種田　山頭火

作品全集

全名作を一冊に

種田山頭火

作品全集

種田山頭火

作品全集

目次

1. 大扉
2. 第1章 赤い壺　(新字新仮名)
3. 第2章 赤い壺(新字新仮名)
4. 第3章 赤い壺(新字新仮名)
5. 第4章 一草庵日記　(新字旧仮名)
6. 第5章 片隅の幸福　(新字新仮名)
7. 第6章 行乞記　01 (新字旧仮名)
8. 第7章 行乞記　02 三八九日記(新字旧仮名)
9. 第8章 行乞記　03 (新字旧仮名)
10. 第9章 行乞記　04 (新字旧仮名)
11. 第10章 行乞記　05 室積行乞(新字旧仮名)
12. 第11章 行乞記　06 北九州行乞(新字旧仮名)
13. 第12章 行乞記　07 伊佐行乞(新字旧仮名)
14. 第13章 行乞記　08 大田(新字旧仮名)
15. 第14章 行乞記　09 山口(新字旧仮名)
16. 第15章 行乞記　10 仙崎(新字旧仮名)
17. 第16章 行乞記　11 大田から下関(新字旧仮名)
18. 第17章 行乞記　12 広島・尾道(新字旧仮名)

19. 第18章 草と虫とそして　(新字新仮名)
20. 第19章 鎖ペンを握って　——三月十九日　夜——　　山頭火(新字新仮名)
21. 第20章 砕けた瓦　(新字新仮名)
22. 第21章 其中日記　01 (新字旧仮名)
23. 第22章 其中日記　02 (新字旧仮名)
24. 第23章 其中日記　03 (新字旧仮名)
25. 第24章 其中日記　04 (新字旧仮名)
26. 第25章 其中日記　05 (新字旧仮名)
27. 第26章 其中日記　06 (新字旧仮名)
28. 第27章 其中日記　07 (新字旧仮名)
29. 第28章 其中日記　08 (新字旧仮名)
30. 第29章 其中日記　09 (新字旧仮名)
31. 第30章 其中日記　10 (新字旧仮名)
32. 第31章 其中日記　11 (新字旧仮名)
33. 第32章 其中日記　12 (新字旧仮名)
34. 第33章 其中日記　13 (新字旧仮名)
35. 第34章 其中日記　14 (新字旧仮名)
36. 第35章 其中日記　15 (新字旧仮名)
37. 第36章 其中日記　16 (新字旧仮名)
38. 第37章 最近の感想　(新字新仮名)
39. 第38章 雑記　(新字新仮名)
40. 第39章 雑信(新字新仮名)

41. 第40章 雑信(新字新仮名)

42. 第41章 三八九雑記　(新字新仮名)

43. 第42章 四国遍路日記　(新字新仮名)

44. 第43章 述懐　(新字新仮名)

45. 第44章 白い花　(新字新仮名)

46. 第45章 白い路　(新字新仮名)

47. 第46章 草木塔　(新字旧仮名)

48. 第47章 草木塔　(新字新仮名)

49. 第48章 旅日記　(新字旧仮名)

50. 第49章 旅日記　02 昭和十三年(新字旧仮名)

51. 第50章 旅日記　03 昭和十四年(新字旧仮名)

52. 第51章 漬物の味〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

53. 第52章 鉄鉢と魚籃と　――其中日記から――(新字新仮名)

54. 第53章 道中記　(新字旧仮名)

55. 第54章 独慎〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

56. 第55章 寝床〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

57. 第56章 俳句に於ける象徴的表現　(新字新仮名)

58. 第57章 『鉢の子』から『其中庵』まで　(新字新仮名)

59. 第58章 故郷〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

60. 第59章 遍路の正月　(新字新仮名)

61. 第60章 歩々到着　(新字新仮名)

62. 第61章 松山日記　(新字旧仮名)

63. 第62章 水〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

64. 第63章 道〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

65. 第64章 物を大切にする心　(新字新仮名)

66. 第65章 夜長ノート　(新字新仮名)

67. 第66章 私の生活　(新字新仮名)

68. 第67章 私の生活(新字新仮名)

69. 第68章 私を語る　——(新字新仮名)

第1章
赤い壺　(新字新仮名)

『あきらめ』ということほど言い易くして行い難いことはない。それは自棄ではない、盲従ではない、事物の情理を尽して後に初めて許される『魂のおちつき』である。

私は酒席に於て最も強く自己の矛盾を意識する、自我の分裂、内部の破綻をまざまざと見せつけられる。酔いたいと思う私と酔うまいとする私とが、火と水とが叫ぶように、また神と悪魔とが戦うように、私の腹のどん底で噛み合い押し合い啀み合うている。そして最後には、私の肉は虐げられ私の魂は泣き濡れて、遣瀬ない悪夢に沈んでしまうのである。

私自身は私というものを信ずることが出来ないのに他人が私を信じてくれるとは何という皮肉であろう！

遠い死は恐ろしく近い死は懐かしい。

死を意識して、そして死に対して用意する時ほど、冷静に自己を観照することはない。死が落ちかかれば自己の絶滅であるが、死の近づき来ることによって自己の真実を掴むことが出来る。

悪魔の手は掴もう掴もうとしている。それだけでも悪魔の心は親しいものではないか。

結婚して後悔しないものが何人あるか、親となって後悔しないものが何人あるか。——私も亦、その何人の中の一人であることを悲しむ。

最初には酔覚の水がうまくて水を飲んでいたが度々飲み続けているうちに、水そのものを味わい飲むようになった。そして水を飲まず

にはいられないようになった。

　彼が真実を主張したとき、彼の周囲の人々は同意し讃嘆した。しかし彼が進んで真実を実行したとき、人々は怒罵し嘲笑した。斯くして彼は彼の周囲から永久に別れてしまったのである。

　強者は破壊する、弱者は弥縫する。強者は創造する、弱者は模倣する。

　すべてに失望した人——生きていても詰らない、死ぬるのも詰らないと思う人は再び官能の陶酔に帰って来る。そして野良猫が残肴を漁るように、爛れた神経の尖端で腐肉の中を吸いまわる。彼は闇にうごめく絶望の影である。しかも彼は往々にして——若しも彼が真摯であるならば——そこで『神の子を孕める悪魔』を捉えることがある。

　遊蕩児にただ一つ羨ましい事がある。彼は歓楽の悲哀——それは恐らく遊蕩児のみが味わい得る——『泣笑』とでも呼びたい情趣を色読している。

　地獄から来た男は走らない、叫ばない。黙って地上を見詰めつつ歩む。

　歓楽に誘惑がある如く、苦痛にも魅力がある。生存がただ苦痛であって、そして死を恐れない人がその儘生きているのは、屡々、生存慾のためよりも苦痛の底の甘味を解している故である。（「層雲」大正五年一月号）

第2章
赤い壺(新字新仮名)

　物を弄ぶのはその物の真髄を知らないからである。理解は時として離反を齎らすけれど、断じて玩弄というような軽浮なものを招かない。

　鏡を持たない人は幸福である。その人は自分が最も美しいと信じきっている。私はそういう見すぼらしい幸福を観るにも堪えない。

　自己を愛するということは自己に佞ねることではない、自己に寛大であることではない。真に自己を愛するものは、自己に対して最も峻厳であり残酷でさえある。

　自分の罪を許すことの出来ない人は他の罪を許すことも出来ない。他の罪を責める人は、より多くの自分の罪を責める人でなければならないと同じ道理である。

　生存は悲痛なる事実である。その悲痛なる事実であることを理解することによって、そしてその悲痛なる事実の奥底まで沈潜することによってのみ堪え得られる事実である。

　妻があり子があり、友があり、財があり、恋があり酒があって、尚お寂しいのは自分というものを持っていないからである。

　張りきった心、しかも落ちついた心でありたい。何物をも拒まない、何物にも動かされない心でありたい。

　蒔いた人は刈れ、蒔いた人のみ刈れ。蒔いた人の強さよ、刈る人の尊さよ。

　自然に対して佞ねるなかれ。

自己を掘る人の前にはたった一つの道しかない。狭い険しい、ともすれば寂しさに泣かるる道しかない。

叱られて泣いた昨日があった。殴られて腹も立たない今日である。——悔なき明日が来なければならない。

外部の圧迫は内部の破綻を緊密にする。そこに人間性の痛切な一面がある。

死を恐れないのではない、死よりも恐ろしいものがあるからである。

肉を虐げることによって霊を慰める人のはかなさは！

霊肉合致とは霊が肉を征服することでなくして肉が霊のあらわれとなることである。

彼が堕落の悲しさよ、彼は真摯なるが故に堕落したのである。

骨肉のなつかしさ、骨肉のあさましさ。

犠牲という言葉のためにはあまりに多くの犠牲が払われた。

（「層雲」大正五年三月号）

第3章
赤い壺(新字新仮名)

　自分の道を歩む人に堕落はない。彼にとっては、天国に昇ろうとまた地獄に落ちようとそれは何でもない事である、道中に於ける夫々の宿割に過ぎない。

　優秀な作品の多くは苦痛から生れる。私は未だ舞踏の芸術を解し得ない。私は所謂、法悦なるものを喋々する作家の心事を疑う。此意味に於て、現在の私は『凄く光る詩』のみを渇望している。

　涙が涸れてしまわなければ、少くとも涙が頬を流れないようにならなければ、孤独の尊厳は解らない。

　ほんとうに苦しみつつある人は、救われるとか救われたいとかいうことを考えない。そういう外的な事を考えるような余裕がないのである。

　空には星が瞬たいている。前には海が波打っている。曙を待つ私の心は暗い。この暗さの中で私の思想は芽吹きつつある。私は悩ましい胸を抑えて吐息を洩らしている。その吐息の一つ一つが私の作品である。

　夜は長いであろう。しかし夜はいかに長くても遂には明けるであろう。明けざるをえないであろう。闇の寂しさ恐ろしさに堪えて自己を育てつつある人の前には、きっと曙が現われて来る。

　同情したからとて涙を流す勿れ、同感だといって手を拍つ勿れ。心と心とのつながりは屡々、涙を流したり拍手したりすることのために破られた。

　二羽の雀が一銭であるとて嘆く勿れ。それは死んだ雀の価であ

る。生きた雀は自由に大空を翔けりつつあるではないか。

　傷づけられて——傷づけられることによって生きてゆくものがある。

　自己の醜劣に堪え得なくなって、そして初めて自己の真実を見出し得るようになる。

　義人は苦しむ。偉大なる義人とは深刻なる苦痛を嘗めて来た人である。

　正しきものは苦しまざるを得ない。正しきものは、苦しめば苦しむほど正しくなる。苦痛は思想を深め生活を強くする。苦痛は生を浄化する。

　真面目な人と真面目な人とが接したところにのみ生の火花が閃めく。彼等は友となるか、然らざれば敵となる、敵とならなければ友とならざるを得ないからである。

　日本人ほど自然を眺める国民はない。そして日本人ほど自然を知らない国民はない。

　日本人ほど小児を可愛がる国民はない。そして日本人ほど小児の心を理解しない国民はない。（「層雲」大正五年二月号）

第4章
一草庵日記　(新字旧仮名)

八月三日　晴。

絶食、私は絶食しなければならない、食物がないといふ訳ばかりでなく、身心清掃のためにも。——せめて今日一日だけでもすなほにつつましく正しく暮らしたいと思ふ、その日その日——その時その時を充実してゆくことが一生を充実することである。黙々読書、おのれに籠つておのれを観た、労れると柴茶をすすつた……今日も午後はおこぼれ夕立があつた、めつきり涼しくなつて、夜明けは肌寒くさへ感じた、夜無水居を訪ふ。

八月四日　曇—晴。

今日も絶食、すこしよろ／＼する、老いたるかなと苦笑する。空腹をかゝへて出かけた、旅中の　　庵を訪ねて奥さんより当面の生活費を少々貸して貰つた、混合米二升——八十二銭——提げて帰ることが出来た、あゝ御飯のおいしさありがたさ、一粒一粒の光明をひし／＼味つた、（まづ仏前に供へて合掌懺悔して、）私は私の健康を呪ふ、私はあまりに健康だ——健康でありすぎるための脱線、（意志薄弱はどうにもならない私である、）朝顔—昼顔—夕顔、或る友へのたより、——……私はあいかはらず片隅にちゞこまつてあるかなきかの生活をつゞけゐますが、その生活も行き詰つて来ました、私はどうでもかうでも一転歩しなければならなくなりました、のるか、そるか、私は全心全身で私の新生活体制を結成しつゝあります。……

八月五日　晴—曇。

早起、私は自から省みて考へる、——私は節度ある生活をうち建てなければならない、ワガママを捨てて規律正しく生きなければならな

い、私はあまりに気随気儘だつた、私の生活にはムラがありすぎた、省みて疚しくない生活、俯仰天地に恥ぢない生活、アトクサレのない生活——さういふ生活にこそほんたうの安心立命がある。ちよつとポストまで出かける、途上、野菜を買ふ、大茄子二つ五銭、大胡瓜一本五銭、大根は高くて買へなかつた、（一本二十銭といふ、）泰山木、その一枝を活ける、私は泰山木のやうな存在でありたいと希ふ、その葉、その花、何と男性的ではないか。吹く風はまさしく秋、更始一新のこゝろである。私は醜悪だ、私は愚鈍でありたい、愚に返り愚を守り愚を貫きたい。

八月六日　晴。

東が白むのを待ちかねて起きる、まもなく護国神社の太鼓が、とうとうとうとうと鳴り出した、だいぶ日が短くなつて、もう五時も近からう。身心沈欝、それをひきたてるべく、ちようど映画宮本武蔵の招待券を貰つたので出かける、しんみり観賞して、いろ／＼考へさせられた、剣は人なり——剣心一路の道はまた私自身の道ではないか、恥ぢる恥ぢる、私には意力がない、あゝ意力がない。——文は人なり、句は魂なり、魂を磨かないで、どうして句が光らう、句のかゞやき、それは魂のかゞやき、人の光である。考へれば考へるほど、私は生存に値しないことを痛感する、殊に内外に亘る急迫しつゝある現情勢に於ては、非生産的な私にはかく感じないではゐられないのである。何が私をさう考へさせるか、——現代には余裕がない、そして私には自信がない！私は私のやうな乞食者ではあつても俳諧報国に一念しつゝあるものにだけは許されるでもあらう消極的価値さへも失ひつゝあるのだ。私は生きてゐたくないと思ふ、しば／＼死にたいと思ふ、それは生活意力を缺いでゐるからだといつてしまへばそれまでゝあるが、私の弱性がアルコールの魅力によつて自他をごまかしてゐるせいでもある、何といふ弱さ、何といふはかなさ、何といふくだらなさだ！——転身一路、こゝにのみ、今の私の活路がある、しつかりしろ、山頭火！

八月七日　晴—曇—雨。

護国神社の太鼓と共に起床。いろ／＼洗濯する、同時に句も洗ひだ

した！連日の謹慎はやゝ沈静にしてくれた。「忍ぶものは救はるべし」、おちつけおちつけ、落ちついて堪へ忍べ。銭がないと（それは多くの場合、ふしだらから来る、）心にもない不義理をする、すまないことが多い、今日も電燈料集金員さんに申訳けなかつた、すみませんすみません。タバコがタバコ屋にだいぶ潤沢に出廻るやうになつた、これだけでも人心がくつろぐ、世上にゆとりの気分がたゞよふ。

　私は私の胃袋が大きいことをこのごろことに痛切にあさましく感じないではゐられない、あさましいかな！よいおしめりがめぐまれた、日にまし涼しくなる、日中は夏、そして夜間は秋だ。けふはめづらしく句がたくさん出来た、一日三十句は多すぎるが、めつたにないことだ。

　過去に執する勿れ、自我を捨てろ、我執放下着。夜、酔つぱらひが近づいて呼びかけた、私はぢつとして動かなかつた、善哉善哉、其調子其調子！

　長生すれば恥多しといふ、あゝ私は生き過ぎてゐる、あまりに恥が多い、恥の多い一生、ただ幸にして、私はまだ恥を失はない。不眠、明方ちかくまで睡れなかつた、無門関を読んだ。

　八月八日　曇—時々微雨、立秋。

　早朝護国神社参拝、まことに秋である。朝食ぬきの梅茶一杯。すこしく沈欝なり、自己沈潜のためか、アルコールを注入しないためか、どちらにしても弱者であることに間違ひはない。今日はあるだけの外米—一合あまりで、すますより外なかつた。

　待つものは与へられん、……私はぢつと待つてゐよう。空々閑々あつけらかん！これが昨日今日の私の気分である。今晩も早寝が出来ないので無門関を読む。

　無能無才なるが故に、私は一筋の道—句作行—をひたむきに精進することが出来たのである、句作するより外に私の為し得ることはなかつたのである、問題は成し遂げるかどうかにある、私は成し遂げるべく、全心全力を傾けてゐるのである、昨日も今日も、明日もまた。あれこれ、用事がないであつて、なか／＼忙しい。日参の旗にはあたま

がさがる。……おとなりにも可愛い七夕竹が立てられた、それを眺めて、私もおさない情緒にひたつた。――待つともなく待つてゐる――待たないものが来た。裕君、ありがたう／＼、おめでたう／＼。街へ、買へるだけ買ふ、酒、米、タバコ、等々々。道後で一浴、むろん一杯。ふる／＼、ふるな／＼、一年一度の逢引が駄目になつては気の毒すぎる、世の中には気の毒すぎることが少なくはないが。今日の酒は悪くなかつた、ほろ／＼、とろ／＼だつた、あぶないことはあぶなかつたらしい。米代一升分返したゞけで、それだけで私はたいへんおちつけた。

八月十一日　雨―曇。

四時ごろ起床。――反省すれば恥づべき行為ばかりである。雨、多少の時化模様、このごろの天候は常態ではない。黙坐沈思、門外不出、――おとなりから※子五六顆、かはり夕顔二三枝頂戴する。

酒、酒、あゝ酒はいとしい悪魔か、憎らしい天使か、あゝ。

八月十二日　曇―晴。

宵から夜明けまでぐつすりと熟睡した、――きのふもけふもつつましくすなほであつた。手足を撫でて、肥えた々々々と思ふ、肥えても痩せても身心の平安が何よりも望ましい。今日は久しぶりに夏らしく、残暑もさうとうきびしかつた、良寛和尚の口吻を借れば、夏は暑いのがよろしく候。久しぶりに――半年ぶりに、層雲へ出句、逓友への随筆は書けなかつた、いや、我儘な私は気乗しないので書かなかつた、また一つ嘘をいつた、恥づべし恥づべし。ポストまで出かけて帰つてゐると、来客二人、灯火骨君と友人、パンとタバコを頂戴したのはうれしかつた。――純麦飯よりも食パンの方がおいしいことは現前の事実である。夜ふけるまで不眠、無門関第五則「香巌上樹」、初めて読む公案である。

八月十三日　晴―曇。上海事変三周年記念日。

感慨無量、自責の念たへがたきものがあつた。ぼんやりあたりを眺めてゐると、和尚さんが出かけてゆく托鉢姿が目に入つた、早く借金を返さなければないと心苦しかつた。きのふ夕顔もよかつたが、けさ

の昼顔もわるくない、活けてしみ／″＼観賞する。失望、けふも待ちぼけだつた、——生きぬけ、生きぬかなければならない日本人である。ポストまで出かけて、あまり出したくもない手紙を投げ入れる。盆前なのでお墓まゐりが多い、今日はいちにちどんより曇つて蒸暑かつた。こほろぎが身にちかく鳴くやうになつた。

無門関、第七則、趙州洗鉢。

日本高僧では道元禅師に心酔し、中国高僧では趙州和尚を敬慕する。

八月十五日　曇—晴。

眼がさめるとそのまゝ起きる、おとなりの時計が四つうつた。こんなに曇つてどんより蒸暑くては稲の虫害が心配になる、——晴れよ晴れよ、照れ照れと祈りつゞける。……昨夜大食、今朝少食。どこの店にもマツチが品切れ、タバコの吸へないには少々まゐつた。泰山木の一枝を貰つて来て庭隅に挿したが、どうぞ根づくやうに、夾竹桃が芽ぶいたやうに。せめて——いとせて私が末後の一句を得んことを。——おちついて、私は待つてゐる。……けふはあるだけの麦を炊いた、そしてそれで今日明日を支へやうと考へてゐるところへ、一洵老来庵、なつかしや一ヶ月ぶりの対談である、旅の話を聴く、そしてまた土産代を頂戴する、ありがたう。午後は道後へ、一浴一杯、そしてまた一杯、——それがいけなかつた、また一杯また一杯でさん／″＼だつた、どろ／＼ぼろ／＼になつてしまつた、あゝ、あゝ。人間のあさましさよ、そして私の弱さよ、私は倒れたまゝ空を見つめたまゝ自分を罵り自己を鞭うつばかりだつた。……

八月十五日　晴。

暗いうちに起きて身辺整理、反省慚愧、自戒自粛。旧盆十二日、墓参者がたえない。お米買ひに、醤油買ひに。——かん／＼照りつける、天地に感謝する。——もし——もしも私が酒を飲ないならば——こうまで酒に強くないならば——私はどんなに安心だらう、——いや、私は良すぎるだらう——いやいや、私は幸福すぎるだらう！。第七句集到来、雀と鴉とが翼をかさねてやつて来た、緑平澄太の両君に

心から頭を下げてお礼を申上げる。

酒はすゝるべし、ビールはあほるべし、それだのに私は酒をあほるのである、酒をあほるところに不幸が生まれるのである。少くとも今後は断乎焼酎と絶縁する、私には酒が何よりもよい。人間は嘘をいふ動物なり――しみ／″＼かう感じる。アル中の徴候があらはれてくる、それはあたりまへすぎる報だけれど、何となく心細くもある。――日ざかりのポストへ、句集をぽとりぽとりと投げ入れた。汀居往訪、全不在だつた、句集を置いて戻つた。よい月夜、寝床で月見、もつたいないな。　今日の買物○八十二銭　混合米二升。○五銭　切手。○七銭　醤油一合。○五銭　胡瓜一つ。○十銭　イリコ少々。――残金正に一銭也！

八月十六日　晴、時々曇る。

四時を過ぎると東雲神社の太鼓、五時ちかくなると護国神社の太鼓が鳴る、その間にいつも私は起床する、――けさもさうだつた。――どうぞ待つものが来るやうに、――それが来ないと私は申訳けがなくなると祈つてゐたけれど、――とうたう今朝も来なかつた、私はみじめであり、あはれ／＼と溜息を洩らすばかりだつた。――

私が生きてゐる、といふよりも、私が死なないでゐるといふことは、八方の知友から借金する―搾取する―各方面に迷惑をかけるといふことではないか、私はさういふ意図は持つてゐないけれど、事実はさういふ結果を招来しつゝあるではないか、……私は考へてひや／＼する。遠雷、夕立が来さうで来なかつた、私の気分と一脈相通ずるものがあつた。

全日本中等学校総力大会の熱と力と光にうたれる。玉峰和尚来庵、真言坊主としては豁達明朗な和尚さんだ。砂糖が切符制になつてから、坊守さんが「お砂糖はどうしませう」と訊かれる、「甘いものには縁がありません」と私は答へる、私は辛党、甘党君は私の分まで甜めて下さい！夕方早々散歩しながら汀居往訪、柿の会例会である、会者七人、これはといふ句は出なかつた、真摯なのがうれしい、席上雑話をして月村さんから、画家乃至画工のうらおもてを聞かされたが、本物でない芸術家はあさましいあさましい。何となく労れてぐつすり

眠つた。

八月十七日　午前晴、午後曇、夜微雨。

よう眠れて眼覚めるとすぐ起きたけれどもう六時に近かつた。盆の十四日、私の盆は淋しいなあ！——蚊、蝿、蟻、蜘蛛、蜂までが飛びこんでくる。昨今の残暑のきびしさ。身辺整理、いや身心整理。門外不出、反省謹慎、一億一心一徳の心がまへ。暮れてからすこし驟雨、そしてよい月夜になつた。貧乏は苦しいものであるが、借金はその苦しみを二重にする。生活の要諦は——私に関する限りでは——左の三項である。

節度を失はないこと借金をしないこと過去に執着しないこと……当来に期待しないこと。

……私は来世を信じない、過去を放下する、私はたゞひたすらに現在を信ずる、即今——永遠の刹那を充実すべく全身心を尽すのである、……宇宙霊を信ずるけれど個人霊を否定する、……個は全から分れ、そしてまた全に合するのである、この意味に於て、生は寄であり死は帰である。……（私の信念として）私の食卓はまづしい、しば／＼お菜を缺ぎ、とき／″＼御飯のないこともあるが、その事実はさまで私をかなしませない、私がいつも食卓に対して嘆くことは——私の胃袋が大きい、大きすぎることである、そしてアルコールをほしがることである、一杯やりたいなあと酒貪（！）を起すことである。ほんに私は無芸大食、貪婪鬼である。

八月十八日　晴、午後小夕立。

盆の十五日、私は快く食べ快く睡つた。けさも待つものは来なかつた、沈静な気持である。警官殺しの犯人も遂に悪運尽いて、事件発生後十一日の昨朝逮捕された、此地方では珍しい出来事であつた、誰もほつと安堵と快心の吐息を洩らしたことである。私は昼も夜もしよつちゆう俳句を考へてゐる、夢中句作することもある、俳人といふ以上は行住坐臥一切が俳句であるほど徹底した方がよいと思ふ。——ともすれば死を思ひ易い、——死を待つ心はあまりに弱い、私は卑怯者！と自ら罵つた。即今如是如是、自己を求めて不可得、因縁無我、空

寂。私の一日——今日の記録。無門関、第十二則、巌喚主人。——第七句集発送の用意をする、用意だけだ、切手代もないから。お寺のＫさんから胡瓜や茄子や南瓜を頂戴した、ありがたい、手作りのよさがかゞやいてゐる。夕方散歩、ほんにうつくしい満月が昇つた、十分の秋だつた、私はあてもなく歩いたが、何となくさびしかつた、流浪人の寂寥であり、孤独者の悲哀である、どうにもならない事実である。
「閑草談」

俳句性について、——

単純に徹すること。自己純化——執着——些末に対する——放下
なりきる生命律——自然律——自由律　┌自然のながれ
│　リズム自他融合——主客渾一　身心一如
└生命のゆらぎ

全と個（私の一考察）

あらはれ　個を通しての全の表現。

八月十九日　晴。

四時すぎには起きた、おだやかな朝明け。旧盆十六日、藪入。すこしいら／＼する、私の盆はまさしく原意通りのうらぼん——懸垂苦——だ、米がないし煙草もない！　腹中清掃だ！今日は到来の胡瓜でも食べて送らう、きりぎりすのやうに！嘘の実はなか／＼熟しないな！よろしい、私は私の愚を守る、私は私の愚を貫かう。句集整理、発送の用意を整へておく、切手が買へないので。正直な胃袋がぐう／＼飢を訴へるけれどしやうがない、水を飲め、飲め水を——空腹をかゝへて乱筆を揮ふ！何しろひもじいので背に腹はかへられないで、夕方になるとたうとう電燈料を借ることにして、（といふのは、電燈料だけ紙袋に入れて留守でも払へるやうに戸口に近く吊つておいたのだが、）その七十銭でいろ／＼買物をした、——四十銭　混合米、六銭　ハギ、二銭　マツチ、九銭　切手、——路傍に好きな苅萱二三本見つけたので食卓の壺に活ける。今日はまざ／＼と夕食に於ける自分の貪心を見せつけられた、情状斟酌の余地がないでもないけれど。

身心一如、行解相応、身心自然脱落、本来面目現前、（道元）花は

愛着に散り草は忌嫌に生ず、といふが雑草のよさが解らなければ自然の心は解らない、雑草はおのがじゝそのところを得てそのまことを表現してゐる。

蚊帳の中でゆつくり食事する、そしてすなほに大の字に寝ころぶ、幸福すぎる幸福だつた。

八月二十日　晴。

早起、空が何ともいへない美しさだつた。孤貧に徹せよ、それが私に残されたる唯一の道である。即景即事即物即心である、あらねばならない。

句作の心がまへとして、——貪著心を去れ。身心一如たれ。すなほであれ、強く強く、細く細く。……

昨日は昨日の風が吹いた、今日は今日の風が吹く、明日は明日の風が吹かうではないか。今日の今を生きよ、生きぬけよ。

「青原白家酒。三盞喫了。猶道未沾唇」（無門関第十則　清悦孤貧頌）——来た来た、来ました来ました、ありがたう、ありがたう、さつそく街へ局へ、そして方々へ、——払へるだけ払ひ、買へるだけ買つた。（払ひたいだけは払へない、買ひたいだけは買へない、）理髪、入浴、散歩、——ああさつぱりした。酒はうまい、うまいですなあ、——焼酎はいけませんぞ。一応帰庵して、それから無水居へ、店頭で快談、さらにどんぐり老を訪ふ、夕食をよばれたりして、しやべりすぎた。夜も散歩して街筋の夜店をひやかした。夜食がうまかつた、寝酒もあつて。

八月廿一日　晴。

早く起きることは起きたけれど多少の宿酔気味、省みて昨日の饒舌が嫌でたまらない、人に逢ふと、とかくしやべりすぎて困る！Ｓさん、ありがたう、あなたの友情が骨身にしみます。残暑がとてもひどい、朝晩が涼しいだけそれだけに。上一万へ、どんぐり老一洵居往訪、俳談しばらく、夕飯まで御馳走になつた、そうめんの御馳走はうれしかつた、おかげで私の盆が盆気分になりました。夜の散歩、夜店であれこれ買物をした。——

三十銭　ちりめんざこ五銭　　菜葉十銭　　唐辛八十銭　酒五十銭　絵本四十銭　小包料四十銭　切手

観徳といふ語がある、性を育て徳を養ふのである。今日は珍らしく遍路が立ち高島易断売が来た。――書くものは書き、送るものは送り、捨てるものは捨てた、――だいぶ身心整理が出来た。すなほな、つゝましい一日であつた。

八月廿二日　晴。

四時起床、まもなくあちらこちら起きよ起きよの太鼓が鳴りわたる。夜明けの明星のひかり、一番電車のひゞき、人の足音、水汲む音、――朝の天地は尊くも美しい。心おだやかにして體ゆたかなり。蚊もいくらか減つたやうである、だん／＼助かる。ほんに私は駄腹の持主だわい！方々へたよりを書く、友はなつかしい、ありがたい。ままごと風景はおもしろい。ポストまで出かける。菜葉を漬ける、あすの朝はおいしい浅漬がいたゞける！塩の安さ尊さ、安すぎるとさへ思ふ。今夜初めて鈴虫の唄を聴いた。油虫がどこからかやつてきて、すばしこくあるきまはつてゐた、私はどうしても油虫にだけは好意が持てない。……三時前、眼が覚めたので、しばらく読書。

個人と民族、――個性の発揮が民族の高揚となる。省みて恥ぢ入る事ばかり、自粛せよ、々々々。老祖母のおもひで果なし、――どんな竹頭木屑でも粗末にしてはならない。きつと何かに役立つ。

八月廿三日　晴。

早起すぎる早起、この朝のよさはどうだ！おちついてゐたが、やつぱりいけなかつた！出かける、無水居でうまい焼酎をよばれる、酒を探して（小売店の多くは品切、造酒屋はふりの客には売つてくれない、）やうやく二番町の馴染の店で手に入れる、いろ／＼買物もして、一杯二杯三杯、……酔つぱらつて、和尚さんから少々借りて道後へ、さらに一杯、それからおでん街へ、さらにさらに一杯二杯三杯、泥酔して路傍に倒れてゐるところを運よく通りかゝられたおとなりの奥さんに連れて帰つていたゞいた、いけないいけない、恥づかしかつた、（私自身ははつきり覚えてゐない、）馬鹿野郎！先夜は交番の厄

介になつたではないか、阿呆、年寄は年寄らしく振舞へ、戦時ではないか、しつかりしろ！あゝすみませんでした。茗荷一把—五本—七銭は松山としては高すぎるよ、自信のない生活はだめだ、自分に自信が持てない人間はみじめだ、そしてさういふ私ではないかよ！

　八月廿四日　晴—曇、午後小夕立。

　昨夜の醜態を考へるとたまらない気持である、酒罎をかたむけてぐい飲みする、その元気で隣家へお伺ひしてお詫とお礼を申上げる、句集を差上げて、少しおしやべりする。一洵老来庵、先日来の酔態狂態を告白する、多少気持がよくなつた、やれ／＼といふ感じである。澄太君から近著を頂戴する、題して日本の味、それは澄太の味である、しんみり味つた。夜、無水君来庵、俳句研究九月号を貸してあげる。人ごとに一つの癖はあるものを——私には酒癖がある、酒を味ふならそれでよろしいのだが、私はハシゴだ、飲みだしたら次から次へと飲み歩いて、泥酔するまで飲みつゞける、……ぐでん／＼の老いぼれはおよそ愚劣の愚劣の愚劣だ！私は文字通りの無能無才で、人並以上に出来ることが二つ、たつた二つある、一つは句を作ること、他の一つは酒を飲むことである、あさましい存在ではある！草は生えるがまゝに生えさしておけ、虫の宿もよいではないか。

　今日の買物九銭　バツト　十銭　なでしこ　十五銭　小鰯　壱円三十五銭　酒　七銭　茗荷　三十四銭　干うどん　二十銭　薬　五銭　茄子　十銭　電車賃　六銭　胡瓜　十銭　ハガキ　十弐銭　泥鰌汁　十銭　唐辛　三十五銭　削り節

　八月廿五日　雨、午後は曇、後晴。

　久しぶりの雨、秋雨、はつきり夏から秋への転換である。今日から米も切符制、一日一合六勺（外米一合、内地米六合）では麦と混じて倍加しても私の胃袋を満たすには足らない、二食にするか、一食はうどんにでもするか、砂糖の切符制には平気の私もこれには少々困るのである。昨日も今日もありがたうありがたう、うれしいうれしい。道後まで出かけてひつかけた、三日分三合たてつゞけに！一時はかなり降つた、川の水が濁つてたう／＼流れ来り流れ去つた。こほろぎのうたが冴えて来た、秋がふかむほど冴えてくる。

八月廿六日　曇—晴。

日が短かくなつた、蚊もめつきり少なくなつた。今日から防空訓練。——秋、秋、新秋来だ。番僧さんから聞くと、まだ米は切符制にならないさうな。（私はすべて和尚さんまかせ、）麦を買ふ、米は買へない。今日の代用食——うどん料理——は失敗した。あゝあゝ大食大食、無芸なるが故に大食なのだらう。さすがに厄日ちかい風物、雲のたゞすまひ、風のうごきかたが何となくおだやかでない。墓場の垣から白い花を採つて来て活けた、何といふ蔓草か、よい香がする。早寝、電燈も暗くて読書し難いので。時々砲声がとゞろく、虫がしきりに鳴く、私はぐつすり睡つた。俳句性管見、——必ずしも形式は内容を規定しないと思ふ、内容が形式を作るともいへる。純化——純化しきる——一如境

（なりきる）　　　　（純情と熱意と）

八月廿七日　晴、時々曇。

早起、五時が打つてもまだ暗い、肌寒かつた。防空訓練第二日、砲声虫声。身心粛然として勉強する、遺言も書きかへておかう。昼は豆腐買ひに——ヤツコで補足しよう、私の食卓はいつもまづしいけれど壺に投げ挿しの草花が風情を添えてくれる、きのふけふは苅萱の二三本。さわやかな風が吹いてきて部屋ぬちを浄化する、汚い慾望なんか逃げてしまう！　おゝ一きれの雲影もない大空のたふとさ！夕方、無水君来訪、俳談閑談しばらく、ほどなく一洵老来訪、九月例会について談合する。籔蚊があまりゐなくなつて大助かり。今日は下駄を踏み割つたので散歩も出来ない。ほんによい鈴虫が鳴いてくれる、その声があたりに澄み徹る。熟睡——私の幸福の一つ。

八月廿八日　秋晴——曇、夕は小雨。

四時前起床、朝月のある新涼風景、しばらくして空襲警報のサイレンが鳴りわたつた、そしてなごやかな夜が明けはなれた。朝のうちはうす寒くて浴衣を重ねたほどだつた。下駄を買ふ銭がないので門外不出、破れた上草履を繕うて当面の跣足から免かれた。残暑があとすざりしてゐる、今日の代用食——うどんは悪くなかつた。「日本の味」

読後感二三。——文は人なり、人は文なり、澄太君の文は澄太君その人である。澄太君は純綿的性格、スフまじりでない。つゝましい巨人（肉体的にも）あたゝかにおちついた人物！

酒は私の公案だ、酒を解くことが、酒をほんたうに味ふことが、やがて私の証悟であり悟達である。

夕刻から蚊帳へもぐりこんで、おぼつかないあかりで読書、もつたいないけれど、極楽々々！蚊帳の中を這ひまはる油虫を叩き殺した、あとの気持がいつまでも不快だつた、おい老いぼれ油虫よ、どこから忍びこんで来たのか、こゝにはお前の仲間はゐないぢやないか。……

八月廿九日　曇。

早起、なか／＼明けなかつた。——ありがたうありがたう、うれしいうれしい。近衛首相、新体制声明発表、——昭和維新の曙光。郵便局へ出かける、（はだしで！）まづ下駄を買ふ、それからタバコ、そしてもちろん二三杯！（五日ぶりですね、）その間にマンヂユウ、チクワ、クワシ等々々。午後、無水君を襲うて長講一席、帰途は大街道へまはつて有楽座見物、気楽な映画でのんびりした、かういふ映画が歓迎されつゝあるといふ事実は、——もとより一部の間で——ちよつと考へさせる。夕方からまた散歩、一洵老の奥さんに甘えて酒代少々借りる、やたらにそこらを歩いた、空襲警報のサイレンが気味悪く鳴つて真闇である、いつものおでんやへ飛び込む、常連二三人、たあいもないことをしやべつてほろ／＼とろ／＼、十時ごろ無事帰庵、そのまゝぐつすりと寝た。新体制が結成されつゝあるときに私の今日の行動はのんきすぎるけれどそれが私には唯一のなぐさめであり、たつた一つの贅沢である、平常のつゝましきまづしさにくらべて、どうか赦していたゞきたい！今日の酒はうまかつた、随つてよかつた、つぶれもしなかつたし、あまりおしやべりもしなかつたし、無駄費ひもしなかつたし、……酔倒れもしなかつたし、落し物もしなかつたし、……よかつた／＼、めでたし／＼、（他人に迷惑といふほどの迷惑をかけなかつたことが何よりもうれしいのである、）

飲むにいそがしかつた山頭火も食ふにあせる彼になつた。酔ふにもがく山頭火か！

八月三十日　晴—曇、微雨。

早々起床、酔はまだ残つてゐるけれど、気はさつぱりしてゐる。洗濯いろ／＼。昨夜で防空訓練がすんだので、今日は天も地も人も明るいやうだ、それは単に感じだけではないと思ふ。午後は雨になつた、秋雨らしく降つたり止んだり、しめやかでよい雨であつた、おちつける。道後へ出かける、一週間ぶりの湯である、例によつて一浴一杯、うまい／＼。電燈料新聞代が払へないので困る、気の毒でならない、飲みさへしなければ……かうした迷惑は起らないのに、……虫声が何ともいへない、寝床に横つていつまでも耳を傾ける。自己省察、それは私に何をもたらしたか。——アルコール超克が私の念願であり、義務であり、責任である。風味（或は雅味）といふ言葉は日本的日本語だ。

今日の買物いろ／＼七十八銭　酒　十銭　小鰯　二銭　入浴料　十銭　ハガキ　十銭　タバコ・マツチ　八銭　沢庵

八月三十一日　曇—雨。

いつものやうに早起、ありがたう、——街へ、——すこしぼんやりする。午後、はだしでまた出かける、質の利あげ、二三杯ひつかける。——月村居訪問、団子汁をよばれる、ついで一洵居訪問、句会の日取をきめる、——それからあちらこちらへ、ほろ／＼ぼろ／＼、とろ／＼どろ／″＼になつちまつた。だめ、だめ、だめである、私もいよ／＼身心建直しの関頭にぶつかつた、しつかり、しつかり、しつかりやらう！

宣誓　　　われら大御心を奉体し、一切の私心を去り、過去に泥まず、個々の立場に捉はれず、協心戦力もつて新体制確立のため全力を尽くさんことを誓ふ。

これは新体制準備会の誓ひであるが、それはまた日本全国民の誓ひでなければならない、そして私自身の誓ひでもある。

九月一日早朝山頭火謹記

九月一日　曇　微雨。

二百十日、興亜奉公日一周年記念日、関東震災記念日。いろ／＼の意味で、今日は私にとつて意味ふかい日である。跣足になつて近郊を散歩する、転々一歩一歩の心がまへである。

独行不愧己、独寝不愧衾、

慎独の境地である、私の生きるべき世界である。省みて疚しい私である、俯仰天地に恥ぢない私でなければならないのである。終日終夜謹慎、身心安定して熟睡することが出来た。

私の覚悟——

節酒断行、借金厳禁、二食実践。

約言すれば、節慾である、生活に即して具体的にいへば、

酒は一日一合、一度に三合以上、一日に五合以上は飲まないこと、酒は啜るべく味ふべく、呷らないこと、微酔以上を求めないこと。借金は決してしないこと、その借金が当面逼迫の融通でないかぎりは、食べ過ぎないこと、代用食を実行すること。煙草も刻ですますやうに努めること。

たゞたゞ実践である、省察が行持となつて発現しなければならない、これを誓ふ、私は私に誓ふ、汝自身を守れ、愚を貫け。

九月二日　晴、時々曇。

護国の太鼓と共に起きあがる、天地清明、身心寂静。下の畑に鳴子がこしらへられて、朝早くから鳴らされる、それを聞くと、私にも少年の夢がよみがへる。……今日から学校が始まつて少年少女が登校する、私も小学生の心で人生第一課から学び直さう！とにかく放下着放下着、貪心を去れ、貪心を砕け。朝食なしの早昼飯。米の切符制実行——番僧さんが私の分まで貰つて来て下さつた、（米代は和尚さんの立換へ）すみません。一度に五日分の八合（一日一人内米六勺、外米一合の割当）

外米代（一升三十八銭）五合、十九銭内米代（一升四十五銭）三合、十三銭五厘合計金　三十二銭五厘也

あゝ私は蝿や蚊にも劣つてゐる。……昨今の蒸暑さ、稲のために照込みが欲しいな。戦時生活は厳粛にしてそして明朗なるべし。

俳句作家の覚書、——

色心不二、物心一如の心境、——即物即心。

随縁随喜の心境、——あるがままをうたへ。

終日、門外不出、静読静思。私の食卓はまづしいよりもとぼしくなつた。夜、百足に二回も螫された、何となく考へさせられた。——

九月三日　晴。

早起、朝焼がうつくしかつた。友よ、ありがたう、すぐ街へ出かける、買物いろ／＼、ひつかけひつかけて！

九月四日　晴。

やゝ宿酔気味、省るべし、慎むべし。兵隊さんよ、あゝ、私は——たわごとそらごと、まことあるなし、——脱皮作用、酔ふぱらふごとに一皮脱ぐことは——一皮脱げることは事実である、酒は毒薬でもあり良薬でもある！馬鹿、馬鹿野郎！自から罵りつきない、あゝ、——

九月五日　曇、小夕立。

郵便局まで出かけた、そして、そして、あゝあゝになつた。

銭がない物がない歯がない一人

さういふ一人がどうといふのだ、恥ぢろ恥ぢろ！汝自身を大地にたゝきつけよ！

九月六日　曇、時々微雨あり。

謹慎、道後入浴。今日こそ酒に勝つた、自己を克服した、萬歳。途上、農家の子弟から茄子を買ふ、六つ五銭也。（安すぎる）愛情を去れ、好悪を捨てよ、因果無人、即今如是如是。

九月七日　曇、厄日前後らしい時化模様。

身心沈欝、自責の念堪へがたし、自粛の実行によつてのみ私は救は

れる、最初に、そして最後まで酒を克服せよ、頃日来の醜態はたゞ酒ゆえではないか。

老境——悪夢の残滓、罪悪と悔恨、——私の老境はこんなものだ、感慨無量、——立ちあがれ、老を味へ、ほがらかな老境に入れ、体験を活かすべし。身心の衰弱を自覚しないではゐられなくなつた。

九月八日　曇—晴。

うつ／＼として自己検討。——どこへ行く、何をする、どうしようといふのだ、どうしなければならないのか、どうせずにはゐられないのか、——飽くまで徹底検討せよ。

西山の宝塔寺拝登、碧師の墓を展す。朝日山陸軍墓地参拝。余戸の子規句碑を観る。

九月九日　晴。

さびしさにたへきれないので一洵居を訪ふ、それから布佐女を訪ふ。それからが悪かつた、ぼろ／″＼だつた、どろ／″＼だつた。……

九月十日

雨—風、臥床、反省、懊悩、懺悔。

九月十一日

強雨、ぶつかけるやうに降つた。今日も頭があがらない、からだが悪いといふよりも気がとがめて。

九月十二日　晴。

道後まで出かける、文字通りの一浴一杯。夜はどんぐり老が来庵、月がよいので出かけて来たといふ、おそくまで話し合つた、私の気分もだいぶ軽くなつたやうだ。

九月十三日　秋晴。

ほんに秋空一碧だつた。四日ぶりに起床、自粛自戒、身辺整理、身心やゝ軽快なり。乃木大将忌、将軍の純情は何よりも尊い。Ｂの使者が来た、微苦笑する外なかつた、（それも酒のためなのだ）使賃を与

へ手紙を托する、彼は一風変つた善人らしかつた。浴衣が二枚とも破れて、一枚は汚れてゐるので、袷を出して着てゐると、暑い暑い、汗を流して辛抱する。

九月十四日　晴。

夜中の一時ごろ眼が覚めたので、読書、選句、執筆する、そして五時ごろ、うと／＼してゐるうちに、いやな夢を見た、夢を見ることはわるくないけれど、いやな夢を見るやうでは困る。日本晴だつた、身心整理、おちついて読書三昧。

自尊心を持て、私は私だけの私ではないぞ。今日は思ひ立つて前庭の草をむしつた、すつかりきれいにした、それは私自身のからだやこゝろを清めたやうなものであつた。寝床から月を見る、――私にめぐまれたよろこびである。

米の切符制、それは私を救つてくれた、もう半月も和尚さんが割当米を持つて来て下さる、金は立換へて、――ありがたく、もつたいなし。

九月十五日　晴。

早起、護国神社の太鼓が鳴る。……沈欝、身心の鈍重を覚える。朝食ぬき、ひよろ／＼のおもひ。あるだけの麦と馬鈴薯とを煮る、（馬鈴薯にあらず、馬齢者也！）何となく腹立たしい日なり、死の誘惑に敗けさうな日なり。休閑地利用といふので和尚さんもダイコクさんも子供も奥さんも賑やかだ、私一人さびしくしてゐる。腹加減よろしからず、早々蚊帳の中で考へてゐる、まんまるい月が射しこむ、地獄の底の極楽か。……月が雲にかくれたりあらはれたり、私も悲しんだり微笑んだり、いつしか眠つた。とにかく快眠ではあつた、幸福々々。アルコールとして貪らないで酒を味へ。

九月十六日　曇—風—晴。

陰暦八月十五日、仲秋名月。今日は心境やゝ開ける。――朝食としてぢやがいもを食べる。（米も麦もないから、）お寺の前庭に休閑地活用の畑が出来た、夫婦共稼ぎ風景！反古ぼろを売つた、此頃は値下りだが、それでも七十銭、大いに助かつた。道後へ出かけるつもりだ

つたが、ポストから引きかへした。

小胡瓜二つ　三銭、中大根一本　四銭。

今日は風があつて涼しい。配給米を今日もまた和尚さんから立換へて頂戴した、恐縮々々。追憶懐旧たへがたし、古臭くも老いぼれたるかな！人にそむき世にそむいて、自分にもそむいて。——あるやうにあらせる——なるやうにならせる——あるがまま——自然法爾。御飯御飯、あはれ／＼、久しぶりに腹いつぱい白飯をいたゞいた、まことにありがたいことであつた。仲秋無銭、それは無月よりもさびしかつたことは事実だ、ほんたうのうそといつたやうな。……

秋風の逞ましい蚊が螫すので早々蚊帳の中へ、いつまでも月を観たり本を読んだり考へたりさびしがつたりした。こんなによい月夜だのに誰も来てくれなかつた、一洵和尚、どうしましたぞ！放哉坊の句をおもひださずにはゐられなかつた。——

こんなによい月をひとりで観て寝る　放哉

私にも自嘲の句二三ある。

酒はない月しみ／″＼観て居り蚊帳の中の私にまで月の明るくあけはなち月をながめつつ寝る

一杯やりたいなあ！　これは自然だ、私の真実だ！観月感慨無量、戦線をおもひ銃後をかへりみる、遠近親疎、有縁無縁、南無阿弥陀仏。——夜、空寂にたへないので、そこらをあちこち散歩する、月夜の護国神社に詣でる人影ちらほら、家の中で家内むつまじく月見の人々。旅情といふか、郷愁といふか、とにかく私は——今夜の山頭火はさびしかつた、芋を食べた、芋は芋だが、じやが芋だつた。——いつまでも睡れないので——隣りの時計は一時を知らせたのにどうしても睡れないので、「おくのほそ道の記」を読みつゞけた。明け方になつて、やつと、とろ／＼したら妙な夢を見た、亡弟新婚を訪ねたことなど。……

とにかく節制へ、そして簡素に、そしてそれから枯淡へ。

九月十七日　晴。

起ると、隣の時計が五つ鳴つた、山に落ちる月がうつくしかつた。身心の平静をとりもどした、私は日に日に刻々燈みつつある、と自信し自祝する。

ぽろぽろ冷飯ぼろぼろ秋寒

これは今朝の実感である、実情は偽れない、そこにこそ句の尊さがあるといふものぞ。けさも郵便は来ないのか、あゝあゝ、山頭火みじなことである。私が若しも——若しもだが——酒をやめることが出来たら私はどんなにやすらかになるだらう、第一、物質的に助かる、食ふや食はずやのその日ぐらしから救はれる、赤字のなやみ、借金のせつなさがうすらぎ、つまらない苦労がなくなる、——だが、私には禁酒の自信が持てない、酒を飲むことが、私にあつては、生きてゐることのうるほひだから！アル中の徴候がだん／″＼現れてきよる、ああ。ちよいとポストまで、途上、句を拾ふ、タバコの吸ひさしを拾ふ。

今日の買物は、——

二十六銭　平麦一升　十銭　ナデシコ　六銭　豆腐一丁　五銭　切手

卑しいかな人間、——醜いかな山頭火！風、風、風——秋、秋、秋。身のまはりをかたづける、自分のエゴイズムを見せつけられたりして。

俳句について、——

┌精神——日本的——不変　┌構成的俳句的
|　|　└表現——時代——流行　└
主体的完成——作品個々的には、未完成——作家的には、

御飯を炊きつゝ、いろ／＼さま／″＼のことを考へる。おゝ何とデカい胃袋、さういふ胃袋の持主——私といふ無能力老人は不幸（あたりまへだけれど）である。

ひしひしと迫るもの、あゝ私は生きてゐられないのだ！自粛の力——時代の力——そして季節の力。今夜もよい月、ひとりしづかに読みつゝ考へつゝ寝た。

九月十八日　曇。

満州事変十周年記念日、故北白河宮永久王殿下の御喪儀。いつとなく火鉢をしたしく感ずる気分になつて来た、秋の心ともいふべきものゝ一つのあらはれである。まづしいといふよりもさびしい私の食卓であると思ふ。護国神社から号令拍手の声がたえない、ぢつとそれに耳を傾けてゐると、故殿下哀悼と東亜新秩序建設の熱意にうたれる。……一洵老ひさしぶりに来庵——先日来不在中に来庵されたさうだ。————近衛首相の念願に和して、私も「一億一心」の念願を堅うする、私はたよりない男であるけれど。——腹のへること、なんぼでも食べられること、奇々妙々也。今日からお彼岸の、暑いも寒いも彼岸まで、まことに然り。快食快眠、うらむらくは快便ならず、（痔がやぶれてゐるから！）——夢を見た、いやらしい夢だつた、かへりみて恥づかしい夢だつた、聖人夢なしといふ、せめてかういふ夢を見ないやうにありたい。

九月十九日　秋晴。

朝寝、起きたのは六時近かつた。朝食ぬきの梅茶一杯。虫干——ぼろぼし、黴々—臭々。秋の蚊いよ／＼ます／＼鋭く迫る、無理もないな。芋麦混食飯、（米はない、）私はいつも「不平なく」であるけれど調理に案外、手数——時間のかゝるのを遺憾とする。事変が民衆を叱正する、国家を緊張せしめる、——天意として祝祷すべしである。早昼食にして芋麦飯数碗、おいしい／＼、ありがたい／＼。高度国防国家の完成と最低生活の保証とは相即不離であることを痛感する。足ぶみしても詮なき場合もあるが、（個人でも国家でも、）断じてあともどりしてはならない。自然と不自然との混合体——それを私自身の中に発見する、たとへば私の孤独に於て。ほんたうの俳句——俳句らしい俳句ではない——俳句の中の俳句。

夕方から正宗寺へ、子規忌なのでお墓まゐりをした、帰途、汀火骨居を見舞ふつもりだつたけれど、気分が滅入るので、亀屋でうどん二杯食べて（それは夕飯で、その代金十二銭はもつてゐた、）そのまま帰庵、十日ぶりに街へ出かけたのだが、すこしうるさく感じた、そしてつく／″＼視力の弱つたことも感じた、栄養不良のためだらう、い

や、ガソリンが切れたせいだらう！今暁、警鐘乱打に驚かされたが、どこかの小学校が全焼したさうな、誰よりも子供が気の毒だと思ふ。今夜もよい月夜だつた、熟睡した。「残老記」彼岸入は明日ださうである。今暁の火事は新玉町の民家二十数戸、松山近来の大火だつたさうな。私もとかく物忘れするやうになり、よく物を間違へる、老いぼれたらしい、年はとりたくないものだとしみ／″＼思ふ。

九月廿日　秋晴、昇る陽たふとし。

眼が覚めると暁だつた、鶏声、鼓声、鐘声、おだやかに、おごそかに明けはなれた、——私は合掌黙祷した。朝寒、火がなつかしい。朝食としてじやが芋を蒸して食べる。身心清澄、ちかごろよくねむれるのがうれしい。百舌鳥が近く来て啼きしきる。水のうまさ、そして塩のありがたさ。郵便が——待ちあぐねてゐる手紙が来ないので何となく憂欝、私はほんたうに弱虫だなあ！　我儘だよ！おちつけば、おちつくほどさびしいとは、——晴れてまた寂し。嚢中空しく厨房からつぽとなる。……貧乏の趣味的鑑賞はよろしくない。悠々不動の姿勢でありたし。三食泥酔から二食微酔へ転向。へりやすい腹の悲哀、そこにユーモアがないでもない。頑健、あまりに頑健な、持てあます頑健！自己革新ができなくて何の革新ぞや。オツチヨコチヨイ気分から脱却せよ。無水君往訪、不在、干うどんを借りる、和蕾居往訪、小遣を借りる。

七十六銭　外米二升（闇にあらずといへども）　十七銭　焼酎半杯　六銭　醤油一合。

タバコは拾へるが、拾ふ米はない！純外米でも干うどんを少々砕いてまぜるとバラ／＼しないでよい、——これは自炊者としての私の発見だ、簡単にして安価ではないか。朝夕、秋冷をおぼえる、まつたく秋だ、旅をおもふ。

九月廿一日　曇、小雨、そして晴。

早起、ちかごろよくねむれるやうになつて、朝はことに快適なり。曼珠沙華を活ける、お彼岸気分の一標象である。和尚さんなか／＼に畑仕事熱心、私は何かにつけて和尚さんの世話になるが、彼我共通の

ものがあるやうな気がする。近来、私はつつましく、あまりにつつましく生活してゐる、それは内からの緊縮もあるし、外からの圧迫もあるが、とにもかくにも私は自粛自戒して居る、今後、私は私らしく私本来の生活をつづけるであらう、ただ省みなければならないのは無理をしないといふことである、無理は不自然である、不自然はつゞくものでもなく、またつゞけるものでもない。天地人に面して懺悔する。新聞代を督促されて閉口した、無理もない、四ヶ月分もたまつてゐるのだから。めづらしく宵寝、いろ／＼の夢を見た、とき／″＼眼が覚めて、孤独のおもひが澄みわたつた、身に迫つてちんちろりん、虫もさびしいのだろう！徳の力――人徳

　九月廿二日　秋晴、何ともいへないこゝろよさ、午後は曇る。

　未明起床、しゆくぜんとして省悟するところがあつた。郵便が来て――抱壺の訃を通知されて、驚いたことは驚いたけれど、それは予期しないではない悲報であつた、あゝ抱壺君、君は水仙のやうな人であつた、友としてはあまりに若く遠く隔てゝはゐたが、いつぞや君を訪ねていつたときのさま／″＼のおもひでは尽きない――こみあげる悲しさ淋しさが一句また一句、水のあふれるやうに句となつた、――抱壺君、君はよく昨日まで生きてくれた、闘病十数年、その苦痛、その努力、そしてその精進、とてもとても私のやうな凡夫どもの出来ることではない、私は改めて君に向つて頭をさげる、――あゝ逝くものは逝く、抱壺もついに逝つてしまつた、あゝ、――私はひとりしづかに焼香し読経した。――山野逍遙、哀悼のおもひは果なし、句がたくさん落ちてゐた。身心沈静、無門関第十一則十二則。和尚さんよまことにありがたう、――おかげで飢えないでゐられます。時局がいよ／＼重大であることを痛感する。（十九日には御前会議が開かれたのである。）午後護国神社参拝、今日はとりわけ参拝者が多い、朝から参拝者がつゞいてたえない。――貧乏は胃袋を大きくする、――私の体験が生んだ警語である！けふのゆうべはことにさびしかつた。明日はどうやら雨らしい、せつかく行楽日、降らなければよいが。（私のためではなく彼らのために）やつと五銭あつめてナデシコをさがして買ふことができた。蚊帳なしで寝てみたが藪蚊がとき／″＼襲ふので、また蚊帳を吊つたことである、私は蚊帳がきらひだ。「松山散策」ほとん

ど徹夜で句作推敲した。今夜もまた百足を殺した、いやな気がした、仕方ないけど。

今日の米代（和尚さん立換）一日　　　外米一合　　　　　一升三十八銭　　割当　　　　　　十日分一人　　　内米八勺　　　八合　三十六銭

九月廿三日　曇—時々晴。

秋季皇霊祭——彼岸の中日——行楽日和。起きやうが早すぎてなか／＼夜が明けなかつた。——一切我今皆懺悔すべきである。外米もまたおいしい、不平なく、すなほに、慎ましく。行楽日の行楽人、善哉、善哉。うれしや、健から着信、（期待した金高でなかつたのを物足らなく思ふとは何といふ罰あたりだらう！）街へ出かける、ほとんど半月ぶりの街頭散歩である、Ｙ屋で為替券を現金に代へて貰つて、（今日は祭日なので）買へるだけ買つた、そのまへに払へるだけ払つてから。半月ぶりの飲みつぷりである、一杯二杯三杯——どろ／＼になつたけれどぼろ／＼にはならなかつた、私としてはまづ／＼である。道後へも行つた、そして十日ぶりの入浴で垢や汚れを洗ひ流した、理髪もした、——さつぱりしたことである。和尚さんと話した、無水君和蕾君と話した、おでんやのおかみさんとも、めしやのおぢいさんとも話した、……闇取引の話、飲食店反則の話、のんべいの話、等々々。

（日本酒に限る！）

酒はうまい、ほんたうにうまい、うますぎる！猫に小判を与へることは与へられた猫の無智よりも与へた人間の愚を示すのである。

九月廿四日　雨、しめやかな秋雨である。

三時ごろ起床、昨日の残物を飲み且つ食べる。昨日はお寺から団子を頂戴したので、私自身も餅を買へたので、どうやらお彼岸らしくなつたのであつた。まさに「秋」まさしく「純」、なりきれ、なりきれ！まづ借金を整理すること、そのためには酒を慎しまなければならない、禁酒は不可能でも節酒は可能だ。ぐうたら根性、やけくそ気分を払拭すべし、是非実行すべし。昨日の返金や買物を記して置かう。

——

二円　和尚さんへ返金　二円　米代　二円四十銭　新聞代　四十二銭　無水居へうどん代二円四十銭　酒代　三十銭　タバコ　八銭　線香　十銭　シヤボン　十銭　ひじき十五銭　マツチ　五十二銭　押麦　八銭　シヨウガ　四十銭　削節　二十銭　パン　二十銭　餅　二十四銭　醤油　十五銭　味噌

めづらしく胃腸のぐあいがよろしくない、きのふのけふだからあたりまへなのだが。けさは袷でもうそ寒く袖ナシをかさねた。手紙三通書く、抱壺へ、柊屋へ、満洲へ、かなしい手紙なり、恥づかしい手紙なり。……和尚さんを襲うていろ／＼話す、さびしい日で、ひとりではやりきれないので。まづ焼酎を厳禁す、焼酎はうまくない、たゞ酔ふのみなり、心理的にも生理的にも有害なり、焼酎は私にはほんに悪魔なり。雨傘がないからお寺の傘を借りて郵便局へ出かける、ちよつと一杯ひつかけたり！さらにまたポストへ、また一杯ぐうつとひつかけました！鈍栗庵の愛息が自転車で栗飯を持つて来てくれる、さつそく御馳走になる、感謝々々。白菜二把六銭、すぐ洗つて漬ける。Ｋ屋のおかみさん来庵、すまなかつた、梯子酒のあとくされである。今日は純日本米、昨日は純支那米、明日は。——夕方虚春君来訪、兄の酒癖を矯めるべく御祈祷を頼みに来たさうな、酒封じの祈祷とは皮肉だ、和尚さんも微苦笑せられたらう！いつとなく晴れて星空となつた。今夜も蚊帳なしで寝た、のび／＼と睡つた。

十月一日　曇—時々小雨。

興亜奉公日、国勢調査日、防空綜合訓練第一日。陰暦の九月朔日。早起、護国神社参拝、自粛自戒。身のまはりを整理する、いつ死んでもよいやうに。——おちついてしづかに読書する。いつのまにやら風邪をひいたらしく、咳が出て洟水が落ちて困る。去年の今日だ、松山へ渡つて来て、そして一洵老に初見参したことは忘れてゐない、忘れてなるものか、もう一年になる、早いといふよりあはたゞしい歳月ではあつた。門外不出、誰にも会はず、一文も費はず、ひたすら謹慎する。風邪心地なので早寝、うと／＼眠りつゞけた。

十月二日　曇、百舌鳥啼きしきり、どうやら晴れさうな。

早起したれど、頭おもく胸くるしく食慾すゝまず、ぼんやりしてゐる。むしろ私としては病痾礼讃、物みな我れによからざるなしである。ちよつとポストまで、途中慣習的にいつもの酒屋で一杯ひつかけたが、つい／＼二杯となり三杯となり、とう／＼一洵老の奥さんから汽車賃を借りだして、今治へとんだ、……電話したら清水さんがしんせつにも仕事を遣り繰つて来てくれた、御馳走になつた、ずゐぶん飲んだ、（Ｆ館の料理には好感が持てた、）何しろ防空訓練で、みんな忙しくて、誰も落ちついてゐないから、またの日を約して十時の汽車で上り下り別れて帰つた、帰途の暗かつたこと、闇を踏んで辿るほかなかつた、そしてアル中のみじめさをいやといふほど感じさせられたのである、……Ｓさんありがたう、ほんにありがたう、小遣を貰つたばかりでなく、お土産まで頂戴した。帰庵したのは二時に近かつた、あれこれかたづけて寝床にはいつたのは三時ごろだつたらう。犬から貰ふ――この夜どこからともなくついて来た犬、その犬が大きい餅をくはえて居つた、犬から餅の御馳走になつた。

ワン公よ有難う、白いワン公よ、あまりは、これもどこからともなく出てきた白い猫に供養した。最初の、そして最後の功徳！犬から頂戴するとは！

┌餅屋の餅│直径五寸位└色やゝ黒く

十月三日　雨―曇。

少々朝寝、何しろ労れたことである、風邪気分。昨日の私とＳさんとの会談を考へると、うれしくもあり恥づかしくもある、懺悔々々、感謝々々。和尚さんに返金し、米代を払ひ、一洵老の奥さんに返金し、麦を買ふ、それから二三杯あほる、すつかり酔つた、酔つたことは酔つたが、酔ひつぶれはしなかつた。宵から寝たが、燈火管制不十分とあつて青年監視人から叱られた。

俳句性について、――

印象の象徴化（刹那の永遠、全と個）結晶（圧縮にあらずして単純なり）身心の純化、平明にして透徹。核心、焦點、求心的。

私の不幸は私が頑健でありすぎることから生じると思ふ。

十月四日　日本晴、申分のないお天気だった。

訓練第四日、防空訓練もいよ／＼本格的、もんぺ部隊に感心する、青年監視人に感謝する。感冒解消、めでたくもあり、めでたくもなし、といふところ。午後、市街散歩、市人の訓練振を見学する、ついで無水居に寄つて俳談一くさり。先日来、だいぶだらしがなかつた、今日は酒を慎しみ気持を引きしめて勉強した、善哉、々々。

十月五日　快晴、まつたく秋晴である。

未明起床、早朝より空襲警報鳴りわたる、何となく落ちつかず。午前中は引き籠つて読書、午後は久しぶりに道後へ、鬚を剃り垢を落してさつぱりした、いつも一浴一杯だが、今日は一浴だけで一杯は遠慮した。至るところお祭前の風景、子供がさわぎまはつてゐる。お祭でも私にはお祭はない、小遣があつて気分のよい日はいつでも私のお祭である、私の食卓のまづしさは、お祭に於て、かへつてまづしさを増すのである！松茸が安くなつた、まだ出盛りではないけれど、下物四十銭、上物八十銭になつた。焼松茸で一杯やりたいなあ！ゆふべ散歩して、しみ／″＼したのもの、そして何となしにさむ／″＼したものを感じた、――帰庵すると御飯を野良猫に食べられてゐた。夜は防空訓練がすんだので落ちつけるとよろこんでゐたら、ぬくいので藪蚊が来襲してさん／″＼だつた、――でも更けて冷えてきてからはゆつくり読み書きが出来た。

十月六日　晴―曇。

今日明日は松山地方の秋祭。和尚さんの温言――お祭りのお小遣が足りないやうなら少々持ち合せてゐますから御遠慮なく――とわざ／＼いつて来られたのである、――温情、身に※む温情、あゝありがたしともありがたし。――忘れるせぬ、昨年十二月十五日一洵老に連れられて此度新居へ移つて来た御幸山麓御幸寺境内の隠宅、――高台で閑静で家も土地も清らかであり市街や山野の遠望も佳い、――殊に和尚さんにその人を得た、たゞ感謝あるばかりである。澄太が一草庵と名つけてくれた、一木一草と雖も宇宙の生命を受けてひたすらに感謝の生活をつゞけてゐる、感謝の生活をしろよとは澄太の心であつたのであらう。一草庵―狭間の六畳一室、四畳半一室、厨房も便所もほと

よくしてある、水は前の方十間ばかりのところに汲場ポンプがある、水質は悪くない、焚物は裏から勝手に採るがよろしい、東に北向だから、まともに太陽が昇る、——此の頃は少し右に偏つてはゐるが——月見には申分がない。東隣は新築の護国神社、西隣は古刹龍泰寺、松山銀座へ七丁位、道後温泉へは数丁、どんぐり庵へは四丁——友人はみな親切、——すべての点に於て私の分には過ぎたる栖家である、私は感泣して、すなほに慎ましく私の寝床をこゝに定めてから既に一年にならうとしてゐる、——それに、それに。——

　感じた、……帰庵すると御飯を野良猫に食べられてゐた。夜は防空訓練がすんだので落ちつけるとよろこんでゐたら、ぬくいので藪蚊が来襲してさん／″＼だつた、でも更けて冷えてきてからはゆつくり読み書きができた。

　十月六日　晴—曇。

　今日明日は松山地方の秋祭。和尚さんの温言——お祭のお小遣が足りないやうなら少々持ち合せてゐますから御遠慮なく、とわざ／″＼いって来られたのである、——温情、あゝありがたしありがたし、——人には甘えないつもりだけれど、いづれまた、すみませんが——とお願ひすることだらう、あゝあゝ。けさは猫の食べのこしを食べた、先夜の犬のことをもあはせて雑文一篇を書かうと思ふ、いくらでも稿料が貰へたら、ワン公にもニヤン子にも奢つてやらう、むろん私も飲むよ！

　十月七日　曇のち晴。

　早朝護国神社参拝、感謝慎しみの心が湧く。感謝！感謝！感謝は誠であり信である、国への感謝、国に尽くした人、尽くしつゝある人、尽くすであらう因縁を持つて生れ出る人への感謝、母への感謝、我子への感謝、友人への感謝、宇宙霊への—仏—への感謝。一洵が師匠の空覚聖尼からしみ／″＼と教へられたといふ感謝、懺悔、精進の生活道は平凡ではあるがそれは慥かに人の本道であるとつく／″＼思ふ、この三道は所詮一つだ、懺悔があれば必ずそこに感謝があり精進があれば必ずそこに感謝がある筈だ、感謝は慥悔と精進の娘である、私は此の娘を大切に心に育くんで行かなければならぬ、そして感謝の心で死ん

でゆきたい、その感謝――誠の心から生れた芸術であり句でなければ本当に人を動かすことは出来ないであらう。澄太や一洵にゆつたりとした落ちつきと、うつとりとしたうるほひが見えて居て何か知ら人を動かす力があるのは此の心があるからだと思ふ。

感じた、……帰庵すると御飯を野良猫に食べられてゐた。夜は防空訓練がすんだので落ちつけるとよろこんでゐたら、ぬくいので籔蚊が来襲してさん／″＼だつた、でも更けて冷えてきてからはゆつくり読み書きが出来た。

十月六日　晴―曇。

今日明日は松山地方の秋祭。和尚さんの温言―お祭りのお小遣が足りないやうなら少々持ち合せてゐますから御遠慮なく――とわざ／＼いつて来られたのである、――温情、あゝありがたしともありがたし、昨年一洵老に連れられて此処新居へ移つて来た、御幸山麓御幸寺境内の隠宅――高台で閑静で家も土地も清らかであり市街や山野の遠望も佳い――が殊に和尚さんにその人を得た。たゞ感謝あるばかりである。澄太が一草庵と名づけてくれた、一木一草と雖も宇宙の生命を受けて感謝の生活をつづけてゐる、感謝の生活をしろよとは澄太の心であつたのであらう。一草庵―狭間の六畳一室、四畳半一室、厨房も便所もほどよくしてある、水は前の方十間ばかりのところに汲場ポンプがある、水質は悪くない、焚物は裏から勝手に採るがよろしい、東に北向だからまともに太陽が昇る、（此頃は右に偏つてはゐるが）月見には申分がない。東隣は新築の護国神社、西隣は古刹龍泰寺、松山銀座へ七丁位、道後温泉へは数町、一洵どんぐり庵へは四丁、友人もみな、親切――、すべての点に於て、私の分には過ぎたる栖家である。私は感謝して、すなほにつゝましく私の寝床をこゝに定めてから既に一年になろうとしてゐる。それに／＼……。感謝の生活、私は本当にそれを思ふ。

十月七日　曇―晴。

早朝和尚さんに逢ふ、――昨日はどうでした、お祭りのお小遣はありますかと言ふてくれた――勿体なし勿体なし、人には甘えないつもりだけれど、いづれまたすみませんが――とお願ひすることだらう、

あゝあゝ。けさは猫の食べのこしを食べた、先夜の犬のことをもあはせて雑文一篇を書かうと思ふ、いくらでも稿料が貰へたら、ワン公にもニヤン子にも奢つてやらう、むろん私も飲むよ！

犬から餅の御馳走になつた話、——

十月八日　——晴。

早朝護国神社参拝、十日、十一日はその祭礼である、——暁の宮は殊にすが／＼しく神々しい、なんとなく感謝、慎しみの心が湧く、感謝、感謝！感謝は誠であり信である、誠であり、信であるが故に力強い、力強いが故に忍苦の精進が出来るのであり、尽きせぬ喜びが生れるのである。皇室——国への感謝、国に尽くした人、尽くしつゝある人、尽くすであらう因縁を持つて生れ出る人への感謝、母への感謝、我子への感謝、知友への感謝、宇宙霊—仏—への感謝。——一洵老が師匠の空覚聖尼からしみ／″＼教へてもらつたといふ懺悔、感謝、精進の生活道は平凡ではあるがそれは慥かに人の本道である——と思ふ、この三道は所詮一つだ、懺悔があれば必ずそこに感謝があり、精進があれば必ずそこに感謝があるべき筈である、感謝は懺悔と精神との娘である、私はこの娘を大切に心の中に育くんでゆかなければならぬ。芸術は誠であり信である、誠であり信であるものゝ最高峰である感謝の心から生れた芸術であり句でなければ本当に人を動かすことは出来ないであろう、澄太や一洵にゆつたりとした落ちつきと、うつとりとした、うるほひが見えてゐて何かなしに人を動かす力があるのはこの心があるからだと思ふ、感謝があればいつも気分がよい、気分がよければ私にはいつでもお祭りである、拝む心で生き拝む心で死なう、そこに無量の光明と生命の世界が私を待つてゐてくれるであろう、巡礼の心は私のふるさとであつた筈であるから。——夜、一洵居へ行く、しんみりと話してかへつた、更けて書かうとするに今日は殊に手がふるへる。

第5章
片隅の幸福　(新字新仮名)

大の字に寝て涼しさよ淋しさよ

　一茶の句である。いつごろの作であるかは、手もとに参考書が一冊もないから解らないけれど、多分放浪時代の句であろうと思う。とにかくそのつもりで筆をすすめてゆく。——　一茶は不幸な人間であった。幼にして慈母を失い、継母に虐められ、東漂西泊するより外はなかった。彼は幸か不幸か俳人であった。恐らくは俳句を作るより外には能力のない彼であったろう。彼は句を作った。悲しみも歓びも憤りも、すべてを俳句として表現した。彼の句が人間臭ふんぷんたる所以である。煩悩無尽、煩悩そのものが彼の句となったのである。しかし、この句には彼独特の反感と皮肉がなくて、のんびりとしてそしてしんみりとしたものがある。　大の字に寝て涼しさよ——はさすがに一茶的である。いつもの一茶が出ているが、つづけて、淋しさよ——とうたったところに、ひねくれていない正直な、すなおな一茶の涙が滲んでいるではないか。　彼が我儘気儘に寝転んだのはどこであったろう。居候していた家の別間か、道中の安宿か、それとも途上の樹蔭か、彼はそこでしみじみ人間の幸不幸運不運を考えたのであろう。切っても切れない、断とうとしても断てない執着の絆を思い、孤独地獄の苦悩を痛感したのであろう。　所詮、人は人の中である。孤立は許されない。怨み罵りつつも人と人とは離れがたいのである。人は人を恋う。愛しても愛さなくても、家を持たずにはいられないのである。みだりに放浪とか孤独とかいうなかれ！　一茶の作品は極めて無造作に投げ出したようであるが、その底に潜んでいる苦労は恐らく作家でなければ味読することが出来まい（勿論、芭蕉ほど彫心鏤骨ではないが）。　いうまでもなく、一茶には芭蕉的の深さはない。蕪村

的な美しさもない。しかし彼には一茶の鋭さがあり、一茶的な飄逸味がある。　私は一茶の句を読むと多少憂鬱になるが、同時にまた、いわば片隅の幸福を感じて、駄作一句を加えたくなった。――

　ひとり住めばあをあをとして草

　（「愚を守る」初版本）

第6章
行乞記　01 (新字旧仮名)

　このみちやいくたりゆきしわれはけふゆく

　しづけさは死ぬるばかりの水がながれて

　　九月九日　晴、八代町、萩原塘、吾妻屋（三五・中）

　私はまた旅に出た、愚かな旅人として放浪するより外に私の行き方はないのだ。七時の汽車で宇土へ、宿においてあつた荷物を受取つて、九時の汽車で更に八代へ、宿をきめてから、十一時より三時まで市街行乞、夜は餞別のゲルトを飲みつくした。同宿四人、無駄話がとり／″＼に面白かつた、殊に宇部の乞食爺さんの話、球磨の百万長者の慾深い話などは興味深いものであつた。

　　九月十日　晴、二百廿日、行程三里、日奈久温泉、織屋（四〇・上）

　午前中八代町行乞、午後は重い足をひきずつて日奈久へ、いつぞや宇土で同宿したお遍路さん夫婦とまたいつしよになつた。方々の友へ久振に——ほんたうに久振に——音信する、その中に、——

　……私は所詮、乞食坊主以外の何物でもないことを再発見して、また旅へ出ました、……歩けるだけ歩きます、行けるところまで行きます。

　温泉はよい、ほんたうによい、こゝは山もよし海もよし、出来ることなら滞在したいのだが、——いや一生動きたくないのだが（それほど私は労れてゐるのだ）。

　　九月十一日　晴、滞在。

午前中行乞、午後は休養、此宿は夫婦揃つて好人物で、一泊四十銭では勿躰ないほどである。

九月十二日　晴、休養。

入浴、雑談、横臥、漫読、夜は同宿の若い人と共に活動見物、あんまりいろ／＼の事が考へ出されるから。

九月十三日　曇、時雨、佐敷町、川端屋（四〇・上）

八時出発、二見まで歩く、一里ばかり、九時の汽車で佐敷へ、三時間行乞、やつと食べて泊るだけいたゞいた。此宿もよい、爺さん婆さん息子さんみんな深切だつた。夜は早く寝る、脚気が悪くて何をする元気もない。

九月十四日　晴、朝夕の涼しさ、日中の暑さ、人吉町、宮川屋（三五・上）

球磨川づたひに五里歩いた、水も山もうつくしかつた、筧の水を何杯飲んだことだらう。一勝地で泊るつもりだつたが、汽車でこゝまで来た、やつぱりさみしい、さみしい。郵便局で留置の書信七通受取る、友の温情は何物よりも嬉しい、読んでゐるうちにほろりとする。行乞相があまりよくない、句も出来ない、そして追憶が乱れ雲のやうに胸中を右往左往して困る。……一刻も早くアルコールとカルモチンとを揚棄しなければならない、アルコールでカモフラージした私はしみ／″＼嫌になつた、アルコールの仮面を離れては存在しえないやうな私ならばさつそくカルモチンを二百瓦飲め（先日はゲルトがなくて百瓦しか飲めなくて死にそこなつた、とんだ生恥を晒したことだ！）。

呪うべき句を三つ四つ　蝉しぐれ死に場所をさがしてゐるのか・青葉に寝ころぶや死を感じつゝ　毒薬をふところにして天の川・しづけさは死ぬるばかりの水が流れて

熊本を出発するとき、これまでの日記や手記はすべて焼き捨てゝしまつたが、記憶に残つた句を整理した、即ち、

・けふのみちのたんぽゝ咲いた・嵐の中の墓がある　炭坑街大きな雪が降りだした　□・朝は涼しい草鞋踏みしめて　炎天の熊本

よさらば・蓑虫も涼しい風に吹かれをり　熊が手をあげてゐる藷の一切れだ（動物園）・あの雲がおとした雨か濡れてゐる・さうろうとして水をさがすや蜩に・岩かげまさしく水が湧いてゐる・こゝで泊らうつく／＼ぼうし・寝ころべば露草だつた・ゆふべひそけくラヂオが物を思はせる・炎天の下を何処へ行く・壁をまともに何考へてゐた・大地したしう投げだして手を足を・雲かげふかい水底の顔をのぞく・旅のいくにち赤い尿して・さゝげまつる鉄鉢の日ざかり

　単に句を整理するばかりぢやない、私は今、私の過去一切を清算しなければならなくなつてゐるのである、たゞ捨てゝも／＼捨てきれないものに涙が流れるのである。私もやうやく『行乞記』を書きだすことが出来るやうになつた。——

　私はまた旅に出た。——所詮、乞食坊主以外の何物でもない私だつた、愚かな旅人として一生流転せずにはゐられない私だつた、浮草のやうに、あの岸からこの岸へ、みじめなやすらかさを享楽してゐる私をあはれみ且つよろこぶ。水は流れる、雲は動いて止まない、風が吹けば木の葉が散る、魚ゆいて魚の如く、鳥とんで鳥に似たり、それでは、二本の足よ、歩けるだけ歩け、行けるところまで行け。旅のあけくれ、かれに触れこれに触れて、うつりゆく心の影をありのまゝに写さう。私の生涯の記録としてこの行乞記を作る。………………

　　九月十五日　曇后晴、当地行乞、宿は同前。

　けふはずゐぶんよく歩きまはつた、ぐつたり労れて帰つて来て一風呂浴びる、野菜売りのおばさんから貰つた茗荷を下物に名物の球磨焼酎を一杯ひつかける、熊本は今日が藤崎宮の御神幸だ、飾馬のボシタイ／＼の声が聞えるやうな気がする、何といつても熊本は第二の故郷、なつかしいことにかはりはない。あはれむべし、白髪のセンチメンタリスト、焼酎一本で涙をこぼす！この宿はよい、若いおかみさんがよい、世の中に深切ほど有効なものはない、それにしても同宿の支那人のやかましさはどうだ、もつと小さい声でチイ／＼パア／＼やればよいのに。鮮人はダラシがないことは日本人同様、ツケアガルことは日本人以上、支那人は金貯め人種だ、行商人の中で酒でも飲んでゐる支那人をみたことがない。昨夜は三時まで読書、今夜もやつぱり寝

つかれないらしい。

九月十六日　曇、時雨、人吉町行乞、宮川屋（三五・上）

けふもよく辛抱した、行乞相は悪くなかつたけれど、それでも時々ひつかゝつた、腹は立てないけれど不快な事実に出くわした。人吉で多いのは、宿屋、料理屋、飲食店、至るところ売春婦らしい女を見出す、どれもオツペシヤンだ、でもさういふ彼女らが普通の人々よりも報謝してくれる、私は白粉焼けのした、寝乱れた彼女からありがたく一銭銅貨をいたゞきつゝ、彼女らの幸福を祈らずにはゐられなかつた、——不幸な君たち、早く好きな男といつしよになつて生の楽しみを味はひたまへ！今夜はさびしい、広い二階に飴売の若い鮮人と二人きりである、彼は特におとなしい性質で好感が持てる、田舎まはりの仲買人から、百姓衆の窮状を聞かされた、此旧盆を迎へかねた家が多いさうな、此辺の山家では椎茸は安いし繭は安いし、どうにもやりきれないさうな、桑畑をつぶしてしまひたいけれど、役場からの慰撫によつて、やつと見合せてゐるさうな、また日傭稼人は朝から晩まで汗水垂らして、男で八十銭、女で五十銭、炭を焼いて一日せい／″＼二十五銭、鮎（球磨川名産）を一生懸命釣つて日収七八十銭、——なるほど、それでは死なゝいだけだ、生きてゐる楽しみはない、——私自身の生活が勿躰ないと思ふ。向ひのラヂオが賑かだ、どこからかジヤズのリコードが響いてくる、ジヤズ／＼ダンス／＼、田舎の人々でさへもう神経衰弱になつてゐる。都会のゴシツプに囚はれてはゐなかつたか、私はやつぱり東洋的諦観の世界に生きる外ないのではないか、私は人生の観照者だ（傍観者であらざれ）、個から全へ掘り抜けるべきではあるまいか（たまたま時雨亭さんの来信に接して考へさせられた）。鰯の新らしいのを宿のおかみさんに酢漬にして貰つて一本いたゞく、鰯が五銭、酢醤油が二銭、焼酎が十三銭。一昨夜も昨夜も寝つかれなかつた、今夜は寝つかれるいゝが、これでは駄目だ、せつかくアルコールに勝てゝも、カルモチンに敗けては五十歩百歩だ。二三句出来た、多少今までのそれらとは異色があるやうにも思ふ、自惚かも知れないが。——

・かな／＼ないてひとりである　一すぢの水をひき一つ家の秋・焼き捨てゝ日記の灰のこれだけか

今日は行乞中悲しかつた、或る家で老婆がよち／＼出て来て報謝して下さつたが、その姿を見て思はず老祖母を思ひ出し泣きたくなつた、不幸だつた――といふよりも不幸そのものだつた彼女の高恩に対して、私は何を報ひたか、何も報ひなかつた、たゞ彼女を苦しめ悩ましたゞけではなかつたか、九十一才の長命は、不幸が長びいたに過ぎなかつたのだ（彼女の老耄と枝柿との話は哀しい）。

九月十七日　曇、少雨、京町宮崎県、福田屋（三〇・上）

今にも降り出しさうな空模様である、宿が落着いてゐるので滞在しようかとも思ふたが、金の余裕もないし、また、ゆつくりすることはよくないので、八時の汽車で吉松まで行く（六年前に加久藤越したことがあるが、こんどは脚気で、とてもそんな元気はない）、二時間ばかり行乞、二里歩いて京町、また二時間ばかり行乞、街はづれの此宿に泊る、豆腐屋で、おかみさんがとてもいゝ姑さんだ。こゝには熱い温泉がある、ゆつくり浸つてから、焼酎醸造元の店頭に腰かけて一杯を味ふ（藷焼酎である、このあたり、焼酎のみでなく、すべてが宮崎よりも鹿児島に近い）。このあたりは山の町らしい、行乞してゐると、子供がついてくる、旧銅貨が多い、バツトや胡蝶が売り切れてゐない。人吉から吉松までも眺望はよかつた、汽車もあえぎ／＼登る、桔梗、藤、女郎花、萩、いろんな山の秋草が咲きこぼれてゐる、惜しいことには歩いて観賞することが出来なかつた。なんぼ田舎でも山の中でも、自動車が通る、ラヂオがしやべる、新聞がある、はやり唄が聞える。……宮崎県では旅人の届出書に、旅行の目的を書かせる、なくもがなと思ふが、私は「行脚」と書いた、いつぞや、それについて巡査に質問されたことがあつたが。今日出来た句の中から、――

はてもない旅の汗くさいこと・このいたゞきに来て萩の花ざかり　山の水はあふれ／＼て・旅のすゝきのいつ穂にでたか・投げ出した足へ蜻蛉とまらうとする　ありがたや熱い湯のあふるゝにまかせ

此地は県政上は宮崎に属してゐるが、地理的には鹿児島に近い、言葉の解り難いのには閉口する。藷焼酎をひつかけたので、だいぶあぶなかつたが、やつと行き留めた、夜はぐつすり寝た、おかげで数日来の睡眠不足を取りかへした、南無観世音菩薩。

九月十八日　雨、飯野村、中島屋（三五・中）

濡れてこゝまで来た、午後はドシヤ降りで休む、それでも加久藤を行乞したので、今日の入費だけはいたゞいた。此宿は二階がなく相客も多く、子供が騒ぎ立てるのでかなりうるさくてきたない、それにしても昨日の宿はほんとうによかつた、何もかも一切がよかつた、上の上だつた。

・濡れてすゞしくはだしで歩く・けふも旅のどこやらで虫がなく
ひとり住んで蔦を這はせる　身に触れて萩のこぼるゝよ

朝湯はうれしかつた、早く起きて熱い中へ飛び込む、ざあつと溢れる、こん／＼と流れてくる、生きてゐることの楽しさ、旅のありがたさを感じる、私のよろこびは湯といつしよにこぼれるのである。けふは今にも噛みつくかと思ふほど大きな犬に吠えられた、それでも態度や音声のかはらなかつたのは自分ながらうれしかつた、その家の人々も感心してくれたらしい、犬もとう／＼頭を垂れてしまつた。同宿の人が語る『酒は肥える、焼酎は痩せる』彼も亦アル中患者だ、アルコールで自分をカモフラージしなくては生きてゆけない不幸な人間だ。鮮人か内地人か解らないほど彼は旅なれてゐた、たゞ争はれないのは言葉のアクセントだつた。同宿の人は又語る『どうせみんな一癖ある人間だから世間師になつてゐるのだ』私は思ふ『世間師は落伍者だ、強気の弱者だ』流浪人にとつては食べることが唯だ一つの楽しみとなるらしい、彼等がいかに勇敢に専念に食べてゐか、その様子を見てゐると、人間は生きるために食ふのぢやなくて食ふために生きてゐるのだとしか思へない、実際は人間といふものは生きることゝ、食ふことゝは同一のことになつてしまうまでのであらうが。とにかく私は生きることに労れて来た。

九月十九日　晴、小林町、川辺屋（四〇・中）

いかにも秋らしいお天気である、心もかろく身もかろく午前中三時間、駅附近を行乞する、そして十二時の汽車で小林町へ、また二時間行乞。此宿は探しまはつて探しあてたゞけあつてよかつた、食べものは近来にないまづさであるが、一室一燈を占有してゐられるのが、私には何よりうれしい。夜はだいぶ飲んだ、無何有郷を彷徨した、アル

コールがなくては私の生活はあまりにさびしい、まじめですなほな私は私自身にとつてはみじめで仕方がない。

九月廿日　晴、同前。

小林町行乞、もう文なしだからおそくまで辛抱した、かうした心持をいやしいとは思ふが、どうしようもない、もつとゆつたりとした気分にならなければ嘘だ、けふの行乞はほんとうにつらかつた、時々腹が立つた、それは他人に対するよりも自分に対しての憤懣であつた。夜はアルコールなしで早くから寝た、石豆腐（此地方の豆腐は水に入れてない）を一丁食べて、それだけでこぢれた心がやわらいできた。このあたりはまことに高原らしい風景である、霧島が悠然として晴れわたつた空へ盛りあがつてゐる、山のよさ、水のうまさ。西洋人は山を征服しようとするが、東洋人は山を観照する、我々にとつては山は科学の対象でなくて芸術品である、若い人は若い力で山を踏破せよ、私はぢつと山を味ふのである。

・かさなつて山のたかさの空ふかく　霧島に見とれてゐれば赤とんぼ　朝の山のしづかにも霧のよそほひ　チヨツピリと駄菓子ならべて鳳仙花　旅はさみしい新聞の匂ひかいでも　山家明けてくる大粒の雨　重荷おもかろ濃き影ひいて人も馬も　朝焼け蜘蛛のいとなみのいそがしさ・泣きわめく児に銭を握らし　蒸し暑い日の盗人つかまへられてしまつた　こんなにたくさん子を生んではだか　死にそこなつて虫を聴いてゐる

九月廿一日　曇、雨、彼岸入、高崎新田、陳屋（四〇・上）

九時の汽車で高原へ、三時間行乞、そして一時の汽車で高崎新田へ、また三時間行乞。高原も新田も荒涼たる村の町である、大きな家は倒れて住む人なく、小さい家は荒れゆくまゝにして人間がうようよしてゐる、省みて自分自身を恥ぢ且つ恐れる。

霧島は霧にかくれて赤とんぼ病人連れて秋雨のプラツトホーム

霧島は霧にかくれて見えない、たゞ高原らしい風が法衣を吹いて通る、あちらを見てもこちらを見ても知らない顔ばかり、やつぱりさびしいやすらかさ、やすらかなさびしさに間違いない。此宿は満員だと

いふのを無理に泊めて貰つた、よかつた、おばあさんの心づくしがうれしい。此宿のおかみさんは感心だ（今の亭主は後入らしい）、息子を商業学校に、娘を女学校にやつてゐる、しかし息子も娘もあまりよい出来ではないらしいが。今の旅のヱピソードとしては特種があつた。——小林駅で汽車を待合してゐると、洋服の中年男が近づいてきた、そしていやにに〳〵して、いつしよに遊ばうといふ、私が菩提銭を持つてゐると思つたのか、或は遊び仲間によ□□思つたのか、とにかく、奇怪な申出である、あまりしつこいので断るに困つた、——何と旅はおもしろい事がある！

　　九月廿二日　晴、曇、都城市、江夏屋（四〇・中）

　七時出立、谷頭まで三里、道すがらの風光をたのしみながら歩く、二時間行乞、例の石豆腐を食べる、庄内町まで一里、また三時間行乞、すつかりくたぶれたけれど、都城留置の手紙が早くみたいので、むりにそこまで二里、暮れて宿についた、そしてすぐまた郵便局へ、——友人はありがたいとしみ〴〵思つた。けふはぞんぶんに水を飲んだ、庄内町の自動車乗場の押揚ポンプの水はよかつた、口づけて飲む山の水には及ばないけれど。こゝへ来るまでの道で逢つた学校子供はみんなはだしだつた、うれしかつた、ありがたかつた。けふもまた旅のヱピソードの特種一つ、——宿をさがして急いでゐるうちにゆきあつた若い女の群、その一人が『あう』といふ、熊本のカフヱーでみたことのある顔だ、よく覚えてゐましたね、いらつしやいといひましたね、さてあなたはどこでしたかね。同宿十余人、同室一人、隣室二人、それ〴〵に特徴がある、虚無僧さんはよい、ブラ〳〵さんもわるくない、坊さんもわるくない、少々うるさいけれど。

　　九月廿三日　雨、曇、同前。

　八時から二時まで都城の中心地を行乞、こゝは市街地としてはなか〳〵よく報謝して下さるところである。今日の行乞相はよかつた、近来にない朗らかさである、この調子で向上してゆきたい。一杯二杯三杯飲んだ（断つておくが藷焼酎だ）、いゝ気持になつて一切合切無念無想。

　　　　きのふけふのぐうたら句　糸瓜の門に立つた今日は（子規

忌）・旅の宿の胡椒のからいこと・羽毛むしる鶏はまだ生きてゐるのに・しんじつ秋空の雲はあそぶ　あかつきの高千穂は雲かげもなくて　お信心のお茶のあつさをよばれる　芋虫あつい道をよこぎる　竹藪の奥にて牛が啼いてるよ・露でびつしより汗でびつしより

夜は教会まで出かけて、本間俊平氏の講演を聴く喜びにあつたが、しかし幻滅でないとはいへなかつた、予期したよりも世間並過ぎ上手過ぎてゐはしないだらうか、私は失礼とは思つたが中座した。やつぱり飲み過ぎた、そして饒舌り過ぎた、どうして酒のうまさと沈黙の尊さと、そして孤独のよろしさとに徹しえないのだ。同宿の坊さんはなか／＼の物知りである、世間坊主としては珍らしい、たゞ物を知つてゐて物を味はつてゐない、酒好きで女好きで、よく稼ぎもするがよく費ひもする、もう一人の同宿老人は気の毒な身の上らしい、小学校長で敏腕家の弟にすがりつくべくあせつてゐる、煙草銭もないらしい一服二服おせつたいしてあげた。酔ふた気分は、といふよりも酔うて醒めるときの気分はたまらなく嫌だけれど、酔ふたゝめに睡れるのはうれしい、アルコールをカルモチンやアダリンの代用とするのはバツカスに対して申訳ないが。

九月廿四日　晴、宿は同前。

藷焼酎のたゝりで出かけたくないのを無理に草鞋を穿く、何といふウソの生活だ、こんなウソをくりかへすために行乞してゐるのか、行乞してゐて、この程度のウソからさへ脱離しえないのか。昼食の代りにお豆腐をいたゞく、そして幾度も水を飲んだ、そのおかげで、だいぶ身心が軽くなつた。今日は彼岸の中日、願蔵寺といふかなり大きな寺院の境内には善男善女がたくさん参詣してゐた、露店も五六あつた、私はそこでまたしても少年時代を思ひ起して、センチになつたことを白状する。

・投げ与へられた一銭のひかりだ・馬がふみにじる草は花ざかり

朝一杯、昼一杯、晩一杯、一杯一杯また一杯で一杯になつてしまふのだらう。心境はうつりかはつてゆく、しかしなか／＼ひらけない、水は流れるまゝに流れてゆけ。けふも旅のヱピソード——行乞漫談の材料が二つあつた、或るカフヱーに立つ、女給二三人ふざけてゐてと

りあはない、いつもならばすぐ去るのだけれど、こゝで一つ根くらべをやるつもりで、まあユーモラスな気分で観音経を読誦しつゞけた、半分ばかり読誦したとき、彼女の一人が出て来て一銭銅貨を鉄鉢に入れやうとするのを『ありがたう』といつて受けないで『もういたゞいたもおなじですから、それは君にチツプとしてあげませう』といつたら、笑つてくれた、私も笑つた、少々嫌味だけれど、ナンセンスの一シーンとしてはどうだらうか、もう一つの話は、お寺詣りのおばあさんが、行きずりに二銭下さつた、見るとその一つは黒つぽくなつた五銭の旧白銅貨である、呼びとめてお返しするとおばあさん喜んで外の一銭銅貨を二つ下さつた、彼女も嬉しさうだつたが、私も嬉しかつた。今晩は特別の下好物として鰯と茗荷とを買つた、焼鰯五尾で弐銭、茗荷三つで一銭、そして醤油代が一銭、合計四銭の御馳走也。

　　九月廿五日　雨、宮崎市、京屋（三五・上）

　たいして降りさうもないので朝の汽車に乗つたが、とう／＼本降りになつた、途中の田野行乞もやめて一路宮崎まで、そして杉田さんを訪ねたが旅行中で会へない、更に黒木さんを訪ねて会ふ、それからこゝへ泊る。けふは雨で散々だつた、合羽を着けれど、草鞋のハネが脚絆と法衣をメチヤクチヤにした、宿の盥を借りて早速洗濯する、泣いても笑つても、降つても照つても独り者はやつぱり独り者だ。こゝは水が悪いので困る、便所の汚ないのにも閉口する、座敷は悪くない、都城でのはれ／″＼しさはないけれど。列車内で乗越切符書換してくれた専務車掌さんには好感が持てた、どこといつていひどころのないよさがあつた、禅の話は好きで得るところが多いなどゝも語つた。宮崎県の文化はたしかに後れてゐる、そして道を訊ねても教へ方の下手、或は不深切さが早敢ない旅人を寂しがらせる、たゞ町名標だけは間違ひなく深切だつたが。隣室の若夫婦、逢うて直ぐ身の上話を初める、失敗つゞきの不運をかこつ、彼等は襤褸を着て故郷に帰つたところだ、まあ、あまり悲観しないで運のめぐつてくるをお待ちなさい、などゝ、月並の文句を云つて慰める。雨そのものは悪くないけれど、雨の窓でしんみりと読んだり考へたりすることは好きだけれど、雨は世間師を経済的に苦しめる、私としては行乞が出来ない、今日も汽車賃八十銭、宿料五十銭、小遣二三十銭は食ひ込みである、幸にして二

三日前からの行乞で、それだけの余裕はあつたけれど。子供が泣く、ほんたうに嫌だ、私は最も嫌ひなものとしては、赤子の泣声を或る人の問に答へたことがある。夜になつて、紅足馬、闘牛児の二氏来訪、いつしよに笑楽といふ、何だか固くるしい料理屋へゆく、私ひとりで飲んでしやべる、初対面からこんなに打ち解けることが出来るのも層雲のおかげだ、いや俳句のおかげだ、いや／＼、お互の人間性のおかげだ！　だいぶおそくなつて、紅足馬さんに送られて帰つて来た、そしてぐつすり寝た。旅のヱピソードの一つとして、庄内町に於ける小さい娘の児の事を書き添へておかう、彼女はそこのブルの秘蔵娘らしかつた、まだ学齢には達しないらしいけれど、愛嬌のある茶目子だつた、私が家の前に立つと、奥へとんでいつて一銭持つてきてくれた、そして私に先立つて歩いて家々のおくさんを探し出しては一銭を貰つてきてくれた、附添の女中も何ともすることが出来ない、私はありがたいやら、おかしいやらで、微苦笑しつゝ行乞をつゞけた。草鞋の時代錯誤的価値、――草鞋を探し求める時にはいつもこんな事を考へる、けふも同様だつた。此宿でも都城でも小林でも晩飯にきつとお汁を添へる、山家、或は田舎ではさういふやり方らしい（朝は無論どこでも味噌汁だ）。

　　九月廿六日　晴、宿は同前。

　九時から三時まで、本通りの橘通を片側づゝ行乞する、一里に近い長さの街である、途中闘牛児さんを訪ねてうまい水を飲ませて貰ふ。宮崎は不景気で詰らないと誰もがいつてゐたが、私自身の場合は悪くなかつた、むしろよい方だつた。夜はまた招かれて、闘牛児さんのお宅で句会、飲み食ふ会であつた、紅足馬、闘牛児、蜀羊星（今は故人）みんな家畜に縁のある雅号である、牛飲馬食ですなどゝいつて笑ひ合つた。昨日はあれほど仲のよかつた隣室の若夫婦が、今日は喧嘩して奴鳴つたり殴つたりしてゐる、それを聞くのが嫌なので、運悪く仲裁でもしなければならないやうになつては困るので早々湯屋へゆき、ぶら／＼散歩する。

　　秋暑い窓の女はきちがひか　物思ふ雲のかたちのいつかかはつて　草を草鞋をしみ／″＼させるほどの雨　うまい匂ひが漂ふ街も旅の夕ぐれ　傾いた屋根の下で旅日記書いてゐる・蚤が寝せない旅の星空

　こゝの名物、地酒を少し飲む、肥後の赤酒と同種類のものである、口あたりがよくて酔ふことも酔ふらしい、私には一杯でたくさんだつた、（地酒に対して清酒を上方酒といつてゐる）。

　　九月廿七日　晴、宿は同前、宮崎神宮へ。

　今日は根気よく市街を行乞した、おかげで一日や二日、雨が降つても困らないだけの余裕が出来た。帰宿したのが四時、すぐに湯屋へ、それから酒屋へ、そしてぶら／＼と歩いて宮崎神宮へ参拝した、樹木が若くて社殿は大きくないけれど、簡素な日本趣味がありがたかつた。この町の名物、大盛うどんを食べる、普通の蕎麦茶碗に一杯盛つてたつた五銭、お代りするのはよつぽど大きな胃の腑だ、味は悪くもなければ良くもない、とにかく安い、質と量とそして値段と共に断然他を圧してゐる、いつも大入だ。夜はまた作郎居で句会、したゝか飲んだ、しやべりすぎた、作郎氏とはこんどはとても面接の機があるまいと思つてゐたのに、ひよつこり旅から帰られたのである、予想したやうな老紳士だつた、二時近くまで四人で過ごした。

　　九月廿八日　曇后晴、生目社へ。

　お昼すぎまで大淀——大淀川を東に渡つたところの市街地——を行乞してから、誰もが詣る生目様へ私も詣つた、小つぽけな県社に過ぎないけれど、伝説の魅力が各地から多くの眼病患者を惹きつけてゐる、私には境内にある大楠大銀杏がうれしかつた、つく／＼ぼうしが忙しくないてゐたのが耳に残つてゐる、帰途は近道を教へられて高松橋（渡し銭三銭）を渡り、景清公御廟所といふのへ参詣する、人丸姫の墓もある（景清の墓石は今では堂内におさめてある、何しろ眼薬とすべく、その墓石を削り取る人が多くて困つたので）。今日はしつかり労れた、六里位しか歩かないのだが、脚気がまた昂じて、足が動かなくなつてしまつた、暮れて灯されてから宿に帰りついた、すぐ一風呂浴びて一杯やつて寝る。また一つ旅のヱピソード、——この宿は子沢山で、ちよつと借りて穿くやうな下駄なんぞありやしない、やうやく自分で床下からチグハグなのを片足づゝ探し出したが、右は黒緒の焼杉、左は白緒の樫、それも歩いてゐるうちに、鼻緒も横も切れてしまつて、とう／＼跣足にならなければならなかつた。大淀の丘に登つ

て宮崎平原を見おろす、ずゐぶん広い、日向の丘から丘へ、水音を踏みながら歩いてゆく気分は何ともいへないものがあつた、もつともそれは五六年前の記憶だが。昨日、篤信らしい老人の家に呼び入れて、彼岸団子をいたゞいたこと、小豆ぬり、黄粉ぬり、たいへんおいしかつたことを書き漏らしてゐた、かういふ場合には一句なければならないところだ。これは闘牛児さんの話である、氏の宅の井戸水はおつとりとした味を持つてゐる、以前は近隣から貰ひにくるほどの水だつたさうなが、厳父がヨリよい水を求めて掘り下げて却つてよくない水としたさうな、そしてまたそれを砂利で浅くして、やうやくこれだけの水が出るやうになつたとのことである、このあたりは水脈が浅いらしい、とにかく、掘りさげて水が悪くなつたといふ事実は或る暗示を与へる、どん底まで掘ればいゝが、生半端に掘つたところよりも、むしろ浅いところによい水が湧くこともあるといふことは知つておくがよからう。けふは大淀駅近くの、アンテナのある家で柄杓に二杯、生目社の下で一杯、景清廟の前で二杯、十分に水を飲んだことである。

　　　　途上即事　笠の蝗の病んでゐる・死ぬるばかりの蝗を草へ放つ　放ちやる蝗うごかない

　今夜同宿の行商人は苦労人だ、話にソツがなくてウルホヒがある、ホントウの苦労人はいゝ。

　　九月廿九日　晴、宿は同前、上印をつけてあげる。

　気持よく起きて障子を開けると、今、太陽の昇るところである、文字通りに「日と共に起き」たのである、或は雨かと気遣つてゐたのに、まことに秋空一碧、身心のすが／＼しさは何ともいへない、食後ゆつくりして九時から三時まで遊楽地を行乞、明日はいよ／＼都会を去つて山水の間に入らうと思ふ、知人俳友にハガキを書く。此宿は座敷も賄も、夜具も待遇もよいけれど、子供がうるさく便所の汚いのが疵だ、そしていかにも料理がまづい、あれだけの材料にもう少しの調理法を加へたならばどんなに客が満足することだらう。今日の行乞中に二人、昨日は一人の不遜な中年女にでくわした、古い型の旧式女性から、女のしほらしさ、あたゝかさ、すなほさを除いて、何が残るか！子供が声張りあげて草津節をうたつてゐる、「草津よいとこ一度

はおぢやれ、お湯の中にも花が咲く」チヨイナ／＼、ほんとうにうまいものである、私はぢつとそれに耳を傾けながら物思ひに耽つてゐるのである、——此間の年数五十年相経ち申し候だらうな。両手が急に黒くなつた、毎日鉄鉢をさゝげてゐるので、秋日に焼けたのである、流浪者の全身、特に顔面は誰でも日に焼けて黒い、日に焼けると同時に、世間の風に焼けるのである、黒いのはよい、濁つてはかないない。行乞中、しば／＼自分は供養をうけるに値しないことを感ぜざるをえない場合がある、昨日も今日もあつた、早く通り過ぎるやうにする、貧しい家から全財産の何分一かと思はれるほど米を与へられるとき、或はなるたけ立たないやうにする仕事場などで、主人がわざ／＼働く手を休ませて蟇口を探つて銅貨の一二□を鉄鉢に投げ入れてくれるとき。……同宿の修行遍路——いづれ炭坑夫などのドマグレで、からだには鯨青のあとがある手合だらう——酔ひしれて、宿のものを手古摺らし同宿人の眉を顰めさせてゐる、此地方では酔うて管を巻くことを山芋を掘るといふ、これも面白い言葉である。言葉といへば此辺の言葉はアクセントが何だか妙で、私には解らないことが多い、言葉の解らない寂しさ、それも旅人のやるせなさの一つである。

　　九月三十日　秋晴申分なし、折生迫、角屋（旅館・中）

　いよ／＼出立した、市街を後にして田園に踏み入つて、何となくホツとした気持になる、山が水が、そして友が私を慰めいたはり救ひ助けてくれる。こゝまで四里の道すがら行乞したが、すつかり労れてしまつた、おまけにボクチンに泊りそこなつて（あのボクチンのマダムは何といふ無智無愛嬌だつたらう）旅館に泊つた、一室一燈を占有して、のんびりと読んだり書いたりする、この安らかさは、二十銭三十銭には代へられない、此宿はかなり広い家だが、お客さんとしては私一人だ、主人公も家内もみな好人物だけれど、不景気風に吹きまくられてゐるらしい。青島を見物した、檳榔樹が何となく弱々しく、そして浜万年青がいかにも生々してゐたのが印象として残つてゐる、島の井戸——青島神社境内——の水を飲んだが、塩気らしいものが感じられなかつた——その水の味もまた忘れえぬものである。久しぶりに海を見た、果もない大洋のかなたから押し寄せて砕けて、白い波を眺めるのも悪くなかつた（宮崎の宿では毎夜波音が枕にまで響いた、私は

海の動揺よりも山の閑寂を愛するやうになつてゐる）。今日、途上で見たり聞いたり思ひついたりしたことを書きつけておかう、昔の客馬車をそのまゝ荷馬車にして老人が町から村へといろ／＼の雑貨を運んでゐた、また草原で休んでゐると、年とつたおかみさんがやつてきて、占い（ウラカタ）はしないかといふ、また、或る家で、うつくしいキジ猫二匹を見た、撫でゝやりたいやうな衝動を感じた。今日、求めた草鞋は（此辺にはあまり草鞋を売つてゐない）よかつた、草鞋がしつくりと足についた気分は、私のやうな旅人のみが知る嬉しさである、芭蕉は旅の願ひとしてよい宿とよい草鞋とをあげた、それは今も昔も変らない、心も軽く身も軽く歩いて、心おきのない、情のあたゝかい宿におちついた旅人はほんとうに幸福である。いはゞ草鞋は時代錯誤的な履物である、そこに時代錯誤的な実益と趣味とが隠されてゐる。このあたりの山も海もうつくしい、水も悪くない、ほんの少しの塩分を含んでゐるらしい、私のやうな他郷のものにはそれが解るけれど、地の人々には解らないさうだ、生れてから飲みなれた水の味はあまり飲みなれて解らないものらしい、これも興味のある事実である。夜おそくなつて、国勢調査員がやつてきて、いろ／＼訊ねた、先回の国勢調査は味取でうけた、次回の時には何処で受けるか、或は墓の下か、いや、墓なぞは建てゝくれる人もあるまいし、建てゝ貰ひたい望みもないから、野末の土くれの一片となつてしまつてゐるだらうか、いや／＼まだ／＼業が尽きないらしいから、どこかでやつぱり思ひ悩んでゐるだらう。元坊にあげたハガキに、――とにかく俳句（それが古くても新しくても）といふものはやつぱり夏爐冬扇ですね、またそれで十分ぢやありませんか、直接其場の仕事に役立たないところに俳句のよさがあるのではないでせうか、私共はあまり考へないでその時その時の感動を句として表現したいと思ひます。

　夕日まぶしい銅像を仰ぐ　涸れはてゝ沼底の藻草となつてしまつて　波の音たえずしてふる郷遠し　波音遠くなり近くなり余命いくばくぞ　お茶を下さる真黒な手で　　　青島即事・白浪おしよせてくる虫の声

　十月一日　曇、午后は雨、伊比井、田浦といふ家（七〇・中）

　よう寝られて早う眼が覚めた、音のしないやうに戸を繰つて空を眺

める、雨かも知れない、しかし滞留は財布が許さない、九時から十一時まで、そこらあたりを行乞、それから一里半ほど内海まで歩く、峠を登ると大海にそうて波の音、波の色がたえず身心にしみいる、内海についたのは一時、二時間ばかり行乞する、間違ひなく降り出したので教へられた家を尋ねて一泊を頼んだが、何とか彼とかいつて要領を得ない（田舎者は、yes no をはつきりいはない）、思ひ切つて濡れて歩むことまた一里半、こゝまで来たが、安宿は満員、教へられてこの家に泊めて貰ふ、この家も近く宿屋を初めるつもりらしい、投込だから木賃よりもだいぶ高い、しかし主人も妻君も深切なのがうれしかつた、何故だか気が滅入りこんでくるので、藷焼酎三杯ひつかけて、ぐつすりと寝てしまつた。労れて宿に着いて、風呂のないのは寂しくもあり嫌でもある、私は思ふ、日本人には入浴ほど安価な享楽はない。朝夕の涼しさ、そして日中の暑さ。今日此頃の新漬——菜漬のおいしさはどうだ、ことに昨日のそれはおいしかつた、私が漬物の味を知つたのは四十を過ぎてからである、日本人として漬物と味噌汁と（そして豆腐と）のうまさを味はひえないものは何といふ不幸だらう（さういふ不幸は日本人らしい日本人にはないけれど）。酒のうまさを知ることは幸福でもあり不幸でもある、いはゞ不幸な幸福であらうか、『不幸にして酒の趣味を解し……』といふやうな文章を読んだことはないか知ら、酒飲みと酒好きとは別物だが、酒好きの多くは酒飲みだ、一合は一合の不幸、一升は一升の不幸、一杯二杯三杯で陶然として自然人生に同化するのが幸福だ（こゝでまた若山牧水、葛西善蔵、そして放哉坊を思ひ出さずにはゐられない、酔うてニコ／＼するのが本当だ、酔うて乱れるのは無理な酒を飲むからである）。今日、歩きつゝつく／″＼思つたことである、——汽車があるのに、自動車があるのに、歩くのは、しかも草鞋をはいて歩くのは、何といふ時代おくれの不経済な骨折だらう（事実、今日の道を自動車と自転車とは時々通つたが、歩く人には殆んど逢はなかつた）、然り而して、その馬鹿らしさを敢て行ふところに、悧巧でない私の存在理由があるのだ。自動車で思ひ出したが、自動車は埃のお接待をしてくれる、摂取不捨、何物でも戴かなければならない私は、法衣に浴せかけられた泥に向つても合掌しなければならないのだらう。今日の特種としては、見晴らしのいゝ路傍に躄車を見出した事だつた、破れ着物を張りまはした中か

ら、ぬつと大きな汚ない足が一本出てゐた（その片足は恐らく見るかげもなく頽れてしまつてゐるのだらう）、彼は海と山との間に悠々として太平の夢を楽しんでゐるのだ、『おい同行さん』とその乞食君（私としては呼び捨てには出来ない）に話しかけたかつたが彼の唯一の慰めともいふべき睡眠を妨げることを恐れて、黙つて眺めて通り過ぎたが。

　　泊めてくれない村のしぐれを歩く　こゝろつかれて山が海がうつくしすぎる　岩のあひだにも畠があつて南瓜咲いてる・波音の稲がよう熟れてゐる・蕎麦の花にも少年の日がなつかしい　労れて足を雨にうたせる

　　十月二日　雨、午后は晴、鵜戸、浜田屋（三五・中）

　ほんたうによう寝られた、夜が明けると眼がさめて、すぐ起きる、細い雨が降つてゐる、けふもまた濡れて歩く外ない、昨日の草鞋を穿いて出かける、途中、宮ノ浦といふ部落を行乞したが、どの家も中流程度で、富が平均してゐるやうであつた、今は養蚕と稲扱との最中であつた、三里半歩いて鵜戸へ着いたのが二時過ぎ、こゝでも二時間あまり行乞、それから鵜戸神宮へ参拝した、小山の石段を登つて下る足は重かつたが、老杉しん／＼としてよかつた、たゞ民家が散在してゐるのを惜しんだ、社殿は岩窟内にある、大海の波浪がその岩壁へ押し寄せて砕ける、境地としては申分ない、古代の面影がどことなく漂うてゐるやうに感じる。今夜はボクチンに泊ることが出来た、殊に客は私一人で二階の六畳一室に寝そべつて、電燈の明るさで、旅のたよりを書くことが出来た、寥平、緑平の二君へ、そして吉田、石次、中山の三氏へ神宮絵葉書を出したのでほつとした。句はだいぶ出来た、旅で出来る句は無理に作つたのでないから、平凡でも、その中に嫌味は少ない。

　・お経あげてお米もらうて百舌鳥ないて　露草が露をふくんでさやけくも・一りん咲けるは浜なでしこ・鵜しきりに啼いて何を知らせる・われとわれに声かけてまた歩き出す・はてしない海を前にして尿する・吠えつゝ犬が村はづれまで送つてくれた　殺した虫をしみ／″＼見てゐる　腰をかける岩も私もしつとり濡れて・けふも濡れて知らな

い道を行く　穴にかくれる蟹のうつくしさよ・だるい足を撫でては今日をかへりみる　暗さおしよせる波がしら　交んだ虫で殺された　霽れてはつきりつく／＼ぼうし

　此附近の風景は土佐海岸によく似てゐる、たゞ石質が異る、土佐では巨巌が立つたり横はつたりしてゐるが、こゝではまるで平石を敷いたやうな岩床である、しかしおしよせ、おしよせて、さつと砕け散る波のとゞろきはどちらも壮快である、絶景であることには誰も異論はなからう。現在の私には、海の動揺は堪へられないものである、なるたけ早く山路へはいつてゆかう。私の行乞のあさましさを感じた、感ぜざるをえなかつた、それは今日、宮ノ浦で米一升五合あまり金十銭ばかり戴いたので、それだけでもう今日泊つて食べるには十分である、それだのに私はさらに鵜戸を行乞して米と銭を戴いた、それは酒が飲みたいからである、煙草が吸ひたいからである、報謝がそのまゝアルコールとなりニコチンとなることは何とあさましいではないか！とにもかくにも、どうしても私は此旅で酒を揚棄しなければならない、酒は飲んでも飲まなくてもいゝ境界へまで達しなければならない、飲まずにはゐられない気分が悪いやうに、飲んではならないといふ心持もよくないと思ふ、好きな酒をやめるには及ばない、酒そのものを味ふがよい、陶然として歩を運び悠然として山を観るのである。岩に波が、波が岩にもつれてゐる、それをぢつと観てゐると、岩と波とが闘つてゐるやうにもあるし、また、戯れてゐるやうにもある、しかしそれは人間がさう観るので、岩は無心、波も無心、非心非仏、即心即仏である。猫が鳴きよる、子供が呼びかける、犬がぢやれる、虫が飛びつく、草の実がくつつく、——そしてその反対の場合はどうだらう、——犬に吠えられる、子供に悪口雑言される、猫が驚ろいて逃げる、家の人は隠れる、等、等、等。袈裟の功徳と技巧！　何といふ皮肉な語句だらう、私は恥ぢる、悔ゐる、願はくは、恥のない、悔のない生活に入りたい、行うて悔ゐず、そこに人生の真諦があるのではあるまいか。同宿の或る老人が話したのだが（実際、彼の作だか何だか解らないけれど）、

　一日に鬼と仏に逢ひにけり仏山にも鬼は住みけり

　鬼が出るか蛇が出るか、何にも出やしない、何が出たつてかまはな

い、かの老人の健康を祈る。鵜戸神宮では自然石の石だゝみのそばに咲いてゐた薊の花がふかい印象を私の心に刻んだ、今頃、薊は咲くものぢやあるまい、その花は薄紅の小さい姿で、いかにも寂しさうだつた、そして石段を登りつくさうとしたところに、名物『お乳飴』を売つてゐる女子供の群のかしましいには驚かされた、まさかお乳飴を売るからでもあるまいが、まるで、乳房をせがむ子供のやうだつた、残念なことにはその一袋を買はなかつたことだ。宿の後方の横手に老松が一本蟠つてゐる、たしかに三百年以上の樹齢だらう、これを見るだけでも木賃料三十五銭の値打はあるかも知れない、いはんや、その下へは太平洋の波がどう／＼とおしよせてゐる、その上になほ、お隣のラヂオは、いや蓄音機は青柳をうたつてゐる、青柳といへば、昔、昔、その昔、ＫさんやＳさんといつしよにムチヤクチヤ遊びをやつた時代が恋ひしくなる。こゝの枕はめづらしくも坊主枕だ、莫蓙枕には閉口する、あの殺風景な、実用一点張の、堅い枕は旅人をして旅のあはれを感ぜしめずにはおかない、坊主枕はやさしくふつくらとして、あたゝかいねむりをめぐんでくれる。宮崎の人々は不深切といふよりも無愛想らしい、道のりのことをたづねても、教へてくれるといふよりも知らん顔をしてゐる、頭もよくないらしい（宮崎の人々にかぎらず、だいたい田舎者は数理観念に乏しい）、一里と二里とを同一の言葉で現はしてゐる、腹を立てるよりも苦笑すべきだらう。

十月三日　晴、飫肥町、橋本屋（三五・中）

すこし寝苦しかつた、夜の明けきらないうちに眼がさめて読書する、一室一燈占有のおかげである、八時出立、右に山、左に海、昨日の風景のつゞきを鑑賞しつゝ、そしてところ／″＼行乞しつゝ風田といふ里まで、そこから右折して、小さい峠を二つ越してこゝ飫肥の町へついたのは二時だつた、途中道連れになつた同県の同行といつしよに宿をとつた。此宿の老主人から、米を渡すとき、量りが悪いといふので嫌味をいはれた、さては私もそれほど慾張りになつたのか、反省しなければならない、それにしても宮崎では良すぎるといはれ、こゝではよくないといはれる、世はさま／″＼人はそれ／″＼であるかな。今朝、宿が豆腐屋だつたので、一丁いたゞいたが、何とまづい豆腐だつたことか、いかに豆腐好きの私でも、その堅さ、その臭さには、せつ

かくの食慾をなくされてしまつた。朝、まだ明けきらない東の空、眺めてゐるうちに、いつとなく明るくなつて、今日のお天道様がらんらんと昇る、それは私には荘厳すぎる光景であるが、めつたに見られない歓喜であつた、私はおのづから合掌低頭した。今は障子の張替時である、張り替へて真白な障子がうれしいと同様、剥がしてまだ張らない障子はわびしい、さういふ障子をよせかけたまゝの部屋へ通されて、ひとりぽかんとしてゐるのは、ずゐぶんさびしいものである。
午後は風が出た、顔をあげてゐられないほどの埃だつた、かういふ日には網代笠のありがたさを感じる、雨にも風にも雪にも、また陽にもなくてはならないものである。

　休んでゆかう虫のないてゐるこゝで一椀の茶をのみほして去る子供ら仲よく遊んでゐる墓の中大魚籃ひきあげられて秋雨のふる墓が家がごみ／″＼と住んでゐるすげない女は大きく孕んでゐたその音は山ひそかなる砂ふりしくけふのつれは四国の人だつた暮れの鐘が鳴る足が動かなくなつた

　　十月四日　曇、飫肥町行乞、宿は同前。

　長い一筋街を根気よく歩きつゞけた、かなり労れたので、最後の一軒の飲食店で、刺身一皿、焼酎二杯の自供養をした、これでいよ／＼生臭坊主になりきつた。この地方には草鞋がないので困つた、詮方なしに草履にした、草鞋といふものは無論時代おくれで、地下足袋にすつかり征服されてしまつたけれど、此頃はまた多少復活しつゝある、田舎よりも却つて市街で売つてゐる。此宿の老爺は偏屈者だけれど、井戸水は素直だ、夜中二度も腹いつぱい飲んだ、蒲団短かく、夜は長く、腹いつぱい水飲んで来て寝ると前に書いたこともあつたが。昨日から道連れになつて同宿したお遍路さんは面白い人だ、酒が好きで魚が好きで、無論女好きだ、夜流し専門、口先きがうまくて手足がかろい、誰にも好かれる、女には無論好かれる。夕方になると里心が出て、ひとりで微苦笑する、家庭といふものは——もう止さう。この宿の老妻君は中気で動けなくなつてゐる、その妻君に老主人がサジでお粥を食べさせてゐる、それはまことにうつくしいシーンであつた。わづか二里か三里歩いてこんなに労れるとは私も老いたるかなだ、私は今まであまりに手足を虐待してゐなかつたか、手足をいたはれ、口ば

かり可愛がるな。わざ／＼お婆さんが後を追うて来て一銭下さつた、床屋で頭を剃る、若い主人は床屋には惜しいほどの人物だつた。焼酎屋の主人から、焼酎は少し濁つてゐるのが本当だと聞かされた、藷焼酎の臭気はなか／＼とれないさうだ、その臭気の多い少いはあるが。今日は行乞エピソードとして特種が二つあつた、その一つは文字通りに一銭を投げ与へられたことだ、その一銭を投げ与へた彼女は主婦の友の愛読者らしかつた、私は黙つてその一銭を拾つて、そこにゐた主人公に返してあげた、他の一つは或る店で女の声で、出ませんよといはれたことだ、彼女も婦人倶楽部の愛読者だつたらう。

・白髪剃りおとすうちに暮れてしまつた・こゝに白髪を剃りおとして去る・熟れて垂れて稲は刈られるばかり　秋晴れの屋根を葺く　秋風の馬に水を飲ませる　水の味も身にしむ秋となり・お天気がよすぎる独りぼつち・秋の土を掘りさげてゆく　誰もゐないでコスモスそよいでゐる　剥いでもらつた柿のうまさが一銭

行乞記の重要な出来事を書き洩らしてゐた――もう行乞をやめて宿へ帰る途上で、行きずりの娘さんがうや／＼しく十銭玉を一つ報謝して下さつた、私はその態度がうれしかつた、心から頭がさがつた、彼女はどちらかといへば醜い方だつた、何か心配事でもあるのか、亡くなつた父か母でも思ひ出したのか、それとも恋人に逢へなくなつたのか、とにかく、彼女に幸あれ、冀くは三世の諸仏、彼女を恵んで下さい。

十月五日　晴、行程二里、油津町、肥後屋（三五・下）

ぶらり／＼と歩いて油津で泊る、午前中の行乞相はたいへんよかつたが、午後はいけなかつた。此宿の人々はみな変人だ、あとで聞いたら変人として有名なさうだ、おかみさんは会話が嫌ひらしい。乞食にも見放された家、さういふ家がある、それは貧富にかゝはらない、人間らしからぬ人間が住んでゐる家だ、私も時々さういふ家に立つたことがある。その一銭をうけて、ほんたうにすまないと思ふ一銭。秋は収穫のシーズンか、大きな腹をかゝへた女が多い、ある古道具屋に、『御不用品何でも買ひます、但し人間のこかしは買ひません』と書いてあつた、こかしとは此地方で、怠けものを意味する方言ださうな、

私なぞは買はれない一人だ。同宿のエビス爺さん、尺八老人（虚無僧さんのビラがない）、絵具屋さん、どれも特色のある人物だつた。例のお遍路さんから、肉体のおせつたいといふ話を聞いた、ずゐぶんありがたい、いや、ありがたすぎるおせつたいだらう。親子三人連れのお遍路さんも面白い人だつた、みんな集つて雑談の花が咲いたとき、これでどなたもブツの道ですなあといつた、ブツは仏に通じ、打つに通じる、打つは勿論、飲む買ふ打つの打つである、またいつた、虱と米の飯とを恐れては世間師は出来ませんよと、虱に食はれ、米の飯を食ふところに世間師の悲喜哀歓がある。

秋暑い乳房にぶらさがつてゐるよいお天気の言葉かけあつてゆく旅は気軽い朝から唄つてゐるふる郷忘れがたい夕風が出た子供と人形と猫と添寝して日向子供と犬と仲よく秋風の鶏を闘はせてゐる

　十月六日　晴、油津町行乞、宿は同前。

九時から三時まで行乞、久しぶりに日本酒を飲んだ、宮崎鹿児島では焼酎ばかりだ、焼酎は安いけれど日本酒は高い、私の住める場所ぢやない。十五夜の明月も観ないで宵から寝た、酔つぱらつた夢を見た、まだ飲み足らないのだらう。油津といふ町はこぢんまりとまとまつた港町である、海はとろ／＼と碧い、山も悪くない、冬もあまり寒くない、人もよろしい、世間師のよく集るところだといふ。

　小鳥いそがしく水浴びる朝日影・秋が来た雑草にすわる　子供握つてくれるお米がこぼれます

八月十五夜は飫肥、油津、大堂津あたりでは全町総出で綱引をやる、興味ふかい年中行事の一つだと思ふ。

明月の大綱をひつぱりあつてゐる

　十月七日　晴、行程二里、目井津、末広屋（三五・下）

雨かと心配してゐたのに、すばらしいお天気である、そこゝ行乞して目井津へ、途中、焼酎屋で藷焼酎の生一本をひつかけて、すつかりいゝ気持になる、宿ではまた先日来のお遍路さんといつしよに飲む、今夜は飲みすぎた、とう／＼野宿をしてしまつた、その時の句を、嫌々ながら書いておく。

酔中野宿・酔うてこほろぎといつしよに寝てゐたよ　大地に寝て鶏の声したしや　草の中に寝てゐたのか波の音・酔ひざめの星がまたゝいてゐる・どなたかかけてくださつた莚あたゝかし

此宿はよくないが、便所だけはきれいだつた、久しぶりに気持よくしやがんでゐることが出来た。

竹を眺めつゝ尿してゐるちらほら家が見え出して鵙が鋭く

今日の珍しい話は、船おろしといふので、船頭さんの馴染女を海に追ひ入れてゐるのを見たことだつた、そして嬉しい話は、或る家の主人から草鞋をいたゞいたことだつた、油津で一足買つたことは買つたが。このあたりの海はまつたく美しい、あまり高くない山、青く澄んで湛へた海、小さい島――南国的情緒だ、吹く風も秋風だか春風だか分らないほどの朗らかさだつた。

十月八日　晴、后曇、行程三里、榎原、栄屋（七〇・上上）

どうも気分がすぐれないので滞在しようかとも思つたが、思ひ返して一時出立、少し行乞してこゝまで来た、安宿はないから、此宿に頼んで安く泊めて貰ふ、一室一人が何よりである、家の人々も気易くて深切だ。やうやく海を離れて山へ来た、明日はまた海近くなるが、今夜は十分山気を呼吸しよう。

・こんなにうまい水があふれてゐる・窓をあけたら月がひよつこり

日向の自然はすぐれてゐるが、味覚の日向は駄目だ、日向路で食べもの飲みものゝ印象として残つてゐるのは、焼酎の臭味と豆腐の固さとだけだ、今日もその焼酎を息せずに飲み、その豆腐をやむをえず食べたが。よく寝た、人生の幸福は何といつたとて、よき睡眠とよき食慾だ、こゝの賄はあまりいゝ方ではないけれど（それでも刺身もあり蒲鉾もあつたが）夜具がよかつた、新モスの新綿でぽか／＼してゐた、したがつて私の夢もぽか／＼だつた訳だ、私のやうなものには好過ぎて勿躰ないでもなかつた。

十月九日　曇、時雨、行程三里、上ノ町、古松屋（三五・上）

夜の明けないうちに眼がさめる、雨の音が聞える、朝飯を食べて煙

草を吸うて、ゆつくりしてゐるうちに、雲が切れて四方が明るくなる、大したこともあるまいといふので出立したが、降つたり止んだり合羽を出したり入れたりする、そして二三十戸集つてゐるところを三ヶ所ほど行乞する、それでやつと今日の必要だけは頂戴した、何しろ、昨日は朝の別れに例のお遍路さんと飲み、行乞はあまりやらなかつたし、それにヤキがなくてリヨカンに泊つたので、一枚以上の食ひ込みだ（かういふ世間師のテクニツクを覚えて使ふのも、かういふ境涯の善し悪しだ）。二時過ぎには宿についた、誰もが勧めるほどあつて、気持のよい家と人であつた。傘を借り足駄を借りて、中ノ町を歩いて見る、港までは行けなかつた、福島町といふのは上ノ町、中ノ町、今町の三つを合せて延長二里に亘る田舎街である。隣室は世間師坊主の四人組、多分ダフのゴミだらう、真言、神道、男、女、面白い組合だ。今日の道は山路だからよかつた、萩がうれしかつた、自動車よ、あまり走るな、萩がこぼれます。昨夜の女主人公は楽天家だつた、今夜の女主人公は家政婦らしい、子を背負うて安来節をうたふのもわるくないし、雑巾で丹念に板座を拭くのもよろしい。一昨日、書き洩らしてはならない珍問答を書き洩らしてゐた、大堂津で藷焼酎の生一本をひつかけて、ほろ／＼機嫌で、やつてくると、妙な中年男がいやに丁寧にお辞儀をした、そして私が僧侶（？！）であることをたしかめてから、問うて曰く『道とは何でせうか』また曰く『心は何処に在りますか』道は遠きにあらず近きにあり、趙州曰く、平常心是道、常済大師曰く、逢茶喫茶、逢飯食飯、親に孝行なさい、子を可愛がりなさい――心は内にあらず外にあらず、さてどこにあるか、昔、達磨大師は慧可大師に何といはれたか、――あゝあなたは法華宗ですか、では自我偈を専念に読誦なすつたらいゝでせう――彼はまた丁寧にお辞儀して去つた、私は歩きつゝ微苦笑する外なかつた。

　　まゝよ法衣は汗で朽ちた・ゆつくり歩かう萩がこぼれる　　　訂正二句　酔うてこほろぎと寝てゐたよ　大地したしう夜を明かしたり波の音

　昨夜は榎原神社に参詣し、今日は東間神社に参詣した、前者は県社、後者は郷社に過ぎないが、参拝者はずゐぶんに多いと見えて、そこには二三十軒の宿屋、飲食店、土産物店が並んでゐた、かういふ場

所には地方的特色が可なり濃厚に出てゐる。同室三人、箒屋といふむつつり爺さん、馬具屋といふきよろきよろ兄さん、彼等にも亦、地方的特色が表現されてゐる。

　　十月十日　曇、福島町行乞、行程四里、志布志町、鹿児島屋（四〇・上）

　八時過ぎてから中町行乞二時間、それから今町行乞三時間、もう二時近くなつたので志布志へ急ぐ、三里を二時間あまりで歩いた、それは外でもない、局留の郵便物を受取るためである、友はなつかしい、友のたよりはなつかしい。

　　旅の子供は夕べしく／＼泣いてゐる　旅はおかしい朝から夫婦喧嘩だ・親によう似た仔馬かあいやついてゆく　みんな寝てしまつてよい月夜かな・月夜の豚がうめきつゞけてゐる　月光あまねくほしいまゝなる虫の夜だ　月の水をくみあげて飲み足つた　明月の戸をかたくとざして　故郷の人とはなしたのも夢か　伸ばした足に触れた隣りは四国の人　秋の白壁を高う／＼塗りあげる　松葉ちりしいてゐますお休みなさい・松風ふいて墓ばかり　踏むまいとしたその蟹は片輪だ　志布志へ一里の秋の風ふく・こゝまできてこの木にもたれる・秋風の石を拾ふ・人里ちかい松風の道となる　泣く子叱つてる夕やみ飲まずには通れない水がしたゝる　砂がぽこ／＼旅はさみしい
ヨタ一句　こんなところにこんなシヤンがゐる波音

　安宿の朝はおもしろい、みんなそれ／″＼めい／＼の姿をして出てゆく、保護色といふやうなことを考へざるをえない、片輪は片輪のやうに、狡いものは狡いやうに、そして、一は一のやうに！今日の行乞相はよくもわるくもなかつた、嫌な事が四つあつた、同時にうれしい事が四つあつた、憾むらくは私自身が空の空になれない事だ、嫌も好きもあるものか。米価の安くなる事実は私のやうなものをも考へさせる、——飫肥では弐十八銭、油津では二十五銭、上ノ町では弐十弐銭となつた（新白米では弐十銭以下だとさへ聞いた）。今町から志布志まで三里強、日本風の海岸佳景である、一里ばかり来たところに、宮崎と鹿児島との県界石標が立つてゐる、大きなタブの樹も立つてゐる、石よりも樹により多く心を惹かれるのは私のセンチメンタリズム

か、夏井の浜といふところは海水浴場としてよいらしかつた、別荘風の料理屋もあつた、浅酌低唱味を思ひ出させるに十分だ。自動車が走る、箱馬車が通る、私が歩く。途上、道のりを訊ねたり、此地方の事情を教へてくれた娘さんはいゝ女性だつた、禅宗——しかも曹洞宗——の寺の秘蔵子と知つて、一層うれしかつた、彼女にまことの愛人あれ。草鞋がないのには困つたが、それでもおせつたいとしていたゞいたり、明月に供へるのを貰つたりして、どうやらかうやらあまり草履をべた／＼ふまないですんだ、私も草鞋の句はだいぶ作つたが、ほんたうの草鞋の名句が出来さうなものだ。同室三人、松葉ヱツキス売の若い鮮人は好きだつたが、もう一人は要領を得ない『山芋掘』で、うるさいから、街へ出て飲む、そしてイモシヨウチユウの功徳でぐつすり寝ることが出来た。

十月十一日　晴、曇、志布志町行乞、宿は同前。

九時から十一時まで行乞、こんなに早う止めるつもりではなかつたけれど、巡査にやかましくいはれたので、裏町へ出て、駅で新聞を読んで戻つて来たのである（だいたい鹿児島県は行乞、押売、すべての見師の行動について法文通りの取締をするさうだ）。今日は中学校の運動会、何しろ物見高い田舎町の事だから、爺さん婆さんまで出かけるらしい、それも無理はない、いや、よいことだと思ふ。隣室の按摩兼遍路さんは興味をそゝる人物だつた、研屋さんも面白い人物だつた、昨夜の「山芋掘り」も亦異彩ある人物だつた、彼は女房に捨てられたり、女房を捨てたり、女に誑されたり、女を誑したりして、それが彼の存在の全部らしかつた、いはゞ彼は愚人で、そして喰へない男なのだ、多少の変質性と色情狂質とを持つてゐた。畑のまんなかに、どうしたのか、コスモスがいたづらに咲いてゐる、赤いの、白いの、弱々しく美しく眺められる。今日はまた、代筆デーだつた。あんまさんにハガキ弐枚、とぎやさんに四枚、やまいもほりさんに六枚書いてあげた、代筆をくれやうとした人もあるし、あまり礼もいはない人もある。夕べ、一杯機嫌で海辺を散歩する、やつぱり寂しい、寂しいのが本当だらう。行乞してゐる私に向つて、若い巡査曰く、托鉢なら托鉢のやうに正々堂々とやりたまへ、私は思ふ、これでずゐぶん正々堂々と行乞してゐるのだが。隣室に行商の支那人五人組が来たので、

相客二人増しとなる、どれもこれもアル中毒者だ（私もその一人であることに間違ひない）、朝から飲んでゐる（飲むといへばこの地方では藷焼酎の外の何物でもない）、彼等は彼等にふさはしい人生観を持つてゐる、体験の宗教とでもいはうか。コロリ往生——脳溢血乃至心臓麻痺でくたばる事だ——のありがたさ、望ましさを語つたり語られたりする。人間といふものは、話したがる動物だが、例の山芋掘りさんの如きは、あまり多く話す、ナフ売りさんはあまりに少く話す、さて私はどちらだつたかな。酒壺洞君の厚意で、寝つかれない一夜がさほど苦しくなかつた、文芸春秋はかういふ場合の読物としてよろしい。支那人——日本へ来て行商してゐる——は決して飲まない、煙草を吸ふことも少い、朝鮮人はよく飲みよく吸ひ、そしてよく喧嘩する（日本人によく似てゐる）、両者を通じて困るのは、彼等の会話が高調子で喧騒で、傍若無人なことだ。夢に、アメリカへ渡つて、ドーミグラスといふ町で、知つたやうな知らないやうな人に会つて一問題をひきおこした、はて面妖な。

十月十二日　晴、岩川及末吉町行乞、都城、江夏屋（四〇・中）

九時の汽車に乗る、途中下車して、岩川で二時間、末吉で一時間行乞、今日はまた食ひ込みである。

・年とれば故郷こひしいつく／＼ぼうし　安宿のコスモスにして赤く白く　一本一銭食べきれない大根である・何とたくさん墓がある墓がある　海は果てなく島が一つ・はだかでだまつて何掘つてるか　秋寒く酔へない酒を飲んでゐる　今日のうれしさは草鞋のよさは　一きれの雲もない空のさびしさまさる　波のかゞやかさも秋となつた　砂掘れば砂のほろ／＼　線路へこぼるゝ萩の花かな　秋晴れて柩を送る四五人に・岩が岩に薊咲かせてゐる（鵜戸）・何といふ草か知らないつゝましう咲いて　まづ水を飲みそれからお経を・言葉が解らないとなりにをる　秋晴れの菜葉服を出し褪めてゐる・こころしづ山のおきふし・家を持たない秋がふかうなつた・捨てゝある扇子をひらけば不二の山　旅の夫婦が仲よく今日の話　　行乞即事　秋の空高く巡査に叱られた・その一銭はその児に与へる

今夜は飲み過ぎ歩き過ぎた、誰だか洋服を着た若い人が宿まで送つ

てくれた、彼に幸福あれ。藷焼酎の臭気はなか／＼とれないが、その臭気をとると、同時に辛味もなくなるさうな、臭ければこそ酔ふのだらうよ。世を捨てゝ山に入るとも味噌醤油酒の通ひ路なくてかなはじ、といふ狂歌（？）を読んだ、山に入つても、雲のかなたにも浮世があるといふ意味の短歌を読んだこともある、こゝも山里塵多しと語句も覚えてゐる、田の草をとればそのまゝ肥料かな――煩悩即菩提、生死去来真実人、さてもおもろい人生人生。夕方また気分が憂欝になり、感傷的にさへなつた、そこで飛び出して飲み歩いたのだが、コーヒー一杯、ビール一本、鮨一皿、蕎麦一椀、朝日一袋、一切合財で一円四十銭、これで懐はまた秋風落寞、さつぱりしすぎたかな（追記）。

十月十三日　晴、休養、宿は同前。

とても行乞なんか出来さうもないので、寝ころんで読書する、うれしい一日だつた、のんきな一日だつた。一日の憂は一日にて足れり――キリストの此言葉はありがたい、今日泊つて食べるだけのゲルトさへあれば（慾には少し飲むだけのゲルトを加へていたゞいて）、それでよいではないか、それで安んじてゐるやうでなければ行乞流浪の旅がつゞけられるものぢやない。この宿はひろ／″＼として安易な気持でゐられるのがよい、電燈の都合がよろしいと申分ないが。昨日今日すつかり音信の負債を果したので軽い気になつた、ゲルトの負債も返せると大喜びなのだけれど、その方は当分、或は永久に見込みないらしい。句もなく苦もなかつた、銭もなく慾もなかつた、かういふ一日が時になければやりきれない。

十月十四日　晴、都城市街行乞、宿は同前。

八時半から三時半まで行乞、この行乞のあさましさを知れ、そこには昨日休んだからといふ考へがある、明日は降るかも知れないといふ心配がある、――こんなことで何が行乞だ、行脚と旅行の目的欄に記したが（宿帳に）、恥づかしくはないか。どこの庭にも咲いてゐる赤い花、それはサルピヤといふのださうな、何とかふさはしい和名がありさうなものだ、花そのものが日本的だから。同宿の薬屋さん、とう／＼アクセントで鮮人といふことが解つた、どんなに内地化したつて

鮮人は遂に鮮人だつた、こにも民族的問題が提供されてゐる。例の饒舌僧とまた同宿した、知つたかぶりといふ言葉は彼のために出来たかと思はれるほどだ、人間はいゝけれど舌が長すぎる、下らない本を読んで、しかもそれを覚えすぎてゐる、『知る』といふことの価値が解らなければ宗教は解らない、といつてゐる私自身も知解情量の亜流だが。都城で、嫌でも眼につくのは、材木と売春婦とである、製材所があれば料理屋がある、木屑とスベタとがうよ／＼してゐる、それもよしあし、よろしくあしく、あしくよろしく。

　　皮膚が荒れてくる旅をつゞけてゐる　すこしばかり買物もして旅の夫婦は　石刻む音のしたしくて石刻む　朝寒に旅焼けの顔をならべて・片輪同志で仲よい夫婦の旅・ざくりざくり稲刈るのみの・秋晴れの砂をふむよりくづれて　鶏を叱る声もうそ寒う着いた　いそがしう飯たべて子を負うてまた野良へ・木葉落ちる声のひとゝき・貧乏の子沢山の朝から泣いてゐる・それでよろしい落葉を掃く

　　十月十五日　晴、行程四里、有水、山村屋（四〇・中・下）

　早く立つつもりだつたけれど、宿の仕度が出来ない、八時すぎてから草鞋を穿く、やつと昨日の朝になつて見つけた草鞋である、まことに尊い草鞋である。二時で高城、二時間ほど行乞、また二里で有水、もう二里歩むつもりだつたが、何だか腹工合がよくないので、豆腐で一杯ひつかけて山村の閑寂をしんみりヱンヂヨイする。宿の主人は多少異色がある、子供が十人あつたと話す、話す彼は両足のない躄だ、気の毒なやうな可笑しいやうな、そして呑気な気持で彼をしみ／″＼眺めたことだつた。途上、行乞しつゝ、農村の疲弊を感ぜざるを得なかつた、日本にとつて農村の疲弊ほど恐ろしいものはないと思ふ、豊年で困る、蚕を飼つて損をする——いつたい、そんな事があつていゝものか、あるべきなのか。今日は強情婆と馬鹿娘とに出くわした、何と強情我慢の婆さんだつたらう、地獄行間違なし、そしてまた、馬鹿娘の馬鹿らしさはどうだ、極楽の入口だつた。村の運動会（といつても小学校のそれだけれど、村全体が動くのである）は村の年中行事の一つとして、これほど有意義な、そして効果のあるものはなからう。宿の小娘に下駄を貸してくれといつたら、自分の赤い鼻緒のそれを持つて来た、それを穿いて、私は焼酎飲みに出かけた、何となく寂しかつ

た。友のたれかに与へたハガキの中に、——

　やうやく海の威嚇と藷焼酎の誘惑とから逃れて、山の中へ来ることが出来ました、秋は海よりも山に、山よりも林に、いち早く深まりつゝあることを感じます、虫の声もいつとなく細くなつて、あるかなきかの風にも蝶々がたゞようてゐます。……

　物のあはれか、旅のあはれか、人のあはれか、私のあはれか、あはれ、あはれ、あはれというもおろかなりけり。清酒が飲みたいけれど罎詰しかない、此地方では酒といへば焼酎だ、なるほど、焼酎は銭に於ても、また酔ふことに於ても経済だ、同時に何といふうまくないことだらう、焼酎が好きなどゝいふのは——彼がほんたうにさう感じてゐるならば——彼は間違なく変質者だ、私は呼吸せずにしか焼酎は飲めない、清酒は味へるけれど、焼酎は呻る外ない（焼酎は無味無臭なのがいゝ、たゞ酔を買ふだけのものだ、藷焼酎でも米焼酎でも、焼酎の臭気なるものを私は好かない）。相客は一人、何かを行商する老人、無口で無愛想なのが却つてよろしい、彼は彼、私は私で、煩はされることなしに私は私自身のしたい事をしてゐられるから。湯に入れなかつたのは残念だつた、入浴は、私にとつては趣味である、疲労を医するといふことよりも気分を転換するための手段だ、二銭か三銭かの銭湯に於ける享楽はじつさいありがたいものである。薩摩日向の家屋は板壁であるのを不思議に思つてゐたが宿の主人の話で、その謎が解けた、旧藩時代、真宗は御法度であるのに、庶民が壁に塗り込んでまで阿弥陀如来を礼拝するので、土壁を禁止したからだと。

　　十月十六日　曇、后晴、行程七里、高岡町、梅屋（六〇・中）

　暗いうちに起きる、鶏が飛びだして歩く、子供も這ひだしてわめく、それを煙と無智とが彩るのだから、忙しくて五月蝿いことは疑ない。今日の道はよかつた、——二里歩くと四家、十軒ばかり人家がある、そこから山下まで二里の間は少し上つて少し下る、下つてまた上る、秋草が咲きつゞいて、虫が鳴いて、百舌鳥が啼いて、水が流れたり、木の葉が散つたり、のんびりと辿るにうれしい山路だつた、自動車には一台もあはず、時々自転車が通ふばかり、行人もあまり見うけなかつた、しかし、山下から高岡までの三里は自動車の埃と大淀川水

電の工事の響とでうるさかつた、せつかくのんびりとした気持が、どうやらいら／＼せずにはゐないやうだつた。今日はめづらしく辨当行李に御飯をちよんびり入れて来た、それを草原で食べたが、前は山、後も山、上は大空、下は河、蝶々がひらりと飛んで来たり、草が箸を動かす手に触れたりして、おいしく食べた。この宿は大正十五年の行脚の時、泊つたことがあるが、しづかで、きれいで、おちついて読み書きが出来る、殊に此頃は不景気で行商人が少ないため、今夜は私一人がお客さんだ、一室一燈、さつぱりした夜具の中で、故郷の夢のおだやかな一シーンでも見ませう。『徒歩禅について』といふやうな小論が書けさうだ、徒歩禅か、徒労禅か、有か無か、是か非か。今夜は水が飲みたいのに飲みにゆくことが出来ないので、水を飲んだ夢ばかり見た、水を飲めないやうに戸締りをした点に於て、此宿は下の下だ！

　　朝の煙のゆう／＼としてまつすぐ　茶の花はわびしい照り曇り　傾いた軒端にも雁来紅を植えて　水音遠くなり近くなつて離れない・水音といつしよに里へ下りて来た　休んでゐるそこの木はもう紅葉してゐる　山路咲きつゞく中のをみなへしである　だん／＼晴れてくる山柿の赤さよ　山の中鉄鉢たゝいて見たりして・しみ／″＼食べる飯ばかりの飯である　蝶々よずゐぶん弱つてゐますね　　　或る農村の風景（連作）　明るいところへ連れてきたら泣きやめた児だつた　子を負うて屑繭買ひあるく女房である　傾いた屋根の下には労れた人々・脱穀機の休むひまなく手も足も・八番目の子が泣きわめく母の夕べ・損するばかりの蚕飼ふとていそがしう食べ・出来秋のまんなかで暮らしかねてゐる　こんなに米がとれても食へないといふのか　出来すぎた稲を刈りつゝ呟いてゐる　刈つて挽いて米とするほこりはあれど豊年のよろこびとくるしみが来て・コスモスいたづらに咲いて障子破れたまゝ・寝るだけが楽しみの寝床だけはある・暮れてほそ／″＼炊きだした・二本一銭の食べきれない大根である・何と安い繭の白さを□□る

　勿論、これは外から見た風景で、内から発した情熱ではない、私としては農村を歩いてゐるうちに、その疲弊を感じ、いや、感じないではゐられないので、その感じを句として表現したに過ぎない、試作、

未成品、海のものでも山のものでも、もとより畑のものではない。かういふ歌が――何事も偽り多き世の中に死ぬことばかりはまことなりけり――忘れられない、時々思ひ出しては生死去来真実人に実参しない自分を恥ぢてゐたが、今日また、或る文章の中にこの歌を見出して、今更のやうに、何行乞ぞやと自分自身に喚びかけないではゐられなかつた、同時に、木喰もいづれは野べの行き倒れ犬か鴉の餌食なりけりといふ歌を思ひ出したことである。

十月十七日　曇后晴、休養、宿は同前。

昨夜は十二時がうつても寝つかれなかつた、無理をしたゝめでもあらう、イモシヨウチユウのたゝりでもあらう、また、風邪気味のせいでもあらう、腰から足に熱があつて、倦くて痛くて苦しかつた。朝のお汁に、昨日途上で貰つて来た唐辛を入れる、老来と共に辛いもの臭いもの苦がいもの渋いものが親しくなる。昨日といへば農家の仕事を眺めてゐると、粒々辛苦といふ言葉を感ぜずにはゐられない、まつたく粒々辛苦だ。身心はすぐれないけれど、むりに八時出立する、行乞するつもりだけれど、発熱して悪感がおこつて、とてもそれどころぢやないので、やうやく路傍に小さい堂宇を見けて、そこの狭い板敷に寝てゐると、近傍の子供が四五人やつて声をかける、見ると地面に莫蓙を敷いて、それに横はりなさいといふ、ありがたいことだ、私は熱に燃え悪感に慄へる身体をその上に横たへた、うつら／＼して夢ともなく現ともなく二時間ばかり寝てゐるうちに、どうやら足元もひよろつかず声も出さうなので、二時間だけ行乞、しかも最後の家で、とても我慢強い老婆にぶつかつて、修証義と、観音経を読誦したが、読誦してゐるうちに、だん／＼身心が快くなつた。

大地ひえ／″＼として熱あるからだをまかす・いづれは土くれのやすけさで土に寝る　このまゝ死んでしまふかも知れない土に寝る　熱あるからだをなが／＼と伸ばす土

前の宿にひきかへして寝床につく、水を飲んで（こゝの水はうまくてよろしい）ゆつくりしてさへをれば、私の健康は回復する、果して夕方には一番風呂にはいるだけの勇気が出て来た。やつと酒屋で酒を見つけて一杯飲む、おいしかつた、焼酎とはもう絶縁である。寝てゐ

ると、どこやらで新内を語つてゐる、明烏らしい、あの哀調は病める旅人の愁をそゝるに十分だ。

たつた一匹の蚊で殺された病んで寝て蠅が一匹きたゞけ

十月十八日　晴、行程四里、本庄町、さぬきや（三〇・上）

夜が長い、いくども眼がさめた、今日もお天気、ようお天気がつゞく、ありがたいことである、雨は世間師には殺人剣だ。高岡から綾まで二里、天台宗の乞食坊さんと道づれになる、彼の若さ、彼の正直さを知つて、何とかならないものかと思ふ。綾を二時間ばかり行乞する、このあたりは禅宗が多いので、行乞には都合よろしい、時々嫌なことがある、その嫌なことを利用してはいけない、善用して、自分の忍辱がどんなものであるかを試みる。先日来、お昼の辨当を持つて歩くことにした、今日は畦草をしいて食べた、大根漬がおいしかつた、それは高岡の宿のおみかさんの心づくしであるが。綾から本庄までまた二里、三時間ばかり行乞、やうやく教へられた、そして大正十五年泊つたおぼえのある此宿を見つけて泊る、すぐ湯屋へゆく、酒屋へ寄る。……相客は古参のお遍路さんだ、例の如く坑夫あがりらしい、いつも愚痴をいつてゐる、嫌な男だと思つたが、果して夕飯の時、焼酎を八本も呷つて（飲むのぢやない、注ぎ込むのだつた）不平を並べ初めた、あまりうるさいので、外へ出てぶら／＼してゐるうちに、私自身もまたカフヱーみたいなところへはいつた、ビールを久しぶりに味ふ、その余勢が朝鮮女の家へまで連れていつた、前には五人の朝鮮淫売婦、彼女らがペチヤ／＼朝鮮語をしやべるので私も負けずにブロークンイングリツシユをしやべる、そのためか、たゞしは一銭銅貨ばかりで払ふのに同情したからか、五十銭の菓子代を三十銭に負けてくれた、何と恥づかしい、可笑しい話ではないか。アルコールのおかげで、隣室の不平寝言——彼は寝てまで不平をいつてゐる——のも気にかけないで、また夜中降りだした雨の音も知らないで、朝までぐつすり寝ることができた。此宿はよい、待遇もよく賄もよく、安くて気楽だ、私が着いた時に足洗ひ水をとつてくれたり、相客の喧騒を避けさせるべく隣室に寝床をしいてくれた、老主人は昔、船頭として京浜地方まで泳ぎまはつたといふ苦労人だ、例の男の酔態に対しても平然として処置を誤まらない、しかし、蒲団だけは何といつてもよろしくな

い、私は酔うてゐなかつたらその臭気紛々でとても寝つかれなかつたらう、朝、眼が覚めると、飛び起きたほどだ。酔漢が寝床に追ひやられた後で、鋳掛屋さんと話す、私が槍さびを唄つて彼が踊つた、ノンキすぎるけれど、かういふ旅では珍らしい逸興だつた、しかし興に乗りすぎて嚢中二十六銭しか残つてゐない、少し心細いね——嚢中自無銭！

　　十月十九日　曇、時々雨、行程五里、妻町、藤屋（　　）

　因果歴然、歩きたうないが歩かなければならない、昨夜、飲み余したビールを持ち帰つてゐたので、まづそれを飲む、その勢で草鞋を穿く、昨日の自分を忘れるために、今日の糧を頂戴するために、そして妻局留置の郵便物を受取るために（酒のうまいやうに、友のたよりはなつかしい）。妻まで五里の山路、大正十五年に一度踏んだ土である、あの時はもう二度とこの山も見ることはあるまいと思つたことであるが、命があつて縁があつてまた通るのである、途中、三名、岩崎、平郡といふ部落町を行乞して、やつと今日の入費だけ戴いた、明日は雨らしいが、明日は明日の事、まだ／＼何とかなるだけの余裕はある。此宿はボクチンでなくてリヨカンであるが、賄も部屋も弟たり難く兄たり難しといつたところ、ただ宿の事を訊ねたのが機縁となつて、信心深い老夫妻のお世話になることになつたのである、彼等の温情はよく解る。今夜は酒場まで出かけて新酒を一杯やつたゞけ（一合十三銭は酒がよいよりも高すぎる）、酒といへば焼酎しか飲めなかつた地方、そのイモシヨウチユウの桎梏から逃れたと思つたら、こんどは新酒の誘惑だ、早くアルコール揚棄の境地に到達しなければ嘘だ。

　　行手けふも高い山が立つてゐる　白犬と黒犬と連れて仲のよいこと　山の水のうまさ虫はまだ鳴いてゐる・父が掃けば母は焚いてゐる落葉　蔦を這はせてさりげなく生きてゐるか　駄菓子ちよつぴりながらつてゐる　あるだけの酒はよばれて別れたが・豊年のよろこびの唄もなし・米とするまでは手にある稲を扱ぐ　茄子を鰯に代へてみんなでうまがつてゐる

　留置郵便は端書、手紙、雑誌、合せて十一あつた、くりかへして読んで懐かしがつた、寸鶏頭君の文章は悲しかつた、悲しいよりも痛ま

しかつた、『痰壺のその顔へ吐いてやれ』といふ句や、母堂の不用意な言葉などは凄かつた、どうぞ彼が植えさせたチユーリツプの花を観て微笑することが出来るやうに。――此宿はよい宿ではないけれど、木賃宿よりはさすがに、落ちついて静かである、殊に坊主枕はよかつた、小さい位は我慢する、あの莫蓙枕の殺風景は堪へられない。隣室は右も左も賑やかだ、気取つた話、白粉臭い話、下らない話、――しかし私は閑寂を味うてゐる、ひとり考へひとり書いてゐる、友人へそれ／″＼のたよりを書いてゐると、その人に逢つて話しかけるやうな気さへする、ひとり考へ、ひとり頷くのも面白い、屁を放つて可笑しくもない独り者といふ川柳があるが、その独り者は読書と思索とを知らなかつたのだらうと思ふ、――とにもかくにも一室一燈一人はありがたいことである。夜は予期した通りの雨となつた、いかにも秋雨らしく降つてゐる、しかし明日はきつと霽れるだらう。

　　　　　　ヨタ二句・腰のいたさをたゝいてくれる手がほしい　お経あげてゐるわがふところは秋の風

　（まことに芭蕉翁、良寛和尚に対しては申訳がないけれど）

　　十月廿日　晴、曇、雨、そして晴、妻町行乞、宿は同前。

　果して霽れてゐる、風が出て時々ばら／＼とやつて来たが、まあ、晴と記すべきお天気である、九時から二時まで行乞、行乞相は今日の私としては相当だつた。新酒、新漬、ほんたうにおいしい、生きることのよろこびを恵んでくれる。歩かない日はさみしい、飲まない日はさみしい、作らない日はさみしい、ひとりでゐることはさみしいけれど、ひとりで歩き、ひとりで飲み、ひとりで作つてゐることはさみしくない。昨日書き落してゐたが、本庄の宿を立つ時、例の山芋掘りさんがお賽銭として弐銭出して、どうしても受取らなければ承知しないので、気の毒とは思つたけれど、ありがたく頂戴した、此弐銭はいろ／＼の意味で意味ふかいものだつた。新酒を飲み過ぎて――貨幣価値で十三銭――とう／＼酔つぱらつた、こゝまで来るともうぢつとしてはゐられない、宮崎の俳友との第二回会合は明後日あたりの約束だけれど、飛び出して汽車に乗る、列車内でも※話が二つあつた、一つはとても元気な老人の健康を祝福した事、彼も私もいゝ機嫌だつたの

だ、その二は傲慢な、その癖小心な商人を叱つてやつた事。九時近くなつて、闘牛児居を驚かす、いつものヨタ話を三時近くまで続けた、……その間には小さい観音像へ供養の読経までした、数日分の新聞も読んだ。放談、漫談、愚談、等々は我々の安全辨だ。

　　十月廿一日　晴、日中は闘牛児居滞在、夜は紅足馬居泊、会合。

　早く起きる、前庭をぶらつく、花柳菜といふ野菜が沢山作つてある、紅足馬さんがやつてくる、話がはづむ、鮎の塩焼を食べた、私には珍らしい御馳走だつた、小さいお嬢さんが馳けまはつてオ智を発揮する、私達は日向の縁側で胡座。招かれて、夕方から紅足馬居へ行く、闘牛児さんと同道、そのまゝ泊る、今夜も話がはづんだ、句評やら読経やらで夜の更けるのも知らなかつた。闘牛児居はしづかだけれど、市井の間といふ感じがある、こゝは田園気分でおちつける、そして両友の家人みんな気のおけない、あたゝかい方々ばかりだつた。

　　　　闘牛児居即詠・ひとりで生え伸びて冬瓜の実となつてゐる　花柳菜たくさん植えて職が見つからないでゐる　垣根へ□□げられた芙蓉咲いて・朝の茶の花二つ見つけた・菊一株のありてまだ咲かない　可愛い掌には人形として観音像　すこし風が出てまづ笹のそよぐ　子供むしつては花をならべる　日を浴びて何か考へてござる　　　紅足馬居即事　お約束の風呂の煙が秋空へ・夕顔白くまた逢うてゐる

　　十月廿二日　曇、行程三里、福島、富田屋（三〇・上）

　おだやかな眼ざめだつた、飲み足り話し足り眠り足つたのである、足り過ぎて、疲れと憂ひとを覚えないでもない、人間といふものは我儘な動物だ。八時出立、途中まで紅闘二兄が送つて下さる、朝酒の酔が少しづゝ出てくる、のらりくらり歩いてゐるうちに、だるくなり、ねむくなり、水が飲みたくなり、街道を横ぎらうとして自動車乗りに奴鳴りつけられたりする（彼があまりに意地悪い表情をしたので、詫の言葉が口から出なかつた）、二里ばかり来て、路傍の林の中へ分け入つて一寝入り、それからお辨当を食べる、バツトと朝日とをかはる／″＼喫ふ、みんな紅足馬さんからの贈物である。少しばかり行乞して、この宿の前へ来たので、すぐ泊る、合客は多いけれど、みんな好人物、そして家の人々も好人物、のんきに話し合ひ笑ひ合ふ、今夜は

飲まなかつた、さすがに昨夜は飲み足りたのだ。油津で同宿したことのある尺八老とまた同宿になつた、髯のお遍路さんは面白い人だ、この人ぐらい釣好きはめつたにあるまい、修行そつちのけ、餌代まで借りて沙魚釣だ、だいぶ釣つて来たが自分では食べない、みんな人々へくれてやるのである、——ずゐぶん興味のある話を聞いた、沙魚の話、鯉の話、目白飯の話、鹿打失敗談、等、等、等——彼はさらに語る、遍路は職業としては二十年後てゐる、云々、彼はチヤームとか宣伝とか盛んにまた新しい語彙を使ふ。

・ふりかへらない道をいそぐ・吠える犬吠えない犬の間を通る・何となくおちつけない顔を洗ふ　草の中の犬ころはもう死んでゐる　落葉しいて寝て樹洩れ日のしづか　山に寝そべれば山の蚊が・草鞋かろく別れの言葉もかろく　そのおべんたうをかみしめてあなたがたのこと　いたゞいたハガキにこま／″＼書いておくる

十月廿三日　曇、雨、佐土原町行乞、宿は同前。

あぶないお天気だけれど出かける、途中まで例の尺八老と同行、彼はグレさんのモデルみたいな人だ、お人好しで、怠け者で、酒好きで、貧乏で、ちよい／＼宿に迷惑もかけるらしい。降りだしたので正味二時間位しか行乞出来なかつた、やつと宿銭と飯米とを貰つて帰つてきた、一杯ひつかけたのと尺八老に一杯あげたのとだけは食ひ込みだ、煙草は貰つてきた朝日とバツト、それも一本づつ同宿者におせつたいした。行乞中、不快事が一つ、快心事が一つ、或る相当な呉服店の主人の非人情的態度と草鞋を下さつたお内儀さんの温情とである（草鞋は此地方に稀なので殊に有難かつた）。シヨウチユウと復縁したおかげで、朝までぐつすりと寝た、金もなく心配もなしに。

めくらの爺さんで唄うたうてゐる穿いて下さいといふ草鞋を穿いて笠に巣喰うてゐる小蜘蛛なれば

まだ孤独気分にかへれない、家庭気分を嗅いだ後はこれだから困る、一人になりきれ、一人になりきれ。

十月廿四日　雨、滞在、休養、宿は勿論同前（上）

雨、風まで吹く、同宿者七人、みんな文なしだから空を仰いで嘆息

してゐる、しかし元来のんき人種だから、火もない火鉢を囲んで四方八方の話に笑ひ興じる（たゞし例の釣好きのお遍路さんはお札くばりの爺さんから餌代五銭出して貰つて出かけた、そして沙魚三十尾ばかりの獲物を提げて得々として帰つて来た、私もその一二尾の御馳走になつた）。長い退屈な一日だつた、無駄話は面白いけれど、それも続けると倦いてくる、——ヤキ宿で死んでいつた人の話はみんなをしんみりさせた、そしてめい／＼の臨終の有様を心に描かせらしい、鯉を盗んで、それをその所有者に食べさせた話はみんなを腹から笑はせた、旅籠に泊つて金が足らないでびく／＼した話、雨に濡れながら門附けした話、テキヤとヘンロとの合同金儲けの話などもとりどりに興味ふかく聞くことが出来た。晩酌には、同病相憐むといつた風で、尺八老に一杯おせつたいした、彼の笑顔は焼酎一合のお礼としては勿躰ないほどよかつた。明日は晴れる、晴れてくれ、晴れなければ困るといふ気分で、みんな早くから寝た、私だつて明日も降つたら、宿銭はオンリヨウだ（オンリヨウとはマイナスの隠語である）。

十月廿五日　晴曇、行程三里、高鍋町、川崎屋（三五・中上）

晴れたり曇つたり、かはりやすい秋空だつた、七時過ぎ出発する、二日二夜を共にした七人に再会と幸福を祈りつゝ、別れ／＼になつてゆく。私はひとり北へ、途中行乞しつゝ高鍋まで、一時過ぎに着く、二時間ばかり行乞、此宿をたづねて厄介になる、聞いた通りに、気安い、気持よい宿である。

山風澄みわたる笠をぬぐ蓮の葉に雨の音ある旅の夕ぐれ

今日は酒を慎しんだ、酒は飲むだけ不幸で、飲まないだけ幸福だ、一合の幸福は兎角一升の不幸となりがちだ。今夜は相客がたつた一人、それもおとなしい爺さんで、隣室へひつこんでしまつたので、一室一人、一燈を分けあつて読む、そして宿のおばあさんがとても人柄で、坊主枕の安らかさもうれしかつた。世間師がいふ晩の極楽飯、朝の地獄飯は面白い、晩はゆつくり食べたり飲んだり話したりして寝る楽しみに恵まれてるが、朝はいそがしく食べて嫌がられる労働をくりかへさなければならないのである、いね／＼と人にいはれつ年の暮（路通）のみじめさを毎日味ははなければならないのである。修行者

の集つたところでは、その話題はいつもきまつてゐる、曰く宿のよしあし、手の内のよしあし、そしてお天気のよしあし、また世間師の享楽もきまつてゐる、寝る事と食べる事、少し甲斐性のあるのが、飲む事、景気のいゝのが、買ふ事打つ事。

十月廿六日　晴、行程四里、都濃町、さつま屋（三〇・中上）

ほんとうに秋空一碧だ、万物のうつくしさはどうだ、秋、秋、秋のよさが身心に徹する。八時から十一時まで高鍋町本通り行乞、そして行乞しながら歩く、今日の道は松並木つゞき、見遙かす山なみもよかつた、四時過ぎて都濃町の此宿に草鞋をぬぐ、教へられた屋号は「かごしまや」だつたが、招牌には「さつまや」とあつた、隣は湯屋、前は酒屋、その湯にはいつて、その酒屋へ寄つて新聞を読ませて貰つた。此宿もわるくない（昨日の宿は五銭高い以上のものがあつたが）、掃除の行き届いてゐるのが何よりも気持がよい、軒先きを流れる小川の音がさう／＼として聞えるのもよい。米の安さ、野菜の安さはどうだ、米一升十八銭では敷島一個ぢやないか、見事な大根一本が五厘にも値しない、菜葉一把が一厘か二厘だ、私なども困るが——修業者はとてもやつてゆけまい——農村のみじめさは見てゐられない。行乞相はよかつたりわるかつたり、恥づかしいけれどそれが実相が仕方がない、持寂定ならばそれは聖境だ、私は右したり左したり、上つたり下つたり、倒れたり起きたり、いつも流転顛動だ。たま／＼鏡を見る、——何といふ醜い黒い顔だらう、この顔を是認するほど私の心地はまだ開けてゐない、可憐々々。途上、店頭で柚子を見つけて一つ買つた、一銭也、宿で味噌を分けて貰つて柚子味噌にする、代二銭也。

・まつたく雲がない笠をぬぎ　よいお天気の草鞋がかろい　警察署の芙蓉二つ三つ咲いて・秋空、一点の飛行機をゑがく・見あぐればまうへ飛行機の空・けふのべんとうは橋の下にて　旅の法衣で蠅めがつるむ　刈田の青草ぐい／＼伸びろ・大石小石かれ／″＼の水となり　もぎのこされた柿の実のいよ／＼赤く

早く寝たが、蚤がなか／＼寝せない、虱はまだゐないらしい、寝られないまゝに、同宿の人々の話を聞く、競馬の話だ、賭博本能が飲酒

本能と同様に人生そのものに根ざしてゐることを知る（勿論、色、食の二本能以外に）。

十月廿七日　晴、行程三里、美々津町、いけべや（三〇・中）

いゝお天気である、午前中は都農町行乞、それからぼつ／＼歩いて二時過ぎ美々津町行乞、或る家で法事の餅をよばれる、もつと行乞しなければ都合が悪いのだが、嫌になつたので、丁度出くわした鮮人の飴売さんに教へられて此宿に泊る、予期したよりもよかつた。けさはまづ水の音に眼がさめた、その水で顔を洗つた、流るゝ水はよいものだ、何もかも流れる、流れることそのことは何といつてもよろしい。同宿者の一人、老いかけやさんは異色があつた、縞のズボンに黒の上衣、時計の鎖をだらりと下げてゐる、金さへあれば飲むらしい、彼もまた『忘れえぬ人々』の一人たるを失はない。途上、がくねんとして我にかへる――母を憶ひ弟を憶ひ、更に父を憶ひ祖母を憶ひ姉を憶ひ、更にまた伯父を憶ひ伯母を憶ひ――何のための出家ぞ、何のための行脚ぞ、法衣に対して恥づかしくないか、袈裟に対して恐れ多くはないか、江湖万人の布施に対して何を酬ゐるか――自己革命のなさざるべからざるを考へざるを得なかつた（この事実については、もつと、もつと、書き残しておかなければならない）。村の共同浴場、一銭風呂といふのを宿のおばさんに教へられて、行つてみたが駄目だつた、まだ沸いてゐなかつた、それにしても丘をのぼり、墓場を抜け、農家の間を抜けて、風呂場へ行くとは面白いではないか。今日も此宿で、修行遍路ではやつてゆけない実例と同宿した、こんなに不景気で、そしてこんなに米価安では誰だつて困る、私があまり困らないですむのは、袈裟の功徳と、そして若し附け加へることを許されるならば、行乞の技巧とのためである。入浴、そして一杯ひつかける、――これで今日の命の終り！

・ひとりきりの湯で思ふこともない　旅のからだでぽり／＼搔く

十月廿八日　曇、雨、行程三里、富高町、成美屋（特二五・上）

おぼつかない空模様である、そしてだいぶ冷える、もう単衣ではやりきれなくなつた、君がなさけの袷を着ましよ！行乞には早すぎるので（四国ではなんぼ早くてもかまはない、早くなければいたゞけな

い、同行が多いから）、紅足馬さんから貰つてきた名家俳句集を読む、惟然坊句集も面白くないことはないけれど、隠者型にはまつてゐるのが鼻につく、やつぱり良寛和尚の方がより親しめる。八時から十一時まで美々津町行乞、とう／＼降りだした、濡れて峠を越える、三度も四度も雨やどりして、此宿についたのが四時、お客さんでいつぱいなので裏の隠宅——といへば名はいゝがその実はバラツク小屋——に泊めてもらう、相客は老遍路さん一人、かへつて遠慮がなくてよろしい。今日の行乞相は、現在の私としては、まあ満点に近い方だつた、我といふものがなかつたとはいへないが、ないに近い方だつた、そして泊つて食べる（その上に酒一本代）だけは頂戴することが出来た。

・墓がならんでそこまで波がおしよせて　いざり火ちら／＼して旅はやるせない　やるせない夢のうちから鐘が鳴りだした　朽ちてまいにち綻びる旅の法衣だ　眼がさめたら小さくなつて寝ころんでゐた　覗いてる豚の顔にも秋風・けふのべんたうも草のうへにて　波の音しぐれて暗し　食べてゐるおべんたうもしぐれて　朝寒夜寒物みななつかし　しぐるゝやみんな濡れてゐる　さんざしぐれの山越えてまた山

ずゐぶん降つた、どしや降りだ、雷鳴さへ加はつて電燈も消えてしまつた、幸にして同宿の老遍路さんが好人物だつたので、いろ／＼の事を話しつゞけた、同行の話といふものは（或る意味に於て）面白い。夜長ゆう／＼として煙管をみがく——といふやうなものが出来た、これは句でもない、句でないこともない、事実としては、同行の煙管掃除の金棒を借りて煙管掃除をしたのである。

十月廿九日　晴、行程二里、富高、門川行乞、坂本屋（三〇・中上）

降つて降つて降つたあとの秋晴だ、午前中富高町行乞、それから門川まで二里弱、行乞一時間。けふの行乞相もよかつた、しかし一二点はよくなかつた、それは私が悪いといふよりも人間そのものの悪さだらう！　四時近くなつたので此宿に泊る、こゝにはお新婆さんの宿といつて名代の宿があるのだが、わざと此宿に泊つたのである、思つたよりもよい宿だ、いわしのさしみはうまかつた。

あぶないきたない仕舞湯であたゝまる・からりと晴れた朝の草鞋もしつくり

なか／＼よい宿だが、なか／＼忙しい宿だ、稲扱も忙しいし、客賄も忙しい、牛がなく猫がなく子供がなく鶏がなく、いやはや賑やかなことだ、そして同宿の同行は喘息持ちで耄碌してゐる、悲喜劇の一齣だ。

十月三十日　雨、滞在、休養。

また雨だ、世間師泣かせの雨である、詮方なしに休養する、一日寝てゐた、一刻も早く延岡で留置郵便物を受取りたい心を抑へつけて、——しかし読んだり書いたりすることが出来たので悪くなかつた、頭が何となく重い、胃腸もよろしくない、昨夜久しぶりに過した焼酎のたゝりだらう、いや、それにきまつてゐる、自分といふ者について考へさせられる。

今日一日、腹を立てない事今日一日、嘘をいはない事今日一日、物を無駄にしない事

これが私の三誓願である、腹を立てない事は或る程度まで実践してゐるが、嘘をいはない事はなかなか出来ない、口で嘘をいはないばかりでなく、心でも嘘をいはないやうにならなければならない、口で嘘をいはない事は出来ないこともあるまいが、体でも嘘をいはないやうにしなければならない、行持が水の流れるやうに、また風の吹くやうにならなければならないのである。行乞しつゝ腹を立てるやうなことがあつては所詮救はれない、断られた時は、或は黙過された時は自分自身を省みよ、自分は大体供養を受ける資格を持つてゐないではないか、応供は羅漢果を得てゐるものにして初めてその資格を与へられるのである、私は近来しみ／″＼物貰ひとも托鉢とも何とも要領を得ない現在の境涯を恥ぢ且つ悲しんでゐる。そして物を無駄にしない事は一通りはやれないことはない、しかししんじつ物を無駄にしない事、いひかへれば物を活かして使ふことは難中の難だ、酒を飲むのも好きでやめられないなら仕方ないが、さて飲んだ酒がどれだけの功徳（その人にとつては）を発揮するか、酒に飲まれて酒の奴隷となるのでは助からない。……今日は菊の節句である、家を持たない私には節句も正

月もないが、雨のおかげでゆつくり休んだ。降る雨は、人間が祈らうが祈るまいが、降るだけは降る、その事はよく知つてゐて、しかも、空を見上げて霽れてくれるやうにと祈り望むのが人間の心だ、心といふよりも性だ、こゝに人間味といつたやうなものがある。

・いつも十二時の時計の下で寝かされる　いちにち雨ふり故郷のこと考へてゐた　夕闇の猫がからだをすりよせる　牛がなけば猫もなく遍路宿で・餓えて鳴きよる猫に与へるものがない　どうやら霽れるらしい旅空・尿するそこのみそはぎ花ざかり

けふまでまとまらなかつたものがこれだけまとまつた、これも雨で休んだゝめである、雨を憎んだり愛したり、煩悩即菩提だ、といへないこともあるまいよ。同宿の老遍路さんが耄碌してゐると思つたのは間違だつた、彼は持病の喘息の薬だといふので、アンポンタン（いが茄子の方語）を飲んだゝめだつた、その非常識、その非常識の効験は気の毒でもあり、また滑稽でもあつた、――いづれにしても悲喜劇の一齣たるを免かれないものだつた。此宿には猫が三匹ゐる、どれも醜い猫だが、そのうちの一匹はほんたうによく鳴く、いつもミヤアミヤア鳴いてゐる、牝猫ださうなが、まさか、夫を慕ひ子を慕うて鳴くのでもなからう。今晩のお菜は姫鮫のぬた、おいしかつた、シヨウチユウ一本なかるべからざる次第である。一日降りつゞけて風さへ加はつた、明日の天候も覚束ない、まゝよどうなるものか、降るだけ降れ、吹くだけ吹け。

十月卅一日　曇后晴、行程四里、延岡町、山蔭屋（三〇・中上）

風で晴れた、八時近くなつて出発、途中土々呂を行乞して三時過ぎには延岡着、郵便局へ駆けつけて留置郵便を受取る、二十通ばかりの手紙と端書、とり／″＼にうれしいものばかりである（彼女からの小包も受取つた、さつそく袷に着換へる、人の心のあたゝかさが身にしみこむ）。今日は風が騒々しかつた、少し熱のある身体で行乞するのは少し苦しかつた、これも死ねない人生の一片だらう。此地方の子供はみんな跣足で学校へゆく（此地方に限らず、田舎はどこでもさうだが）、学校にはチヤンと足洗ひ場がある、ハイカラな服を着てハイカラな靴を穿いた子供よりもなんぼう親しみがあるか知れない、また、

此地方にはアンテナを見ることが稀だ、それだけ近代文化は稀薄だともいへやう。此宿も悪くない、二三年前山蔭で同宿したことのある若い世間師に再会した、彼は私をよく覚えてゐた、私も彼をよく覚えてゐた、世の中は広いやうで狭い、お互に悪い事は出来ませんなあ、といつて挨拶をかはしたことだつた。

　　ゆき／＼て倒れるまでの道の草・酔ひざめの星がまたゝいてゐる（野宿）　風が出てうそ寒い朝がやつてきた・夕寒の豚をひきずりまはし・すこし熱がある風の中を急ぐ　跣足の子供らがお辞儀してくれた

　三日振に湯に入つて髯を剃つて一杯ひつかけた、今夜はきつといゝ夢をみることだらう！

　　十一月一日　曇、少雨、延岡町行乞、宿は同前。

　また雨らしい、嫌々で九時から二時まで延岡銀座通を行乞、とう／＼降りだした、大したことはないが。例の再会の人とは今朝別れる、彼は南へ、私は北へ——そして夕方また大分で同宿したことのあるテキヤさんと再会した、逢うたり別れたり、さても人のゆくへはおもしろいものである。同宿の土方でテキヤさんはイカサマ賽を使ふことがうまい、その実技を見せて貰つて、なるほど人はその道によつて賢しだと感心した。昨日も今日も行乞相は悪くなかつた、しかしまだ／＼境に動かされるところがある、いひかへれば物に拘泥するのである、水の流れるやうな自然さ、風の吹くやうな自由さが十分でない、もつとも、そこまで行けばもう人間的ぢやなくなる、人間は鬼でもなければ仏でもない、同時に鬼でもあれば仏でもある。隣室の老遍路さんは同郷の人だつた、故郷の言葉を聞くと、故郷が一しほ懐かしくなつて困る。……

　空たかくべんたういたゞく光あまねく御飯しろく

　女房に逃げられて睾丸を切り捨てた男——その男が自身の事をしやべりつゞけた、多分、彼はその女房の事で逆上してゐるのだらう、何にしても特種たるを失はなかつた。Ｇさんに、——我々は時々『空』になる必要がありますね、句は空なり、句不異空といつてはどうで

す、お互にあまり考へないで、もつと、愚になる、といふよりも本来の愚にかへる必要がありますね。どうやら雨もやんだらしい、明日はお天気に自分できめて寝る、私にもまだ明日だけは残つてゐる、来月はないが、もちろん来年もないが。

　　十一月二日　曇、后晴、延岡町行乞、宿は同前。

　九時から一時まで辛うじて行乞、昨夜殆んど寝つかれなかつたので焼酎をひつかける、それで辛うじて寝ついた——アルコールかカルモチンか、どちらにしても弱者の武器、いや保護剤だ。同宿の同郷の遍路さんとしみ／″＼語つた、彼は善良なだけそれだけ不幸な人間だつた、彼に幸福あれ。

　　十一月三日　晴、稍寒、延岡町行乞、宿は同前。

　だいぶ寒くなつた、朝は曇つてゐたが、だん／＼晴れわたつた、八時半から三時半まで行乞する、近来の励精である。今日の行乞相はたしかに及第だ、乞食坊主としてのすなほさとほこりとを持ちつゞけることが出来た、勿論、さういふものが残つてゐるほど第二義的であることは免れないけれど。いよ／＼シヨウチユウとも縁切りだ。うるかを買はうと思つたがいゝのがなかつた、松茸を食べたいと思ふが、もう季節も過ぎたし、だいたい此地方では見あたらない、此秋は松茸食べなかつたゞけぢやない、てんで見ることも出来なかつた、それにしても故郷の香り高い味はひを思ひださずにはゐられない。新来のお客さん四人、みんな同行だ、話題は相変らず、宿の事、修行の事、そしてヨタ話。

　ふる郷の言葉なつかしう話しつゞけるけふも大空の下でべんたうをひらく

　　十一月四日　晴、行程十里と八里、三重町、梅木屋（三〇・中上）

　早く起きる、茶を飲んでゐるところへ朝日が射し込む、十分に秋の気分である、八時の汽車で重岡まで十里、そこから小野市まで三里、一時間ばかり行乞、そして三重町まで八里の山路を急ぐ、三国峠は此地方では峠らしい峠で、また、山路らしい山路だつた、久振に汗が出

た、急いだので暮れきらうちに宿へ着くことが出来た。今日の道はほんたうによかつた、汽車は山また山、トンネルまたトンネルを通つた、いちだなとしげをかとの間は八マイル九分といふ長さだつた、歩いた道はもつとよかつた、どちらを見ても山ばかり、紅葉にはまだ早いけれど、どこからともなく聞えてくる水の音、小鳥の声、木の葉のそよぎ、路傍の雑草、無縁墓、吹く風も快かつた。峠を登りきつて、少し下つたところで、ふと前を見渡すと、大きな高い山がどつしりと峙えてゐる、祖母岳だ、西日を浴びた姿は何ともいへない崇美だつた、私は草にすはつてぢつと眺めた、ゆつくり一服やつた（実は一杯やりたかつたのだが）、そこからまた少し下ると、一軒の茶店があつた、さつそく漬物で一杯やつた、その元気でどん／＼下つて来た。汽車賃五十銭は仕方なかつたが、『みのり』はたしかに贅沢だつた、しかしそれが今日は贅沢でなくなつた、それほど急いで山を楽しんだのである、山を前に悠然として一服、いや一杯やる気持は何ともいへない。小野市といふ村町では、見事な菊を作つて陳列してゐる家が多かつた、菊はやつぱり日本の花、秋の花だと思つた。山道が二つに分れてゐる、多分右がほんたうだらうとは直感したが、念のために確かめたいと思つて四方を見まはすけれど誰もゐない、たゞ大きな黒い牛が草を食んでゐる、そして時々不審さうに私を見る、私も牛を見る、私はあまり牛といふ動物を好かないが、その牛には好感が持てた、道を教へてくれ、牛よ。行乞してゐると、人間の一言一行が、どんなに人間の心を動かすものであるかを痛感する、うれしい事でも、おもしろくない事でも。此宿はよくないだらうと予期して泊つたのだが、予期を裏切つて悪くなかつた、何でも見かけにはよらないものだ。

・休む外ない雨のひよろ／＼コスモス・しぐるゝや道は一すぢ（旧作）

・ほがらかさ一家そろうて刈りすゝむ・秋の山路のおへんろさん夫婦づれ・秋はいちはやく山の櫨を染め・崖はコンクリートの蔦紅葉　いたゞきの枯すゝきしづもるまなし　旅の人々が汽車の見えなくなるまでも　山路下りて来てさこんた　嫌な声の鴉が一羽・山の一つ家も今日の旗立てゝ（旗日）・峰のてつぺんの樹は枯れてゐる・さみしさは松虫草の二つ三つ　枯草に残る日の色はかなし　日が落ちかゝるそ

の山は祖母山　暮れてなほ耕す人の影の濃く　軒も傾いたまんま住んでゐる

　さすがに山村だ、だいぶ冷える、だらけた身心がひきしまるやうである、山のうつくしさ水のうまさはこれからである。『空に遊ぶ』といふことを考へる、私は東洋的な仏教的な空の世界におちつく外はない。台湾蕃婦の自殺記事は私の腸を抉つた、何といふ強さだ。

　　十一月五日　曇、三重町行乞、宿は同前。

　昨夜は蒲団長く夜長くだつた、これからは何よりもカンタン（フトンの隠語）がよい宿でなければかなはない、此宿は主婦が酌婦上りらしいので多少、いやらしいところがないでもないが、悪い方ではない。山の町の朝はおくれる、九時から二時まで行乞、去年の行乞よりもお賽銭は少なかつたが、それでも食べて飲んで寝るだけは十分に戴いた、袈裟の功徳、人心の信愛をありがたく感じる。行乞相はだん／＼よくなる、おちついてきたからだらう、歩かない日は——行乞しない日は堕落した日である。此地方ではもう、豆腐も水に入れてある、草鞋も店頭にぶらさげてある、酒も安い、——何だか親しみを覚える。豪家らしい家で、御免と慳貪にいふ、或はちよんびり米を下さる（与へる方よりも受ける方が恥づかしいほど）、そして貧しい裏長屋でわざ／＼よびとめて、分不相応の物質を下さる、——何といふ矛盾だらう、——今日も或る大店で嫌々与へられた一銭は受けなかつたが、通りがゝりにわざ／＼さしだされた茶碗一杯の米はほんたうにありがたく頂戴した。入浴三銭、酒弐十銭、——これで私は極楽の人となつた。今日は一句もない、句の出来ないのは気持の最もいゝ時か或は反対に気持の最もよくない時かである。今日は酒屋で福日と大朝とを読ませて貰つた、新聞も読まないやうになると安楽だけれど、まだそこまではゆけない、新聞によつて現代社会相と接触を保つてゐる訳だ。今日はまた湯屋で、ほんたうの一番風呂だつた、湯加減もよかつたので、たつたひとり、のび／＼と手足を伸ばした気持は何ともいへなかつた、殊にそこの噴井の水はうまかつた、腹いつぱい飲んだことである。アルコールのおかげで、ぐつすり寝た、お天気もよいらしい、いゝ気分である、人生の最大幸福はよき食慾とよき睡眠だ。いつ頃からか、また小さい蜘蛛が網代笠に巣喰うてゐる、何と可愛い生き

物だらう、行乞の時、ぶらさがつたりまひあがつたりする、何かおいしいものをやりたいが、さて何をやつたものだらう。

十一月六日　晴后曇、行程六里、竹田町、朝日屋（三五・中）

急に寒くなつた、吐く息が白く見える、八時近くなつてから出発する、牧口、緒方といふ村町を行乞する、牧口といふところは人間はあまりよくないが、土地はなか／＼よい、丘の上にあつて四方の連山を見遙かす眺望は気に入つた、緒方では或る家に呼び入れられて回向した、おかみさんがソウトクフ（曹洞宗の意味！）といつて、たいへん喜んで下さつたが、皮肉をいへば、その喜びとお布施とは反比例してゐた、また造り酒屋で一杯ひつかけた、安くて多かつたのはうれしかつた、そこからこゝまでの二里の山路はよかつた、丘から丘へ、上るかと思へば下り、下るかと思へば上る、そして水の音、雑木紅葉——私の最も好きな風景である、ずゐぶん急いだけれど、去年馴染の此宿へついたのは、もう電燈がついてからだつた、すぐ入浴、そして一杯、往生安楽国！竹田は蓮根町といはれてゐるだけあつてトンネルの多いのには驚ろく、こゝへくるまでにも八つの洞門をくゞつたのである。

・すこしさみしうてこのはがきかく（元寛氏、時雨亭氏に）・あなたの足袋でこゝまで三十里（闘牛児氏に）　百舌鳥ないてパツと明るうなる・飯のうまさもひとりかみしめて・最後の一粒を味ふ・名残ダリヤ枯れんとして美しい　犬が尾をふる柿がうれてゐる　腰かける岩を覚えてゐる・よろ／＼歩いて故郷の方へ・筧あふるゝ水に住む人なし　枯山のけむり一すぢ　かうして旅の山々の紅葉・ゆきずりの旅人同志で話つきない

此宿はよいといふほどではない、まあ中に位する、或る人々は悪いといふかも知れないが、私には可もなく不可もなし、どちらかといへばよい方である、何となくゆつくりしてゐておちついてゐられるから。また主人公も妻君も上手はないが好人物だ、内証もよいらしく、小鳥三十羽ばかり飼うてゐる、子がないせいでもあらうけれど。坊主枕はよかつた、こんな些事でもうれしくて旅情を紛らすことができる、汽車の響はよくない、それを見るのは尚ほいけない、こゝからＫ

市へは近いから、一円五十銭の三時間で帰れば帰られる、感情が多少動揺しても無理はなからうぢやないか。夜もすがら水声が聞える、曽良の句に、夜もすがら秋風きくや裏の山、といふのがあつたやうに覚えてゐるが、それに同じて

　夜をこめて水が流れる秋の宿

　同宿の老人はたしかに変人奇人に違ひない、金持ださうなが、見すぼらしい風采で、いつも酒を飲み本を読んでゐる。

　　十一月七日　曇、夕方から雨、竹田町行乞、宿は同前。

　雨かと思つてゐたのに案外のお天気である、しかし雨が近いことは疑はなかつた、果して曇が寒い雨となつた。九時から四時まで行乞、昨年と大差はないが、少しは少ないが、米が安いのは的確にこたえる、やうやく地下足袋を買ふことができた、白足袋に草鞋が好きだけれど、雨天には破れ易くてハネがあがつて困るから、感じのよいわるいをいつてはゐられない。こゝの唐辛の砂糖煮、味噌汁、煎茶はうまい、九州ほど茶を飲むところは稀だが、私も茶飲み連中の一人となつてしまつた。今日の行乞相も及第はたしかだ、行乞相がいゝとかわるいとかいふのは行乞者が被行乞者に勝つか負けるかによる、いひかへれば、心が境のために動かされるか動かされるかによる、随処為主の心境に近いか遠いかによる（その心境になりきることは到底望めない、凡夫のあさましさだ、同時に凡夫のよさだ、ともいへやう）。町の酒屋で二杯ひつかけたので、ほろ／＼酔うた、微酔の気地は何ともいへない、しかしとかく乱酔泥酔になつて困る、もつともさうなるだけ酒がうまいのだが！今夜も夜もすがら水音がたえない、階下は何だか人声がうるさい、雨声はトタン屋根をうつてもわるくない、——人間に対すれば憎愛がおこる、自然に向へばゆう／＼かん／＼おだやかに生きてをれる。月！　芋明月も豆明月も過ぎてしまつた、お天気がよくなので、しばらく清明の月を仰がない、月！　月！　月は東洋的日本的乃至仏教的禅宗的である。寝ては覚め、覚めては寝る、夢を見ては起き、起きてはまた夢を見る——いろ／＼さま／″＼の夢を見た、聖人に夢なしといふが、夢は凡夫の一杯酒だ、それはヱチールでなくてメチールだけれど。

十一月八日　雨、行程五里、湯ノ原、米屋（三五・中）

やつぱり降つてはゐるけれど小降りになつた、滞在は経済と気分とが許さない、すつかり雨支度して出立する、しようことなしに草鞋でなしに地下足袋（草鞋が破れ易いのとハネがあがるために）、何だか私にはそぐはない。九時から一時間ばかり竹田町行乞、そしてどし／″＼歩く、村の少年と道づれになる（一昨々日、毛布売の青年と連れだつたやうに）、明治村、長湯村、赤岩といふところの景勝はよかつた、雑木山と水声と霧との合奏楽であり、墨絵の巻物であつた、三時近くなつて湯ノ原着、また一時間ばかり行乞、宿に荷をおろしてから洗濯、入浴、理髪、喫飯（飲酒は書くまでもない）、――いやはや忙しいことだ。竹田といふところはほんたうにトンネルが多い、入るに八つくゞつたが、出るに五つくゞつた、それはトンネルと書くよりは洞門と書いた方がよい。

・雨だれの音も年とつた・一寝入してまた旅のたより書く　酔ひざめの水をさがすや竹田の宿で　朝の鶏で犬にくはれた　谷の紅葉のしたゝる水です・しぐるゝ山芋を掘つてゐる　ぼう／＼として山霧につゝまれる・いちにちわれとわが足音を聴きつゝ歩む・水飲んで尿して去る

こゝは片田舎だけれど、さすがに温泉場だけのよいところはある（小国には及ばないが）、殊に浴場はきたないけれど、解放的で大衆的なのがよい、着いてすぐ一浴、床屋から戻つてまた一浴、寝しなにも起きがけにもまた／＼一浴のつもりだ！　湯の味は何だか甘酸つぱくて、とても飲めない、からだにはきけるやうな気がする、とにかく私は入浴する時はいつも日本に生れた幸福を考へずにはゐられない、入浴ほど健全で安価な享楽はあまりあるまい。造り酒屋へ行つたら、酒がよくてやすかつたので、おぼえず一杯二杯三杯までひつかけてしまつた、うまいことはうまかつたが、胃が少々悪くなつたらしい、明日はたくさん水をのまう。夜もすがら瀬音がたえない、それは私には子守唄だつた、湯と酒と水とが私をぐつすり寝させてくれた。

十一月九日　晴、曇、雨、后晴、天神山、阿南屋（三〇・中）

暗いうちに眼が覚めてすぐ湯へゆく、ぽか／＼温かい身心で七時出

発、昨日の道もよかつたが、今日の道はもつとよかつた、たゞ山のうつくしさ、水のうつくしさと書いておく、五里ばかり歩いて一時前に小野屋についたが、ざつと降つて来た、或る農家で雨宿りさせて貰ふ、お茶をいたゞく、二時間ばかり腰かけてゐるうちに、いろんな人々が来て、神様の事、仏様の事、酒の事、等々々、そのうちにやうやく霽れてきた、小野屋といふ感じのわるくない村町を一時間ばかり行乞して、それから半里歩いて此宿へついた。昨夜の湯の原の宿はわるくなかつた、子供が三人、それがみんな掃除したり応対したりする、いただいてゐてそのまゝにしてゐた密柑と菓子とをあげる、継母継子ではないかとも思ふ、——とにかく悪くない宿だつた、燠を持つてくる、めづらしく炭がはいつてゐる、お茶を持つてゐる、お茶受としてはおきまりの漬物だが、菜漬がぐつさり添へてある、そして温泉には入り放題だ。朝湯——殊に温泉——は何ともいへない心持だ、湯壺にぢとしてゐる時は無何有郷の遊び人だ、不可得、無所得、ぼうばくとしてナムカラタンノウトラヤヤ……。今日は草鞋をはいた、白足袋の感じだけでも草鞋はいゝ、いはんや草鞋はつかれない、足についてくる（地下足袋にひきずられるとは反対に）、さく／＼として歩む気持は何ともいへない。歩いてゐて、ふと左手を見ると、高い山がなかば霧にかくれてゐる、疑ひもなく久住山だ、大船山高岳と重なつてゐる、そこのお爺さんに山の事を訊ねてゐると——彼は聾だつたから何が何だか解らなかつた——そのうちにもう霧がそこら一面を包んでしまつた。家々に唐黍の実がずらりと並べ下げてあるのは、いかにも山国らしい、うれしい風景である（唐黍飯には閉口だけれど）。道ゆく人々がみんな行きずりに、お早うといふ、学校生徒は只今々々といふ（今日は日曜だが、午後は只今帰りましたといふ）、これも山国らしい嬉しい情景の一つである（その癖、行乞の時は御免が割合に多い、未就学児童が、御免々々といふのは何としても嬉しくない）。
山々樹々の紅葉黄葉、深浅とり／″＼、段々畠の色彩もうつくしい、自然の恩恵、人間の力。このあたりは行人が稀で、自動車はめつたに通らない、願はくは風景のいゝところには山路だけあれ、車道を拓くべからずだ！頬白、百舌鳥、鵯、等々、小鳥の歌はいゝなあ。どこへいつても道路がよくひらかけてゐるのに感謝する、そして道路の事だつたら道路工夫にお訊ねなさい、其地方の道路については彼はよく知つ

てゐる、そしてよく教へてくれる、決して田舎の爺さん婆さんに道路のことを訊くものぢやない、なあに二里か三里だよといふ、労れた旅人に二里か三里かは大した相違ぢやないか、彼等はよくいふ、ついそこだといふ、そのついそこだが五丁の時もあり、十丁の時もあり、一里の時もないことはない、まあ仕方のない時は小学生の上級生に訊ねると、大した間違はない、もつとも、そこの停車場を知らない生徒もないではないが（因みにいふ、その地方の山の名、川の名を知つてゐる地方人が稀なのにはいつも驚かされる）。今日の道はよかつたが、下津留附が最もよかつた、これについては別に昨日の赤岩附近の景勝といつしよに書く、それはそれとして、今朝、湯ノ原から湯ノ平へ山越しないで幸だつた、道に迷ふばかりでなく、こんな山水を見落すのだつた。

　　明けはなれゆく瀬の音たかく　あかつきの湯が私ひとりをあたゝめてくれる　壁をへだてゝ湯の中の男女さゞめきあふ　見る／＼月が逃げてしまつた・物貰ひ罷りならぬ紅葉の里を通る　一きわ赤いはお寺の紅葉　電線の露の玉かぎりなし・脚絆かはかねど穿いて立つ　ホイトウとよばれる村のしぐれかな・手洟かんでは山を見てゐる　枯草の日向の蝶々黄ろい蝶々・しつとり濡れて岩も私も・蝶々とまらう枯すゝきうごくまいぞ　枯草、みんな言葉かけて通る　剃りたてのあたまにぞんぶん日の光　さみしい鳥よちゝとなくかよこゝとなくかよ　日をまともに瀧はまつしぐら・青空のした秋草のうへけふのべんたうひらく・あばら屋の唐黍ばかりがうつくしい　まだ奥に家がある牛をひいてゆく　山家一すぢの煙をのぼらせて　ぬかるみをとんでゐる　蝶々三つ　去年の色に咲いたりんだう見ても（熊本博多同人に）・宿までかまきりついてきたか・法衣吹きまくるはまさに秋風（改作）　ずんぶりぬれて馬も人も働らく

　山はいゝなあといふ話の一つ二つ――三国峠では祖母山をまともに一服やつたが、下津留では久住山と差向ひでお辨当を開いた、とても贅沢なランチだ、例の如く飯ばかりの飯で水を飲んだゞけではあつたが。今日の感想も二三、――草鞋は割箸と同じやうに、穿き捨てゝゆくところが、東洋的よりも日本的でうれしい、旅人らしい感情は草鞋によつて快くそゝられる。法眼の所謂『歩々到着』だ、前歩を忘れ後

歩を思はない一歩々々だ、一歩々々には古今なく東西なく、一歩即一切だ、こゝまで来て徒歩禅の意義が解る。山に入つては死なゝい人生、街へ出ては死ねない人生、いづれにしても死にそこないの人生。雑木山の美しさは自然そのもの、そのまゝの美しさだ、殖林の美しさは人工的幾何学的の美しさだ、前者を日本的とすれば後者は西洋的ともいはうか。酒はたしかに私を世間的には蹉跌せしめたが、人間的には疑ひもなく生かしてくれた、私は今やうやく酒の繋縛から解脱しつゝある、私の最後の本格が出現しつゝあるのである、呪ふべき酒ではあつたが、同時に祝すべき酒でもあつたのだ、生死の外に涅槃なく、煩悩の外に菩提はない。おしまひにユーモラスな※話を二つ（それは行乞漫談の資料としておもしろい）、――或る小さい料理屋の前に立つ、そこの階段の横で、鏡台を前に、あまりシヤンでもない酌婦がしきりに髪を撫でたり顔を撫でたりしてゐる、時々横目で私の方を見るが、御免とも何ともいはないので、私も観音経を読誦し続けた、しかしずゐぶん長く立つてゐるのに、依然として同じ状態だ、とう／＼私は根気負けして立ち去つた、ユーゴーか誰かの言葉に、女は弱く母は強しとあつたが、鏡の前の女は何といふ強さだらう、とても敵はない、或はまた思ふ、彼女の布施は横眼でちよい／＼見たこと、いひかへれば色眼ではなかつたらうか知ら！　もう一つは、或る店の前に立つ、老婆がすぐ立ちあがつて抽出しの中を探し初めた、お断りをいはないから読経しつゝ待つてゐる、しきりに探しまはすが見つからないらしい様子、気の毒さうに私を見ては探しつゞけてゐる、暫らくしてやつと見つかつたらしい、それを持つてきて鉄鉢に入れて下さつた、見ると五厘銅貨である、多分お婆さん、その銅貨をどこかで拾ひでもしてその抽出しに入れておいたのだらう、そして私が立つたので、それを思ひだして喜捨して下さつたのだらう、空気の報謝――これも一※話――よりも罪はないが、少々慾張りすぎてゐますね、お婆さんは多分五厘で極楽へゆくつもりだらう、慾張り爺さんが一銭で大願成就を神様に押しつけるやうにさ！此宿も悪くないけれど、いや、良い方だけれど、水に乏しく風呂を立てないのは困る、今夜も私は五六里歩いてきた身体そのまゝで寝なければならなかつた、もちろん湯屋なんかありはしないから。今夜も水声がたえない、アルコールのおかげで辛うじて眠る、いろんな夢を見た、よい夢、わるい夢、懺悔の

夢、故郷の夢、青春の夢、少年の夢、家庭の夢、僧院の夢、ずゐぶんいろんな夢を見るものだ。味ふ——物そのものを味ふ——貧しい人は貧しさに徹する、愚かなものは愚かさに徹する——与へられた、といふよりも持つて生れた性情を尽す——そこに人生、いや、人生の意味があるのぢやあるまいか。

　　十一月十日　雨、晴、曇、行程三里、湯ノ平温泉、大分屋（四〇・中）

　夜が長い、そして年寄は眼が覚めやすい、暗いうちに起きる、そして『旅人芭蕉』を読む、井師の見識に感じ苦味生さんの温情に感じる、ありがたい本だ（これで三度読む、六年前、二年前、そして今日）。冷たい雨が降つてゐるし、腹工合もよくないので、滞在休養して原稿でも書かうと思つてゐたら、だん／＼霽れて青空が見えて来た、十時過ぎて濡れた草鞋を穿く、すこし冷たい、山国らしくてよろしい、沿道のところ／″＼を行乞して湯ノ平温泉といふこゝへ着いたのは四時、さつそく一浴一杯、ぶら／＼そこらあたりを歩いたことである。

　△秋風の旅人になりきつてゐる

　こゝ湯ノ平といふところは気に入つた、いかにも山の湯の町らしい、石だゝみ、宿屋、万屋、湯坪、料理屋、等々々、おもしろいね。ルンペンの第六感、さういふ第六感を、幸か不幸か、私も与へられてゐる、人は誰でも五感を通り越して第六感に到つて、多少話せる。朝寒夜寒、山の谷の宿はうすら寒い、もう借衣ではいけないらしい、どなたか、綿入一枚寄附してくだされ、ハイカシコマリマシタ、呵々。これは行乞ヱピソードの一つで——嘘を教へる、しかも母が子に嘘を教へる、——さういふ微苦笑劇の一シーンに時々出くわす——今日もさういふことがあつた、——御免、お御免、留守、留守と子供がいふ、子供はさういふけれど母親はゐるのだ、ゐて知らない顔をしてゐるのだ、——子供は正直にいふ、お母さんが留守だといへといつたといふ——多分、いや間違ひなく、彼女は主婦の友か婦女界の愛読者だらう、そして主婦の友乃至婦女界の実現者ではないのだらう。

　・いちにち雨ふり一隅を守つてゐた（木賃宿生活）　あんたのこと

を考へつゞけて歩きつゞけて・大空の下にして御飯のひかり・貧しう住んでこれだけの菊を咲かせてゐる（改作）　阿蘇がなつかしいりんだうの花

人生の幸福は健康であるが、健康はよき食慾とよき睡眠との賜物である、私はよき——むしろ、よすぎるほどの食慾を恵まれてゐるが、どうも睡眠はよくない、いつも不眠或は不安な睡眠に悩んでゐる、睡られないなどゝはまことに横着だと思ふのだが。此温泉はほんたうに気に入つた、山もよく水もよい、湯は勿論よい、宿もよい、といふ訳で、よく飲んでよく食べてよく寝た、ほんたうによい一夜だつた。こゝの湯は熱くて豊かだ、浴して気持がよく、飲んでもうまい、茶の代りにがぶ／＼飲んでゐるやうだ、そして身心に利きさうな気がする、などゝすつかり浴泉気分になつてしまつた。

十一月十一日　晴、時雨、——初霰、滞在、宿は同前。

山峡は早く暮れて遅く明ける、九時から十一時まで行乞、かなり大きな旅館があるが、こゝは夏さかりの冬がれで、どこにもあまりお客さんはないらしい。午後は休養、流れにはいつて洗濯する、そしてそれを河原に干す、それまではよかつたが、日和癖でざつとしぐれてきた、私は読書してゐて何も知らなかつたが（谿声がさう／＼と響くので）宿の娘さんが、そこまで走つて行つて持つて帰つて下さつたのは、じつさいありがたかつた。こゝの湯は胃腸病に効験いちじるしいさうなが、それを浴びるよりも飲むのださうな、田舎からの入湯客は一日に五升も六升も飲むさうな、土着の人々も茶の代用としてがぶ／＼飲むらしい、私もよく飲んだが、もしこれが酒だつたら！　と思ふのも上戸の卑しさからだらう。今夜は同宿者がある、隣室に支那人三連れ（昨夜は私一人だつた）大人一人子供二人の、例の大道軽業の芸人である、大人は五十才位の、痘痕のある支那人らしい支那人、子供はだいぶ日本化してゐる、草津節をうたつてゐる、私に話しかけては笑ふ。暮れてから、どしや降りとなつた、初霰が降つたさうな、もう雪がふるだらう、好雪片々別処に落ちず。——今夜は飲まなかつた、財政難もあるけれど、飲まないでも寝られたほど気分がよかつたのである、それでもよく寝た。繰り返していふが、こゝは湯もよく宿もよかつた、よい昼でありよい夜であつた（それでも夢を見ることは忘れ

なかつた！）

　　枯草山に夕日がいつぱい　しぐるゝや人のなさけに涙ぐむ　山家の客となり落葉ちりこむ　ずんぶり浸る一日のをはり・夕しぐれいつまでも牛が鳴いて　夜半の雨がトタン屋根をたゝいていつた・しぐるゝや旅の支那さんいつしよに寝てゐる・支那の子供の軽業も夕寒い・夜も働らく支那の子供よしぐれるな　ひとりあたゝまつてひとりねる

　　十一月十二日　晴、曇、初雪、由布院湯坪、筑後屋（二五・上）

　九時近くなつて草鞋をはく、ちよつと冷たい、もう冬だなと感じる、感じるどころぢやない、途中ちら／＼小雪が降つた、南由布院、北由布院、この湯の坪までは四里、あまり行乞するやうなところはなかつた、それでも金十四銭、米七合いたゞいた。湯の平の入口の雑木山もうつくしかつたが、このあたりの山もうつくしい、四方なだらかな山に囲まれて、そして一方はもく／＼ともりあがつた由布岳——所謂、豊後富士——である、高原らしい空気がたゞようてゐる、由布岳はいい山だ、おごそかさとしたしさとを持つてゐる、中腹までは雑木紅葉（そこへ杉か檜の殖林が割り込んでゐるのは、経済的と芸術的との相剋である、しかしそれはそれとしてよろしい）、中腹から上は枯草、絶頂は雪、登りたいなあと思ふ。此地方は驚くほど湯が湧いてゐる、至るところ湯だ、湯で水車のまはつてゐるところもあるさうな。由布院といふところは——南由布院、北由布院と分れてゐるが、それは九州としては気持のよい高原であるが、こゝは由布院中の由布院ともいふべく、湯はあふれてゐるし、由布岳は親しく見おろしてゐる、村だから、そここゝにちらほら家があつて、それがかなり大きな旅館であり料理屋である、——とにかく清遊地としては好適であることを疑はない。山色夕陽時といふ、私は今日幸にして、落日をまともに浴びた由布岳を観たことは、ほんたうにうれしい。この宿は評判だけあつて、気安くて、深切で、安くて、よろしい、殊に、ぶく／＼湧き出る内湯は勿体ないほどよろしかつた。

　・刺青あざやかな朝湯がこぼれる　洗うてそのまゝ河原の石に干す　寝たいだけ寝たからだ湯に伸ばす　別れるまへの支那の子供と話

す・水音、大声で話しつゞけてゐる　支那人が越えてゆく山の枯すゝき　また逢うた支那のおぢさんのこんにちは

　同宿三人、みんな同行だ、みんな好人物らしい、といふよりも好人物にならなくてはならなかつた人々らしい、みんな一本のむ、私も一本のむ、それでほろ／＼とろ／＼天下泰平、国家安康、家内安全、万人安楽だ（としておく、としておかなければ生きてゐられない）。

　　十一月十三日　曇、汽車で四里、徒歩で三里、玖珠町、丸屋（二五・中ノ上）

　早く起きて湯にひたる、ありがたい、此地方はすべて朝がおそいから、大急ぎで御飯をしまうて駅へ急ぐ、八時の汽車で中村へ、九時着、二時間あまり行乞、ぼつ／＼歩いて二時玖珠町着、また二時間あまり行乞、しぐれてさむいので、こゝへ泊る、予定の森町はすぐそこだが。山国はやつぱり寒い、もうどの家にも炬燵が開いてある、駅にはストーブが焚いてある、自分の姿の寒げなのが自分にも解る。北由布から中村までの山越は私の好きな道らしい、前程を急ぐので汽車に乗つたのは残念だつた、雑木山、枯草山、その間を縫うてのぼつたりくだつたりする道、さういふ道をひとり辿るのが私は好きだ、いづれまた機縁があつたら歩かせてもらはう。今日もべんたうは草の上で食べたが、寒かつた、冷たかつた。このあたりの山はよい、原もよい、火山型の、歪んだやうな荒涼とした姿である、焼野焼山といつた感じだ。これは今日の行乞に限つたことではないが、非人間的、といふよりも非人情的態度の人々に対すると、多少の憤慨と憐愍とを感じないではゐられない、さういふ場合には私は観音経を読誦しつゞける、今日もさういふ場合が三度あつた、三度は多過ぎる。吊り下げられた鉤にひつかゝる魚、投げ与へられた団子を追うて走る犬、さういふ魚や犬となつてはならない、さうならないための修行である、今日も自から省みて自から恥ぢ自から鞭つた。寒い、気分が重い、ぼんやりして道を横ぎらうとして、あはや自動車に轢かれんとした、危いことだつた、もつともそのまゝ死んでしまへば却つてよかつたのだが、半死半生では全く以て困り入る。

　　あふるゝ朝湯のしづけさにひたる（湯口温泉）・こゝちようねる

今宵は由布岳の下　下車客五六人に楓めざましく　雑木紅葉のぼりついてトンネル　尿してゐる朝の山どつしりとすはつてゐる・自動車に轢かれんとして寒い寒い道

　昨日の宿は申分なかつたが、今日の宿もよい、二十五銭でこれだけの待遇をして貰つては何だかすまないやうな気がする、着くと温かい言葉、炭火、お茶、お茶請（それは漬物だけれど）そして何でも気持よくやつて下さる。……同宿の坊さん、彼は真言宗だといつてゐたが、とにかく一癖ある人間だつた、今は眼が悪く年をとつたのでおとなしいが、ちよいちよい昔の負けじ魂を押へきれないやうだ。

　　十一月十四日　霧、霜、曇、——山国の特徴を発揮してゐる、日田屋（三〇・中）

　前の小川で顔を洗ふ、寒いので九時近くなつて冷たい草鞋を穿く、河一つ隔てゝ森町、しかしこの河一つが何といふ相違だらう、玖珠町では殆んどすべての家が御免で、森町では殆んどすべての家がいさぎよく報謝して下さる、二時過ぎまで行乞、街はづれの宿へ帰つてまた街へ出かけて、造り酒屋が三軒あるので一杯づゝ飲んでまはる、そしてすつかりいゝ気持になる、三十銭の幸福だ、しかしそれはバベルの塔の幸福よりも確実だ。森町は、絵葉書には谿郷と書いてあるけれど、山郷といつた方がいゝ、末広神社へ詣つて九州アルプスを見渡した風景はよかつた、町の中に森あり原あり、家あり石あり、そこがいゝ。岩扇山といふはおもしろい姿だ、頂上の平ぺつたい岩が扇を開いたやうな形をしてゐる、耶馬渓の風景のプロローグだ、私は奇勝とか絶景とかいはれるものは好かないが、その山は眺めて悪くない。此宿も悪くない、広くて静かだ、相当の人が落魄して、かういふ安宿をやつてゐるらしい、漬物がおいしい、お婆さんが深切だ。今日は雑木山でおべんたうを開いた、よかつた。朝が冷たかつたほど昼は暖かだつた。浜口首相狙撃さる——さういふ新聞通信を見た時、私は修証義を読みつゝ行乞してゐた、——無情忽ちに到るときは国王大王親昵従僕助くるなし、たゞ独り黄泉に赴くのみなり、己れに随ひゆくは善悪業等のみなり。——

　　おべんたうをひらく落葉ちりくる　大銀杏散りつくしたる大空・

落葉散りしくまゝで住んでゐる　ゆふべ、片輪の蜘蛛がはいあるく・また逢うた支那の子供が話しかける　西へ北へ支那の子供は私は去る　歩いても眺めても知らない顔ばかり　鉄鉢、散りくる葉をうけた　水飲んでルンペンのやすけさをたどる　支那人の寝言きいてゐて寒い・虱よ捻りつぶしたが

明日の事——深耶馬の渓谷美や、昧々さんとの再会や何や彼や——を考へて興奮したからだらう、二時頃まで寝られなかつた、かういふ身心では困るけれど、どうにもしようがない。今夜も例の支那軽業師と同宿、また同宿の同郷人と話した、言葉の魅力といつたやうなものを感じる。近来しみ／″＼感じるのであるが、一路を辿る、愚に返る、本然を守る——それが私に与へられた、いや残された最後の、そして唯一の生き方だ、そこに句がある、酒がある、ともいへやう。このあたりも菊作りがさかんだ、小屋までかけて観せるべく並べてある、私も観せて貰つた、あまり好きではないが。一室一人（但し半燈）もよかつた、宿の人々、同宿の人々がやさしいのもうれしかつた。

十一月十五日　晴、行程七里、中津、昧々居（最上々々）

いよ／＼深耶馬渓を下る日である、もちろん行乞なんかはしない、悠然として山を観るのである、お天気もよい、気分もよい、七時半出立、草鞋の工合もよい、巻煙草をふかしながら、ゆつたりした歩調で歩む、岩扇山を右に見てツイキの洞門まで一里、こゝから道は下りとなつて深耶馬の風景が歩々に展開されるのである、——深耶馬渓はさすがによかつた、といふよりも渓谷が狭くて人家や田園のないのが私の好尚にかなつたのであらう、とにかく失望しなかつた、気持がさつさうとした、観賞記は別に『秋ところ／″＼』の一部として書くつもり——三里下つて、柿坂へついたのが一時半、次の耶馬渓駅へ出て汽車に乗る、一路昧々居へ、一年ぶりの対面、いつもかはらない温情、よく飲んでよく話した、極楽気分で寝てしまつた。……

霜をふんであんなの方へ・山を観るけふいちにちは笠をかぶらず・山の鴉のなきかはす間を下る・小鳥ないてくれてもう一服　その木は枯れてゐる蔦紅葉　もう逢へまい顔と顔とでほゝゑむ　山の紅葉へ胸いつぱいの声　けふのべんたうは岩のうへにて・藪で赤いのが烏

瓜・岩にかいてあるはへのへのもへじ・寝酒したしくおいてありました（味々居）・また逢へた山茶花も咲いてゐる（味々居）・蒲団長く夜も長く寝せていたゞいて（　〃　）

十一月十六日　曇、句会、今夜も味々居の厄介になつた。

しぐれ日和である（去年もさうだつた）、去年の印象を新らたにする庭の樹々——山茶花も咲いてゐる、八ツ手も咲いてゐる、津波蕗もサルピヤも、そして柿が二つ三つ残んの実を持つたまゝ枯枝をのばしてゐる。朝酒、何といふうまさだらう、いゝ機嫌で、味々さんをひつぱりだして散歩する、そして宇平居へおしかけて昼酒、また散歩、塩風呂にはいり二丘居を訪ね、筑紫亭でみつぐり会の句会、フグチリでさん／″＼飲んで饒舌つた、句会は遠慮のない親しみふかいものだつた。

晴れてくれさうな八ツ手の花・朝、万年青の赤さがあつた　しぐるゝや供養されてゐる・土蔵そのそばの柚の実も（福沢先生旧邸）・すゝき一株も植ゑてある（　〃　）　座るよりよい石塔を見つけた（宇平居）　これが河豚かと食べてゐる（筑紫亭句会）・河豚鍋食べつくして別れた（　〃　）・ならんで尿する空が暗い　世渡りが下手くそな菊が咲きだした（闘牛児からの来信に答へて）　芙蓉実となつたあなたをおもふ（　〃　）

枕許に、水といつしよに酒がおいてあるには恐縮した、有難いよりも勿躰なかつた（味々さんの人柄を語るに最もふさはしい事実だ）。

春風秋雨　花開草枯自性自愚　歩々仏土

メイ僧のメンかぶらうとあせるよりも　ホイトウ坊主がホントウなるらん

酔来枕石　谿声不蔵酒中酒尽　無我無仏

見たまゝ、聞いたまゝ、感じたまゝの、

野衲、

山頭火

十一月十七日　晴、行程一里、宇ノ島、太田屋（三〇・中ノ上）

朝酒は勿躰ないと思つたけれど、見た以上は飲まずにはゐられない私である、ほろ／＼酔うてお暇する、いつまたあはれるか、それはわからない、けふこゝで顔と顔とを合せてる——人生はこれだけだ、これだけでよろしい、これだけ以上になつては困る。……情のこもつた別れの言葉をあとにして、すた／＼歩く、とても行乞なんか出来るものぢやない、一里歩いて宇ノ島、教へられてゐた宿へ泊る、何しろ淋しくてならないので濁酒を二三杯ひつかける、そして休んだ、かういふ場合には酔うて寝る外ないのだから。此宿はよろしい、木賃宿は一般によくなつたが、そして客種もよくなつたが、三十銭でこれだけの待遇をうけると、何となくすまないやうな気もする、しかも木賃宿は、それが客の多い宿ならば、みんな儲けだしてゐる。友人からのたより——味々居で受け取つたもの——をまた、くりかへしくりかへし読んだ、そして人間、友、心といふものにうたれた。同宿七人、同室はおへんろさんとおゑびすさん、前者はおだやかな、しんせつな老人だつたが、後者は無智な、我儘な中年者だつた、でも話してゐるうちに、私といふものを多少解つてくれたやうだつた。

・別れて来た道がまつすぐ　酔うて急いで山国川を渡る・つきあたつてまがれば風・別れきてさみしい濁酒があつた　タダの湯へつかれた足を伸ばす

十一月十八日　曇、宇ノ島八屋行乞、宿は同前、いゝ宿である。

行乞したくないけれど九時から三時まで行乞、おいしい濁酒を飲んで、あたゝかい湯に入る、そして寝る、どうしても孤独の行乞者に戻りきれないので閉口々々。

十一月十九日　晴、行程三里、門司、源三郎居、よすぎる。

嫌々行乞して椎田まで、もう我慢出来ないし、門司までの汽車賃だけはあるので大里まで飛ぶ、そこから広石町を尋ね歩いて、源三郎居の御厄介になる、だいぶ探したが、酒屋のおかみさんも、魚屋のおやぢさんも、また若い巡査も（彼は若いだけ巡査臭ぷん／＼であつたが）私と源三郎さんのやうな中流以上の知識階級乃至サラリーマンと

を結びつけえなかつたのはあたりまへだらう。源三郎さんは——奥さんも父君も——好感を持たないではゐられないやうな人柄である、たらふく酒を飲ませていたゞいて、ぞんぶん河豚を食べさせていたゞいて、そして絹夜具に寝せていたゞいた。

　　けふのべんたうは野のまんなかで　なつかしくもやはらかいフトンである（源三郎居）・蒲団ふうわりふる郷の夢（　〃　）

　駐在所で源三郎居の所在を教へられて、そこへの石段を上つてゆくと、子を負つた若い奥さんが下つて来られる、それが源三郎さんのマダムだつた、これは句になりさうで、なか／＼まとまらない、犬の方はすぐ句になつたが！

　　十一月廿日　曇、時雨、下関市行乞、本町通り、岩国屋（三〇・中ノ上）

　朝風呂に入れて下さつたのはありがたかつた、源三郎さんといつしよに出かける、少し借りる（何しろ深耶馬を下るためにといふので二円ばかり貯つてゐたのだが、宇島までにすつかり無くなつた、宇島で行乞したくないのを無理に行乞したのは、持金二十銭しかないので、食べて泊るだけにも二十二銭の不足だつたからである）、駅で別れる、しぐれがなか／＼やみさうもない、気分もおちつかないので、関門を渡る、晴間々々に三時間ばかり行乞、まだ早すぎるけれど、昨春馴染の此宿へ泊る、万事さつぱりしてゐて、おちつける宿、私の好きな宿である。酒は心をやはらげ湯は身体をやはらげる、身心共にやはらげられて寝たのに、虱の夢をみたのはどうしたことだらう！（もう一杯飲みたい誘惑に敗けたからかも知れない！）下関はなつかしい土地だ、生れ故郷へもう一歩だ、といふよりもすでに故郷だ、修学旅行地として、取引地として、また遊蕩地として——二十余年前の悪夢がよみがへる。……秋風の関門を渡る——かも知れませんよと白船君に、旅立つ時、書いて出したが、しぐれの関門を渡る——となつたが、こゝからは引き返す外ない、感慨無量といふところだ。

　　しぐるゝ朝湯もらうて別れる（源三郎居）・ふる郷の言葉となつた街にきた・ふる郷ちかい空から煤ふる

十一月廿一日　晴曇定めなくて時雨、市街行乞、宿は同前。

夢現のうちに雨の音をきいたが、やつぱり降る、晴れる、また降る、照りつゝ降る、降つてゐるのに照つてゐる、きちがい日和だ、九時半から一時半まで行乞する、辛うじて食べて泊つて一杯飲むだけは与へられた、時雨の功徳でもあり、袈裟の功徳でもある。さんざ濡れて働らく、かういふ人々の間を通り抜けて行乞する、私も肉体労働者であることに間違いない。下関の市街は歩いてゐるうちに、酒屋、魚屋、八百屋、うどん屋、餅屋（此頃は焼芋屋）、等々の食気屋の多いのに、今更のやうに驚かないではゐられない、鮮人の多いのにも驚ろく、男は現代化してゐるけれど、女は固有の服装でゆう／＼と歩いてゐる、子供を腰につけてゐるのも面白い（日本人は背中につけ、西洋人は籃に入れてゐる）。昨日も時化、今日も時雨だ、明日も時雨かも知れない、時化と関門、時化の関門と私とはいつも因縁がふかいらしい。街頭風景としては、若い娘さんが、或る魚屋の店頭で、手際よく鰒を割いてゐた、おもしろいね、月並臭はあるけれど、おもしろいことはおもしろい（シヤンとフグとヂヤズ）。

・片輪同志で濡れてゆく　ぬれてはたらいてゐるは鮮人　ぬれてひとりごというて狂人・それは私の顔だつた鏡つめたく　日記焼き捨てる火であたゝまる　あんまり早う焼き捨てる日記の灰となつた

今宵も我慢しきれなくなつて、ドブ一杯、シヨウチユウ一杯、その二杯の最大能力を発揮させて寝る、どうぞ明日は降つてくれるなよ、昨夜はよう寝られたのに、今夜はどうしても寝つかれない、十二時過ぎるまで読んだ、読物はみんな友からの贈物である。しぐれの音が聞える、まつたく世間師殺しの天候だ、宵のうちに、隣室の土工さんが、やれ／＼やつと食ふだけは儲けて来た、土方殺すにや刃物はいらぬ、雨が三日降りやみな殺し、と自棄口調で唄つてゐたのを思ひだす、私だつて御同様、わがふところは秋の風どころぢやない、大時化のスツカラカンだ。

旅のみなし児砂糖なめてゐる　寄りそうてだあまつて旅のみなし児は　旅の子供はひとりでメンコうつてゐる　　　□・久しぶり逢つた秋のふぐと汁（源三郎居）　鰒食べつゝ話が尽きない（

〃　）　　　　□・濡れて寒い顔と顔がしづくしてゐる　バクチにまけてきて相撲見の金を借り出さうとしてゐる　時化でみづから吹いて慰む虚無僧さん・空も人も時化ける　冬空のふる郷へちかづいてひきかへす　追うても逃げない虫が寒い

　　十一月廿二日　晴曇定めなし、時々雨、一流街行乞、宿は同じ事。

　お天気は昨日からの――正確にいへば一昨日からの――つゞき、降つたり晴れたりだ、十時近くなつて、どうやら大して降りさうもないので出かける、こんな日は、ひとり火鉢をかゝへて、読書と思索とに沈潜したいのだけれど、それはとうてい許されない。草鞋ではとてもやりきれないので、昨日も今日も地下足袋を穿いたが、感じの悪い事おびたゞしい。二時過ぎまで行乞、キス一杯の余裕あるだけはいたゞいて、地橙孫さんを訪ねる、不在、奥さんに逢つて（女中さん怪訝な顔付で呼びにいつた）ちよつと挨拶する、白状すれば、昨春御馳走のなりつぱなしになつてゐるし、そのうへ少し借りたのもそのまゝになつてゐる、逢うて話したいし、逢へばきまりが悪いし、といつてこゝへ来て黙つてゐることは私の心情が許さないし、とにもかくにも地橙孫さんは尊敬すべき紳士である、私は俳人としてゞなく、人間として親しみを感じてゐるのである。宿に戻つて、すぐ入浴、そして一杯、それはシヨウチユウ一杯とドブ一杯とのカクテルだ、飲まずにはゐられないアルコール（酒とはいはない）、何とみじめな、そして何とうまいことだろう！下関は好きだけれど、煤烟と騒音とには閉口する、狭くるしい街を人が通る、自動車が通る、荷馬車が通る、オートバイが通る、自転車が通る、……その間を縫うて、あちらこちらと行乞するのはほんたうに嫌になります。生きてゐることのうれしさとくるしさとを毎日感じる、同時に人間といふものゝよさとわるさとを感ぜずにはゐられない、――それがルンペン生活の特権とでもいはうか、それはそれとして明日は句会だ、どうかお天気であつてほしい、好悪愛憎、我他彼此のない気分になりたい。

　　　　改作二句（源三郎居即事）・吠えて親しい小犬であつた・まづ朝日一本いたゞいて喫ひこむ　　　　□・旅はきらくな起きるより唄・雨をよけてゐるラヂオがきこえる　ハジカレたが菊の見事さよ

（ハジカレは術語、御免の意味）　お経とゞかないヂヤズの騒音（或は又、ヂヤズとお経とこんがらがつて）　風の中声はりあげて南無観世音菩薩・これでもお土産の林檎二つです　火が何よりの御馳走の旅となつた　　改　紅葉山へ腹いつぱいのこし・藪で赤いは烏瓜　坐るよりよい石塔を見た・ならんで尿する空が暗い　また逢ふまでの山茶花を数へる・土蔵そのそばの柚の実も（福沢旧邸）

　　十一月廿三日　曇、時雨、下関市、地橙孫居。

　相変らずの天候である、朝の関門海峡を渡る、時雨に濡れて近代風景を観賞する、舳の尖端に立つて法衣を寒風に任した次第である、多少のモダーン味がないこともあるまい。門司風景を点綴するには朝鮮服の朝鮮人の悠然たる姿を添へなければならない、西洋人のすつきりした姿乃至どつしりした姿も、――そして下関駅頭の屋台店（飲食店に限る）、門司海岸の果実売子を忘れてはならない。約束通り十時前に源三郎居を訪ふたが、同人に差閊が多くて、主客二人では句会にならないで、けつくそれをよい事にして山へ登る、源三郎さんはりゆうとした現代紳士型の洋装、私は地下足袋で頬かむりの珍妙姿、さぞ山の神――字義通りの――もおかしがつたであらう。下関から眺めた門司の山々はよかつたが、近づいて見て、登つて観て、一層よかつた、門司には過ぎたるものだ。『当然』に生きるのが本当の生活だらうけれど、私はたゞ『必然』に生きてゐる、少くとも此二筋の『句』に於ては、『酒』に於ては！

　・燃えてしまつたそのまゝの灰となつてゐる　風の夜の戸をたゝく音がある　風の音もふけてゐる散財か　更けてバクチうつ声　あすはあへるぞトタン屋根の雨・しんみりぬれて人も馬も　夢がやぶれたトタンうつ雨・きちがい日和の街をさまよふのだ・ま夜中の虱を這はせる　あの汽車もふる郷の方へ音たかく　地図一枚捨てゝ心かろく去る　　　□　すこし揺れる船のひとり　きたない船が濃い煙吐いて　しぐるゝ街のみんなあたゝかう着てゐる　しぐるゝや西洋人がうまさうに林檎かじつてゐる　あんな船の大きな汽笛だつた　しぐれてる浮標が赤いな　　　□　風が強い大岩小岩にうづもれ□□　吹きまくられる二人で登る　好きな僕チヤンそのまゝ寝ちまつた（源三郎居）・このいたゞきにたゞずむことも

・水飲んで尿して去る　水飲めばルンペンのこゝろ・雨の一日一隅を守る

十一月廿四日　曇、雨、寒、八幡市、星城子居（もつたいない）

今日も亦、きちがい日和だ、裁判所行きの地橙孫君と連れ立つて歩く、別れるとき、また汽車賃、辨当代をいたゞいた、すまないとは思ふけれど、汽車賃はありますか、辨当代はありますかと訊かれると、ありませんと答へる外ない、おかげで行乞しないで、門司へ渡り八幡へ飛ぶ、やうやく星城子居を尋ねあてゝ腰を据える、星城子居で星城子に会ふのは当然だが、俊和尚に相見したのは意外だつた、今日は二重のよろこび——星氏に会つたよろこび、俊氏に逢つたよろこび——を与へられたのである。俊和尚は予期した通りの和尚だつた、私は所謂、禅坊主はあまり好きでないが、和尚だけは好きにならずにはゐられない禅坊主だ（何と不可思議な機縁だらう）。星城子氏も予期を裏切らない、いや、予期以上の人物だ、あまり優遇されるので恐縮するほどだ、訪問早々、奥さんの温情に甘えて、昼御飯をうんと食べたほど、身心をのび／＼とさせた。ずゐぶんおそくまで飲みつゞけ話しつゞけた、飲んでも／＼話しても／＼興はつきなかつた、それでは皆さんおやすみ、あすはまた飲みませう、話しませう（虫がよすぎますね！）。

逢ひたうて逢うてゐる風（地橙孫居）　※かみしめては昔を話す（　〃　）　風の街の毛皮売れない鮮人で・けふもしぐれて落ちつく場所がない・しみ／″＼しみいる尿である　買ふでもないものを観てまはる　ふる郷ちかく酔うてゐる　朝から酔うて雨がふる・ありがたいお金さみしくいたゞく　供養受けるばかりで今日の終り・しぐるゝや煙突数のかぎりなく（八幡風景）　風の街の朝鮮女の衣裳うつくしい　また逢ふまでの山茶花の花（昧々氏へ）　標札見てあるく彦山の鈴（星城子居）　しぐるゝやあんたの家をたづねあてた（　〃　）

省みて、私は搾取者ぢやないか、否、奪掠者ぢやないか、と恥ぢる、かういふ生活、かういふ生活に溺れてゆく私を呪ふ。……芭蕉の言葉に、わが句は夏爐冬扇の如し、といふのがある、俳句は夏爐冬扇だ、夏爐冬扇であるが故に、冬爐夏扇として役立つのではあるまい

か。荷物の重さ、いひかへれば執着の重さを感じる、荷物は少くなつてゆかなければならないのに、だんだん多くなつてくる、捨てるよりも拾ふからである。八幡よいとこ——第一印象は、上かんおさかなつき一合十銭の立看板だつた、そしてバラツク式長屋をめぐる煤煙だつた、そして友人の温かい雰囲気だつた。

　　十一月廿五日　晴、河内水源地散歩、星城子居、雲関亭、四有三居。

　ほがらかな晴れ、俊和尚と同行して警察署へ行く、朝酒はうまかつたが、それよりも人の情がうれしかつた、道場で小城氏に紹介される、氏も何処となく古武士の風格を具へてゐる、あの年配で剣道六段の教士であるとは珍らしい、外柔内剛、春のやさしさと秋のおごそかとを持つ人格者である、予期しなかつた面接のよろこびをよろこばずにはゐられなかつた、稽古の済むのを待つて、四人——小城氏と俊和尚と星城子君とそして私と——うち連れて中学校の裏へまはり、そこの草をしいて坐る、と俊和尚の袖から般若湯の一本が出る、殆んど私一人で飲みほした（自分ながらよく飲むのに感心した）、こゝからは小城さんと別れた、三人で山路を登る、途中、柚子を貰つたり、苺を摘んだり、笑つたり、ひやかしたり、句作したりしながら、まるで春のやうな散歩をつゞる、そしてまた飲んだ、気分がよいので、景色がよいので——河内水源地は国家の経営だけに、近代風景として印象深く受け入れた（この紀行も別に、秋ところ／″＼の一節として書く）、帰途、小城さんの雲関亭に寄つて夕飯を饗ばれる、暮れてから四有三居の句会へ出る、会する者十人ばかり、初対面の方が多かつたが、なか／＼の盛会だつた（私が例の如く笑ひ過ぎ饒舌り過ぎたことはいふまでもあるまい）、十二時近く散会、それからまた／＼例の四人でおでんやの床几に腰かけて、別れの盃をかはす、みんな気持よく酔つて、俊和尚は小城さんといつしよに、私は星城子さんといつしよに東と西へ、——私はずゐぶん酔つぱらつてゐたが、それでも、俊和尚と強い握手をして、さらに小城さんの手をも握つたことを覚えてゐる。

　・朝日まぶしく組み合つてゐる（道場即時）・ほがらかにして草の上（草上饗宴）　よい家があるその壁の蔦紅葉　蓬むしれば昔なつかし　水はたゝへてわが影うつる（水源地風景）・をり／＼羽ばたく水

鳥の水（　　〃　　）・水を前に墓一つ　好きな山路でころりと寝る・そよいでるその葉が赤い　小皿、紫蘇の実のほのかなる（雲関亭即事）・さみしい顔が更けてゐる　風が冷い握手する　竹植ゑてある日向の家　まつたく裸木となりて立つ（雲関亭即事）

　十一月廿六日　晴、行程八里、半分は汽車、緑平居（うれしいといふ外なし）

ぐつすり寝てほつかり覚めた、いそがしく飲んで食べて、出勤する星城子さんと街道の分岐点で別れる、直方を経て糸田へ向ふのである、歩いてゐるうちに、だん／＼憂欝になつて堪へきれないので、直方からは汽車で緑平居へ驀進した、そして夫妻の温かい雰囲気に包まれた。……昧々居から緑平居までは歓待優遇の連続である、これでよいのだらうかといふ気がする、飲みすぎ饒舌りすぎる、遊びすぎる、他の世話になりすぎる、他の気分に交りすぎる、勿躰ないやうな、早敢ないやうな心持になつてゐる。山のうつくしさよ、友のあたゝかさよ、酒のうまさよ。今日は香春岳のよさを観た、泥炭山のよさも観た、自然の山、人間の山、山みなよからざるなし。

　あるだけの酒飲んで別れたが（星城子君に）　眼が見えない風の道を辿る・十一月二十二日のぬかるみをふむ（歩々到着）・夜ふけの甘い物をいたゞく（四有三居）　傷づいた手に陽をあてる　晴れきつて真昼の憂欝　はじめての鰒のうまさの今日（中津）　ボタ山ならんでゐる陽がぬくい・ひとすぢに水ながれてゐる・重いドアあけて誰もゐない　枯野、馬鹿と話しつゞけて　憂欝を湯にとかさう・地下足袋のおもたさで来て別れる　ボタ山の下でまた逢へた（緑平居）　また逢うてまた酔うてゐる（　〃　）・小菊咲いてまだ職がない（闘牛児君に）　留守番、陽あたりがよい

駅で、伊豆地方強震の号外を見て驚ろいた、そして関東大震災当時を思ひ出した、そして諸行無常を痛感した、観無常心が発菩提心となる、人々に幸福あれ、災害なかれ、しかし無常流転はどうすることも出来ないのだ。緑平居で、プロ文士同志の闘争記事を読んで嫌な気がした、人間は互に闘はなければならないのか、闘はなければならないならば、もつと正直に真剣に闘へ。此二つの記事が何を教へるか、考

ふべし、よく考ふべし。

十一月廿七日　晴、読書と散歩と句と酒と、緑平居滞在。

緑平さんの深切に甘えて滞在することにする、緑平さんは心友だ、私を心から愛してくれる人だ、腹の中を口にすることは下手だが、手に現はして下さる、そこらを歩い見たり、旅のたよりを書いたりする、奥さんが蓄音機をかけて旅情を慰めて下さる、――ありがたい一日だつた、かういふ一日は一年にも十年にも値する。夜は二人で快い酔にひたりながら笑ひつゞけた、話しても話しても話は尽きない、枕を並べて寝ながら話しつゞけたことである。

・生えたまゝの芒としてをく（緑平居）・枝をさしのべてゐる冬木（　〃　）　ゆつくり香春も観せていたゞく（　〃　）・旅の或る日の蓄音機きかせてもらう（　〃　）・風の黄ろい花のいちりん　泥炭車ひとりできてかへる　泥炭山ちかく飛行機のうなり　夕日の机で旅のたより書く（緑平居）・けふも暮れてゆく音につゝまれる　あんなにちかいひゞきをきいてゐる（苦味生君に）

糸田風景のよいところが、だん／＼解つてきた、今度で緑平居訪問は四回であるが、昨日と今日とで、今まで知らなかつたよいところを見つけた、といふよりも味はつたと思ふ。

十一月廿八日　晴、近郊探勝、行程三里、香春町（二五・中）

昨日もうらゝかな日和であつたが、今日はもつとほがらかなお天気である、歩いてゐて、しみ／″＼歩くことの幸福を感じさせられた、明夜は句会、それまで近郊を歩くつもりで、八時緑平居を出る、どうも近来、停滞し勝ちで、あんまり安易に狎れたやうである、一日歩かなければ一日の堕落だ、などゝ考へながら河に沿うて伊田の方へのぼる、とても行乞なんか出来るものぢやない（緑平さんが、ちやんとドヤ銭とキス代とを下さつた、下さつたといへば星城子さんからも草鞋銭をいたゞいた）、このあたりの眺望は好きだ、山も水も草もよい、平凡で、そして何ともいへないものを蔵してゐる、朝霧にほんのりと浮びあがる香春、一ノ岳二ノ岳三ノ岳の姿にもひきつけられた、ボタ山が鋭角を空へつきだしてゐる形もおもしろい（この記事も亦、別に

書かう、秋ところ／″＼の一節として書くに足るものだ）、ぶらりぶらり歩く、一歩は一歩のうらゝかさやすらかさである、句を拾つて来なさいといつて下さつた緑平さんの友情を思ひながら、――いつのまにか伊田まで来たが、展覧会があつた後で、何だかごた／＼ゐる、おちついて寝られるやうな宿がありさうにもないので、橋を渡つて香春へ向いてゆく、この道も悪くない、平凡のうれしさを十分に味ふ、香春岳はやつぱりいゝ、しかし私には少し奇峭に過ぎないでもない、それに対してなだらかな山なみが、より親しまれる、そのところ／″＼の雑木紅葉がうつくしい（香春岳は遠くからか、或は近くから眺めるべき山だ、緑平居あたりからの遠山がよい、また、こゝまできて見あげてもよい）、十一時にはもう香春の町へ着いた、寂れた街である、久振に蕎麦を食べる、宿をとるにはまだ早すぎるので、街を出はづれて、高座寺へ詣る、石寺とよばれてゐるだけに、附近には岩石が多い、梅も多い、清閑を楽しむには持つてこいの場所だ、散り残つてゐる楓の一樹二樹の風情も捨てがたいものだつた（この辺は今春、暮れてから緑平さんにひつぱりまはされたところだ、また、因に書いておく、香春岳全山は禁猟地で、猿が数百匹野生して残存してゐる、見物に登らうかとも思つたが、あまり気乗りがしないので、やめた、二三十匹乃至二三百匹の野生猿が群がり遊んでゐる話を宿の主人から聞かされた）。此宿は外観はよいが内部はよくない、たゞ広くて遠慮のないのが気に入つた、裏の川で洗濯をする、流れに垢をそゝぐ気分は悪くなかつた。一浴一杯、それで沢山だつた、顔面頭部の皮膚病が、孤独の憂欝を濃くすることはするけれど。

　　すくひあげられて小魚かゞやく　はぎとられた芝土の日だまり・菊作る家の食客してゐる　そこもこゝも岩の上には仏さま（高座石寺）　訝訝するほがらか　鳴きかはしてはよりそふ家鴨　枯木かこんで津波蕗の花　つめたからう水底から粉炭拾ふ女　火のない火鉢があるだけ　落葉ふんでおりて別れる（緑平君に）・みすぼらしい影とおもふに木の葉ふる（自嘲）

　　十一月廿九日　晴、霜、伊田行乞、緑平居、句会。

　大霜だつた、かなり冷たかつた、それだけうらゝかな日だつた、うらゝかすぎる一日だつた、ゆつくり伊田まで歩いてゆく、そして三時

間ばかり行乞、一週間ぶりの行乞だ、行乞しなくてはならない自分だから、やつぱり毎日かゝさず行乞するのが本当だ。行乞は雲のゆく如く、水の流れるやうでなければならない、ちよつとでも滞つたら、すぐ紊れてしまふ、与へられるまゝで生きる、木の葉の散るやうに、風の吹くやうに、縁があればとゞまり縁がなければ去る、そこまで到達しなければ何の行乞ぞやである、やつぱり歩々到着だ。伊田で、八百屋の店頭に松茸が少しばかり並べてあつた、それを見たばかりで私はうれしかつた、松茸を見なかつた食べなかつた物足りなさが紛らされた（その松茸は貧弱なものだつたけれど）。糒川の草原にすわつて、笠の手入れをしたり法衣のほころびを縫ふたりする、ついでに虱狩もした、香春三山がしつとりと水に映つてゐる、朝の香春もよかつたが、夕の香春もよい。河岸には（伊田の街はづれの）サアカスが興業してゐた、若い踊子や象や馬がサーカス気分を十分に発散させてゐた、バカホンド、ルンペン、君たちも私も同じ道を辿るのだね。枯草の上で、老遍路さんとしみ／″＼話し合つた、何と人なつかしい彼だつたらう、彼は人情に餓えてゐた、彼は老眼をしばたゝいてお天気のよいこと、人の恋しいこと、生きてゐることのうれしさとくるしさとを話しつゞけた（果して私はよい聞手だつたらうか）。夜は緑平居で句会、門司から源三郎さん、後藤寺から次郎さん、四人の心はしつくり融け合つた、句を評し生活を語り自然を説いた。真面目すぎる次郎さん、温情の持主ともいひたい源三郎さん、主人公緑平さんは今更いふまでもない人格者である。源三郎さんと枕をならべて寝る、君のねむりはやすらかで、私の夢はまどかでない、しば／＼眼ざめて読書した。日が落ちるまへのボタ山のながめは、埃及風景のやうだつた、とでもいはうか、ボタ山かピラミツドか、ガラ炭のけむり、たそがれる空。オコリ炭、ガラ炭、ボタ炭、ビフン炭（本当のタドン）、等、等、どれも私の創作慾をそゝる、句もだいぶ出来た、あまり自信はないけれど。

　けふは逢へる霜をふんで（源三郎さんに）　落葉拾ふてはひとり遊んでゐる　ボタ山もほがらかな飛行機がくる　枯草に寝て物を思ふのか　背中の夕日が物を思はせる　たゞずめばおちてきた葉　かうして土くれとなるまでの・橋を渡つてから乞ひはじめる　鶏が来て鉢のお米をついばもうとする　いつも動いてゐる象のからだへ日がさす

（サーカス所見）　口あけてゐる象には藷の一きれ（　　〃　　）
日向の餅が売り切れた　何か食べつゝ急いでゐる　枯草の日向で虱とらう・乞ふことをやめて山を観る　香春見あげては虱とつてゐる・いつまでいきる蜻蛉かよ　ボタ山の下で子のない夫婦で住んでゐる・逢ひたいボタ山が見えだした・法衣の草の実の払ひきれない　枯草の牛は親子づれ　ほゝけすゝきもそよいでゐる　即きすぎるすゝきの方へ歩みよる　落ちる陽のいろの香春をまとも　鳴きやまない鶏を持てあましてる・ボタ山のまうへの月となつた　もう一度よびとめる落葉
みんなで尿する蓮枯れてゐる　夕空のアンテナをめあてにきた

　　十一月卅日　雨、歓談句作、後藤寺町、次郎居（なつかしさいつぱい）

　果して雨だつた、あんなにうらゝかな日がつゞくものぢやない、主人公と源三郎さんと私と三人で一日話し合ひ笑ひ合つた、気障な言葉だけれど、恵まれた一日だつたことに間違はない。夕方、わかれ／＼になつて、私はこゝへきた、そして次郎さんのふところの中で寝せてもらつた、昨夜約束した通りに。飲みつゞけ話しつゞけだ、坐敷へあがると、そこの大机には豆腐と春菊と密柑と煙草とが並べてあつた、酒の事はいふだけ野暮、殊に私は緑平さんからの一本を提げてきた、重かつたけれど苦にはならなかつた、飲むほどに話すほどに、二人の心は一つとなつた、酒は無論うまいが、湯豆腐はたいへんおいしかつた。

　　あんな月が雨となつた音に眼ざめてゐる　ほどよい雨の冬空であります・ボタ山のたゞしぐれてゐる　ふとんふか／″＼とあんたの顔・いくにち影つけた法衣ひつかける　ふりかへれば香春があつた　ボタ山もとう／＼見えなくなつてしまつた・冬雨の橋が長い　びつしより濡れてる草の赤さよ・音を出てまた音の中　重いもの提げてきた冬の雨　水にそうて下ればあんたの家がある・笠も漏りだしたか（自嘲）　おわかれの言葉いつまでも／＼　炭坑町はガラ焚くことの夕暮　あの木がある家と教へられた戸をたゝく　ひとりのあんたをひとり私が冬の雨　逢うてまだ降つてゐる

　次郎さんはほんたうに真面目すぎる、あまりつきつめて考へては生

きてゐられない、もつとゆつたりと人間を観たい、自然を味はひたい、などゝ忠告したが、それは私自身への苦言ではなかつたか！

　　十二月一日　曇、次郎居滞在、読書、句作、漫談、快飲、等々。

　　朝酒したしう話しつゞけて・落葉掃かない庭の持主である（次郎居）・撫でゝやれば鳴いてくれる猫（　〃　）　猫はいつもの坐布団の上で・捨炭車ひとりで上下する月の捨炭山（改作）

　次郎さんは今日此頃たつた一人である、奥さんが子供みんな連れて、母さんのお見舞に行かれた留守宅である、私も一人だ、一人と一人とが飲みつゞけ話しつゞけたのだから愉快だ。猫が一匹飼うてある、きいといふ、駆け込み猫で、おとなしい猫だ、あまりおとなしいので低脳かと思つたら、鼠を捕ることはなか／＼うまいさうな、能ある猫は爪をかくす、なるほどさうかも知れない。

　　十二月二日　曇、何をするでもなしに、次郎居滞在。

　毎朝、朝酒だ、次郎さんの厚意をありがたく受けてゐる、次郎さんを無理に行商へ出す、私一人猫一匹、しづかなことである、夜は大根膾をこしらへて飲む、そして遅くまで話す。

　　　　次郎居即事　朝の酒のあたゝかさが身ぬちをめぐる　ひとりでゐて濃い茶をすゝる　物思ふ膝の上で寝る猫　寝てゐる猫の年とつてゐるかな　猫も鳴いて主人の帰りを待つてゐる　人声なつかしがる猫とをり　猫もいつしよに欠伸するのか　猫もさみしうて鳴いてからだすりよせる　いつ戻つて来たか寝てゐる猫よ　その樅の木したしう見あげては・なつかしくもきたない顔で　徹夜働らく響にさめて時雨　家賃もまだ払つてない家の客となつて・痒いところを掻く手があつた　機械と共に働らく外なし・機械まはれば私もまはる・機械動かなくなり私も動かない　人は動かない機械は動いてゐる・今夜のカルモチンが動く・投げ出された肉体があざわらつてゐる

　寸鶏頭君、元寛君に、先日来方々から寄せ書をしたが、感情を害しやしなかつたか知ら、あまりに安易に、自己陶酔的に書き捨てゝ、先方の感情を無視してゐた、慙愧々々。或る友に与へて、――

　私はいつまでも、また、どこまでも歩きつゞけるつもりで旅に出た

が、思ひかへして、熊本の近在に文字通りの草庵を結ぶことに心を定めた、私は今、痛切に生存の矛盾、行乞の矛盾、句作の矛盾を感じてゐる、……私は今度といふ今度は、過去一切——精神的にも、物質的にも——を清算したい、いや、清算せずにはおかない、すべては過去を清算してからである、そこまでいつて、歩々到着が実現せられるのである、……自分自身で結んだ草庵ならば、あまり世間的交渉に煩はされないで、本来の愚を守ることが出来ると思ふ、……私は歩くに労れたといふよりも、生きるに労れたのではあるまいか、一歩は強く、そして一歩は弱く、前歩後歩のみだれるのをどうすることも出来ない。……

　　十二月三日　晴、一日対座懇談、次郎居滞在。

　今日は第四十八回目の誕生日だつた、去年は別府附近で自祝したが、今年は次郎さんが鰯を買つて酒を出して下さつた、何と有難い因縁ではないか。次郎さんは善良な、あまりに善良な人間だ、対座して話してゐるうちに、自分の不善良が恥づかしくなる、おのづから頭が下る——次郎さんに缺けたものはオと勇だ！ポストへ行く途上、若い鮮人によびとめられた、きちんとした洋服姿でにこついてゐる、そしておもむろに、懐中時計を買はないかといふ、馬鹿な、今頃誰がそんな詐欺手段にのせられるものか、——しかし、彼が私を認めて、いかさま時計を買ふだけの金を持つてゐたと観破したのならば有難い、同時に、さういふイカサマにかへらる外ない男として、或は一も二もなくさういふものを買ふほどの（世間知らずの！）男と思つたのならば有難くない。夜は無論飲む、次郎さん酔うて何も彼も打ち明ける、私は有難く聴いた、何といふ真摯だらう。

　　雑巾がけしてる男の冬　鰯さいても誕生日・侮られて寒い日だ飛行機のうなりも寒い空　話してる間へきて猫がうづくまる　涙がこぼれさうな寒い顔で答へる

　　十二月四日　晴、行程六里、汽車でも六里、笹栗町、新屋（三〇・下）

　冷たいと思つたら、霜が真白だ、霜消し酒をひつかけて別れる、引き留められるまゝに次郎居四泊はなんぼなんでも長すぎた。十一時の

汽車に乗る、乗車券まで買つて貰つてほんたうにすまないと思ふ、それぱかりぢやない、今日は行乞なんかしないで、のんきに歩いて泊りなさいといつて、ドヤ銭とキス代まで頂戴した、――かういふ場合、私は私自身の矛盾を考へずにはゐられない、次郎さんよ、幸福であつて下さい、あんたはどんなに幸福であつても幸福すぎることはない、それだのに実際はどうだ、次郎さんは商売の調子がよくないのである、日々の生活も豊かでないのである。飯塚へ着いたらもう十二時近かつた、濁酒一杯の元気で八木山峠を越える、そして七曲りの紅葉谷へ下りる（笹栗新四国八十八ヶ所、第三十四番の薬師堂）、このあたりの山と水とは悪くない。途中、村の老人連の放蕩話は面白かつた、博多柳町で、仕切一円、一円六十銭といつたやうな昔がたり、また途上の狂女は嫌だつた、若いだけ、すつかり調子外れでないだけ気味悪かつた。此宿はよくない、お客さんは私一人だ、気儘に読んだり書いたりをすることが出来たのは勿怪の幸だつたが。

　　別れの畳まで朝日さしこむ　別れともない猫がもつれる　また逢ふまでの霜をふみつゝ　霜の消えないうちに立つ・もういちど濃いお茶飲んで別れませう　二三歩ついてきてさようなら・ちつとも雲のない空仰ぎつゝ別れた　廃坑の霜がぬくうとけてゆく・みんな活きてゆく音たてゝゐる・古い墓に新らしい墓のかゞやかさ　朝日まぶしう枯山たかく・いたづらに真昼の火が燃えてゐる・曲つて旧道のしづけさをのぼる　耕す下を掘つてるか・これでも生活のお経あげてゐるのか　そこら音ある水をたづねる　秋風の石を祀つて拝んでゐる（追加）

　さみしいなあ――ひとりは好きだけれど、ひとになるとやつぱりさみしい、わがまゝな人間、わがまゝな私であるわい。

　　十二月五日　曇、時雨、行程三里、福岡市、句会、酒壺洞居。

　お天気も悪いし、気分もよくないので、一路まつすぐに福岡へ急ぐ、十二時前には、すでに市役所の食堂で、酒壺洞君と対談することが出来た（市役所で、女の給仕さんが、酒壺洞君から私の事を聞かされてゐて、うろ／＼する私を見つけて、さつそく酒壺洞君を連れて来てくれたのはうれしかつた）、退庁まではまだ時間があるので、後刻

を約して札所めぐりをする、九州西国第三十二番は龍宮寺、第三十一番は大乗寺、どちらも札所としての努力が払つてない、もつと何とかしたらよさゝうなものだと思ふ。夜は酒壺洞居で句会、時雨亭さん、白楊さん、青炎郎さん、鳥平さん、善七さんさんに逢つて愉快だつた、散会後、私だけ飲む、寝酒をやるのはよくないのだけれど。……さすがに福岡といふ気がする、九州で都会情調があるのは福岡だけだ（関門は別として）、街も人も美しい、殊に女は！　若い女は！　街上で電車切符売が多いのも福岡の特色だ。存在の生活といふことについて考へる、しなければならない、せずにはゐられないといふ境を通つて来た生活、『ある』と再認識して、あるがまゝの生活、山是山から山非山を経て山是山となつた山を生きる。……役所のヒケのベルの音、空家の壁に張られたビラの文字、——酒呑喜べ上戸党万歳！……たゞこの二筋につながる、肉体に酒、心に句、酒は肉体の句で、句は心の酒だ、……この境地からはなか／＼出られない。……

・ボタ山も灯つてゐる　別れる夜の水もぞんぶんに飲み・しぐるゝ今日の山芋売れない　親一人子一人のしぐれ日和で　新道まつすぐな雨にぬれてきた　砂利を踏む旅の心　焼き捨てる煙である塵である車、人間の臭を残して去つた　地下室を出て雨の街へ　飾窓の人形の似顔にたゝずむ　大根ぬいてきておろして下さるあんただ（次郎さんに）・濡れてもかまはない道のまつすぐ　窓をあけた明るい顔だつた　水を挾んでビルデイングの影に影　お寺の大銀杏散るだけ散つた・ぬれてふたりで大木を挽いてゐる　しぐるゝやラヂオの疳高い声　買ふことはない店を見てまはつてる・窓の中のうまいもの見てゐるか　どの店も食べるものばかりひろげて・よんでも答へない彼についてゆく　十二月の風も吹くにまかさう（寸鶏頭さんに）

十二月六日　雨、福岡見物、彷徨五里、時雨亭居。

眼がさめて、あたりを見まはすと、層雲文庫の前だ、酒壺洞君は寝たまゝでラヂオを聞いてゐる、私にも聴かせてくれる、今更ながら機械の力に驚かずにはゐられない、九時、途中で酒君に別れて、雨の西公園を見物する、それからまた歩きつゞけて、名島の無電塔や飛行場見物、ちようど郵便飛行機が来たので、生れて初めて、飛行機といふものを近々と見た。時雨亭さんは神経質である、泊るのは悪いと思つ

たけれど、やむなく今夜は泊めて貰ふ、酒壺洞君もやつてきて、十二時頃まで話す。今日は朝のラヂオから夕の飛行機まで、すつかり近代科学の見物だつた、無論、赤毛布！　いや黒合羽だつた！

　　朝の木の実のしゞま　降るまゝ濡れるまゝで歩く・赤い魚すぐ売れた　泥をあびせられつゝ歩くこと・雨の公園のロハ台が見つからない・すさんだ皮膚を雨にうたせる・ふけてアスフアルトも鈴蘭燈もしぐれます・さんざしぐれる船が出てゆく・死ねない人の鈴が鳴る　墓をおしのけレールしく　松原ほしいまゝな道を歩く（名島風景）・正しく並んで烟吐く煙突四本（　〃　）　飛行機着いたよ着いたよ波　飛行機飛んで行つた虹が見える　無電塔、またしぐれだした　蚤も虱もいつしよに寝ませう　暮れ残る頂の枯すゝき　すさまじい響の大空曇る

　時雨亭さんは近代人、都会人であることに疑いない、あまり神経がこまかくふるへるのが対座してゐる私の神経にもつたはつて、時々私自身もやりきれないやうに感じけれど、やつぱり好意の持てる人である。

　　十二月七日　晴、行程四里、二日市町、わたや（三〇・中）

　早く眼は覚めたが――室は別にして寝たが――日曜日は殊に朝寝する時雨亭さんに同情して、九時過ぎまで寝床の中で漫読した、やうやく起きて、近傍の大仏さんに参詣して回向する、多分お釈迦さんだらうと思ふが、大衆的円満のお姿である、十一時近くなつて、送られて出立する、別れてから一時頃まで福岡の盛り場をもう一度散歩する、かん酒屋に立ち寄つて、酢牡蠣で一杯やつて、それでは福岡よ、さよなら！ぽか／＼と小春日和だ、あまり折れ曲りのない道をこゝまで四里、酔が醒めて、長かつた、労いた、夕飯をすまして武蔵温泉まで出かけて一浴、また一杯やつて寝る。

　　朝日かゞやく大仏さまの片頬　まともに拝んで、まはつて拝む大仏さま　師走の街のラヂオにもあつまつてゐる・小春日有縁無縁の墓を洗ふ　送らるゝぬかるみの街　おいしいにほひのたゞよふところをさまよふ　ぬかるみもかはくけふのみち・近づいてゆく山の紅葉の残つてゐる・どつかりと腰をおろしたのが土の上で・三界万霊の石塔傾

いてゐる　ころがつてゐる石の一つは休み石・酔がさめて埃つぽい道となる　からだあたゝまる心のしづむ（武蔵温泉）

　福岡の中州をぶら／＼歩いてゐると、私はほんたうに時代錯誤的だと思はずにはゐられない、乞食坊主が何をうろ／＼してると叱られさうな気がする（誰に、——はて誰にだらう）。すぐれた俳句は——そのなかの僅かばかりをのぞいて——その作者の境涯を知らないでは十分に味はへないと思ふ、前書なしの句といふものはないともいへる、その前書とはその作者の生活である、生活といふ前書のない俳句はありえない、その生活の一部を文字として書き添へたのが、所謂前書である。

　　十二月八日　晴后曇、行程四里、松崎、双之介居。

　八時頃、おもたい地下足袋でとぼ／＼歩きだした、酒壺洞君に教へられ勧められて双之介居を訪ねるつもりなのである、やうやく一時過ぎに、松崎といふ田舎街で『歯科口腔専門医院』の看板を見つける、ほんたうに、訪ねてよかつた、逢つてよかつたと思つた、純情の人双之介に触れることが出来た（同時に酔つぱらつて、グウタラ山頭火にも触れていたゞいたが）、まちがいのないセンチ、好きにならずにはゐられないロマンチシズム、あまりにうつくしい心の持主で、醜い自分自身を恥ぢずにはゐられない双之介、ゆたかな芸術的天分を発揮しないで、恋愛のカクテルをすゝりつゝある人——さういつたものを、しんみりと感じた。開業所、宿泊所、飲食所、それがみんな別々なのも面白い、いかにも双之介的らしい、このあたりは悪くない風景だが、太刀洗が近いので、たえず爆音が聞えるのは困る。……昨日今日は近代科学に脅やかされた、その適切な一例として、右は汽車が走る、左は電車が走る、そのまんなかを自動車が走る、法衣を着て網代笠をかかつた私が閉口するのも無理はあるまい、閉口しなければウソだ。道を訊ねる、答へる人の人間的価値がよく解る、今日も度々道を訊ねたが、中年の馬車挽さんは落第、若い行商人は満点だつた、教へるならば、深切に、人情味のある答を望むのは無理かな。

　　しんせつに教へられた道の落葉・つめたい雨のうつくしい草をまたぐ　大木に腰かけて旅の空　立札の下手くそな文字は「節倹」　山

茶花散つて貧しい生活　坊さん二人下りたゞけの山の駅の昼（追加）　大金持の大樅の木が威張つてゐる・空の爆音尿してゐる（太刀洗附近）・たゝへた水のさみしうない　また逢つた薬くさいあんたで（追加）・降るもよからう雨がふる　夕空低う飛んで戻た（飛行機）　暮れてもまだ鳴きつゞける鵙だ

今夜は酔ふた、すつかり酔つぱらつて自他平等、前後不覚になつちやつた、久しぶりの酔態だ、許していたゞかう。

十二月九日　雨后晴、双之介居滞在（本郷上町今村氏方）

よい一日だつた、勧められるまゝに滞在した、酒を飲んで物を考へて、さてどうしようもないが、どうしようもないまゝでよかつた、日記をつけたり、近所のお寺へまゐつたりした、……そして田園情調を味はつた、殊に双之介さんが帰つて、床を並べて、しんみり話し合つてゐるところへ、家の人から御馳走になつた焼握飯はおいしかつた。双之介さんと対座してゐると、人間といふものがなつかしうなる、それほど人間的温情の持主だ、同宿の田中さん（双之介さんと同業の友達）もいゝ人物だつた、若さが悩む悶えを聞いた。

みあかしゆらぐなむあみだぶつ（お寺にて）自動車まつしぐらに村の夕闇をゆるがして行つた

十二月十日　晴、行程六里、善導寺、或る宿（二五・中）

九時近くなつて、双之介さんに送られて、田主丸の方へ向ふ、別れてから、久しぶりに行乞を初めたが、とても出来ないので、すぐ止めて、第十九番の札所に参拝する、本堂庫裡改築中で落ちつきがない、まあ市井のお観音様といつた感じである、こゝから箕ノ山の麓を善導寺までの三里は田舎路らしくてよかつた、箕ノ山といふ山はおもしろい、小さい山があつまつて長々と横はつてゐるのである、陽をうけて、山脈が濃淡とり／″＼なのもうつくしかつた、途中、第十八番の札所へ詣るつもりだつたが、宿の都合が悪く、日も暮れかけたので、急いで此宿を探して泊つた、同宿者が多くてうるさかつた、日記を書くことも出来ないのには困つた、床についてからも嫌な夢ばかり見た、四十九年の悪夢だ、夢は意識しない自己の表現だ、何と私の中には、

もろ／＼のものがひそんでゐることよ！

・旅は雀もなつかしい声に眼ざめて・落葉うづたかく御仏ゐます・行き暮れて水の音ある

十二月十一日　晴、行程七里、羽犬塚、或る宿（二〇・中ノ上）

朝早く、第十八番の札所へ拝登する、山裾の静かな御堂である、札所らしい気分になる、そこから急いで久留米へ出て、郵便局で、留置の雑誌やら手紙やらを受け取る、こゝで泊るつもりだけれど、雑踏するのが嫌なので羽犬塚まで歩く、目についた宿にとびこんだが、きたなくてうるさいけれど、やすくてしんせつだつた。霜——うらゝか——雲雀の唄——櫨の並木——苗木畑——果実の美観——これだけ書いておいて、今日の印象の備忘としよう。

・大霜の土を掘りおこす　枯草ふみにじつて兵隊ごつこ　うらゝかな今日の米だけはある　さうろうとしてけふもくれたか　街の雑音も通り抜けて来た

十二月十二日　晴、行程六里、原町、常盤屋（三〇・中）

思はず朝寝して出立したのはもう九時過ぎだつた、途中少しばかり行乞する、そして第十七番の清水寺へ詣でる、九州西国の札所としては有数の場所だが、本堂は焼失して再興中である、再興されたら、随分見事だらう、こゝから第十六番への山越は□□□にない難路だつた、そこの尼さんは好感を与へる人だつた、こゝからまた清水寺へ戻る別の道も難路だつた、やうやく前の道へ出て、急いでこゝに泊つた、共同風呂といふのへはいつた、酒一合飲んだらすつかり一文なしになつた、明日からは嫌でも応でも行乞を続けなければならない。行乞！行乞のむづかしさよりも行乞のみじめさである、行乞の矛盾にいつも苦しめられるのである、行乞の客観的意義は兎も角も、主観的価値に悩まずにゐられないのである、根本的にいへば、私の生存そのものゝ問題である（酒はもう問題ではなくなつた）。

・日向の羅漢様どれも首がない（清水寺）・山道わからなくなつたところ石地蔵尊　明日は明日のことにして寝ませうよ

遍路山道の石地蔵尊はありがたい、今日は石地蔵尊に導かれて、半

里の難路を迷はないで巡拝することが出来た。今夜の宿も困つた、やつと蝋燭のあかりで、これだけ書いた、こんなことにも旅のあはれが考へられる。……

十二月十三日　曇、行程四里、大牟田市、白川屋（　　　）

昨夜は子供が泣く、老爺がこづく、何や彼やうるさくて度々眼が覚めた、朝は早く起きたけれど、ゆつくりして九時出立、渡瀬行乞、三池町も少し行乞して、普光寺へ詣でる、堂塔は見すぼらしいけれど景勝たるを失はない、このあたりには宿屋——私が泊るやうな——がないので、大牟田へ急いだ、日が落ちると同時に此宿へ着いた、風呂はない、風呂屋へ行くほどの元気もない、やつと一杯ひつかけてすべてを忘れる。……

痰が切れない爺さんと寝床ならべる・孫に腰をたゝかせてゐるおぢいさんは・眼の見えない人とゐて話がない　水仙一りんのつめたい水をくみあげる　水のんでこの憂欝のやりどころなし　あるけばあるけば木の葉ちるちる

先夜同宿した得体の解らない人とまた同宿した、彼は自分についてあまりに都合よく話す、そんなに自分が都合よく扱へるかな！私はどうやらアルコールだけは揚棄することが出来たらしい、酒は飲むけれど、また、飲まないではゐられまいけれど、アルコールの奴隷にはならないで、酒を味ふことが出来るやうになつたらしい。冬が来たことを感じた、うそ寒かつた、心細かつた、やつぱりセンチだね、白髪のセンチメンタリスト！　笑ふにも笑へない、泣くにも泣けない、ルンペンは泣き笑ひする外ない。夜、寝られないので庵号などを考へた、まだ土地も金も何もきまらないのに、もう庵号だけはきまつた、曰く、三八九庵（唐の超真和尚の三八九府に拠つたのである）。

十二月十四日　晴、行程二里、万田、苦味生居、末光居。

霜がまつしろにおりてゐる、冷たいけれど晴れきつてゐる、きょうは久振に苦味生さんに逢へる、元気よく山ノ上町へ急ぐ、坑内長屋の出入はなか／＼やかましい（苦味生さんの言のやうに、一種の牢獄といへないことはない）、やうやくその長屋に草鞋を脱いだが、その本

人は私を迎へるために出かけて留守だつた、母堂の深切、祖母さんの言葉、どれもうれしかつた、句稿を書き改めてゐるうちに苦味生さん帰宅、さつそく一杯二杯三杯とよばれながら話しつゞける、――苦味生さんには感服する、あゝいふ境遇であゝいふ職業で、そしてあゝいふ純真さだ、彼と句とは一致してゐる、私と句とが一致してゐるやうに。入浴して散歩する、話しても話しても話し飽かないほど、二人は幸福であり平和であつた、彼等に幸福と平和とがつゞくことを祈る。夜は苦味生さんの友人末光さんのところへ案内されて泊めていたゞいた、久しぶりに、ほんたうに久しぶりに田園のしづけさしたしさを味はつた、農家の生活が最も好ましい生活ではあるまいか、自から耕して自から生きる、肉体の辛さが精神の安けさを妨げない、――そんな事を考へながら、飲んだり話したり作つたりした。

・霜の道べりへもう店をひろげはじめた　大霜、あつまつて火を焚きあげる　つめたい眼ざめの虱を焼き殺す・師走ゆきこの捨猫が鳴いてゐる　よい事も教へられたよいお天気・霧、煙、埃をつきぬける・石地蔵尊へもパラソルさしかけてある　のぼりくだりの道の草枯れ　明るくて一間きり（苦味生居）・柵をくゞつて枯野へ出た　子供になつて馬酔木も摘みます　夕闇のうごめくは戻る馬だつた　八十八才の日向のからだである（苦味生さん祖母）

さびしいほどのしづかな一夜だつた、緑平さんへ長い手紙を書く、清算か決算か、とにかく私の一生も終末に近づきつゝあるやうだ、とりとめもない悩ましさで寝つかれなかつた、暮鳥詩集を読んだりした、彼も薄倖な、そして真実な詩人だつたが。我儘といふことについて考へる、私はあまり我がまゝに育つた、そしてあまり我がまゝに生きて来た、しかし幸にして私は破産した、そして禅門に入つた、おかげで私はより我がまゝになることから免がれた、少しづゝ我がまゝがとれた、現在の私は一枚の蒲団をしみ／″＼温かく感じ、一片の沢庵切をもおいしくいたゞくのである。

十二月十五日　晴、行程二里、そして汽車、熊本市、彷徨。

けふも大霜で上天気である、純な苦味生さんと連れ立つて荒尾海岸を散歩する（末光さんも純な青年だつた、きつと純な句の出来る人

だ）、捨草を焚いて酒瓶をあたゝめる、貝殻を拾つてきて別盃をくみかはす、何ともいへない情緒だつた。苦味生さんの好意にあまえて汽車で熊本入、百余日さまよいあるいて、また熊本の土地をふんだわけであるが、さびしいよろこびだ、寥平さんを訪ねる、不在、馬酔木さんを訪ねて夕飯の御馳走になり、同道して元寛さんを訪ねる、十一時過ぎまで話して別れる、さてどこに泊らうか、もうおそくて私の泊るやうな宿はない、宿はあつても泊るだけの金がない、まゝよ、一杯ひつかけて駅の待合室のベンチに寝ころんだ、ずゐぶんなさけなかつたけれど。……

・あてもなくさまよう笠に霜ふるらしい　寝るところがみつからないふるさとの空・火が燃えてゐる生き物があつまつてくる
□　起きるより火を焚いて　悪水にそうて下る（万田）　磯に足跡つけてきて別れる　耕す母の子は土をいぢつて遊ぶ　明日の網をつくらうてゐる寒い風　別れきてからたちの垣　身すぎ世すぎの大地で踊る・夕べの食へない顔があつまつてくる・霜夜の寝床が見つからない

十二月十六日　晴、行程三里、熊本市、本妙寺屋（四〇・下）

堅いベンチの上で、うつら／＼してゐるうちにやうやく朝が来た、飯屋で霜消し一杯、その元気で高橋へ寝床を探しにゆく、田村さんに頼んでおいて、ひきかへして寥平さんを訪ねる、今日も逢へない、茂森さんを訪ね、夫婦のあたゝかい御馳走をいたゞく、あまりおそくなつては、今夜も夜明しするやうでは困るので、いそいで本妙寺下の安宿を教へられて泊る、悪い宿だけれど仕方がない、更けるまで寝つかれないので読んだ（書くほどの元気はなかつた）。こんど熊本に戻つてきて、ルンペンの悲哀をつく／″＼感じた、今日一日は一句も出来なかつた。

十二月十七日　霜、晴、行程六里、堕地獄、酔菩薩。

朝、上山して和尚さんに挨拶する（昨夜、挨拶にあがつたけれど、お留守だつた）、和尚さんはまつたく老師だ、慈師だ、恩師だ。茅野村へ行つて土地を見てまはる、和尚さんが教へて下さつた庵にはもう人がはいつてゐた、そこからまた高橋へゆく、適当な家はなかつた、またひきかへして寥平さんを訪ねる、後刻を約して、さらに稀也さん

を訪ねる、妙な風体を奥さんや坊ちやんやお嬢さんに笑はれながら、御馳走になる、いゝ気持になつて（お布施一封までいたゞいて）、寥平さんを訪ねる、二人が逢へば、いつもの形式で、ブルジヨア気分になりきつて、酒、酒、女、女、悪魔が踊り菩薩が歌ふ、……寝た時は仏だつたが、起きた時は鬼だつた、ぢつとしてはゐられないので池上附近を歩いて見る、気に入つた場所だつた、空想の草庵を結んだ。

……今日も一句も出来なかつた、かういふあはたゞしい日に一句でも生れたら嘘だ、ちつとも早くおちつかなければならない。自分の部屋が欲しい、自分の寝床だけは持たずにはゐられない、——これは私の本音だ。

十二月十八日　雨、后、晴、行程不明、本妙寺屋（悪いね）

終日歩いた、たゞ歩いた、雨の中を泥土の中を歩きつゞけた、歩かずにはゐられないのだ、ぢつとしてゐては死ぬる外ないのだ。朝、逓信局を訪ねる、夜は元寛居を訪ねる、煙草からお茶、お酒、御飯までいたゞく、私もいよ／＼乞食坊主になりきれるらしい、喜んでいゝか、悲しのか、どうでもよろしい、なるやうになれ、なりきれ、なりきれ、なりきつてしまへ。

十二月十九日　晴、行程二里、川尻町、砥用屋（四〇・中）

まつたく一文なしだ、それでもおちついたもので、ゆう／＼と西へ向ふ、三時間ばかり川尻町行乞、久しぶりの行乞だ、むしやくしやするけれど、宿銭と飯代とが出来るまで、やつと辛抱した。宿について、湯に入つて、ほつとする、行乞は嫌だ、流浪も嫌だ、嫌なことをしなければならないから、なほ／＼嫌だ。安宿といふものは面白いところだ、按摩さん、ナフタリン売、土方のワタリ、へぼ画家、お遍路さん、坊主、鮮人、等、等、そして彼等の話の、何とみじめで、そして興ふかいことよ。

十二月二十日　雨、曇、晴、行程四里、本妙寺屋（可、不可、四〇・下、上）

雨に間違いない空模様である、気の強い按摩さん兼遊芸人さんは何のこだはりもなく早く起きて出ていつた、腰を痛めてゐる日本的鮮人

は相かはらず唸つてゐる、——間もなく降りだした、私は荷物をあづけて、雨支度をして出かけた、川尻——春竹——砂取——新屋敷——休みなしに歩いたが、私にふさはしい部屋も家もなか／＼見つからない、夕方、逓信局に馬酔木さんを訪ね、同道してお宅で晩餐の御馳走になる、忙しい奥さんがこれだけの御馳走をして下さつたこと、馬酔木さんが酒好きの私の心持を察して飲まして下さつたこと、そして舅さんが何かと深切に話しかけて下さつたこと、ありがたい、／＼、そしてまた同道して元寛居へ推参する、雑談にも倦んでそれ／″＼の寝床へいそぐ、おちつけない一日々々である、あはたゞしい一日々々である、よき食慾とよき睡眠、そしてよき食物とよき寝床。

・今夜の寝床を求むべくぬかるみ　与へられた寝床の虱がうごめく・降つたり照つたり死場所をさがす　狂人が銭を数へてるま夜中の音

嫌な夢から覚めたら嫌な声がするので、何ともいへない気分になつた、嫌な一夜、それはおちつかない一日の正しい所産だ。

十二月廿一日　晴后曇、行程五里、熊本市。

昨夜、馬酔木居で教へられた貸家を見分すべく、十時、約束通り加藤社で雑誌を読みながら待つてゐたら、例のスタイルで元寛さんがやつてきた（馬酔木さんはおくれて逢へなかつたので残念）、連れ立つて出町はづれの若い産婆さん立石嬢を訪ね、案内されて住む人もなく荒れるにまかした農家作りの貸家へ行く、とても住めさうにない、広すぎる、暗すぎる——その隣家の一室に間借して独占してゐる五高生に同宿を申込んで家主に交渉して貰ふ、とても今日の事にはない、数日後を約して、私は川尻へ急行する、途中一杯二杯三杯、宿で御飯を食べて寝床まで敷いたが、とても睡れさうもないし、引越の時の事もあるので、電車でまた熊本へ舞ひ戻る、そして彼女を驚かした、彼女もさすがに——私は私の思惑によつて、今日まで逢はなかつたが——なつかしさうに、同時に用心ぶかく、いろ／＼の事を話した、私も労れと酔ひとのために、とう／＼そこへ寝込んでしまつた、たゞ寝込んでしまつたゞけだけれど、見つともないことだつた、少くとも私としては恥ざらしだつた。

枯草ふんで女近づいてくる　枯草あたゝかう幸福な二人で（元寛君へ）・住みなれて枯野枯山・道はでこぼこの明暗・ふりかへるふるさとの山の濃き薄き

十二月廿二日　曇、晴、曇、小雪、行程五里、本妙寺屋。

一歩々々がルンペンの悲哀だつた、一念々々が生存の憂欝だつた、熊本から川尻へ、川尻からまた熊本へ、逓信局から街はづれへ、街はづれから街中へ、そして元寛居であたゝかいものをよばれながらあたゝかい話をする、私のパンフレツト三八九、私の庵の三八九舎もだん／＼具体化してきた、元坊の深切、和尚さんの深切に感謝する、義庵老師が最初の申込者だつた！寒くなつた、冬らしいお天気となつた、風、雪、そして貧！

十二月廿三日　曇、晴、熊本をさまよふてＳの家で、仮寝の枕！

けふも歩きまはつた、寝床、寝床、よき睡眠の前によき寝床がなければならない、歩いても／＼探しても／＼寝床が見つからない、夕方、茂森さんを訪ねたら出張で不在、詮方なしに、苦しまぎれに、すまないと思ひながらＳの家で泊る。

十二月廿四日　雨、彷徨何里、今夜もＳの厄介、不幸な幸福か。

また清水村へ出かけてＡ家を訪問する、森の家を借りるために、——なか／＼埒があかない、ブルヂヨアぶりも気にくはない、パンフレツトをだすのに不便でもある、——すつかり嫌になつて方々を探しまはる、九品寺に一室あつたけれど、とてもおちつけさうにない、それからまた方々を探しまはつて、もう諦めて歩いてゐると、春竹の植木畠の横丁で、貸二階の貼札を見つけた、間も悪くないし、貸主も悪くないので、さつそく移つてくることにきめた、といつて一文もない、緑平さんの厚情にあまえる外ない。

十二月廿五日　晴、引越か家移か、とにかくこゝへ、春竹へ。

緑平さんの、元寛さんの好意によつて、Ｓのところからこゝへ移つて来ることが出来た。……

大地あたゝかに草枯れてゐる・日を浴びつゝこれからの仕事考へ

る　　　追加一句　歩きつかれて枯草のうへでたより書く

だん／＼私も私らしくなつた、私も私の生活らしく生活するやうになつた、人間のしたしさよさを感じないではゐられない、私はなぜこんなによい友達を持つてゐるのだらうか。

　十二月廿六日　晴、しづかな時間が流れる、独居自炊、いゝね。

寒い、寒い、忙しい、忙しい――我不関焉！

枯草原のそこここゝの男と女葬式はじまるまでの勝負を争ふ枯草の夕日となつてみんな帰つた明日を約して枯草の中

これらの句は二三日来の偽らない実景だ、実景に価値なし、実情に価値あり、プロでもブルでも。

　やつと見つけた寝床の夢も・餅搗く声ばかり聞かされてゐる・いつも尿する草の枯れてゐる・重たいドアあけて誰もゐない

　十二月廿七日　晴、もつたいないほどの安息所だ、この部屋は。

ハガキ四十枚、封書六つ、それを書くだけで、昨日と今日とが過ぎてしまつた、それでよいのか、許していたゞきませう。……やうやく、おかげで、自分自身の寝床をこしらへることができました、行乞はウソ、ルンペンはだめ、……などとも書いた。前後植木畠、葉ぼたんがうつくしい、この部屋には私の外に誰だかゐるやうな気がする、ゐてもらひたいのではありませんかよ。数日来、あんまり歩いたので（草鞋を穿いて歩くのには屈托しないが、下駄、殊に足駄穿きには降参降参）、足が腫れて、足袋のコハゼがはまらないやうになつた、しかし、それもぢきよくなるだらう。

・師走のポストぶつ倒れゐた　自分の家を行きすぎてゐたのか　タドンあたゝかく待つてゐてくれた　夜ふけてさみしい夫婦喧嘩だ

附記、昨日Ｉさんを訪ねたが会へなかつた（先日も訪ねたが、さうだつた）、多分居留守をつかつてゐるらしい、Ｉさんは私と彼女との間を調停してくれた人、私がこんなになつたから腹を立てゝ愛想をつかして、面会謝絶と出たのかも知れない、子供は正直だから取次に出た子供の様子で、そんなやうに感じた、――とにもかくにも、それで

は、Ｉさんはあまりに一本気だ、人間を知らない、——私はＩさんのために、居留守が私の僻みであることを祈る、Ｉさんだつて俗物だ、俗物中の最も悪い俗物だ、プチブル意識の外には何物も持つてゐない存在物だから。

第7章
行乞記　02 三八九日記(新字旧仮名)

十二月廿八日　曇、雨、どしや降り、春日へ、そして熊本へ。

もう三八九日記としてもよいだらうと思ふ、水が一すぢに流れるやうに、私の生活もしづかにしめやかになつたから。——途上、梅二枝を買ふ、三銭、一杯飲む、十銭、そして駅で新聞を読む、ロハだ。夕方から、元坊を訪ねる、何といふ深切さだらう、Ｙ君の店に寄る、Ｙ君もいゝ人だ、Ｉ書店の主人と話す、開業以来二十七年、最初の最深の不景気だといふ、さうだらう、さうだらうが、不景気不景気で誰もが生きてゐる、たゞ生きてゐるのだ、死ねないのだらう！

晴れた朝の悲しいたよりだつた（寸鶏頭君の病篤し）・酔へば人がなつかしうなつて出てゆく　師走夕暮、広告人形がうごく　久しぶりに話してゐる雨となつた　どしやぶり、正月の餅もらうてもどる・どうなるものかとはだしであるく　暮れてまだ搗いて餅のおいしからう　濡れて戻つて机の塵

Ｓがお正月餅を一袋くれた、※餅、平餅、粟餅、どれもこれもありがたくいたゞいた、元坊のところでも搗きたてのホヤ／＼餅をおいしく食べた。……寝床の中でつく／″＼考へる、——私は幸福な不幸人だ、恵まれた邪宗徒だ、私はいつでも死ねる、もがかずに、従容として！　私にはもうアルコールもいらない、カルモチンもいらない、ゲルトもいらない、フラウもいらない、……やつぱりウソはウソだけれど、気分は気分だ。

十二月廿九日　晴、紺屋町から春日駅へ、小春日和の温かさ。

或る人へのたよりに、『……こゝへ移つて来てから、ほんたうにしづかな時間が流れてゆきます、自分自身の寝床――たとへそれはどんなにみすぼらしいものであつても――を持つてゐることが、こんなにも身心をおちつかせるかと、自分ながら驚いてをります、ちようど、一茶が長年待ち望んでゐた家庭を持つた時のよろこびもこんなだつたらうと、ひとりで微苦笑を禁じえませんでした。……』ぶら／＼歩いてゐるうちに、酒が飲みたくなつて、飲むだけの十銭は持つてゐたので、一杯ひつかけた、漬物、皿、炭、等々を買つたら、もう財布には一銭銅貨四枚しか残つてゐない。ルンペンは一夜の契約だが、今の私は来年の十五日までは、こゝにゐることが出来る、米と炭と数の子と水仙と白足袋とを買つたら、それこそおめでたいお正月だ！（餅はすでに貰つた。酒も貰へるかも知れない、乞食根性をだすなよ）

月の葉ぼたんへ尿してゐる誰もが忙しがつてる寒月があつた

三八九の原稿を書くのに、日記八冊焼き捨てゝしまつたので困つた、しかし困つても、焼き捨てたのはよかつたらう、――過去は一切焼き捨てなければ駄目だから、――放下了也。

十二月卅日　風は冷たいけれど上々吉のお天気、さすがに師走らしい。

私は刻々私らしくなりつゝある、私の生活も日々私の生活らしくなりつゝある、何にしてもうれしい事だ、私もこんどこそはルンペンの足を洗ふことが出来るのだ。草鞋のかろさと下駄のおもさとを考へる、殊に足駄をひきずつて泥濘を歩くと、すぐ足が痛くなり腫れあがつて歩けなくなる、長袖を着て下駄を穿いて活動が出来るものか。師走の人ごみにまじつて、ぶら／＼歩く、買う銭もなければ、あまり買ひたいものもない、あんまりのんきな師走の私かな。私には師走もなければ、したがつて正月もない、気取つていへば、毎日が師走でもあり正月でもある。

あんな夢を見たけさのほがらか　けさも一りん開いた梅のしづけさ　鐘が鳴る師走の鐘が鳴りわたる・街は師走の広告燈の明滅・仲よい夫婦で大きな荷物　飾窓の御馳走のうつくしいことよ　うつくしう飾られた児を見せにくる　寒い風の広告人形がよろめく　朝日まぶし

い餅をいたゞく

午前は元寛さん来訪、夜は馬酔木居往訪、三人で餅を焼いて食べながら話した、元寛さんは元寛さんのやうに、馬酔木さんは馬酔木さんのやうに、どちともすぐれた魂を持つてゐられる。……元寛さんから餅と数の子とを貰つた、ありがたかつた。

二本三銭の梅が咲きはじめた・明日はお正月の数の子まで貰つた・ぐるりとまはつてまたひとりになる　霜枯れの菊の枯れざま・霜の大地へコマぶつつける　洟垂息子の独馬は強いな　降つてきたのは煤だつた　畠の葉ぼたんのよう売れてさみしくなる　夕ざれは豆腐屋の笛もなつかしく

十二月卅一日　曇つて寒い、暮れてからは雨になつた、今年もおしまひだ。

嚢中に四銭しかない、三銭で入浴、一銭でヒトモジ一把、文字通りの無一物だ、いかに私でも——師走がない正月がない私でも困るので、夕方、寥平さんを訪ね、事情を明かして少し借りる、いや大いに掠める、寥平さんのすぐれた魂にうたれる。……見切の白足袋一足十銭、水仙一本弐銭、そして酒一升一円也、——これで私の正月支度は出来た、さあ正月よ、やつてこい！人間は妙なもので、酒を一杯飲ませて下さいとはいひにくいが、煙草一服貸して下さいとはいひやすい、餅を頂戴しませうとはいひやすけれど、飯をよばれませうとはいひにくい、思ふに、自分の身に即きすぎた物、いひかへれば必要の度の強い物、誰もが持たなくてはならない物は強請しにくいらしい。風呂敷といふものは何と便利なものだらう、大小自由だ、大きいものも小さいものも一枚で包める、とてもトランクやケースやバツグが及ばない、たゞモダーンではない。食べたい時に食べ、寝たい時に寝る、私しやほんとに我がまゝ気まゝ。偶然のない生活、当然のみの生活、必然の生活、「あるべき」が「あらずにはゐられない」となつた生活。忙しい中の静けさ、貧しい中の安らかさ、といつたやうなものを、今日はしみ／″＼感じたことである。寥平さんのおかげで、炊事具少々、端書六十枚、其他こま／″＼したものを買ふ、お歳暮を持つて千体仏へ行く、和尚さんもすぐれた魂で私を和げて下さつた。あんまり

気が沈むから二三杯ひつかける、そして人が懐かしうなつて、街をぶらつき、最後にＳのところで夜明け近くまで話した（今夜は商店はたいがい徹夜営業である）、酔うて饒舌つて、年忘れしたが、自分自身をも忘れてしまつた。……

　葉ぼたん抜かれる今年も暮れる今年も今夜かぎりの雨となり

　それでは昭和五年よ、一九三〇年よ、たいへんお世話になつた、各地の知友福寿長久、十方の施主災障消除、諸縁吉祥ならんことを祈ります。

　　一月一日　雨、可なり寒い。

　いつもより早く起きて、お雑煮、数の子で一本、めでたい気分になつて、Ｓのところへ行き、年始状を受取る、一年一度の年始状といふものは無用ぢやない、断然有用だと思ふ。年始郵便といふものをあまり好かない私は、元日に年始状を書く、今日も五十枚ばかり書いた、単に賀正と書いたのでは気がすまないので、いろ／＼の事を書く、ずゐぶん労れた。

　　元旦の捨犬が鳴きやめない　売れ残つた葉ぼたん畑のお降り・水仙いちりんのお正月です・ひとり煮てひとり食べるお雑煮

　　一月二日　曇后晴、風、人、――お正月らしい場景となつた。

　吉例によつて、お屠蘇とお雑煮だけは缺かさない、独り者にも春は来にけり、さても結構なお正月で御座います、午後になつて出かける、まづ千体仏へ、老師はお年始まはりで不在、つぎに茂森さん宅へ、こゝも廻礼でお留守、――歩くのが嫌になつて、人間がうるさくなつて、そのまゝ帰つて来た、夕方、思ひがけなく元坊来訪、今夜また馬酔木居で会合することを約束する、何も御馳走するものがないから密柑をあげる、私はお雑煮やりそこなひの雑炊を食べて、ぶら／＼新市街の雑踏を歩いて、馬酔木さんを訪ねる、いろ／＼お正月の御馳走になる、十分きこしめしたことはいふまでもない、だいぶおそくなつてＳの店に寄つた、年賀状がきてはゐないかと思つて、――が、それがいけなかつた、彼女の御機嫌がよくないところへ、私が酔つたまぎれに言はなくてもいゝ事を言つた、とう／＼喧嘩してしまつた、お

互に感情を害して別れる、あゝ何といふ腐れ縁だらう！暁、火事があつた、裏の窓からよく見えた、私は善い意味での、我不関焉で、火事といふものを鑑賞した（罹災者に対してはほんたうにすまないと思ひながらも）。さきころまでは何を食べても――水を飲んでさへも――塩つぽく感じたのに、けふこのごろは、何を食べても甘たらしく感じる、何の病気だらうか、しかし近来の私は健康である、今夜も馬酔木居で、肥えたといはれたが、なるほど、私は肥えた、手首を握つて見るに、今までにない大きさである。……通信費が多いのには閉口する、こゝへ移つてから、転居の通知やら、年始状やらで、もう葉書を百五十枚ぐらいは買つたらう、これではとてもやりきれない（生活費の三割以上を占めるやうになる）、早く三八九を出して、それを利用したい。

　先祖代々菩提とぶらふ水仙の花　酔へばけふもあんたの事（緑平さんに）・うまい手品も寒い寒い風　正月二日の金峰山も晴れてきた　お正月の熊本を見おろす・もう死ぬる声の捨猫をさがす　自動車も輪飾かざつて走る　持てるものみんな持つて歩いてゐる（老遍路さん）　よい月の葉ぼたんのよさ　　追加二句・訪ねる人もゐない街のぬかるみ　闇をつらぬいて自動車自動車

　一月三日　うらゝか、幸福を感じる日、生きてゐるよろこび、死なゝいよろこび。

　――昨夜の事を考へると憂欝になる、彼女の事、そして彼の事、彼等に絡まる私の事、――何となく気になるのでハガキをだす、そして風呂へゆく、垢も煩らひも洗ひ流してしまへ（ハガキの文句は、……昨夜はすまなかつた、酔中の放言許して下さい、お互にあんまりムキにならないで、もつとほがらかに、なごやかに、しめやかにつきあはふではありませんか、……といふ意味だつたが）。

　お正月も暮れてまだ羽子をついてゐる・お正月のまんまるいお月さんだ　夕闇せまりくる独馬をたゝかはせてゐる　おとなしく象は食べものを待つばつかり（有田洋行会所見二句）　食べものに鼻がとゞかない象は　水仙けさも一りんひらいた・とりとめもなく考へてゐる水仙のかほり　考へてをる水仙ほころびる　水仙ひらかうとするしづ

けさにをる・いやな夢見た朝の爪をきる　寝る前の尿する月夜ひろ／″＼　よい月夜のび／＼と尿するなり

当座の感想を書きつけておく。――恩は着なければならないが、恩に着せてはならない、恩を着せられてはやりきれない。親しまれるのはうれしいが、憐れまれてはみじめだ。与へる人のよろこびは与へられる人のさびしさとなる、もしほんたうに与へるならば、そしてほんたうに与へられるならば、能所共によろこびでなければならない。与へられたものを、与へられたまゝに味ふ、それは聖者の境涯だ。若い人には若い人の句があり、老人には老人の句があるべきである、そしてそれを貫いて流れるものは人間の真実である、句を読む人を感動せしむるものは、句を作る人の感激に外ならない。父子共に句作者であつて、そしてその句が彼等のいづれの作であるかゞ解らないやうな句を作るやうでは情ない、現今の層雲にはかういふ悲しむべき傾向がある（今月号所載、谷尾さんの苦言は肯綮に当つてゐる、私もかね／″＼さう考へてもゐたし、またしば／＼口に出して忠告もしてゐた）。

　　　自嘲一句詫手紙かいてさうして風呂へゆく

　　一月四日　曇、時雨、市中へ、泥濘の感覚！

昨日も今日も閉ぢ籠つて勉強した、暮れてから元寛居を訪ねる、腹いつぱいお正月の御馳走になつて戻つた。一本二銭の水仙が三輪開いた、日本水仙は全く日本的な草花だと思ふ、花も葉も匂ひも、すべてが単純で清楚で気品が高い、しとやかさ、したしさ、そしてうるはしさを持つてゐる、私の最も好きな草花の一つである。やうやく平静をとりもどした、誰も来ない一人の一日だつた。米と塩――それだけ与へられたら十分だ、水だけは飲まうと思へば、いつだつて飲めるのだが。

しぐれ、どこかで三味を弾いてる　水兵さんがならんでくる葉ぼたん畑　今年のお正月もお隣りのラヂオ　ひそかに蓄音機かけてしぐれる　けふも返事が来ないしぐれもやう・ひとり住んで捨てる物なし　二階ずまゐのやすけさのお粥が出来た　お正月もすんで葉ぼたんの雨となつて　さん／″＼降りつめられてひとり　ぬかるみふみゆくゆくところがない・重いもの負うて夜道を戻つて来た・戻れば水仙咲き

きつてゐる

今夜は途上でうれしい事があつた、Ｓのところから、明日の句会のために、火鉢を提げて帰る途中だつた、重いもの、どしや降り、道の凹凸に足を踏みすべらして、鼻緒が切れて困つてゐると、そこの家から、すぐと老人が糸と火箸とを持つて来て下さつた、これは小さな出来事、ちよつとした深切であるが、その意義乃至効果は大きいと思ふ、実人生は観念よりも行動である、社会的革命の理論よりも一挙手一投足の労を吝まない人情に頭が下る。……

一月五日　霧が深い、そしてナマ温かい、だん／＼晴れた。

朝湯へはいる、私に許された唯一の贅沢だ、日本人は入浴好きだが、それは保健のためでもあり、享楽でもある、殊に朝湯は趣味である、三銭の報償としては、入浴は私に有難過ぎるほどの物を与へてくれる。次郎さんから悲しい手紙が来た、次郎さんの目下の境遇としては、無理からぬことゝは思ふが、それはあまりにセンチメンタルだつた、さつそく返事をあげなければならない、そして平素の厚情に酬ゐなければならない、それにしても、彼は何といふ正直な人だらう、そして彼女は何といふ薄情な女だらう、何にしても三人の子供が可哀想だ、彼等に恵みあれ。午後はこの部屋で、三八九会第一回の句会を開催した、最初の努力でもあり娯楽でもあつた、来会者は予想通り、稀也、馬酔木、元寛の三君に過ぎなかつたけれど、水入らずの愉快な集まりだつた、句会をすましてから、汽車辨当を買つて来て晩餐会をやつた、うまかつた、私たちにふさはしい会合だつた。だいぶ酔うて街へ出た、そしてまた彼女の店へ行つた、逢つたところでどうなるのでもないが、やつぱり逢ひたくなる、男と女、私と彼女との交渉ほど妙なものはない。自転車が、どこにもあるやうに、蓄音機も、どこの家庭にもある、よく普及したものは、地下足袋、ラヂオ、等、等。

朝霧の赤いポストが立つてゐる　霧の朝日の葉ぼたんのかゞやき・おみくじひいてかへるぬかるみ　冬日ぬくう毛皮を張る　しぐれ、まいにち他人の銭を数へる　山に向つて久しぶりの大声　灯が一つあつて別れてゆく　葉ぼたん畑よい月がのぼる

一月六日　雨、何といふ薄気味の悪い暖さだらう、そして何とい

ふ陰欝な空模様だらう。

昨日は大金（今の現状では）を費つたが、今日は殆んど費はなかつた、切手三銭と湯銭三銭とだけ。隔日に粥を食べることにしてゐる、経済的には僅かしか助からないけれど、急に運動不足になつた胃のためにたいへんよろしい。次郎さんに手紙を書いた、——その心中を察して余りある事、感傷的になつては詰らない事、気持転換策として禅の本を読まれたい事、一度来訪ありたき事、等、等。苦痛のために身心を歪曲されるやうでは駄目だ、人生といふものはおのづから道が開けてくるものである、といふよりも、人間は自分自身の道を見出さずには生きられないのである。

干し物そのまゝにしてしぐれてゐる・ま夜中、熱いものをすゝる・食べるもの食べつくしてひとり　とりわけてうつくしい葉ぼたんの日ざし・ぬくい夜の赤児へ話しかけてゐる

一月七日　曇、后晴、寒くなつた、冬らしくなつた（昨日から小寒入だ）

銭がなくなつた、餅もなくなつたし米もなくなつた（銭は精確にいへば、まだ十三銭残つてゐるが）。朝は腹も空いてゐないからお茶を飲んですます、午後は屑うどんを少しばかり買つて食べる、夜は密柑の残つたのを食べる、お茶がやつぱり一等うまい。昨日も今日もアルコールなしだつた、飲みたいとも思はなかつた、私もやつとアルコールだけは揚棄することが出来らしい、そして昨日も今日も私一人だつた、訪ねてもゆかず、訪ねてくるものもなかつた、たゞ一人ぢつとして読んでゐた、考へてゐた、そして平静だつた。

・お茶でもすませる今日が暮れた・散つては咲く梅の水かへる　寒うなつて葉ぼたんうつくしい　生活の御詠歌うたふも寒いこと・音たてゝ食べる夜の人・街の雑音の密柑むく・星が寒う晴れてくるデパートの窓も・いちりんのその水仙もしぼんだ　尿する月かくす雲のはやさよ　寒月の捨犬が鳴きつゞける

一月八日　朝のうちはうらゝかな晴れだつたが、午後は曇つた。

今朝は嫌な事と嬉しい事とがあつた、その二つを相殺しても、まだ

まだ嬉しさが余りあつた、——といふのは、起きてすぐ前の畠に尿して道を横ぎらうとするところへ、まご／″＼走る自動車がやつてきた、彼は巡査だつた、私が尿したのを見たのだらう、そして恐らくは自分のまご／″＼を隠すためだらう、そこへ小便してはいかんぢやないか、といひ捨てゝいつた、私は無論何とも答へなかつた、そして彼の没常識を憐んだ、私などはなるたけ小言をいひたくないのに、彼はなるたけ小言がいひたいのだ、とうてい部長にもなれない彼だ、なぜ彼等はあんなにこせ／＼するのだらう、——嬉しい事といふのは、郷里の妹からたよりがあつたのだ、ゲルトも送つてくれたし、着物も送つてくれた、私はさつそくその着物をつけて、そのゲルトで買物しい／＼歩いた、あゝ何といふ肉縁のあたゝかさだらう！米を買つた、一升拾六銭だ、米はほんたうに安い、安すぎる、粒々辛苦、そして損々不足などゝ考へざるをえないではないか。どうも通信費には困る、毎日葉書の五六枚、手紙の二三本書かないことはない、今日は葉書六枚、手紙三本書いた。

・送つてくれたあたゝかさを着て出る（妹に）　吹いても吹いても飴が売れない鮮人の笛かよ・向きあつて知るも知らぬも濁酒を飲む（居酒屋にて）　　　　□　かきおきかいておいてさうして（述懐）

一月九日　雨、曇、晴、曇、雨。

起きると、そのまゝで木炭と豆腐とを買ひに行く、久しぶりに豆腐を味はつた、やつぱり豆腐はうまい。あんまり憂欝だから二三杯ひつかける、その元気で、彼女を訪ねて炬燵を借りる、酒くさいといつて叱られた。帰家穏坐とはいへないが、たしかに帰庵閑坐だ。昨夜も今夜も鶏が鳴きだすまで寝なかつた、寝られなかつた。

お正月の母子でうたうてくる　また降りだしてひとりである　ほころびを縫ふほどにしぐれる・縫うてくれるものがないほころび縫つてゐる

一月十日　雪が積んでゐる、まだ降つてゐる、風がふく、寒く強く。

近来にない寒さだつた、寒が一時に押し寄せたやうだつた、手拭も

葱も御飯も凍つた、窓から吹雪が吹き込んで閉口した。ありがたいことには炬燵があつた、粕汁があつた。朝湯朝酒は勿体ないなあ。今日は金比羅さんの初縁日で、おまゐりの老若男女が前の街道をぞろ／＼通る、信仰は寒さにもめげないのが尊い。隙洩る風はこの部屋をいかにも侘住居らしくする、そしてその風をこらへて、せくゞまつてゐる自分をいかにも佗人らしくする。……寒いにつけても、ルンペン時代のつらさを思ひ出さずにはゐられない。酒ほどうまいものはない、そして酒ほどにがいものはない、——酒ではさんざ苦労した、苦労しすぎた。……

雪の葉ぼたんのしゞま　さら／＼ふりつむ雪見ても　雪夜、隣室は聖書ものがたり・ヤスかヤスかサムかサムか雪雪（ふれ売一句）吹雪吹きこむ窓の下で食べる

一月十一日　曇つて晴れる、雪の後のなごやかさ。

いつものやうに、御飯を炊いて、そして汁鍋をかけておいて湯屋へ。——あんまり寒いから一杯ひつかける、流行感冒にでもかゝつてはつまらないから、といふのはやつぱり嘘だ、酒好きは何のかのといつては飲む、まあ、飲める間に飲んでおくがよからう、飲みたくても飲めない時節があるし、飲めても飲めない時節がある。……事実を曲げては無論いけない、といつて、事実に囚へられては、また、いけない（句作上に於て殊に然り）。

あるだけのものを着てあたゝかうをる・かあいらしい雪兎が解けます・豆腐屋さんがかちあつた寒い四ツ角　雪の朝の郵便も来ない　雪の夕べをつゝましう生きてゐる・逢うて戻ればぬかるみ・十分に食べて雪ふる　雪の夜半の誘惑からのがれてきた　寒空、二人連れは男と女

一月十二日　曇、陰欝そのものといつたやうな天候だ。

外は雪、内は酒——憂欝を消すものは、いや、融かすものは何か、酒、入浴、談笑、散歩、等、等、私にあつては。

雪の葉ぼたんの枯れるのか　曇り日の重いもの牽きなやむ・凍土をひた走るバスも空つぽ・雪ふる何も五十銭

夕方から熊本へ出かける（こゝも市内だけれど、感じでは出かけるのだ）、元寛さん馬酔木兄さんに逢ふ、別れて宵々さんを訪ねる、御夫婦で餅よ飯よと歓待して下さる（咄、酒がなかつた、などといふな）、私はこんなに誰もから歓待されていゝのだらうか。

一月十三日　曇、今日もまた雪でも降つて来さうな。

苦味生さんから、方向転換の手紙が来た、苦味生さんの気持は解る（苦味生さんに私の気持が解るやうに）、お互に、生きる上に於て、真面目であるならば、人間と人間とのまじはりをつゞけてゆける、めい／＼嘘のない道を辿りませう、といふ意味の返事を出しておいた。昨夜も夜明けの鶏がうたふまで眠らなかつた、いろ／＼の事――おもに、三八九の事――が気になつて寝つかれなかつたのである、私も案外、小児病的で恥づかしい。

雪もよひ、飯が焦げついた

一月十四日　曇、降りさうで降らない雪模様。しかし、とにかく、炬燵があつて粕汁があつて、そして――。

東京の林君から来信、すぐ返信を書く、お互に年をとりましたね、でもまだ色気がありますね、日暮れて途遠し、そして、さうだ、そしてまだよぼ／＼してゐますね。……先夜の吹雪で吹きとばされた綿入遂に不明、惜しい品でないだけ、それだけ考へさせる。

雪空、痒いところを掻く　雪空、いつまでも女の話で（隣室の青年達に）・雪の日の葱一把・一把一銭の根深汁です

一月十五日　晴、三寒四温といふがじつさいだ。

少々憂欝である（アルコールが切れたせいか）、憂欝なんか吐き捨てゝしまへ、米と塩と炭とがあるぢやないか。夕方からまた出かける（やつぱり人間が恋しいのだ！）、馬酔木さんを訪ねてポートワインをよばれる、それから彼女を訪ねる、今夜は珍らしく御気嫌がよろしい、裏でしよんぼり新聞を読んでゐると、地震だ、かなりひどかつたが、地震では関東大震災の卒業生だから驚かない、それがいゝ事かわるい事かは第二の問題として。けふは家主から前払間代の催促をうけたので、わざ／＼出かけたのだつたが、馬酔木さんには何としてもい

ひだせなかつた、詮方なしに、彼女に申込む、快く最初の無心を聞いてくれた、ありがたかつた、同時にいろ／＼相談をうけたが！彼女のところで、裏のおばさんの御馳走――それは、みんなが、きたないといつて捨てるさうなが――をいたゞく、老婆心切とはおばさんの贈物だらうか、みんなは何といふ罰あたりどもだらう、じつさい、私は憤慨した、奴鳴りつけてやりたいほど興奮した。今日で、熊本へ戻つてから一ヶ月目だ、あゝこの一ヶ月、私は人に知れない苦悩をなめさせられた、それもよからう、私は幸にして、苦悩の意義を体験してゐるから。

・痛む足なれば陽にあてる・人のなつかしくて餅のやけるにほひして・よう寝られた朝の葉ぼたん　雪もよひ雪とならなかつたビルデイング・何か捨てゝいつた人の寒い影・そうてまがる建物つめたし・子のために画いてゐるのは鬼らしい（馬酔木さんに）・警察署の雪はまだ残つてゐる・あんなに泣く子の父はゐないのだ

一月十六日　曇、やがて晴、あたゝかだつた。

朝、時雨亭さん桂子さんから、三八九会加入のハガキが来た、うれしかつた、一杯やりたいのをこらへて、ゆつくり食べる。……午後散歩、途中で春菊を買つて帰る、夜も散歩、とう／＼誘惑にまけて、ひつかけること濁酒一杯、焼酎一杯（それは二十銭だけれど、現今の財政では大支出だ！）。唐人街、新市街、どこを歩いても、見切品ばかりが眼について嫌になつちまう、人間がそも／＼見切だから詮方もないが、実は旧臘以来、安物ばかり買はされてきたせいだ。

・あたゝかく人を葬る仕度してゐる　晴れて遠く阿蘇がまともにまつしろ（こゝから）・凩に焼かれる魚がうごいてゐる　捨てられた梅も咲いてゐる　枯れきつてでかい樹だ・デパートのてつぺんの憂欝から下りる・星晴れてのんびりと尿する　尿してゐるあちらはヂヤズか

こゝに重大問題、いや／＼重大記録が残つてゐた、――それはかうである、――十三日は午後、三八九の趣意書を、どうしても刷りあげるつもりで出て、蔚山町の黎明社へいつた、そこは謄写刷の専門店だ、主人が留守で弟子が一人、その弟子を説きつけて刷りあげた、それを持つて、元寛君へ駈けつけて、そこで四方八方、といつても、面

識のある、好意を持つてくれさうな俳友へ配つた、実は手帖を忘れて行つたので、そんな事柄をこま／″＼と書きつけておいたのだが、……ともかく、私の生活の第一歩だけは、これできまつた訳だ、それを書き忘れてゐたのだから、私もだいぶ修行が積んだやうだ、三八九最初の、そして最大のナンセンスとでもいひたいもの如件。

　　終電車重い響を残して帰つた・星があつて男と女・霙ふる、売らなきやならない花をならべる・霙ふるポストへ投げこんだ無心状・ぬかるみをきてぬかるみをかへる

　不幸はたしかに人を反省せしめる、それが不幸の幸福だ、幸福な人はとかく躓づく、不幸はその人を立つて歩かせる！

〜〜〜

　……へんてこな一夜だつた、……酔うて彼女を訪ねた、……そして、とう／＼花園、ぢやない、野菜畑の墻を踰えてしまつた、今まで踰えないですんだのに、しかし早晩、踰える墻、踰えずにはすまされない墻だつたが、……もう仕方がない、踰えた責任を持つより外はない……それにしても女はやつぱり弱かつた。……

　　一月十七日　晴、あたゝかだつたが、私の身心は何となく寒かつた。

　帰途、薬湯に入つてコダハリを洗ひ流す、そして一杯ひつかけて、ぐつすり寝た、もとより夢は悪夢にきまつてゐる、いはゞ現実の悪夢だ。今日は一句も出来なかつた、心持が逼迫してゐては句の出来ないのが本当だ、退一歩して、回光返照の境地に入らなければ、私の句は生れない。

　　一月十八日　晴、きのふもけふもよいお天気だつた、そして私も閉ぢ籠つて読んだり書いたりした。

　夕方から散歩、ぶら／＼歩きまはる、目的意識なしに――それが遊びだ――そこに浄土がある、私の三八九がある！また逢うてまた別れる、逢ふたり別れたり、――それが世間相！　そして常住だよ。こゝの家庭はずゐぶんやゝこしい、寄合世帯ぢやないかと思ふ、爺さんはガリ／＼、婆さんはブク／＼、息子は変人、娘は足りない、等、等、

等、うるさいね。

・凩に明るく灯して母子です　凩のラヂオをり／＼きこえる　闇夜いそいで戻る馬を叱りつゝ　凩、餅がふくれあがる・のび／＼と尿してゐて咎められた

一月十九日　けふもよい晴れ、朝湯朝酒、思無邪。

朝湯の人々、すなはち、有閑階級の有閑老人もおもしろい、寒い温かい、あゝあゝあゝの欠伸。濁酒を飲む、観音像（？）を買ふ、ホウレン草を買ふ。元寛さんを訪ねて、また厚意に触れた、馬酔木さんに逢うて人間のよさに触れた。

・日向ぼつこする猫も親子　小春日、仏像を買うて戻つた　日向ぬくうしてませた児だ・餅二つ、けふのいのち　ホウレン草の一把一銭ありがたや　うらゝかにいたづらに唄うて乞うてゐる　（ルンペンに）　生きたくてドツコイシヨ唄うてあるく　巷に立つて運命を説いてる髯
有田洋行会の象をうたふ　象も痩せて鼻のばす身体うごかす　なんぼ食べても食べ足りない象はうごく　さぞ寒からう象にもフトンがない　しきりに鼻をふる象に何かやれ　鼻をさしのべる象には食べるもの　愛嬌ふりまく象はメクラだつたのか　君ヶ代吹いてオツトセイは何ともない

一月廿日　うらゝか、今日の昨日を考へる、微苦笑する外はない。

すまなかつた、寥平さんにも、彼女にも、私自身にも、――しかし、脱線したのぢやない、それだけまた心苦しい。苦味生さんから来信、あたゝかい、あたゝかすぎる、さつそく返信、そして寝る、悪夢はくるなよ。自分が見え坊だつたことに気付いて、また微苦笑する外なかつた、といふのは、私は先頃より頭部から顔面へかけて痒いものが出来て困つてゐる、それへテイリユウ膏を塗布するのだが、見えない部分よりも見える部分――自分からも他人からも――へ兎角たび／＼塗布する。……

風の音にも何やかや　　□・大空晴れわたり死骸の沈黙　木

枯やぼう／＼としてゐる

　　一月廿一日　晴れたり曇つたり、大寒入だといふのに温かいことだ。

　今日は昼も夜も階下の夫婦が喧嘩しつゞけてゐる、こゝも人里、塵多し、全く塵が多過ぎます、勿論、私自身も塵だらけだよ。

　よろめくや寒空ふけて電燈のひかりにうかぶや葉ぼたんひとり住むことにもなれてあたゝかく

　　一月廿二日　雨、憂欝な平静。

　稀也さんから突然、岡山へ転任するといふ通知があつたので、逓信局に元、馬の二君を訪ねて、送別句会の打合をする。途上で少しばかり飲んだ、最初は酒、そして焼酎、最後にまた酒！　何といつても酒がうまい、酔心地がよい、焼酎はうまくない、うまくない焼酎を飲むのは経済的だからだ、酔ひたいからだ、同じ貨幣で、酒はうまいけれど焼酎は酔へるからだ、飲むことが味ふことであるのは理想だ、飲むうちに味ふほどに酔うてくるなら申分ないけれど、それは私の現状が許さない、だから、好きでもない焼酎を飲む、眼をつぶつて、息もしないやうにして、ぐつと呻るのである、みじめだとは自分でも知つてゐる、此辺の消息は酒飲みの酒好きでないと解らない、酒を飲むのに目的意識があつては嘘だが、目的意識がなくならないから焼酎を飲むのである。……

　夫婦で洗ふ赤児がおとなしい夫婦喧嘩もいつしかやんだ寒の月夕ぐれのどの家も子供だらけだ酔うほどは買へない酒をすゝるのか

　　一月廿三日　雨、曇、何といふ気まぐれ日和だらう。

　夜、元寛居で、稀也送別句会を開く、稀也さんは、いかにも世間慣れた（世間摺れたとは違ふ）好紳士だつた、別れるのは悲しいが、それが人生だ、よく飲んでよく話した。

　　冷やかに明けてくる霽れてくる・出来そこなひの飯たべて今日を逝かせる　寒空、別れなければならない　恋猫の声も別れか　寒い星空の下で別れる・重荷おもくて唄うたふ・ひとりにはなりきれない空

を見あげる　あたゝかく店の鶯がもう啼いて　よいお天気の山芋売かな　畑は月夜の葉ぼたんに尿する

　稀也さんに、元寛さんへも馬酔木さんへも木葉猿をげる、そして稀也さんも私も酔ふた、酔うて別れて思ひ残すことなし、よい別れだつた。裏のおばさんに『あたゝかいですね』といふと『ワクドウが水にはいつたから』と答へる、熊本の老人は誰でもさういふ、ワクドウ（蟇の方言である）が水にはいる（産卵のためである）、だから暖かいと理窟である、ワクドウが水に入つたから暖かいのでなくて、暖かいからワクドウが水に入るのだから、原因結果を取違へてゐるのだが、考へやうによつては、面白くないこともない、私たちはいつもしば／＼かういふ錯誤をくりかへしつゝあるではないか。

　　一月廿四日　うらゝかだつた、うらゝかでないのは私と彼女との仲だつた。

　米の安さ、野菜の安さ、人間の生命も安くなつたらしい。朝湯のこゝろよさ、それを二重にする朝酒のうまさ。

　　一月廿五日　また雨。

　午後、稀也さんを見送るべく熊本駅まで出かけたが、どうしても見出せなかつた、新聞を読んで帰つてくると、間もなく馬酔木さんが来訪、続いて元寛さんも来訪、うどんを食べて、同道して出かける、やうやくにして鑪板を買つて貰つた（今夜もまた元寛君のホントウのシンセツに触れた）。

　　また降りだしてひとり・ぬかるみ、こゝろ触れあうてゆく

　　一月廿六日　雨、終日終夜、鉛筆を走らせる。

　　凩の葉ぼたんのかゞやかに・いちにちいちりんの水仙ひらく

　　一月廿七日　晴れて寒い。

　一杯やりたいが、湯銭さへもない。

　・握りしめるその手のヒビだらけ　暮れて寒い土を掘る寒い人　けふも出来そこなひの飯で寒い

一月廿八日　晴、霜、ありがたい手紙が来た、来た、来た。

やつと謄写刷が出来た、元寛居を訪ねて喜んで貰ふ、納本、発送、うれしい忙しさ。入浴して煙草を買ふ、一杯ひつかける。……生きるとは味ふことだ、物そのものを味ふとき生き甲斐を感じる、味ふことの出来ないのが不幸の人だ。鰯三百目十銭、十四尾あつたから一尾が七厘、何と安い、そして何と肥えた鰯だらう。

一月廿九日　降つて曇つて暖かい、すつかり春だ。

犬を洗つてやる爺さん婆さんの日向・鶏を殺して鶏臭い手を清めてゐる

夕方、三八九第一集を持つて寥平さんを訪ねる、例の如く飲む、最初は或る蕎麦屋で、しかしそこはヱロ味ぷん／＼だから、さらに一日本店で飲み直す、そして最後はタクシーで送られる。寥平居で、重錘時計といふものを見た、床しい印籠も見た、そして逢へば飲み、飲めば酔ふた次第である。

一月三十日

宿酔日和、彼女の厄介になる、不平をいはれ、小言をいたゞく、仕方ない。夜は茂森さんを訪ねる、そして友情にあまやかされる。

一月三十一日

やつぱり独りがよい。

女の話はなしつゞけて袋貼りつゞける　（隣室の若者に）　袋貼り貼り若さを逃がす・ラジオ声高う寒夜へ話しかけてゐる

二月一日　降つたり霽れたり、夜はおぼろ月がうつくしかつた。

三八九第一集を発送して、重荷を下ろしたやうに、ほつとしたことである、心も軽く身も軽くだ。今日もまた苦味生さんの真情に触れた。

・笛を吹いても踊らない子供らだ・あるだけの米を炊いて置く　競るほどに売るほどに暮れた・逢ふまへのたんぽゝ咲いてゐる　一杯や

りたい夕焼空

俳句は一生の道草とはおもしろい言葉かな。

二月二日　また雨、何といふ嫌らしい雨だらう。

私も人並に風邪気味になつてゐる。

更けてやつと出来た御飯が半熟

ゲルトが手にいつたので、何よりもまづ米を、炭を、そして醤油を買つた（空気がタダなのはほんたうに有難いことだ）。

二月三日　曇、よく眠られた朝の快さ。

生きるも死ぬるも仏の心、ゆくもかへるも仏の心。不思議な暖かさである、『寒の春』といふ造語が必要だ、気味の悪い暖かさでもある。

・こゝに住みなれてヒビアカギレ・つゝましう存らへてあたゝかい飯・豆腐屋の笛で夕餉にする　日の落ちる方へ尿してゐる

馬酔木居を訪ねてビールの御馳走になる、私は至るところで、そしてあらゆる人から恵まれてゐる、それがうれしくもあればさびしくもある。子供はお宝、オタカラ／＼といふてあやしてゐる。

二月四日　雨、節分、寒明け。

ひとりで、しづかで、きらくで。

・ひとりはなれてぬかるみをふむ

二月五日　まだ降つてゐる、春雨のやうな、また五月雨のやうな。

毎日、うれしい手紙がくる。雨風の一人、泥濘の一人、幸福の一人、寂静の一人だつた。

・雨のおみくじも凶か　凩、書きつゞけてゐる・ひとりの火おこす

味取在住時代　三句久しぶりに掃く垣根の花が咲いてゐるけふも托鉢、こゝもかしこも花ざかりねむり深い村を見おろし尿する

追加一句松はみな枝たれて南無観世音（味取観音堂の耕畝として）　　行乞途上旅法衣ふきまくる風にまかす

第8章
行乞記　03 (新字旧仮名)

　死をまへの木の葉そよぐなり陽を吸ふ死ぬる夜の雪ふりつもる生死のなかの雪ふりしきる

　十二月廿二日　晴、汽車で五里、味取、星子宅。

　私はまた旅に出た。——『私はまた草鞋を穿かなければならなくなりました、旅から旅へ旅しつゞける外ない私でありました』と親しい人々に書いた。山鹿まで切符を買うたが、途中、味取に下車してＨさんＧさんを訪ねる、いつもかはらぬ人々のなさけが身にしみた。Ｓさんの言葉、Ｇさんの酒盃、Ｋ上座の熱風呂、和尚さんの足袋、……すべてが有難かつた。積る話に夜を更かして、少し興奮して、観音堂の明けの鐘がなるまで寝つかれなかつた。

　十二月廿三日　晴、冬至、汽車で三里、山鹿、柳川屋（三〇・中）

　九時の汽車で山鹿まで、二時間ばかり行乞する、一年ぶりの行乞なので、何だか調子が悪い、途上ひよつこりＳ兄に逢ふ、うどんの御馳走になり、お布施を戴く。一杯ひつかけて入浴、同宿の女テキヤさんはなか／＼面白い人柄だつた、いろ／＼話し合つてゐるうちに、私もいよ／＼世間師になつたわいと痛感した。

　十二月廿四日　晴、徒歩八里、福島、中尾屋（二〇・上）

　八時過ぎて出立、途中ところ／″＼行乞しつゝ、漸く県界を越した、暫らく歩かなかつたので、さすがに、足が痛い。山鹿の宿も此宿も悪くない、二十銭か三十銭でこれだけ待遇されては勿体ないやうな気がする。同宿の坊さん、籠屋のお内儀さん、週旋屋さん、女の浪速節語りさん、みんなとり／″＼に人間味たつぷりだ。

十二月廿五日　曇、雨、徒歩三里、久留米、三池屋（二五・中）

昨夜は雪だつた、山の雪がきら／＼光つて旅人を寂しがらせる、思ひだしたやうに霙が降る。気はすゝまないけれど十一時から一時まで行乞、それから、泥濘の中を久留米へ。今夜の宿も悪くない、火鉢を囲んで与太話に興じる、痴話喧嘩やら酔つぱらひやら、いやはや賑やかな事だ。

十二月廿六日　晴、徒歩六里、二日市、和多屋（二五・中）

気分も重く足も重い、ぼとり／＼歩いて、こゝへ着いたのは夕暮だつた、今更のやうに身心の衰弱を感じる、仏罰人罰、誰を怨むでもない、自分の愚劣に泣け、泣け。此宿もよい、宿には恵まれてゐるとでもいふのだらうか、一室一燈を一人で占めて、寝ても覚めても自由だ。途中の行乞は辛かつた、時々憂欝になつた、こんなことでどうすると、自分で自分を叱るけれど、どうしようもない身心となつてしまつた。禅関策進を読む、読むだけが、そして飲むだけがまだ残つてゐる。毎日赤字が続いた、もう明日一日の生命だ、乞食して存らへるか、舌を噛んで地獄へ行くか。……こゝは坊主枕なのがうれしい、莫座枕は呪はれてあれ！　こんな一些事がどんなに孤独の旅人を動かすかは、とても第三者には解りつこない。床をならべた遍路さんから、神戸の事、大阪の事、京都の事、名古屋の事、等、等を教へられる、いゝ人だつた、彼は私の『忘れられない人々』の一人となつた。

十二月廿七日　晴后雨、市街行乞、大宰府参拝、同前。

九時から三時まで行乞、赤字がさうさせたのだ、随つて行乞相のよくないのはやむをえない、職業的だから。……大宰府天満宮の印象としては樟の老樹ぐらいだらう、さん／″＼雨に濡れて参拝して帰宿した。宿の娘さん、親類の娘さん、若い行商人さん、近所の若衆さんが集つて、歌かるたをやつてゐる、すつかりお正月気分だ、フレーフレー青春、下世話でいへば若い時は二度ない、出来るだけ若さをエンヂヨイしたまへ。

十二月廿八日　晴、汽車で四里、酒壺洞居。

九時の汽車で博多へ、すぐ市役所に酒君を訪ねたが、忙しいので、

後刻を約して市街を行乞する。今夜はよく飲んだ、自分でも呆れるほどだつた、しかし酔つたいきほひで書きまくつた、酒君はよく飲ませてもくれるけれど、よく書かせもする。市は市のやうにハジキが多い、十軒に一軒、十人に一人ぐらゐしか戴けない、ありがたかつたのは、途上で、中年婦人から五銭白銅貨を一つ、田舎者らしい人から一銭銅貨を三枚喜捨せられた事だつた。この矛盾をどうしよう、どうしようもないといつてはもう生きてゐられなくなつた、この旅で、私は身心共に一切を清算しなければならない、そして老慈師の垂誨のやうに、正直と横着とが自由自在に使へるやうにならなければならない。あゝ酒、酒、酒、酒ゆえに生きても来たが、こんなにもなつた、酒は悪魔か仏か、毒か薬か。

　十二月廿九日　曇、時雨、四里、二日市、和多屋。

　十時、電車通で別れる、昨夜飲み過ぎたので、何となく憂欝だ、どうせ行乞は出来さうもないから、電車をやめて歩く、俊和尚上洛中と聞いたので、冷水越えして緑平居へ向ふつもり、時々思ひだしたやうに行乞しては歩く。武蔵温泉に浸つた、温泉はほんたうにいゝ、私はどうでも温泉所在地に草庵を結びたい。

　十二月卅日　晴れたり曇つたり、徒歩七里、長尾駅前の後藤屋に泊る、木賃二十五銭、しづかで、しんせつで、うれしかつた、躊躇なく特上の印をつける。

　早朝、地下足袋を穿いて急ぎ歩く、山家、内野、長尾といふやうな田舎街を行乞する、冷水峠は長かつた、久しぶりに山路を歩いたので身心がさつぱりした、こゝへ着いたのは四時、さつそく豆田炭坑の湯に入れて貰つた。山の中はいゝなあ、水の音も、枯草の色も、小鳥の声も何も彼も。——このあたりはもうさすがに炭坑町らしい。夫婦で、子供と犬とみんないつしよに車をひつぱつて行商してゐるのを見た、おもしろいなあ。何といふ酒のうまさ、呪はれてあれ。持つてゐるだけの端書を書く、今の私には、俳友の中の俳友にしか音信したくない。

　十二月卅一日　快晴、飯塚町行乞、往復四里、宿は同前。

昨日は寒かつたが今日は温かい、一寒一温、それが取りも直さず人生そのものだ。行乞相も行乞果もあまりよくなかつた、恥づべし／＼。昨夜は優遇されたので、つい飲み過ごしたから、今夜は慎しんで、落ちついて読書した。此宿は本当にいゝ、かういふ宿で新年を迎へることが出来るのは有難い。『年暮れぬ笠きて草鞋はきながら』まつたくその通りだ、おだやかに沈みゆく太陽を見送りながら、私は自然に合掌した、私の一生は終つたのだ、さうだ来年からは新らしい人間として新らしい生活を初めるのである。

　　ここに落ちついて夕顔や・雨の二階の女の一人は口笛をふく　　　　□・ふるさとを去るけさの鬚を剃る・ずんぶり浸るふる郷の温泉で・星へおわかれの息を吐く・どこやらで鴉なく道は遠い・旅人は鴉に啼かれ・旅は寒い生徒がお辞儀してくれる・旅から旅へ山山の雪・身にちかく山の鴉の来ては啼く　　　熊本県界・こゝからは筑紫路の枯草山　　　自嘲・うしろ姿のしぐれてゆくか　　　大宰府三句　しぐれて反橋二つ渡る・右近の橘の実のしぐるゝや・大樟も私も犬もしぐれつゝ　　　　□・ふるさと恋しいぬかるみをあるく・街は師走の売りたい鯉を泳がせて　　　酒壺洞房・幼い靨で話しかけるよ　　　　□・師走のゆきゝの知らない顔ばかり・しぐれて犬はからだ舐めてゐる　　　　□・越えてゆく山また山は冬の山・枯草に寝ころぶやからだ一つ

　　　　　　　　×　　　×　　　×まづ何よりも酒をつゝしむべし、二合をよしとすれども、三合までは許さるべし、シヨウチユウ、ジンなどはのむべからず、ほろ／＼としてねるがよろし。いつも懺悔文をとなふべし、四弘誓願を忘るべからず。——

我昔所造諸惑業　　皆由無始貪慎痴従身口意之所生　　一切我今皆懺悔

衆生無辺誓願度　　煩悩無尽誓願断法門無量誓願学　　仏道無上誓願成

一切我今皆懺悔——煩悩無尽誓願断——

一月一日　時雨、宿はおなじく豆田の後藤といふ家で。

・水音の、新年が来た

何としづかな、あまりにしづかな元旦だつたらう、それでも一杯ひつかけてお雑煮も食べた。申の歳、熊本の事を思ひだす、木の葉猿。宿の子供にお年玉を少しばかりやつた、そして鯉を一尾家の人々におごつた。嚢中自無銭、五厘銅貨があるばかり。酒壺洞文庫から借りてきた京洛小品を読む、井師の一面がよく出てゐる、井師に親しく面したやうな気持がした。飲んで寝て食べて、読んで考へて、そして何にもならない新年だつたが、それでよろしい。私が欣求してやまないのは、悠々として迫らない心である、渾然として自他を絶した境である、その根源は信念であり、その表現が句である、歩いて、歩いて、そこまで歩かなければならないのである。

一月二日　時雨、行程六里、糸田、緑平居。

今日は逢へる――このよろこびが私の身心を軽くする、天道町（おもしろい地名だ）を行乞し、飯塚を横ぎり、鳥尾峠を越えて、三時にはもう、冬木の坂の上の玄関に草鞋をぬいだ。この地方は旧暦で正月をする、ところ／″＼に注連が張つてあつて国旗がひら／＼するぐらゐ、しかし緑平居に於ける私はすつかりお正月気分だ。

風にめさめて水をさがす（昨夜の句）

自戒三則――

一、腹を立てないこと二、嘘をいはないこと三、物を無駄にしないこと（酒を粗末にするなかれ！）

今日は、午前は冬、午後は春だつた。

一月三日　晴曇さだめなし、緑平居。

終日閑談、酒あり句あり、ラヂオもありて申分なし。

　ボタ山の間から昇る日だ・ラヂオでつながつて故郷の唄

香春岳は見飽かぬ山だ、特殊なものを持つてゐる、山容にも山色にも、また伝説にも。

一月四日　晴、行程わづかに一里、金田、橋元屋（二五・上）

朝酒に酔つぱらつて、いちにち土手草に寝そべつてゐた、風があたゝかくて、気がのび／＼とした。夜もぐつすり寝た。此宿の食事はボクチンにはめづらしいものだつた。

一月五日　晴、行程九里、赤間町、小倉屋（三〇・中）

歩いた、歩いて、歩いて、とう／＼こゝまで来た、無論行乞なんかしない、こんなにお天気がよくて、そして親しい人々と別れて来て、どうして行乞なんか出来るものか、少しセンチになる、水をのんでも涙ぐましいやうな気持になつた。

一月六日　晴、行程三里、神湊、隣船寺。

赤間町一時間、東郷町一時間行乞、それから水にそうて宗像神社へ参拝、こんなところにこんな官幣大社があることを知らない人が多い。神木楢、石牌無量寿仏、木彫石彫の狛犬はよかつた。水といつしよに歩いてゐさへすれば、おのづから神湊へ出た、俊和尚を訪ねる、不在、奥さんもお留守、それでもあがりこんで女中さん相手に話してゐるうちに奥さんだけは帰つて来られた、遠慮なく泊る。

・蘭竹もかれ／″＼に住んでゐる　咲き残つたバラの赤さである・つきあたつて墓場をぬけ

一月七日　時雨、休養、潜龍窟に蛇が泊つたのだ。

雨は降るし、足は痛いし（どうも脚気らしい）、勧められるまゝに休養する、遊んでゐて、食べさせていたゞいて、しかも酒まで飲んでは、ほんたうに勿躰ないことだ。

・松のお寺のしぐれとなつて・遠く近く波音のしぐれてくる

一月八日　雪、行程六里、芦屋町　　　（三〇・下）

ぢつとしてゐられなくて、俊和尚帰山まで行乞するつもりで出かける、さすがにこのあたりの松原はうつくしい、最も日本的な風景だ。今日はだいぶ寒かつた、一昨六日が小寒の入、寒くなければ嘘だが、雪と波しぶきとをまともにうけて歩くのは、行脚らしすぎる。

・木の葉に笠に音たてゝ霰・鉄鉢の中へも霰

こゝの湯銭三銭は高い、神湊の弐銭があたりまへだらう、しかし何といつても、入浴ほど安くて嬉しいものはない、私はいつも温泉地に隠遁したいと念じてゐる、そしてそれが実現しさうである、万歳！この宿もよくない、ボクチンには驚ろくほどのちがひがある、すまないと思ふほど優遇してくれるところもあれば、木石かと思ふほど冷遇するところもある、ボクチンのいゝところは、独善主義でやりぬけるところだらう。同宿の二人の朝鮮人のうち、老鮮人は風采も態度もすべて朝鮮人的で好きだつた、どうぞ彼の筆が売れるやうに。もう一人の同宿者もおもしろかつた、善良な世間師だつた、相当に物事を知つてる人だつた、早くから床を並べて話し続けた。途上で、連歌俳句研究所、何々庵何々、入門随意といふ看板を見た、現代には珍らしいものだ。

一月九日　曇、小雪、冷たい、四里、鐘ヶ崎、石橋屋（中）

とにかく右脚の関節が痛い、神経痛らしい、嫌々で行乞、雪、風、不景気、それでも食べて泊るだけはいたゞきました。今日の行乞相はよかつたけれど、それでも／＼時々よくなかつた、随流去！　それの体現まで行かなければ駄目だ。此宿はわるくない、同宿三人、めい／＼勝手な事を話しつゞける、政変についても話すのだから愉快だ。

・暮れて松風の宿に草鞋ぬぐ

同宿のとぎやさんから長講一席を聞かされる、政治について経済について、そして政友民政両党の是非について、——彼は又、発明狂らしかつた、携帯煽風器を作るのだといつて、妙なゼンマイをいぢくつたり図面を取りちらしたりしてゐた、専売特許を得て成金になるのだといつて逆上気味だつた、彼に反して同宿の薬屋さんはムツツリヤだつた、彼は世間師同志の挨拶さへしなかつた。昨夜はちゞこまつて寝たが、今夜はのび／＼と手足を伸ばすことが出来た、『蒲団短かく夜は長し』。此頃また朝魔羅が立つやうになつた、『朝、チンポの立たないやうなものに金を貸すな』、これも名言だ。人生五十年、その五十年の回顧、長いやうで短かく、短かいやうで長かつた、死にたくても死ねなかつた、アルコールの奴隷でもあり、悔恨の連続でもあつた、そして今は！

一月十日　晴、二里、散策、神湊、隣船寺。

一月十一日　晴、歩いたり乗つたりして十里、志免、富好庵。

一月十二日　雨后晴、足と車とで十余里、姪ノ浜、熊本屋。

此三日間の記事は別に書く。

・朝から泣く児に霰がふつてきた・寒い空のボタ山よさようなら（志免）　福寿草を陽にあてゝ縫うてゐられた（千鶴女居）

一月十三日　曇つて寒かつた、霙、姪ノ浜、熊本屋（二五・中）

東油山観世音寺（九州西国第三十番）拝登。

・けふは霰にたたかれて

今日は行乞は殆んど出来なかつた、近道を教へられて、それがために却つて遠道をしたりして一層労れた。お山の水はほんたうにおいしかつた、岩の上から、そして樋をあふれる水、それにそのまゝ口づけて腹いつぱいに二度も三度も頂戴した。野芥（ノケと読む）といふ部落があつた、珍しい地名。同宿は女の油売、老いた研屋、共に熊本県人、そして宿は屋号が示すやうに熊本県人だ、お互に熊本の事を話し合つて興じた。

一月十四日　曇、風が寒い、二里歩く、今宿、油屋（中・二五）

もう財布には一銭銅貨が二つしか残つてゐない（もつとも外に五厘銅貨十銭ばかりないこともないが）、今日からは嫌でも応でも本気で一生懸命に行乞しなければならないのである。午前は姪ノ浜行乞（此地名も珍らしい）午後は生きの松原、青木松原を歩いて今宿まで、そして三時過ぎまで行乞する、このあたりには元寇防塁の趾跡がある、白波が押し寄せて松風が吹くばかり。途中、長垂寺といふ景勝の立札があつたけれど、拝登しなかつた、山からの酒造用水を飲ませて貰つたがうまかつた、たゞしちつとも酔はなかつた！俳友に別れ、歓待から去つて、何となく淋しいので、少々焼酎を飲み過ぎたやうだ、酒は三合、焼酎ならば一合以下の掟を守るべきである。同宿の老遍路さん、しんせつで、ていねいで、昔を思はせるものがあつた。若い支那行商人、元気がよい、そして始末屋だ、きつと金を貯めるだらう（朝

鮮人は日本人に似てゐて、酒を飲んだり喧嘩をしたりするが、支那人は決して無駄費ひしない、時に集つて団子を拵らへて食べ合ふ位だ）。いかけやさん、とぎやさんと遅くまで話す、無駄話は悪くない（いかけやさん、とぎやさんで飲まないものはない）。長崎では、家屋敷よりも墓の方が入質価値があるといふ、墓を流したものはないさうな、それだけ長崎人の信心を現はしてゐる。

一月十五日　曇、上り下り七里、赤坂、末松屋（二五・中）

雷山千如寺拝登、九州西国二十九番の霊場。

・山寺の山柿のうれたまゝ

今日は近頃になく労れた、お山でお通夜を阻まれ、前原で宿を断はられ、とう／＼こゝまで重い足を曳きずつて来た、来た甲斐はあつた、よい宿だつた、同宿者も好人物だつた、たとへ桶風呂でも湯もあつたし、賄も悪くなかつた、火鉢を囲んで雑談がはづんだ、モンキの話（猿）長虫の話（蛇）等、等の縁起話は面白かつた。雷山の水もよかつたが、油山には及ばなかつた、この宿の水はよい、岩の中から湧いてくるのださうな。先日来、御馳走責で腹工合が悪かつたが、アルコールをつゝしみ水を飲み、歩いたので、殆んどよくなつた、健康——肉体の丈夫なのが私には第一だ、まことに『からだ一つ』である、その一つを時々持て余すが。

一月十六日　雨后晴、寒風、宿は同前（二五・中）

雨だ、風だ、といつてぢつとしてゐるほどの余裕はない、十時頃から前原町まで出かけて三時頃まで専念に行乞する、一風呂浴びて一杯ひつかける。句稿を整理して井師へ送る、一年振の俳句ともいへる、送句ともいへる、とにかく井師の言のやうに、私は旅に出てゐなければ句は出来ないのかも知れない。前原も田舎町だ、本通の新道は広々としてゐるけれど、自動車々庫がヤタラに多い、しかし今日の行乞相は上出来だつた、所得も悪くなかつた。朝も夜も、面白い話ばかりだ、——女になつて子を生んだ夢の話、をとこ女の話、今は昔、米が四銭で酒が八銭の話。……

・いつまで旅する爪をきる

一月十七日　また雨、行程二里、深江、久保屋（二五・上）

世間師は晩飯を極楽飯、朝飯を地獄飯といふ、私も朝飯を食べた以上、安閑としてゐることは出来ない、合羽を着て笠を傾けて雨の中へ飛び出す、加布里、片山といふやうな部落を行乞して宿に着いたのは三時過ぎだつた、深江といふ浦町はさびしいけれど気に入つたところである、傾いた家並も、しんみりとしてゐる松原もよかつた、酒一合、燗をしてくれて九銭、大根漬の一片も添へてくれた。此宿は新らしくて掃除も行き届いてゐる、気持よく滞在出来るのだが、憾むらくはゲルトがない（殊に同宿の煩はしさがないのがうれしい）。私たちは『一日不作一日不食』でなくて『食べたら働かなければならない』である、今日の雨中行乞などは、まさにそれだ（働かなければ食へないのはホントウだ、働らいても食へないのはウソだ）。よく降る雨だ、世間師泣かせの雨だ、しかし、雨の音はわるくない、ぢつと雨を聴いてゐると、しぜんに落ちついてくる、自他の長短が解りすぎるほど解る。此宿はほんたうによい、部屋もよく夜具もよく賄もよい、これだけの待遇をして二十五銭とは、ほんたうによすぎる。途中、浜窪といふ遊覧地を通つた、海と山とが程よく調和して、別荘や料理屋を建てさせてゐる、規模が小さいだけ、ちんまりと纒まつてゐる。一坊寺といふ姓があつた、加布里といふ地名と共に珍らしいものである。また不眠症にかゝつた、一時が鳴つても寝つかれない、しようことなしに、まとまらないで忘れかけてゐた句をまとめる。――

・道が分れて梅が咲いてゐる・沿うて下る枯葦の濁り江となり　　古風一句　たゞにしぐれて柑子おちたるまゝならん（追想）

一月十八日　晴、行程四里（佐賀県）浜崎町、栄屋（二五・中）

霜、あたゝかい日だつた、九時から十一時まで深江行乞、それから、ところ／″＼行乞しつゝ、ぶら／＼歩く、やうやく肥前に入つた、宿についたのは五時前。福岡佐賀の県界を越えた時は多少の感慨があつた、そこには波が寄せてゐた、山から水が流れ落ちてゐた、自然そのものに変りはないが、人心には思ひめぐらすものがある。筑前の海岸は松原つゞきだ、今日も松原のうつくしさを味はつた、文字通りの白砂青松だ。左は山、右は海、その一筋道を旅人は行く、動き易い心

を恥ぢる。松の切株に腰をかけて一服やつてゐると、女のボテフリがきて『お魚はいりませんか』深切か皮肉か、とにかく旅中の一興だ。在国寺といふ姓、大入といふ地名、そして村の共同風呂もおもしろい。此宿は悪くないけれど、うるさいところがある、新宿だけにフトンが軽くて軟かで暖かだつた（一枚しかくれないが）。いつぞや途上で話し合つた若い大黒さんと同宿になつた、世の中は広いやうでも狭い、またどこかで出くわすことだらう、彼には愛すべきものが残つてゐる、彼は浪花節屋なのだ、同宿者の需めに応じて一席どなつた、芸題はジゴマのお清！一年ぶりに頭を剃つてさつぱりした、坊主にはやつぱり坊主頭がよい、床屋のおかみさんが、ほんたうに久しぶりに頭を剃りました、あなたの頭は剃りよいといつてくれた。

・波音の県界を跨ぐ

落つればおなじ谷川の水、水の流るるまゝに流れたまへ、かしこ。

一月十九日　曇、行程二里、唐津市、梅屋（三〇・中）

午前中は浜崎町行乞、午後は虹の松原を散歩した、領巾振山は見たゞけで沢山らしかつた、情熱の彼女を想ふ。唐津といふところは、今年、飯塚と共に市制をしいたのだが、より多く落ちつきを持つてゐるのは城下町だからだらう。松原の茶店はいゝね、薬罐からは湯気がふいてゐる、娘さんは裁縫してゐる、松風、波音。……受けとつてはならない一銭をいたゞいたやうに、受けとらなければならない一銭をいたゞかなかつた。江雲流水、雲のゆく如く水の流れるやうであれ。

・初誕生のよいうんこしたとあたゝめてゐる・松に腰かけて松を観る・松風のよい家ではじかれた

此宿はおちついてよろしい、修行者は泊らないらしい、また泊めないらしい、しかし高い割合にはよくない、今夜は少し酔ふほど飲んだ、焼酎一合、酒二合、それで到彼岸だからめでたし／＼。虹の松原はさすがにうつくしいと思つた、私は笠をぬいで、鉄鉢をしまつて、あちらこちら歩きまはつた、そして松――松は梅が孤立的に味はゝれるものに対して群団的に観るべきものだらう――を満喫した。げにもアルコール大明神の霊験はいやちこだつた、ぐつすり寝て、先日来の

不眠をとりかへした。

一月廿日　曇、唐津市街行乞、宿は同前。

九時過ぎから三時頃まで行乞、今日の行乞は気分も所得もよかつた、しみ／″＼仏陀の慈蔭を思ふ。こゝの名物の一つとして松露饅頭といふのがある、名物にうまいものなしといふが、うまさうに見える（食べないから）、そしてその本家とか元祖とかいふのが方々にある。小鰯を買つて一杯やつた、文字通り一杯だけ、昨夜の今夜だから。

・けふのおひるは水ばかり・山へ空へ摩訶般若波羅密多心経

晩食後、同宿の鍋屋さんに誘はれて、唐津座へ行く、最初の市議選挙演説会である、私が政談演説といふものを聴いたのは、これが最初だといつてもよからう、何しろ物好きには違ひない、五銭の下足料を払つて十一時過ぎまで謹聴したのだから。

一月廿一日　曇、いよ／＼雨が近いことを思はせる。

貯へを持たないルンペンだから、ぢつとしてはゐられない、九時半から三時半まで行乞。近松寺に参拝した、巣林子に由緒あることはいふまでもない、その墓域がある、記念堂の計画もある、小笠原家の菩提所でもある、また曽呂利新左衛門が築造したといふ舞鶴園がある、こぢんまりとした気持のよいお庭だつた。今日は市議選挙の日、そして第六十議会解散の日、市街至るところ号外の鈴が響く。唐津といふ街は狭くて長い街だ。おいしい夕飯だつた、ヌタがおいしかつた、酒のおいしさは書き添へるまでもあるまい。この宿はしづかできれいであかるくていゝ、おそくまで読書した、久しぶりにおちついて読んだ訳である。毎日、彼等から幾度か不快を与へられる、恐らくは私も同時に彼等に不快を与へるのだらう――それは何故か――彼等の生活に矛盾があるやうに、私の生活に矛盾があるからだ、私としては、当面の私としては、供養を受ける資格なくして供養を受ける、――これが第一の矛盾だ！――酒は涙か溜息か、――たしかに溜息だよ。

一月廿二日　晴、あたゝかい、行程一里、佐志、浜屋（二五・上）

誰もが予想した雨が青空となつた、とにかくお天気ならば世間師は

助かる、同宿のお誓願寺さんと別れて南無観世音菩薩。……こゝで泊る、唐津市外、松浦潟の一部である、このつぎは唐房——此地名は意味ふかい——それから、湊へ、呼子町へ、可部町へ、名護屋へ。唐津行乞のついでに、浄泰寺の安田作兵衛を弔ふ、感じはよろしくない、坊主の堕落だ。唐津局で留置の郵便物をうけとる、緑平老、酒壺洞君の厚情に感激する、私は——旅の山頭火は——友情によつて、友情のみによつて生きてゐる。行乞流転してゐるうちに、よく普及してゐるのは、いひかへれば、よく行きわたつてゐるのは、——自転車、ゴム靴（地下足袋をふくむ）そして新聞紙、新聞紙の努力はすばらしい。松浦潟の一角で泊つた、そして見て歩いた、悪くはないが、何だかうるさい。此宿はよい、私が旅人としての第六感もずゐぶん鋭くなつたらしい、行乞六感！よい宿だと喜んでゐたら、妙な男が飛び込んで来て、折角の気分をメチヤ／＼にしてしまつた、あんまりうるさいから奴鳴つてやつたら、だいぶおとなしくなつた。緑平老の肝入、井師の深切、俳友諸君の厚情によつて、山頭火第一句集が出来上るらしい、それによつて山頭火も立願寺あたりに草庵を結ぶことが出来るだらう、そして行乞によつて米代を、三八九によつて酒代を与へられるだらう、山頭火よ、お前は句に生きるより外ない男だ、句を離れてお前は存在しないのだ！昨夜はわざと飲み過した、焼酎一杯が特にこたへた、そしてぐつすり寝ることが出来た、私のやうな旅人に睡眠不足は命取りだ、アルコールはカルモチンよりも利く。

　一月廿三日　雨后晴、泥中行乞、呼子町、松浦屋（三〇・中）

　波の音と雨の音と、そして同宿のキ印老人の声で眼覚める、昨夜はアル注入のおかげで、ぐつすり寝たので、身心共に爽やかだ。とう／＼雨になつたが、休養するだけの余裕はないので、合羽を着て八時過ぎ出立する、呼子町まで二里半、十一時に着いて二時半まで行乞、行乞相もよかつたが、所得もよかつた。呼子は松浦十勝の随一だらう、人も景もいゝ感じを与へる、そしてこの宿もいゝ、明日も滞在するつもりで、少しばかり洗濯をする。晴れて温かくなつた、大寒だといふのに、このうらゝかさだ、麦が伸びて豌豆の花が咲く陽気だ。私でも——私の行乞でも何かに役立つことを知つた、たとへば、私の姿を見、私の声を聞くと、泣く児が泣くことをやめる！中流以上の仕舞う

た屋で、主婦も御隠居もゐるのに、娘さん――モダン令嬢が横柄にはじいた、そこで、私もわざと観音経読誦、悠然として憐笑してやつた。例の鍋とり屋さんとまた同宿、徳須恵では女が安い話を聞かされた、一枚も出せば飲んで食つて、そして抱いて寝られるといふ、あなかしこ／＼、それにつけても昨夜のキ印老人は罪のない事をいつた、彼は三十八万円の貯金があるといふ、その利子で遊ぶといふ、わはゝゝゝゝ。今日は郵便局で五厘問答をやつた、五厘銅貨をとるとらないの問答である、理に於ては勝つたけれど情に於て敗けた、私はやつぱり弱い、お人好しだ。唐房といふ浦町が唐津近在にある、そのかみの日支通商を思はせる地名ではないか。

一月廿四日　小春、発動汽船であちこち行乞、宿は同前。

早く起きる、何となく楽しい日だ、八時ポツポ船で名護屋へ渡る、すぐ名護城趾へ登る、よかつた。――遊覧地じみてゐないのがよい、石垣ばかり枯草ばかり松ばかり、外に何も残つてゐないのがよい、たゞ見る丘陵の起伏だ、そして一石一瓦こと／″＼く太閤秀吉を思はせる、さすがに規模は太閤らしい、茶店――太閤茶屋――たゞ一軒の――老人がいろ／＼と説明してくれる、一ノ丸、二ノ丸、三ノ丸、大手搦手、等々々、外濠は海、内濠は埋つてゐる、本丸の記念碑（それは自然石で東郷元帥の筆）がふさはしい、天主台は十五間、その上に立つて、玄海を見遙かして、秀吉の心は波打つたゞらう、その傍にシヤンがつゝましく控へてゐたかも知れない。後方の山々には日本諸国の諸大名がそれ／″＼陣取つて日本魂を発露したゞらう。私は玄海のかゞやきの中に豊太閤の姿を見た。桑田変じて北海となるといふが、城趾が桑畑になつてゐる、松風、小鳥、枯薄。……茶店の老人があまり深切に説明してくれるので、とう／＼絵葉書一組買はないではすまないやうになつた。大きな松が枯れてゐる、桜が一本、藤が一株。観月の場所としては随一だらう。こゝでまた、いつもの癖で水を飲んだ。

　城あと、茨の実が赤い・ゆつくり尿して城あと枯草

二時間ばかり漁村行乞、ありがたいこともあり、ありがたくないこともあつた。十二時近くなつてまた発動機船で片島へ渡る、一時間ほ

ど行乞、蘭竹の海岸づたひに田島神社へ参拝する、こゝに松浦佐用姫の望夫石がある、祠堂を作つて、お初穂をあげなければ見せないと宮司がいふ、それだけの余裕もないし、またその石に回向して、石が姫に立ちかへつても困るので堂の前で心経読誦、そのまゝ渡し場へ急いだ、こゝでも水を飲むことは忘れなかつた。呼子へ渡されたのは二時、あまり早かつたので、そして今日は出費が多かつたので——渡銭三回で三十銭、外に久し振りにバツト七銭、判をいたゞいてお賽銭五銭など——一時間行乞、宿に帰つて、また洗濯、また一杯、宿のおかみさんが好意を持つてくれて鰯の刺身一皿喜捨してくれた、私も子供に一銭二銭三銭喜捨してやつた。鰯といへば、名護屋でも片島でもたくさんの収穫があつた、女が七八人並んで網から外しては後へ投げる、どこも鰯、鰯臭かつた。呼子町の対岸には遊女屋が十余軒、片島にも四五軒あつた、しかし佐用姫の情熱を持つたやうな彼女は見当らなかつた！石になるより銭になる、石になれ、銭になれ、なりきれ。名物松浦漬（鯨骨の粕漬）そして佐用姫漬（福神漬）、島へ小鳥を持つて帰る人、島の遊女を買ふ人。蒲鉾はようござんすか、と少年がいつた、いつぞや、お魚はいりませんか、と女がいつたのと好一対の傑作だ。

・朝凪の島を二つおく（呼子港）　　　　□・ほろりとぬけた歯ではある（再録）　　　　□・黒髪の長さを潮風にまかし

この宿の娘については一つのロマンスがある、おばあさんが、わざわざ、二階の私に燠を持つてきてくれて話した。——（×印へ）同宿のテキヤさん、トギヤさん、なか／＼の話上手だ、いろ／＼話してゐるうちに、猥談やら政治談やら、なか／＼面白かつた、殊にオツトセイのエロ話はおかしかつた。自動車は、乗らないものには外道車、火鉢に火がないならば灰鉢。……

一月廿五日　晴、行程三里、佐志、浜屋（二五・上）

一天雲なし、その天をいたゞいて、湊まで、一時間半ばかり行乞、近来にない不所得である、またぶら／＼歩いて唐房まで、二時間行乞、近来にない所得だつた、プラスマイナス、世の中はよく出来てゐます。テキヤさんの話、世の中が不景気になつて、そして人間が賢く

なつて、もう昔のやうなボロイ儲けはありません。見師の誰もがいふ、ほんたうに儲け難くなつた！私自身にいて話さう、――二三年前までは、十五六軒も行乞すれば鉄鉢が一杯になつたが（米で七合入）今日では三十軒も歩かなければ満たされない。女は、農漁村の女はよく稼ぐ、と今朝はしみ／″＼思つた、朝早く道で出逢ふ女人の群、それはみんな野菜、薪、花、干魚を荷つた中年の女達だ。松浦潟――そのよさが今日初めて解つた、七ツ釜、立神岩などの奇勝もあるさうだが、そんな事はどうでもよい、山路では段々畠がよかつた、海岸は波がよかつた、岩がよかつた。相賀松原もよかつた、そこには病院があつて下宿が多かつた。島はあたゝかだつたが、このあたりも、南をうけてあたゝかい、梅は盛り、蒲公英が咲いてゐる、もう豌豆も唐豆も花を咲かせてゐる。今日の行乞相は、湊ではあまりよくなかつたが、唐房、佐志ではわるくなかつた、――たとへば、受けてはならない三銭を返し、受けなければならない五銭をいたゞいた。鰯、鰯、鰯、見るも鰯、嗅ぐも鰯、食べるも、もちろん、鰯である。

・港は朝月のある風景・しんじつ玄海の舟が浮いてゐる

同宿のおへんろさんは大した鼾掻きだつた、これまで度々そのために宿で問題を惹き起したと自白してゐたが、それは素破らしいものだつた、高く低く、長く短く、うはゞみのやうでもあり、怒濤の如くでもあつた！呼子とはいゝ地名だ、そこには船へまで出かける娘子軍がゐるさうな。ゆつくり飲んだ、おかみさんが昨日捕れた鯨肉を一皿喜捨してくれた（昨夜は鰯の刺身を一皿貰つたが）、酒はよくなかつたが、気分がよかつた。予期した雨となつた、明日はまた雨中行乞か、それはそれとして、かすかな波の音を聞くともなく聞きながら寝た。（×印から）宿の娘――おばあさんの孫娘がお客の鮮人、人蔘売といつしよになつて家出したといふ、彼女は顔はうつくしいけれど跛足であつた、年頃になつても嫁にゆけない、家にゐるのも心苦しい、そこへその鮮人が泊り合せて、誘ふ水に誘はれたのだ、おばあさんがしみ／″＼と話す、あなたは方々をおまはりになるから、きつとどこかでおあひになりませう、おあひになつたら、よく辛棒するやうに、そして あまり心配しないがよい、着物などは送つてやる、と伝へてくれといふ、私はこゝろよく受け合つた、そして心から彼女に幸あれと祈つ

た。この宿のおかみさんもよく働く、家内九人、牛までゐる、そして毎晩四五人のお客だ、それを一人でやつてゐる、昨夜の宿のおかみさんもやり手だつた、四人の小さい子、それだけでも大した苦労なのに、お客さんへもなか／＼よくしてくれた。

一月廿六日　曇、雨、晴、行程六里、相知、幡夫屋（二五・中）

折々しぐれるけれど、早く立つて唐津へ急ぐ、うれしいのだ、留置郵便を受取るのだから、——しかも受け取ると、気が沈んでくる、——その憂欝を抑へて行乞する、最初は殆んど所得がなかつたが、だん／＼よくなつた。徳須恵といふ地名は意味がありさうだ、こゝの相知（〔O_chi〕）もおもしろい。麦が伸びて雲雀が唄つてゐる、もう春だ。大きな鰯が五十尾六十尾で、たつた十銭とは！この宿はきたないけれど、きやすくてわるくない、同宿の跛足老人はなか／＼練れた人柄で、物事に詳しかつた、土地の事、宿の事をいろ／＼教はつた。この地は幡随院長兵衛の誕生地だ、新らしく分骨を祀つて、堂々たる記念碑が建てゝある、後裔塚本家は酒造業を営んでゐる、酒銘も長兵衛とか権兵衛とかいふ独特のものである、私は無論一杯ひつかけたが、酒そのものは長兵衛でも権兵衛でもないやうだつた、呵々。第二十八番の札所常安寺は予期を裏切つて詰らない禅寺だつた（お寺の方々は深切だつたけれど）、門前まで納屋がせりこんでゐて、炭坑寺とでもいはうか。どこを歩いても人間が多い、子供が多過ぎる。朝早いのは鶏と子供だ。

・ふりかへる領巾振山はしぐれてゐる・枯草の長い道がしぐれてきた・ぐるりとまはつて枯山・枯山越えてまた枯山

一月廿七日　雨、曇、晴、行程三里、莇原、若松屋（二五・中）

同宿の老人が早いので、私も六時前に起きた、九時まで読書、沿道を行乞しながら東へ向ふ、雨はやんだが風がでた、笠を吹きとばすほどである、ヨリ大声でお経をあげながら流して歩く、相当の所得はあつたので安心する。此地方はどこも炭坑街で何となく騒々しくてうるさい、しかし山また山の姿はうれしい、海を離れて山にはいつたといふ感じはよい。相知の街に、千里眼人事百般鑑定といふ看板がかけてあつた。或る商家の前でグラ／＼した、近来めづらしい腹立たしさで

あつた。けふのおひるは饅頭一つだつた、昨日のそれは飴豆二つだつた（いづれもおせつたい）。厳木（きうらぎと読む）は山間の小駅だが、街の両側を小川がさう／＼と流れてゐた、古風な淋しいなつかしいところだつた。宿のおかみさんが、ひとりで弾いて唄つて浮かれてゐる、一風変つた女だ、何だか楔が一本足らないやうにも思はれるが。同宿三人、誰もが儲からない／＼といふ。ぐうたら坊主、どまぐれ坊主、どちらもよい名前だ。

・山路きて独りごというてゐた

一月廿八日　朝焼、そして朝月がある、霜がまつしろだ。

今日一日のあたゝかさうらゝかさは間違ない、早く出立するつもりだつたが、何やかや手間取つて八時過ぎになつた、一里歩いて多久、一時間ばかり行乞、さらに一里歩いて北方、また一時間ばかり行乞、そして錦江へいそぐ、今日は解秋和尚に初相見を約束した日である、まだ遇つた事もなし、寺の名も知らない、それでも、そこらの人々に訊ね、檀家を探して、道筋を教へられ、山寺の広間に落ちついたのは、もう五時近かつた、行程五里、九十四間の自然石段に一喝され、古びた仁王像（千数百年前の作ださうな）に二喝された、土間の大柱（楓ともタブともいふ）に三喝された、そして和尚のあたゝかい歓待にすつかり抱きこまれた。一見旧知の如し、逢うて直ぐヨタのいひあひこが出来るのだから、他は推して知るべしである。いかにも禅刹らしい（緑平老はきつと喜ぶだらう）、そしていかにも臨済坊主らしい（それだから臭くないこともない）。遠慮なしに飲んだ、そして鼾をかいて寝た。

・父によう似た声が出てくる旅はかなしい

今日はほんたうにうらゝかだつた、枯葦がびつくりしてそよいでゐた、私のやうに。フトン薄くてフミンに苦しむ、このあたりはどこの宿でも掛蒲団は一枚（好意でドテラをくれるところもあるが）。をんな山、女らしくない、いゝ山容だつた。馬神隧道といふのを通り抜けた、そして山口中学時代、鯖山洞道を通り抜けて帰省した当時を想ひだして涙にむせんだ、もうあの頃の人々はみんな死んでしまつた、祖母も父も、叔父も伯母も、……生き残つてゐるのは、アル中の私だけ

だ、私はあらゆる意味に於て残骸だ！此地方は二月一日のお正月だ、お正月が三度来る、新のお正月、旧のお正月、――お正月らしくないお正月が三度も。共同餅搗は共同風呂と共に村の平和を思はせる。勝鴉（神功皇后が三韓から持つて帰つたといふ）が啼いて飛ぶのを見た、鵲の一種だらう。歩く、歩く、死場所を探して、――首くゝる枝のよいのをたづねて！

飯盛山福泉寺（解秋和尚主董、鍋島家旧別邸）

山をそのまゝの庭、茅葺の本堂書院庫裏、かすかな水の音、梅の一二本、海まで見える。猫もゐる、犬もゐる、鶏も飼つてある、お嬢さん二人、もろ／＼の声（音といふにはあまりにしづかだ）。すこし筧の匂ひする山の水の冷たさ、しん／＼としみいる山の冷え（薄茶の手前は断はつた）、とにかく、ありがたい一夜だつた。

一月廿九日　曇后晴、行程三里、武雄、油屋（三〇・中）

朝から飲んで、その勢で山越えする、呼吸がはずんで一しほ山気を感じた。千枚漬はおいしかつた（この町のうどんやで柚子味噌がおいしかつたやうに）。解秋和尚から眼薬をさしてもらつた（此寺へは随分変り種がやつてくるさうな、私もその一人だらうか、私としては、また寺としても、ふさはしいだらう）。この寺は和泉式部の出生地、古びた一幅を見せて貰つた（峨山和尚の達磨の一幅はよかつた）。

故郷に帰る衣の色くちて　　錦のうらやきしまなるらん

五百年忌供養の五輪石塔が庭内にある。井特の幽霊の絵も見せてもらつた、それは憎い怨めしい幽霊でなくて、おゝ可愛の幽霊――母性愛を表徴したものださうな。

・ひかせてうたつてゐる

こゝの湯――二銭湯――はきたなくて嫌だつたが、西方に峙えてゐる城山――それは今にも倒れさうな低い、繁つた山だ――はわるくない。うどん、さけ、しやみせん、おしろい、等々、さすがに湯町らしい気分がないでもないが、とにかく不景気。

一月卅日　晴、暖、滞在、宿は同前、等々々。

お天気はよし、温泉はあるし、お布施はたつぷり（解秋和尚から、そして緑平老からも）、どまぐれざるをえない。一浴して一杯、二浴して二杯、そしてまた三浴して三杯だ、百浴百杯、千浴千杯、万浴万杯、八万四千浴八万四千杯の元気なし。けふいちにちはなまけるつもりだつたが、おもひかへして、午後二時間ばかり行乞。よき食慾とよき睡眠、そしてよき生慾とよき浪費、それより外に何物もない！とにかくルンペンのひとり旅はさみしいね。

一月卅一日　曇、歩行四里、嬉野温泉、朝日屋（三〇・中）

一気にこゝまで来た、行乞三時間。宿は新湯の傍、なか／＼よい、よいだけ客が多いのでうるさい。飲んだ、たらふく飲んだ、造酒屋が二軒ある、どちらの酒もよろしい、酒銘「一人娘」「虎の児」。武雄温泉にはあまり好意が持てなかつた、それだけこの温泉には好意が持てる。湧出量が豊富だ（武雄には自宅温泉はないのにこゝには方々にある）温度も高い、安くて明るい、普通湯は二銭だが、宿から湯札を貰へば一銭だ。茶の生産地だけあつて、茶畑が多い、茶の花のさみしいこと。嬉野はうれしいの（神功皇后のお言葉）。休みすぎた、だらけた、一句も生れない。ぐつすり寝た、アルコールと入浴とのおかげで、しかし、もつと、もつと、しつかりしなければない。

二月一日　雨、曇、行程四里、千綿（長崎県）、江川屋（三〇・中）

朝風呂はいゝなあと思ふ、殊に温泉だ、しかし私は去らなければならない。武雄ではあまり滞留したくなかつたけれど、ずる／＼と滞留した、こゝでは滞留したいけれど、滞留することが出来ない、ほんに世の中はまゝにならない。彼杵（むつかしい読方だ）まで三時、行乞三時間、また一里歩いてこゝまできたら、降りだしたので泊る、海を見晴らしの静かな宿だ。今日の道はよかつた、山も海も（久しぶりに海を見た）、何だか気が滅入つて仕方がない、焼酎一杯ひつかけて胡魔化さうとするのがなか／＼胡魔化しきれない、さみしくてかなしくて仕方がなかつた。

・寒空の鶏をたゝかはせてゐる・水音の梅は満開　牛は重荷を負はされて鈴はりんりん

最後の句は此地方の牛を表現してゐると思ふ、鈴音のりん／＼は聞いてうれしいが、牛の重荷は見てかなしい。私はだん／＼生活力が消耗してゆくのを感じないではゐられない、老のためか、酒のためか、孤独のためか、行乞のためか——とにかく自分自身の寝床が欲しい、ゆつくり休養したい。新しい鰯を買つて来て、料理して貰つて飲んだ、うまかつた、うますぎだつた。前後不覚、過現未を越えて寝た。

二月二日　雨、曇、晴、四里歩いて、大村町、山口屋（三〇・中）

どうも気分がすぐれない、右足の工合もよろしくない、濡れて歩く、処々行乞する、嫌な事が多い、午後は大村町を辛抱強く行乞した。大村——西大村といふところは松が多い、桜が多い、人も多い。軍人のために、在郷人のために、酒屋料理屋も多い。昨日も今日も飛行機の爆音に閉口する、すまないけれど、早く逃げださなければならない。此宿はよい、しづかで、しんせつで、——湯屋へいつたがよい湯だつた、今日の疲労を洗ひ流す。

・街はづれは墓地となる波音

何だか物哀しくなる、酒も魅力を失つたのか！あたゝかいことだ、まるで春のやうだ、そゞろに一句があつた。

・あたたかくて旅のあはれが身にしみすぎる

お互に酒をつゝしみませう。大村湾はうつくしい、海に沿うていちにち歩いたが、どこもうつくしかつた、海も悪くなあと思ふ、しかし、私としては山を好いてゐる（海は倦いてくるが山は倦かない）。歩いてゐるうちに、ふと、梅の香が鼻をうつた、そしてそれがまた私をさびしい追憶に誘ふた。——

梅が香もおもひでのさびしさに

かういふ月並の一句を書き添へなければならない。

二月三日　勿体ないお天気、歩けば汗ばむほどのあたゝかさ。

だいぶ気分が軽くなつて行乞しながら諫早へ三里、また行乞、何だか嫌になつて——声も出ないし、足も痛いので——汽車で電車で十返花さんのところまで飛んで来た、来てよかつた、心からの歓待にのび

／＼とした。よく飲んでよく話した、留置の郵便物はうれしかつた、殊に俊和尚の贈物はありがたかつた（利休帽、褌、財布、どれも俊和尚の温情そのものだつた）。けさ、顔を洗ふ水が濁つてゐたのは、旅情をそゝつた、此頃、彼かにつけて寂しがる癖になつた、放下着、々々々。けふの道連れは田舎の老人、彼は田舎医者の集金人だつた、当節は懸取にいつても、なか／＼薬代をくれないといふ、折角、頼まれて来たのに、煙草代ほどもないので、先生に申訳ないといふ、いづこもおなじ、不景気々々々。どこへいつても多いのはヤキイモヤ（夏は氷屋）そして自転車屋（それも修繕専門）。長崎はよい、おちついた色彩がある、汽笛の響にまでも古典的な、同時に近代的なものがひそんでゐるやうに感じる。このあたり——大浦といふところにも長崎的特殊性が漂うてゐる、眺望に於て、家並に於て、——石段にも、駄菓子屋にも。思案橋といふのはおもしろい、実は電車の札で見たのだが、例の丸山に近い場所にあるさうだ、思切橋といふのもあつたが道路改修で埋没したさうだ。

・旅は道づれの不景気話が尽きない・けふもあたゝかい長崎の水

飲みすぎたのか、話しすぎたのか、何やら彼やらか、三時がうつても寝られない、あはれむべきかな、白髪のセンチメンタリスト！

二月四日　曇、雨、長崎見物、今夜も十返花居で。……

夜は句会、敦之、朝雄二句来会、ほんたうに親しみのある句会だつた、散会は十二時近くなり、それからまだ話したり書いたりして、ぐつすり眠つた、よい一日よい一夜だつた。友へのたよりに、——長崎よいとこ、まことによいところであります、ことにおなじ道をゆくもののありがたさ、あたゝかい友に案内されて、長崎のよいところばかりを味はゝせていたゞいてをります、今日は唐寺を巡拝して、そしてまた天主堂に礼拝しました、あすは山へ海へ、等々、私には過ぎたモテナシであります、ブルプロを越えた生活とでもいひませうか。——

長崎の句として・ならんであるくに石だゝみすべるほどの雨（途上）　（だん／″＼すべるやうな危険を持つてきた！）
□・冬曇の大釜の罅（崇福寺）　□・寺から寺へ蔦かづら（寺町）　□・逢うてチヤンポン食べきれない（十返花君

に）　　　　　□・すつかり剥げて布袋は笑ひつゞけてゐる（福済寺）　　　　　□・冬雨の石階をのぼるサンタマリヤ（大浦天主堂）

二月五日　晴、少しばかり寒くなつた。

朝酒をひつかけて出かける、今日は二人で山へ登らうといふのである、ノンキな事だ、ゼイタクな事だ、十返花君は水筒二つを（一つは酒、一つは茶）、私は握飯の包を提げてゐる、甑岩へ、そして帰途は敦之、朝雄の両君をも誘ひ合うて金比羅山を越えて浦上の天主堂を参観した、気障な言葉でいへば、まつたく恵まれた一日だつた、ありがたし、ありがたし。昨日の記、今日の記は後から書く、とりあへず、今日の句として、——

・寒い雲がいそぐ（下山）

二月六日　陰暦元旦、春が近いといふよりも春が来たやうなお天気である。

今日もたべるに心配はなくて、かへつて飲める喜びがある、無関心を通り越して呆心気分でぶらぶら歩きまはる、九時すぎから三時まへまで（十返花さんは出勤）。諏訪公園（図書館でたま／＼九州新聞を読んで望郷の念に駆られたり、鳩を見て羨ましがつたり、悲しんだり、水筒——正確にいへば酒筒だ——に舌鼓をうつたり……）。波止場（出船の船、波音、人声、老弱男女）。浜ノ町（買ひたいものもないが、買ふ銭もない、たゞ観てあるく）。ノンキの底からサミシサが湧いてくる、いや滲み出てくる。上から下までみんな借物だ、着物もトンビも下駄も、しかし利休帽は俊和尚のもの、眼鏡だけは私のもの。別にウインクしたのでもないが、服装が態度が遊覧客らしかつたのだらう、若い売笑婦に呼びかけられた！長崎の銀座、いちばん賑やかな場所はどこですか、どうゆきますか、と行人に訊ねたら、浜ノ町でしようね、こゝから下つて上つてそして行きなさいと教へられた、石をしきつめた街を上つて下つて、そして下つて上つて、そしてまた上つて下つて、——そこに長崎情調がある、山につきあたつても、或は海べりへ出ても。

・波止場、狂人もゐる（波止場）

長崎の人々、殊に子供は山登りがうまからうと思ふ、何しろ生れてから、石の上を登つたり下つたりしてゐるのだから！低い方へゆけば海、高い方へ行けば山、海を埋め立てるか、それはもう余地がない、だから山へ、山の上へ、上へと伸びてゆく、山の家、――それが長崎市街の発展過程だ。灯火のうつくしさ、灯火の海（東洋では香港につぐ港の美景であるといはれてゐる）。△二月七日は書き落したから、二月八日の後へ書く。

二月八日　雨、曇、また雨、どうやら本降らしくなつた。

ひきとめられるのをふりきつて出立した、私はたしかに長崎では遊びすぎた、あんまり優遇されて、かへつて何も出来なかつた、酒、酒、酒、Ｇさんの父君が内職的に酒を売つてをり、酒好きの私が酒樽の傍に寝かされたとは、何といふ皮肉な因縁だつたらう！とにもかくにも、長崎よ、さようなら、私は何だか、すまないやうな、放たれたやうな気分で歩いて来た。Ｇさんの父君が餞別として、六神丸を下さつた、この六神丸は、いろ／＼の意味で、ありがたかつた。今朝は烟霧といふものを観た、それは長崎港にふさはしいものだ、街の雑音も必ずしも悪くない。鎮西三十三所の第二十四番、田結の観音寺に詣でる、つまらないところだつた。このあたりには雲仙のおとしごといひたいやうな、小さい円い山が五つも五つも盛りあがつてゐる、その間を道は上つたり下つたり、右へそれたり左へ曲つたり、うね／＼ぐる／＼と伸びてゆくのである、だらけたからだにはつらかつたが、悪くはなかつた、しかしずゐぶん労れた、江ノ浦にも泊らないで、此浦まで歩いて来た、有喜の湊屋（三〇・中）。有喜近い早見といふ高台からの遠望はよかつた、美しさと気高さとを兼ね持つてゐた、千々岩灘を隔てゝ雲仙をまともに見遙かすのである。……江の浦から早見まで、よい道連れを与へられた、村の有志者とでもいふ部類の人柄らしかつた。あまり草臥れたので一杯やつた、この一杯はまことに効果百パーセントだつた。渇いて渇いて、もう歩けなくなつたとき、水の音、水が筧から流れ落ちてゐる、飲む、飲む、腹いつぱい飲む、うまい、うまい、甘露とはまさにこの水だ。このあたりは陰暦の正月三日、お正月気分が随処に随見せられる、晴着をきて遊ぶ男、女、おばあさん、こども。長崎から坂を登つて来て登り尽すと、日見墜道があ

る、それを通り抜けると、すぐ左側の小高い場所に去来の芒塚といふのがある。

　　　芒塚　去来君が手もまじるなるべし花薄・けさはおわかれの卵をすゝる・トンネルをぬけるより塚があつた（去来芒塚）・もう転ぶまい道のたんぽゝ

　同宿は遍路坊さん、声よくて程がない、近所の不良老婦人が寄つてきて騒ぎ□□声色身振をする、何しろ八里は十分に歩いたのだら、労れた／＼睡い／＼。

　二月七日　（追加）晴、肥ノ岬（脇岬）へ、発動船、徒歩。……

　第二十六番の札所の観音寺へ拝登、堂塔は悪くないが、情景はよろしくない、自然はうつくしいが人間が醜いのだ、今日の記は別に書く、今日の句としては、

　・明けてくる山の灯の消えてゆく・大海を汲みあげては洗ふ（船中）　まへにうしろに海見える草で寝そべる　岩にならんでおべんたうののこりをひろげる

　二月九日　風雨、とても動けないから休養、宿は同前。

　お天気がドマグレたから人間もドマグレた、朝からひつかけて与太話に時間をつぶした。

　二月十日　まだ風雨がつゞいてゐるけれど出立する、途中千々石で泊るつもりだつたが、宿といふ宿で断られつゞけたので、一杯元気でこゝまで来た、行程五里、小浜町、永喜屋（二五・中）

　千々岩は橘中佐の出生地、海を見遙かす景勝台に銅像が建立されてゐる。或る店頭で、井上前蔵相が暗殺された新聞記事を読んだ、日本人は激し易くて困る。……此宿は評判がよくない、朝も晩も塩辛い豆腐汁を食べさせる、しかし夜具は割合に清潔だし（敷布も枕掛も洗濯したばかりのをくれた）、それに、温泉に行けて相客がないのがよい、たつた一人で湯に入つて来て、のんきに読んでゐられる。こゝの湯は熱くて量も多い、浴びて心地よく、飲んでもうまい、すべて本田家の個人所有である。海も山も家も、すべてが温泉中心である、雲仙

を背景としてゐる、海の青さ、湯烟の白さ。凍豆腐ばかりを見せつけられる、さすがに雲仙名物だ、外に湯せんべい。

二月十一日　快晴、小浜町行乞、宿は同前。

日本晴、朝湯、行乞四時間、竹輪で三杯。水の豊富なのはうれしい、そしてうまい、栓をひねつたまゝにしていつも溢れて流れてゐる、そこにもこゝにも。よい一日よい一夜だつた。

二月十二日　けふも日本晴、まるで春、行程五里、海ぞひのうつくしい道だつた、加津佐町、太田屋（三〇・中）

此町は予想しない場所だつた、町としても風景としてもよい、海岸一帯、岩戸山、等、等。途中、折々榕樹を見出した、また唐茄子の赤い実が眼についた。△水月山円通寺跡、大智禅師墓碑、そしてキリシタン墓碑、コレジヨ（キリシタン学校）跡もある。

二月十三日

朝の二時間行乞、それから、あちらでたづね、こちらでたづねて、水月山円通寺跡の丘に登りついた、麦畑、桑畑、そこに六百年のタイムが流れたのだ、やうやくにして大智禅師の墓所を訊ねあてる、石を積みあげて瓦をしいて、堂か、小屋か、たゞの楠の一本がゆうぜんと立つてゐる、円通寺再興といふ岩戸山巌吼庵に詣でる、ナマクサ、ナマクサ、ナマクサマンダー。……歩いてゐるうちにもう口ノ津だ、口ノ津は昔風の港町らしく、ちんまりとまとまつてゐる、ちよんびり行乞、朝日屋（三〇・中）、同宿は鮮人の櫛売二人、若い方には好感が持てた。よくのんでよくねた。

二月十四日　曇、晴、行程五里、有家町、幸福屋（三五・中）

昨夜はラヂオ、今夜はチクオンキ、明日はコト、——が聴けますか。大きな榕樹（アコオ）がそここゝにあつた、島原らしいと思ふ、たしかに島原らしい。

二月十三日（追記）

玉峰寺で話す、——禅寺に禅なし、心細いではありませんか。同宿の鮮人二人、彼等の幸福を祈る。

自戒、焼酎は一杯でやめるべし

酒は三杯をかさねるべからず

・解らない言葉の中を通る

歩いてゐるうちに、だん／＼言葉が解らなくなつた、ふるさと遠し、——柄にもなく少々センチになる。今日は五里歩いた、何としても歩くことはメシヤだよ、老へんろさんと妥協して片側づゝ歩いたが、やつぱりよかつた、よい山、よい海、よい人、十分々々。原城趾を見て歩けなかつたのは残念だつた。

二月十四日（追記）幸福屋といふ屋号はおもしろい。

同宿は坊主と山伏、前者は少々誇大妄想狂らしい、後者のヨタ話も愉快だつた——剣山の話、山中生活の自由、山葵、岩魚、焼塩、鉄汁。……

二月十五日　少し歩いて雨、布津、宝徳屋（三〇・中）

気が滅入つてしまうので、ぐん／＼飲んだ、酔つぱらつて前後不覚、カルモチンよりアルコール、天国よりも地獄の方が気楽だ！同宿は要領を得ない若者、しかし好人物だつた、適切にいへば、小心な無頼漢か。此宿はよい、しづかでしんせつだ、滞在したいけれど。——

二月十六日　行程三里、島原町、坂本屋（投込五〇・中）

さつそく緑平老からの来信をうけとる、その温情が身心にしみわたる、彼の心がそのまゝ私の心にぶつつかつたやうに感動する。

二月十六日　廿二日　島原で休養。

近来どうも身心の衰弱を感じないではゐられない、酒があれば飲み、なければ寝る、——それでどうなるのだ！俊和尚からの来信に泣かされた、善良なる人は苦しむ、私は私の不良をまざ／＼と見せつけられた。同宿の新聞記者、八目鰻売、勅語額売、どの人もそれ／″＼興味を与へてくれた、人間が人間には最も面白い。

二月廿三日　いよ／＼出立、行程六里、守山、岩永屋（三〇・中）

久しぶりに歩いた、行乞した、山は海はやつぱり美しい、いちにち風に吹かれた。此宿はよい、同宿の牛肉売、皮油売、豆売老人、酒一杯で寝る外なかつた。

二月廿四日　廿五日　行程五里、諫早町、藤山屋（三〇・中）

吹雪に吹きまくられて行乞、辛かつたけれど、それはみんな自業自得だ、罪障は償はなければならない、否、償はずにはゐられない。また冬が来たやうな寒さ、雪（寒があんまりあたゝかだつた）。

風ふいて一文もない

五厘銭まで払つてしまつた、それでも一銭のマイナスだつた。

二月廿六日　晴曇定めなくして雪ふる、湯江、桜屋（三〇・上）

だいぶ歩いたが竹崎までは歩けなかつた、一杯飲んだら空、空、空！九州西国第二十三番の札所和銅寺に拝登、小さい、平凡な寺だけれど何となし親しいものがあつた、たゞ若い奥さんがだらしなくて赤子を泣かせてゐたのは嫌だつた。

　きのふは風けふは雪あすも歩かう・ふるさとの山なみ見える雪ふる・さみしい風が歩かせる・このさみしさや遠山の雪・山ふかくなり大きい雪がふつてきた

酢牡蠣で一杯、しんじつうまい酒だつた！夢の中でさへ私はコセ／＼してゐる、ほんたうにコセ／＼したくないものだ。

二月廿七日　風雪、行程七里、多良（佐賀県）、布袋屋（三〇・中）

キチガイ日和だつた、照つたり降つたり、雪、雨、風。……第二十二番の竹崎観音（平井坊）へ参拝。今日はお天気が悪くて道は悪かつたけれど、風景はよかつた、山も海も、そして人も。此宿はよい、まぐれあたりのよさだつた。

・こゝに住みたい水をのむ

二月廿八日　晴、曇、雪、風、行程五里、鹿島町、まるや（三〇・中）

毎日シケる、けふも雪中行乞、つらいことはつらいけれど張合があつて、かへつてよろしい。浜町行乞、悪路日本一といつてはいひすぎるだらうが、めづらしいぬかるみである、店鋪の戸は泥だらけ、通行人も泥だらけになる、地下足袋のゴムがだんぶり泥の中へはまりこむのだからやりきれない。同時に、此地方は造酒屋の多いことも多い、したがつて酒は安い、我党の土地だ。いつぞや福岡地方で同宿したことのある妙な男とまた同宿した、私を尊敬してくれるのは有難いけれど、何だ彼だと附き纒はれるのは迷惑だ、彼ぐらい増上慢になれば天下太平、現世極楽だらう。

　四ッ手網さむ／″＼と引きあげてある　焼跡のしづかにも雪のふりつもる・雪の法衣の重うなる（雪中行乞）　雪に祝出征旗押したてた

生きるとは味ふことだ、酒は酒を味ふことによつて酒も生き人も生きる、しみ／″＼飯を味ふことが飯をたべることだ、彼女を抱きしめて女が解るといふものだ。

二月廿九日　けふも雪と風だ、行程一里、廻里、橋口屋（投込五〇・上）

朝、裕徳院稲荷神社へ参拝、九州では宮地神社に次ぐ流行神だらう、鹿島から一里、自動車が間断なく通うてゐる、山を抱いて程よくまとまつた堂宇、石段、商売的雰囲気に包まれてゐるのはやむをえまいが、猿を飼うたり、諸鳥を檻に閉ぢこめてあるのは感心しない、但し放ち飼の鶏は悪くない、十一時から四時まで鹿島町行乞、自他共にいけないと感じことも二三あつた。興教大師御誕生地御誕生院、また黄檗宗支所並明寺などがあつた。この宿はほんたうによい、何よりもしんせつで、ていねいなのがうれしい、賄もよい、部屋もよい、夜具もよい、――しかも一室一燈一鉢一人だ。心の友に、――我昔所造諸惑業、皆由無始貪瞋痴、従身口意之生、一切我今皆懺悔、こゝにまた私は懺悔文を書きつけます、雪が――雪のつめたさよりもそのあたゝかさが私を眼醒ましてくれました、私は今、身心を新たにして自他を省察してをります。……不眠と感傷、その間には密接な関係がある、私は今夜もまた不眠で感傷に陥つた。

三月一日

三月更生、新らしい第一歩を踏みだした。午前は冬、午後は春、シケもどうやらおさまつたらしい、行程二里、高町、秀津、山口、等、等とよく行乞した、おかげで理髪して三杯いただいた。同宿六人、同室は猿まはし、おもしろいね。

・寒い寒い千人むすびをむすぶ（改作）

此宿は山口屋、二五、中、可もなし、不可もなし。物にこだはるなかれ、無所得、無所有、飲まないで酔ふやうになれ。

三月二日　晴、曇、どうやら春ですね、行程二里、行乞六時間、久保田、まるいちや（三〇・中）

行乞相が日にましよくなるやうだ、主観的には然りといひきる、第三者に対しては知らない。此地方で——どこでも——多いのは焼芋屋、そして鍼灸治療院。いはゆる勝烏——天然保護物——が啼き飛ぶ、そこで一句。——

頭上に啼きさわぐ烏は勝烏・枯草につゝましくけふのおべんたう（追加）

今日は妙な事があつた、——或る家の前に立つと、奥から老妻君が出て来て、鉄鉢の中へ五十銭銀貨を二つ入れて、そしてまた奥へ去つてしまつた、極めて無造作に、——私は、行乞坊主としての私はハツとした、何か特殊な事情があると察したので懇ろに回向したが、後で考へて見ると、或は一銭銅貨と間違へたのではないかとも思ふ、若しさうであつたならば実に済まない事だつた、といつて今更引き返して事実を確めるのも変だ——行乞中、五十銭玉一つを頂戴することは時々ある、しかしそれが一つである場合には、間違ではないかと訊ねてからでなければ頂戴しない、実際さういふ間違も時々ある、だが、今日の場合は二つである、そして忙しい時でもなく暗い時でもない、すべてがハツキリしてゐる、私が疑はないで、特殊な事情のためだと直覚したことは、あながち無理ではあるまい、が、念のため　一応訊ねておいた方がよかつたとも考へられる、——とにかく、今となつては、稀有な喜捨として有難く受納する外はない、その一円を最も有効に利用するのが私の責務であらう。

□焼き棄てて日記の灰のこれだけか

菩薩清涼月　畢竟遊於空

□うららかにして風

勿忘草よりわすれぐさちよいと一服やりましよか

カルモチンよりアルコールちよいと一杯やりましよか

三月三日　晴、春だ、行程わづかに一里、佐賀市、多久屋（二五・中）

もう野でも山でも、どこでも草をしいて一服するによいシーズンとなつた、そしてさういふ私の姿もまた風景の一点描としてふさはしいものになつた。今日はあまり行乞しなかつた、留置の来信を受取つたら、もう何もしたくなくなつた、それほど私の心は友情によつてあたゝめられ、よわめられたのである。或る友に、——どうやら本物の春が来たやうですね、お互にたつしやでうれしい事です、私は先日来ひきつゞいての雪中行乞で一皮脱ぐことが出来ましたので、歩いても行乞しても気分がだいぶラクになりました、云々。緑平老の手紙は私を泣かせた、涙なしには読みきれない温情があふれてゐる、私は友として緑平老其他の人々を持つてゐることを不思議とも有難すぎるとも思ふ。途中、或る農家でお茶をよばれたが、薩摩芋を強ゐられたには閉口した、あまり好きではないけれど、いや、むしろ嫌いな方だけれど、それは深切そのものなので、二切三切食べたが、胸がやけて困つた。佐賀へは初めて来たが、市としては賑ふ方ぢやない、しかし第一印象は悪くなかつた。湯屋の看板に『一浴心広体胖』、大盛うどん屋の立額に『はたらかざる人はくふべからず』。昨夜はよい宿よい酒だつた、此宿もよくないとはいへないが、うるさくて、おち／＼酒も飲めない。同宿七人（例の二人連れの猿まはしさんとまた泊り合せた）、その中の遍路夫婦は小さい子供を四人も連れてゐる、無智と野卑と焦燥とを憐れまずにはゐられない。

三月四日　晴、市中行乞、滞在、宿は同前。

九時半から二時半まで第一流街を行乞した、行乞相は悪くなかつた、所得も悪くなかつた。何となく疲労を感じる、緑平老の供養で一

杯やつてから活動へ出かける、妻吉物語はよかつた、爆弾三勇士には涙が出た、頭が痛くなつた、帰つて床に就いてからも気分が悪かつた。戦争——死——自然、私は戦争の原因よりも先づその悲惨にうたれる、私は私自身をかへりみて、私の生存を喜ぶよりも悲しむ念に堪へない。此宿は便利のよい点では第一等だ、前は魚屋、隣は煙草屋、そして酒屋はついそこだ、しかも安くて良い酒だ、地獄と極楽とのチヤンポンだ。一年中の好季節となつた、落ちついて働きたい！

三月五日　すべて昨日のそれらとおなじ。

大隈公園といふのがあつた、そこは侯の生誕地だつた、気持のよい石碑が建てられてあつた、小松の植込もよかつた、どこからともなく花のかをり——丁字花らしいにほひがたゞようてゐた、三十年前早稲田在学中、侯の庭園で、侯等といつしよに記念写真をとつたことなども想ひ出されてしようぜんとした。こゝのおかみさんは口喧しい人だ、女の悪いところをヨリ多く持つてゐる、彼女といつしよに生活してゐる亭主公の忍耐に敬服する、同宿のお遍路さんの妻君は顔も心も十人並だが、境遇上時々ヒステリツクになるらしい、無理もないとは思ふけれど、朝から夫婦喧嘩してるのを見聞してゐる、彼女をさげしむよりも人間のみじめさを感じる。子供といふものもおもしろい、オコトワリ／＼といつてついてくる子供もゐるし、可愛い掌に米をチヨツポリ握つてくれる子供もゐる、彼等に対して、私は時々は腹を立てたり、嬉しがつたりするのだから、私もやつぱり子供だ！佐賀市はたしかに、食べ物飲み物は安い、酒は八銭、一合五勺買へば十分二合くれる、大バカモリうどんが五銭、カレーライス十銭、小鉢物五銭、それでも食へる。緑平老の厚意で、昨日今日は余裕があるので、方々へたよりを書く、五枚十枚二十枚、何枚書いても書き足らない、もつと、もつと書かう。とにかく、たよりほどうれしいものはない。

　畳古きにも旅情うごく　　　□　樹影雲影猫の死骸が流れてきた・土手草萌えて鼠も行つたり来たりする　　　□　水鳥の一羽となつて去る　飾窓の牛肉とシクラメンと

三月六日　曇后雨、あとは昨日の通り。

行乞して、たま／＼出征兵士を乗せた汽車が通過するのに行き合せ

た、私も日本人の一人として、人々と共に真実こめて見送つた、旗がうごく、万歳々々々々の声——私は覚えず涙にむせんだ、私にもまだ／＼涙があるのだ！同宿の猿まはし君は愉快な男だ、老いた方は酒好きの、剽軽な苦労人だ、若い方は短気で几帳面で、唄好だ、長州人の、そして水平社的な性質の持主である、後者は昨夜も隣室の夫婦を奴鳴りつけてゐた、おぢいさんがおばあさんの蒲団をあげたのがいけないといふのだ、そして今夜はたまたま同宿の若いルンペンをいろ／＼世話して、鬚を剃つてやつたり、或る世間師に紹介したりしてやつてゐる。みんな早くから寝た、寝るより外ないから——鳴りだした、お隣のラヂオが、そして向ひの蓄音機が、そしてみんなそれに聴き入つた、浪花節、流行歌、等、々、——私はだん／＼センチになつた、いつぞや緑平老の奥さんにそれを聴かしていたゞいたことなども想ひだしたりして。同宿のルンペン青年はまづ典型なものだらうが、彼は『酒ものまない、煙草もすはない、女もひつぱらない、バクチもうたない、喧嘩もしない、たゞ働きたくない』怠惰といふことは、極端にいへば、生活意力がないといふことは、たしかに、ルンペンの一要素、——致命的条件だ。

座右銘としておこるな　しやべるな　むさぼるな　　ゆつくりあるけ　しつかりあるけ

三月七日　降つたり霽れたり、行程四里、仁井山、敉屋（二五・中）

朝早く出立、歩きだしてほつとした、ほんたうにうるさい宿だつた、ゆう／＼と歩く、いいなあ！今日の行乞相はよかつた、心正しければ相正し、物みな正し。今日は妙な日だつた、天候も妙だつたが人事も妙だつた、先づ、佐賀を立つて一里ばかり、畦草をしいて一服やつてゐると、刑事らしい背広服の中年男が自転車から下りて来て、何かと訊ねる、素気なく問答してゐたら——振向きもしないで——おとなしくいつてしまつた、それからまた一里、神崎橋を渡つて行乞しはじめたら、前の飲食店から老酔漢が飛びだして、行乞即時停止を命じた、妙な男があるものだわいと感心してゐるうちにドシヤ降りになつた、行乞は否応なしに中止、合羽を着て仁井山観音参拝、晴間々々を二時間ばかり行乞、或る家で、奥様が断つて旦那はお茶をあがれとい

ふ、ずゐぶん妙だ、それからまた歩いていると呼びとめられる、おかみさんが善根宿をあげませうといふ、此場合、頂戴するのがホントウだけれど、ウソをいつて体よく断る。……久しぶりに山村情調を味はつた、仁井山（第二十番札所地蔵院）はよいところ、といふよりも好きなところだつた、山が山にすりよつて水がさう／＼と流れてくる、山にも水にも何の奇もなくて、しかもひきつけるものがある、かういふところではおちつける、地蔵院の坊守さんがつゝましくお茶をよんで下さつた、しづかでいゝところですね、と挨拶したら、しづかすぎまして、と微笑した。同宿三人、みんな好人物、遠慮のない世間話で思はず夜がふけた。此宿のおかみさんはもう三年越しの起居不自由だ、老主人が何もかもやつてゐる、それを見るともなく見て、つく／″＼女は我まゝだなあと恐れ入らざるをえなかつた。彼はいつも、食べることばかりいふ、彼をあはれむ。『聖人に夢なし』『聖人には悔がないから』自分が与へられるに値しないことを自覚することによつて行乞がほんたうになります。ルンペンのよいところは自由！　主観的にも客観的にも。――失職コツクと枯草に寝ころんで語つた！

　三月八日　晴曇、行程三里、川上、藤見屋（投込四〇・下）

　神崎町行乞、うれしい事もあり、いやな事もあつた、私はあまり境に即しすぎてゐる。途中、なぐれコツクに話しかけられて、しばらく枯草の上で話す、不景気風はどこまでも吹いてゆく。川上といふところは佐賀市から三里、電車もかゝつてゐる、川を挾んだ遊覧地である、水も清く土も美しい、好きな場所である、春から秋へかけてはいゝだらうと思ふ。宿はよくない、たゞ気安いのが何よりだ、アグラをかいて飲んだ、酒はよかつた。同宿四人、その一人は旅絵師で川合集声といふ老人、居士ともいふべき人物で、私が旅で逢つた人の中で最も話せる人の一人だつた、話が面白かつた。執行（シユギヨウ）といふ姓、尼寺（ニイジ）といふ地名を覚えてゐる。句が出来なくなつた、出来てもすぐ忘れてしまふ。

　三月九日　曇、なか／＼冷たい、滞在休養。

　例の画家に酒と飯とを供養する、私が供養するのぢやない、私の友人の供養するのだから――友人から送つてくれたゲルトだから――お

礼がいひたかつたら、友人にいつて下さいといつたりして大笑ひしたことだつた。今日一日で旅のつかれがすつかりなくなつた。

三月十日　雨となつた、行程二里、小城町、常盤屋（二五・上）

降りだしたので合羽をきてあるく、宿銭もないので雨中行乞だ、少し憂欝になる、やつぱりアルコールのせいだらう、当分酒をやめようと思ふ。早くどこかに落ちつきたい、嬉野か、立願寺か、しづかに余生を送りたい。

酒やめておだやかな雨

こんな句はつまらないけれど、ウソはない、ウソはないけれど真実味が足りない、感激がない。夜は文芸春秋を読む、私にはやつぱり読書が第一だ。ほろりと前歯がぬけた、さみしかつた。追記——川上といふところは川を挟んだ部落だが、水が清らかで、土も美しい、山もよい、神社仏閣が多い、中国の三次町に似てゐる、いはゞ遊覧地で、夏の楽園らしい、佐賀市からは、そのために、電車が通うてゐる、もう一度来てゆつくり遊びたいと思うた。宿は高い割合に良くなかつた。春日墓所（閑叟公の墓所）は水のよいところ、水の音も水の味もうれしかつた。

三月十一日　晴、小城町行乞、宿は同前。

ずゐぶん辛抱強く行乞した、飴豆を貰つて食べる、焼芋を貰つて食べる、餅を貰つて食べる、そして酒は。……三日月といふ地名はおもしろい。此宿はよい、木賃二十五銭では勿体ない。同宿五人、みんなお遍路さんだ、彼等には話題がない、宿のよしあし、貰の多少ばりを朝から晩まで、くりかへしくりかへし話しつゞけてゐる。

三月十一日　また雨、ほんに世間師泣かせの雨だ、滞在。

札所清水山へ拝登、山もよく瀧もよかつた（珠簾瀧）、建物と坊主とはよくなかつたが。終日与太話、うるさくて何も出来ない、私も詮方なしに仲間入して暮らす。名物小城羊羹、頗る美人のおかみさんのゐる店があつて、羊羹よりもいゝさうな！

三月十三日　曇、晴れて風が強くなつた、行程六里、途中行乞、再

び武雄町泊、竹屋といふ新宿（三〇・下）

同宿は若い誓願寺さん、感情家らしかつた、法華宗にはふさはしいものがあつた。

・ここにおちつき草萌ゆる（改作）

三月十四日　曇、時々寒い雨が降つた、行程五里、また好きな嬉野温泉、筑後屋、おちついた宿だ（三〇・上）

此宿の主人は顔役だ、話せる人物である。友に近状を述べて、——

嬉野はうれしいところです、湯どころ茶どころ、孤独の旅人が草鞋をぬぐによいところです、私も出来ることなら、こんなところに落ちつきたいと思ひます、云々。

楽湯——遊於湯——何物にも囚へられないで悠々と手足を伸ばした気分。とにかく、入湯は趣味だ、身心の保養だ。

三月十五日　十六日　十七日　十八日　滞在、よい湯よい宿。

朝湯朝酒勿体ないなあ。

駐在所の花も真ッ盛り（追加）　　□・さみしい湯があふれる・鐘が鳴る温泉橋を渡る

余寒のきびしいのには閉口した、湯に入つては床に潜りこんで暮らした。雪が降つた、忘れ雪といふのださうな。お彼岸が来た、何となく誰もがのんびりしてきた。

ざれうたうれしのうれしやあつい湯のなかで　　またの逢瀬をまつわいなわたしやうれしの湯の町そだち　　あついなさけぢやまけはせぬたぎる湯の中わたしの胸で　　主も菜ツ葉もとけてゆく

もつとも温泉は満喫したが、嬉野ガールはまだ鑑賞しない！方々からのたより——留置郵便——を受取つてうれしくもありはづかしくもあつた、味々、雅資、元寛、寥平、緑平、俊の諸兄から。緑平老の手紙はありがたすぎ、俊和尚のそれはさびしすぎる、どれもあたゝかいだけそれだけ一しほさう感じる。こゝに落ちつくつもりで、緑、俊、元の三君へ手紙をだす、緑平老の返事は私を失望せしめたが、快くそ

の意見に従ふ、俊和尚の返事は私を満足せしめて、そして反省と精進とを投げつけてくれた。

とにもかくにも歩かう、歩かなければならない。こゝですつかり洗濯した、法衣も身体も、或は心までも。

春が来た旅の法衣を洗ふ

小入無間、大絶方所、自由自在なところが雲水の徳だ。今日は一室一人で一燈を独占して読書した（一鉢までは与へられないけれど）。先日来同宿の坊主二人、一は常識々々と口癖のやうにいふ非常識な男、他は文盲の好々爺。こゝの主人公は苦労人といふよりも磨かれた人間だ、角力取、遊人、世話役、親方、等々の境地をくゞつてきて本来の自己を造りあげた人だ、強くて親切だ、大胆であつて、しかも細心を失はない、木賃宿は妻君の内職で、彼は興行に関係してゐる、話す事も行ふ事も平々凡々の要領を得てゐる。彼からいろ／＼の事を聞いた、相撲協会内部の事、茶の事、女の事。……嬉野茶の声価は日本的（宇治に次ぐ）、玉露は百年以上の茶園からでないと出来ないさうである、茶は水による、水は小川の流れがよいとか、茶の甘味は茶そのものから出るのでなくて、茶の樹を蔽ふ藁のしづくがしみこんでゐるからだといふ、上等の茶は、ぱつと開いた葉、それも上から二番目位のがよいさうである。マヲトコツクル（勇作）の情話も愉快だつた。

三月十九日　お彼岸日和、うらゝかなことである、滞在。

今朝は出立するつもりだつたが、遊べる時に遊べる処で遊ぶつもりで、湯に入つたり、酒を飲んだり、歩いたり話したり。夢を見た、父の夢、弟の夢、そして敗残没落の夢である、寂しいとも悲しいとも何ともいへない夢だ。終日、主人及老遍路さんと話す、日本一たつしやな爺さんの話、生きた魚をたゝき殺す話などは、人間性の実話的表現として興味が深かつた。元寛君からの手紙を受取る、ありがたかつた、同時にはづかしかつた。

三月廿日　曇、小雪、また滞在してしまつた、それでよか／＼。

老遍路さんと別離の酒を酌む、彼も孤独で酒好き、私も御同様だ、

下物は嬉野温泉独特の湯豆腐（温泉の湯で煮るのである、汁が牛乳のやうになる、あつさりしてゐてうまい）、これがホントウのユドウフだ！夜は瑞光寺（臨済宗南禅寺派の巨刹）拝登、彼岸会説教を聴聞する、悔ゐなかつた。——

応無所住而生其心（金剛経）たゝずむなゆくなもどるなゐずはるな　　ねるなおきるなしるもしらぬも（沢庵）

先日来の句を思ひだして書いておかう。——

・湯壺から桜ふくらんだ　ゆつくり湯に浸り沈丁花　　　　□　寒い夜の御灯またゝく

三月廿一日　晴、彼岸の中日、即ち春季皇霊祭、晴れて風が吹いて、この孤独の旅人をさびしがらせた、行程八里、早岐の太田屋といふ木賃宿へ泊る（三〇・中）

少しばかり行乞したが、どうしても行乞気分になれなかつた、嬉野温泉で休みすぎたゝめか、俊和尚、元寛君の厚意が懐中にあるためか、いや／＼風が吹いたゝめだ。夕方、一文なしのルンペンが来て酒を飲みかけて追つぱらはれた、人事ぢやない、いろ／＼考へさせられた、彼は横着だから憎むべく憐れむべしである、私はつゝましくしてはゐるけれど、友情にあまり恵まれてゐる、友人の厚意に甘えすぎてゐる。

・ふるさとは遠くして木の芽

三月廿二日　曇、暖か、早岐町行乞、佐世保市、末広屋（三五・中）

たしかに春だ、花曇だと感じた。行乞相がよくない、よくない筈だ、身心がよくないのだ。佐世保はさすがに軍港街だ、なか／＼賑やかだ、殊に艦隊が凱旋して来たので、街は水兵さんでいつぱい、水兵さん大持てである。留置郵便落手、緑平老、俊和尚、苦味生君、いつもあたゝかい人々である。夕食後、市街を観て歩く、食べもの店の多いのと、その安いのに驚く、軍港街の色と音とがそこにもあつた。一杯ひつかけて寝る、新酒一合六銭、ぬた一皿二銭！

三月廿三日　雨后晴、休養、漫歩、宿は同前。

小降りになつたので、頭に利久帽、足に地下足袋、尻端折懐手の珍妙な粉装で、市内見物に出かける、どこも水兵さんの姿でいつぱいだ、港の風景はおもしろい。プロレタリヤ・ホールと大書した食堂もあれば、簡易ホテルの看板を出した木賃宿もある、一杯五銭の濁酒があるから、チヨンの間五十銭の人肉もあるだらう！安煙草はいつも売切れだ、口付は朝日かみのり、刻はさつき以上、バツトは無論ない、チヱリーかホープだ。

骨となつてかへつたかサクラさく（佐世保駅凱旋日）

塩湯へいつた、よかつた、四銭は安い、昨日の普通湯四銭は高いと思つたが。佐世保の道路は悪い、どろ／＼してゐる（雨後は）、まるで泥海だ、これも港町の一要素かも知れない。同宿は佐商入学試験を受ける青年二人、タケ（尺八吹）、そして競馬屋さん、この競馬は面白い、玩具の馬を走らせるのである、むろん品物が賭けてある、一銭二銭の馬券で一銭から十銭までの品を渡すのである。

三月廿四日　晴、春風がふく。

九時から三時まで市街行乞、行乞相はわるくなかつたが所得はよくなかつた。此宿もうるさい、早く平戸から五島へわたらうと思ふ、それにしても旅はさみしいな、行乞もつらいね。塩湯にゆつくり浸つてから二三杯かたむける、ありがたい。

・水が濁つて旅人をさびしうする

近来、気が滅入つてしようがないので、夜はレヴユーを観た。花はうつくしい、踊り子はうつくしい、あゝいふものを観てゐると煩悩即菩提を感じる。

をとことをんなとその影も踊るサクラがさいてサクラがちつて踊子踊る

蛙の踊、鷺の舞、さくら踊などが印象として残つた。

三月廿五日　晴、夜来の雨はどこへやら、いや道路のぬかるみへ！

今日も行乞しなければならない、食べなければならないから、飲まなければならないから、死なないから。……同宿の活辯の失業人と話しこんでゐるうちにもう十一時近くなつてしまつた、急いで支度をして出かける、行乞相はよかつた、所得もよかつた、三時過ぎ戻つた。例の塩風呂に浸つてから例の酒店で一杯やる、この店は安い、一合でも二合でも喜んで燗をしてくれる、下物は刺身五銭、天ぷらもも五銭、ぬた弐銭、湯豆腐弐銭、私のやうなノンベイでも三グワン握つて行くと、即身成仏が出来る、ギヤアテイ、ギヤアテイ、ボーヂ、ソワカ、などゝ親しい友に書いてやつた。九州西国第二十七番清岩寺へ拝登した、なか／＼よいところである、堂宇をもつと荘厳したらよからうと口惜しかつた。夜は万歳大会を観た、どうも此頃どうかしたのかも知れない、見物気分がいやに濃厚になつてゐる、が、とにかく愉快だつた、人間は何も考へないで馬鹿笑ひする必要がある、時々はね。

・ヒヨコ孵るより売られてしまつた

三月廿六日　晴、いよ／＼正真正銘の春だ、宿は同前。

いや／＼ながら午前中行乞（そのくせ行乞相はよろしいのだが）、そして留置郵便をうけとる、緑平老からのたよりはしんじつ春のおとづれだつた、うれしくてかなしうなつた。一風呂浴びて、一杯ひつかけて、そして一服やるのは何ともいへない、まさに現世極楽だ、極楽は東西南北、湯坪にあり、酒樽にあり、煙管にありだ！空に飛行機、海に船、街は旗と人とでいつぱいだ。午後は風が出てまた孤独の旅人をさびしがらせた。季節は歩くによろしく乞ふにものうい頃となつた。行乞流転に始終なく前後なし、ちゞめれば一歩となり、のばせば八万四千歩となる、万里一条鉄。方々へハガキをとばせる、とんでゆけ、そしてとんでこい、そのカヘシが、なつかしい友の言葉が、温情かよ。駅の待合室で偶然、九日を読むことが出来た、此新聞へは私は好感を持つてゐないけれど、それが熊本といふ観念を喚び起してなつかしかつた。同宿は売卜師、日本を股にかけて歩きまはつてゐるだけに、また口で食つてるだけに、話題も豊富だし話方も上手だつた、八卦見！　何とクラシツクでそしてポピユラアだらう。彼の話では、深切な巡査、情死娘と役所の小使爺、などが忘れられない。彼もなまけものだつた。世間師は、あればあるやうに、なければないやうに、や

つてゆくだけの技術を備へてゐる。何といつても世の中で、高いのは酒、安いのは米。今日は微苦笑寸劇にぶつかつた、――或る下駄店の前を戻るとき、安いのでぢつと見てゐると、店にゐた若いおかみさんが、さつそく御免とおつしやつた、違ひますよ、下駄を買はうかと思つてるんです、ずゐぶん気が早いですなといつてやつたら、赤い顔をして泣笑ひをした、――罪はないが快い出来事ぢやない。夕食後、佐世保会館を訊ねて行く、若い店員に訊ねたら、頭の悪い男で、いふことがちつとも要領を得ない、そのために、だいぶ歩き損つた（気の毒だが、あの青年は落伍者にしかなりえまい）、会館は堂々たる建物だつた、ホールも気持がよかつた、支那事変傷痍軍人後援会主催、全国同盟新聞社、森永製菓株式会社後援、映画と講演の夕といふのである、ざつくばらんにいへば、後援と商売とを一挙両得しようといふ愛国運動である、Ｉ大佐の講演では少しばかり教へられた、軍事映画では大に考へさせられた、『日本人が一番日本人を知らない』といふ言葉は穿つてゐると思つた。

三月廿七日　曇、終日臥床。

とう／＼寝ついてしまつたのだ、実は一昨夜つい飲んだ焼酎が悪かつたらしい、そして昨日食べた豆腐があたつたらしい、夜中腹痛で苦しみつゞけた、今日は断食で水ばかり飲んで寝た、夕方から少しづゝよくなつてきた。あまり健康だつたから、健康といふことを忘れてしまつてゐた、疾病は反省と精進とを齎らす。旅で一人で病むのは罰と思ふ外ない。

・よろこびの旗をふる背なの児もふる（旗行列）

病めば必ず死を考へる、かういふ風にしてかういふ所で死んでは困ると思ふ、自他共に迷惑するばかりだから。死！　冷たいものがスーツと身体を貫いた、寂しいやうな、恐ろしいやうな、何ともいへない冷たいものだ。今日はさすがの私も飲まなかつた（飲んだのはアルコールでなくて水ばかりだつた）、飲みたくもなく、また飲めもしなかつた。早く嬉野温泉に落ちつきたい、そして最少限度の要求に於て、最少範囲の情実に於て余生を送りたい。

三月廿八日　曇后晴、病痾やゝ怠る、宿は同前、滞在。

午近くまで寝てゐたが、行乞坊主が行乞しないのは一種の堕落だと考へて、三時間ばかり市街行乞、今日一日の生存費だけ頂戴した、勿躰ないことである、壮健な男一匹が朝から晩まで働らき通して八十銭位しか与へられないではないか（日傭人足）、私は仏陀の慈蔭、衆生の恩恵に感謝せずにはゐられないのである（これを具体的にいへば袈裟のおかげである）。今日は少しばかり飲んだ、昨日一日だけ飲まなかつたのが、一ヶ年間禁酒してゐたやうに感じた（いつぞや三日ばかり禁酒してゐた時はそんなに感じなかつたのに）、ほんたうに、酒好きの酒飲みは助からない、救はれない。今日、行乞中、いたゞかなければならない一銭をいたゞかなかつた、そしていたゞいてはならない五十銭をいたゞかなかつた――行乞相はよかつたのである、与へられるだけ、与へられるまゝに受けるべき行乞でなければならない、行乞はほんたうにむづかしいと思ふ。こゝには滞在しすぎた、シケたゝめでもある、病んだゝめでもある、しかしだらしなかつたゝめでもある、明朝は是非出立しよう。夜に入つてからまた雨となつた、風さへ加はつた、雨は悪くないけれど、風には困る、雨は身心を内に籠らせる、風は身心を外へ向はしめる、風は法衣を吹きまくるやうに、私自身をも吹きまくる、旅人に風はあまりに淋しい。今夜の同宿者はタケの三人連れ（タケとは尺八の事、随つて虚無僧の事）、何の彼のと喧嘩ばかりしてゐる、他の男は家出した息子を探してゐるといふ、こゝにも性の問題、血縁の問題がある、私は気の毒に思ふと同時にあさましく感じる。独り住むほど寂しきはなくまた安らけきはない、そして私に於てはその安らかさが寂しさを償うて余りあり。……

三月廿九日　からりと晴れてゐる、まだ腹工合はよくないが、いよいよ出立した、停滞する勿れ、行程三里、相ノ浦、川添屋（三〇・中）

物乞ふとシクラメンのうつくしいこと

恋塚といふ姓、夫婦株式会社といふ看板、町内規約に依り押売・物貰・寄附一切御断りといふ赤札。今晩は飲みすぎた、地球が急速度で回転した、私自身も急速度で回転した、一切が笑つた、踊つた、歌つた、そして消滅してしまつた！（此貨幣換算価値五十五銭）酔ひざめの夢を見た、息づまるほど悲しい夢だつた、あゝ生れたものは死ぬ

る、形あるものはくづれる、逢へば別れなれけばならない、――しかし、あゝ、しかしそれは悲しいことである。

三月三十日　晴、宿酔気味で滞在休養。

旅なればこそ、独身なればこそである、ありがたくもあり、ありがたくもない。此宿には子供が多い、朝から喧嘩で、泣いたり喚いたり、いやはやうるさいことである、母親は子供をどなるために生存してゐるやうだ。昨夜は酔うたけれど脱線しなかつた、脱線料がないからでもあつたらうが、多少心得がよくなつたからでもあらう（脱線してはならないのを、いひかへれば、脱線することが出来ないのを脱線するのが、脱線の脱線たるところだから）。行乞雑感の一つとして、――腹が立たないことの二種といふことについて考察した。悪女の深情といふ語句があるが私には関係ない、私には悪酒の深酔だ。同宿の老人がいろ／＼しんせつに宿の事や道筋の事を教へて下さつた、しつかりした、おちついた品のよい老人だつた、何のバイ（商売）か知らないが、よい人がおちぶれたのだらう。私はさつぱりと過去から脱却しなければならない、さうするには過去を清算しなければならない、私は否でも応でも自己清算に迫られてゐる。

・朝の山路で何やら咲いてゐる・すみれたんぽゝさいてくれた　　　　□・さくらが咲いて旅人である

三月三十一日　晴、行程八里、平戸町、木村屋（三十・中）

早く出発する、歩々好風景だ、山に山、水に水である、短汀曲浦、炭車頻々だ。江迎を行乞してゐて、ひよつこり双之介さんに再会して夢のやうに感じた、双之介さんはやつぱり不幸な人だつた。双之介さん、つと立つて何か持つてきた、ウエストミンスターだ、一本いたゞいてブルの煙をくゆらす、乞食坊主と土耳其煙草とは調和しませんね。日本百景九十九島、うつくしいといふ外ない。田平から平戸へ、山も海も街もうつくしい、ちんまりとまとまつてソツがない、典型的日本風景の一つだらう。テント伝道の太鼓が街を鳴らしてゆくのもふさはしい、お城の練垣が白く光つてゐる、――物みなうつくしいと感じた――すつかり好きになつてしまつた。当地は爆弾三勇士の一人、作江伍長の出生地である、昨日本葬がはな／″＼しく執行されたとい

ふ。今日の感想二三、——私は今日まで、ほんたうに愛したことがない、随つてほんたうに憎んだこともない、いひかへれば、まだほんたうに生活したことがないのだ。私は子供を好かない、子供に対しては何よりも『うるさい』と感じる、自分の子すら可愛がることの出来ない私が、他人の子を嫌つたところで無理はなからう。此宿はしづかでよろしい、お客といつては私一人だ、一室一燈一鉢一人だ（宿に対してはお気の毒だけれど）。

・春寒い島から島へ渡される

昨夜は何だか変な女がやつてきてうろ／＼してゐたやうだつた、をんなか、をんなか、をんなには用のない私だから、三杯機嫌でぐう／＼寝てしまつたが！（一日朝記）

四月一日　晴、まつたく春、滞在、よい宿だと思ふ。

生活を一新せよ、いや、生活気分を一新せよ。朝、大きな蚤がとんできた、逃げてしまつた、もう虱のシーズンが去つて蚤のシーズンですね。朝起きてすぐお水（お初水？）をくむ、ありがたしともありがたし。九時から二時まで行乞、そして平戸といふところは、人の心までもうつくしいと思つた、平戸ガールのサービスがよいかわるいかは知らない、また知らうとも思はない、しかし平戸はよいところ、何だか港小唄でもつくりたくなつた。しかし、しかし、しかし、行乞中運悪く二度も巡査に咎められた、そこで一句、——

巡査が威張る春風が吹く

「絵のやうな」といふ形容語がそのまゝこのあたりの風景を形容する、日本は世界の公園だといふ、平戸は日本の公園である、公園の中を発動船が走る、県道が通る、あらゆるものが風景を成り立たせてゐる。もし不幸にして嬉野に落ちつけなかつたら、私はこゝに落ちつかう、こゝなら落ちつける（海を好かない私でも）。美しすぎる——と思ふほど、今日の平戸附近はうらゝかで、ほがらかで、よかつた。今日、途上で巡査に何をしてゐるかと問はれて、行乞をしてると答へたが、無能無産なる禅坊主の私は、死なゝいかぎり、かうして余生をむさぼる外ないではないか、あゝ。平戸町内ではあるが、一里ばかり離

れて田助浦といふ、もつとうつくしい短汀曲浦がある、そこに作江工兵伍長の生家があつた、人にあまり知られないやうに回向して、——

・弔旗へんぽんとしてうらゝか

島！　さすがに椿が多い、花はもうすがれたが、けふはじめて鶯の笹鳴をきいた。鰯船がついてゐた、鰯だらけだ、一尾三厘位、こんなにうまくて、こんなにやすい、もつたいないね。平戸にはかなり名勝旧蹟が多い、——オランダ井、オランダ塀、イギリス館の阯、鄭成功の……

四月二日　晴、また腹痛と下痢だ、終日臥床。

緑平老の手紙は春風春水一時到の感があつた、まことに持つべきものは友、心の友である。April fool! 昨日はさうだつたが今日もさうらしい、恐らくは明日も——マコト　ソラゴト　コキマゼテ、人生の団子をこしらへるのか！しく／＼腹がいたむ、読書も出来ない、情ないけれど自業自得だ、病源はシヨウチユウだつたのだ。

四月三日　雨かと心配したが晴、しかし腹工合はよくない。

寝てばかりもゐられないので三時間ばかり町を行乞する、行乞相は満点に近かつた、それはしぼり腹のおかげだ、不健康の賜物だ、春秋の筆法でいへば、シヨウチユウ、サントウカヲタヾシウスだ。湯に入つて、髯を剃つて、そして公園へ登つた（亀岡城阯）、サクラはまだ蕾だが人間は満開だ、そこでもこゝでも酒盛だ、三味が鳴つて盃が飛ぶ、お辨当のないのは私だけだ。昨日も今日もノン　アルコール　デー、さびしいではありませんか、お察し申します。春風シユウ／＼といふ感じがした、歩いてをれば。

平戸よいとこ旅路ぢやけれど　　　旅にあるよな気がしない

同宿二人、一人は例の印肉屋老人、一人は老遍路さん、此人酒はのまないけれど女好き（一円位で助平後家はありますまいかなどゝといふ、人事ではないが）。（know thyself!）印肉屋老人は自称八十八才、赤い襦袢を着てゐる、酒のために助からない人間の一人だ、ありがたうございました（これはこれ蚯蚓の散歩なり）。もう一人の老遍路さんは、□□者のカンシヤク持、どうしても雰囲気にはあはないとい

ふ、まつたくさうだらうと思ふ、そのくせ彼はケチンボウのスケベイだ、しかし彼には好感が持てた、野宿常習遍路にして、飲むのは二円の茶！印肉老人また出かけて酔うて来て踊つた、踊つた、夜の白むまで踊つた、だまつて、ひとりでおとなしく——あゝ、かなしい、さみしい。また雨、ふるならふりやがれ！晴れて寝、曇つて歩く、善哉々々。

酔ひどれも踊りつかれてぬくい雨ふるさと遠い雨の音がする

けふの道はよかつた、汗ばんで歩いた、綿入二枚だもの、しかし、咲いてゐたのは、すみれ、たんぽゝ、げんげ、なのはな、白蓮、李、そしてさくら。……これだけの労働、これだけの報酬。酒代は惜しくないけれど酒は惜しい、物そのものを愛する、酒呑心理。人間はあまりたつしやだと横着になる。□□を、愛する夢を見た。とう／＼一睡もしなかつた、とろ／＼するかと思へば夢、悪夢、斬られたり、突かれたり、だまされたり、すかされたり、七転八倒、さよなら！

——（これから改正）——

時として感じる、日本の風景は余り美しすぎる。花ちらし——村総出のピクニツク——味取の総墓供養。

四月四日　雨、曇、晴、行程三里、御厨、とうふや（三〇・中）

ぽつり／＼歩いてきた、腹がしく／＼痛むのである、それでも三時間あまりは行乞した。腹工合は悪かつたが行乞相は良かつた。留置郵便を受取る、うれしかつた、すぐそれ／″＼へハガキをだす、ハガキでも今の私にはたいへんである。此宿はよい、電燈を惜むのが玉に疵だ（メートルだから）。ゆつくり飲んだ、わざ／＼新酒を買つて来て、そして酔つぱらつてしまつた、新酒一合銅貨九銭の追加が酔線を突破させたのである、酔中書いたのが前頁の通り、記念のために残しておかう、気持がよくないけれど（五日朝、記）。アルコールのおかげでグツスリ寝ることが出来た、昨夜の分までとりかへした、ナム　アルコール　ボーサー。

・草餅のふるさとの香をいたゞく　休み石、それをめぐつて草萌える・よい湯からよい月へ出た・はや芽ぶく樹で啼いてゐる・笠へぽつ

とり椿だつた　はなれて水音の薊いちりん・石をまつり緋桃白桃・みんな芽ぶいた空へあゆむ

四月五日　花曇り、だん／＼晴れてくる、心も重く足も重い、やうやく二里ほど歩いて二時間ばかり行乞する、そしてあんまり早いけれどこゝに泊る、松原の一軒家だ、屋号も松原屋、まだ電燈もついてゐない、しかし何となく野性的な親しみがある（二五・上）

自省一句か、自嘲一句かもう飲むまいカタミの酒杯を撫でてゐる（改作）

自戒三章もなか／＼実行出来ないものであるが、ちつとも実行出来ないといふことはない、或る時は菩薩、或る時は鬼畜、それが畢竟人間だ。今日歩いて、日本の風景——春はやつぱり美しすぎると感じた、木の芽も花も、空も海も。……風呂が沸いたといふので一番湯を貰ふ、小川の傍に杭を五六本打込んでその間へ長州釜を狭んである、蓋なんかありやしない、藁筵が被せてある、——まつたく野風呂である、空の下で湯の中にをる感じ、なか／＼よかつた、はいらうと思つたつてめつたにはいれない一浴だつた。同宿二人、男は鮮人の飴屋さん（彼はなか／＼深切だつた、私に飴の一塊をくれたほど）、女は珍重に値する中年の醜女、しかも二人は真昼間隣室の寝床の中でふざけちらしてゐる、彼等にも春は来たのだ、恋があるのだ、彼等に祝福あれ。今夜もたび／＼厠へいつた、しぼり腹を持ち歩いてゐるやうなものだ、二三日断食絶酒して、水を飲んで寝てゐると快くなるのだが、それがなか／＼出来ない！層雲四月号所載、井師が扉の言葉『落ちる』を読んで思ひついたが——落ちるがまゝに落ちるのにも三種ある、一はナゲヤリ（捨鉢気分）二はアキラメ（消極的安心）三はサトリ（自性徹見）である。世間師には、たゞ食べて寝るだけの人生しかない！

岩を掘り下げる音の春日影・植ゑられてもう芽ぐんでゐる・明日はひらかう桜もある宿です（木賃宿）　酒がやめられない木の芽草の芽・旅の法衣に蟻が一匹　まッぱだかを太陽にのぞかれる（野風呂）　旅やけの手のさきまで酒がめぐつた・梅干、病めば長い長い旅・こゝに住みたい水をのんで去る（添作）・あすもあたゝかう歩か

せる星が出てゐる・ふんどしは洗へるぬくいせゝらぎがあり（木賃宿）　春夜のふとんから大きな足だ　　　　□・枯草の風景に身を投げ入れる（改作）

四月六日　晴れたり曇つたり、風が吹いて肌寒かつた、どうも腹工合がよくない、したがつて痔がよくない、気分が欝いで、歩行も行乞もやれないのを、むりにこゝまで来た、行程わづかに二里、行乞一時間あまり、今福町、山代屋（二五・上）

死！　死を考へると、どきりとせずにはゐられない、生をあきらめ死をあきらめてゐないからだ、ほんたうの安心が出来てゐないからだ、何のための出離ぞ、何のための行脚ぞ、あゝ！

・こゝまでは道路が出来た桃の花・崖にかぢりつき崖をくづすこと・旅もをはりの、酒もにがくなつた　病んで寝てゐる家鴨さわがしい宿・忘れようとするその顔の泣いてゐる（夢）・どうでもよい木の芽を分けのぼる・さみしさ、あつい湯にはいる・水のうまさは芽ぐむものにもあたへて・食べるだけ食べてひとりの箸をおく　花ざかり豆腐屋で豆腐がおいしい・どこかで頭のなかで鴉がなく（夢幻）

此宿はよい、昨夜の宿とはまた違つた意味で、——飲食店だけでは、此不景気にはやつてゆけないので安宿を始めたものらしい、うどん一杯五銭で腹をあたゝめた、久しぶりのうどんだつた、おいしかつた。世間師には明日はない（昨日はあつても）、今日があるばかりである、今日一日の飯と今夜一夜の寝床とがあるばかりだ、腹いつぱい飲んで食つて、そして寝たとこ我が家、これが彼等の道徳であり哲学であり、宗教でもある。人間の生甲斐は味ふことにある、生きるとは味ふのだともいへよう、そして人間の幸は『なりきる』ことにある、乞食は乞食になりきれ、乞食になりきらなければ乞食の幸は味はへない、人間はその人間になりきるより外に彼の生き方はないのである。金がある間は行乞など出来るものでない、また行乞すべきものでもあるまい、私もとう／＼無一物、いや無一文になつてしまつた、ＳさんＧさんに約束した肌身の金もちびりちびり出してゐたら、いつのまにやら空つぽになつてしまつてゐる、これでよい、これでよいのだ、明日からは本気で行乞しよう、まだ／＼袈裟を質入しても二三日は食べ

てゐられるが。酒飲みは悪い酒を飲み、茶好きはよい茶を好む、前者では量、後者では質が第一の関心事らしい。かう腹工合が悪くては困つたものだ、これでは行乞相まで悪くなる、姿勢がくづれる、声が出なくなる、眼が光りだす、腹が立ちやすくなる。……今夜も寝つかれなくて、下らない事ばかり考へてゐた、数回目の厠に立つた時はもう五時に近かつた（昨夜は二時）。

四月七日　曇、憂欝、倦怠、それでも途中行乞しつゝ歩いた、三里あまり来たら、案外早く降りだした、大降りである、痔もいたむので、見つかつた此宿へ飛び込む、楠久、天草屋（二五・中）

ずゐぶんうるさい宿だ、子供が多くて貧乏らしい、客間は二階だが、天井もなければ障子もない、せんべいふとんが二三枚あるだけだ（畳だけは畳らしい）、屋根裏のがらんどうにぼつねんとしてゐると、旅愁といふよりも人生の悲哀に近いものを感じる、私はかういふ旅に慣れてゐるから、かういふ宿にかへつて気安さを感じるが（そこをねらつてわざと泊つたのでもあるが）普通の人々――我々の仲間はとても一夜どころか一時間の辛抱も出来まい。今日は県界を越えた、長崎から佐賀へ。どこも花ざかりである、杏、梨、桜もちらほら咲いてゐる、草花は道べりに咲きつゞいてゐる。食べるだけの米と泊るだけの銭しかない、酒も飲めない、ハガキも買へない、雨の音を聴いてゐる外ない。

　お地蔵さんもあたたかい涎かけ　汽車が通れば蓬つむ手をいつせいにあげ・何やら咲いてゐる春のかたすみに・明日の米はない夜の子を叱つてゐる（ボクチン風景）

此宿はほんたうにわびしい、家も夜具も食物も、何もかも、――しかしそれがために私はしづかなおちついた一日一夜を送ることが出来た、相客はなし（そして電燈だけは明るい）家の人に遠慮はなし、二階一室を独占して、寝ても起きても自由だつた、かういふ宿にはめつたに泊れるものでない（よい意味に於てもわるい意味に於ても）。よく雨の音を聴いた、いや雨を観じた、春雨よりも秋雨にちかい感じだつた、しよう／＼として降る、しかしさすがにどこかしめやかなところがある、もうさくら（平仮名でかう書くのがふさはしい）が咲き

つゝあるのに、この冷たさは困る。雪中行乞で一皮だけ脱落したやうに、腹いたみで句境が一歩深入りしたやうに思ふ、自惚ではあるまいと信じる、先月来の句を推敲しながらかく感じないではゐられなかつた。友の事がしきりに考へられる、Ｓ君、Ｉ君、Ｒ君、Ｇ君、Ｈ君、等、等、友としては得難い友ばかりである、肉縁は切つても切れないが、友情は水のやうに融けあふ、私は血よりも水を好いてゐる！天井がないといふことは、予想以外に旅人をさびしがらせるものであつた。今日は一つの発見をした、それは、私の腹いたみは冷酒が、いひかへれば酒屋の店頭でグツと呷るのが直接原因であることだつた。今夜も寝つかれない、読んだり考へたりしてゐるうちに、とうとう一番鶏が鳴いた、あれを思ひ、これを考へる、行乞といふことについて一つの考察をまとめた。

　四月八日　晴、雨後の春景色はことさらに美しい、今日は花祭である、七年前の味取生活をしぜんに想ひだしてなつかしがつたことである。

　今日は辛かつた、行乞したくないよりも行乞できないのを、むりやり行乞したのである、しなければならなかつたのである、先日来毎日毎日の食込で、文字通りその日ぐらしとなつてしまつたから詮方ない。やつと二里歩いて此町へ着いた（途中二度上厠）、そして三時間ばかり行乞した、おかげで飯と屋根代とは出来た、一浴したが一杯はやらない、此宿は清潔第一で、それがために客が却つて泊らないらしい、昨夜の宿とは雲泥の差だ、叶屋（二五・中）。旅に病んで、つく／″＼練れてゐない自分、磨かれてゐない自分、そしてしかも天真を失ひ純情を無くした自分、野性味もなく修養価値もない自分を見出さゞるを得なかつた。此宿の不人気である理由が解つた、すべて世間師は生活に労れてゐる、家庭的情味に餓えてゐる、彼等には宿が家である、そこには何よりもくつろぎとしたしみとがなければならない、いひかへれば at home な情緒が第一要件である、清潔とか何とかは第二第三の要件である、此宿のおかみさん抜目がなさすぎる、いたづらにきれい好きで、そしてふしんせつだ。街上所見の一――これはまた、うどんやが硝子戸をはめてカフヱー日輪となつてゐる、立看板に美々しく『スマートな女給、モダーンな設備、サーピス（セーピスぢやな

い）百パーセント』さぞ／＼非スマートな姐さんが非モダーなチヤブ台の間をよた／＼することだらう（カフヱー全盛時代には山奥や浦辺にもカフヱーと名だけつけたものがうよ／＼してゐた、駄菓子がカフヱーベニスだつたりした、もつともそこは入川に臨んでゐたから、万更縁がないでもなかつたが）。もう蕨を触れ歩く声が聞える、季節のうつりかはりの早いのにには今更のやうに驚かされる。同宿五人、私はひとりを守つて勉強した。

・山から自転車でさくら売つてきた　いつ咲いたさくらまで登つてゐる　腹底のしく／＼いたむ大声で歩く

四月九日　申分のない晴、町内行乞、滞在、叶屋。

今日はよく行乞した、こんなに辛抱強く家から家へと歩きまはつたことは近来めづらしい、お天気がよいと、身心もよいし、行乞相もよい、もつとも、あまりよすぎてもいけないが。行乞中、毎日、いやな事が二三ある、同時にうれしい事も二三ある、さしひきゼロになる、けふもさうだつた。花が咲いて留守が多い、牛が牛市へ曳かれてゆく、老人が若者に手をひかれて出歩く、子供は無論飛びまはつてゐる。花、花、花だ、満目の花だ、歩々みな花だ、『見るところ花にあらざるはなし』『触目皆花』である、南国の春では、千紫万紅といふ漢語が、形容詞ではなくて実感だ。風呂へいつたついでに駅へ立ち寄つたら、凱旋兵歓迎で人がいつぱいだ、わづか一兵卒（といつては失礼だけれど）を迎へるのに一村総出で来てゐる（佐賀市で出征兵士見送の時もさうだつた）、これだけの銃後の力があつて日本兵が強くなければ嘘だと思つた。

・蕨がもう売られてゐる　鳩も雀も燕までをりていたゞいてゐる　夫婦仲よく鉄うつやとんかん（鍛冶屋）・春風のボールにうたれた（行乞途上）　乞食となつて花ざかり

世間師にもいろ／＼ある、殊に僧形を装うていろ／＼の事をやつてゐるが、私は行乞を尊重する、ガラ（行乞の隠語）が一等よろしい、かへりみてやましいところがない（いや、すくない）。夕食後、春宵漫歩としやれる、伊万里も美しい町である、山も水も、しかし人はあまり美しくないやうである。今夜の同宿は三人、一人は活動に、一人

は浪花節にいつた、私は後に残つて読書。今夜もまた眠れない、眠れないのでいろ／＼のラチもない事を考へる——酒好きは一切を酒に換算する、これが一合、いや、これで一杯やれる、等、等、等。私はしよつちう胃腸を虐待する、だから、こんどのやうに胃腸が反逆するのはあたりまへだ。聖人に夢なく凡人に夢は多すぎる、執着のないところに夢はない、夢は執着の同意語の一つだ、私はよく悪夢におそはれる、そして自分で自分の憎愛の念のはげしいのにおどろく。

四月十日　曇后晴、行程八里、唐津市、梅屋（三〇・上）

八時から六時まで歩きつゞけた、黒川と波多津とで行乞、海岸路山間路、高低曲折の八里を歩いて来たのだから、山頭火いまだ老いず矣（但し途中キツケ水注入）。伊万里は勿論、途上、空家貸家売家がよく目につく、不景気は深刻である。今日の道はよかつた、自動車どころか行人もあまり見受けなかつた、しづかでうれしかつたが、同時に、道をまちがへてだいぶ無駄足をふんだ（訊ねる家も人もないやうなところで）。さすがに田舎は気持がよい、手掴みで米を出すやうな人もなく、逢ふ人はみな会釈する、こちらが恥づかしくなるほどだ。御大典記念の時計台がこしらへてある、いゝ思ひつきだけれど、あんなところにこしらへたのが、さて、どのくらゐ役立つだらうかとも考へられる。今日、はじめて蟇を聞き蛇を見た。やつぱり南国の風景は美しすぎる、築山のやうな山、泉水のやうな海、——まるで箱庭である。山ざくらはもう葉ざくらとなつてゐた。山村のお百姓さんはほんたうによく働らいてゐる、もつたいないと思つた、すまないと思つた。同宿四人、二人は夫婦、仲のよいことである。今夜の酒はうまかつた、酒そのものはあまりよくないのに。

学校も役場もお寺もさいたさいた　朝ざくらまぶしく石をきざむや　うたつてもおどつてもさくらひらかない・石がころんでくる道は遠い　馬に春田を耕すことを教へてゐる・しづかな道となりどくだみの芽　どつさり腰をすえたら芽　けふのおせつたいはたにしあへで

さつそく留置郵便をうけとる、どれもありがたかつたが、ことに緑平老のそれはありがたかつた。私は何も持つてゐない、たゞ友を持つてゐる、よい友をこんなに持つてゐることは、私のよろこびあり、ほ

こりでもある。緑平老のたよりによれば、朱鱗洞居士は無縁仏になつてしまつてゐるといふ、南無朱鱗洞居士、それでもよいではないか、君の位牌は墓石は心は、自由俳句のなかに、自由俳人の胸のうちにある。此宿の便所は第一等だ、ヤキ（木賃宿）には勿体ない、武雄のそれに匹敵するものだ。人間に対して行乞せずに、自然に向つて行乞したい、いひかへれば、木の実草の実を食べてゐたい。

四月十一日　晴后曇、行程六里、深江、久保屋（二五・上）

歩いてゐる、領布振山、虹ノ松原、松浦潟の風光は私にも写せさうである、それだけ美しすぎる。松原逍遙、よかつた、道は八方さわりなし。今夜はずゐぶん飲んだ（緑平兄の供養で）、しかし寝られないので、いろ／＼の事を考へる——其中庵のこと、三八九の事。

・朝からの騒音へ長い橋かゝる（松浦橋）　春へ窓をひらく・松風に鉄鉢をさゝげてゐる・松はおだやかな汐鳴り・へんろの眼におしよせてくだけて白波・旅のつかれの腹が鳴ります・しらなみの県界を越える　　　　□・わびしさに法衣の袖をあはせる

酒は嗜好品である、それが必需品となつては助からない、酒が生活内容の主となつては呪はれてあれ。木の芽はほんたうに美しい、花よりも美しい、此宿の周囲は桑畑、美しい芽が出てゐる、無果花の芽も美しい。

四月十二日　雨、滞在休養、ゆつたりと一日一夜を味はつた。

久しぶりに朝酒を味ふ、これも緑平老の供養である、ありがたしともありがたし。同宿は五人、みんな気軽な人々である、四方山話、私も一杯機嫌でおしやべりをした。しと／＼と降る、まつたく春雨だ、その音に聴き入りながらちびり／＼と飲む、水烏賊一尾五銭、生卵弐個五銭、酒二合十五銭の散財だ、うれしかつた。終日、句稿整理、私にはまだ自選の自信がない、しかし句集だけは出さなければならない、句集が出せなければ、草庵を結ぶことが出来ないのである。今夜の同宿は五人、その中に嫌な男がゐるので、私は彼等のグループから離れてゐた、彼は妙に高慢ちきで、人の揚足を取らう／＼としてゐる、みんなが表面敬意を見せて内心では軽蔑してゐるのに気がつかな

いで、駄法螺を吹いて威張つてゐる、よく見る型の一種だが、私の最も好かない型である、彼にひきかへて、鍋釜蓋さんは愉快な男だ、いふ事する事が愛嬌たつぷりである、お遍路婆さんも面白い、元気で朗らかだ、遊芸夫婦（夫は尺八、妻は尼）にも好感が持てた、こゝで思ひついたのだが、出来合の旅人夫婦は、たいがい、女房の方がずつと年上だ、そして妻権がなか／＼強い、彼は彼女の若い燕、いや鴉でもあらう。夜は読書、鉄眼禅師法語はありがたい。

四月十三日　晴、行程二里、前原町、東屋（二五・　）

からりと晴れ、みんなそれ／″＼の道へゆく、私は一路東へ、加布里、前原を五時間あまり行乞、純然たる肉体労働だ、泊銭、米代、煙草銭、キス代は頂戴した。今朝はおかしかつた、といふのは朝魔羅が立つてゐるのである、山頭火老いてます／＼壮なり、か！浜窪海岸、箱島あたりはすぐれた風景である、今日は高貴の方がお成になるといふので、消防夫と巡査とで固めてゐる、私は巡査に追はれ消防夫に追はれて、或る農家に身を潜めた、さてもみじめな身の上、きゆうくつな世の中である、でも行乞を全然とめられなかつたのはよかつた。初めて土筆を見た、若い母と可愛い女の子とが摘んでゐた。店のゴム人形がクル／＼まはる、私は読経しつゞける。犬ころが三つ、コロ／＼ころげてきた、キツスしたいほどだつた。孕める女をよく見うける、やつぱり春らしい。日々好日に違ひないが、今日はたしかに好日だつた。

・春あを／＼とあつい風呂

此宿は見かけよりもよかつた、町はづれで、裏坐敷からのながめがよかつた、遠山の姿もよい、いちめんの花菜田、それを点綴する麦田（此地方は麦よりも菜種を多く作る）その間を流れてくる川一すぢ、晴れわたつた空、吹くともなく吹く風、馬、人、犬、――すべてがうつくしい春のあらはれだつた。たゞ不便なのは酒屋が遠いことだ、三里はないけれど十丁位はある、それをわざ／＼一合買ひに行くのだから、ほんたうに酒飲は浮ばれない（もつとも此場合の酒は古機械にさす油みたいなものだが）。酒については、昨日、或る友にこんな手紙を書いた。――

……酒はつゝしんでをりますが、さて、つゝしんでも、つゝしんでもつゝしみきれないのが酒ですね、酒はやつぱり溜息ですよ（青年時代には涙ですが、年をとれば）、しかし、ひそかに洩らす溜息だから、御心配には及びません。……

四月十四日　雨となるらしい曇り、行程三里、生きの松原、その松原のほとりの宿に泊る綿屋（　・　）

行乞途上、わからずやが多かつたけれど、今日もやつぱり好日。女はうるさい、朝から夫婦喧嘩だ、子供もうるさい、朝から泣きわめく、幸にして私は一人だ。……朝鮮人はうるさいと思ふのに（此宿にも二人泊つてゐる、朝鮮人としての悪いところばかり持つてゐるらしい）、亭主持つなら朝鮮人（遊ばせて可愛がつてくれるから）とおばあさんがいふ！休んでゐると、犬が尾をふりあたまをふつてやつてくる、からだをすりよせる、しかし私はお前にあげるものを持たない、すまないね。どうでもといはれて、病人のために読経した、慈眼視衆生、福聚海無量、南無観世音菩薩、彼に幸あれ。今年はじめての松露を見た（店頭で）、松原らしい気分になつた、私もすこし探したが一個も見つからなかつた。松に風なく松露が。……うるふといふ宿場はちつともうるほさなかつた。

　すこし濁つて春の水ながれてくる・旅人のふところでほんにおとなしい児・春の街並はぢかれどほしでぬけた・あたゝかい小犬の心がようわかる　春のくばりものとし五色まんぢゆう　　　再録・朝からの騒音へ長い橋かゝる・松はおだやかな汐鳴り・遍路たゞずむ白浪おしよせる・わびしさは法衣の袖をあはせる　　　□・旅の或る日の松露とる　花ぐもりのいちにち石をきざむばかり

此宿はよい、家の人がよい、そして松風の宿だ、といふ訳でずゐぶん飲んだ、そしてぐつすり寝た、久しぶりの熟睡だつた、うれしかつた。途中、潤（うるふ）といふところがあつた、うるほさないところだつた。私は此頃、しやべりすぎる、きどりすぎる、考へよ。同宿六人、みんなおへんろさんだ、その中の一人、先月まで事件師だつたといふ人はおもしろいおへんろさんだつた、ホラをふいてエラがる人だけれど憎めない人間だつた。木賃宿に於ける鮮人（飴売）と日本人

（老遍路）との婚礼、それは焼酎三合、ごまめ一袋で、めでたく高砂になつたが、かなしくもうれしいものだつた。

四月十五日　夜来の雨が晴れを残していつた、行程二里、福岡へ予定の通り入つた、出来町、高瀬屋（　・中）

この町――出来町――はヤキとヤキを得意とする店ばかりだ（久留米の六軒屋と共に九州のボクチン代表街だ）。朝早く起きて松原を散歩した、かういふ旅にかういふ楽がある。午前中の行乞相はよくなかつたが、午後のそれはよかつた、行乞もなか／＼むつかしいものである。山吹、連翹、さつき、石楠花、――ことしはじめて見る花が売られてゐた。博多名物――博多織ぢやない、キツプ売（電車とバス）、禁札（押売、物貰、強請は警察へ）、と白地に赤抜で要領よく出来てゐる（西新町のそれはあくどかつた、字と絵とがクドすぎる）。西公園を見物した、花ざかりで人でいつぱいだ、花と酒と、そして、――不景気はどこに、あつた、あつた、それはお茶屋の姐さんの顔に、彼女は欠伸してゐる。街を通る、橋を渡る、ビラをまいてゐる、しかし私にはくれない、ビラも貰へない身の上だ、よろしい、よろしい。酒壺洞君を搾取した、君は今、不幸つゞきである、君に消災妙吉祥。……さくら餅といふ名はいゝ、餅そのものはまづくとも。

・松風のゆきたいところへゆく・洗へばよう肥えとるサカナ・松風すゞしく人も食べ馬も食べ・遍路さみしくさくらさいて・さくらさくらさくさくらちるさくら　　　　□　いちにち働らいた塵をあつめてゐる　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（市役所風景）　鈴がなるよう働らいた今日のをはりの

此宿はよい、何となくよい（満員なので、私は自分から進んで店に陣取つた、明るくて、かへつて静かでよろしい）、同宿は十余人、その中の六人組は曲搗の粟餅屋さんである、そしてその老親方は、五六年前、山陰で一夜同宿会談したことがある、江戸ツ児で面白い肌合だ（私が彼を覚えてゐたやうに、彼もまた私を覚えてゐた）。今日もよい日だつた、ほんたうにほどよい日だつた、ほどよく酔ひ、ほどよく眠つた。よい食慾とよい睡眠、これから人生の幸福が生れる。

四月十六日　薄曇、市街行乞、宿は同前。

福岡は九州の都である、あらゆる点に於て、——都会的なものを感じるのは、九州では福岡だけだ。今日の行乞相はよかつた、水の流れるやうだつた（まだ雲のゆくやうではないけれど）、しかし福岡は——市部はどこでも——行乞のむつかしいところ、ずゐぶんよく歩いたが、所得は、やつと食べて泊つて、ちよつぴり飲めるだけ。一銭、一銭、そして一銭、それがたゞアルコールとなるばかりでもなかつた、今日は本を買つた（達磨大師についての落草談）、読んで誰かにあげやう、緑平老にでも。春を感じる、さくらはあまり感じない、それが山頭火式だ。夜は中洲の川丈座へゆく、万歳オンパレードである、何といふバカらしさ、何といふホガらしさ。

・昼月に紙鳶をたたかはせてゐる・水たまりがほがらかに子供の影うつす・あたゝかに坊やは箱の中に寝てゐる

——飲んだ、歩いた、歩いた、飲んだ——そして今日が今夜が過ぎてしまつた、たゞそれだけ、生死去来はやつぱり生死去来に御座候、あなかしこ。夜は万歳を聞きに行つた、あんまり気がクサ／＼するから、そしてかういふ時にはバカらしいものがよいから、——可愛い小娘がおぢさん／＼ていつて好意を示してくれた。世の中味噌汁！　此言葉はおもしろい。今夜、はじめて蕨を食べた、筍はまだ。

四月十七日　花見日和、午前中行乞、宿はおなじく。

わざと中洲——福岡市に於ける第一流の小売商店街——を行乞した、行乞相はよかつたけれど、所得は予想通りだつた、二時間で十五銭、まあ百軒に一軒いたゞいたぐらゐだらう、いたゞかないのになれて、いたゞくと何だかフシギなやうに感じた。大浜の方は多少出る、少し歩いて、約束通り酒壺洞房を訪れる、アルコールなしで、短冊六十枚ばかり、半切十数枚書いた（後援会の仕事の一つである）、悪筆の達筆には主客共に驚いたことだつた、折々深雪女来訪、酒がまはれば舌もまはる、無遠慮なヨタはいつもの通り、夕方、酒君と共に農平居を襲ふ、飲んだり話したり、山頭火式、農平式、酒壺洞式、十時過ぎて宿に戻る、すぐ、ぐつすり寝た。どうも近来飲みすぎる、友人の厚情に甘えるのもよくないけれど、自分を甘やかしてもよくない。

・星がまたたく旅をつづけてきてゐる・おわかれのせなかをたたい

てくれた（農平居）

一握の麦、それが私をよくした、といふのは、今日、行乞中に或る家で、子供が米と間違へて麦を持つてきた、受けては困るけれど、受けなければなほ困る（いつぞや佐世保で志だけ受けるといつたら、その子供が泣きだした）、ハンカチーフでいたゞいた、そして宿まで持つて帰つて鶏にやつたら食べてくれない、ボクチン宿のニハトリなんてゼイタクなものだ。

四月十八日

けさも早く起きたが雨だ、起きてくる誰もが不機嫌な顔をしてゐる、雨ほど世間師に嫌なものはないのに、此不景気だ、それやこれやで、とう／＼喧嘩がはじまつた、呶鳴る、殴る、そして止める。うるさいから、ぢつとしてゐるのもいやだから、十時過ぎてから、合羽を着て出立する、一時間ばかりで晴れてきた、どし／＼歩いて神湊まで八里、久々で俊和尚に相見、飲んで話して書いて。――俊和尚が浮かない顔をしてゐると思つたら、夫婦喧嘩して奥さんが実家へ走つたといふ、いろ／＼宥めて電話をかけさせる、私と俊和尚とは性情に於て共通なものを持つてゐる、それだけ一しほ人事とは思へない、彼も憂欝、私も憂欝になる。筑前の海岸一帯は美しい松原つゞきだが、殊に津屋崎海岸の松原は美しい、津屋崎の町はづれの菜の花も美しかつた、いちめんの花菜で、めざましいながめである（こゝでまた、筒井筒振分髪のＨ子をおもひだした）。風がふいた、笠どころか、からだまで吹きまくるほどの風だ、旅人をさびしがらせるよ。今夜は俊和尚の典座だ、飯頭であり、燗頭であつた、ふらん草のおひたし、山蕗の甘煮、蕨の味噌汁、みんなおいしかつた、おいしく食べてぐつすり寝た。かういふ手紙を書いた、それほど俊和尚はなつかしい人間だ。

――

また松のお寺の客となりました、俊禅師貎下の御親酌には恐入りました、サービス百パーセント、但しノンチツプ、折から庭の桜も満開、波音も悪くありません。……　　　□　麦田花菜田長い長い汽車が通る　霞の中を友の方へいそぐ　霞のあなたで樹を伐る音をさせてゐる　水音を踏んで立ちあがる　晴れて風ふく銅像がある・早泊り

して蘭竹の風が見える（改作）　ひさ／″＼きて波音のさくら花ざかり（隣船寺）

四月十九日　晴、そして風、行程三里、赤間町、小倉屋（三〇・中）

奥さんが夜中に戻つて来られたので、俊和尚も安心、私も安心だ、しかしかういふ場合に他人が狭つてゐるのはよくないので、早々草鞋を穿く、無論、湯豆腐で朝酒をやつてからのことである。行乞気分になれないのを行乞しなければならない今日だつた、だいたい、友を訪ねる前、友を訪ねた後は、所謂里心が起るのか、行乞が嫌になつて、いつも困るのだが。もう山吹が咲き杜鵑花が蕾んでゐる、紫黄のきれいなことはどうだ。同宿五人、その中の婆さんは着物は持つてゐるが銭は持つてゐない、長崎からはる／″＼門司にゐる息子を尋ねてゆくといふ、同宿の人々がいろ／＼世話してあげたが、私はわざと知らない顔をしてゐた、我不関焉といふのではないが、彼女には好感を持てない何物かゞあるやうだ、明朝たばこ銭でもあげやうか、——彼女の存在は私の心を暗くした。筍を食べたが、料理がムチヤクチヤなので、あんまりおいしくなかつた、うまい筍で一杯やりたいものだ。

四月廿日　曇、風、行程四里、折尾町、匹田屋（三〇・中）

風にはほんたうに困る、塵労を文字通りに感じる、立派な国道が出来てゐる、幅が広くて曲折が少なくて、自動車にはよいが、歩くものには単調で却つてよくない、別れ路の道標はありがたい、福岡県は岡山県のやうに、此点では正確で懇切だ。行乞相はよかつた、風のやうだつた（所得はダメ）。省みて、供養をうける資格がない（応供に値するものは阿羅漢以上である）、拒まれるのが当然である、これだけの諦観を持して行乞すれば、行乞が修行となる、忍辱は仏弟子たるものゝ守らなければならない道である、踏みつけられて土は固まるのだ、うたれたゝかれて人間はできあがる。

　旅のこどもが犬ころを持つてゐる（ルンペン）・けふもいちにち風をあるいてきた　山ふところの水涸れて白い花・風のトンネルぬけてすぐ乞ひはじめる　もう葉桜となつて濁れる水に

同宿は土方君、失職してワタリをつけて放浪してゐる、何のかのと話しかける、名札を書いてあげる、彼も親不孝者、打つて飲んで買うて、自業自得の愚をくりかへしつゝある劣敗者の一人。

四月廿一日　晴、申分なし、行程三里、入雲洞房、申分なし。

若松市行乞、行乞相と所得と並行した、同行の多いのには驚いた、自省自恥。若松といふところは特殊なものを持つてゐる、港町といふよりも船着場といつた方がふさはしい、帆柱林立だ（和船が多いから）、何しろ船が多い、木造、鉄製、そして肉のそれも！諺文の立札がある、それほど鮮人が多いのだらう、檣のうつくしい港として、長崎が灯火の港であることに匹敵する如く。鮮人宛の立札があるのは、諏訪神社に外人向のお※札（英語の）があると好対照だ。入雲洞君はなつかしい人だ、三年ぶりに逢うて熊本時代を話し、多少センチになる。……金魚売の声、胡瓜、枇杷、そしてこゝでも金盞花がどこにも飾られてゐた。酢章魚がおいしかつた、一句もないほどおいしかつた、湯あがりにまた一杯が（実は三杯が）またよかつた、ほんに酒飲みはいやしい。

煙突みんな煙を吐く空に雲がない（八幡製鉄所）　ルンペンが見てゐる船が見えなくなつた（若松風景）　ぎつしりと帆柱に帆柱がうらゝか（　〃　）　　入雲洞房二句　窓にちかく無花果の芽ぶいたところ　ひさしぶり話してをります無花果の芽　　□・もう死ぬる金魚でうつくしう浮く明り

徹夜して句集草稿をまとめた、といふよりも、句集草稿をまとめてゐるうちに夜が明けたのだ、とにかくこれで一段落ついた、ほつと安心の溜息を洩らした、すぐ井師へ送つた、何だか子を産み落しやうな気持、いや、私としては糞づまりを垂れ流したやうな心持である（きたない表現だけれど）。

四月廿二日　曇、あちらこちら漫歩、八幡市、山中屋（三〇・中）

朝酒、等、等、入雲洞さんの厚情が身心にしみる、洞の海を渡つて、木村さんを訪ねる、酒、それから同行して小城さんの新居へ、また酒、そしてまた四有三居で酒、酒、酒。木村さんに連れられて、や

つと宿を見つけて泊る、ぐつすり寝た、二夜分の睡眠だ。四有三さんに——（廿三日、小倉から）。

昨日はまるで酔ひどれの下らなさ図々しさを見せるためにお訪ねたやうなものでしたね、寄せ書きした頃から何が何だか解らなくなりましたよ、でも梅若葉のあざやかさ、おひたしのおいしさは、はつきり覚えてゐるから不思議です。……

入雲洞さんから、敷島の百本入を一函頂戴した（双之介君からウエストミンスター、酒壺洞君からチエスターフイールドを貰つたのと共に漫談のいゝ材料だ）。洞海（ドウカイ）或は洞の海（ホラノウミ）はいゝ、此の海を中心として各市が合併して大都市を形成する計画があるさうだが、それはホントウのスバラシイ事業だ。美しい女が美しい花を持つてゐた。子供の遊び、今日此頃は軍隊ごつこ戦争ごつこだ、子供は正直で露骨、彼等は端的に時代の風潮を反映する、大日本主義！

朝曇りのボロ船が動かない　汐風を運ばれる鰒がふくれてゐる　きたない水がぬくうて葦の芽・鉄板をたゝいても唄うたつてゐる　警察署の無花果の芽・帆柱ばつかりさうして煙突ばつかり（若松から八幡へ）　竹藪あかるう子供もできた（小城氏新居）　あかるく竹がそよいでゐる

四月廿三日　雨、風、行程二里、小倉市、三角屋（三〇・中）

わざと風雨の中を歩いた、先日来とかく安易になつた気持を払拭しようといふ殊勝な心がけからである。小倉まで来て、放送居士、ではない、放送局下の惣三居士を訪ねる、初相見にしては始中終見、よばれて、しやべつて、いたゞいて、それから。——酔うた、酔うた、ヱロ街散歩、何とぬかるみの変態的興味、シキシマを一本づゝ彼女達に供養した。

びつしよりぬれてゆくところがない・風の建物の入口が見つからない　どうやら霽れてくれさうな草の花　春雨の放送塔が高い・移りきて無花果も芽ぶいてきた（惣三居）

廃棄工場（発電所）、そこにはデカダン的で男性的なものがあつ

た、なか／＼句にならない。寝十方花庵、月庵——惣三居士の面目。雲水悠々として去来に任す、——さういふ境界に入りたい。

　雨なれば雨をあゆむ

　此一句（俳句のつもりではありません）を四有三さんの奥さんに呈す。

　〓ＪＯＧＫ、ふるさとからちりはじめた

　此一句（俳句のつもり）を白船老に呈す。

　雨がふつてもほがらか

　此一句を俊和尚に呈す。

　四月廿四日

　雨、春雨だ、しつぽりぬれる、或はしんみり飲める、そしてまた、ゆうぜん遊べる春雨だ、一杯二杯三杯、それはみな惣三居士の供養だ。朝湯朝酒、申分なくて申分があるやうな心地がする、さてそれは何だらう。読書、けふはすこし堅いものを読んだ。昨夜はたしかに酔うた、酔うたからこそヱロ街を散歩したのだが、脱線しなかつた、脱線しないといふことはうれしいが、同時にかなしいことでもある（それは生活意力の減退を意味するから、私の場合に於ては）。此宿はよかつた、よい宿へとびこんだものだと思つた、きれいで、しんせつで、何かと便利がよろしい。同宿四人、老人は遊人だらう、若者は行商人、中年女は何だか要領をえない巡礼さん、最後の四十男はお稲荷さん、蹴込んで張物の狐をふりまはす営業、おもしろい人物で、おしやべりで、苦労人で辛抱人だ。夕方、そこらを散歩する、芭蕉柳塚といふのがあつた、折からの天神祭で、式三番叟を何十年ぶりかで見た、今夜はきつと少年の日の夢を見るだらう！

　・晴れたり曇つたり籠の鳥　曇り日、珠数をつなぐ

　四月廿五日　晴、行程七里、直方市外、藤田屋（二〇・上）

　どうしても行乞気分になれないので、歩いて、たゞ歩いてこゝまで来た、遠賀川風景はよかつた、身心がくつろいだ。風が強かつた、は

じめて春蝉を聞いた、銀杏若葉が美しい、小倉警察署の建物はよろしい。此宿はほんたうによい、すべての点に於て（最初、私を断つたほどそれほど客を撰択する）。

　　風の中から呼びとめたは狂人だつた・寝ころ□□はもう春蝉の二声三声

　四月廿六日　曇后晴、市街行乞、宿は同前。

　雲雀の唄（飼鳥）で眼が覚めた、ほがらかな気分である、しかし行乞したいほどではない、といつて毎日遊んではゐられないので（戸畑、八幡、小倉では行乞しなかつた、今日が五日ぶりで）五時間行乞、行乞相は悪くなかつた、所得も、世間師連中が取沙汰するほど悪くもなかつた。朝のお汁で山椒の芽を鑑賞した。花売野菜売の女群が通る、通る。午後はまつたく春日和だつた。このあたりを勘六といふ、面白い地名である、そして安宿の多いのには驚ろいた、三年ぶりに歩いてみる、料理屋などの経営難から、木賃宿の看板をぶらさげてゐるのが多い、不景気、不景気、安宿にも客が少いのである、安宿がかたまつたゐるのは、九州では、博多の出来町、久留米の六軒屋、そしてこの勘六だらう。遠賀川の河床はいゝと思つた、青草の上で、放牧の牛がのそり／＼遊んでゐる、――旅人の眼にふさはしい。洗濯したり、整理したり、裁縫したり、身のまはりをきれいにする、男やもめに蛆がわく、虱がぬくいので、のそ／＼這ひだして困りますね！夜は三杯機嫌で雲心寺の和尚を攻撃した、酒、酒、そして酒、酒よりも和尚はよかつた、席上ルンペン画家の話も忘れない、昆布一罎いたゞいた。

　ルンペンとして二人の唄□あんまりうつくしいチユーリツプ枯れた

　四月廿七日　雨、后曇后雨、後藤寺町、朝日屋（二五・中）

　雨ではあるし、酔はさめないし、逢ひたくはあるし、――とても歩いてなんかゐられないので、急いで汽車で緑平居へ、あゝ緑平老、そして緑平老妻！泊るつもりだつたけれど、緑平老出張となつたので私もこゝまで出張した。

　　撫でゝ見て美しい芽だ・牛が遊んでゐるところで遊ぶ　　　緑平

居・ボタ山なつかしい雨となつた・雨のボタ山がならんでゐる　香春をまともにまた逢へた・枝をさしのべて葉ざくら・草もそのまゝ咲いてゐる　唐豆ヤタラに咲かせてゐる・そつけなく別れてゆく草の道・別れてきて水に沿うて下る　　　　□・やつと芽ぶいたは何の木ぞ

　四月廿八日　雨、休養、終日読書、宿は同前、なか／＼よい、もつと掃除が行届くといゝのだが。

　悠然として春雨を眺めてゐられる、それも緑平老のおかげだ、夜はあんまり徒然だから活動見物、日活映画のあまいものだつたが、十銭はとにかく安い。同宿数人、その中の二人は骨董仲買人、気色が変つてゐて多少の興味をひいた。ちよんびり焼酎を飲んだら腹工合があやしくなつた、もう焼酎には懲りた、焼酎との絶縁が私の生活改善の第一歩だ。

　・ぬかるみをふんできてふるさとのうた・炭坑のまうへきれいな星　字幕消えてうまさうな水が流れる流れる（映画）　梅若葉柿若葉そして何若葉　明日は明日の事にして寝るばかり

　四月廿九日　晴、後藤寺町行乞、伊田、筑後屋（三〇・中）

　すつかり晴れた、誰もが喜んでゐる、世間師は勿論、道端の樹までがうれしさうにそよいでゐる。やつぱり行乞したくない、したくないけれどしなければならない、やつと食べるだけ泊るだけいただく（ずゐぶんハヂカれた、いや／＼でやるんだから、それがあたりまへだらう）。歯が痛む、春愁とでもいふのか、近くまた二本ぬけるだらう。後藤寺町の丸山公園はよろしい、葉桜がよろしい、それにしても次良さんをおもひださずにはゐられない、一昨年はあんなに楽しく語りあつたのに、今は東西山河をへだてゝ、音信不通に近い。白髪を剃り落してさつぱりした（床屋の職人、多分鮮人だらうが、乱暴に取扱つた）。

　逢ふまへの坊主頭としておく

　香春岳にはいつも心をひかれる、一の岳、二の岳、三の岳、それがくつきりと特殊な色彩と形態とを持つて峙えてゐる、よい山である、忘れられない山である。此宿も悪くない、五銭奮発して上客なんだか

ら、部屋もよく夜具もよかつたが、夜おそく、夫婦者が泊つたので大きい部屋へ移されたのは残念だつた、折角、一室一燈一人で、読書してゐたのに。

四月卅日　雨后曇、后晴、再び緑平居に入る。

雨、雨、かう雨がふつてはやりきれない、合羽を着て、水に沿うて、ぶら／＼歩いて、緑平居の客――厄介な客だと自分でも思つてゐる――となる。雨後の新緑のめざましさ、生きてゐることのよろこびを感じる。夕方、予期した如く、緑平老が出張先から戻つて来た、酒、話、ラヂオ、……友情のありがたさよ。

窓一つ芽ぶいた　旅空の煙突ばつかり　焼芋つゝんで下さつた号外で・ぬけさうな歯を持つて旅にをる　ぬけた歯を見詰めてゐる　□　お留守に来て雀のおしやべり（緑平居）

五月一日　まつたく五月だ、緑平居の温情に浸つてゐる。

熱があるとみえて歯がうづくには困つたが、洗濯したり読書したり、散歩したり談笑したり。彼女からの小包が届いてゐた、破れた綿入を脱ぎ捨てゝ袷に更へることが出来た、かういふ場合には私とても彼女に対して合掌の気持になる。廃坑を散歩した、アカシヤの若葉がうつくしい、月草を摘んできて机上の壺に※して置く。放哉書簡集を読む、放哉坊が死生を無視（敢て超越とはいはない、彼はむしろ死に急ぎすぎてゐた）してゐたのは羨ましい、私はこれまで二度も三度も自殺をはかつたけれど、その場合でも生の執着がなかつたとはいひきれない（未遂にをはつたがその証拠の一つだ）。筍を、肉を、すべてのものをやはらかく料理して下さる奥さんの心づくしが身にしみた（私の歯痛を思ひやつて下さつて）。緑平老は、あやにく宿直が断りきれないので、晩餐後、私もいつしよに病院へ行く、ネロ（その名にふさはしくない飼犬）もついてくる。緑平居に多いのは、そら豆、蕗、金盞花である、主人公も奥さんも物事に拘泥しない性質だから、庭やら畑やら草も野菜も共存共栄だ、それが私にはほんたうにうれしい。

廃坑の月草を摘んで戻る　廃坑、若葉してゐるはアカシヤ・ここ

にも畑があつて葱坊主　へたくそな鶯も啼いてくれる・夕空、犬がくしやめした　ひとりものに犬がじやれつく　香春晴れざまへ鳥がとぶ　　　□　何が何やらみんな咲いてゐる（緑平居）

五月二日

五月は物を思ふなかれ、せんねんに働け、といふやうなお天気である、かたじけないお日和である、香春岳がいつもより香春岳らしく峙つてゐる。早く起きる、冷酒をよばれてから別れる、そつけない別れだが、そこに千万無量のあたゝかさが籠つてゐる。四里ばかり歩いて、こゝまで来て早泊りした、小倉の宿はうるさいし、痔もよくないし、四年前、長い旅から緑平居へいそいだときの思出もあるので。此宿は宿としてはよい方ではないけれど、山家らしくて、しつとりと落ちついてゐられるのが好きである。今日の道はよかつた、いや、うつくしかつた、げんげ、たんぽゝ、きんぽうげ、赤いの白いの黄ろいの、百花咲きみだれて、花園を逍遙するやうな気分だつた、山もよく水もよかつた、めつたにない好日だつた（それもこれもみんな緑平老のおかげだ）、朝靄がはれてゆくといつしよに歯のいたみもとれてきた。麦の穂、苗代つくり、藤の花、鮮人の白衣。

　雀よ雀よ御主人のおかへりだ（緑平老に）　香春をまともに別れていそぐ　別れてきた荷物の重いこと　別れてきて橋を渡るのである　靄がふかい別れであつた　ひとりとなつてトンネルをぬける　なつかしい頭が禿げてゐた（緑平老に）・塵いつぱいの塵をこぼしつゝゆく　石をきざみ草萠ゆる　若葉清水に柄杓そへてある・住みなれて筧あふれる・あるけばきんぽうげすわればきんぽうげ　　　□・衣がへ、虱もいつしよに捨てる　　　□　山寺ふけてゆつくり尿する（改作・福泉寺）

此宿の田舎らしいところはほんたうにうれしかつた、水もうまかつた、山の水としてもうまかつた、何度飲んだか分らない、何杯も何杯も飲んだ、腹いつぱい飲んだ、こんなにうまい水はめつたに飲めない。同宿二人、一人は研屋さん、腕のある人らしい、よく働いてよく儲けて、そしてよく費ふ——費ひすぎる方らしい、飲まなければ飲まないですむが、飲みだしたら徹底的に飲む、いつかも有金すつかり飲

んでしまつて、着てゐる衣服はもとより煙草入まで飲んでしまいましたよ、などゝニコ／＼話してくれた、愉快な男たることを失はない、他の一人は蹴込んでマツチを売つてあるく男、かなり世間を渡つてゐるのに本来の善良性を揚棄しえないほど善良な人間であつた。今夜といふ一夜は幸福だつた、地は呼野、家は城井屋、木賃三十銭、中印をつけて置くが上印に値する、私のやうなものには。

・ぜんまい　　・おばぜり

五月三日　晴、行程七里、下関市、岩国屋（三〇・中）

よい日だつた、よい道づれもあつた、十一時頃小倉に入つた、招魂祭で人出が多い、とても行乞なんか出来さうになし、また行乞するやうな気分にもなれないので、さらに門司まで歩く、こゝから汽船で白船居へ向ひたいと思つてゐたのに、徳山へは寄港しないし、時間の都合もよくないので、下関へ渡つていつもの宿へおちつく、三時前とはあまりに早泊りだつた。同宿十余人、同室弐人、おへんろさんと虚無僧さん、どちらも好人物だつた。此宿の主人は、前年泊つた時感じたやうに、所謂普請道楽だ、部屋、食堂、便所、等、等と造り直してゐる、そして今日も二階の張出縁を自分で造つてゐる。酒は高く米は安い。関門を渡るたびに、私は憂欝になる、ほんたうの故郷、即ち私の出張地は防府だから、山口県に一歩踏み込めば現在の私として、私の性情として憂欝にならざるをえないのである、といふ訳でもないが、同時にさういふ訳でないこともないが、とにかく今日は飲んだ、飲んだゝけではいけないので、街へ出かけた、亀山祭でドンチヤン騒ぎ、仮装行列がひつきりなしにくる。……今日は昼火事に出くわした。少し腹工合が悪いので、念のために、緑平老から貰つてきた薬を飲む、よくきく薬だ、よくきく肉体だ。

焼跡あを／＼と芽ぶいたゞけ　乞食は裸で寝てゐる五月晴・だまつて捨炭を拾ひ歩く　声をそろへ力をそろへ鶴嘴をそろへ（線路工事）　晴れておもひでの関門をまた渡る

刑務所の傍を、水に沿うて酒買ひにいつた、塀外の畑を耕してゐる囚人の視線は鋭かつた。更けて隣室の夫婦喧嘩で眼が覚めた、だから夫婦者はうるさい、仲がよくてもうるさい、仲がわるければよりうる

さい。

五月四日　曇、行程八里、埴生、今井屋（三〇・下）

行乞しなければならないのに、どうしても行乞する気分になれない、それをむりに行乞した、勿論下関から長府まで歩くうちに身心を出来るだけ調整して。長府はおちついた町で感じがいゝ、法泉寺の境内に鏡山お初の石塔があつた、乃木神社二十週年記念の博覧会（と自称するもの）が開催されてゐた、それに入場する余裕もないし興味もないので小月まで、小月では宿といふ宿から断られた、しようことなしにこゝまで歩いた、電燈がついてから着いて、頼んで泊めて貰つた、何といふ無愛想な、うるさい、けちな宿だらう！（しかし野宿よりはマシだ、三十銭の銅貨は泣くだらうけれど）どこへ行つても日本の春は、殊に南国の春は美しい、美しすぎるほど美しい。

海から五月の風が日の丸をゆする生れた土のからたちが咲いてゐるよ旅の人としふるさとの言葉をきいてゐる（再録）露でびつしより汗でびつしより

五月五日　雨、破合羽を着て一路、白船居へ——。

埴生——厚狭——舟木——厚東——嘉川——八里に近い悪路をひたむきに急いだ、降る吹くは問題ぢやない、こゝまで来ると、がむしやらに逢ひたくなる、逢はなくてはおちつけない、逢はずにはおかない、といふのが私の性分だから仕方がない、嘉川から汽車に乗る、逢つた、逢つた、奥様が、どうぞお風呂へといはれるのをさえぎつて話しつゞける、何しろ四年振りである。——今日ほど途中いろ／＼の事を考へたことはない、二十数年前が映画のやうにおもひだされた、中学時代に修学旅行で歩いた道ではないか、伯母が妹が友が住んでゐる道ではないか、少年青年壮年を過ごした道ではないか（別に書く）。峠を四つ越えた、厚東から嘉川への山路はよかつた、僧都の響、国界石の色、山の池、松並木などは忘れられない。雨がふつても風がふいても、けふも好日だつた。端午、さうだ、端午のおもひでが私を一層感傷的にした。

・鉄鉢へ霰（改作）

余談として一、二。――関門風景はよい、そこに鮮人ルンペンを配さなければなるまい。道程を訊ねて、適切を答を与へる人はめつたにない、爺さんはたいがい正確である、彼は昔、歩いてゐるから。

雨の朝から夫婦喧嘩だ（安宿）・あざみあざやかにあさのあめあがり・誰にも逢はない水音のおちてくる・うつむいて石ころばかり　いそいで踏みつぶすまいぞ蛙の子　ぬかるみで、先生お早うございます・右は上方道とある藤の花　ふつたりやんだり歩く外ない　降り吹く国界の石　ほどよう苔むした石の国界　どしやぶりのお地蔵さん・穂麦、おもひでのうごきやう

話しても話しても話しつきない、千鳥がなく、千鳥だよ、千鳥だね、といつてはまた話しつゞける。長州特有のちしやもみ（苣膾）はおいしかつた、生れた土地そのものに触れたやうな気がした、ありがたい、清子さんにあつく御礼を申上げる。

五月六日　曇、后晴、ふつてもふいてもよろしい白船居。

悠々として一日一夜を楽しんだ、洗濯、歓談、読書、静思、そして夜は俳句会へ。糞ツ南無阿弥陀仏の話はよかつた、その『糞ツ』は全心全身の声だ、合掌して頂戴した。句を拾ふ――こんな気持にさへなつた、街から海へ、海から森へ、森から家へ。――棕櫚竹を伐つて貰ふ、それは記念の錫杖となる。

石があつて松があつて、そして密柑があつて（白船居）　どうやら霽れさうな松のみどり　沖から白帆の霽れてくる　埋立地のそここゝ咲いてゐる　頬かむりして夏めく風に　そよいでる棕櫚竹の一本を伐る　西瓜とパヽイヤとさて何を添へようか　　（白船居）　春蘭そうして新聞　むつまじく白髪となつてゐられる　□　星も見えない旅をつゞけてゐる　□・岩へふんどし干してをいて・若葉のしづくで笠のしづくで

よく話した、よく飲んだ、よく飲んだ、よく話した、そしてぐつすり寝た。

五月七日　晴、行程二里、福川、表具屋（三〇・上）

ほがらかに眼はさめたのだが、句会で饒舌りすぎ、夜中飲みすぎたので、どこかにほがらかになりきれないものがないでもない。さう／＼として出立する、逢うてうれしさ、別れのつらさである、友、友の妻、友の子、すべてに幸福あれ。富田町行乞（そこは農平老の故郷だ）そして富田よいとこと思つた、行乞相は満点、いつもこんなだと申分ない。けさ、立ちぎはの一杯二杯はうれしかつた、白船老の奥さんは緑平老の奥さんと好一対だ。こゝまで来ると、Ｓ君の事が痛切に考へられる、Ｓ君よ健在なれ、私は君の故郷を見遙かしながら感慨無量、人生の浮沈を今更のやうにしみ／″＼感じた。此宿は飴屋の爺さんに教へられたのだが、しづかできれいで、気持よく読んだり書いたりすることが出来る、それにしても私はいよ／＼一人になつた。

・バスが藤の花持つてきてくれた

五月八日　雨、しようことなしの滞在、宿は同前。

終日読書静観、ゲルトがないと坊主らしくなる。同宿四人、みんな間師だ、間師はそれ／″＼間師らしい哲学を持つてゐる、話してもなか／＼おもしろい、間師同志の話は一層おもしろい（昨日今日当地方の春祭だから、それをあてこんで来たものらしい）。痔がいたむ、酒をつゝしみませう。

・ふるさとの夢から覚めてふるさとの雨　入川汐みちて出てゆく船　窓が夕映の山を持つた

この宿のおかみさんはとても醜婦だ、それだけ好意が持てた、愛嬌はないが綺麗好きだから嬉しい。世間する、といふ言葉は意味ふかい、哲学するといふ言葉のやうに。

五月九日　曇、歩いて三里、汽車で五里、樹明居（小郡）

文字通りの一文なし、といふ訳で、富田、戸田、富海行乞、駅前の土産物店で米を買うていたゞいて小郡までの汽車賃をこしらへて樹明居へ、因縁があつて逢へた、逢ふてうれしかつた、逢ふだけの人間だから。街の家で飲んで話した、呂竹、冬坊、俊の三君にも逢つた、呂竹居に泊る、樹明君もいつしよに。

街は祭の、世間師泣かせの雨がふる（福川）霽れるより船いつぱい

の帆を張つたやつとお天気になり金魚、金魚　　　□晴れて鋭い故郷の山を見直す（防府）育ててくれた野は山は若葉車窓から、妹の家は若葉してゐる

　戸田ではＳ君に逢ひたくてたまらなかつた、君は没落して大連にゐるのに。椿峠で二人連れのルンペンに逢つた、ルンペンらしいルンペンだつた。今日の行乞相は九十点以上。防府を過ぎる時はほんたうに感慨無量だつた。樹明居は好きになつた、樹明君が好きになつたやうに。

　　柿若葉その家をたづねあてた（樹明居）　逢へたゆふべの椿ちりをへてゐる　地肌あらはなたそがれの道で　こんやはここで寝る鉄瓶の鳴る（呂竹居）　壁に影する蘭の活けられて・ふるさとの夜がふかいふるさとの夢　すゞめがおぢいさんがもうおきた・けさの風を入れる　　　□　赤いのは楓です（即興追加）・水音のクローバーをしく　身にせまり啼くは鴉　また鴉がなく旅人われに

　五月十日　晴、二里ばかり歩いて三里は自動車、伊東宅（大田）

　樹明君がどうでも大田までいつしよに行くとの事、職務妨害はいけないと思つたが（君は農学校勤務）、ちつとも妨害にはならないといはれるので、一杯機嫌で伊東君の宅へころげこんだ、幾年ぶりの再会か、うれしかつた。街の家でまた飲む、三人とも酒豪ではないが、酒徒であることに間違はない、例によつて例の如く飲みすぎる、饒舌りすぎる。葉山葵はおいしかつた、苣膾はなつかしかつた。

　五月十一日　十二日　十三日　十四日　十五日

　酒、酒、酒、酒、酒、……遊びすぎた、安易になりすぎた、友情に甘えすぎた、伊東君の生活を紊したのが、殊に奥さんを悲しませたのは悪かつた、無論、私自身の生活気分はメチヤクチヤとなつた。……いよ／＼十五日の夕方、大田から一里ばかりの山村、絵堂まで送られて歩いた（このあたりは維新役の戦跡が多い、鍾乳洞も多い）。アルコールの力を借つて睡る。秋吉台の蕨狩は死ぬるまで忘れまい。

　　バスを待ちわびてゐる藤の花（小郡から大田へ）　曲つて曲る青葉若葉（　　〃　　）　ぎつしり乗り合つて草青々（

〃　　）　　　　□　苺ほつ／＼花つけてゐた（伊東君に）　つゝましく金盞花二三りん（　〃　）　襁褓干しかけてある茱萸も花持つ（　〃　）　逢うてうれしい音の中（　〃　）　　　　□　鳴いてくれたか青蛙（或る旗亭にて）　葉桜となつて水に影ある（　〃　）　たそがれる石燈籠の（　〃　）　　　　□　きんぽうげ、むかしの友とあるく　蔦をははせて存らへてをる　　　　□・山ふところで桐の花・青草に寝ころんで青空がある　咲いてかさなつて花草二株　　　　□・別れて橋を渡る・青葉の心なぐさまない

しつかりしろ、と私は私自身に叫ぶ外なかつた、あゝ。――赤郷絵堂、三島屋（三〇・中）。

五月十六日　晴、行程四里、三隅宗頭、宮内屋（二五・上）

すつかり初夏風景となつた、歩くには暑い、行乞するには懶い、一日も早く嬉野温泉に草庵を結ばう。けふの道はよい道だつた、こんやの宿はよい宿だ。花だらけ、水だらけ、花がうつくしい、水がうまい（酒はもう苦くなつた）。

　初夏の水たたへてゐる　雲がない花の散らうとしてゐる　柿の若葉が見えるところで寝ころぶ　けふのみちも花だらけ・わらや一つ石楠花を持つ

途上で、蛇が蛙を呑まうとしてゐるのを見た、犬養首相暗殺のニユースを聞かされた。

五月十七日　十八日　十九日　降つたり吹いたり晴れたり、同じ宿で。

仏罰覿面、痔がいたんで歩けないので休養、宿の人々がまたよく休養させてくれる、南無――。同宿の同行はうれしい老人だつた、酒好きで、不幸で、そして乞食だ！何といふ山のうつくしさだらう、このあたりに草庵を結ばうかと思つたほどのうつくしさだつた。終日黙想、労れたら寝た、倦いたら読んだ、曰く、講談本、――新撰組、相馬大作、等、等、等。自動車パンク、そしてガソリン発火、こんな山村にもこんな事件が起つた、そして狂人、そして死人。……晴、風、そして雨、それがホントウだ。またこゝで、一皮脱ぎました、たしか

に一皮だけは。

五月廿日　曇、行程四里、正明市、かぎや（三〇・中）

いや／＼歩いて、いや／＼ホイトウ、仙崎町三時間、正明市二時間、飯、米、煙、そしてそれだけ。此宿の主人は旧知だつた、彼は怜悧な世間師だつた、本職は研屋だけれど、何でもやれる男だ、江戸児だからアツサリしてゐる、おもしろいね。同宿六人、みんなおもしろい、あゝおもしろのうきよかな、蛙がゲロ／＼人間ウロ／＼。空即空、色是色、――道元禅師の御前ではほんたうに頭がさがる、――日本に於ける最も純な、貴族的日本人、その一人はたしかに永平老古仏。こゝで得ればかなたで失ふ、一が手に入れば二は無くなる、彼か彼女か、逢茶喫茶、ひもぢうなつたらお茶漬でもあげませうか、それがほんたうだ、それでたくさんだ、一をたゞ一をつかめば一切成仏、即身即仏、非心非仏。

　こんやの宿も燕を泊めてゐる・ふるさとの夜となれば蛙の合唱

初めて逢うた樹明君、久しぶりに逢うた敬治君、友はよいかな、うれしいかな、ありがたいかな、もつたいないかな、昨日今日、こんなにノンキで生きてゐるのはみんな友情の賜物である、合掌。

五月廿一日　曇后雨、行程六里、粟野、村尾屋（三〇・中）

今にも降りだしさうだけれど休めないやうになつてゐるから出かける、脱肛の出血をおさへつけてあるく。古市、人丸といふやうな村の街を行乞する、ホイトウはつらいね、といつたところで、さみしいねえひとり旅は。行乞相はまさに落第だつた、昨日のそれは十分及第だつたのに（それだけ今日はいら／＼してゐた）。今日の道はよかつた、丘また丘、むせるやうな若葉のかをり、ことに農家をめぐる密柑のかをり。

　おどつてころんで仔犬の若草・ふるさとの言葉のなかにすわる
密柑の花がこぼれる／＼井戸のふた

今日はよく声が出た、音吐朗々ではないけれど、私自身の声としてはこのぐらゐのものだらうか。同宿三人、何といふ善良な人だらう、家のない人間は、妻も子も持たない人間は善良々々。この土地もこの

宿も悪くない、昨日は三杯飲んだから、今日は飲まないつもりだつたら、やつぱり一杯だけは飲まずにはゐられなかつた。まさに、蚤のシーズンだ、彼等はスポーツマンだ。故郷の言葉を、旅人として、聴いてゐるうちにいつとなく誘ひ入れられて、自分もまた故郷の言葉で話しこんでゐた。油谷湾——此附近——は美しい風景だ、近く第一艦隊が入港碇泊するさうだ。今日の昼食は豆腐屋で豆腐を食べた、若い主人公は熊本で失敗して来たといふ、そこで私独特の処世哲学を説いてあげた。此宿の婆さんはしたゝかものらしい、また色気があるらしい、それだけ元気があり悪気がある。どうも夢を見て困る、夢は煩悩の反影だ、夢の中でもまだ泣いたり腹立てたりしている。……

　五月廿二日　あぶないお天気だけれど休めない、行乞しつゝ四里は辛かつた、身心の衰弱を感じる、特牛港、三国屋（三〇・中）

　此宿はおもしろい、遊廓（といつても四五軒に過ぎないが）の中にある、しかも巡査駐在所の前に。山、山、山、青葉、青葉、青葉。今日の行乞相はまづ及第、所得はあまりよくない。棕櫚竹の※杖はうれしい、白船老はなつかしい。附野（津々野）のお薬師さまにまゐる、景勝の地、参拝者もかなりあるらしい。

　けふは霞にたゝかれてゐる（改作）

　五月廿三日　晴、行程六里、小串町、むし湯（　・　）

　久しぶりの快晴、身心も軽快、どし／＼歩く、久玉、二見、湯玉といふところを行乞、小串まで来て宿をさがしあてたが、明日は市が立つので満員で断られる、教へられて、この蒸湯へ来た、事情を話して、やつと泊めて貰ふ、泊つて見れば却つて面白い、生れて初めて蒸湯といふものへはいる、とても我慢が出来なかつた。今日の特種として、もう一つ書き添へなければならない、それは久玉でお祭の御馳走を頂戴したことである。今日の行乞相も及第、所得は優等だつた。旅の眼覚の窓をあけたら、青葉若葉に朝月があつた。このあたりの海岸は日本的風景。

　　波音のお念仏がきこえる・玄海の白波へ幟へんぽん・向きあつておしやべりの豆をむぐ　　　□・旅のつかれの夕月が出てゐ

る　　　　　　　　　　　　　　　　　（改作追加）・焼芋をつゝんでくれた号外も読む

蚤と蚊と煩悩に責められて、ちつとも睡れなかつた、千鳥が鳴くのを聞いたが句にはならなかつた。……先日からいつも同宿するお遍路さん（同行といふべきだらうか）、逢ふたびに、口をひらけば、いくら貰つた、どこで御馳走になつた、何を食べた、いくら残つた、等々ばかりだ、あゝあゝお修行はしたくないものだ、いつとなくみんな乞食根性になつてしまふ！

五月廿四日　晴、行程わづかに一里、川棚温泉、桜屋（四〇・中）

すつかり夏になつた、睡眠不足でも身心は十分だ、小串町行乞、泊つて食べて、そしてちよつぽり飲むだけはいたゞいた。川棚温泉——土地はよろしいが温泉はよろしくない（嬉野に比較して）、人間もよろしくないらしい、銭湯の三銭は正当だけれど、剃髪料の三十五銭はダンゼン高い。妙青寺（曹洞宗）拝登、荒廃々々、三恵寺拝登（真言宗）、子供が三人遊んでゐた、房守さんの声も聞える、山寺としてはいゝところだが。——歩いて、日本は松の国であると思ふ。新緑郷——鉄道省の宣伝ビラの文句だがいゝ言葉だ——だ、密柑の里だ、あの甘酸つぱい匂ひは少年の夢そのものだ。松原の、松のないところは月草がいちめんに咲いてゐた、月草は何と日本的のやさしさだらう。

・ふるさとはみかんのはなのにほふとき・若葉かげよい顔のお地蔵さま　初夏の坊主頭で歩く　歩くところ花の匂ふところ　　　　□・コドモが泣いてハナが咲いてゐた

五月廿五日　廿六日　雨、風、晴、発熱休養、宿は同前。

とても動けないので、しようことなしに休養する、年はとりたくないものだ、としみ／″＼思ふ。終日終夜、寝そべつて、並べてある修養全集を片端から読みつゞける、それはあまりに講談社的だけれど。——病んで三日間動けなかつたといふことが、私をして此地に安住の決心を固めさせた、世の中の事は、人生の事は何がどうなるか解るものぢやない、これもいはゆる因縁時節か。嬉野と川棚とを比べて、前者は温泉に於て優り、後者は地形に於て申分がない、嬉野は視野が広

すぎる、川棚は山裾に丘陵をめぐらして、私の最も好きな風景である。とにかく、私は死場所をこゝにこしらへよう。

五月廿七日　晴、行程七里、安岡町行乞、下関、岩国屋（三〇・中）

ぢつとしてはゐられないので出発する、宿料が足らないので袈裟を預けて置く、身心鈍重、やうやく夕暮の下関に着いた。久しぶりに地橙孫君を訪ねて歓談する、君はいつも温かい人だ、逢ふたびに、人格が磨かれつゝあることを感じる。夜更けてから馴染の宿に落ちつく、今夜は地橙孫君の供養によつて飲みすぎた、安価な自分が嫌になる。……

五月廿八日　晴、船と電車、酒と魚、八幡市、星城子居。

星城子君の歓待は恐縮するほどだつた、先日来の身心不調で、御馳走が食べられないで困つた、好きな酒さへ飲めなかつた、この罰あたりめ！　と自分で自分を憫れんだ。夜、いつしよに仙波さんを訪ねる、こゝでも懇ろにもてなされた、お布施までいたゞいた。葉ざくら、葉ざくら、友のなさけが身にしみる。工藤君からハガキをうけとつたのはうれしかつた、伊東君からも、国森君からも。私は、私のやうなものが、こんなにしてもらつていゝのだらうか、と考へずにはゐられない。

門司埠頭凱旋兵・生きて還つてきた空の飛行機低う
▫・芭蕉二株青い雨（追加）　星がまたたく草に寝る　▫・かたい手を握りしめる

五月廿九日　晴、電車と汽車で緑平居へ、葉ざくらの宿。

朝から四有三居を襲うて饗応を強要した。緑平老はあまりに温かい、そつけないだけそれだけしんせつだ、友の中の友である。

水を渡つて女買ひに行く（添加）

夕方、連れ立つて散歩する、ボタ山のこゝそこから煙が出てゐる、湯が流れてくる、まるで火山の感じである、荒涼落漠の気にうたれる。

・ボタ山へ月見草咲きつゞき

五月三十日　晴、行程五里、高津尾といふ山村、祝出屋（三〇・中）

早く起きて別れる、そして川棚へ急ぐ、労れて途中で泊る、この宿はほんたうにしづかだ、山の宿の空気を満喫する。例の後援会の成績はあまり良くないけれど、それでも草庵だけは結べさうなので、いよ／＼川棚温泉に落ちつくことになつた、緑平老の諒解を得たから、一日も早く土地を借りてバラツクを建てなければならない、フレイ、フレイ、サントウカ、バンザアイ！近来とかく身心不調、酒も苦くなつた、——覚醒せずにはゐられない今が来たのである。しつかり生きなければならない、嘘の多い、悔の断えない生き方にはもう堪へられなくなつた。酒をつつしまなければならない、酒を飲むことから酒を味ふ方へ向はなければならない、ほんたうにうまい酒ありがたい酒をいたゞかなければならないのである。伊東君に手紙をだして、私の衷情を吐露しつゝ、お互に真実をつかまうと誓約した。少し飲んでよく寝た。

　山の家のラヂオこんがらがつたまゝ・こゝにも畑があつて葱坊主（再録）

五月三十一日　曇が雨となり風となつた、小倉まで三里、下関から風雨の四里を吉見まで歩いた、関門通有のシケで、全身びしよぬれになつて、やつと宿についた、石風呂があるので石風呂屋といふ、子供が多いので騒がしいけれど、おかみさんもおばあさんもしんせつなので居心がよい（三〇・中）

昨夜の宿は予想したほどよくなかつた（水だけは、筧から流れてくる水だけはよかつた）、しかし、期待したやうに山ほとゝぎすを聴くことが出来たのはうれしかつた。

　ほつかり眼ざめて山ほとゝぎす・ほとゝぎすしきりに啼くやほとゝぎす・あかつきの火の燃えさかる　　□・ふたゝび渡る関門は雨・ぬれてうつくしいバナナをねぎるな　　□・シケの石風呂へはいりこむ

石風呂は防長特有のものではあるまいか、その野人趣味を興ふかく思ふ。ノミ、シラミ、アメ、カゼに責められて、なか／＼寝つかれなかつた、落ちついて澄んでゆく自分を見詰めつゞけた。長かつた夜が白みかゝつてきた、あかつきの声が心の中から響く、生活一新の風が吹きだした。とにもかくにも、昨日までの自分を捨てゝしまへ、たゞ放下着！

第9章
行乞記　04 (新字旧仮名)

　　　　　鶏肋抄□霰、鉢の子にも（改作）□山へ空へ摩訶般若波羅密多心経（再録）□旅の法衣は吹きまくる風にまかす（〃）　　　雪中行乞□雪の法衣の重うなる（〃）□このいたゞきのしぐれにたゝずむ（〃）□ふりかへる山はぐれて（〃）　　　　————□水は澄みわたるいもりいもりをいだき□住みなれて筧あふれる

　　　　　鶏肋集（追加）□青草に寝ころべば青空がある□人の子竹の子ぐいぐい伸びろ（酒壺洞君第二世出生）

　　六月一日　川棚、中村屋（三五・中）

　曇、だん／＼晴れて一きれの雲もない青空となつた、照りすぎる、あんまり明るいとさへ感じた、七時出立、黒井行乞、三里歩いて川棚温泉へ戻り着いたのは二時頃だつたらうか、木下旅館へいつたら、息子さんの婚礼で混雑してゐるので、此宿に泊る、屋号は中村屋（先日、行乞の時に覚えた）安宿であることに間違はないが、私には良すぎるとさへ思ふ。すべてが夏だ、山の青葉の吐息を見よ、巡査さんも白服になつた、昨日は不如帰を聴き今日は早松茸を見た、百合の花が強い香を放ちながら売られてゐる。笠の蜘蛛！　あゝお前も旅をつゞけてゐるのか！新らしい日、新らしい心、新らしい生活、——更始一新して堅固な行持、清浄な信念を欣求する。樹明君からの通信は私をして涙ぐましめた、何といふ温情だらう、合掌。

　・ほうたるこいほうたるこいふるさとにきた

　此宿はよい、ていねいでしんせつだ、温泉宿は、殊に安宿はかういふ風でなければならない、ありがたい／＼。

六月二日　同前。

雨、そして関門地方通有の風がまた吹きだした、終日、散歩（土地を探して）と思案（草庵について）とで暮らした。午後、小串へ出かけて、必要缺ぐべからざるものを少々ばかり買ふ。山ほとゝぎす、野の花さま／″＼。老慈師から、伊東君から、その他から、ありがたいたよりがあつた。隣室の奥さん――彼女はお気の毒にもだいぶヒステリツクである――から御馳走していたゞいた。自己を忘ず――そこまで徹しなければならない。こゝはうれしい、しづかにしてさびしくない。だん／＼酒から解放される、といふよりもアルコールを超越しつゝある、至祷至祝。緑平老から貰つた薬を、いつのまにやら、みんな飲んでしまつた、私としては薬を飲みすぎる、身心がおとろへたからだらうが、とにかく薬を多く飲むほど酒を少く飲むやうになつたわい。昨夜はよく寝られたのに、今夜はどうしても眠れない、暁近くまで読書した。

家をさがすや山ほとゝぎす　月草いちめん三味線習うてゐる・ばたり落ちてきて虫が考へてゐる・旅のつかれの夕月がほつかり（改作再録）

六月三日　同前。

雨、まるで梅雨のやうだ、歩いたり、考へたり、照会したり、交渉したり……、たゞ雨露を凌ぐだけの庵を結ぶのもなか／＼である。早朝、雷雨に起きて焼香し読経する。温泉饅頭を坊ちやんに、心経講話をパパに送つてあげる（伊東君にあてゝ）。夕方、一風呂浴びて一本傾けて、そしてぶら／＼歩く、こゝにも温泉情調はある、カフヱーと自称するもの二軒、百貨店と自称するもの一軒、食堂二三軒、そこかしこに三味線の音がする、……いやまて、ビリヤード二軒、射的場も一軒ある。……妙青寺拝登、長老さんにお目にかゝつて土地の事、草庵の事を相談する（義庵老慈師の恩寵を感じる）、Ｋ館主人にも頼む、すぐ俳句の話になる、彼氏も一風かはつた男だ、Ｎ館主人も頼む、彼は何だか虫の好かない男だ、とにかく成行に任せる、さうする外ない私の現在である。山はうつくしい、茶臼山から鬼ヶ城山へかけての新緑はとてもうつくしい、希くはそれをまともに眺められるとこ

ろに庵居したいものだ。

　・鉄鉢かゞやく・着飾らせて見せてまはつてゐる・水音、なやましい女がをります・暗さ匂へば螢

　夜、浴場で下駄をとりかへられた、どちらも焼杉（客用）だつたが、私の方がよかつた、宿に対して気の毒なので、穿き減らされた下駄の焼印を辿つて、その宿屋へ行つてとりかへしてきた、ちと足元に気をつけなさいと皮肉一口投げつけてをいて、――まことに脚下照顧はむつかしい（此句は足元御用心とでも訳すべきだらう）。今夜もまた睡れさうにないから、寝酒を二三杯ひつかけたが、にがい酒だつた、今夜の私としては。――

　アルコールよりカルモチン　　　ちよつと一服盛りましよか

　　六月四日　同前。

　曇后晴、読んだり歩いたり考へたり、そして飲んだり食べたり寝たり、おなじやうな日がつゞくことである。午後、小串まで出かける、新聞、夏帽、シヨウガ、壺を買ふ、此代金五十一銭也。帰途、八幡の木村さんから紹介されて、森野老人を訪ねる、初対面の好印象、しばらく話した、桑の一枝を貰つてステツキとする、久しぶりにうまい水を頂戴する、水はいゝなあ、先日来、腹中にたまつてゐたものがすーつと流れてしまつたやうにさへ感じた。人は人中、田は田中、といひますから……とは老人の言葉だつた。此宿も一日二日はよかつたが、三日四日と滞在してゐると、だん／＼アラが見えてくる、だいたい嬶天下らしいが、彼女はよいとして亭主なるものは人好きの悪い、慾張りらしい、とにかく好感の持てるやうな人間ぢやない。今夜も睡れない、ちよつと睡つてすぐ覚める、四時がうつのをきいて湯にはいる、そして下らない事ばかり考へる、もしこゝの湯がふつと出なくなつたら、……といつたやうな事まで考へた。杜鵑がなく、『その暁の杜鵑』といふ句を想ひだした、私はまだ／＼『合点ぢや』と上五をつけるほど落ちついてゐない。

　・梅雨雲の霽れまいとする山なみふるさと　仲よく連れて学校へいそぐ梅雨ぐもり・どこまでも咲いてゐる花の名は知らない・晴れきつ

た空はふるさと　旅から旅へ河鹿も連れて　更けて流れる水音を見出した

　隣室の客の会話を聞くともなしに聞く、まじりけなしの長州辯だ、なつかしい長州辯、私もいつとなく長州人に立ちかへつてゐた。カルモチンよりアルコール、それが、アルコールよりカルモチンとなりつゝある、喜ぶべきか、悲しむべきか、それはたゞ事実だ、現前どうすることもできない私の転換だ。

　　六月五日　同前。

　朝は霧雨、昼は晴、夕は曇つて、そしてとう／＼また雨となつた。朝の草花――薊やらみつくさやら――を採つてきて壺に投げ※した。今日は日曜日であり、端午のお節句である、鯉幟の立つてゐる家では初誕生を祝ふ支度に忙しかつた（私のやうなものでも、かうして祝はれたのだ！）。方々からたよりがあつた、その中で、妹からのそれは妙に腹立たしく、Ｉ君からのそれはほんたうにうれしかつた（それは決して私が私情に囚はれたゝめではないことを断言する）。隣室のヒステリー夫人ます／＼ヒステリツクとなる、宿の人々も困り、私たちも困る。萩の客人から、夏密柑についていろ／＼の事を聞いた、柿と鴉と弓との話は面白かつた。山下老人を訪ね、借りたい妙青寺の畠を検分する、夜、ふたゝび同道して寺惣代の武永老人を訪ねて、借入方を頼んだ。

　・おしめ影する白い花赤い花　おとなりが鳴ればこちらも鳴る真昼十二時・お寺のたけのこ竹になつた　　　　□・こゝに落ちつき山ほとゝぎす（再作）

　今夜もまた睡られないで困つた、困つた揚句は真夜中の湯にでもはいる外なかつた。

　　六月六日　同前。

　雨風だ、こゝはよいところだが、風のつよいのはよくないところだ。まるで梅雨季のやうな天候、梅雨もテンポを早めてやつてきたのかも知れない。さみしさ、あつい湯にはいる、――これは嬉野温泉での即吟だが、こゝでも同様、さみしくなると、いらいらしてくると、

しづんでくると、とにかく、湯にはいる、湯のあたゝかさが、すべてをとかしてくれる。……安宿にもいろ／＼ある、だん／＼よくなるのもあれば、だん／＼わるくなるのもある（後者はこの中村屋、前者はあの桜屋）、そして、はじめからしまゐまで、いつもかはらないのもある（この例はなか／＼むつかしい）。今夜はこの宿は夫婦喧嘩をして、やたらに子供を泣かしてゐる、坊や泣くな、お客がなくなるよ！　隣室の萩老人とおそくまで話す、話してゐるうちに、まざ／＼といやしい自分を発見した。鰒の中毒には、日本蝋、または、海賊のクロミが適薬ださうな、人助けのためにも覚えてをきたいと思つた。源三郎君から来信、星を売り月を売る商売をはじめます（天体望遠鏡を覗かせて見料を取るのださうである）、これには私も覚えず微苦笑を禁じえなかつた。

　捨てたものにしづかな雨ふる

　　六月七日　木下旅館（三〇・上）

　転宿、チヨンビリ帰家穏座のこゝち。壺を貸して下さつたので、すい葉とみつ草とを摘んで来て活ける、ほんによいよい。午前は午後は晴。小串へ行つて、買物をする、財布を調べて、考へ考へ、あれこれと買つた、茶碗、大根おろし、急須、そして大根三本、茶一袋、——合計金四十三銭也、帰途、お腹が空いたので、三ツ角の茶店で柏餅を食べる、五つで五銭。草花を摘みつゝ、柏餅を食べつゝ、酒を飲みつゝ、考へる。——うつくしいものはうつくしい、うまいものはうまい、それが何であつても、野の草花であつても一銭饅頭であつてもいゝのである、物そのものを味ふのだから。飲める時には、飲める間は飲んだがよいぢやあないか、飲めない時には、飲めなくなつた場合には、ほがらかに飲まずにゐるだけの修行が出来てゐるならば。私も酒から茶へ向ひつゝあるらしい、草庵一風の茶味、それはあまりに東洋的、いや、日本的だけれど山頭的でないこともある。茶道に於ける、一期一会の説には胸をうたれた、そこまで到達するのは実に容易ぢやない。日にまし命が惜しくなるやうに感じる、凡夫の至情だらう、かういふ土地でかういふ生活が続けられるやうだから！此宿はよい、ホントウのシンセツがある、私は自炊をはじめた、それも不即不離の生活の一断面だ。

朝の水くみあげくみあげあたゝかい・いちご、いちご、つんではたべるパパとボウヤ　旅の人とし休んでゐる栴檀の花や葉や　まいにちいちにち掘る音を聞かされる（温泉掘鑿）

六月八日　同前、吉見行乞。

夜が明けきらないのに眼がさめたので湯へゆく、けふもよい日の星がキラ／＼光つてゐる。……朝湯千両、朝酒万両。朝から子供が泣きわめく、あゝ、あゝ、あゝ。吉見まで三里歩いて行乞三時間、また三里ひきかへす、私の好きな山道だからちつとも苦にならない。満目の青山、汝の見るに任す、——といつた風景、いつまでもあかずに新緑郷を漫歩する。農家は今頃よつぽど忙しい、麦刈り、麦扱ぎ、そして蚕だ、蚕に食はせるためには人間は食う隙がない、そして損だ！今日の行乞相は最初悪くして最後がよかつた、彼等が悪いので私も悪かつた、私が善いので彼等も善かつた、行乞中はいつも感応といふ事を考へさせられないことはない。暑かつた、真ツ陽に照らされて、しばらく怠けてゐたゝめに。禁札（世間師を拒絶する）いろ／＼、今日の禁札は（吉見の一部では）婦人会の名に於て謝絶してあつた（私はいつもそんなものは無視して行乞するが）。口で嘘をいふのは造作ないが、からだがホントウをいふ、いひかへれば、言葉よりも動作にヨリ真実的なものがある。こゝはおもしろいところだ、妙青寺山門下の宿で、ドンチヤン騒ぎをやつてゐる、そしてしづかだ！私は一人で墓地を歩くのが好きだ、今日もその通りだつた、いゝ墓があるね、ほどよく苔むしてほどよく傾いて。——

・墓まで蔓草の伸んできた　　　　　□　水にはさまれて青草・山畑かんらんやたらひろがる・松かげ松かぜ寝ころんだ・茅花穂に出てひかる・山ゆけば水の水すまし　　　　　□・地べた歩きたがる子を歩かせる　　　　　□　さみしうて夜のハガキかく

川棚温泉の缺点は、風がひどいのと、よい水のないことだ、よい水を腹いつぱい飲みたいなあ！大根一本一銭、キヤベツ一玉四銭だつた。教育のない父が、貧乏な父が、とかく子にむつかしい、嫌味たつぷりの名をつける、気をつけて御覧、まつたくさうだから。緑平老から、いつもかはらぬあたゝかいたよりがあつた、層雲六月号、そこに

は私のために井師のともされた提灯が照つてゐた。……

六月九日　同前。

晴、といつても梅雨空、暗雲が去来する。今日は寺惣代会が開かれる日だ、そして私に寺領の畠を貸すか貸さないかが議せられる日だ。昨夜もあまり睡れなかつたので、頭が重い。アルコールよりカルモチン——まつたくさういふ気分になりつゝある、飲まないのではない、飲めなくなつたのだ（肉体的に）、意志が弱いと胃腸が強い、さりとはあんまり皮肉だつたが、その皮肉も真実になつたらしい、少くとも事実にはなつた、健全な胃腸は不健全な飲食物を拒絶する！年をとると、身体のあちらこちらがいけなくなる、私は此頃、それを味はひつゝある。川棚温泉には犬が多い、多すぎる。野を歩いてゐたら、青蘆のそよいでゐるのに心をひかれた、こんなにいゝものがあるのに、何故、旅館とか料理屋とかは下らない生花に気をとられてゐるのだらう、もつたいない、明早朝さつそく私はそれを活けやう。

・柿の葉柿の実そよがうともしない

六月十日　同前。

晴、めづらしい晴だつたが、それだけ暑かつた。朝、宿の主人が、昨夜の寺惣代会では、私の要求は否定されたといふ、私はしみ／″＼考へた、そして嫌な気がした、自然と人間、個人と大地。……野を歩いて青蘆を切つて来て活けた、何といふすが／＼しさ、みづ／＼しさぞ、野の草はみんなうつくしい、生きてゐるから。つばくろがよくうたふ、此宿にも巣をかけて雛をかへしてゐる。此宿もいろ／＼の生き物を持つてゐる——人間の子、猫の子、燕の子、牛、私、そして花嫁さん！彼女から送つてくれた荷物が来た、フトン、ヤクワン、キモノ、ホン、チヤワン、ヰハイ、サカヅキ、ホン、カミ、等、等、等。その荷物の中から二通の手紙が出て来た、一つは彼に送金した為替の受取、他の一つはＳ子からのたより、前者はともかくも、後者はちよんびり私を動かした、悪い意味に於て、——なるほど、私は彼女が書いてゐるやうに、心の腐つた人であらうけれど、——これは故意か偶然か、故意にしては下手すぎる、私には向かない、偶然にしてはあまりに偶然だ。子供が子猫をおもちやにして遊んでゐる、その子猫は首

玉を握りしめられて半死半生になつてゐる、小さい暴君と小さい犠牲、人間の残忍と畜生の弱さだ。夕方散歩する、いそがしい麦摺機の響、うれしさうな三味の音と唄声。今日はいやにゲイシヤガールがうろ／＼してゐる。私の因縁時節到来！　緑平老へ手紙を書きつゝ、そんな感じにうたれた。

　　ふたゝびこゝで白髪を剃る　どうでもこゝにおちつきたい夕月・朝風の青蘆を切る　　　　□・これだけ残つてゐるお位牌ををがむ　　　　□・あるだけの酒のんで寝る月夜・吠えてきて尾をふる犬とあるく・まとも一つの灯はお寺

　昨夜は幾夜ぶりかでぐつすり眠つたが、今夜はまた眠れないらしい、ゼイタク野郎め！若夫婦の睦言が、とぎれ／＼に二階から洩れてくる、無理もない、彼等は新婚のほや／＼だ。どうしてもねむれないから、また湯にはいる、すべてが湯にとける、そしてすべてがながれてゆく。……

　　六月十一日　同前。

　快晴、明日は入梅だといふのに、これはまた何といふ上天気だらう、暑い陽がきら／＼照つた。農家は今が忙しい真盛りだ、麦刈、麦扱（今は発動機で麦摺だが）、やがてまた苗取、田植。しかし今年はカラツユかも知れない、此地方のやうな山村山田では水がなくて困るかも知れないな、どうぞさういふ事のないやうに。——歯が悪くなつて、かへつて、物を噛みしめて食べるやうになつた（しようことなしに）、何が仕合になるか解つたものぢやない。此宿の裏長屋に、仔猫が四匹生れてゐる、みんな可愛い姿態を恵まれてゐる、毎日、此宿の孫息子にいぢめられてゐるが、親猫は心配さうに鳴いてゐるより外ない、その仔猫を夕方、舞妓が数人連れて貰ひに来た、悪口いつては気の毒だが、仔猫仔猫を貰ひに来た、ソモサン！

　・からつゆから／＼尾のないとかげで　いつしよにびつしより汗かいて牛が人が・ゆふぐれは子供だらけの青葉　仔猫みんな貰はれていつた梅雨空

　また文なしになつた、宿料はマイナスですむが、酒代が困る、やう

やくシヨウチユウ一杯ひつかけてごまかす。やつぱり生きてゐることはうるさいなあ、と同時に、死ぬることはおそろしいなあ、あゝ、あゝ。

六月十二日　同前。

曇、今日から入梅。山を歩いて山つつじを採つて戻る、野の草といつしよに、――花瓶に活けて飽かず眺める。川棚名物の『風』が吹きだした（湯ばかりが名物ぢやない）。十六銭捻出して、十一銭は焼酎一合、五銭は撫子一包、南無緑平老如来！リヨウマチ再発、右の腕が痛い。

・明けてゆく鎌を研ぐ・枝をおろし陽のあたる墓・山の花は山の水に活けてをき　客となり燕でたりはいつたり　考へてをれば燕さえづる・旅のペンサキも書けなくなつた・ころげまはる犬らの青草・ひとりの湯がこぼれる

六月十三日　同前。

朝のうちは梅雨空らしかつたが、やがてからりと晴れた、そして風も相変らず吹いた。三恵寺へまた拝登する、いかにも山寺らしい、坐禅石といふ好きな岩があつた、怡雲和尚（温泉開基、三恵寺中興）の墓前に額づく、国見岩といふ巨岩も見た、和尚さん、もつと観光客にあつてほしい。酒はもとより、煙草の粉までなくなつた、端書も買へない、むろん、お香香ばかりで食べてゐる、といつて不平をいふのぢやない、逢茶喫茶、逢酒喫酒の境涯だから――しかし飲まないより飲んだ方がうれしい、吸はないより吸ふた方がうれしい、何となくさみしいとは思ふのである。南無緑平老如来、御来迎を待つ！

妙青禅寺　もう山門は開けてある　梅雨曇り子を叱つては薬飲ませる　子猫よ腹たてゝ鳴くかよ　子をさがす親猫のいつまで鳴く　仔牛かはいや赤い鉢巻してもろた　　三恵寺　樹かげすゞしく石にてふてふ　迷うた山路で真赤なつゝじ　牛小屋のとなりで猫の子うまれた・家をめぐつてどくだみの花　働きつめて牛にひかれて戻る

今日は句数こそ沢山あるが、多少でも自惚のある句は一つもない、蒼天々々。どうやら寺領が借れるらしい、さつそく大工さんと契約し

よう、其中庵まさに出来んとす、うれしい哉。

六月十四日　同前。

晴、朝の野べから青草を貰つてきて活ける、おばさんから貰つて活けてをいた花は、すまないけれど、あまり感じよくないから。青草はよい、葉に葉をかさねて、いき／＼としてゐる。来信数通、みんなうれしいたよりであるが、殊に酒壺洞君、緑平老、井師からの言葉はうれしかつた。返事を書かうと思つても端書がない、切手を買ふ銭がない、緑平老への返事は急ぐので、やうやくとつておきの端書一枚を見つけて、さつそく書いた。貧乏は望ましいものでないが、かういふ場合には、私でも多少の早敢なさを覚える。嚢中まさに一銭銅貨一つ、読書にも倦いたし、気分も落ちつかないので、楠の森見物に出かける、天然記念保護物に指定されてあるだけに、ずゐぶんの老大樹である、根元に大内義隆の愛馬を埋葬したといふので、馬霊神ともいふ、ぢつと眺めてゐると尊敬と親愛とが湧いてくる。往復二里あまり、歩いてよかつた、気分が一新された、やつぱり私には、『歩くこと』が『救ひ』であるのだ。途上、切竹が捨てゝあつたので拾つて戻つた、小刀で削つて衣紋竹を拵らへた、その竹を活かしたのだが、ナマクサ法衣をひつかけられては、竹は泣くかも知れない。河があつた、小魚が泳いでゐる、釣心がおこつた、いつか釣竿かたいでやつてきたい（漁猟の中では、私は釣が一番よいと思ふ、一番好きだ）。君よ、ナマクサと嘲るなかれ、セツシヨウを説くなかれ、ナマクサ坊主は遂にナマクサ坊主なり！うしろ姿は鬼、こちら向いたら仏だつた、これは或る日の行乞途上の偶感である。君は不生産的だからいけないと、或る人が非難したのに対して、俺は創造的だよと威張つてやつた。けふもサケナシデーだつた、いやナツシングデーだつた、時々、ちよいと一杯やりたいなあと思つた、私は凡夫、しかも下下の下だ、胸中未穏在、それは仕方がない、酒になれ、酒になれ通身アルコールとなりきれば、それはそれでまたよろしいのだが、そこまでは達しえない、咄、撞酒糟漢め。夕方また歩いた、たゞ歩いた。自から嘲る気分から、自からあはれみ自からいたはる気分へうつりつゝある私となつた、さて、この次はどんな私になるだらうか。いつからとなく私は『拾ふこと』を初めた、そしてまた、いつからとなく石を愛するやう

になつた、今日も石を拾うて来た、一日一石としたら面白いね。拾う――といつても遺失物を拾ふといふのではない（東京には地見といふ職業もあるさうだが）、私が拾ふのは、落ちたるものでなくして、捨てられたもの、見向かれないもの、気取つていへば、在るものをそのまゝ人間的に活かすのである。いつぞやは、缺げた急須を拾うて水入とし、空罎を酢徳利とした、平ぺつたい石は文鎮に、形の好きなのを仏像の台座にした。

・冴える眼に虫のいろ／＼・山ほとゝぎすいつしか明けた・朝風、みんなうごく・しめやかな山とおもへば墓がある・春蝉に焼場の灰のうづたかく　　　　□・よう泣く子につんばくろ　　　　□・いつまで生きよう庵を結んで・ありつたけ食べて出かける（行乞）・食べるものもなくなつた今日の朝焼　　　楠の森三句　注連を張られ楠の森といふ一樹・大楠の枝から枝へ青あらし・大楠の枝垂れて地にとゞく花　　　　□・蜂のをる花を手折る・田植唄もうたはず植ゑてゐる・ひつかけようとする魚のすい／＼澄んで・梅雨の月があつて白い花

六月十五日　同前。

午前は晴、午後は雨、これでどうやら本格的な梅雨日和となつた訳だ、空梅雨ではあるまいかと心配してゐた農夫の顔に安心と喜悦との表情が浮んでゐる、私も梅雨季は梅雨季らしい方を好いてゐる、行乞が出来ないので困ることは困るけれど。昨日の夕方、私に下関への道を訊ねたルンペン（東京から歩いてきたといつた、歯切れのいゝ中年男だつた）の顔が、どういふ訳からか、今日まざ／＼と思ひ浮べられた。午前は松谷の松原を散歩した、一句も拾へなかつたが、石を一つ拾つた。昨日今日はまことにきゆう／＼うつ／＼である、酒の代りにがぶ／＼茶を飲み、たび／＼湯にはいつた。……酒をやめるよりも煙草はやめにくいといふ、まつたくその通りだ、胃さへいつぱいならば、酒を忘れてゐられるが、煙草は、手を動かし足を動かし、食べるたびに飲むたびに、歩く時も寝てゐる時も、一服やりたくなつて、やらずにはゐられない。貧しさと卑しさとは仲のよい隣同士であることを体験した。しばらくおたよりがないから気にかゝる、とＩ君がいつてきた（三日間ハガキを出さないものだから）、ハガキを買ふ銭もない、とは私の口からはいへない、それでなくても私は、貧乏を売物に

してゐるやうな気がして嫌でならないのだ、嘘をいふのは嫌だが、此場合、本当をかくことは私の潔癖が、或は見得坊が許さない、明日でも金が手に入つたら、工合がわるかつたものだから、とか何とかいつてごまかしておかうか（私はもつと、もつと卒直でなければならないのだけれど）。小包が来た、酒壺洞君からだ、うれしかつた、君には嫌な半面がある代りに、極めて良い一面がある、まだ若いから仕方なからう。こゝに滞留してゐて、また家庭といふものゝうるさいことを見たり聞いたりした、独居のさびしさは群棲のわずらはしさを超えてゐる。このあたりは、ほんたうにどくだみが多い、どくだみの花を家をめぐり田をかこんで咲きつゞいてゐる。自殺した弟を追想して悲しかつた、彼に対してちつとも兄らしくなかつた自分を考へると、涙がとめどもなく出てくる、弟よ、兄を許してくれ。昨日も今日も連句の本を読む、連句を味ふために、俳句を全的に味ふために。どうやら『其中庵の記』が書けさうになつた。

・竿がとゞかないさくらんぼで熟れる・花いちりん、風がてふてふをとまらせない・梅雨の縞萱が二三本　　　　□・水は澄みわたるいもりいもりをいだき

だん／＼心境が澄みわたることを感じる、あんまり澄んでもいけないが、近来あんまり濁つてゐた。清澄、寂静、枯淡、さういふ世界が、東洋人乃至日本人の、つゐの棲家ではあるまいか（私のやうな人間には殊に）。柿、栗、蕗、筍、雑木、雑草、杜鵑、河鹿、蜩、等々々。いづれも閑寂の味はひである。さみしい夜が、お隣の蓄音器によつて賑つた、唐人お吉、琵琶歌、そして浪花節だ、やつぱりおけさ節が一等よかつた。

六月十六日　同前。

降りみ降らずみ、寝たり起きたり。予期しないゲルトが少しばかり手に入つた、酒を買ふたり、頭を剃つたり、胡瓜もみをこしらへたり、いやはや忙しい事だつた、嬉しい事だつた。土地借入について保證人になつて貰ふべく、森野老人を訪ねる、即座に快諾して下さつた。森野老人に感謝すると同時に、木村幸雄さんに感謝しなければならない。今夜、はじめて温泉饅頭を食べた、うまい、そしてたかい。

御飯とお香々、——ありがたし、ありがたし。銭といふものの便利を感じすぎるほど感じた、私は金銀そのものを、その他の物以上に有難いとは思はない、貨幣は勤労の表徴として尊いのである、物の価値は物そのものにある。今日といふ今日は、私として、最も有効に金を遣つたと思ふ。

・働らき働らき牛を叱つて

数日たまつてゐた返事を書いてだしたので、ほつとした、はがき十枚、手紙弐通。五日ぶりに酒を飲んだが、あんまりうまくなかつた、うれしいやうでもあり、さびしいやうでもある、とにかく酒を清算することが私を清算することの第一歩であることはたしかだ。久しぶりに、ほんたうに久しぶりに、今夜は水を飲んだ、うまくない水である、だいたい、川棚といふところは水がよくない、飲める井戸は数ヶ所しかない、これからは谷川の水を飲まう、水は私を清浄にする、私の生活から、むしろ、私の心から水をとりのぞけば、私はきたなくなるばかりだ。

六月十七日　同前。

梅雨日和、終日読書、さうする外ないから。アイバチといふ魚を買つた、十銭、うまくていやみがなかつた（ナマクサイモノを食べたのは、何日目だつたかな）、そしてうどん玉二つ、五銭、これもおいしかつた、今晩は近来の御馳走だつた。このあたりも、ぼつ／＼田植がはじまつた、二三人で唄もうたはないで植ゑてゐる、田植は農家の年中行事のうちで、最も日本的であり、田園趣味を発揮するものであるが、此頃の田植は何といふさびしいことだらう、私は少年の頃、田植の御馳走——煮〆や小豆飯や——を思ひだして、少々センチにならざるを得なかつた、早乙女のよさも永久に見られないのだらうか。お隣の蓄音器がまたうたひだした、浪花節、肉弾三勇士のなかの、赤い夕日に照らされて、の唄にはほろりとした、あのうたはたしかに我々の心にひゞく、大和民族の血潮を沸き立たせるものを持つてゐる、私にはヂヤズよりも快感を与へる。土地借入には当村在住の保證人二名をこしらへなければならないので、嫌々ながら、自己吹聴をやり自己保證をやつてゐるのだが、さてどれだけの効果があるかはあぶないもの

だ、本人が本人の事をいふほどアテになるものはなく同時にアテにならないものもない。一も金、二も金、三もまた金だ、金の力は知りすぎるほど知つてゐるが、かうして世間的交渉をつづけてゐると、金の力をあまり知りすぎる！私の生活は――と今日も私は考へた――搾取といふよりも詐取だ、いかにも殊勝らしく、或る時は坊主らしく、或る時は俳人らしくカムフラーヂユして余命を貪つてゐるのではないか。法衣を脱ぎ捨てゝしまへ、俳句の話なんかやめてしまへよ。それにしても、やつぱりさみしい、さみしいですよ。

さみしいからだをずんぶり浸けた・水田青空に植ゑつけてゆく
人の声して山の青さよ・一人で黙つて植ゑてゐる　夏草いちめんの、
花も葉も刈り・とう／＼道がなくなつた茂り・ひとりきてきつゝき
（啄木鳥）・こゝの土とならうお寺のふくろう

六月十八日　同前。

快晴、梅雨季には珍らしいお天気でもあるし、ちようど観音日でもあるので、狗留孫山へ拝登、往復六里、山のよさ、水のうまさを久しぶりに味つた。道を間違へて、半里ばかり岨路を歩いたのは、かへつてうれしかつた、岩に口づけて腹いつぱい飲んだ水、そのあたりいちめんにたゞようてゐる山気、それを胸いつぱい吸ひこんだ、身心がせいせいした。狗留孫山修禅寺、さすがに名刹だけあるが、参詣者が多いだけそれだけ俗化してゐる、参道の杉並木、山門の草葺、四面を囲む青葉若葉のあざやかさ、水のうつくしさ、――それは長く私の印象として残るだらう。田植を見て『土落し』を思ひだした、それは私が少年時代、郷里の農家に於ける年中行事の一つであつた、一日休んで田植の泥を落すのである、何といふ、なつかしい思出だらう。

・朝戸あけるより親燕・こゝもそこもどくだみの花ざかり・水田
たゝへようとするかきつばたのかげ・梅雨晴れの山がちゞまり青田が
かさなり・つゝましくこゝにも咲いてげんのしようこ　　　□・お
寺まで一すぢのみち踏みしめた・うまい水の流れるところ花うつぎ・
山薊いちりんの風がでた・水のほとり石をつみかさねては（賽の河
原）　霽れて暑い石仏ならんでおはす　夏草おしわけてくるバスで

昨日も今日もまたサケナシデー、すこし切ない。近頃、ひとりごと

をいふやうになつた、年齢の加減か、独居のせいか、何とかいふ支那の禅師の話を思ひだしておかしかつたり、くやしかつたりしたことである。

六月十九日　同前。

曇、時々照る、歩けば暑い、汗が出た、田部、岡林及、岡町行乞、往復六里、少々草臥れた。朝の早いのは、私自身で感心する、今日も四時起床、一浴、読経回向、朝食、——六時まへに出立して三時すぎにはもう戻つて来た、山頭火未老！今日の行乞相（十日目の行乞である）はよほどよかつたが、おしまひがすこしすなほでなかつた、反省すべし。途中、菅生のところ／″＼にあやめが咲いてゐた、『あやめ咲くとはしほらしや』である、山つゝじを折つてきた、野趣（山趣？）横溢、うれしい花である。九州地方はよく茶をのむ、のみすぎる方だらう、隣家のものがちよつと来てもすぐ茶をくむぐらゐ、本県人、概して中国人はあまり茶をのまない、普通ならば、茶でも出さなければならない場合でも、ださないですましてゐる。此地方には馬は見あたらない、牛ばかりだ、牛を先立てゝ、ゆつたりと歩いてゆく農夫の姿は、山村風景になくてはならないものだ。此宿は気安くて深切で、ほんたうによろしいけれど、子供がうるさい、たつた一人の孫息子で、母親が野良仕事に精出すので、おばあさんが守をしてゐるが、彼女も忙しくて、そして下手糞だ、のみならず、此孫息子はかなりのヂラ（方言、駄々ツ児と同意義）、いやはや、よく泣く、泣く、誰よりも、それが私に徹える、困る、ほんたうに困る。笠から蜘蛛がぶらさがる、小さい可愛い蜘蛛だ、彼はいつまで私といつしよに歩かうといふのか、そんなに私といつしよに歩くことが好きなのかよ。

・梅雨の満月が本堂のうしろから・傾いた月のふくろうとして　　　　□　けふから田植をはじめる朝月・朝の虫が走つてきた・朝月にもう一枚は植ゑてしまつた・炎天の影ひいてさすらふ　さみしい道を蛇によこぎられる

今夜は行乞所得で焼酎を買ふことが出来た（十方の施主、福寿長久であれ、それにしても浄財がそのまゝアルコールとなりニコチンとなることは罰あたりである）、そしてほろ／＼酔ふた（とろ／＼までは

ゆけなかつた、どろ／＼へは断じてゆかない）。

六月廿日　同前。

雨、梅雨もいよ／＼本格的になつた、それでよい、それでよい、終日閉ぢ籠つて読書する、これが其中庵だつたら、どんなにうれしいだらう、それもしばらくのしんぼうだ、忍辱精進、その事、その事。雨につけ風につけ、私はやつぱりルンペンの事を考へずにはゐられない、家を持たない人、金を持たない人、保護者を持たない人、そして食慾を持ち愛慾を持ち、一切の執着煩悩を持つてゐる人だ！ルンペンは固より放浪癖にひきずられてゐるが、彼等の致命傷は、怠惰である、根気がないといふことである、酒も飲まない、女も買はない、賭博もしない、喧嘩もしない、そしてたゞ仕事がしたくない、といふルンペンに対しては長大息する外ない、彼等は永久に救はれないのだ。今日も焼酎一合十一銭、飛魚二尾で五銭、塩焼にしてちびり／＼、それで往生安楽国！

・夏めいた灯かげ月かげを掃く・障子に箒の影も更けて・わいてあふれるなかにねてゐる・生えてあやめの露けく咲いてる　　　　□・重さ、かきなやむ四人の大地　　魚店風景　ならべられてまだ生きてゐる　　　　□・笠ぬげば松のしづくして　　　　□・しぼんだりひらいたりして壺のかきつばた・こゝろふさぐ夜ふけて電燈きえた（事実そのものをとつて）

六月廿一日　同前。

昨夜来の風雨がやつと午後になつてやんだ、青葉が散らばり草は倒れ伏してゐる。水はもう十分だが、この風では田植も出来ないと、お百姓さんは空を見上げて嘆息する。私にはうれしい手紙が来た、それはまことに福音であつた、緑平老はいつも温情の持主である。自分でも気味のわるいほど、あたまが澄んで冴えてきた、私もどうやら転換するらしい、——左から右へ、——酒から茶へ！何故生きてるか、と問はれて、生きてるから生きてる、と答へることが出来るやうになつた、此問答の中に、私の人生観も社会観も宇宙観もすべてが籠つてゐるのだ。

　　これで田植ができる雨を聴きつゝ寝る・いたゞきは立ち枯れの一樹・蠅がうるさい独を守る・ひとりのあつい茶をすゝる・花いばら、こゝの土とならうよ

　　六月廿二日　同前。

　晴曇さだめなし。小串へゆく、もう夾竹桃が咲いてゐた、松葉牡丹も咲いてゐた。あんまり神経がいらだつので飲んだ、そして飲みすぎた、当面の興奮はおさまつたが、沈衰がやつてきた、当分また苦しみ悩む外ない。笑へない喜劇、泣けない悲劇、それが私の生活ではないか。寺領借入の交渉が頓挫した、時々一切を投げだしたいやうな気分になる、こんなにまでして庵居しなければならないのか。……子供はほんたうに騒々しい、耳をふさいでゐた。

　　夫婦で親子で畑の草とる・握つてくれた手のつめたさで葉ざくら・ひとりをれば蠅取紙の蠅がなく

　　六月廿三日　同前。

　空模様のやうに私の心も暗い、降つたり照つたり私の心も。……ふりかへらない私であつたが、いつとなくふりかへるやうになつた、私の過去はたゞ過失の堆積、随つて、悔の連続だつた、同一の過失、同一の悔をくりかへし、くりかへしたに過ぎないではないか、あゝ。払ふべきものは払つた、といつてはいひすぎる、払へるだけは払つた。多少、ほがらかになつたやうである。

　　六月廿四日　同前。

　やうやく晴となつた。妹から心づくしの浴衣と汗の結晶とを贈つてくれた、すなほに頂戴する。血は水よりも濃いといふ、まつたくだ、同時に血は水よりもきたない。小串へ出かけて、予約本二冊を受取る、俳句講座と大蔵経講座、これだけを毎月買ふことは、私には無理でもあり、贅沢でもあらう、しかし、それは読むと同時に貯へるためである、此二冊を取り揃へて置いたならば、私がぽつかり死んでも、その代金で、死骸を片づけることが出来よう、血縁のものや地下の人々やに迷惑をかけないで、また、知人をヨリ少く煩はして、万事がすむだらう（こんな事を考へて、しかもそれを実行するやうになつ

たゞけ、私は死に近づいたのだ）。近来、水——うまい水を飲まない、そのためでもあらうか、何となく身心のぐあいがよろしくない、よい水、うまい水、水はまことに生命の水である、あゝ水が飲みたい。蠅取紙のふちをうろ／＼してゐる蠅を見てると、蠅の運命、生きもののいのち、といつたやうなものを考へずにはゐられない。終日終夜、湯を掘つてゐる、その音が不眠の枕にひゞいて、頭がいたんできた。今日は書きたくない手紙を三通書いた、書いたといふよりも書かされたといふべきだらう、寺領借入のために、いひかへれば、保證人に対して私の身柄について懸念ないことを理解せしめるために、——妹に、彼に、彼女に、——私の死病と死体との処理について。——
欝々として泥沼にもぐつたやうな気分だ、何をしても心が慰まない、むろん、かういふ場合にはアルコールだつて無力だ、殊に近頃は酒の香よりも茶の味はひの方へ私の身心が向ひつゝあることを感じてゐる（それは肉体的な、同時に、精神的なものに因してゐると思ふ）。

六月廿五日　同前。

晴后曇、梅雨の或る日は、といつたやうな気分。朝焼はうつくしかつた（それは雨を予告するのだが）、自然のうつくしさが身心にしみいるやうだつた。朝、青草——壺に投※すために——五六本を摘んだ、露も蜘蛛もいつしよに。燕の子が、いつのまにやら巣立つてゐる、それらしいのがをり／＼軒端近く来ては囀づる。水田もまた、いつのまにやら、いちめんの青田となつてゐる、そして蛙が腹いつぱいの声でうたうてゐる。生きのよい鯖が一尾八銭だつた、片身は刺身、片身は塩焼にして食べた、おいしかつた、焼酎一合十一銭、水を倍加して飲んだがうまくなかつた。たしかにアルコールに対する執着がうすらぎつゝある、酒を飲まないのでなくて飲めなくなるらしい、うれしくもあり、かなしくもあり、とはこのことだ。捨てられて仔猫が鳴きつゞけてゐる、汝の運命のつたなきを鳴け、といふ外ない。新聞配達の爺さんが、明日からは魚も持つてまゐりますから買うて下さいといふ、新聞と生魚！調和しないやうで調和してゐると思ふ。

・待つてゐるさくらんぼ熟れてゐる

六月廿六日　同前。

曇、近郊散策、気分よろし、御飯がうまい、但し酒はうまくない、これも人生の悲喜劇一齣だらう。蚤はあたりまへだが、虱のゐたのにはちよいと驚いた、蠅や蚊はもちろん。今日は日曜日なので一夜泊り、或は一日遊びの浴客がちらほら歩いてゐる、あまりモダンぶりのものは見うけない、こゝにインバイがゐないやうに（カフヱーの女給や芸妓のエロサービスは知らないが）、それはこゝにふさはしいお客さんばかりだ。妙青禅寺の本堂で、観世流の謡会があつた、日本的でよいと思ふけれど、ほんたうの味は解らない。青龍園——妙清寺境内、雪舟築くところ——を改めて鑑賞する、自然を活かす、いひかへれば人為をなるたけ加へないで庭園とする点に於てすぐれてゐると思ふ、つゝじとかきつばたとの対照融和である（萩が一株もう咲いてゐた）。門前の老松もよいが、大タブもよい、その実はうれしいものだ。午後はあてどもなく山から山へ歩く、雑草雑木が眼のさめるやうなうつくしさだ、粉米のやうな、こぼれやすい花を無断で貰つて帰つた。おばさんが筍を一本下さつた、うまい、うまい筍だつた、それほどうまいのに焼酎五勺が飲みきれなかつた！（明日は間違なく雨だよ！）ほんたうに酒の好きな人に悪人がゐないやうに、ほんたうに花を愛する人に悪人はゐないと思ふ。改造社の俳句講座所載、井師の放哉紹介の記録を読んで、放哉は俳句のレアリズムをほんたうに体現した最初の、そして或は最大の俳人であると今更のやうに感じたことである。『刀鋒を以て斬るは敗る、刀盤を以て斬るは勝つ』捨身剣だ、投げだした魂の力を知れ。

緑平老に・ひさしぶり逢へたあんたのにほひで（彼氏はドクトルなり）　□・梅雨晴の梅雨の葉のおちる　□　蠅取紙・いつしよにぺつたりと死んでゐる・山ふかくきてみだらな話がはづむ・山ふところのはだかとなる・のぼりつくして石ほとけ・みちのまんなかのてふてふで・あの山こえて女づれ筍うりにきた

晩に土落し（田植済の小宴）、の御馳走を頂戴した（御相伴といふ奴だ）、煮しめ一皿、まだ飯一椀、私に下さる前に、牛が貰つたか知ら！（此地方は山家だから牛ばかりだ）今朝はめづらしくどこからも来信がなかつた、さびしいと思つた、かうして毎日々々遊んでゐるのはほんたうに心苦しい、からだはつかはないけれど、心はいつもやき

もきしてゐる、一刻も早く其中庵が建つやうにと祈つてゐる。……近頃また不眠症にかゝつて苦しんでゐる、遊んで、しかも心を労する私としては、それは当然だらうて。

六月廿七日　同前。

曇、梅雨らしく。朝蜘蛛がぶらさがつてゐる、それは好運の前徴だといはれる、しかし、今の私は好運をも悪運をも期待してゐない、だいたい、さういふものに関心をあまり持つてゐない、が、事実はかうだつた、東京から送金して貰つた、同時に彼女から嫌な手紙を受取つたのである。二三日前からの寝冷がとう／＼本物になつたらしい、発熱、倦怠、自棄――さういつた気持がきざしてくるのをどうしようもない。小串へ出かける、月草と石ころとを拾うてきた、途中、老祖母の事が思ひだされて困つた、父と私と彼女と三人が本山まゐりした時の事が、……八鉢旅館の事、馬の水の事。……近来、妙な句ばかり出来る、私も老いぼれたのかも知れない、まだ老いぼれるには早すぎるが！

・安宿のざくろたくさん花つけた　　　　□・六月六日、こゝにおちついた雨（追加）　　蠅取紙・大きな声で死ぬるほかない　　鑿泉工事・掘りさげる土の底からふきあがる　　鮮人ルンペン　拾ふことの、生きることの、袋ふくれる

六月廿八日　同前。

晴、時々曇る、終日不快、万象憂欝。不眠が悪夢となつた、恐ろしい夢でなくて嫌な夢だから、かへつてやりきれない。何もかも苦い、酒も飯も。最後の晩餐！　といふ気分で飲んだ、飲めるだけ飲んだ、ムチヤクチヤだ、しかもムチヤクチヤにはなりきれないのだ。何といふみじめな人間だらうと自分を罵つた、――こんなにしてまで、私は庵居しなければならないのでせうか――と敬治君に泣言を書きそへた。

六月廿九日

晴、寝床からおきあがれない、悪夢を見つゞける外ない自分だつた。寝てゐて、つく／″＼思ふ、百姓といふものはよく働らくなあ、働

らくことそのことが一切であるやうに働らいてゐる。私は悔恨の念にたへなかつた。

六月卅日　同前。

曇、今日も門外不出、すこしは気軽い。あさましい夢を見た（それは、ほんとうにあさましいものだつた、西洋婦人といつしよに宝石探検に出かけて、途中、彼女を犯したのだ！）。

・かつと日が照り逢ひたうなつた

私は、善良な悪人に過ぎない。……　　　　△　△　△　△

自戒三条　一、自分に媚びるな　一、足らざるに足りてあれ　一、現実を活かせ

いつもうまい酒を飲むべし、うまい酒は多くとも三合を超ゆるものにあらず、自他共に喜ぶなり。

七月一日　木下旅館。

雨、終日読書、自省と克己と十分であつた、そして自己清算の第一日（毎日がさうだらう）。伊東君に手紙を書く、愚痴をならべたのである、君の温情は私の一切を容れてくれる。私は長いこと、死生の境をさまようてゐる、時としてアキラメに落ちつかうとし（それはステバチでないと同時にサトリではない）時として、エゴイズムの殻から脱しようとする、しかも所詮、私は私を彫りつゝあるに過ぎないのだ。……例の如く不眠がつゞく、そして悪夢の続映だ！　あまりにまざ／＼と私は私の醜悪を見せつけられてゐる、私は私を罵つたり憐んだり励ましたりする。彼――彼は彼女の子であつて私の子ではない――から、うれしくもさみしい返事がきた、子でなくて子である子、父であつて父でない父、あゝ。俳句といふものは――それがほんとうの俳句であるかぎり――魂の詩だ、こゝろのあらはれを外にして俳句の本質はない、月が照り花が咲く、虫が鳴き水が流れる、そして見るところ花にあらざるはなく、思ふところ月にあらざるはなし、この境涯が俳句の母胎だ。時代を超越したところに、目的意識を忘却したところに、いひかへれば歴史的過程にあつて、しかも歴史的制約を遊離したところに、芸術（宗教も科学も）の本質的存在がある、これは現

在の私の信念だ。

　　さみしい夜のあまいもの食べるなど・何でこんなにさみしい風ふく・手折るよりぐつたりしほれる一枝・とりきれない虱の旅をかさねてゐる・雨にあけて燕の子もどつてゐる　縞萱伸びあがり塀のそといちめんの蔦にして墓がそこゝ

　ロマンチツク――レアリスチツク――クラシツク――そして、何か、何か、何か、――そこが彼だ。

　我昔所造諸惑業　　皆由無始貪瞋痴従身口意之所生　　一切我今皆懺悔衆生無辺誓願度　　煩悩無尽誓願断法門無量誓願学　　仏道無上誓願成

　　七月二日　同前。

　雨、いかにも梅雨らしい雨である、私の心にも雨がふる、私の身心は梅雨季の憂欝に悩んでゐる。入浴、読経、漫読、思索、等、等、等。発熱頭痛、まだ寝冷がよくならないのである、歯がチクチクいたむ、近々また三本ほろ／＼ぬけさうだ。聞くともなしに隣室の高話しを聞く、在郷の老人連である、耕作について、今の若い者が無智で不熱心で、理屈ばかりいつて実際を知らないことを話しつゞけてゐる、彼等の話題としてはふさはしい。

　・朝の烏賊のうつくしくならべられ（魚売）・どうやら晴れさうな青柿しづか・旅もをはりの、歯がみなうごく　胡瓜こり／＼かみしめてゐる・松へざくろの咲きのこる曇り　梅雨寒い蚤は音たてゝ死んだ・くもり憂欝の髯を剃る　　　□　　改作一句・そゝくさ別れて山の青葉へ橋を渡る　　　□　見なほすやぬけた歯をしみ／″＼とほつくりぬけた歯で年とつた　投げた歯の音もしない木下闇　これが私の歯であつた一片　　　□・釣られて目玉まで食べられちやつた

　例の歯をいぢくつてゐるうちに、ひよいとぬけてしまつた、何となくがつかりとした気持である、さみしいといはうか、おかしいといはうか、何ともいへない感じだ。△物、心、真実、表現、――芸術、句。二日かゝつてやつと焼酎一合だつた！もう二本ぬけさうな歯がある！夕方、五日ぶりに散歩らしい散歩をした、山の花野の花を手折つ

て戻つた。今夜初めて蚊帳を吊つた、青々として悪くない（私は蚊帳の中で寝る事をあまり好かないのだが）、それにしてもかうした青蚊帳を持つてゐるのは彼女の賜物だ。夜おそく湯へゆく、途上即吟一句、——

・水音に蚊帳のかげ更けてゐる

七月三日

晴、これで霖雨もあがつたらしい、めつきり暑くなつた。朝は女魚売の競争だ、早くまはつてきた方が勝だから、もう六時頃には一人また一人、『けふはようございますか』『何かいらんかのう』。農家のおぢいさんが楊桃を売りに来た、Ａ伯父を想ひだした、酒好きで善良で、いつも伯母に叱られてばかりゐた伯父、あゝ（同時に、私たちの少年時代には果実といふものがいかに貧弱であつたかを考へた）。朝の散歩はよいものである、孤独の散歩者ではあるけれど、さみしいとは思はないほど、心ゆたかである。振衣千仞岡、濯足万里流——といふ語句を読んでルンペンの自由をふりかへつた。いつしよに伸べてゐた手をふと見て、自分の手が恥づかしかつた、何と無力な、やはらかな、あはれな手だらう。私は貧乏を礼讃するものではない、しかし私は私の貧乏に感謝しなければなるまい、私は貧乏のおかげで、食物の好き嫌ひがなくなつた、何でもおいしくいたゞくことができるやうになつた、そして貧乏のおかげで今日まで生き存らへることが出来たのである、若し私が貧乏にならなかつたならば、私は酒を飲みたいだけ飲んで、飲みすぎつゞけて、そのために死んでしまつたであらうから。隣室の話はなか／＼興ふかく聞かれる、——農家の爺さん婆さんが大きな声で、ねち／＼と話しあつてゐる、——働けるだけ働いて、働いても働いても借金がふえるばかり、息子がいふ事をきかないで（世の中に孫ほど可愛いものはないさうな）目先の流行ばかり追うてゐる、あの家の主人が嫁をまた貰ふさうな、四度目の結婚と三度目の結婚で、子供が男に二人、女に三人、それがいつしよになつたら、さぞや面倒だらう、——といつたやうな話。今日は日曜日のお天気で浴客が多かつた、大多数は近郷近在のお百姓連中である、夫婦連れ、親子連れ、握飯を持つて来て、魚を食べたり、湯にいつたり、話したり寝たり、そして夕方、うれしげに帰つてゆく、田園風景のほがらかな

一面をこゝに見た。

・いつしよに伸べた手白い手恥づかしい手　　　□・温泉掘る音の蔦の実　みんな売れた野菜籠ぶら／＼戻る　　　□・なぐさまないこゝろを山のみどりへはなつ・家のまはり身のまはり蛙蛙

七月四日

晴、一片の雲もない日本晴。発熱、頭痛、加之歯痛、怏々として楽しまず、といふのが午前中の私の気分だつた。裏山から早咲の萩二枝を盗んで来て活ける、水揚げ法がうまくないので、しほれたのは惜しかつた。萩は好きな花である、日本的だ、ひなびてゐてみやびやかである、さみしいけれどみすぼらしくはない、何となく惹きつける物を持つてゐる。訪ねてゆくところも訪ねてくる人もない、山を家とし草を友とする外ない私の身の上だ。身許保證（土地借入、草庵建立について）には悩まされた、独身の風来坊には誰もが警戒の眼を離さない、死病にかゝつた場合、死亡した後始末の事まで心配してくれるのだ！当家の老主人がやつてきて、ぼつり／＼話しだした、やうやく私といふ人間が解つてきたので保證人にならう、土地借入、草庵建立、すべてを引受けて斡旋するといふのだ、晴、晴、晴れきつた。豁然として天地玲瓏、——この語句が午後の私の気分をあらはしてゐる。それにしても、私はこゝで改めて「彼」に感謝しないではゐられない、彼とは誰か、子であつて子でない彼、きつてもきれない血縁のつながりを持つ彼の事だ！

・山路はや萩を咲かせてゐる・ゆふべの鶏に餌をまいてやる父子で・明日は出かける天の川まうへ

夜ふけて、知友へ、いよ／＼造庵着手の手紙を何通も書きつゞけてゐるうちに、何となく涙ぐましくなつた、ちようど先日、彼からの手紙を読んだ時のやうに、白髪のセンチメンタリストなどゝ冷笑したまふなよ。とう／＼今夜も徹夜してしまつた。

七月五日

曇、后晴、例の風が吹くので、同時に不眠の疲労があるので、小月行乞を見合せて籠居。きのふのゆふべの散歩で拾うてきた蔓梅一枝

（ねぢうめともいふ）を壺の萩と※しかへたが、枝ぶり、葉のすがた、実のかたち、すべてが何ともいへないよさを持つてゐる、此木は冬になつて葉が落ち実がはじけた姿がよいのだが、かうした夏すがたもよかつた。句集「鉢の子」がやつときた、うれしかつたが、うれしさといつしよに失望を感ぜずにはゐられなかつた、北朗兄にはすまないけれど、期待が大きかつたゞけそれだけ失望も大きかつた、装幀も組方も洗練が足りない、都会染みた田舎者！　といつたやうな臭気を発散してゐる（誤植があるのは不快である）、第二句集はあざやかなものにしたい！払うべきものを払へるだけ払つてしまつたので、また、文なしとなつちやつた、おばさんにたのんでアルコール一罎をマイナスで取り寄せて貰ふ、ぐい／＼ひつかけて昼寝した。……夜は宿の人々といつしよに飲んでしまつた、アルコールのきゝめはてきめん、ぐつすりと朝まで覚えなかつた。

七月六日

雨、今日も行乞不能、ちよんびり小遣が欲しいな！終日歯痛、歯がいたいと全身心がいたい、一本の歯が全身全心を支配するのである。夕方、いたむ歯をいぢつてゐたら、ほろりとぬけた、そしていたみがぴたりととまつた、――光風霽月だ。これで今年は三本の歯がなくなつた訳である、惜しいとは思はないが、何となくはかない気持だ。くちなしの花を活ける、花の色も香も好きである、野の貴公子といつた感じがある。

・ほつくりぬけた歯を投げる夕闇・何だかなつかしうなるくちなしさいて

七月七日

雨、空は暗いが私自身は明るい、其中庵が建ちつゝあるのだから。――しかし今日も行乞が出来ないので困る、手も足も出ない、まつたくハガキ一枚もだせない。時々、どしやぶり、よう降るなあ！昨日も今日も、そして明日も恐らくは酒なし日。どこの家庭を見ても、何よりも亭主の暴君ぶりと妻君の無理解とが眼につく、そしてそれよりも、もつと嫌なのは子供のうるさいことである。歯痛がやんだら手足のところ／″＼が痛みだした、一痛去つてまた一痛、それが人生だ！

・くもりおもたくおのれの体臭・けさはあめの花いちりん・畦豆も伸びあがる青田風・雨の山越え苗もらひに来た・青田青田へ鯉児を放つ

七月八日

雨、少しづゝ晴れてくる。痔がよくなつた、昨春以来の脱肛が今朝入浴中ほつとりとおさまつた、大袈裟にいへば、十五ヶ月間反逆してゐた肉塊が温浴に宥められて、元の古巣に立ち戻つたのである、まだしつくりと落ちつかないので、何だか気持悪いけれど、安心のうれしさはある。とにかく温泉の効験があつた、休養浴泉の甲斐があつたといふものだ、四十日間まんざら遊んではゐなかつたのだ。建ちさうで建たないのが其中庵でござる、旅では、金がなくては手も足も出ない。ゆつくり交渉して、あれやこれやのわずらひに堪へて、待たう待たう、待つより外ない。臭い臭い、肥臭い、こゝでかしこで肥汲取だ、西洋人が、日本は肥臭くて困るといふさうだが、或る意味で、我々日本人は糞尿の中に生活してる！

・朝の道をよこぎるや蛇・朝しづくの一しづくである　□田植じまひは子を連れて里へ山越えて　□・梅雨あかり、ぱつと花のひらきたる　□・鯉の児放つや青田風・曇の日、釣りあげたはいもり　□・墓から墓へ夕蜘蛛が網を張らうとする・墓に紫陽花咲きかけてゐる・夕焼小焼牛の子うまれた・家をめぐり蛙なく新夫婦である

七月九日

空は霖雨、私は不眠、相通ずるものがあるやうだ。あの晩からちつとも飲まないので、一杯やりたくなつた！星城子さんの厚情によつて、飯田さん仙波さん寄与の懐中時計が到着した、私が時計を持つといふことは似合はないやうでもあるが、すでに自分の寝床をこしらへつゝある今日、自分の時計を持つことは自然でもあらう（その時計の型や何かは、私の望んだほど時代おくれでもなくグロテスクでもなけれど、三君あればこそ私の時計があつたのである、ありがたい／＼、たゞ口惜しいのはチクタクがちよい／＼と睡ることである、まさか、私のところに来たといふので、酔つぱらつたのでもあるまい！）。動

かない時計はさみしく、とまる時計はいらだゝしいものである。うれしいたよりが二つあつた、樹明君から、そして敬治君から。花ざくろを活ける、美しい年増女か！石を拾ふついでに、白粉罎を拾うた、クラブ美の素といふレツテルが貼つてあつた、洗つても洗つてもふくいくとしてにほふ、なまめかしい、なやましいにほひだ、しかし酒の香ほどは好きでない、むろん嫌いではない、しばらくならば（これは印肉入にする）。夕方になつて腹が空いてくると、ひつかけたくなる、大急ぎで、詰めこんで、アルコール虫をママで抑へつけた！

・おちつかない朝の時計のとまつてる・旅路はいろ／＼の花さいて萩

夜は宿の人々と雑談する、行乞の話、酒の話、釣の話、等、等、――此家の人々はみんな好人物である、かういふ人々と親しくして余生を送ることができるやうになつた私の幸福を祝さう。当地に草庵をつくるについて、今更のやうに教へられたことは、金の魅力、威力、圧力、いひかへれば金のきゝめであつた。私は私にふさはしくない、といふよりも不可能とされてゐた貯金を始めることになつた、保證人に対する私の保證物として！（毎月壱円）そして、私がしみ／″＼と感じないではゐられないことは、仏教の所謂、因縁時節である、因縁が熟しなければ、時節が来なければ、人生の事はどうすることも出来ないものである。

七月十日

ほんとうによくふると、けさはおもつた、頭痛がしてぼんやりしてゐた。夢精！　きまりわるいけれど事実だから仕方がない、もつともそれだけ vital force が残つてるのだらう！

水をたゞようて桐一葉・夕焼うつくしい旅路もをはり
□・青葉ふかくいち高い樹のアンテナ・ゆふべのラヂオの泣きたうなつた

七月十一日

四時前に起きた、掃除して、湯にはいつて、朝課諷経してゐるうちに、やうやく夜が明けた。すなほでない自分を見た、同時に自分の乞

食根性を知つた。……今日はどうやらお天気らしいので近在を行乞するつもりだつたが、どうしたわけか（酒どころか煙草すらのめないのに）、痔がわるくて休んだ、コツ／＼三八九復活刊行の仕事をやつた。晴れて急に暑くなつた、ぢつとしてゐて、汗がたら／＼流れる、いよ／＼真夏を感じる、私はどんなに暑くても苦しくても、冬よりは夏をえらぶ、私の肉体が寒さよりも暑さに対して抵抗強いからでもあるが、浴衣一枚で何のこだわりもない生活が好ましいからである。

・ふたゝびこゝに花いばら散つてゐる・この汽車通過、青田風・旅の法衣がかわくまで雑草の風

夜は妙青寺の真道長老を訪ねて暫時閑談、雪舟庭の暗さから青蟇の呼びかけるのはよかつた、螢もちらほら光る、すべてがしづかにおちついてゐる。正法眼蔵啓迪を借りて戻る、これはありがたい本であり、同時におもしろい本である（よい意味で）。また不眠だ、すこし真面目に考へだすと、いつも眠れなくなる、眠れなくなるやうな真面目は嘘だ、少くとも第二義的第三義的だ。しかし不眠のおかげで、千鳥の声をたんまりと聴くことができた。どこかそこらで地虫もないてゐる、一声を長くひいてはをり／＼なく、夏の底の秋を告げるやうだ。

七月十二日

雨、降つたり降らなかつたりだが、小月行乞はオヂヤンになつた、これでいよ／＼空の空になつた。啓迪を読みつゞける、元古仏の貴族的気禀に低頭する。……

・なく蠅なかない蠅で死んでゆく・長かつた旅もをはりの煙管掃除です

ありがたい品物が到来した、それはありがたいよりも、私にはむしろもつたいないものだつた、――敬治君の贈物、謄写器が到来したのである、それは敬治君の友情そのものだつた、――私はこれによつてこれから日々の米塩をかせぎだすのである。今夜も千鳥がなく、虫がなく。……

七月十三日

雨、雨、雨、何もかもうんざりしてゐる、無論、私は茶もなく煙草もなく酒もなくてぼんやりしてゐるが。正法眼蔵啓迪「心不可得」の巻拝読。白雲去来、そして常運歩（其中庵は如何）。とう／＼我慢しきれなくなつて、おばさんからまた金二十銭借る、それを何と有効につかつたことか——郵券二銭一枚、ハガキ二枚、撫子一包、そして焼酎一合！私もどうやらかうやらアルコールから解放されさうだ、といつて、カルモチンやアダリンはまつぴら／＼。午後、ぶら／＼歩いて、谷川の水を飲んだり、花を摘んだりした、これではあまりに安易すぎる、といつて動くこともできない、すこしいら／＼する。

・ひとりなれば山の水のみにきた・山の仏には山の花

七月十四日

曇、まだ梅雨模様である、もう土用が近いのに。今日も、待つてゐる手紙がない、旅で金を持たないのは鋏をもがれた蟹のやうなものだ。手も足も出ないから、ぼんやりしてる外ない、造庵工事だつて、ちつとも、捗らない、そのためでもあるまいが、今日は朝から頭痛がする。……山を歩く、あてもなしに歩きまはつた、青葉、青葉、青葉で、ところ／″＼躑躅の咲き残つたのがぽつちりと赤いばかり。めづらしく句もない一日だつた、それほど私の身心はいぢけてゐるのだらうか。

七月十五日

一切憂鬱、わづかに朝湯が一片の慰藉だ。たゞ暑い、空つぽの暑さだ。南無緑平老菩薩、冀はくは感応あれ。

・暑く、たゞ暑くをる・蜩のなくところからひきかへす・あすはよいたよりがあらう夕焼ける　　　□・食べるもの食べきつたかなかな

夕の散歩で四句ほど拾ふたが、今年はじめて蜩を聴いたのはうれしかつた、峰と峰とにかこまれたゆふべの松の木の間で、そこにもこゝにも蜩がしづかにしめやかに鳴きかはしてゐた（みん／＼蝉は先日来いくたびも聴いたが）。

七月十六日

曇、此頃は、日和癖とでもいふのか、午前中は雨模様、午後になると晴、頭痛がして困る。――朝の散歩はよい、ことに朝の山路を逍遙する時は一切を忘れて一切に合してゐる気分になる、歯朶がうつくしい、池水がおだやかだ、頬白の声がすが／＼しい、物みなよろしとはこの事だ。そこにもこゝにも句が落ちてゐる、かくべつ拾ひたいとも思はないが、その二つ三つ。

・朝の土から拾ふ・山奥の蜩と田草とる（これは昨夕）・夜どほし浴泉があるのうせんかつら・青すゝきどうやら風がかはつた

晴れた、晴れた、お天気、お天気、みんなよろこぶ、私も働かう、うんと働かう、ほんとうに遊びすぎた。

・けふの散歩は蜩ないて萩さいて・かんがへがまとまらないブトにくはれる・山のいちにち蟻もあるいてゐる

何だかノスタルヂヤにでもかゝつたやうだ、これも造庵や生活やすべてがチグハグになつてゐるせいかも知れない。

・はだかしたしくはだかをむける（大衆浴場）・夏の夜のヱンヂンのようひゞく

七月十七日

晴、小月町行乞、往復九里は暑苦しかつたけれど、道べりの花がうつくしかつた、うまい水をいくども飲んだ、行乞はやつぱり私にふさはしい行だと思つた。行乞所得はよくなかつたが、句の収穫はわるくなかつた。――

・ぴつたり身につけおべんたうあたゝかい・朝の水にそうてまがる・すゞしく蛇が朝のながれをよこぎつた・禁札の文字にべつたり青蛙・このみちや合歓の咲きつゞき・石をまつり水のわくところ・つきあたつて蔦がからまる石仏・いそいでもどるかなかなかなかな・暮れてなほ田草とるかなかな・山路暮れのこる水を飲み

一銭のありがたさ、それは解りすぎるほど解つてゐる、体験として、――しかも万銭を捨てゝ惜まない私はどうしたのだらう！なぜだか、けふは亡友Ｉ君の事がしきりにおもひだされた、彼は私の最初の

心友だつた、彼をおもひだすときは、いつも彼の句と彼の歌とをおもひだす、それは、――

□おしよせてくだけて波のさむさかな　我れんちさう籠るに耳は眼はいらじ　　　　土の蚯蚓のやすくもあるかな

労れて戻つて（此宿へは戻つたといつてもいゝ、それほど気安くて深切にして下さる）そして酒のうまさは！

・つかれた脚を湯が待つてゐた・雲がいそいでよい月にする

七月十八日

晴れて暑い、ぢつとしてゐて汗がにじみでる、湯あがりの暑さは、裸体になることの嫌いな私でも、褌一つにならずにはゐられない。昨日の行乞所得の残金全部で切手と端書とを買つた、それでやうやく信債の一部を果した。酒が好きなために仏門に入るやうになり、貧乏になつたために酒毒から免かれてゐる、世の中の事は変なものであるわい（酒のために自己共に苦しみ悩んだ事はいふまでもないが）。

・朝からぴよんぴよん蛙・穂すゝきへけふいちにちの泥を洗ふ・月あかり撰りわける夏みかんの数　　　　□・聴くでもないおとなりのラヂオ泣いてゐる

七月十九日

晴、いよ／＼天候もきまつたらしい、私の心もしつかりしてくれ、晩年の光を出せ！此宿の漬物はなか／＼うまい（木賃自炊だが、朝の味噌汁と漬物とは貰へる、今日此頃の私は無一文だから漬物でお茶漬さら／＼掻きこんでゐる）、殊に今朝は茗荷がつけてあつた、何ともいへない香気だ、暑さを忘れ憂欝を紛らすことが出来る。夏は浅漬がよい、胡瓜、茄子、キヤベツ、何とか菜、時々らんきようも悪くない、梅干もありがたい。

山の夏みかんもぐより売れた　山からもいで夏みかんやばらばら雨・朝は涼しい茗荷の子（夏茗荷である）・はだかではだかの子をだいてゆふべ

七月廿日

曇、土用入だから、かん／＼照ればよいのに。朝の山へ、蜘蛛の囲を分けて登つて萩を採つて来て活けた、温湯に※したが、うまく水揚げしてくれるとうれしい。昨夜はとろりとしたゞけだつた、こんなでは困る。盆草――精霊草。人間は（いや、あらゆる生物は程度の差こそあれ）自分の好きなものを中心として（或は基本として）万事万物を観察する（または換算する）、それが自然でもあり真実でもある、といふ訳で、私は酒を以てすべてを観る、山を眺めては一杯やりたいな、野菜のよいのを見るとしんみり飲みたいなあと思ふ、これだけあれば一合やれる、これで一本買へるなと考へる、笑はれても実際だから仕方がない。

・紫陽花もをはりの色の曇つてゐる・つゆけく犬もついてくる・ゆふ雲のうつくしさはかなかなないて

私は今、庵居しようなどゝいふ安易な気分に堕した自分を省みて恥ぢてゐる、悔いてもゐる、しかも庵居する外ない自分を見直して嘆いてゐる、私はやむなく背水の陣を布いた、もう血戦（自分自身に対して）する外ない。緑平老へ、そしてＳ子へ、Ｓ女へ手紙を書いた、書きたくない手紙だつた、こんな手紙を書かなければならない不徳を憤つた。眠れない、眠つたと思へば悪夢だ。アルコールが私に対して、だん／＼魅力を失ひつゝあることは、むしろ悲しい事実だらう。

・蠅取紙の蠅がまだ鳴いてゐる

七月廿一日

曇、しかし朝蝉が晴れて暑くなることを予告しつゝある。山へ空へ、樹へ草へお経をあげつゝ歩かう。黒井行乞、そのおかげで手紙を差出すことが出来た。安岡町まで行くつもりだつたが、からだの工合がよくないのでひきかへした、暑さのためでもあらうが、年のせいでもあらうて。

（草木塔）・朝早い手を足を伸ばしきる・伸ばしきつた手で足で朝風・いちりん咲いてゐてててふてふ・あつさ、かみそりがようきれるかな

物を粗末にすれば物に不自由する（因果応報だ）、これは事実だ、

少くとも私の事実だ！

・夏のゆふべの子供をほしがつてゐる・墓へも紫陽花咲きつゞける

七月廿二日

朝曇、日中は暑いけれど朝晩は涼しい、蚊がゐなければ千両だ。感情がなくなれば人間ぢやない、同時に感情の奴隷とならないのが人間的だらう。さみしくいらだつからだへ蠅取紙がくつついた、句にもならない微苦笑だつた。

・泣いてはなさない蝉が鳴きさわぐ・何やら鳴いて今日が暮れる・水瓜ごろりと垣の中・虫のゆききのしみじみ生きてゐる　　　□・朝の木にのぼつてゐる

七月廿三日

土用らしい土用日和である、暑いことは暑いけれど、そこにわだかまりがないので気持がよい。隣室のお客さん三人は私の同郷人だ、純粋なお国言葉をつかうてゐる、彼等と話しあつてゐると、何だか血縁のものに接してゐるやうな気がする（私としては今のところ、身上をあかしたくないから、同郷人であることが暴露しないやうに警戒しなければならない）。当地には温泉情調といつたやうなものはあまりたゞようてゐない、むろん、私には入湯気分といつたやうなものはないが。今日も私はいやしい私を見た、自分で自分をあはれむやうな境地は走過しなければならない。子供はうるさいものだとしば／＼思はせられる、此宿の子はちよろ／＼児でちつとも油断がならない、お隣の子は兄弟妹姉そろうて泣虫だ、競争的に泣きわめいてゐる、子供といふものはうるさいよりも可愛いのだらうが、私には可愛いよりもうるさいのである。

（山水経）・のびのびてくさのつゆ・つゆけくもせみのぬけがらや・事がまとまらない夕蝉になかれ（此一句は事実感想そのまゝである）

夕食後、Ｍ老人を訪ねて、土地借入證書に捺印を頼んだら、案外にも断られた、何とかかとか言訳は聞かされたけれど、然諾を重んじない彼氏の立場には同情すると同時に軽蔑しないではゐられなかつた、

それにしても旅人のあはれさ、独り者のみじめさを今更のやうに痛感したことである。これで造庵がまた頓挫した、仕方がない、私は腰を据えた、やつてみせる、やれるだけやる、やらずにはおかない。……敬治さん、幸雄さんのたよりはほんとうにうれしかつたのに！今日は暑かつた、華氏九十七度を数へた地方もあるといふ、しかし私はありがたいことには、樹木の多い部屋で寝ころんでゐられるのだから。幸雄さんの供養で、焼酎を一杯ひつかける、饅頭を食べる、端書を十枚差出すことが出来た。

七月廿四日

今日も暑からう、すこし寝過した、昨夜の今朝で、何となく気分がすぐれない。野の花を活けた、もう撫子が咲いてゐるが、あの花には原始日本的情趣があると思ふ。幸雄さんへ手紙を書く、昨夜、M老人にふられたから、もう一人どうでもかうでも保證人を打出しなければならないのである（さういふ次第だから、書くにも気のすゝまない、貰つてもうれしく手紙である）、度々幸雄さんを煩はしてほんとうにすまないことである。——百雑砕——燃ゆる陽を浴びて夾竹桃のうつくしさ、夏の花として満点である。色身を外にして法身なし、しかも法身は色身にあらず、法身とは何ぞや。貧時には貧を貧殺せよ。私は拾ふ、落ちた物を拾ふ、落した物を拾ふにあらず、捨てたる物を拾ふなり。緑平老からの来信は私に安心と落ち着きとを与へてくれた。

・朝曇朝蜘蛛ぶらさがらせてをく・この木で二円といふ青柿のしづかなるかな・蒸暑い木の葉いちまい落ちた・私の食卓、夏草と梅干と

今日は梅干とランキヨウとで食べた、もう三週間あまり魚を買はない、野菜が一等おいしい。嫁と姑、これはあまりにも古い課題だ、そしていつも新らしい課題だ（今日、昼寝覚に、婆さん連中の会話を聞いて）。夕涼み、軽い心、軽いからだ、軽い話、涼しい。さみしさはうるさいにまさる。——一箇半箇——捨猫がうろついてゐる、彼女は時々いら／＼した声で鳴く、自分の運命を呪ふやうな、自分の不幸を人天に訴へるやうに鳴く、そして食べるものがないので、夜蝉を捕へる、その夜蝉がまた鳴く、断末魔の悲鳴をあげる。……安いものは、マツチ、釘、浴衣、そして。——近眼と老眼とがこんがらがつて読み

書きに工合がわるくて困る、そのたびに、年はとりたくないなあと嘆息する。

・よいゆふべとなりゆくところがない　　　青炎郎君にかへし　夾竹桃、そのおもひでの花びら燃えて

七月廿五日

何と朝飯のうまいこと！　（現在の私には、何物でも何時でもうまいのだが）私はほんとうに幸福だ！茗荷の子三把で四銭、佃煮にして置く、当分食卓がフクイクとしてにほふだらう、これもまた貧楽の一つ。――怪我をするときは畳の上でもするといふ、まつたくさうだ、今朝、私は縁側でしたゝか向脛をうつた、痛い、痛い。こゝの息子さんと土用鰻釣に出かける約束をしたので、釣竿を盗伐すべく山林を歩いてゐると、仏罰覿面、踏抜をした、こん／＼と血が流れる、真赤な血だ、美しい血だ、傷敗けをしない私は悠々として手頃の竹を一本切つた、いかにも釣れさうな竿だ、しかし私は盗みを好かない、随つて盗みの罰を受け易い、どうも盗みの興味が解らない。

・押売が村から村へ雲の峰

七月廿六日

相かはらず暑い、夕立がやつて来さうでなか／＼やつて来ない、草も木も人もあえいでゐる。約束通り、こゝの息子さんと溜池へ釣りに行く、鰻は釣れないで鮒が釣れた、何と薄倖な鮒だつたらう、せい／″＼三時間位だつたが、ずゐぶんくたぶれた。

・朝から暑い野の花をさがしあるく・すゝき活けて誰かを待つてゐる・蟻や蝉やいちにち孫を遊ばせる　　　□・水底の雲から釣りあげた・赤い夕日に釣つてやめようともしない

七月廿七日

今日は土曜の丑の日。鰻どころか、一句もない一日だつた！だが、夕方になつて隣室から客人から、蒲焼一片を頂戴した。まことに鰻ひときれの丑の日だつた！

・暑さ、泣く子供泣くだけ泣かせて

だから、駄句一つの一日でもあつた！

七月廿八日

晴、風がすが／＼しい、そして何となく雨の近い感じがする、今日はきつとよいたよりがあるだらう。よいたよりといへば、昨日うけとつたたよりはうれしいものであつた、緑平老からのたよりもうれしかつたが、幸雄さんからのそれは殊にうれしかつた、それは温情と好意とにあふれてゐた。頭痛がする、頑健そのものゝやうな私も暑さと貧しさとでだいぶ弱つたらしい、だがまゐつたのぢやない。野百合と野撫子とを活けた、百合はうつくしい、撫子は村娘野嬢のやうな風情でなくて（百合のやうに）深山少女といつた情趣である、好きな花だ、一目何でもないけれど、見てゐるとたまらなくよいところがある、西洋撫子はとても／＼だ。正さん——この宿の次男で、私の新らしい友達の一人——の新居を訪ねる、井戸を掘つてゐる、よい水が湧いて出るといつて喜んでゐる、掘つた穴の底には水が溜つて、そして蛙がもう二三匹飛び込んでゐる、これが文字通りの井底蛙だ。暑い、暑い、貧乏は暑いものだと知つた。貧乏はとう／＼切手を貼らない手紙をだす非礼を敢てせしめた、それを郵便集配夫がわざ／＼持つてきて見せた厚意には汗が流れずにはすまなかつた、それでなくても暑くてたまらないのに、——そしてまた、次のやうな嫌味たつぷりの句を作らないではゐられなかつた。

・炎天のポストへ無心状である・貧しさは水を飲んだり花を眺めたり　　　　□・炎天、夫婦となつて井戸も掘る・掘ればよい水が湧く新所帯で　　　　□　すゞしくなでしこをつんであるく

昔——といつても徳川時代——には大酒飲を酒桶とよんださうな、酒が飲めない酒好きは徳利になりたがる、酒桶には及びもないが！長い暑い一日がやうやく暮れて、おだやかな夕べがくる、茶漬さら／＼掻きこんで出かける、どこへといふあてもない、何をしようといふのでもない、訪ねてゆく人もなければ訪ねてくる人もない現在の境涯だ、たゞ歩くのである、たゞ歩く外ないから。——

七月廿九日

朝曇、日中は照りつけるだらう。修證義読誦、芭蕉翁発句集鑑賞、その気品の高いことに於て、純な点に於て、一味相通ずるものがある、厳かにして親しみのある作品といふ感じである、約言すれば日本貴族的である。みんなよく水瓜を食べる、殊に川棚水瓜だ、誰もが好いてゐる、しかし私の食指は動かない、それだけ私は不仕合せだ。隣室の旅人（半僧半俗の）から焼酎と葡萄とをよばれる、久振にアルコールを飲んだので、頭痛と胃痛とで閉口した。私はたしかにアルコールから解放された、ニコチンからも解放されつゝある、酒を飲まなくなり、煙草も喫はなくなつたら、さて此次は何をやめるか！山百合、山桔梗、撫子、苅萱、女郎花、萩、等等等、野は山はもう秋のよそほひをつけるに忙しい。

とんぼくはえてきた親つばめ子つばめあをむけば蜘蛛のいとなみ

七月三十日

晴、晴、晴、一雨ほしいなあ！緑平老から来信、それは老の堅実を示し、同時に私の焦燥を示すものだつた、人生不如意は知りすぎるほど知つてゐる私であるが、感情的な私はともすれば猪突する、省みて恥ぢ入る外なかつた（造庵について）。

・ラヂオがさわがしい炎天の花さいてゐて・日ざかり、われとわがあたまを剃り・星が光りすぎる雨が近いさうな・どうしてもねむれない夜の爪をきる・更けてさまよへばなくよきりぎりす　殺された蚤が音たてた・旅のこゝろもおちついてくる天の川まうへ

今日は特種が一つあつた、私は生来初めて自分で自分の頭を剃つた、安全剃刀で案外うまくやれた、これも自浄行持の一つだらう。

七月卅一日

いよ／＼出かけた、五時一浴して麦飯を二三杯詰めこんで勢よく歩きだしたのである、もう蝉がないてゐる、法衣にとびついた蝉も一匹や二匹ではなかつた。暑かつた、労れた、行程八里、厚狭町小松屋といふ安宿に泊る（三〇・中）、掃除が行き届いて、老婦も深切だが、キチヨウメンすぎて少々うるさい。行乞相はよかつた、所得もわるくなかつた、埴生一時間、厚狭二時間、それだけの行乞で食べて飲んで

寝て、ノンキに一日一夜生かさせていたゞいたのだから、ありがたいよりも、もつたいなかつた。明日は是非小郡まで行かう、そして宮市へ、そこで金策しなければならない。……歩くのはうれしい、水はうまい、強烈な日光、濃緑の山々、人さま／″＼の姿。

・涼しい風人形がころげる・泳ぎつかれてみんな水瓜をかゝえ・夾竹桃、そのかげで氷うりだした　かぼちやごろ／＼汐風に・何と涼しい南無大師遍照金剛

子のない女は何かペツトを持たずにはゐない、こゝのおばあさんは犬を可愛がつてゐる、もう老ひぼれ犬だ、そのきたない犬を座敷にあげて撫でたり擦つたりしてゐる、夜は抱いて寝るらしい、あれだけのキレイ好きが！

八月一日

歩いて三里、汽車で三里、そして樹明居だ、いつもかはらぬ友情にひたつた、うれしかつた。夜は飲んだ、冬村、二三男の二君来訪、四人でおそくまで話しつゞけた。午前中二時間は厚狭裏町行乞、午後の二時間はまた船木町行乞、時々気分がみだれた、没分暁な奥様、深切なおかみさん、等、等。昨日は蓮華のうつくしさ、今日は木槿のうつくしさを見た。糸根（愛寝）といふ和泉式部の古蹟、寝太郎餅といふ名物。馬占山の最後に一滴の涙をそゝぐ。朝御飯が最もおいしいほどの健康と幸福とを私は恵まれてゐる、合掌。樹明居、夏はすゞしく冬はあたゝかい、主人は道としての俳句に精進しつゝある、私は是非とも樹明居の記を書かなければならない（緑平居の記、白船居の記、そして其中庵記と共に）。女の服装（殊に夏季の）が一変しつゝあるのに驚く、老女のアツパツパは感心しませんね。駅の待合室の電燈の笠で生れて育つた燕はおもしろい。着いて、逢うて、すぐ風呂があつたとは！坊ちやん、あなたは暴君ですね、毎日蝉を虐殺する、虐殺されながら蝉は鳴く。

空を見てゐる若い女の腹が大きい・石にとんぼはまひるのゆめみる・昼寝ふかい村から村へのうせんかづら・ひるねざめ風があるきり／″＼す　峠下れば青田ふきとほし・日ざかり、学校の風車まはつたりまはらなかつたり　山はみどりの、広告文字が夕日にういて　逢へて

よかつた岩からの風に・水瓜したゝるしたしさよ（樹明居）　別れる星がすべる・ふけて雨すこしおちた　星あかりをあふれくる水をすくふ

八月二日

朝から酒（壁のつくろひは泥だといふがまつたくその通りだ）、宿酔が発散した。十一時の汽車で大道へ、追憶の糸がほぐれてあれこれ、あれこれといそがしい。七年目ぶりにＳ家の門をくゞる、東京からのお客さんも賑やかだつた、久しぶりに家庭的雰囲気につゝまれる。伯母、妹、甥、嫁さん、老主人、姪の子ら。……夕食では少し飲みすぎた、おしやべりにならないやうにと妹が心配してゐる、どうせ私は下らない人間だから、下らなさを発揮するのがよいと思ふけれど。酒は甘露、昨日の酒、今日の酒は甘露の甘露だつた、合掌献盃。よい雨だが、足らない、降れ、降れ、しつかり降つてくれ。寿さんの努力で後山がよく開拓されてある、土に親しむ生活、土を活かす職業、それが本当だ。樹明兄が借して下さつた「井月全集」を読む、よい本だつた、今までに読んでゐなければならない本だつた、井月の墓は好きだ、書はほんとうにうまい。石地蔵尊、その背景をなしてゐた老梅はもう枯れてしまつて花木が植ゑてある、こゝも諸行無常を見る、一句手向けよう。

あかつきのどこかで何か搗いてゐる　朝風に竹のそよぐこと　青田かさなり池の朝雲うごく・朝風の青柿おちてゐて一つ　おきるよりよい風のよい水をよばれた　　　Ｓ家即事　伯母の家はいまもちろ／＼水がながれて・水でもくんであげるほかない水をくみあげる　風ふくふるさとの橋がコンクリート　ふるさとのこゝにもそこにも家が建ち

八月三日

風、雨、しみ／″＼話す、のび／＼と飲む、ゆう／＼と読む（六年ぶりにたづねきた伯母の家、妹の家だ！）。風にそよぐ青竹を切つて線香入をこしらへた、無格好だけれど、好個の記念品たるを失はない。省みて疚しくない生活、いひかへればウソのない生活、あたゝかく生きたい。東京からまた子供がやつてきた、総勢六人、いや賑やかなこ

と、東京の子は朗らかで嬉しい、姉――彼等の祖母――が生きてゐたら、どんなに喜ぶだらう！東京の子が青紫蘇や茗荷の子を摘んでくれた、おいしかつた。風雨なので、そして引留められるので、墓参を明日に延ばして、さらに一夜の感興を加へた。

・松もあんなに大きうなつて蝉しぐれ（勅使松）・やつぱりおいしい水のおいしさ身にしみる　うれしい雨の紫蘇や胡麻や茄子や胡瓜や

八月四日

曇、どうやら風雨もおさまつたので、朝早く一杯いたゞいて出立、露の路を急いで展墓（有富家、そして種田家）、石古祖墓地では私でも感慨無量の体だつた、何もかもなくなつたが、まだ墓石だけは残つてゐたのだ。青い葉、黄ろい花をそなへて読経、おぼえず涙を落した、何年ぶりの涙だつたらうか！それから天満宮へ参拝する、ちようど御誕辰祭だつた、天候険悪で人出がない、宮市はその名の示すやうにお天神様によつて存在してゐるのである、みんなこぼしてゐた。酒垂公園へ登つて瀧のちろ／＼水を飲む、三十年ぶりの味はひだつた（おかげで被布を大の枝にひつかけて裂いたが）。故郷をよく知るものは故郷を離れた人ではあるまいか。東路君を訪ねあてる、旧友親友ほどうれしいものはない、カフヱーで昼飯代りにビールをあほつた、夜は夜でおしろいくさい酒をしたゝか頂戴した、積る話が話しても話しても話しきれない。三田君にちよつと面接、斉藤さんへは電話で挨拶、いろ／＼くいちがつたり、こんがらがつたりして、ゆつくり話しあふことが出来なかつたのは残念だつた、またの機会を待たう。

・ふるさとの蟹の鋏の赤いこと・ふるさとの河原月草咲きみだれ・蝉しぐれ、私は幸福である・ふるさとの水だ腹いつぱい・ふるさとの空の旗がはたはた・ひさびさ雨ふりふるさとの女と寝る・日向草の赤いの白いのたづねあてた　□・うぶすなの宮はお祭のかざり・うぶすな神のおみくじをひく　□　展墓・おもひでの草のこみちをお墓まで　夏草、お墓をさがす・すゞしくお墓の草をとる　お墓の、いくとせぶりの夏草をぬく　□　追加　みんなに話しかける青葉若葉のひかり

八月五日

曇、眼がさめるとまたビールだ、かうしたアルコールはいくらのんでもよろしからう。名残は尽きないけれど、東路君は勤人、私は行乞坊主なので、再会を約して別れる、八時の列車で小郡へ。——農学校に樹明さんを訪ねる、いつもかはらぬ温顔温情の持主である、こゝでもまたビールだ、いかな私もビール巻鮨の方がうまかつた！樹明さんの紹介で永平さんに初相見した、私たちの道の同行に一人を加へられたことを喜ぶ。防府で、小郡で、その他で、山頭火後援会の会員が十口くらい出来たのは（いや出来るのは）うれしい。学校として、農学校は好きだ、動物植物といつしよに学び、いつしよに働らいてゐるから。樹明居の一夜は一生忘れることの出来ない印象を刻みつけた、酒もよい、肴もよい、家も人も山も風もみんなよかつた、冬村君もよかつた、君のおみやげの梅酒もよかつた、あゝよかつた、よかつた。あんまり物みながよくて一句も出なかつた。

八月六日

暁の雨は強かつた、明けても降つたり晴れたりで、とても椹野川へ鮒釣りに行けさうもないので、思ひ切つてお暇乞する、こゝでもまた樹明さんの厚意に涙ぐまされた、駅まで送つて貰つた。何といろ／＼さま／″＼のお土産品を頂戴したことよ！　曰く茶卓、曰く短冊掛、曰く雨傘（しかも、それは其中庵の文字入だ）曰く何、曰く何、そして無論、切符から煙草まで、途中の小遣までも。汽車と自動車だから世話はない、朝立つて昼過ぎにはもう宿にまどつた、一浴して一杯やつて、ごろりと寝た。やつぱり、川棚の湯は私を最もよく落ちつかせてくれる、昨日、学校の廊下で藤椅子の上の昼寝もよかつたが、今日の、自分の寝床でのごろ寝もよかつた。朝湯と昼寝と晩酌とあれば人生百パアだ！

・すゞしく自分の寝床で寝てゐる・稲妻する夜どほし温泉を掘つてゐる

八月七日

まだ雨模様である、我儘な人間はぼつ／＼不平をこぼしはじめた。此宿の老主人が一句を示す。——

蠅たゝきに蠅がとまる

山頭火、先輩ぶつて曰く。——

蠅たゝき、蠅がきてとまる

しかし、作者の人生観といつたやうなものが意識的に現はれてゐて、危険な句ですね、類句もあるやうですね、しかし、作者としては面白い句ですね、云々。動く、秋意動く（ルンペンは季節のうつりかはりに敏感である、春を冬を最も早く最も強く知るのは彼等だ）。山に野に、萩、桔梗、撫子、もう女郎花、苅萱、名もない草の花。

・秋草や、ふるさとちかうきて住めば・子に食べさせてやる久しぶりの雨・秋めいた雲の、ちぎれ雲の

焼酎一杯あほつたせいか、下痢で弱つた、自業自得だ。

八月八日　川棚温泉、木下旅館。

立秋、雲のない大空から涼しい風がふきおろす。秋立つ夜の月（七日の下弦）もよかつた。五六日見ないうちに、棚の糸瓜がぐん／＼伸んで、もうぶらさがつてゐる、糸瓜ういやつ、横着だぞ！バラツク売家を見にゆく、其中庵にはよすぎるやうだが、安ければ一石二鳥だ。今日はめづらしく一句もなかつた、それでよろしい。

八月九日

朝湯のきれいなのに驚かされた、澄んで、澄んで、そして溢れて、溢れてゐる、浴びること、飲むこと、喜ぶこと！野を歩いて持つて帰つたのは、撫子と女郎花と刈萱。夜、椽に茶卓を持ちだして、隣室のお客さんと一杯やる、客はうるさい、子供のやうに（後記）。よいお天気だつた、よすぎるほどの。あゝあゝうるさい、うるさい、こんなにしてまで私は庵居しなければならないのか、人はみんなさうだけれど。

・炎天の電柱をたてようとする二三人

独身者は、誰でもさうだが、旅から戻つてきた時、最も孤独を体験する、出かけた時のまゝの物みなすべてが、そのまゝである、壺の花

は枯れても机は動いてゐない、たゞ、さうだ、たゞ、そのまゝのものに雪がふつてゐる、だ。当分、酒は飲まないつもりだつたが、何となく憂鬱になるし、新シヨウガのよいのが見つかつたので、宿のおばさんに頼んで、一升とつてもらつた、ちようど隣室のお客さんもやつてこられたので、だいぶ飲んで話した、……ふと眼がさめたら、いつのまにやら、自分の寝床に寝てゐる自分だつた。

八月十日

晴れて、さら／＼風がふく、夏から秋へ、それは敏感なルンペンの最も早く最も強く感じるところだ。昨日今日、明日も徴兵検査で、近接の村落から壮丁が多数やつて来てゐる、朝湯などは満員で、とてもはいれなかつた。妙青寺の山門には『小倉聯隊徴兵署』といふ大きな木札がかけてある、そこは老松の涼しいところ、不許葷酒入山門といふ石標の立つところ、石段を昇降する若人に対して感謝と尊敬とを捧げる。昨夜、酒を飲んだが（肴も食べて）何となく今朝は工合が悪い、私にはやつぱり禁慾生活がふさはしい。酒を飲まなくなつたことは事実だ、正確にいへば、飲めなくなつたのだ、経済的でなく、肉体的乃至精神的なもののために、――よし、よし、これからは酒を飲む代りに本を読まう、アルコールよりカルモチンといふほどの意味で。こゝでもそこでも子供が泣く、何とまあよく泣く子供だらう、私はまだ／＼修行が足らない、とても人間の泣声を蝉や蛙や鳥や虫の鳴声とおなじには聞いてゐられないから、そして子供の泣声を聞くとぢつとしてはゐられない。Ｓからの手紙は私を不快にした、それが不純なものでないことは、少くとも彼女の心に悪意のない事はよく解つてゐるけれど、読んで愉快ではなかつた、男の心は女には、殊に彼女のやうな女には酌み取れないらしい、是非もないといへばそれまでだけれど、何となく寂しく悲しくなる。それやこれやで、野を歩きまはつた、歩きまはつてゐるうちに気持が軽くなつた、桔梗一株を見つけてその一株を折つて戻つた、花こそいゝ迷惑だつた！

・やつぱりうまい水があつたよ（再録）・蘭竹の葉の秋めいてそよぎはじめた・別れてからもう九日の月が出てゐる・去る音の夜がふかい

夕の散歩をする、狭い街はどこも青年の群だ、老人の侵入を許さなかつた。真夜中、妙な男に敲き起された、バクチにまけたとか何とかいつて泊めてくれといふ、無論、宿では泊めなかつた、その時の一句が前記の最後の句である。

八月十一日

コドモ朝起会の掃除日ださうで、まだ明けきらないうちから騒々しい、やがてラヂオ体操がはじまる、いやはや賑やかな事であります。何となく穏やかならぬ天候である、颱風来の警報もうなづかれる、だが其中庵は大丈夫だよ。若い蟷螂が頭にとまつた、カマキリ、カマキリ、ウラワカイカマキリに一句デヂケートしようか。宿のおばさんが「あかざ」の葉をむしてゐる、あかざとはめづらしい、そのおひたし一皿いたゞきたい。今日此頃は水瓜シーズンだ、川棚水瓜は名物で、名物だけの美味を持つてゐるさうだが（私は水瓜だけでなく、あまり水菓子を食べないから、その味はひが解らない）一貫十二銭、肥料代がとれないといふ、現代は自然的産物が安すぎる。刈萱を活けた、何といふ刈萱のよろしさ！今日は暑かつた、吹く風が暑かつた、しかし、どんなに暑くても私は夏の礼讃者だ、浴衣一枚、裸体と裸体とのしたしさは夏が、夏のみが与へる恩恵だ。

・朝焼すゞしいラヂオ体操がはじまりました・炎天、まけとけまからないとあらそうてゐる

八月十二日

曇、よいおしめりではあつた。今朝の湯壺もよかつた、しづかで、あつくて、どん／＼湯が流れて溢れてゐた、その中へ飛び込む、手足を伸ばす、これこそ、優遊自適だつた。緑平老から返信、それは珍品をもたらしたのである。早速、小串町まで出かけて買物をする、両手にさげるほどの買物だ、曰く本、曰く線香、曰く下駄、曰く鍋、曰く何、曰く何、等、等、等。南無緑平老菩薩！　十万三世一切仏、諸尊菩薩摩薩、摩訶般若波羅蜜。

八月十三日

空晴れ心晴れる、すべてが気持一つだ。其中庵は建つ、——だが

——私はやつぱり苦しい、苦しい、こんなに苦しんでも其中庵を建てたいのか、建てなければならないのか。——

夏草ふかく自動車乗り捨てゝある夕陽

八月十四日

朝から墨をすつて大筆をふりまはす、何といふまづい字だらう、まづいのはいゝ、何といふいやしい字だらう。うれしいこゝろがしづむ、晴れて曇る！

八月十五日

何といふ苦しい立場だらう、仏に対して、友に対して、私自身に対して。やつぱりムリがあるのだ、そのムリをとりのぞけば壊滅だ、あゝ、ムリか、ムリか、そのムリは私のすべてをつらぬいてながれてゐるのだ、造庵がムリなのぢやない、生存そのものがムリなのだ。茗荷の子を食べる、かなしいうまさだつた。

八月十六日

いよ／＼秋だ、友はまだ来てくれない、私はいはゆる『昏沈』の状態に陥りつゝあるやうだ。待つてゐる物が——それがなければ造庵にとりかゝれない物が来ない。今日もやつぱり待ちぼけだつたのか。

・虫が鳴く一人になりきつた・けさも青柿一つ落ちてゐて

八月十七日

やつぱりいけない、捨鉢気分で飲んだ、その酒の苦さ、そしてその酔の下らなさ。小郡から電話がかゝる、Ｊさんから、Ｋさんから、——来る、来るといつて来なかつた。また飲む、かういふ酒しか飲めないとは悲しい宿命である。

・あてもない空からころげてきた木の実

此句には多少の自信がある、それは断じて自惚ぢやない、あてもないに難がないことはあるまいけれど（あてもないは何処まで行く、何処へ行かう、何処へも行けないのに行かなければならない、といつたやうな複雑な意味を含んでゐるのである）。

八月十八日

近来にない動揺であり、そしてそれだけ深い反省だつた、生死、生死、生死、生死と転々した。アルコールよりカルモチンへ、どうやらかういふやうに転向しつゝあるやうである、気分の上でなしに、肉体に於て。待つ物来らず、ほんとうに緑平老に対してすまない、誰に対してもすまない。

八月十九日

何事も因縁時節、いら／＼せずに、ぢつとして待つてをれ、さうするより外ない私ではないか。入浴、剃髪、しんみりとした気持になつて隣室の話をきく、あゝ母性愛、母といふものがどんなに子といふものを愛するかを実証する話だ、彼等（一人の母と三人の子と）は動物に近いほどの愛着を体感しつゝあるのだ。……父としての私は、あゝ、私は一度でも父らしく振舞つたことがあるか、私はほんとうにすまなく思ふ、私はすまない、すまないと思ひつゝ、もう一生を終らうとしてゐるのだ。……

八月廿日

やつと心気一転、秋空一碧。初めてつく／＼ぼうしをきいた、つく／＼ぼうし、つく／＼ぼうし、こひしいなあ。いよ／＼身心一新だ、くよ／＼するな、けち／＼するな、たゞひとすぢをすゝめ。

八月廿一日

ほんとうに秋だ、何よりも肌ざわりの秋。正さん（此宿の二男）と飲んだ、お嫁さんのお酌で、気持よく飲みあつた、ちと新家庭を妨げなかつたでもないらしい。売家があるといふので問合にいつた。

八月廿二日

今日も家の事で胸いつぱいだ、売家が二つ三つある、その一つが都合よければ、其中庵も案外早く、そして安く出来るだらう、うれしいことである。

逢うて別れる月が出た

八月廿三日

何となく穏やかでない天候だつたが、それが此頃としては当然だが、私は落ちついて読書した。旅がなつかしくもある、秋風が吹きはじめると、風狂の心、片雲の思が起つてくる、……しかし、私は落ちついてゐる、もう落ちついてもよい年である。

・咲いてしやくなぎのはな（改作）

此句は悪くないと思ふが、どうか知ら。

八月廿四日

晴れてきた、うれしい電話がかゝつてきた、――いよ／＼敬坊が今日やつてくるといふのである。駅まで出迎に行く、一時間がとても長かつた、やあ、やあ、やあ、やあ、そして。――友はなつかしい、旧友はとてもなつかしい、飲んだ、話した、酒もかういふ酒がほんとうにうまいのである。

・家をめぐる青田風よう出来てゐる

八月廿五日

朝の散歩、そして朝の対酌、いゝですね！彼は帰る、私に小遣までくれて帰る、逢へば別れるのだ、逢うてうれしや別れのつらさだ、早く、一刻も早く、奥さんのふところに、子供の手にかへれ。自動車――バスはいやなものだよ、ゆれるばかりで、さうだ、ゆれるばかりだ。朝の散歩で摘んできたのは毒薬草だつた、ウツグサとかいふのださうな、毒か薬か、毒即薬だ。

一人となればつくつくぼうし　　　□・若葉に若葉がかさなつた（酒壺洞第二世出生）

残暑といふものを知つた、いや味つた。

アキアツクケツアンノカネヲマツ　（秋暑く結庵の金を待つ）緑平老へ電報

夕方、Ｓ氏を訪ねる、これで三回も足を運んだのである、そして土地借入の保證を懇願したのである、そしてまた拒絶を戴いたのであ

る、彼は世間慣れがしてゐるだけに、言葉も態度も堂に入つてゐる、かういふ人と対座対談してゐると、いかにも私といふ人間が、世間人として練れてゐないかゞよく解る、無理矢理に押しつける訳に行かないから、失望と反抗とを持つて戻つた。夜、Ｋさんに前後左右の事情を話して、此場合何か便法はあるまいかと相談したけれど乗つてくれない（彼も亦、一種の変屈人である）。茶碗酒を二三杯ひつかけて寝た。

　　八月廿六日　川棚温泉、木下旅館。

　秋高し、山桔梗二株活けた、女郎花一本と共に。いよ／＼決心した、私は文字通りに足元から鳥が立つやうに、川棚をひきあげるのだ、さうするより外ないから。……形勢急転、疳癪破裂、即時出立、――といつたやうな語句しか使へない。其中庵遂に流産、しかしそれは川棚に於ける其中庵の流産だ、庵居の地は川棚に限らない、人間至るところ山あり水あり、どこにでもあるのだ、私の其中庵は！ヒトモジ一把一銭、うまかつた、憂鬱を和げてくれた、それは流転の香味のやうでもあつたが。精霊とんぼがとんでゐる、彼等はまことに秋のお使である。

　・いつも一人で赤とんぼ

　今夜もう一夜だけ滞在することにする、湯にも酒にも、また人にも（彼氏に彼女に）名残を惜しまうとするのであるか。……

　　八月廿七日　樹明居。

　晴、残暑のきびしさ、退去のみじめさ。百日の滞在が倦怠となつたゞけだ、生きることのむつかしさを今更のやうに教へられたゞけだ、世間といふものがどんなに意地悪いかを如実に見せつけられたゞけだつた、とにかく、事こゝに到つては万事休す、去る外ない。

　けふはおわかれのへちまがぶらり（留別）

　これは無論、私の作、次の句は玉泉老人から、

　道芝もうなだれてゐる今朝の露

　正さん（宿の次男坊）がいろ／＼と心配してくれる（彼も酒好きの

酒飲みだから）、私の立場なり心持なりが多少解るのだ、荷造りして駅まで持つて来てくれた、五十銭玉一つを煙草代として無理に握らせる、私としても川棚で好意を持つたのは彼と真道さんだけ。午後二時四十七分、川棚温泉よ、左様なら！川棚温泉のよいところも、わるいところも味はつた、川棚の人間が『狡猾な田舎者』であることも知つた。山もよい、温泉もわるくないけれど、人間がいけない！立つ鳥は跡を濁さないといふ、来た時よりも去る時がむつかしい（生れるよりも死ぬる方がむつかしいやうに）、幸にして、私は跡を濁さなかつたつもりだ、むしろ、来た時の濁りを澄ませて去つたやうだ。Ｔ惣代を通して、地代として、金壱円だけ妙青寺へ寄附した（賃貸借地料としてはお互に困るから）。

・ふるさとちかい空から煤ふる（再録）　　　　□　この土のすゞしい風にうつりきて（小郡）

小郡へ着いたのが七時前、樹明居へは遠慮して安宿に泊る、呂竹さんに頼んで樹明兄に私の来訪を知らせて貰ふ、樹明兄さつそ来て下さる、いつしよに冬村居の青年会へ行く、雑談しばらく、それからとう／＼樹明居の厄介になつた。

八月廿八日　小郡町柳井田、武波憲治氏宅裏。

朝から二人で出かける、ちようど日曜日だつた、この離座敷を貸していたゞいた（こゝの主人が樹明兄の友人なので、私が庵居するまで、当分むりやりにをいてもらふのだ）。駅で手荷物、宿で行乞道具、運送店で荷物、酒屋で酒、米屋で米。さつそく引越して来て、鱸のあらひで一杯やる、樹明兄も愉快さうだが、私はよつぽど愉快だ。夜、冬村君が梅干とらつきようを持つて来て下さる、らつきようはよろしい。一時頃まで話す、別れてから、また一時間ばかり歩く、どうしても寝つかれないのだ。

・墓へ藷の蔓・秋風のふるさと近うなつた

八月廿九日

厄日前後らしい空模様である、風のために本まで動く、炊事、掃除、読書、なか／＼忙しい。諸方の知友へ通知端書を出す、三十幾つ

かあつて、ずゐぶん草臥れた。入浴のついでに、市場でシユンギクとホウレンサウとを二把買つてきて、さつそく汁の実おひたしにして食べた、やつぱり菜食がよいと思ふ。人のまこと、友のなさけ――それを存分に味はひ味つた。新居第一日は徹夜して朝月のある風景ではじまつた。あせらずにゆう／＼と生きてゆくこと。

・いちぢくの実ややつとおちついた（再録、改作すべし）

夜おそく、樹明兄来訪、友達と二人で。いろ／＼の友からいろ／＼の品を頂戴した、樹明兄からは、米、醤油、魚、そして酒！友におくつたハガキの一つ。――

何事も因縁時節と観ずる外ありませんよ、私は急に川棚を去つて当地へ来ました。庵居するには川棚と限りませんからね。こゝで水のよいところに、文字通りの草庵を結びませう、さうでもするより外はないから。山が青く風が涼しい、落ちつけ、落ちつけ、落ちつきませう。

いつとなく、なぜとなく（むろん無意識的に）だん／＼ふるさとへちかづいてくるのは、ほんとうにふしぎだ。野を歩いて、苅萱を折つて戻つた、いゝなあ。どこにもトマトがある、たれもそれをたべてゐる、トマトのひろまり方、たべられ方は焼芋のそれを凌ぐかも知れない、いや、すでにもう凌いでゐるかも知れない。

・風のトマト畑のあいびきで　やうやう妻になりトマトもいでゐる　　　　□　虫がこんなに来ては死ぬる

八月三十日

風が落ちておだやかな日和となつた、新居三日目の朝である、おさんどんと坊主と、そして俳人としてのカクテル。今日もまた転居のハガキをかく（貧乏人には通信費が多すぎて困る、といつて通信をのぞいたら私の生活はあまりに殺風景だ）。樹明兄から、午後一時庵にふさはしい家を見に行かう、との来信、一も二もなく承知いたしました。大田の敬坊（坊は川棚温泉に於ける私を訪ねてくれた最初の、そして最後の友だつた）から、ありがたい手紙が来た、それに対して、さつそくこんな返事をだしてをいた。――

……私もいよ／＼新らしい最初の一歩（それは思想的には古臭い最後の一歩）を踏みだしますよ、酒から茶へ——草庵一風の茶味といつたやうな物へ——山を水を月を生きてゐるかぎりは観じ味はつて——とにもかくにも過去一切を清算します。……

また買物、即ち、バケツ、ゴマイリ、ゴトク、ヒバシ、等、等、一人でも世帯は世帯、一世帯としてのあれやこれやが苦労する、それも誰ゆえ、みんな私自身ゆえ！酒飲みに酒が飲めなくなり、放浪者が放浪をやめると、それはもう生命がなくなるのではあるまいか。警戒せよ、石古祖（私に残された墓地）が近いぞ。酒飲みは酒飲めよ、酒は甘露だ、涙でもなければ溜息でもない、さうだ、酒は酒だ、飲めば酔ふのだ。樹明兄に連れられて、山麓の廃屋を見るべく出かけた、夏草ぼう／＼と伸びるだけ伸んでゐるところに、その家はあつた、気にいつた、何となく庵らしい草葺の破宅である、村では最も奥にある、これならば『其中庵』の標札をかけても不調和なところはない、殊に電燈装置があつたのは、あんまり都合がよすぎるよ。帰途、冷たいビール弐本、巻鮨一皿、これだけで二人共満腹、それから水哉居を訪ねる（君は層雲派の初心晩学者として最も真面目で熱心だ）。樹明兄の人柄が渾然として光を放つた、その光に私はおぼれてゐるのではあるまいか。其中庵、其中庵、其中庵はどこにある。廃屋から蝙蝠がとびだした、私も彼のやうに、とびこみませう。水哉居でよばれた酢章魚はほんとうにおいしかつた、このつぎは鰒だ。ふけてから、ばら／＼と雨の音。

・稲妻する過去を清算しやうとする

今夜は寝つかれさうだ、何といつても安眠第一である、そして強固な胃袋、いひかへれば、キヤンプをやるやうなもので、きたないほど本当だ。

八月三十一日

曇后晴。四時半起床、朝食七時、勤行八時、読書九時、散歩十一時、それから、それから。——裸体で後仕舞をしてゐたら、虫が胸にとまつた、何心なく手で押へたので、ちくりと螫された、蜂だつたのだ、さつそく、こゝの主人にアンモニヤを塗つて貰つたけれど、少々

痛い。駅まで出かけて、汽車の時間表をうつしてくる、途上で野菜を買ふ、葱一束二銭也（この葱はよくなかつた）。川棚から小郡へきた時、私の荷物は三個だつた、着物と書物とで竹行李が一つ、蒲団と机とで菰包が一つ、外に何やら彼やらの手荷物一つである、ずゐぶん簡単な身軽だと思つてゐたのに、樹明兄は、私としてはそれでも荷物が多過ぎるといふ、さういへばさうもいはれる。ざーつと夕立がきた、すべてのものがよろこんでうごく、川棚では此夏一度も夕立がなかつたが。

・ひとりゐて蜂にさされた　雨の蛙のみんなとんでゐる

午後、樹明さんが黒鯛持参で来訪（モチ、銘酒註文）、ゆつくり飲む、夕方、山口まで進出して周二居を驚かす、羨ましい家庭であつた、理解ある母堂に敬意を表しないではゐられなかつた。それから——それからがいけなかつた、徹宵飲みつゞけた、飲みすぎ飲みすぎだ、過ぎたるは及ばざるにしかず、といふ事は酒の場合に於て最も真理だ、もう酒には懲りた、こんな酒を飲んでは樹明さんにすまないばかりでなく世間に対しても申訳ない、無論、私自身に対し、仏陀に対しては頭を石にぶつけるほどの罪業だ。我昔所造諸惑業、皆由無始貪瞋痴、従身口意之所生、一切我今皆懺悔、——ほんとうに懺悔せよ。

九月一日

朝の汽車でいつしよに戻る、そして河へ飛びこんで泳いだ、かうでもしなければ、身心のおきどころがないのだ、午後また泳いだ、六根清浄、六根清浄。二百十日、大震災記念日、昨日の今日だ、つゝましく生活しよう。今日も夕立がきた、降れ降れ、流せ流せ、洗へ洗へ、すべてを浄化せよ。

・後悔の朝の水を泳ぎまはる　ちんぽこにも陽があたる夏草（或はまらか）　　　　□・いやなおもひでのこぼれやすいはなだ（改作）・朝月にこほろぎの声もととなうた

とにかく、更生しなければ、私はとても生きてはゐられない、過去一切の董習を清算せずにはゐられなくなつた。

九月二日

おだやかな雨、ことに昨夜は熟睡したので、のび／＼とした気分であつた。四時に起きて五時に食べ六時には勤行もすました、この調子で其中庵生活は営まれなければならない。発熱倦怠、身心が痛む、ぢつとしてゐると、ついうと／＼とする、甘酸つぱいやうな、痛痒いやうな気分である、考へるでもなく考へないでもなく、生死の問題が去来する、……因縁時節はどうすることも出来ない、生死去来は生死去来だ、死ぬる時は死ぬる、助かる時は助かる。……事実を活かす、飛躍よりも漸進、そして持続。快い苦しみ、苦しい快さ（今日一日の気分はかうだつた）。夕方、樹明さんに招かれて、学校の宿直室で十一銭のお辨当をよばれる、特に鶏卵が二つ添へてある、飯盒を貰つて戻る、御飯蒸器では（飯釜を持たないから）どうも御飯の出来栄がよろしくないので。ごろりと横になつて、襖の文字を読む、――一関越来二処三処、難関再来一関覚悟、――此家の主人が若うして不治の疾にとりつかれたとき書きつけたのださうな。

いちじくの実や、やつとおちついた・ゆふべは雨ふる蓮を掘る

九月三日

今朝も早かつた、四大不調は不思議に快くなつた、昨夜、樹明さんからよばれたタマゴがきいたのかも知れない、何しろ、薬とか滋養物とかいふものがきゝすぎるほどきく肉体の持主だから。夕立がきた、夕立を観ず、といつたやうな態度だつた。午後、周二さん来訪、予期しないでもなかつた、間もなく敬治君も来訪、予期したやうに、そして樹明兄は間違なく来訪。汽車辨当で飲んだ、冬村君もやつてきて、小郡に於ける最初の三八九会みたいだつた。よい雨、よい酒、よい話、すべてがよかつた、しかし一人去り二人去り三人去つて、私はまた独りぼつちになつた、かういふ場合には私だつてやつぱり寂しい、いや人並以上に寂しいのだ、それをこらへて寝た、夢のよくなかつたのは当然である。

・こばまれて去る石ころみちの暑いこと（川棚温泉留別二句の内）

九月四日

雨、よう降りますね、風がないのは結構ですね。午前は、樹明さ

ん、敬治さん、冬村さんと四人連れで、其中庵の土地と家屋とを検分する、みんな喜ぶ、みんなの心がそのまゝ私の心に融け入る。……午後はまた四人で飲む、そしてそれ／″＼の方向へ別れた。夕方から夕立がひどかつた、よかつた、痛快だつた。さみしい葬式が通つた。私はだん／＼涙もろくなるやうだ（その癖、自分自身に対しては、より冷静になる）。飯盒の飯はうまい、しかしこれは独身のうまさだ。故郷へ一歩近づくことは、やがて死へ一歩近づくことであると思ふ。——孤独、——入浴、——どしや降り、雷鳴、——そして発熱——倦怠。私はあまりに貪つた、たとへば食べすぎた（川棚では一日五合の飯だつた）、飲みすぎた（先日の山口行はどうだ）、そして友情を浴びすぎてゐる。……かういふ安易な、英語でいふ easy-going な生き方は百年が一年にも値しない。あの其中庵主として、ほんとうの、枯淡な生活に入りたい、枯淡の底からこん／＼として湧く真実を詠じたい。

いつも尿する木の実うれてきた　秋雨の枝をおろし道普請です・雨ふるふるさとははだしであるく

九月五日

曇、どうやらかうやら晴れさうである。つゝましい、あまりにつゝましい一日であつた、釣竿かついで川へ行つたけれど。——

けふは鮠二つ釣つて焼いて食べて

彼から返事が来ないのが、やつぱり気にかゝる、こんなに執着を持つ私ではなかつたのに！ふと見れば三日月があつた、それはあまりにはかないものではなかつたか。——

・三日月よ逢ひたい人がある（彼女ぢやない、彼だ）　待つともなく三日月の窓あけてをく（彼のために）

この窓は心の窓だ、私自身の窓だ。

・三日月、遠いところをおもふ・いつまで生きる三日月かよ・三日月落ちた、寝るとしよう

どうしても寝つかれない、いろ／＼の事が考へられる、すこし熱が出てからだが痛い、また五位鷺が通る。とぶ虫からなく虫のシーズン

となつた、虫の声は何ともいへない、それはひとりでぢつと聴き入るべきものだ。味覚の秋——春は視覚、夏は触覚、冬は聴覚のシーズンといへるやうに——早く松茸で一杯やりたいな。先日は周二さんが果実一籠をお土産として下さつた、そしてみんなで頂戴した、私の食卓にデザートがあるとは珍らしかつた、といふ訳で。

・木の実草の実みんなで食べる

トマトからイチヂクへ、といへないこともなからう、どこの畠にもトマトがすがれてをり、そこにもこゝにもイチヂクが色づきつゝある。

九月六日

三時になるのを待つて起きた、暫時読書、それから飯を炊き汁を温める。……気分がすぐれない、すぐれない筈だ、眠れないのだから。昨日は誰も訪ねて来ず、誰をも訪ねて行かなかつた、今朝は樹明さんが出勤途上ひよつこり立ち寄られた、其中庵造作の打合せのためである、いつもかはらぬ温顔温情ありがたし、ありがたし。夕立、入浴、そして鯰釣、今日は十五尾の獲物があつた、さつそく焼いて焼酎を傾けた、考へてみれば、人間ほど無慈悲で得手勝手なものはない、更にまた考へてみれば、朝の水で泳ぎ遊んでゐた魚が、昼にはもう殺されて私の腹中におさまつてゐる、無常とも何ともいひやうがない。小郡には蓮田が多い、経済的に利益があるためであらうか、その広い青葉をうつ雨の音は快いものだ。肌寒くなつた、掛蒲団なくては眠れなくなつた、これ私のやうな貧乏な孤独人はキタヱられるのである。

晴れてよい日の種をまく土をまく・子のないさみしさは今日も播いてゐる・夕月に夕刊がきた　　　　□・まがつた風景そのなかをゆく（再録）

夜は樹明、冬村の二兄来庵、話題は例によつて、其中庵乃至俳句の事、渋茶をがぶ／＼飲むばかりお茶うけもなかつた。今日うれしくも酒壺洞君から書留の手紙がきた、これで山頭火後援会も終つた訳だ（決算はまだであるが）、改めて、私は発起賛同の諸兄に感謝しなければならない、殊に緑平老の配慮、酒壺洞君の斡旋に対して。

九月七日

朝、天地清明を感じた、いはゆる秋日和である、寒いほどの冷気だつた。午前は郵便局まで出かけた、途中いろ／＼の品物を買つた、今日に限つたことではないが、小郡の商人はサービスといふことを知らない、言葉は知つてゐようけれど、その意味を知らないといつても過言ではない、何といふ愛想の缺乏だらう、彼等は知人と他人とをあまりに明瞭に区別する、買物高の多少によつて挨拶も扱別も違ふ、等、等（私の接触した限りに於て、そして類推した限りに於て）。前が酒屋で、隣が豆腐屋、これがこの家の位置だ、端唄のほとゝぎすとは何といふ相違だらう！夕方の途上で泊客を見たら、何と綺麗だつたらう、新秋、二人相携へて箱根へゆく、——そして彼等の会話、——冷たいわねえ、いゝ時候ですわね——モチ、私の白日夢の一片である、ハ、ハ、ハ。——午後はまた魚釣に出かけた、一時間ほど、今日の獲物は本当の雑魚七尾（其内訳は鮠二、ドンコ二、ニゴヅ三、そしてドンコの一は川で洗ふ時ツルリと逃げた、何といふ幸運なドンコだつたらう）それをコリ／＼焼（これは私だけの術語で、小魚を丹念に遠火で焼き、噛めばコリ／＼音がするまで焼きあげるのである、ちつとも腥くない、それだけ味は劣るが）にして焼酎を一杯やつた、うまかつた、所謂、ほろ／＼とろ／＼の境である。食後、夕べの散歩がてら樹明居へ推参、案の如く不在、一時間ばかり待つたが、待ちきれないで帰る、途中ヒヨツコリ樹明さんと逢ふ、樹明さんは私の所で私を待つてゐて、待ちきれないで帰つて来たのだといふ、二人が別々に二人を待つてゐたのだつた、これも人生の一興たるを失はない。初めて樹明さんの労働姿を見た、初めて樹明さんの父君と話した、此父にして此子あり、此子にして此父あり、すつかり信服した、大人の風格があるとでもいはうか。樹明さん再度来訪、何だか嬉しくて飲みはじめた、一時頃別れる、二人ともかなり酔うてゐた。今日の午後は、樹明さんと冬村君とが、いよ／＼例の廃屋を其中庵として活かすべく着手したとの事、草を刈り枝を伐り、そしてだん／＼庵らしくなるのを発見したといふ、其中庵はもう実現しつつあるのだつた、何といふ深切だらう、これが感泣せずにゐられるかい。明日は私も出かけて手伝はう、其中庵は私の庵ぢやない、みんなの庵だ。樹明さんからの贈物、——辛子漬用の長茄子、ニンヂンのまびき菜、酒と罐詰。真昼の茶碗が砕

けた、ほがらかな音だつた、真夜中の水がこぼれた、しめやかにひろがつた。……

・汲みあげる水のぬくさも故郷こひしく・枯れようとして朝顔の白さ二つ　石地蔵尊その下で釣る・暮れてとんぼが米俵編んでゐるところ・灯かげ月かげ芋の葉豆の葉（改作）

一つ風景――親牛仔牛が、親牛はゆう／＼と、仔牛はちよこ／＼と新道を連れられて行く、老婆が通る、何心なく見ると、鼻がない、恐らくは街の女の成れの果だらう、鐘が鳴る、ぽか／＼と秋の陽が照りだした、仰げばまさに秋空一碧となつてゐた。……

九月八日

酔中、炊いたり煮たり、飲んだり食べたりして、それを片付けて、そのまゝごろ寝したと見える、毛布一枚にすべてを任しきつた自分を見出した。雨がをり／＼ふるけれど、何となくほゝゑまれる日だ。彼が変人だつたといふことが彼を不幸にしたのである、彼が悪人又は畸人であつたならば、あゝまで不幸にはならなかつたらう（変人の多くは厭人だから）。其中庵へ行つた、屋根の葺替中だつた、見よ、其中庵はもう出来てゐるのだ、夏草も刈つてあつた、竹、黄橙、枇杷、密柑、柿、茶の木などが茂りふかく雨にしづもり立つてゐた。……米はＫさんが、塩はＩさんがあげます、不自由はさせませんよといつて下さる、さて酒は。――百舌鳥の最初の声をきいた、まだ秋のさけびにはなつてゐない。辛子漬をするために、壺、鉢、塩などを買ふ、大根も買つた、久しぶりに大根おろしが食べられる。塩は安い、野菜も安い、高いのは酒である。こゝの人々――家主の方々、殊に隣家の主人――は畑作りが好きで、閑さへあれば土いぢりをしてゐる、見てゐて、いかにも幸福らしく、事実また幸福であるに違ひない、趣味即仕事といふよりも仕事即趣味だから一層好ましい。けさ播いてゆふべ芽をふく野菜もある、昨日播いたのに明日でなければ芽ふかないのもあるといふ、しよつちゆう、畑をのぞいて土をいぢつて、もう生えた、まだ生えないとうれしがつてゐる、私までうれしくなる。どうも枕がいけない、旅ではずゐぶん枕のために苦労した、枕のよしあし、といふよりもすききらひが私の一日、いや一生を支配するのである！

・日照雨ぬれてあんたのところまで　ふつたりはれたり傘がさせてよろこぶ子・鳴いてきてもう死んでゐる虫だ　　　　□・さみしうてみがく

ひとりがさみしうなると、私はキツパチをみがいてゐる、だからキツパチのツヤ即ワタシのサミシサである。いろんな虫がくる、今夜はこほろぎまでがやつてきて、にぎやかなことだつた。

九月九日

相かはらず降つてゐる、そしてとう／＼大雨になつた、遠雷近雷、ピカリ、ガランと身体にひゞくほどだつた、多分、どこか近いところへ落ちたのだらう。午後は霽れてきた、十丁ばかり出かけて入浴。畑を作る楽しみは句を作るよろこびに似てゐる、それは、産む、育てる、よりよい方への精進である。出家——漂泊——庵居——孤高自から持して、寂然として独死する——これも東洋的、そしてそれは日本人の落ちつく型（生活様式）の一つだ。魚釣にいつたが一尾も釣れなかつた、彼岸花を初めて見た。夕方、樹明兄から珍味到来、やがて兄自からも来訪、一升買つてきて飲む、雛鶏はうまかつた、うますぎた、大根、玉葱、茄子も、そして豆腐も。生れて初めて、生の鶏肉（肌身）を食べた、初めて河豚を食べたときのやうな味だつた。Comfortable life 結局帰するところはこゝにあるらしい。

・起きるより土をいぢつてゐるはだか　ひとり住めば雑草など活けて・こほろぎがわたしのたべるものをたべた・くりやまで月かげのひとりで・月の落ちる方へ見送る・あさあけ、うごくものがうごくものへ・蚯蚓が半分ちぎれてにげたよ　　　　□・水のながれの、ちつとも釣れない　水草さいてゐるなかへ釣針をいれる

九月十日

とう／＼徹夜してしまつた、悪い癖だと思ふけれど、どうしてもやまない、おそらくは一生やまないだらう、ちようど飲酒癖のやうに。こゝまで来たらもう仕方がない、行けるところまで行かう。夜が明ける前の星はうつくしい、星はロマンチツクだ、星を眺めることを人間が忘れないかぎり、人生はうつくしい。こほろぎがいろ／＼の物をた

べるには驚いた、胡瓜、茄子、さゝげ、大根、玉葱までたべてゐる、私のたべるものはこほろぎもたべる、彼等は私に対して一種の侵入者だつた！過ぎたるは及ばざるに如かず——まつたくさうだ、朝もかしわ、昼もかしわ、晩もまたかしわだ、待人不来、我常独在、御馳走がありすぎた！どうやらかうやらお天気らしい、風呂にいつて鬚を剃り、財布をはたいて買物をした。身辺に酒があると、私はどうも落ちつけない、その癖あまり飲みたくはないのに飲まずにはゐられないのである、旦浦で酒造をしてゐる時、或る酒好老人がいつたことを思ひだした、——ワシは燗徳に酒が残つてをつてさへ、気にかゝつて寝られないのに、何と酒屋は横着な、六尺の酒桶を並べといて平気でゐられたもんだ、——酒に『おあづけ』はない！

・朝の水で洗ふ・樹影雲影に馬影もいれて　こゝでしばらくとゞまるほかない山茶花の実・草を刈り草を刈りうちは夕餉のけむり・夕焼、めをとふたりでどこへゆく・いつさいがつさい芽生えてゐる

樹明さんと夕飯をいつしよに食べるつもりで、待つても待つてもやつてきてくれない（草刈にいそがしかつたのだ）、待ちくたびれて一人の箸をとつた、今晩の私の食卓は、——例のかしわ、おろし大根、ひともじと茗荷、福神漬、らつきよう、——なか／＼豊富である、書き添へるまでもなく、そこには儼として焼酎一本！食事中にひよつこりと清丸さん来訪、さつそく御飯をあげる（炊いてはおそくなるから母家で借りる）、お行儀のよいのに感心した、さすがに禅寺の坊ちやんである。今夜は此部屋で十日会——小郡同人の集まり——の最初の句会を開催する予定だつたのに、集まつたのは樹明さん、冬村さんだけで（永平さんはどうしたのだらう）、そして清丸さんの来訪などで、とう／＼句会の方は流会となつてしまつた、それもよからうではないか。みんなで、上郷駅まで見送る、それ／″＼年齢や境遇や思想や傾向が違ふので、とかく話題がとぎれがちになる、むろん一脈の温情は相互の間を通うてはゐるけれど（私としては葡萄二房三房あげたのがせい／″＼だつた）。

送別一句また逢ふまでのくつわ虫なく（駅にて）

焼酎のたゝりだらう、頭が痛んで胃が悪くなつた、じつさい近頃は

飲みすぎてゐた、明日からは慎まう。

　　九月十一日

　曇、夕方から雨、ほんとうに今年は風が吹かない。ふつと眼がさめたのが四時、そのまゝ起きる、御飯をたいて御経をあげて、そしたらやつと夜が明けた。昨日、隣家の店員から貰つた鶏頭を活ける、野趣横溢、日本式の鶏頭は好きだ。彼は与へすぎる、私は受けすぎる、与へて情におもねるなかれ、受けて恩になれるなかれ。しんじつ、けさの御飯はおいしかつた。中領八幡宮へ参詣する、あまり好意は持てない。郡市主催の蓄産共進会見物、馬と牛と人とが、こゝでは、少くとも、同権同勢だ、手並のうつくしさ、動物の若さのほがらかさ。産地熊本県と名札にかいてあるのにも郷愁に似たものをそゝられました。昼寝でいやな、といふよりも、きたない夢をみた。樹明さんが、鮒のあらいを芋の葉につゝんで草刈そのままの服装で持つてきて下さつた、たいへんうれしかつた。清丸さんを見てから、しきりに彼の事が気にかゝる、彼が私の生活にこんなにもくひいつてゐようとは予期しなかつた、それは彼が彼の生活にくひいつてゐないやうに。私はどんづめのどたんばでは落ちついてゐるだらう、本来無一物でなくて、即今無だから！私のつけた辛子漬はうまい、それは必ずしも辛子代、私の手間代、彼の労力に対してではない。よい釣場を見つけたが、雑魚一ぴきも釣れなかつた。案山子二つ、一つは赤い、一つは白い着物をきてゐた、赤い、……白い。……あれやこれやと考へまはしてゐるうちに、すこしセンチになつた、そのためでもなからうが、――クシとブトウ！今日は暑かつた、むしあつかつた、ぢつとしてゐて、『一番つまらないのが百姓』である話を聴いた。といつたつて、そのせいでもあるまいが、私は野菜と肉類らしくない肉類を味つてゐる、あれもよし、これもよし、それでさつぱする。

　　雑草めい／＼の花を持ち百姓　お祭ちかい秋の道を掃いてゆく　かつちり時間あつてゐる曇の日のドン　萩の一枝に日がある　曇り、時計赤い逢ふ・とかくして秋雨となつた

　雨、こほろぎ（彼の納所坊主でもたづねますか）。食べるものが無くなつてくるから、松茸、うまから

う。　　　　　　　　〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

降つてゐる、鳴いてゐる、けさも早かつた。昨日の日記を読んで驚いた、それは夢遊病者の手記みたいだつた（前半はあれでもよからう）、アルコールの漫談とでもいはうか、書かなくてもよい事が書いてある代りに、書かなければならない事が書いてない、どうせ反古になるのだから、どうでもよいやうなものゝ、このまゝにしてをくことは私の潔癖が許さない。事実そのものはかうである。――今日は魚釣にゆかうかとも思つてゐたが、読書することに心が傾いたので読書してゐた、しかし何としても頭がいたいので、夕方、それは四時すぎだつた、ぶらりと釣竿と魚籠とを持つて出かけた、そして草の上の樹蔭によい場所があつたので、そこへしがんで、釣ることよりも考へることをつゞけてゐた、ちつとも釣れない、やうやく雑魚一尾釣りあげたきりなので、見切をつけて戻つてくる、樹明さんが待つてゐた、草刈の寸暇をぬすんで（草刈男、墓刈番はこちらにあります）、鮒の洗身を持つてきて下さつた。やあ、やあで十分である、それだけで一切が通じる、草刈姿と芋の葉と鮒、――日本的百パアである。例によつて一杯のんだ（焼酎二合）、そして別れた。……ふと眼がさめて見たら十時半だつた、本式に寝て、二度目の眼がさめたのが四時、それからそれへ。……昨夜、樹明兄を見送つて、日記を書きはじめたのは覚えてゐる、書いてゐるうちに前後不覚になつたらしい。意識がなくなる、といつては語弊がある、没意識になるのである（それは求めて与へられるものぢやない、同時に、拒んで無くなるものでもない）。その日記を通して自己勘検をやつてみる。案山子二つ、……赤いとあるだけではウソだ。その前のところに、――即今無――とある、無意味だ、といふよりも缺陥そのものだ、無無無といつた方がよいかも知れない、とにかくムーンだから！辛子漬云々は、私といふ人間が御飯ぐらゐは炊けることを証明した事実である。雑草の句の下の文句が百姓とあるのは、用意のない嫌味だ、それだけに却つて嫌味たつぷり。お祭の句なんどは全然問題にならない。その他の句は、長門峡とか、時計とか赤いとか、何とかかとかうるさいばかりだ。昨日の今日で頭がわるくない、痔もわるくない、腹も胃も、手も足も、――あゝすこしばかり行乞流転した

い。　　　　　　　　〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

改　お祭ちかい朝の道を大勢で掃いてゆく・萩の一枝にゆふべの風があつた　曇り日の時計かつちりあつてゐる　案山子、その一つは赤いべゞ着せられてゐる　　改訂再録・とかくして秋雨となつた　鶏頭の赤さ並んでゐる・咲いて萩の一枝に風がある　けふからお祭の朝の道みんなで掃く（改）・芋の葉でつゝんでくれた小鮒おいしい

九月十二日

晴曇不定、厄日前後らしい天候である。昨夜は蚊帳を吊らなかつた、昼でも障子を締めてをく方がよい時もある。自己勘検は失敗だつた、裁く自己が酔ふたから！樹明兄から米を頂戴した、これで当分はヒモじい目にあはないですむ、ありがたや米、ありがたや友。慎独――自己を欺かない、といふことが頻りに考へられた、一切の人間的事物はこれを源泉としなければならない。古浴衣から襦袢一枚、雑巾二枚を製作した。夕ぐれを樹明来、蒲鉾一枚酒一本で、とろ／＼になつた。今日の水の使用量は釣瓶で三杯（約一斗五升）。近来少し身心の調子が変だ、何だかアル中らしくもある（たゞ精神的に）。今夜も楽寝だつた。

九月十三日

起きたい時に起き、寝たい時に寝る、食べたくなれば食べ、飲みたくなれば飲む（在る時には――である）。今日は三時起床、昨夜の残滓を飲んで食べる。何といつても朝酒はうまい、これに朝湯が添へば申分なし。今朝の御飯はよく炊けた（昨朝の工合の悪さはどうだつた）。よく食べた、そして自分の自炊生活を礼讃した、その一句として、一粒一滴摂取不捨。めづらしい晴れ、とき／″＼しぐれ、好きな天候。摘んできて雑草を活ける、今朝は露草、その瑠璃色は何ともいへない明朗である。母家の若夫婦は味噌を搗くのにいそがしい、川柳的情趣。白船老から来信、それは私に三重のよろこびをもたらした、第一は書信そのもの、第二は後援会費、第三は掛軸のよろこびである。蛇が蛙を呑んだ、悲痛な蛙の声、得意満面の蛇の姿、私はどうすることもできない、どうすることはないのだ！廃人が廃屋に入る、――其中庵の手入は日にまし捗りつゝあると、樹明兄がいはれる、合掌。昼

御飯をたべてから、海の方へ一里ばかり歩いて、五時間ほど遊んだ、国森さんの弟さんに逢ふ（必然の偶然とでもいはうか）、蜆貝をとつてきて一杯やる。夜、樹明兄来庵、ちよんびり飲んでから呂竹居へ、呂竹老は温厚そのものといへるほど、落ちついた好々人である、楽焼数点を頂戴する、それからまた二人で、何とかいふ食堂で飲む、性慾、遊蕩癖、自棄病が再発して困つた、やつと抑へつけて、戻つて、寝たけれど。——女房といふものは、たとへば、時計に似たところがある、安くても、見てくれはよくなくても、きちんとあつてをればよろしい、困るのは故障の多い品、時計屋をよろこばせて亭主は泣く、ヒチリケツパイ。

・夜あけの星がこまかい雨をこぼしてゐる・鳴くかよこほろぎ私も眠れない　星空の土へ尿する・並木はるかに厄日ちかい風を見せてゐる　秋晴れの音たてゝローラーがくる　　　　□・二百二十日の山草を刈る　　　　□・秋の水ひとすぢの道をくだる　すわればまだ咲いてゐるなでしこ・かるかやへかるかやのゆれてゐる　ながれ掻くより澄むよりそこにしゞみ貝・水草いちめん感じやすい浮標　　　　□月がある、あるけばあるく影の濃く　　追加三句　おもたく昼の鐘なる　子を持たないオヤヂは朝から鳩ぽつぽ・こほろぎよ、食べるものがなくなつた

いやな夢ばかり見てゐる。……唖貝（煮ても煮えない貝）はさみしいかな。根竹の切株を拾ふ、それはそのまゝ灰皿として役立つ。

・別れて月の道まつすぐ

九月十四日

晴、多少宿酔気味、しかし、つゝましい一日だつた。身心が燃える（昨夜、脱線しなかつたせいかも知れない、脱線してもまた燃えるのであるが）、自分で自分を持てあます、どうしようもないから、椹野川へ飛び込んで泳ぎまはつた、よかつた、これでどうやらおちつけた。菜葉二銭、半分は煮て食べ、半分は塩漬にした（私はあまり芋類豆類を好かない）。漬物石の代りには、一升徳利に水を詰めたのがよろしい、軽重自在、ぴつたりしてゐる。お祭の旗や提灯がちらほら見える。あゝ、雑草のうつくしさよ、私は生のよろこびを感じる。そこ

の柿の木にいつも油蝉がゐる、まいにち子供がきてはとる、とつてもとつても、いつもゐる、不思議な気がする。いつもリコウでは困る、時々はバカになるべし（Ｓ君に）。イヤならイヤぢやとハツキリいふべし、もうホレタハレタではない（彼女に）。大きな乳房だつた、いかにもうまさうに子が吸うてゐた、うらやましかつた、はて、私としてどうしたことか！

・九月十四日の水を泳ぐ・秋の雑草は壺いつぱいに

昨夜はほんとうにあぶないところだつた、また小郡を去らなければならないやうになつたかも知れない、おかげで——樹明さんのおかげ、仏様のおかげ、何かのおかげで助かつた。彼此一時、あれもよし、これもわるくない。今日の雑草は野撫子だつた、その花の色のよろしさ、「日本」そのものを見るやうだ。一昨夜から蚊帳をやめたが、のう／＼した気持である、蚊帳は封建的なところがある（便所のやうに）、それは人をして差別的ならしめて圧迫を加へる、と感じるのは私だけだらうか。月がよくなつた、蚊もゐなくなり、灯による虫も少くなかつた、暑くなし寒くなし、まことに生甲斐のあるシーズンとなつた、かうしてぶら／＼してゐるのが勿躰ないと思ふ。新町はお祭、四十八瀬川のほとりに組み立てられたバラツクへ御神輿が渡御された、私も参拝する、月夜、瀬音、子供の群、みんなうれしいものだつた。此頃はよく夢を見るが（私は夢中うなるさうな、これは樹明兄の奥さんの話である）、昨夜の夢なんかは実に珍妙であつた、それは或る剣客と果し合ひしたのである、そして自分にはまだまだ死生の覚悟がほんとうに出来てゐないことを知つた。夢は自己内部の暴露である。今日は誰にも逢はなかつた、自己を守つて自己を省みた、——私は人を軽んじてゐなかつたか、人を怨んでゐなかつたか、友情を盗んでゐなかつたか、自分に甘えてゐなかつたか、私の生活はあまりに安易ではないか、そこには向上の念も精進の志もないではないか。——

月夜の水を汲ましてもらふ・月かげひとりの米とぐ　月の落ちる山の灯ちんがり・どかりと山の月おちた　月おちた大空のしらみくる　月おちて風ふく・月が落ちる山の鐘鳴りだした　　　　□　月へあけはなつ・朝月がある雑草を摘む・朝月に誰やら拍手鳴らしてゐる

九月十五日

晴、時々曇る、満月、いはゆる芋名月、満洲国承認の日、朝五時月蝕、八幡祭礼、肌寒を感じる。昼、ばら／＼としぐれた、はじめてしぐれの風情を味ふ。今日の雑草は夏水仙といふ花、その白いのがうれしい（これは雑草でなくて、どこかのこぼれ種らしい、川土手で摘んだが）。酒壺洞君から、もつと強くなれと叱られた、たしかに私は弱気だ、綺語を弄すれば、善良な悪人だ。八幡宮の御神幸をこゝから遙拝する、追憶は三四十年前の少年時代にかへる、小遣銭を握りしめて天神様へ駈けてゆく自分がよみがへつてくる。……蓮芋一茎をもらつて、そのまゝ食べた。憂欝な日は飯の出来まで半熟で、ます／＼憂欝になる、半熟の飯をかみしめてゐると涙がぽろ／＼こぼれさうだ。朝魔羅が立つてゐた、——まさにこれ近来の特種！

月蝕四句　旅の或る日の朝月が虧げる・虧げつゝ月は落ちてゆく　虧げはじめた月に向つてゐる・朝月となり虧げる月となり　□・おまつりのきものきてゆふべのこらは・こどもほしや月へうたうてゐる女　待てば鐘なる月夜となつて　□・お祭の提灯だけはともし　月夜のあんたの影が見えなくなるまで（樹明兄に）

夜、樹明兄来庵、章魚を持つて、——私がお祭客として行かないものだから待ちくたびれて——今夜こそ酒なかるべからずである、あまり飲みたくはないけれど、そしてあまり酒はよくないけれど少し買うてくる（といつてもゲルトは私のぢやない）、しんみり飲んで話しつゞけた、十二時近くまで。

・月夜おまつりのタコもつてきてくれた

その鮹はうまかつた、まつたくうまかつた。ねむれない、三時まへに起きて米を炊いだり座敷を掃いたりする、もちろん、澄みわたる月を観ることは忘れない。

・月のひかりの水を捨てる（自分をうたふ）

月並、常套、陳腐、平凡、こんな句はいくら出来たところで仕方がない、月の句はむつかしい、とりわけ、名月の句はむつかしい、蛇足

として書き添へたに過ぎない。

　　九月十六日

　今朝も三時には床を離れてゐた。月を眺め、土を眺め、そして人間——自分を眺める、人間の一生はむつかしいものだ、とつく／″＼思ふ。

　・月から夜の鳥ないて白みくる　明けてまんまるい月　　　　□・秋の空から落ちてきた音は何・まづしいくらしのふろしきづゝみ　　　　□　斬られても斬られても曼珠沙華・ほつとさいたかひよろ／＼コスモス

　夕方から其中庵へ出かける、樹明兄が冬村、二三雄その他村の青年と働いてゐられる、すまないと思ふ、ありがたいと思ふ、屋根も葺けたし、便所も出来たし、板敷、畳などの手入も出来てゐる、明日からは私もやつて出来るだけ手伝はう、手伝はなければ罰があたる、今日まで、私自身はあまり立寄らない方が却つて好都合とのことで、遠慮してゐたが、まのあたり諸君の労作を見ては、もう私だとてぢつとしてはゐられない、私にも何か出来ないことはない。

　・まづたのむ柿の実のたわわなる　暮れて戻つて秋風に火をおこす

　今夜もよい月である、月はいろ／＼の事を考へさせる、月をひとりで眺めてゐると、いつとなし物思ひにふけつてゐる、それはあまりに常套的感傷だけれど、私のやうな日本人としては本当である、しんじつ月はまことなるかな。

　　九月十七日

　晴、うすら寒いので、とう／＼シヤツをきた、ことに三時にはもう起きてゐたのだから、——うつくしい月だつた、月光流とはかういふ景情だらうと思つた。朝から其中庵へ出かける（飯盒そのものを持つて）、大工さんへ加勢したり、戸外を掃除したり、室内を整理したりする、近来にない専念だつた。樹明さんから、ポケツトマネー（五十銭玉一つ）頂戴、それでやうやく煙草、焼酎にありつく。夜、さらに同兄と冬村君と同道して来訪、話題は其中庵を離れない、明日は大馬力で其中庵整理、明後日入庵の予定。これで、私もやつとほんとうに

落ちつけるのである、ありがたし、／＼。じつさい寒くなつた、朝寒夜寒、障子をしめずにはゐられないほどである。秋、秋、秋、今年は存分に秋が味はへる。……

　　月のひかりのながれるところ虫のなくところ・山の端の月のしばし雲と遊ぶ　　　　□・なつめたわゝにうれてこゝに住めとばかりに（其中庵即時）　　　　□・またも旅するふろしきづつみが一つ（改作）

　　九月十八日

　晴、すこし風があつた。満洲事変一週年記念日、方々で色々の催ほしがある。私は朝から夕まで一日中其中庵で働らいた。

　庵は山手山の麓、閑静にして申分なし、しづかで、しかもさみしうないといふ語句を用ひたい。椿の木の多いところ、その花がぽとり／＼と心をうつことだらう。柿の木も多い、此頃は枝もたれんばかりに実をつけてゐる、山手柿といつて賞味されるといふ。彼岸花も多く咲いてゐる、家のまはりはそこもこゝも赤い。樹明は竹格子を造り、冬村は瓦を葺く、そして山頭火は障子を洗ふ。樹明、冬村共力して、忽ちのうちに、塵取を作り、箒を作り、何やらかやら作つてくれた。電燈がついてから、竹輪で一杯やつて別れた（こゝはまさに酒屋へ三里、豆腐屋へ二里の感じだ）。

　私はそれからまた冬村君に酒と飯とをよばれた、実は樹明兄に昼食として私の夕飯を食べられてしまつたのである。四日ぶりに入浴、あゝくたびれた。

　　月にほえる犬の声いつまでも・朝の雲朝の水にうつり・水に朝月のかげもあつて・水音のやゝ寒い朝のながれくる・朝寒の小魚は岸ちかくあつまり　仕事のをはりほつかり灯つた・秋風の水で洗ふ

　其中庵には次のやうな立札を建つべきか、——

　歓迎葷酒入庵室

　或は又、——

　酒なき者は入るべからず

労働と酒とのおかげで、ぐつすり寝た、夢も見なかつた、このぐらゐ熟睡安眠したことはめつたにない。留守に誰か来て、待つて、そして帰つたやうだなと思つたら、それは先刻別れた樹明兄だつた、……樹明兄はしばらくして、またやつて来られたさうな、そしたら山頭火が酔つぱらつて寝言をいつてゐたさうさうな、……私は知らない！

九月十九日

天地清明、いよ／＼本格的秋日和となつた、働らくにも遊ぶにも、山も野も海も空も、すべてによろしいシーズンだ、よくぞ日本に生れける、とはこの事だ。子規忌、子規はゑらかつた（私としてはあの性格はあまり好きでないけれど）、革命的俳人としては空前だつた、ひとりしづかに彼について、そして俳句について考へた、床の花瓶には鶏頭が活けてあり、糸瓜は畑の隅にぶらさがつてゐる。朝から其中庵へ、終日掃除、掃いても掃いても、拭いても拭いてもゴミが出る。

——

此服装を見よ、片袖シヤツにヅボン、そのうへにレーンコートをひつかけてゐる（すべて関東震災で帰郷する時に友人から貰つた品）、頭には鍔広の麦桿帽、足には地下足袋、まさに英姿サツソウか！更に此辨当を見よ、飯盒を持つてゆくのだが、それは私の飯釜であり飯櫃であり飯茶碗である。日中一人、夜は三人（樹明、冬村の二君来庵）。月を踏んで戻る、今夜もまた樹明君に奢つて貰つた、私は飲み過ぎる、少くとも樹明君の酒を飲み過ぎる。

古釘をぬいてまはる、妙に寂しい気分、戸棚の奥から女の髪の毛が一束出て来た、何だか嫌な、陰気な感じ、よし、この髪の毛を土に埋めて女人塔をこしらへてやらう。

枝もたわわに柿の実の地へとどき　彼岸花の赤さがあるだけ・つかれてもどるに月ばかりの大空

九月廿日　小郡町矢足　其中庵。

晴、彼岸入、そして私自身結庵入庵の日。朝の井戸の水の冷たさを感じた。自分一人で荷物を運んだ、酒屋の車力を借りて、往復二度半、荷物は大小九個あつた、少いといへば少いが、多いとおもへば多

くないこともない、とにかく疲れた、坂の悪路では汗をしぼつた、何といふ弱い肉体だらうと思つた、自分で自分に苦笑を禁じえないやうな場面もあつた。五時過ぎ、車力を返して残品を持つて戻ると、もう樹明兄がきてゐて、せつせと手伝つてゐる、何といふ深切だらう。私がこゝに結庵し入庵することが出来たのは、樹明兄のおかげである、私の入庵を喜んでゐるのは、私よりもむしろ彼だ、彼は私に対して純真温厚無比である。だいぶ更けてから別れた、ぐつすり眠つた、心のやすけさと境のしづけさとが融けあつたのだ。昭和七年九月廿日其中庵主となる、——この事実は大満洲国承認よりも私には重大事実である。

第10章
行乞記　05 室積行乞(新字旧仮名)

一鉢千家飯　　　　　　　　　　山頭火□春風の鉢の子一つ□秋風の鉄鉢を持つ

雲の如く行き水の如く歩み風の如く去る　　　　　　　　　一切空

五月十三日　（室積行乞）

まだ明けないけれど起きる、まづ日暦を今日の一枚めくり捨てゝから空模様を見る、有明月の明るさが好晴を保證してゐる。今日はいよ／＼行乞の旅へ旅立つ日だ。いろんな事に手間取つて出かけるとき六時のサイレン。汽車賃が足らないから、幸にして、或は不幸にして歩く外ない。長沢の池はよかつた、松並木もよかつた。大道――プチブル生活のみじめさをおもひだす。それから、――それから二十年経過！佐波川の瀬もかはつてゐた。若葉がくれの伯母の家、病める伯母を見舞ふことも出来ない甥は呪はれてあれ。私を見つめてゐた子供が溝に落ちた、あぶない。暑い風景である。おもひではてしなくつゞく。宮市……うぶすなのお天神様！肖像画家Ｓ夫妻に出くわした、此節は懐工合よろしいらしく、セル、紋付、そして人絹！富海で、久しぶりに海のよさをきく。大道、宮市、富海――あれこれとおもひでは切れないテープのやうだよ。お宮の松風の中で昼食、一杯やりたいな。転身の一路がほしい。富海行乞、戸田行乞、二時間あまり。さりとは、さりとは、行乞はつらいね！Ｓ君の家はとりこぼたれてゐた、Ｓ君よ、なげくな、しつかりやつてくれ。自動車、それは乗客には、そして歩くものにはまさに外道車！旧道はよろしいかな、山の色がうつくしくて、水がうまくて。今、電話がかゝつてゐるから、行乞の声をやめてくれといふ家もあつた、笑止とはこれ。一銭から一銭、一握

の米から一握の米。暮れて徳山へついた。徳山は伸びゆく街だ。白船居では例のごとし、酒、飯、そしてまた酒。雑草句会に雑草のハツラツ味がないのはさみしかつた、若人、女性を見分したのは白船老のおかげ、感謝、感謝。白船居の夢はおだやかだ、おだやかでなければならない。白船老いたり、たしかに老いたり。けふいちにちはあるきつゞけた、十里強。行乞はつらいね。可愛い子には遍路をさせろ。行乞は他を知り同時に自を知る。

　月見草もおもひでの花をひらき・春まつりの、赤いゆもじで乳母車押してきた・春もゆくふるさとの街を通りぬける・はぎとる芝生が春の草・かきつばた咲かしてながれる水のあふれる　五月晴、お地蔵さんの首があたらしい　松蝉があたまのうへで波音をまへ　たちよればしづくする若葉・夏山のトンネルからなんとながいながい汽車・踏切も三角畑の花ざかり・竹の子みんな竹にして住んでゐる　はるかに墓が見える椎の若葉も・松並木ゆくほどに朝の太陽・こゝでやすまう月草ひらいてゐる（大道）・音もなつかしいながれをわたる（佐波川）・ふるさとの山はかすんでかさなつて（宮市）・水にそうてふるさとをはなれた・誰もゐない蕗の葉になつてゐる・線路がひかるヤレコノドツコイシヨ・春はゆく鉢の子持つてどこまでも・こゝは水の澄むところ藤の咲くところ・埃まみれで芽ぶいてゐる

　五月十四日

　とろ／＼まどろんですぐ起きた、そして街から浜を歩いた。晴は晴だが、時々曇、雨が近いことはたしかだ。朝から酒、朝酒はうまいこともうまいがこたへることもこたへる。漣月老を久しぶりに訪ねて、勢のよい君を祝し喜んだ。九時近くなつて出立、櫛ヶ浜行乞、それから下松、虹ヶ浜、そして室積——六里の道が六十里にも感じられた、何しろ過飲と不眠とのために、さすがの私も今日ばかりは弱つてしまつた。米はあまり重いから、途中の安宿に預けたが、それだけでも大に助かつた。室積は普賢市なので、帰る人がぞろ／＼ぞろ／＼、その場を自動車、自動車、自動車、何もかも埃まみれだ。多少脚気の気味がある、旅で死んでは困る、私は困らないけれど、周囲の人々が困るから。暮れるまゝに、やつとせい二居に着いた、学校まで行かないうちに、或る人に偶然教へられて尋ねあてたのはよかつた。熱い風呂に

はいつてさつぱりした、それから酒となつたのは自然で当然で必然だ、おそくまで、酒、鮹、酒、鮹。やはらかな寝床、やすらかな睡眠。せい二さんに尊敬と感謝とをさゝげる。今日は一句もなかつた、昨日数十句あつた反動かも知れない、あるも本当、ないも本当だ。とにかくこゝろよく酔へてぐつすり眠れた。こゝから××まで何里ありませうかと訊ねたら、

おぢいさんは、三里近いおばあさんは、一里半あまり

と教へてくれたが、おぢいさんは全然落第、おばあさんはまさに及第だつた、まあ二里位といふところであつたが。道程を訊ねると、その教へ方によつてその人の智能性情がよく解る、それはメンタルテストといつてもよいほどに。

今日の行乞所得米　一升四合銭　九銭也

五月十五日

曇、とう／＼雨になつた、半月ぶりの雨だらう、室積の人々には、せつかくの最後の書入日が駄目になつて気の毒だが、天を怨む訳もない。私はこゝへきてゐてよかつた、安心して今日が暮らせる！普賢様へ詣でる、女子師範校を通りぬけて大師堂へ詣でる。皷ヶ浦はおだやかに千鳥が啼いてゐた。学校はひつそりと風景をそなへてゐた。えにしだの花がしづかだ、月草がふさはしい。買物客が右往左往してゐる、農具や植木や瀬戸物が多い、合羽、竹籠がよく売れる、私はたゞ見て歩いた、買ふ金もなく買ふ気もない。明るい雨だ、私の心が明るいから。行きあたりばつたり！　さういふ旅が、といふよりも、さういふ生き方が私にはふさはしい。昼食で酒四本、そして昼寝ぐつすり、何だかせい二さんの厚意に甘えてゐるやうで気が咎める。五橋羊羹（岩国名物と自称する）を一きれ食べる、容器（竹製）も内容も日本的。夕方から、サカモリがはじまる、Ｍ氏に好感を持つて飲み合つた、ほどよく酔うて安眠。短冊と半切とを書きなぐつた、自分が、自分といふ人間の出来てゐないことを痛感する、かういふ場合にはいつもかういふ痛感があるのだが。

汐風の、すこしはなれてマブの花・地べたべつとりと浜朝顔の強

い風・やけあと何やら咲いてゐる・わがまゝきまゝな旅の雨にはぬれてゆく・松のなか墓もありて・つかれた顔を汐風にならべて曲馬団の女ら　やたらにとりちらかしてお祭の雨となつた　雨となつた枇杷の実の青い汐風・山しづかにしてあそぶをんな　つたうてきては電線の雨しづくしては　警察署の木の実のうれてくる

五月十六日

まだ降つてゐる、残酒残肴を飲んで食べる、うまい／＼、そしてＭ氏のために悪筆を揮ふ。朝酒は身心にしみわたる、酔うて別れる、誠二さんはすでに出勤、書置を残して、そして周東美人を連れて！宿の奥さん、仕出屋の内儀さんの深切に厚くお礼を申上げる。雨、雨、雨、ふる、ふる、ふる、その中を歩く、持つてきた一本を喇叭飲みする、酔ひつぶれて動けなくなつた、松原に寝ころんでゐたら、通行人が心配して、どうかなさいましたかといふ、まことに恥晒しだつた。工合よく、近くに安宿があつたのでころげこむ、宿銭がないから（酒と煙草とは貰つてきたのがありあまるほどあるけれど）、すまないと思ひつゝ、誠二さんへ手紙を書いて、近所の子供に持たせてやつた。誠二さんの返事はありがたかつた、すまない／＼、人々に酒と煙草とを御馳走する。

・松風のみちがみちびいて大師堂・夏めいた雨がそゝぐや木の実の青さや　雨音のしたしさの酔うてくる　これからどこをあるかう雨がふりだした　ずんぶりぬれて青葉のわたし　　室積松原の宿木賃料　　三十銭米五合　　十一銭　　　中ノ上といふところ、　　　飯が少ない、　　　すこしうるさい、　　今日の行乞所得米　　八合銭　　九銭

五月十七日

霧雨、ぼうとして海も山も見えない。松原の宿といふ気分はよかつた。早朝、合羽を着て出立、島田を経て呼坂へ、そして勝間へ、行程六里。薊が咲きつゞいてゐた、要の若葉が美しかつた。呼坂の附近を行乞壱時間。旧友井生君を訪ねて旧情を温めた、十年振の再会、話しても話しても話しつきない、君のよさに触れてうれしかつた。君の祖父君は風雅人だつたといふ、さすがに家構も庭園も調度も趣味的に整

頓してゐる。

・霧雨のしつとりと松も私も　茨がもう咲いてゐる濁つた水・ふつたりやんだりあざみのはなだらけ・あやめあざやかな水をのまう　なにがなしラヂオに雑音のまじるさへ・晴れさうな水が湧いてゐる・うごいて蓑虫だつたよ　やうやく晴れてきた桐の花・いちじくの葉かげがあるおべんたうを持つてゐる

五月十八日

雨、曇、そして晴。昨夜はよい一夜だつた、ありがたい一夜だつた。下松まで二里、五時間あまり行乞する。妙見社参詣、溜池に重なりあつてゐる亀はあはれであつた、人間の利己的信仰の具象である。それから一里ばかり歩いて、先日、米を預けてをいた宿に泊る、村の宿とでもいはうか、若葉につゝまれて水にのぞんでゐる、よい宿であつたが、同宿の酔漢がうるさかつた。白蛇——純白でなくて黄色を帯びてゐた——を見た、あまりよい気持はしなかつた。同宿のお遍路さんの軽口のなかに、——

水はいやお茶はにがいし　　　酢醤油の外に飲みたいものがある

その飲みたいものは、さて何でせう！

村の宿の印象水のいろ、若葉のかげ遍路の世間話、酔ひどれの口説亭主の強さ、おかみさんの深切空は晴れてゆく風のさわやか　木賃料三十銭　飯はたつぷり　夕飯　刺身　　　　煮魚と菜葉　　　　おしたし　朝飯　味噌汁　　　　おろし大根　　　　菜漬

五月十九日

早く起きて、そこらを歩く、田園の朝景色はよいかな、帰心が水の湧くやうにおこる。徳山行乞、八時から二時まで。今日の特種としては、下駄店の主人が間違つて、鉄鉢に入れた十銭白銅貨を返して喜ばせ、しまうたやの娘から五銭白銅貨を戴いて喜んだ事の二つであつた。途上の買物、——麦捍帽子特価二十五銭、茶碗二個十銭。帰途、白船居でコツプ酒をよばれる、白船君のよい人であるに間違はないが、奥さんもまたよい人であることに間違はない、だから白船居はいつも春風たいとうだ。福川まで歩いて、それから汽車、往路一日が帰

途一時間だつた。

　　　行乞所得　　　米　一升四合昨日　　　銭　二十九銭　　　米　二升今日　　　銭　五十五銭

　　五月十九日

　帰庵したのが六時半、夕あかりに雑草がはびこつてゐるのに驚かされた、あやめが咲いてゐた、棗が若葉を出してゐた。樹明君のニホヒは残つてゐたが、姿は見えなかつた（日暦が今日になつてゐたから来庵はタシカだ）。塵がういてゐた、蜘蛛の囲が張りまはされてゐた、その他に別状なし、変化がないといふことはさみしくないことはない。自分には自分の寝床がいちばんよろしい、ヤレ／＼ヤレ／＼といふ気持だ。飯を炊いたら半熟！　これはさみしい事実である。

　・さみしさ、半熟飯となつたか・たんぽゝちらんばかりへもどつてきた・南天のしづくが蕗の葉の音

　　五月二十日

　曇、晴れさうだ、ゆつくりと朝寝。一週間のとりかたづけをする。のんびりと食べたり、考へたり、寝たり、歩いたり。買物に出て、俄雨に降りこめられた、焼酎一杯の贅沢。樹明君に帰庵の挨拶をする、早速来庵、酒と下物とを持つて。久しぶりの会飲、うれしかつた、送つて学校まで。

　　晴れるより雲雀はうたふ道のなつかしや・ぬれるだけぬれてゆくきんぽうげ　　今日の買物一、十五銭　石油三合一、十五銭　焼酎一合五勺一、十銭　　若布百匁一、八銭　　醤油二合一、八銭　　赤味噌百匁一、六銭　　茹玉子二個

　　五月二十一日

　雨、ほどよい雨だつた。昨日、樹明君が持つてきてくれた茄子苗を植ゑる。今夜も樹明君は来てくれた、一杯やりたいな、しかし我慢する。敬坊遂に来らず、失望々々。

　・若葉して遠く街がかくれた

五月二十二日

曇、間もなく晴れた。身辺整理がなか／＼忙しい、掃除、洗濯、畑仕事。茄子苗はうまくついたらしい、トマト苗――これは昨日樹明君が植ゑてくれた――も好結果らしい、畑を見まはり、山を眺め、雑草、若葉を賞することは、ほんとうにうれしいことだ。柑橘の花の香がすこし強すぎて困る。せつかく売りにきた爺さんから豆腐二丁買ふ、五厘銅貨でやつとこさ！夕方ちよつと樹明来、落ちついた樹明を祝福する。

五月廿三日

晴、今朝も寝過した、六時に近かつた。腹工合が悪いので、行乞は止めにして、洗濯したり畑仕事をしたり、読書したり執筆したりして暮らした。蕗の佃煮をこしらへる、私の好物である。裏畑の麦を刈る音、梅をもぐ声、のどかである。たしかにほとゝぎすが啼いた、若い調子で。机の場所を変へる、もう蚊帳を吊らなければならなくなつたから、書斉を表の四畳半から後の三畳へ移したのである。アルコールなしの門外不出が三日つゞいた、努めてさうしたのではないが、しようことなしに、いや、おのづからさうなつたのだ。

窓へのぞいて柿の若葉よ　播いてゐるときほとゝぎす・ほとゝぎすがなけば鴉も若葉のくもり　身のまはりかたづけてさみしいやうな　仲よく空から梅をもいでは食べ・伸びぬいて筍の青空・あてなくあるくや蛇のぬけがら

どうしても寝つかれないで、とう／＼徹夜してしまつた。井生君から貰つてきた改造と中央公論とを読んで、いろ／＼の事を考へないではゐられなかつた、殊にその一つのものと転換時代とはその熱力と意気とで私をうつた、私は今更のやうに私の生活について、存在の意義について考へた、今更どうなるものでもないけれど。――私の句作には私だけの価値、私の生存には私だけの意味があることを私は信じてゐる、信じてはゐるが、同時に私は私といふ人間があまりにみすぼらしいことを恥ぢてゐる、――かういふ私をほんとうに理解してくれる友は誰か！

いつぞやの鉄鉢の句訂正・霰、鉢の子の中の　　　冬村君新婚の祝句として・青葉に青葉が二つのかげ・竹の子の竹になつてならんでゐる・空は皐月の、一人ではない

五月廿四日

　今朝も早いも遅いもなかつた、ちつとも眠れなかつたのだから。老いて眠れない、老いて眼がよくない、——老境しみ／″＼だ。どうも私はクヨ／＼しすぎる、ケチ／＼しすぎる、ゆうようとして生きろ。今日も行乞はダメ、新聞を隅から隅まで読む、やめてゐたのだけれど、Ｔ配達が好意を持つて、持つてきてくれるのである、とにかく新聞と現代生活とは一日も離れられない。午後は果して雨となつた、しめやかな雨だ、たま／＼発見した十銭白銅一つを持つて出かける、地下足袋を穿いて。四日ぶりの外出、そして一浴一杯、いつでも湯はいゝな、酒はいゝな、だから、銭はほしいな！

　朝が待ち遠い鳥の一声二声で　夜明けの水くめばそこら花のにほひ・くもりおもたく蛙のなく　小鳥なくや、ひとりごといふ　ひさ／″＼もどればやたらに虫が（追加）・伸びるがまゝの雑草の春暮れんとす・ひつそり暮れるよ蛙が鳴くよ

五月廿五日

　雨、あがりさうであがらなかつた。行乞には出かけられない、もう物資が乏しくなつたのに。あざみをあやめに活けかへる、『見かけはつらき鬼薊、さわれば露の一しづく』か。裏の雑草の中から、小さい筍が一本、によこりと伸び出てゐた、すまないとは思つたが、煮て食べた、うまくはなかつたが新鮮を味つた。小鼠の悪戯には困る、一枚しか持たない蒲団の綿をかぢつたり、三八九をかぢつたりする。……蚊帳の用意は出来てゐたが、今夜から吊りはじめた、昨日は百足が顔を這ふのに驚ろいて眼が覚めた、山家は虫の多いのに閉口する。今日はいちにち無為無言だつた。

・あけたてもぎくしやくとふさいでゐる・雀がころげる草から草へ・によこりと筍こまかい雨ふる・雨ふるあやめで手がとゞかない・葉かげ黒い蝶・ほきりとたんぽゝの折れてゐる花・青葉の雨のしんか

んと鐘鳴る・壁に夜蜘蛛がぴつたりとうごかない

△酒についての覚書の一つ、――うまい酒、酔ふ酒であらねばならない、にがい酒、酔はない酒であつてはならない。

五月廿六日

曇、后晴れて風が出た、時々雨がふつた。御飯を炊いてゐると、聞き覚えるのある、そして誰とも思ひだせない声がする、出て見たら、意外にも義庵老師であつた、上京の帰途、立ち寄られたのである、いろ／＼話してゐるうちに熊本がなつかしうなつた。お茶もないし、何も差上げるものがないので、Ｓ店へ走つてビールと鑵詰と巻鮨とを借りて来て、朝御飯を食べて貰つた。八時の汽車に間にあふやう、駅近くまで見送つていつた。樹明君がやつてきて、冬村新婚宴はいよ／＼今晩だといふ、うんと飲んで面白く騒がう。もう米がなくなつたから、気はすゝまないけれど陶行乞、五時間ばかり歩きまはつた。

米　二升四合銭　十七銭（外に樹明君が色紙代として二十銭喜捨）

今日の買物はよかつた。――

一金七銭　　色紙二枚一金六銭　　焼酎五勺一金十一銭　バツトとなでしこ一金九銭　　ハガキ六枚一金三銭　草鞋一足

六時のサイレンをきいてから樹明居へ出かける、風呂に入れて貰つて、同道して冬村居へ、めでたし冬村君、冬村君御馳走でした、酔うてふらふらして戻つて、そのまゝごろりと寝てしまつた。

祝句空はさつきの、一人ではない青葉に青葉がふたつのかげ

端午が近づいた、笹の葉を活けて粽をのしのぶ。馬刀貝を食べつゝ旦浦時代の追憶にふける。

五月廿七日

海軍記念日、上々吉の天気、のんびりした一日だつた。朝、不三生さんが蜊貝をどつさり持つてきてくれた、しばらく話してゐるところへ樹明君、昨夜の酔態を話しあふべく来庵。私も昨夜の着物の泥を落すのに苦心した、やかましくいふ人がゐないやうに、やさしくしてく

れる人もゐない。神保さんがくる、豆腐屋さんがくる、今日は賑やかだつた。物資缺乏、もう塩までなくなつてしまつた、明日はどうでも山口行乞をしなければなるまい。

青葉から電燈線へ蜘蛛の囲大盃の梅の花を飲む（冬村新婚宴）

五月廿八日

曇、……行乞は見合せる。……旧暦の端午である、在来の年中行事は旧暦でないと、季節的に本当でない、したがつて、気分的にも気乗がしない。朝から、神保さんがやつてきて茶摘みに精出してゐる。朝は塩気なしですましたが、昼は前のＦ家から茶碗に一杯の醤油を借りて菜葉を煮る（神保さんが借りてきてくれた、多謝々々）。昼御飯の仕度をしてゐるところへ、樹明君さうらうとしてやつてくる、酒はつゝしむべきかなと私を悲しませる、そして私をして学校の給仕を通して奥さんに嘘を吐かなければならないやうにした！昼寝は悪くないけれど、今日の昼寝は長すぎた。夕方また雨となつた。寝て起きた樹明君がおとなしく――みすぼらしく帰つた、お互に共通の弱点を持つてゐるのだから、その切なさはよく解る、よく解るだけそれだけ、私自身に鞭つ意味に於て、君に苦言を呈せざるを得ない（伊東君に対しても同様だ）。石油がなくなつたから、そして買ふことが出来ないから、暮れると直ぐ寝た、寝た方がよい、読むよりも、考へるよりも。こゝ二三日、どういふものか句が出来ない、それもよからう。

五月廿九日

曇つてはゐるけれど、今日はどうしても行乞しなければならない、ずゐぶん早く起きたが、あれこれ手間取つて、出かけたのは六時すぎだつた、九時から二時まで山口市街行乞、それからまた歩いて帰庵、往きの三里は何でもなかつたけれど、帰りの三里は少々こたえた、幸にして焼酎といふ元気回復薬を飲んだけれど。――ほんとうに久しぶりに草鞋を穿いた、草鞋でアスフアルトの新国道を歩みしめてゆく心持はよかつた。山口で、ゆくりなく、川棚温泉で昨夏相識の坊さんに邂逅した、彼は俗坊主だけれど、憎めない人間だ。帰庵して、胡瓜苗を植ゑ、唐辛苗を植ゑ、種生薑を植ゑ、月見草を植ゑた、イヤハヤ忙しい事。そしてまた、街へ出かけた、今夜なくてはならない物を買ふ

ために。

今日の行乞所得銭　六十八銭　　　　　　　　合計金九十弐銭　米　一升一合　　今日の買物　　　　　　種生薑　百匁七銭一金十五銭　　　　　　胡瓜苗六本五銭、唐辛苗七本三銭一金十七銭　焼酎壱合五勺一金八銭　　石油二合一金五銭　　醤油一合一金五銭　　塩一金四銭　　なでしこ一金九銭　　ハガキ六枚・月草を植ゑて一人・鉢の子の米の白さよ・注連を張られて巌も五月・初夏や人は水飲み馬は草喰み　　　二句追加・うごかない水へ咲けるは馬酔木の花で・ゆく春の身のまはりいやな音ばかり

五月三十日

晴、けふも山口へ、十時前から二時過まで行乞、帰途、湯田温泉浴、蓮芋の苗を買うて戻る。山口の山はさすがによろしい、ことに糸米あたりの山がよろしい、中学時代のおもひでがそこらに残つてゐた、後河原の葉桜もうれしかつた、よくそのあたりを歩いたものだ。伊勢神楽がおどつてゐた、私と同様に時代錯誤的産物の一つだ、はかないをかしさを覚える。たま／＼鏡にうつつた顔！　何と醜い顔！　それが私のだつた！

新国道はまつすぐにして兵列がくる・草へ脚を投げだせばてふてふ・春ふかい草をふみわけ蛇いちご・たゞ暑くゆきつもどりつローラーのいちにち・うしろは藪でやぶうぐひす・うらから風もひとりですゞしい

昨日も今日も行乞相はわるくなかつたが、それでも時々こだはつた、捨てゝも、捨てゝも、ちぎつても、ちぎつても、執着はのこるものかな。夜はぐつすりと寝た、近来にない熟睡だつた。

今日の行乞所得　　　　今日の買物銭　六十四銭　　　　　蓮芋苗　五銭米　一升三合　　　　　焼酎　二十銭

五月三十一日

けさは早かつた。阿知須行乞、わるかつた、風はふくし、人気はよくないし、気分はいら／＼するし、同行が多いし（三人）、労れてはゐるし、……さう／＼にして帰庵した。庵が、やつぱり、よろしい、

さみしいけれどやすらかで。▵鮮人の子供が喧嘩してゐる。うれしいたより、かなしいたより、黎々火君からはへちまのたね。樹明来、よい酒をのんでよい酔をえた。昨日は新国道のよさを痛感した、――大道坦として砥の如し、――今日は石ころ道のみじめさ、――どこまで行く石ころみち。――▵この窮乏、そしてこの自由、食ふや食はずの私であるが、私は行きたいときに行きたいところへ行く、天は二物を与へないといふ、まつたくその通り。

電線といつしよに夏山越えて来た・朝から水をのむほがらかな空

六月一日

酔中夢なし、ほつかり覚めて、飯を炊く、そして酒を飲む。今日一日のさびしさは飯の生煮であつた。冬村居から青紫蘇の苗を貰うて来て植ゑる。柿の花はおもしろいかな。待つてゐる――敬坊来、間もなく樹明来、かしわで飲む、何といふうまさ、友情そのものの味はひだ！敬坊の奥さんが子供をみんな連れてやつて来られた、敬坊に信用なし、奥さんに理解なし、女といふものは、妻といふものは。――敬坊おとなしく、奥さんうれしく、樹明つゝましく、帰つてゆく、私はぽかんとしてあるだけの酒を飲む、……よかつた、よかつた、よかつた、よかつた。

・もう明けさうな窓あけて青葉・蛙がうたうてゐる朝酒がある　肉が煮えるにほひの、赤子が泣く　めつきり夏めいて机の上の蟻も・ながい毛がしらが　もらうてきてうゑてをくよいくもり　昨日の所得　昨日今日の買物米　一升一合
一金十六銭　酒二合　一金弐銭　切手一枚銭　十七銭　一金六銭　醤油二合　一金五銭　湯札弐枚　換算して一金四十一銭也。　一金九銭　ハガキ六枚　一金四銭　胡瓜苗四本　（嚢中完全に無一文なり）

六月二日

くもり、北九州への旅立を見合せる。樹明君が朝早く来て、飯をたべさせてくれといふ、そしてたつた一杯だけたべた、頭髪を刈りても

らふ、さつぱりした、ふたりが縁側で話してゐるところへ、やつてきた人がある、——中井吉之介さんだつた、インテリルンペンである君の話は興味ふかく尽くるところがなかつた、ムジナの話、フクロウの話、近代女性の話、マムシの話、アダリンの話、ボクチンの話、等、等、等。私もルンペン生活をやつてきたけれど、君のそれは本格的だ。敬坊が樹明君に托してくれた壱円で、石油を買ひ、煙草を買ひ、焼酎を飲み湯に入つた。夜は酒と句とヨタとで賑つた、主賓吉之介、客賓樹明、不二生、主人公は山頭火、たゞし酒も魚も樹明君の贈物、酒もうまかつたが話もおもしろかつた。

　　明日は死なう青葉をあるきつゞける（吉之介さんに代つて）・地べたにすわり食べてるわ・はれ／″＼酔うて草が青い・石垣の日向の蛇のつるみつつ・つきあたれば枯れてゐる木・さみしいけれども馬齢薯咲いて

　　六月三日

　徹夜だつたから早い、五時にはもう支度が出来た、あまり早うて気の毒だつたけれど、ルンチヤンを起す、六時のサイレンが鳴る前に二人は出立した、彼は故郷鳥取へ、私は北九州へ。

　　六月三日　　から　　　　　　　　　　行乞記　六月十一日　まで

第11章
行乞記　06 北九州行乞(新字旧仮名)

　　六月三日　（北九州行乞）

　一年ぶりに北九州を歩きまはるべく出立した、明けたばかりの天地はすが／＼しかつた、靄のふかい空、それがだん／＼晴れて雲のない空となつた、私は大股に歩調正しく歩いていつた。嘉川を過ぎると峠になる、山色水声すべてがうつくしい、暑さも眠さも忘れて、心ゆくばかり自然を鑑賞しつゝ自己を忘却した。十一時すぎて船木着、三時まで行乞、泊つて食べるだけの物資をめぐまれて、かしわやといふ安宿に泊つたが、申分のない宿だつた、おかずもよろしいし、御飯もたつぷりあつた、風呂もわいてゐたし水もよかつた、蒲団もきれいで相客までが好人物ぞろひだつた、これで、木賃料三十銭とは！こゝろよく酔うて話がはづんだ。

　　山ふところの花の白さに蜂がゐる　松風松蝉の合唱すゞし　こゝがすゞしい墓場に寝ころぶ　　　河の向岸は遊廓、家も女も　　　田園情趣ゆたか・水をへだてゝをなごやの灯がまたゝきだした　をとこがをなごに螢とぶ水　　今日の行乞所得米　一升三合銭　三十八銭

　落葉石のおもひで（周陽時代）

　　六月四日

　昨夜は興に乗じて焼酎を飲みすぎたので胃の工合はよくないけれど、ぐつすりと眠れたので気分は軽い。行程六里、厚狭行乞。山に陽が落ちてから黎々火居へ落ちつく、心からの歓迎をうけた、ありがたかつた。近来にないうまい酒うまい飯であつた。ずゐぶんたくさん水

を飲んだ。

　　飲みすぎの胃袋が梅雨ちかい空　おべんとうひろげるまうへから陽がさす・水もさつきのわいてあふれる　女房に死なれて子を負うて暑い旅　若竹がこまやかなかげをつくつてゐた　　　黎々火居二句　夜もふけた松があつて蘭の花　盛花がおちてゐるコクトオ詩抄　　本日の所得米　一升一合銭　五十六銭

　フクロウはうたふ、ボロキテホウコウ！

　　六月五日

　朝、黎々火君と散歩する、長府は気品のある地である、さすがに士族町である、朝早く、または月の夜逍遙するにふさはしい、しづかで、しんみりしてゐて、おちついた気分になる。覚苑寺、功山寺、忌宮、等々のあたりをそゞろあるきする、青葉若葉、水色水声、あざやかでなつかしい。心づくしの御馳走を遠慮なくよばれる、ひきとめられるのをふりきつてお暇した。行乞米を下さいといつてお布施を下さる、写真をとつてもらふ、端書、巻煙草、電車切符を頂戴する、——何から何までありがたい。黎々火居は家も人もみんなよかつた。今日は陰暦の端午、柏餅、笹巻餅を味つた、草餅のかをり、それは遠い少年のかをり、伝統日本のかをりだ。長府から下関へ電車、門司へ船、そしてまた電車でまつしぐらに戸畑へ。入雲洞居はなつかしい、入雲洞君の飾らない厚意が身にしみる、酒はもとよりいはずもがな。食後、市街を漫歩する、戸畑市の輪郭だけは解つたから、明日は行乞しようと思ふ。昨夜も今夜も絹夜具、私にはもつたいないけれど、わざとだまつて寝させていたゞく。

　　朝の山が朝の水に・松が三本、国分寺跡といふ芋畑　水音の山門をくゞる水音　汐風つよくボートが塗りかへられる

　　六月六日

　病院出勤の入雲洞君といつしよに出発。風雨が強くなつて行乞どころぢやない、一杯機嫌で八幡へ急いだ。星城子居に星城子君はゐなかつた。——

　さくらの木ばかりあんたはゐない

幸雄さんを訪ねる、私の好きな青年俳人である、こゝでもまた父君母君が酒をすゝめられる。同道して鏡子居を驚かす、鏡子君はオナゴヤの主人であるがおもしろい人である、酒、ビール、サイダー、蕎麦。……同業者井上さんのところでまた御馳走になる、鯛のあらひは格別おいしかつた、こゝで星城子君にあへたのはうれしかつた。鏡子、幸雄、星城子、私の四人連で、電車に乗つて支那料理屋へいつた、チヤンチユウ、サントウカとなつてしまつて、宿屋へ送りこまれた。風、風、人、人、煙、煙――私には山村がよい、庵がよい、――そして酒、酒。

押売の押売これは鏡子君の話、君の門柱には、物貰、押売謝絶の札がうつてゐる、あれは或る日或る男がきて、無断でうちつけて、さて十銭ですといつたのださうな、――これこそ押売を排する押売だらう！

六月七日

曇、終夜、障子がガタ／＼鳴つてゐたことを覚えてゐる、あれだけ飲んでもこれだけ真面目だ、喜んでいゝかどうかはわからないが。出勤前の星城子君来訪、幸雄さんはそれよりも早く見舞つてくれてゐる。しみ／″＼友情を感じる、道としての句作の力をひし／＼感じる。八幡は労働都市だけあつて、たべもの店が多くて安い、そこで私もサケとビールとシヨウチユウとのカクテルを飲んだ。いそいで街を離れた、黒崎から左へ曲つてホツとした、人間的臭気の濃厚には堪へきれない私となつてゐた。遠賀川の青草はよい、遊んでる牛もよい。笠がやぶれた（緑平老の眼につくほど）。香春岳は旅人の心をひきつける。途中、木屋瀬を行乞する、五時前にはもう葉ざくらの緑平居に着いた。月がボタ山のあなたからのぼつた、二人でしんみりと話しつゞける、葉ざくらがそよいでくれる。彼の近状をこゝで聞き知つたのは意外だつた、彼が卒業して就職してゐるとはうれしい、幸あれ、――父でなくなつた父の情である。

・青葉へ無智な顔をさらして女　ぽつきり折れてそよいでゐる竹で・こゝから路は松風の一すぢ　養老院の松風のよろしさ・ともかくも麦はうれてゐる地平　牛といつしよに寝て遊ぶ青い草　　　緑平

居　葉ざくらとなつてまた逢つた　ひさ／″＼逢つてさくらんぼ・がつちりと花を葉を持つて泰山木

六月八日

名残惜しい別れ、緑平老よ、あんたのあたゝかさはやがてわたしのあたゝかさとなつてゐる。晴れて暑い、行程六里、身心不調、疲労困憊、やうやくにして行橋の糀屋といふ木賃宿に泊つたが、こゝもよい宿だつた。アルコールの力を借りて、ぐつすりと睡ることができた、そのアルコールは緑平老のなさけ。

木屋瀬行乞米弐合に銭弐拾銭　　行橋行乞米四合に銭四十七銭

六月九日

朝のうち行橋行乞、行乞相は当然よくなかつた。小倉までよい道連れ――中年の商人――を得て助かつた、行程五里。惣参居はおだやかな家庭である、お嬢さんが三味線の稽古をしてゐた、此一事にも惣参居士の心ばえがしのばれる。二人で湯屋へ行く、湯の空色が気に入つた。いつものやうに酒を十分いたゞく、お布施もいたゞく、御馳走はなかつたが、温情があまつた。泊れといはれたが、お断りして安宿に泊つた、三角屋といつて、相客が多くてうるさかつたが、悪い宿ではなかつた。今夜は飲みすぎた、酔ひすぎた。小倉はさすがに昔からの城下町だけあつて、とゝなうておちついてゐる。

・かげは楠の若葉で寝ころぶ・橋の下のすゞしさやいつかねむつてゐた　わかれきて峠となればふりかへり・風のてふてふのゆくへを見おくる　　仲哀洞道　登りつめてトンネルの風　落穂ひろうては鮮人のをとこをなご・こゝろむなしく旅の煤ふる

六月十日

今日も暑い、とても行乞なんか出来ない、電車で門司へ、なつかしい海峡をしたしい下関へ渡る、いつもの岩国屋へ泊る、可もなく不可もないといふところ、遠慮のないのが何よりである。よう寝られた。

六月十一日

すつかり夏景色夏心地だ、一刻も早く帰庵したい、そしてわがまゝ

きまゝなひとりになりたい。長府まで電車、長府から小郡まで汽車、やれやれといふ気分だつた。……八幡で四有三君、小城さん、下関で地橙孫君に逢へなかつたのは残念だつた。――別事なし――出て歩いても、戻つて来てもこんな気がする。――やつぱりひとりがよろしい――こんな句が出来る自分を再発見する。――生死去来は生死去来に任す――どうやらこゝまで達したやうである。

六月十一日　入梅。

三時帰庵した、歩けば二日の行程を汽車は二時間で運んでくれた（こゝで改めて、近代文化のありがたさ、金銭のありがたさを痛感した）。私はぐつたりと疲れてゐた、帰るなり寝た。▵雑草、雑草、雑草に埋れた気分に浸つて。飲みすぎたからでもあらう、年のせいでもあらう、暑いためでもあらう、――とにかく私は労れてゐた、そして何はなくとも、私は私の寝床に戻つて、安心して寝たのである！庵はよいかな、さみしいけれどしづかだ、まづしくてもやすらかである。夕方樹明来、お土産の雲丹――それが最小の一罐であることを許してくれたまへ――をおかずにして御飯をあげる、それから出かける、君が意気投合したといふ、そして私をよく知つてゐるといふ、新任校長Ｋさんを訪ねる、生憎差支があつて話にも、むろん酒にもならない、そこでＳカフヱーへ、酔うて窟へ。――よくなかつた、小脱線だつたけれど、久振のワヤだつたけれど、やつぱりよくなかつた。

・ひさ／″＼もどれば筍によき／＼

六月十二日

朝寝した、樹明君が昨夜の動静を聞きに来た。夾竹桃がもう咲いてゐる、南国の夏の花だ。夜は庵で、私の酒をちよんびり飲んだ（樹明君といつしよに）、おだやかな酒だつた、さみしい酒だつた。雷鳴、驟雨、梅雨らしい天候だつた。

六月十三日

晴、今年は誰もがいふやうにカラツユかも知れない。畑の手入。苦もなく句もない、ノンキな一日だつた。筍、螢、蛙。……樹明君は腰が痛くて来られないさうで、原稿紙をくれといふ使が来た、胡瓜苗も

送つてくれた。

六月十四日

晴れたり曇つたり、私はゆつくり昼寝した。

六月十五日

晴、草取デー。樹明来、酒と肴とをおごつてくれた。ほとんど徹夜して身辺を整理した、気分がさつぱりした。

・たれかこいこい螢がとびます　さら／＼青葉の明けてゆく風・風は夜明けのランプまたたく・こゝろすなほに御飯がふいた　埃まみれで芽ぶく色ともなつてゐる（改作）

六月十六日

昨夜の酒がこたえて胃が悪い。行乞をやめて野菜の手入をする、樹明君が持つてきてくれた菊を※したり、胡瓜の棚を拵らへたり。

・から梅雨の蟻の行列どこまでつづく・朝風、胡瓜がしつかりつかんでゐる　番茶濃きにもおばあさんのおもかげ・柿の花のぽとりとひとりで・てふてふうらからおもてへひらひら　街が灯つた青葉を通して遠く近く

入浴して心気颯爽。樹明君が胡瓜と着換とを持つて来庵、学校宿直を庵宿直にふりかへたといふ、飯がないから、といふよりも米がないから、Ｆ家へいつて五合借りる、醤油がないから酢だけで胡瓜なますをこしらへる、それでも二人でおいしく食べて、蚊帳の中でしんみり話した。△新聞を配達して来ない、電燈料が払へなくて電燈をとりあげられたやうに、新聞代もたまつたので新聞もとりあげられたらしい、電燈の場合よりも、よりさみしい場合だ。

改作二句・月も水底に旅空がある・まこと雨ふる筍のんびりと

六月十六日

晴、ちつとも梅雨らしくない、梅雨は梅雨らしければよいのに。宿直した樹明君が帰つて行く、私は湯田行乞に出かける。百足、蛇、

蜂、蛞蝓、蝶、蚊、虻、蟻、そして人間！胡瓜、胡瓜、胡瓜だつた、うますぎる、やすすぎる！朝の道はよい、上郷の踏切番小屋から乞ひはじめる、田植がなつかしく眺められる、それはすでに年中行事の一つとしての趣味をなくしてゐるが、やはり日本伝統的のゆかしさがないことはない。△畦の草をしいて食べる田植辨当はうまからう、私もその割子飯の御馳走になりたいな、土落しによんでくれるうちはないかな。椹野川の瀬音、土手のさくらんぼ。夕凪の浅瀬を泳ぐのは鮎か鯱か、負うた子にとつてやる月草のやさしい心。十一時から二時まで行乞、行乞相はわるくなかつた。戻つたのが五時過ぎ。——

　暑くるしい塵がたまつて出たときのまま

　だつた、破れた人生の、捨てられた姿だ。飯は貰うて食べる、煙草は拾うて吸ふ、生きてゐるのでなくて生かされてゐるのである。△自然的には生かされてゐる人間であるが、社会的には生きてゐなければならない、虫に生存があつて人間に生活がある所以だ。△風の如く来り風の如く去る、水の如く雲の如く。

　　　今日の行乞所得米　一升四合　　　　銭　弐十七銭　　今日の買物一金四銭　たばこ　　　　一金四銭　古雑誌一金三銭　はがき　　　一金五銭　しようゆ一金十銭　しようちゆう

　これで二三日は死なゝいですみます！

　　山は青葉して招魂碑いよ／＼白し・水車ふむほどに太陽のぼるほどに　空が人が田植はじまつてゐる・なんできたかよ蛇のすずしい眼　みんな留守で燕だけ・兄がもげば妹がひらふさくらんぼ
□・なにかそこらで燃えてゐる音の夕凪　ふくらうがよびかける声をきいてゐる・青葉や青空や大きな胃袋を持つて歩く・ひとりとなればひとりごと・あれは竹の皮が落ちる夜の声

　　六月十八日

　晴、めづらしく小鳥が来て啼く、しづかな明け暮れ。休養読書。枇杷の実がつぶらに色づいてきた、Ｊさんの子供たちが来てよろこんでうまさうに、もいではたべる、たべてはもぐ。

　・ほつかり朝月のある風景がから梅雨　夕闇の筍ぽき／＼ぬいてい

つたよ　　　旧作再録　ぢつとたんぽぽのちる　やつぱり一人がよろしい雑草　どうにもならない矛盾が炎天　線路まつすぐヤレコノドツコイシヨ　焼跡なにか咲いてゐる方へ　埃まみれで芽ぶいたか　送電塔が青葉ふかくも澄んだ空　やつと芽がでたこれこそ大根　すずめおどるやたんぽぽちるや　暮れてつかれてそらまめの花とな

六月十九日

ずゐぶん早く起きた、暁天の蛙声はよかつた、ほつかりと朝月があつて空梅雨、何となくニヒリスチツクな風景。行乞は気分がふさぐから止めにして庵中閑打坐。すこし梅雨らしく曇つては見せるが、なか／＼降つてくれない。▵食べる事、そして寝る事をのぞいて、他に何事が私に残つてゐるか！Ｊさんが唐辛を持つてきてくれた、何よりの贈物だ。一杯やりたい慾望、性慾のなくなつた安静。私の生活もいよ／＼単純、簡素、枯淡になつた、これで追想や空想や妄想がなくなると申分ないのだが。蚯蚓のやうに、土のやすけさを味へ。野菜に水をやる、雨——自然の偉大を考へさせられる、今更のやうに。夜、樹明君が袖に螢を一匹つけて来た、どうしても来ずにはゐられないから来たといふ、何といふうれしい言葉だらう。きりぎりすが鳴きはじめた。

・朝露しとゞ、行きたい方へ行く・これでもわたしの胡瓜としそよいでゐる・菜も草も朝はよいかなそよいでゐる・窓へ筍伸びきつた・蜂がとんぼが通りぬけるわたしは閑打坐　どうやら雨となりさうな蛙のコーラス　青葉まぶしく掌をひらく　飯の煮えてきた音のしづけさで・夕あかりの枇杷の実のうれて鈴なり・酒がほしいゆふべのさみだれてくれ・何やらたたく音の暮れがてに・夜ふけて落ちる木の葉の声は柿の葉・夜明けの月があるきりぎりす

六月廿日

早すぎるほど早く起きて仕度をした、すつかり片づけて、伊佐地方を行乞すべく出かけた、五時頃だつたらう。裏山の狐が久しぶりに鳴くのを聞いた。

六月廿日　　　　　　　行乞記　六月廿一日

第12章
行乞記　07 伊佐行乞(新字旧仮名)

六月廿日　（伊佐行乞）

朝あけの道は山の青葉のあざやかさだ、昇る日と共に歩いた。いつのまにやら道をまちがへてゐたが、――それがかへつてよかつた――山また山、青葉に青葉、分け入るといつた感じだつた、蛙声、水声、虫声、鳥声、そして栗の花、萱の花、茨の花、十薬の花、うつぎの花、――しづかな、しめやかな道だつた。途中行乞しつゝ、伊佐町へ着いたのは一時過ぎだつた、こゝでまた三時間ばかり行乞して、どうやかうやら、野宿しないで一杯ひつかけることができた、ありがたいやら情ないやらの心理を味つた。今日の行程七里、そして所得は、――

銭四十三銭に米八合。

伊佐で、春田禅海といふ真言宗の行乞相と話し合ふ機会を得た、彼は地方の行乞僧としては珍らしく教養もあり品格もある人間だ、しきりにいつしよに在家宿泊を勧めるのを断つて、私は安宿におちついた、宿は豊後屋といふ、田舎町に於ける木賃宿の代表的なものだつた、家の中が取り散らしてあるところ、おかみさんが妻権母権を発揮してゐるところ、彼女はまさに山の神だ、しかし悪い宿ではなかつた、食事も寝具も相当だつた。同宿は四国生れの老遍路さん、彼もまた何か複雑な事情を持つてゐるらしい、ルンペンは単純にして複雑な人間である。その人のしんせつ、ふしんせつ、頭脳のよさわるさ、――道をたづねるとき、あまりによくわかる。今日の支出は、――

木賃二十五銭、飯米五合、たばこ四銭、端書六銭、酒代十銭、……

伊佐は風流な町だ、山あり田あり、鶯が鳴き不如帰が鳴く、狼が出

るかも知れない、沙漠のやうに石灰工場の粉が吹き流れてゐる。まだ蚊帳なしで寝られたのはよかつた、蚤の多いのには閉口した、古いキングを読んだり隣家のレコードの唄を聞いたり、――これもボクチン情調だ。

　　朝風すゞしく馬糞を拾ふ人と犬・山里をのぼりきて捨猫二匹　捨てられて仔猫が白いの黒いの・夏草の、いつ道をまちがへた・虫なくほとりころがつてゐる壺・道がなくなればたたへてゐる水・これからまた峠路となるほとゝぎす・ほとゝぎすあすはあの山こえてゆかう

　　六月廿一日

　習慣で早く眼が覚めたが起きずにゐた、梅雨空らしく曇つて、霧雨がふつてゐた。七時出立、すぐ行乞をはじめる、憂欝と疲労とをチヤンポンにしたやうな気分である。時々乞食根性、といふよりも酒飲根性が出て困つた、乞ふことは嫌だが飲むことは好きだ。ひさ／″＼で、飯ばかりの飯をかみしめた、そのうまさは水のうまさだ、味はひつくせぬ味はひだ。本降りとなつたが、わざと濡れて歩きつゞけた、厚東駅まで八里、六時の汽車に乗つた。山頭火には其中庵がある、そこは彼にとつて唯一の安楽郷だ！

　　　今日の行乞所得米一升六合　銭四十一銭

　途上一杯の酒、それこそまさに甘露！汽車は便利以外の何物でもない、自動車は外道車だ！足で歩くにまさるものなし、からだで歩け。今日の汽車賃三十銭は惜しかつた。

　・寝ころべば筍も生えてゐる・山鶯も山頭火も年がよりました・梅雨空をキヤルメラふいてきたのは鮮人・水の音、飯ばかりの飯をかむ・おばあさんが自慢する水があふれる・いつかここでべんたうたべた萱の穂よ・笠きて簑きて早乙女に唄なく・笠をぬぎしつとりと濡れ・ふるもぬれるも旅から旅で・禿山しみじみ雨がふるよ・合羽きるほどはふらない旅の雨ふる・青葉に雨ふりまあるい顔

　　六月廿一日

　暮れきるまへに帰庵した、さつそく御飯を炊く、筍をひきぬいてきて煮る、掃く、拭く。……安心満腹、前後不覚、よい雨の夜のよい眠

だつた。

六月廿二日　夏至。

熟睡した快さ、雨の音のうれしさ。——

・よい雨の窓をあけはなつ

塩はある（何と塩の尊くて、そして安いことよ）、その塩で御飯をいたゞきませう。いよ／＼本格的梅雨となつた。どこも田植で、純日本的風景が展開されてゐる。樹明君から来信、私が酒を買ひ、君が下物を持つてくることになつた（酒代は、ありがたや、句集代を樹明君が保管してゐてくれたので、十分、十分、十分である）。合羽を着て酒買ひに。約をふんで、樹明君がやつてきた、鮹と胡瓜とを持つて。うまい酒だつた、酔うて倒れた、眼が覚めたらもう朝が来てゐた。

・さみだるゝや真赤な花の・濡れて尾をたれて野良犬のさみだれ・はたらく空腹へさみだれがそゝぐ・梅雨空のしたしい足音がやつてくるよ（改作）・あめのはれまの枇杷をもいではたべ・梅雨あかり私があるく蝶がとぶ・びつしより濡れてシロ掻く馬は叱られてばかり　　　追悼・夏木立、そのなかで首をくゝつてゐた

六月廿三日

曇、后晴、やつぱり空梅雨か。早起、好日、さてもほがらかな今朝なるかな。糸瓜を植ゑる、五本生えたが三本は虫に喰はれた。道ばたの青梅を十個ばかり盗んできて（捨てゝあるのだから、むしろ拾うてきて）漬ける、果して焼酎漬が出来るか知ら。可愛い赤蛙がぴよんと飛ぶ、そして考へてゐる、まだ子供、いや青年だ。樹明君が陰惨な顔で来た、私の杞憂が杞憂でなかつたことを証拠立てゝゐる、昨夜のよい酒が今朝のわるい酒となつたのか、いたましい事実である、私は君を責めずにはゐられない、亡弟の忌中であり、学校職員であり、夫であり父である君としては、あまりに不謹慎である、君よ、自ら苦と罪とを求めたまふな、しばらく寝たまへと私がいふ、どうしても寝られないと君はいふ、さびしい問答のかなしい真実である、……飯が出来るのも待たないでＪさんといつしよに帰つていつた。……午後、ハガキを投函すべく、石油を買ふべく街へ出かける、小郡にもガソリン

ガールが出現した、その軽快愛すべしであつた。地虫が鳴きだした、地上は夏でも地中は秋だらう。

・草しづかにして蝶がもつれたりはなれたり　糸瓜植ゑた日また逢うてさびしい話・糸瓜植ゑる、そこへ哀しい人間がきた・考へつつ出来た御飯が生煮で・梅雨晴ごし／＼トラツクを洗ふ　親も子も田を植ゑる孫も泥をふむ・まづしいけれどもよい雨の糸瓜を植ゑる・とんぼつるめばてふてふもつれるま昼のひかり・煮る蕗のほろにがさにもおばあさんのおもかげ・障子をたたくは夏の虫・蠅もおちつかない二人のあいだ・みんないんでしまうより虫が鳴きだした・雑草のなか蛙のなかや明け暮れて　昼も蚊がくるうつくしい蚊

六月廿四日

晴、時々曇、晴れても曇つても日々好日である。今日は山口を行乞しよう、六時出立、九時着、行乞三時間、三時帰庵、行乞相はよかつた、所得もわるくなかつた。

今日の所得銭　四十五銭　米　一升三合　今日の買物　煙草　四銭　焼酎　十一銭端書　六銭　味噌　八銭

途上で拾ひあげた句七つ。――

・ふりかへる柿の葉のひらり・アスフアルトもをんなくさい朝の風・叱られる馬で痩せこけた馬で梅雨ふる・はれたりふつたり青田となつた　梅の実も落ちたまゝお客がない・梅雨晴の大きい家が建つ　□・山頭火は其中庵にふくろうがうたふ

△秘密を持たないやすらかさ、身心かくすところなくして光あまねし、浮世夢の如く塵に似たり、その夢を諦らめその塵を究めるのが人生である。△食ふや食はずでも（正確にいへば、飲むや飲まずでも）山頭火にはやつぱり其中庵がいちばんよろしいことを今日もしみ／″＼痛感した。△捨てる事と拾ふ事とは、その心構へに於て同一事である。△しづかに燃えるもの――その生命――その感動がなければ芸術は（宗教も科学も哲学も）、光らない、俳人よ、先づ自己を省みよ。△日が暮れたら寝る、夜が明けたら起きる、食べたくなつたら食べる、歩きたくなつたら歩く、――さういふ生活へ私は入りつゝある、

それは無理のない、余裕のある、任運自在の生活である。

・この花を見つけた蝶の白い風・陽が落ちるそよ風の青い葉が落ちる・ゆふ風いそがしい蜘蛛のいとなみがはじまる

六月廿五日

明けゆく空、朝風はよいかな。郵便――うれしいたより、私は郵便によつて唯一の社会的交渉を保つてゐる。蔬菜の手入れ、トマトと茄子とは上出来、胡瓜と大根とは不出来、しかし、楽在其中で、趣味第一、実用第二である。△「嘘をいはない」ではまだ浅い、「嘘がいへない」まで深くならなければならない。△梅干の味、それは飯の味、水の味につぐものだ、日本人としてそれが味へなければ、日本人の情緒は解らない。△無一物底無尽蔵は観念として解つてゐるだけだが、無一物中無関心は体験として解つてゐる。△人情的なものを私からとりのぞかなければならない。久しぶりに入浴、湯はよいかな。此頃の私はおちついてゐるよりも、むしろしづんでゐるらしい。飯のうまさ、眠りのよろしさ、――これだけでも私は幸福だ。

・南天の花へは蜂がきてこぼす・前田も植ゑて涼しい風　炎天の鶏を売りあるく・田植べんとうはみんないつしよに草の上で　カフヱーもクローバーもさびれた蓄音器の唄・雑草しづかにしててふてふくればそよぐ・ちぎられてもやたらに伸びる草の穂となつた　　　改作附加笠きて簑きてさびしや田植唄はなく

六月廿六日

いつからとなく、早く寝て早く起きるやうになつた、此頃は十時就寝、四時起床、昼寝一時間ばかり、そして純菜食（仕方なしでもあるが）、だから、身心ます／＼壮健、ことに頭脳の清澄を覚える、こんな風ならば、いつまで生きるか解らない、長生すれば恥多しといふ、といつて自殺はしたくない、まあ、生きられるだけは生きよう、すべてが業だ、因果因縁だ、どうすることもできないし、どうなるものでもない、日々随波逐波、時々随縁赴感、それでよろしい、よろしい。今朝は碧巌の雲門日々好日を味読した。新聞屋さんが新聞を持つてきて、今月分だけは進呈しますといふ、タダより安いものはない、よか

らう。掟三章（其中庵来訪者の）を書いて貼つて置いた。——（未定稿）

一、辛いもの好きは辛いものを、甘いもの好きは甘いものを持参すべし。一、うたふもをどるも自由なれども春風秋水のすなほさあるべし。一、威張るべからず気取るべからず髝ぐべからず其中一人の心を持すべし。

蠅はほとんどゐない、誰かゞ連れてきたか、私についてきたか、時々二三匹ゐることもあるが、すぐ捕りつくせる、蚊は多い、昼も藪蚊が出て刺す、朝夕は無数の蚊軍が私一人をめがけて押し寄せる、蚊遣線香が買へないから、私はさつそく蚊帳の中へ退却する、そしてその小天地を悠々逍遙する。……午後は畑を中耕施肥した、トマトよ、茄子よ、胡瓜よ、伸びよ、ふとれよ、実れよ（人間はヱゴイストですね！）。なごやかな一日だつた。樹明君はどんな様子か、敬坊の来庵はいつだらうか、逢ひたいな。

・朝風すゞしく爪でもきらう・なにかさみしい茅花が穂に出て・草しげるそこは死人を焼くところ　蜘蛛が蠅をとらへたよろこびの晴れ　からつゆやうやく芽ぶいたしようが　たま／＼人が来てほゝづき草を持つていつた　ま昼青い葉が落ちる柿の葉・ぢつとしてをればかなぶんがきてさわぐ・けふもいちにち誰も来なかつた螢

六月廿七日

梅雨模様で降りだしたが、すぐまた晴れて暑かつた。墓地に咲いてゐた夾竹桃を切つて活ける、赤い夾竹桃はまことに南国の夏の花である、美しい情熱が籠つてゐる。何もかも生きてゐる、……とつく／″＼思ふ、畑を手入れしてゐる時に殊にこの感が深い（胡瓜の蔓など実に不可思議である）。昼寝はよいかな、まさに一刻千金に値する（二刻は百金！）。遠く西方の山で郭公がしきりに啼いてゐた。▵漬物は日本人にはなくてはならぬ食物である、私は今日、大根を間引いて漬けた、明日は食べられる、おいしからうぞ。何かにつけて、彼及彼女を思ひだす、見頓思漸、理先事後、詮方もない事実である。晩にはお菜がないので、小さい筍を抜いて煮て食べた、一皿に盛るだけしかなかつたが、ダシもなかつたが、それでも十分うまかつた。▵晴耕雨読、

そして不足なく剰余もない生活、さういふ生活を私は欣求する、さういふ生活がほんとうではあるまいか。△自浄吾意、これが人間生活の基調でなければならない、念々不停流、これが生活態度でなければならない、朝々日は東より出で出で夜々月は西に沈む、——私たちの生活はこゝから出発してこゝに到着しなければならない。樹明来信、これで私も安心した、どうやら因縁が熟して時節到来したらしい、お互にしつかりやりませうよ。

　よい朝のよい御飯が出来た　草ふかくおどりあがつたよ赤蛙　晴れさうなきりぎりすのないてはとぶ・ちぎられてまた伸びてもう咲いてゐる・いつもかはらぬお地蔵さんで青田風・水音をふんで下ればほととぎす・しづむ陽をまへにして待つてゐる・すつぱだかへとんぼとまらうとするか・ふりかへるうしろすがたが年よつた　雑草にうづもれてゐるてふてふとわたくし・とんできたかよ螢いつぴき

　六月廿八日

早すぎるけれど、寝床でぐづ／＼してゐるのは嫌だから跳ね起きる、そしてあるだけの米を飯にする。雨、雨の音はいいな、その音に聴き入る、身心なごやかになる。昼の蚊は憎いな。敬坊から来信、明日来庵といふ、うれしいな。敬坊は人道的、樹明君は人情的、私はそのどちらでもあり、そのどちらでもない、むしろ非人道的、非人情的でありたいと考へてゐる（感傷的であるのは恥づかしい）。梅雨らしく降つたり晴れたりする、やむなく行乞は見合せる、明日の米がないけれど、明日は明日の事だ、明日の事は明日に任しておけ！午後は草取、取らずにはゐられない草だけ取る、雑草、雑草、雑草風景は悪くない、其中庵にふさはしい。

・あんなに高く蜘蛛が網張る朝焼　朝焼しめやかな雨がふる・朝焼の大きい葉が落ちた・雨が地べたをたたく音の中・昼も蚊が喰ふ肉体をいたはる・赤い花のしぼめば白い花のひらく・伸びあがつて蔓草のとりつくものなし　雑草みんないつしんに雨を浴びて・竹の子も竹となつた窓の明け暮れ・竹の子竹になる明るい雨ふる　晴れると開く花で・梅雨空へ伸びたいだけ伸びてゐる筍・降つたり照つたり何事もなくて暮れ　　追加一句・日が長い家から家へ留守ばかり（行乞）

窓へ竹の子竹となつて（追加）

六月廿九日

今朝は一粒の米もないから、そして味噌は残つてゐたから、それだけ味噌汁にして吸ふ、実は裏から筍二本！夜明けの蛙の唄はよろしい。黴には閉口、もつとも梅雨と黴とは離れられないが。断食――たゞしくは絶食、私の今日の場合では――それもよからう、よからうよ。葉が落ちる、柿の葉はばさり――昔の人は婆娑と書いたがその通り。虻には困る、蚋にも。日が照れば、何とうつくしいトカゲの色ごろも！虫の声はいゝ、コウロギはまだをさなく、キリギリスはいゝ。曇、行乞は今日も駄目。適意――自適――この言葉にふくむニユアンスが、すなはち、私のニユアンスだ、――かういふ生活もないことはない。娘さんがうたふ、梅をもいでゐる、その梅の実を一升買ふ。昼飯は五厘銅貨を豆腐に代へて、それですます。△豆腐の味は水のそれとおなじ、冷暖自知、いひがたし。野の花はどれもうつくしい、をどりこ草を活ける、露草がもう咲いてゐた。敬治君、約束の如く来庵、予感の如く樹明君も来庵、よい酒をのんだ、うまい、うまい。樹明君早く帰る、敬治君と私とは街へ出て、米を買ひ、ビールを飲んで戻つて寝た、めでたし、めでたし、ほんにめでたやなあ！夜ふけて飯を炊いて食べる。――螢がとぶ、とばない螢がこゝそこ。

・てふてふひらひらおなかがすいた・けふは水ばかりのむ風のふく　わたしの胡瓜の花へもてふてふ　花にもあいたかてふてふもつれつつ・障子ひらけば竹に雀の前景がある・むしあつく蟻は獲物をだいてゐる・ひとりでたべるとうがらしがからい・萱の穂も風が畳をふきぬける・どなた元気で夏畑の人や虫や・ひらくより蝶が花のうへ……………（これは酔線なり、今日の）

六月三十日

ほとんど徹夜した、敬治君はよく眠つてゐる。曇、すこし朝焼、多少の風。昨夜はやつぱり飲みすぎだつた、私は女難を知らないけれど酒難は知りぬいてゐる。今朝、それこそほろりと歯がぬけた、ぬけさうでぬけなかつた歯が。敬治君が睡眠の足つた上機嫌で県庁へ出張する、私はひとりしづかに読書、『唯物辨證本読本』裏山で自殺者が見

つかつたといふ、もう腐つて骨になつてゐたさうだが、情死だといふ、どこの男か、どんな女か、――それは話題でなくて問題だ。たま／＼人がきた、それは掛取だつた！　皮肉といへば皮肉である。蟷螂の子は可愛い、油虫の子には好感が持てない。客車便で小さい荷物が来た、森さんからの贈物、桑名の名物、時雨蛤である、ありがたい、うれしい、敬治君と共に味ふ、一杯やりたいな、桑名の殿さんでもうたひたいな。敬治君といつしよに入浴、帰途、米を買うて貰つた、焼酎を飲ませて貰つた、ほろ／＼ほろ／＼、ぐつすりと寝た。

・草苺ほのかに朝の水がたゝへ（改作）・青葉のむかういちはやくカフヱーの灯　咲いてゐる花を見つけてきてゐるてふてふ・草の葉の晴れててふてふ三つとなつて・こゝまで機械がうなつてゐる梅雨空・うらから仔蟹もはうてくる　　　山の情死者を悼む四句・青葉につゝまれてふたりで死んでゐる　骨だけとなり梅雨晴るゝ山　夏木立ふたりで死んで腐つてゐた・夏山ひそかにも死んでいつたか南無阿弥陀仏

必然に、そして自然に、私は私の弟の死態を思ひうかべた。……

七月一日

今朝はまたずゐぶん早かつた、御飯ができお汁ができてもまだ夜が明けなかつた。もう七月である、時間といふものは不可思議なものである。敬治君に教へられて、大根の芽を噛み切る夜盗虫なるものを退治してやつた。夾竹桃は情熱の女だ、枇杷は野人だ（赤い夾竹桃と小粒の枇杷）、敬坊、うれしいなあ、しづかだなあ。晴、曇、雨。昨日、裏山で発見された死人は抱合心中だつたさうな、男が八十、女が四十、夫婦だか親子だか解らないさうだ、先月、小郡の木賃宿に泊つて、それから行方不明だつたさうである、とにかく八十の高齢にしてなほかつ縊死しなければならなかつた事情の深さを考へずにはゐられない、老の涙！　その涙は辛かつたらう！蕗を煮る、いい香気だ、青紫蘇のにほひもいい。樹明君を学校に訪ねて、胡瓜と玉葱とを貰うて戻る。先日、伊佐町で知り合ひになつた禅海坊がひよつこりと訪ねてきた、此度は泊らないで対談二時間ばかりで帰つていつた、行乞米一升ばかりくれた、私は財布の底をはたいて五銭あげた。夕の白い風を身心に感じた。敬治君が戻つてくる、樹明君が酒と下物とを持参し

た、やつぱり酒はうまい、二君がそれ／″＼帰つた後で、自分で自分の酔態を笑つたことである。近来、酒に弱くなつた、酔ひやすくなつた、それがホントウだらう。

・雑草に風がある夜明けの水をくむ・蛙が鳴きつつ蛇に呑まれてしまつた・日照雨、ぴよんぴよん赤蛙・あすは来るといふ雨の蕗を煮てをく（澄太さんに）・てふてふなかよく花がなんぼでも・てふてふとんで筍みつけた・晴れわたり蓮の葉のあたらしい色　青葉へ錫杖の音を見送る（禅海坊に）・あるきまはつてふたゝびこゝへ桐の花（改作再録）

七月二日

眼がさめたら夜明けらしいのですぐ起きる、酔うてそのまま寝てゐたのでさん／″＼蚊にくはれてゐる。裏山をあるく、青草に寝ころんで雲をながめる。伊東さんがやつてくる、飯を炊いていつしよに食べる、まもなく国森さんがやつてくる、大村さんもやつてくる、とう／＼焼酎を買うてみんなでちび／＼と飲む、とかくするうちに日も傾いたので、伊東さんを送つて駅まで行く、同時に大山さんを迎へるつもり。大山さんと清水さんとはちやんと庵にきてすはつてゐられた。焼酎と油揚餅と梅酢との中毒で私は七顛八倒しなければならなかつた、大村さんが医者へ走る、樹明君が介抱する、お客さんが自分で賄をする、主客も何もあつたものぢやなくなつてしまつた。私は腹の痛みで呻きつゞけた、しかし皆さんのおかげで、悪運強くして死なゝかつた。とにかく意味ふかい一夜ではあつた。

・朝焼あほげばぶらさがつてきた簑虫・草の青さに青い蛙がひつそり

庵にも赤い花が咲いてゐる――と誰かゞいつた。

七月三日

昨夜おそくまで看病してくれた大村君と樹明君とが朝から見舞に来て下さつた、ありがたい。大山さんと清水さんとは十二時に山口へ立たれた、お土産を頂戴したゞけで何のお構ひも出来なかつた、まことにすまない。終日臥床、何年ぶりの服薬だらう、こんなに苦しんだこ

とは近来にないことだ。ぞんぶんに吐瀉したので、身心清浄になつたやうに感じる、そして飲食物に対して恬淡になつたやうにも感じる。雨がふつた、ふつた、どしやぶりだつた。

・みんな去んでしまへば水音

七月四日

午前は曇、午後は晴。今朝も樹明君が見舞つてくれた。水音を聴きつゝ臥床、食慾減じて心気安らかなり。からりと晴れた夕空、はじめてみん／＼蝉が鳴いた。よろ／＼と庵のまはりをあるく、雑草のうつくしさがあたらしく身にしみる。……

・あんなが来てくれる大根もふとうなつてゐる（緑平老に）・腹がいたいみんみん蝉・夕焼しづかな糸瓜に棚をこしらへる・死にそこなつた、こうろぎがもうないてゐる

七月五日

徹夜読書、腹が空つたので、大山さん持参のうどんを茹でゝ食べる、やさしくてうまかつた。朝風に病床を払ふ、そして洗濯、掃除、草取、等々。街へ出かけて買物、それから入浴、どうやらいつもの私になつた。外へ出ると、ことに田の草取を見ると、炎天だと思ふ。筍もをはりらしい三本をぬく（うち一本は隣地のを失敬！）ぬいて、すぐむいで、ゆつくり味ふ。帰宅途上、樹明君来庵、折よく御飯が出来たばかりで、しかも君の最大好物雲丹（これも大山さんのお土産の一つ）があつたので、夕飯をあげる、何とそのうまさうなたべぶり！夜はおそくまで蚊帳の中で読書、極楽浄土はこゝにあり！

・明ける水音のする枯木焚きつける　朝の蚊のするどくてあれもこれも・庵にも赤い花が咲いてゐる日ざかり・見おくるかげの、雑草の暮れてゆく・人去れば青葉とつぷり暮れた・かさりこそりと音させて鳴かぬ虫がきた・これでをはりのけさの筍をぬく二本・さつと夜の雨が青葉たゝいていつた・ぬくよりむぐより筍のお汁が煮えた・ゆふべはうれて枇杷の実のおちるしめやかさも・とほく郭公のなき何かこひしい　　　樹明君に二句・いつもたづねてくれるころの夕風がでた・ぬくめしに雲丹をぬり向きあつてゐる　　　追加三句・そんなことも

あつたやうな夾竹桃の赤さで・旅は何となく草餅見ればたべたくなつてたべ・よばれる草餅の香もふるさとにちかく

七月六日

さすがに昨夜はよく眠られて、今朝はすこし寝すごした、でも五時半頃だつたらう。手作りの初茄子一つもいできて味噌汁の実にする、とてもうまかつた、珍重々々。心さわやかに身こゝろよし。冬村君の仕事場を久しぶりに訪ねる、針金を貰ひ、らつきようの漬け方を習ふ。私は老いてます／＼健やかである、論より証拠、若い時よりも今頃の方が筋肉が肥えてゐる（無論かたぶとりだ）、それは果して幸か不幸か、喜ぶべきか悲しむべきかを私は知らない、私としては、私は生きられるだけは生きやう、生きてゐるかぎり、その日その日を十分に生きよう、言葉をかへていへば、今日を今日として私の力の全き今日たらしめる外ない。先日の吐瀉以来、私の胃は小さくなつたやうだ、食気が薄くなつた、とにかくそれだけ私の身心は安らかになつたのである。ひとりで、じだらくにして、粗衣粗食してをれば、周囲がしづかで、すゞしくて、のんきでゆつたりしてくる。

其中一人にしてまた万人なり。酒の酔心地、これこそ冷暖自知の境。▵句は武器でなくて玩具だ、まさに持つべき玩具だ。活きるとは味ふことなり、味ふより外に活きることなし。▵夏はうれしや、プロの楽園、ルンペンの浄土、浴衣があれば蚊帳があればゆつくり暮らせる、ハダカで暮らせ、身も心も、君も僕も。夕方あんまり所在ないから、新町まで出かけて焼酎一杯、ついでに酢も一合求める、それから椹野河原へいつて宵待草を一株ひきぬいてきて庵の前に植ゑる、句も二つ拾つた、樹明君から雑草も借りた、いや御苦労々々々。夜おそくまで蚊帳の中で読んだり考へたり、なか／＼寝つかれなかつた。
――▵句作道程の段階（感動をうたふこと、それが詩であるとして）

説く――述べる――写す――描く――表現する。のべる（叙景の叙であり、抒情の抒である、のべることがゑがくこととなる）、境地、風格、一家を成す、堂奥に入る。――

今日は近来にない濫作駄作だつた、これではまるで俳句製造者だ、警戒々々、自重々々、駄作千句よりも佳作一句だ。

咲いておもたく白さ赤さのもつれてはゆれ・朝蝉やよいたよりうけとつて出かける・朝ぐもりの落ちる葉にてふてふ・炎天へ枯れさうもない草のむしられても・かぼちやおほきく咲いてひらいておばあさんの顔　（対句――おぢいさんも山ゆきすがたの高声でゆく）
今日の冬村君に一句・だまつて考へない金網を織りつづける・畑いつか田になつた稲のそよいでゐる・まだかきをきをかきをえてゐない腹のいたみをおさへ　梅雨ぐもり、見たことのある顔がくる　花草にしやがんだ女で銭のやりとり・青田のまんなかを新国道はまつすぐな旗立てて・ひえ／″＼とからだをのばし蛇もうごかない・庭も畑も草のしげりゆく草

七月七日

何だか不安な一夜だつた、そして朝飯の仕度はすつかり出来たのにまだ夜が明けない、また蚊帳にはいつてとろ／＼まどろんだ。――鋳銭司まで出かける、今月最初の行乞であるが、何分にも睡眠不足と※気とで苦しくてしようがない、それをこらへて二時間だけやつと行乞、それでも今日一日の生命を保つには十分すぎるほど戴いた。往きは涼しかつたが、返りはとても暑かつた、道ばたの木槿が咲いてゐた。行乞は身心晴朗でなければならない、足もかろく気もかろくなければならない、そしておちつきがなければならない、すなほさがなければならない。暑さは植物にもこたえる、山東菜が芽ぶいたことは芽ふいたが、春のやうに成長しない。雷電、雷鳴、これで梅雨もあがるのだらう、今日から盛夏。夕立が晴れて、やりきれなくて街へ出かける、わざ／＼出かけてやうやく一杯だ、だがその一杯は百杯万杯に値する、ほんにわたしは酒好きで、酒好きは酒飲む外ない！酒一杯ひつかけて、そして、花と句とをひらうてもどつた。樹明君から、キヤベツとキユウリとを送つてきた、明日のために、明日は緑平来、そして白船来の日である。しづかな、ほんとうにしづかなゆふべであつた。△いのちのよろこびはしづけさ、しめやかさにあると思ふ。今宵は十五夜である、月がうつくしかつた、昼寝したゝめに、そして多少興奮してゐるために、いつまでもねむれなかつた。今日も私は俳句屋だつた（午前は乞食坊主だつたが）。

・楊桃は枝ながら実家のおみやげに・これで昼飯にしよう青田風・

日ざかりのきりぎりすは鳴きかはし・橋の日かげへ女ばかりのボートで　うらみちは夏草が通れなくしたまんま・もどるより水を火を今日の米をたき・黴だらけの身のまはりをあらうてはあらふ・田草とるしたしさもわかいめをとで・まへもうしろも耕やす声の青葉　いなびかり畑うつ音のいそがしく・かみなりうつりゆく山のふかみどり　夕立たうとして草は木は蝶もとばない・雨はれた若竹にとんぼが来てゐる・雨のいろの草から草へてふてふ・暮れきらない空は蜘蛛のいとなみ・街へ出かける夕立水のあふれてゐる・蓮田いつぱいの蓮の葉となつてゐる夕立晴・夕立晴の花をたづねてあるく　つきあたりはガソリンタンのうつくしいペンキの模様・夕立が洗つていつた月がまともで　寝て月を観る蚊帳の中から

何となく、不安、動揺、焦燥、憂欝——身心の変調を感じる、その徴候の一つとして連夜の不眠がある、また行乞の旅に出る外あるまい。清閑、自適、任運、孤高——さういふところへ私の心はうごいてきて、そしてその幾分かをあたへられてゐるのであるが、私はさらにうごいてゆかなければならない、うごきつゝある、うごかずにはゐられないのである。……

七月八日

晴、緑平老を迎へる日である、待つ身のつらさを味ふ。赤いシンパとして獄中にある河上肇博士の告白にうたれた。

辿りつき振り返り見れば山川を　　　越えては越えて来つるものかな（博士作）

炎天下の青田をいたはりそだてゝゐる農夫を眺めて、お百姓の心の尊さを痛感する。夕方の汽車で来てくれた緑平老を駅に迎へた、うれしかつた、酒を二本頂戴する。樹明来、鶏肉を持参。夜、冬村来、蝮蛇に咬まれたといふので、みんな騒いださうであるが、私はうまいうれしい酒にすつかり酔ひつぶれてちつとも知らなかつた。ふと眼がさめる、あたりを見まはすと、明けはなつた部屋の蚊帳の中に、緑平老とならんで寝てゐる！　ありがたかつた。

・炎天のましたをアスフアルトしく・胡瓜の手と手と握りあつた炎

天

七月九日

晴、晴れるにきまつてゐる、晴れなければならないのだ！早朝、白船老が来てくれた。やがて樹明君、つゞいて黎々火君来庵。清談、閑談、俳談、其中庵空前の——敢て絶後とはいひきらない——賑やかさ喜ばしさであつた。折角、来庵してくれたのに、何のお愛想もできない、たゞ雑草風景を鑑賞してもらつた、雑草の自由美は庵の特色でもあり自慢でもある。緑白二老は一時の汽車で、黎々火君は四時の汽車で、そして樹明君は学校へ、——みんながそれ／″＼の家庭へ帰つていつた、私はとてもやりきれないので、萩地方行乞の旅へと山口まで出かけたが、宿の都合がわるくて（湯田で三軒、山口で三軒断られた）、ムシヤクシヤしたので、温泉に浸つて、水を飲んで、※パンをかぢりながら帰庵した、まことに遠い散歩ではあつたが、月の一すぢみちはまことによかつた。

・朝ははだしで、何やら咲いてゐる・梅雨空うなる機械へ人間があつまつてくる　朝空の夾竹桃は赤いかな・土運ぶ手が本をひろげて昼やすみ・ここにも夏花の赤さはある・螢もいつぴき　水音の三人の朝である　　　　□・わかれたままの草鞋をはく・わかれてきた道がまつすぐ・さびしさはここまできてもきりぎりす・みんないんでしまつた炎天　あるけばこゝろなぐさむやいぬころ草・石に腰かけあほぐや青葉・山の青さ湯のわく町で泊らうとする・月かげながうひいて戻つてきた・月の障子のあかるさで寝る　このままでかへるほかない草螢草の花ほんに月がよか　緑平ほんによか昭和八年七月九日　山頭火

七月十日

快晴、朝の冷やかさは新秋のやうだつた、日中はまさに真夏。今日は朝、昼、晩の三度とももぎたての茄子を食べた、うまい／＼。昼寝は長すぎたが、連日のつかれをすつかり解消した。午後、街へ出かけた、焼杉下駄を買ふ、二十一銭、これで二ヶ月は大丈夫だ、冬村君の仕事場へ寄る、弟さんだけしかゐない、蝮蛇疵は大したことがないとのこと、それは結構、安心する、さらに樹明君を学校に訪ねる、元気いつぱい、うれしいことだ。幸福な夕——昨日のおかげで、酒はある

し、下物もあるし、身心は安らかだし。——ふと眼がさめたら、月が寝床をのぞいてゐた、よくねむつ一夜。

　ばつたり風がなくなつて蝉の声　すこし風が出てきて青蛙なく・あんなところに網を張り蜘蛛のやすけさは・あすは雨らしい空をいたゞく

第13章
行乞記　08 大田(新字旧仮名)

七月十四日

ずゐぶん早く起きて仕度をしたけれど、あれこれと手間取つて七時出立、小郡の街はづれから行乞しはじめる。大田への道は山にそうてまがり水にそうてまがる、分け入る気分があつてよい、心もかろく身もかろく歩いた。行乞はまことにむつかしい、自から省みて疚しくない境地へはなか／＼達せない、三輪空寂はその理想だけれど、せめて乞食根性を脱したい、今日の行乞相は悪くなかつたけれど、第六感が無意識にはたらくので嫌になる。暑かつた、くら／＼して眼がくらむやうだつた。林の中でお辨当を食べる、山苺がデザートだ。水を飲んだ、淡として水の如し、さういふ水を飲んだ、さういふ心境にはなれないが。蕨といふ地名はおもしろい。予定通り、二時には敬治居の客となつた、敬坊は早退して待つてゐてくれた、さつそく風呂を頂戴する、何よりの御馳走だつた、そして酒、これは御馳走といふよりも生命の糧だ。敬坊はよい夫、よい父となりつゝある、それが最もうれしかつた、人間は落ちつかなければ人間を解し得ない、人間を解し得なければ人間の生活はない。おはぎ餅はおいしかつた、餅そのものもおいしかつたが、それを食べる気持、それを食べさせてくれる気持がとてもおいしかつた。生活の打開と共に句境も打開される、私も此頃多少の進展を持つたらしい。暑くて、腹がくちくて寝苦しかつた。

銭　二十一銭今日の所得　　　行程五里。
米　一升二合

朝月暈をきてゐる今日は逢へる　朝風へ蝉の子見えなくなつた　朝月にしたしく水車ならべてふむ・水が米つく青葉ふかくもアンテナ　夾竹桃赤く女はみごもつてゐた　合歓の花おもひでが夢のやう

に・柳があつて柳屋といふ涼しい風　汗はしたゝる鉄鉢をさゝげ　見まはせば山苺の三つ四つはあり・鉄鉢の暑さをいたゞく・蜩よ、私は私の寝床を持つてゐる

　　七月十五日

　曇、降りさうで降らない、すこし憂欝。八時から十一時まで大田町行乞。

　所得――銭四十四銭に米一升三合

　午後は東御嶽観音様へ詣でる、青葉、水音、蝉がなき鶯がなく、とてもしづかな山村だつた、そこから赤郷へ河鹿聴きに出かけたが、暑くはあるし、興味もうすらいだので途中から引き返す、往復三里の散歩だ。山の茶屋には筧の水があふれて、ところてんが澄んでゐた。敬治居はなか／＼にぎやかである、坊ちやんが時々あばれる、繋がれた仔犬もあばれる、小さいお嬢さんがなかなか茶目公だ。敬坊は綾木へ出張、私は一人でちび／＼やつた。水のうまさ、豆腐のうまさ、これは自慢するだけの値打がある。暮れきつてから、敬坊がＭといふ友人といつしよに、だいぶ酔うて戻つてきた、三人でまた飲んだ。ほどよく酔うて、ぐつすり眠つた。

　　朝ぐもりもう石屋の鑿が鳴りだした　朝風につるまうとする犬はくゝられてゐる・草も蛙も青々としてひつそり・山は青葉の、青葉の奥の鐘が鳴る・蝉しぐれこゝもかしこも水が米つく　ながれをさかのぼりきて南無観世音菩薩・山からあふれる水の底にはところてん　御馳走すつかりこしらへて待つ蜩・寝ころぶや雑草は涼しい風・道筋はおまつりの水うつてあるかなかな　うらは蜩の、なんとよい風呂かげん　おかへりがおそい油蝉なく　かなかな、かなかな、おまつりの夜があける

　　七月十六日

　かなかな、かなかな、みんみん、みんみん。朝風はよかつた、朝飯はうまかつた。河原朝顔の一輪が私をすつかり楽天的にした。とめられたけれど七時出発、友情のありがたさ、人間性のよさをひし／＼と感じながら。今日の道はよい、といふよりも好きな道だつた、山村の

景趣を満喫した、青葉もうつくしいし、水音はむろんよかつた、虫の声もうれしいし、時々啼いてくれるほとゝぎすはありがたかつた。木部行乞、十一時から一時まで二時間。歩くために歩く、歩いて歩くことそのことを楽しむ。荒瀧山、ちよつとよい山だ。けふのおべんたうはおいしかつた、敬治君の奥さんにあつくお礼を申上げなければならない。けふぐらゐ水をたくさん飲んだことはあまりない、まことにうまい水だつた、山の水は尊し。米が重かつた、腰が痛むほどだつた、しかしこの米のおかげで暫らく休養することができるのだ。小野を通つて帰庵したら六時を過ぎてゐた、戻るより水を汲み火を熾し飯を炊いた、もちろん寝酒は買うて戻ることを忘れてゐない。

銭　四十三銭今日の所得　行程七里
米　一升六合

　此度の敬治居訪問はほんとうによかつた、敬治君にもよりよく触れたし、奥さんのよいところよくないところも解つた、敬坊万歳、どなたも幸福であれ。この旅中に私の不注意を実証する出来事が三つあつた、敬治居で眼鏡をこわしたことが一つ、途上辨当行李をなくしたことが一つ、そしてあとの一つは帰庵して、すこし酔うて茶碗を割つたことである、こゝに記して自己省察の鍵とする。

　　けふも暑からう草の葉のそよがうともしないかなかな・山をまへに昼虫の石に腰かける・山ほとゝぎす解けないものがある・おのが影のまつすぐなるを踏んでゆく・炎天の影の濃くして鉄鉢も・石に腰かけて今日のおべんたう　遠雷すふるさとのこひしく・水音の青葉のいちにち歩いてきた・けふいちにちの汗をながすや蜩のなくながれ・雷鳴が追つかけてくる山を越える・日照雨ふる旅の法衣がしめるほどの・かげは松風のうまい水がふき

　ぢつとしてゐることは——暑中閑坐は望ましくないこともないが——それは、今の私には、生活上で、また精神的にも許されない。一衣一鉢、へう／＼として炎天下を歩きまはるのである。

　・山の鴉はけふも朝からないてゐる・手紙焼き捨てるをお湯が沸いた・風の枯木をひらふては一人

戻るなり、水を汲み胡瓜を切り御飯を炊く、いやはや忙しいことである、独居は好きだけれど寂しくないこともない、たゞ酒があつて慰めてくれる、南無日本酒如来である。

水と酒と句（草本塔に題す）　　　　——（山頭火第二句集自序）——

私は酒が好きなやうに水が好きである。これまでの私の句は酒（悪酒でないまでも良酒ではなかつた）のやうであつた、これからの私の句は水（れいろうとしてあふれなくてもせんせんとしてながれるほどの）のやうであらう、やうでありたい。この句集が私の生活と句境とを打開してくれることを信じてゐる、淡として水の如し、私はそこへ歩みつゝあると思ふ。

・何か落ちたる音もしめやかな朝風　　追加二句・なんとうつくしい日照雨ふるトマトの肌で・夾竹桃さいて彼女はみごもつてゐる

七月十七日

夢のない眠り、千金にも値する快眠だつた。毎日暑いことである、夕立がきさうでこない、ばら／＼と日照雨。街へ買物にちよつと出たが汗でびつしよりになつた、石油十銭、醤油七銭、眼鏡四十五銭、……酒まではまはらない。茄子胡瓜、胡瓜茄子ばかり食べてゐる。野菊（嫁菜の花）が咲きはじめた、トマトも色づいてきた。らつきよう一升十銭、その手入で午後はつぶれた。夕は早くから蚊帳の中、待つてゐたが樹明君はやつてこなかつた。今夜は十七夜、宮島祭だつたらう。

・ころ／＼ころげてまあるい虫・つながれて吠えるばかりの仔犬の暑さ・朝からはだかで蝉よとんぼよ・夕立つや蝉のなきしきる　夕立つや逃げまどふ蝶が草のなか

七月十八日

朝ぐもり、蝉しぐれ、身心なごやかなり。胡瓜の味噌煮、茄子の浅漬うまし。緑平老から涙ぐましいほど温かい手紙がくる、さつそくビール代や新聞代の借銭を払ふ、荷が軽くなつて吻とする。入浴、身心のび／＼とする。夕立が沛然とやつてきた、よい雨だつた、よろこ

んだのは草木ばかりぢやない、虫も人もよろこんだ。夕方、樹明君が御馳走を持つてきた、酒と鑵詰と、――たのしく飲んで、酔うて、寝てしまう。

・朝風のいちばん大きい胡瓜をもぐ・肥をやる菜葉そよ／＼そよぐなり・朝はすゞしく菜葉くふ虫もつるんで・朝の水はつらつとしていもりの子がおよいでゐる・日ざかり黄ろい蝶・山のあなたへお日様見送つて御飯にする・寝るには早すぎるかすかにかなかな・夕凪あまりにしづかなり豚のうめくさへ・遠くから街あかりの、ねむくなつてねる

七月十九日

酒はよいかな、とてもよい眠りだつた、そしてよい眼覚めだつた。兎肉とキヤベツと玉葱と胡瓜。△犬ころ草がやたらにはびこる、その穂花が犬ころのやうな感じで好きな草だ、其中庵の三雑草として、冬から春はぺん／＼草、春から夏は犬ころ草、秋はお彼岸花をあげなければなるまい、そのほかに、草苺、青萱、車前草、蒲公英。毎日、茄子胡瓜でもあるまいから、そしてちやうど駄目になる燠があつたから、これでをはりの蕗を採つて来て佃煮にした、蕗のほろにがさには日本的老心といつたやうな味がある。

・朝風の青草食みつつ馬は尾をふる・日影ゆるゝは藪ふかく人のゐて・炎天の機械がうごく人がうごく（アスフアルトプラント）　□　ひらいてゆれてゐる鬼百合のほこり・朝からはだかで雑草の花　糸瓜さいて垣からのぞく　殺された蚊でぞんぶんに血を吸うた蚊で・風が吹きとほすまへもうしろも青葉

七月廿日　土用入。

快い朝明けだつたが、洋燈のホヤをこわして不快になつた、ホヤそのものはヒビがはいつてゐたぐらいだからちつとも惜しくはないけれども、それをこわすやうな自分を好かないのである、もつとくはしくいへば、こわす意志なくして物をこわすやうな、不注意な、落着のない心持が嫌なのである。夏草にまじつて、こゝそこに咲きみだれてゐる鬼百合はまつたく炎天の花といひたい矜持をかゞやかしてゐる。露

草がぽつちりと咲いてゐる、これはまたしほらしい。晩飯はうどんですました、澄太さんのおみやげ。ヒビのいつたホヤだつたけれどこわれて困つた、新らしいホヤを買ふ銭がない、詮方なしに今夜は燈火なしで闇中思索だつた！何とつゝましい私の近来の生活だらう。夜が明けて起き、日が暮れて寝る、朝食六時、十二時昼食、夕食六時、すべてが正確で平静である。

※酒に関する覚書（一）酒は目的意識的に飲んではならない、酔は自然発生的でなければならない。酔ふことは飲むことの結果であるが、いひかへれば、飲むことは酔ふことの源因であるが、酔ふことが飲むことの目的であつてはならない。何物をも酒に代へて悔いることのない人が酒徒である。求むるところなくして酒に遊ぶ、これを酒仙といふ。悠然として山を観る、悠然として酒を味ふ、悠然として生死を明らめるのである。

七月廿一日

早く眼はさめたけれど、あたりが明るくなつてから起きた、燈火がないのだから、くらがりでは御飯の仕度も出来ないといふ訳で。朝ぐもり、日中はさぞ暑からう。此頃は夜よりも昼を、ことに朝が好きになつた。郵便を待つ、新聞を待つ、それから、誰か来さうなものだと待つ、樹明君はたしかに今晩来るだらうと待つてゐる。郵便局へ出かけたついでに、冬村君の仕事場に立ち寄る、君はもう快くなつて金網機をセツセと織つてゐる、よかつた／＼。とかげの木のぼりを初めて見た、蟻の敏活にさらに驚かされた、黒蜂（？　蜂蠅といつてもよからう）はまことにうるさい。ひとりこそ／＼茄子を焼く、ほころびを縫ふ糸がなかなか針の穴に通らない、――人の知らない老境だ。青い風、涼しい風、吹きぬける風。四時すぎ、案の如く樹明君がやつてきてくれた、そして驚くべき悲報をもたらした。――緑石君の変死！　私は最初どうしても信じられなかつた、そして腹が立つてきた、そして悲痛のおもひがこみあげてきた。緑石君はまだ見ぬ友のなかでは最も親しい最も好きな友であつた、一度来訪してもらふ約束もあつたし、一度往訪する心組でもあつた。それがすべて空になつてしまつた。海に溺れて死んだ緑石、――私はいつまでもねむれなかつた。樹明君とビールを飲みながら緑石君の事を話し合つた、どんなに惜しん

でも惜しみきれない緑石君である、あゝ。樹明君が帰つてから、ひとりでくらやみで、あれやこれやといつまでも考へてゐた、……寝苦しかつた。人生は笑へない喜劇か、笑へる悲劇か、泣笑の悲喜劇であるやうだ。

※酒に関する覚書（二）酒中逍遙、時間を絶し空間を超える。飲まずにはゐられない酒はしば／＼飲んではならない酒であり、飲みたくない酒でもある、飲まなければならない酒はよくない酒である。飲みたい酒、それはわるくない。味ふ酒、よいかな、よいかな。酒好きと酒飲みとの別をはつきりさせる要がある。酒好きで、しかも酒飲みは不幸な幸福人だ。　　※酒に関する覚書（三）酒は酒嚢に盛れ、酒盃は小さいほど可。独酌三杯、天地洞然として天地なし。さしつ、さされつ、お前が酔へば私が踊る。酒屋へ三里、求める苦しみが与へられる歓び。酒飲みは酒飲めよ、——酒好きに酒を与へよ。飲むほどに酔ふ、それが酒を味ふ境涯である。

・かどは食べものやで酒もある夾竹桃・夜風ふけて笑ふ声を持つてくる　　悼　緑石二句　波のうねりを影がおよぐよ　夜蝉がぢいと暗い空　　追加数句・日ざかりのながれで洗ふは旅のふんどし・いろ／＼の事が考へられる螢とぶ・なんといつてもわたしはあなたが好きな螢

七月廿二日

昼も暑く夜も暑かつた、今日も我儘ながら休養。仕事をする人々——田草取り、行商人、等々——に対して、まことにすまないと思ふ。朝、手紙を二通書いて出す、一つは句稿を封入して白船老へ、一つは緑石君の遺族へお悔状。途上、運よく出逢つた屑屋さんを引張つてきて新聞紙を売る、代金弐十弐銭也、さつそく買物をする、——ホヤ八銭、タバコ六銭、シヨウチユウ四銭、そして入浴して、まだ一銭余つてゐる！南無新聞紙菩薩、帰命頂礼。けふも漬茄子、やつぱりうまい、青紫蘇の香は何ともいへない。夜は寝苦しかつた。盆踊の稽古らしい音がきこえる、それは農村のヂヤズだ、老弱男女、みんないつしよに踊れ、踊れ。

・炎天の水のまう蛇のうね／＼ひかる　炎天の下にして悶えつゝ死

ぬる蛇・伸びて蔓草のとりつくものがない炎天　晴れわたり青いひかりのとんぼとあるく　いちにち黒蜂が羽ばたく音にとぢこもる　すこし白んできた空から青柿　青葉ふみわけてきてこの水のいろ・蚊帳をふきまくる風の暮れると観てゐる・すつかり暮れた障子をしめて寝る・よるの青葉をぬけてきこえる声はジヤズ・きりぎりすも更けたらしい風が出た・なんぼたゝいてもあけてやらないぞ灯取虫・落ちたは柿か寝苦しい夜や・死ぬる声の蝉の夜風が吹きだした・あちらで鳴くよりこちらでも鳴く夜の雨蛙　　　　□・空のふかさは木が茂り蜘蛛の網張るゆふべ・とんぼつるんで風のある空　　　追加・あの山こえて雷鳴が私もこえる

七月廿三日

昨夜も寝苦しかつた、それは暑いためばかりではなかつた。せつかくよう出来てゐた茄子に虫がついて、しだいに弱つてきた、どんな手当をしてよいか解らないので、灰をふりかけてやつた。味噌も醤油もなくなつてしまつた、むろん銭はない、今日は蕗、紫蘇、らつきよう、梅干、唐辛、焼塩、——そんなものばかり食べた、何といつてもまだ米があるから、そして塩だけはあるから有難い、飯ばかりの飯、いや空気を食べてさへすましたこともあるのだから。もろ／＼の虫、いろ／＼の草、さても其中庵はにぎやかである。禅海さんからハガキが来たが、私製ハガキの規定通りになつてゐないものだから、不足税を三銭徴収された、やつと五厘銅貨で納めたが。くもり、ばら／＼雨、トマトのいつくしい色を食べる（じつさいうれたトマトの肌はうつくしい）。

・糸瓜やうやく花つけてくれた朝ぐもり　をのれにひそむや藪蚊にくんだりあはれんだりして・蝉時雨もう枯れる草がある・昼しづかな焼茄子も焼けたにほひ・けふまでは生きてきたへそをなでつつ・はひまはつた虫は見つけた穴にはいつた・へちまよ空へのぼらうとする

七月廿四日

ようねむれた、行乞すべく早う起きたが、ばら／＼降つて風模様なので見合せる。一円ばかり欲しいな、と思ふと同時に、蝉の声はよいな、とも思ふ。天地うるほひあり、といつたやうな感じ。自然荘厳

——自然浄土である。△梅干のうまさよ、ありがたさよ。いつもは雀が稀なのに（雀の緑平老に不平をおこさせたほど）今日はたくさん雀がきてゐる、十羽、二十羽、三十羽、まさか風がふくからでもなからう。午後、樹明君来庵、魚と焼酎とをおごつてくれる、ツマは畑から、トマト、胡瓜、蓮芋、紫蘇、とても豊富である、そして飯の代りとしてウドン、たらふく飲んで食べて酔ふた、あぶない／＼。風が強い、吹きとばされさうだつた、樹明君を途中まで送つて、それから局まで行つてハガキを投函、そしてフラ／＼しながら戻る、戻つて茶を沸かし飯を食べる、なか／＼酔が醒めない、ハダカで寝る、アブラムシに笑はれた。

・郵便屋さんはがきと蠅とをいていつた・うまくのがれた蠅めが花にとまつてゐる・風ふく身のまはりおほぜい雀がきてあそぶ・どちらへあるいてもいぬころぐさの花・いぬころぐさいぬころぐさと風ふく・ほろりとひかつて草の露・風の風車の水車水をくみあげる・風のなかおとしたものをさがしてゐる・風のなか買へるだけの酒買うてきた

七月廿五日

すてきに早起して、佐波川沿岸地方を行乞すべく、湯田まで出かけたが、とう／＼降りだしたので、そして止みさうもないので、残念ながら引き返した（それでも一時間あまり途中行乞することは忘れなかつた、それほど事情が切迫してゐたからでもあるし、また、それほど乞食根性に慣らされてゐるからでもある、といつてよからう！）。よい雨、明るい雨であつた（方々で雨乞をやつてゐたくらゐだから）、まことに慈雨であり喜雨であつた。また何か事件があつたと見えて、今朝は柳井津橋のほとりで張込の刑事に誰何された、若い、人のよい刑事だつた、私が「二三日行脚してこうと思ふのです」といつたら、「それはよい、おいでなさい」とほがらかにいつてくれた。合羽をきたので暑かつた、この合羽もずゐぶん古いものだ。新国道の空をもう精霊蜻蛉が飛びまはつてゐた。

今日の所得　　米　六合　　　銭　九銭　　　外に句、十三。

帰庵したのは一時すぎ、法衣をぬぐなり、水をくんで飯を炊く、ひ

とりもののノンキないそがしさである。△童心――句心――老心といふことについて考へる。山のしづけさ、山のさびしさ。蝉のうれしさ、蚋のにくさ、ことに血に飢えた藪蚊は。よい事ばかりはない、よい事をよくない事がうらづける、それが浮世といふものだ。昼蚊帳を吊つて休養した、あんまり年寄くさいけれど。あたりまへの事が好きになつた、平凡のうちに見出される味が本当のものだと思ふ、昔は二二ヶ四でないことを祈つたが、今は二二ヶ四であることを願ふ。

・けふも暑からう蓮の花咲ききつた・ここも空家で糸瓜の花か・風が落ちて雨となつた茄子や胡瓜や・夕立晴れた道はアスファルトの澄んだ空・大橋小橋も新らしい国道一直線・やつぱりお留守でのうぜんかづら　青柳おしわけいたゞくや一銭銅貨・しんじつよい雨がふるいちじくの実も・よい雨の、草や小供やみんな濡れ・雑草のよろこびの雨にぬれてゆく・死ねない杖の二本があちこち・はたらいてきて水のむ・蘇鉄の芽も昔ながらの家である・自動車が通つてしまへば群とんぼ・むしあつい雨だれの虫がはうてでる・血がほとばしる、わたしのうつくしい血・草から追はれて雨のてふてふどこへゆく・雨が洗つていつたトマトちぎつては食べ・いつも見て通る夾竹桃のなんぼでも咲いて・せつせと田草とる大きな睾丸・けふも夕立てる花のうたれざま・ぬれてなく蝉よもう晴れる・向日葵や日ざかりの機械休ませてある（追加）

七月廿六日

昨夜はずゐぶん降つた、今日も時々降つた、これで水も十分だらう、草にも人にも喜色が見える。天候も定らないし、法衣も乾かないので休養読書。トマトを食べる、トマトのうまさがすこし解つたやうに思ふ。何となく倦怠を覚える（そのくせ食慾はちつとも減じないどころか、ありすぎるほどある、五合の飯をペロリと平らげる）、入浴したら、だいぶ気持がすが／＼しくなつた（湯銭が五厘不足とは笑はせる）。向日葵が咲いてゐる、驕れる姿だ、どことなく成金臭があるけれど嫌いではない。△酒と句、この二つは私を今日まで生かしてくれたものである、若し酒がなかつたならば私はすでに自殺してしまつたであらう、そして若し句がなかつたならば、たとへ自殺しなかつても、私は痴呆となつてゐたであらう、まことに、まことに、南無酒菩

薩であり、南無句如来である。遊歩悠々、行乞は遊歩三昧でなければならないと思ふ、いつも行乞する場合、さう思ふのである。夜の雨はしめやかだつた、財布はいよ／＼ないふだつたが！

・すつかり好きになつたトマトうつくしくうれてくる・地べたはいあるく児のまつぱだかなり・警察署の裏はきたない水へ夾竹桃・灯れば青葉のしたしい隣がある・夕立晴れたる草や木や話声がするゆふべ　　追憶一句・ほうけすゝきのいつまでも秋ふかし・よべの雨の水音となつて明けはなれた　子にせがまれて蝉はいつもの柿の木に（樹明君、敬坊に与ふ）　雨の日ねもす藪蚊とたゝかふ　　（・風の日ねもす萱の穂の散りくる）　あぶら蝉やたらに人が恋ひしうて・雨ふる裏田ははだかで草とる・子のことは忘れられない雲の峰　黒い蝶白い蝶夏草はしげる

七月廿七日

まだ降つてゐる、まるで梅雨のやうだ、これではもう水は十分すぎるだらう、そして水を呪ふだらう、エゴイスト人間！昨夜から今朝は涼しい、子の夢を見た、それは埒もない夢だつたが、そこにはやつぱり親としての私の心があらはれてゐた、捨てゝも捨てゝも捨てきれないもの、忘れようとしても忘れることの出来ないもの、――そこに人間的なものがある、といへないこともあるまい、人間山頭火！△与へられるものは与へなければならない、与へるよろこびが与へられるよろこびでなければならない。いぬころ草のさかりがすぎてつゆ草の季節となつた。何しろ藪蚊が多いので昼も蚊帳を吊つて読書、坊主の言草ぢやないが、内は極楽、外地獄、まことに麻布一重であります。雨、その雨を利用して中耕施肥。今日午後、はじめて、つく／＼法師の声。樹明来、お土産は例の如し、鰺はうまいし焼酎もわるくない、酔ひつぶれて宵から熟睡。

・なか／＼暮れないきりぎりすかな・夕蝉のなくことも逢ひたいばつかり

七月廿八日

ねた、ねた、とてもようねた。オミキ！　昨夜の残りの焼酎一杯！

今日からまた行乞の旅へ出る、歩け、歩け、たゞ歩け、歩くことが一切を解決してくれる。……

△七月のはじめに、――　　葉の青さに青蛙ひつそり△七月のをはりに、――　　草も蛙もあを／＼としてひつそり△自然の推敲改作とでもいはうか。　　酒飲めば谷の枯木も仏なり（連句）（芭蕉）

┌こんな一句がたしかにあつたと思ふ。┘酒好きに痴人は多いが悪人は少ない。　七月廿九日　　　　　　　　『行乞記』　七月三十日

第14章
行乞記　09 山口(新字旧仮名)

七月廿八日

六時すぎ出立、道はアスフアルトの一路坦々。朝風が法衣の袖にはらんで涼しい。九時から山口市の裏通行乞二時間。鈴木の奥さんに御挨拶する、思ひがけなくお布施を頂戴して恐縮した。野田神社、豊栄神社へ参拝、境内は掃目もあざやかに蝉しぐれのなごやかさ。山口県庁の建物はおちついてゐて好きだつた、背景の山のすがたも気にいつた。サベリヨ記念碑を観た。寺内文庫で新聞を読みながら休む。二時から六時まで、宮野仁保を行乞して仁保上郷の河内屋といふ安宿へ泊つた、山村のしづかな家でうれしかつた、行程五里。

木賃　三十銭。夕飯（鯖の煮付、茄子の煮込、沢庵漬）　朝食（味噌汁、煮豆、沢庵漬）所得（銭三十銭、米三升）

今夜はお布施のおかげで、日本酒三合いたゞく。△途上、鮮人の一家族に心を惹かれた、世帯道具を背負うて移動する道中らしい、蒲団、飯釜、行李、子供、そして弱者劣敗者である彼等は私にまで挨拶した、私は彼等に対して好感よりも哀感を持つた。或る農家で、おかみさんが皿に米をいつぱい盛つてくれた、くれやうが多すぎるから何かあるなと思つてゐたら、果してさうだつた、小さい子に鉄鉢をいたゞかせてくれといふ、消災呪を唱へてあげた、此頃は鉄鉢をさゝげてあるく坊主も稀だし、また子供が頭剃を嫌はない禁厭として鉄鉢をいたゞかせてくれといふ事も稀である。△今日はめづらしくコヤトといふ方言を聞いた、コヤトは餓鬼とおなじく、子供に対する親愛と軽蔑とを意味する言葉である、ホイトといふ方言のやうにおもしろいと思ふ。

・生きのびて蔦のからんだ門のうち　炎天の地べたへ人間をゑがく・水に水草びつしり・ぼろきてすずしい一人があるく・蝉しぐれあふれるとなくあふれてゐる水・ここが国ざかひで涼しい風　山かげの夕凪の魚がはねるさゞなみ・ながい豆も峠茶屋のかなかな　河鹿にはおそかつた蜩の安宿で　枕がひくうて水音がたえない一夜　たつた一軒家の白木槿咲いてゐる・水瓜はごろりと日ざかりの畑　　（乞食坊主の頭陀のおもさよ）　水音のかなかなの明けてくる・窓は朝蜘蛛のうごかない山がせまり　ながれ、寝苦しかつた汗をながす・みんなたつしやでかぼちやのはなも・こどもばかりでつくつくぼうし・家あれば水が米つく・どこまでついてくるぞ鉄鉢の蠅・家がとぎれると水音の山百合　煙が山から人間がをる　仲よく朝の山の草刈る・いたゞきのはだかとなつた・こゝからふるさとの山となる青葉　山奥の田草とる一人には鶯　人にあはない山のてふてふ

七月廿九日

曇、六時から行乞、ずゐぶん暑い、流れに汗を洗ふ、山がちかく蝉がつよく、片隅の幸福とでもいふべきものを味ふ。今日の道はよかつた、山百合、もう女郎花が咲いてゐる、にい／＼蝉、老鶯、水音がたえない、佐波川はなつかしかつた。あの無限者のうちへはおいでなさい、なか／＼の善根家で、たくさんくれますよと教へて下さつた深切な人もあつた。河鹿がそこらでかすかに鳴いてくれてゐた。労れて、四時すぎには小古祖の宿屋で特に木賃で泊めて貰つた、おばあさん一人のきれい好きで、まことによい宿だつた。同宿四人、みんな愚劣な人ばかりだつた（現代の悪弊だけを持つて天真を失つてゐる）。

今日の所得は銭二十銭と米四升。行程七里。河野屋の木賃は三十銭。夕食（ちくわ一皿、ぢやがいも一皿、沢庵漬）うるかをよばれた。朝食（味噌汁、漬物）

宿の前にある水は自慢の水だけあつてうまかつた、つめたすぎないで、何ともいへない味はひがあつた、むろん二度も三度も腹いつぱい飲んだ。△どこへいつても、どんなをんなでも（一部の老人と田草取とをのぞけば）アツパツパを着てゐる、簡単服、家庭服として悪くはないが、どうぞヅロース一番せられよ（天声子の語を借る）。

・楮にこんにやくが青葉に青葉　ふるさとのながれや河鹿また鳴いてくれる・ふるさとの水をのみ水をあび・長い橋それをわたればふるさとの街で・おばあさんはひとりものでつんばくろ四羽・つゆのつゆくさのはなひらく・水音のよいここでけふは早泊り　炎天、蟻が大きな獲物をはこぶ・炎天の鴉の啼きさわぐなり　石にとまつて蝉よ鳴くか・山の青さへつくりざかやの店が閉めてある・そこから青田のほんによい湯加減・おそい飯たべてゐる夕月が出た・暮れてまだ働らいてゐる夕月　ぐつすり寝て覚めて青い山　よい寝覚のよい水音　炎天のした蚯蚓はのたうちまはるばかり・ことわられたが青楓の大きな日かげ・けふはプラタナスの広い葉かげで昼寝　岩水に口づけて腹いつぱいのすずしさ・ふるさとのながれにそうて去るや炎天・逢ひたいが逢へない伯母の家が青葉がくれ・ふるさとは暑苦しい墓だけは残つてゐる・ふるさとや尾花いちめんそよいではゐれど　笹にもたれて河原朝顔の咲いてゆらいで・はるかに夕立雲がふるさとの空

七月三十日

よくねむれた、つばめが朝早くから子に餌をもつてきてやつてゐる、これはおばあさんの孫みたいなものだらう。堀行乞、七時から九時まで、そして島地行乞、十時から十二時まで。花尾八幡宮の社殿で昼休み二時間。途中、現世利益の御祈祷を頼まれたが婉曲に断る、そんな事は私の柄にない事だから！岩の間から雫する水はよいな。嶋地の人々に幸あれ。佐波川にそうて下り、岸見の飯田屋といふのに泊つた、こゝも悪くない宿だつた、殊に一室一人、一燈一人はうれしかつた、お客さんは私一人だから。

行程五里、所得は米四升二合、銭卅七銭。

禁を破つて、昼二杯、夕二杯、とてもうまい酒だつた。

夕飯（茄子、さゝげ豆、胡瓜膾、沢庵漬）朝食（味噌汁、沢庵漬）木賃　三十銭

・まうへに陽がある道ながし・おもひでは暑い河原の石をふみ

七月三十一日

沿道を行乞しながら一時舟橋通過、四時大道到着、もう歩きつゞけ

る元気もなくなつて汽車に乗る、四辻も束の間、すぐ小郡だ、やれ／＼戻つてきました。イリコ五十目十五銭、ミヨウガ三十ばかり二銭、サケ三合二十四銭が今日の途中の買物だつた。右田岳のよさを見直した、河原には朝顔、撫子、月草、そして萢萱も。今日はプチブル婆、プチブル爺に対して腹が立つた、そして乞食の負惜を体験した。田舎の子沢山を見て憤慨する、何故彼等は birth-control しないのか！

行乞が私に与へた恩恵―、何でもおいしく食べられる―、ほとんど腹が立たないやうになつた

飯のうまさ、水のうまさ（モチ酒のうまさも）、食べるもの飲むもののうまさは行乞してからほんとうに解つた。徒歩禅は断じて徒労禅ではなかつた。歩々清風である。

今日の所得は銭十八銭、米四升一合。

七月三十一日

さすがに汽車は早い、有難い、五時にはもう其中庵主として夕食の仕度にいそがしかつた、胡瓜、茗荷、トマト、そしてイリコ、それで一杯ひつかけて寝た、手足をぞんぶんに伸ばして。トマトはほんとうにうまい。戻つて来て、何の変化もない、蜘蛛が網を張り、油虫が這ふだけ！梭二さん贈るところの松笠風鈴はうれしかつた。

・山頭火には其中庵がよい雑草の花・糸瓜伸びたいだけのぼつたりさがつたりして花つけた・風はうらから風鈴の音もつゝましく・仏前しづかに蝶々きてとまる・もどつてきたぞ赤蛙・ひえ／″＼として夜明ける風鈴のなる・なにかつかみたい糸瓜の蔓で朝の風ふく・草のすゞしさは雀もきてあそぶ

八月一日

ねた、ねた、ねた、ほんとうによくねた、牛のやうにねた。くもり、あるけばあついが、ぢつとしてをればすゞしい。なんと松笠風鈴の音のよろしさ、其中庵はあたらしく一つの声を与へられて、ひとしほ閑寂のおもむきを増した。新秋清涼の気がどことなくたゞようてゐる。買物いろ／＼、――酢、醤油、石油、煙草、端書――行乞四日間の所得はすつかり無くなつてしまつた。樹明君往訪（学校に）、大村

君来訪（午後半日）。近代野蛮人といふ語の意義ふかきをおもふ。

句集自序の一節として私の句はまだ／＼水つぽいけれど、へたなカクテルのいやなあくどさはないと信じてゐる。……　（描く句、述べる句、うたふ句）　（説く句、叫ぶ句、呟く句）

八月二日

朝風のこゝろよさ、風鈴もしめやかな音色。夕立時雨でめつきり涼しくなつた、風がふいて蚊もすくなかつた。▵歌でも句でも、詩は自然景象を通して生活感情がにじみ出てゐなければならない、いひかへれば自然が自己とならなければならないのである。今日は誰も来なかつた、誰をも訪ねなかつた、ものいふことはなかつた、郵便と新聞とが来たゞけ。胡瓜、胡瓜、茄子、茄子だつた、そして炭がなく薪もなくなつたので、まことに苦心さんたんであつた。

・ころころころげてまんまるい虫のたすかつた・とまるより鳴き、鳴きやめるより去つた夕蝉・降つたり照つたりちよろ／＼するとかげの子・まづしい火をふく粉炭がはねた・それはそれとして火を焚きつける　　戯作三首（或る友に）・風鈴の音のよろしさや訪ねてくれるといふ・風鈴のしきりに鳴るよ訪ねてくれる日の・訪ねてくれて青紫蘇の香や飲ましてくれる

八月三日

けさは早かつた、近在行乞しなければならなかつたから、――しかしお天気があぶないのでしようことなしに中止、硯貝掘りにでも行きたかつたがそれも中止しなければならなかつた。雨模様の時化模様、土用としては変に涼しい。朝、樹明君が実習生四五人連れてくる、庵の周囲はあんまり草ぶかいので刈つてくれようといふのである、監督は神保さん、何しろ生徒さんたちだから、そこらをわがまゝに刈り取つて帰つていつた、下手な理髪のあとのいがぐりあたまのやうにして！　私もところ／″＼の草を取つた、たまさかお化粧した田舎娘の顔のやうにまだら／＼だ！風が雨をよんで強くなつた、柿の青葉が吹きちぎられて飛ぶ、風鈴がやけに鳴る、障子をあけてはゐられないほどだつた、――秋近しと肉体が感じた。伊東さんに手紙をあげた、逢ひ

たいな、一杯やりたいな。風を観てゐると、ひようびようたるおもひにうたれる、風よ汝はいづこより来り、いづこに去るや、と昔の詩人は嘆じたが、私も風を、風そのものをうたいたいと思ふ。

・いぬころ草もほうけてきたまた旅に出よう・赤い花が白い花が散つては咲いては土用空・夕焼ふかい蜘蛛の囲でさけぶ蝉あはれ　暮れると風が出た月の出を蚊帳の中から・あすの水くんでをく棗はまだ青い夕空・何はなくとも手づくりのトマトしたゝる・ほつと眼がさめ鳴く声は夜蝉・身のまはりは雑草つぎ／＼に咲いて・風の子供はかけまはる風

八月四日

雨もやみ風もおちた、どうやらお天気になるらしい、庵の周囲は何だか荒涼としてゐる、草刈草取の跡そのまゝ。野菜畑手入、晴れるとさすがに暑い、蚊や蚋がすぐ襲撃する。胡瓜はもうをはりに近い、茄子はまだ／＼盛り、トマトはボツ／＼ふとつてうれる、ハスイモ、シソ、トウガラシはいよ／＼元気だ、大根はいつもしなびてげつそりしてゐる、……しようがもおなじく。野菜はうまい、そのほんとうのうまさはもぎたてにある。五厘銅貨でやつとなでしこ小袋を手に入れることができた。けふは敬坊帰省の日、きつと寄つてくれると、行乞もやめにして待つてゐた、待つて、待つて、待つたあげくは待ちぼけで寝た、――と呼び起す人がある、敬坊だ、お客がきてやつてこられなかつたといふ、酒、酒、よい酒だつた。△よう寝た、何もかも忘れて寝た、捨てるまへに忘れろ、いや、忘れることは捨てることだ。

きのふの蝉がまだ蜘蛛の囲に時化の朝ぐもり・胡瓜の皮をむぐそれからそれと考へつゝ・夏草ふかい水底の朝空から汲みあげる　またもいつぴき水におぼれて死んだ虫・朝ぐもり触れると死んだふりする虫で　風ふく鴉のしわがれて啼く　ほろりと糸瓜の花落ちた雨ふる・蛙をさなく青い葉のまんなかに・こんなに降つても吹いても鳴きつゞける蝉の一念・風がさわがしく蝉はいそがしく・風がふくふく髯でも剃らう・ついてきた蠅の二ひきはめをとかい・街からつかれてお米と蠅ともらつてもどつた（追加）・竹になりきつた竹の青い空・雑草すゞしい虫のうまれてうごく・きのふもけふも茄子と胡瓜と夏ふか

し・月がぽつかり柿の葉のむかうから・のぼる月のあかるい蚊帳に寝てゐて・蚊帳へまともな月かげも誰かきさうな　家ぬち明るすぎる夜蟬のするどくて・まうへに月を感じつゝ寝る

八月五日

五日ぶりの酒はこたえた、といふ訳で寝すごした、六時のサイレンが鳴つてから御飯、むろん、昨夜の残酒はそのまゝにしておかなかつた。朝はよいな、ことにけさはよいな。曇、日傭人夫が困ることも事実だ、私もその仲間の一人！醤油も煙草も、そして出さなければならない端書もないので、学校に樹明君を往訪して五十銭玉一つを強奪した、そしてその残金でＫに立寄つて氷を一杯たべた、Ｋへは五月ぶり、氷は今年最初のそれだつた。とにかく、けふはなんとなく愉快だ、ダンスでもやるか！午後、樹明来、そして敬坊来、酒は豊富、下物も豊富（野菜ばかりだが）、生ビールさへあつた、みんなほどよく酔うて、樹明君は九時頃帰宅、敬坊はとう／＼泊つた。

・ききようかるかやことしの秋は寝床がある・日が暮れて夜が明けてそして乞ひはじめる（行乞）・風が吹きぬける風鈴と私・いちぢくにからまつたへちまの花で　人を待つこれから露草の花ざかり・何もしないで濡タオルいちまいのすゞしさよ・死んだまねして蜘蛛はうごかない炎天・青葉がくれの、あれは Ichifuji の灯

八月六日

曇、朝の仕度をしてゐるうちに晴れてくる。昨夜の残物（むろん酒もある）を平げる、あゝ朝酒のうまさ、このうまさが解らなければ、酒好きは徹してゐない、敬君、樹明君どうです？敬君は何も食べないで県庁へ出張。木炭を持つてきてくれないのにフンガイする、油虫の横暴にもフンガイする、フンガイしたところでどうにもならないけれど。朝蟬はよいな、敬坊いふ『こゝは極楽浄土だ』山は答へる、『さびしい浄土だ』樹明君来庵、なが／＼と寝た、私はなるだけ昼寝をしないやうにしてゐる、それでなくても夜中寝覚勝だから。もう早稲田には穂が出てゐる。敬坊なか／＼戻つて来ない、二人でぢり／＼する、二人だけで物足りない夕飯を食べて、敬坊の家の方へ散歩する、樹明君は敬君往訪、私は帰庵、水を汲んだり汚れ物を洗つたりしてゐ

ると、果して敬坊来車、酒を持つて、間もなく樹明も来車、茹鯖を下げて。月がよい、昨夜もよかつたが今夜は一層よい、月あり酒あり、友あり寝床あり。……二人をよい月へ見送つて、よい月へごろりと寝る。

・鳴るは風鈴、この山里も住みなれて・伸びあがつて炎天の花・はぶさう葉をとぢてゐる満月のひかり・すずしい月へふたりを見おくる・子のことも考へないではない雲の峰がくづれた・灯して親しいお隣がある（改作）・親子でかついでたなばたの竹・風は裏藪から笠と法衣と錫杖と・暑い土のぽろ／＼こぼれるをくだる・葉かげふかくうもれてゐる実があつた・据えた石もおちついてくる山をうしろに・炎天の枯木よう折れる・真昼を煮えてゐるものに蝉しぐれ・このうまさは山の奥からもらつてきた米・風鈴の音のたえずして蝉のなくことも

八月七日

すこし飲みすぎですこし朝寝、しかし天地明朗である、夏の日を感じる。今日は七夕、当地の河原はたいへん賑ふといふ、郵便局へ出かけたが、街は青竹のうつくしさで埋められてゐる、晩には煙火見物に出かけるかな。夫婦で棚機竹をかついだり、家内惣動員で色紙飾紙を竹にとりつけてゐる、七夕祭は女性的だが、たしかに東洋的な日本らしい情調を帯びてゐる。うつくしいかな、なつかしいかな、大和撫子、常夏の花。いぬころ草を活けて、これもをはりのよさを味ふ。糸瓜がちいさくぶらりとさがつてきた。巡査来、戸籍調べらしい、飛行機来、一句くれていつた、冀くは今夜も敬坊来、樹明来、南無アルコール大明神来！茄子がうまかつた、漬菜がほんとうにうまかつた。街の七夕夜景を見物して歩いた、提灯のほかげはまつたくうつくしい、親しみふかい日本美観である、なまじ近代風を加味したのはかへつて面白くない、それから河原へ行つた、たいへんな人出だ、果物店、氷店の羅列である、久しぶりに夜店風景を満喫した。月がよかつた、風も涼しかつた、煙火のポン／＼もうれしかつた。人形芝居の催しがあつた、やたらに人形が動く、どこらそこらで蛙が鳴いてゐた。街の人ごみの中で、今日来庵した巡査が私を見つけて、訊き忘れた生年月日を訊いた、さすがに職掌柄、私をよく覚えてゐて、そして私を見つけだしたものだ。△句に遊ぶ、私は天地逍遥遊の境地に入り込み

つゝある、それがよい、それがほんとうだ、自然にして必然な道だと思ふ。

・ひろげて涼しい地図の、あちこち歩いた線・はつきり見えて炎天の飛行機がまうへ・こんなに出来てくれて青紫蘇や青唐辛・つくつくぼうしあすから旅立つ私で・糸瓜ぶらりと地べたへとゞいた・かなかなのほそみちおりるはをとこにをなご・雑草ふかくほうづきのうれてゐる夕風・更けて戻れば風鈴は鳴つてゐる　よい月夜、月の夜の蛇にも咬まれたが（冬村君に）・どこでも歩かう月がのぼる・街はお祭提灯の、人のゆく方へゆく・今が人も出さかりの、山をはなれた月・月へ花火の星があがつた　朝空ふか／″＼と雲のちぎれ／＼・法衣もすゝきもほうけて戻つた（追加）

八月八日

有明月夜、秋吉——八代——仙崎方面へ行乞と出かける。　八月九日　八月十日　八月十一日　　　　　　　『行乞記』　八月十二日　八月十三日　八月十四日

第15章
行乞記　10 仙崎(新字旧仮名)

八月八日

五時半出立、はつらつとして歩いてゐたら、犬がとびだしてきて吠えたてた、あまりしつこいので※杖で一撃をくれてやつた、吠える犬はほんとうに臆病だつた。水声、蝉声、山色こまやかなり、大田へはいつてゆく道はやつぱりよろしい。十時には秋吉に着いて行乞、さらに近在行乞、財布（ナイフとルビをふるべし）を忘れてきてゐる。夕立がやつてきた、折よく観音堂で昼寝。もう萩が咲いてゐる。新屋といふ安宿に泊る、愛嬌のない、井戸もない宿だつた、相客はいかけやさん、料理人、前者はおしやべり、どこか抜けたところがある、後者は生来の世間師、いらないものがある。水は正直ですよ、といつていかけやさんが修繕したバケツに水を入れて覗いてゐる。さすがに秋吉附近は大理石の産地、道ばたの石ころも白い光沢を持つてゐる。

旅立つ今朝の、蝉に小便かけられた　朝月のある方へ草鞋はかろし・あぶない橋の朝風をわたり山の仕事へ　笹に色紙は七夕の天の川・そこは涼しい峠茶屋を馬も知つてゐる・夕立晴れた草の中からおはぐろとんぼ・昼寝覚めてどちらを見ても山・おのが影をまへに暑い道をいそぐ　暮れると水音がある暗い宿で・月夜の音させる牛も睡れないらしく・旅はいつしか秋めく山に霧のかゝるさへ・霧ふかく山奥は電線はつづく・ゆふべの鳥が三羽となつて啼いてゐる・山のまろさは蜩がなき・蜩のうつくりなくに田草とる　かなかなもなきやんだ晩飯にしよう

行程五里、行乞四時間。今日の所得は　銭弐十六銭、米弐升八合。木賃は三十銭　（等級は中の下）。お菜は野菜づくし

八月九日

朝曇、涼しかつた、七時出立。山の奥へ奥へと分け入つてゆく、霧がたちこめてゐる、時鳥がなく、途上ところ／″＼行乞。売られてゆく豚のうめき、水蜜桃の供養、笑顔うつくしい石仏。どこでも土用干の着物が色とり／″＼、私は何を干さうか、支那の何とかいふ奇人のまねではないが、破れ法衣に老いぼれ身心でも干さうよ、いや現に干しつゝあるではないか。彼のよしあし、それはやがて私のよしあしだつた、行乞の意義はこゝにもある。嘉万の街を行乞してゐるところへ伊東さんが自転車でやつてきた、今夜は八代でゆつくりとよい酒を飲む約束で、此地方へ出かけてきたのだが、万事都合好く運びつゝある（君は醤油味噌醸造の講師として出張したのである）、山のまろさ酒のうまさ人のよさ！負子（朝鮮ではチゲ）は印象ふかく眺められる。八代の共同作業所へ着いたのは五時過ぎだつた、そして意外にも樹明君が後を追うて来た、小郡から自転車で二時間半で飛んだのである。生一本、此地方でいはゆる引抜はよかつた、Ｎ家の酒はよい酒である、そのよい酒の最もよい酒だ、酔うて蚊帳もつらずに寝たのはあたりまへだらう。私の好きな山がかさなつてゐる、私の好きな友だちといつしよである、酒はひきぬき、風はすゞしい、あゝ極楽、極楽。……

今日の行程八里。今日の所得銭五十七銭、米三升六合。

・近道の近道があるをみなへし・こゝから下りとなる石仏・山の朝風の木が折れてゐる・ほんにうまい水がある注連張つてある・どうやら道をまちがへたらしい牛の糞・住めば住まれる筧の水はあふれる
近道近かつた石地蔵尊　うらは蓮田で若いめをとで・はだかではだかの子にたたかれてゐる・波音のガソリンタンクの夕日・一切れ一銭といふ水瓜したたる

八月十日

朝の山を眺めながら朝酒を味はつた、樹明君は夜明けに起きるなり自転車を飛ばせていつた。七時すぎてから地下足袋を穿く、ほろ酔のうれしさである。峠は近道（いひかへれば旧道）を歩いた、道連れとして面白い人物が待つてゐた、彼は酒好きの左官、女房に死なれて焼

糞になつてゐるが、近く後妻を貰ふつもり、どうでせうかと訊く、是非お貰ひなさい、それが最も賢明な策ですと勧説して別れた。三隅へ二里、十時頃に着いた、さつそく行乞をはじめる、今日はどういふものか気分がすぐれない、手当り次第に何でもぶちこわしたいほどいら／＼してゐる、かういふ場合の行乞はとても苦しい、自他共に傷づく行為である、しかし私は無理にも行乞しなければならないのだ、私は銭が欲しいのだ、不義理な借金をいくらかづゝでも払はなければならないのだ。——仙崎まで三里の間、行乞しつゞけた、中途で橋の下の草の上で昼寝などして。投げてくれた一銭銅貨は投げかへしてやつた。田舎饅頭、五銭で六つはうまかつた。若い飴売鮮人と話し合うた。こぢれた気分がすこしづゝほぐれた、こだはるな／＼、水のながれるやうであれ。仙崎の宿はよかつた、設備（部屋も夜具も便所も湯殿も井戸も）待遇（その大半はおかみさんのサービス如何にある）共によかつた、木賃料は一昨夜の宿とおなじく三十銭だが、その倍の値打はある、相客三人、屋号は寺田屋。

今日の所得（銭六十四銭、米二升二合）晩のおかず（さしみ、茄子、焼海老）

夜は近所のお寺の夜店を見物した、観音祭らしい。桟橋の涼風が身心をさはやかにしてくれた。昨日は山の青さ、今日は海の青さ、明日はまた山の青さを鑑賞することができる。

朝月残る木槿が咲いてゐるながれ　島へ渡しの、氷や菜葉や郵便や・氷屋ができて夾竹桃の赤や白や・落ちてきて米つく音の水がながれる・近道のいちはやく山萩の花・水は岩からお盆のそうめん冷やしてある　　行乞雑感（一）

八月十一日

晴、暑かつたが気持は軽かつた、仙崎町行乞、そして滞在、新相客は伊佐で同宿の老遍路。

行乞雑感（二）

八月十二日

明けてゆく海の色はうつくしかつた。六時出発、深川町を行乞しは

じめたら大夕立がきた、そして地雨らしく降りつゞける、馴染の川本屋へとびこむ、こゝの主人公――押入聟さん――は私の放浪時代に度々同宿して打解けた飲友達だ、久振に一杯やらうといふので一升買つた、酔うて唄うて踊つて――誰も彼もいつしよになつて――近来の大散財なり。前後不覚になつて、どうして寝床にはいつたやら、いつ寝たやら、一切合切不明なり、しかも些の不都合なし、善哉々々。

今日の所得（銭七十九銭、米二升一合）今日の買物　一、五銭　キセル　一、三銭　シヤモジ　一、四銭　ハシ　一、弐十四銭　サケ

八月十三日

からりと晴れてゐる、身心もさつぱりしてゐる、今日は昨日の分まで行乞しなければならない。午前中深川町行乞、巡査がきていろんな事をたづねる、要領よく応対。湯本へ出て、安宿で昼寝、それから湯町を行乞してゐるとまた巡査がやつてきた、何のかのとうるさい、近く澄宮殿下が萩市に行啓なさるので、彼等は神経過敏になつてゐるらしい、あんまりうるさいから峠を越えて於福まで歩き、朝日屋といふのへ泊つた、母子二人のしめやかさ、なか／＼よい宿だつた、木賃二十五銭は安すぎる、気の毒な事には娘さんが病んでゐる、肺結核らしい、とても助かるまい。

今日の行程は四里。所得は銭八十一銭、米一升七合。

八月十四日

山村の朝は何ともいへないすが／＼しさだ。今日は樹明居往訪を約してゐる、樹明君も待つてくれてゐるだらうか、同行の敬治君も待ちあぐんでゐるだらう。急テンポで於福行乞、途中また堅田行乞、急いで帰庵したが、五時を過ぎてゐた、置手紙二つ、一つは樹明君が待つてゐるといふ、他は敬治君が待ちあぐねたといふ。おそかつた、すまなかつた、くたびれた、がつかりした。……昼食として桃を食べた、おいしかつた、気附薬として焼酎半杯、これはむろんうまい。

×　×　×

行乞七日間、懸命に稼いで（私のやうな行乞はまつたく筋肉労働である）残つたものは、

銭が壱円四十銭あまり、米が三升ばかりだつた。

今日の所得（銭四十七銭、米一升六合）行程八里。

八月十四日

於福から八里歩いて戻つて、戻るなり樹明居へ押しかけて、お盆のお経をあげてお盆の御馳走になつた、たいへん酔うた、道がわからなくて樹明君に途中まで送つて貰つた。……樹明君ありがたう、敬治君すみませんでした、二時間も待たせて、そしてとう／＼いつしよに樹明居襲撃ができなくて。

改作・からりと晴れたる法衣で出かける　　追加二句　みんな寝てしまつてゐるポストのかげがはつきり　見おくるかげは見えない松むし鈴むし（樹明君に）

八月十五日

晴、宿酔ほがらかである、昨夜、最後の一片まで賞味した鮒のあらひのうまさがまだ残つてゐる！樹明来、敬坊不来。夜、樹明君といつしよに街へ、水哉居を襲うてビールを頂戴する。樹明君泊る。ガチヤガチヤ、ガチヤガチヤ、轡虫が鳴きはじめた。

きのふの酔がまだ残つてゐるつく／＼ぼうし・ま昼ふかうして鳴子鳴る・ゆふべの夏草をふみわける音がちかづく・日ざかりあるくはつるんだ虫で

八月十六日

朝風は秋風だ。方々から便りをもらつたりあげたり。買物いろ／＼、品多くして銭少し。出勤した樹明君が到来のビールをさげてまたやつてくる、敬坊が酒とかしわとを持つてくる。其中庵独得の酒宴がはじまる、うれしやめでたや。提灯がないので、暗くて蝮の危害を懼れて、樹明君即製の灯火をふりかざして帰つてゆく、昭和の討入よろしくといつた風態！私は酔うてぐつすりと寝た。

・いなびかり別れて遠い人をおもふ　こうろぎこうろぎ風鈴が鳴る

八月十七日

朝、敬坊来、それから樹明来、私が使者となつて酒と豆腐と味噌と焼魚とを仕入れて戻る、夕方まで三人でゆつくり飲む、樹明帰宅、敬坊と私とは街を散歩する、そして敬坊は泊つた。書物を食べる虫！
油虫が新刊歳事記の表紙を舐めて剥がしてしまつた。

　　　　追加・おべんとうをひらく雀も何やら食べてゐる・昼寝覚の夕立の水音が鳴りだした

八月十八日

昨夜は二人共安眠熟睡だつた。敬治君は朝飯も食べないで早々帰つていつた。△私は狷介だけれど、友には恵まれてゐる、それを何よりもありがたいと思ふ。△いつのまにやら、歯がぬけてゐる、歯がぬけるといふことは寂しい、自分でぬかないのにぬけてゐたといふことはより寂しい。昼寝、ぐう／＼ごろ／＼と眠りたいだけ眠つた、我儘すぎるかな。裸木の訃がまた新らしく胸をついた。

・一人となれば風鈴の鳴る　白い花たゞーりんの朝風のふく　とりとめもなく考へてゐる日照雨　　　改作一句・ちかく、あまりにちかくつく／＼ぼうし

八月十九日

晴々として門外不出。

八月二十日

早く起きたが、そして行乞するつもりだつたが、雨がふりだしたので安居。しめやかな雨、しめやかな心。先日来配達中止だつた新聞をまた配達して来てゐる、昨日は防長社の主人が来て、代金未払の歳事記を何とか彼とか口実をいつて取り戻していつた。来者不拒、去者不追、有つてもよし、無くてもわるくない。樹明君が何だかいら／＼してやつてきた、一応帰つてまたきた、酒と下物とを小者に持たせて。よい酒だつた、よい酔だつた、よいよいよいとなあ。——

・深夜の鏡にふか／″＼と映つてゐる顔　あれは青柿が落ちた夜の音

八月二十一日

草取、身辺整理。藪蚊と油虫とが癪に障る。早く晩飯をすまして、蚊帳の中で読書をしてゐるところへ樹明君が来て、井手逸郎さんの到着を知らしてくれる、私は駅前の宿屋まで出迎にいつたが、かけちがつて、逸郎さんはひとりでもう庵にきてゐられた。酒も下物もすべてを樹明君が負担してくれた、いつもすまないと思ふが、さう思ふだけでどうにもならない。三人で夜のふけるのも忘れて話しあつた、愉快な一夜だつた、送つて街へ出かける、まるし食堂でビールを飲んで別れる。樹明君はいつしよに戻つて泊つた。

・朝焼うつくしいとかげの木のぼり・泣く子泣かしておく青田風　　　述懐一句　がちや／＼がちや／＼生き残つてゐる

八月廿二日

晴、宿酔気分、焼酎一杯。逸郎さんから見事な葡萄を一籠貰つたので、冬村君、呂竹さんへお裾分する。△私の貧乏はよい貧乏だとしみ／″＼思ふ、裸木さんの貧乏だつたことを聞くにつけても。蛙の子がやたらにそこらあたりを飛びまはつてゐる。すつかり無くなつた、——米も薪も、無論、銭も！　明日はどうでもかうでも行乞しなければならない。夕方、学校の宿直室に樹明君を訪ねて暫らく話した、十一銭のお辨当を頂戴した、庵ほど御馳走のないところはないから、何を食べてもうまい。どうも飲みすぎる食べすぎる、禁酒絶食はとても出来ないが、せめて節酒節食したい、しなければならない。いかなる場合でもいかなる事物でも、過ぎたるは及ばざるに如かず、好物に対して殊に然り。

・あすのあさの水くんでおくかなかな　　　（追加）本妙寺・昇る陽を吸うてゐる南無妙法蓮華経・秋がきた朝風の土に播いてゐる・めつきり秋めいた風が法衣のほころび・何となく考へてゐる犬も私も草のうへ・夕立つや思ひつめてゐる・夕立が洗つていつた茄子をもぐ・夕立晴れたトマト畑に出て食べる・夕立晴るゝや夕焼くる草の葉・藁屋根はしづくする雑草はれ／″＼

八月廿三日

今朝はすつかり秋だつた。七時から嘉川在を行乞したが、何分にも

心臓がわるくて気分がすぐれない、無理に二時間ばかり家から家へと歩いて、今日明日食べるだけのお米を頂戴して帰庵した。曼珠沙華が一輪、路傍の叢に咲き出てゐた、折つて戻つて、机上に飾つてゐたら、油虫が食べてしまつた。▵死生から脱することは出来ないが、死生に囚はれないことは出来る、宗教的修行の意義はこゝにある。▵行乞してゐると、村の餓鬼君がホイトウホイトウといふ、いつぞや敬治居に泊つたとき、坊ちやんが、「おぢさんはホイトウかの」といつて私達を微苦笑させたが、ホイトウはおもしろいな！午後、夕立があつた、落雷もあつたらしい。

・青田おだやかな風が尾花のゆるゝほど・秋暑く何を考へてゐる・こゝにも家が建てられつゝ秋日和・何もかも虫干してある青田風

八月廿四日

秋、秋、秋寒く秋暑し、夜は秋にして昼は夏なり。気分すぐれず、身心の倦怠いかんともしがたし、行乞もやめて終日独居、ぼんやりして一句もなし。明日の糧は明日に任さう。

八月廿五日

曇、風模様、二百十日前後らしい天候。出勤途上、樹明君が立ち寄つて暫らく話す。晴れてきた、おだやかなお天気となつた。気分はすぐれないけれど、もう食べるものがなくなつたから、しようことなしに近在行乞、やうやく米一杯半と句四つ戴いた。▵昨日の御飯が少しばかり残つてゐたので昼飯をすます、少々ベソをかいてゐる、お茶漬にして食べる、ルンペンを通つてきたおかげで、何でもおいしくして腹をいためない。▵これから水がうまくなる、と今朝樹明君と話しあつたことである、むろん、酒はいよ／＼ます／＼うまくなる。秋が来ると、私はいつも牧水の酒の歌をおもひださずにはゐられない。こんばんの御飯はほんとうにおいしかつた、からだのぐあいもだいぶよくなつたやうだ、気持がうかないのは一杯やらないからだらう（二十二日、二十三日、二十四日、二十五日と四日間飲まない、いや飲めない）、機械も人間も同様で、油がきれたのだ、誰か来て油をさしてくれる人はないか、などゝアル中患者の愚痴を一言書き添へて置く。昨日から待ちつゞけてゐる敬坊は今日も来なかつた、私は失望するより

も、何かあつたのではないかと心配する。▵行乞帰途、路傍に捨てゝあつた大根を拾うてきた、そして浅漬にして置いた、勿論、捨てゝあつたぐらゐだから牛の尻尾みたいな屑大根である、それでも私が作つたのよりもよく出来てゐる、私は不生産的な人間だから、せめて物を粗末にしないことによつて、それを少しでも償ひたいと努めてゐる、そしていつも物の冥加といふことを考へてゐる、生きてゐるよろこびを知るならば生かされてゐるありがたさを忘れてはならない。それにつけても、その大根を拾ひあげるとき、私は何だかきまりが悪かつた、禅坊主らしくもない羞恥感である、古徳先聖の勝躅を再思三考せよ（巻煙草の吸殻を拾ふ場合は別である、それは恥ぢなければならない、恥づべき享楽のあらはれだから）。▵ありがたさがもつたいなさとなるとき、その人の宗教的情操は高揚したといつていゝ、彼はもののいのちにぴつたり触れたのだ。

・まへもうしろもつく／＼ぼうしつく／＼ぼうし・胡瓜もをはりの一つで夕飯・こうろぎよあすの米だけはある・星がまたゝく山こえて踊大鼓の澄んでくる　改作二句追加・酔ざめの水くみに出て草月夜かな・家を持たない秋がふかうなるばかり・昼もしづかな蠅が蠅たゝきを知つてゐる・蠅たゝきを感じつゝ蠅が飛びまはる　追加（昨年の句を改作して）・雪ふりつもる法衣のおもくなりゆくを・朝の鐘の谷から谷へ澄みわたるなり　曇れば鴉鳴もかなしくて　夕鴉鳴きかはしてはさびしうする　追加・濡れて涼しく晴れて涼しく山越える・いつもひとりでながめる糸瓜ながうなる・秋空へ屋根葺きあげてゆく　はだかとなれば秋らしい風で・水くんであほぐや雲は秋のいろ

八月廿六日

朝晩のすがすがしさ、けさのさわやかさ、身心快適。つく／＼ぼうしがいらだゝしく鳴く、その声が迫りくるやうにこたえる。今日はどういふものか感傷的になつた、そして厭世的にさへなつた、私はセンチメンタリストではあつてもペシミストではない、しかし今日のやうな場合には、もし私が死ねる薬を持つてゐたならば死んだかも知れない。夢は悪夢だつた、恩愛の夢、執着の夢だつた、それは断ちがたい人間の絆であり軛であつた、人間としてあたりまへのものであつたけ

れど、私としては――かふいふ生活にはいりこんだ現在の私としては捨てなければならない夢だつた。

　・いつしよにくりやへとびこんだは蛙の子・ゆふざればトマト畑でトマトを味ふ・さびしうなつてトマトをもぐや澄んだ空・煙ひろがるゆふべの山はうごかない

　　八月廿七日

　晴朗、新秋清涼の気天地に満つ、身辺整理、心境平安、澄んで沈むのか、沈んで澄むのか、とにかく落ちついた。明日から福岡地方へ行乞に出かけるので、畑の手入をして置く、広島菜を一うね、時知らず大根を半うね播いて置く。トマトはうまいな、いつ食べても、――会心の作が二句できた。

　　　　油虫をうたふ二句・虫も食べる物がない本を食べたか・這うてきて虫がぢつと考へてゐる

　　八月廿八日

　晴、旱天、酔うて倒れこんできた樹明君はそのまゝにして出立。

　　八月廿九日　　　　　　　　『行乞記』　九月三日

第16章
行乞記　11 大田から下関(新字旧仮名)

八月廿八日

　星晴れの空はうつくしかつた、朝露の道がすが／＼しい、歩いてゐるうちに六時のサイレンが鳴つた、庵に放つたらかしいおいた樹明君はどうしたか知ら！駄菓子のお婆さんが、よびとめて駄菓子を下さつた。山口の農具展覧会行だらう、自転車と自動車とがひつきりなしにやつてくる。山のみどりのこまやかさ、蜩のしめやかさ。真長田村——湯ノ口近く——で、後からきた自動車がすつと止まる、そして洋服姿が出てきて、にこにこしながら近づく、敬君だ、まるで予期したやうな、約束したやうな邂逅だ、自動車に乗ることだけは断つて、今夜はゆつくり飲むことにする。湯ノ口行乞、伊佐へ左折しないでまつすぐ大田へ、夕立がやつてきた、濡れて歩く、あんまり降るから、とある農家に雨やどりして、そこの老人と世間話をする、誰もが話すやうに不景気々々々。十二時すぎにはもう敬治居にくつろぐことができた、敬君は御馳走こしらへにいそがしく、私は風呂水をくむ、奥さんも子供さんも留守だから、まるで其中庵の延長——物資の豊富はいはない——みたいなものだつた。うまい酒（一週間ぶりの酒だ）うまい飯（敬君炊ぐところの）を腹いつぱい詰め込んだ。大夕立、まことに大雨大雷だつた、これで二人の憂鬱は流れ去つてしまつた。敬君が跣足で尻端折で畠の草を取る、私は寝ころんで新聞を読む、ユカイ／＼。法衣の洗濯、一年ぶりの垢を洗つた、敬君に理髪して貰ふ、さつぱりした。夜はまた酒、敬君は腹痛で注射をしてもらつたりしたが、私はぐつすり寝ることができた。とにかくたのしい日であり夜であつた。

・みちは露草のつゝましい朝明け　さかのぼる水底の秋となつてゐる　小亀がういて秋暑い水をわたる　旅の法衣のはらへどもおちないほこり　つくり酒屋の柳いよ／＼青し・けふのおひるは草にすわつてトマトふたつ　昼寝のびやかだつたよ山とんぼ・山をまへに流れくる水へおしつこする・昼顔も私も濡れて涼しうなつた

行程五里、所得は十六銭と六合。

行乞について

八月廿九日

四時には二人とも起きた。敬君はまた草取、私は風呂焚だ。朝湯朝酒はゼイタクすぎるうれしさだつた（私共の酒量も減つたものである、二人で三度飲んで、やうやく一升罎が空になつたぐらゐである）。御飯を炊きすぎたといふので、敬君が大きなおむすびをこしらへてくれた。七時半出立、秋吉をへて伊佐へ。途上しば／＼休んだ、朝酒がこたえたのである。或る山寺で例のおむすびを味つた、親友の心持がしみ／″＼と骨身にしみた、その山寺の老房守さんもしんせつだつた、わざ／＼本堂の障子をあけはなつて、私を涼しく昼寝させて下さつた。午後二時から四時まで伊佐行乞。行程五里、所得はいつもの通り。この宿――豊後屋といふ――はやつぱりよかつた、同宿者のおしやべりには閉口したけれど、一室一燈一張のよろしさだつた、便所のきたないのはぜひもない。隣家のラヂオを蚊帳の中に寝ころんで聴く、三十三間堂柳の佐和利、泣くわ／＼。

・こゝで寝るとする草の実のこぼれる　よい娘さんがゐる村のデパートで・萩さいてそこからなんとうまい水・山寺のしづけさは青栗もおちたまゝ　おべんたうたべてゐるまうへつく／＼ぼうし・若竹伸びきつて涼し　地べたへべつたりはらばうた犬へ西日・旅のつかれもほつかりと夕月・蚊帳のなかまで月かげの旅にゐる　月が山の端に安宿のこうろぎ・旅も月夜の、おとなりのラヂオが泣いてゐる　　　敬治居出立・からりと晴れた法衣で出かける

八月三十日

寝すごした、それほどよく眠れたのである。朝のうちは伊佐行乞、

それから麦川へ、途中あまりだるいから村の鎮守の宮で昼寝、涼しい社殿だつたが、村の悪童共の集合所でもあつたので騒々しかつた、それでも二時間ぐらゐは寝たらう。おひるは報謝のお菓子二きれですます。二時から四時まで麦川行乞、西市へ越すつもりで山路にかゝつたが、平原といふところで宿を見つけたので泊つた、豊田屋、悪い宿ではなかつた。同宿の若い坑夫さんと山の観音様へ詣でた、一年一度のおせつたいがあるといふので、近村のおぢいさんおばあさんが孫を連れておほぜい詰めかけてゐた、山村風景のおもしろい一枚である。夕飯は、さしみと豆腐汁と煮豆と茄子漬、なかなかの御馳走だつた、ことに前は造酒屋だから、飲みすごしたのも無理はなからう！

・うらは山で墓が見えるかな／＼・かな／＼ゆふ飯がおそい山の宿・よい宿でどちらも山でまへは酒屋で・宵月がみんなの顔にはだかばかりで

行程二里、所得は銭六十二銭、米一升九合。

八月三十一日

早起して散歩した、同室者の人間臭にたへなかつたからである、人間の姿よりも山の姿がよろしい。踏みだした一歩がもう山路である、石ころを踏みしめてすゝむ、桃の木といふ部落には特殊な色彩と音響とがあつた、こゝが大嶺無煙炭山である、ここで採掘した炭塊を索道で麦川へ送るのである。西市へはかなり遠かつた、萩、女郎花、刈萱、白い花、赤い花が咲きみだれた道で、私の好きな道であつた。途中行乞しなかつたが、三里を三時間かゝつて、十時から十一時まで西市行乞、行乞相はよくなかつたが、所得はよかつた、私は西市に頭を下げなければならない。五時、田部の藤本屋といふ安宿に泊つた、よい意味で、また、わるい意味で、安宿の代表的なものであつた、この宿でも一室一燈一張の主人であることができた。

今日の所得（銭――九十六銭、米――二十二銭）今晩の御馳走（烏賊のさしみ、馬鈴薯の煮付、茄子漬瓜漬）

今日の行程（麦川から西市まで三里、多くは山路）　　　　　西市から田部まで二里、多くは平地。・朝の水音のかな／＼・はるかに

かな／＼の山の明けたいろ・岩ばしる水をわたれば観世音立たせたまふ・住めば住まれる掘立小屋も唐黍のうれてゐる・ひよつこり家が花がある峠まがれば　　大嶺炭坑索道・炭車が空を山のみどりからみどりへ　萩に萩さき山蟻のゆきき・坑口から出てきてつまぐりの咲いてゐる家・かるかや、そのなかのつりがねさう・あすは二百十日の鴉がたたかうてゐる・妻子に死なれ死を待つてゐる雑草の花・秋暑いをんなだが乳房もあらはに

九月壱日

晴、八朔、二百十日の厄日である、関東大震災十週年、何といふおだやかさ。七時から十時まで岡枝及び田部行乞、それから歩む、小月は行乞しないで、清末のところ／″＼を行乞する、疳癪がおきてしようがないから酒屋で一杯いたゞきたいといふたらお断り、カリウチは出来ませんといふ、それでは鉄鉢へ入れて貰ひましよう、酒の出したのがありません、といつたやうな問答、いよ／＼疳の虫がおさまらない、やつと或る酒屋で一杯ひつかけると、すぐおさまつた、まことに酒は疳の妙薬でありまする。ぶらりだらりと長府町へはいつて裏道を歩いてゐたら、ひよつこり黎々火君に出逢つた、偶然にしてはあまりに偶然すぎるが、訪ねてゆく途上で出逢ふたのはうれしい、さあ、ようこそと迎へられて、まず入浴、そして、つめたいうまい水を腹いつぱい飲むことは忘れなかつた。かういふ家庭の雰囲気にひたると、家庭といふものがうらやましくなる。……心づくしのかず／＼の御馳走になる。明月、涼風、籐椅子、レコード、物みなよろし。

行乞所見橋の名にもいろ／＼あるが。——夜長橋、月見橋、納涼橋などは風雅で、しかも嫌味がない、解り易くて要を得てゐる、日本の田舎の橋らしい名である。

・山桐のかたまつて実となつてゐる・この山里にも泊るところはあるかなかな・制札にとんぼとまつてゐる西日・こうろぎ、旅のからだをぽり／＼と掻く・日ざかりの石ころにとんぼがふたつ・なんとすずしい松かげに誰もゐない

行程四里。所得、銭五十三銭と米一升六合。

九月二日

今日も好晴。二人で朝の散歩。おひるはまたお酒をいたゞいた、行乞米を貰つて下さつてお布施を下さつた、襦袢の手入、浴衣の洗濯、そして褌まで頂戴した、黎々火さんはほんとうによい肉縁の人々を持つてゐる、お父さんの温情、お母さんの慈愛、あゝ羨ましい。二時お暇乞する、二人で下関へ出かけるのである、途中で沢田さんといふ方に招かれてちよつと話す、色紙に悪筆を揮ふ。電車で下関へ着いたのは四時頃、茶碗、シヤボン、本、小刀、インキ等を買ふ、そして本町の馴染の宿へいつて荷物を預け、浴衣に着換へて、日和山公園へ登つて下つて、地橙孫居を訪ねた。会談一時間ばかり、そこを出てから（結城孫三郎のあやつり人形見物はやめにして）やたらに歩きまはつた、ネオンサインのうつくしさ、デパートのさわがしさ、飲んだり食べたりのいそがしさ。十時頃、駅附近で西と東とに別れた、黎々火さんはあたゝかい家庭へ、私はうるさい安宿の二階へ。

黎々火居　琴がならべてある涼しい風・手入とゞいた松をはなれない月のあかるさ・月が風が何もない空・腹いつぱいの月が出てゐる　月から風が、籐椅子の酔心地・感じやすくて風の蘭竹のおちつかない旅　　関門海峡・灯に灯が、海峡の月冴えてくる

九月三日

明けても酔がさめない、湯にとびこむ、一杯ぐつとひつかける、そしてやつぱりこゝからひきかへすことにきめた、何となく身心が不調で気がすゝまない、海峡を渡るだけの元気が出てこない。歩けるだけ歩くつもりで歩く、赤間宮参拝、しみ／″＼としたものがあつた、句は一句もできなかつたが、しかしそれで十分だ。だん／＼と時化てきた、風が強く雨がふりだした、びつしより濡れたけれど、関門風景がよろしい。長府を通りすぎて、王司村を一時間ばかり行乞した、帰庵しても、米がない石油がない醤油がないから。小月は競馬で人出が多い、三時の汽車に乗る、嘉川着四時二十分（小郡下車だと六銭多くかゝる、私の倹約も必要からだが、ホンモノである）。途中、刈萱を摘んで帰庵したのは五時近かつた。

・しらなみ、ゆうゆうと汽船がとほる　波音の霽れてくるつく／＼

ぼうし

　　九月三日

　六時まへに帰庵、さつそく水をくみ、火を焚き夕餉の支度をする。トマトがすきてによくうれてゐた、すぐもいでたべる、うまい／＼。かるかやを活ける、よいかなかるかや。虫がなく、うちの虫がなく。風も何のその、手足をのび／＼と伸ばしてぐつすり寝た。

　　　　　とりとめもない言葉死は生の解決ではないけれど、それが休息であることは疑へない。生に清算はありえない、清算がありえないほど、かぎりなく伸びてゆくのが生である。生の決算！　それは死だ。生の破算！　それも死だ。

　　九月四日

　朝焼、曇、雨、厄日頃らしい天候。蒜の花はおもしろい、留守の間に咲いてゐた。樹明君がきてくれた、その憂欝な顔、私も憂欝だつた。秋、秋寒を感じる、蚊が少くなつた、夜は晴れて月がよかつた。

　・陽がとゞけば草のなかにてほほづきの赤さ・つく／＼ぼうしもせつなくないてなきやんだ　　　改作追加・秋空の井戸がふかうなつた・雲が澄む水を汲むげんのしようこの花

　　九月五日

　秋晴、終日寝ころんで読む、牧水の紀行文集を読んでゐると一杯やりたくなる。とても行乞なんか出来ない。悪夢――餅にとりつかれた夢を見た。夕方、樹明来、久しぶりに飲む、うまい酒だつた、君はおとなしく帰つた、私もおとなしく寝た。月もよい、虫もよい、よくないのは人間だ。「松」の裸木追悼号を読んで、あれやこれや考へさせられた。

　・草ふかく木の実のおちたる音のしづか　ひとりでだまつてにがい茄子をたべることも・かへるより障子あけるより風鈴のなる・法衣のやぶれも秋めいた道が遠くて

　　九月六日

今朝は食べるものがない、梅湯（茶もないから）を飲む。行乞気分にはどうしてもなれない、やうやく米一升捻出した。まことに我がまゝ気まゝな一日だつた。

九月七日

秋空一碧、けふも休養する。だるく、ものうく、わびしく、せつなく。……

九月八日

日本晴、清澄明徹いはんかたなし。今日はどうでもかうでも行乞しなければならないので、午前中近在を歩いた、行乞相は満点に近かつた（現在の私としては）。歩くとよくわかる、私の心臓はだいぶんいたんでゐる。歩いたおかげで、今日明日はおまんまがたべられる。芙蓉、紫苑、彼岸花が咲いてゐた、芙蓉はとりわけうつくしかつた、日本のうつくしさとおごそかさとを持つてゐる。今朝はうれしかつた、大山澄太さんのハガキが私を涙ぐましたほどうれしかつた。物事にこだはる心、その心を捨てきらなければならない。私もどうやらかうやら本格的に私の生活に入り私の句作をすることができるやうになつた、おそらくはこれが私の最後のものだらう。新聞をやめたので（旅に出がちでもあり、借銭がふえもするので）、何だか社会と離れたやうな気がする、物足らないと同時に気安にも感じる。今日は歩いてきて、そして昼寝もしないのに、どういふものか、一番鶏が鳴いて暁の風が吹くまで眠れなかつた、いろ／＼さま／″＼の事が考へられる、生活の事、最後の事、子の事、句の事、そしてかうしてゐても詰らないから一日も出く広島地方へ出かけたい、徳山に泊るならば、明日立ちたいけれど汽車賃がない、貧乏はつらいものだ、などゝも考へた、しかしながらその貧乏が私を救ふたのである、若し私が貧乏にならなかつたならば、私は今日まで生きてゐなかつたらうし、したがつて、仏法も知らなかつたらうし、句作も真剣にならなかつたであらう。……これもやつぱり老の繰言か！

・俵あけつゝもようできた稲の穂風で・月のあかるさはそこらあるけば糸瓜のむだ花・それからそれと考へるばかりで月かげかたむいた・虫の音のふけゆくまゝにどうしようもないからだよこたへて・い

つまでもねむれない月がうしろへまはつた・うらもおもても秋かげの木の実草の実・人が通らない秋暑い街で鸚鵡のおしやべり　　　述懐ともいふべき二句・酔へなくなつたみじめさをこうろぎが鳴く・ねむれない秋夜の腹が鳴ります　　　追加　へちまに朝月が高い旅に出る

九月九日

晴、朝日がまぶしく机のほとりまで射しこむ。休養読書。芸術の母胎は何といつても情熱である、そして芸術家は純一と冒険とを持つてゐなければならない。午後、郵便局へいつて端書を書く（その万年筆を忘れてきた、年はとりたくないものだ！）、帰途、工場に冬村君を訪ね、それから学校に樹明君を訪ねる、樹明君が奢るといふので、酒と豆腐とを買うて戻つた、重かつたが苦にはならなかつた。学校からすぐ樹明君がやつてくる、ほろ／＼酔ふ、どうでも湯田へ行つて一風呂浴びてこうといふ、お互に脱線しないことを約束して、バスで一路湯田まで、千人風呂で汗を流す、それから君の北海道時代に於ける旧友Ｙさんを訪ふ、三千数百羽の鶏が飼はれてをり、立体孵卵器には一万五千の種卵が入れてあるほど、此地方としては大規模であり、大成功である、樹明君が心易立に無遠慮に一杯飲ましなさいといふ訳で、奥さんが酒と料理とを持つて来て、すみませんけれど、主人は客来で手がひけないので、どうぞ勝手に召しあがつて下さいといはれる、酒はあまりうまくなかつたが、料理はすてきにうまかつた、私などはめつたに味へない鶏肉づくしだつた、さすがに養鶏場だ、聞くも鶏、見るも鶏、食べるもまた鶏だつた。何故だか何となく腹工合が悪くて、いくら飲まうと思つても、また、樹明君の気分に合しようと努めても、飲めない、酔へない、やうやく君をすかして、だまつて帰途につく、バスを一時間も待つた、その間、樹明君はそこらの床几に寝ころび、私は切符売の老人と湯田の今昔を話したり、Ｍ旅館の楼上で遊興する男女を垣間見たりする。いつしよに帰庵してから、樹明君は家へ、私は床に就いたのは十二時頃、銭といふものゝありがたさ、自動車といふものゝありがたさ、友人といふものゝありがたさを痛感する。私にはゼイタクきはまる一夜の遊楽でありました。

Ｙ養鶏場三句・鶏はみなねむり秋の夜の時計ちくたく・うたふ鶏も羽ばたく鶏もうちのこうろぎ　秋の夜の孵卵器の熱を調節する

飲めなくなつたさびしさ酔へなくなつたみじめさ

追加・月が落ちる山から風が鳴りだした・蛇が、涼しすぎるその色のうごく　出来秋のなかで独りごというてゐる男　秋らしい村へ虚無僧が女の子を連れて・秋日和のふたりづれは仲のよいおぢいさんおばあさん・晴れて雲なく釣瓶縄やつとゝゞく・声はなつめをもいでゐる日曜の晴れ

九月十日

秋ぢや、秋ぢや、といふほかなし、身心何となく軽快。朝飯のとき、庵の料理はまづいなあとめづらしく思つた、何しろ昨夜の今朝だから。△昨日忘れてきたと思つた万年筆は浴衣の袖の底にあつた、忘れてきたと忘れてゐたところにまた私の老が見える、この万年筆は十年あまり前に或人から貰つて、ずゐぶん酷使したのだから、もう暇をやつていゝほどの品であるが、それが私をして老を感ぜしめることは不思議な皮肉である。忘却といふことはわるくない、老いては忘れることが何よりだ。日和下駄からころと街へ出て来る、昨日樹明君が買うてくれたのです、かたじけない贈物です。物事に無理をしない、といふことが私の生活のモツトーです。昨夜、湯田へ行くとき、バスの中で樹明君が知合の妙な男と話してゐた、その男はふたなりだつた、そのいやらしさがいまだに眼前をちらつく、嫌ですね。百舌鳥が啼いた、これから空が深うなるほどその声も鋭くなる、そして私に秋を痛感せしめる、……そして。独り者の昼寝、今日はそのよさとわるさとを味解した。

・最後の飯の一粒まで今日が終つた・朝寒の針が折れた　　　入庵一週年ちかし・蓼の花もう一年たつたぞな　　　追加備忘・道がなくなり落葉しようとしてゐる・水に水草がびつしりと旅・たゞあるく落葉ちりしいてゐるみち

九月十一日—十月一日　『行乞記』

第17章
行乞記　12 広島・尾道(新字旧仮名)

九月十一日

広島尾道地方へ旅立つ日だ、出立が六時をすぎたので急ぐ、朝曇がだん／＼晴れて暑くなる、秋日はこたえる、汗が膏のやうに感じられるほどだ。中関町へ着いたのは十一時過ぎ、四時頃まで附近行乞。六時、三田尻の宿についた、松富屋といふ、木賃二十五銭でこれだけの待遇を受けては勿躰ないと思ふ。夜は天満宮参詣をやめて旧友M君を訪ねる、涙ぐましいほど歓待してくれた、奥さんもお嬢さんも、おばあさんまで出てきて、私の与多話を聞いて下さつた、十時近く、帰宿して熟睡。同宿、いや、同室一人、誓願寺詣の老人、好きな好々爺だつた、いづれ不幸な人の一人だらう！捨てた、今日の行乞で物事に拘泥する悪癖を捨てた、気持がたいへん楽になつた、もう一つ捨てたいものは、捨てなければならないものは酒の執着である（正しくいへば酒への未練）。有縁止、無縁去、去来行住すべて水の如かれ、雲の如かれ。おもひでの道を歩いて、善友悪友のおもひでがあつた、——K君、Ｓ君、Ｉ君、M君、等々等。私はどこへいつても、招かれざる客であつても拒まれる客ではない、今日は歓迎せられた客でさへあつた。秋草のうつくしさ、水草のうつくしさ。ルンペン家族が、とある樹蔭で、親子四人でお辨当を食べてゐた、彼等に幸福あれ。私の貧乏、そして私の安静、私の孤独、そして私の自由、不幸なる幸福。

今日の所得（銭十九銭　米二升四合）今日の御馳走（酢鮹、煮魚、里芋）

・朝風の簔虫があがつたりさがつたり・バスも通うてゐるおもひで

の道がでこぼこ・役場と駐在所とぶらさがつてる糸瓜・かるかやもかれ／″＼に涸れた川の・秋日あついふるさとは通りぬけよう・おもひでは汐みちてくるふるさとの渡し　ふるさとや少年の口笛とあとやさき　ふるさとは松かげすゞしくつく／＼ぼうし・鍬をかついで、これからの生へたくましい腕で　おばあさんも出てきて話すこうろぎ鳴いて（Ｍ君に）・相客はおぢいさんでつゝましいこほろぎ　　　追加
つかれてついてどこかそこらでをんなのにほひ

九月十二日

朝、鞠生松原を散歩する。放下着、放下着、身心ほがらかほがらか。六時出立、我ながらサツソウとしてあるく、見渡すかぎり出来秋のよろこびだ（実際問題としては豊年飢饉だらう！）。末田海岸の濤声、こゝにも追懐がある。荷馬車にひつかゝつて、法衣の袖がさん／″＼にやぶれた。彼岸花が咲いてゐる、旅の破法衣と調和するだらう。富海から戸田まで汽車、十時から一時まで福川行乞、行乞がいやになつて、そこからまた汽車で徳山へ、二時にはもう白船居におさまることが出来た。酒はうまい、友はなつかしい。井葉子さんもずゐぶん年が寄つたと思ふ、それだけまた、その接待振が垢抜けしてうれしい、感謝合掌。飲みすごしても、層雲を借覧して、句稿整理することは忘れなかつた、句は酒と共に私の生命の糧である。

今日の所得（銭十七銭、米一升三合あまり、これは白船君の奥様にむりにあげて、その代償として五十銭拝受）身うちのものがいふ、――『あんたもホイトウにまでならないでも、何かほかに仕事がありさうなものだが、……』私は苦笑して心の中で答へる、――『ホイトウして、句を作るよりほかに能のない私だ、まことに恥づかしいけれど仕方がない、……』

・いまし昇る秋の日へ摩訶般若波羅密多心経・コスモス咲いて、そこで遊ぶは踏切番のこどもたち・鍛冶屋ちんかんと芭蕉葉裂けはじめてゐる　煤け障子は秋日の波ですつかり洗つた　おもひでは波音がたかくまたひくく（末田海岸）・もう秋風のお地蔵さまの首だけあたらしい・秋の日ざしか、旅の法衣をつくらふことも・すわれば風がある秋の雑草・寝ころべば青い空で青い山で・何もかも捨てゝしまはう酒

杯の酒がこぼれる　うらに木が四五本あればつく／＼ぼうし（白船居）　　　追加・海をまへに果てもない旅のほこりを払ふ・ふるさとの山にしてこぼるゝは萩

九月十三日

曇、八時出立、尻からげ一杯ありがたく頂戴。遠石八幡宮参拝、奥床しく尊い。昨夜飲みすごしたおかげで、今日はだるくてねむくて閉口した、そのためでもあるまいけれど、犬に咬みつかれた、シヤレた奴で傷づかない程度で咬みついたのである、一つ懲らしめのために殴つてやらうと思つて※杖をふりあげたがやりそこなつた（飼主の床屋さんは責任廻避のために飼主ではないと解りすぎる嘘をいつてゐる、犬よりも犬の主人の方が下等だ！）。十時から十一時まで花岡行乞。花岡八幡宮はよいお宮だつた、多宝塔は特別保護建造物になつてゐる、古色蒼然として無量の含蓄がある、心しづかに味ふべし。社務所の白萩はうつくしくてふさはしい。老ルンペンといつしよにお寺の縁で休む、昼食は戴いた菓子四五片。途中、都合よければ泊めて貰ふつもりでＩ君を訪ねる、折あしく大掃除で、手伝人も多勢で、腰をかける場所もない、挨拶もそこ／＼にして飛びだした。Ｉ君は相かはらずプチブルボツチヤンだつた。呼坂行乞、そして今市に近いところで泊つた、この宿はほんたうにきたなくてうるさくて、同時にしんせつできやすかつた。子供がゐる、猫がゐる、鶏がゐる、馬がゐる、蠅、蚊、等々等、いやはや賑やかなことだつた。木賃は三十銭、賄はまず普通、三田尻のそれを上の中とすれば、これは中の中といふところ。同宿は少々気のふれた乞食老人、下らなく話しかけてうるさいから、すまないけれど黙殺してやつた。こんな宿にも盆栽の数鉢はある、鳳仙花、唐辛、蘭、万年草など、おしやべりの、きかぬ気の小娘の丹青だ、日本人はうれしいなと思ふ。今夜は特に奮発して晩酌三合（いつもは二合）、いゝ気持で寝てゐるところを揺り起された、臨検だといふ、お役目御苦労、問はれるまゝに日本禅宗史を一席辯じて、おまはりさんと宿の人々を感心させた（と自惚れる）。

今日の所得（銭弐十弐銭、米二升一合）
米はどこでも二十銭替今晩の御馳走（焼魚、茄子の煮たの）

・かあかあと鳴いたゞけで山の鴉は　あえぎのぼる並木にはひでりのほこり・こんなに子供があつてはだかではいまはる・笠へ落葉の秋が来た・なんでもない道がつゞいて曼珠沙華・うらは蓮田できたなくてきやすい宿・旅の夜空がはつきりといなびかりする・ほんとうによい雨が裏藪の明ける音・今日の陽もかたむいたひよろ／＼松の木　　　追加・まんぢゆさけさきわたしの寝床はある（帰庵）

九月十四日

夜中に雨の音をきいた、朝空は曇つてゐるがなか／＼降らない、宿の支度がおそくて出立もおくれた。十時から一時まで高森町行乞、夕立がやつてきた。二時から四時まで玖珂行乞、こゝでも夕立、よい夕立だつた。心たいらか、行乞相も行乞所得も上上来、善哉、々々。与へる人のいろ／＼さま／″＼が考へられる、三輪空寂は理想だ、せめて二輪空寂になりたい。昼飯代りに柏餅五つ、五銭は安かつた、いはんや、新聞を読まして貰ひ、マツチを貰つたに於ておやである。ありがたい雨だつた、草も木も人もよみがへつた、畑仕事をする人々が至るところに見られた。欽明寺峠は峠としては何でもないが何しろ長い、秋草、虫声がよかつた、萩の老木は口惜しいほど欲しかつた。師木野といふところ、鉄道工事風景が興味ふかゝつた。夕雀、赤子の泣声、犬の吠えるのも旅のあはれだ。しんせつなおばあさん、ふしんせつなおぢいさん。路傍の荷馬車小屋で野宿の支度をしつゝあつたお遍路さんがていねいに挨拶した、私もねんごろに会釈した、彼の境遇を羨ましく感じるほどそれほど私はまだ私の生活に徹してゐない、恥づべきかな。暮れて急いで道を間違へて、岩国の馴染の宿（昭和二年にも四年にも世話になつた）へ着いたのは八時頃だつたらう、地下足袋をぬぎ法衣をぬいで、やれ／＼、「周東美人」を二、三杯ひつかける、どうも酒はうますぎますね。木賃三十銭、中の上、または上の下とでもすべきか。宿の主人夫妻がめつきり年をとつてゐる、娘がもう年頃になつてゐる。……

今日の所得　（銭四十銭、米二升四合）御馳走　（小海老のいりつけ、にんじんのおしたし、豆腐汁）

もう栗が店に出てゐる、栗そのものは食べたいとも思はないが、栗

の感じはよろしい、柿——きねり柿——をおせつたいとして頂戴した、歯がわるいから小供にくれてやつたが。

・百舌鳥がするどくふりさうでふらない空・馬も肥えたと朝飯いそがしく出てゆく・秋のひかりや蠅がつるんだりして・鮮人長屋も秋暑い子供がおほぜい　乞ひあるく旅のいやになつたバスのほこり・売られて鳴いて牛はのそ／＼あるく　牛を見送ると水涸れた橋まで・夕立すずしくこちらで鳴けばあちらで鳴くも牛・ほんによかつた夕立の水音がこゝそこ・すゞしくぬれて街から街へ山の夕立・いたゞきは夕立晴れの草にすわる・長い峠の、萩がちつたり虫がないたり　峠くだればゆふべの牛が鳴いてゐる・夕立晴れるより山蟹のきてあそぶかな　長屋あかるく灯して疳高いレコードの唄　アンテナがあつて糸瓜がぶらさがつて鉄道工事長屋で

九月十五日

降りさうなが、降ればよいのだが、歩いてゐるうちに晴れてきた。今日は歩けるだけ歩いて、そして汽車に乗つても、広島入の日である、よろこばしい日である。朝酒一杯、その元気で八時半から十時半まで岩国町行乞、十一時から十二時まで麻里布町行乞、近来にないはじかれ方だつた。愛宕山林をながめて亡弟追憶の涙をしぼつた。——

今は死ぬるばかりと掌を合せ　　山のみどりに見入りたりけむ

旧作は新作だ！　あゝ。二時半から三時半まで、さらに大竹町行乞。四時近い汽車に乗る、若夫婦のクツシヨンに割り込ませて貰つたが、お気の毒でした。五時広島駅着、地下道をのぼつて出札口に近づくと、大山さんのニコ／＼顔が待つてゐた、うれしかつた、連れて澄太居へ。——澄太居は予想通りで、市にあつて市を離れたところに澄太らしいところがある、葉鶏頭がたくさんあつて、とてもうつくしい。明るい家、明るい気分。酒は加茂鶴、下物は焼鮎、……身にあまる優遇で野衲いさゝか恐縮の体。よく飲んでよく話してよく寝た。……

今日の所得は、銭七十四銭と米六合（？）今日の行程は徒歩で三里、汽車で九里。

・暮れても宿が見つからないこうろぎで・水は涸れきつて松虫や鈴虫や旅人　のぼりつめればトンネルとなりこだまする　誰も寝しづまり鈴虫のよい声ひとつ　秋の波がうちよせる生徒がむらがる・赤子つぶらな眼を見張り澄んで青い空・葉鶏頭に法衣の袖がふれるなど（澄太居）　窓へからまり朝顔の実となつてゐる・塀にかぼちやをぶらさがらしてしづかなくらし・葉が四五本穂をだして揺れるのも・父がくれた柘榴はじめての実が揺れてゐる（澄太居）　野良猫も仔を持つて草の中に・これが最後のかぼちやたゝいて御馳走にならう

九月十六日

秋空一碧、一片の雲もない明朗さである、午前中はそこらを散歩、そして句稿整理。友の温情が、酒のうまさが全心全身にしみいる。菓子のうまさまで味つた。都会情調、人のゆききが自動車電車のひゞきが今の私にはうるさい。蛙の声があかるい室でしづかに自然人生をおもふ。奥さんが昼食にも一本つけて下さる、主人が昨日二階にあがるより一杯持つてきて下さつた時のやうに、うまい／＼ありがたい／＼。一浴して一杯やる気持は何ともいへませんね。牛田風景は三方が山、南が河の、雑音のない閑静である。湯上り浴衣にヘルメツト帽。夜は独壺君来訪、三人で飲みながら話した、とても愉快な一夜だつた。悪夢に襲はれて寝言をいひつゞけたことが私自身によく解つてゐる、これはとても不愉快だつた。

・兵営の柳散らうとする騒音　秋の野へうごくのはタンク・旅も蓮の葉の枯れはじめた　蓮の葉のやぶれてゐる旅の法衣も・秋風の驢馬にまたがつて・朝はすこし萩のこぼれてゐる・空瓶屋空瓶だらけへ秋日がまとも・雑魚の列も水底の秋・朝がながれるまゝに流れてくる舟で・秋風の家をそのまゝうごかしつゝ・かぼちやとあさがほとこんがらかつて屋根のうへ・秋空に雲はない榾を割つてゐる・卵を産んだと鳴く鶏の声が秋空・たゝみにかげはひとりで生えた葉鶏頭・へたなピアノも秋となつた雲の色で　　追加・有明月夜の葦の穂の四五本はある　　再録・鍬をかついで、これから世の中へたくましい腕

九月十七日

電車で五日市へ行き、終日舟遊、私の一生にはめつたにない安楽な

一日だつた。釣つた魚を下物にして、水上饗宴である、澄太さんは少しく、独壺（黙壺氏の誤記）さんも少しく、私は大に飲んだ。釣つた魚は何々ぞ――キス、ハゼ、コチ、小鯛、そして鮹（いたづらに種類多くして小さかつたことは内密々々）。さらにまた蜊貝、蟹。……水、酒、友、秋、物みなよろし。夜は若い巨村君来訪、奥さんも仲間入、朝からのほろ酔機で、夜の更けるのも忘れて行乞漫談。

・朝風がながれいる朝酒がある・朝からしやべる雲のない空・丸髷の大きいのが陽を浴びて　秋晴の日曜の、ルユツクサツクがかるい朝風・向日葵日にむいてゐるまへをまがる・空ふかうちぎれては秋の雲　水底からおもく釣りあげたか鮹で・いながはねるよろこびの波を漕ぐ　葱も褌も波で洗ふ・足は波に、舟べりに枕して秋空・雲のちぎれてわかれゆくさまを水の上　ぽつかりとそこに雲ある空を仰ぐ・仰いで雲がない空のわたくし・波の音ばかり波の上に寝ころんで・陽のある方へ漕いでゆく

九月十八日

曇、后晴、日支事変二週年記念日、小学校中学校は休。広島風景――軍国風景。東練兵場へ出かけて模擬戦を観る、鉄条網、毒瓦斯、煙幕、タンク、機関銃、……労れて、少し憂欝になつて戻る。午後は句稿整理。夕飯を食べながら、澄太さんから清水さんの話を聞く、聞けば聞くほど頭がさがる、そして自分の不甲斐なさを恥ぢる、是非一度は同朋園を訪ねたいと思ふ。多賀さん来訪、生れて初めて蓴菜をよばれる、横旗さん来訪、葡萄をよばれる、波田さんら二人来訪。話、話、話。……朝、眼がさめると枕頭の大徳利から二三杯、夜は澄太さんと寝酒、とかく飲みすぎて困ります。法衣の手入、奥さんが縫うてあげようとおつしやつたけれど、これは綻びを縫ふとか何とかいふ程度のものぢやない、裁縫を知らない人で初めて出来る仕事である！流転しない世界はさびしい、流転するが故に新らしく、流転するが故に成長するのである、否、流転即成長なのである。

・煙幕ひろがつてきえる秋空・突撃しようする空は燕とぶ・タンクがのぼつてゆくもう枯れる道草・鉄兜へ雑草のほこりがふく　改作追加・はてしない旅もをはりの桐の花・晩の極楽飯、朝の地獄飯を

食べて立つ

九月十九日

曇、小雨がふつてゐるが、引き留められたけれど、出立する、私としては長い滞在であつた、大山夫妻の心づくしはいつまでも忘れないであらう、忘れられないであらう。尻からげ一杯、この一杯にも澄太さんの心づくしがある、おべんたう、こゝにも奥さんの心づくしがある。饒津神社の境内で、独壺さんがきて写真をうつした、それからいよ／＼お別れだ、……山頭火一人だ。私は東へ急いだ、十時から十二時まで海田市町行乞、行乞相申分なしといつてよからう。私はたしかにこの旅で一皮脱いだ。慾望をほしいまゝにするなかれ、貪る心を放下せよ。午後は雨、合羽を着て歩いた、横しぶきには困つた、二時半瀬野着、恰好な宿がないので、さらに半里ばかり歩いて、一貫田といふ片田舎に泊つた、宿は本業が豆腐屋、アルコールなしのヤツコが味へる。……相客は一人、若い鮮人で人蔘売、おとなしい人柄だつた。

今日の行程は五里。所得は（銭三十銭、米四合）　二五中ノ上御馳走は（豆腐汁、素麺汁）

前が魚屋だからアラがダシ、豆腐はお手のもの。早くから寝た、どしやぶりの音も夢うつゝ。

・朝がひろがる豆腐屋のラツパがあちらでもこちらでも・やつと糸が通つた針の感触　時化さうな朝でこんなにも虫が死んでゐるすがた・朝の土をあるいてゐるや鳥も・旅は空を見つめるくせの、椋鳥がさわがしい・また一人となり秋ふかむみち・この里のさみしさは枯れてゐる稲の穂・案山子向きあうてゐるひさ／″＼の雨・案山子も私も草の葉もよい雨がふる　明けるより負子を負うて秋雨の野へ　ひとりあるけば山の水音よろし・よい雨ふつた朝の挨拶もすずしく　一歩づつあらはれてくる朝の山・ぐつすりと寝た朝の山が秋の山々　秋の山へまつしぐらな自動車で　改作追加　あるくほどに山ははや萩もおしまい

九月二十日

曇、まだ降るだらう、彼岸入、よい雨の瀬音。歩いてゐるうちに、はたして降りだした、しようことなしに八本松は雨中行乞、どうやらかうやら野宿しないですみさうだ。濡れて歩く、一歩一歩、両側の山が迫る、谷川の音がうれしい。すゝき、はぎ、そしてききようやあざみや、名も知らぬ秋花。山家に高くかゝげてある出征の日の丸、ぶらりと糸瓜。「良い犬の子あげ升」といふ紙札。萩は捨てがたい趣を持つてゐるが、活ける花でも植ゑる花でもない、生えて伸びてこぼれるべき花であることを知つた。ありがたかつたのは、山路で後になり先になつてゐたおぢいさんがあまりゆたかでもなさゝうな財布から一銭喜捨して下さつたことだつた、この一銭は長者の千万金よりもありがたい。八本松から西条までルンペン君と道連れになつた、彼はコツクで満洲から東京まで帰るのだといふ、満洲へいつたときは汽車辨当がまづくて食へなかつたのに、失敗し失職して帰るときは一椀五銭の朝鮮飯にもありつけなかつたといふ、すこし奔走して来ませうといつて、そこらの民家から握飯を貰つて、むしやむしや食べる、——おもしろい、それ以上の何物でもない。昨夜は海田市町はづれの神社で五人のルンペンと一夜を明かしたさうな、ルンペンが職業化しない限り、いひかへれば、生活の手段としてルンペンをやら限り、人間は一度ルンペンになるがよろしい、ルンペンの味は人間味の一つだから。二時近くなつて西条着。感じのわるくない町だ、金本屋といふ安宿へ泊る、木賃三十銭、上の下といふところ、主人は少し調子はづれと見たは僻目か。

今日の行程四里、所得は十弐銭と五合。

関西第一の酒造地に泊つて、酒が飲めないとは『宝の山に入りながら……』の嘆なきにしもあらずだつた（財布には五厘銅貨が六銭あるだけ）。今夜も風呂がない、初めて蚊帳をつらないで寝た。雨はまだ二日も降り続けないのにもう雨を嫌つてる声が聞える、あれだけ待ち望んでゐた雨だのに！しづかな宿だ、どこからか三味の音がする、わしが国さを弾いてゐる、虫の声、犬の声もさわがしくないほどに。同宿同室は鮮人、彼も失職者、よく話すけれど嫌味がない、どこでも働らきたい、金を貯めて家庭を持ちたいといふ、彼によき妻あれと祈つた。

今晩の御馳走（きうりなます、にざかな、いも）昼飯はぬき

・まことお彼岸入の彼岸花・よべのよい雨のなごりが笹の葉に・道がわかれて誰かきさうなもので山あざみ・レールにはさまれて菜畑もあるくらし（踏切小屋）・山ふかく谺するは岩をくだいてゐる音　蛙とびだしてきてルンペンに踏み殺された・仕事は見つからない眼に蜘蛛のいとなみ・あれが草雲雀でいつまでもねむれない・旅のからだをぽり／＼掻いて音がある

九月廿二日

晴、秋暑し。午前中は西条町行乞、午後はゆつくりと歩みつゞける。予定が狂つて、本郷までは無理だから、途中安宿がないから、すこし左折して新庄といふ田舎の宿に泊る。宿もわるくないが、山はだんぜんよい。上の下で屋号本岡屋、三十銭。空高雲多少——といふ語句が行乞途上でひよいと浮んだ、昨今の私の心境そのまゝである。何でもない山村風景、その何でもないところに何ともいへないよさがある、かういふよさがほんたうのよさだらう。或るおかみさんと道連れになつて、彼女がいかに夫思ひで、そして子煩悩であるかを見せつけられた、彼女に幸あれ。里程を訊ねてもよく知らない人が多い、しんせつにせいかくに、教へてくれる人はなか／＼すくない（安宿のおかみさんは、おばあさんでもさすがによく知つてゐるが）、今日訊ねたら、その一人はよく教へて下さつた、彼は中年の不具者だつた。川原へ出かけて、からだを洗ひふんどしを洗つた。宿の病弱なおかみさんが月おくれ雑誌を貸してくれた、その厚意はありがたい、去年の夏の富士！宿の便所はきれいだつたが（安宿の便所は殆んど例外なしにきたない）私の夢はいやにきたなかつた。

・はぎがすゝきがけふのみち・ゆつくりあゆめば山から山のかげとなつたりひなたとなつたり・水が米をついてくれるつく／＼ぼうし・出来秋の四五軒だけのつく／＼ぼうし　かたまつて曼珠沙華のいよ／＼赤く・大地にすわるすゝきのひかり・あほむけ寝れば天井がない宿で・ころもやふんどしや水のながれるまゝに

或る友へのたより昨日は雨中行乞をしましたが、やつと泊つて食べたゞけ、加茂鶴も亀齢も白牡丹もその煙突を観るばかりでし

た、今日は山もよかつたしお天気もよかつたし、行乞相も所得もよかつたし、三日ぶりに入浴もしたし、一杯やる余裕もあつたし、——まづこのあたりが山頭火相応の幸福でありませう！

　　　　三風居・街のひゞきも見おろして母子の水入らずで
淡々居・松に糸瓜も、生れてくる子を待つてをられる　　　阿弥坊居・カンナもをはりの、秋がきてゐる花一つ

　　十月二日

　　十一月一日

　行乞のつかれと酒の酔とでぐつすり寝た。眼覚めたらすぐ起きるのが私の癖だ、起きたのは四時頃か、そこらを片付ける、さつぱりする、気持がいゝな。緑平老の温情そのものであるカワセを受ける、そして買物また買物、買へるだけ買つた。

　火鉢　三十銭　五徳　八銭……白米　四十八銭　酒　八十五銭……

　いそがしくてうれしい、うれしくていそがしい。老来、人のなさけがわかる！　雑木紅葉がうつくしいな！樹明来、つゞいて黎々火来、すべて予定の行動也。酒あり下物あり、友あり火あり。何ヶ月ぶりの魚か、その魚は鰯（十尾九銭だつた）。樹明の酒八合、黎々火のカーネーシヨン六本。いつしよに黎々火と寝る、フトンがないからでもある。

　　今日の夜明けの星とぴつたり　稲刈日和の、道ばたのをとことをなごがむつかしい話・柚子をもぐ朝雲の晴れてゆく　稲刈るそこををとこふたりにをなごがひとり（稲刈の写生也）・秋日にかたむいてゐる墓場は坊さんの

　　十一月二日

　・雨がおちるいそがしい籾と子供ら（農村風景の一つ）　笠は網代で、手にあるは酒徳利（酒買道中吟）・月夜あるだけの米をとぐ

　　十二月廿七日

　何といふ落ちついた、そしてまた落ちつけない日だらう。私は存在

の世界に還つてきた、Sein の世界にふたゝびたどりついた、それはサトリの世界ではない、むしろアキラメの世界でもない、その世界を私の句が暗示するだらう、Sein の世界から Wissen（道徳の世界）の世界へ、そして〔Mu:ssen〕（宗教の世界）の世界へ、そしてふたゝび Sein（芸術の世界）の世界へ。――それは実在の世界だ、存在が実在となるとき、その世界は彼の真実の世界だ。

　　　　十二月廿七日　死をまへに、やぶれたる足袋をぬぐ　　　　　　　　（この句はどうだ、半分の私を打出してゐる）・晴れてきてやたらに鴉なきさわぐ　ほろにがいお茶をすゝり一人である・身にせまり人間のやうになきさわぐ鴉ども　冷飯が身にしみる今日で・草もわたしも日の落ちるまへのしづかさ　　　追加一句　荷づくりたしかにおいしい餅だつた・枯れた山に日があたりそれだけ・死にたくも生きたくもない風が触れてゆく・こゝにかうして私をおいてゐる冬夜・独言でもいふほかはない熱が出てくる・さびしうなりあつい湯にはいる・こゝろむなしく風呂があふれるよ・焚くだけの枯木はひろへて山が晴れてゐる・人をおこらしてしまつて寒うをる（北朗君に）・北朗作るところの壺に梅もどきあれ　　　庵中有暦日、偶成一句・これがことしのをはりの一枚を剥ぐ　　　樹明君に　冬朝をやつてきて銭をおとした話　　　種田山頭火　　　第三句集　　山行水行

　私は私自身について語りたい、Sein の世界について。境涯の句、彼の生活が彼の句の詞書だ。山行水行はサンコウスヰコウとも、サンギヨウスヰギヨウとも、どちらにても読んで下さい、私にはコウがギヨウだから、――たゞ歩く、歩くために歩くのだけれど、それは自然発生的に修するのだから。

　　　　十二月廿七日から風邪気味にて臥床、病中吟として・ふとめざめたらなみだこぼれてゐた・なみだこぼれてゐる、なんのなみだぞ・いつのまにやら月は落ちてる闇がしみ／″＼・うつとりとしてうれてはおちる実の音も・冬蠅のいつぴきとなつてきてねむらせない・何を食べてもにがいからだで水仙の花　　　病中吟がめづらしくもつゞく・病めばひたゝきがそこらまで・よびかけられてふりかへつたが落葉林・ひさしぶりにでゝあるく赤い草の実・いよ／＼押しつまりまして梅もどき

自依帰仏　当願衆生　体解大道　発無上心自依帰法　当願衆生　深入経蔵　智慧如海自依帰僧　当願衆生　統理大衆　一切無礙　　　　　（三帰礼文—華厳経偈文）

第18章
草と虫とそして　(新字新仮名)

いつからともなく、どこからともなく、秋が来た。ことしは秋も早足で来たらしい。

昼はつくつくぼうし、夜はがちゃがちゃがうるさいほど鳴き立てていたが、それらもいつか遠ざかって、このごろはこおろぎの世界である。こおろぎの歌に松虫が調子をあわせる。百舌鳥の声、五位鷺の声、或る日は万歳万歳のさけびが聞える。夜になると、どこかのラジオがきれぎれに響く。

柿の葉が秋の葉らしく色づいて落ちる。実も落ちる。その音があたりのしずかさをさらにしずかにする。　蚊が、蠅がとても鋭くなった。声も立てないで触れるとすぐ螫す藪蚊、蠅は殆んどいないけれども、街へ出かけるときっと二三匹ついてくる。たまたま誰か来てくれると、意識しないお土産として連れてくる。彼等は蠅たたきを知っている。打とうとする手を感じていちはやく逃げる。いのち短かい虫、死を前にして一生懸命なのだ。無理もないと思う。

季節のうつりかわりに敏感なのは、植物では草、動物では虫、人間では独り者、旅人、貧乏人である（この点も、私は草や虫みたいな存在だ！）。

蝗は群をなして飛びかい、田圃路は通れないほどの賑やかさである。これにひきかえて赤蛙はあくまで孤独だ。草から草へおどろくほど高く跳ぶ。

　一匹とんで赤蛙

蟻が行儀正しく最後の御奉公にいそしんでいる姿は、ときどき机

の上を歩きまわったり寝床を襲うたりして困るけれど、それは私に反省と勤労を教えてくれる。　憎むべきは油虫だ。庵裏空しうして食べる物がないからでもあろうが、何でもかでも舐めたがる。いつぞやも友達から借りた本の表紙を舐めつくして、私にお詫言葉の蘊蓄を傾けさせた。

　蜚※ほど又なく野鄙なるものはあらじ。譬へば露計りも愛矜なく、しかも身もちむさむさしたる出女の、油垢に汚れ朽ばみしゆふべの寝まきながら、発出でたる心地ぞする。（風狂文章）

　　古人がすでに言いきっている。油虫よ、私ばかりではないぞ、怒るな憎むな。

　　げんのしょうこという草は腹薬として重宝がられるが、何というつつましい草であろう。梅の花を小さくしたような赤い花は愛らしさそのものである。或る俳友が訪ねて来て、その草を見つけて、子供のために摘み採ったが、その姿はほほえましいものであった。

　げんのしようこのおのれひそかな花と咲く

　　萩がぼつぼつ咲き初めた。曼珠沙華も咲きだした。萩の花は塵と呼ばれているように、曼珠沙華のように、花としてはさまで美しくはないけれど、何となく捨てがたいところがある。私は萩を見るたびにいつも故人一翁君を思い出す。彼の名句——たまさかに人来て去ねば萩の花散る——は歳月を超えて私たちの胸を打つ。

　　今日はあまりの好晴にそそのかされて近在を散歩した。そして苅萱を頂戴した。　素朴な壺に抛げこまれた苅萱のみだれ、そこには日本的単純の深さが漂うている。何の奇もないところに量ることのできないものがある。　露草の好ましさも忘れてはならない。まいあさ、碧瑠璃の空へ碧瑠璃の花、畑仕事の邪魔にならないかぎりはそっとしておきたい。

　　だんだん月が澄みわたってくる。芋が肥え枝豆がおいしくなるにつれて、月も清く明らかになる。とかく寝覚がちの私は夜中に起きて月を眺める。有明月の肌寒い光が身にも心にも沁み入って、おもいでは果もなくひろがる、果もない空のように。　欲しいな、一杯やりた

いな。――そんなとき、酒を求めないではいられない私は、亡き放哉坊の寂しい句をくちずさむ。――こんなよい月をひとりで観て寝る。　私にもひょいと戯作一句うかんだ。芭蕉翁にはすまないが。――

一つ家に一人寝て観る草に月

（「愚を守る」初版本）

第19章
鎖ペンを握って　――三月十九日　夜――　　山頭火(新字新仮名)

△春と共に白楊社が生れた。あのポプラ若葉のようにすくすくと伸びゆけよと祈る。△会名の『白楊社』は可い。（たしか二三年前に東京郊外在住の画家連中が同名の会合を組織していたと思う。今では解散したらしい）『四十女の恋』は本集の内容にふさわしくない。次号からはもっと適切な名をつけて欲しい。△勝手な文句は並べるものの、私は不泣君の労に対しては最大級の感謝を捧げます。△編輯は順番に為ることにしたい。各地各人の気分が出て面白かろうと思う。△歌の数は最近作十首内外ということにしたい。それでないと、一人で二百首も三百首も出されたとき、編輯者が困る。そして十首内外ならば、ほぼ、或る纏った気分を現わすことも出来ようし、また最近作として置けば季を限る必要はない。△歌集留置期限はまあ二三日ということにしてはどうだろう。二回まわすのだから、その位の日数にしておけばどんな忙しい人でも充分通読することが出来るだろうと思う。△互選はせぬ方がいいらしい。その代りに読後の感想をなるたけ正直に、なるたけ詳細に書いて貰いたい。△申合は此位にして置きたい。此以上啾々すると面白くなくなる。それから先の事は自己の芸術的良心に従って行えば可い。それで腹を立てたり拗ねたり泣き出したりするような人は野暮だ。△ただ一つ、もう一つ、私として――無遠慮な、ぐうたら男の私として、予じめ頼んで置きたいことがある。それは、若しも何かの間違で、諸君が右の頬を打たれなすったとき（或は接吻せられることもあろう）左の頬を出されないまでも、じっと堪忍して、願わくならば微笑でもしていて下るほどの雅量を持っていて欲

しいということです。小供のするような無邪気な喧嘩ならば面白いけれど、大供のする睨合には感心しません――▵兎に角、こう早く本社が成り立ったのは嬉しかった。私はエムファサイズする。今朝、本集を手にしたとき、胸がどきどきした。初めて熱い恋を囁かれた少女のように。……笑ってはいけません。私は妻も子もある三十男ですからね！　諸君、可愛くなりませんか※▵本集は『春愁』『若き悲しみ』またはハイカって（少々嫌味はあるが）『二十歳の峠へ、三十歳の峠から』とでも名付くべきでしたろう。若い人は大胆に若い恋を歌いたまえ。私ら中年者は中年の恋を露骨に歌います。それにしてももう少し物足りませんね。老爺さんと……そして……フェヤセックスがいないから！▵私は以前から小っぽけな純文芸雑誌発刊の希望を胸ふかく抱いています。機が熟したら、必ず実行します。そして、その一半を俳句の椋鳥会と短歌の白楊社とに捧げたいと思うています。郷土芸術――新しい土に芽生えつつある新らしい草の匂いが、春風のように私の心をそそります。そして私の血は春の潮のように沸き立って来ます。（併し、こんなことはあまり高い声では申されません。地方雑誌の経営ではこれまで、度々失敗していますから。）

△　△　△

▵春が来た。春が来たからといって、私には間投詞を並べて、可愛い溜息を洩らすほどの若々しさもなく、また、暗い穴の底へ投り込まれたような鬱憂もないが、矛盾した自己を、やや離れた態度で、冷かに観照しうるだけの皮肉がある。シニカルな気分である。この心持はドストエヴスキーやストリンドベルヒのそれらでなくしてチェーホフのそれに近い。微笑でもない、慟哭でもない、泣笑である。赤でもない、黒でもない、クリーム色である。▵『三十男にも春は嬉しい。』と白泉君が呟く。『嬉しくないこともないね。』と私が答える。『あまり嬉しくはないんですか。』と誰やら若い人が混ぜ返す。――こういう心持をおどけた態度でうたってみた。断るまでもなく与太郎の囈語みたいなものである。本号の雑録があまり淋しいから、筆序に書いて置きました。真面目に読んで下さると、諸君より先に、私の方がじっとしていられません！

（歌集『四十女の恋』所収　大正二年）

第20章
砕けた瓦　(新字新仮名)

私は此頃自から省みて『私は砕けた瓦だ』としみじみ感ぜざるをえないようになった。私は瓦であった、脆い瓦であった、自分から転げ落ちて砕けてしまう瓦であったのだ。　玉砕ということがあるが、私は瓦砕だ。それも他から砕かれたのではなくて、自から砕いてしまったのだ。見よ、砕けて散った破片が白日に曝されてべそを掻いている。　既に砕けた瓦はこなごなに砕かれなければならない。木端微塵砕き尽されなければならない。砕けた瓦が更に堅い瓦となるためには、一切の色彩を剥がれ、有らゆる外殻を破って、以前の粘土に帰らなければならない。そして他の新らしい粘土が加えられなければならない。

家庭は牢獄だ、とは思わないが、家庭は沙漠である、と思わざるをえない。　親は子の心を理解しない、子は親の心を理解しない。夫は妻を、妻は夫を理解しない。兄は弟を、弟は兄を、そして、姉は妹を、妹は姉を理解しない。——理解していない親と子と夫と妻と兄弟と姉妹とが、同じ釜の飯を食い、同じ屋根の下に睡っているのだ。彼等は理解しようと努めずして、理解することを恐れている。理解は多くの場合に於て、融合を生まずして離反を生むからだ。反き離れんとする心を骨肉によって結んだ集団！　そこには邪推と不安と寂寥とがあるばかりだ。

泣きたい時に笑い、笑いたい時に泣くのが私の生活だ。泣きたい時に泣き、笑いたい時に笑うのが私の芸術である。

私は何故こんな下らない事ばかり書くのであろう。私が書く事はすべて、自分の恥晒しであり世上の物笑いである。それは私自身を傷づけるばかりではないか。　そう思わぬではない。こんなくだらない

事はもう書くまいと思わぬではない。しかも私は書かずにはいられないのだ。書けば下らない事しか書けないのだ。あさましい心はあさましい事ばかり考える、荒んだ生活からは荒んだ思想しか生れないのだ。……もっと適切にいえば、私には世間の風評や一身の利害を無視しても、表現せずにはいられない欠陥と悔恨と苦痛とがあるのだ。若し私が私の欠陥から脱却し得たならば——私が私自身を超越し得たならば、私は最早何にも書かないであろう。何も書かないで、安んじて生きてゆくことが出来るであろう。何となれば沈黙の福音は全き人にのみ許されるからである。　Everyman sings his own song and follows lonely path——お前はお前の歌をうとうてお前の道を歩め、私は私の歌をうとうて私の道を歩むばかりだ。驢馬は驢馬の足を曳きずって、驢馬の鳴声を鳴くより外はない。　お前と私とは長いこと手を握り合って、同じ歌をうたいながら同じ道を進んで来た。しかも今や、二人は別々の歌をうとうて別々の道を歩まなければならなくなった。　私達は別れなければならなくなったことを悲しむ前に、理解なくして結んでいるよりも、理解して離れることの幸福を考えなければならない。

　男には涙なき悲哀がある、女には悲哀なき涙がある。　○　自殺は一の悲しき遊戯である。　○　溢れて成った物は尊い、絞って作った物は愛せざるをえない、偽って拵えた物は捨ててしまえ。
○　人生は奇蹟ではない、軌跡である。　○　真実は慈悲深くあり同時に残忍である。神に真実があるように悪魔にも亦真実がある。　○　苦痛は人生を具象化する。
○　高下駄を穿いているときは、その高下駄の高さほど背丈が高いということは解りきった事である。しかもこの解りきった事を忘れていたために、多くの悲喜劇が屡々演ぜられた。　○　酔わないうちに胃が酒で一杯になった、ということは悲しい事実である。
（「層雲」大正三年九月号）

第21章
其中日記　01 (新字旧仮名)

九月廿一日

庵居第一日（昨日から今日へかけて）。朝夕、山村の閑静満喫。虫、虫、月、月、柿、柿、曼珠沙華、々々々々。

・移つてきてお彼岸花の花ざかり　　　□・蠅も移つてきてゐる

近隣の井本老人来庵、四方山話一時間あまり、ついで神保夫妻来庵、子供を連れて（此家此地の持主）。——矢足の矢は八が真　大タブ樹　大垂松　松月庵跡——樹明兄も来庵、藁灰をこしらへて下さつた、胡瓜を持つてきて下さつた（この胡瓜は何ともいへないうまさだつた、私は単に胡瓜のうまさといふよりも、草の実のほんとうのうまさに触れたやうな気がした）。酒なしではすまないので、ちよんびりシヨウチユウを買ふ、同時にハガキを買ふことも忘れなかつた。今夜もよう寝た、三時半には起床したけれど。

・さみしい食卓の辛子からいこと・柿が落ちるまた落ちるしづかにも

九月廿二日

秋雨しめやかである、おちつかせる雨である。其中一人とおさまつてゐると、身心が自然になごんでくる。駅の売声がようきこえる。跣足でポストまで、帰途、蓼を折つてきて活ける、野趣横溢、そして秋気床間に満つ。百舌鳥が啼く、だいぶ鋭くなつた、秋の深さと百舌鳥の声の鋭さとは正比例する、いや、秋が深うなれば百舌鳥は鋭く啼かざるを得ないのだ。

改作二句・伸びて伸びきつて草の露・柿は落ちたまゝ落ちる

まゝにしてをく

『後記』昨日の誤写を補足して置かう、——いはゞ引越祝をやつた記事の追加だ。——今夜はどうしても飲まなければならないのだつた、引越祝と軽視すべきぢやない、結庵入庵の記念祝宴なのだ、しかも私は例によつて文なしだ、恥を忍んで、といふよりも鉄面皮になつて、樹明兄から五十銭銀貨三枚を借りる（返さなければ掠奪だ！）、街へ出て、鮹、蒲鉾、酒、煙草、葉書を買うて来る、二人でやつてゐるうちに、冬村君もやつてきて、三人で大に愉快にやつた、めでたしめでたしめでたし、万歳万歳。——

・身にちかくあまりにちかくつくつくぼうし　昼虫のしづけさを雨が落ちだした

夕方、樹明、敬治二兄同道来庵、酒、魚、鮨、すべて持参だから恐入る、飲む、話す、笑ふ、酔ふ、そして三人いつしよに街へ出た、ちよんびり飲み直して宿屋に泊つた、三人ともいづれ劣らぬ脱線常習者なのだ、三人いつしよにぶらついて脱線しなかつたのだから、まことに不思議な愉快だつた。

九月廿三日

彼岸の中日、其中庵の開庵祝日でもある。朝早く帰庵して拭いたり掃いたりする、御飯を炊きお菜を拵らへて、待つてゐる。……間もなく二兄がニコ／＼してやつてくる、すぐまた酒にする（此酒は私が買つた、敬治坊から頂戴したお祝儀で！）、そして三人で近隣の四五軒を挨拶して廻る、手土産として樹明兄がカルピスをあげる。これで、私も変則ながら、矢足の住人となつた訳だ。何といつても、樹明兄の知人が多く、敬治坊の親戚が多いのだから、私も肩身広く落ちつけるといふものだ。夕方、三人で散歩する、後の山はよかつた、庵の跡、宮の跡、萩が咲きみだれてゐる、夕日がおだやかにしんみりと照らす、物と物、心と心とが融け合ふやうだ。夜は、さらに水哉、冬村二君も来庵、かしわでうんと飲んだ、酔ふた酔ふた、みんなが去つてゆくのが癪に障るほど酔ふた（私は時々、親しい人々に対しては駄々児気分を発散するらしい）。今日の忘れられない事は、米を頂戴した事、無花果を食べた事、酒のよかつた事（昨日から今日へかけてよく

飲んでよく食べたものだ、酒五升、鶏肉五百目、その他沢山である）。

・つく／＼ぼうしつく／＼ぼうしと鳴いて去る・咲いてこぼれて萩である・秋ふかう水音がきこえてくる　　農学校即事　鶩鳥よ首のべて何を考へてる

九月廿四日

晴れて独りだ。咳で苦しむ、時々苦しむのが本当だ。昨日のかしわの骨でスープをつくる。山村庵居のしづけさやすらかさは何ともいへない。柿が落ちる、蜂がくる、閑寂を楽しむ。

九月廿五日

こづいて苦しくて寝てゐられないので、三時に起きて働らく、秋らしくない気分だつた。樹明兄来庵、種子を貰ふ、早く畠をこしらへて、播かなければならない。暮れてから、樹明兄再度来庵、藤本さんと同伴、夜間撮影をやつて下さる。藤本さんは大商店の息子さんだ、オートバイでやつてきてゐる、それに便乗して街へ出る、そして樹明、山頭火の酒宴がはじまつた、うまい酒だつた、こゝろよく酔うて戻つて、ぐつすり寝た。

・灯ればしたしく隣があつた

九月廿六日

よく寝られたので、よい気持で読んだり耕したりするうちに、もう正午近くなつた、そこへ樹明兄突然顔を見せる、昨夜あれからひとりで飲みすぎて少し脱線したのでまたやつてきたといふ、飲みすぎ脱線には理解あまりある私だ、さつそく酒と豆腐とを買つてくる、いはゆる迎酒の苦さ旨さを味ふ、ほろ酔になつて出かける、途中で別れて、樹明兄は自宅へ、私は湯屋へ。それがいけなかつた、こんどは私の飲みすぎ脱線だ、酔つぱらつて路傍に寝てしまつた（後から聞けば、私の寝姿を見た者が二三あるらしい）、とう／＼帰庵かなはずしてＫ婆さんの家で夜を明かした、そして未明、ふら／＼歩いてゐたら、非常線にひつかゝつた、しかしそこは海千河千の私だ、うまくいひぬけた、『ずゐぶん早い散歩ですねえ』と刑事先生びつくりしてゐた！よ

い酒とわるい酒とがあるやうに、よい酔とわるい酔とがあるとすれば、昨夜の酒は、いや今夜の酒はたしかにわるい酒であり、わるい酔だつた。インバイに戯れ、ハダシで散歩するなんてことは悪趣味ぢやない、悪行そのものだ、ことに禅宗坊主に於てをやである。……

九月廿七日

曇、雨、晴れでないので助かつた。風呂へはいつて一切を洗ひ落して戻ると、樹明さんと武波さんとがにや／＼して待つてゐられた、悪行露見、罪業深重、いさぎよく白状して呵々大笑したことである、さうする外ないではないか！

草の日向の蛇がかくれる穴はあつた秋の蚊のないてきてはたゝかれる

九月廿八日

大連の青葉君から、熊本の元寛君から、どちらもうれしいたよりがあつた。咳が出て困る、喘息になりはすまいかと自他共に心配しないでもないが、不死身にちかい私のからだからと放任して安心してゐる、また、このぐらゐの苦しみはあつてよろしい、近来どうも安易に流れ自堕落になつてゐるから！夜は樹明兄に招かれて、学校の宿直室で夕飯を御馳走になつた、一杯やつたことは書くまでもあるまい、咳嗽薬まで戴いてきた。今夜の酒は何とよい酒だつた、そしてよい酔だつた。今日の特種は、竈をこしらへたことである、なか／＼よく出来た、自分ながら感心する（樹明兄も感心してくれた）、これで炭代がういてくる、それだけ酒代が。

九月廿八日

好晴、伐木の音がこゝろよくきこえる。樹明さんが吉野さんを連れてきて庵を描いて下さつた、三八九復活号の裏表紙に刷るのである、私は文字で庵を写さう。夜、国森令弟わざ／＼海の幸——小鯛一籠——を持つてきて下さつた、魚に添へてある青紫蘇の香が何ともいへないフレツシユだつた、早速焼いて酢に漬けた、あゝ、この好下物あつて酒なしとは……、うらめしや。

・しづけさはこほろぎのとぶ　夜の奥から虫があつまつてくる

九月三十日

憂欝な一日だつた。土を耕やして大根を播いた、土のなつかしさ、したしさ、あたゝかさ、やはらかさ、やすけさ、しづけさ。……ぼつ／＼稲刈がはじまつた、豊年満作だ。門外不出、もちろん酒なし。暮れてから樹明兄来庵、野菜をたくさんいたゞいた、これだけあれば当分は安心してゐられる、野菜ばかりぢやない、別にまた一升寄贈だ、涙の出るほどうれしかつた。

十月一日

寝苦しくて三時にはもう起きてゐた、御飯炊も朝の勤行も、何もかもすんだのにまだ明けない。天地高朗、日月清明の気候だ。今日も畠いぢり、二畝耕やした、石ころ、草の根を除くのはかなり骨が折れるけれど愉快だ、ひともじを植ゑつけた。昨夜のお布施で買物をする、私がどんなにつゝましく買物をしたか、左の通りだ。——

一、十銭　醤油二合　　一、九銭　ハガキ六枚一、七銭　味噌百目　　一、十八銭　焼酎一合五勺一、二銭　蠅取紙一枚　一、三銭　湯銭一、八銭　上草履一足　一、十銭　玉葱代一、五銭　辛子粉　　一、五銭　豆腐二丁　　　合計金　七十七銭也（残存金二十三銭）

菜葉を漬けた、重石をたづねてあるいたが。一杯やつてゐるところへ、樹明兄が一升さげて来た、山村の饗宴がはじまる、おしまひには街へまで延長する、そしてとう／＼わやになつてしまつた。かういふ風では罰があたる——と考へてゐたが、果して罰があたつた、一切我今皆懺悔、しつかりしろ。

十月二日

近頃にない熟睡だつた。晴、昨夜の残酒を傾ける。省みて愧ぢない生活。郵便配達夫が柿を御馳走してくれといふ、私の柿ではないけれど、さあさあ好きなだけ食べなさい、食べろといはれる私の代りに、うまいかね。萩が咲きこぼれてゐる、煙がうす／＼のぼつてゐる。終日籠居、孤独と沈黙と、そして閑寂と沈潜との一日だつた。家の周囲の雑草が刈られた、萩も薄もみんな。こうろぎを聴いてゐると、ずゐ

ぶん上手下手がある、濁つたのがだん／＼澄んでくるのが解る、虫の声もなか／＼複雑だ。咳嗽がひどくて苦しんだ、しかしそれが同時に私を自堕落から救ふのも事実である。

十月三日

晴、時々曇る、私の身心のやうに。百舌鳥が啼く、その声もだいぶ鋭くなつたやうだ。火吹竹をこしらへる、何といふ時代後れ！後の山路を歩く、萩が多い。大根の芽生はうれしい、自分で耕して自分で播いた、それが芽を吹いた、ありがたいやうな、すまないやうな気持。

・ゆふべのさみしさはまた畑を打つ

十月四日

咳入つて覚める、声が嗄れて胸の奥が鳴る、罰は甘んじて受けなければならない。出勤前の樹明兄、私の安否を心配して一寸来庵、その温情かたじけなし。今日は殺生デーともいひたい日だつた、早朝、座敷で百足を殺した、掃除の時に蝶々を殺した、井戸からイモリをくみあげた、また、蛙をとびこませた、庭で蜂を殺した、カマキリを殺した、畠では蚯蚓、※、ケラ、を殺した。……殺さないまでも、彼等の夢を驚かして気の毒だつた、人間が土を耕やすのは、ケラにとつては安眠妨害、蚯蚓にとつては家宅侵入だらう、人間は時として虫にも劣つてゐる。帰宅前の樹明兄、先夜写していたゞいた写真を持つて来庵、よく写つてゐる、あまりに私らしい、同時にあまりに私らしくない写真でもあつたが、とにかく、禅坊主としての私、庵主としての私は出てゐる、感謝々々。蕎麦の花はいゝ、声が嗄れて話すことがむつかしくなつた、何だかさみしくなる。さういふ私を気の毒と思つてだらう、樹明兄が乏しい弗入から五十銭玉一つをおいていつた、ありがたしとばかり、すぐ駅通りまで出かけて、焼酎と豆腐とを買うて戻つて、ゆつくり、しんみり、やりました、うまかつた、ありがたかつた、酔うた、酔うた、いつとなく前後不覚になつてしまつた。改めて御礼をいふ、南無樹明如来、焼酎大明神、豆腐菩薩。……

・三日月、おとうふ買うてもどる・新道まつすぐにして三日月・夜へ咳入る（改作）　わたしがはいればてふてふもはいる庵の昼・ひと

りで酔へばこうろぎこうろぎ

十月五日

めづらしく朝寝した、もう六時に近かつた、それほど私は心地よく酔うたのである。柿の落葉はわるくない、掃いてゐるうちに、すぐまた落ちる、それがかへつてよろしい、掃き寄せて、その樹、その実を仰ぐ気持はうれしい。前の家から柿を貰つた、さつそく剥いだ（私はあまり木の実を食べないが、柿だけは以前から食べる）、いはゆる山手柿を味つた、うまかつた、私は柿を通して木の実が好きになるだらうと思ふ。柿は枝振も木の葉も実も日本的だ（茶の木が花が日本的であるやうに）。この秋日和！　もつたいないほどである。達磨忌である、廓然無聖、冷暖自知。樹明兄から約束の通りに寄贈二品、一は白米、これは胃腸薬として、そして他は砂糖、これは風邪薬として。ウソでもない、ジヨウダンでもない、ホントウだ、私にはもう食べるものがなくなつてゐたのだ、風邪をひいて咳が出て咽喉がいたいのに砂糖湯さへ飲めなかつたのだ。だから、今日の樹明はメシヤだつた！何と久しぶりに、そして沢山、甘い物を飲んだことよ。寥平兄からなつかしいたよりがあつた、熊本はなつかしくもいやな土地となつた、私にとつては。湯屋でゆつくり、そして酒屋でいつぱい、それから栄山公園の招魂祭へいつた、そこは小郡町唯一の遊覧地である、まづ可もなし不可もなしだらう。ゆう／＼としてぶら／＼帰庵すると、樹明兄が待つてゐた、招魂祭で早引けだつたから、ちよいと寄つてみたといふ、忙しい／＼といひながら（事実、彼は農学校の書記であり、山手の百姓であり、小郡町の酒徒であり、そして私たち層雲の俳人でもあるのだ）来庵せずにはゐられないところに（そして私自身も彼の来庵を期待してゐる）、そこに私たち二人の友情があり因縁があるのだ、私としては彼の世話になりすぎると思うてゐるけれど、彼としては私に尽し足らないと考へてゐるかも知れない（彼の場合はやがて敬治坊のそれでもあらうか）。今日はほうれんさうを播いた、昨日のやうに二うね耕したのである（樹明兄は一気呵成に、まつたく彼らしく一うね耕してくれた）。播く——何といふほがらかな気持だらう。

・朝やけ雨ふる大根まかう　うれておちる柿の音ですよ・ふるさとの柿のすこししぶくて　　秋晴二句・秋晴れの空ふかくノロシひゞい

た　秋晴れの道が分れるポストが赤い　　招魂祭二句　ぬかづいて忠魂碑ほがらか　まひるのみあかしのもゑつゞける　　　□・秋ふかく、声が出なくなつた　道がなくなり萩さいてゐる　このみちついて水のわく・またふるさとにかへりそばのはな　そばのはな、こゝにおちつくほかはない　　　□　虫も夜中の火を燃やしてゐる

　　十月六日

　夜が長くなつた、朝晩はなか／＼寒い、空の高さ、星の美しさはどうだ、今朝などは、まつたく雲がなかつた。今日も土いぢり、芽生えるものを味ふ。油虫よ、殺したくはなかつたけれど。――秋風を感じた（心よりも身に於て）。

　　ひとりごといふ声のつぶれた・お寺の鐘も、よう出来た稲の穂

　　十月七日

　任運自在、起きたい時に起き、食べたいだけ食べる。さびしさには堪へうる私だけれど、うるささにはとても／＼。毎日待つてゐるのは、朝は郵便、昼は新聞、夕は樹明、そして夜は！午前中、秋晴半里を逍遙した、彼岸花はすつかりすがれた、法師蝉もあまり鳴かなくなつた、たゞ柿が累々として赤くうれてゆく。四辻におもしろい石地蔵尊が立つてゐられた（ダイカンヂゾウ！）。樹明兄を往訪して、明日の山口行を取消さうと思つてるところへ来訪、残念だけれど、こんなに声が嗄れてゐてはとても行乞は出来ないから。――いよ／＼煙草の粉末までなくなつた、酒屋へは無論、湯屋へも行けない（それでもヤキモキしなくなつたゞけは感心）、それにしても胃袋よ、お前はたつしやでふとくなつたね！

　　墓がならびそうしてそばのはな　大空たゞしく高圧線の列　家がとぎれてだん／＼ばたけそばばたけ・刈田はれ／″＼と案山子である　　　□・貧乏のどんぞこで百舌鳥がなく

　（これは私自身をうたうたのではない、けふ歩いてゐるうちに、ある貧家を見た時の実感である、しかし、それがその時の私を表現してゐないといふのではない、いや、私自身を表現してはゐようが、自己の直接表現ではない）

□・明けてくる熟柿おちる　茶の木が実をもつてゐる莟つけてゐる

（『捨てきれないもの』ありやなしや、いへいへ）

十月八日

けさも早かつた、朝が待遠かつた、もう火鉢が恋ひしい。だいぶ長く乞食をしたので、ちよい／＼乞食根性が出てきて困る、慎其独、恥づかしい。土を運ぶ、蚯蚓の家を破壊した。よいたより、うれしいたより、ありがたいたより。街へ出かけた、いろ／＼の買物、そしてとう／＼またわやになつた、Ｔさんの店で、Ｋさんの店で。買物をさげてかへる、樹明兄が山口からの帰途を立寄つた、酒と魚とを持つて。酔うて寝てゐた、樹明兄が敷いてくれた寝床のなかに！　ぐつすり寝た。

・隣も咳入つてゐる柿落葉　ひとり住めば木の葉ちるばかり　住みなれて茶の花さいた・みほとけのかげわたしのかげの夜をまもる

┌雨ふるふるさとは——┐|灯かげ日かげ——　　|└　　日かげ二句　　┘

我昔所造諸惑業皆由無始貪瞋癡従身口意之所生一切我今皆懺悔

衆生無辺誓願度煩悩無尽誓願断法門無量誓願学仏道無上誓願成

自帰依仏　当願衆生　体解大道　発無上心自帰依法　当願衆生　深入経蔵　智慧如海自帰依僧　当願衆生　統理大衆　一切無礙

十月九日

晴、昨日の今日だから身心がすぐれない、朝寝して残酒残肴を片付けてゐたら、六時のサイレンが鳴りだした。即今の這是だ、参。一人はよいかな、日向ぼつこしてゐる私は一人だよ。湯屋まで出かける、イージーゴーイングな自分に鞭ちつゝ早々帰庵した。ゲルトなし、アルコールなし、エゴなし。Ｓさん一家族みんなで柿もぎに来た、子供はうるさいね、裏畑の柿をもぐべく、近所の娘さんが二人連れで来た、ナツメを下さいといふ、サア／＼おとりなさい、いんぎんに礼をいつて行つた、若い女性はやつぱりわるくないな。

・酔へばやたらに人のこひしい星がまたゝいてゐる　裏からつめたく藪風のふきぬけてゆく・わかれてもどる木の実をひらふ・秋あつくせりうりがはじまつた・月に咲けるはそばのはな・寝るよりほかない月を見てゐる　　（放哉坊の句とは別な味があると思ふが）

昨日の買物（此言葉はよい）、――

一、端書切手　　　　　十銭（私の買物はいつでも郵便局からはじまる、何故！）一、線香　一　　　　　　六銭　　　　一、茶　一袋　　　　　　十銭一、煙草（バツトナデシコ）十一銭　　　　一、小バケツ　　　　　十二銭一、いりこ五十目　　十三銭　　　　一、菜葉二把　　　　　　四銭一、焼酎一合　　　　十二銭　　　　一、ノート一冊（日記用）八銭　　　合計金　八十六銭也（財布にまだ一円ばかり残つてゐたが、例のワヤで、酒や豆腐や松茸になつてしまつた）

とにかく、近頃の私は飲みすぎる、遊びすぎる、生死の一大事を忘れてはゐないけれど、やゝすてばち気分に堕してゐることを痛感する、こんなことで何が庵居だ、何の句作だぞといひたくなる、清算、精進、一念一路の真実に生きよ。私は柿を愛する、実よりも樹を、――あの武骨な枝、野人的な葉、そこには近代的なものはないが、それだけ日本的だ、日本的なもの以外には何物もない（もつとも近来だいぶ改良されてはゐるが）。小さな犯罪、それを私は敢てした、裏畑の茗荷の子を盗んだのである、忘れられた茗荷の子だ、不運なその子は私の胃の腑で成仏しなければならなかつた。

追加二句・三日月のどこやら子供の声がある・夜なべの音の月かげうつる

十月十日

今朝も朝寝だつた、といつても五時過ぎだつたが。咳嗽には閉口する、閉口しながら、酒は飲むし、辛いものは食べるし、そして薬は飲まないのだから、それが当然だらう。暁の百舌鳥の声は鋭い。俊和尚からのハガキ一枚、それがどんなに私を力づけたか（昨日、預けてあつた冬物を、寒いので急に思ひだしたといつて送つてくれたのである）。ほんとうによいお天気だ、洗濯をする（三枚しかない）、雑巾

がけをする、気持がシヤンとした。さてもうらゝかな景色ぢやなあ、ほがらかなことでござる。大根を間引く、間引いたのはそのまゝお汁の実。人間は——少くとも私は——同じ過失、同じ後悔を繰り返し、繰り返して墓へ急いでゐるのだ、いつぞや、口の悪い親友が、私のぐうたらを観て、よく倦けませんね、おなじ事ばかりやつてゐて、——といつたが、それほど皮肉を感じたことはなかつた、現に、小郡に来てからでも、私は相も変らず酒の悪癖から脱しえないではないか。
……午後入浴、自分で剃髪する、皮膚がピリ／＼するので利久帽をかぶつたまゝで起居する、いやどうも自分ながら古くさくなつたぞ、破被布を羽織つて、茶人帽をいたゞいて火鉢の縁を撫でゝゐては、あまりに宗匠らしい、咄。

　　二葉となりお汁の実となり（大根の芽生に）　日本晴れの洗濯ですぐ乾く・萩もをはりの、藤の実は垂れ・くみあげる水がふかい秋となつてきた　ふるさとのそばのあしいよ／＼あかし　さみしさがけふも墓場をあるかせる

　さみしいから（或る日はアルコールでまぎらすけれど）あてもなくあちこちあるきまはる、蕎麦畑、藷畑、墓場、大根畑、家、人。このあたりは柿も多いが椿も多い、前のＦ家の生垣は椿である、ところ／″＼に大椿がある、実がなつてゐる、家に乾してもあるだらう。井戸の水が毎朝めつきり減つてゆく、釣瓶の綱をつないでもまたつないでも短かくなる、こゝにも深みゆく秋の表現がある。だん／＼食べるものがなくなつてゆく、——もう醤油も味噌も酢もなくなつたが、——まだ塩がある（米だけは、ありがたいことは大丈夫だ、樹明菩薩が控へておいでだから！）。掃くよりも落ちるが早い柿の葉だ、掃いたところへ散つた葉はわるくない（私もだいぶ神経質でなくなつたやうだね）。夕ぐれ、ばら／＼と降つた、初時雨だらうか、まだ時雨が本質的でなかつた。晩課諷経の最中に誰だか来たけはいを感じたが、そのまゝ続ける、すんでから出てみると、農学校の給仕君が、樹明君からの贈物だといつて、木炭一俵を持参してゐる、かたじけなく頂戴、時雨のなかを帰つてゆく彼に頭をさげた。夜は十日会の月次例会、集まつたものは樹明、冬村二君に過ぎつたが、しんみりとした、よい会合だつた、ことに折からの時雨がよかつた、時雨らしい音だつた、樹明

君の即吟に、

三人のしぐれとなつた晩で

といふ一句があつた、まことにみたりのすべてであつた、別れる前にあまり腹が空いたので（といつて食べるものを売るやうな店は近くにないので）白粥を煮て、みんなで食べた、おいしかつた、とろ／＼するやうな味はひだつた、散会したのは十二時近く、もうその時は十一日の月がくわう／＼とかゞやいてゐた。

・落ちついてどちら眺めても柿ばかり・ゆふべうごくは自分の影か　月夜のわが庵をまはつてあるく・月からこぼれて草の葉の雨　夕雨小雨そよぐはコスモス・ぬれてかゞやく月の茶の木は　わが庵は月夜の柿のたわわなる　壺のコスモスもひらきました　　　□　しぐれてぬれて待つ人がきた　しぐれて冴える月に見おくる　月は林にあんたは去んだ

十月十一日

労れて朝寝、もう東の空が白んでゐた、どうも咳が出て困る、幸にして音声はとりもどしたが、咽喉が痛い。寒うなつた、米を磨ぐ水のつめたさが指先からしみこんでくる、今朝は何だかしようぢようたるものを感じた。待つてゐる音信が来ない。しかし、よいお天気で、よい気分で。塩で食べてゐたが、辛子漬も菜漬もおしたじがないとうまくないので（といふのも私にはゼイタクだが）、財布をはたいてみたら、一銭銅貨が四つあつた、そこで小さい罎を探しだして醤油買に出かける、途中でその売子さんに逢ふ、ついでだから彼の手数を煩はさないですむので、一杯詰めて貰ふ、一升二十銭といふから、まさに一銭五厘位の支払だ、支払ふとしたら、いらないといふ、あげますといふ、彼は私の風采（破被布に利久帽だ）を見て、おせつたいするつもりらしい、そこで妥協してお賽銭一銭あげて、ありがたく万事解決した、彼は若い鮮人だつた、鮮人から報謝をうけたのはこれが二度目だ、一度は行乞流転中にどこかで鮮人の若いおかみさんから一皿の米をいたゞいたのである。昨夜の事を考へる、草庵――時雨――白粥――はあまり即きすぎて句にもならないが、それは涙ぐましいほどの情愛だつた、うれしかつた。駅の物売の声がよくきこえる、風向のよ

い夜などはハツキリきこえる、だが何といふ言葉だかはあまりよく解らない、よく解つては困ります、べんたう、すし、ビール、まさむね、サイダーなどとやられては、食べたくなつたり、飲みたくならうではないか、風よ、向うへ吹け。山東菜を漬けてをいたのがちようど食べ頃となつた、うまい、うまい、これからは自分で作つて自分で漬けて食べられます。三八九の原稿整理。私の事を私よりも周囲の人々がヨリ心配して下さる、私はあんまりノンキかも知れない、ノンキなルンペン！

　　郵便やさん、手紙と熟柿と代へていつた　垣のそとへ紫苑コスモスそして柿の実　秋風、鮮人が鮮人から買うてゐる・ふるさとはからたちの実となつてゐる・わが井戸は木の実草の葉くみあげる・あの柿の木が庵らしくする実のたわわ・そこらいつぱい嫁入のうつくしさ干しならべてある

　これで午前の分をはり、めでたし／＼。どうも腹が空つてくると飲みたくなる、空腹へギユツとひつかける気持は酒好きの貧乏しか知らない、そこでまだ早いけれど夕飯にして、また出かける、どこへでも行きあたりばつたりに行くのである、いはゞ漫談に対する漫歩だ。一時間ばかり歩きまはつて戻つてくると、誰やら庵の前で動いてゐる、樹明君だ、忙しい中を新菊を播いて、苣を植ゑてくれてるのである、ありがたし／＼。飲む酒も食べる飯もないから、辛子漬でお茶をいれてあげる、辛子漬の辛いのも一興でないことはあるまい。ばら／＼としぐれた、今夜もしぐれるらしい、かうしてしぐれもだん／＼本格的になつてゆく。貧すりや鈍するといふ、まつたくだ、金がないと、とかく卑しい心が出てくる、自家の醜劣には堪へがたい。毎日待つてゐるのは——そしてそれが楽しみのすべてといつていゝが——朝は郵便、それから新聞、それから友人だ、今日はその三つがめぐまれた。

　・人がゐてしぐれる柿をもいでゐた・庵のぐるりの曼珠沙華すつかり枯れた・つゆくさ実をもち落ちつかうとする

　夜はまた粥を煮て食べた、私には粥がふさはしいらしい、その粥腹で、たまつた仕事をだいぶ片付けた。これでまづ今日いちにちのをはり、あなかしこ／＼。横になると咳が出る、絶え入るばかりに咳き入

るといふが、じつさいさうである、咳き入つてゐると、万象こんとんとして咳ばかりになる、しばらくして小康、外へ出て歩く、何とよい月だらう。

十月十二日

好晴、まことに秋空一碧だ。急に右の胸がいたくなつた、風邪をひきそへて、あんまり咳をしたためらしい、だるいからすこし散策する（この程度の病気を持つてゐることは、私のためには却つて可いかも知れない）。製材所の仕事を観る、よく切れる鋸だな。或る友への消息に、——

……私もだん／＼落ちついてきました、そして此頃は句作よりも畑作に身心をうちこんでをります、自分で耕した土へ自分で播いて、それがもう芽生えて、間引菜などはお汁の実としていたゞけるやうになりました、土に親しむ、この言葉は古いけれど、古くして力ある意義を持つてゐると痛切に感じました。……

柚子のかをり（にほひでなくてかをりである）、そのかをりはほんとうによろし。今日の御飯はよく出来た、これもほんとうにおいしい。

蓮を掘る泥まみれ泥をかいては・秋のひかりの大鋸のようきれる・近眼と老眼とこんがらがつて秋寒く・芋の葉、それをちぎつてつゝんでくれる・ゆふ空から柚子の一つをもぎとる

百舌鳥がしきり啼く、あの声に聴き入つて、死身の捨身になつたこともあつたが、今はどうだ！　あゝ。散歩してゐて、コスモスのうつくしさがハツキリ解つた、あの花は農家にふさはしい、或はこぢんまりとした借家にふさはしい、はかないけれどもしたしみのある花だ（茎もまた）。昼寝した、ぐつすり寝たが、覚めて何物もなかつた。アルコールについて、そしてニコチンについて一考察。御飯のうまいのは釜底が焦げつくまで炊きあげた場合だ、いひかへればその一部が犠牲になつた時に全体が生きるのである、こゝにも浮世哲学の一節を読む。樹明君、私のために小遣銭を捻出して持つてきてくれた、そして一升飲んだ、地主家主のＪさんもいつしよに。それからがいけなか

つた、――ワヤになつてしまつた、カフヱーからカフヱーへと泳ぎまはつた――それでも帰ることは帰つた、こけつまろびつ、向脛をすりむいだり、被布を裂いたり、鼻緒を切らしたりして。――

　　十月十三日

　秋晴、昨夜のたゝりでぼんやりしてゐる。珍客来、川棚温泉のＫさんが訪ねてきた、彼は好きな男だ、姿も心持も（彼は子供のやうに熟柿をよろこんだ）。いつしよに街へ出た、別れてから、買物、入浴、一杯ひつかける、そしてそれからがまたいけなかつた、Ｋさんをひつぱりだして飲み歩いた、Ｍ屋からＳ軒へ。さうらうとして戻つたら、樹明君がちやんと座つてゐる、午後一度来たといふ、そして夜中また来たのだといふ、話したり、食べたり、飲んだり（ちようど焼酎があつた）笑つたり、悔んだり、寝たり、起きたり、もう十二時だらうか。ぐつすり寝る、夢まどかではないが、のんびりした一夜だつたよ。どうもいけない、回光返照すべし、退いてもう一度、自分を、自分の周囲を見直すべし。せつかくの浄財を不浄化しては罰があたるぢやないか、恥づべし、恥づべし。

　・何もない熟柿もいであげる・壺のコスモスみんなひらいた

　今日の買物を附け添へて置かう、こんなにつゝましくして、そしてあんなにやりつぱなしだから助からない！

　一、　七銭　　赤味噌　　百目　　　　一、七銭　　はぎ　　五匁
包一、　六銭　　醤油　　　二合　　　　一、五銭　　大根　　三本
一、　二十銭　焼酎　　　二合　　　　一、九銭　　ハガキ　六枚
一、　七銭　　バツト　　一　　　　　一、十銭　　並そば　二杯
〆金　七十一銭也

　　十月十四日

　曇、折角の豆名月が台なしになつてしまつた。終日憂欝、畑の草をとつてごまかす、大根おろしはうまかつた、間引菜の味噌汁も。ほうれんさうがほつ／＼芽をふいてきた。柿の葉がだいぶ赤らんできた。Ｊ夫人が子供を連れて柿もぎに来た、子供はうるさい、柿の落葉よりも。呉服屋さんが、戸惑ひしたのだらう、御用はございませんかとい

ふ、見るだけでも見てくれといふ、嫌になつてしまう。夕時雨、あの音には何ともいへないものがある。まことにしづかである、今にして思へば、私は川棚温泉で拒まれてよかつた、とてもあそこでは落ちつけなかつたらうし、また、こゝほどしんみりしなかつたらう。

・ゆふ空の柚子二つ三つ見つけとく・わたしひとりのけふのをはりのしぐれてきた・寝覚まさしく秋雨であつた（即興）

夜中にふと眼がさめたら雨がふつてゐた、それはしよう／＼とした秋雨だつた、そこでおのづから此一句がある。――

十月十五日

けさは早かつた、すべての行事がすんでもまだ明けなかつた、おちついて読書した。時々鉄砲の音が聞える、今日から狩猟解禁、鳥や獣の受難時季が来たのである。朝の鐘声はよいな、鶏の声よりも。出勤前の樹明来庵、わざ／＼胃の妙薬を持つてきて下さつたのである（白米ですよ！）。どうも咳が出て切ないから昼寝、そしたら嫌な夢。茶の花がいちりん、ほんとうにいちりん咲いてゐた、さつそく一輪※のコスモスと代へる、まことに茶の花は床しい花である。蛇が蛙に喰ひついてゐた、あんなに小さい蛇があの蛙を犠牲にしてゐることは、いかに彼の闘争心が強いかを如実に示してゐる、しかし彼に難はない、彼は生きなければならないから、生きずにはゐられないのだから、ことに冬眠の前である、できるだけ栄養分を摂取しなければなるまい、彼は生存の純一な慾望のためにのみ蛙を殺したのである、人間ほど卑劣でない強慾でない。松の会の同人（平野多賀治）君から、浜松名産『浜納豆』を贈つて下さつた、さつそく頂戴する、これで一杯も二杯も三杯も飲めるといふものだ、私一人には多すぎるから、樹明、冬村、両君にお裾分する（関西にはあまり納豆が喜ばれない）。Ｊさんがよい菜葉を持つてきて下さつた、半分は惣菜に、半分は漬物にする、今日はいろ／＼のものを頂戴する日だ。午後は文字通りの一浴一杯。夜食は菜葉粥、近来の御馳走であつた。いざよひ月がおもむろに昇る、それを眺めてゐると、何となく人恋しくなる。……ずゐぶん長く遊んだ、三八九が出来たら行乞に出かけやう、遊んでゐると、しらず／＼我儘になつてゐる。月を眺めてゐたが、咽喉がいけないので砂

糖湯を飲み、厠にはいつてゐると、誰やら来たらしい、そのまゝ返事をする、やつぱり樹明君だつた、誰もがみんなさびしいのだらう。持つて来て貰つた茶をがぶ／＼飲んで別れる、いつもの癖で、送つて出て、月を見あげながら尿する。

・土の虫のちぎられたまゝ土にもぐる　月にむいて誰をまつとなくくつわむし　ふけてあぶらむしがはふだけ・住みついて煤のおちるにも（改作）

十月十六日

夜あけのしぐれはさびしくわびしく身にしみた。けさの空はうつくしかつた、月はもとより、明星のひかりが凄艶、いや冷徹であつた。かまどを焚いてゐて虫――こうろぎの声をきいてゐると、虫も私も老いたりの感がある、それとおなじやうに、お経をあげてゐると、虫の声も私の声も寂びてきたと思ふ。苦茗をすゝる前に、まづ最初の一杯を観世音に献じる、そして仏といふものが、したしみふかい存在として示現する。

・あぶらむしおまへのひげものびてゐる　あかつきのあかりで死んでゆく虫で・水音のしんじつ落ちついてきた　もうはれて葉からこぼれる月のさやけさ　柿がうれてたれて朝をむかへてゐる　　　□・露も落葉もみんな掃きよせる・秋の朝の土へうちこみうちこむ・朝の秋風をふきぬけさせてをく・秋空の電線のもつれをなをさうとする・枇杷から柿へ、けさの蜘蝶の囲はそのまゝに　　浜納豆到来、裾分して　秋空、はる／″＼おくられて来た納豆です

酒壺洞君からやうやく手紙が来た、無論、よいたよりだつたが、君の身辺に或る事件が起つて、それがためにこんなにおくれたと知つては、ほんとうに気の毒である、才人酒壺洞君にもさうした過失（勿論それは君自身の犯したものではないけれど）があるとは、まことに世の中は思ふまゝにはならぬものだと、改めて教へられた。句集代の小為替を現金に代へて貰つて、いろ／＼の買物をする、そして最後にはワヤまで買つてしまつた、そのワヤは私としてあまりに非常識な、そしてあまりに高価なものだつた、幸にして冬村君の好意によつて非常事を処理することが出来たことは出来たが、――冬村君にはすまなか

つた、何ともかともいひやうがない。ぼうとして戻つてきた、手の火傷がいたい、茶碗をこはした、むしやくしやして寝てゐるところへ樹明君がやつてきた、とても起きあがれないので寝たまゝでむちやくちやを話す、君も或る事件でむしやくしやしてゐる、いつしよに飲みにゆかうといふのも断つて、そのまゝ悪夢を見つゞけた。……かうして生てゐてどうするんだ、生きてゐる以上は生きてゐるに値するだけの生活（たとへそれはたゞ主観的であつても）を営まなければ嘘だ、もう嘘には倦いた、本当らしい嘘をくりかへしては今日まで存らへてゐたが。……

十月十七日

終日就床、昨日の飯を食べてゐた。自己清算、それが出来なければ私はもう生きてゐられなくなつた、いさぎよく、自己決算でもやれ（やれるかい）。自殺はやつぱり嫌だ、嫌なばかりぢやない、周囲の人々に迷惑をかける、それは自分をごまかすばかりでなく、他人の好意に悪感を酬いるばかりだ。死ぬにも死ねない、生きるにも生きられない、ヂレンマだ、こゝに宗教的、殊に禅の飛躍がなければならない。

・あてもなくあるけば月がついてくる・月も林をさまよふてゐた

夜、菜葉粥をこしらへて食べた、それでだいぶ身心がなごんだ。買物——昨日の買物をつけてをく。

一、　九銭　　ハガキ六枚　　　一、　十銭　　湯札四枚
一、十二銭　　昆布五十目　　　一、二十三銭　日和下駄一足
一、二十銭　　焼酎二合　　　　一、　七銭　　バツト一ツ　〆金　八十一銭　　　外にワヤ代（冬村君の保證によつて懸）

□・こゝろおちつかず塩昆布を煮る・さみしさへしぶい茶をそゝぐ

長い、長い一夜だつた、展転反側とはこれだらう、あれを思ひこれを考へる、ガランとして、そしてうづまくものがあつた。……

十月十八日

曇、やつと平静をとりもどした、お観音さまの御命日なので普門品読誦、胸がいたい、罰だ、みんな自業自得だ、いつさいがつさい投げだして清算しよう、さうするより外に私の復活する方法はない。郵便がきた、新聞がきた、さてこのつぎには何がくるか、何もない！出かける元気もないし、出かければロクな事はないし、それではどうするか、寝るか読むか書くか、よろしい、土いぢり草とりがいちばんよろしい。　　　　　　　　　　□白船老から手紙と半切とが来た、これで其中庵も持つべきものを一つ持つことが出来た訳だ、多謝多謝。だん／＼晴れる、空も人も。自から閉門を申渡して蟄居謹慎、しんみりと土に遊んだ。さみしいといひ、いら／＼するといふ、すべてがワガママだ、このワガママがとれなければ私は救はれない。

・ひとりで障子いつぱいの日かげで・おちつけば茶の花もほつ／＼咲いて　煮えるもののかげがある寒いゆふべで

しづかに読む、そして読経、しづかに暮れていつた。

・みほとけのかげにぬかづくもののかげ　　　　□・闇夜かへつてきてあついあついお茶・秋の夜ふかうして心臓を聴く

十月十九日

曇、雨が近いらしい。けさも朝寝、といつても五時過ぎ、咳で覚めたのである、いやな夢も見たのだ、小人夢多し、是非もないかな。火を焚くことが上手になつた、習ふより慣れろだ、今までは木炭で自炊してゐたのだが。百舌鳥が啼く、サイレンが鳴る、両者は関係がないけれど、私の主観に於ては融合する、百舌鳥は自然のサイレン、サイレンは人間の百舌鳥か。苦茗、といふよりも熱茗をすゝる、まづ最初の一杯を仏前に供へることは決して忘れない、私にも草庵一風の茶味があつてもよからう、しかし、酒から茶への転換はまだ／＼むつかしい。寒い、ほんとうに寒い、もう単衣でもあるまいぢやないか、冬物はこしらへて送つてあげますといつてよこした人が怨めしい、といふのも私の我儘だけれど。今日の御飯は可もなく不可もなし、やつぱり底が焦げついて香しくなるやうでないとおいしくない。朝課諷経は食後にして、大根おろしに納豆で食べる、朝飯はいちばんうまい。畑を見まはる、楽しみこゝにあり、肥料をやつたので、ひよろひよろ大根

がだいぶしつかりしてきた、白菜はもう一度間引しなければなるまい、ひともじの勢のよさ、何とほうれんさうが伸ぶことぞ、新菊は芽生える／＼。掃く、柿の落葉だけだ、雑草はそのまゝにしてをけ、土地は誰の独占物でもない、雑草だつて生えて伸びて茂る権利があらうぢやないか。暫らく読書、新聞がきたから新聞を読む。早目に昼飯、塩昆布でお茶漬さら／＼。日中諷経は修證義、その語句が身にしみる。樹明君から胃の薬（いや白米大菩薩）到来、これで当分餓える心配なし、それにしてもいつまでも知友の厚情に甘えてゐてはならない、行乞、行乞、行乞に出かけやう、そして安易と我侭とを解消しよう（此一項は、読書の項の前に記入すべきだつた）。樹明君の来信の一節に『しばらく菜根を噛んで静養して下さい』とある、まことにその通り、今日は文字通りの菜根デーだらう。茶の花を※しかへる、さびしい、ゆかしい花なるかな。郵便さんがとう／＼来なかつた、めづらしい事だ。Ｊさんの妻君がいつものやうに子供多勢ひきつれて柿もぎに来た、子供はやつぱりうるさい、柿はしづかなのに。憂欝が忍び足でやつてきた、それからのがれるには、歩くか、飲むか、寝るか、三つの手段があるが、歩くだけの元気なく、飲むほどの銭がなく、寝てみたが寝つかれないので、入浴と出かける、二銭五厘の遣悶策だ、あたゝかい湯に浸り、髯を剃つたら、だいぶ気軽になつた。四日ぶりに街へ出かけたのだが、人間は人間の中へはいりたがる、それが自然でもある、私にだつてそれが本当だらう。川ぞひのみぞそばのうつくしさ、私はしばし見惚れた、此地方のそれは特別にうつくしいと思ふ。歩けばきつと蛇の二三匹におびやかされる、けふもまた蛙が喰ひつかれて断末魔の悲鳴をあげてゐた、いたましいとは思ふけれど、私はどうすることも出来ない、蛙よ、汝は汝の運命のつたなきを泣け！（芭蕉が大井川のほとりで秋風の捨児に与へたと同一の語句だ）夕飯も茶漬でぼそ／＼だつた。晩課諷経は普門品にする、偈頌の後半部はまつたくうれしい、身心がのび／＼するやうだつた。夜は読んだり書いたり、さて寝ようかなと思つてゐるところへ、樹明君の足音が聞える、久振だな、といつても四日振だ、それほど二人はしげ／＼逢つてゐた、逢はずにはゐられないのだ。あれこれ話しつゞけてゐたが、いよ／＼農繁期に入つたのでまた暫らく逢へまいといふので、一杯やることに相談一決（いつでも異議のあつたことがない！）私は支度、君

は街まで一走り。いゝ酒だつた、罐詰もうまかつた、私が大部分平らげた、そしてずゐぶん酔うて、君を困らしたらしい、例の常習的変態デマをとばしたのだらう、とにかく、私は親友に対しては駄々ツ児だ。幸にして（樹明君が今夜はいつもとちがつてしつかりしてゐた）ワヤにならなかつた、ありがたかつた。送つて出て月がある、――それから、粥を煮て食べた、このあたりの行為は夢遊病者に似てゐる。　　　　　　就寝前の言葉として（附記）飛躍はなかつた、しかし、たしかに諦観はあつた、自己超越に近いもの、身心脱落らしいもの、さういふ心境への第一歩を歩んだと信じてゐる。

・秋空、うめくは豚（追加）・朝は陽のとゞくところで茶の花見つけた　めをとで柿もぐ空が高い　秋の山の近道の花をつんでもどる・たそがれる木かげから木かげへ人かげ

十月二十日

まつたく朝寝だつた、六時のサイレンで眼が覚めたのだ、それほど、昨夜は快く酔うたのである。そしてまた、よい御飯、よいお汁だつた。山へ石蕗の花を貰ひに行く、そこにもこゝにも黄金色のかたまりがかゞやいてゐる、野の花としても、また庭の花としても賞美するに足る、すこし盛りをすぎてはゐたが、欲しいだけのものは貰つた、戻つて、ふと袖や裾を見ると、草の実だらけだ、これは一本まゐつた、花だけ求めたのはやつぱり人間のエゴだ。長崎の十返花君から、枇杷二部とハガキ、同誌はこぢんまりと気がきいてゐたが、どうやら気がきゝすぎてきた様子、もう止めるかも知れないといふ源因の一つはこゝにあらう。百舌鳥がしきり啼く、そして私は胃が悪い、むろん痔はよくない。昼御飯を食べてから湯屋まで出かける、今日も道すがら、みぞそばの美にうたれた、帰途は前の家のＦ老人と道連れになり、世間話をつゞけた。空家の庭園から、コスモスと鶏頭とを盗んできて仏様にあげる。北九州の炭坑町で、酌婦と坑夫とのダイナマイト心中があつたさうな、いかにも北州らしい、そして病酌婦と失職坑夫との心中らしい。塩昆布をこしらへる、昆布五銭、醤油十銭。柿と娘、――これは日々見る活画題だ。町のお寺で幼稚園の遊戯を見物してゐるうちに、涙ぐましくなつて閉口した、白髪のセンチメンタリスト、あはれむべきかな。夕方、どうでも雨になりさうだから畑のもの

に肥料をやる、かうしてをけば、どうやらかうやら野菜だけは自給自足が出来るらしい（いろ／＼の意味で自給自足だ、たとへば肥料に於ても）。虫の声、その声もおとろへたなと思つた。壺の茶の花が二つ開いた。燈火したしむべし、孤独よろこぶべし。

・草もかれゆくこうろぎとびあるく・山から花をもらつてもどれば草の実も

十月廿一日

曇、それから晴、いよ／＼秋がふかい。朝、厠にしやがんでゐると、ぽと／＼ぽと／＼といふ音、しぐれだ、草屋根をしたゝるしぐれの音だ。

・おとはしぐれか

といふ一句が突発した、此君楼君の句（草は月夜）に似てゐるけれど、それは形式で内容は違つてゐるから、私の一句として捨てがたいものがある。

追加三句　（帰郷　やつぱりうまい水があつたよ、の句と共に句賛の三句とする）・露のしたゝるしたしさにひたる・別れて遠い秋となつた　朝から百舌鳥のなきしきる枝は枯れてゐる

けさはほどよい起床だつた、すべてがおだやかに運ばれた、何かうれしい事でもないかな。敬治坊からの返信は私を微苦笑させた、いづくもおなじ秋の夕暮、お互に借金の風にふきまくられてゐる。どれ散歩でもせうか、それはまことに露のそゞろあるきでござりまする、はい、はい。——こゝに庵居してからもう一ヶ月になる、落ちついたことは落ちついたが、まだほんとうに落ちついてはゐないらしい。其中庵風景——その台所風景の傑作は酒徳利の林立であらう、いつでも五六本並んでゐないことはない。Ｉ老人、竹伐りにきて、縁側でしばらく話しあふ、しづかでうらやましいといふ、誰でもがさういふ、そして感にたへたやうにあたりを見まはす、まあひとりで、かうしてやつてごらんなさいと私の疳の虫が腹の中でつぶやく、かうした私の生活は私みづから掘つた私の墓穴なのだ。……竹を伐る——伐られる竹——葉のそよぎ——倒されて枝をおろされて、明るみに持ちだされ

て。――寝て起きて、粥を煮て食べる、――今日も暮れた。

・もう、暮れる百舌鳥は啼きやめない

暮れてから（あまり暗いので、それは勘で歩いたのである）学校へ樹明君を訪ねる（彼は今晩宿直だから来るやうにといつてきたのである）、例によつて一杯よばれる、風呂にもよばれる、そして雑誌にもよばれたといつてよからう、ひきとめられるまゝに泊る、帰つたところで仕方もないから、もつとも帰つた時にお茶なりと飲むつもりで、炭をいけ床をのべてきたのだが。読みつゝ寝た、昆虫の愛情についての記事が面白かつた、かういふ科学記事を読んでゐると、人間執着がとれてくる、動物としての自己他己観照が出来るやうになる。

十月廿二日

眼がさめて、あたりを見まはすと変だ、変な筈だ、学校の宿直室に樹明君と枕を並べて寝てゐたのである、そして頭痛がする、胃の工合もよろしくない、昨夜飲みすぎたためか、硝子戸を密閉してをいたためか、そのいづれのためでもあらう、朝食をよばれる、麦飯と味噌汁と沢庵漬、器物が殺風景だつたが、それでもおいしく頂戴した、新菊と本とを貰つて戻る、金木犀の香がうれしかつた。戻つてすぐ掃除、読経、それから炊事。今日は郵便が来ない、新菊のおひたしはおいしかつた。昼寝の夢を鮮人の屑買が破つた（売るものなんかあるもんかい、買ひたいものばつかりだ）。読書、読むうちに日が暮れて夜が更けた。たしかに私は飲みすぎる、食べすぎる、そして饒舌りすぎる。

窓いつぱいの日かげのてふてふ

十月廿三日

晴、朝月があつた、よかつた。鶏の声、お寺の鐘の音、百舌鳥が啼く、虫も鳴いてゐる、朝の音楽もなか／＼よろしい。蝶が身のまはりをバタ／＼とびまはつてゐたが、読んでゐる雑誌のページに卵を産みつけた、何といふ忙しさ、しかし無理もない、こんなに秋も深うなつたのだから。午後、湯にはいつてくる、農学校の運動会でみんな行くやうだが、今の私には行くだけの興味が持てない、あたりの秋色を味はひつゝ戻つた、戻つてよかつた、樹明君が留守にあがりこんで寝こ

ろんでゐる、彼はデリケートな部分をいためて、痛い／＼と苦しんでゐる、それは罰といへば罰だが、私としては一刻も早く樹明君が健康と幸福との持主となることを願はずにはゐられない。学校まで引きかへして、そしてまた樹明君がやつてきた、一人では気がまぎれないので、ぢつとしてゐられないといふ、病む人に対してゐると私も病む人のやうに感じる、私だつて咳嗽で苦しんでゐるのだ、塩昆布に茶をかけては飲み、飲みして、とう／＼薬鑵に二杯も飲んだ。樹明君がお土産——といふより外ない——として塩鱒を二尾持つてきてくれた、早速台所につりさげる、そこらあたりが急ににぎやかになつた、うれしいなあと子供のやうによろこぶ、樹明大明神様々だ。十時頃まで話す、話し倦くる塩昆布湯を飲んで。

　暗夜送つて出て長い尿する

　　十月廿四日

　時雨模様、だん／＼晴れて秋日和となる。昨夜、樹明君が手をとつて教へてくれた三平汁（？）はめづらしくもあり、うまくもあつた。今日から節食（節酒は書くまでもなし）。時雨を聴く（音の世界、いや声の世界）、私の境涯。

　・しぐれ空のしらみつつしぐれだした・しぐれては百舌鳥のなくことよ・朝からしぐれて柿の葉のうつくしさは　しぐれてきた裏藪に戸をしめる　しぐれる落葉はそのまゝでよし・もぎのこされて柿の三つ四つしぐれてゐる　もうはれてしぐれの露が干竿に

　虫があはたゞしくとぶ、こほろぎの恋、かまきりの恋、いなごの恋、今は恋のシーズン、やがて凋落の季節だ。左の親指を火傷したので、右手ばかりでいろ／＼やつてみる、やつてやれないことはないけれど、不自由千万である、指一本の力、その恩恵といつたやうなことを考へさせられる、そして片手の生活といふやうなことも。——菜を間引く、雑草がはびこるには閉口する（神仏の前には菜も雑草もおなじものだらう）。昼飯をすましてから学校へゆく、樹明君が宿直だからである、コヽアをよばれる、コヽアそのものよりもミルクがおいしかつた。風呂をもらふ、夕飯をよばれる（樹明君は病気で飲めないのに私ひとり飲むのはすまなかつたが）、夜になつて戻つた、菜葉をた

くさんさげて。友はよいかな、ありがたいかな。手探りで井戸の水をくんだ、何となく思ひが深かつた。

　ふるればおちる葉となつてゐた

　あつい茶をのんで、ぢつとしてゐる、身心が水のやうにおちついてきた、生死事大、無常迅速。……

　　十月廿五日

　まつたく朝寝だつた、床の中でサイレンを聞いたのだから。寒い、寒い、冬物がほしいなあ、ことに今日はどんより曇つてゐるので、何だか陰気くさくて仕方がなかつた。井戸端で菜葉を洗ふ。落ちたるを拾ふ、のぢやない、捨てたのを拾ふのぢや！さみしいよりもわびしかつた。風、――林の風に耳を澄ました。樹明君から来信、すまない、すまない、ほんとうにすまない。味噌を頂戴した、田舎味噌のおいしさは。夜は読書、露伴道人の洗心録はなか／＼面白かつた。寝苦しかつた。

　　十月廿六日

　すべてがもう冬の近いことを思はせる、とりわけ風の音が。夜来の風のために、けさは落葉がいつもより多かつた。郵便を待つても待つても来なかつた、頭が痛い。よくない手紙――書きたくない手紙を書いた、ウソとマコトとをとりまぜて、泣言と愚痴と嘆願とを述べ立てた、あゝ嫌だ。樹明居を往訪する、病気見舞でもあるし、お詫びでもある（私のワヤの余沫が同君へまで飛んだのである）、対坐してゐるのも気の毒だから、水を腹いつぱいよばれて戻つた（こゝの井戸はもう水が涸れて濁つて、とても生水は飲めない）。

　・暮れてなほ柿もいでゐる・明けるより柿をもぐ・柿をもぐ長い長い竿の空　あるけば寒い木の葉ちりくる・秋のすがたのふりかつてはゆく・ひとりの火がよう燃えます（改作）・法衣ぬげば木の実ころころ（〃）・更けてあたゝかい粥がふきだした　夜をこめて落ちる葉は音たてゝ

　あぶら虫にはとても好感は持てないけれど、あぶら虫の恋を考へるとき、いぢらしいやうな、おかしいやうな気分になつて殺したいとこ

ろを逃がしてやることもある。夜は読書、一茶を読んだ、私は趣味的に彼をあまり好かないけれど、彼の作品にはあたまがさがる（さげるのぢやない）。また風邪をひきそへたらしい、ひきそへ、ひきそへ、ひきそへて、さて、その風邪はどうなる？

十月廿七日

　もう足袋がほしい、つめたさを感じつゝ、明星のまたゝき、片われ月の寒いかげを眺めた。しかし、日中はよいお天気で、日向ぼつこがうれしい。防府まで出かけるつもりだつたが（いふまでもなく金策のために）、頭痛悪寒がするので、床をとつて寝た、読むに層雲（今月は早くて来月号が今日来た）があるのはありがたい。いよ／＼閉戸子となつた、そして時々自分をあさましいと思ふ、あさましい事を考へるから、そして行はないでもないから。石蕗の花のよさを知つた、野に咲いてゐても、また、床に活けてあつても。りんだうの花を一つ見つけた、さつそく仏前にそなへた。柿の木を所有するものは、その実に囚へられて、柿のうつくしさを知らない、あはれむべし。さみしさは心の底から湧く、環境のためでない、境遇のためでない、性格のためである、センチと笑はれても仕方がない。ゆふべ、あんまりさみしいから柚子をもいだ、ゆかしい匂ひかな、柚子味噌をこしらへるつもりだつたけれど、めんどうくさくなつたのでやめた、それでもすこし慰められた。苦があつて句はない、苦を観照するだけの余裕を持つて初めて句が出来る。もう醤油がなくなつた（それを買ふことが出来れば問題はない）、まだ味噌がある、塩がある、菜葉もあれば塩魚もあるぢやないか。寒いのに冬物がない、ふつと思ひついて、レーンコートを下に着込んだら、めつきりあたゝかくなつた、このコートは関東大震災の時にＳ君から貰つたそれである、今夜はまた、あの当時の事をおもひ、Ｓ君の温情を味はつた。昼も夜も寝てばかり、それでも食べることは一人前以上だ、驚くべき食慾であり、大きすぎる胃の腑である、もつとも私たちのやうなルンペン乃至ルンペン生活をやつてきた人間が、食慾を失ひ、そして食べるものを食べなくなれば、もうお陀仏である、彼等（私たちとはいひきれないから）は食べることが即ち生きることだから。——

十月廿八日

六時のサイレンが鳴つてから起きた、飯を炊き汁を煮る、そして食べてまた寝る、今日も動けさうにない。孤独よろこぶべし——が、孤独あはれむべし——になつてしまつた。井戸がいよ／＼涸れてきた、濁つた水を澄まして使ふ、水を大切にせよ、水のありがたさを忘れるな、水のうまさを知つて、はじめて水の尊さが解る。秋日和、それはつめたさとぬくさとが飽和して、しんみりとおちつかせる、しづかで、おだやかで、すべてがしみ／″＼として。ぐずり／＼して存らへてゐる、寝るでもなく、起きるでもなく、読むでもなく、考へるでもなく、——生きてゐるでもなく。——あんまり気がめいりこむから、歩くともなく歩いた、捨てられた物を拾ふともなく拾ひつゝ（それはホントウのウソだ！）。

・ただ百舌鳥のするどさの柿落葉・放つよりとんでゆく蜂の青い空　子供も蝗もいそがしい野良の日ざしかたむいて・秋の野のほがらかさは尾をふつてくる犬　たそがれる家のぐるりをめぐる・空からもいで柚味噌すつた・真昼あはたゞしいこうろぎの恋だ・秋の夜のふかさは油虫の触角　秋の夜ふけてあそぶはあぶらむし　障子たゝくは秋の夜の虫・秋ふかうなる井戸水涸れてしまつた　こゝろつめたくくみあげた水は濁つて　　　　□・みんないつしよに柿をもぎつつ柿をたべつつ

十月廿九日

けふもよいお天気で。一雨ほしい、畑のものがいら／＼してゐる。憂欝、倦怠、焦燥。——掃く、拭く、そして身心を清める。とう／＼水までなくなつた、米もおぼつかなくなつた。待人来るか来らぬか、敬坊は、樹明老は。——けふから貰ひ水、Ｆ家へいつたら誰もゐない、四季咲の牡丹がかゞやいてゐた、無断でバケツチに一杯、よい水を貰うて戻る（倹約すれば一日バケツ一杯の水で事足るのだから幸である）。待人はなか／＼来ない、出たり入つたり、歩いたり佇んだり、さても待遠いことではある、待たれる身にはなつても待つ身にはなるなといふ、ほんに待つ身につらい落葉かなだ！もう諦めて、コツ／＼柚子の皮を刻んでゐたら、さうらうとして樹明老がやつて来た、病気といふものはおそろしい、あれほど元気な君が二三日の間にすつかり憔悴してしまつてゐる、それでも約を履んで来てくれたとは——

なぜ敬坊は来ないのか、すこし腹が立つた――ありがたい／＼、うれしい／＼、しかも、生きの飯蛸をさへ持つてきてくれたのだ、この蛸まさに千両！御馳走は何もない、橙湯をあげる、そして何かと話して、たそがれの草道で別れた、お互にたつしやでうまい酒をのむやうになりたい、至祷々々。茶の花――石蕗の花観音経――修證義飯蛸は、煮るに酒も醤油もないから茹でゝをく、此地方の地口に、「ようもいひだこ、すみそであがれ」といふのがある、敬坊が来たら、酢味噌で食べさせて、うんと不平をいつてやらう。今夜はさびしい、樹明君（老の字は遠慮しよう）がおいていつたバツトをふかしながら物思ひにでもふける外ない。

・お留守しんかんとあふれる水を貰ふ・待つて待つて葉がちる葉がちる・あるくほかない草からぴよんと赤蛙　　　　□・つぎ／＼にひらいてはちる壺の茶の花・秋の夜のどこかで三味線弾いてゐる・葉がちるばかりの、誰もこない

十月卅日

けさは早かつた、そしてとてもいゝお天気だつた、文字通りの一天雲なし、澄みきつて凛とした秋だつた。かうしてゐると、ともすれば漠然として人生を考へる、そしてそれが自分の過去にふりかへつてくると、すべてが過ぎてしまつた、みんな死んでしまつた、何もかも空の空だ、といつたやうな断見に堕在する、そしてまた、血縁のものや、友人や、いろ／＼の物事の離合成敗などを考へて、ついほろりとする、今更、どんなに考へたつて何物にもならないのに――それが山頭火といふ痴人の癖だ。落葉を掃いてゐるうちに、何となしにうれしくなつた、よいたよりがあるかも知れない、敬坊は今日こそやつてくるだらう、……ところが、悪い手紙が来た（Ｓ女から）、予期しないではなかつたけれど、悪い手紙はやつぱり悪い、読むより火に投じた。しかし、私は、だいぶ長らく私自身から遊離してゐた私は今、完全に私自身をとりもどした、私は私自身の道を歩む外ない、私自身の道――それは絶対だ。私は知らず識らず自堕落になつてゐた、与へられることになれて与へることを忘れてゐた、自分を甘やかして自分を欺いてゐた、貧乏はよい、しかし貧乏くさくなることはよくない、貧乏を味ふよりも貧乏に媚びてゐた、孤独を見せびらかして孤独をしや

ぶつてゐた。……樹明君から胃の名薬（一名白米）が到来した、何といつても米と水と塩とさへあれば、私は当分死なゝいですむ、命の恩人だ、井月の口吻をまねすれば、千両、千両！殺されて、焼かれて、油虫が香ばしい匂ひを発する、人間は残忍至極の動物なるかな（油虫は人間を害しはしない）。午後、敬治坊を待合せるべく樹明君来庵、夕方まで話しながら待つてゐたが敬治坊遂に来ない、敬治坊よ、二人まで待ちぼけさせるとはあんまりひどいぞ。樹明君が畑を中耕してくれた（君は病人であることを忘れてはならない、そして畑作りの私が中耕を御存じなかつたことも忘れてはならない）、中耕、中耕、なるほどさうか！昨日今日のよい気分が夜になつて少々いら／＼してきた、早く寝床にはいる、とても寝つかれはしないけれど。

・電燈から子蜘蛛がさがりれいろうと明ける・朝はよいかな落ちた葉も落ちぬ葉も　とほくちかく稲こぐひゞきの牡丹咲いてゐる・こんなところに茶の花がけさの雰囲気・掃いてきて何とこれがらつきようの花　わたくしのほうれんさうが四つ葉になつた　あゝしてかうして草のうへで日向ぼこして　蠅が、秋蠅がもつれより・病人を見送つて落葉する木まで・恋のこうろぎが大きい腹をひきずつて（改）

今日の所感二三追記する。——茹でた章魚を切りながら、章魚といふものをよく見て、もう章魚のうまさの半分を無くしてしまつた、それほど章魚は怪物だ、グロのグロだ、章魚を最初に食した人間はよほどの人間（賢愚によらず）であつたに違ひない、海鼠も怪物だが、彼には何処となく愛嬌がある、章魚を食べるに比べては、蚯蚓や蛞蝓や蜘蛛や百足位は何でもないのに、前者は賞美せられて、後者は見向きもされない、なるほど習慣といふものは恐ろしいと思ふ。坊主の綽名を鮹ともいふ、頭部がつるりとしてゐるからだらうが、私ばかりでなく坊主には鮹好きが多い、とにかく私は鮹好きだが、自分で料理すると、あのぬめ／＼した吸盤が眼について、食慾をそゝられない、総じて日本料理は眼で最初に食べ、そして舌で味ふ品が多いが、鮹は見ないで、舌、いや歯で食べるべきだらう。畑をいつも飛びまはつてゐるこうろぎも、もう孕んでゐるらしい、手や足が一本位ないのが多い、恋の痛手とはこのことだらう。粥といふものには特殊な情趣がある、今日は樹明君と二人で粥を煮て食べたが、何だかしみ／″＼としたもの

を感じた、庵には誰も来ない二人で二人の夜を——といふ樹明君の近作があるが、あのあつい粥をふき／＼すゝりあふところにはしたしさそのものが湯気のやうにたちのぼるやうだつた。十七日から今日まで十三日間、よく私も辛抱した、十七日の朝、財布をしらべたら二十五銭あつた、そこで十銭が醤油、五銭が撫子、十銭が焼酎となつて、まつたくの一文なしとなつた、そして今日まで一文なしで暮らしてきたのである（米とか味噌とは別にして）、酒も暫らく飲まない、飲まうにも飲めない（もつとも、その間に樹明君に三度ほど御馳走になつた）。夜になつて風が出て、木の葉がしきりに落ちる、落葉は見てよりも聞いてさみしい、また聞くべきものだらう。

十月卅一日

昨日よりもよいお天気で。——そして私はいら／＼して、とてもぢつとしてはゐられないので、十時過ぎ、冷飯を掻きこんで、ぶらりと外へ出た、さて何処へ行かうか、行かなければならないところもなければ（あることはあるけれど行けない）、行きたいところもない、まあ、秋穂方面でも歩かうか。途中、駅のポストへ出したくない——だから同時に出してはならない手紙を投じた。椹野川に沿うて一筋に下つてゆく、潮水に泡がういて流れる、秋の泡とでもいはうか、堤防には月草、撫子が咲き残つてゐる、野菊（嫁菜ではない）がそこここゝに咲いてゐる、砂ほこりが足にざら／＼して何だか物淋しい、やたらに歩いて入川の石橋に出た、海は見えないけれど、今日は立干をやつてるさうで、鯔が上つてくる、それを網打つべく二三人の漁夫が橋の上で待つてゐる、見物人が多い、私のその一人となつて暫らく見物した、そして労れたので、そこからひきかへした、名田島の中央を横ぎつて、駅の南方をまはつて帰庵したのは夕方だつた、それから水を貰ふやら、粥を煮るやら、お菜をこしらへるやらするうちに、すつかり暮れてしまつた。出来秋の野良仕事はまことにいそがしい、その間をぶらつく私は恥づかしかつた、私はまつたく不生産的人間だ、社会の寄生虫だ！夜は早寝した、明日は朔日だ、よし、明日からは働かう。

・水音の秋風の石をみがいてゐる　水はたたへて秋の雲うつりゆく　　　ざれうた一首　何もかもウソとなりたる世の中に　　マコトは酒のうまさなりけり

十一月一日

曇、早起、御飯を食べて、御経をあげて、さて本でも読まうかといふところへ樹明君が長靴をひきずつてきて、ひよつこり顔をだした、顔色がよろしい、今朝は部落の早起会で（彼は青年団長である）仕事をすましてそのまゝ来たといふ、敬治坊からの手紙を見せる。果して敬治坊は耽溺沈没したのだつた、関の鴉に笑はれたらしい、私へは、叱られるから手紙を出さないと書いてある、私には彼を叱る資格はないが、彼を叱るだけの熱意を私が持つてゐることを知つてくれてゐるのはうれしい、お互にもう過去をすつかり清算してもよい、いや、さうしなければならない時期になつてゐる。敬治坊、これからは、うまくない酒、悔をのこすやうな酒は、お互に断然あほらないことを誓約しようぢやないか、そしてそれを断然実行しようぢやないか、敬治坊！物の声といふものはおもしろいものである、けさも、鶏の鳴声や汽車の音響によつて、もう夜明けにちかいことを知つた、大気の関係で、同一の音がいろ／＼に響くものである、そしてけさはまた風の工合で、駅売の触声がよく聞えた、べんとう、べんとう、――だが、ビール、正宗は聞きとれなくて仕合だつた。私の無一文を気の毒がつて、樹明君が彼も此頃乏しい銭入から風呂銭として、二十銭おいていつた、私はその十銭白銅貨二つを握つて、考へた。――これは樹明君へ与へる山頭火報告書である。――

一　金三銭　入浴料一回分　　　　一、四銭　撫子小包一　金五銭　焼酎五勺　　　　　　　一、五銭　醤油二合　　（此誤記は不用意の皮肉だ）　一、三銭　端書弐枚　〆金弐拾銭也　差引残金なし

この報告書の具体的記述はかうである。――正午のサイレンをきいてからぶらりと出た、まづ風呂にはいつた、まだ風呂が沸いてゐないので、待つ間におかみさんから針と糸とを借りて、ほころびを縫ふたも一興、それから例のをギユツ、まことにこれは一週間振の一浴であり、一週間振の一杯（正確にいへば半杯）だつたのである、そして今日は椹野川にそうて溯つた、この道にもいろ／＼のおもひでがある、身にあまる大金をふところにして山口の税務署へいそいだこともあれば、費ひ果して二分も残らず、ぼう／＼ばく／＼としてさまよふたこともある、そんな事を考へたり、あちこちの山や野や水を眺めて、と

う／＼大歳駅まで来てしまつた、そして新国道をひきかへしたが、かへりついたのは薄暗い頃であつた。……朝も三平汁、昼もおなじ三平汁（三平汁は樹明直伝のもの、朝も三平、昼も三平、そして晩も三平だつたら、合して九平、クヘイ、クヘイ）、晩はにんぢん葉の煮付、何を食べてもうまい、此点に於て、私はほんとうに幸福だ、やつぱりメグマレテヰル！

朝早い柿をもぐより食べてゐる（樹明君に）・この山里へ朝からひゞくは柿買車で　わが庵の更けては落葉の音するだけ・道はひとすぢの、バスがくる蟹がよこぎる・重荷おもくて高きへのぼるたかい空

ちよつとそこらの枯枝をひろひあつめたゞけで、茶を入れるほどの湯はわいた、その茶のよろしさ、あたゝかう身ぬちへしみ入つた。仏説四十二章経を読んだ、恥ぢ入つた、出家沙門とは何ぞや、あゝいたい、いたい、いたい。今日の新聞の運勢欄が眼についた、かう書いてあつた、——一白の人、満山紅葉の錦を以て飾られし如く美々し、——これは美々しすぎる、そんなに美々しくなくてもよろしい、ちよい／＼、ところ／″＼美々しければ結構ですよ、それはとにかく、もう紅葉シーズンとなつた、見わたす山の雑木紅葉がうつくしい、石の鳥井に銀杏のかゞやき、白壁土蔵に楓の一もと、などはありふれた月並風景だけれど、さすがに捨てがたいものがある、小高い丘の雑木二三本、赤く、黄いろく、もみずつてゐるのは、たちどまつて眺めずにはゐられない。私が秋晴半日逍遙してゐる間に、樹明君が帰宅の途上、立寄つたらしい、いつぞや無心しておいた原稿紙がちやんと机の上に持つてきてある、そして汽車、自動車の新らしい時間表が襖に貼りつけてある、多謝々々。今夜は久しぶりおいしい水をのんだ、Ｆ家の井戸の水はよい水だ。

十一月二日

昨夜は割合によく眠れたので、今朝の眼覚めもわるくない、お天気は照つたり曇つたり、晴れた方が多く温かだつた。夢窓国師夢中問答集を読む。やつと酒壺洞君から鉢の子到着、これは寄贈用として。今日も出歩かずにはゐられなかつた、早昼飯を食べてから、西へ西へとたどつた、道が時々なくなるので、引き返したり、がむしやらに雑草

を踏み分けたりして、やうやく小山を一つ越えて、嘉川へ着いた、こゝにもおもひでがある（周中三年生として下関へ修学旅行途上の一泊地だつた、等、等）、そしてそこから旧国道を戻つて来た、土ほこりには閉口した、そのために、だん／＼憂欝になつて、とう／＼頭痛がしだした。夕方、樹明君来庵、茶をのんで、粥をたべて、しばらく話しあつた、君も近来禁酒で（疾病のために）、そして私が怠慢なので（三八九の原稿も書かないから）、何となく不機嫌だつた、私は内心、気の毒やら申訳ないやらで恐縮したことである。関門日々新聞の九星欄を見ると、——一白の人、紅葉の美も凋落し葉を振ひ落せし如き日——とある、これではたまらない、何とかならないものかな、もつとも、私はいつも裸木だが！山の野菊（嫁菜の類）、龍胆がうつくしかつた、ひたゝきもめづらしく可愛かつた、この小鳥を見たのは何年ぶりだらう、山柿や櫨紅葉のよいことはいふまでもない。りんだうを持つてかへつて活けた、山の花として満点。

・みんなもがれてこの柿の木は落葉するばかり・この山奥にも田がありﾠ蝗があそんでゐる・りんだうはつゝましく蔓草のからみつき・見はるかす野や街や雲かげのうつりゆくを

十一月三日

天地玲瓏として身心清明、菊花節。ほんとうによいたよりがあつた、同時にそれは恥づかしい（受取人の私には）たよりでもあつた。句集を寄贈発送する、ほがらか／＼。樹明君来庵、ひさしぶりに飲んだ、酔うて歩いた、歩いてまた飲んだ、別れてから少ワヤ、おそくかへつてきてお茶漬をたべる、独身者は気軽でもあればみじめでもある。葉が落ちる、柿、枇杷、棗。——

・秋はほがらかな日かげ、もう郵便がくるころ・みほとけはひとすぢのお線香まつすぐ・落葉ふる奥ふかくみほとけを見る

十一月五日

今日一日は殆んど寝て暮らした、もつたいないことである。昨夜はやつぱり飲みすぎ歩きすぎだつた、しかし脱線ではなかつた、混線程度にとゞまつた。それでも労れた、何しろ半月ぶりだつたから——も

つとも時々あのぐらゐの酒と乱歩とがないと、生存してゐられない。

　　寝てをれば花瓶の花ひらき・今日の落葉は落ちたまゝにしておかう

　　十一月六日

　朝寝した、晴れてゐる、元気回復、何でもやつてこい！敬坊から来信、「松」十一月号が来る。落葉を掃きつゝ、身も心ものびやかに、大空を仰ぎつゝ。何となく人の待たれる日、といつて誰も来ないけれど。正午のサイレンをきいてから湯屋へ、かへりみち、墓場の黄菊（これがほんとうの野菊であると思ふ）を無断頂戴して来て、仏前に供へ奉つた。銀杏かゞやかに、山茶花はさみしく。このあたりには雀がゐない、どうした訳だらう、私は雀に親しみを持つてゐる。裏を歩いたついでに拾うてきた枯枝で、ゆふべの粥がうまく出来た、何でもない事だけれど、ありがたい事である。日ごろはつゝましく、あまりにつゝましく、そして飲めばいつも飲みすぎる、——これも性であり命である、一円をくづして費ふ人もあれば、そのまゝ費ひ果す人もある。業報は受けなければならない、それは免かれることの出来ないものである、しかし業報をいかに受けるかはその人の意志にある、そして生死や禍福や、すべてを味到することが出来る力は信念にのみある。

　　もう穴に入るまへの蛇で日向ぼこ・ほがらかにして親豚仔豚・夕日の、ひつそりと落葉する木の・音がして落ちるは柿の葉で・あれは木の実の声です・夜はしぼむ花いけてひとりぐらし

　夜に入つてから樹明君来庵、渋茶をすゝりながらつゝましく話して別れた、月も林のかなたに、汽車の響がもうだいぶ更けたらしい調子になつてゐた。アルボースせつけんのきゝめが意外にてきめんなのに驚かされた、まだ二回しか使はないが、それでも頭部のかゆがりがかゆるくなくなつた、私が此頃とりわけいら／＼している源因の一つは、このかゆがりがかゆくてかゆくて、かけばいたむし、かかずにはゐられないし、それこそ痛し痒しの苦しみだが、そのかゆがりにあると思ふ、しかし痒いところを掻く時の気持は何ともいへない快さである。

十一月六日

けさも朝寝、お寺の鐘を床の中で聴いた、空はどんより曇つてゐるが私の心は重くない。妙な、珍らしい夢を見た、Ｓさんが訪ねてきたのである、そしてさらにＫさんも訪ねてきたのである、そこへ父があらはれる、彼の彼女があらはれる、あの懐かしくてならない老祖母までがあらはれてくれたのであつた。……ひたきがきて、そこらで啼いてゐる、すぐ出て見たけれど、枝から枝へうつるらしい姿は眼に入らない、やがてどこかへ飛んでいつてしまつた。雀がゐないのはまことにさびしい、樹明君の説では、このあたりは藁屋ばかりで巣がかけられないからだらうとの事、さうかも知れない、では私が一つ雀の宿をこしらへてあげやうか。はらみこうろぎは腹がおもくてとべないので、よち／＼あるいてゐる、子蜘蛛がおほぜいで網を張るおけいこをしてゐた。午後一浴（一杯がないのは残念々々）、もうトンビをきてゐる人もあるのに私はまだ単衣だ、ＫＳよ、早く送つてちようだい。酒屋さんが空罎とりにやつてきた、酒のことを話し合ふ、酒では私も専門家の一人だ（酒客としても、またかつては同業者としても）、今日の会話はこれだけ。日暮頃から、やうやう雨になつた、慈雨といつてよからう、野良仕事には困るだらうけれど、水不足には一層困るから。

・山をあるけば木の実ひらふともなく・水くんでくる草の実ついてくる　森はまづいりくちの櫨を染め

夜はしづかだつた、雨の音、落葉の音、そして虫の声、鳥の声、きちんと机にむいて、芭蕉句集を読みかへした、すぐれた句が秋の部に多いのは当然であるが、さすがに芭蕉の心境はれいろうとうてつ、一塵を立せず、孤高独歩の寂静三昧である、深さ、静けさ、こまやかさ、わびしさ、――東洋的、日本的、仏教的（禅）なものが、しん／＼として掬めども尽きない。

十一月七日

とう／＼朝寝坊になつてしまつたが、眠られないより眠られる方がよろしい、よき食慾はあつたけれど、よき睡眠はなかつたから。今日は立冬、寒い、寒い、洟水が出るから情ない、冬隣から初冬へ。晴れ

てはあたゝかく、曇れば寒い。樹明君からサクラ到来、そのためでもあるまいが、少し跳ねて少しワヤ！

十一月八日

やつぱり跳ねすぎた、――飲む、寝る、――そして。盃の焼酎に落ちて溺れて蠅が死んだ、それは私自身の姿ではなかつたか。

十一月九日

ブランクだ、空白のまゝにしてをかう。十日の分もおなじく、さうする外ない。

十一月十一日

星城子君から小包が来た、今春預けて置いた古袷を送つて下さつたのである、これでやつと冬着をきることが出来る。この一封を見よ（山頭火様御煙草銭として若干金添入してあつた）何といふあたゝかい星城子君の志だらう、剣道四段の胸に咲いた赤い花ではないか。

十一月十二日

どうしても身心がすぐれない。昨日、星城子君から戴いたゲルトを汽車賃にして白船居を訪ねる、いつ逢つてもかはらない温厚の君士人、すこし快活になつて、夜は質郎居で雑草句会、いつものやうに与太もとばせない、引留められるのを断つて二時の夜行列車で防府まで、もう御神幸はすんでゐた、夜の明けるまで街を山を歩きまはつた、此地が故郷の故郷だ、一草一木一石にも追憶がある。佐かた利園はやつぱりよかつた、国分寺もよかつた。

石へ月かげの落ちてきた　　　□街はお祭の、せつせと稲を刈つてゐる

十一月十三日

ます／＼憂欝になる、白船居でめぐられた快活が防府でまたうばはれてしまつたのだ。篤君に逢つたのはうれしかつた、そして東路君に逢へなかつたのは、遺憾といふよりも不快だつた。一時の汽車で戻つた、戻つたことは戻つたけれど、ぢつとしてゐられないから、街へ出

かけてシヨウチユウを呷つた、そして脱線しえられるだけ脱線したらしい（意識が朦朧としてゐたから）。

　　十一月十四日――十七日

　ブランク、強ゐて書けば、降つたり晴れたり、寝たり起きたり、泣いたり笑つたり。

　　十一月十八日

　柿はすつかり葉をおとした、裸木もそうごんなものだ。茶の花ざかり、枇杷の花ざかり。

　　十一月十九日

　どうにもかうにもやりきれないから、一升借りてきて一杯やつてゐるところへ樹明君来庵、さしつさゝれつ、こゝろよく飲んだ、そして街までいつしよに出かけて、また二三杯。私はいつものやうでなく、しつかりしてゐたが、樹明君は日頃に似合はず酔ひつぶれてしまつたらしい（私は先に帰つてきた）、君の酔態を観てゐると、私は私自身の場合よりも悲しく感じる。

　　十一月二十日

　未明に樹明君がひよろ／＼してやつてきた、そして一日寝て暮らした、みじめな二人だつた。樹明君は夕方に帰宅して、またやつてきた、あの良妻をごまかしたのである、私は家庭争議の起らなかつたことを喜ぶと同時に、君の酒癖を憎まずにはゐられなかつた。樹明君の妻君に幸福あれ。今日一日、私はめづらしく冷静だつた。

　　十一月廿一日

　私の近来の生活はただ愚劣の一語に尽く。

　　十一月廿二日

　独坐、読書。

　　十一月廿三日

　すこし気分がよくなつた、一升借りてきて樹明君と飲む。夜、街の

人々といつしよに飲んだ、可もなく不可もない酒だつた、樹明君から或る家庭争議を聞いた、情痴といふやうな事は私にはよく解らない。

十一月廿四日

しぐれ、しぐれ、しぐれ。ありがたい米をいたゞいた、お米観音とでもいはうか。柿もぎにきたＳ家の子供がやたらに花をむしる、それをＳがむやみにむしるなと叱る、しかしＳ自身が花をむしつてゐるのだ、彼はそれを花瓶に活けるではないか！胃袋が強すぎて頭脳が弱すぎる、それが私だ、また、胃袋は正直で頭脳は横着だ、それは誰もだ。

十一月廿五日

けふもしぐれる、身心やゝよろしくなる。こほろぎの子、あぶらむしの子、子は何でもかあいらしい。雨に汚れ物――茶碗とか鍋とか何とか――を洗はせる、といふよりも洗つてもらふ。俳句講座を漫読して、乙二を発見した、何と彼と私とはよく似てゐることよ、私はうれしかつた、松窓七部集が読みたい、彼について書きたい。けふはほんとうにしみ／″＼としぐれを聴いた。

・さんざふる夜の蠅でつるみます・たゞ一本の寒菊はみほとけに・山茶花さいてお留守の水をもらうてもどる・誰かきさうな空からこぼれる枇杷の花・しぐれたりてりだしたりこゝそこ茶の花ちつて・冬蠅とゐて水もとぼしいくらし　　　改作二句　この柿の木が庵らしくするあるじとして　こゝにかうしてみほとけのかげわたしのかげ（晩課諷経）

十一月廿六日

徹夜、ほんとうの自分をとりもどす。澄むなら澄みきれ、濁るなら濁りきれ、しかし、或は澄み或は濁り、いや、澄んだらしく、濁つたらしく、矛盾と中途半端とを繰り返すのが、私の性情らしい。いくら考へても仕方がないから歩いた、私はやつぱり歩かなければならないのだ、歩きつゝ考へ、考へつゝ歩くのだ、そして歩くことがそのまゝ考へることになるかも知れない（此場合の『歩くこと』は必ずしも行乞流転を意味しない）。櫨を活ける、燃えあがる情熱だ、同時に情熱

の沈潜だ、赤の沈黙だ、自然の説法だ。久しぶりに掃いた、柿の葉はすつかり散つてしまつて、枇杷の花がほろ／＼こぼれる、森の栗の葉がちらほらとんでくる。落ちついて身辺整理、机の上が塵だらけだつた。人生は『何を』でなく『如何に』ではないかとも思ふ、内容は無論大切だが、それはそれを取扱ふ態度によつてきまるのではあるまいか。樹明君が来て、私の姿は山男のやうだとひやかす、ひやかしぢやない、じつさいなのだらう、山から来た男どころか、泥沼でもがく動物だらう。やつぱり酒だ、最後には涸れた川へ転落した。

　　十一月廿七日

　敬坊のやつてくる日だ、予期すると先月のやうに違約されたとき癪にさわるから、待たないやうにして待つてゐるのだ。午後になると、樹明君が待ちきれなくてやつてきた、連れだつて敬坊の実家附近へゆく、ゐた、ゐた、今、帰つたところだと敬坊がいふ、坊ちやんがついてゐる、奥さんの用心ぶかい策かも知れない、瘤つきの敬坊！　防腐剤添加の敬坊、坊ちやんは私を忘れてゐなかつた。途中、茶店で食べた鰯の卵の花鮨はうまかつた。樹明君が鯨肉、私が海老雑魚、敬坊がヱソを買ふ、酒も醤油も彼に買はせる、たいへんな御馳走だ、まづ鯨の酢の物、ヱソの刺身、たゝき魚の吸物、海老の煮付、等、等、等だ。其中庵の饗宴だけでは足らないので、三人揃つて街へ、そして例の寉で要領よく飲んだ、この三人で、この始末は大出来々々々。

　　十一月廿八日

　しづかな一日、しぐれがわびしかつた、友がこひしかつた。昨日、樹明君から袷、敬坊から帽子を頂戴した。

　　十一月廿九日

　朝早くＦ家から蕪と柿とを貰つた、そしてＳから冬着を送つてきた、ありがたし、かたじけなし。寒かつたが上天気だつた、私だけには。樹明君が夕方来て、入浴（十日ぶりだつた）して着物を改めてゐる私を見て、眼をみはつた、が、紳士のやうだはいつてくれなかつた。

　　十一月三十日

寒い、水仕舞する手が冷たい、もう足袋なしではゐられない、いよ／＼本格的に冬となつた。まことに好いお天気である、山を歩きまはる、どてらをきて、層雲をもつて、——とんぼまでうれしがつてゐる、山笑ふは春の季題だが、秋の山だつてほゝゑんでゐる。ほつといた音信を書く、駅のポストまで出かける。私は柿を食べるよりも眼で味ふ、私は不幸にして、まだ木の実の味はひを解してゐらない。畑の野菜が食べきれないほどになつた、ちしや、ほうれんさう、しんぎくのうまさよ。夕方から約束通りに学校の宿直室で樹明君と飲んだ、飲みすぎた、ソーセージはうまかつた、理髪して貰つてうれしかつた。

・あしもとのりんだう一つ二つひらく　からだいつぱい陽をあびとんぼに好かれる

自省自戒の言葉二三。夜は長かつた、暗かつた、朝が待ち遠かつた、とう／＼朝が来た、死にたくても死ねない人生だ、死ねないのに死にたい人生だ。

十二月一日

更生一新の朔日でなければならない。何ともかともいへない好日だ。昨夜の今朝だから、だいぶ労れてはゐるけれど、身も心も軽い、冬に春がある、さういふ今日だ。樹明君が朝早く来た、微醺を帯びてゐる、昨夜の残りをひつかけたのださうな、ソーセージがうますぎて少々あてられたといふ、談笑ちよつとで別れる。釣瓶から蛙がとびだした、彼は文字通りの井底蛙だつたのだ、広い大地をぴよん／＼とんでいつた、彼に幸あれ。何よりも借金取が嫌だ、それほど嫌なら借金しなければよいのに——今日の借金取はＦのおばさん、彼女は最初の来庵婦人といつてよからう。大した借金はないが、また出来もしないが、借金だけはしないやうに努めませう（つまり懸で飲まなければよいのです）。今日も山を歩いた、私の別荘——山裾の草原日向——で読書したり冥想したりした、来庵者はこゝへ連れて来たいと思ふ（うまい水もわいてでる）。

・けさはけさのほうれんさうのおしたし・茶の木も庵らしくする花ざかり・すくうてはのむ秋もをはりの水のいろ・冬山をのぼれば遠火事のけむり・あたゝかくあつまつてとんぼの幸福（とんぼの宿）・赤

さは日向の藪柑子・とんぼにとんぼがひなたぼつこ　ちろ／＼おちてゆく冬めいた山の水・ふめば霧がせなかに陽があたる　　　　□・お地蔵さまのお手のお花が小春日　　　　□・めつきりお寒うなりました蕪を下さつた　霜の落葉にいもりを汲みあげた

夜、樹明君が酒とソーセージとを持つて来庵、酒もうまい、ソーセージもうまい。更けて街まで送つてゆく（といふつもりで出かけたが、途中すぐ別れた）、そしてそこらをたゞ歩いて戻つた、歩けば心がなぐさむといふのか、さりとは御苦労千万。

十二月二日

日々好日でもない、悪日でもない、今日は今日の今日で沢山だらう。鉄筆を握つたり、肥柄杓を握つたり。

十二月三日

第五十回誕生日、形影共に悲しむ風情。午後、樹明来庵、程なく敬坊幻の如く来庵、三人揃へば酒、酒、酒。酒が足りなくて街へ。——

しぐれへ三日月へ酒買ひに行く

例によつて街を飲みついたが、三人とも無事に帰庵、三人が枕をならべていつしよに寝てゐるのは珍妙だつた。

・茶の花や身にちかく冬のきてゐる・落葉して大空の柚子のありどころ

十二月四日

お誂向の雨、迎酒なかるべからずで、また街まで酒買ひに、……それからワヤ、大ワヤ、……昨夜のメチヤに今日はクチヤを加へた！

十二月五日

昨日のワヤのつゞき、ムチヤクチヤだ。敬坊をおきざりにして帰庵する、そこらを片づけてすこしおちつく、ぐつすり寝た。

十二月六日

鉄筆を握りつゞける。樹明来、家庭の空気が険悪ださうな、あたり

まへだ、梅川忠兵衛のやうな場面を演じた罰だ、おとなしくあやまつて、しばらく謹慎すべし、あなかしこ。風がふく、いやに身にしみる風だ。

十二月七日

終日、三八九の仕事。夜おそく樹明君が来てお土産の新聞包をひろげた、巻鮨、柿、ザボン、焼魚、それは或る家によばれて貰つたのだといふ、酒はないがおいしかつた。

・住みなれて茶の花のひらいてはちる・冬日の葉からとべばとべる虫

十二月八日

しぐれたり照つたり、何だか小雪でもふりさう。やつと三八九出来、すぐ発送したいのだが、郵便料がない、それでもまあこれで一安心、重荷をおろしたやうな心持。

冬は濁り井のなぐさむすべもなくて

これは実感そのまゝだ、濁り水を常用してゐるせいか、先日来腹工合が妙である。一週間ぶりに入浴、さつぱりして夜食は白粥。強ゐられた善人はみじめだ、強ゐられた貞婦、強ゐられた高僧。△人間は買ひかぶられるよりも見さげられた方がよい。△ムリのない生活、ムラのない生活、それは必ずしもムダのない生活ではないが。もう凩だ、冬雨だ。樹明君よい御機嫌でお土産持参、有難く頂戴、それは醤油一升罎、お正月までは大丈夫だ。

十二月九日

晴れ／″＼とした、自然も人間も。昨日、発行届を出すのに、内務大臣の名を忘れてゐた、中橋か、山本か、まゝよとばかり中橋にしたら、山本だつた。何もかも忘れるとよいのに、自分自身をも忘れてしまへ。△型にはめて生きた人間を評して貰ひたくない、生身は刻々色もかはれば味もかはる、それでよいのだ、それが本当だ、私は私でたくさんだ、山頭火は山頭火であればけつかうだ。食べても食べてもほうれんさうが食べきれない、といふやうな事を思ふのも人間のエゴだ

らう。△木の実の味が解らないでは、自然を十分に味へない、自然は眼でも耳でも舌でも――からだぜんたいで味はなければならない。

世の中はウソもマコトもなかりけり　　　　火はあたゝかく水はすゞしく

これが三八九を綴ぢながらの感想だつた。左足が神経痛で、少々びつこをひくやうになつた、けつかう、けつこう、足が一本になると身持がよくなる、よくならずにはゐまい（両足ともいけなくなつては、いつぞや樹明君と話しあつたやうに、自殺しなければなるまいから困る、自殺そのものには困らないけれど、後始末に困るだらうと思ふ）。夜は樹明君が手伝つてくれた。私の大根は葉ばかり出来て根が出来ない、大根でなく大葉だ、それでも今朝おろしにして食べたらうまかつた。△自分の手で作つた野菜はヨリうまい、これはエゴぢやない、自然と自己との融合調和からくるよろこびだ（自分の所有する土地で出来た野菜だからうまいといふのはエゴだらう）。死期遠からず――何となくこんな気分になつた、心臓の悪いことは自分でもよく知つてゐるが、それよりほかに、何物か自分に近づいてくるけはひを感じる。

十二月十日

寒い、霜、氷、菜葉を洗ふ手がかじけた、このごろは菜葉ばかり食べてゐる、ほかに食べるものもないが。△手といふものはありがたいものだと、手をうごかしながらつく／″＼思つたことである、自己感謝とでもいふか。貧苦と貧楽、御酒漫談、などゝ他愛もない事を考へながら三八九の発送準備、それにつけても郵送料二円ほど欲しいなあ。晩方、Ｊさんが白菜二玉持つてきてくれた、見事々々。私の生活を羨むなかれ、これはウソからでたマコトだよ。

・いつしか明けてゐる茶の花・ひらりとおちたは蔦のいちまい・よい月夜の誰かを待つ

十二月十一日

今日ですつかり三八九の仕事がをはつた、切手を貼つて出しさへすればよいのだが、さて質入するやうな物はなし、売るほどの品はな

し、山口へ行乞するよりほかに仕方はあるまい、どこからか一枚舞ひこまないかな、咄、乞食根性！腹がいたい、泥水のおかげだ、意味深長々々。ふと干柿をちぎつて食べた、何といふうまさだらう、私ははじめて柿のうまさを知つた、二つ、三つ、六つ食べた、実に何ともいへない甘さだ、自然そのものの甘さだ、太陽の甘さといつてもよからう、これも一つの生甲斐だつた。独語と寝言、独身者が老後になればね。或る男の手記、彼はま夜中にひとり踊る、何を踊る、ステテコ、ステテコ、オツトヤレコラ、ハクシヨイ。酒が飲みたいよりも煙草が吸ひたくてたまらないので、最後の五銭玉を握つて出かける、なでしこ四銭、それからＮ酒店へいつて、カケで焼酎一杯、御馳走々々々、まだ一銭銅貨が残つてゐる。遠眼と近眼とこんがらつてさびしうする。樹明君が新そばの粉を持つてきてくれた、茶をのみながら浮世話、今夜はいやにしめつぽく語りつゞけた。

・しぐれる夜の歪んだ障子・茶の花のちるばかりちらしてをく

十二月十二日

雨となつてあたゝかくなつた、山口行はオヂヤンになつたが仕方ない、あすはよい日だらう、まあ、よい日としてをかう。鴉啼がよくない、何だか気にかゝる、人の身も自分の身も。けふもよくしぐれる、午後は風が出てさみしがらせた。あれこれと用事がある、今月は——先月は気分が悪くて怠けたが——句稿を層雲社へ送るべくまとめた。夜はさみしかつた、必ずしも酒がないためばかりではない。

ほほけすゝきに風がある紅葉ちりつくし・きものがやぶれる音をゆく霜朝・誰も来ない茶の花がちります・お茶漬さら／＼わたしがまいてわたしがつけたおかうかう・もう冬がきてゐる木きれ竹ぎれ・もう凩の、電燈きえたりついたり・月の凩の菜葉のかげ

十二月十三日

曇后晴、山口行、寒かつた、いや冷たかつた、寒いといふのは誰もがいふ、冷たいのは寒さを身に感じたから。初雪、屋根にも畠にも、もつともちよんぼり初雪らしく。山口へ行つた、Ｓさんの奥さんに壱円五十銭借りて（売るべく持つてゐた本弐冊をあづけて）、そして三

八九を発送した、やれまあ、何とはづかしい。往復六里、歩いたが草臥れた、とても御飯では我慢しきれないでＫで飲んだ、そしてそれから学校の宿直室へ、樹明君と一時間ばかり話して、戻つて寝た。今日の小遣は。――

一　金七銭　バツト　一一、　五銭　古雑誌一、十五銭　焼酎二杯

これだけ、これだけ（Ｋの分は別、まづ一円位）。

百舌鳥におこされて初雪　茶の花やけさの初雪の・寒い身のまはりをかたづける　街は師走の、小猿も火鉢をもらつてる　あれは監獄といふ寒い塀　入日をまともに金借りて戻る河風・月が、まんまるい月が冬空

十二月十四日

三八九をだしてほつとしたのとアルコールのきゝめによつて、ぐつすりと寝た、たゞすこし胃の工合が悪い、十週間ぶりにちと飲みすぎたやうでもある。曇り寒く雨となる、今日此頃はほんとうにようしぐれる、しかししぐれはわるくない、気分がおちついて物をしんみり味ふやうになる。煙草が粉までなくなつた、火鉢をかきまはして灰の中からバツト吸殻を見つけだしたときのうれしさ、それは砂金採集家が砂金を拾ふやうなものだろう、しかし何としても恥づかしい仕業だ、いはゆる乞食根性のいやしさだ、慾望の奴隷であるな。いね／＼と人にいはれつ年の暮――路通の乞食吟である、私は幸にして此季節には行乞に出かけなくてすみさうだ、ありがたい。こゝろのプロレタリアであれ、清く純であれ。白菜はおいしいね。みんな死んでゆく、――彼も死んだ、彼女も死んだ、――心細いよりも早敢ないよりも、もつと根本的なものを感じる、生死去来真実人、生死は仏の御命なり、生死去来は生死去来なり、生也全機現、死也全機現、生死になりきれ、生もなく死もないところまで精進せよ。

冬になつた老眼と近眼とこんがらかつて

老境の述懐である、しづかなあきらめである、冬日影のしめやかさである、私の自画自賛である。昨日、山口では、俳句講座と浄土三部経とを預けて郵税を借りたが、Ｓ奥さんに対談しつゝある自分の姿を

思ひだすと、それは苦笑に値するばかりだ。山口は私にとつて第三故郷ともいふべき土地、やつぱりなつかしいうれしい気持をそゝられた、山のよさをはつきり知つた。ゆつくりして湯田温泉に一浴したかつたが、その余裕も持たなかつた、また近いうちに出かけやうと思ふ。

・わらやしづくするあかるいあめの・のびあがりのびあがり大根大根・夕焼ける木の実とし落ちたどんぐり・こんなところに水仙の芽が、お正月

昨日の山口行は私にいろ／＼の事を考へさせたが、途上、花柳菜を見て宮崎を思ひ、葉牡丹を見て熊本を思つた。△抗議二つ、その一は、独居をうらやむなかれ、その二は、古人の様式に今人をあてはめるなかれ。さみしくなれば、畑を見てまはる、家の周囲をぐる／＼まはる、それでもなぐさめられる。いつのまにやら、干柿をすつかり食べつくした、こゝに改めてＦ家のおばさんにお礼を申上げなければなるまい、こんなところにも人間の推移があるからおもしろい。夜、突然、敬坊来庵、酒と汽車弁当とを買つてくる、敬坊は何といふなつかしい人間だらう、酒がなくなり、弁当を食べてしまつてから街へ、そして例の如し。

・酒もなくなつたお月さんで

この句が悪くないならば——よくもなからうが——その程度ぐらいにふざけて酔うたのである。

・月がのぼつて何をまつでもなく

この句には此頃の私が出てゐると思ふ、待つでもないで待つてゐる私である。……

十二月十五日

悪かつた、小郡に於ける最大悪日だつた。小人玉を抱いて罪ありといふ、私は玉を預けられて罪を造つたのである。筆にも言葉にも現はせない悪、毒、悔だつた。

十二月十六日——十九日

気分が悪い、樹明君といつしよになつてヨリ悪かつた、私のなげやりと樹明君のむしやくしやとが狂ほしく踊つて歩いた！

十二月十九日

踊りつかれて、戻つてきて、読経した。——本来空、畢竟空である、空即空、色即色だ、この事実が観念としてゞなく体験として滲みだした。執着を去れ、自からごまかすな、我を捨てゝしまへ、気取るな。——▵色即色だ、それが空即空だ、十方無礙の空であり、不生不滅の色である、色に執するが故に色を失ふ、空を観じて色に徹するのぢやない、色に住して色に囚へられないが故に空に徹するのである、喝。私はしゆくぜんとして私を観た。——

十二月二十日

風の、己の、その声を聴く。

十二月廿一日

身辺をかたづけた、昨日も今日も。夜、樹明来、暫らく話してから街へ出る、すぐ別れて、酒三杯、それでよい、それでよい。「さびしい」から「さみしさ」へ、それから「さび」へ。自己に執せずして人類に執する心（五十歩百歩だが）。ウソをいふな、ホントウがいへないまでも。食慾から食慾へ、それが人間らしい、子供の食慾、老人の食慾、その間に色々のものがある。愛よりも信（鳥潟令嬢の結婚解消事件に対して）。

十二月廿二日

ぐつすり寝た、大霜だ、冬至、私はうらゝかだ。熊本の山中さんからありがたい手紙が来た。農学校の農産物品評会、満蒙展覧会見物。樹明君を招いて、鰯で一杯やる、暮れてから送つてゆく。先月分の電燈料を払ひ、例のインチキカフヱーのマイナス五十銭を払ふたのは近来の大出来だつた。台所に空罎がもう五六本並んでゐる、まことに其中庵風景の豪華版だ！大風一過、うらゝかに木の葉ちるかなである。

・あぶない橋をわたれば影　星が流れる二人で歩く寒いぬかるみ　　月並一句、自嘲自戒　われとわが□をせばめたる茶の木

哉？？？

十二月廿三日

久しく滞つてゐた水が流れはじめたやうな気分だ、流れる、流れる、流れるまゝに流れてゆく。身辺整理、出すべき手紙をだし、捨つべきものは捨てた。自然を味へ、ほんとうに味へ、まづ身を以て、そして心を以て、眼から耳から、鼻から舌から、皮膚から、そして心臓へ、頭へ、――心へ。

・小春日をあるけば墓が二つ三つ・風をききつつ冷飯をかみつつ・凩のふけてゆく澄んでくる心　　　　△　△　△我昔所造諸悪業皆由無始貪瞋癡従身口意之所生一切我今皆懺悔

今日今時、我と我が罪過を悔い悪行を愧ぢて、天上天下、有縁無縁、親疎遠近、一切の前に低頭し合掌す、願はくは此真実を以て皆共に仏道を成ぜんことを。　　昭和七年十二月二十四日耕畝九拝

十二月二十四日

雪もよひ、なか／＼寒い。米がなくなつた（煙草も）、米なしで暫らく暮らすのもよからう、事々皆好事だ。山を歩いて、何か活けるやうなものはないかと探したけれど、何も見あたらない、仕方なしに歯朶（ネコシダ？）を五六本持つて戻つて活ける、なか／＼よい。昼食はそば粉をかいて食べる、菜葉をそへて。大根、ほうれんさう、ちしや、新菊は食べても食べても食べきれない、何といふ豊富！夕方からあたゝかく雨になつた、夕食はすひとん（関東大震災当時はこれが御馳走だつた、一杯五銭で）。夜ふけて雨の音がよかつた、いつまでも眠れなかつた。△私は聴覚的性能の持主――耳の人、或は声の詩人とでもいはうか――であるが、聞き分けるよりも聴き入る方だ。

・雪もよひのみかんみんなもがれた・風に最後のマツチをすらうとする

十二月廿五日

けさは蕎麦汁二杯だけ。あたゝかい手紙（平野さんから）、あたゝかい小包（山野さんから）。△不幸の幸福。よくてもわるくても生き

てゐる人間だ。酒は一人で飲むものぢやない、といふやうな訳で、地下足袋を穿いて、雨のぬかるみを訪ねたら、樹明君不在、それから歩いた歩いた、飲んだ飲んだ、ワヤのワヤになつた。誰かにいはれるまでもなく、私は私の人格がゼロであることを知りぬいてゐる、いや、私には人格なんかないのだ。

・冬雨の遠くから大きな小包

十二月廿六日

よいところがあればわるいところがある、わるいところがあればよいところがある、重点はその分量如何にある。心一つ、――心一つの存在である。雨そして酒、外に何の求むるところぞ。

・冬ざれの水がたたへていつぱい・ひとりの火の燃えさかりゆくを

十二月廿七日

ウソもマコトもない世界に生きたい。ウソといへばみんなウソだ、マコトといへばみんなマコトだ。

十二月廿八日

雨、あたゝかい雨。その雨のやうな手紙二つ、俊和尚から、緑平老から。

雨がやまない、ちつとも酔はない酒を飲みつゞけてゐる

十二月廿九日

空は曇、私は晴。此頃はあまり後悔しなくなつたゞけでも、私はひらけてきたやうだ。南無元寛坊如来。

・このからだを投げだして冬山・寝られない夜は狐なく　山から音させて冬木負うて・どこかそこらにみそさざいのゐる曇り

愛想を尽かしたのか、樹明君も来なければ敬治君も来ない、誰も来ない。しづかな一日、しづかな一夜。

十二月三十日

からりと晴れて、よーいとなあ――樹明来、そして敬治来、三人いつしよに街へ。酒、女、自動車、等、等、等。インチキ、インチキ、インチキ、インチキ、インチキ。……

十二月三十一日

昼は敬治君と、夜は樹明君と酒らしい酒を飲んだ。ひとり、しづかに、庵主として今年を送つた、さよなら。

・冬夜の人影のいそぐこと・鉄鉢たたいて年をおくる

インチキ　ドライヴ

昭和七年度の性慾整理は六回だつた、内二回不能、外に夢精二回、呵、呵、呵、呵。

第22章
其中日記　02 (新字旧仮名)

　其中日記は山頭火が山頭火によびかける言葉である。日記は自画像である、描かれた日記が自画像で、書かれた自画像が日記である。日記は人間的記録として、最初の文字から最後の文字まで、肉のペンに血のインキをふくませて認められなければならない、そしてその人の生活様式を通じて、その人の生活感情がそのまゝまざ／＼と写し出されるならば、そこには芸術的価値が十分にある。現在の私は、宗教的には仏教の空観を把持し、芸術的には表現主義に立脚してゐることを書き添へて置かなければならない。

　うららかにして木の葉ちる

　　一月一日

　私には私らしい、其中庵には其中庵らしいお正月が来た。門松や輪飾はめんどうくさいので、裏の山からネコシダを五六本折つてきて壺に※した、これで十分だ、歯朶を活けて、二年生きのびた新年を迎へたのは妙だつた。お屠蘇は緑平老が、数の子は元寛坊が、そして餅は樹明君が送つてくれた。いはゆるお正月気分で、敬治君といつしよに飲みあるいた、そして踊りつゞけた、それはシヤレでもなければヂヨウダンでもない、シンケンきはまるシンケイおどりであつた！踊れ、踊れ、踊れる間は踊れ！芝川さんが上海からくれた手紙はまことにうれしいものであつた。

　・お地蔵さまもお正月のお花・お正月のからすかあかあ　　　樹明君和して曰く　　かあかあかあからすがふたつ・シダ活けて五十二の春を迎へた

　　一月二日

今夜は樹明君といつしよに飲みあるき踊りつゞけた、あゝ何と酒がうまくて、何と踊のかなしかつたこと！山手閑居。

一月三日

今日は樹明君、敬治君と三人で遊んだ、遊びつかれて、夜おそく帰つてきた。私はひとりで涙を流して笑つた、そしてこん／＼として睡つた、天国の夢も地獄の夢も見なかつた。

一月四日

曇、お正月もすんだ、すべてが流れてゆく。アルコールのない、同時にウソのない一日だつた。

茶の花やお正月の雨がしみ／″＼・お正月の鉄鉢を鳴らす

また／＼人が来て金の話をしていつた。

一月五日

雨、寒い、そして静かだ。夕方、樹明君がきてくれた、そしておとなしく帰つていつた、大出来、々々々。米がないから餅を食べる。夜の雨はよかつた、閑寂そのものゝやうだつた。

一月六日

小寒入、時雨。雨を聴きつゝ、完全に自分を取り戻した。△乞食になつて、乞食になりきれないのはみじめだ。餅もなくなつたから蕎麦の粉を食べる。今日がほんとうの新年だつた、私にとつては。しづかなよろこび。△まづしくともすなほに、さみしくともあたゝかに。自分に媚びない、だから他人にも媚びない。気取るな、威張るな、角張るな、逆上せるな。△腹を立てない事、嘘をいはない事、無駄をしない事。私は執着を少くするために、まづ骨肉と絶縁する、そしてその最初の手段として音信不通にならう（賀状なんかもさういふ方面へは一切出さなかつた）。私は私を理解してくれる、そして私が尊敬する友といつしよに、友に支へられて生きよう、生きられるかぎりは。

・枯枝の空ふかい夕月があつた　凩の火の番の唄　雨のお正月の小鳥がやつてきて啼く　空腹かかへて落葉ふんでゆく・枯木ぱちぱち燃

える燃える　誰も来ない夜は遠く転轍の音も　宵月に茶の花の白さはある・三日月さん庵をあづけます

一月七日

寒の雨、考へさせる雨だ。△一杯の酒は甘露だつた、百杯の酒は苦汁となつた。清貧に安んじて閑寂を楽しむ、さうなる外はない、それが時代おくれであらうと、何であらうと。何のための出家ぞ、何のための庵居ぞ、落ちつけ、落ちつけ。「身のまはり」三日の夜から今朝まで考へつゞけた、そして或る程度の諦観を握ることが出来たので、掃いたり拭いたり、身辺を整理した。あるのは命だけだ——まだ命だけは残つてゐる。さびしい昼餉だつた、ソバノコだけだつた。△やつぱり、昨日を思はず明日を考へず、今日は今日を生きる、これがやつぱり、私の真の生活である。夕方ひよつこり樹明君来庵、私が落ちついてゐるので、それが彼にはさびしく、さびしすぎて感じられたのだらう、五十銭玉二つを机上に載せて置いて、さう／＼と帰つていつた。この壱円はほんとうにありがたかつた、私は樹明大菩薩を同じ道の友として持つてゐることを喜ぶ。さつそく店まで出かけて、米を買ひ醤油を買ひ焼酎を買ひ、煙草を買つた、そしてすつかり楽天老人となつた、ノンキナ　ヲヂサン　バンザイ！八日ぶりに飯を炊く、それは明けてから最初の御仏飯でもあつた。

・ひとりで酔ふたら雨が降りだした　雨がふる逢ひたうなる雨が・酔へばいろ／＼の声がきこえる冬雨　　　　　（述懐）　　　煙草のけむり　　　五十年が見えたり消えたり

一月八日

晴、すこし胃が痛む、昨夜の飲みすぎ食べすぎのためだらう。久しぶりに——八日ぶりに入浴した、二銭五厘の享楽である、からだもこゝろもさつぱりした。△無理に垢をおとすな、無理におとさうとすると皮をむぐぞ。

楢の枯葉が声だして日をまねくやうだ・風を、ぬかるみを、売りにゆく米二俵　茶の花や蜂がいつぴき　雑草伸びたまゝの紅葉となつてゐる　虫がおしつぶされてゐる冷たいページ・枝をはなれぬ枯れた

葉と葉とささやく・風がきて庭の落葉を掃いていつた　泥足袋洗ふにぽつとりどんぐり・落葉踏みにじりどうしようといふのか

一月九日

徹夜した、といふよりもあれこれ考へてゐるうちに夜が明けてしまつたのである。盥に薄氷が張つてゐる、うらゝかな陽が射してゐる。敬坊からの手紙はあまりにさびしくかなしくした、敬坊よ、しつかりしてくれ、しつかりやつてくれ。麦飯を食べることにする、経済的理由よりも生理的、生理的よりも心理的理由から。落葉の掃き寄せをふと見たら、水仙、私の好きな水仙がある、落葉の底から落葉を押し分けて伸び出たのである、生きるものゝ力、伸びるものゝ勢を見て、今更のやうに自然の前に頭がさがつた、私は落葉をのぞき雑草をひきぬいて、すまないけれど私の机上に匂うであらう水仙を祝福した。夜、樹明、冬村の二君が酒肴持参で来訪、飲んで話した、こゝまではよかつたが、それからワヤになつた（もつとも私はあまりワヤにはならなかつた）、いふまでもなく赤い灯へ、彼女等のテーブルへ、泥酔乱舞の世界へ——。更けて戻つてから、飯を炊き味噌汁をこしらへた、やれやれ、御苦労、々々々。火鉢に火があり、米桶に米があり、そして酒徳利に酒があるとは、さてもほがらかな風景であるかな。慾には銭入に銭があつてほしい！

・ここでわかれる月へいばりして・霜の大根ぬいてきてお汁ができた・たべきれないちしやの葉が雨をためてゐる・落葉の、水仙の芽かよ・曇つた寒空できりぼしきりつゞけてる娘さんで・冬空、何をぶちこはす音か・猿まはしが冬雨の軒から軒へ・雨となつた夜の寒行の大皷が遠く　考へてゐる電燈ともつた・冬蠅よひとりごというてゐた・楢の葉の枯れて落ちない声を聴け

一月十日

曇、それもよし、雨となつた、それもよし。御飯のおいしい日であつた、ことに葱のお汁がおいしかつた。△食べるうまさはたしかに生きてゐるよろこびの一つである。樹明君が昨夜から行方不明となつてゐることを聞かされて、私は昨日敬治君の手紙を読んだ時のやうに、さびしくかなしかつた、樹明君、お互にしつかりしようぢやありませ

んか、ほんとうに生きようぢやありませんか、昨日までのやうでは、私たちはあまり下らないぢやありませんか、みじめすぎるぢやありませんか、酒を飲まないぢやない、うまい酒をうまく飲みませうよ。夜の雨をついて寒行四人連れで来庵、御苦労さまでした。寝られぬまゝに思ひついたこと二三、——独酌酔中自楽といふ境界まで行きたいものだ。健やかな、あまりに健やかな胃袋ではある！私はたしかに私が不死身の一種であることを信じてゐる。人生は割り切れるものぢやない、少くとも現実は。もし人生が割り切れるものならば、それを割り切るものは恋と麻酔と、そして。——底力のある生活を生活したい。私から酒をのぞいたら何が残る！（と私はしば／＼自問自答する）句が残るだらうか？酒が何々させた……といふ言葉は何といふ卑劣だらう。米がなくなつたから餅を食べてゐた、餅がなくなつたから蕎麦の粉を食べてゐた、蕎麦の粉がなくなつたら、さて何を食べようか、野菜でも食べるか、水でも飲むか、その時はその時、明日の事は明日の事にしてゐたら、彼氏が米をくれた、酒までくれた、それはまことに天来の賜物ともいふべきであつた。水と空気とがタダだからありがたい。私はだん／＼アルコール中毒になりつゝあるらしい、すこし手がふるへだした、アルコールがきれると憂欝を感じる。自然的自殺、かういふ事実はザラにある、放哉の死もさうだつた、私もさうなりつゝあるらしい。

　・どこやらに水の音ある落葉　水音をたづねて落葉のなかへ・たたへて冬の水のすこし濁り・太陽がのぞけば落葉する家や　たんぽぽはまだ咲かない雨の水だまり・けふは水がある川の何やかや流れる　長い手紙をかけばしたしく虹がたち・あれこれ食べる物はあつて風の一日

　よい眼ざめであつた、しづかなよろこびがあふれた、私はひとり、ゆう／＼として一日を暮らした、しかしお天気はよくなかつた、雨風だつた。敬治君へ長い手紙を書いた、私の心はきつと通じる、お互にもうアルコールの繋縛から脱してもよい時節である。うれしい酒をのむがよい、酒は涙でもなければ溜息でもない、天の美禄だ、おいしい酒をおいしく飲まなければ嘘だ。風を聴く、風もよいかな。今日も御詠歌組がやつてきた、二銭あげる、昨夜の二銭とこの二銭とでサイフ

はナイフになつてしまつた、此次やつてきたら何をあげようかな（もう米もない、紙でもあげるか）。▵敵は味方に似せてゐるときいたが、まつたくそのとほりだつた、今朝、ほうれんさうを摘む時、似而非ほうれんさうをたくさん見つけた、ほうれんさうらしい草がほうれんさうにまぢつて生えてゐた。嵐の跡——といふ感じがする、とにかく嵐は過ぎた。酔うて乱れる酒は断じて飲まないことを山頭火が山頭火に宣誓した。▵ホントウとアタリマヘとはシノニムである。

・耳垢を掌にのせて夜のふかく・ふつと挙げた手で空しい手で

一月十二日

眠れないから考へる、考へるから眠れない、とやかくするうちに朝が来た。——諸法常示寂滅相——どうやら晴れさう、そして冬らしく寒らしくなつた。そばだんご汁をこしらへる、御苦労様、御馳走様。▵とき／″＼貧乏になることは、いろ／＼の意味に於て悪くない、いつも貧乏では困るけれど。樹明君が帰宅の途次ちよつと立寄つた、あの夜の経過を聞くまでもなく、※れた顔色が万事を雄辯に語つてゐる、私は私の友情が足らなかつたことを恥ぢる、樹明君よ、お互に酒の奴隷はやめませう。寒い、寒い、何もかもみんな寒い、こんな夜は早くから寝るに限る、ことに昨夜は寝なかつたから。▵私たちの生活は雑草にも及ばないではないか（と草取をしながら私は考へた）見よ、雑草は見すぼらしいけれど、しかもおごらずおそれずに伸びてゆくではないか、私たちはいたづらにイライラしたり、ビクビクしたり、ケチケチしたり、ニヤニヤしたりしてばかりゐるではないか、雑草に恥ぢろ、頭を下げろ。▵恥のない、悔のない生活、ムリのない、ムラのない生活。

落葉するだけ落葉して濡れてゐる・よごれものは雨があらつてくれた

一月十三日

ぐつすり寝た、大安眠だつた、これならば大往生も疑ない。しづかな、あたゝかい寝床を持つてゐるといふことは何といふ幸福であらう（こゝで改めてまた樹明君に感謝する）。小雪ちらほら、寒くて冷た

いが、お天気はよくなりさうだ。幸雄さんからあたゝかい手紙、あたゝかすぎる手紙がきた。するめをちぎつてはしようちゆういつぱい、人間ほどヱゴの動物はないと思ふ。それから街へ出かけてワヤ、たゞし小ワヤ。

　　　今日の買物一金九銭　　　　ハガキ六枚　　　　　　　　　　┌バツトー一金十一銭　　　タバコ│　　　　　　　　　　　└なでしこ一一金七銭　　　　醤油二合一金弐十弐銭　　焼酎二合一金四十八銭　　白米二升　　合計金九拾七銭也

一月十四日

　曇、后晴、小雪、——私の心は明朗。梅花一枝を裏の畑から盗んで来て瓶に※した、多過ぎるほど花がついてゐる、これで仏間の春がとゝのふた。敬治君からうれしい返事が来た、彼の平安が長続きするやうに祈つてやまない。昼も夜もコツコツと三八九の原稿を書いた、火鉢に火のないのが（木炭がないので）さびしかつた、燗瓶に酒があつたら賑やかすぎるだらう。

　・落葉ふんでどこまでも落葉・雑草もみづりやすらかなけふ・木枯の身を責めてなく鴉であるか・冬の夜ふかく煙らしてゐる・寒うをれば鴉やたらにないて・けさは雪ふる油虫死んでゐた

一月十五日

　霜、晴れたり曇つたり、寒らしい冷たさ。終日、三八九の原稿を書いた、邪念なしに、慾望なしに。夜はよく寝られた、平凡にして安静、貧乏にして閑寂。

一月十六日

　薄雪がまだらにつんでゐて晴、明けてから最初のお天気らしいお天気である。うらゝかで、あたゝかで、日向ぼつこしてゐねむりするにはもつてこいの日だ。けさの御飯は上出来だつた、仏様も喜んで下さるだらう、まだ雪をかぶつてゐる大根一本ぬいてきておろしにする。「松」がきた、待つともなく待つてゐる手紙は来ない、まもなく新聞がくる、これでもう来る人も物もないわけだ。それにつけても、樹明

さんはどうしたのだらう、こんなに長く、といつても五日ばかりだが、やつてこないことは、今までにはなかつた、禁足か、自重か、それとも家事多忙か、身辺不穏か、とにかく気にかゝるけれど、此場合、訪ねてゆきたくない、行くべきでないと思ふ、いろ／＼の理由から。——三八九の原稿を書きつゞける、煙草のなくなつたのが残念だ、一服やりたいなあ、と灰の中の吸殻をさがしてみる。午は菜葉を煮て食べる、寒いからラードを少し入れる。火を焚きつゝ、私はいつも火について考へる、火、ひとりの火。この火床も火吹竹も私がこしらへたものである。水仙は莟がだいぶ大きくなつた、裏の梅二株は見頃だ。晩にはすいとん汁をこしらへた、御飯が足らないらしいから。夜、やうやく三八九の原稿を書きあげた、安心して寝る。よろこびがしづかにわく、そのよろこびを味ふ、しづかな雨がふる、その雨を味ふ。

・冬ぐもり、いやな手紙をだしてきたぬかるみ・あたたかし火を焚いて古人をおもふ・芥うかべて寒の水の澄まうとする雲かげ・寒い朝の土をもりあげてもぐらもち

一月十七日

けさはゆつくり朝寝した、寝床のなかで六時のサイレンをきいた。雨がふつてゐる、おちついて何かと仕事をする。あるだけの米を粥にした、大根の浅漬がおいしい。忘れてゐた※をかみつゝ、三八九印刷、紙があるだけ。三八九、何から何まで私一人の仕事である、書く、刷る、綴ぢる、送る、等、等。△おだやかに、けちけちせずに、つつましく、くよくよせずに。

一月十八日

くもり、はれる、そしてまたくもる。きのふ一通、けふ一通、いやな手紙をかいてだす。五厘銅貨でなでしこの小袋を買ふ、村のデパートで、そして、そこのおかみさんが五厘銅貨を歓迎してくれた！（豆腐油揚が弐銭五厘なので釣銭として五厘銅貨がほしいといつた）古木を焚いて湯を沸かして砂糖湯を飲む、うまい。酒はこらえられるが、煙草はなか／＼こらえにくいものである、その煙草を三日ぶりに喫ふたのである。△身貧しくして道貧しからず、——負け惜みでもなく、

諦めでもなく、それは今日の私の実感であつた。木がある水がある、塩がある、砂糖がある、……しかし、古木を焚いて（炭がないから）砂糖湯を啜る（米がないから）といふ事実はさみしくないこともない、さみしくてもありがたい、湯がたぎる、りん／＼とたぎる、その音はよいかな、ぱち／＼と燃える音はいはでもがな。かうして生きてゐる、それは生活といふべくあまりにはかないであらうけれど、死ねないあがきではない、やすらかである。▵水仙のきよらかさ、藪柑子のつゝましさ、雑草のやすけさよ。けふも鴉が身にせまつて啼く。晩には食べるものがないから、大根を三本（大根三本の命ともいへる）ひきぬいて、それを煮て食べた、それで十分だつた、大根は元来うまいものだが、こんばんの大根はとりわけうまかつた、こんなにうまい大根をたべることが出来たのはありがたいことだ、しかしこれでいよ／＼食べるものがなくなつた、塩と砂糖とが残つてゐるだけだ（いやまだ／＼野菜と水とがある）。夜はしづかに読書した、火鉢に火があり、煙草入に煙草がある、私は幸福だつた。かうして、私は閑寂枯淡の孤独生活にはいることができるやうになつた、私は私自身を祝福する。悠々淡々閑々寂々。樹明君も敬治君も、緑平老も井師も喜んで下さるだらう。自分の性情がはつきりしてきた、随つて自分の仕事もはつきりした、私はかういふ私としてかういふ仕事をすればよいのだ、さうするほかないのだ。——しめやかなうれしさがからだいつぱいになつた。

・草のそのまま枯れてゐる　そのまま枯れて草の蔓・楢の葉の枯れてかさかさ鳴つてゐる・燃えてあたたかな灰となつてゆく・食べるもの食べつくし何を考へるでもない冬夜・いたづらに寒うしてよごれた手・冬日まぶしく飯をたべない顔で・落葉ひよろ／＼あるいてゆくひよろ／＼あるけばぬかるみとなり落葉する・落葉して夕空の柚子のありどころ（再録）

一月十九日

雪もよひ、手紙は来ない、行乞は気がすゝまないからやめる、といふ訳で、野菜食がはじまる、菜葉（大根葉をも）をラードでいためて塩で味付けするのだつた。五厘銅貨を握つて村のデパートへ出かける、きのふ、おばさんの諒解が得てあるので、焼酎一合と豆腐二丁と

を買うて戻る（此代金十六銭、まだ二銭あまつてゐる！）、飯をたべないものだから、何となくよろ／＼する（酒好きは酒好きですね、間違なく）。朝は砂糖湯、昼は野菜、それから焼酎と豆腐だつた、これではゼイタクすぎる、まつたくさうだ。とにかく山籠と思へば何でもない、いや、けつこうすぎる、かういふ機会を活用して、かういふ食事をしなければウソだ。おちついた、おちついた、おちつきすぎるほどおちついた（すぎるといふ言葉をつかひすぎる！）。……焼酎はにがかつた（いかに酒のうまいことよ）、豆腐はからかつた（こゝで味噌醤油の必要なことがわかる）、でも、おかげで、腹がふくれて、ほろ酔気分になつた。その気分で原稿を書いた、曰く、乞食漫談、曰く、其中庵日記。さらに書きたいのが、過去帳——自叙伝（これは長くなる）。やつぱり御飯がたべたい、米がほしい、私は日本人だから、日本的日本人だから（しかし、この豊葦原の瑞穂の国に生れてきて、酒がのめるとはうれしいな！）。ゆふべ、枯枝をひろひあるいて、二句作つたが、放哉坊の『枯枝ぽきぽき折るによし』には、とてもとても。昨日今日の新聞は、第二共産党検挙記事で賑やかな事此上なし、共産党そのものは私の批判以外の事件だが、彼等党人の熱意には動かされざるを得ない、人と生れて、現代に生きてゆくには、あの熱意がなければならない、私は自から省みて恥づかしく、そして羨ましく思つた。学校からの帰途、樹明君が寄つてくれた、ほんとうに久しぶりだつた（こゝへきてから逢はなかつた時日に於て最長レコード）、かはつた事がなくて、元気な顔を見てうれしかつた（先日、たしか十一日にやつてきた時は色身憔悴だつた）、そしておみやげをいろ／＼貰つた、干魚、塩辛、インキ、そしてバツト。何やかや食べて飲んで、腹がいつぱいになつたけれど、御飯を食べないものだから、何だか力がなくて労れてゐる、日本人は（今日以後の若い人は、私たちより時代のちがふ若い人は別として）やつぱり、米喰ふ虫だ。早く、寝床にはいつて漫読する、野上八重子さんの小説の文章の気のきいてゐるのに感心した。それでは、けふはこれでさようなら。書き漏らした事をもう一つ、——今夜はどうしたわけか、やたらに溜息がでる、はてめんような、これは何の溜息でござるか！

　・湯がわいてくる朝日をいれる・枯木よりそうて燃えるあたゝかさ・あたゝかく枯枝をひろうてあるく・ゆふべの枯枝をひろへばみそ

つちよ　夕風の枯草のうごくは犬だつた・更けて荷馬車の、人が馬が息づいて寒い星のまたたき・落葉鳴らして火の番そこからひきかへした・つめたいたたみをきて虫のぢつとしてゐる　落葉ふかく藪柑子ぽつちり　すこし日向へのぞいて藪柑子　ちぎられて千両の実のうつくしくちらばつて・日向の梅がならんで満開・夜どほしで働らく声の冴えかえる空　冴えかえる夜でようほえる犬で　たたずめばどこかで時計鳴る　　　句賛として四句　一日花がこぼれて一人（枇杷）・はなれて遠いふるさとの香を味ふ　　　　　　　　　　　　　　　（松茸）・その香のしたしくて少年の日も　家を持たない秋ふかうなつた　ほのぼの明けてくる土に咲けるもの（十薬）

一月廿日　大寒入。

のび／＼と寝たから私は明朗、天候はまた雪もよひ、これでは行乞にも出かけられないし、期待する手紙は来ないし、さてと私もすこし悲観する、それは何でもない事なのだが。一茶会から「一茶」、酒壺洞君から仙崖の拓字が来た。△すべてを自然的に、こだはりなく、すなほに、――考へ方も動き方も、くはしくいへば、話し方も飲み方も歩き方も、――すべてをなだらかに、気取らずに、誇張せずに、ありのまゝに、――水の流れるやうに、やつてゆきたいと痛感したことである。鼠もゐない家――と昨夜、寝床のなかで考へた、じつさい此家には鼠がやつてこない、油虫も寒くなつたので姿をかくした、時々その死骸を見つけるだけだ。△苦茗をすゝる朝の気持は何ともいへないすが／＼しさである、私は思ふ、茶は頭脳を明快にする、酒は感興を喚ぶ、煙草は気を紛らす、茶は澄み酒は踊り煙草は漂ふ、だから、考へるには茶をすゝり、作るには酒を飲み、忘れるには煙草を喫ふがよい。住めば住むほど、此家が此場所が気に入つてくる、うれしくなる、落ちついてくる、樹明君ありがたい。酒が悪いのぢやない、飲み方が悪いのだ、酒を飲んで乱れるのは人間が出来てゐないからだ、人間修行をしつかりやれ。今日は大寒入、朝飾としては昨日の豆腐の残りを食べた、それで沢山、うまくもまづくもなかつたが、さて昼飾は！けふも、いやな手紙を一通かいてだした、ゴツデム！ぢつとしてはゐられないから、そして午後はすこしあたゝかくなつたから、嘉川まで出かけて行乞三時間、いろ／＼の意味で出かけてよかつた、行乞

相も（主観的には）わるくなかつた。四日ぶりの御飯である（仏様も御同様に）、それはうまいよりもうれしい、うれしいよりもありがたいものだつた（仏様、すみませんでした）。御飯をたべたらがつかりした、米の魅力か、私の執着か、そのどちらでもあらう。△醤油も味噌もないので、生の大根に塩をつけて食べた、何といふうまさだらう、フレツシユで、あまくて、何ともいへない味だつた、飯とても同じこと、おいしいお菜を副へて食べると、飯のうまさがほんとうに解らない、飯だけを噛みしめてみよ、飯のうまさが身にしみるであらう、物そのものの味はひ、それを味はなければならない。大根の浅漬に柚子を刻んでまぜた、そのかをりはまことに気品の高いものであつた、貴族的平民味ともいふべきであつた。△私は考へる、食べることの真実、くはしくいへば、食べる物を味ふことの真実を知らなければならない。昨夜、樹明君から貰つた干魚はうまかつた、もうほとんどみんな食べてしまつたほど――天ヶ下にうまくないものはない！△今日の行乞は、ほんとうに久しぶり――半年ぶりだつた、声が出ないのには閉口した、からだがくづれるのに閉口した、必ずしも虚勢を張るのではない、表面を飾るのではないけれど、行乞相は正しくなければならない、身正しうして心正し（心が正しいから身が正しくなるのであるが、それと同様に）、我正しうして他正し、それは技巧ではない、表現である。△心を白紙にせよ、そこに書かれた文字をすつかり消してしまつて、そして新らしい筆で――古い筆でもよろしい――新らしい文字を――古い文字でもよろしい――はつきりと書け。私の行乞姿を見ても、そこらの犬が吠えなくなつた、尾をふつては来ないけれど、いぶかしさうに眺めてゐる。△貧乏は時々よい事を教へてくれる、貧しうしてまづいものなし、きたないものなし。あいかはらず、楢の葉が鳴る、早寝の熟睡。

・まとも木枯のローラーがころげてくる・によきと出てきた竹の子ちよんぎる（改作）　　今日の行乞所得―、米一升七合―、金十四銭　　今日の買物―金三銭　　　　切手一枚―金四銭　　　　なでしこ小袋―金三銭五厘　　醤油一合―金五銭五厘　　焼酎五勺　　〆金十六銭　　　これで嚢中は文字通り無一文！・けふの御仏飯のひかりをいたゞく・何やらきて冬夜の音をさせてゐる

一茶の次の二句はおもしろいと思ふ。

節穴や我が初空もうつくしきうつくしや障子の穴の天の川

うつくしいといふ言葉がおもしろい、穴から見るのが一茶の俳人的眼孔だ。

一月廿一日

雪もよひ、だん／＼晴れる、そんなに冷たくはない。朝のお茶はうまい、こんな調子だと、あんぐあい転換が出来るかも知れない、転換したいものだ。急に眼の工合が悪くなつた、栄養不良のためか、老眼と近眼とのこんがらがりのためか、とにかくこれでは困る、といつたところで詮方もないけれど。此頃の私は、とりわけて、よく食べよく寝る、それではどうぞ、よく働らきなさい。△山にしたしむことは木の葉にしたしむことであり、小鳥にしたしむことであり、石にしたしむことでもある。山村庵居は空と土とにしたしむことである。鴉よ、あんまり啼いてくれるな。来庵者について考へる、——郵便屋さん、新聞屋さん、それから、眼白頬白みそさゞい、そして鴉、犬、——それだけ、時々樹明君が人間として！焚火といふものは意味ふかい、その原始的情趣を味ふ。身辺整理、遺書も書き換へて置く。水仙を切るために指を切つた、赤い血が流れるのは不可思議のやうな気がした、水仙は全身を切られた、指を傷づけるぐらゐは何でもない。夕方、樹明来、久しぶりに一杯やる、別れてからＩさんを訪ねてまた一杯、それからＨへ、ずゐぶん酔うて戻つたのはおそかつたが、そのあたりは前後不覚だつたが、悪い事はしなかつた、善哉々々。

・つめたさの歯にしみる歯をいたはらう・冬山へつきあたり焚火してある・寒い水からいもりいつぴきくみあげた　寒い寒い指を傷づけた・たま／＼逢へて火を焚いて　火を焚いて来るべきものを待つ　鴉ないて待つものが来ない　けさは郵便がおそい寒ぐもり・新聞つめたし近眼と老眼がこんがらがつて・冬草もほどよう生えて住みなれて・くもりさむい肥をあたへるほうれんさう

一月廿二日

冷たい、昨夜の酒が残つてゐる、飲まずんばあるべからずぢや、う

まいな、何といつても酒はうまいものである、利害を超越して。昨日のお菜は三度とも菜葉と大根とちしやだつたが、今日は鰯の御馳走があつた、十尾六銭、おばさんから借りて。新聞屋さんが号外を持つてきてくれた、※餅といつしよに。二週間ぶりに入浴、帰途、金策の相談が出来た。魚行商のおばさんはほんとうに感心な女性だ、悪病の夫を看護しつゝ、二人の子供を育てつゝ、朝から晩まで働らきつゞけてゐる、信仰心を持つてゐるからやれるのだ、前身が娼妓だつたと聞いて、私は頭がさがつた、自分が恥づかしかつた。餅もうまかつた、鰯はさらにうまかつた。夜、樹明君がバリカンを持つてきて、理髪してくれた、何ともいひやうのない深切だ、餅も貰へた、句集代壱円も受取つた、紙代をとつてをいて、残りで酒を買つてきて、すこし飲んだ、かういふ酒はめつたに飲めるものぢやない。

・冬ぐもりひさ／″＼湯にいり金を借る・石垣の日向にはビラも貼つてある・雪空から最後の一つをもぐ・冴えかえるながれをふんで下る　墓場の梅はほつ／＼咲いて　　今日の買物一金十八銭　　酒二合一金十七銭　　焼酎一合五勺一金七銭　　　バツト一金四銭　　　なでしこ　　〆金四十六銭也

一月廿三日

午前は晴れてあたゝかだつたが、午後はくもつて寒かつた、しかしとにかく、好日好事たることを失はない。朝、紙を買ひにゆく、インフレ景気は私にも影響を及ぼして、紙も二割の値上をするといふ。三八九印刷終了、揃へる、綴ぢる、なか／＼忙しい。手紙も来なければ人間も来ない、鴉が来て啼くばかり。夜は餅を焼いて食べた、何とまあ餅のうまいこと。こゝで私は重大な宣言をする、——今後は絶対に焼酎と絶縁する、日本酒、麦酒以外の酒類は飲まないことにしよう、これも転換の第一歩といへよう。

・霜にはつきり靴形つけてゆく　小春日の畦をつたうてやつてきた・冬夜の瞳ぱつちりうごく　火の番と火の番とぬくい晩である・あたたかなれぱよもぎつむ

一月廿四日

さむい、つめたい、小雪ちらちら。あるだけの米を白粥にして置く。今日の食事は、三度が三度とも、米と水と餅と塩とのちやんぽんだつた。餅をやいて食べながら三八九仕事、やうやう終了。うれしいな、餅はうまいな、好きだから、貧乏だから。どんと銃声があたりの閑寂をみだす、嫌がるのは小鳥ばかりではござらぬぞ。暮れてから、待つてゐた樹明君が来た、豚肉を持つて、——そして三八九の仕事を手伝つてくれた、今晩はどうでもかうでも私が一杯おごらなければならないのだが、さて八方塞がりの無一文なので、手も足も出ない、やたらに火を燃やしてゐると、樹明君とう／＼こらへかねて酒屋へ手紙を書いた、それを持つて街の酒屋へまで出かける、酒好きは呪はれてあれ、しかし途中で三句拾つた。うまい酒だつた、枯木までよう燃える、感泣々々。

　　今日の買物一金八十三銭　　切手四十枚と一枚一金十二銭　　ハガキ八枚一金十八銭　　酒二合一金五銭　　醤油二合一金七銭　　バツトーツ一金二十三銭　　米一升　　〆金壱円四十八銭

本日敬坊から送金壱円五十銭差引残金二銭！

　一月廿五日

よい朝、よい朝、このよろこび、うれしいな、とても、とても。△酒も滓もみんな飲む心。敬坊から約の如くうれしい手紙（それは同時にかなしい手紙でもあつたが）。郵便局まで大急ぎ、三八九発送第一回、帰りみち、冬村君を訪ねて、厚司とレーンコートとを押売する、おかげで、インチキカフヱーのマイナスが払へて、めいろ君に申訳が立つといふ訳。雪となつた藪かげで、椿の花を見つけた。今日の御馳走はどうだ！　酒がある、飯がある、肉がある、大根、ちしや、ほうれんさう、柚子。……△右の手の物を失ふまいとして、左の手の物を失ふ、これは考へなければならない問題である。△酒と貧乏とは質に於て反比例し、量に於て正比例する。雪の畑にこやしをやつた（肥料も自給自足）、これは昨夜、樹明君に教へられたのだ。夕方、樹明君がせか／＼とやつてきた、生れたといふ、安産とは何より、このさい大によき夫ぶりを発揮して下さいと頼んだ。子がうまれたから句もう

まれるといふ、万歳々々。吉野さんが三八九会費を樹明君に托して下さつたので、それを持つてまた街へ、三八九第二回発送。けふはほんとうにうれしい日だつた、涙がでるほどうまい酒を飲んだ、かういふ一日が一生のうちに幾日あらうか。おだやかな私と焚火だつた。▵年をとると、いやなもの、きたないものがないやうになる、肯定勝になるからか、妥協的になるからか、それとも諦めて意気地なくなるからか、とにかく与へられたものを快く受け入れて、それをしんみりと味ふ心持は悪くないと思ふ。句が出来すぎて困つた、おちついて、うれしかつたからだらう。かういふ場合には、句のよしあしは問題ぢやない、句が出来すぎるほどの心にウソはないかを省みるべきである。

・待人来ない焚火がはじく・雪あかり餅がふくれて　焚火へどさりと落ちてきた虫で・寒さ、落ちてきた虫の生きてゐる・ふけて山かげの、あれはうちの灯・冴えかえる夜の酒も貰うてもどる・つまづいて徳利はこわさない枯草　　　樹明君に・燗は焚火でふたりの夜・雪ふる其中一人として火を燃やす・雪ふるポストへ出したくない手紙　仕事すまして雪をかぶつて山の家まで　晴れて雪ふる里に入る・雪がつみさうな藪椿の三つ四つ　一人にして※」に「マヽ」の注記］の音澄む・のどがつまつてひとり風ふく・ふるよりつむは杉の葉の雪　雪のふるかなあんまりしづかに・雪、雪、雪の一人・雪はかぶるままの私と枯草・小雪ちほら麦田うつふたりはふうふ　雪かぶる畑のものにこやしやる・からみあうて雪のほうれんさうは・雪となつたが生れたさうな（樹明君さうですか）・安産のよろこびの冴えかえる（樹明君さうでしたか）・もう暮れたか火でも焚かうか　恋猫がトタン屋根で暗い音・夜ふけの薬罐がわいてこぼれてゐた　雪の夜は酒はおだやかに身ぬちをめぐり・雪がふるしみじみ顔を洗ふ　たれかきたらしい夜の犬がほえて　火鉢に火がなくひとりごというて寝る

一月廿六日　旧正月元日。

すこし早目に起きた、今朝、どこからも送金がないやうならば、三八九送料の不足をかせぐために山口へ行乞に出かけるつもりで。ところが、雪だ、このあたりには珍らしい雪だ、冷えることもずゐぶん冷える、何もかも凍つてゐる。まづ雪見で一杯といふところだらう、誰か雪見酒を持つてこないかな。けさは驚嘆すべき事があつた、朝魔羅

が立つたのである、この活気があるからこそ句も出来るといふものだ、スケベイオヤヂとけなすべからずぢや。あんまり寒いから、餅粥をこしらへて腹いつぱい詰めこんだら、すつかりあたゝかくなつた。雪景色はまことにうつくしい、枝や葉につもつた雪、ことに茶の木、松の木、南天の雪、とりわけて柿の裸木にところ／″＼つもつた雪、柿がよみがへり、雪がいき／＼とする、草の芽がすこし雪の下からのぞいてゐるのはいぢらしい。△雪の風情は雪を通して観る自分の風姿である。樹明君から来信、子がうまれ句がうまれる、祝祷々々。地下足袋はいて雪風にふかれて、駅のポストまで、樹明君へよろこびのはがきをだすために。帰途、風邪をひきさうなので、例の店に寄つて一杯ひつかける、むろんカケで。雪見に酒がないのは、かへつて雪をよく見ることができる、料理にダシや味の素をいれないとき、その物のうまさがわかるやうに。午後、態人が樹明君の手紙を持つて来た、これは意外な好消息だつた、待つものは来ないで待たないものが来た、何はともあれ、ぜひはやくいらつしやい、一升さげてよ、待つてる／＼。△雪のしづけさ（雪のさびしさではない）、雪のしゞまを感じる、それは自己観照である。わらやつもる雪（庵もさうだ）はよいなあと思ふ、私の短冊掛には井師の句がはさんである、『和羅也布流遊支津毛留』雪の大根をぬいてきて、豚の汁で煮る、火吹竹でふう／＼やつてゐるところへ、樹明君がひよつこり、やあ、ありがたいな。樹明君は苦労人である、よい意味での、――だから、今、彼がさげてきた包が、木炭とソーセージであつても、ちつとも不自然でない、わざとらしくない、ちやんとイタについてゐる。ふたりの財布をはたいて一升買ふ、最後の一滴まで飲んでしまつてから、送つたのやら送られたのやら、Ｙへ、彼氏彼女等としばらく話して、樹明君をわかれ道まで送つて、そしてＫへ、そこでまた一杯、戻つてきたのは二時近かつたらう。

　　くらがりへふみだした足のさむい私で・雪の夜の大根をきざむ　　　樹明君に八句　よろこびを持つてきたあんたと空を仰ぎ　あんたのよろこびの水音もきこえる・雪あしたやす／＼うまれたといふか　雪ふるけさは君の子のうまれた日・産湯すてる雪のとける・雪や山茶花やむすめがうまれた　雪のなか産声のたかしも　雪をふんでよろこびの言葉をおくる　寝ざめしん／＼雪ふりしきる　お正月の雪が

つみました　雪の鴉のなが／″＼ないて　雪のまぶしくひとりあるけば・茶の木の雪をたべる　わが庵は雪のあしあとひとすぢ　雪ふかうふんで水わくところまで　雪あしたくみあげる水の澄みきつて・わらやしたしくつららをつらね　雪の晴れてうれしい手紙うけとつた・よう燃える火でわたしひとりで・雪から大根ぬいた　雪風、大またであるく　大根うまい夜のふけた　　　また樹明君に・産後おだやかな山茶花さいてたか

一月廿七日

よい朝、つめたい朝、すこし胃がわるくて、すこしにがい茶のうまい朝（きのふの破戒――シヨウチユウをのみ、ウイスキーをのんだタタリ）。何もかもポロ／＼だ、飯まで凍てゝポロ／＼。けふも雪、ちらりほらり。さすがの私も今日ばかりは、サケのサの字も嫌だ、天罰てきめん、酒毒おそるべし／＼、でも、雪見酒はうまかつた／＼。また、米がなくなつた、しかし今日食べるだけの飯はある、明日は明日の風が吹かう、明日の事は明日に任せてをけ――と、のんきにかまへてゐる、あまりよくない癖だが、なほらない癖だ。自製塩辛がうまかつた。午後はだいぶあたゝかくなつた、とけてゆく雪はよごれて嫌だ。△満目白皚々、銀※盛雪、好雪片々不落別処（すこし、禅坊主くさくなるが）、などゝおもひだす雪がよい。遺書をいつぞや書きかへてをいたが、あれがあると何だか今にも死にさうな気がするので（まだ死にたくはない、死ぬるなら仕方もないが）、焼き捨てゝしまつた、これで安心、死後の事なんかどうだつてよいではないか、死後の事は死前にとやかくいはない方がよからう。原稿も書き換へることにした、どうも薄つぺらなヨタリズムがまじつて困る、読みかへして見て、自分ながら嫌になつた、感興のうごくまゝに書いてゆくのはよいが、上調子になつては駄目だ。△奇績を信じないで、しかも奇績を待つてゐる心は救はれない、救はれたら、それこそ奇績だらう。自己陶酔――自己耽溺――自己中毒の傾向があるではないかと自己を叱つてをく。いちにち、敬坊を待つた（今明日中来庵の通知があつたから）。焚火するので、手が黒く荒れてきた、恐らくは鼻の穴も燻ぶつてゐることだらう、色男台なしになつちやつた。酒の下物はちよつとしたものがよい、西洋料理などは、うますぎて酒の味を奪ふ、そして

腹にもたれる。樹明さんは、来庵者が少い――殆んど無いといふことを憤慨してゐるが、私としては、古い文句だけれど、来るものは拒まず去るもの追はず、で何の関心もない、理解のない人間に会ふよりも、山を見、樹を眺め、鳥を聞き、空を仰ぐ方が、どのぐらいうれしいかは、知る人は知つてゐる。敬治さんは、炬燵がなくては困るだらうと心配してくれる、しかし、私はまだ、炬燵なしにこの冬を凌ぐだけの活気を残されてゐる、炬燵といふものは日本趣味的で、興あるものであるが、とかくなまけものにさせられて困る、あつて困る方が、なくて困る場合よりも多い、だが、かういう場合の炬燵――親友会飲の時には、炬燵がほしいな。私の寝仕度もおかしいものですよ、――利久帽をかぶつて襟巻をして、そして、持つてるだけの着物をかける、何しろ掛蒲団一枚ではやりきれないから。亀の子のやうにちゞこまらないで、蚯蚓のやうにのび／＼と寝るんですな！

・雪へ雪ふるしづけさにをる・雪にふかくあとつけて来てくれた・雪のなかの水がはつきり・なにもかも凍つてしまつて啼く鴉　　樹明君に・雪のゆふべの腹をへらして待つてゐる・雪も晴れ伸びた芽にぬくいひざし・火を燃やしては考へ事してゐる・雪ふるひとりひとりゆく・水のいろのわいてくる・雪折れの水仙のつぼみおこしてやる　　　改作一句・この柿の木が庵らしくするあるじとなつて　遠く遠く鳥渡る山山の雪　雪晴れの煙突からけむりまつすぐ　小鳥が枝の雪をちらして遊んでくれる　今夜も雪が積みさうなみそさゞい　暮れはやくみそつちよが啼く底冷えのして　電燈きえて雪あかりで食べる・いそいでくる足音の冴えかえる・雪あした、あるだけの米を粥にしてをく　山の水の張りつめて氷・雪の山路の、もう誰か通つた・雪のあしあとのあとをふんでゆく・霜ばしら踏みくだきつゝくらしのみちへ・雪どけみちの兵隊さんなんぼでもやつてくる・大きな雪がふりだして一人・おぢいさんは唄をうたうて雪を掃く・朝の墓場へもう雪が掃いてある

一月廿八日

ゆつくり朝寝、けふもまた雪か。お茶はうまいが食べる物がない、あまり食慾もない、お仏飯をさげていたゞく（十粒ぐらいしかないけれど、それで十分だつた）。古新聞と襤褸を屑屋へ売つて、少しばか

り金が出来た。米一升、酒屋へ、肴屋へ二十四銭払ふ。彼――某酒店の主人――の心をあはれむ、いやしい人間だ。待つてゐた敬坊が来た、県庁へ出張する彼を駅まで見送つて行く、そしてちよつぴりやる。それから、冬村君の仕事場に立ち寄つて、いつぞや押売してをいた厚司の代金を受取る、それで払へるだけマイナスを払ふ、だいぶさつぱりした。夕方、樹明来、鰯で一杯やる、今夜こそは私が奢つたのだ、のう／＼した気持だ。敬坊が木炭を買うてくれたのはありがたかつた。鰯、鰯、鰯ほどやすくてうまい魚はない、感謝する。例によつて、樹と山と二人はインチキバーでホツトウイスキー、こゝろよく酔うてこゝろよく別れた。『鉄鉢の句』こゝまでくれば、もう推敲といふやうなものからは離れる、私はしゆくぜんとして、因縁の熟するのを待つばかりである。『ひとり』を契機として孤独趣味、貧乏臭、独りよがりを清算する、身心整理の一端として。

　　押しつぶされて片隅の冬鴨のしづか　ひとり雪みる酒のこぼれる　　樹明夫人に・お産かるかつた山茶花のうつくしさ　　樹明赤ちやんに・雪ふるあしたのをんなとしうまれてきた　競つて売られる大魚小魚寒い風・林となり雪の一しほおちついて・ゆふやみの恋猫のこゑはきこえる・冴えかえる水音をのぼれば我が家　赤いものが捨てゝある朝の寒い道　林のなか、おちついて雪と私・ほいなく別れてきて雪の藪柑子・つららぶらさがらせてやすらけく生きて　大根みんなぬかれてしまつた霜・けふも鴉はなく寒いくもり・ハガキを一枚ぬかるみのポスト

　　一月廿九日

　雪、あたまはよいが胃がわるい。あれこれと用事がないやうでなか／＼ある、けふは街まで五度も出かけた。夜、敬坊来、街でほどよく飲んで、街はづれまで送つた。酒あり、炭あり、ほうれんさうあり。私もすつかり落ちついた、落ちつき払つては困るけれど。

　　一月三十日

　毎日毎日お天気の悪いことはどうだ。氷柱の落ちる音はわるくない。今夜も、敬君が帰宅の途中に寄つてくれた、いつしよに街へ出かけて小ワヤ。

・さそひあうて雪の婦人会へゆく顔で　ふうふの家鴨がつめたい地べた・雪もよひ雪となる肥料壺のふたする・日向の枯草をやいてゐる人一人・この家にも娘さんがあつてきりぼしきざんでゐる・紙反古もほつたらかして寒う住んでゐる・みぎひだりさむいさむいあいさつ・やうやうにして水仙のつぼみ　寒うきて子の自慢していつた　雪ふる大木に鋸をいれやうとして

一月三十一日

日々好日、事々好事。朝、敬坊来、県庁行を見送る、樹明来、珍品を持つて、そして早く出勤。粕汁はうまかつた、山頭火も料理人たるを失はない！大根の始末をする、同じ種で、同じ土で、同じ肥料で、しかも大小短長さま／″＼はどうだらう。△切り捨てた葱がそのまゝ伸びてゆく力には驚いた。今日から麦飯にした。何か煮える音、うまさうな匂ひ、すべてよろし。千客万来、——薬やさん、花もらひさん、電気やさん、悪友善人、とり／″＼さま／″＼。夕方、また三人があつまつて飲みはじめた、よい酒だつた、近来にないうまい酒だつた（酒そのものはあまりよくなかつたが、うまかつた）、三人でまた街で飲みつゞけた、樹君を自動車で送り、敬君を停車場まで送つて、ききとして戻つた、よう寝られた。落ちついた、ではなくて落ちつけた、であらう。「ぢいさま」と或る女給が呼びかけたのにはびつくりさせられた。これで一月が終つた、長かつたやうでもあり、短かつたやうでもある、この一ヶ月はまことに意味深かつた。△所詮、人生は純化によつて正しくされる、復雑を通しての単純が人生の実相だ、こゝから菩薩の遊びが生れる、物そのものに還生して、そして新生がある。

とう／＼雪がふりだした裏藪のしづもり・まづ枇杷の葉のさら／＼みぞれして・けふいちにちはものいふこともなかつたみぞれ・けさから麦飯にしてみぞれになつて・雪晴れ、落ちる日としてしばしかゞやく・あんたに逢ひたい粉炭はじく・霜をふんでくる音のふとそれた・右は酒屋へみちびくみちで枯すゝき・いつも尿するあとが霜ばしら・何だか死にさうな遠山の雪　障子に冬日影の、郵便屋さんを待つてゐる・ようできたちしやの葉や霜のふりざま・ついそこまでみそつちよがきてゐるくもり　倒れさうな垣もそのまゝ雪のふる・地下足袋おもたく山の土つけてきてゐる

二月一日

雪もよひ、ひとりをたのしむ。▵年はとつてもよい、年よりにはなりたくない（こんな意味の言葉をゲーテが吐いたさうだ）、私は年こそとつたが、まだ／＼年寄にはなつてゐないつもりだ！▵本来の愚を守つて愚に徹す、愚に生きる外なし、愚を活かす外なし。依頼心が多い、——この言葉ほど私の心を鋭く刺したものは近来になかつた、ああ。▵自然即入。▵生も死も去来も、それはすべていのちだ。有無にとらはれて、いのちを別扱にするなかれ。

また雪となり、大根もらつた　くもりおもくて竹の葉のゆれてなる・影が水を渡る　影もならんでふむ土の凍てゝゐる・夕月があつて春ちかい枯枝・ゆふやみのうらみちからうらみちへ雪どけの

二月二日

早寝の早起だつた、御飯をたべて御勤をすましてもまだ明けなかつた、狐が鳴いてサイレンが鳴つた、寒い山が微笑んだ。久しぶりに入浴、そして買物。前のおばさんから大根を貰つた、山頭火お手づくりのものより、よく出来てゐる、干大根にでもしてをかう。▵善悪を考へる前に愛憎がある、正邪を判ずるに先つて純不純を思ふ。若し私の生活——といふよりも私の句によいところがあるならば、それはマネがないからだ、コシラヱモノでないからだ、ウソがすくないからだ、ムリがないからだ。

二月三日　節分。

冷静にして明朗、つめたいけれどゆつたりしてゐる。昼酒を味ふた、悠々独酌、二合で腹いつぱい心いつぱいになつた、これ以上は貪るのだ。▵型といふものは出来るのが本当、そしてそれを破るのが本当（これはパラドツクスめくが）。▵麦飯の嫌な人には、麦飯が麦ばかりに見えるだらう。▵無駄のある生活人に人があつまるといふよりも、缺点のある人格者に友が出来るといふ方が、ヨリ痛切であらう。他人——殊にそれが友達、殊に殊に親友——の缺陥を見せられた場合の悲痛は自分のさうした場合よりも強い。雑草、雑木、雑魚、雑兵、等、等、——私は雑といふ字のつく物事に、限りない親しみと喜びと

を感じる。学校から帰宅の途次、樹明君が寄つてくれた、誘はれて八幡宮の節分祭へ参詣する約束をした。夕飯は煮大根（正しくいへば、焦げつかせたので、焼大根）で麦飯茶漬さら／＼さら、まことに簡にして純。数日来、風邪気味なので、着れるだけ、あるだけ着て出かける、なか／＼の人出である、自動車が遠慮ぶかく乗り捨てゝある風景にも近代的地方味がある。樹明君と合して、こゝで一杯、そこで一杯、そして私はぐる／＼まはつて戻つた（この中に無意味の有意味がひそむ）。逢はない彼女、知らない恋人、何が何だか分らないのよ、といふものについて漫想した（漫想といふ言葉はどうですか！）。

・大根洗ふ指がおしへてくれる道は霜どけ・麦飯が腹いつぱいの日向ぼつこり・おちつくまゝに水仙のひらく・歪んで日向の花つけた梅のよろしさ・考へるでもなく考へぬでもなく大根洗ひつゝ・電燈ひとつ人間ひとり　　節分三句・さそはれてまゐる節分の月がまうへに・月がまうへに年越の鐘が鳴る鳴る・節分の長い石段をいつしよにのぼる・どこかに月が、霜がふる白い道・ふけて炊かねばならない煙がさむい・枯野まつすぐにくる犬の尾をふつて・そこらに大根ぶらさげることも我が家らしく・遠い道の轍のあとの凍つてゐる・たま／＼来てくれて夕月のある空も（再録）

二月四日　立春。

すこし夜の雪がつんでゐる、寒いことは寒いが、大したことはあるまい。たよりいろ／＼——俊和尚、孝志君、緑平老、敬治坊、そして雑草二月号。下痢で弱つた、酒のためか、寝冷のためか、それとも麦飯のためか、とにかく腹工合も悪いし、懐工合はなほさらよくないし、節食断酒の好機である、しばらくさうしよう。▵昨夜、樹明君と立ち寄つたおぢさんのところで、血書の話を聞いて、みんな微苦笑したことであつた、血書もかう流行的になつてはインチキがあるのも当然だらう、黒い心を赤い血で書いて、それがどうしたといふのだらう、袢をきてゐても不真面目があり、どてらをきてゐても真摯がある、シンケンらしいウソを呪ふ。けふもいちにち、ものをいふこともなかつた、たゞ執筆し読書した、そして月のよろしさをよろこびながら寝た。

更けゆけば咳入るばかり（述懐）・干大根が月のひかりのとゞくところ　月の暈、春遠くない枝に枝・月が暈きた餅持つてきてくれた（樹明君に）　別れよう月の輪を見あげ

二月五日

春近しの感がある、霜のとけるほどあたゝかい。そこらあたりを漫歩する、漫はそゞろと訓む、目的意識のないことを意味する、漫談、漫読、漫想、漫生！無為而化――そんな一日であつた、たゞ一事の記すべきがあつた、珍客来、Ｈのおばさんとふうちやんとが立ち寄つたのである、私は彼女等の好奇心と好意とに対して微苦笑するより外はなかつた。義庵老師から、禅の生活と大乗禅とを六冊送つて下さつた、深謝感佩。ぬくう暮れて、月が暈をかぶつてゐる、寝るより外なく、寝て読書してゐると、樹明君来庵、大村君を伴つて、そして餅を持つて。その餅を焼いて食べながら話す、句の話、やつぱり句の話が一等よろしい。

・いかりおさへてさむいぬかるみもどつてきたか（自嘲）　こやしあたへてしみ／″＼ながめるほうれんさうで・掃きよせ掃きよせた落葉から水仙の芽（再録）

二月六日

けさはまつたく早すぎた、御飯、御勤、何もかもすんでしまつても、まだ／＼なか／＼明けない、禅書を読んだ。ぬくうてなごやかだつたが、だん／＼つめたくなり、小雪ちりはじめた、畑仕事の手が寒かつた、そしてとう／＼雨になつた。今日も行乞には出かけられさうにもない、餅でも食べてをるか！夕方、樹明君から来状、今夜は宿直だから、夕飯と晩酌とを御馳走しようとの事、大に喜んで出かける、飲む食べる話す、そして別れてＨおばさんのところで、一品の二本、それから二三軒をあるきまはつて（文字通りたゞあるきまはるのである、銭もないし、信用もないから）そして戻つてきて、お茶漬を食べて、ぐつすり寝た、ああ、極楽々々。

楢の葉のそよぐより明けそめた空　日がのぼり楢の葉のしづか・落葉あたたかうして藪柑子・せなかにぬくい日のあたりどこでもよろ

しく・日あたりがようて年をとつてゐる・ぬくい日の、まだ食べる物はある

二月七日

けさも早起だつた、朝のうちだけでもかなり読書が出来た、書かなければならない原稿があるけれど、気乗りがしないから、裏山へ登つて遊んだ、ぽか／＼とぬくい日である、かういふ日には何だか老を痛感する。小松一本、ぬいてきてうゑた、この松の運命は。――近来、疳の虫が出てきてゐる、いろ／＼の事に腹が立つ、つまらない事が癪に障る、昨夜も胸中むく／＼があつたので、それには何のかゝはりもない樹明君に対して礼を失したに違いないと今朝考へて恐縮してゐる、これではいけない、私は行乞のおかげで、怒るといふやうなことは忘れてゐたのだつた、もつとも、熊本では特殊の理由から疳癪玉を破裂させたが、それからはまことにおとなしいものであつた、それがＭ君の事やＳ君の策やＨ君の態度などによつて、ぐらつきだして、しだいにむしやくしやをかもしだすやうになつた、じつさい、腹の立つうちが花かも知れない、癪にさわるものがなくなつては、生甲斐がないやうになるかも解らない、とにかく虫の事だから、よくもわるくも、虫にまかしてをくか。久しぶりに――十日ぶりぐらいだらう――入浴して顔をあたつた、せい／＼した、飯の足らないのも忘れてしまつたほど。喫茶読書、これもよかつた、古教照心といつた気持。腹が鳴るのはさびしいものだと思つた、その声（まさに声だ）にはさびさへもあるやうに感じた。

・山ふところの啼かない鳥の二羽で・このみちどこへゆくふかう落葉して　おぢいさんも山ゆきすがたのぬく／＼として　日のあたる家からみんな山ゆきすがたで・茨の実はぬくい日ざしのほうけすゝき・なんとなく春めいて目高のあそびも・藪柑子、こゝから近道となる落葉　　　　　　　　　近道の落葉して　たえず啼いてさわがしい鳥が葉のない木　腹が鳴る、それに耳をかたむけてゐる私

二月八日

あたゝかい雨、もう春が来たかと喜ばせるやうな。朝、樹明君が見舞に来てくれた、貧乏見舞に！　そして、雨の其中庵はなか／＼よい

なあといふ、しめやかなものですよと私が答へる、お茶をのんで別れた。いよ／＼食べる物がなくなつた、明朝までも餓死もすまいて。朝はお茶、昼は餅を焼いて、晩は野菜汁ですました、すませばすませるものである。△ふくろうが濁つた声でヘタクソ唄をうたつてゐる、どこかにひきつけるものがある、聞いてゐると何となく好きになる、彼と私とは共通な運命を負うてゐるやうだ。夜、樹明君再来、第六感を働らかして、白米を持つてきてくれた、何よりも有難い品だつた、千謝万謝。一人となつて、このまゝ寝るのは何だか物足らないので、その米を一握りほど粥にして食べた、まことにしみ／″＼と食べたことである。△貧乏、といふよりも缺乏は私を純化する、そして私を私の私たらしめる。多少の発熱、からだがだるくて発散するやうな気分、これも悪くない、現実を二三歩遊離した思索にふけつた（風邪をひきそへたのだらう）。

・めつきりぬくうなつた雨のしづくする雑草・足音は郵便やさんで春めいた雨・食べる物がなくなつた雨の晴れてくる　ゆふべはさむいふくろうのにごつたうた　ゆふべつめたく屋鳴りした・冬夜ふければ煮えてこぼれる音のある　　　樹明君に・冬月夜、手土産は米だつたか　朝から雪の掃いてある墓場まで　　　樹明君に　月かげまつすぐに別れよう・地べた月かげあたゝかう木かげ

二月九日

晴曇さだめなし、風邪発熱、だるくて慾望がない。いろ／＼の手紙がきた、手紙は差出人の心を表白すると同時に受取人の心をも表白せしめる。はじめて、雲雀の唄をきいた。買物いろ／＼、すぐまた無一文、それでよい／＼。一杯やるつもりで仕度をして樹明君を待つ、やつてきてくれた、気持よく飲む、ほろ酔機嫌で街へ出かける、そこで一杯、また一杯、すこしワヤをやつて、それ／″＼の寝床へもどつて寝た。

今日の買物一金拾三銭　　醤油二合其他一金壱円　　　酒壱升一金拾弐銭　　ゴマメ五十目一金五銭　　　切干百目一金七銭　　　バツト一個一金四銭　　　なでしこ一袋一金七銭　　　鰯一くぎり一金五銭　　　竹輪一本一金弐銭　　　しようが一ツ一金四銭　　　酢

一合一金十銭　　　古雑誌一冊一金三十銭　　酒代借払一金十弐銭　　小口色し一金十銭　　　切手十枚一金五銭　　　酒粕百目一金十銭　　　煙管弐本

　　二月十日

　天地清明、私もその通り。樹明君、朝、来訪、昨夜のワヤはわるくなかつたやうです。午前は漫歩、飲みたくなれば酒屋で一杯、喫ひたくなれば煙草屋で一服、ひもじくなつてパン屋でパンパン！とにかく、すべてがよろしい。△執着しないのが、必ずしも本当ではない、執着し、執着し、執着しつくすのが本当だ、耽る、凝る、溺れる、淫する、等々の言葉が表現するところまでゆかなければ嘘だ、そこまでゆかなければ、その物の味は解らない。今夜の月はよかつた、冬の月でもなし、春の月でもなし、たゞよい月であつた。夜、宿直の樹明君から来状、来てくれといはれては、行きたい私だから、すぐ行く、冬村君ともいつしよになつて、飲んで話して、そして書く。おとなしく別れて戻つた、まことに、まことによい月であつた、月夜のよさをよく味はつた。とろ／＼こゝろよいほどの発熱（風邪もわるくない！）

　　水底の岩も春らしい色となつた・草の芽、めくらのおばさんが通る・春は長い煙管を持つて　君こひしゆふべのサイレン（！）・冬の山からおりてくるまんまるい月・枯枝をまるい月がのぼる・月へいつまでも口笛ふいてゐる・月のよさ、したしく言葉をかはしてゆく・月のあかるさが木の根

　　二月十一日　紀元節、そして建国祭。

　晴れると春を感じ、曇ると冬を感じた、春を冬が包んでゐるのだ。周囲を掃除しながら、心臓の弱くなつたことをまざ／＼と感じた、余命いくばく、忙しいぞ。藪椿一輪を活ける、よいかな、よいかな。午後、風が出た。樹明君が吉野さんをひつぱつてきてくれた、三八九第六集の裏絵として、裏から見た其中庵を写してもらつた。おだやかな、あまりにおだやかな一日だつた。夜は早くからぐつすりと寝た、そして夢を見た！

　・月が照らしてくれるみちをもどらう・月かげのまんなかをもど

る・まるい月のぼる葉のない枝（改作再録）・さらさらささのゆきあかりして（追加）　　　改作・どこかそこらにみそつちよがゐるくもり

二月十二日

　天地清明にして、雪花ちらほら。朝、山路を歩くともなく歩いて、お稲荷さんに詣でた、行者一人の長日月の努力が、岩を割き地を均らして、これだけの霊場を出現せしめた事実に頭を下げる。水仙を活ける、よいかな、よいかな、藪椿とは対蹠的な趣致がある、貴族的——平民的、洗練味——野趣、つめたさ——あたたかさ、青白い美人——肥つたお侠、等々。夕は墓場を散歩する、墓といふものは親しみがある、一つ二つの墓はさみしいが、上にも下にも並んで立つてゐる墓石は賑やかだ、新らしいの、古いの、大きいの、小さいの、うつくしいの、かたむいたの。……今夜は悪夢を見ないやうに祈る、昨夜はつゞけて悪夢を見た、ヱゴ諸相の連続映像！

　・朝日まぶしい花きるや水仙・けさのひざしの手洗水へあたたかく　ここもやしきあとらしいうめのはな・もうしづむひでささのさやさや・ゆふべのサイレンのながうてさむうて・暮れても耕やす人かげに百舌鳥のけたたましく・茶の木にかこまれそこはかとないくらし（述懐）　火を焚いて咳ばかりして

二月十三日

　降霜結氷、つめたいけれどうららかだ、冬三分春七分。けさ、はじめて笹鳴が耳にはいつた、ずゐぶんヘタクソだつた、それでよろしい。内容充実の手紙が来ないので、山口行乞を実行した、山口は雪もよひで寒かつた、行乞三時間、悪寒をおぼえるので、急いで帰庵した、途中で一杯ひつかけて元気回復。行乞は求めてすべきものではないが、しようことなしの行乞を活かすだけの心がまへは持つてゐなければならない。

　・朝月ひやゝけく松の葉に・葉がない雲がない空のうらゝか・枯葦の水にうつればそよいでる・月へひとりの戸はあけとく・伸びたいだけは伸びてゐる雑草の花・樒の葉枇杷の葉掃きよせて茶の木の葉

今日の行乞所得—、米八合—、銭二十九銭　　今日の買物—、十五銭　シヨウチユウ—、四銭　　タバコ—、三銭　　ヤキイモ

　　二月十四日

　うらゝか、ほがらか、のどか、のどかだつた。春ちかし、……もう春といふてもよかつた。行乞に出かけるつもりだつたが、風邪気味なので自重して（独身者は殊に気をつけなければならない）、閑居。夕方、樹明君が四日ぶり来庵、お土産として、ビスケツトとスルメとを頂戴した。何のかのと用事がある、独身者は、閑なやうな忙しいやうな。しんぢつおちきました、と私はすべてに報告した。敏感な虫が灯をしたうてやつてくるやうになつた。

　　二月十五日　涅槃会。

　けさは早かつた、御飯をたべて、おつとめをすまして、しばらく読書してゐるうちに、六時のサイレンが鳴つた。朝月夜がよかつた、明けゆく風が清澄だつた。読書、読書、読書に限る、他に累を及ぼさないだけでもよろしい。アメリカは黄金を抱き込んで、しかも貧乏に苦しんでゐる！　これに似た人間が日本にも存在する、黄金を食べても餓は凌げないのだ、胃は食物を要求してゐるのだ、物そのものの意義を理解しなければ駄目だ。くわう／＼として日が昇る、かたじけないと思ふ。小為替一枚受取つた、さつそく米と酒とを買つた、米二升四十六銭、酒二合十八銭、そして煙草が四銭。午後、晴れて寒い風が吹く、何となく物足らないので、樹明君を招いて一杯やりたいと思ひついたので、湯屋まで出かけた途次、顔馴染の酒屋へ寄つて、一升借入の交渉を試みたが、不調に終つた、私は断られて腹を立てるほど没常識ではないが、さりとて、借りそこねて平然たるほど没感情的でもない、貸して貰つた方がうれしかつたのが本当だ、とにかく酒一升借るだけの銭も信用もないのは事実だつた！だいたい、掛で飲まうなどゝいふ心得は褒めたものぢやないね、もつと物に執する心持を捨てなければなるまいて。陽が傾いて樹明来、酒はのみたし酒はなし、学校の畜舎へまでのこ／＼出かけて、かしわとさけとにありつく、そしてひとりでインチキカフヱーでホツトウイスキー一杯、泥まみれになつて戻る、いのちを持つて戻つたのはまことに感心々々。

・じゆうぶんやすんだ眼があいて春・枯木はおだやかな朝月である・これが新国道で、あれはやきいもや（柳井田所見）・みんな働らく雲雀のうた・水音の藪椿もう落ちてゐる・枯草の日向の脚がぽこ／＼あるく・咲いてここにも梅の木があつた・朝月夜、竹藪がさむうゆれだした・鳴るは楢の葉で朝月夜・朝月はうすれつつ竹の葉のなかへ・つめたく風が、私もおちつけない・枯れつくしてぺんぺん草の花・つゝましく酔うてゐる庵は二十日月・やまみちのきはまればわいてゐる水（改作再録）

二月十六日

けさも早かつた、四時頃だつたらう、昨夜の今朝だから、感服しても差支ない。朝の読書はほんとうによい、碧巌第二則、至道無難、趙州和尚の唇皮禅に敬服する。△そのものになりきる、――これこれ、これだ。午前は雪もよひで寒かつたが、午後は晴れて暖かだつた、そこで、樹明君と会して、鰯で一杯やらうといふのだ。焼酎即死！　と思ひながら、どうしても縁が切れない。滓を飲んで旦浦時代を追憶した、滓なんて飲む人があるからおもしろいと、あの時代は考へてゐたが、今の私はその滓でさへろく／＼飲めないではないか（現に一昨日は十銭しかないので、わざ／＼新町まで出かけて滓を飲んで来たやうなみじめさだ）。焼酎を借りる、鰯を借りる、さて酒はどこから借りださうか、窮すれば通ず、要求あれば供給あり、何とかなるだらう（醤油はＦ家から借りた）。夕づつかけて樹明来、やうやく一升捻出して飲んだ、よい酒だつた、うまい酒だつた、涙ぐましい酒だつたともいへよう、ハムの一きれにもまことがあつた。よう寝た、ぐつすりと夢も見ないねむりだつた。△私は、すべての音響を声と観じるやうになつた、音が心にとけいるとき、心が音をとかすとき、それは音でなくして声である、その新らしい声を聴き洩らすな。

・梅と椿とさうして水が流れてゐる・庚申塚や左は街へ下る石ころ・あさぐもりの垣根の花をぬすまうとする　太陽、生きものが生きものを殺す・寝覚しめやかな声はあたゝかい雨・ハムは春らしい香をかみしめる（樹明君に）

二月十七日

サイレンが鳴る、お寺の鐘が鳴る、そしてしめやかな雨の音。めづらしい訪問者——猫がやつてきて、鰯のあたまを食べて行つた。歯がうづいて頭痛がする、暮れないうちから寝た、寝た、寝た、十二時間以上寝た。歯——抜ける前の痛みだ、去年は旅で上歯が三枚ぬけた、今年はもうすぐ下歯が二枚ぬけるだらう。噛みしめなければ、食物の味は出て来ない、それにしても酒が固形体でないことは、何といふ仕合だらう！

・人も枯草も濡れてたそがれ・かあと鴉が雨ふる山へ遠く・茶の木もうゑかへたりして日照雨・晴れてはあたゝかく銃声をりをり・うづく歯を持ちつゝましう寝る

二月十八日

曇、寒、小雪、閉ぢ籠つてゐるにはよい日である。三八九原稿整理。午後、街へ出かける、三日ぶりである、入浴、木炭を持つて戻る。樹明来、お茶とビスケツト。かうして、つゝましくしてゐることも悪くない。明日は、樹明君が朝から、そして敬坊も来庵の予約。不快な——それは私自身の不安心を暴露する以外の何物でもなかつた夢に襲はれた、そして頻りに囈語を吐いた（自覚してゐて寝言をいふのだから助からない）、修行未熟、精進せよ。このあたりに、いかに多くの鶏が飼はれてゐるか、そしてその鶏がいかに屡々鳴くかを今更のやうに知つた。

・山から下りてゆく街へ虹立つた　暮れて寒い百舌鳥がまだないてゐる

彼の過去帳を繰りひろげて見る。——

最初の不幸は母の自殺。第二の不幸は酒癖。第四の不幸は結婚、そして父となつた事。第五の不幸……

同時に、彼の最初の、そして最の幸福は？

二月十九日

今朝は早かつた、早過ぎた、四時頃でもあつたらうか、一切事をすまして、ゆつくり読書しても、まだサイレンは鳴らなかつた、しか

し、早起はよい、朝の読書もよい、頭脳が澄みきつて、考へる事がはつきりする、あまり句は出来ないけれど、自己省察、といふよりも自己観照――それが一切の芸術の母胎――が隅から隅まで行き届く、自分といふものが、そこらの一草一石のやうに、何のこだはりもなく露堂々と観照される。……今朝の片破月はうつくしかつた、星もうつくしかつた、空のすべてがうつくしかつた、そよとの風もない、そして冷たさのしん／＼と迫つてくる天地はうつくしいものであつた、かういふ境地、かういふ境地から湧いてくる情趣は俳句的であると思つた。▵朝早くから、いろ／＼の小鳥がやつてくる、――モズ、ヒヨ、メジロ、シヂユウガラ、ミソサヾイ――スヾメも時々くればよいのに。めづらしい大霜だつた、何もかも霜をかぶつてゐた、霜といふものはずゐぶんうつくしいものだと感じ入つた。待ち設けた敬治君がきた、一杯やつてゐるところへ、樹明君がおくれたのであはてゝやつてきた、これで揃つた、酒、酒、酒、そして鰯、竹輪、うどん、汁、飯、等々等。ほんとうによい酒だつた、うれしい酒だつた、おだやかな、をはりを全うした酒だつた、近来稀な、私たちの酒だつた。よく寝た、ありがたい、ありがたい。

・大霜、釜をみがく・枯枝、するどい霜の・霜の水仙うごかず・落葉うづたかし霜しろく・わらや霜どけしづくするゆたかな音・さわがしく竹をきつてゐる霜どけ　麦の芽、麦の芽と親子でうつ・雪もよひ、莚織つてゐる子だくさん　　　長州料理　これがちしやもみといふふるさとにゐて・冬山から音させておりる一人二人　藪のしづかさが陽をのんでしまつた

二月二十日

けふもよい日だ、寒いことは寒いけれど。桂子さんからうれしい手紙が来た、桂子女菩薩、女人に反感を持つてゐるのは誰だい。買物をする、第一は酒、第二は魚、諸払をする、酒屋、魚屋、そして湯屋。夕、樹明君を招待する、酔うて出かけた、そしてワヤ、いけなかつた、ゴロにぶつつかつた、君を送つていつて、とう／＼泊つた（樹明君、もう歩きまはることは止めませう）。桑原、々々、敬遠、々々。

けさをひらいた水仙二りん馬が尿する日向の藪椿

二月廿一日

樹明居で朝飯をよばれる、産後の奥さんにすまないと思ふ。何とうらゝかなお天気だらう。桂子さんから小包到来、御厚情のかず／＼ほんとうにありがたく頂戴いたしました。大山さんから稿料落手、それだけ飲んでしまふ。樹明君違約して不参、それが却つてよかつた。焼酎よ、お前と永劫に縁をきる。文字通り無一文。▵人間を離れて人間はゐない、彼、彼女、等々。

さんざ労れて春めいた雨となつた・水のいろも春めいたいもりいつぴき　霜、水仙は折れて咲いてゐる

二月廿二日

予期した雨となつた、そして晴れた。酒があるから酒を飲んだ、私はまだひとりの酒はほんとうに飲めない、酒は親しい人々といつしよに飲みたい。樹明君がハムを持つてきてくれた、春らしい情景である。

二月廿三日

春、春、春がきました。二三日なまけた、けふからしつかりはたらかう。三八九の原稿を書きつゞける。句もないほど、平穏な日だつた。酒はないけれど、米があり野菜がある、水仙がほのかに匂ふ。

・こゝにふきのとうひらいてゐる・あるけばふきのとう（追加）・やつとふきのとう・藪椿、号外のベルがやつてくる・春がきた山から大きな木をはこぶ

二月廿四日

また雨だが、ぬくい雨だ、すつかり春めいた雨だ、油虫がどこからかのこ／＼はいだしてきたほどだつた、午後は風がでゝ、だん／＼晴れてきた。三八九の仕事、ハムはうまいな、文旦飴もうまいな。

二月廿五日

未明、樹明来、宇部へ出張して、飲み過ぎて、三田尻まで乗り越して、やうやくこゝまで来たといふ、いかにも樹明らしい、ふたりいつ

しよにしばらく寝る。明けてから、お茶を飲んで、さよなら、それから私は飯だが、もうシヨウユもスミもタバコもコメもなくなつた、まだハムとアメとが残つてゐる！村のデパートで、サケ一杯とタバコ一袋とを借りた。国際聯盟決裂の日、日本よ強くなれ、アジアは先づアジア人のアジアでなければならない。三八九、三八九、三八九はメシのタネだ、あああああ、ああ。樹明君が夕方再び来庵、豚のお土産を持つて、――一杯あげたいとは思へども。――夜は三八九原稿を書く、あひまあひまに読みちらす。今日は自然の事実を一つ発見した、水仙も向日葵のやうに太陽に向いて咲くといふことである、花はたいがいさうだけれど。ハムばかり食べてゐる、まるで豚の春だ。舌皷を食べた（これは山口名物、これも樹明君のお裾分）。

・暮れきらないほの白いのは水仙の花・陽がさせば水仙はほつかりひらき・とろ／＼とける『舌皷』の春ですね・水のいろも春めいたいもりいつぴき（再録）・水仙こちらむいてみんなひらいた・あたゝかく虫がきて夜の障子をたゝく　すつかり春らしく家々のけむり・地べた日向をころげて落葉・焚火あたゝかく風さわぐ

二月廿六日

寒い雪がちらほらしたが、どうやら晴れさうだ。昨日も今日もよい手紙が来ない、軽い失望。ハム、飴――なか／＼の御馳走だ。樹明君がめづらしく山ゆき姿で来た、ルンペンのやうでもあり、ギヤングのやうでもあるが、樹明はやつぱり樹明だ。けふも暮れたか、の嘆。

二月廿七日

寒い、寒い、こんな日はとても出かけられない、出かけたくないのを無理に出かけるよりも、ぢつとしてゐる方がよい、たとへ食べる物がなくて、お茶ばかり飲んでゐても。昨日の夕餉はハムと文旦飴だつたが、今日の朝飯はハムと大根、ブルだかプロだか解らない食事だ。午後は晴れて春日和になつた、思ひ立つて防府行、汽車賃を冬村君から借りて。浴永君といつしよに三田君を訪ねる、たいへん歓待された、酒も飲んだし、金も貰つたし、お土産まで頂戴した。終列車で帰庵、Ｈおばさんから飯を借りた。今日の浪費壱円也（現在の私には）。

・みんな山ゆきすがたの雪が来さうな・汽車も春風のふるさとのなか・ゴボウマキ、ふるさとのうまさかみしめる（この一句を浴永君に）

二月廿八日

晴、春景色、朝酒、万事豊富、炭、酒、米、煙草。樹明来、大に飲み大に語つて、往生安楽国！

・ほつかりと宵月のある枯枝で・風がでて葉が鳴るゆふべの祈り・春風の豚でうめく・日向の椿がぽとりと水へ・春がきたどろ／＼の蓮を掘つてゐる・草の芽乞食が荷をおろした

三月一日

くもつてはゐるがぬくい、さすがにもう春らしい。三八九印刷。また無一文、銭がほしいな。村のデパートで一杯また一杯、とうぜんとしてもどる。

三月二日

晴、春、三八九。入浴、春風しゆう／＼だつた、馴染の酒屋で一杯、むろんカケで。人影がさしたと思つたら、乞食だつた、彼もまた珍客たるを失はない、それほどわが庵は閑静である。夜、樹明来、茶をすゝつて漫談しばらく。しづかに更けて、やすらかなねむり。

・人影うらゝかな、乞食だつたか　犬がほえる藪椿のつそりと乞食で　痛さこらへてゐて春めいた一日・椿ひらいて墓がある・これだけ拓いてそらまめの芽

三月三日

さむい、くもり、冬らしく、そして晴、あたゝかく春らしく。けふは新暦では桃の節句だが、私には何のかゝはりもない。朝早くからみそつちよがきてなく。うら／＼と野山がかすんでゐる、春の横顔うつくしいね。私の庵には鼠さへゐないのだ、めづらしいだらう（井師の雑文、鼠を読んで）。新聞配達さんがアカツキを一本くれた、貧者の一本！号外がきて驚かした、東北地方に地震、海嘯、火災があつたといふ、願はくは被害少かれと祈る。やうやく三八九の仕事がすむ、切

手代がないので発送することが出来ない、あはれ／＼。火を焚く、さみしくない、——かういふ句はもう作らない、たゞ感想の一片としてこゝに書きつけておかう。いつもきこえるステーシヨンの雑音、しづかだ、——これもおなじく。△金銭に乏しうして苦しんだのでは、ほんとうの意味で救はれない、物そのもの——たとへば米なら米——に乏しうして苦しんで、初めて、物そのものゝありがたさが解り、したがつて生そのもののよろこびを味ふことが出来る。△貧乏といふことがほんとうに解らなければほんとうに救はれない。樹明不来、待ちぼけ。

・生垣も椿ばかりでとしよりふうふ・号外のベルが鳴る落椿・そこに鳥がゐる黙つてあるく鳥　草の実つけて食べ足つてゐる　鳥かげのまつすぐに麦の芽・ようほえる犬であたゝかい日で・おきるより火吹竹をふく・寒い火吹竹の穴ふとうする・けさから春立つといふぺんぺん草　　　　　　　　　　　　　　　　（追加）・札をつけられて桜ひらかうとして

三月四日

けさはすこし早く起きる、曇つて寒い。よい手紙——わるい手紙も来ない。樹明来、おかげで三八九、一部発送。ぬくうて雨となつた、明日から行乞に出かけるつもりなのに。

・水わけば水に生きるもの・落葉ふかしも巌のすがた　暮れるより降りだして街の雑音も・なげやりの萱の穂もあたゝかい雨・森かげかそけく枯れてゐる葉に雨がきて　ぬくとくはうてきて百足は殺された

三月五日

夜来の雨がはれてすが／＼しくなつた、どれ出かけよう。征坊からなつかしいありがたい手紙がきた、感謝々々。おかげで三八九全部発送済となる、安心々々。晴れて風がふく、かういふ日は警戒を要する。夕方から宿直室へ、例の如く食べる、飲む、饒舌る。そして少し泳いだ、久しぶりに。それでも戻つて寝た、さうするより外ないのだけれど。

・みんなしづくしてはれるそら　風ふく餅をたべてはひとり遊ぶ

児　大きな松がある、そこが警察です・どこかに月がある街から街へ・月がまうへのかげをふむ　燈火管制の月夜をさまよふ　南無地蔵尊、こどもらがあげる藪椿

三月六日

晴、よい朝ではじまつてわるい夜で終つた。酔うて乱れて、何が母の忌日だ、地下の母は泣いたらう。樹明君を案内して置いて、このざまはどうだ。ふと仏前を見たら、——御供物料、樹明——の一封がある、恥を知れ、々々。ぶら／＼歩いたら、だいぶ気分がよくなつた。

三月七日

独りを慎しみ独りを楽しんだ。考へる事も書く事も、何もない一日だつた。あるだけの米を炊いて食べた。

今日の買物を見よー、五銭　醤油二合ー、弐十弐銭　白米壱升ー、十銭　酒一合ー、三銭　端書二枚ー、五銭　煙草一袋ー、六銭　焼酎五勺　（これがやめてよいものなり）・住みなれてふきのとう（改作）

三月八日

晴、なか／＼つめたい、淡雪よろし。防空デー、燈火管制の日、朝からサイレンが鳴りひゞく。悪い、といふよりも恥づかしい夢を見た、それを洗ひ落すべく湯屋へまで出かけた、帰途、樹明君を訪ねたかつたが、キマリがわるいので止めにした。夜、樹明君来庵、ほがらかな顔を見てほつとした。社会人として、電燈を消して寝る。……

三月九日

春寒、午後はポカ／＼日和だつた。あてもなく山から野を歩きまはつた、墓地逍遙もよかつた。けふはじめてやうやく、ふきのとうをみつけた（たゞしよそで）。△蕗の薹、蕗の薹、お前は春の使者だよ。畑を打つて根肥をしてをく。△肉体労働にはまことに、まことに尊いものがある。樹明君ひよつこりとやつてくる、酒を持つて、——ハムとちしやの下物で飲む、うまい、うまい、うますぎてとう／＼前後不覚になつてしまつた（それでも、するだけの事はして、寝るべき処に

寝てゐた）。

・もうみそつちよがきてないてゐるあわゆき・杉の葉に雪がちらつくうすい日ざしの・石から草の葉の淡雪・早春の晴れて風ふくサイレンのいつまでも・こゝろなぐさまない春雪やあるいてもあるいても・藪椿ひらいてはおちる水の音　　　防空デー、燈火管制の夜・爆音、月は暈きてまうへ・街はあかりをなくしたおぼろ夜となつた・月夜いつぱいサイレンならしつゞける・月をかすめて飛行機はとをざかるおぼろ

三月十日

雨、春寒なか／＼きびしい、袢纒を一枚かさねる。終日独坐。小鳥、殊に眼白が此頃興奮してきたやうだ、椿の木にあつまつて、朝から晩まで、恋の合唱をつゞけてゐる。茫然として、私はそれにも聞き入るのである。

　　　樹明君に・月あかりのしたしい足音がやつてくる　　　自分自身に　椿が咲いたり落ちたり道は庵まで　　　春雪二句追加・雪すこし石の上・ぶら／＼あるけば淡雪ところ／″＼・霜どけの道をまがると焼場で・墓場したしうて鴉なく・早春の曇り日の墓のかたむき　春の野が長い長い汽車を走らせる

三月十一日

何もかも食べつくしてしまつた、朝は干大根をかんでは砂糖湯をすゝつた。手答へのある手紙は来ない、行乞にもお天気がきまらないので出たくない。やうやくにして白米一升だけ工面した、これでもやつぱり世帯の遣繰といふべきだらう。身のまはり、家のまはりをかたづける、おだやかな気分で。やつと、うちの、ふきのとうを見つけた、二つ、しよんぼりとのぞいてゐた、それでもうれしかつた。よい月夜、おだやかな月夜だつた。

・朝からふりとほして杉の実の雨・雨の椿の花が花へしづくして・こゝにふきのとうがふたつ　　　亡母忌日二句追加・おもひでは菜の花のなつかしさ供へる・ひさびさ袈裟かけて母の子として

三月十二日

まことに春寒である、霜がふつて氷が張つてゐる、小雨さへふりだした。よい手紙が来た、うれしいな、さつそく酒を買ふ。樹明来、ふたりで飲んで街を歩いてゐると、ひよつこり敬坊にぶつつかつた、三人でまた飲んだ。戻つてきて、飯を炊いて食べる、残つた酒を飲む。夜、敬坊来、ふたりいつしよに寝る、おもしいろいな。

・雪の茶の木へ雪の南天　あんたが泊つてくれて春の雪・雑草はうつくしい淡雪・雪へ雪ふる春の雪・雪のしづけさのつもる・晴れて雪ふる春の雪　春の雪をあるく・春の雪ふるふたりであるく　雪の水仙つんであげる・わらやねしづくするあわゆき

三月十三日

雪がつんでゐる、そして雪がふる、敬坊と二人で雪をしみじみ観た。△今日は今日だ、昨日は昨日、明日は明日だ。△雪そのものを味ふた、雪そのものを詠ひたい。よいかな、雪の水仙、雪の小鳥、よいかな。しづかにしてさみしからず、まづしうしてあたゝかなり、いちにち雪がふつたりやんだり、そしてよい一日だつた。若い遊猟家がやつてきて、むちやくちやにポン／＼やられるには閉口した、小鳥も脅やかされるし、私も妨げられる、雪のしづけさが破られる。よくない手紙が来た。敬坊と別れてから、ずゐぶんさみしかつた。さみしい夕餉だつた、——素湯に干大根だけだつた。△私は物を感じるよりも物を観ることに心が傾いてきた、物の相、そこに今まで観なかつたものを観るやうになつた、物の色、香、音といふものから離れて、物のかたち、物のすがた、そのものに没入しようとしてゐる、多分こゝから、私の句境に一転向——それは一つの飛躍でなければならない——が出て来るであらう。△描く、写す、そして述べる、詠ずるのである、正しい認識、それがなければ、まことの芸術はない。

・茶の木の雪のもうとけた・雪の小鳥よとんできたかよ　　敬坊に　ごつちやに寝てゐる月あかり・月がのぼればふくらううたひはじめた・雪空、わすれられたざくろが一つ（改作再録）・笹原の笹の葉のちらつく雪・雪ふりつもる水仙のほのかにも・かすかな音がつめたいかたすみ・茶の木の雪のおのがすがた・投げだしてこのからだの日向・どうすることもできない矛盾を風が吹く・つい嘘をいつてしまつ

て寒いぬかるみ

三月十四日

まつたく春だ、うらゝかな日かげ、霜はつめたいが。もう食べるものがなくなつた、でも身心はやすらかだ。昨日の夕方、敬坊と約した手紙を受取るべく駅まで出かけたが、その手紙はまだ届いてゐなかつた、で、今朝はわざ／＼嘉川まで出かけたのだが、その人に逢へなかつた、失望落膽、急に空腹を感じたことである。一天雲なく腹裡一物なし、そして途上二句だけ拾つた。瓶の水仙を椿（もちろん藪椿）に代へた、仏壇は水仙の盛花、花はよいなあと花を眺めては思ふ。食べすぎの後は食べたらないのがホントウだらう！暮のサイレンが鳴つても電燈がつかない、つかない筈だ、電球がきれてゐる、そしてそれをかへて貰ふ拾銭もない、——今夜は早くから寝て考へよう！日中来書の約を履んで、樹明君バリカン持参で来庵、理髪どころぢやない、会話にも興が乗らない、やうやく名案を思ひついた、——焚火で理髪して貰つたのである。今夜の其中庵風景はまことに異色あるものであつた、私は、恐らくは樹明君も、一生忘れないであらう。街あかり星あかりだけでも、室内はほんのり明るい、そして今、十九夜の月が昇つた、その光をまともにうけて、明るい、明るい。樹明君がお土産の牡蠣はうまかつた、殻をたゝき割つて、そのまゝ食べる、かんばしい、久しぶりに磯の香をかいだ。

・水音もあたらしい橋ができてゐる・新国道まつすぐに春の風・うらゝかにして腹がへつてゐる・送電塔に風がある雲雀のうた・麦田風はれ／″＼として藁塚や・裏口からたんぽゝにたんぽゝ・春風のお地蔵さんは無一物・あれが変電所でうらゝか・こんなに虫が死んでゐる、たゞあかるくて　春夜の虫のもう死んでゐる　もだえつゝ死んでゆく春の夜の虫　春の夜の火事の鐘をきいてゐる・何だか物足らない別れで、どこかの鐘が鳴る・春寒のシヤツのボタンを見つけてつけた

三月十五日

来信いろ／＼、しみ／″＼読む。やつと米一升（二十二銭）となでしこ一袋（四銭）とを捻出した、かういふ場合でないと、飯のうまさ、煙草のうまさが全身心に味へない。十日ぶりに入浴、剃刀がないので

髯が剃れなかつたのは残念、それよりも残念なのは電球をかへることが出来ない事だ、今夜もくらがりで考へるか！春曇らしく曇つて、多少の風、遠山は霞。いつのまにやら、鼠がやつて来てゐるらしい、そこらをごそごそやつてゐる、食べるものがなくて気の毒千万、とても同居はむつかしからう。ちしや、ひともじ、ほうれんさうを食べる、うれしい味だ。夕ぐれ、ぢつとしてゐると、裏戸があいた、樹明君だ、電球を持つてきてくれた、そしてバツト、そして五十銭玉一つ、さつそく酒を買うてくる、……感泣々々。野鼠だつた、家鼠ではなかつた、野鼠でなくては、こんなところには我慢出来ない。虫が多くなつた、明るすぎる電燈の下で、たくさん死んでゐる、こゝにも生死去来の厳粛な相がある。樹明君のおかげで、明るく、安らかに寝た。

　・あたゝかい雨の木の実のしづくする・ぱつとあかるく水仙がにほふ私の机・草の芽、釣瓶縄をすげかへる　霽れるより風が出て遠く号外の鈴の音・裏山へしづかな陽が落ちてゆく・落ちる陽をまへにして虹の一すぢ

　　三月十六日

　ぬくすぎたが、はたして雨だ、この雨が木の芽草の芽を育てるのである。サイレンと共に起きた、何となく心楽しい朝だ。降つたり止んだり、照つたり曇つたり、まことにとりとめのない日和、かういふ日和には、しぜんルンペン——旅人をおもふ、行乞流転の苦を考へる。……△俳句の本質については一家見を持つてゐるが、俳句と時代との相関についてはアヤフヤである、史的研究が不足してゐるからだ、勉強しなければならない。△芸術の極致は自楽ではあるまいか。△芸術は闘争を超越する（私は此意味に於て、明らかに芸術のための芸術、芸術至上主義者である）。△社会——個性——芸術。△酒を飲む、から酒を味ふ、へ、そして、酒に遊ぶ、へ。△酒と人とが、とうぜんとして融けなければ本当でない。

　　こゝにも春が来て生恥をさらしてゐる・煮ゑえるもののうまいにほひのたそがれる・煮ゑる音の、よい日であつたお粥・たま／＼人くれば銭のことをいふ春寒・暗さ、ふくろうはなく・梅はなごりの、椿さきつゞき・椿おちてはういてたゞよふ・おもひつめては南天の実・

春がきたぞよ啼く鳥啼かぬ鳥　彼岸入といふ晴れたり曇つたりして
晴れては曇る鴉のさわがしく　人を待ちつゝあたゝかく爪をきりつゝ

三月十七日

晴れて冷たく、降れば寒かつた。憂欝な日だつた、敬君の手紙も私を憂欝にした、病気が何よりもいけない、出来る事ならば、私の頑健を分けてあげたい。独り貧しく淋しく静かに。今日も金を持たないための不快を味つた。夕方、約束通り、樹明君がいろ／＼の品物を持つてきてくれたが、今日ほど樹明君に対して、いや友人に対してすまないと思つた事はなかつた、樹明君のお嬢さんは危篤なのである、厚志はありがたくいたゞくけれど、樹明君を留めておいてはならないので、急き立てゝ帰つて貰つた、あゝ。私の貧乏——それは自業自得だ——が私の周囲の人々を迷惑させることはほんとうに心苦しい、いひかへれば私がぐうたらであるために、私の敬愛する友人を悩ますことが私を責める（現に昨日、樹明君の場合に於ける事実を見よ）、私はもつと妥協的になつて世間並の生活を営むか、或はさらに虚無的になつて孤独地獄に落ちるか、どちらかに進まなければならない、それをつなぐ手段としては、酒をやめるか、または行乞をつゞけるかである、——私としては、三八九を発刊しつゝ、時々行乞するのが最もよい方法と思ふ、さうする外はないのだから。——

三月十八日　彼岸入。

晴れたり、曇つたり、とりとめもないお天気。郵便屋さんからバツト一本供養して貰つた、これも乞食根性のあらはれか！掃除をする、ほうれんさうのおひたしをこしらへてをく。樹明君を学校に訪ねて、大山さん歓迎の打合をなし、お茶と煙草とを貰ふ、何から何まで厄介になるのは、まつたくすまない（お嬢さんの容態が悪くないと聞いてほつと安心した）。△病める七面鳥！不精髯を剃つた、学校でＩさんから剃刀を借りて。ちしやを搾取しすぎたのだらう、従来の元気がない。五時頃、大山さんが約束を違へずに来庵、一見旧知の如く即時に仲よしとなつた、予想した通りの人柄であり、予想以上の親しみを発露する、わざとらしさがないのが何よりもうれしかつた、とにかく練れた人である。お土産沢山、——酒、味淋干、福神漬、饅頭。間もな

く樹明君も来庵、鶏肉と芹とをどつさり持つてきてくれた、ありがたいお接待役である、主人公はいたづらに右往左往してゐる。まことに楽しい会合だつた、酒のうまさ、芹のうまさ、人と人とのなごやかさ。だいぶ更けてから、三人で街を散歩する、すこし脱線したが、悪くない脱線だつた。三時近くなつて帰庵、大山さんを寝床に就かせてをいて、樹明君を送つて行く、戻つたのが四時過ぎ、後始末してゐるうちに、東の空が白んできた、とう／＼徹夜した（それでよかつたのである、実は私が着る蒲団はなかつたのである）。

・おぢいさんも山ゆきすがたの大声でゆく　　　十八日夜三句・つきあたつて大きな樹・酔ひしれた月がある・月影ながうひいて水のわくところまで・水底青めば春ちかし（追加）・椿またぽとりと地べたをいろどつた・はなれた家で日あたりのよい家で・蛙も出てきたそこへ水ふく・眼白あんなに啼きかはし椿から椿・こゝにふきのとうそこにふきのとう・もう郵便がくるころの春日影・ひつそりとしてぺんぺん草の花ざかり　　　大山さん樹明君に、二句・話しつかれてほつと千鳥が・笠もおちつかせて芹のうまさは・山の水をせきためて洗ふのがおしめ・いつも空家のこぼれ菜の花・すこし寒い雨がふるお彼岸まゐり・夜ふけの風がでてきてわたしをめぐる・触れて夜の花のつめたし・夜風その奥から迫りくるもの・こやしあたへるほそいあめとなり

三月十九日

すつかり春だ。増富黎々火さんが大山澄太さんと打合せてをいた通りに来庵、またお土産沢山、——味噌、塩昆布、蒲鉾。大山さん自身出かけて、酒と酢と豆腐とを買うてくる、どちらがお客さんだか解らなくなつた。樹明君もやつてくる、其中庵稀有の饗宴がはじまつた。よい気持で草原に寝ころんで話した、雲のない青空、そして芽ぐみつゝある枯草。道に遊ぶ者の親しさを見よ。夕方、それ／″＼に別れた、私は元の一人となつた、さみしかつた、さみしくなければ嘘だ。夜、樹明君再来、何だか様子が変だつた、私も少々変だつた。風を聴きつゝ、いつしか寝入つてしまつた。

・こゝからがうちの山といふ木の芽　石に蝶が、晴れて風ふく　　　□　春風の鉢の子一つ

┌厳陽尊者、一物不将来の時如何。┃趙州和尚、　放下着。┤┃厳―――、一物不将来、箇の什※をか放下せん。└趙―――、擔取し去れ。

『山はしづかにして性をやしなひ、水はうごいて情をなぐさむ』

第23章
其中日記　03 (新字旧仮名)

かうして　　　　　　　　　　山頭火ここにわたしのかげ

昭和八年三月二十日ヨリ同年七月十日マデ

三月二十日　初雷。

また雨だ、うそ寒い、何だか陰惨である、しかし庵は物資豊富だ。春来、客来、物資来だ。けふもよい手紙は来なかつた。風がふいて煤がふる、さみしくないことはない。ちしやにこやしをやる。樹明君の事が何となく気にかゝる。野韮、これは一年食べつゞけても食べきれないほど生えてゐる。笹鳴、夕霧。……よく寝られた、よすぎる食慾とよい睡眠。

三月廿一日　彼岸の中日。

早く起きて星空を仰いだ。入庵してから半周年（去年の秋の彼岸の中日に入庵したから）。晴、朝月のある風景。草餅が食べたいな。澄太さんからペーパー頂戴。樹明来、飲み歩いた、いけなかつた、おなじワヤでもタチのよくないワヤだつた、慚愧の冷汗。白魚の吸物だけはおいしかつた、蓬餅も。いつになつたら、ほんとうに酒が味はへるのだらう！酔うて、そして淋しく戻つて寝た。

三月廿二日

曇、冷たい雨となつた。樹明君が昨日の事を心配してやつてきた。すべての従来の悪念悪行を捨てさるべし。終日終夜、寝てゐた、寝る外ないから。嵐の前、死の前——そんな気持だつた。サケとスシとを与へられた、ありがたや。

三月廿三日

身心すこし軽くなる。味噌汁をこしらへて、それぱかり吸ふ、何といふうまさ。昨日も今日も一句なし。夜、樹明来、福神漬でお茶を飲んで、もうワヤはやるまいと誓約した。時々ワヤをやつてもかまはないけれど、後悔するやうなワヤはいけない。

三月廿四日

晴、春風しゆう／＼として天地のどかであつた。朝は塩昆布茶。或る場所に或る人間を訪ね、たゞ不快を与へられて戻つた、おかげで近来とかく怠りがちの自己省察が十分に出来た。非家庭的、非社会的、非国家的な私である、私は非人情的に生きる外ない。晩には、味噌汁をこしらへて吸ふた、おいしかつた。△空腹と鼠とシヤモジ——何とユーモラスな事実の題材！これを書きあげるだけのユーモアが私にあるかどうか！

やうやく三句・ゆんべの雨がたたへてゐる、春・朝から小鳥が木の実たべにきてゐる雨あがり・夜のふかうしてあついあついお茶がある

三月廿五日

雨、春雨、終日独坐。待つてゐる手紙は来ない、でも、柳は芽ぶいた、桜はふくらんだ、とつぶやいてゐる。ナマケモノといふ動物を思ひ出さずにはゐられないほど、此頃はなまけてゐる、どうもグウタラから抜けきれない。味噌漬をかぢりながら湯ばかり飲んでゐる。少しばかり三八九仕事。△労働と遊戯について考へる、人生は「あそび」にまで持ち来されねばならないと思ふ。夜、寝床にはいつてゐる私を敬治君が起した（私の第六感はやつぱり正しかつたのである）。お土産の鑵詰を下物にしてお土産の酒を飲んだ、そして二人いつしよに寝た（さうする外ないのだが）、うれしかつた。

・林は朝のしづくしてゐる藪柑子・ぬれて水くむ草の芽のなか・石垣の日向のふきのとうひらいてゐる　とう／＼寝られなかつた鼠の執着

三月廿六日

日本の春、小鳥の声、人間の声。朝酒はよいかな、敬君はまだこのよさを解しない（解すれば不幸だが！）。飯の白さも四日ぶり、敬君ありがたう。俊和尚からうれしい手紙。二人で歩いて二人で入浴、何日ぶりの入浴か、髯を剃る。樹明君を学校に訪ねる、校庭の何とかいふ桜はもう咲いてゐた。魚を買ふ、酒を借る、樹明君が七面鳥の肉をどつさり持つて来る、春は三重奏の酒宴のはじまりはじまり。うまい肉だつた、よい酒だつた、今夜はおとなしく別れた、このところ樹明君大出来、あつぱれなおちつきぶりだつた、私と敬坊とはたしかに落第だつた。ヨーヨーをやつてみる（樹明君が持つて来たので）、誰だかヨーヨーとひやかす。出来るだけ借金を払ひ、出来るだけ買物をする、酒屋へ弐十弐銭、米屋へ弐十三銭、そして古本屋へ十銭払ふべく行つたら、彼はいつのまにやら夜逃してゐた、近頃ユーモラスな題材が多い。落し物をした、——拾ふことあれば落すことあり、善哉々々。一人となつて、千鳥が鳴くのを聞いた、やつぱりさびしい。ねむれないから本を読む、本を読むからねむれない、今夜は少々興奮したのだらう、とかくしてまた雨となつたらしい。鼠が天井を走る、さても辛棒強い鼠かな、庵主に食べる物がなくなつても、鼠には食べる物があるのか、不思議だな。敬君がヒヨを一羽拾うてきた、打たれてまだ間がないと見えて、傷づいた胸がぬくかつた。△西田天香さんの息子、本間俊平さんの息子、共に不良ださうなが、考へさせる人生の事実だ。

あれは九州といふ春の山また山・うららかな、なんでもないみち・林も春の雨と水音の二重奏・かろいつかれのあしもとのすみれぐさ　ママとよばれつつ蓬摘んでゐる・藁塚ならんでゐる雑草の春　あれこれ咲いて桜も咲いてゐる・春はまだ寒い焚火のそばでヨーヨー・みんなかへつてしまつて遠千鳥

三月廿七日

どうやら霽れさうだ。ちよつと郵便局まで、冬村君の工場でしばらく話した、花見の約束をする、ハナ（花）ノシタより、ハナ（鼻）ノシタ！すみれ、げんげ、なのはな、いろ／＼の草花が咲きはじめた。晩酌二合、甘露の甘露だつた。しづかな一日、小鳥が啼いて、私が考へて、そして雨。

・工場のひゞきも雨となつた芍薬の芽・ぬかるみ赤いのは落ちてゐる椿　雨あがり、なんと草の芽が出る出る・けさはお粥を煮るとて春の黴・春さむく針の目へ糸がとほらない　春夜、どこからきたのか鼠の声・わらやねふけてぬくい雨のしづくする　あすはお節句の蓬つむと乙女が来た　　　追加二句・お彼岸まゐりの、おばあさんは乳母車・春さむく小舟がいつさう

三月廿八日　旧暦節句。

時化、霰さへ落ちた。宵から朝まで、ぐつすり寝たので気分爽快、仕事が出来る。鼠の悪戯には閉口する、よし持久戦だ、糧道を断つてやらう！心のうちに雨がふる、――私もやつぱりまだセンチメンタリストだ！糸菜――京菜を買ふ、一株一銭（小売値段が）とは安すぎる、何だか腹立たしくなつた、――が、煮てもうまい、漬けてもうまい。滓酒一杯、それで虫をごまかす。飯を食べないでも、嫌な行乞はしたくない、この気持は行乞の体験のない人には解らないらしい。理智、理解、理論といふものが考へさせられる。△摂取不捨といふことも、同時に考へさせられる。夜、冬村君来庵、お節句の蓬餅を貰つた、さつそく焼いて食べる、うまいうまい、つゞいて樹明君来庵、上機嫌だ、塩昆布茶をすゝりつゝ話す、そしておとなしく別れた、すこし淋しかつたが。

・春寒い鼠のいたづらのあと・春がしける日のなにもかも雑炊にしてすする・たたきだされて雨はれる百合の芽である・春時化のせせらぎがきこえだした・林も水があふれる木の芽　土のしじまの芽ぶいてきた雑草　草萠えるあちらからくる女がめくら　籠りをれば風音の煤がふる　暮れるまへの藪風の水仙の白さ　どこかで家が建つだいぶ日が長うなつた・やつと山の端の三日月さん　　　追加一句　春時化、米がなくなつて餅がある

三月廿九日

快晴、春霜、なか／＼寒い。近郊散策、七句拾ふ。△アスフアルトプラント（新国道舗装用の）を観る、人間と機械、機械と自然、この関係をはつきり理解しなければならない。さくらのつぼみがふくらんだ、春、春、春だ。新聞所載の九星表を見たら、『うか／＼と山路に

入つて、踏み迷ふ如き日』とあつた、足元御用心。午後、意外にも敬治君来庵、自宅からわざ／＼酒と餅とを持つて！なかよくおとなしく飲んだり食べたり、山へ登つたり野を歩いたりした。山から蘭を三株持つて帰つて、茶瓶に植ゑた、やんがて咲くだらう。▵日あたりのよい隠れ場処といふ語句を思ひついた。夜、敬治君機嫌よく実家に帰る、樹明君はとう／＼来なかつた、宴会があると聞いたから、おそくなつて、——といふ次第だらう。

　街をあるけば街のせつなさ山へのぼれば山のさみしさひとりかなしみひとりなぐさむ

　こんな小唄が出来るとは、私はどこまでも孤独な痴人だ！

　・山羊もめをとで鳴くうららかな日ざし・一つが鳴けばみんな鳴く春の野の牛・落ちては落ちては藪椿いつまでも咲く・工夫にレールが長いエンヤラヤ　春の野の汽鑵車がさかさまで走る・春風のアスファルトをしく　水をへだてて笹鳴くやうまくなつたな・山の椿のひらいては落ちる・春の山をのぼる何でもない山・山ふところはいちはやく蘭に莟をもたせ・枯木のてつぺんで啼いてゐるのは渡鳥・いちりん※しの椿いちりん・春山をのぼる下駄が割れて

　　三月三十日

　昨日の今日だから、さすがに胃腸の工合がよろしくない、酒の飲みすぎ、餅の食べすぎ、——お粥をこしらへる。こゝろたのしく、朝、昼、晩、お粥ですました。朝、樹明来、やつぱり昨夜は酔中彷徨だつたさうな、顔色がよくない。午前中は山中漫歩、句と躑躅と土筆とを得た。▵貧乏はかまはないが、借金のない貧乏でありたい。人間山頭火を観て下さい、俳人とか禅宗坊主とかいはないで。また米がなくなつた、餅もなくなつた、私も空腹、仏様も、また鼠も！▵酒はいつもうまいが、春の酒よりも秋の酒。なまけた一日、たべること第一。ちしやが萎れて枯れるのは、搾取のためでなくて立枯病であることを教へられたので、まづ安心、さつそく灰を与へた。▵遊ぶ日の朝酒、働らいた日の晩酌。自然を出来るだけ自然のまゝで味ふべし。夕方、樹明君を通して敬治君から呼び出し、すぐ出かける、第一窟から宿直室へ、——酒、むきみ貝、樹、敬、山の三重奏、ぢやない、キミチヤン

を加へて四重奏。戻つて寝てゐたら、敬坊ひよろりと御入来、例の如くいつしよにごろ寝、まあ／＼この程度の脱線ならよか／＼。

・鴉まつすぐに墓場までてきてなく　伐られなければならない樹の影の水しづかにも・ひなたの六地蔵どれも首がない・によきによき土筆がなんぼうでもある・つかれて街からもどるそらまめの花・誰か死にさうな鴉がカアとなくばかり・穴から草の芽の空

三月三十一日

曇后晴。敬坊起きるよりヨーヨー、春はのどかである、間もなく出立帰宅。うれしいたより、とりわけて緑平老からのそれはうれしいものであつた。友人知己へのかへしに、『老来春来共によろしく』とも『春は春風に吹かれて』とも書いた。いよ／＼春のあたゝかさとなつた、あたゝかくなるほどプロは助かる、足袋を穿かないだけでも。△バスのほこりも春らしい。△酒が酒を飲む——むしろそれがよいではないか。やうやくにして亡母の持越法事を営む、案内したのは樹明氏だけ、とてもしめやかな酒だつた。樹明君が今晩ほど悲しい顔をしてゐたことはない（昨夜の酔興を自省して）、そして今晩ほど嬉しい色になつたこともない（今晩の酒によつて心機一転して）、友よ、道の友よ、お互にしつかりやりませう。快い睡眠をめぐまれた。

今日がはじまる日ざしを入れて・一人が一人を見送るバスのほこり　常套的小唄一つ声をそろへて　エンヤラヤ力をあはせて　エンヤラヤさてものどかな地つきかな

四月一日

起きたのは五時前、何と身も心ものびやかな弥生のあけぼの！霜がふつてゐる、なか／＼つめたい。三八九の仕事、倦けると畑いぢり、ほうれんさうはおしまひになつた。花菜を水仙に活けかへる、水仙のつめたきもよいが花菜のあたゝかさもよい。蛙がなき蟻がはひ蝶々がまふ、雑草の花ざかり（まだ早いが）。白木蓮が咲いてゐた、その花のうつくしさよりも、その花にまつはるおもひでがさびしかつた。学校からの帰途、樹明君が立ち寄る、待つても待つても敬治君は来ない、二人とも少し憤慨して、二三杯やつて別れる。敬治君はとう／＼

来なかつた、何か事故が突発したのだらう、とにかく無事であつてくれ。人間は人形ぢやない、——これは大切な事だ、人間は人形ぢやないから、人間は人形には解らない。

・こぼれ菜の花や霜どけ　春霜の菜葉を摘んでおつけの実　お花をきれば春霜のしたたり　仕事屑が捨ててあるそこら雪の下　やうやくたづねあてた家で牡丹の芽・子供がねつしんに見てゐる機械がよう廻る・あたたかさ野山にみち笹鳴うつる・まつたく春風のまんなか・身のまはりは草もそのまま咲いてゐる・鳥かげのいりまじり草の青さも・ちぎられた草の芽の霜・干しものすぐ干せた木の芽草の芽・音は朝から木の実をたべにきた鳥か　　　澄太さんに　わかれてからの韮の新芽のこんなに伸びた　　　敬治君に二句　けふはあんたがくるといふ菜の花を活けて　花菜活けてあんたを待つなんとうららかな　　　追加二句・明けはなれて木の実うまからうつぐみの声・いちにちだまつて小鳥の声のもろもろ

△念ずれば酒も仏なり、仏も酒なり。樽見て酔ふ境地はうらやまし。権兵衛が飲めば田伍作が酔ふやうになりたし。

四月二日

けさも早かつた、そして寒かつた、うらゝかな春日。敬坊は脱線したらしい、何となく気にかゝつてゐた、そこへさうらうとして彼がやつてきた、うれしいやうな、かなしいやうな、そしてさみしいやうな気持だつた。樹明君もやつてきた、三人で山へのぼつた、よかつた。暮れてから、敬坊といつしよに湯屋へ、それからＫへ、私だけ戻つた。

　　　敬君に・菜の花を水仙に活けかへて待つ　　　敬坊をうたふ二句　費ひはたして日向ぼこしてゐる　酔ひしれた眼にもてふてふ・伸びはうだいの南天の実の食べられてゐる　藪で赤いのは椿・かすかに山が見える春の山・寝ころべば昼月もある空　山のあなたは海といふほのかふくれてゐる・花がひらいてゐて机の塵（酔後）

四月三日

くもり、花ぐもり、宿酔の気がある。敬坊をＫから連れて戻る、ち

いちやんを借りて来る。山のぼり会は雨となつたので、たゞの飲み会となつてしまつた、樹、敬、山、そしてちいちやんを加へて四重奏、其中庵はまさに春らんまんだつた。それからがいけなかつた、いつしよに街へ出たのがいけなかつた、私だけは早く帰つたが、残つた二人はムチヤクチヤだつたといふ。夜おそく敬治君が戻つてきた、さらにおそくなつて樹明君がやつてきた、ぼろ／＼どろ／＼だ、いつしよに寝る、私だけは早く起きてそこらを片附ける、さば／＼した。今後は酔後断じて、敬治君や樹明君といつしよに街へ出ないことを決心する、そして私一人に関する限りに於て、料理屋やカフヱーや、さういふ享楽境、遊蕩場所へ立ち寄らないことを誓約する、それぐらゐの覚悟を持つてゐなければ、とうてい真実の生活は出来ない、随つて真実の句も生れない。不思善、不思悪、清濁併せ飲む境地へはまだ／＼遠い、私はさしあたり私独りだけでも澄みきりたい。

四月四日

雨、回光返照の雨。樹明君は学校へ、敬治君は自宅へ、私は其中庵主として。——閑寂のよろこび、自分の長短がはつきり解る。何年ぶりかで牛乳を飲む（樹明君が敬治君のために持参）。敬治君の顔は悲しかつた、樹明君の顔は痛ましかつた、私の顔は淋しかつたらう！

・濁つた水で木かげ人かげ・白木蓮があざやかな夕空

四月五日

曇、そして晴。やうやくにしていよ／＼自己革命の時節が到来した。九時半の汽車で来庵の大前誠二さんを駅で迎へる、お土産として灘の生一本、茹章魚、干鰈。灘の生一本は何ともいへない醇酒だつた、さつそく一本頂戴した、酔心地のこまやかさ。ちよつと街へ出て、お酌をしてくれる酒二三杯。夜は樹明、冬村の二君来庵、四人でおもしろく飲んで話した。道をおなじうするもののよろこび。

椿の花、お燗ができました酒がどつさりある椿の花

四月六日

ごろ寝から覚めて、あれやこれやと忙しい（私の貧しい寝床は大前さんに提供したから）、冬村君が手伝つてくれる、樹明君もやつてく

る。其中庵の春、山頭火の春。九時すぎ別れる、がつかりしてさみしかつた。敬坊の手紙はかなしい。夕方、樹明再来、つゝましく、といふよりも涙ぐましく対酌。

・昼月へちぎれ雲　裏口からげんげたんぽぽすみれ草・芽ぶく梢のうごいてゐる・みんなかへつてしまつて春の展望・このさみしさは蘭の花・水をくむ影する水を　酔ひたい酒で、酔へない私で、落椿・やりきれない草の芽ぶいてゐる・出てあるいてもぺんぺん草・昼月のあるだけ・自分の手で春空の屋根を葺く・水音、寝ころぶ・石ころに日はさせども・死をまへにして濁つた水の・ひとりがよろしい雑草の花　春の夜のひとりで踊る　身にせまりやたらに芽ぶいてきた　なんぼでも虫がゐる夜のふかくして・月と雲と、水をくむわたくし　摘んできて名は知らぬ花をみほとけに

四月七日

花ぐもり、雨となつた。今朝はさすがの私も飲みたくない、飲めない、飲みすぎ食べすぎのたたりで気分がすぐれない、午前中は山野を逍遙した。酒には溺れるべし、それ以上を求めるのは間違なり。まづ、其中庵は其中庵臭を去れ、山頭火は山頭火臭を捨てろ、耽溺趣味、陶酔気分を解消せよ。△宗教は阿片にあらず、現代の宗教は現代の人々を麻痺せしめるだけの魅力を持つてゐない。ぐつすりと春のねむり。

・笹鳴くや墓場へみちびくみちの・がらくたを捨てるところ椿の落ちるところ・咲くより剪られて香のたかい花・酔ふたが雨の音・忘れられて空へ木の実のゆれてゐる・出て見れば雑草の雨

四月八日

雨、花まつりの日。句集半切代入手、払うて買うて、すぐまた無一文。酔へばいら／＼する、酔はなければぢつとしてゐられない、といつて！△酒のために苦楽のどん底をきはめることができたのである、尊い悪魔であつたよ、酒は！今日の身心は雨と酒とでぐつしよりだつた、だがあまり悔いるほどではなかつた、悔いたところで詮もないけれど。

・山に霧が、さびしがらせる霧が山に　　追加一句・日向ぽかぽかと歯がへやさんが歯がへしてゐる

四月九日

まだ降つてゐる、書入れの日曜日が台なしになつて困つた人が多からう、まことに花時風雨多しである。寝て暮らした、寝るより外になかつたから。暮れてから、招かれて、樹明君を宿直室に訪ねる、気がすゝまなかつたのだが、そして遠慮してゐたのだが、逢へばやつぱり嬉しい。ふくらうのさびしいうた！　百花春至為誰開！△肉慾の奴隷に堕しつゝある自分を鞭つ。

・月のはばかりへちつてきた木の葉いちまい・なんとわるいみちのおぼろ月・あれはうちの灯、ぬかるみをもどる・しだれざくらがひつそりとお寺である・釣瓶の水がこぼれるなつめの実（追加）

四月十日

曇、やうやくにして晴、そこらから花見のぞめきがきこえる。悪筆を揮うて送る、この悪筆が米代になるとは！知足安分の一日。△私の好きな着物はドテラとユカタ、浴衣に褞袍をかさねた快さ。すべてが、よりよくなるためのものでなければならない、今日は昨日より、明日は今日よりよりよい生活でなければならない、さて、よいとは何か、よりよい生活とは何か。――△木を見て林を見ない人間！　さういふ人間であつてはならない。よく読み、よく考へた一夜だつた。

・やたらに咲いててふてふにてふてふ　便所の窓まで芽ぶいたか・雑草にうづもれてひとつやのひとり・雑草ばかりで花見の唄のきこえるところ・花のよな木の芽ゆれつつ暮れる家　春の夜を落ちたる音の虫・気ままに伸んで香のたかい花つけて・あれは木蓮の白いゆふざれがきた（改作）　かめば少年の日のなつめの実よ（追加）　遠く花見のさわぎを聞いてゐる

四月十一日

日本晴、春や春、春の春。うらゝかな空腹だ（いやな行乞はやめとかう）。天地荘厳、摂取不捨。今日は絶食的断食である、絶食は他力的、断食は自力的、具体的に説明すれば、米がなくなつた、それもよ

からう、米なしデーにしてをく、である。溜池の杭の上に甲羅を干してゐる亀を見た。公園へ花見連中が繰り込むのを見ても何とも感じないが、山あがり（田舎人のピクニツク）へ行く一家族を見ると、何となく心を動かされる、そして、私の生活のムリ、といふよりもウソを解消しなければならない、と思ふ。△しづかなよろこび――空の、山の、草木の、土の、――流れる水にも、囀づる小鳥にも、吹き去る風にも。――△近頃どうも心持がきたなくなつたことを感じる、あさましい事実である、銭をほしがるのは貧乏のせいだが、物をむさぼるのは心の卑しさがのぞけないからである。

・芽ぶかうとする柿の老木のいかめしく・芽ぐむ梨の、やつとこやしをあたへられた・おばあさんは草とるだけの地べたをはうて・蕗の葉のひろがるやかたすみの春は　花が咲いたといふ腹が空つてゐる・機械がうなる雲のない空（アスフアルトプラント）　亀がどんぶりと春の水・月へならんで尿するあたたか・花見のうたもきこえなくなり蛙のうた・春の夜を夜もすがら音させて虫

よい月だつた（陰暦三月十七日）、寝るには惜しい月だつたが、寝床で読書してゐると、樹明酔来、私を街へ引張り出して、飲ましてくれたが、どうしても酔へなかつた。△私にはもう春もない、花もない、大きい強い胃袋があるだけだ。ルンペンの自由と不自由とをおもひだした。△酒は女に酌してもらふより、山を相手に飲め。

四月十二日

うら／＼と春景色である。ぢつとしてゐられなくなつたから、こゝで一杯、そこで一杯と借りて飲んだ、そして米を少しばかり借りて来た、あはれといふもおろかである。銭を持たないために、いひかへれば、私はズボラのために、他から軽蔑され、自分で軽蔑した。酔うて倒れてゐるところへ、樹明君が来た、酔うても愚痴を捨て切らない私といふ人間はさぞみじめだつたらうよ。

・借せといふ貸さぬといふ落椿・ここに花が咲いてゐる赤さ・これが御飯である

四月十三日

春にそむいて寝てゐた。——

・夫婦で筍を掘る朝の音・桜の句を拾ふ吸殻を拾ふ（自嘲）

四月十四日

くもり、しづかにふりだした。身辺整理、まづ書くべき手紙を書いてだす、それから、それから。雀が、めつたにおとづれもしない雀が二三羽きてくれた。昨日の夜明け方にはたしかにホトトギスの初声もきいた。樹明来、もう夜が明ける一升罎を持つて！

したしや雀がやつてきてないてゐる雨

四月十五日

どうやら晴れるらしい。さびしいかな、樹明君の酔態。酒だけはあるから酒だけ飲む、飲めば酔ふからおもしろい。ワヤに大小なし、高下なし。ぐでん／＼に酔つぱらつて戻つて、そして寝ましたよ。

小鳥よ啼くなよ桜が散る蝿がなく、それだけかさくらまつさかりのひとりで寝てゐる

四月十六日

寝てゐる、夢と現実とがカクテール。飲む酒はまだあるけれど、食べる飯は一粒もない。

・いつもみんなで働らく声の花がちる　さくらちるさくらちるばかり・伸びた草へ伸びた草で・街へ春風の荷物がおもい

四月十七日

残つてゐた酒をあほつたら、ほろ／＼になつた、ふら／＼と出かけて樹明君から米代を借りた（といふよりも奪つた）。▵飯をたべたら身心が落ちついてきた、——私は今更のやうに、食べることについて考へさせられた、米の飯と日本人！しつかりしろ、と私は私によびかける、いや私をどなりつけた。

鴉が啼いて椿が赤くて　あるきまはれば木の芽のひかり・街はまだ陽がさしてゐる山の広告文字・暮れのこる色は木の芽の白さ

私はずぼらでありすぎた、あんまりだらしがなかつた、いはゆる衣架飯袋にすぎなかつた。……

四月十八日

晴れ晴れとした、うれしい手紙も来た、そして。――私には財布の必要はない、郵便局で小為替の金を受けて、その足で、払ふ、買ふ、すぐまた無一文だ、さつぱりしてよろしい！コツプ酒に酔うてゐたら、樹明君がきた、いつもとちがつて大真面目だつた。電燈がどうしてもつかない、故障だらうと思つて電気局へ行つたら、電燈料の滞納（二ヶ月分）だから、点燈差止との事、なるほど無理もない、仕方がないから蝋燭を買つてきて御飯にする、そして寝た、寝たがえゝ、寝たがえゝ。私の貧乏もいよ／＼本格的になつてきた。

晴れてつめたい朝の洗濯赤いもの・よいお天気の葱坊主

四月十九日

曇、雨となつて、花見もおしまひ。△まつたく泣笑の人生だ、泣くやうな笑ふやうな顔だ、いや、笑ふことが泣くこと、泣くことが笑ふことになつてしまつたのだから。夜は早く寝た、灯がなくては読書も出来ないから。

・考へる人に遠く機械のうなる空・筍を掘るひそかな筍

四月二十日

雨、曇、そして晴、私の気分もその通り。やつと古道具屋でランプを探しだして手に入れることができた、古風な新鮮味といつたやうなものを感じる、私には電燈よりもランプが相応してゐる。呪ふべき焼酎よ、お前と私とはほんとにくされ縁だねえ。夜おそく樹明君来庵、何か胸に痞えるものがあるらしく、頻りに街へ行かう、大に飲まうとすゝめたけれど、私は頑として応じなかつた、とう／＼諦めて寝てしまつた、善哉々々。

・街の雑音のそらまめの花　せり売の石楠花のうつくしさよ・シクラメン、女の子がうまれてゐる・花がちる朝空の爆音・草から草へ伸びる草・せゝらぎ、何やら咲いてゐる

四月二十一日

曇、平静な身心、晴。樹明君がきまりわるさうな顔をしてゐる、昨夜は脱線しないでよかつた、酔うて苦しみをごまかすのは卑怯だ。小鳥の声がいらゞたしくなつた、恋、交接、繁殖。蕗がだいぶ伸びたので摘む、蛇がのろ／＼して驚かす。雑草を活けかへる、いゝなあとばかり見惚れる。山東菜を播いた。ランプのあかりで読書。

・梨の花の明けてくる・咲いてゐる白げんげも摘んだこともあつたが・竹藪のしづもりを咲いてゐるもの・蕗をつみ蕗を煮てけさは　麦笛ふく子もほがらかな里　雑草ゆたかな春が来て逝く・播いてあたゝかな土にだかせる・おもひではあまずつぱいなつめの実・いらだたしい小鳥のうたの暮れてゆく・ぬいてもぬいても草の執着をぬく

昨夜はとう／＼徹夜、それだのに今夜も睡れさうにない。△性慾をなくしたノンキなおぢいさん！　私もどうやらそこまで来たやうだ（去年は性慾整理で時々苦しんだが）。

四月廿二日

快晴、しかし何となく気が欝ぐ、この年になつて春愁でもあるまい、もつとも私は性来感傷的だから、今でも白髪のセンチメンタリストかな。山へのぼつた、つつじの花ざかりだ、ぜんまいはたくさんあるが、わらびはなか／＼見つからない、やつと五本ほど摘んだ（これだけでも私一人のお汁の実にはなるからおもしろい）、そしてつゝじ一株を盗んできて植ゑて置いた。柿が芽ぶいた、棗はまだ／＼、山萩がほのかに芽ぶかうとしてゐた、藤はもう若葉らしくなつてゐた。昨日は蕗、今日は蕨、明日は三つ葉。雀がきた、雀よ雀よ、鼠がゐた、鼠よ鼠よ。みみづをあやまつて踏み殺し、むかでをわざと踏み殺した。山で虻か何かに刺された。持つてゐる花へてふてふ、腕へとんぼがとまつた。すばらしい歌手、名なし小鳥がうたつてゐた。今日は敬坊が、そして樹明君も来庵する筈なので、御馳走をこしらへて待つてゐる、——大根の浅漬、若布の酸物、ちしやなます、等々！春は芽ぶき秋は散る、木の芽、草の芽、木の実、草の実——自然の姿を観てゐると、何ともいへない純真な、そして厳粛な気持になる、万物生成、万象流転はあたりまへといへばそれまでだけれど、私はやつぱり驚

く。――夕方、電燈工夫が来て、電燈器具をはづして持ちかへつた、彼は好人物、といふよりも苦労人らしかつた、いかにも気の毒さうに、そして心安げにしてくれた。それにしても待つてる友は来ないで、待たない人が来たものである。こゝで敬坊と樹明君との人物について、我観論を書き添へて置くのも悪くあるまい、両君とも純情の人である、そしてそれは我儘な人であり、弱い人であることを示してゐる、純なるが故に苦しみ我儘なる故に悩む、君よ、強い人となれ、私も。

　　　　濫作一聯如件・みほとけに供へる花のしつとりと露・朝風のうららかな木の葉が落ちる　仏間いつぱいに朝日を入れてかしこまりました・山へのぼれば山すみれ藪をあるけば藪柑子・山ふところはほの白い花が咲いて・によきによきぜんまいのひあたりよろし・山かげ、しめやかなるかな蘭の花　うつろなこゝろへ晴れて風ふく・雲のうごきのいつ消えた　燃えぬ火をふくいよ／＼むなし　まひるのかまどがくづれた　いちにち風ふいて何事もなし　椿ぽとりとゆれてゐる・鳥かけが見つめてゐる地べた・墓場あたたかい花の咲いてゐるほそいみちがみちびいてきて水たまり・春ふかい石に字がある南無阿弥陀仏　春たけなはの草をとりつつ待つてゐる・ようさえづる鳥が梢のてつぺん　親子むつまじく筍を掘つてをり・筍も安いといひつつ掘つてゐる　木の芽へポスターの夕日

　暮れてもまだ敬坊は来ない、樹明君も来ない、いら／＼してゐるところへやつとやつて来た、御持参の酒を飲みつゝ話してゐると、樹明君もやつてきた、三人とも酔ふた、酔うて。――樹明君近来の口癖はブチコワスゾである、何カヲブチコワサズニハヰラレナイホド、君は悩み苦しみ焦立つてゐる、そこで、私が先づ茶碗をぶちこはす、樹明君喜んで皿を投げつける、ガチヤンガラガラ、どうやら胸がすいたらしい。酔つぱらつた三人は必然的に街へ出かけた、そしてまた飲んでさらに酔ふた、私と敬坊とは腕を組んで、さうらうまんさんとして駅前の宿屋に泊つた。今夜は文字通りにどろ／＼になつた、泥田を這ひまはつたのだから、からだは泥まみれだつた（こゝろはあまり汚れなかつたが）。

　　四月廿三日

明けて飲み、暮れて別れた、とにかく忘れることのできない一日一夜だつた、めでたくもありめでたくもなし、喝。戻つて来て、室内を掃除し、茶を沸かし飯を食べる。敬坊よ、夫婦喧嘩も時々はよからう、それはほがらかでなければならない、陰惨であつてはならない。私には喧嘩する相手もない、独相撲でもとるか！

・こころ澄めば蛙なく

昨日の二十二句は此一句に及ばない。

四月廿四日

晴、すべてが過ぎてしまつた！　といふ気持、しかし昨夜は労れてぐつすりねむれたので悪い気持ではない。身のまはりを片づける。出来るだけの買物をする、——米、醤油、石油、そして焼酎一杯。初めて春蝉をきいた、だるくてねむくなる、五日ぶりに入浴、さつぱりした、しづかに読書。酒もよいが茶もわるくありませんね。Ｆ家のおばさんから、例のブチコハシをひやかされた、あゝいふ気分はとても彼女等には理解できぬらしい、喧嘩でもしたのだらうと思つてる。三ツ葉のおしたし、葉わさびをふつて貯蔵する（敬坊のお土産）。夜、樹明君来庵、まじめな、酔つぱらはない、なごやかな樹明を見せてくれたのでうれしかつた。

・たどりきてからたちのはな・からたちの咲いてゐる始業の鐘の鳴る・何もかも過去となつてしまつた菜の花ざかり　今日がはじまるサイレンか・ゆふべは豚のうめくさへ・右からも左からも蛙ぴよんぴよん

四月廿五日

曇、間もなく雨となつた、そして一日一夜降り通した。のらりくらり、かういふ生活にはもう私自身がたへきれなくなつた。敬君からの手紙は悲喜こも／″＼であつた、君、君の家庭に平和あれ。

朝ぐもりの草のなかからてふてふひらひら・ここまではうてきた蔦の花で

四月廿六日

ふと水音に眼がさめた、もう明けるらしいので起きる。身も心もすべてが澄みわたる朝だつた。正法眼蔵拝誦、道元禅師はほんたうにありがたい。

・春雨の夜あけの水音が鳴りだした・唱へをはれば明けてゐる・朝の雨にぬれながらたがやす・白さは朝のひかりの御飯・ぬれてしつとり朝の水くむ・水にそうて水をふんで春の水・春はゆく水音に風がさわいで・春の水のあふれるままの草と魚・晴れて旗日や機械も休んでゐる（追加）・蕗の皮がようむげる少年の夢

誰かきた声がする、出て見ると、嘉川の万福寺の御開帳で、御案内旁御詠歌連中を連れて来ましたといふ、私は困つた、私には差上げる銭も米もないのだ、何もありませんが、といふと、それではまた、といつて帰つていつた、まことにお気の毒だつた、すみませんでした。敬治君へ手紙を書く、——何よりも先づ金銭の浪費をやめなければなりません、現代の社会組織下に於ては、我々にとつて、金銭の浪費は生命の浪費です、これを宗教的芸術表現でいへば、それは仏陀の慧命の浪費です。……純情は尊いけれど、それを裏付ける強い意志が伴はないならばたゞそれだけにとゞまる、……よい酒とは昨日を忘れ、明日を思はず、今日一日をホントウに生かしきることが出来るやうに役立つ酒でなければなりません、……とにかく、酒に求めないで、酒を味ふやうにならなければウソですね。ちよいと出かけて、ちよいと一杯。夕方、帰途、樹明来、さびしい顔で酒が飲みたい、飲まずにはゐられないと訴へる、が、私は今や八方塞がりのどうすることも出来ない、もじ／＼してゐると、君が一筆書いた、それを持参して一升借りて戻る、——悪い酒ではなかつたが寂しい酒だつた、あゝ、三人でうれしい酒を飲みたい！

四月廿七日

晴、冷、このあたりでは苗代風といふ。昨夜も飲みすぎ食べすぎ、そしてまた朝酒。雑木を雑草に活けかへる。散歩、——新国道を嘉川まで、釈迦寺拝登、御開扉会、帰途は山越、白い花をつけた雑木がよかつた。初めて燕を見、初めて蚊に喰はれた。雀、蜂、蟻、庵をめぐつて賑やかなことである。蕗のうまさ、ほろにがい味は何ともいへな

い。樹明君来庵、春風微笑風景を展開した。

　・青空の筍を掘る・春山の奥から重い荷を負うて鮮人・蕗のうまさもふるさとの春ふかうなり

　　四月廿八日

　けふも晴れてつめたい、きのふのやうに一天雲なし。ちよつと散歩したが――郵便局までハガキを出しにいつたが――一文なしではあまり興がのらない。蕗はうまいなあ、まいにち食べても、なんぼ食べても。午前は読書、午後は畑仕事、晴耕雨読でなくて、或読或耕だ、とにかく好日だつた。

　　春空雲なくなまけものとしなまけてゐる・春蝉もなきはじめ何でもない山で・裏からすぐ山へ木の芽草の芽・けふも摘む蕗がなんぼでも・みんな芽ぶいてゐる三日月・三日月さんには雲かげもなくて

　　四月廿九日

　天長節日和とでもいはうか、まことにのどかな日だつた。前の竹藪の持主から筍を頂戴した、掘りたてのホヤ／＼だ、ありがたかつた。午前は山を歩いた、若葉のうつくしさ、若草のうつくしさ。午後は青年団員の競技をしばらく見物したが、私にはスポーツのおもしろさが解らない（すべての勝負事に興味を感じない私だ）。運動総務の一人として樹明さんは少しばかり興奮してゐるらしい。さう／＼戻つて畑地を耕した、この方が私には愉快でもありまた相当してゐるやうだ。筍はうまかつた、蕗とはちがつたうまさがある、だが、私は歯がいけなくなつて、ほろ／＼抜けるから来年はどうかな（鬼よ笑へ！）。

　　大空をわたりゆく鳥へ寝ころんでゐる　春たけた山の水を腹いつぱい・晴れきつて旗日の新国道がまつすぐ・けさも掘る音の筍持つてきてくれた・摘めば散る花の昼ふかい草・送電塔が山から山へかすむ山

　　四月三十日

　曇、をり／＼雨、夕方からどしやぶり。晩春から初夏へうつる季節に於ける常套病――焦燥、憂欝、疲労、苦悩、――それを私もまだ持

ちつゞけてゐる。

　・春もどろどろの蓮を掘るとや・春がゆくヱンジンが空腹へひびく・くもりおもたい蛇の死骸をまたぐ・食べるもの食べつくし雑草花ざかり・春はうつろな胃袋を持ちあるく・蕗をつみ蕗をたべ今日がすんだ・菜の花よかくれんぼしたこともあつたよ・闇が空腹・死ぬよりほかない山がかすんでゐる・これだけ残してをくお粥の泡・米櫃をさかさまにして油虫・それでも腹いつぱいの麦飯が畑うつ・みんな嘘にして春は逃げてしまつた　どしやぶり、遠い遠い春の出来事・晴れてのどかな、肥料壺くみほして（追加）・楢の葉の若葉の雨となつてゐる　雨に茶の木のたゝかれてにぶい芽・ゆふべのサイレンが誰も来なかつた

　朝は、筍をたべてはお茶をのみ、晩は蕗をたべてはお茶をのんだ、昼御飯としては葱汁！　野菜デーだつた。△米櫃に米があるならば、味噌桶に味噌があるならば、そして（ゼイタクをいつてすみませんが）煙草入に煙草があるならば、酒徳利に酒があるならば。――△春があれば秋がある、満つれば缺げる、酔へば醒める、腹いつぱいも腹ぺこ／＼も南無観世音、オンアリヨリカソワカ。△飯の美味をたゝへ、胃の正直をほめよ。夕方からどしやぶり、ふれ、ふれ、ふれ、ふれ、ふれ。大降りの中を樹明君来庵、さつそく銀貨を投げだす、大降りの中を酒買ひにいつた、つゝましい酒だつた、樹明君が御飯をたべてくれたのはめづらしくもまたうれしいことであつた。

　　どしやぶりのいなびかり、酒持つて戻るに・蛙とんできて、なんにもないよ　雨の水音のきこえだしてわかれる　わかれていつた夜なかの畳へ大きな百足

　それは大きな百足だつた、五寸以上あつた、私はぞつとして打ち殺さうとして果さなかつた。長虫――蛇、百足、いもり、とかげ、蚯蚓――はまつたく嫌だ。今日の食事には嘘があつた、――といふのは、日記をつけてしまつてから、飯が食べたくて、そして煙草が吸ひたくてやりきれなかつたから、私一流の、窮余の策を弄して、酒と米と煙草とを捻出したのである、――それはかうである、――Ａ店で一杯ひつかけて（此代金十一銭）その勢でＢ店で煙草一包（此代金四銭、抵

当として端書三枚預けて置いた！）を手に入れ、さらにＣ店で白米二升（此代金四十六銭）を借りて来たのである。何と酒がうまくて、煙草がうまくて、そして飯のうまかつたことよ、私は涙がこぼれさうだつた（この涙はどういふ涙ぞ）。

五月一日

くもり、だん／＼晴れて、さつきの微風が吹く、雨後の風景のみづ／＼しさを見よ。山蕗を採つて煮た、半日の仕事だつた。何日ぶりの入浴か、身心さつさうとしてかへる。樹明来（筍と卵とのお土産持参）、うち連れて、夕の街をあるく、夜の街を飲みまはる、――いつもとはちがつて、よい散歩、よい飲振、よい別れ方だつた。飲食過多、それはやつぱり貪る心だ、戒々々。

・酔ひざめの、どこかに月がある・月の落ちる方へあるく・落ちてまだ月あかりの寝床へかへる

五月二日

曇、明るい雨となつた。早朝、樹明来、ほがらか／＼、素湯とわさび漬で、節食、どうやら過飲過食の重苦しさがなくなつた。何だか泣きたいやうな気分になる、老いぼれセンチめ！

・柿若葉、あれはきつつきのめをと・草をとりつつ何か考へつつ・くもり、けふはわたしの草とりデー・まこと雨ふる筍の伸びやう・いつまでも話しつゞける地べたの春・見るとなく見てをれば明るい雨

△すべての物品を酒に換算する私だつたのに、いつからとなく米で換算するやうになつた、例へば、五十銭の品物は酒五合だと考へてゐたのが、米二升だと考へるやうになつた、そして、酒さへあれば、といふ私が、米さへあれば、の私となつてゐる。……

・さいてはちつてはきんぽうげのちかみち・たれかきたよな雨だれのあかるくて・もう暮れる火のよう燃える・竹の子のたくましさの竹になりつつ・によきによきならんで筍筍・親子で掘る筍がある風景です　　　樹明君に・なんとよいお日和の筍をもらつた

五月三日

曇、風が出て寒かつた。草取、入浴、散歩。……樹明君が帰宅の途中を寄つてくれる、忠兵衛もどきで酒を捻出して飲む、精進料理のよい酒だつた。句もなく苦もなし、楽もなく何物もなし、めでたし／＼。

五月四日

晴、なか／＼つめたい。待つてゐるものは来ない。山の色がうつくしうなつた、苗代づくりがはじまつた。敬君へ手紙を書いた、悪口を書いたけれど、私の友情はくんでもらへるだらう、敬君、しつかりしてくれたまへ、たのむ。まじめな身心で畑仕事、蚯蚓の多いのには閉口した。夜は樹明君を宿直室に訪ねる、よく話しよく飲みよく食べた、ずゐぶん酔ふたが、習慣と心構へとがはたらいて、おとなしく戻つて寝た（残つた酒を持つて！）。

・山は若葉の、そのなかの広告文字　山肌いろづき松蝉うたふ・なんにもなくなつて水の音・石にとんぼはかげをすえ

五月五日

曇、端午、男の祝日、幸にして酒がある、朝から飲む、今日一日は好日であれ。終日閑居、昼寝したり、読書したり、蕗を摘んだり、草をとつたり、空想したり、追憶したりして。若葉の月はよかつた。今日は一句も出来なかつた。

五月六日　立夏。

早起すぎた、明けるのが待遠かつた。晴、ネルセルシーズンだ。入雲洞君の手紙はありがたかつた、黎々火君のはがきはうれしかつた、しげ子さんのたよりはかなしかつた。暮春と貧乏との関係如何！酒を借り、魚を借りて来て、樹明君を招待した、よい酒宴であり、よい月見であつた。

食べたものがそのまゝで出る春ふかし（何ときたない、そして何とまじめな句かよ）・ほしものほどようほせた藤の花・ゆふべしめやかな土へまいてゆく・影は若葉で柿の若葉で（十二日の月）・ずんぶりぬれて枯れて一本松（追加）　　今日の買物一、七銭　　　バツト一、四銭　　　なでしこ一、十二銭　　醤油一、十二銭　　いりこ

一、十銭　　　マツチ一、弐十弐銭　焼酎一、弐十弐銭　白米一、三銭　　　酢一、三銭　　　菓子一、五銭　　　湯札　　（入金壱円五十銭）一、十七銭　　魚　　　　　　　　（借）一、九十五銭　酒

五月七日

晴、待つてゐる。――黎々火さんが予想よりも早くやつてきてくれた、草花の苗をどつさり持つて、――さつそく植ゑる、――縞萱、小米桜、桔梗、雁皮草、熊笹蘭、友禅菊、秋田蕗、等、等。――萱と蕗とがとりわけて気に入りました、ありがたう、ありがたう、君は純な若人である、私はまた一人のよい友をめぐまれた。樹明君が悪酔姿でやつてくる、昨夜の酒が酒をよんだらしい、バリカン（昨夜わざと置いていつた）を眺めながら、頭を撫でながら、ひそかに案じてゐたが、やつぱり案じた通りだつたらしい、樹明君よ、独りで呷る酒はよくない、さういふ酒から離れて下さい、頼みます。夕方、みんな別れる、私はまた一人となつて月を眺めた、今日はまことにしめやかな一日であつた、酒なしの、おいしい御飯をたべたゞけでも。

日の照る若葉はゆらぐともなく・草の葉ふかくきり／″＼すのをさなさよ・ぢつとしてたんぽゝのちる・放たれて馬にどつさり若草がある・夏山のせまりくる水をくみあげる・からころ／＼水くみにゆく・月あかりの筍がつちり・蕗の葉の大きさや月かげいつぱい・月のあかるい別れ姿で

五月八日

曇、暑くもなく寒くもない、まさに行乞日和。草花を見まはる、やつぱり秋田蕗がよいな。九時頃から四時頃まで嘉川行乞、まことに久しぶりの行乞だつた、行乞相も悪くなかつた。嘉川は折からお釈迦様の縁日、たいへんな人出、活動写真、節劇、見世物、食堂出張店、露店がずらりと並んでゐた、どの家でも御馳走をこしらへてお客がゐた、朝から風呂も沸いてゐた、着飾つた娘さん、気取つた青年が右往左往してゐた、その間を私と、そしてオイチ薬売とが通るのは時代逆行的景観であつた、そして空腹へ焼酎一杯は私をほろ／＼させるに十分だつた、何とまあ自動車の埃、まつたく貧乏人はみじめですね。帰庵して冷飯を詰め込んだところへ、ひようぜんとして樹明来、そして

私もひようぜんとして、いつしよにまたお釈迦様へ、おかげで人、人、埃、埃、その中をくぐつていつて、腰掛で飲む、一杯二杯三杯、十杯二十杯三十杯、——自動車で小郡駅へ、それから窟へ、おばさんのところへ、それでも庵へもどつて雑魚寝、少し金を費はせすぎて気の毒でもあり相済まなかつた。今夜は窟で大にうたつた、樹明君も私も調子を合せて、隣室の若衆を沈黙さしたほどうたつた、身心がすうとした。

・村はおまつり、家から家へ、若葉のくもり（行乞）・蕗の葉のまんなかまさしく青蛙・若葉、高圧線がはしる・水底の月のたたへてゐる　麦の穂、ごた／＼店をならべて（釈迦市）　やつぱり私は月がある路を私の寝床まで　　本日の行乞所得白米　二升八合現金　二十三銭

五月九日

晴、酔うて労れて、いつもより寝過した、六時前ではあつたが。樹明君は腫れぼつたい顔をしてゐる、お茶も御飯も食べないで、さう／＼帰つていつた。私も過飲過食で胃が悪い、とても秋穂行乞はやれさうもないので、地べたに莚をしいて寝た、土が何より薬だ、土のなごやかなつめたさが身心のつかれを癒やしてくれます。過ぎたるは及ばざるにしかず、——酒の場合に於て最も然り、そして、過ぎやすく及びやすし——最も然り。終日無言、悠然観山、一切無事。十五夜の月はうつくしかつた。ぐつすりねむつた、たんぼでもねむられるからありがたい。

・ひなたの葉をひろげてやる（秋田蕗移植）・若葉しづもりまんまるい月が・ゆふべひとときはさびしい若葉で

五月十日

晴、行乞しなくちやならない、どれ出かけやう。出かけることは出かけたが、風が吹くし留守が多いし、気分もよくないので、中途から引き返した、行乞所得は——

白米　七合銭　　六銭

間引菜のお汁はおいしかつた。

・人がきたよな枇杷の葉のおちるだけ・生きられるだけは生きやう草萠ゆる　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（追加二句）・萠ゆる草枯るる草に風が強い・晴れて風ふき仕事を持たない・やつぱりひとりがよろしいい雑草（再録）

五月十一日

起きてまづ空を仰ぐ、そして日暦をめくり捨てる、――けふもすばらしいお天気だ、あれこれしてゐるうちにおそくなつて、とう／＼行乞に出そこなつてしまつた。

・どうにもならない矛盾が炎天・けふは蕗をつみ蕗をたべ（訂正再録）・ゆふべはよみがへる葉の大きく青く・のぼりつめたる蟻の青空・やつと芽がでたこれこそ大根・なんとかしたい草の葉のそよげども　　　行乞・つかれてもどるそらまめのはな（再録）・草にうづもれうれしい石かな　わかれてのぼる月をみて・ふるつくふうふう月がぼる

Ｋおばさんがヒヨコリと来た、掛取かとビク／＼したが、そこまで来たので、そしてその人を待つてゐるので、チヨツと寄りましたといふ、といふ訳で、安心して三十分ばかり四方山の話をした。松蝉がなく、柿が花をつけた、蛙もうたふ。茶の試製をやつた、珍妙な茶ができた、これでも無いより有る方がよい。樹明君がきて、飯を御馳走になりたいとは！　酒を飲む君の顔はかゞやいてゐるが、飯を食べる姿は、あゝ、みじめだつた、私もさみしいけれど、君はもつとさみしさうだつた。生活にムリがあつてはいけない、ウソがあつては助からない。

五月十二日

晴、上々吉の天候でもあり気分でもあつた。旅立の用意いろ／＼、これも身心整理の一端だ。八時頃から行乞と出かける、山口まで急行、四時間あまり行乞、帰庵の途中――農学校附近で、六時のサイレンを聞いた。新聞も今日限りで一時購読中止。行乞は自他を省察せしめる、人さま／″＼の心かな。空腹（昼食ぬきなので）へ焼酎一杯はうまかつた、うまかつた。

本日の行乞所得米　　一升二合銭　　四十七銭

黎々火さんの手紙はあたゝかだつた、樹明さんはどんな様子か、血族と絶縁してしまつた私には友がなつかしくてならない。

・雀したしや若葉のひかりも・若葉はれ／″＼と雀の親子・いちにち石をきざむや葉ざくらのかげ・ツルバシぶちこんで熱い息はいて

五月十三日　朝から　　　　　　　　　　『行乞記』　五月十九日　夕まで

第24章
其中日記　04 (新字旧仮名)

其中一人として炎天　　　　　山頭火

七月十一日

天気明朗、心気も明朗である。釣瓶縄をすげかへる、私自身が綯うた棕梠縄である、これで当分楽だ、それにしても水は尊い、井戸や清水に注連を張る人々の心を知れ。百合を活ける、さんらんとしてかゞやいてゐる、野の百合のよそほひを見よ。椹野川にそうて散歩した、月見草の花ざかりである、途上数句拾うた。昼食のおかずは焼茄子、おいしかつた。此頃は茄子、胡瓜、胡瓜、茄子と食べつゞけてゐる。

・けさは逢へる日の障子あけはなつ（追加一句）　青田いちめんの長い汽車が通る・炎天かくすところなく水のながれくる・涼しい風が、腰かける石がある・すずしうて蟹の子・ふるさとちかく住みついて雲の峰　水をわたる高圧線の長い影・日ざかりのお地蔵さまの顔がにこにこ

野菜に水をやる、栄養の水でもあれば感謝の水でもある。△其中庵はまことに雑草の楽園であり、虫の宿である、草は伸びたいだけ伸び、虫は気まゝに飛びあるく。……蜩！　ゆふべの窓からはじめて裏山の蜩を聞いた。とても蚊が多いから、といふよりも、私一人に藪蚊があつまつてきて無警告で螫すから、まだ暮れないのに蚊帳を吊つて、その中で読書、我儘すぎるかな。△或る日はしづかでうれしく、或る日はさみしくてかなしい、生きてゐてよかつたと思ふこともあれば、死んだつてかまはないと考へることもある、君よ、孤独の人生散歩者を笑ふなかれ。

・昼寝の顔をのぞいては蜂が通りぬける　もつれあひつつ胡瓜に胡

瓜がふとつてくる・炎天のの虫つるんだまんま殺された・もいでたべても茄子がトマトがなんぼでも　心中が見つかつたといふ山の蜩よ　今から畑へなか／＼暮れない山のかな／＼　　　追加一句・飯のしろさも家いつぱいの日かげ

七月十二日

月明に起きて蛙鳴を聴く、やがて蝉声も聴いた。玉葱といつしよに指を切つた、くれなゐあざやかな血があふれた、肉体の疵には強い私だが、疵の痛みには弱い私だ。生死一如、物心一枚の境地――それは眼前脚下にある、――それが解脱だ。五時半出立、九時から十二時まで秋穂行乞、三時半帰庵。

米　二升二合　　　酒　弐十銭今日の所得　　　今日の買物　　　銭　二十六銭　　　ハガキ　三銭

この二合の酒はとてもうまかつた、文字通りの甘露だつた。秋穂はさすがに八十八ヶ所の霊場だけに、殊に今日は陰暦の二十日だけに、お断りは殆んどなかつた。

・朝月まうへに草鞋はかろく・よち／＼あるけるとしよりに青田風・朝月に放たれた野羊の鳴きかはし・田草とる汗やらん／＼として照る・木かげ涼しくて石仏おはす（改作）・炎天の虫をとらへては命をつなぐ・一人わたり二人わたり私もわたる涼しい水・重荷おろすやよしきりのなく

小豆飯と菓子とのおせつたいをいたゞいた、まことに久しぶりのお接待！信心遍路さんが三々五々ちらほらと巡拝してゐる、わるくない風景である、近代風景ではないけれど。女学生が二三人づゝ、自転車に乗つて、さつさうとして走つてくる、これは近代風景だ、そしてこれもわるくない風景だ。村の処女会の人々がにぎやかに神社の境内を洒掃してゐる、辻々には演習兵歓迎の日の丸がへんぽんとひるがへつてゐる、これもまたわるくない風景だ。△土手の穂すゝきがうつくしかつた、旧家には凌宵花、野には撫子、青田風があを／＼と吹く。往復七里、帰途の暑さはこたえた、しかし、のんべんだらりと坐つてゐ

るよりも歩いた方がたしかに身心をやしなふ。

・吸はねばならない血を吸うて殺された蚊で・とまればたたかれる蠅のとびまはり・炎天の雲はない昼月・草すゞし人のゆくみちをゆく・炎天の機械と人と休んでゐる・木かげたゝへた水もほのかに緋鯉のいろ・茄子胡瓜胡瓜茄子ばかり食べる涼しさ

七月十三日

朝月はよいな、蛙のうたもよいな、キヤベツはうまいな。桔梗が咲いた、虫の声がしんみりしてくる。……網代笠を修繕する、いつぞや緑平老は、ずゐぶん破れましたねといつた、樹明君は、新らしいのを買つてはどうですかといふが、物を活かせるだけ活かすのが禅門の教であり、同時に新らしい笠をかぶるよりも一杯やりたいのが私の煩悩でもあり、熱心に紙を張り渋を塗つて役立てるのである、このところ一句あるべくして一句もなかつた。△空罎を焼酎に代へてのんべい虫をなだめた、さりとてははかない酒徒なるかな、だ。蝉（わし／＼）大蝉（じん／＼）が暑苦しく啼きだした。

追加・月あかり蜘蛛の大きい影があるく・月夜の道ばたの花は盗まれた・昼ふかく草ふかく蛇に呑まれる蛙の声で・待ちぼけの、寝るとする草に雨ふる・待つでもない待たぬでもない雑草の月あかり

焼酎の御利益でぐつすり昼寝、覚めてから水をしたうて椹野川へ行く、何と河童少年少女の泳ぎまはつてゐること、そしてみんなそれ／″＼に海水着を着て浮袋を持つてゐる。一瓢を携へて網漁をやつてゐる老人がゐた、その余裕ぶりを少し羨ましく思つた。私は二合入の空瓶を拾うて戻つた、行乞途上、般若湯を詰めて持つてあるく用意として。ひとり蚊帳の中に寝ころんで、好きな本を読む——極楽浄土はまさにこゝにある！緩歩不休は山登りばかりの秘訣ではない、人生の事すべて然り。

掟（改訂）一、辛いもの好きは辛いものを、甘いもの好きは甘いものを任意持参せられたし。一、うたふもおどるも勝手なれども、たゞ春風秋水のすなほさでありたし。一、威張るべからず、髀ぐべからず、其中一人の心を持すべ

し。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　其中庵

主　　　　右三章　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山頭火

しるす

　夜、樹明君がバリカンを持つて来て、白髪頭を理髪してくれた、ありがたい、言語同断ありがたかつた。机の上に蝉の子がぢつとしてゐる、殻を脱いだばかりのみん／＼蝉である、今夜はこゝで休んで明日からは鳴いて恋してそして死ね、お前の一生は短かいけれど私たちよりは充実してゐるぞ。

　　七月十四日　七月十五日　『行乞記』　七月十六日

第25章
其中日記　05 (新字旧仮名)

┌──────────────────────┐|おかげさまで、五十代四度目の、||其中庵二度目の春をむかへること||ができました。山頭火拝||　天地人様|└──────────────────────┘

二月四日

明けてうらゝかだつたが、また曇つて雪がふりだした。身心不調、さびしいとも思ひ、やりきれないとも感じたが、しかし、私は飛躍した、昨夜の節分を限界として私はたしかに、年越しをしたのである。朝、冷飯の残りを食べたゞけで、水を飲んで読書した、しづかな、おちついた一日一夜だつた。

第三句集『山行水行』に※入する語句二章　（庵中閑打坐）　（一鉢千家飯）山があれば山を観る　村から村へ雨のふる日は雨を聴く　家から家へ春夏秋冬　一握の米をいたゞき受用して尽きることがない　いたゞくほどに　鉢の子はいつぱいになつた

二月五日

天も私も憂欝だ、それは自然人生の本然だから詮方がない、水ばかり飲んでゐても仕方がないから、馴染の酒屋へ行つて、掛で一杯ひつ

かけた、そしてさらに馴染の飲食店から稲荷鮨とうどんとを借りて戻つた。湯札が一枚あつたので、久振に入浴、憂欝と焦燥とを洗ひ落してさつぱりした。幸福な昼寝。やつぱり、句と酒だ、そのほかには、私には、何物もない。大根、ほうれん草、新菊を採る、手入をする、肥をやる。私の肉体は殆んど不死身に近い（寒さには極めて弱いけれど）、ねがはくは、心が不動心となれ。米桶に米があり、炭籠に炭があるといふことは、どんなに有難いことであるか、米のない日、炭のない夜を体験しない人には、とうてい解るまい。徹夜読書、教へられる事が多かつた。

・椿の落ちる水の流れる・みそさゞいよそこまできたかひとりでなくか・梅がもう春ちかい花となつてゐる・轍ふかく山の中から売りに出る・枯枝をひらふことの、おもふことのなし　そこら一めぐりする椿にめじろはきてゐる　ふるさとなれば低空飛行の爆音で

二月六日

くもり、何か落ちてきさうだ。うれしいたよりがあつた。やうやく句集壱部代入手、さつそく米を買ふ、一杯ひつかける、煙草を買ふ。……四日ぶりに御飯を炊く、四日ぶりにぬく飯をたべる、あたゝかい飯のうまさが今更のやうに身にしみる。酒もやつぱりうまい、足りないだけそれだけうまい。山を歩く、あてもなく歩くのがほんたうに歩くのだ、枯木も拾ふたが句も拾ふた。味ふ、楽しむ、遊ぶ――それが人生といふものだらう、それ自体のために、それ自体になる――それがあそびである、遊行といふ言葉の意義はなか／＼に深遠である。仏法のために仏法を修行する、仏法をも忘れて修行するのである。

今日の決算（二月六日）（収入）一金壱銭　　　財布在金一金七十五銭　　句集壱部代入金　合計金　七十六銭也（支払）一金四十六銭　　米二升一金九銭　　　ハガキ六枚一金拾銭　　　焼酎一杯一金四銭　　　なでしこ小包　合計金　六拾九銭也　差引残金七銭也　　　この七銭は、銅貨七個はまことに大切なり。

・たゝずめば山の小鳥のにぎやかなうた・枯草に落ちる葉のゆふなぎは・ゆくほどに山路は木の実のおちるなど・暮れてゆくほほけすゝきに雪のふる・雪空おもたい街の灯の遠くまたたく・冬夜の水をのむ

肉体が音たてて・ランプともせばわたしひとりの影が大きく

二月七日

快晴、身心やゝかるくなつたやうだ。昨夜もねむれなかつた、ほとんど徹夜して読書した。心が沈んでゆく、泥沼に落ちたやうに、——しづかにして落ちつけない、落ちついてゐていら／＼する、それは生理的には酒精中毒、心理的には孤独感からきてゐることは、私自身に解りすぎるほど解つてはゐるが、さて、どうしようもないではないか！その根本は何か、それは私の素質（temperament）そのものだ。生きてゐることが苦しくなつてくる、といつて、死ぬることは何となく恐しい、生死去来は生死去来なりといふ覚悟は持つてゐるつもりだけれど、いまの、こゝの、わたしはカルモチンによつてゞもゴマカすより外はない！シヨウチユウを二杯ひつかけてきた、むろんカケだ、そして樹明君を訪ねて話す。風、風がふく、風はさびしい。昼寝、何ぞ夢の多きや、悪夢の連続だつた。ほうれん草を摘んで食べた、ほうれん草はうまいかな。ゆふべ、ぢつとしてゐるにたへなくて山をあるく、この身心のやりどころがないのだ、泣いても笑ふても、腹を立てゝも私一人なのだ。蓑虫がぶらりとさがつてゐる、蓑虫よ、殻の中は平安だらう、人間の私は虫のお前をうらやむよ。炬燵をのけたら、何となく寂しい、炬燵は日本の伝統生活を象徴する道具の一つである、家庭生活が炬燵をめぐつて営まれるのである、囲爐裏がさうであるやうに。火といふものはまことになつかしい、うれしい、ありがたいものである、ぬくいといふよりあたゝかいといふ言葉がそれをよく表現する、肉体をぬくめると同時に心をあたゝめてくれる。乞食や流浪者はよく焚火をするといふ、私もよく火を焚くのである、そして孤独のもつれをほぐすのである。……待つてゐた敬坊がやつてきてくれた、間もなく樹明君もきてくれた、お土産の般若湯がうまいことうまいこと。それから三人で雨の中を街へ、ほどよく飲み直して戻る、樹明君よく帰りましたね、敬治君よく泊りましたね、そして山頭火もよく寝ましたよ。ほんに、とろ／＼ぐう／＼だつた！

・あんたがくるといふけさの椿にめじろ（敬治君に）・日が照る草は枯れて石仏・こゝろあらためて霜の大根をぬく　大根の、大きいの小さいのが霜ばしら　葉のない枝が、いつしかみのむしもゐない・竹

の葉に風のあるひとりでゐる・石ころを蹴とばして枯山・やりきれない冬空のくもつてくる・ふめばさく／＼落葉のよろし・冬空の、この道のどこへ、あるく・さいて、かげする花のちる・あるけば冬草のうつくしいみち・ウソをいつたがさびしい月のでゝゐる・ウソをいはないあんたと冬空のした（樹明君に）・冬の山が鳴る人を待つ日は　かきよせて、おこつた炭ではあるけれど・火鉢もひとつのしづかなるかな・椿が咲いても眼白が啼いても風がふく・竹があつて年をとつて梅咲いてゐる・手をひいて負うて抱いて冬日の母親として・このさびしさは山のどこから枯れた風・蓑虫の風にふかれてゐることも・風ふくゆふべの煙管をみがく　　　　追加・枯野をあるいてきて子供はないかなどゝいはれて・ゆふ空へゆつたりと春めいた山

二月八日

日が射してゐたが、雪となつた、春の粉雪がさら／＼とふる、もう春だ、春だとよろこぶ。敬坊は県庁へ、私は身辺をかたづける。朝の紅茶はおいしかつた、樹明君ありがたう。友からあたゝかいたよりのかず／＼、ありがたう、ありがたう。小鳥よ、猟銃のひゞきは呪はしいかな。老眼がひどくなつて読書するのにどうも工合が悪い、妙なもので、老眼は老眼として、近眼は近眼として悪くなる、ちようど、彼女に対して、憎悪は憎悪として、感謝は感謝として強くなるやうに。
夕、樹明来、ハムを持つて、——敬坊不帰、ハテナ！鰹節を削りつゝ、それを贈つてくれた友の心を感じる、桂子さん、ありがたう。
年齢は期待といふことを弱める、私はあまり物事を予期しないやうになつてゐる、予期することが多いほど、失望することも多い、期待すれば期待するだけ裏切られるのである、例へば、今日でも、敬坊の帰庵を待つてはゐたけれど、間違なく、十中の十まで帰庵するとは信じてゐなかつた、彼も人間である、浮世の事はなか／＼思ふやうにはならない、多分帰庵するだらうとは思ふけれど、或は帰庵しないかも知れないと思ふ、だから私は今夜失望しないではなかつたけれども、あんまり失望はしなかつた、ひとりしづかにハムを食べ、ほうれんさうのおひたしを食べて、ひとりしづかに寝た、——これは敬坊を信じないのではない、人生の不如意を知つてゐるからである。石油がきれたのには困つた、先日来の不眠症で、本でも読んでゐないと、長い夜が

いよ／＼ます／＼長くなるのである。銭がほしいな、一杯やりたいな、と思つたところでいたし方もありません。

　・林のなかへうしろすがたのふりだした春雪（敬治君に）　昼はみそさゞい、夜はふくらうの月が出た（追加一句）・寝ざめ雪ふるさびしがるではないが・雪が霙となりおもひうかべてゐる顔・ひとりへひとりがきていつしよにぬくうねる（旧友来庵）・梅はさかりの雪となつただん／＼ばたけ　雪を見てゐるさびしい微笑・雪のしたゝり誰もこないランプを消して　恋のふくらうの逢へらしい声も更けた・枯れた葉の枯れぬ葉の、日のさせば藪柑子・風の鴉の家ちかく来ては啼く　あんたは酒を、あんたはハムを、わたくしは御飯を炊く（敬治、樹明両君に）　ふたりいつしよに寝て話す古くさい夢ばかり・枯れて草も木もわたくしもゆふ影をもつ・ぬかるみのもう春めいた風である・まがらうとしてもうたんぽゝの花・大根も春菊もおしまいの夕空・ふるつくふうふう酔ひざめのからだよろめく

　　二月九日

　朝は曇つて寒くて、いまに雪でもふりだしさうだつたが、だん／＼晴れてきてぬくうなつた、吹く風はつめたいけれど。山をあるく、風がさわがしい、枯枝をふんで寂しい微笑をさがすといふのが、ロマンチケルだ。午後、岐陽さん呂竹さん、来庵、珍品かたじけなし、といふ訳で、さつそく一杯やつて御馳走ちようだい、うまい／＼。敬坊はいまだに帰らない、アヤシイゾ！街へ出かけるとて、書きのこして曰く、アブラ（いろ／＼のアブラ）買ひに！　よかつたね！やりきれなくなつて、街まで出かけて熱い湯にはいる、戻つてくると、庵には灯がついてゐる、敬坊が炬燵にぬく／＼と寝てゐるのだつた。酒と米とを持つてくることを忘れない彼は涙ぐましい友情を持ちつゞけてゐる、彼に幸福あれ、おとなしく飲んで、いつしよに寝る、一枚の蒲団も千枚かさねたほどあたゝかだつた。……

　・バスが通る水田の星もうるめいてゐるを戻る　夢の女の手を握つたりなどして夢・春めいた夜のわたしの寝言をきいてくれるあんながゐてくれて（敬治君に）・酔うていつしよに蒲団いちまい（敬君に、樹明君に）・あんなところに灯が見える山が空がもう春・ふたりでふ

みゆく落葉あたゝかし　落葉ふんではふたりで枯枝ひらふなんど・わたしが焚くほどの枯木はおとしてくれる山・梅がひらいてそこに蓑虫のやすけさ・をちこち畑うつその音もめつきり春

　　二月十日

　晴、朝は霜で冷えたが、日中はほんたうにぽか／＼だつた。アルコールのおかげで、ぐつすり寝られた、同時にそのまたおかげで胃が悪い、ありがたくもありありがたくもなし、か。朝酒はうまし、朝茶もうまし、敬坊とふたりで、しめやかな朝飯をたべた、いつもかういふ調子だと……よすぎます！葉も実もすつかりおとしてしまつた木のゆうぜんたるすがたはよいかな、うらやましいかな。敬君が実家を見舞ふといふので、連れ立つて街へ。帰庵して、間もなく敬君も来庵、餅を持つてきてくれた、それにしても其中庵は家庭よりも、そんなにいゝのだらうか！樹明君から来信、今日午後、岐陽、呂竹の両君といつしよに、御馳走を携へてくるとのこと、日々好日、今日大好日。彼等を待つ間のしんきくささに、二人で山を散歩する、……せめて、私たちの生活をして二二ヶ三ぐらゐであらしめたい、などゝ話しながら。……待つてゐた三人がやつてきた、枯枝を焚いて酒をあたゝめ飯をたく、ヂンギスカン鍋はうまかつた、みんな酔ふた。それから三人は街へ、どろ／＼どろ／＼になる、私は私の最後の一銭まではたいた。私が最初に帰庵、それから敬君、最後に樹明君、一枚のフトン、一つのコタツに三人が寝た。

　・ふるつくふうふう逢ひたうなつた　　　再録・誰かきさうな雪がちらほら・落葉ふんでは枯木をひらふあたゝかさ・雀おどるや雲かげもなし・ちようど酔のでたところが墓地で梅のさかり

　　二月十一日

　旗日も祝日もあつたものぢやない、身心の憂欝やりどころなし、終日臥床、まるで生ける屍だ。敬君やうやく帰宅、樹明君来庵、テル坊も（この称呼は樹明君にしたがふ）。退一歩、そして進十歩、歩々新たなれ。

　・朝から小鳥はとべどもなけども・かうしてこのまゝ死ぬること

の、日がさしてきた・壁にかげぼうしの寒いわたくしとして・寒晴れ、誰もゐない火の燃えてゐる・晴れてうつくしい草の葉の霜・庵はこのまゝ萌えだした草にまかして

二月十二日

春日和です、私は終日終夜、寝床の中です。酒も煙草もない一日一夜でした。風呂はまことに結構でした、餅はたいへんおいしうございました。……

・夜のふかうして薬鑵たぎるなり　あの夜の梅が北朗作るところの壺（敬君に）・いつも小鳥が、南天の実の赤さはある・だん／＼ばたけに人がきてゐる春の雪ふる

二月十三日

晴れてあたゝか、曇つてあたゝか、ぢつとしてゐても、出て歩いてもあたゝか。樹明君を訪問して、切手と煙草と酒代とを貰つた。倦怠、無力、不感。夜を徹して句作推敲（この道の外に道なし、この道を精進せずにはゐられない）。

・はれてひつそりとしてみのむし・火鉢ひとつのあたゝかさで足る・なむからたんのう御仏の餅をいたゞく・ふくらうはふくらうでわたしはわたしでねむれない・汽車のひゞきも夜あけらしい槠の葉の鳴る・火の番そこから遠ざかるふくらう

二月十四日

今日は旧のお正月です、お寺の鐘が鳴ります、餅を貰ひに行きましよか、さうらうとして鉢の子をさゝげて。どうも憂欝だ、無理に一杯ひつかけたら、より憂欝になつた、年はとりたくないものだとつく／″＼思ふ。畑仕事を少々やつてみたが、ます／＼憂欝になる、読書すればいよ／＼憂欝だ。春風よ、吹きだしてくれ、私は鉢の子一つに身心を托して出かけやう、へう／＼として歩かなければ、ほんたうの山頭火ではないのだ！旧暦のお正月だといふのに、百姓は田を耕やしたり、畑を打つたり、洗濯をしたり、大根を刻んだりしてゐる、こゝにも農村窮乏の色が見えるといへるだらう。思ひがけなく、東京の修君からたよりがあつた、彼も私とおなじく落伍者、劣敗者の一人だ、そ

して妻君にこづかれてゐる良人だ、幸にして彼にはまだ多少の資産が残つてをり、孝行な息子があり、世才がないこともないので、東京で親子水入らずの、そして時々はうるさいこともある生活をつゞけてゐるらしい、修君よ、山の神にさわるなかれ、さわらぬ神にたたりなしといふではありませんか！夕、樹明君に招かれて宿直室へ出かける、うまい酒うまい飯だつた、そのまゝ泊る、あたゝかい寝床だつた。

・寒空のからりと晴れて柿の木・ふくらうがふくらうに月は冴えかへる・よつぴて啼いてふくらうの月・冴えかへる月のふくらうとわたくし・恋のふくらうの冴えかへるかな

二月十五日

雪、雪はうつくしいかな、雪の小鳥も雪の枯草も。わらやふるゆきつもる——これは井師の作で、私の書斎を飾る短冊に書かれた句であるが、今日の其中庵はそのまゝの風景情趣であつた。ふりつもる雪を観るにつけても、おもひだすのは一昨年の春、九州を歩いてゐるとき、宿銭がなくて雪中行乞をしたみじめさであつた（如法の行乞でないから）、そのとき、私の口をついて出た句——雪の法衣の重うなりゆくを——その句を忘れることができない。裏山のうつくしさはどうだ、私はしん／＼とふりしきる雪にしんみりと立つてゐる山の雪景色に見惚れた。地下足袋を穿いて、尻からげで、石油買ひに街へ出る、チヤンチヤン（このあたりではソデナシといふ）を着たおぢいさんの姿には我ながら吹きだしたくなつた、そして、アーブラ買ひにチヤア買ひに、といふ童謡を思ひだして泣きたくなつた。雪の日の庵はいよ／＼閑寂なり、閑寂を愛するは日本人老来の伝統趣味なり、私は幸福なるかな。樹明君から聞いて。——Ｔさんはとう／＼死んださうな、葬式には私も列したいと思ふ、読経回向しなければならない、Ｔさんは不幸な人だつた、幼にして母を失ひ、継母にいぢめられ、やゝ長じては父に死なれて、多少の遺産を守るに苦しんだ、そしてさらに不治の病気に犯され、青春の悦楽をも味ふことが出来なかつた、彼は樹明君の幼馴染であり、その縁をたどつて、私は一昨年の夏、庵が整ふまで、一ヶ月ばかりの間、その離座敷に起臥してゐた、彼は善良な人間だつた、句作したいといつて、私の句集なども読んでくれた、私は彼の余命がいくばくもなからうことを予感してゐたが、……樹明君は情

にあつい人である、Ｔさんの友達としては樹明君だけだつたらしい、樹明君は病床のＴさんを度々おとづれて、或る時は、東京音頭を唄うて、しかも踊つて慰めたといふ、病んで寂しがるＴさんと酔うて踊る樹明君との人間的感応を考へるとき、私は涙ぐましくならざるを得ない。晩の雑炊はおいしかつた、どうも私は食べ過ぎる（飲み過ぎるのは是非もないが）、一日二食にするか、一食は必らずお粥にしよう（胃拡張はルンペン病の一つだ、いや貧乏人はみんな胃拡張だ、腹いつぱい食べたい、といふのが彼等の念願だから、そして彼等は満腹感を味はなければ、食べた気持になれないのである、おいしいものを少し、よりも、まづくても多くを欲求するのである）。何を食べてもうまい！　私は何と幸福者だらう、これも貧乏と行乞とのおかげである。句作道は即ち成仏道だ、句を味ふこと、句を作ることは、私にあつては、人生を味ふこと、生活を深めることだ。主観と客観とが渾然一如となる、或は、自己と自然とが融合する、といふことも二つの形態に分けて考察するのがよい、即ち、融け込む人と融かし込む人、言ひ換へれば、自己を自然のふところになげいれる人と、自然を自己にうちこむ人と二通りある、しかし、どちらも自然即自己、自己即自然の境地にあることに相違はないのである。人間に想像や空想を許さないならば、そこには芸術はない、芸術上の真実は生活的事実から出て来るが、真実は必ずしも事実ではない（事実が必ずしも真実でないやうに）、芸術家の心に於て、ありたいこと、あらねばならないこと、あらずにはゐられないこと、それは芸術家の真実であり、制作の内容となるのである。内容は形式を規定する、同時に、形式も内容を規定する、しかし、私は内容が形式を規定する芸術を制作したい。俳句的内容を持つて俳句的形式を活かす俳人でありたいのである。高くして強き感情、何物をも――自己をも燃焼せしめずにはおかないほどの感情、その感情から芸術――詩は生れる、自己燃焼がやがて自己表現である。

・お正月の小鳥がうたひつつうたれた・お正月も降つたり照つたり畑を打つ・降つては晴れる土にこやしをあたへる　木の実があつて鳥がゐて山がしづけく・竹をきる風がふきだした　風ふく日かなほころびを縫ふ・いちはやく伸びて咲いたるなづなであつた・握りあはした手に手のあかぎれ（農村風景）・ほほけすすきのいつまでも春めいて

きた　雪をかぶりて梅はしづかなる花・雪、最初の足あとで行く・雪へ轍の一すぢのあと・雪をふんで郵便やさんよいたよりを持つてきた・雪ふる火を焚いてひとり・ひとつやにひとりの人で雪のふる・ゆきふるだまつてゐる・春の雪のすぐとける街のいそがしくなる・雪の小鳥がかたまつて食べるものがない・すすきに雪の、小鳥はうたふ・誰も来ない木から木へすべる雪・雪あかりの、足袋のやぶれからつまさき・雪のあかるさが家いつぱいのしづけさ・春の雪のもうとけて山のしめやかないろ・このみちいつもおとしてゐる枯枝ひらふ・少年の夢のよみがへりくる雪をたべても・濡れて枯草の水をくみあげる　こやしやつたらよい雨となつた葱や大根や・一つあれば事足るくらしの火を燃やす・北朗作るところの壺の水仙みんなひらいた・こちらをむいて椿いちりんしづかな机・身にちかくふくらうがまよなかの声・月がうらへまはつても木かげ　霜晴うらゝかな鰹節を削ります（桂子さんに）・『とかく女といふものは』ふくらうがなきます

二月十六日

霜晴れ、霜消し一杯！旧正月で、鮮人連中の踊り姿を見た、赤、黄、青の原色がけばゞしいが、原始的のよさがないでもなかつた。樹明君を訪ね、さらに久芳さんを訪ねる、週間朝日所載の、井師『酒と水』とを読ましてもらふ、そこには私の事がまざゞと書いてあつた。午後、武波憲治君の葬式に列した、彼の一生、人間の一生といふものがつくゞ考へられた。夕方、樹明君来庵、テル坊も来庵、彼女は餅を持つてきてくれた、餅は好きだ、煮ても焼いてもうまい、餅と日本人の生活、といふやうな事も考へる。暮れて、樹明君と同道して岐陽さんを訪ねる、さつそく酒になる、久芳校長も浅川国手もやつてこられて、一升瓶が何本か倒れた、下物はお手のもので凝つたものばかり。酔うて、二人であちらこちらと歩く、そしておそく帰庵。久芳さんが満洲の石鍋を下さつた、樹明君が生酔本性を発揮して、無事持ち帰つてゐるといふ、東上送別にはその鍋でスキヤキして一杯やりたいな。

Ｔさんの葬儀に列して（二月十六日午後）・野辺のおくりのすすきはよろしいかな・南無阿弥陀仏もう鴉がきてゐる　墓石に帽子をのせ南無阿弥陀仏・これが一生のをはりの、鴉と子供　人を葬ると

ころ梅の花・墓場へみちびくみちの落葉鳴らしゆく　落ちてそのまゝ芽生えた枇杷に枇杷・ぼんやりをればのぞいては啼くはひたたき・さびしさのはてのみちは藪椿・風に木の葉のさわがしいさうろうとしてゆく・夜ふけの餅のうまさがこんがりふくれ・枯れたすゝきに日が照る誰かこないかな　　　黎々火君に秋田蕗二句　蕗の芽もあんたのこゝろ・あんたのこゝろがひろがつて蕗の葉

二月十七日

あたゝかい、雨が近いらしい、九州行が困らないやうに。朝、樹明来、昨夜の酔態を気にかけてゐる、酔うて乱れないやうにならなければ、人間は駄目、生活も駄目だ。身心ぼんやり、大風一過の気分、凝心ばかりではいけない、私は放心を味ふ、いや楽しむ。いつでも餓死する覚悟があれば、日々好日であり事々好事である、何のおそれるところもなく、何のかなしいものもない。食べることが生きることになる、といふ事実は、老境にあつては真実でないとはいへまい。終日終夜、寝床で読書、ひもじくなれば餅をたべて安らかに。

・遠山の雪ひかる別れなければならない・草は枯れて犬はたゞほえて・雪どけのぬかるみのあすはおわかれ・朝から降つたり照つたり大きな胃袋（ルンペンのなげき）・かみしめる餅のうまさの夜のふかさの・なにもかも雑炊としてあたゝかく・小鳥も人もほがらかな雲のいろ　こゝろあらためて水くみあげてのむ・ほつかりめざめた春めいた雨の柿の木　ぽつとり椿が雨はれたぬかるみ

二月十八日

雨、しと／＼と春めいて降る、出立を延ばした。午後、風呂へいつた留守に樹明来、ハムを持つてきたといふ、一杯やらずはなるまいといふ、まことに然りで、一杯やる、おとなしく別れる、めでたし、めでたし、あゝめでたし。餅をたべつゝ、少年時代に餅べんたうを持つて小学校に通うたことをおもひだす、餅のうまさが少年の夢のなつかしさだ。アルコールのおかげで、ぐつすり一ねむり、それから読書。

・風の中の変電所は午後三時　風ふく西日の、掘りつゞけてゐる泥蓮・風をあるいてきて新酒いつぱい・寺があつて墓があつて梅の花

風が出てきて冬が逃げる雲の一ひら二ひら・水底しめやかな岩がある雲のふかいかげ・ちかみちは春めく林の枯枝をひらうてもどる・夜あけの葉が鳴る風がはいつてくる

明日から、東行前記ともいふべき　　　　　北九州めぐり　旅日記

二月十九日

晴、寒い、いよ／＼出立だ。樹明君が、約束の珍品を持たせて寄越す、五十銭銀貨弐枚を酒代として、そして旅の餞別として地下足袋、かたじけなく頂戴して歩きだしたことである。まことに久しぶり行乞の旅である、絡子をかけることを忘れたほど、あはてゝいそいだ（これは禅坊主として完全に落第だ！）。峠はよいかな、よいかな、昔の面影が十分に残つてゐる、松並木がよい、水音がよい、風もわるくない。……風は吹いても寒くはなかつた、昼飯はヌキにして酒一杯と饅頭五つ、下手な両刀つかひだ！厚狭まで歩いて、それから汽車で長府まで、そしてまた歩いて、黎々火居に地下足袋をぬいだ、君はまだ帰宅してゐない、日記をつけたり本を読んだりして待つ、黎々火居の第一印象はほんとによかつた、家も人も何もかも。今日は何故だか労れた（六里強しか歩いてゐないのに）、老のおとろへもあらう、なまけ癖もあらう、出発がおくれたためもあらう、風がふくからでもあらう（風は孤独者には禁物だ）、待ちきれなくて、勧められるまゝに、ひとりで酒をいたゞき餅をいたゞく、酒もうまく餅もうまい、ありがたいありがたい。やうやくにして黎君帰来、しんみり飲んで話しつゞける、酔うて労れて、ぐつすり寝る。……返事をしない男！　厚狭駅の待合室で、新聞を読んでゐる男に読まして下さいといつたら、彼は黙つてゐた、物をいふことが惜しいといつた風に！

・食べもの食べつくし旅へでる春霜・これから旅も春風のゆけるところまで・春がきた水音のそれからそれへあるく・梅もどき赤くて機嫌のよい頬白目白・こゝからは長門の国の松葉ふる・誰もゐない筧の水のあふれる落葉・岩を白う岩から寒い水は走る・こゝで泊らうどの家も餅がほしてある（改作）　春が来たぞな更けてレコードもをんなの肉声　　追加二句・灯つてまたたいてあれはをなごや・春寒いを

なごやのをんなが一銭持つて出てくれた

　　二月二十日

　五時すぎにはもう起きた、お雑煮はいつでもおいしい、お辨当まで貰つて、いつしよに出立、朝ぐもりの寒さだ。黎君は汽車で局へ出勤、私は海岸線を下関へ。関門風景はよろしい、なつかしい、ゆつくりと歩く、ぼつり／＼句もできる、おもひでの感慨多少。長府はまことにおつとりとした遊園地だ、享楽場ではないが、とにかく、ブルヂヨアの土地だ、プロレタリヤの土地でもあるが。下関へ着いたのは九時だつた、唐戸市場を見物する、どうしても行乞気分になれない、あちこち歩きまはるだけ。下関といふところは、何と食べ物の多いこと！　食べる人の多いこと！かうして歩いてゐると、私といふ人間がどれだけ時代錯誤的であるかゞよく解る、世間と私との間にある距離を感じる、しかし、私の悩みはそこにはない、私の悩みは、なりきれない——何物にもその物になりきりえないところにある。花屋さんがもう、菜の花を売つてゐる、八百屋には蕗の薹。街の老楽師！　なんとみじめな。午後、地橙孫居を訪ねて閑談二時間。四時、唐戸から船で大里へ、大里から荒生田まで電車、公園の入口でひよつこり星城子君にでくわす、よかつた。入浴、身心やゝかろし、酒、飯、話。……同道して井上さんを訪ねる、また酒だ、シヤンもゐらつしやる。酔うて戻つて熟睡、大鼾であたりをなやましたらしい。井上さんがトンビを供養して下さつた、私にはよすぎるほどの品である、トンビはむろんあたゝかい、井上さんの人情と共に。

　トンビでもほしい夜のトンビをもらつて着てゐる

　帰途の一句である。

　　朝はつめたい煙草も分けてさようなら・なか／＼寒い朝から犬にほえられどうし　崖にそうてきて曲れば蘭竹二株の早春・汽笛とならんであるく早春の白波　昇る日は春の、はいつてくる船出てゆく船（関門風景）　日が出るとあたゝかい影がながう枯草に　早春のさゞなみが発電所の石垣に・投げて下さつた一銭銅貨の寒い音だつた　春もまだ寒い街角で売る猪の肉で　きたない水がちろ／＼と寒い波の中へ（御裳川）　そこらを船がいつたりきたり岩に注連をかざり（壇ノ

浦）・鴎が舞へば松四五本の春風（巌流島）・あの娘がかあいさうでと日向はぬくいおばあさんたち・春めいた風で牛肉豚肉馬肉鶏肉・こんなに食べる物が食べる人々が・みんな生きねばならない市場が寒うて・背中流してくれる手がをさなうてぬくうて　　　星城子居即事・冬木をくゞつて郵便やさんがうらから・かけごゑかけてかつぎあげるは先祖代々の墓・よい道がよい建物へ、焼場です

二月二十一日

春光うらゝかである、満ち足りた気持である。星城子君我儘不出勤、自から称して禄盗人といふ、いつしよにぶらぶら歩いて到津遊園鑑賞。動物園はおもしろい、獅子、虎、熊、孔雀、兎、鶴、等々には好感が持てるが、狐、狸、猿、鸚鵡、等々には好感が持てない、殊に狐は悪感をよぶばかりだ。七面鳥はおしやれ、鳩はさびしがりや、鶴はブルヂヨア、いやさインテリゲンチヤ、鸚鵡はどうした、考深さうに首をかしげてゐる！総じて、獣よりも鳥が好き、人間は人間にヨリ遠いものほど反感をうすらげますね。星城子なげくところの犬の墓を見た。顔は生活気分を表象する、私の顔の変化についての、星城子君の言説は首肯する。ちよつと四有三居訪問、「一即二」の額がまづ眼についた、井師がよく出てゐる。それから小城さんの白雲閣を襲ふ、赤ん坊が生れてゐる、おめでたい、主人がすゝめられるまゝに、二階で飲む、牛肉がうまいやうに芋がらもうまかつた、酒のうまさは握飯のそれに匹敵した。星城子君は飲めないから飲まない、山頭火君は飲めるから飲む、などゝ、小城さん思つたかどうだか。……暮れてお暇乞する、次良さんの事を話しながら戻つた、二郎さんは不幸な人だ、彼の善良と不幸とは正比例してゐる。読書するつもりだつたが、しぜん眼があけてゐられなくなつた。

　　到津遊園・人影ちらほらとあたゝかく獅子も虎もねむつてゐる　　　白雲閣即事二句・お産かるかつたよかつた青木の実・訪ねて逢へて赤ん坊生れてゐた

二月廿二日

曇、何か降つてきさうだ。九時、星城子さんは役所へ、私はアスファルトの街道へ。星城子さんは好きだけれど、八幡は好かない。小倉

の寝十方花庵を訪ねる、庵主不在、奥様と話しながらよばれる、酒は飲んでも飯は食べない、お嬢さんはホガラカで、しごくよろしい。降りだした、濡れて戸畑へ、そして若松へ。病院で入雲洞君に逢ふ、退けるまで待つて、また戸畑へ、入雲洞居へ、あつい風呂はうれしかつた、酒も肴もおいしかつた、奥さんはお留守で、すべてが主人みづからの心づくしだ。病院は病院くさい、それでよいのだらうけれど、まめでたつしやな私は嫌だ。食べられるだけ食べて、いや、そのまへに飲めるだけ飲んで、さてこれから寝られるだけ寝ればよい。今日は風が吹いた、風は禁物だ、ルンペンのからだへ吹きつける風のさびしさよ。飲んで食べてから、入雲洞も出かけてゆく、奥さんが手伝してゐる近所の婚礼へ、――私はまづ留守番といつた体、ほろ酔で漫読、よろしうございます。

　・みちはうねつてのぼつてゆく春の山・これでも住める橋下の小屋の火が燃える・放送塔を目じるしにたづねあてた風のなか・さてどちらへ行かう風のふく・招かれない客でお留守でラヂオは浪花節・さんざ濡れてきた旅の法衣をしぼる　　　若松病院・病人かろ／″＼とヱレ※」に「マヽ」の注記］ーターがはこんでいつた　　　戸畑から若松へ、入雲洞君に・あんたとわたしをつないで雨ふる渡船　宿直室も灯されて裸体像などが・待たされてゐる水音の暮れてゆく・宵月のポストはあつた旅のたよりを・旅のたよりも塗りかへてあるポスト

　　二月二十三日

　晴、すこし風はつめたいが春がきてゐることに間違はない。もつたいなくも朝酒頂戴。入君は出勤、私は足にまかせて街をあるきまはる、やつぱりこゝもたべものやが多い、工場町、漁港町はどこでもさうだが。入雲洞君の喜捨で理髪する、身心さつぱりして、先日来の欝屈がほぐれた。昨日も今日も（多分明日もまた）行乞は駄目、当分行乞なんか出来さうにない、やつぱり私はまだ平静をとりかへしてゐない。午後は読書、こんなに我儘ではいけないとも思ひ、これだけ他の供養をうけてはすまないとは思ふのだが。――夜は句会、とほる君、箕三楼君、入雲洞君、そして私、つゝましい、たのしい会合だつた。よく寝られたが、よく夢も見た、その夢は苦しい夢だつた、夢は妄想執着のあらはれだ、夢を見ないやうになりたいものだ。

戸畑漁港（一）　金バス銀バス渡船も旗立てゝ春風に（廿三日奉祝）・海から風はまだ寒い大福餅をならべ・クレーンおもむろに春がきてゐる空　やたらに汽笛が鳴るとつしりと舫つた汽船・今日がはじまる七輪の石炭が燃えさかる・バツト吸ひきれば重い貨物で　朝から安来節で裏は鉄工所　　戸畑漁港（二）・日向はぬくうて子供があつまる廻転饅頭・仕事すましてぶらさげてもどる大刀魚のひかる・枯葦に汐みちてくる何んにもゐない・こんなに帆柱が、春風の、出る船入る船　長屋の真昼はひつそりとホウホケキヨ　もうあたゝかい砂の捨炭ひらふことも

二月廿四日

晴、朝の寒さは昼の暖かさとなる。入雲洞君よ、たいへんお世話になりました、何から何までありがたう。山越して八幡へ、のんびりぼんやりの気分で市街見物。小山の枯草にすわつて古い握飯を食べる。製鉄所の煙突と煤煙とを鑑賞する。四有三居訪問、番人に誰何されたり、押売と間違へられたりした、それも旅の一興、いや、私にはふさはしい出来事だ。からいおひやをよばれる、ペハアミントをよばれる、いやはや。夜は光の会、会者十数名、なか／＼盛況だつた。黎々火君と共に星城子居に泊る、星城子君の友情が骨身にしみとほる。

・こんな水にも春の金魚が遊んでゐる・かすんでけぶつて山の街にも日の丸へんぽん・今日の乞ふことはやすくておいしい汁粉屋の角まで・おぢいさんの髯のながさをおもちやにして日向ぼつこ・食べものうつくしうならべ煤がふる　白い煙が黒い煙が煙突に煙突

（八幡は製鉄所を持つ都会だけに、くろがねせんべいといふのがある、鉄町といふ町名があつた）

二月廿五日

朝からかしわで酒の贅沢三昧。黎々火君とは駅で別れる、君は上りで門司へ、私は下りで糸田へ。一時にはもう緑平居に落ちついて、湯豆腐で一杯二杯三杯だつた。緑平老はまことに君子人なるかな。急に左半身不髄の症状に襲はれた、積悪の報いいたしかたなし、飲みすぎ食ひすぎはつゝしむべし。

曇れば寒いボタ山ふたつ・逢うてうれしくボタ山の月がある

緑平居ふきのとう、焼いてもらふ雀のお宿、雀が泊りにくる泰山木、雀の好きな木夕雀にぎやかなり、雀と仲よし

二月廿六日

左手が利かない、身体が何だか動かなくなりさうだ、急いで帰庵することにする、八時出立、直方までは歩いた、それから折尾まで汽車、八幡まで歩く、門司まで汽車、下関へ汽船、それから黎々火居まで歩いて一泊、黎々火君の純情にうたれる。私もいよ／＼本格的癡人になりさうだ、本格的俳句が出来るかも知れない。ヒダリはかなはなくても飲むことは飲める、水はなか／＼酒にならない、酒は水になりやすいが。酒と心中したら本望だ。

・けさはおわかれの太陽がボタ山のむかうから（緑平居）・よぼ／＼のからだとなり水をさかのぼる・驢馬にひかせてゆくよ春風・枯草ふかく水をわたり、そしてあるく・また逢へようボタ山の月が晴れてきた

遠賀川風景枯葦雲雀の歌放牧の牛の三々五々霞うら／＼

あされば何かあるらしい鶏は鶏どち　焼芋やけます紙芝居がはじまります　旅のつかれのほつかりと夕月・枯草の日向見つけて昨日の握飯　病めばをかしな夢をみた夜明けの風が吹きだした

二月廿七日

夜来の雨がはれて、何となく春だ。七時の汽車に乗る、九時帰庵、其中一人のうれしさよ。さつそく樹明君を訪問する、そして方々の借銭を払へるだけ払うてまはる。酒を食べ鮨を食べる、酔うて寝る。樹明君来訪、積る話は尽きなかつた。

・こんなにつかれて日照雨ふる・うらからはいればふきのとう・ほろにがいのも春くさいふきのとうですね（緑平居）　誰も来ない月はさせどもふくらうなけど　利かなくなつた手は投げだしておく日向げそりと暮れて年とつた

二月廿八日

片手の生活、むしろ半分の生活がはじまる。不自由を常とおもへば不足なし、手が二本あつては私には十分すぎるのかも知れない、一つあれば万事足る生活がよろしい。街へ米買ひに、――食べずにはゐられないことは困つたことだ。身辺整理、――遺書も認めておかう。樹明君が病状見舞に来てくれる、酒と下物とを持つて。死を待つ心、おちついて死にたい。

鳴きつゞけて豚も寒い日・何やら来て何やら食べる夜のながいこと　もう一杯、柄杓どの（酔ざめに）・月がぱち／＼お風呂がわいた　夜ふかうして白湯のあまさよ　　　追加　乞ひあるく道がつづいて春めいてきた

三月一日

曇つて寒い、井上さんから貰つてきたトンビのありがたさよ。新若布がおいしい、私には菜食がよろしい。何事もなし。

三月二日

晴、春寒、不自由不愉快。我儘な猟人が朝からパン／＼うつ、気の毒な小鳥たちよ。何事も積悪の報い、甘受いたしませう。孤独、沈黙、句作。めづらしや女性来訪、Ｆ屋のおばさんとちいちやん、水仙もらひに寄つたのです、紅茶を御馳走する。夜、冬村君来庵、お土産として水餅どつさり。つゞいて樹明来、おとなしくすぐ帰宅。さらにＴさんがやつてくる、酒を持つて、――おそかりし、おそかりし。月のあかるさ、一人のよろしさを味ふ。

・風が明けてくる梅は満開　いつもつながれてほえる犬へ春の雪　待つても来ない木の葉がさわがしいゆふべとなつた・ちかみちは夕ざれの落葉ふめば鳴る　さむいゆふべで、もどるほかないわたくしで（樹明君に）　犬がほえる鳥のなく草は枯れてゐる・水底ふかくも暮れのこる木の枯れてゐる

三月三日

さむいけれどうらゝかである、餅と酒と豆腐と。樹明君を往訪して、帰庵して、御馳走をこしらへて待つ、待ちきれなくて街をあるく、帰つてみれば、樹明君はちやんと来てゐて、御馳走を食べてゐ

る、さしつさゝれつ、とろとろとなる、街へ出てどろ／＼となつて別れる。

・酔ひざめの春の霜・藪かげほつと水仙が咲いてゐるのも　みんな酔うてシクラメンの赤いの白いの・風がふくひとりゆく山に入るみちで・すげなくかへしたが、うしろすがたが、春の雪ふる（樹明に）・洗つても年とつた手のよごれ・心あらためて土を掘る

三月四日

樹明君が朝も晩もやつてきて、昨夜の酔態をくやしがる。雪がとけて風がふく、さみしいな、やりきれないな。

三月五日

晴れたり曇つたり、今日も雪だ。形影問答、年はとりたくないものだのう、さうだのう。……風呂にはいる、身心やゝ解ける。夜は宿直室に樹明君を訪ねて御馳走になる、そして泊る。

三月六日

雪、雪、寒い、寒い。母の祥月命日、涙なしには母の事は考へられない。終日独居。友はありがたいかな、私は親子肉縁のゆかりはうすいが、友のよしみはあつい、うれしいかな。忘れられた酒、それを台所の片隅から見出した、いつこゝにしまつてゐたのか、すつかり忘れてゐた、老を感じた、その少量の酒をすゝりながら。……陶然として、悠然として酔ふた、そして寝た、寝た、宵の七時から朝の七時まで寝つゞけた。

・雪あした、すこしおくれて郵便やさん最初の足跡つけて来た・死ねる薬はふところにある日向ぼつこ・水のんで寝てをれば鴉なく・売れない植木のハツ手の花・寒い雨がやぶれた心臓の音

三月七日

晴、春風しゆう／＼だつたが、午後は曇つて降つた、しかし昨日の雪のとけるといつしよに冬はいつてしまつたらしい。草が萠えだした、虫も這ひだした、私も歩きださう。一片の音信が、彼と彼女と私とをして泣かしたり笑はしたりする、どうにもならない私たちではあ

るが。街へ出て、米すこしばかり手に入れる、餅ばかりでは困る。心臓がわるい、心臓はいのちだ、多分、それは私にとつて致命的なものだらう。どうせ畳の上では往生のできない山頭火ですね、と私は時々自問自答する、それが私の性情で、そして私の宿命かも知れない！

・晴れて風ふく春がやつてきた風で・日がのぼれば見わたせばどの木も春のしづくして・むのむしもしづくする春がきたぞな・木の実ころ／＼ころげてくる足もと・豚の子のなくも春風の小屋で・まがればお地蔵さまのたんぽぽさいた

三月八日

降つても照つても、晴れても曇つても、風が吹いても、春が来てゐることに間違はない。日がさすと、雲雀が出てきてあるいてゐる、私も出てあるく。緑平老、春風春水、一時到！新酒二合の元気で、街へ山へ。酔はねばさびしいし、酔へばこまるし。歩いてゐると、足がしぜんに山の方へ向く、私は本能的に山が好きだ。

・遠山の雪のひかるや旅立つとする・影も春めいた草鞋をはきかへる・春がきてゐる土を掘る墓穴　これだけの質草はあつてうどんと酒・みちはいつしか咲いてゐるものがちらほら

三月九日

春光うらゝかなり、陽はあたゝかく風はさむい。けふも餅を焼いては食べた、まだ米はあるけれど。風よふくな、鴉よなくな。電燈屋さんが二人連れでやつてきたが、お気の毒様、庵には電燈もありません。藪椿を活ける、水仙もよかつたが椿もよいな。はじめて蛙を見た、蛙よ、うれしいか、とんでゐる。やぶれかけた心臓が私に自然的節酒ができるやうにしてくれました。

風ふく日の餅がふくれあがり・水田も春の目高なら泳いでゐる・眼は見えないでも孫とは遊べるおばあさんの日なた・もう春風の蛙がいつぴきとんできた・夕ざれはひそかに一人を寝せてをく・山から暮れておもたく背負うてもどる

三月十日

晴、なか／＼冷たい、霜がふつてゐる。あれやこれやと東上準備、なか／＼忙しい。また山の方へ。——独酌二本、対酌三本、酒は味ふべし、たゞ／＼味ふべし。夕方、樹明君来庵、ハムと餅を持つて、——酒は買ひに行く、ハムはおいしかつた、餅はおいしいよりも腹をふくらす。……樹明君おとなしく帰る、私は街へ出て歩く。今夜は多少の性慾を感じた、それがあたりまへだ、人間は人間でよろしい、枯木寒巌になつては詰らない。おそくなつて帰庵、見ると机上に酒壱本と海苔一袋とが置いてある、Ｔ子さんに間違はない、だいぶ待つたらしい形跡がある、私も樹明君もゐなくて、かへつてよかつた、よかつた。

・日かげりげそりと年をとり・そこらに冬がのこつてゐる千両万両・地つきほがらかな春がうたひます・ゆふべはゆふべの鐘が鳴る山はおだやかで・鴉があるいてゐる萠えだした草

三月十一日

晴、晴、朝酒はよいかな、よいかな。街へ、飲みすぎ食べすぎのたたりてきめん、身心がだるい、熱い溢れる湯にはいりたくなり湯田へ行かうかとも思つたが止めにして戻る。水菜一把四株四銭也。酒もある、肴もある、そして餅もある、其中一人春十分。酒ぼいとう！　おもしろい方言ではないか。疾病の福音、事々是好事。花時風雨多し、春めいて花が咲きはじめる、曇が雨となり風となつた。

・枯枝ひらふにもう芽ぶく木の夕あかり・春の夜の街の湯の湧くところまで・つゝましく大根煮る火のよう燃える　曇り日のひたきしきりに啼いて暮れる

三月十二日

ぬくい雨、さう／″＼しい風、ひとりしづかに読書。記念写真帖について、大山君、瀧口君の友情こまやかなるにうたれた、私はその友情に値しない友人だ、省みて恥づかしかつた。熱い湯にはいつて身を洗ひ心を洗つた。待てども樹明来らず、私一人で飲んで食べて、そして寝た、そこへやつてきた樹明、そして私、何だか二人の気持がちぐはぐで、しつくりしなかつた。

風のなか酔うて寝てゐる一人・木の芽、いつもつながれてほえるほかない犬で・つながれて寝てゐる犬へころげる木の実・春風のはろかなるかな鉢の子を・からりと晴れたる旅の法衣の腰からげ

三月十三日

折々降るが、ぬくいので何よりだ。思ひ立つて山口へゆく、椹野川風景もわるくない、桜冬木、白梅紅梅、枯葦、枯草、ことに川ぞひの旧道は自動車が通らないのがうれしい。蕎麦は敦盛、味は義経――このビラには新味はないが効果はあらう。温泉はよいなあ、千人風呂は現世浄土だ。鰯の卯の花※」に「マヽ」の注記］はうまかつた、一つ三銭、三つ食べた。秤り炭二十銭、線香十銭、これが今日出山の目的の買物だつた。定食二十銭の（これはたしかに安い）一杯機嫌で映画館にはいつた、何年ぶりのシネマ見物だらう、今日初めてトーキーを聴いたのだから、私もずゐぶん時代おくれだ。ぬかるみを五里ぐらゐ歩いたらう、くたぶれた、帰庵したのは一時頃、それからお茶をわかして。……手足多少の不自由、何だか、からだがもつれるやうな。

・生きてゐるもののあはれがぬかるみのなか・いつも馬がつないである柳萠えはじめた・猫柳どうにかかうにか暮らせるけれど　ぬくい雨でうつてもついても歩かない牛の仔で・焼芋やいて暮らせて春めいた・監獄の塀たか／″＼と春の雨ふる・病院の午後は紅梅の花さかり・ずんぶりと湯のあつくてあふれる（湯田温泉）・早春、ふけてもどればかすかな水音・春めけば知らない小鳥のきておこす・あたゝかい雨の、猿のたはむれ見てゐることも

三月十四日

曇、白い小さいものがちら／＼する。老遍路さんがやつてきた、珍客々々。身辺整理。しづかに読書してゐると、若い女の足音がちかづいてきた、女人禁制ではないが、珍らしいなと思つてゐると、彼女はＦ屋のふうちやんだつた、近所まで掛取りにきたので、ちよつと寄つて見たのだといふ、到来の紅茶を御馳走した、紅茶はよかつたらう！夕方、約の如く敬治君が一升さげて来てくれた、間もなく樹明君が牛肉をさげて来た、久しぶりに三人で飲む、そして例の如くとろ／＼になり、街に出かけてどろ／＼になつて戻つた。

・雪ふりかゝる二人のなかのよいことは・雪がふる人を見送る雪がふる・この道しかない春の雪ふる・ふる雪の、すぐ解ける雪のアスファルトで・かげもいつしよにあるく・けふはこゝまでの草鞋をぬぐ・椿咲きつゞいて落ちつく

三月十五日

雪が降りしきる、敬君を駅まで見送る、一杯やる、雪見酒といつてもよい。酔うて労れてぐつすりと寝た。夜は読書。

三月十六日

雪、しづかな雪であり、しずかな私だつた。おとなしく新酒一本、それで沢山。

・うれしいたよりもかなしいたよりも春の雪ふる・けふも木を伐る音がしづかな山のいろ

三月十七日

晴、風、春だ。旅立つ用意をする。――蓬摘む女の姿、春らしいな。

三月十八日

晴、今日からお彼岸。なしたい事、なすべき事、なさずにはゐられない事。早く旅立ちたい。――樹明来、同道して散歩、そしていら／＼どろ／＼。

春の水をさかのぼる笑へば金歯が見える春風

三月十九日

花ぐもりだ、身心倦怠。Ｔ子さん来庵、愚痴と泣言とをこぼすために（それを聞く私は辛いかな）。夜はしんみり読書。

三月二十日

倦怠、倦怠、春、春。樹明君、そしてＴ子さんが来た、例によつて例の如し。

第26章
其中日記　06 (新字旧仮名)

旅日記

□東行記（友と遊ぶ）

□水を味ふ（道中記）

□病床雑記（飯田入院）

□帰庵独臥（雑感）

三月廿一日　（東行記）

春季皇霊祭、お彼岸の中日、風ふく日。樹明君から酒を寄越す、Ｔ子さんが下物を持つてくる、やがて樹明君もやつてくる。……出立の因縁が熟し時節が到来した、私は出立しなければならない、いや、出立せずにはゐられなくなつたのだ。酔歩まんさんとして出かける、岐陽君を訪ねる、酒、さらに呂竹さんを訪ねる、そしてＦをＳを訪ねて酒。とう／＼出立の時間が経過してしまつたので、庵に戻つて、さらに一夜の名残を惜しんだ。

三月廿二日　徳山から室積へ。

晴、朝早く駅へかけつけて出立。物みなよかれ、人みな幸なれ。八時から一時まで白船居、おちついてしんみりと別盃を酌んだ、身心にしみ入る酒だつた。駅の芽柳を印象ふかく味はつた。白船君の歯がほろりと抜けた、私の歯はすでに抜けてしまつてゐる。汽車からバスで室積へ、五時から十時まで、大前さん水田さんと飲みながら話す。十二時の汽船（商船愛媛丸）で宇品へ、春雨の海上の別離だ。船中雑然、日本人鮮人、男女、老人子供、酒、菓子、果実、——私は寝るよ

り外なかつた。

　庵はこのまゝ萠えだした草にまかさう

　そして私は出て行く、山を観るために、水を味ふために、自己の真実を俳句として打出するために。

　・ふりかへる椿が赤い

　其中庵よ、其中庵よ。

　　わかれて春の夜の長い橋で　木の実すつかり小鳥に食べられて木の芽・こんやはこゝで涸れてゐる水

　　三月廿三日

　おくれて九時ちかくなつて宇品着、会社に黙壺君を訪ねる、不在、さらに局に澄太君を訪ね、澄太居に落ちつく、夫妻の温情を今更のやうに感じる。樹明、白船、せい二、清恵、澄太、等、等、等、春風いつもしゆう／＼だ、ぬくい／＼うれしい／＼だ。夜は親しい集り、黙壺、後藤、池田、蓮田の諸君。近来にない気持のよい酒だつた、ぐつすりと眠れた。

　　三月廿四日

　おこされるまで睡つてゐた、夢は旅のそれだつた。春雨、もう旅愁を覚える、どこへいつてもさびしいおもひは消えない。……澄太君が描いてくれた旅のコースは原稿紙で七枚、それを見てゐると、前途千里のおもひにうたれる、よろしい、歩きたいだけ歩けるだけ歩かう。青天平歩人――清水さんの詩の一句である。しぜんに心がしづみこむ、捨てろ、捨てろ、捨てきらないからだ。放下着――何と意味の深い言葉だらう。澄太君の友情、いや友情といつてはいひつくせない友情以上のものが身心にしみる。……

　夕方から、澄太君夫妻と共に黙壺居の客となる、みんないつしよに支那料理をよばれる、うまかつた、鶩の丸煮、鯉の丸煮、等、等、等（わざ／＼支那料理人をよんで、家族一同食べたのは嬉しい）。澄太居も黙壺居もあたゝかい、白船居も緑平居も、そして黎々火居も、星城子居も。……私だけ泊る。

　　春の波の照つたり曇つたりするこゝろ・菜の花咲いた旅人として　日ざしうらゝなどこかで大砲が鳴る（澄太居）・枯草あたゝかうつもる話がなんぼでも

　　三月廿五日

　早く起きる、八時の汽船に乗り込まなければならない。こゝでも黙壺君の友情以上のものが身心にしみる、私は私がそれに値しないことを痛感する。……宇品から三原丸に乗る、海港風景、別離情調、旅情を覚える。法衣姿の私、隣席にスマートな若い洋装の娘さん、――時代の距離いくばくぞ。

　三原丸船中、――

　天気予報を裏切つて珍らしい凪、ラヂオもある、ゆつたりとして、人間は所詮、食べることゝ寝ることゝの動物か、高等学校の学生さんと漫談、瀬戸内海はおだやか、甲板は大衆的に、兎の子を持つて乗つた男女島から島へ、酒から酒へ！

　船中所見、――

　港について売子の売声、インチキ賭博、上陸して乗りおくれた人、修学旅行の中学生、私も追憶の感慨にふける、春風の甲板を遊歩する、団参連中のうるさいことは、船から陸へ、水から土へ、

　四時神戸上陸、待合室で六時半まで。自動車、自動車、自動車がうづまいてゐました。

　・兵営、柳が柳へ芽ぶいてゐる・旅も何となくさびしい花の咲いてゐる　しつとりと降りだして春雨らしい旅で　お寺の銀杏も芽ぐんでしんかん・そこゝ播いて食べるほどはある菜葉・水に影あれば春めいて・春寒い朝の水をわたる・船窓から二つ、をとことをなごの顔である　なんぼでも荷物のみこむやうらゝかな船　島にも家が墓が見える春風　銭と銭入と貰つて春風の旅から旅へ（黙壺君に）

　　三月廿六日

　歩いて兵庫へ、めいろ居へ。神戸は国際都市であることに間違はなかつた。ビルデイングにビルデイング、電車に自動車、東洋人に西洋

人、ブルヂヨアにプロレタリヤ。……めいろ居はめいろ君のやうに、めいろ君が営んでゐた、意外だつたのは、ピヤノのあつたこと。——わざ／＼出迎へて下さつたのに、出迎への甲斐がなくて、めいろ君にも詩外楼にもすまなかつた、それもかへつて悪くなかつたが。

　　ぽつかり島が、島も春風　島はいたゞきまで菜ばたけ麦ばたけ・ここが船長室で、シクラメンの赤いの白いの（三原丸）

　　四月十四日　坂下から清内路へ。

　曇、やがて晴、そゞろ寒い、春がおそい今年で、さらに春がおそいこのあたりで。

　　四月十五日　清内路から飯田町へ。

　　四月十五日　蛙堂居。　〃　十六日　〃　十七日　〃　十八日　〃　十九日　〃　廿日　四月廿一日　川島病院。　〃　廿二日　〃　廿三日　〃　廿四日　〃　廿五日　〃　廿六日　〃　廿七日　四月廿八日

　大死一番　天地一枚

　莫妄想

　無常迅速時不待人光陰可惜慎勿放逸

　裁断前念後念

　大事了畢身心脱落断命根己平究明大我爆発三昧発得

　天地同根　万物一体　　□山はしづかにして性を養ひ、水は動いて情をなぐさむ諸行無常、無常迅速、諸法常示寂滅相、眼前景致、口頭語。

　　四月廿九日

　四月廿九日、暮れて八時過ぎ、やうやく小郡に着いた、いろ／＼の都合で時間がおくれたから、樹明君も出迎へてゐない、労れた足をひきずつて、弱いからだを歩かせて、庵に辿りついた、夜目にも雑草風景のすばらしさが見える。……風鈴が鳴る、梟が啼く、やれ／＼戻つ

た、戻つた、風は吹いてもさびしうない、一人でも気楽だ、身心がやつと落ちついた。すぐ寝床をのべて寝た、ぐつすりとゆつくりと寝た！

　ふるさとはすつかり葉桜のまぶしさ・やつと戻つてきてうちの水音・わらやしづくするうちにもどつてる・雑草、気永日永に寝てゐませう（病中）

　四月三十日

　久しぶりによようねむれた、山頭火は其中庵でなければ落ちつけないのだ、こゝならば生死去来がおのづからにして生死去来だ、ありがたし、かたじけなし。降つたり照つたり、雑草、雑草。起きるより掃除（樹明君が掃除してくれてはゐたが）、数十日間の塵を払ふ。学校に樹明君を訪ねる、君は私が途中、どこかに下車したと思つて、昨日も白船君と交渉したさうな、感謝々々。街へ出かけて買物、米、炭、味噌、等々（うれしいことにはそれらを買ふだけのゲルトは残つてゐた）。御飯を炊き味噌汁を拵らへて、ゆう／＼と食べる、あまり食べられないけれどおいしかつた。つかれた、つかれた、……うれしい、うれしい。とんぼがとまる、てふてふがとまる、……雲雀がなく蛙がとぶ、……たんぽぽ、たんぽぽ、きんぽうげ、きんぽうげ。……柿若葉がうつくしい、食べたらおいしからう！方々へ無事帰庵のハガキを書く、身心がぼーつとしてまとまらない、気永日永に養生する外ない。午後、樹明君来庵、酒と肉とを持つて、――もう酒が飲めるのだからありがたい。樹明君を送つてそこらまで、何と赤い月がのぼつた。蛙のコーラス、しづかな一人としてゆうぜんと月を観る。今夜はすこし寝苦しかつた、歩きすぎたからだらう、飲みすぎたからでもあらうよ。

　・いかにぺんぺん草のひよろながく実をむすんだ・藪かげ藪蘭のひらいてはしぼみ　みんな去んでしまへば赤い月　　　改作二句　乞ひあるく道がつゞいて春めいてきた　藪かげほつと藪蘭の咲いてゐた　木の実ころころつながれてゐる犬へ　まんぢゆう、ふるさとから子が持つてきてくれた　雑草やはつらつとして踏みわける

　五月一日

早く起きた、うす寒い、鐘の音、小鳥の唄、すが／＼しくてせい／″＼する。雑草を壺に投げ※す、いゝなあ。身辺整理、その一つとして郵便局へ投函に。私の身心はやぶれてゐるけれどからりとしてゐる、胸中何とはなしに廓落たるものを感じる。北国はまだ春であつたのに、こちらはもう、麦の穂が出揃うて菜種が咲き揃うて、さすがに南国だ。ありがたいたより、今日は作郎老からのそれ。食べることは食べるが、味へない。△誰か通知したと見えて、健が国森君といつしよにやつてくるのにでくはした、二人連れ立つて戻る、何年ぶりの対面だらう、親子らしく感じられないで、若い友達と話してゐるやうだつたが、酒や鑵詰や果実や何や彼や買うてくれた時はさすがにオヤヂニコニコだつた（庵には寝具の用意がないので、事情報告かた／″＼、夕方からＳ子の家へいつてもらつた、健よ、平安であれ）。午後、樹明君がまた鈴木周二君と同行して来庵（周二君は徴兵検査で帰省中、私の帰庵を知つて見舞はれたのである）、飲む食べる饒舌る、暮れて駅まで送る。今日はよい日だつた、よい夜でもあつた。

・肌に湿布がぴつたりと生きてゐる五月　草からとんぼがつるみとんぼで　五月、いつもつながれて犬は吠えるばかりで　こんなところに筍がこんなに大きく・おててをふつておいでもできますさつきばれ・雑草につつまれて弱い心臓で　　　病臥雑詠　寝床から柿の若葉のかゞやく空を　柿若葉、もう血痰ではなくなつた　病んでしづかな白い花のちる　蜂がにぎやかな山椒の花かよ・ぶらぶらあるけるやうになつて葱坊主・あけはなつやまづ風鈴の鳴る・山ゆけば山のとんぼがきてとまり・あれもこれもほうれん草も咲いてゐる（帰庵）

五月二日

五時を待ちかねて起床、晴、五月の朝はよいかな。子の事を考へるともなしに考へてゐる、私はやつぱり父だ！うれしいたよりがいろ／＼。病人らしくないといつて樹明君に叱られるほど、私は不思議な病人だ、生きのこつたといふよりも死にそこなつた山頭火か。ちよつと街まで出かけても労れる、間違なく病人だ。うどん二つ五銭、これが今日の昼食。春蝉——松蝉——初夏だ。天地人の悠久を感じる。湿布する度に、ヱキシカを塗る毎に入雲洞をおもふ。夕方、敬坊来、約の如く、樹明は手のひけないことがあるので二人だけでＦへ行きうまい

ものをどつさりたべて別れる、彼は東京へ、私は庵へ（彼は私と東京で出逢ふべく、無理に出張さしてもらつたのだが、私が中途で急に帰庵したので、がつかりしてゐた）。しづかで、しづかで、そして、しづかで。

　　　病臥雑詠蛙とほく暗い風が吹きだした病めば寝ざめがちなる蛙の合唱五月の空をまうへに感じつつ寝床死にそこなつたが雑草の真実風は五月の寝床をふきぬける

　　五月三日

　五月の空は野は何ともいへない。湿布とりかへるときなどは、もう一つ手がほしいな。ぬかなければならない雑草だけぬく、衰弱した体力は雑草のそれにも及ばなかつた。ありがたいたより（四有三さんから、桂子さんから）。ちよつと街まで、たゞし、さうらうとして！五月をはつきり感覚する。歩けば汗ばむほどの暑さ、珍らしや雀どの、来たか。おまんまにたまごをかけてたべる――老祖母のこと、母の自殺などが胸のいたいほどおもひだされる。……友人からの送金で、ふとんを買ふ、それを冬村君に持つて来て貰ふ（夜、自転車で）。

　　ねむれない夜の百足が這うてきた　這うてきて殺された虫の夜がふける　日だまりの牛の乳房　草の青さで牛をあそばせてゆふべ・てふてふつるまうとするくもり　暮れてふるさとのぬかるみをさまよふ

　　五月四日

　放下着、放下着。やつぱり酒はうまい、雑草はうつくしい。山口まで、湯田で一浴、廿日間の垢をおとす、おとなしく帰庵、ふとんのしきふをかゝへて（昨日から拾壱円ばかり買つた）。山のみどり、鯉のぼりのへんぽん、蛙げろ／＼。粉末松葉を飲みつゝ、源三郎さんをおもふ。

　・向きあうて湯のあふるゝを（湯田温泉で澄太君と）　風はうつろの、おちつけない若葉も　やつと家が見えだした道でさかなのあたま・おもひではそれからそれへ蕗をむぎつつ　たどんも一つで事足るすべて

　　五月五日

けさも早起、晴れて端午だ。身辺整理、きれいさつぱり、針の穴に糸が通らないのはさびしかつた。さみしくなるとうぐひすぶゑ（叡山土産の一つが残つてゐた）をふく、ずゐぶんヘタクソ鶯だね、そこが山頭火だよ。放下着、死生の外に。——Ｔ子さん来庵、白米を持つてきてくれたのはありがたいが。寝苦しかつた、肺炎なんて、凡そ私にはふさはしくない。

　雑草そのままに咲いた咲いた　おもさは雨の花のあかさ　けふも雨ふる病みほうけたる爪をきらう・雨のゆふべの人がきたよな枯木であつたか・どうやらあるけて見あげる雲が初夏

　五月六日

晴、朝は郵便を待つ、これあるがゆえの毎日でもある。樹明来、胡瓜で一杯、さらに鯛で一杯、鯛は近来の美味だつた、さしみ、うしほ、そして焼いて、たらふく頂戴した、うまかつた、うまかつた。寝苦しい、放下着。

　五月七日

まさに五月だ。同朋園の田中さんから、たくさん薬を送つてきた、ありがたし、さつそく服用する。街で買物、——洗濯盥、たどん、火鉢、鎌、等々。山へ枯枝拾ひに、それから風呂へ。△粟餅屋の小父さん、彼とはもう三度目の邂逅だ、私は彼をよく記憶してゐるが、彼は私を覚えてゐないらしい（私がもう乞食坊主の服装をしてゐないから）、街角の彼等から一包を買うて追憶に耽つた。健が持つてきてくれた饅頭もうまかつたがカステイラもおいしいなあ（ぬけさうな歯が少々邪魔になる）。今夜はとう／＼一睡もできなかつた、終夜読書した。

　五月八日

曇、風（風はさみしくてやりきれない）。弱い身心となつたものかな、あゝ。

・山はひつそり暮れそめた霧のたちのぼる・サイレンながう鳴りわたる今日のをはりの・病みて一人の朝となり夕となる青葉・雑草咲くや捨つべきものは捨てゝしまうて・草や木や死にそこなうたわたしな

れども・五月の空の晴れて風吹く人間はなやむ

五月九日

曇、昨夜は眠れた、何よりも睡眠である。初夏の朝、よいたより。ちよつと街へ出て戻ると、誰やら来てゐる、思ひがけなく澄太君だ、酒と豆腐とを持つて。ちび／＼やつてゐるところへ、呂竹さんが見舞に来られた、これまた茶を持つて。さらに樹明来、Ｔ子さん来庵。風が吹いて落ちつけない、風には困る。澄太来のよろこびを湯田まで延長する、よい湯、よい酒、よい飯、よい話、よい別れでもあつた、澄太君ほんたうありがたう、ありがたう。夕暮、帰庵すると、飲みつゝある樹明を発見する、彼はまことに酒好きだ、少々酒に飲まれる方だが。労れた、よい意味で、——今夜はよくねむれるだらうと喜んでゐると、Ｔ子再来、詰らない事を話して時間を空しくする、しめやかな雨となつたが寝苦しかつた、困つた。

・生きて戻つて五月の太陽・けさは水音の、よいことがありさうな　葱坊主、わたしにもうれしいことがある　湯あがりの、かきつばたまぶしいな（病後）・竹の葉のうごくともなくしづかなり・土は水はあかるく種をおろしたところ（苗代）

五月十日

雨、風、朝酒が残つてゐた、しめやかな一日だつた。

・いつまで生きることのホヤをみがくこと・ひとりをれば蟻のみちつづいてくる・草の青さできりぎりすもう生れてゐたか・胡瓜植ゑるより胡瓜の虫が暑い太陽　風ふくゆふべのたどんで飯たく（追加）

五月十一日

雨、五時には起きておさんどんの仕事。地下足袋はいて街へ、びつしよりになる。放下着。うろ／＼する油虫をたゝきつぶしたほど、いら／＼してねむれなかつた。

五月十二日

まだ降つてゐる、どうやら霽れさうではあるが。陽が照りだした、照るとなか／＼暑い。ヘビ、トカゲ、クモ、いろ／＼さま／″＼のもの

がうごいてゐる、私自身もぢつとしてはゐられないやうに。鶯笛はなか／＼よろしい、ピーピツ、ピヨピヨピーツ。畑仕事、やうやく一畝だけ耕して大根を播いた。春は逝く、夏近し、いよ／＼晴れた、苗代作りが初まつた、それは感じのよい仕事だ。風呂にはいり豆腐をたべた。酒は内から、湯は外から、どちらもちよいと一杯、などゝ考へてゐたら樹明来庵、酒なかるべからずと酒を買つた、すこし酔うて、同道してＦ家へ押しかけて御馳走になる、それからまたＳで飲む。樹明は泥酔して行方不明になつてしまつた、私は酔へないで戻つて寝た、ふと眼がさめて、そこに酔樹明を見出した、彼がこゝへ倒れ込んだのは、まづ／＼感心、すぐ寝せる、大蛇のやうな鼾声をあげて眠つた、私もいつしか睡つた。

　　　　断想二三存在の世界、あるがまゝの世界、それを示現するものとして私の周囲に雑草がある。雑草の花、それを私の第何集かの題名としたい。生活の単純化、そこから日本的なものがうまれる。

　　五月十三日

　晴、好季節。左股の注射のあとが痛い、起居が苦しい。鶯笛、かなしい笛か、さびしい笛か、それを私が吹く。樹明は酔がまださめきらないので、ふら／＼してゐるけれど、講習があるとやらで、日曜日にもかゝはらず出勤、これも感心の一つたるを失はない。予期したやうに、十時の汽車で黎々火が来てくれた、お土産は鮹壺雲丹、巻鮨（お手製だからひとしほうれしい）。その雲丹を蛙堂老と青蓋人君とに贈つた、かういふハガキといつしよに、――

　下関名産の鮹壺雲丹を送ります、名物にうまいものなしといひますが、これはなか／＼うまくて、初夏の食卓に磯の香が、いや玄海の波音が聞えるかも知れません、云々。

　Ｔ子さんが卵を持つて、樹明君が魚を持つて来た、四人で飲んだり食べたり、寝たり、饒舌つたり。黎々火君が草をぬき土をうつてくれた、樹明君が苗を植ゑてくれた、これで茄子も胡瓜も十分だ。暮れてみんな帰つていつた、まことによい一日だつた。

　　　　改作追加・藪かげほのと藪蘭の花かな・いつもつながれて吠

えるほかない犬です・木の芽草の芽いそがしい旅の雨ふる・からりと晴れて枯木なんぼでもひろへるよ・もう秋風の、腹立つてゐるかまきり　　　発表できない句！（或る時機がくるまでは）・死ねる薬はふところにある日向ぼつこ（再録）

五月十四日

寝た、寝た、九時から四時までぐつすりと寝た。申分のないお天気だ、うらむらくは私の身心がよくない。風呂へ行く、五月野をよこぎつて。トマトを植ゑる準備、草取、肥汲。雑草のうつくしさよ、私は雑草をうたはずにはゐられない。

・道がひろくて山のみどりへまつすぐ・けふ播いた苗代へあかるい灯

五月十五日

今日も好いお天気。街へ、豆腐買ひに、むろん酒も買ひに。草も人もしづかなるかな。播きおくれた山東菜を播く、芽が出ればよいが。初夏の暑さだ、しかし私はまだ綿入を着てゐる、病人くさいな。夕方から農学校へ行く、今晩は樹明宿直なので、一杯やらうといふ約束が一昨日ちやんと成り立つてゐるのである、すこし早すぎたのでそこらを見てまはる、花草はうつくしいが、豚は、食べてゐる豚も寝てゐる豚も、仔豚も親豚もいやらしくつてたまらなかつた、これは必ずしも、ブルヂヨアイデオロギーのせいではあるまいて。二人で飲んで（彼が飲まないので、殆んど私だけが飲んで）、いゝ機嫌になつて戻つて寝る、まだ十時前だつた。樹明君は熱があるので、何を食べてもうまくないといふ、私は回復期でもあり粗食してもゐるので、何を食べてもうまいといふ、今夜の場合でも、この蒲鉾はまづいといつて二三片しか口にしない彼、これはうまいよと一枚食べつくした私、寄宿舎のライスカレーなんぞ閉口とばかり二口三口しか食べやうともしない彼、そんなにまづくはないと大丼をぺろりと平げた私、――うまいかうまくないか、――たべない者は不幸で食べる者は幸福だらう。今夜もだいぶ寝苦しい、寝苦しいのも肺炎の特徴らしい、読書でゴマカすより外ない。毎晩寝苦しいのには閉口する、一時間ぐらゐとろ／＼するとすぐ眼がさめる、あやしい夢（といつてヱロチツクぢやない

が）をみるのである。

・この笛、おかしいかさみしいか、また吹く（鶯笛）・青葉あざやかな身ぬちへポリタミン・明けてくる空へ燃やす・とほく朝の郭公がなく待つものがある　シヤンがゐるので垣のかなめが赤いので

五月十六日

日本晴、むしろ日本的晴朗とでもいふべきだらう。外は夏、内は春、私の身心にふさはしい気候である。今朝もむろん早過ぎるほど早かつた、六時過ぎにはもうちやんとすべてがとゝなうてゐた。朝、西の方で郭公が啼いた、珍らしい、そして好きだ（昨日学校でも聞いたが）。雀が来て遊んでゐる、これも珍らしい、そして親しい。蜻蛉の飄逸、胡蝶の享楽、蜂の勤勉、どれもそれ／″＼によろしい。餅をたべる、餅もうまいな、餅はうまいな。放下着、放下着、放下着と私は私に警告した、そして監視した。……今日はとう／＼郵便が来なかつた、一日のよろこびの大半をなくした訳である。帰庵このかた、いつとなく昼酌（晩酌はない）がおきまりになつたが、さてこれがいつまで続くか、続けられるか？

・柿の梢のいつか芽ぶいて若葉して窓ちかく・ひつそりとおちついて蠅がいつぴき・焼かれる虫の音たてていさぎよく　　　Ｔ子さんに・雑草にほふや愚痴なんどきかされては（与樹君）

五月十六日」はママ］

曇、何となく身心重し、昨夜はねむれたが、変な夢に苦しんだけれど、十一時から四時までねむれたのだ。だん／＼晴れてきた、防府へ行かうかとも思つたが止める、さらに山口へ行かうかとも思つたが、また止める、元気もないし銭もないし。……けさは郵便屋さんが、うれしい、ありがたいたよりを持つてきた。独り者はなか／＼忙しい、立つたり坐つたり、下りたり上つたり、炊いたり沸かしたり。……もう茨の白い花がちらほら、セルを着て歩く若い女の姿は悪くない、初夏風景の一つ。垣根にばら、道べりにはあざみが咲いてゐた、私はちつとも迷はないで後者を採つた、一輪ざしにさすために。しづかなるよろこび。――午後は湯屋へ、そしてうどん玉を買うて戻る。初めて

蚊帳を吊つた。梟が啼きつゞける、根気のよい鳥だな。

　　寝床までまともにうらから夕日　青葉からまともな陽となつて青葉へ・これは母子草、父子草もあるだらう（述懐、子に）　　夜ふけて餅を焼いて　ふくれて餅のあたたかさを味ふ・麦畑へだてゝとんとん機音は村一番の金持で

　　五月十八日

　予期した通りの雨、しかしあまり降らない。ありがたい手紙やら小包やら。青藍人君からは豊川稲荷の玉せんべい（たゞし実際は、せんべいの断片！）。

　今日の買物は、——味噌、酒、ふらん草、合して三十銭。

　放下着。降らないで曇、曇つてゐたが晴となつた。昼食後ふと大田行を思ひ立つた、敬君とゆつくりよい酒を飲みながら話したくなつたのである、学校に樹明君を訪ねて、念のために電話で都合を訊ねて貰つたら、出張で不在といふので止めた（かういふ場合、電話——文明の利器に感謝しないではゐられない）。横臥読書。蕗を摘んで、お菜をこしらへる、茎もうまいし葉もうまい。入雲洞君から借りた「雲水は語る」を読む、前の著作と重複するところはあるが、面白く読ませるところに蓬州和尚の腕がある、大に飲んで大に書いて下さい（もう書きすぎてゐるから！）。可愛らしい鼠がそこらをかけまはつてゐる（これは不思議、いつやつてきたのだらう、これで其中庵も家並の家になつた）、上手な鶯が窓ちかく啼く、なつめの若葉、桐の花、密柑の蕾。……雑炊を味ふ、雑草を眺めつつ！あやめを床に、いばらを机上に活ける、どちらもよい。△業が残つてゐる（死にそこなうた、死ねなかつた）、といふことは、仕事がある、成し遂げるべきものがある、といふことだらう。△木曽路で句作のいとぐちがやうやくほぐれかけたが、飯田で病んでいけなくなつた、そして帰来少しづゝほぐれる。△捨てるも捨てないもない、さういふ考へを捨ててしまへばそれでよいのだ、即今の這箇に成りきればそれでよいのだ。

　・あさのみちの、落ちてゐる梅の青い実の・あほげば青梅、ちよいともぐ・病めば考へなほすことが、風鈴のしきりに鳴る　をさないふ

たりで、摘みきれない花で、なかよく・ほんにしづかな草の生えては咲く・ひらかうとする花がのぞいた草の中から・芽ぶいて若葉して蓑虫は動かない・いちはやく石垣の茨は咲いた校長さんのお宅　声をそろへて雨がほしい青蛙はうたふ・打つ手を感じ逃げてゆく蚊の、寝苦しい・灯火、虫はからだをぶつつける・生えて伸びて咲いてゐる幸福

　五月十九日

　頬白が晴々と囀つてゐる、誰かを、何物かを待つてゐる。考へること、読むこと、書くこと、……歩くこと。人生は五十からだ、少くとも東洋の、日本の芸術は！曇つて降りだしさうになつたが、なか／＼。昼酌をやりながら、といふよりも、ほうれん草のおしたしを食べつゝ、味取をおもひだした、Ｈ老人をおもひだして、彼の生死を案じた、味取在住一ヶ年あまり、よくＨ老人と飲んだ、そしておさかなはほうれん草のおしたしが多かつた。……▵私は毎日これだけ食べる（不幸にしてこれだけ飲みます！）。

　米　四合、三椀づゝ三回酒　　合、昼酌　壱回朝、味噌汁　二杯昼、野菜　　一皿晩、同　外に佃煮時々うどん玉まんぢゆう

　これで食費一ヶ月まづ五円位。▵湯屋で感じた事、——

　男湯と女湯とを仕切るドアがあけつぱなしになつてゐたので、私は見るともなく、女の裸体を見た（山頭火はスケベイだぞ）、そしてちつとも魅力を感じなかつた、むしろ醜悪の念さへ感じた（これは必ずしも私がすでに性慾をなくしてゐるからばかりではない）、そこにうづくまつて、そして立つてゐた二人の女、一人は若い妻君で、ブヨ／＼ふくれてゐた、もう一人は女給でもあらうか、顔には多少の若い美しさがあつたが、肉体そのものはかたくいぢけてゐた、若い女性がその裸体を以ても男性を動かし得ないとしたならば、彼女は女性として第一歩に於て落第してゐる、——私は気の毒に堪へなかつた、脱衣場の花瓶に※された芍薬の紅白二枝の方がどんなにより強く私を動かしたらう！（私はまだ雑草のよさを味ふと同様に、女の肉体を観ることが出来ない、修行未熟ですね）

　▵俳人の夥多、そして俳句の貧困。▵ながいこと、ぶら／＼うごいて

ゐた前歯（後歯はもうみんな抜けてしまつたが）がほろりと抜けた、抜けたことそのことはさびしいが、これでさつぱりした、物を食べるにもかへつて都合よくなつた（私自身が社会に於ける地位はその歯のやうではないかな）。△ラツキヨウを食べつゝ考へる（私はラツキヨウが好きだ、帰庵して冬村君から壺に一杯貰つたが、もう残り少なくなつた）、人生はラツキヨウのやうなものだらう、一皮一皮剥いでゆくところに味がある、剥いでしまへば何もないのだ、といつてそれは空虚ではない、過程が目的なのだ、形式が内容なのだ、出発が究竟なのだ、それでよろしい、それが実人生だ、歩々到着、歩々を離れては何もないのが本当だ（ラツキヨウを人生に喩へることは悪い意味に使はれすぎた）。たどんはありがたいかな、たどん一つのおかげで朝から夜まで暖かいものが食べられる、その火一つで、御飯もお湯もお菜も、そしてお燗も出来ます。……今日の夕方はさみしかつた、人が恋しかつた、――誰か来ないかなあ、と叫びたかつた、いや、心の中では叫んだのである。寝苦しかつた、一時から三時まで、やつとねむれた。

　　うちの藪よその藪みんなうごいてゆふべ・空は初夏の、直線が直角にあつまつて変電所・閉めて一人の障子を虫がきてたたく・影もはつきりと若葉・ほろりとぬけた歯は雑草へ・たづねあてたがやつぱりお留守で桐の花・きんぽうげも実となり薬は飲みつゞけてゐる・くもりおもくてふらないでくろいてふてふ　この児ひとりこゝでクローバーを摘んでゐる　摘めば四ツ葉ぢやなかつたですかお嬢さん（途上即事）

　　　　断想生活感情をあらはすよりも生活そのものをうたふのだ。人生は、少くとも私の生活は水を酒にするのではなくて、酒が水になるのだ。生活事実、その中に、その奥に、その底に人生の真実、自然の真実がある。

　・誰もたづねて来ない若葉が虫に喰はれてゐるぞ・ひよいと穴から、とかげかよ・雑草が咲いて実つて窓の春は逝く・ねむれない私とはいれない虫と夜がながいかな・夜ふけてきた虫で、いそいで逃げる虫で

五月二十日

雨、よい雨、風、わるい風、身心すなほ、しづかな幸福。時化になつた、米もなく石油もなくなつてゐるが、そしてそれを買ふだけの銭は持つてゐるが、とても出かけられない、ひとりしづかに寝床に横はつて読書。もう一週間ほど誰も来なかつた、私からはちよいちよい出かけたが。夕方、樹明来、米持参、この米は今日の場合、とりわけ有難かつた、君は健康を害して酒が飲めないので、お茶をのんで閑談、幸に青蓋人おくるところの、せ、ん、べい、があつた。といふやうなわけで、米代が浮いたので、――といつても五十銭だが――風雨を衝いて街へ、酒と石油を買うて戻つた、雨風でびつしよりになつた、いや御苦労、々々々。酒はウチノアブラ、石油はソトノアブラ。樹明がくれた胡瓜を膾にして飲む、胡瓜もうまいが、酒はとてもうまい、陶然悠然としてベツドへ。――雨で水が出たので、そこらに水のたまり水の音、水はよい、断然よい、水と雑草との俳人として山頭火は生きる、生きられるだけ生きる、そしてうたへるだけうたふのだ！

ひとりひつそり雑草の中・雨の、風の、巣を持つ雲雀よ、暮れてもうたふか・宵月のあかり、白いのはやつぱり花だつた・よい雨のよい水音が草だらけ　活けられて開く花でかきつばた

五月廿一日

細い雨、風は落ちた、頬白が機嫌よく囀るうちに、日が照りだしていよ／＼初夏日和となつた、もう湯あがりに浴衣がほしい。昨夜はよう寝た、九時から四時まで眠つた。たよりいろ／＼ありがたし、田中耕三君から心臓の薬、青蓋人君から静岡茶、黎々火君から豆腐の本、その他。△よき本はよき水の如し、よき水はよき本に似たり。佐藤吾一氏の豆腐を語るは面白い、著者に早速、葉書をだしたほど好意が持てた。小郡のやうな町でも、八百屋の店頭に苺や枇杷がならべられて、行人の食指を誘ふ。△酒の量りのよさわるさが妙に神経にこたえる、これについては興味ふかい随筆が書けるよ。入浴のついでに工場の冬村君を訪ねる、二三日前に父となつたといふ、その娘は不幸な人間として生れてきたが、どうか不幸でないやうにと祈らずにはゐられない。結婚はもう Adventure でなくて Business となつたのである、

Business でなければならないのである。

・金魚売る声も暑うなつたアスフアルト　いやな薬も飲んではゐるが初夏の微風・なんと若葉のあざやかな、もう郵便がくる日かげ　若葉めざましい枯枝をひらふ・郵便もきてしまへば長い日かげ・湯があふれる憂欝がとけてながれる（改作）

五月廿二日

とてもよいお天気、小鳥も草も人間もよろこぶ。何とはなしに憂欝になる、病気のためか、銭がないためか、お天気があまりに好すぎるためか、……やつぱり把握すべきものをしつかりと把握してゐないからだ、自己阿附が感傷的になるからだ、このセンチを解消しなければ、ほんたうの山頭火にはなれない、ほんたうの句は作れない。野をよこぎつて街をあるいたが、カケで一杯ひつかけたが、そんなことでは駄目だつた、私の身心はなぐさまなかつた、咄。昼飯最中だつた、誰だか来て案内を乞ふ、出て見て思ひだしたが、福日の恒屋匡介君だつた、まことに意外なお客さんだつた、白船君から私の近況を聞いて訪ねて来たといふ、閑談二時間あまり、後日を約して別れた。あんまり虫が胡瓜の葉を喰ふから紙袋で囲うてやつた、もう花をつけてゐる、ちと早熟だな。△煩悩執着を放下することが修行の目的である、しかも修行しつつ、煩悩執着を放下してしまうことが、惜しいやうな未練を感ずるのが人情である、言ひ換へると、煩悩執着が無くなつてしまへば、生活――人生――人間そのものが無くなつてしまうやうに感じて、放下したいやうな、したくないやうな弱い気を起すのである、こゝもまた透過しなければならない一関である（蓬州和尚の雲水は語る、を読んで）。△有仏のところ止まる勿れ、無仏のところ走過せよ、――私は今、この話頭に自から参じてゐる。もううす暗くなつて、農学校の給仕さんが酒徳利をさげてきた、樹明来の予告である、間もなく樹明来、自分で飲みたいよりも私に飲ませる心いきはよく解る、よく解るだけ酔へない、胡瓜と酒とは食べて飲んだが。干大根は煮そこなつた、伽羅蕗はうまくできるらしい。蛙かやかやこやこや、ころころ、げろげろ。……よう寝た、さすがにアルコール大明神の効験はいやちこ也。

（未定稿）（生みの苦しみ）　（わたしの）窓へ糸瓜の蔓をみちびく　（だん／＼畠の）麦刈ればそこには豆が芽ぶいてる　（夜の机の）これでも虫であつたか動いてる・風の夜の虫がきて逃げない・風鈴鳴ればたんぽぽ散ればとんぼ通りぬける・触れると死んだまねして虫のいのち・蜘蛛はほしいままに昼月のある空　蜂もいそがしい野苺咲いた

五月廿三日

今日はすばらしい好晴、清明の気が天地にあふれてゐる、身心ほがらかにしてかろし。朝は、とりわけて初夏の朝はよろしいかな。うれしいたよりが方々から、そして意外のよろこびがあつた！山口へ行く、いつぞや見つけておいた食卓——それは私が食卓として用ひるので、安物の小机——を買ふために、そして湯田で入浴するために、しかしその机はもう無かつた、千人風呂はあつくあふれてゐたけれど。酒一杯、うどん一杯、十五銭なり、これは昼食、見切本のお惣菜のこしらへ方十銭、菜葉弐把五銭なり、これはお土産。もう戸外は暑い、今日は一日ゆつくり遊ぶつもりだつたが、三時には戻つてきた、バス代を倹約して半分は歩いた、途上、感じのよい若いマダムを見た、山口小郡間のバスが乗心地のよいやうに、気持がよかつたことです！暮れるころになつて、約の如く樹明来庵、例の如く飲んで食べる（念のために断つておくが、食べて飲むのではない）それから両人共理髪、ちよいと、ちよいとしたところを見て帰庵。まだ酒が残つてゐる、その酒を飲んで、飯を食べて、そして寝る、樹明はいびき、わたしは眠れない。もう一時過ぎてゐたらう、Ｔ子さんが来た（仕事がすむのは毎夜今頃ださうな）、樹明君は二時の汽車に乗るといふので、彼と彼女は同道して出て行つた、彼の旅に幸あれ、彼女の生活に幸あれ。

・誰も来ない蕗の佃煮を煮る・蕗つめば蕗のにほひのなつかしく・蕗の香のしみ／″＼指を染めた・初夏の、宵月の、何か焦げるにほひの・こゝまではあるけたところで熱い温泉がある（山口へ）・あかるくあつくあふれる湯にひたりおもひで（湯田入浴）・惜しみなくあふるゝよながるゝよ（途上即事）・街からついてきた蠅で打つ手は知つてゐる　ゆふべおもむろに蠅は殺された・打つ手を感じて蠅も私もおちつかない　草が青うてどこかの豚が出て遊ぶ・よい湯あがりのはだ

かであるく雑草の風（追加）

五月廿四日

　すばらしいお天気のつゞくことである、すこし急いで歩けば汗ばむほどの暑さとなつた。茄子の支へ竹を拾ふべく椹野河原へまで出かける（近所にもあるけれど個人所有の山へはいるのはうるさいから）、月見草がうつくしく咲いてゐた、土手の葉桜もうつくしかつた。帰途、魚市場の前を通りかゝつて、鯖を一尾買うて戻つた（私が生魚を買つたのは、今年はこれが最初ではないか知ら）、下手糞に料理して食べたが、予期したほどうまくなかつた、私の嗜好はたしかに、腥いもの油濃いものから去つてしまつた、肉食よりも菜食が好きになつてゐる。鯖の刺身でビール（このビールは昨夜Ｔ子さんが持つてきてくれたその一本だ）、ゼイタクだな。畑の麦刈がはじまつた。そこらの青梅を十個ばかり盗んで梅焼酎をこしらへた。昨日植ゑたトマトへ支へ竹をして肥水を与へる、威勢よくそよいでゐる、これでこの夏もトマトのおいしいのが食べられる。しづかな一日だつた、しづかな私自身でもあつた。

　朝風の青梅をぬすむ五つ六つ　家は青葉の中からアンテナ・郵便がなぜ来ない朝から雀のおしやべり・青葉あかるくげつそりと年とつた鏡の顔・これが今日のをはりの一杯をいただく

五月廿五日

　快晴、身心さわやかである。途上、兎の仔の可愛いのを見た、豚も仔はさすがにいやらしくない、それはそれとして、彼等はすべて、殺されて食べられるために養はれてゐるのだ、平気で食べる人間はどんな人間か（さういふ人間は二種ある、一は菩薩ともいふべく、他は禽獣ともいふべき人間）。（肥育といふことも）△君よ、みだりに愛を口にするなかれ、慈悲を説くなかれ。もう暑い、街まで出かけてもヱライ、弱くなつたものだ、こんなに弱くては。……夕方、案外早く樹明君が帰つて来た、飲んで寝る。よい月夜、ほろ酔の月のあかりはよろしいかな。樹明君は夜の明けるのを待つて早く帰つていつた、よろしい。

・青葉そよぐ風の、やぶれた肺の呼吸する・夕風がでてあんたがくるころの風鈴の鳴る（樹明に）・かたづけてまだ明るい茄子に肥水をやる・月夜の、洗濯ですか、よいです
な　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（自問自答）　　　　　せんたくはよろし　月夜の蛙がなく米をとぐ　厠のあかるさは月のさし入りて

五月廿六日

日本晴、頬白が囀り合うてゐる、私もうれしい、多分彼氏の来る日だ。何とあたゝかい手紙が――澄太君をして迎田さんから――ふと思ひ立つて山口へ行く、途上、冬村君に逢ふ、ニコ／＼してゐる、その筈だ、今夜が婚礼だといふ、一天雲なし、めでたい／＼。大歳駅附近には芝居の掛小屋があつた、山口駅では旅芸人の群を見た、彼等に幸福あれ。買物いろ／＼――夕顔の苗、蕨、生干の小鰯、小さい食卓、等々――それだけで壱円あまり。昼食は酒一杯とうどん一杯、むろん千人風呂には入つた、これが目的の大半だから、――温泉はほんたうによい。九時で行つて三時には戻つた、戻つてみたら、やつぱり敬治君が来てゐた、いつしよに農学校へ、樹明君は婚礼の接待役を頼まれてゐて駄目、二人で駅のＩ旅館で夕飯、よく食べてよく飲んだ、うまかつた、近来の御馳走だつた、それからＭでコーヒー一杯、そこで別れる、敬君は実家へ、私は庵へ戻つてぐつすりと寝た（コーヒー代五十銭はやつぱり惜しかつた、それは買はなければならない米二升代だつたではないか！）。陰暦四月の十四日、月がよかつた。

ちつとも雲がない山のよろしさ・おもひでは山越えてまた山のみどり　刑務所の高い塀から青葉若葉　　　千人風呂　ま昼ひろくて私ひとりにあふれる湯　ぞんぶんに湧いてあふれる湯をぞんぶんに・ちんぽこもおそそも湧いてあふれる湯　　　駅所見　初夏の牛どもよ載せられてどこへ行く・こんなに晴れた日の猫が捨てられて鳴く

五月廿七日

晴、午後は曇つて雨が近いらしい、満月も駄目になつた。身心がすこし重い、昨夜の飲みすぎ食べすぎのむくいだ。街へ石油買ひに、――砂土を貰つて戻る、昨日、わざ／＼山口から買つてきた夕顔の苗

を植ゑる、どうもあぶないらしい、どうか生きかへつてくれ、伸びてくれ、咲いてくれ、実つてくれ。……今日は海軍記念日、町では記念会が催されたらしい、飛行機が通つていつた爆音も今日にふさはしかつた、非常時風景、軍国風景の一つだ。敬治君来庵、庵の御飯はうまいといつて数椀食べてくれた。△人間の気分といふものも面白いものだ、君は、医者のところで、うつかり父はゐないといつて、父を殺してしまつたさうな！私だけ学校へ、鋸と鎌とを借りて、葵一茎、白薔薇一枝を貰つてくる。やがて樹明君来庵（昨夜の冬村婚礼は朝の六時まで続いたさうだ）、ビール、酒、胡瓜も来庵！飲んで食べて饒舌つて、夕方解散。しづかなるかな、さびしくはない、しづかなる一人だ。

・雨ふる竹をきる濡れてゐる（追加）・死んでもよい青葉風ふく（〃）・雀こゝまで子を連れてきてだんだんばたけ・大きな鋸が造作なく大きな木を炎天（追加）　　　改作追加・雨ふる生えてゐる木を植ゑかへる・百姓も春がゆく股引のやぶれ・たま／＼髯剃れば何とふかい皺（病後）・ひとり、たんぽぽのちる・寝るとして白湯のあまさをすする

五月廿八日

曇、后晴、また持ち直したらしい、よく続くことだ。ありがたい手紙をいたゞく（江畔老人から）。うつかりして百足に螫された、大していたまなくてよかつた、見たらいつも殺すのだから一度ぐらゐ螫されたつて腹も立てられない。街へ出かける、米買ひに（ついでに酒もうどんも）。杉の下枝をおろす、茂りおろすや、と一句ありさうなものだが。樹明君から白米を貰ふ、ありがたし。敬治君は予想した通りに来ない、山口から大田へだつたらう、それがよろしい。昨日も今日も句なし、それもよろしい。何といふ鳥か、夕まぐれを切なさうに啼く。虫が、いろんな虫がいそがしく動いてゐる。山頭火の胃袋は何とデカイかな（その実例）。

朝食―お茶漬さら／＼三杯、手製の新菜漬で。昼食―小鰯を焼いて独酌一本（二合入）、温飯四杯。夕食―うどん三杯、飯二杯、蕗の佃煮で。

五月廿九日

よい月夜、寝苦しい寝返りを繰り返してゐるうちに、いつとなく夜が明けてしまつた、けさは早起の中の早起だつた。しかし、二時頃だつたらう、二声三声、ほとゝぎすが啼いたのはよかつた、私には初音だつた。今日も好天気、歩きたいな、行きあたりばつたりの旅がしたい。たよりいろ／＼、澄太君の温情、ありがたしともありがたし。学校に樹明君を訪ねる、それから街を歩いてゐるうちに、ガソリンカーに乗つて山口へ、——小人、銭を持つて罪あり、——酔うて歩けばすつかり夏だ。鈴木の奥さんを訪ねてビールをよばれる、湯田の湯はよいな、外郎はうまいな。とにかく、愉快で、そして憂欝で、妙な一日一夜だつた。

・白うつづいてどこかに月のある夜みち・寝苦しい月夜で啼いたはほととぎす・てふてふとまるなそこは肥壺・悔いることばかり夏となる・いつでも死ねる草が咲いたり実つたり

五月三十日

晴、いよ／＼夏が来た。独臥漫読、出て歩くのもよいが、かうしてゐるのも悪くない。放下着、放下着の外に何物もない、何物もないのが放下着だ。夜、樹明来庵、酒はやめて飯をあげる。……更けてＴ子さん来庵、庵にも珍風景なきにしもあらず！

おたがひにからだがわるくていたはる雑草・胡瓜の蔓のもうからんでゐるゆふべ・とんぼついてきてそこらあるけば　改作追加・前田も植ゑて涼しい風の吹いてくる

五月三十一日

曇、一雨ほしい、草も木も人間も。胡瓜に棚をこしらへてやる、伸びよ、伸びよ、実れ、実れ。駅のポストまで、戻つてビール、これはＴ子さんが昨夜のお土産。柿の花はおもしろい。蛇には親しめない、によりと出てきてぎよつとさせる。遊びすぎた、ちと勉強しよう。夕方樹明来、今日はどうしても飲ましてくれといふ、からだのぐあいがわるくて酒でものまなければやりきれないといふ、すこし買うてきて飲む、彼もうまくないといふ、私もうまくない、何といつても健康第

一ですよ。

　　　　寒山の路、拾得の箒△酒も水もない世界、善悪、彼我、是非、利害のない世界、個も全もない世界。それが極楽であり浄土である、いはゆる彼岸である。水を酒とするのでなくて、酒が水となつた境地だ、酒は酒、水は水だけれど、酒と水とにとらへられない境涯、酒と水とに執しない生活だ。こゝから、俳句、私の欣求する俳句は出てくる、私はさういふ俳句を作らうと念じてゐる。個から出発して全に到達する道である、個を窮めて全を発見する道である。我心如秋月——と寒山拾得は月を見て笑つてゐる。

　　六月一日

　曇、糸瓜を植ゑる、おもての入口に、うらの窓の下に。入浴、髯を剃る。△放下着の放下——放下着を放下せよ。△清貧清閑、竹葉微風。三時頃、ヱプロン姿でＴ子さんがやつてきた、今日は酒と肴とを持参して、樹明君にも来て貰つて、ゆつくり飲むつもりだつたが、仕事が忙しくて手がひけないので、お断りにきたといふ、そして酒屋の方へまはらなかつたからといつて、五十銭銀貨一つを机に載せて帰つていつた、彼女もずゐぶん変り者だ、女としては殊に変つてゐる、夫もあり子もあり、そして料理屋兼業の旅館Ｍの仲居さんだが、ヒス的であることに間違はない（樹明君も妙な人間を其中庵訪問者として紹介したものである）、句作でもすると面白いのだが、まあ、文学好きの程度、或る意味では求道者といつてもよからう。夕暮はいろ／＼の鳥が啼くかな。つゝましい一日だつた。

　　六月二日

　曇、こんどこそ雨だらう、風が吹きだした。草花を活ける、草花はどれもいつもよいなあ。風、風、いやな風がふく、風ふく日の一人はいろ／＼の事を考へる、——今日は自殺について考へた。簡素、禅的生活、俳句生活は此の二字に尽きる。純情と熱意とを失ふ勿れ。すなほに受ける、そしてすなほに現はす。やうやく雨になつた、よい雨だが、風が落ちるとよいのだが。△在るところの世界について考察する、在るべき、在りたい、在らねばならない世界、在らずにはゐない世界。夜は碧巌録を読む、いつ読んでもおもしろい本である、宗教的

語録として、そして文芸的表現として。趙州三転語、彼は好きな和尚だ。

・すでに虫がきてゐる胡瓜の花・さつそくしつかとからみついたな胡瓜・麦がうれたよ嫁をとつたよ・なにがなしあるけばいちじくの青い実・子を負うて魚を売つて暑い坂かな・茂るだけ茂つて雨を待つそよぎ・蜂がてふてふが花草なんぼでもある・風のふくにしいろい花のこぼるるに・風の中の蟻の道どこまでつづく・風ふくてふてふはなかよく草に・風ふく山の鴉はないてゐる・いちにち風ふいて永い日が暮れた　暮れてふきつのる風を聴いてゐる

自殺について　（安心決定とは）自殺は人間の特徴だといふ、同時に特権でもあると思ふ。自殺者は必ずしも生死透脱底の人ぢやない、否、寧ろ生死の奴隷が多い、しかし自殺は一大事であるには相違ない。死にたくて死ぬる人もあらう、死にたくなくて死ぬる人もあらう、死にたくもなく、死にたくなくもなくて死ぬる人もないことはなからう。ほがらかな自殺、幸福な自殺者、それは第三者には到底理解されない心境であり体験であると、私は考へる。自殺の方法、それは自殺者に任したがよい。自殺者の手記、それは最も下手糞な文芸作品だらう。天も白く地も白く、そして人も白く光る、白光は死である、死の生である（死の生ではあるが、生の死ではない）。

┌存在　生命│生存　└生活

生死去来　行│遊行　乞│苦行

句│難行　作│易行　独り遊ぶ　いつしよにあそぶ

六月三日

霽れてゆく空や野や、雨後の朝景色はさわやかである。野菜畑がいき／＼としてきた。……とても好い、そして暑いお天気になつた。めうが一茎をぬすんできてたべる、めうがのかをりはよい。Ｔ子さんがメカシて来た、今から掛取にゆくといふ、料理屋のカケがうまくとれるやうになれば、立派な一人前だ。淡々君を待つ、今日来庵の通知があつたので、――もう、日が暮れるのに来てくれない、待ちきれなく

なつて、学校に樹明君を訪れる（今日は宿直なのだ）、病状すぐれないと見えて欠勤、Ｃへ行つて酒一杯（四日目のアルコール注入だ）、ほろ／＼として帰つてくると来客、来客——淡々君、そして耕三君。暫らく会談、それから街へ、淡々君と私とはバスで湯田へ、耕三君は庵へ（どちらがお客だかわからない、そこが其中庵の其中庵たるところかもわからない！）。湯田では飲んだ、飲んだばかりでなくフラウといつしよに寝た、しかし幸にして、或は不幸にして一夜だけの童貞であり、処女でありました！

六月四日

朝早く一杯浴びて一杯ひつかける、湯町の朝酒はまことにまことによろし。淡々君の財布が軽くなつたらしい（私は財布を持つてゐないし、持つてゐても重い日のあつたことなし）、十時のバスで小郡駅まで、そこで私は眠り、君は去つた。耕三さんは昨夜よく庵で寝てくれたらしい、酒と米とが置いてあつた、ありがたすぎて、あまりにすまなくて。……さつそく飲む、食べる、そして寝る、あゝ、庵中極楽。寝た、寝た、ぐつすりねむれた、労れて、ぐつたりして。酒と女、人間と性慾——こんな問題が考へられてならなかつた。女よりも酒、酒よりも本、——それが本音だ、私の、今の。

・風をおきあがる草の蛇いちご・鳴きつつ呑まれつつ蛙が蛇に・雨をたたへてあふるるにういて柿の花・霽れててふてふ二つとなり三つとなり・いつでも植ゑられる水田蛙なく・夏めいた空がはつきりとあふれる水

『性慾といふもの』性慾といふものは怪物である。人間が生きてゐるかぎり、それはどこかにひそんでゐる。若いときにはあまりに顕在的に、老いてはあまりに潜在的に。生存力、それは性慾の力といつてもいいかも知れない。食慾は充たされなければならない、これと同じ意味で、性慾も充たされなければならない、それが要求する場合に於ては。┌個体維持└種族保存性は生なり、といつても過言だとは必ずしもいへないだらう。生活と交接とは不可離不可別である。性慾は常に変装して舞踏する、それが変形変態すれば性慾でないかのやうでさへあるが、性慾の力はそのうちに動いてゐる。

六月五日

曇、反省して顔を蔽ふ、なんぼ淡々君といつしよであつても、湯田に於けるプチブルくさい遊蕩ぶりは恥づかしい。身心すぐれず、罰をうける、当然だ、必然だ。裏の藪に——よその藪からうちの藪へ——によろりと筍が伸びてゐた、さつそく草をわけて抜く、お汁の実として食べる。まだ酒があり米がある日。夕方、樹明君に招かれて学校へ行く、宿直室で酒と飯とをよばれる、かういふ酒、かういふ飯がホンモノだ。早く戻つて読書、それから安眠。

六月六日

晴、勉強しよう、一切放下着、クヨ／＼するな。入浴、さつぱりする、清風こゝろよし。うれしいたよりがあつた、砂吐流君から、安六君から。▵一は一だけしか、一は一として、黒いものは黒く、黒いなりに、——それ以外の何物でもない、それはそれでよろしいではないか。夕、樹明君が痛む足をひきずつてやつてきて泊めてくれといふ、ＯＫ、酒はないが飯はある、蚊帳の中で大の字に寝そべつて漫談数刻、いつのまにやら寝入つてしまつた。庵中無事、事々妙好である。

其中庵二句・しろい蝶くろい蝶あかい蝶々もとぶところ・花がさいて蜂がきてゐる朝　この木のどこか病んでゐる日向水やらう・てふてふあそばせてあざみあさのいろ・ここにもてふてふがぢやがいものはな・うぐひすよ、もとのからだにはなれないで夏

六月七日

晴、すこし寒くて、なか／＼忙しい。薊を活ける、老鶯が啼く。「松」「雑草」到着。山へ行く、山はよいかな。よく眠れた。

こんな句はナイシヨウ／＼！・死んでしまうたら、草のそよぐ・死ぬるばかりの、花の赤いかな・からりとしてしきりに死が考へられる日・死なうとおもふに、なんとてふてふひらひらする　夏野、犬が走れば人も走つて・朝風のきりぎりす大きうなつた・ゆふべあかるい草の葉で蝶はもう寝てゐる

六月八日

晴、けさはゆつくりと五時すぎるまで寝床の中。△自殺是非について考へる。——詩外楼君から、桂子さんから来信、桂子さんからのそれはなか／＼興ふかいものだつた。大事に育てる茄子の一本が枯れた、根切病、詮方なし。額が出来た、井師筆の其中一人、ありがたい。焼酎一杯、むろんカケで、その元気で学校へ寄る。Ｔ子さん来庵、酒とサイダーと肴とを持つて、やがて樹明君も来庵。それから歩く、私一人で、そしてヘト／＼になつて帰る、途中無事で、ヤレ／＼。

・風ひかる、あわたゞしくつるんでは虫　めくらのばあさんが鶏に話しかけてゐる日向・たつた一人の女事務員として鉢つつじ　たま／＼たづねてくれて、なんにもないけどちしやなます（友に）　もう春風の蛙がとんできた（再録）

自殺是非　　　　　（などゝいふなかれ）自殺の可否は自殺者にあつては問題ぢやない。死にたくて自殺するのでなくて、生きてゐたくないからの自殺だ。生の孤独や寂寥や窮迫やは自殺の直接源因ではない。自殺は最後の我儘だ。酒と句とが辛うじて私の生を支へてゐた。

六月九日

三時半には起きた、昨夜の後始末。うつ木の花、はかない花だ、活けてもすぐ散る。残つたゞけ飲む、飲まずにはゐられない、といふよりも一滴も残しておけないのが酒好きの酒飲みだ。性慾と食慾、食慾は満たさないと死ぬる、性慾は抑へてゐても生きてゐられる、そこに私共の関心がある。△技巧はそれを技巧と感じさせないところにそのうまさがある。茄子苗を見つけた、すぐ植ゑる、どうぞついてくれ。野韮の花、坊主花。ウソかマコトか、ウソからマコト、マコトからウソ。△桂子さんのちまきが来た、重いな、グロテスクな食物だ、屈原の味か、薩摩隼人の味か、ようく噛みしめろ。入浴、数日来のわだかまりを流す。山へ、つつじを折つてきて仏様に供へる。しづかな日だつた、遊蕩気分を払拭した。ほんとに熟睡した、近来にないことだ。

六月十日

曇、梅雨入前、午後すこし降つて晴。時の記念日、とまつた時計を時計屋へ持つてゆく、ネヂがゆるんだためで、すぐに直してくれた、タヾで。なまけもの、きまぐれもの、ぐうたら、等々と自分を罵つた、どうもこれは直らない、ネヂがゆるんだのではあるまい、ネヂがないのだらう！郵便はとう／＼来なかつた、さみしい日だ。△ゆすら桃、通りかゝつた垣根から二粒三粒つまんでたべて、遠い少年の夢を味つた。夾竹桃がもう咲いてゐる、南国の夏の色と姿だ。更けて、跛を曳きつつ、犬に吠えられつつ、樹明泥酔して来庵、自転車々々々と繰り返す、生酔本性とはこれだらう、宥め賺して、やつと寝させる、……すぐ大鼾だ！夕暮、クロトリを聴く、ぢつと耳傾けてゐると、その声は切ない、しかし情愛の籠つた声だ。△一元的になりきりえない自分をあはれむ。夜、時の記念として、――この句を喜代志さんにあげませう。

サイレンが鐘が正しく私の時計も九時

雨、夜の雨の音はよろしい。未明近くＴ子さん来庵、たづねてきたのは私をぢやない、樹明をである、庵にはふさはしくない――困つたことである。四時半には起きた、めづらしく裏山で狐が鳴いた。

（変電所の構成）

・草からてふてふがまた草へ　大地にごろ／＼かさなつて豚の仔が暑い　ゆふべ時計がとまつてゐる午後三時　ゆふべの窓に影あるは竹の二三本・ひろがつて、こぼるゝ花をうけてゐる葉の（南天と蕗）・ゆふ空ゆうぜんとして蜘蛛の生活・蜘蛛は網張る、私は私を肯定する・枯木へ糸瓜の蔓をみちびく・萱もみな穂に出て何か待つてゐるようなゆふ風・かういふ世の中の広告気球を見あげては通る・実つて垂れて枯れてくる・いちめんの夏草をふむその点景の私として・待つでもなく待たぬでもなく青葉照つたり曇つたり

六月十一日

梅雨日和、明日から入梅だ。枇杷を食べる、私には初物だ、これは恐らく、昨夜の宴会の残物だらう、といつては持つてきてくれたＴ子さんにすまないけれど。だん／＼晴れる、雨後の風景はまことにあざ

やかなものである。Ｔ子さん帰る、樹明君も帰る、あとは私一人でしづかなこと、其中一人で十分だ（半人では困るが二人三人でも困ります）。雑草の中から伸びてゐた葱坊主、それは野韮でもないし、ラツキヨウでもないし、何だらうと考へてゐたが、玉葱だつた、今年捨てた屑根から芽生えてきたのだつた、小さい玉が三つ、これでも私の味噌汁の実にはなる、いや有難う。大根菜間引、洗つて干す、あす新漬にするために。奴蜘蛛を観察する、なか／＼面白い。虫を殺すことは不愉快だ、しかし殺さなければならない虫。駅へ砂吐流君を出迎ふべく行かける、途中、樹明を訪ねて訳を話す。△赤と黒との接触を観察した、赤い蝶と黒い蝶との交尾行動！砂君と共に、もう一度、樹明往訪、二十年振の昔話、それから庵で、三人でよい酒うまい酒を飲む、砂君宿泊。よく飲みよく話しよく寝た。

・歩いても歩いても草ばかり・雑草やたらにひろがる肉体・てふてふとんでも何かありさうな昼・濡れて、てふてふも草の葉のよみがへる雨・虫はなんぼでもぶつかつてくる障子の灯かげ・ここにも工場建設とある草しげる・土に描いて遊ぶ子のかげもむつまじく

六月十二日

早朝、砂君を見送つて駅へ。砂君はまろい人だつたが、二十年の歳月が君をいよ／＼まろくした、逢うて嬉しい人だ。何だか遣りきれなくて飲む、酔うて辛うじて戻つて寝た。或る時は善人、或る時は悪人、或は賢、或は愚、是非正邪のこんがらがるのが人間の生活だ。

・てふてふよつかれたかわたしはやすんでゐる・ふつと逢へて初夏の感情（追加）・青空したしくしんかんとして・朝じめりへぽとりと一つ柿の花・けさはじめての筍によつこり・こんなところに筍がこんなにながく（再録）・あひゞきの朝風の薊の花がちります・酔ざめはくちなしの花のあまりあざやか

六月十三日　六月十四日

身心も梅雨季だ、寝る、寝るより外ない！寝る、寝る、寝るよ。大村君が不意来庵、しばらく話す、樹明君へ手紙を托して米を送つて貰ふ。夕、樹明来庵、庵の空気の険悪なのに避易して直ぐ帰つてしまつ

た！

・梅雨空おもく蜘蛛と蜂とがたたかふ・焼かれる虫のなんと大きい音だ・頬白がよう啼いて親鳥子鳥・何もないけどふるさとのちしやなます（砂君に）・話しても話しても昔話がなんぼうでもとんぼ通りぬけさせる　　　こんな句も・けさも二人でトマト畑でトマトをたべる（新夫婦に）　　　（一人ならば私だ！）

六月十五日

空も私もすこし晴れてきたが、……放下着。筍によき／＼、うまいなあ。やつと層雲句稿を送つた、ほつとした。シヨウチユウ！　いけなかつた、破戒の罰はテキメンだつた。Ｙさんにもすまなかつた、樹明君にもすまなかつた、とう／＼二人で酔つぱらつて、Ｍ旅館に酔ひつぶれてしまつた、……何といふダラシなさだらう！

六月十六日　六月十七日　六月十八日

こん／＼と寝た、寝る外ないのだ！

六月十九日

……ヨリいけなくなつた、……シヨウチユウの誘惑、泥酔の醜態。……放下着する外ないとすれば、行乞流転のくりかへしか、それとも自殺のハカナサか。……衝動性変質者のみじめさ。樹明君に謝し、同時に戒めます、あんたもあぶない！

六月廿日

今日から断食、いや、絶食。

六月廿一日

夕方だしぬけに金井三郎さん来庵、対談一時間あまり。お茶もあげなかつた、すまなかつた。お土産として、日本魂の二合罎を戴く、胡瓜をもいできてさつそくに飲む、酒はうまいけれど、……あゝ。

六月廿二日

晴、身心やつと落ちつく、ちつとも睡らないで、四時には起きて身

辺整理。時計をマゲテ――マゲルほどの品ではないが――それで米を買ふ。三日ぶりにオマンマにありついたのである。米は安い、酒は高い。先日来の自分を反省して悲憤やる方なかつた、馬鹿、阿呆、頓間、間抜。死にも死ねないやうになりつゝあつたのだ、情ない。樹明君が死にそこなつた私を案じて給仕をよこした、ありがたい志だつた。△暴風一過の境地である。

　いぬころぐさを活ける、去年をすぐおもひだす、おどり子草も咲いてゐる、すぐまた一昨年のことをおもひだす。……ぐみの実、草いちごの実、おもひでがあまりに多い。虫が鳴く、こうろぎよ。……虫が歩く、油虫だ。△近眼と老眼とがこんがらがる、躓き易くなつて老を感じる。

…………………………………………………………

　・ま昼の花の一つで蝶々も一つで・かどは酒屋で夾竹桃が咲きだした・朝風の草の中からによこりと筍・ゆふ空ゆたかに散りくるはあざみ・ほんに草の生えては咲く（改作）　うらは藪で筍によきによき（其中庵風景）・水田たたへてつるみとんぼがゆふ日かげ・雲雀が空に親子二人は泥田の中・鍋や茶碗や夜つぴて雨が洗つてくれた
かういふ句も　抱かうとして夜の雨ふる

　　六月廿三日

　昨夜もよく睡れなかつたので、何となく身心が重苦しいけれど、落ちついたことに間違はない。学校に樹明君を訪ねて、先夜のお詫とお礼とをいふ、君はまつたく病人だつた、身心共に。△酒はよいが、アルコールがいけないのだ、人そのものは申分ないのに意志が弱いのだ。君よ、しつかりして下さい、私もしつかりと生活する。空梅雨の暑苦しさ梅雨の暑苦しさ」に傍点］、それは私たちの身心のやうな！放下着、そしてまた放下着。行雲流水、無礙無作、からりとして生きて行け。田植がはじまつた、毎日、朝から晩まで泥田を這うて働らく人々に対して、私は恥づかしく思はないではゐられない。豚が食べてゐる、クン／＼鼻を鳴らして――豚は食慾そのものであるやうに感じさせる、食べて肥えて、そして殺される豚だ。雀の子がうまく飛べない、畦から畦へと餌をあさつてはゐるが――多分、彼はみなしごだら

う。夕方、ばら／＼と降つた、なか／＼降らない梅雨だ。風呂を飲んでしまつた、澄太君に申訳がない、どうでもかうでも風呂代だけは捻出して、その野風呂にはいつて貰はなければならない。……中外日報を読んで、無塀さんを思ひだした、品のよい、おとなしい芸術家である彼はしづかな力を持つてゐられる。

断想△心清浄、身清浄、　身清浄、心清浄△山のすがた、水のすがた、人間のすがた。△すがた即こころ、こころ即すがた。△そのすがたをうたふ、それがこゝろの詩である、私の俳句である。

六月廿四日

曇、梅雨らしく降りだした。△私は平静である、清澄でさへあると自惚れてゐる、私は私にかへることが出来たから、私は私の場所に坐つてゐるから。一切が過ぎてしまつた、といふやうに私は感じつゝある。午後、樹明君が酒井教諭をひつぱつて来た（本当は酒井さんが樹明君に案内されて来庵したのださうなが）、無論、酒と肉とを御持参になりまして、——三人ほどよく酔うて暮れる前に解散、それから私は御飯を炊いて筍を煮て夕飯。快眠、眼覚めたのが十二時頃、漫読してゐると、ゴム靴の音がする、樹明酔来、手のつけやうがないので、ほつたらかしておく、かういふ場合の彼は（必ずしも彼に限らないが）人間でなくて獣だ、鼾は大蛇の如く、そして野猪の如く振舞ふ、あゝ酒好きの酒飲みの亭主を持つた女房は不幸なるかな！（これは樹明君にのみ対して投げる言葉ぢやない）

酒についての覚書△味うてゐるうちに（飲むのではない）酒のうまさがよい酔となるのでなければ嘘だ、酒はうまい、酔へばます／＼うまい。……

六月廿五日

曇、雨、梅雨らしくなつた、梅雨は梅雨らしいのがよい。樹明君は朝になつてもまだ酔が醒めないらしい、それでも、ひよろ／＼跛をひいて出勤した、樹明君よ、しつかりして下さい、あなたがしつかりしてゐてくれないと、私も倒れる（私にはそんな忠告を敢てする資格はないけれど）。晴ならば山口へ行くつもりだつた、明日は澄太君、砂

吐流君が来て下さるのに、もう米もない、醤油もないから、本でも売つていくらか拵らへるつもりだつたが。自然生の桐苗を移し植ゑた、どうか枯れないでくれ。窓に近く筍二本、これは竹にしたいと思ふ、留守にＴさんが来て抜かれては惜しいと思つて、紙札をつけておく、『この竹の子は竹にしたいと思ひます　山頭火』昨夜の酒は私にはよかつた、今日は昨日よりも落ちついて、そして幸福である。

　・ここでもそこでも馬を叱りつつ田植いそがしい・叱つても叱られても動かない馬でさみだれる・人がきて蠅がきて賑やかなゆふべ・どうにもならない人間が雨を観る・負うて曳いて抱いてそして魚を売りあるく（彼女を見よ）

　　六月廿六日

　梅雨曇、まづ玉葱と筍とを茹でて友を待つ。昨夜もよく眠れたが、狂犬に追つかけまはされた夢を見た、その狂犬は煩悩だつたらう。たよりいろ／＼、なかんづく、緑平老からの手紙は涙がこぼれるほどうれしかつた。晴れてきて蒸暑くなつた。街へ、買物かず／＼、米と醤油と買へたのが何よりも有難かつた。友に与へた手紙のうちに、——

　老来なか／＼に思ひ惑ふことが多くて、ます／＼グウタラとなり、モノクサとなりつゝあります、どうでも少し歩いて来なければなりません。……

　駅のポストへ行つて戻つたところへ、ひよこりと澄太君があらはれた、さつそく一杯やる、胡瓜がうまかつた、酒のうまさはいふまでもない、何もかも愉快々々。六時の汽車で帰りたいといふので駅まで見送る、待つてゐる人のところへかへるとは、ちと癪にさわりますね。月がよかつた、陰暦の五月十五夜だつた、一人で観るには惜しい景色であつた。△月がこぼれる、月かげを拾ふ、といふやうな文句が思ひ浮べられた。澄太君の友情はありがたい、水を汲んでくれ、そしてまた小遣までもおいてくれて、——私はこんなにして貰つてもよいだらうか！螢がとぶ、すこしさびしい。のう／＼と蚊帳の中に横はつてもなか／＼に睡れなかつた、何だか少し興奮して。

　・山はひそかな朝の雨ふるくちなしの花・子供が駈けてきて筍によ

きりと抜いたぞ　赤い花や白い花や梅雨あがり　降つて降つていつせいに田植はじまつた・花さげてくる蝶々ついてくる　　　石鴨荘即事　草山のしたしさは鶯のなくしきり（改作再録）・酔へばはだしで歩けばふるさと・さみだるるやはだしになりたい子がはだしとなつて・なんとよい月のきりぎりす・はだかで筍ほきとぬく・竹にしたい竹の子がうれしい雨

　　六月廿七日

　曇、よく睡れないので明けきらないうちに起きた、水鶏（？）がしきりに啼く、あはれな声で。草苺のうつくしさよ。朝酒のよろしさ、一人のよろしさ。ほろ酔機嫌で、床屋へ、湯屋へ、酒屋へ、質屋へ、仕立屋へ、そして防府へ行つた。三田君の宅に泊めて貰ふ、Ｅ君にもＩ君にも逢ふことは逢ふたが、もう彼等と私との間には友情が残つてゐない、三田君は特別だ、彼は世間的には失敗した方だけれど、人間としてのあたゝかさを失つてゐない、彼のあたゝかさは沸かしさあたゝかさでなくして湧くあたゝかさだ。月はよかつたが蒸暑い夜だつた、飲みすぎたので寝苦しかつた。

　・ならんで竹となる竹の子の伸びてゆく雨・竹となりゆく竹の子のすなほなるかな・山から山がのぞいて梅雨晴れ　月夜の青葉の散るや一枚・もう一めんの青田となつて蛙のコーラス・がつがつ食べてゐるふとると殺される豚ども・街はうるさい蠅がついてきた　ついてきた蠅でたゝき殺された・風ふくとんぼとまらないとんぼ

　　六月廿八日

　晴、いよ／＼空梅雨だ、もう真夏の暑さである。昨日の失敗を省みて、気短かと早合点とを戒める。――朝、九時前にオヨリデキヌ一一ジ二〇ヱキデオアイシタシといふ電報が砂吐流君から来た、で、十時過ぎには駅へ出かけて、大社線十一時弐拾三分止の列車を待つた、が、車内にもプラツトにもどこにも砂君の姿は見えない、そこで気短かの私は早合点して、さては何かの事情で延引したのだらう、留守中に何とかいつてきてゐるかも知れないと考えたので、急いで帰庵したのである、そして念のために、学校に樹明君を訪ねたら、案の定（といふ風に感じたのである）、砂君が自動電報をかけて、私を探しても

見当らないから、残念ながらこのまゝ帰京するといふことであつた、それは十一時三十分頃だつたといふ、私もその頃駅の附近にゐた、もうすこし待つて十一時四十分東上急行車の発着までゐればよかつたのだ（砂君は多分自動車でやつて来て、その列車に乗り込んだのである）、人生の事おほむね斯くの如し、ほんの五分か十分の現在が当来の十年二十年となるのである。何ぞ塩の安きや、私は一ヶ年間に五銭づゝ三度しか塩を買はない、それで十分なのである、一年十五銭の塩代だ。

　宮市はふるさとのふるさと、一石一木も追懐をそゝらないものはない、そして微苦笑に値しないものはない。天神様へ参詣した、通夜堂から見遙かす防府はだいぶ都会らしくなつてゐる、市となるのも時の問題だらう。町役場で戸籍謄本を受ける、世間的に処理しなければならないことが私にもある！駅前の菖蒲園を見た、日本的なのがうれしかつた。十一時の汽車で帰庵、うちがいちばんよい（といふことは防府が私をひきとめるだけのものを持つてゐないといふことだ）。△……足らで事足る生活……それが私の現在の、そして将来の生活でなければならない。日が傾いてくると、きゆつと一杯ひつかけたくなつて、もうたまらないので、わざ／＼Ｔ店まで出かけて、焼酎一杯、息なしに飲む、だいたい焼酎を私は好かない、好かないけれど酒の一杯では酒屋の前を通つた位にしかこたえない、だから詮方なしに焼酎といふことになる、酒は味へるけれど、焼酎は味へない、たゞ酔を買ふのである、その焼酎がいかに私の身心を害ふかは明々白々だ、だから、焼酎を呷ることは、まあ自殺――慢性的な――今の流行語めかしていへば slow suicide だ！　それはむしろ私に相応してゐるではあるまいか！△転ぜられるところが転ずるところ、そこは物心一如、自他不二だ。△腐つた物をたべてもあたらない、――こゝまでくるとりつぱにルンペンの尊さを持つてゐる。いはでもの事をいふ私、しなければならない事をしない私。ふと眼がさめたら、とてもよい月夜、もう十二時を過ぎてゐた、近来稀な快眠熟睡だつた。

　　　　防府にて・この家があつてあの家がなくなつてふる郷は青葉若葉・青田はればれとまんなかの墓・青草をふみ鳴らしつつ郵便やさん　　　再録二句・月からこぼれて草の葉の雨・あほげば梅の実、ひ

よいともぐ・ほろにがさもふるさとにしてふきのとう（追加）

故郷といふもの故郷はなつかしい、そしていとはしい、それが人情だ。故郷の人間には何の関心を持たなくても、故郷の風物には心を惹かれる。一木一石、すべてが追想を強いる。歩々の微苦笑だ、ニガワラヒといふやつだ。（防府にて）

・朝風のトマト畑でトマトを食べる（改作再録）・うらへまはる私ととんぼとぶつかつた

六月二十九日

晴、昨日今日、梅雨には珍らしい青天、そして暑気だ。九時の汽車へゆく、もう米もないし、米代もないから。朝から失敗した、年はとりたくないもの、此頃は物忘れして困る、といふのは煙草代と汽車賃だけはある銭入を忘れて出立したのである、八百屋のおばさんに事情を説いて、時計を預けて、五十銭玉一つを借りる、おかげでバツトが吸へて、ガソリンカアに乗れた。古本として多少の銭になりさうな弐冊、それが八十銭になつた、さつそく一杯、そしてＳ家を訪ねる、周二さんはまだ帰郷してゐない、赤の事で当局に油をしぼられてゐるらしい。湯田の千人風呂で一浴、バスで上郷まで、新町で下車して、朝のマイナスを返す、やれ／＼。二時半帰庵、うちほど楽なものはない。今日もまた焼酎を呷つた、それだけ寿命を縮めた。何となく——それはウソぢやない——人心凝滞、世相険悪を感ぜざるを得ない、ダイナマイトはうづたかく盛られてある、まだ点火するほどの人間が出現しないのだ！我儘を許されない身心——かうまで心臓が弱くなつてゐるとは思はなかつた、ああ。△くちなしの花、その匂ひが（その色よりも姿よりも）私を追想の洞穴に押し込める。……△アルコール中毒、ニコチン中毒、そして俳句中毒、酒と煙草と俳句とはとうてい止められない、止めようとも思はない。△在る世界から在るべき世界へ、在らずにはゐない世界へ、そして私はまた在る世界へかへつて来た、在るところに在るべき、或は在らずにはゐないものがある、——私をそれを知るといふよりも感じる、そしてそれを味はひつゝある。私も破家散宅したけれど、それは形骸的であるに過ぎなかつた、これから心そのものの放下着だ。

『旧道』新道はうるさい、おもむきがない、歩くものには。自動車が通らないだけでも旧道はよろしい。旧道は荒れてゐる、滅びゆくもののうつくしさがある。水がよい、飲むによろしいやうにしてある。山の旧道、水がちろ／＼流れるところなどはたまらなくよい。

或る農夫の悦び・植ゑた田をまへにひろげて早少女の割子飯・田植もすましてこれだけ売る米もあつて・足音は子供らが草苺採りにきたので・夕凪の水底からなんぼでも釣れる・露けき紙札『この竹の子は竹にしたい』・ほんとにひさしぶりのふるさとのちしやなます（改作再録）　　　山口後河原風景・おいとまして葉ざくらのかげがながくすずしく　木かげがあれば飴屋がをれば人が寄つて・ま夏ま昼の火があつて燃えさかる　大橋小橋、最後のバスも通つてしまつて螢・バスの※花の、白百合の花のすがれてはゐれど　　　緑平老に・あれからもう一年たつた棗が咲いて

六月三十日

晴、曇、蒸暑いこと。▵水はともかく、ビールのやうな句も出来ない、出来るのは濁酒のやうな句だ、ウソはないけれど。ごろ／＼と寝たり起きたり、あゝ退屈だ、もつたいないが。坐敷にぱたりと音を立てゝとかげ殿の散歩！とんぼがあたまのてつぺんにとまりました。蝉の声です、初耳です、もちろんみん／＼蝉です。今日も焼酎を呷ることを忘れなかつた、といふよりも、呷らずにはゐられなかつた、飲むときは胸が痛いほど苦しい、しかし飲んでしまへば何となくうれしくなる。……ウソイツハリのない自殺的行為だ。▵歩けなくなつた山頭火、みじめな山頭火だ。青紫蘇の香のよろしいこと。▵心境はかはる、気分はうつる、——生きたくも死にたくもなかつた、生きてゐてもよく死んでしまつてもわるくなかつた、——生きてゐたくなくなつた、——死んでしまひたくなつた、——それは自然的推移、必然的変化ではあるまいか。——▵事物の破壊から自己の破壊へ！

……………………………………………………………

・筍あんなに伸びて朝月のある空へ・いつも鳴る風鈴で夏らしう鳴り・晴れて朝から雀らのおしやべりも（改作）・糸瓜の蔓がこゝまで

筍があつた・空ラ梅雨のゆふ風や筍はしづくして

　　七月一日

　晴、つゝましくすなほな生活を誓ふ。

　こゝろあらためて七月朔日の朝露を踏む

　▵筍を観てゐると、それを押し出す土の力と、伸びあがるそれ自身の力とを感じる。▵ウソからホントウの自殺へ——彼は酔うて浪費つて、毒をのんだとウソをいつたが、とう／＼ホントウに服毒しなければならなくなつた、そして死んだのである。……移植した三本の桐苗がみんなついたらしい、二三年もたつたら青々として夕日をさえぎつてくるだらう。樹明来庵、飯を食べたい、そして銭を三十銭貸してくれといふ、昨夜から飲んで帰らないのださうな、目前酔うてゐないのがうれしくて、飯を炊き銭入をはたいた。……焼酎を呷る、焼酎が焼酎をよぶ、酔うた、泥酔した、しかし、庵にかへつてぐつすり寝た。酔うても酔はないでも、悠然として変らない身心となりたい。シヨウチユウよ、サヨナラ。

　　家いつぱいに昇る日をまともに郵便を待つ・たづねてくれるみちの草だけは刈つておく・郵便やさんがきてゆけばまた虫のなく　すこし風が出て畳へちつてくるのは萱の穂・ひとりひつびり竹の子竹になる・うれしいこともかなしいことも草しげる・生きたくもない雑草すずしくそよぐや　あをあをと竹の子の皮ぬいでひかる・竹の子竹となつた皮ぬいだ・竹の子伸びるよとんぼがとまる

　　七月二日

　曇、酔覚のむなしさ、はかなさ、終日読書。

　さらにこゝろをあらためて七月二日の朝露をふむ

　　七月三日

　晴れきつて暑かつた、今日も終日読書。水、水、水はうまいな、ありがたいな。身心が弱くなつたことを痛感する。

　・雑草すゞしく人声ちかづく・すくすくと筍のひたすら伸びる・暮

れるとひやつこい風がうら藪から・けさは鶯がきてこうろぎも鳴く・炎天、かぜふく・おもくて暑くてねぎられてまけるのか

七月四日

晴、夏の朝はよろし。一天雲なくして暑い、まだ梅雨のうちだのに。昨夜は寝苦しくて寝不足だつたので、ぐつすりと昼寝。四日ぶりに街へ出かけてコツプ酒一杯借りた。たいへん忘れつぽくなつた、忘れてならないことを忘れるやうになつた。

ここにも筍がとなりの藪から・炎天、とんぼとぶかげ・いま落ちる陽の、風鈴の鳴る

七月五日

晴、とても暑くなるだらう、終日読書。蝉が鳴きはじめた、まだ長く巧くは鳴けないが。何といふ鳥か（雉子かとも思ふが）、迫るやうな鋭い声で裏山の奥の方で啼く。よいたよりもよくないたよりもこないさびしさだつた。うちの初茄子を味ふ。野菜に水をやる、いかに私の身心が弱つてゐるかを知る。

・けふも暑からの山の鴉のなくこゑも・朝からはだかでとんぼがとまる

七月六日

好晴、身心清澄。あれからもう一年たつた、緑平老をおもひ白船老をおもふ。碧巌を読む、碧巌はいつ読んでもなんど読んでも興が深い、そこに禅の語録の味はひがある。私に貧閑の記があるべきだ、あらなくてはならない。今日も郵便が来ない、さびしいなあ！樹明往訪。何日ぶりかで新聞を読む、斉藤内閣が総辞職して大命が岡田大将に降下したことを知つた。米がなくなつて思案してゐたら、米を与へられた、米、米、米、米なるかなです、日本人は米がなくては生きてゐられない。暑い、暑い、ぢつとしてゐて、雑草の風がふくのにこんなに暑い、さぞや。……さびしいけれどしづかで、貧しいが落ちついてをります、……と友へ書いた、私はやうやく落ちついた、過去の一切の罪障を清算しなければならない。……

・かうしてながらへて蝉が鳴きだした・藪を伸びあがり若竹の青空・若竹ゆらゆらてふてふひらひら・いつぴきとなりおちつかない蠅となつてゐる・炎天の萱の穂のちるばかり・ま昼ひそかに蜂がきては水あびる

七月七日

晴、新暦では七夕、一年一回の逢瀬は文字通りに一刻千金だらう！朝は涼しいよりも寒い、そして日中は土用よりも暑い。一雨あつたら、人よりも草木がよろこぶだらう、田植の出来ない地方、田植しても枯渇する地方のみじめさ、気の毒さ。身心ます／＼平静、山頭火は山頭火であれ。若竹のすなほさ、のびやかさ、したしさ。やつと郵便がきた、北朗君がよく覚えてゐて鈴を送つてくれた、忘れてゐたゞけ嬉しかつた、「松」「地に坐る者」などそれ／″＼ありがたい。嫌な手紙を書いた、それは書きたくない、書いてはならない手紙だつた、生きてをれば、生きるために、かういふ手紙を書かなければならないのだ。雨乞の声が山野に満ちてゐる。ちよつと街まで出かける、心臓の弱さがハツキリ解る、ぽつくり往生こそ望ましい。夕方、樹明君が来た、酒と下物とを持つて、――よろしくやつてゐるところへ、ひよこりと黎々火君がやつて来た。黎々火君をそゝのかして街を歩く、持つてゐるだけ飲んでしまつた（といつてもみんなで一円五十銭位！）、酔ふ、とう／＼野菜畑で一寝入した。……

・すゞしい風のきりぎりすがないてとびます・炎天、なんと長いものをかついでゆく・父が母が、子もまねをして田草とる・炎天、きりぎりすはうたふ・朝の水があつて蜘蛛もきて水のむ

七月八日

晴、とても暑い日だつた、百度近くだつたらう。朝蝉が鳴く、朝酒がほしいな、昨夜の酒はだらしなかつたけれど、わるい酒ではなかつた、ざつくばらんな酒だつた。八時頃、約を履んで樹明来、釣竿、突網、釣道具、餌、そして辨当まで揃へて。三人異様な粉装で川へ行く、途中コツプ酒、与太話、沙魚は釣れなかつたが蝦をすくうた、裸体で水中を歩くのは愉快だつた、船のおかみさんが深切にも辨当を食べる用意をしてくれました。帰途、酒と豆腐とを買つて（三人で買へ

るだけ、金九十五銭！）、ゆつくり飲んだ、それは「豆腐をたべる会」第一回でもあつた、とかうして七時解散。

　とんぼふれても竹の皮のおちる・とぶは萱の穂、おちるは竹の皮・いつもの豆腐でみんなはだかで　蝉なくやヤツコよう冷えてゐる　したしさははだかでたべるヤツコ・風はうらからさかなはヤツコで・金借ることの手紙を書いて草の花・朝蝉、何かほしいな・夕蝉、かへつてゆくうしろすがた（黎々火君に）・ともかくもけふまでは生きて夏草のなか・ぽとりぽとり青柿が落ちるなり

　七月九日

　晴、降ればよいのに、降りさうにもない。甘草、またの名は忘れ草を活ける、百合よりも野趣がある。蟻地獄といふもの、何だか気味悪い存在だ。ちよつと街のポストまで、そしてちよつと一杯！夕蝉なけばまた一杯やりたいな！

　・風がふきぬけるころりと死んでゐる（自弔）

　七月十日

　晴、曇、夕立がきさうだつたが、バラ／＼と落ちたゞけ。昨日も今日も終日読書。一杯やりたいが、それどころぢやない、一椀があやしくなつた！周囲が（私自身も）コセ／＼してゐるのが嫌になる、もつとユツタリとしたいものだ。△……生きてをれば生きてをるがために、いひたくない事をいひ、したくない事をしなければならない、……生きてゐたくないと思ふ。三八九復活の外はない、やつぱり謄写刷がよい。肋膜の工合が変だ、うまく死ねないものか！

　・食べる物がない涼しい風がふく・どうせもとのからだにはなれない大根ふとる　生えて移されてみんな枯れてしまつたか・酒と豆腐とたそがれてきて月がある・青田風ふく、さげてもどるは豆腐と酒・食べる物はあつて酔ふ物もあつて草の雨

　七月十一日

　晴、曇、晴、そして待ちに待つ手紙は来ない。今日は食べる物がないから砂糖湯を飲む、そして胡瓜を食べる。米屋は米を貸してくれな

い、酒屋は酒を飲ましてくれた！酔ふ、虚無が酔ふ、踊らう、踊らう。肺炎再発の気味、生死去来は御意のまゝ！何か食べたいな――これが人間の本音かも知れない。

　生死去来

　　七月十二日

　曇、やつと雨になつた。……慈雨、喜雨、生命の雨だ、降れ降れ、降つてくれ。何とうれしい手紙が、それはＮＫから、そして地獄がすぐ極楽だ！▵食気と色気の二つが人間生活の根源だつた。飯のあたゝかさ、うまさ、ありがたさ。よく飲んでよく食べて、ぐつたりとしてゐるところへ黎々火君ひよつこり来庵、酒と米とを持つて、――はだかで、かやの中で飲んだり食べたり。彼の憂欝はよく解る、私も老来かへつて惑ひ多し。

　父と子との間　　――（Ｋをおもふ）――

　　七月十三日

　雨、曇、晴。朝の四時の汽車で黎々火君は出立出勤。▵過去一切の悪業を清算する時機が来たやうだ。酒といふものは、飯といふものは、銭といふものは、句といふものは、人間といふものは。今の今、こゝのこゝ、私の私。――ちよつと街まで、午前、ちよつと駅まで、午後、夜は読書。無事平安の一日だつた、めでたし、めでたし。

　・どうにもならない空から青柿・若竹はほしいままに伸びる炎天・雨を待つ風鈴のしきりに鳴る・炎天のはてもなく蟻の行列・身のまはり草の生えては咲いては実る（改作）

　　七月十四日

　曇、おかげでよいお盆が迎へられました。鬼百合を活ける、力強い花である。句稿をおくる、かなり句作するのだが、おくるとなれば、さても少ない、自信のある句が少ないのである。あるだけの酒を飲む、街を歩いても、友を訪ねても、ちつとも慰まない、戻つて寝る、――まことにあぶない一歩だつた。▵父と子との間は山が山にかさなつてゐるやうなものだ（母と子との間は水がにじむやうなものだら

う）、Ｋは炭塵にまみれて働らいてゐる、彼に幸福あれ。雨乞が方々で行はれる、こゝでも今夜裏山で火を焚くさうな。

・空梅雨いちにち、どなられてぶたれて馬の溜息・空は空梅雨の雨蛙なくとても・その竹の子も竹になつた、さびしさにたへて・もう死んでもよい草のそよぐや（帰庵病臥二句）・死ねる薬はふところにある草の花・灯すよりぶつかつてくる虫のいのちで（改作）

七月十五日

今日も曇つてゐるが、降りさうでなか／＼降らない。酒に対する執着を放下しないかぎり、私の生活は安定しない。△まづ、消極的禁酒を実行しなければならない（進んで呷らないこと、退いて味ふこと、具体的にいひかへれば、ありもせぬ金で買うて飲まないこと、貰ふたら飲むこと、御馳走酒しか飲まないこと）。△個人的感情――社会的感情――人間的感情。午後、樹明君が来て、ゆつくり昼寝して帰つた、私は今日の君にフイリスチンを感じた、多分、君も今日の私にミサンスロピストを感じたであらう。

七月十六日

曇、だいぶ日が短かくなつた。昨夜はよくねむれた、九時から四時までぐつすりだつた。街のポストまで、ついでにちよいと一杯、つい破戒してしまつた！

・青田いちめんの送電塔かな・虫が蔓草のぼりつめて炎天・ひでり空、咲いて鬼百合の情熱は・しげりふかく忘れられたるなつめの実・きのふのいかりをおさへつけては田の草をとる・炎天まうへにけふのつとめの汗のしたたる

七月十七日

曇、今日こそは降りさうな。たより、いろ／＼のおもひ。蓮華がひらいた、まことに仏の花。今日の一杯は昨日の百杯よりも明日の千杯よりもうれしい。午過ぎ、ひよこりと周二さん来庵、暫らく話した。油虫！　この虫には閉口する、すまないけれど見つけしだいに殺す、百足と同様に。昨日のやうに今日も寝ころんで漫読。どうしても睡れないから、読んだり作つたりするうちに、やつと夜が明けた、身のつ

かれ、心のつかれ、かうなつては薬物の力で睡るより外はあるまい。……

・蝉の声はたえずしてきりぎりす・むしあつく鴉の声は濁つてゐる　窓へもからんで糸瓜がぶらりと・風の雀がとまらうとする竹がゆらいで・ゆふ風によみがへり草も虫も・暮れると出てくる油虫だけ

七月十八日

曇、朝から暑い、よその夕立。彼は子を負うて田の草をとつてゐる。豚小屋の豚を見るとき、嫌厭と憐愍とにうたれる。彼の結婚について考へる、……私は。……また一杯、サケ一杯では酒屋の前を素通りした位にしか感じないから、シヨウチユウにした、——破戒の破戒だ。学校に樹明君を訪ねる、別状なし、どちらも酒が飲みたい顔色をしてゐたらう！私のでかい胃の腑よ、呪はれてあれ、でかすぎる。久しぶりに入浴、そして顔剃。めづらしく犬がきた、猫もきた、鼠もきてゐるらしい。夕暮、すこしセンチになつた、白髪のセンチメンタリストか。

・ひでりつづきの踊大鼓の遠く近く・風鈴すずしい雑草青い朝がきた・いつまで降らない蕗の葉もやぶれ・ぎいすはらめばはひあるくひでりばたけ・百合咲けばお地蔵さまにも百合の花　　酒中酒尽・よい酒だつた草に寝ころぶ（末後の一句）

七月十九日

曇、思はせぶりなお天気ではある。△裸礼讃、むろん私は朝からハダカだ、お客にもすぐハダカになつてもらう、ハダカは其中風景のありがたい一景だ。△感覚的なものが最も現実的である、だから、食慾と色慾とが生活の根本動力であり、ニヒリストが官能に走る所以である。気分に沈静になつてくる、あまり好もしい状態ではない。△今日の、招かないお客さんとして、とんぼ、とかげ、蜂、蠅、かまきり、きりぎりす、そしてあぶら虫は嫌な食客である。何と糸瓜と糸瓜とが握手してゐる、その蔓が蔓にからんでござるのだ。今夜も不眠苦、不眠は生理的には勿論、心理的にも、道徳的にさへもよろしくない。

・胡瓜ばかりたべる胡瓜なんぼでもふとる・炎天落ちる葉のいちま

い　炎天、がつがつ食べるは豚　青田のなかの蓮の華のひらいた・汲みあげた芥がおよげばいもりの子かよ・バケツの水もゆたかにいもりの子はおよぐ・からむものがない糸瓜が糸瓜に・食べる物がない夜中のあぶら虫でやつてきた

　　七月二十日

　曇、——后晴か！　と思つてゐたら降りだした！△垣根から白い花が咲いてゐた、私はぢつと眺めてゐたが、たまらなくなつて、一枝下さいといつたら、若い妻君が、さあどうぞといつてナイフまで持つてきてくれた、彼女はおなじく白い花だつた。（白木槿の花）彼のハズは幸福だらう、幸福でなくちやならない。△一切は死に対する心がまへ、死についての身じまひではなからうか、もとより生や生の全機現、死や死の全機現ではあるが。△うまい句とよい句、——これが解らなければダメだ、私としてはうまい句を望まない、よい句を作りたい、それは真実の句だ。どうにもやりきれなくなつて、あの店この店とヤケで二三杯飲み歩いた、もしも人生に、いや私に酒といふものがなかつたら！とにもかくにもよい雨だつた。ねむれた、十時から五時まで、夢が夢につゞいたが。

　・草にも風が出てきた豆腐も冷えただろ・ゆふなぎを、とんでゐるてふねてゐるてふ・田の草をとるせなかの子は陽にやかれ・めつきり竹になつてしづくしてゆふ風に・ここを死場所として草はしげるまゝに・汲む水もかれがれに今日をむかへた

　　七月廿一日

　曇、時々雨、よその夕立のこぼれだらう。熊蝉最初の声、油蝉も鳴いた。△芭蕉撰集を読む、それは碧巌録のやうである、私には。△豚の如く——まつたく私は豚のやうに生活、いや、生存してゐる、異るところは、肉が食料として役立たないばかりか、焼却の手数を煩はすことだ！△私はなるたけ虫類を殺さないやうにしてゐるが（雑草を茂るがまゝに茂らせておくとおなじく）、油虫だけは見あたりしだい殺さずにはゐられない、彼等は食器を汚して困る、物をいためて困る、本でさへかじる、——しかし、私はいつも私のヱゴイズを恥ぢる。ねむれない、ねむれない、雨声を聴く、虫声に耳傾ける、そしてとろ／＼

とすれば、何といふ夢だ！　恥を知れ！

・百姓なれば石灰をまく石灰にまみれて炎天・朝はすずしくお米とお花とさげてもどる・夕立つや若竹のそよぎやう・青田も人も濡れてゐる雨のあかるく・こゝまでさくらが、窓あけておく・あすはかへらうさくらがちるちつてくる（追加）・病み臥してまことに信濃は山ばかり（飯田にて）

七月廿二日

曇、夕立、身心やゝよろし、豪雨こゝろよし。柿が大きくなつた、葉からのぞいてきた。死をおもふ。……樹明来、サケとトウフとカルモチンとザツシとを持つて。酔ふ（酔ひでもしなければやりきれなくなつてゐた私だつた）、そして山口へ、たゞ歩いた。△酔如件——これで何もかも解消！

・虫が火のなか声もろともに無くなつた・そばの花もうてふてふきてゐる・さびしさにたへて草の実や・さびしい手が藪蚊をうつ・月夜風呂たく麦わらもにぎやかに燃えて・宵月ほつかりとある若竹のさき

七月廿三日

晴、シアヤ／＼／＼（これは蝉）ヒヨロ／＼／＼（これは私）。朝酒三三杯ひつかける、これで先日来、不眠と疲労からくる、イラ／＼クヨ／＼がとんでしまつた、ほがらかな気分でラツキヨウを買うて戻つて漬けた。やつぱり私は私だつたのだ、山頭火は山頭火以外の何物でもありえないのだ！おもしろな、世の中は、人の身は。うちのひよろ／＼へちまも咲きだした。待ちかまへてゐる敬坊も中原さんもやつてこない。△壺の白木槿がしほれたので、鬼百合に活けかへる、前者はリフアインされたレデーのやうだつたが、後者は厚化粧した田舎娘に似てゐる。胃痛、そして読書。△自己忘却！　よろしい、酒を飲んで酔ふ場合ばかりでなく、任意自由にさうありたい。ねむれた、ありがたかつた、カルモチンよりアルコールだ。

・うつ手を感じて街の蠅うまく逃げた・うまく逃げた蠅めが壺の花のうへに（再録）・モシモシよい雨ですねよい酒もある待つてゐる（樹明に）・どしやぶりのそのおくで蠅のなく・草にてふてふがきて

あそぶ其中一人（本文に）・ランプ消せば月夜の雨が草に地べたに・ゆふぐれせつなくむしあつくうめくは豚か

七月廿四日

雨、万物がうるほうてゐる、だん／＼晴れて暑くなつた。たよりいろ／＼、とりわけて緑平老の手紙はいつもうれしい。

草にてふてふがきてあそぶ其中一人

△白い蝶に黄ろい蝶がまじつてゐる。樹明君から来信、お客はどんな都合かといふ、中原さんも伊東さんも、どうしたのかやつてこない、腹を立ててはならないとは思ふけれどやつぱり腹が立つてしようがない。……△裏山でもうつく／＼ぼうしが鳴きはじめた。夏の夜の散歩はよいね、方々で夏祭。めづらしい熟睡快眠だつた。

・山のすがたが三十五年の夢（山口にて）・ここで死にたい萱の穂の散りてはとぶ・山あをあをと死んでゆく・みんな死んでしまうことの水音・ぽとりと青柿が炎天の音・しがないくらしの、草がやたらにしげります・夏の夜あるけばいつか人ごみの中

七月廿五日

曇、少雨、まるで梅雨のやうな土用である。緑平老から大泉到来、これはまたよい雑誌だ、井師としみ／″＼話すやうな気がする、心がぴたりと心に触れる。※木と移植、昨年の桐はついたが、今年のは三本とも枯れた、莢竹桃はうまく根ついた、白木槿が根ついてくれるとほんとうにうれしいのだが。蠅と蚊と油虫と、彼等は毎日私を考へさせる！△いつみても、なんぼうみてもあかない雑草、みればみるほどよい雑草、私を雑草をうたはずにはゐられない。△わたくしごゝろと個性とは別物だ、私心がなくして、そこで個性が発揮されるのである。△蜩が鳴いた、しつかり鳴いてくれ。△生活の糧となる仕事、糧にする仕事ではない。△宗教的真理の芸術的表現、それが私の仕事だ。△自然（生活もその一部分）――律動――俳句的詠出。△生活に即するといふことは生活の奴隷となることではない。一時頃、樹明来庵、例の如くお辨当を食べ、そしてお昼寝だ、昼寝から覚めてさかんに悪口をいふ、やつてこないお客さんに向つて、――とう／＼たまらなくなつ

て、街へ出て一杯やる。よく食べてよく飲んだ、よく戻つてよく寝た。酔うて乱れない樹明を見出したことが何よりもうれしかつた。山頭火は酔うて朗らかだつた。△去年は蒲団を飲み、今年は風呂を食べた。……

・けふ咲きだした糸瓜が一つあすは二つで・うまくだまされたが、月がのぼつた（敬君に）・蠅はうごかない蠅たたきのしたで・いつしよに昼寝さめてかなかな（樹君に）・待つても待つても来ない糸瓜の花もしぼんでしまつた（礼、敬、二君に）・けさも雨ふる鏡をぬぐふ・月夜、飲んでも酔はない二人であるく（樹君に）

日記といふもの

改作再録・ゆふなぎしめやかにとんでゐるてふねてゐるてふ・病みて寝てまことに信濃は山ばかり・ちんぽこもおそそもあふれる湯かな（千人風呂）

山があれば山を観る雨のふる日は雨を聴く春、夏、秋、冬受用しつくさない花開時蝶来蝶来時花開

（善導大師の言葉）従仏逍遙帰自然、自然即是弥陀国「百花春到為誰開」

第27章
其中日記　07 (新字旧仮名)

花開時蝶来蝶来時花開

七月廿六日

曇、雨、蒸暑かつた、山口行。△心臓いよ／＼弱り、酒がます／＼飲める、——飲みたい、まことに困つたことである。朝、学校の給仕さんがやつてきて、山口へ出張の樹明君からの電話を伝へる、——今日正午、師範学校の正門前で待つてゐる、是非おいでなさい、——そこでさつそく出かける、上郷駅まで歩いて、九時半の汽車で湯田へ。千人風呂にはいつて髭を剃る、浴後一杯ひつかけることは忘れない、濡れて歩いて山口へ、予定通りに両人会合、二十銭の定食で腹をこしらへて、鈴木さん訪問、いつものやうに御馳走になる、冷し素麺がおいしかつた、それから、街をぶらついてゐると、幸か不幸か、伊東俊さんに邂逅、食堂から食堂へとうろついた、そしてさらに湯田で飲む、私たち二人は西村さんを尋ねあて、湯に入れて貰ひ、ビールを戴いた、むろん短冊や色紙は樹明君に煽動されて書きなぐつた、それからまた、祇園祭の人込を縫ひ歩き、最終のバスで帰庵、満月のうつくしさを賞する余裕もなく、ぐつすりと寝た、よくもあれだけ飲んだり食べたりしたものだ、そして無事におとなしく戻つてきたものだ、そのいづれも感心されてよい！今日の印象、——今日の感想——何となく心楽しい日（時々かういふ日がある、日々好日ではあるけれど）。汽車がバスより高いとは（上郷から湯田まで、汽車賃十三銭、バスは十銭、このバスは安くて心地のよい道である、今日は満員つゞきで、とても乗れない）。ガソリンカアの快さよ、逢ひにゆくにも飲みにゆくにも！田舎の娘さんのハイカラぶりはあまりよくありませんね、ゼイタクは一しほみじめですよ。マダムはシヤン、お嬢さんはスベタ、

まことにお気の毒なことですが。湯田はよいとこ。……千人風呂五銭の享楽！檻の猿、それをいつまでも見てゐる人々。ボロ着て涼しく、安らかで朗らかで。湯あがりの肌へ雨のかゝるも悪くない。さみだれて濁り湛へた水（といつても差支あるまい）からぼちやんと跳ねては大鯉のあそび。梅雨のやうな土用、しかし鰻は、せめて鰌でも食べたいものですね。糸米の山口が今日は殊によかつた、山口の山はうつくしい、含蓄があつて親しみがある。鱸のあらひ、鮒のあらひ、鮎の塩焼、いづれも結構だつたが、鮎はとりわけ有難かつた。人の世に、死のさびしさ、生のなやみはなくなりません。女よりも男、ビールよりも酒、海よりも山、樹よりも草、そして、——Ｎ旅館の三助君、とても感じがよかつた、そして二人の仲居さん、あまり感じがよくなかつた。Ｙ子さんは女性としての媚態を持つてゐない、そこがよいと思つた、彼女自身のためにはよくあるまいけれど。

・道がまつすぐ大きなものをころがしてくる・よい雨が音たかくふる、これで十分・かうして暮らして何もかも黴だらけ・山のみどりを霧がはれたりつつんだり・うれしい朝の、かぼちやの大きい花かな　赤い花が、墓場だつた　あつい温泉が湧いてのうせんかつらの花が咲いて　おぢいさんは高声で、ふんどしのあとも・濡れて歩いてしよんぼり昼顔・けふは飲めるガソリンカアで行く　むしあつくやつとホームイン（対校試合）・こんやの最終は満員でバスガールはうたひつつ・月へうたふバスガールのネクタイの涼しく

七月廿七日

晴、土用だからしつかり照つてくれ。蝉捕の児が三々五々やつてくる、うれしくもあればうるさくもある、私はやつぱり薄つぺらなヱゴイストだ。午後、樹明来庵、魚と米とを持つて、そして昼寝して晩飯をたべて、おとなしく帰宅。今日はアルコールなし。▵読書、思索、人間には自得の境地がなければならない、芸術は、殊に俳句はそこから生れる。管絃祭第一夜、ぽん／＼花火があがる。哀しい夢だつた。……

・しろいてふてふにいつうまれたかきいろいてふてふ・蚊帳越しにまともに月が青葉のむかうから・月の水鶏がせつなく啼いて遠ざか

る　郵便やさんがばさりと朝日へ投げだしてくれた

七月廿八日

快晴、涼しい快い夏の朝を味ふ。身辺整理。桔梗が咲く、さつそく壺に※す、その姿、その色、すべてがたまらなくよい、山桔梗はことに。M君の友情を味ふうちに、欝屈したふさぎの虫が反逆して、どろ／＼になつてしまつた、そして樹明君の友情をも攪乱してしまつた。……夕方、さうらうとして帰庵すると、待ちに待つた中原さんが来て待ちくたぶれて帰つたといふ置手紙がある、地団太踏んでも追つつかない、悔と恥と詫とを痛感しながら、そのお土産を戴く、酒、卵、さうめん、バナナ。……

・くらがり風鈴の鳴りしきる・炎天の鴉の声の濁つてゐる・月あかり白い薬を飲むほどは・草ふかくここに住みついて涼しく・炎天の地しばり草の咲きつづく・おそい月が出てきりぎりす・ねむり薬もねさしてはくれない月かげ・夜蝉よここにもねむれないものがゐる

七月廿九日

曇、こんな中日だつた、何といふ情ない。……樹明君から最後通牒みたいな葉書がきた、どうにも仕方がないから放任する。……

七月三十日

晴、昨日から寝つづけてゐる。夜半、酔樹明君が来て寝る、彼も無言、私も無言、夜が明けると帰つていつた、彼も無言、私も無言、この無言はまことに千万無量のものだつた。トマトを食べて、すこし心がなごんだ。こん／＼と睡つた。節酒するより外に方法なし、とても禁酒なんぞは出来ない。

七月三十一日

我昔所造諸悪業――皆由無始貪瞋痴――従身口意之所生――一切我今皆懺悔――

カルモチンのおかげで、やつとねむつた。

八月一日

晴、転一歩、歩々新。前後際断、たゞ即今の当念に生きろ！身辺整理、整理しても整理しても片付かない。沈欝たへがたし、自己に籠つて自己を罵る。暑さきびし、はだかでよこたはる。死の方へ、——死に面して、——一切我今皆懺悔。知死期か致死期か。ちよつと草刈りしてさへ溜息が出る、情ない肉体となつたものではある。つく／＼ぼうしが山から里へ。老来ます／＼惑ひ多く、悔いることばつかりなり。

八月二日

朝ぐもり、今日も暑いことだらう。とう／＼徹夜だつた、あたまは冴えてゐるけれどからだが労れきつてゐる、この情態がつゞけば自滅の外はない。カルモチンを飲んでも眠れないとはみじめだ、やつぱり。

カルモチンよりアルコールちよいと一杯やりましよか

一杯やりたいな、やりたいなだ！▵或る時は死にたい人生、或る時は死ねない人生。或る時は仏にちかく、或る時は鬼にひとしい。自分のうちに動物を見出すことはかなしい。やつと夜が明けた、朝日がよかつた。油虫め、食べるものがないから、本をなめマツチをかぢる、そして花までたべる、気の毒と思はないではないけれど、食べ物を与へる気にはなれない、油虫よりも蝿や蚊の方がよい、蛇よりも嫌な油虫だ。今日も身辺整理、いつ死んでもよい用意をして置かなければならない、遺書も書きかへなければならない。……

・風がすゞしく吹きぬけるので蜂もてふてふも・死ねる薬をまへにしてつく／＼ぼうし・草の青さをしみじみ生き伸びてゐる・住みなれて草だらけ・のぼる陽をまつ糸瓜の花とわたくしと・さらりと明けてゐるへちまのはな・朝月はすずしいいろの桔梗がひらく

炎天のヱンジンのまはるとゞろき・なんとかかんとか蝿もつれてきて・こゝろむなしくて糸瓜咲く　炎天、はてもなくさまよふ・炎天、否定したり肯定したり・右は海へ左は山へ木槿咲いてゐる　ひとりしんみりとゐてかびだらけ・なんと朝酒はうまい糸瓜の花

・炎天ぶらりと糸瓜がならんで・ゆく手とほく雲の峰とほく・暑

さ、この児はとても助かるまい（或る家にて）・もう秋風のすゝき穂をそろへ　虫なくや投げだした私なれども・しんみりあほぐ空のゆふ月があつた・山のしたしさは水音をちこち　雑草ふかく見えかくれゆく馬のたてがみ

・炎天の鴉一羽で啼く・こゝろあらためてつく／＼ぼうし・あきないひまなへちまなどぶらさがり（山口にて）・ふときてあるくふるさとは草の花さかり・炎天のレールまつすぐに・炎天のかげはとびかふとんぼ

　　　八月廿七日、故郷の妹の家を訪ねて・せんだんもこんなにふとつたかげで汗ふく・腹いつぱい飲んで寝るふるさとの水

　　九月六日

　曇、雨、晴、——私の心のやうだ。昨夜も不眠、徹夜乱読するより外なかつた。○まことに借金はサナダムシの如し。身辺整理、いつでも死ねるやうに、いつ死んでもよいやうに。——○なつめは誰にもかもはれなくて、なつてうれて落ちる、時代おくれとは人間のいふこと、なつめそれ自身のやすけさを見よ。すつかり秋、あまりに早い秋、虫がいそがしく虫のいのちをひろげる。……酒精中毒の徴候として、爪に筋があらはれた！長い夜がいよ／＼長い、あゝ。○無理のない生活、悔のない生活、本然の生活。

・空も秋がきた地しばり草の花も・つくつくぼうしよ死ぬるばかりの私となつて・死ねる薬が身ぬちをめぐるつくつくぼうし・今が最後の、虫の声の遠ざかる・家があつて墓があつて草が青くて　草の中ゆく私の死のかげ

　　九月七日

　曇つた空から雨が落ちる、まつたく秋だ。恥知らずの手紙を二つ書く、恥はむしろ洒した方がホントウだらう。○暗中在明、明中在暗、明暗雙々底。樹明君を学校に往訪する、数日ぶりに話した。四日ぶりに、人間に会うて話し、酒を一杯飲んだのである。沈黙は私をいら／＼させ、そしてじめ／＼させる。○不幸な鰐！　古い文藝春秋で此一文を読んで、たいへん動かされた。○門外不出、いや不能出。○とても

心臓が悪い、それはむしろ私のよろこびである、私は不健康をよろこぶほど不健康になつてゐるのである、そして私の不健康を救ふものはたゞ不健康そのものである。○四十にして惑はず、五十にして惑ふ、老来ます／＼惑うて、悩みいよ／＼ふかし。

・誰にあげよう糸瓜の水をとります　　　改作・猿と人間と金網と炎天と（湯田）　誰か来さうな糸瓜がぶらりと曇天・夕焼ふかく何かを待つてゐる・しぐれて遠くラヂオがうたひだした

九月八日

雨、風、身心沈静。○コン畜生、オイボレセンチめ、時々あたまをもたげる！樹明から層雲九月号を借りて来て読む、今月はもう来さうな雑誌が来ない、これもさびしいことの一つだ。○説いて詠ふのでなくて描いて詠はなければならない。夜、樹明来、連れ立つて、どしや降りの中を街へ、そしてそれからそれへ飲みあるく、とろ／＼がどろ／＼になつて帰庵、御苦労々々々。

・つゆ草のさけばとて雨ふるふるさとは・誰もこないでちら／＼するのは萱の穂で　ずんぶりと湯の中の手足いとほしや

九月九日

雨、そして晴、さすがに今日は胃がいたみ頭がおもい。短冊や半切を書いて書債を果たす。終日落ちついて読書。

質草一つ出したり入れたりして秋また質入する時計ちくたく蝿が打つ手のかげが秋風

九月十日

晴れたり曇つたり、しかし身心清澄、やつと不眠も去つたやうだ、いはゞ狂風一過の境地、しかしいつまた再来するかも計り難い。○最後の危機、最後の転換期、五十惑ともいふべきものだらう。秋の水ひえ／″＼と澄んで湛へてゐる。○生に即して生を離れる、——こゝだ、こゝだ。近郊散策、それから戻つて畑仕事。○耽る溺れる、から、味ふ楽しむ、へ。——

めうがのこそれもふるさとのにほひをさぐる・おもひでのみち尾

花墓場まで・ポプラに風も秋めいてきた坑木の堆積・こゝにわたしがつく／＼ぼうしがいちにち・月のへちまの水がいつぱい・いつでも死ねる草の枯るゝや

九月十一日

晴、安眠熟睡の幸福をめぐまれた。まことに好季節、百舌鳥が啼く、萩が蕾んだ、曼珠沙華が咲きだした。

九月十二日

Ｋさんから手紙、清丸さんから本、どちらも好意そのものゝやうでうれしかつた。黙壺来、黙壺君はフアンのフアンだ、酒、牛肉、豆腐、※」に「マヽ」の注記］、そして銭――それらはすべて彼が私に投げかける温情の断だつた。樹明来、めづらしくまじめで、彼らしくない彼であつた、さびしい彼だつた。払へるだけ払つて、飲めるだけ飲んだ、とう／＼※代を交番に行つて借りた、いや保證して貰つた！

・がちやがちやよ鳴きたいだけ鳴け・お彼岸のお彼岸花をみ仏に・何だか腹の立つ秋雨のふる・秋雨の一人で踊る・雨がふるので柿がおちるので

九月十三日

雨、よく降つた、井戸がいつぱいになつてあふれたほど。ひとりひつそり、読んだり考へたり、寝たり起きたり。

九月十四日

曇、よいたより、ありがたかつた。鴉が啼いて私を淋しがらせる、終日読書。

九月十五日

曇、雨、秋祭。田舎祭の追憶はかなしくもなつかしい。○酒が飲みたくなくなつた、そして飲まずにはゐられない、地獄である。今夜も地獄の亡者として、酔うて歩いた、辛うじて戻つて寝た。……○味ふ酒でなければならないのに酔ひたい酒なのだ、それはまつたく致命的な酒である。

九月十六日

曇、晴れてお祭日和となつた、お宮の大鼓が鳴つてゐる、私は門外不出。樹明来、行商の話に花が咲いた、それはまことに小つぽけな花だが、私の花でなければならない。

・枯れそめて赤いのは曼珠沙華　庵もすつかり秋のけしきの韮の花

九月十七日

曇、また雨になつた、身心沈静、あれこれ整理する。畑仕事、大根と蕪とを播く。何を食べてもうまかつた私が、何を食べてもうまくない私となつた、横着な私となつたのだ、ニヒリストとなつたのだ。ちよつとポストまで、ちよつと一杯ひつかけたが苦しかつた、何とニガイアルコールだらう。

・わらやしづくする朝の虫のなく・しんかんとして熟柿はおちる・つく／＼ぼうしもをはりの声の雨となり・夜のふかくこほろぎがたたみのうへに・灯火一つ虫がとんできては死ぬる・彼岸花さくふるさとは墓のあるばかり

九月十八日

晴、まつたく秋だ。久しぶりに入浴、髯など剃つて、ゆつたりした気分で、寝ころんでゐると、夕方、約の如く敬治君来庵、間もなく、樹明君も来庵、お土産の酒と蒲鉾とで一杯ひつかけて街へ。そして待望の街の灯を観た、やつぱりよかつた、チヤツプリンの本質に触れたやうな思ひがした、日本映画は新派悲劇的で興がなかつた。おとなしく敬君といつしよに帰庵、今夜もよくはねむれなかつた、一時間ばかりはぐつすりねむつたが。

・あさつゆのしそのはなこぼれては・藪のなか曼珠沙華のしづか
なんぼでも落ちる柿の木のしづくして・汲みあげた水の澄む雲かげ・水は透きとほる秋空・秋空のどこかそこらで何か鳴く・おちついて柿もうれてくる

九月十九日

曇、五時前に起きて朝飯の支度。酒があまつてゐたので朝酒、いつ

ものやうにうまくない、呪はれた山頭火！敬君は下関へ出張、駅まで見送る、戻つてから、預つた愛犬Ｓと遊ぶ。……ハガキが来たので鯖山の禅昌寺へ、大山君に会ふために。○犬と遊ぶ、――随筆一篇書けます。○単調と単純、――それはすなはち、世間生活と私の生活。ヤキムスビ、――犬に十分与へておいて残飯をそれに。澄太君からのハガキで、同君が鯖山の禅昌寺に出張してゐて、そしてとても訪ねてくれる余裕がないといふので、こちらから出かけて、逢うてくるつもりで、田舎道を歩きだしたが、いやはや濡れた／＼困つた／＼、『雨はふります、傘はなし』と子供にひやかされたりして、――とうてい、行きおほせないので、湯田の温泉で、冷えたからだをあたゝめてから、また濡れて戻つた、はだしであるいて。ひそかに心配してゐたＳはおとなしく留守番をしてゐた（最初はやりきれないらしかつたと見えて、座敷の障子をつきやぶつて室内にとびこんだらしい、その障子のやぶれも何となく微笑ましいものだつたが）、彼にも食べさせ、私も食べた。○何といふおとなしい犬だらう、上品で無口で、人懐かしい、犬小屋は樹明君がいつか持つてきた兎箱、二つに仕切つてあるから一つは寝室で、一つは食堂、そこには碗一個と古筵一枚、――それで万事ＯＫだ！水音がどこかにある、虫の声が流れるやうだ、溢れてこぼれるやうだ、寝覚はさびしい、しかしわるくない。○物の音が声に、そして物のかたちがすがたにならなければウソだ、それがホントウの存在の世界だ。○酔ひたい、うまいものがたべたい、――呪はれてあれ。

　水のながるるに葦の花さく・てふてふとべばそこここ残る花はある・あひびきは秋暑い街が長く・あすはおまつりの蓮をほるぬくいくもり・掃きよせて焚くけむりしづかなるかな・はれたりふつたりあひたうていそぐ・まよふたみちで、もう秋季収穫がはじまつてゐる音・出来秋ぬれてはたらく・夜あけの雨が柿をおとして晴れました・十字街はバスが人間がさん／＼な秋雨・濡れて越える秋山のうつくしさよ・ぬれてきてくみあげる水や秋のいろ　はだしであるく花草のもう枯れそめて・ヱスもひとりで風をみてゐるか・秋雨の夜がふける犬に話しかける

　九月二十日

雨、うんざりする雨だ、終日読書。朝酒があつた、やゝよろしい。○昨日の出来事が遠い昔の夢のやうな！街のポストまでちよつと出掛ける、ヱスがついてくる。降る降る、どしやぶりだ。いそぎの手紙を四本書いた、行乞から行商へかはるについての問合だ、それを持つてまた郵便局へ、むろんヱスはついてきた、そして途中その姿を見失つてしまつた、仕方がないからそのまゝ戻る、多分ひとりでかへつてくると信じて、——果して彼女は帰つてきた、彼女もうれしがつてゐる、私もうれしかつた。ヱスはほんたうにおとなしい犬だ。夕暮から暴風雨となつた、風は何よりも淋しい。

九月廿一日

やうやく風雨がおさまつて晴れてきた。菜園手入、ホウレン草と新菊とを播きつけた、これで播きたいものだけは播いた、大根、蕪、菜はもう芽生えてゐる、風で倒された蕃椒や茄子をおこしてやる。嵐の跡、野分の名残も寂しいものである。街のポストへ、酒屋で一杯ひつかけて、新聞を読んでゐる間に、ついてきたＳが見えなくなつた、生き物は厄介だな、探しても見当らないから戻る、Ｓよ、早く戻つてこい。大根一本四銭は高いな、田舎味噌百匁八銭。あれこれ、そそくさして夜が明け日が暮れる。——昨日もさうだつた、今日もさうだ、明日もさうだらう。……背広をきて、ステツキをついて、犬をつれて、山頭火も歩いたらどうです！庵の周囲は曼珠沙華の花ざかり、毒々しい花だけれど、捨てがたい野性味がある、人がかへりみないだけ私は心をひかれる。うすら寒い、ソデナシをきて頭巾をかぶつて、さて——だいぶおそくなつてＳが戻つてきた、何だかすまなさうにしよんぼりしてゐる、飯を与へると、いそいで食べて、ぐつたりと寝てしまつた、やれ／＼これで私は安心。

・けさの水音の、ゆふべがおもひだされる雨・サイレン鳴れば犬がほえる秋雨　嵐のかげのしろ／″＼と韮の花・日向ごろりとヱスもわたしも秋草に・あらしのあとの水音が身のまはり・月へ汲みあげる水のあかるさ・月のさやけさ酒は身ぬちをめぐる・月が酒が私ひとりの秋かよ

九月廿二日

秋日和、天高く雲遊ぶ、身心不調、沈欝せんすべなし。Ｓを連れて近郊散歩、彼は私よりもさびしがりやだ、途中でまた行方不明になつてしまつた、何しろ誘惑物が多いから、田舎者の彼はきよろ／＼して、ちつとも落ちついてゐない、……どうしても見つからない、困つたことになつた、……夕方また街へ出かけて探したが駄目だつたので、がつかりして帰庵、……と、彼はけろりとして戻つてきて、がつ／＼飯を食べてゐる。……ふけるほどよい月になつた、よくねむれた。

・秋風の腹たててゐるかまきりで（再録）・かまきりよいつ秋のいろがはりした・糸瓜ゆつたりと朝のしづくしてゐる・重荷を負うて盲目である・家いつぱいの朝日がうらの藪までも・風に眼ざめてよりそふ犬の表情で・這うてきたのはこうろぎでぢつとしてゐる

九月廿三日

朝寒夜寒。秋空一碧、今夜の月はうつくしからう、結庵三度目の名月、観月句会を催ほすのである。○酒慾をなくして酒徒のみじめさをなめる！酒はキレイ、一升借りた、樹明君が豆腐と鶏肉とをどつさり持つてきてくれた。午後、岔水君と黎々火君とが偶然いつしよになつて来庵、お土産は酒と下物。四人で飲んだり食べたり、興に乗じて山口へドライヴする、周二君を連れて戻る（君は来庵の用意をしてゐた）、酒と赤貝と菓子とのお土産が貰つて、いよ／＼ます／＼豊富である。さらに飲む、食べる、話す、月が昇る、虫が鳴く、あゝユカイ、ユカイ。十時の汽車に岔水君を、バスに周二君を見送る。樹明君はうなつてゐる、黎々火君はねむつてゐる、私はねむれない、後始末をして、残つた酒を飲みほす、これは私の悪癖の一つだが、どうにもならない。今日の失敗は湯田のＮ女を訪ねたことだつた、誤解される私も悪からうが、誤解する彼等もよくはあるまい。

・月がまろい夜を逢うて別れた・百舌鳥がてつぺんに落葉しはじめた樹・秋草ふみつつかりそめの犬とあとさき・月夜の柿がばたりぽとり（改作）・木の葉ちるや犬もわたしもおどろきやすく・サイレン鳴ればさびしい犬なればほえ・ヱスもわたしもさびしがる月のこうろぎも

九月廿四日

秋晴、秋季皇霊祭。掃く、拭く、障子のやぶれをつくらふ。黎々火君を未明の汽車に、樹明君は腹工合がいけなくて頭があがらない。ヱスも私も昨日の御馳走のおあまりを頂戴する。Ｓはさびしい犬だ、あまりにつつましくおとなしい、何だかあはれつぽい犬ではある。樹明君やうやく起きて、昼飯をたべて帰つてゆく。このしづかさは（さびしさではない）どうだ！今夜もまた眠れないらしい、不眠は何よりも苦しい、不眠がつづくと自殺したくなる。……

・柿の葉や実やおしみなくふる・みごもつていそがしい虫でまさに秋風・お彼岸花もをはりのいろのきたない雨・ヱスもわたしも腹をへらして高い空

▵糸瓜（随筆）▵犬と遊ぶ（雑文）

九月廿五日

晴、曇、そして雨、私の気分もそんなだつた。一昨日の汚れものをやつと片づける、鶏肉の脂肪でズル／＼するので閉口した。何となくいら／＼する日である、心持が険しくなつて、犬のぢやれつくのも癪にさわる。……自己省察。人間の一生、自我の生活。私はつつましく、きよく、あたゝかく生きてゆく外はない。身心不調、発熱倦怠。Ｓの弱虫め、猫にとびつかれて悲鳴をあげた。Ｓ、お前は我儘だぞ、かしわ汁をかけない飯をたべないとは。

九月廿六日

雨、よくねむれた、暗いうちに起きる。Ｓの我儘が私の我儘だ、彼の姑息が私の姑息ではないか、もつと強く、もつと愿に、もつと朗かであれ。うつら／＼として悪夢の連続。私はよく寝るが——眠るのではないが——Ｓもよく寝る、寝るより外ないからでもあらうが。五時頃、めづらしくＴ女来庵、待ちあぐんでゐると、樹明君とＩさん来庵、むろん、酒も下物も。とろ／＼、どろ／＼、そしてぐう／＼！よく飲んでよく寝た、極楽、地獄、ヨカヨカ。

明けないうちから藁うつくらしの音がはじまつた・ゆふべはあんまりしづかなたわわな柿・大風ふいていつた蟻はせつせとはたらく・

お地蔵さまへ生えて鶏頭の咲いてゐる・秋の日の暮れいそぐ蒲焼のにほひなど・いつからともなく近眼に老眼が、すゝきとぶ　ま昼虫なくそこへぽとりと柿が

九月廿七日

晴、ゆうぜんとして、或はぼうぜんとして。Ｓが卑怯な我儘な振舞をするので、腹が立つて打つた、あゝ何故にＳを打つたのだ、私自身を打つべきではないか、敬君よ、早くＳを連れていつてくれたまへ、彼は私をして私自身をあまりにまざ／＼と見せつける！近郊散歩、Ｓを連れて。昨夜の山頭火狂乱の跡を観て歩く、誰も知らない、知つてゐるのは山頭火自身だけだ！

・むすめの竿がやつと熟柿へとどいて青空・住む人はない秋ふかい花をもらふ・さうぼうとして街が灯れば木の葉ちる　足音ちかづくよな、柿の葉おちるわおちるわ・をとことをんなと月が冴えすぎる空

九月廿八日

晴、当面の仕事は何か、——まづ書債を果たす、これだけでもサツパリした。午前樹明往訪、午後は樹明来訪、ちりで一杯やる、松茸は初物なり、そしていつ食べてもうまい。高木断食寮の研究生、中村幸治さんといふ青年来庵、長期断食をしたいが泊めてくれぬかとの事、私はＳがゐてさへ神経にさはる位だからと断る。彼は断食、私は絶食！樹明君は風邪気味で夕方まで寝た、そしておとなしく帰宅、私はねむれないのでおそくまで漫読。樹明君についていつたＳがいつまでも戻つてこない、それがまた私の気分をみだす。……

追加一句　津島にて・おわかれの、水鳥がういたりしづんだり　　改作二句・つく／＼ぼうしあまりにちかくつく／＼ぼうし・月へゆれつつバスガールのうたひつつ

九月廿九日

曇、晴れて秋空のよろしさ。過去一切を清算して、新一歩を踏み出さなければならない、私はもう行乞する意力も体力もなくしてしまつたから、行乞を行商にふりかへて、改めて歩くより外ない。Ｓは昨夜はとう／＼戻つて来なかつた、多分、樹明君に跟いて行つたのだらう

とは思ふけれど気にかゝる、午後になつたら、学校へ出かけようと心配してゐるところへ、給仕さんが、樹明君からの手紙を持つて、Ｓを連れて来てくれた、よかつた／＼。大田へ来てくれといふ電話ださうなが、行きたいけれど、いつもの金缺で行けさうもない、残念々々。近在散歩、お伴はＳ、秋の雑草を貰つて帰る、苅萱、コスモス、河原蓼、等々、やつぱり苅萱がいちばん好きだ。今夜はまた不眠で困つた、夜が長かつた。油虫ものろ／＼となつた、それを打ち殺す残忍さ。

・昼も虫なく咲きこぼれたる萩なれば・風がふく障子をしめて犬とふたり・ここへも恋猫のきてさわぐか闇夜・ゆれては萩の、ふしては萩のこぼるゝ花・みごもつてこほろぎはよろめく・どうでもかうでも旅へ出る茶の花の咲く・朝は早い糸瓜のしづくするなどは

九月三十日

霧雨、午後は晴。武二君から返信、さらに返信を書く――

……失礼ながら打明けていへば、私は過去及現在の生活が続くならば、続けなければならないやうならば、私は自殺でもする外ないのです。……行商は労働です、お言葉の通りです、そして行乞も労働です、もつと労働です、ただ筋肉労働として行乞しなければ現代の情勢では食つてゆけないのです。すべてが生存――生活とはいへませんね――のあえぎです、私が行乞を行商にふりかへようとするのも、封建的遺習乃至資本主義社会の崩壊過程を暗示してゐますね。……

Ｓも自分を持てあまして、あちらへごろり、こちらへごろりしてゐる、私は自分をもＳをも持てあましてゐる。今日から麦飯、それは経済的でなくて保健的意義からである、食べすぎる、うまいものを食べたがる、――それがいけない、弊□は不足から来ないで十分以上から来る。どうしても眠れない、頭脳が痛む、ああ。

十月一日

曇、晴れて秋、そして秋風秋雨。柿買爺さんがやつてきていろ／＼話す。○「質よりも量」から「量よりも質」へ転向しつつある私、それは自然であり真実だ。

『私はうたふ』

十月二日

肌寒くなつた、昨夜はよく眠れた、有難かつた。今朝もＳの卑怯な態度に腹が立つた、そしてすぐまた、あはれみいたはるのだつた。
方々から色々のたより、しみ／″＼ありがたいと思ふ、とりわけてＫのはかなしくもうれしい手紙だつた！断ちがたい執着、捨てきれない煩悩、愛憎好悪のいづれもの人生の姿であり人間の力ではないか。払ふ、払へるだけ、そして買ふ、買へるだけ。Ｓはぢやれる、私はふさぐ、犬と人とは。——私の好きな、そして其中庵にふさわしい茶の花がもう咲きだしました、私は旅のおもひでにふけります、そして旅へ出たい、出なければならないと思ひます。さびしさうな、かなしさうでもあるＳを見よ、やりきれないではないか！

・おもてもうらもやたらに糸瓜がむだばなつけて・なつめはみんなうれておちて秋空・つるべしたたるぽつちり咲いてゐるげんのしようこ・秋の雨ふるサイレンのリズム・藪風、逢ひたうてならない・別れて遠い顔がほろ／＼落葉して・質のいれかへも秋ふかうなつた・柿の木のむかうから月が柿の木のうへ

十月三日

三時に眼が覚めて四時に起きる、おさんはつらいね！今日も秋雨、わるくないけれど、すこしくどいね。○麦飯のききめ、驚くべきものがある。○尊ぶと惜しむとは違ふ、もつたいないもいやしいから、とと諺が意味ふかい。○コクとアク、この差違も考へなければならない、コクは物そのものの味はひであるが、アクは残滓的遺物だ。

不眠と不昧と、そして転向。

○茶の花が咲きだした、茶の木に茶の花。○音と声、陰影——濃淡、明暗、強弱。○酔ひたい酒は呪ふべし、味ふ酒は讃ふべし。秋がふかうなる——ソデナシを着てゐてもうそ寒い——雨が落葉をたゝいて虫がないてゐる。——ヒマはありすぎるほどあるのに余裕がないとは！酔つぱらつてどろ／＼、樹明君も酔つぱらつてどろ／＼になつてきた。……

・死にたい草の枯れようとして・秋蝿、それを打ち殺すのか・御飯のしろさぬくさが手から手へ・めい／＼のこと考へてゐる灰皿をまんなかに・ゆふべいろづいた柿がおちさうな・なんとなくなつかしいもののかげが月あかり・さみしさのやりどころない柿の落ちる・郵便やさんたより持つてきて熟柿たべてゆく

十月四日

晴、泥を洗ふ、曇、洗つても落ちない泥だ。街へ出ていつたＳがよろ／＼とかへつてきた、うたれたのか、悪いものでも食べたのか、——それは私自身の姿でもあつた、みじめでやりきれない。敬君来庵、Ｓを連れていつてくれた。アルコールはありがたいかな、ぐつすりねむれた。

十月五日

機縁が熟した、ぐうたらな、でたらめな生活よ、さようならだ、昨日と今日との間には截然として一線が劃された、私の心境はおのづからとけて、すなほにあふれて、あたゝかく澄んでゐる。……○しづかなよろこび、それはいづみあふれる水のやうな、奇蹟的に、昨日までの不平、焦燥も未練も憂欝も解消してしまつた、明るく澄んで、温かく冴えた境地へ到達してゐる。日暮に樹明来庵、酒と下物とを持つて。何とおちついた酒と会談だつたらう。そしてまた何とよいねむりだつたらう。夜ふけてＳがひよろりとやつて来た、食べものをあるだけ与へると、ぺろりと食べて、そこらへごろりと寝てしまつた、彼はいぢらしい犬だ、どうも不幸な犬らしい。

・けさから旅の草鞋はく蕎麦の花が白く・夜あけ米とぐみぞそばのさいてゐるところ・秋雨の汽車のけむりがしいろいひゞき・てふてふひらりと萩をくぐつて青空へ・うらからきてくれて草の実だらけ（樹明に）・たまたま人がくると熟柿をもぐと・風の日を犬とゐて犬の表情

十月六日

曇、ぢつと落ちついてゐて、さて、さびしくないことはないが。肌寒い、蕎麦の花が白い。身辺整理、むしろ身心整理。夜、樹明来庵、

泥酔してゐる、蒲団を敷いて寝かせる、かうまで酔はなければならとは不幸だ。

十月七日

晴、百舌鳥の鳴声が鋭い、秋風らしく吹く。豊饒の秋！　山には山の幸、野には野の幸、庵には庵の幸がある。すすき尾花がうつくしい。午後、樹明君がまたやつてきて、飯をたべて、ぐう／＼と寝て、さびしさうに帰つていつた。文字通りに、三日間の門外不出だ、ちよつとポストまで出かけたいのだが、風がふくのでやめる。寝たり起きたり、読んだり考へたり。――

・生きものみんな日向へ出てゐて秋風・寝床へ日がさす柿の葉や萱の穂や・何か足らないものがある落葉する・やつと郵便がきてそれから熟柿がおちるだけ

十月八日

晴、風。朝、Oさんから採つたばかりの松茸を貰ふ。四日ぶりに街のポストへ、そして三日ぶりにコツプ酒一杯、そして心臓がいかに弱くなつてゐるかが解る。石蕗がもう咲いてゐたので床の壺に活ける。○雑草はみなよろしい、好きである。凡山凡水、凡人凡境、それでけつかうです。松茸一本焼いて麦飯三杯、おいしい昼餉だつた。例の洋服を質入して、マイナスを払ひ、酒を借る。入浴、何日ぶりか忘れたほど久しぶりだつた。樹明君を招待する、いそがしい会合だつたが愉快だつた。よいさけ、よいちり、よいよいよいとなあ。それから、泥、泥、泥だつた、泥のやうに酔うて泥の中を這ひまはつた。

・百舌鳥のするどくその葉のちるや　　　老祖母追憶・熟柿のあまさもおばあさんのおもかげ　南天の実のいろづくもうそさむい朝・空はゆたかな柿のうれたる風のいろ

十月九日

酒、酒、そして酒だ。面白くないから飲む、飲めばきつと飲みすぎる、いよいよ面白くないから、ますます飲む、――これを循環的に繰り返して転々するから、末は自殺しかない（その自殺はほがらかな自殺であらうが）。現在の私に望ましいものがあるとするならば、それ

はころり往生だ。

十月十日

終日一人楽清閑。禅海君が一年ぶりに来庵したけれど、彼に好意を持たない私は好意の示しようがない、彼も私の心持を察して、四国へ渡るといつて、別れていつた。

自然はうたふ自然のリズム。自然の相。人生の真実。現実のうごき。

十月十一日

晴、何が何やら解らないけれど面白い、同時に面白くない、やつぱり何が何やら解らないのだ。公益質屋へ行つて利子だけ払ふ、今日此頃の質屋風景は秋らしい。

十月十二日

秋晴、風がふいては雨。○あかるいさみしさだ、すなほな死であれ。樹明君が何のついでに立ち寄ちて熟柿を食べる、私も勧められて食べる、うまい／＼、あまい／＼。○熟柿――木の実のあまさは自然のあまさだ。○熟柿と日本の老人（老祖母追憶）○みぞそばがうつくしい花を咲かせはじめた。○四十惑うて五十更に惑ふ、六十尚ほ惑ふだらう。

十月十三日

まことに秋晴、散歩日和、運動会日和だ。朝は水の冷たさを感じる。○存在の世界、在るところのもの。アキラメでない、サトリでない、マコトである。

┌──────────────┐|近在散歩、||　どこへゆくか、いつもどるか、わかりません|└──────────────┘

かう書き残して置いて歩く、時計をまげて一杯やる、そして自動車に乗り込んでしまつた。大田の町へ運ばれた、そして伊東君のお客となつた、酔ふた、眠つた。

十月十四日

曇、大田の伊東君の家庭の中にゐた。身心がすぐれないので、早々帰庵。衰へたるかな、山頭火！米がない、銭もない、麦はある、それを炊いて食べる、これがホントウの麦飯だ、あまりうまくはないな。

枯草あたたかう犬は戻つてきてゐる（Ｓよ）　こころむなしく日向をあるく・もいではすする熟柿のぬくとさは・空のふかさへ変電所の直角形（改作）・あかるくするどく百舌鳥はてつぺんに

十月十五日

曇、時々雨となる。○明るい空しさ――これが今日此頃の私の気分。○貧閑――まことにしづかで、ほんたうにさみしい。Ｓがまたやつてきてゐるけれど、与へる物がない。

十月十六日

曇、そして雨、百舌鳥がやたらに啼く。うれしい手紙、それは未見の新らしい友から。やうやくにして酒と飯とにありついた。樹明君からも白米のお布施。夕方、君はさらに酒と魚とを持つて来庵、それから、私はまた恥づかしい私となつた。

十月十七日

雨、やがて晴、ほがらかな憂欝とでもいはうか。樹明君やつてきたがすぐかへる。

・みごもつてよろめいてこほろぎのいのち・日向ぼつこはなごやかな木の葉ちつてくる・ゆふかぜのお地蔵さまのおててに木の実・日かげいつか月かげとなり木かげ　空が風が秋ふかうなる変電所の直角形（改作）

十月十八日

晴、自省あるのみである、苦しめるだけ苦しめ。

十月十九日

晴、徹夜展転反側。――三日間まつたく門外不出。純真に生きる、

これが私の一切でなければならない。従容として、私は生きよう、そして死なう。流れるままに流れよう、あせらずに、いつはらずに。

十月二十日

快晴、身心安静。私の境地は悠々自適でなければならない、私の行動は逍遥遊でなければならない。酒が飲みたくなつた、煙草も吸ひたくなつた、御馳走が食べたくなつた。……

・柿落葉そのままそれでよい日向・米をとぐ手のひえ／″＼と秋・熟柿もぐとて空のふかさよ・病めるからだをよこたへて風を聴くなり・秋もをはりの日だまりのてふてふとわたくし

十月廿一日

晴れて明るく、むなしくはてなく、澄みてかぎりなし。……

十月廿二日

晴、門外不出六日間、自分を見詰めつゞけてゐる。夕、樹明来庵、酒と煙草とありがたし、そして玉ころがしとはおもしろし。

十月廿三日

曇、樹明往訪。やつと工面して、冬物を質受して、妹を訪ねる、子の結婚について相談するために！肉縁はたちがたくしてなつかしい。

十月廿四日

曇、帰庵休養、身心の衰弱いかんともしがたし、昨日の茸狩がこたえたのであらう。

・茂るまゝにして枯れるまゝにして雑草　みんないつしよに茸狩すると妹の白髪（妹の家にて）　落葉ふか／″＼と茸はしめやかにある・秋風のふく壁土のおちること

十月廿五日

故郷宮市は花御子祭にて賑ふならん。昨日貰つてきた黒茸を焼いて麦飯を腹いつぱい。熊本へ行かなければならない、彼女と談合しなければならない、行きたくもあり行きたくもなし、逢ひたくもあり、逢

ひたくもなし、——といふ気持。あれこれとおくれて、四時の汽車で出発。複雑な微妙な心理状態だつた。

　　十一月廿六日　十一月廿七日　十一月廿八日　　　　　　　『旅日記』　十一月廿九日　十一月卅日　十一月卅一日

　　十一月一日

　午後五時帰庵、やれ／＼と思つた、そしてすぐ寝た。九州行そのものは悪くなかつたけれど、熊本はやつぱり鬼門だつた。○出かけて、帰つてきて、庵のよさ、自分のよわさがよく解る、山頭火には其中庵の外におちつくところなし。柿の落葉、茶の花、みんなよろしい。がつかりして、ぐつすり寝た。

　　つかれてかへつてきて茶の花・伸きのびてゐて唐辛赤うなる・すすきをばなもうららかにちるや・まいてまびいてつけてきざんでかみしめてゐる　　　水前寺にて・水は秋のいろふかく魚はういてあたまをそろへ・柿が赤くて住めば住まれる家の木として

　　十一月二日

　晴、風。——

　さびしけれどもしづかなりまづしけれどもやすらかなり

　すなほに、すなほに、そしてすなほに。夜、樹明来、しんみりと話す。

　　十一月三日

　しぐれ、明治節、農学校運動会の騒音。東京の井師五十歳祝賀句会へ打電——

　アキゾラハルカニウレシガルサントウカ

　野菊、りんだう、石蕗、みぞそばの花、とり／″＼に好きだ。

　・みんな働らく刈田ひろ／″＼として・あぜ豆もそばもめつきり大根ふとつた・たつた一つの、もぎのこされた熟柿をもがう・垣も茶の木で咲いてゐますね・秋もをはりの夜風の虫はとほくちかく

十一月四日

終日読書。私は熊本行を契機として転向、といふよりも復帰することが出来た。……○……持つべきものは子なりけり、私は私を祝福しなければなるまい。方々へたよりを書く。

十一月五日

晴、何とうらゝかな、曇、何としづかな。洗濯、施肥、そして入浴、一杯ひつかけました。櫨がもう紅葉してゐる、雑木紅葉がだん／＼うつくしくなる、雑草は日にまし枯れてゆく。○濁酒から泥水へ——私の一生はかうした経路をたどりつゝありはしなかつたか！うれしい事は、アルコール渇望が薄らぎつゝあることである、酒に対する執着さへなくなれば、私は私の欣求する生活に入ることができる。○動かうにも動けない、しばらくぢつとして、身を養ふ、いや心を養ふのだ、私の身心は荒んでゐる。○病痾は、私にとつては一つの天恵だ、これは悲しい事実であるが、合掌して味到さるべきものだ。○本然の自己に帰つて落ちついた安らかさ。

・草も木もうち捨ててあるところ茶の花・雨ふる落葉おちつく・雑草、どこからともなくレコードうた・茶の花さいてここにも人が住んでゐる　　　病中・寝てゐるほかない茶の花のいつまでも咲いて・百舌鳥のするどくぬける歯はぬけてしまふ　　　旅・みちはすすきへ、すすきをくぐれば水

十一月六日

秋時雨、雨の音と百舌鳥の声と柿落葉と。Ｍ君からの返信はありがたかつた、ほんたうにありがたかつた。あまり沈欝になるので、キレイ一升借りて、イワシ十銭ほど買うてきて、チビ／＼飲みはじめたが、そして待つともなく樹明君を待つてゐたがやつてこないので、学校まで出かけて訳を話したが、とても忙しくて行けないといふ、そこで私自身を持てあまして街へ出てみたけれど面白くないので、鮨を食べて戻つて、すぐ寝た。……酒飲みが酒が飲めなくなつては、——あれほど好きだつた酒があまり欲しくなくなつては、——それが今日の私だつた、明日の私であるかも知れない。身心不調、胸苦しくて困つ

た、心臓がいけなくなつたのであらう、もう罰があたつてもよい頃ですね！○持つて生れて来たものを出したい、その人のみが持つもの、その人でなければ出せないもの、それを出しきるのが人生だ、私は私を全的に純真に俳句しなければならない、それを果さなければ死んでも死ねないのだ。○食慾がなくなるのがさみしい、私の大きい胃袋は萎縮しつつあるのか、ルンペンの精力がなくなりだしたのか。

　　　　病中・ともかくも生かされてはゐる雑草の中・をんな気取つてゆく野分ふく・蛇がひなたに、もう穴へはいれ

　　十一月七日

　うそ寒い風がふいて晴れてくる、蒲団を干す、と、またしぐれてくる、柿の葉が生もののやうに舞ひ散る。……やがて日本晴だ、一天雲なし、ありがたいな。なまけてたまつた返事を書く、緑平老へは殊に長い手紙を書いた、私の愚痴を本当に聞いてくれる友の一人として、私は君を信頼してゐる。○明日の句はもう私には作れないけれど、私にも今日の句はまだ作れる自信がある（芭蕉や蕪村や一茶の作はすでに昨日の句であることに間違はない）、よし、私はほんたうの私の句を作らう、作らなければならない、それが私のほんたうの人生だから。米買ひに行つて、そこの主人に話しかけられた、宗教についてしばらく話した、彼もまた悩める一人だつた。寒い、寒い、冬ごもりの用意は出来ますか。○雑草の声を聴く、雑草的存在、雑草的生活。○酔ひたい酒から味ふ酒へ。○播かないで刈る、――私の生活はさうでないといひきれるか。夕方から山口へ行く、三八九を復活続刊する外なくなつたから鉄筆を買ふために、――そして鈴木さんを訪ねる、おいしい御酒と御飯とをいたゞいてたのしく話す（私の現実に触れすぎたが）、九時の汽車で戻つておとなしく寝た。平和なる家庭なるかな、私は家庭人ではないけれど、家庭のあたたかいアトモスフイアは好きである。

　　柿もたわわに村一番の物持の屋敷で・灯影が水に、落葉する樹もありて・バスト汽車と寒い灯が灯が走りくる・ふけて戻ればたどんがひそかに燃えてゐた　　　湯田一句追加・山山もみづりそのなかよい湯のわくところ・しぐれてはそこらで山羊のなく変電所

十一月八日

晴曇さだめなくしぐれる、いはゆる秋の空だ。寒い、冷たい、もう冬だ、火燵が欲しい。何も食べたくないから、トンビを着て豆腐買ひに、――一丁三銭に値上げしてゐた（前は二銭五厘）。寝てゐると、めづらしや女客、彼女は掛取だつた！○現実とは何か、生活とは何か、自然とは何か、主観とは何か。青白い生活、青白い句を揚棄せよ。さらに光を力を――と私はさらに主張したい。

・豆腐さげてしぐれて濡れてもどる　　　自戒・今日から禁酒のしぐれては晴れる空・菜葉しぐれてきたこやしをやらう・熟柿日和で山の鴉が出てきてさわぐ　　　あつ子嬢新婚　ほんに晴れわたり木の葉のとぶことも　　　改作・ここを死に場所とし草はしげるままに

十一月八日」はママ］

日本晴、それから――万事如件。○光の句、力の句。現実を直視せよ、生活を強化せよ。各人各人からのたより、それ／″＼にうれし、緑平老のそれはことにうれしかつた。今日はトンビを着て油買ひに。紙の中に油虫の巣窟を偶然見つけた、幼虫数百、すぐ掃き捨てたが、ぞつとした。過去を忘れよ、過去の残影を捨てよ。私も苦労性だわい、私が帰庵の手紙をだしたのに健からは何ともいつてこないので何となく気にかかる、これも親心のあらはれか、ああ。○理窟と作家、緑平の一面。理窟を持たない人は尊い。鍋が一つ、それでも事足りる。抜ける歯は抜けるまゝにしておく。かきをきを書きかへておかう。日暮に樹明来庵、久しぶりな会飲だつた、酒はキレイ、肴はハム、客は樹明、だから酔うてぶらつくこと例の如し。やつと帰庵、彼氏も泊る、とんだ宿直なり。○酔うていよ／＼老衰を感ず。

・雑草も声ありてしぐれ・病めば梅干のあかさ・誰にもあはないとうがらし赤うなる・かうまでからだがおとろへた草のたけ・すつかり葉をおとしてしまつた柿の木へ旅から戻つた・ほつと入日のさすところ草の実・やうやくおちつけて茶の花や

十一月十日

晴、二日酔の気味、恥づべし。小鳥の来ては啼く日なり。○余生を

楽しむ——私の場合では私に徹することだ。○与へる何物も持たない私はせめて何物をも奪はない生活を持しなければならない、他を妨げ物を害する行動を捨てなければならない。昨日の酔中散歩は醜くかつたが、いや悪かつたが、それによつて積日の沈欝が払ひ除かれたのはよかつた。「雑草」所載の「正信偈一巻」を読んで白船老におそひかゝつた不幸を悲しむ、希くはこの不幸が最初の、そして最後のものであれ。勉強、勉強、勉強しよう、私はあんまりなまけてゐた。ヱキのポストまで、——やつと行つてきた。○ありのままに一切を観る。○与へられるものを与へられるままに受入ける、それを咀嚼し消化し消化する生活。○いつもそく／＼として身にせまるもの、それは流転のすがただ。○自己省察がアヤフヤだ、だから現実把握もアヤフヤだ。あまりにしづかな、しづかすぎてやりきれないほどのゆふべだつた。終日終夜読書。

　・こゝに枯れたるこの木の冬となる（庵の枇杷樹）・大根漬けてから長い手紙を書く・ひなたはあたゝかくやがて死ぬる虫　いつとなく草枯れて家が建ち子が泣いてゐる　お寺の鐘が鳴りだしました蔦紅葉　病めるからだをあるかせてゐるよ草の実よ　虫なくや咳がやまない　なんだか人なつかしい草はみのつてゐるみち　あまりひつそりして死相など考へては

　　十一月十一日

　のどかな晴れ、小鳥が山から出て遊ぶ。朝、樹明来庵、昨夜の残りの酒を飲む。お茶漬さら／＼、樹明おくるところの辛子漬で。ぬけさうでぬけなかつた歯がぬけた、ほつとしたさびしさを味ふ、もう堅いものは食べられない、食べものの味がなくなつた、噛まなければ、噛みしめなければ物の味は出てこない、幸にして酒は液体、そして別物だ、流動のなかに酒のうまさはある。……午後散歩、折から女学校の運動会、ちよつと見物、ぶら／＼帰つてくると、女客が二人、縁に腰かけて待つてゐられた、Ｔさん Ｓさんといふ、何も話すことはないので、私の心境について話した。

　・山のぬくさはりんだうひらく　酒を買ふとて踏んでゆく落葉鳴ります・藪のむかうまで夕日のつばふき・なんぼう考へてもおんなじこ

との落葉をあるく・そこに夕月をおき枇杷は花もつ（雑）・冬夜むきあへるをとことをんなの存在・木の葉ふるところ眼をとぢるとき

十一月十二日

まことに日本晴、あまり晴れすぎたからか、夕方から曇。秋のよろしさ、田園のよろしさ、独居のよろしさ。身心がすぐれないので近郊散歩に出かけたが、それも苦しくてすぐ帰つてきた、昼飯としてうどん玉を買うて。○ひなたをあゆむ――ぢぢむさいけれど、私に残されためぐみの一つである。○昨日来庵のＴさんから、玄米茶と生玉子とを頂戴した、何よりの品、ありがたく賞味しませう。夕ぐれは何となくさびしい、湯にでもはいらうか、ちよつと一杯やりたいな！いのちがけで酒をのむやうな悪趣味は捨てゝしまへ。○自己を愛するがゆえに一切を愛する、一切を愛するがゆえに自己を愛する、自己は個の個ではない、全の個である。

女学校運動会・ひかりは空から少女らはおどる・水にそうてくだれば草の枯れまさり・あのみちのどこへゆくもみづる山こえて（雑）　空ほがらかで樽屋さんいそがしい　　再録、長門峡二句　鯉をよぶとや紅葉ちれとや手をたたく　水たたへたればその枝もみづりたれば　　改作、信濃にて　まこと山国の、山ばかりなる月の

十一月十三日

曇、小雪でもちらつきさうな、――冷たい雨がふりだした。○安分知足、楽清閑、楽在其中、まことに、その中にある楽しみが、ほんたうの楽である。○句作生活二十年、そしてつく／″＼思ふ、此道や門に入りやすくして堂にのぼりがたし、仏道のやうに。○うたふもののよろこびは力いつぱいに自分の真実をうたふことである、あらねばならない。私のうちには人の知らない矛盾があり、その苦悩がある、それだから私は生き残つてゐるのかも知れない、そして句が出来るのだらう。また不眠で徹夜乱読。◎俳句の将来についての一家言――俳句は畢竟階級的なものではありえない、階級意識を高唱するには川柳的なものが出来るであらう、そして大衆的娯楽文芸として俳句は堕落すると共に、詩としても高上し純化するであらう、それが真の俳句であり、芸術家の芸術であり、純日本的なユニイクなものである。……

学生軍事教練・ずうつと晴れてならんで旗の信号・蓼のあかさも秋ふかいひなたの仕事・木の葉のちればまたハガキかく・考へつつ歩きつつふつと赤いのはからすうり

十一月十四日

好晴、身辺整理。私の心は今日の大空のやうに澄みわたる、そしてをり／＼木の葉を散らす風が吹くやうに、私の心も動いて流れる。うれしいたよりがいろ／＼きた。酒屋の店員Ｓさんが来て話して帰る。絶対的境地には自他もなければ善悪もない、第一義的立場に於ては俳句も短歌もない、詩が在るのみだ、たゞ実際の問題として、作者の素質傾向才能によつて、俳句的表現があり短歌的表現がある。私はほんとに幸福だ、しんみりとしづかなよろこびを味ふ。酒はかならずあたためてしづかにするべし。○芸術的飛躍、それは宗教的飛躍と通ずるものがある、その飛躍が私にもやつてきてくれた！私はとかく普通の世間人から undervalue せられるやうに、いはゆるインテリには overvalue されがちである、人は――私は買被られるよりも見下げられる心易さをよろこぶ。――死ぬる時には死ぬるがよろしく候、と良寛和尚は或る人への手紙の中に書いてゐる、私はそれを思ひ出す毎に、私の修養の到らないのを恥ぢないではゐられない、私はかうしかいへない、――殺すべき時には殺すがよろしく候、――このべくがいけない、それは嘘ではないけれど、小主観の言葉だ、自殺、自決、自裁といふやうなことを考へないで、さういふ独善的な潔癖を抛擲して、死ぬるまで死なないでゐる、生きられるだけ生きたい、生も死も忘却して是非を超越した心境にまで磨きあげなければならないと思ふ。酒と句と、句と酒と。……○私は遂に木の実をほんたうに味はひ得なかつた、もう歯がぬけてなくなつてしまつた、どうすることも出来ない、もつとも、耳で、眼で、手で木の実を味ふことは出来るけれど。……夜は斎藤さんから今朝頂戴した『はてしなく歩む』に読みふけつた、私は当然必然、今春の私の旅、そして来春の私の旅を考へながら。

・落葉ふかく水くめば水の澄みやう（雑）・雨の落葉の足音は郵便やさんか　　病中・寝たり起きたり落葉する（松）・煮えるにほひの、焼けるにほひの、野良がへりのゆふ闇ただよふ　すつかり柿の葉

は落ちて遠く灯つた　　　病中さらに一句・ひとり寝てゐるわらやしたしくしづくする（松）　身のまはりかたづけてすわる私もよい人であらう・柿をもぐ父と子とうへしたでよびかはし・水たたへたればいちはやく櫨はもみづりて・実ばかりの柿の木のなんとほがらかな空・雑草みのつて枯れてゆくその中に住む　めづらしく人のけはひは木の実ひらふこゑ・やつと汲みあげる水の秋ふかく・ひよいと手がでて木の実をつかんだ　大根いつぽんぬいてきてたべてそれでおしまい

（改作）山あれば山を観る雨の日は雨を聴く春夏秋冬物みなよろし

十一月十五日　まことによいお天気、しつかり冷たくなつた。

日向で読書、もつたいないなあと思ふ。酒——句——死、この三つが私の昨日までの生活を織り成してゐた。——酒亦酒哉茶亦茶——といふ語句が足利時代の酒茶論といふ本にあるさうな。新菊第二回播種。Ｓさん母子が乳母車を押して柿もぎに来た、柿は日本家庭的なものを持つ木の実である。時計が米ともなり煙草ともなり酒ともなる、さても便利な世の中、重宝な時計である（今日は質入しないでぢつと我慢したが）。

十一月十六日　まつたく雲がない——とは今朝の空だつた。

樹明君を学校に訪ねたが、乱酒のため憔悴した相貌を見るに堪へないで、早々別れて戻つた、あゝ。△鰹節をけづりつつ、これを贈つてくれた友の温情を思ふ、そして感謝と懺悔と織り交ぜた気分になる。……夕方、駅のポストまでいつてきたが、途中二度も三度も休まなければならなかつた、それほど私のからだは弱つてゐるのである、しかしその弱さが同時に心の平静を持続せしめてゐることも事実だ（私は猫である癖に虎になりたがるのだ、からだにアルコールがまはるとぢつとしてはゐられないのだ）。△半身不随ならば、どうかかうか生きてゆける、おとなしくつましい生活をつづけることが出来る、全身随意ならば多分自※」に「マヽ」の注記］するだらう、石火せめぐほどの自己闘争が身をも心をも焼きつくすだらう、そして全身不随となつたならば自殺あるのみである、それで自他共に助かるのである（これが私の覚悟の一面である）。△性慾をなくした安けさ、アルコールが

遠ざかりゆく静けさ（すこしは何となくさみしいな）。夜はねむれないのでおそくまで読書。牧句人句集「木の端集」を読み直して、君の熱意と巧妙とにうたれた。詩歌新人の「屋上の旗」も興味を以て読んだ。十月十日の月がさえ／″＼とうつくしかつた。

明けるより小鳥の挨拶でよいお天気で・残された二つ三つが熟柿となる雲のゆきき・時計を米にかへもう冬めくみちすぢ　　　—（こんな句もある）—　ま夜中ふと覚めてかきをきかきなほす

十一月十七日　晴、曇、肌寒い。

あれやこれやとすればすることはいくらでもある、今日だつて、草取、窓張、洗濯。……△友よ、私を買ひかぶる勿れ——と今日も私は私に向つて叫んだ、彼は私を買ひ被つてゐる、私に善意を持ちすぎてゐる、君は私の一面を見て他の一面を見ないやうにしてゐる、君は私の病所弱点缺陥を剔抉し指摘して、私を鞭撻しなければならない、私は買ひ被られてゐるに堪へない、私は君の笑顔よりも君の鞭を望んでゐる、——これは澄太君に対する私の抗議——といふ外あるまい——である。△私がどんなに醜い夢を見るか、私が酔うた場合にどんなに愚劣であるか、私が或る日或る場合、或る事件或る人に対して、どんなに卑怯であり利己的であるか、——それをあなたは知らなければなりません、私はあなたに対して、あなたが私を正しく批判して下さることを熱望してゐるのです（これも澄太君に）。山田酒店のＳさんがやつてきて、しばらく話した。終日就床、読書思索。樹明遂に来らず、約束が守れないほど酔ひしれた彼でないことを祈る。△慾望がうすらぐといふことが——具体的にいへば、性慾は勿論、酒も煙草もこらへられるし、三度の食事すらもあまり欲しくない——私をして事物——自然、人生、私自身——を正視直視せしめる、生活意力の沈潜とでもいはうか。△こゝにふたゝび私の身のふりかたについて書きそへておかう——……私がもし健康ならば、私はとうていここには落ちついてゐないだらう、そして私がもし疾病にとりつかれるならば、私はおそらく自殺しなければなるまい、……私がもし病むでもなく病まぬでもなく、いはゆる元気がなくなつて、ぼんやりした気分であるならば、私は多分ここに落ちついて、生きられるだけ生きるだらう。……半病人の生活、それが私には最もふさわしい、それがこゝに私に実現

しつゝある！　しかし果して私の運命はどんな姿で私の上にあらはれるか、私には解らない、誰も知るまい、それでよいのだ、それでよいのだ。

・ほほけすすきもそよがないゆふべの感傷が月・或る予感、はだか木に百舌鳥のさけぶや・灯のとゞく草の枯れてゐる　　Ｓよさようなら・ああいへばかうなる朝がきて別れる　　（改作）石鴨荘　草山のしたしさを鶯もなき・月のあかるい水くんでおく・窓からいつも見える木のいつかもみづれる月あかり・月のひかりの、はだか木の、虫のなくや・ひとりで朝からけぶらしてゐる、冬・もう冬空の、忘れられてあるざくろの実・糸瓜からから冬がきた・おちついてゐる月夜雨降る・月の落ちた山から鳴きだしたもの

十一月十八日　雨はれて曇、ぬくい日だ、また雨。

時計を質入れして食料品を買ふ、これで当分は餓えないですむ、ありがたい。菜葉に麦飯、それで十分、それが私には最もふさわしいし、また最もうまいと思ふ。午後、樹明来庵、玄米茶をのんで話す外なかつたけれど、明るい顔を見てうれしかつた、知足安分、この平凡事を君にすゝめる、すゝめなければならない。△飲みたい酒を飲まないのではない（さういふ事は私には出来さうもない）、飲みたくないから飲まないのである（私はこれまで、いかにしば／＼飲みたくない酒を飲んだか、飲まねばならなかつたか！）。まことにこれは自然的断酒である。△雑木雑草の秋色のよろしさ。△枯れゆく草にふりそゝぐ雨の姿、声。櫓の葉がいつとなく黄ばんで、さら／＼と鳴る。小鳥が山から里ちかく出てきて囀づる。△秋から冬へ——晩秋初冬は私の最も好きな季節であるが、庵もこの季節に於てそのよさを最もよくあらはす、清閑とは其中庵の今日此頃の風趣である。こんなにからだぐあいが悪いのは、一生の酒を飲みすごしたからだらう。△流転する永遠の相、永遠が流転する相。私は身辺風景をうたふ、雑草を心ゆくばかりうたひたい。今夜も不眠で、詮方なしに徹宵句作。△いはゆる枯淡にはその奥がまだある、水のやうに流れるものは常に新らしい。△「生死は仏の御命なり」何といふ尊い言葉であらう、生も死も去も来も仏のはたらきである、それは人間の真実である、人間の真実は仏作仏行である。△生活の句とは——句は無論生活から遊離して作られ

たものであつてはならない、生活に即して、否、生活からにじみでた句でなければならない、生活の表皮や生活断片そのままの叙述は句ではない、日記の一節であり、感想の一端に過ぎない、生活そのものの直接表現、自然現象を通して盛りあがる生活感情、そのどちらも生活の句である。

質入して・けふから時計を持たないゆふべがしぐれる・ちよつとポストまで落ちる葉や落ちた葉や　父子対面—飯塚に健を訪ねて—・このみちまつすぐな、逢へるよろこびをいそぐ・煤煙、騒音、坑口からあがる姿を待つてゐる・話しては食べるものの湯気たつ・分けた髪もだまりがちな大人となつてくれたか　（山田君の父となれるを賀して昌子嬢の誕生を祝して）　パパとママとまんなかはベビちやんのベツド　山々もみづるはじめて父となり・けさは郵便も来ない風が出てきて葉をちらす　病中・食べるものはあつて食べられない寒い風ふく　秋風の競売がちつともはづまない人数　祖母追懐・おもひではかなしい熟柿が落ちてつぶれた　星城子君に　その鰹節をけづりつつあなたのことを考へつつ

十一月十九日　晴、雨後のあざやかさ。

風が出てきた、風には何ともいへないものがある、さびしいとばかりはいひきれないものが。午前は駅のポストへ、午後は街のポストへまで出かけた、そして歩々に肉体の秋を痛感した、……人間は生活意力が盛んであれば十年に一歳しか年取らないが、生活意力が衰へると、一年に十歳ほど年取ることもある、……私は此一年間にたしかに十歳老いた！▵日本の秋はほんたうに美しいかな、今日途上で、水へめざましく紅葉してゐる山櫨を観賞した。▵句作は米の飯、いや麦飯だ、私にありては。▵私にもし友達といふものがなかつたならば、私はかうした生活をつづけることが出来なかつたであらう、友情は人間愛情の最高なるものである、私はその友情にめぐまれすぎるほどめぐまれてゐる。うどん玉三つ、此代金六銭也、これでやつと今日の食慾をそゝることができた、貨幣の六銭はともかくとして、三つのうどん玉はまことにありがたいものであつた。食慾不振と睡眠不能とは人間生活の最大不幸である、私は今、その二つの不幸に襲はれてゐる、すべてが自業自得で致し方もないが、甘んじて受納するけれど、不幸は

不幸であることにかはりはない。何を食べてもうまいといふ事と、何を食べてもまづいといふ事との間には、天と地との差、東と西との隔りがある。私の意慾は日にましおとろへてゆく、この事実はうれしくもありかなしくもありさびしくもある。変態的幸福、私はそれを味はひつつある。△病めば梅干の赤さ——たゞ梅干がよい、——梅干の味が病める身心にうれしいのである。

・人のなつかしくかれくさみちをゆく・出かけようとする月はもう出てゐる　剃りおとして月の冴えたる野をもどる

十一月二十日　晴、うらゝかな小春日、鵯がなけばさらに。

日向でほころびを縫ふ、襦袢の襟のつけかへはなか／＼むつかしい。味噌買ひに街まで。私の好きな寒菊がほつ／＼ほころびそめた。机上の壺に櫨の一枝を※す。たよりいろ／＼、緑平老の手紙は私を泣かせる。緑平老から小遣を貰つたので、買へないでこらへてゐた品物を買ふ、煙草、マツチ、ハガキなど、そして一杯ひつかける酒を餅に代へる、十銭で七つ。辛いものをやめてゐると甘いものが食べたくなる、今の私はアルコールよりも砂糖の方に心をひかれる！人間の嗜好といふものも面白い。餅を仏様に供へて回向、観音様も先祖様もめづらしい御馳走を召し上つて下さいまし。△井戸の水が雨で増して濁つてゐる、濁れる水の色もさびしいことの一つだ。私もさびしがりやにあともどりしつゝあるやうだ。夜はあまりに月がよいので、田圃を歩き、そして街へまで出かけて、ついでに理髪、うれしかつた。△貪る心（殊に酒に対して）驕る心（殊に自分に対して）が弱くなつた、そして怺へる心（物に対して）堪へ忍ぶ心（自他に対して）が強くなつた、病痾の賚賜である。△死を待つ心、それはまことに落ちついた、澄んで湛へた、しづかな、しんみりとした心である。△一期一会の人生である、その時その場のその物をしみ／″＼と味はへ、私は山を観るとき、空を仰ぐとき、草に触れるとき、人に接するとき、酒を飲むとき、飯を食べるとき、……すべてのものをしみ／″＼と味ふ。△太陽と水とは保護者であり導師であり、医者でもある。水を飲んで日光を浴びてゐると、私の身心は蘇生する。△いつも安いものは米、いつも高いものは酒。△私の生活になくてならない、一日も缺ぐことの出来ない、そしてあまりに安いものは食塩とマツチ。食塩は一ヶ年間に五銭

宛四回、此代金弐十銭。マツチは一年二函、これも二十銭。

・野原をよこぎるおもひでの月がかたむいた・櫨の一枝、机の上に秋がある・うらの畑のとうがらし赤くてお留守　　　改作追加一句・ゆふべはやりきれない木蓮のしろさ　　　行乞・いつから笠に巣くうたる蜘蛛といつしよに・枯れるものは枯れてゆく草の実の赤く・枯れゆく草のうつくしさにすわる

十一月廿一日　晴、朝の雲のうつくしさ、曇。

やゝ寒い、足のつまさきが冷たい、裏藪で鵯が啼く。秋もをはりの冬ちかしといふ感じ。身心の調子よろし。△裏の菜畑は私の花園だ。△物を粗末にするな、大根のしつぽでも大切にせよ、物を殺すな、たとへ木切でも生かして使へ。物を生かしてゆくところに生活の味がある。よいお天気になつた、宮市の天神祭万歳だ、よし、私も参詣しよう。一時の汽車で出かける、宮市はお祭気分があふれてゐる。そこの一木一石みなおもひでの種だ、宮市は私の故郷の故郷である。裸坊——それは天神祭独特の、宮市名物——が右往左往する、しかし昔ほど盛んでない。粟の岩、焼栗、メリヤス、うどんそば、密柑、等々の店の間を人にもまれて歩く、天満宮に参拝して、いろ／＼の見世物小屋の間をくゞつて、お山で休む、酒垂山は天然の公園だ、一歩一歩に少年時代の夢がよみがへる、あゝ時は過ぎ行く、過去はなつかしい、あの頃の私は……霊台寺に詣でる、山茶花がうつくしい、饅頭を買うて食べる、これも少年時代の私をおもひださせる。新橋の方へ行く、途中、大行司小行司の行列を観た、さびしい行列になつたものだと思ふ。佐波川は昔ながらに流れてゐる。……さけとさしみとすしとで四十四銭、腹いつぱいになつた、感慨無量で胸いつぱいだ。再び街へ、人ごみの中へ。労れた、労れた、とても御神幸までは待ち切れないので、八時の汽車で帰つてきた。この世にこの庵ほどよいところはない、——これが今日のをはりの感想だつた。ぐつたりしてぐつすり寝た、極楽々々浄土々々！山手閑居の場、私の現在はかういつた様子。胃の工合がよくなつて酒が少し飲めるやうになつた、そして晩酌は壱本にきまつた（きめたのではない）。

小春ぶらぶらと卒塔婆を持つてゐる女　刈田はれ／″＼蓼の赤け

れ・あひびきまでは時間があるコリントゲーム　お祭の人ごみをぬけて枯草山・おまつりの桜紅葉のしづけさはある　桜紅葉の残つた葉の赤さ・落ちる陽をうかべて水のながれゆく・枯草へながう影ひいてふるさとの・濁酒あほることもふるさとはおまつり・日の落ちる方へ水のながれる方へふるさとをあゆむ

十一月廿二日　曇つて寒い、雪でもふりだしさうな。

炬燵の用意はよろしいか。△枯れてゆく草のうつくしさよ。久しぶりに——十日ぶりに入浴。裏の林でひよどりがしきりに啼きかはします。シヤツがあたゝかい、黙壺君ありがたう、トンビがあたゝかい、井上さんありがたう、また冬がまはつてきて、感謝を新たにする。ほんにしづかだなあ——と、今更のやうに今夜も感じたことである。米と酒、むろん米の方が大切だ、しかし私は金が手にはいると、何よりもまづ酒を買つた、それが此頃はどうだらう、第一に米、そして味噌、そして炭、第二第三として酒を買ふのである。飯のうまさ、それは水のうまさとおなじだ、淡々として、そして滋々として尽きることのない味である。△……酒はどうでもよくなつた、句はやらずにはゐられない……たゞ此一筋につながる、……私は此一筋をたどりつゝある、此一筋をたどるより外に私の生きる道はないのである。△道を楽しむ——俳句道の根本はこゝにある、句作と鑑賞と、物と心と、彼と我と、渾然として一枚になつた境地である。

・寒う曇ればみそさゞいが身のまはり・大根あんなに土からおどりでてふとく・早う寝るとして寒い薬を掌に・ゆふべあかるくいろづいてきて柚子のありどころ

十一月廿三日　天地清明、澄んでうらゝかである。

白船君が山口行の途次、寄るかも知れないといふハガキを寄越したので、新菊を採り、ほうれん草を茹で、鰹節を削り、……そしてうどん玉を買ひに街へ出かけた。身心脱落只真実、私も、良寛和尚に頭を下げる。午後、樹明君来庵、ぼうばくとしてゐる、かういふ情態にある彼を救ふものは、恐らくは、疾病しかないであらう、悲しい人間現実の一相である、すすめて休ませた、高鼾で寝たのはよかつた。白船老はとう／＼来てくれなかつた、「かも知れん」程度しか待たないつ

もりだつたけれど（あまり当にして当が外れると失望が大きい）、それでもやつぱり待つてゐたので、失望した、そして淋しかつた、といつても仕方はないが。東北地方凶作の惨状は人から聞いたり新聞で読んで察してはゐたけれど、今朝、新潟の金井さんからの手紙で、直接知らされて、その窮境はまことにいたましいと思つた、そして自分を省みて、勿体ないと感じないではゐられなかつた、私は私としてあまり幸福である、私は幸福すぎるではないか。……

・うらゝかにしてすがれた花にとまるてふちよも　母子で藷掘る暮れ早い百舌鳥の啼く・うらゝかなれば一羽鴉のきてなけば　日あたり水仙もう芽ぶいたか・ことしもこゝに落葉しておなじ蓑虫　　　白船君に　あなたを待つてゐる火のよう燃える

十一月廿四日　けふもうらゝかな日。

朝から裏山でポン〳〵鉄砲を打つ音がする、せつかく小鳥は楽しく啼きかはして遊んでゐるのに。うれしいたよりいろ／＼、ことにＫ子さんのそれはうれしかつた、ありがたかつた、もつたいなかつた。——かうしてゐて、こんなにされてゐて、よいものだらうか——この疑問が事にふれ折にふれて私を苦しめる、苦しむだけで、どうにもならない私ではあるけれど。——あまりお天気がよいので、小遣も少々あるので、買物がてらふさぎの虫を湯田の温泉に洗ひ流すつもりで出かける、ぽか／＼とぬくすぎる小春日和である。山がうつくしい、なだらかに波うつて雑木が紅葉してゐる、山口へ近づくにしたがつて、山なみに含蓄がある、糸米あたりの山は殊によろしい、路傍の石に腰かけて飽かず眺め入つた。買物いろ／＼、小鍋、削節、なでしこ（これはやうやくその大袋を八木デパートで見つけた）、そして古本。温泉はほんとによい、湯上りのよい気持で、例の安い安い定食で二本飲んで、七時の汽車で帰庵、めでたしめでたしであつた。△いつ死んでもよいやうに身心をかたづけておけ。

・あたたかく折れるほど枝の柿が赤い・山に山がもみづるところ放たれた馬・ちよいと茶店があつて空瓶に※した菊・もどつてうちがよろしい月がのぼつた（帰庵）

十一月廿五日　曇、雨となる。

　誰か来さうな。……うすら寒い、火鉢を抱いて漫読。麦飯と松葉薬とが（消極的には酒を飲まずにゐたことが）胃の工合をほどよくしてくれた、こゝに改めてお百姓さんと源三郎君とに感謝を捧げる。御飯を炊いてゐるところへ、ひよこりと樹明君、要件を持つて山口へ出かけるから、いつしよに行かうといふ、もう誰も来さうにないし、歩くのは好きだし、二人ではアブナイと思はないではなかつたが、一時の汽車で出かける、要件をすまして、周二居に誘はれて罷り出る、いろ／＼御馳走を戴いた、酒もうんと戴いたことはいふまでもない、暮れてお暇乞する、さてそれからが例によつて例の如しだつた、遺憾なく梯子酒根性を発揮した、……カフヱーからカフヱーへ、おでんやから、おでんやへ、車動車から自動車へ、……どしやぶりの中を山口から小郡まで飲みあるいた、あまり銭は費はなかつたけれど、飲んだね、たしかに飲んだね……それでもＴちやんに送られて、恙なく、ひよろ／＼と帰庵した、一時を過ぎてゐたらう。樹明君に銭を費はせたのは、Ｔちやんに後始末をさせたのは気の毒だつた、こらえて下さい。久しぶりの酒だつた、めづらしい梯子酒だつた、暫らくは飲むまい、飲みたくもない。今日の珍談は、湯田で大行司の御神酒を頂戴したことだつた、コツプ酒一杯、串肴一本。周二君のよさがよく解つた、あの純真がいつまでも失はれないやうに、世間の荒んだ空気があの家庭にはいらないことを祈る。

　櫨がまつかで落葉をふんでちかづく音で　　偶作ストーブもえる彼
女は人妻┌──────────────┐│山行水
行　　　　　　　　　　　　　　　　││　　雑草の
中　　　　　　　　　　　　　　││ともかくも生かされてはゐる雑草
の中　　　││　　旅から旅へ　　　　　　　　　　　││燕とびか
ふ旅から旅へ草鞋をはく　　　　│└──────────────┘バ
スがまがつてゆれて明るいポスト線がまつすぐにこゝにあつまる変電
所の直角形┌────────┐│　　　改作　　　　　　　││　山あれ
ば山を観る　　　││　雨の日は雨を聴く　　　││　春、夏、秋、
冬　　　││　あしたもよろし　　　　││　ゆふべもよろし
│└────────┘

　　十一月廿六日　曇、雨。

二時間も睡つたらうか、眼が覚めたのですぐ起きる、六時のサイレンが鳴つて、やうやく明るくなつた。樹明君がふら／＼しながら帰つて行く、その後姿を見送りながら、家庭といふもの、職業といふもの、酒と人生といふやうなものについて考へるともなく考へる、……私は不思議にしやんとしてゐる。樹が雫する、屋根が雫する、……庵はまたいつものしづけさにかへる、草の葉の濡れた色、国道を走る自動車の音、……しづかなるかな。柚子味噌をこしらへる、去年の事を思ひだす、酔うて柚子釜を黒焦げにして井師に笑はれたが。終日就床、読書反省。しよう／＼としてふりそゝぐ雨、その音はわびしすぎる。あれだけ食べて、あれだけ飲んだ昨日の今日だから、さすがに胃の工合がよろしくない、自業自得、ぢつとしてゐる外ない。昨日の麦飯をあたためて食べる、昨日の御馳走はむろんうまかつた、今日のぬくめ飯もありがたい。△自己を欺く勿れ、――自分に嘘をいはせな生活、酒を愛し、酒を味はひ、酒を楽しむことは悪くないが、酒に溺れ、酒に淫することは許されない。だらしなく飲みまはるくだらなさ！△私が生かされてゐる恩寵を知つてゐるかぎり、私はそれに対して報謝の行動をしなければならないではないか。△こゝにかうして寝てゐる私にも時代の風波はひし／＼と押し寄せてくる、私は私があまりに退嬰的隠遁的であることを恥ぢる、時としてはぢつとしてゐるに堪へないことがある、そして……あゝ。……

「酒と生活と貧乏」私が若し破産しなかつたら、貧乏にならなかつたら、そして酒が安からたら――私は今日まで生き伸びてゐなかつたらう、そして酒の味も解らなかつたらうし、句も作れなかつたらうし、仏道にも入らなかつたらう。幸不幸はもののうらおもてである、何が幸福で、何が不幸であるか、よいかわるいか、ほんたうかうそかは、なか／＼に知り難い。　　小春日――（雑草点描）――私は晩秋初冬が好きだ。小春日のうらゝかさは春ののどけさ以上である。草のうつくしさ、萠えいづる草の、茂りはびこる草の、そして枯れてゆく草のうつくしさ。雑草！　その中に私自身を見出す。

十一月廿七日　けふも雨、おぼえず朝寝、午後は晴。

Ｋからの手紙が私の身心を熱くした。……おだやかな、まことによい日であつた。午後四時過ぎ、伊東さんが約の如く来庵、国森君へ電

話する、酒と魚と豆腐とを買うてきて、三人で親しく話し合ひながら飲む、近頃めづらしいよい酒であつた（街へいつしよに出て、わかれが何となくあきたらなかつたけれど）。酔うてやつと帰庵、そのまゝ寝た、弱くなつたものだよ、山頭火も。——

友、銭、酒友はありがたい、銭はほしい、酒はうまい。友を持ち、銭があつて、酒があつてはよすぎる！

十一月廿八日　晴。

きれいさつぱりと昨日までの事は忘れてしまつて、新らしく生きよう！寒い、冷える、——もう冬だなと思ふ。やつぱり、からだのぐあいがよくないので入浴、かへりみち、うどん玉を買うてきて、それで夕飯にする。風邪心地、早寝する。

・とつぷり暮れて一人である・雲がみな星となつて光る寒い空

十一月二十九日　大霜。

バケツの水が初氷となつてゐた、いはゆる霜日和、ふとんや何やかや干す。近来、朝寝をするやうになつた、そして朝食がまづくなつた、これらの事実に徴しても身心の衰弱が解る。うれしいたより。……霜日和が雪もよい空となり寒い風が吹きだした、いよ／＼冬ごもりである。酒屋の店員、米屋の主人、来庵して閑談暫時、米と炭とを買ふた、ありがたし。米屋の主人Ｉ氏から香仙粉一袋を頂戴した、日本的家庭の飲物としても食物としてもこよなき品である、そして私をして懐旧の感慨に耽らしめる。ぐつすりとようねむれた、享楽情調を去つて感謝気分に入るとき、安眠は恵まれる。

雪中行乞（改作）・雪ふりかゝる法衣おもうなる　　重雄君新婚・霜晴れ、向きあうて食べること（改作）

十一月三十日　快晴、降霜結氷。

友と本とを待つ。待つてゐた本がきた、冬ごもりの読物として広島のＧさんに頼んでおいたのである、Ｇさん、ほんとにありがたう。街へ出かけて買物いろ／＼——うどん、葱、豆腐、醤油、等々。樹明君を学校に往訪する、澄太君、黎々火君の来庵を伝へる、残念ながら宿

直だから出られないといふ、その顔のほがらかなのはうれしかつた。あれやこれやといそがしい、待つ身のつらさをあまり味はせないで、暮れないうちに、澄太君がきてくれた、酒と豆腐とを持つて。——飲む、話す、食べる、笑ふ。暮れて黎々火君もやつてきた、さらに飲む。三人で豆腐七丁、うどん五玉、酒は五合ばかり。炬燵をこしらへて、いつしよに寝た。まことにうれしい一夜だつた。

友と本とを待つ日・待つ日の炭火かさなつておこるなり　　哀悼一句、仙波さんに・こゝろしづかに小鳥きてなく香をたく　楢の枯葉の鳴るのも人を待つゆふべは・明けはなれる山の線くつきりと送電塔

十二月一日　曇、后晴。

五時の汽車へ黎々君を送る、そして二人は湯田へ行く。朝酒のうまさが朝酒のあたゝかさで、とけて流れる、すぐ戻つてきて、何もかも雑炊にして腹いつぱい食べて、そして別れた、がつかりして炬燵をかゝえて寝る。昨夜のにぎやかさ、今夜のしづけさ、それもよし、これもよし。樹明君、夜警から来て泊る。

湯田温泉にて、澄太君に・からだながしあふあつい湯がわいてあふれて・しめやかに今日がはじまる煙ひろがる

十二月一日」はママ］　晴、めつきり冬らしくなつた。

庵には春秋はあるけれど、節季はなく、随つて正月もない、あるといへば、毎日が節季でも正月でもある。……寒い、寒い、また風邪をひいたやうだ、終日炬燵にしがみついて読書。樹明君来庵、香煎をすゝり、白菜新漬でお茶を飲んで別れる、めでたし／＼。今日、漬物を刻みつゝ、独身者はとかく自分の好尚に執しやすいことを感じた。□酒好きが酒そのものに執することに罪はない、笑つて許せる、しかし酒をのむ方法手段が卑しくなるのは彼といふ人間の堕落だ、断じて許せない。——（感ずるところありて）——

暮れいそぐ百舌鳥のするどく身にちかく・冬がまたきてまた歯がぬけさうなことも　たえず鳴る汽車のとほく夜のふかく・酔ひざめのつめたい星がながれた・わかれようとしてさらにホツトウヰスキー・

しんみりする日の身のまはりかたづける　　　病中・ほつかり覚めてまうへの月を感じてゐる

　　十二月三日　曇、雪もよひ。

　第五十二回の誕生日だ、一杯やらなければなるまい、自祝の、或は自弔の意味で！濁酒はうまいな、冬はこれに限ります。独酌一本、感慨無量。樹明君招待、酒は亀齢、下物は茹葱と小鰕、ほうれん草のおひたし、鰯の甘漬。……思ひがけなくＴ子さんがやつてきた、一升罎を抱へてゐる、酒はいよ／＼豊富だ、酒さへあれば下物なんか何でもよい。愉快に飲んで酔ふ、街へその愉快を延長して、鮨を食べたり、コリントゲームを遊んだり、例の女を相手に飲んだり、……ホツトウヰスキーでおわかれ。

　・つかれてもどつてひなたの寒菊・いちにち風ふき誰もこない落葉する・悔いるこゝろに日がてり小鳥きてなくか・霜晴れ澄みわたるほどに散るは山茶花

　　十二月四日　冬ぐもり。

　身心何となく快い。しんみりする日だ。夜はひとり出かけて飲んだ、そして泊つた、酒はよくなかつたが宿はよかつた。

　　　　多賀治第二世かさねて出生、そのよろこびを私もよろこびて・霜あしたうまれたのは男の子・お日さまのぞくとすやすや寝てゐる

　　十二月五日　晴、疲労、倦退、悔恨。

　やつぱり昨夜の酒はよくなかつた、私はさういふ酒を飲んではならない。……入浴して不快を洗ひ落す。風のさわがしい一日だつた、私はしづかに落ちついてゐた。ちしや苗を植ゑつける、ふるさとをたべる砂吐流を思ひだして、ハガキを出す。

　・松葉ちる石に腰かける・藪から出てくる冬ざれの笹をかついで・落葉ならして豆腐やさんがきたので豆腐を

　　十二月六日　午前はうらゝか、午後はくもり。

まことにうれしいたよりをうけとつた、多々楼君の心がぴつたりと山頭火の心に触れた。一張羅を質入して、マイナスを払つて安心。コーヒーを餅に代へて、お観音さまといつしよに食べる。蔓梅を見つけて活ける、ステキだ。夜はヘンリライクロフトの手記を読む。

・寒をはうてきてうづくまつた虫（松）・寒さ、質受しておのが香をかぐ　ひとりで冬日のあたたかく・あるけば、あるけばよろしい落葉かな（松）・どうにかならない人間があつい湯のなか（松）・ことしもをはりの憂欝のひげを剃る・藪かげあたゝかな鶲の啼きよる・うめくは豚の餓えてゐる、寒い・どこからともなく散つてくる木の葉の感傷（松）

十二月七日　曇。

私は私のワガママとグウタラとを責めずにはゐられない、何といふ我儘な怠け者だらう！久しぶりに豆腐屋さんが来てくれたので、豆腐料理の御馳走をこしらへた。□コンニヤクのうまさも解つた。街まで出たついでに野を歩く、枯れるまゝに枯れてゆく草はほんたうにうつくしい。□自然現象は単に自然現象ではない、それが詩人に把握され表現される時には。ヘンリライクロフトの手記を読みつゞける、彼は私ではあるまいかとさへ思はれるページがある。……私も私流の随筆なら書けさうだ、三八九を復活刊行して、私の真実を表現することを決心する。

成道会の日・けさのひかりの第一線が私のからだへ　障子にゆらぐはほほけすすきで小春日和の・いつもお留守で茶の花もをはり・日がのぼると霧が晴れると大きな木がはだか　　行乞・なむからたんのう投げられた一銭　　病中・木の葉ちるちるからだがもとのやうであつたら

十二月八日　冬ぐもり。

老境の感傷。しみ／″＼したものを感じる。近郊散歩。人間は、ルンペンは死場所を求めて彷徨しつゝあるのだ、私はいつもＳ伯母が私にいつた言葉を思ひ出す、それはルンペンとしての私の心理を抉つた、……人は独り生くべし……と……と」は底本では「人は独り生くべ

し……と」]ギツシグはライクロフトにいはせてゐる、彼は孤独の個人主義者として徹してゐる。……□私にはもう、外へひろがる若さはないが、内にこもる老ひはある、それは何ともいへないものだ、独り味ふ心だ。また不眠で苦しんだ、読む本があるので助かつた。

・おもふことなく枯木をひろひあるきつつ　茶の花のちりしくところ寒菊の花・こちらがあゆめばあちらもうごく小春雲・すゝきをばながほほけたままに住みなれた・ゆふ月が、百舌鳥はまだ暮れない・冬夜いつのまに豚をぬすまれた

十二月九日　日本晴、よい日曜日を祝福する。

樹明君から来書、難問題について照会、此問題を解決する能力を私は持つてゐない、さるにても金のほしさよ。午後、公民学校へ行く、お天気がよいので、なか／＼の人出である、農産物展覧会、観てまはるうちに、おのづから頭がさがる、粒々辛苦にうたれるのである、それから小学校へ行く、児童製作展覧会、こゝではおのづからほゝゑまれる、一年生の字はまことにありがたい、三年四年となるともうよろしくない、うまくなるだけいけなくなるのだ、私は何よりも稚拙を愛する。上手ぶるのも嫌だが、下手めかすのは一層嫌だ。ぽか／＼とあたゝかい、空には一きれの雲かげもない、私にも一句の屑もなかつた。めづらしく安眠熟睡。

「のらくら手記」素材□一杯の濁酒、それがどんなに彼を慰めるか。□「腹が立つ」と「腹を立てる」と。□人生は所詮割れないものであるが、結局は一に一を加へてゆくものである。□当為〔so:llen〕と必然〔mu:ssen〕――私の生き方。□生存 existence と生活 living ――私のくらし。□日本人には何よりも米がありがたい！□働らいても食へない世の中で、ぼんやりして生きてゆける私は喜ぶべきか悲しむべきか、呪ふべきか、祝福すべきか、――私にも誰にも解るまい。

十二月十日　めづらしい霧。

何となく身心が重苦しいので、散歩でもして紛らすつもりで出かけたが、それも嫌になつて、戻つてきて読書。読書、思索、散歩、――

これが私に与へられた、いや恵まれた仕事である。人生の矛盾に時々うたれる――死にたくて死ねない人、死にたくないけれど死ななければならない人。人生は過程だといふ気がする、生から死への旅である、事の成ると成らないとは問題でない、どれだけ真実をつくしたか、それが問題だ。尽人事俟天命、あしたに道をきけばゆふべに死すとも可なり、――こゝに安心決定の鍵がある。

「のらくら手記」素材□老祖母と夏密柑の種。□したいこと、しなければならないこと、しないではゐられこと。　労働と遊戯、強制と自由。□日本人の食慾の究極は梅干に茶漬か、炊立飯に味噌汁か、新漬に濁酒か。□空想を実行する人、実行を空想する人。□知ること、忘れること。□自然観照――自己観照――人間観照。□ランプと新聞。□味ふ心、五十にして物の味を知る、知味。□頓死――ころり往生。　ぐうたら手記（覚書）　行乞　三輪空寂、三つの功徳　一、腹を立てなくなつた事　一、物を粗末にしなくなつた事　一、何を食べてもおいしくなつた事　年の暮　年くれぬ笠きて草鞋はきながら　冬ごもり　冬ごもりまたよりそはむこの柱□月と緑平と私と酒。□鼠のゐない家、、」は底本では「鼠のゐない家、」］油虫はは」は底本では「油虫は」］私を神経衰弱にする。□簑虫よ、簑虫よ。□炬燵といふもの。　日本家屋、日本国土、日本人。□妙な夢のいろ／＼。□音立てずして、しん／＼として燃ゆる火。□小さくとも完いもの、、」は底本では「小さくとも完いもの、」］大きくて完からざるものよりも。　俳句――俳句的――俳句性□与へるもののよろこび、与へられるものゝさびしさ。

十二月十一日　晴れたり、曇つたり。

酒一升借りて、肴をちよつぴり買うて、樹明君と一杯やらうと思ふ、お互に慰め合ひたい、樹明君は当面のマイナス難を忘れ、私は連夜の不眠を紛らさう。今日は郵便やさんは来ないのか、さびしいなあと独語してゐたら、正午のサイレンが鳴つてから、やつてきた、いろ／＼のたよりを持つて、――うれしかつた。待つて、待つて、待ちくたぶれてゐるところへ樹明君がやつてきた、さつそく飲む食べる話す、……私は待ちきれないで、待つ身につらき置炬燵で一本ひつかけてゐたが、――ほどよく酔うて、街を歩いて、ほどよく唄うて、別れ

て戻つて、ぐつすり寝た。

　　十二月十二日　小春日和、まことに日々好日だ。

　昨夜の残酒残肴で、朝からほろ酔機嫌！裏山の雑木がもみづいて、しんみりと朝日を浴びてゐる、いゝね、いゝね、ひとりで眺めるには惜しい。身辺整理、必要な物以外は身辺に置かないのが私の持前だ、古い手紙やハガキを燃やして湯を沸かす！緑平いよ／＼緑平、といふ題で彼の人物と作品とを評すべく、いろ／＼考へる。私も私自身に少しづつ自信が持てるやうになつた、自分の作品を愛するやうになつた。実感がなければ作らない、これが私の強味だ。昼も夜もしづかに読書。

　　　　「のらくら手記」素材□忘年会とは面白い、忘の字が意味深長だ。□世間を卒業してしまつてはかへつて面白くない、悟れば空々寂々、迷うてゐるからこそ、花も咲き鳥も啼く。……□藪柑子！　何といふつつましさ、安分知足のすがただ。□小器晩成、それが私だつた、やはり知命の五十代。□炬燵と濁酒とうどんとカレーライス！□思索、読書、句作、散歩。□噛みしめた味、人生五十年の味、命を知り耳順ふところの味。□性慾はなくなつた、食慾がなくなりつつある、つぎには何がなくなるか！

　「有句無句、「庵中独坐。

　　十二月十三日　晴、さすがにちつと冷たいが、とてもらゝかである。

　鴉、ヒヨ、ツグミ、百舌鳥、頬白、目白、ヒタキ、ミソサザヱ、等々、小鳥のうたはほんたうにうれしい。近来、食慾が減退して閉口してゐるが、今日の昼飯はうまかつた、一昨夜、駅前で食べたライスカレーのやうに、——といつて御馳走があつたのぢやない、あたゝかい白飯に玉葱の味噌汁、たゞそれだけ。二三日中に敬坊が寄つてくれるといふので、心待ちに待つてゐるが今日は駄目だつた。

　　　　「のらくら手記」素材□鱚といふ魚は、ほんたうにキレイだ、海の鮎だ、夏から秋への魚として申分なし、焼いてよろしく、刺身にしてわるくない。□香煎をすすりつつ追憶にふける。□辛いものか

ら甘いものへ、酒を飲まずにゐると、菓子や餅が食べたくなる。□生きてゐることのよろこび、生を楽しむ。□読書傾向の転移、老人の愛読書として。□雑炊といふものは。――□雲丹について（歯がぬけた老人の負惜しみ）。

　　十二月十四日　今日も好晴、毎日勿体ないやうなお天気。

　太陽のめぐみを浴びる、私の庵は日当りのよいことは一等だ、朝日がまともに昇る、家いつぱいの光だ。食慾減退の気味、今日はうどん玉を買うてきて食べた、昨日は餅、明日はパンにしようか。今春発病このかた、とかく身心がすぐれない、しかし此程度の衰弱ならば却つて私のためには好都合であらう。私はあばれたがる、砕けていへば酒癖がよろしくない、銭もないのにはしご酒である、猫である癖に虎になりたがるのである、しかも猫は猫であつて虎ではない、野良猫は日向ぼつこでもしてゐればよいのに！読んだり考へたり作つたりしてゐるうちに夜が明けてしまつた。不眠にも困つたものだ。

　・冬夜さめてはおもひでの香煎をすゝります　お粥のあたゝかさ味の素の一さじ二さじ・噛みしめる味はひも抜けさうな歯で・更けてひそかに竹の葉の鳴る

　　十二月十五日　晴、朝のよろこび。

　今年も押迫つて、あと半ヶ月となつた、庵には節季もなく、随つて正月もないのであるが、年の改まるを機として、生活のくぎりをつけなければならないものが、私にもないことはない。駅売の声がきこえる、夜はことによくきこえる、その声の調子に朝鮮人らしいのがまじつてゐる。日々の安楽、それがまことの安楽であらう、物そのものの味、それがほんたうの味であるやうに。私の最大の失敗は不幸は結婚であつた！昨夜の不眠で身心がすぐれない。待つ、郵便を、敬坊を待つ。運動がてら街のポストまで、途中海老雑魚を買ふ、これで晩飯はおいしく食べられるだらう。閑静かぎりなし。今夜もうまく寝つかれない、ぬくとさがとう／＼雨になつた。

　・枯草うごくと白い犬・日ざしあたゝかな草の実の赤い・さうぼうとしてゆふけむる月と人・小春日和の幟立ててこの里はおまつり・竹

のよろしさは朝風のしづくしつつ・あたたかくあるけば草の実くつつく・このみちの雑草の中あたたかうたどる　　　賀　元寛君新婚二句・まことに小春日の、並んでゆくかげの・山しづかにして咲いてるもの

　　十二月十六日　からりと晴れて、とてもよいお天気である。

　師走のいそがしい物音ものどかにきこえる。家いつぱいの朝日影、ありがたし。終日、閑を楽しむ、有閑老人！入浴、肉体の衰弱がはつきり解る。蕪菜を煮る、やはらくてまことに年寄向。雑草をうたふ——これが私の当面のつとめだ。毎夜よい月、今夜の月かげもよかつた。今日で五日間、私は誰とも会話しなかつた、いはゞ独坐無言の五日間だつた、孤独は私の宿命であらう、そしてそれは孤独の微笑でなければならない。畢竟、私の過去は私の煉獄であつた、無論、善い意味に於て。どうも眠れないで困る、長い夜がとても長かつた。

　　　　「ぐうたら手記」素材□凝心と放心、求心力と遠心力、知ることと忘れること。□愚に返つて愚を守る、本来自然の生活。□享楽から感謝へ。□私は恋といふものを知らない男である、かつて女を愛したこともなければ、女から愛されたこともない（少しも恋に似たものを感じなかつたとはいひきれないが）、私は何よりも酒が好きだ、恋の味は酒の味のやうなものではあるまいかと、時々考へては微苦笑を洩らす私である、酒は液体だが女は生き物だ、私には女よりも酒が向いてゐるのだらう！

　女の肉体はよいと思ふことはあるが、女そのものはどうしても好きになれない。女がゐなくても酒があれば、米があれば、炭があれば、石油があれば、本があれば、ペンがあれば、それで十分だ！

　十二月十七日　毎日、結構なお天気でございます、……と思うてゐるうちに、曇つて寒くなつた、近く雨か雪であらう、それでよろしい、今年もはや暮れようとしてゐる。

　Ｆの家族が、馬まで連れて、前畑へきた、枯蔓燃やしたり、土を耕やしたり、何のかのと話したり、……その睦まじい協力労作を見聞して、私のふさぎの虫がすこしやはらげられる。……寂しがるのではな

いが、親しい友達といつしよに、湯豆腐ででもしんみり一杯やりたいなあと思ふ。街へ出たついでに、石油代を掛にして貰つて、その金で、濁酒一杯ひつかけて例の虫をなぐさめ、うどん玉を買うて戻る、それが昼飯。いつぞや見つけておいた路傍の水仙を採つてくる、まだ蕾はかたいけれどお正月までには開くだらう。水仙は尊い花である。案外早く、暮れないうちから降りだした、そしてまた直ぐ止んだ、いやにぬくいことである。今夜も寝苦しかつた、ヘンリライクロフトの手記をやうやく読みをへて、ワルデンを読みはじめる、どちらも私の愛読書として興味がふかい。

「落葉抄」　小春なごやかな屋根をつくらふ・小春日和の豆腐屋の笛がもうおひるどき・おしつこさせる陽がまとも・人も藁塚もならんであたたか・落葉が鳴るだらう足音を待つてゐる（敬坊に）・建ていそぐ大工の音が遠く師走の月あかり・冬ごもりの袂ぐさのこんなにも・あのみちのどこへゆく冬山こえて（再録）

「ぐうたら手記」素材□したいことはいろ／＼あるけれど、しなければならないことはあまりない、さてもノンキな年の暮ではある。□性慾がなくなると、むなしいしづけさがやつてくる、食慾がなくなると、はかないやすけさがやつてくる。□後光のさす人物、余韻余情のある生活。□単純――率直――真実、それが私の生活でなければならない。□私も私自身についてアケスケに話したり書いたりすることが出来るやうになつた、自他共に隠さず衒はず、佞らず飾らない私達でなければならない。□朴念人――妙好人。□物忘れ、それは老人の特権でもあり恩寵でもある。□一鉢千家飯（行乞心理）。□カネとゼニ（金と銭とは同意語のものだが）。□南国の冬。□自殺の方法いろ／＼。□風味とは、風情とは、風流、風韻、風光、風物。　「ぐうたら手記」おぼえがき□何でもない物の美しさ！□水を大切にせよ。□物そのものの値打、殊に食物について。□倹約人、浪費者、命がけの遊蕩（私の過去）。□私の鳥目と老祖母（鱧の肝のお汁）。　┌或る老婆□矢足部落に於ける生死去来。│　└盲女
┌霊台寺　┌カリン□菩提樹のおもひで。│
│　└味取観音　└イクリ□枯れた枇杷の木（其中

庵）。▫椿に目白（梅に鶯のやうに）。▫現実を味解せよ。▫手紙風呂、日記風呂。▫私の生活はまづ私自身に真実なものでなければならない。▫充ち足れり、「放てば手に満つ。」

十二月十八日　雨。

冬雨といふよりも秋雨にちかい、何といふぬくさだらう、冬は冬らしくあれ、などゝ人間の勝手をいひたくなるほどだ、そしていつのまにやら晴れてきた。うれしいおくりもの、——黎々火君から鯛の壺雲丹、おかげでお昼食をおいしくいたゞいた。一日二食にしたい、一食は米麦、一食は雑煮、それに添へて晩酌二合（ゼイタクをいふな）。何を食べても、その味がえげつない、——濃厚すぎるやうに感じるのは、私が急に老衰したからばかりであらうか。やうやく第三句集の後記を書きあげた、再考したので意外におくれた、そしてやつと湯銭だけはあるので、湯屋まで出かけた。気分転換法としては酒もよいし散歩もよいが、入浴もよろしい、熱い湯の中にのび／＼とからだをよこたへてゐると、こゝろまでがとろけるやうである。捨丸一行が来演するといふ、私は映画を観るよりもナンセンスを聴く方が好きであるが、昨年は山口へまで出かけて彼を聴いたが、此度は行けさうにもないし、あまり行きたくもない、戯れにざれうたを作つて自から独り笑ふ——

捨丸きこか酒のもかのめばきゝたいきけばのみたいどちらもやめて寝るとする　　　　▫・空のあをさへ枯れておちない葉のさわぐ・仕事しまうて今年もをはりの柿をもぐなど・昼月ほのかに一ひらの雲かげもとゞめない・ゆふ闇のたゞよへば槠の枯葉のしきりに鳴れば　　　不眠二句・ねむれない夜の鶏はなけども明けない凩・うと／＼すれば健が見舞うてくれた夢（病中不眠）　　　　　　　　（健は離れて遠い私の独り子の名）・お祥忌の鐘が鳴り耕やす手を休め　飛行隊通過・冬空ちかく爆音の脅威　　　隣の娘・けふはお嬢さんで白いショールで　　　　　×「柿落葉」

十二月十九日　晴、冬らしくなつて曇る。

悠々として酒を味ふ——かういふ境涯でありたい。終日、第三句集山行水行の草稿をまとめる。夕方から、樹明君に招かれて学校の宿直

室へ出かける、八日ぶりの会話であり（途上挨拶をのぞいて）八日ぶりの酒であつた（濁酒二三杯はひつかけたが）。食べすぎて飲みすぎて、やつと帰庵して、そのまゝぐつすりと寝た、連夜の睡眠不足をとりかへした。不眠の苦痛は不眠症にかゝつたものでないと、ほんたうには解らないだらう。

「ぐうたら手記」□このみちをゆく――このみちをゆくより外ないから、このみちを行かずにはゐられないから――これが私の句作道だ。□芸術家の胸には悪魔がゐる、その悪魔が出現して、あばれた時に芸術家は飛躍する、悪魔がころんで神の姿となるのである、芸術的飛躍は悲劇である、それは人生で最も深刻な、最も悲痛な行動の一つである。……□捨てて捨てて、捨てても捨てても捨てきらないものが、それが物の本質であらう（さういふ核心はほんたうには存在してゐないのだらうが）。□雲丹を味はひつつ物のヱツセンスについて考へた。□大蘇鉄の話（旦浦時代の父の追憶）古鉄、考へやう一つ、吉凶禍福は物のうらおもて。□農夫のうちかへす一鍬一鍬は私の書く一字一字でなければならない、彼にありては粒々辛苦、私にありては句々血肉である。

十二月二十日　晴、そして曇。

胃は重いが頭は軽い。どうしたわけか、昨日も今日も郵便が来ないのでさびしいことかぎりなし。句集草稿をやうやく大山君に送ることができたので、のう／＼して炬燵で読書。どうも腹工合がよろしくない、腹工合のよろしくないほど飲み食ひするとはあさましい！しかし、麦飯と梅干と松葉粉とがその腹工合をよろしくしてくれた。ここに寝てゐて安養浄土を感じてゐる。

・日照雨ふる朝からぽんぽん鉄砲をうつ・晴れさうな竹の葉の露のしたたる　　　緑平老に・あなたのことを考へてゐてあなたのたよりが濡れてきた　　　そこらの嫁さん・麦まきもすんだところでお寺まゐりのおしろい塗つて┐・鋪装道路の直線が山へ、もみづる山山　　　　　　├（雑草）・師走の空のしぐれては月あかり　　　　　　┘・ハガキ一枚持つて月のあるポストまで・あるくともなくあるいてきて落葉する山

十二月廿一日　晴、時々曇りて暖かし。

街のポストまで出かけて、それだけでがつかりした、何と、弱くなれば弱くなれるものだ。思索する、散歩する、句作する、読書する、——山頭火はかうして生活する。……刻煙草もなくなつた、なくなればなくなつたでよろしい。喫はないでこらえる……これは私の心境の平静をあらはすものであるが、一面に於ては、私の意慾の減退をしめすものである。

「ぐうたら手記」素材□下手くそで間のぬけたもの、好きだね、気がきいて出来すぎたもの、いやだね。□妹がくれたチヤンチヤンコの話。　冬ごもりには炬燵と共にふさわしい。　シヱーターきては冬ごもりらしくない（ネンネコ、サル、胴着、追憶ばかり）。□したいことしかしない私である！□なくて困る歯、あつて困る脱肛肉、世の中は思ふやうにはならない、ほんとにきたない老の繰言。□餅といふものは——

十二月廿二日　曇、をり／＼しぐれる、ぬくすぎる。

机上の一輪※に梅一枝を※す、まだ／＼蕾はかたい。身辺整理、整理しても整理しても整理しきれないものがある。……餓えたる油虫！彼に人間を観た！夜は雨、不眠、読書。

十二月廿三日　雨、曇、晴、夜はあたゝかい月あかり。

いつでも死ねる——いつ死んでもよい覚悟と用意とを持つてゐて、生きられるだけ生きる安心決定で生きてゆきたい。かりそめの干柿を味ふ、うまい、捨てられた柿だつたが。伊東さんが送つてくれた中外日報を読む、年来の愛読誌であるが、涙骨老に改めて敬意を表する。今夜も眠れなかつた、ランプの油が乏しいから、月あかり街あかりする寝床の中で考へつゞけた。……

・きら／＼ひかつて売り買ひされるよう肥えた魚　孫の手をひきお寺まゐりのさげてゐるはお米・月からこぼれて師走の雨のぬくい音・触れると散るまへの櫨紅葉かな　其中一人にして冬ごもり・小春日のさせば障子をあるく虫のかげ

十二月廿四日　晴、めつきり冬らしい寒さとなつた。

安静、感謝、知足安分の心境。健がボーナスのお裾分をしてくれたので、さつそく払へるだけ、払ふべきものは払ふことが出来た、そして買物もあるし、温泉にも浸りたいので、山口へまで出かけたが、からだのぐあいが悪くて、ほんたうに閉口した、いつも食べる二十銭の定食も食べたくなかつた、ほどよい宿に泊つてもいゝのだが泊りたくなかつた、おそくなつて、やつと帰庵して、すぐ寝た。……冷酒をあほつたからであらう、餅菓子を食べたからでもあらうか、……とにかく弱つた、……老衰をひし／＼と感じた、感じないではゐられなかつた、……そして考へたことである、山頭火は其中庵にぢつとしてゐるより外はない、口腹の慾を断ち、人間の執着を捨てて、自然観照の詩に沈潜する外はない。……

・凩の、大きな日の丸がはためく・こんなにも弱つてしまつた落葉ふむさへ・早う寝るとして寒月ののぼるところ・生きてゐることがうれしい水をくむ・こんなに痩せてくる手をあはせても

十二月廿五日　晴。

何とうらゝかなお天気、そして何と衰へた私。庵はよいかな、日光はありがたいかな、小鳥のうたはよろしいかな。心しづかにして香を※く、からだが弱つてゐる、香煎をすゝる、読むに本あり、思ふて懐かしい友あり。
……………………………………………………………………三八九復活準備。真理創刊号を読む、私のやうなものでもその運動に参加したいほどの衝動を感じた。……孤立は無論ウソだ、対立もウソだ、やつぱり私達は相互依存でなければならない、自覚的に、意識的に。○今年も暮れようとしてゐる、今年はいろんな意味で苦しんだ年だつた、たしかに私の身心の転換期であつた、肉体がます／＼弱く、心はいよ／＼澄んで。抱壺句集が来た、抱壺君からの来信もうれしかつた、三羽の鶴の出現はほんたうによろこばしい。農学校に樹明君を訪ねて話してゐるとき、思ひがけなく周二君来訪、三人いつしよに帰庵して会飲、そして珍客芝川君を迎へた、意外であつたゞけ会合のよろこびは二乗された、千福の酔心地、広島牡蠣のうまさ、そのうまさも二重だつた。みんないつしよに駅まで、芝川君は長崎へ、周二君は山口へ、樹明君は家へ、そして私は庵へ。また飲みすぎ食べすぎで工合がよく

なかつたが、ぐつすり眠れたのは幸福だつた。何も食べたくないが、梅干はよろしい、酒は飲みたくないけれど生水はうまい！

・ことしも暮れるお墓を掃除する　　　周二君に・けふはよばれてゆきますガソリンカーで・年の市のお猿さんやたらに踊らされてゐる・こゝろなぐさまずこゝまで来たが冬されの水　　　湯田温泉・わいてたたへてあふれる湯の惜しむところなく・ぼんやり観てゐる冬山のかさなれるかたち

　十二月廿六日　晴、冬ぐもり、晴。

食慾がない、昨日の酒がまだ一升残つてゐるのに飲みたくない、弱くなるときにはかうも弱くなるものかと嘆きたくなる。……午後、約束通りに山口の周二居へ出かける、君の入営送別句会を催ほすといふのである、句会といつたところで、家族の方々と会談して名残を惜しまうといふのである。途中湯田温泉に浸る、飯蒸器を買ふ、温泉はよいかな、そして飯蒸器はありがたいかな（こんな器具でも手持のそれとの間にはいろ／＼改良された個所がある、日進月歩といへば大袈裟だらうけれど、時々刻々進んでゆきつゝある時代を感じないではゐられない）。糸米あたりの山々を眺めては休む、周二居についたのは五時前、酒はお断りしてライスカレーを頂戴する、暮れて樹明君も来会、奥さんやお嬢さん方もいつしよに句作する、そして最後は御馳走になる、まことにしめやかな会合ではあつた、私も甘やかされて健の話をした、息子自慢が出来るオヤヂではないのに！　やうやく最終のバスで帰庵した、折からの月がまともに庵いつぱいのひかり、寝るには惜しいやうだつたが、ぐつすりねむれた。人の情にうたる私だつた！今夜、周二居で、壺に※してあつた寒菊の白さがいつまでも眼に残つた。

・こんなところに師走いそがしい家が建つ・枯れつくして芭蕉葉は鳴る夜の片隅・遠く鳥のわたりゆくすがたを見おくる・寝しな水のむ山の端に星一つ・あすはお正月の御飯をあたゝめてひとり

　十二月廿七日　晴、曇。

霜が降つて氷が結んでゐる、冬の厳粛を感じる。当分、酒を断つて

ぢつとしてゐよう、さうするより外ない私となつたから。今日はポストまで出かける気力もなかつた。庵中独坐、こゝろおのづから澄む。今日の食物——うどん一玉、ぬくめ飯一碗、香煎一杯、餅二つ、饅頭三つ！酒が飲めなくなつて菓子がうまくなる、木の実を味ふ、酒の執着がなくなつて貪る心もなくなつた。□病みてしみ／″＼生を味ふ、死を観じつつ。樹明君から饅頭を、私から酒を。——食慾のないことはさびしいが、眠れることはうれしい。

・しと／＼しぐれる笹のさら／＼　　　宿直室にて・電燈一つが長い廊下が冬・年わすれの酒盃へ蝿もきてとまる・ことしもをはりの宿直室でラヂオドラマが泣きだした・年のをはりの風が出て木の葉ふきおとした・きずがそのままあかぎれとなり冬籠る・豆腐屋の笛が、郵便もくるころの落葉・お正月の、投げざしの水仙ひらいた　　　周二居・むかへられてすはれば寒菊のしろさ

　十二月廿八日　雪もよひ、しぐれてしける。

不安なく不平なし、ひとりしんみり時雨を聴く。てつかい味噌、有一君の心づくしを日々味ふことである。※友情に生きる、それは私の生活をあらはす語句だ。身辺整理。お天気もよくないし、気分もすぐれないけれど、むりに郵便局へ出かけて手紙や葉書を投げ込む、そして謄写用紙を買ふ、重いのを我慢して、雨に濡れながら農学校まで辿り着いた、都合よく樹明君は宿直、夕飯をよばれてそのまゝ泊つた、さけ、さかな、めし、みんなうまかつた。

　　　「ぐうたら手記」素材□大根の煮たの、あの香、あの味、あの団欒、あの雰囲気！□創作の苦楽——遊戯、表現、苦即楽。□味噌汁と漬物と梅干。□牡蠣と雲丹。□五十才にして五十年の非を知る！※食慾があつて食物がないのと、食物はあるのに食慾がないのと、さてどちらがよいか、いづれを択ぶか！□酒中酒尽——空の世界、有無超脱。

非有、非無、非非有、非非無。……

□このみちをゆく——このみちをゆくよりほかない私である（第四句集後記）。

十二月廿九日　さんざ降つて晴れ、いやな風がふく。

起きるとそのまゝ帰庵。ありがたし、緑平老。今日は敬治君来庵の日、樹明君も来庵の筈、で、魚買ひに豆腐買ひに街まで。樹明君午後来庵、敬治君不来、二人で一杯やる、私が飲めないので気の毒だつた。六日ぶりに、やつと冷飯がなくなつた。夜は読書。くづれつつある肉体をいたはる。心！　心とは。——

・ふと眼がさめて枯草の鳴るはしぐれてゐるか・考へるともなく考へてゐたしぐれてゐた　藪はしぐれる郵便受函が新らしい　雨がぬくすぎる師走のかみなり・山から夜風がごうときて窓をうつ年の暮

十二月卅日　晴、冬らしくて気持がよい。

朝は餅雑炊、めづらしくおいしくてたくさん食べた、ちと食べすぎたやうだ。煤払、床の間、仏壇、机上、食卓をきれいにする。昼食は饅頭三つ、香煎一杯。山へ行つて、松と裏白とを採つてきて、松飾をこしらえる、うらじろ、しめかざりといふものはよろしいかな。六日ぶりに御飯を炊く、二合、今明日中はこれで十分。暮れる前に、やうやくにして敬治君来庵。お土産は鶏肉と酒（砂糖までも気をつけてありがたい）。豆腐は昨日の残りがあり、ほうれん草は畑からぬいてきて、何と御馳走が出来たことだ、——ゆつくり飲んだ、よい酒だつた、うまい酒だつた、近来にない楽しい会談だつた、来る筈の樹明君が来てくれなかつたのは惜しかつた。九時過ぎて敬治君は帰つていつた、私はあたゝかい寝床にはいつた、ぬくさがとう／＼雨となつた、この二三日来また、どうもよくねむれない。……

十二月卅一日　雨。

昭和九年、一九三四年、私の五十三才の歳もいよ／＼今日限りである。……まことにおだやかな年の暮なるかな。六時のサイレンと共に起きて、あれやこれやと一人の節季。食慾がだん／＼出てくるやうだ、うれしい。Slowly and Steadily. 何事もこれでなければならない。午前、樹明君来庵、餅と輪飾とを持つてきてくれる、一本つける、私は飲めないから、彼の飲みつぷりを観てゐるだけ、すまないと思ふ。……病めば嗜好もかはつてくる、好きなものが嫌になつたり、嫌なも

のが好きになつたり。樹明君から古いゴムの長靴を貰つて、それを穿いて、ぼとり／＼と街へ出かける、端書と石油と、そして年越そばを買うて戻る。午後、敬治君来庵、餅を貰ふ、餅ほどうまいものはないと思ふ、日本人と餅！二人で一杯やつて、炬燵でしめやかに話す、かはればかはる二人であつた。後からまた来ます、帰つて子供の世話をして来ませう、ゆつくりこゝで年を送り年を迎へませうといつて敬治君は帰つていつたが、それきり来なかつた、私はひとりしづかに読書しつつ除夜の鐘の鳴るのを待つた。……私は期待しない、明日よりも今日である、昨日よりも今日である、今の今、これのこれが一切だ。

□今日、或る店でハガキ二十枚買つたら、息子が間違つて二十一枚くれた、当然その一枚は返した、そして私は愉快だつた、それは――小さな善を行つたといふよろこびでもある、受取つてはならないものを返したといふ快さでもある、しかし――私は偶然を願望しない（幸も不幸も）、人生には偶然らしいものがありがちだけれど、私は偶然を受取らない、人間の生活は当然に向つて進展しつつある、あらねばならない、必然を受納する、しなければならない。除夜の鐘が鳴りだした、私は焼香念誦した、あゝありがたい年越ではある。・昭和九年もこれぎりのカレンダー一枚

×

『最後の晩餐』一家没落時代の父を想ひ祖母を想ふ。

第28章
其中日記　08 (新字旧仮名)

唐土の山の彼方にたつ雲は　　ここに焚く火の煙なりけり

一月一日

・雑草霽れてきた今日はお正月・草へ元旦の馬を放していつた・霽れて元日の水がたたへていつぱい　けふは休業の犬が寝そべつてゐる元日・椿おちてゐるあほげば咲いてゐる・元日の藪椿ぽつちり赤く・藪からひよいと日の丸をかかげてお正月・お宮の梅のいちはやく咲いて一月一日・空地があつて日が照つて正月のあそび　　　湯田温泉・お正月のあつい湯があふれます　　　年頭所感・噛みしめる五十四年の餅である

ぐうたら手記　覚書▫底光り、人間は作品は底光りするやうにならなければ駄目だ、拭きこまれたる、磨きあげられたる板座の光、その光を見よ。▫平凡の光、凡山凡水、凡山凡境、それでよろしい。※自然現象――生命現象――山頭火現象」は底本では「――山頭火現象」］。※自己のうちに自然を観るといふよりも、自然のうちに自己を観るのである（句作態度について）。※したい事をして、したくない事はしない――これが私の性情であり信条である、それを実現するために、私はかういふ生活にはいつた（はいらなければならなかつたのである）、そしてかういふ生活にはいつたからこそ、それを実現することが出来るのである、私は悔いない、恥ぢない、私は腹立てない、マガママモノといはれても、ゼイタクモノといはれても。……▫自己の運命に忠実であれ、山頭火は山頭火らしく。

清丸さんに・こゝのあるじとならう水仙さいた・こゝに舫うてお正月する舳をならべ　　　坊ちやん万歳・霜へちんぽこからいさ

ましく　霜晴れの梅がちらほらと人かげ・耕やすほどに日がのぼり氷がとける　足音、それはしたしい落葉鳴らして（友に）・みんないんでしまへばとつぷりと暮れる冬木・ふけてひとりの水のうまさを腹いつぱい

一月十一日　晴、あたゝかい。

近頃の食物の甘さ——甘つたるさはどうだ、酒でも味噌でも醤油でもみんな甘い、甘くなければ売れないさうだが、人間が塩を離れて砂糖を喜ぶといふことは人間の堕落の一面をあらはしてゐると思ふが如何。朝、浜松飛行隊へ入営出発の周二君を駅に見送る、周二君よ、幸福であれ。前の菜畑のあるじから大根を貰ふ、切干にして置く、大根は日本的で大衆的な野菜の随一だ。よい晩酌、二合では足りないが三合では余ります。うたゝね、宵月のうつくしさ。

周二君を送る三句　落葉あたゝかう踏みならしつゝおわかれ・おわかれの顔も山もカメラにおさめてしまつた・おわかれの酒のんで枯草に寝ころんで・甘いものも辛いものもあるだけたべてひとり　枯草を焼く音の晴れてくる空・枯木に鴉が、お正月もすみました　送電塔が、枯れつくしたる草　私の懐疑がけふも枯草の上　時間、空間、この木ここに枯れた

一月十二日

いつもより早く、六時のサイレンで起きる。物忘れ、それは老人の特権かも知れない、私も物忘れしてはひとりで微苦笑する。餅と酒とを買ふ、餅もうまいし酒もうまい。酔うた、酔うたよ、二合の酒に。……夜はさびしい風が吹きだした、風がいかにさびしいものであるかは孤独生活者がよく知つてゐる。

・雑草よこだはりなく私も生きてゐる・しぐるゝや耕すやだまつて一人　　周二君を小郡駅に見送るプラットホームにて　窓が人がみんなうごいてさようなら

一月十三日　晴れて風吹く。

冷たくて「寒」らしい、冬は寒いのがほんたうだ。酒と豆腐とがあつて幸福である。樹明君来庵。いつしよに出かけてＳさんを訪ねる、

御馳走になる、それから三人連れで歩く、コーヒー、ビフテキ、コリントゲーム、等、等、等。ほどよく別れて帰庵。

・家があれば菰あむ音のあたゝかな日ざし・雑草ぽか／＼せなかの太陽・日向ぬく／＼と鶏をむしつてゐる　夕日のお地蔵さまの目鼻はつきり　水に夕日のゆらめくかげは

一月十四日　晴――曇――雨。

うれしいたより、これあるがゆえに私も生きてゆける。昨夜の食べすぎ飲みすぎで今日一日苦しんだ、やつぱりつゝしむべきは口である。つゝましく生活せよ、私の幸福はそこにある。

一月十五日　雨、曇。

終日終夜、読書思索。深夜の来庵者があつた、酔樹明君とＩ君、どこへいつても相手にされないのでやつてきたといふわけ、管を巻くことはやめにして寝てもらつた！

一月十六日　曇、初雪。

早朝、樹明君がしほ／＼としてかへつてゆく、酔つぱらつた人間もみじめだが、酔ひざめの人間はさらにみじめだ！うれしいたより、井師から麻布の佃煮を頂戴した、さつそく昨夜の酒を燗して、雪見酒といふ贅沢さ、酒もうまかつたが、佃煮はとてもおいしかつた。佃煮といふものは日本的情趣がある。近頃の私は飲むことよりも食べることに傾いてゐる。小米餅が見つかつたのでさつそく買つた、まづしい田園味だ。久しぶりに入浴、しづかなるかな身も心も。此頃は巻煙草よりも刻煙草が好きになつた、しかもなでしこのどろくさいのが！炬燵で読んだり考へたりしてゐるうちに、いつしか夜が明けてしまつた。……

・芽麦あたゝかなここにも家が建つ・麦田うつ背の子が泣けば泣くままに　暮れてひつそり雪あかり月あかり・月がうらへかたむけば竹のかげ・雪ふる食べる物もらうてもどる　　農村風景の一つ・梅がさかりで入営旗へんぽんとしてひつそりとして　　悪友善友に　わかれてひとり、空のどこかに冷たい眼

一月十七日　雪がうつくしい、ふつてはきえる。

朝早くから今日も雪見酒、もつたいない仕合せである。雪のふりしきる中を街のポストまで。今日の買物は——餅、うどん、パン、いなり鮓！

ぐうたら手記□佃煮と老境と日本的なもの。□豚の生活、食べて、そして食べられるだけ！□写生——文字通りに——イノチヲウツス。□忌花の話。※何よりも不自然がよくない、いひかへれば生活に無理があつてはいけない、無理があるから不快があり、不安があるのである。□買ひかぶられるきまりのわるさよりも、見下げられる安らかさ。※将棋の名手は含みといふことをいふ、一手は百手二百手を含んでゐるのである、また、千石二千石の水からしたゝる一滴は力強いものを持つてゐる、そのやうに一句は全生活全人格からにじみでたものでなければならない。※私の一句一句は私の一歩一歩である、一句は一歩踏みゆく表現である。

一月十八日　晴、ちらほら小雪がふつて冷たい。

あれば食べすぎる下司根性が恥づかしい！　どうやら餅を食べすぎたらしいので今日はパン。呪はれた枇杷の木、それがいつのまにやら枯れた！　さびしい。夜を徹して句作推敲……。明日は入営の別宴の唄声がおそくまできこえた。

・雪もよひ雪となつた変電所の直角形（改作）・おもひでがそれからそれへ晩酌一本・雪あかりのしづけさの誰もこないでよろしい　子をおもふ・わかれて遠いおもかげが冴えかへる月あかり・あの人も死んださうな、ふるさとの寒空・あすは入営の挨拶してまはる椿が赤い・おわかれの声張りあげてうたふ寒空・ひつそり暮らせばみそさざい・ぬけた歯を投げたところが冬草

一月十九日　雪へ雪ふる寒さ、「寒」も変態的から本格的となつた。

今日が一番冬らしい冷たさだつた、吹く風もまさに凩。午後、急に思ひ立つて防府へ行く、運悪くも逢ひたい人に逢へず、果したい用事も果さなかつた、たゞ宮市——生れ故郷の土を踏んでライスカレーを

食べて帰つた。非常に労れた、私はぢつとして余生を終る私でしかないことが解つた。ぐつすり寝た、熟睡のありがたさ、それは近頃にないうれしいめぐみだつた。

一月二十日　晴、四五日来の暗雲がすつかり消えた。

今日はＤさんＳさんＫさんが来庵する日である、何はなくとも火をおこし、炬燵をぬくめておかう。友あり……と庵主の心境である。三寒四温といふ、その一温といふお天気である。街のポストまで出かけて、ついでに豆腐を買うてくる。餅粥はうまいな。……Ｄさんはとう／＼来なかつた、Ｓさんも Ｋさんも来なかつた、……私は待つてはゐたけれどアテにはしてゐない（アテにしてゐるとアテがはづれたとき腹が立つ）。来者不拒、去者不追、私は私一人で足るだけの生活情調を持つてゐる。今夜もようねむれるこころよさ。

・明けてくる物みな澄んで時計ちくたく・はなれたかげはをとことをなごの寒い月あかり・けさの雪へ最初の足あとつけて郵便やさん・とぼ／＼もどる凩のみちがまつすぐ　ここに家してお正月の南天あかし　たまたま落葉ふむ音がすれば鮮人の屑買ひ　　　緑平老の愛犬ネロが行方不明となつたと知らされて二句・冬空のどちらへいつてしまつたか・犬もゐなくなつた夫婦ぎりの冬夜のラヂオ

一月廿一日　曇、時雨、晴。

目白の群がおとなしく椿の花に遊んでゐる。――あるけない、のめない、うたへない、をどれない私自身を見出すばかりだつた、――ひとりしづかに、たべて、読んで考へて、作る外ない私自身を見出すばかりだつた。――完全に遊興気分から脱却した、アルコールを揚棄することが出来た、――味はひ楽しむ時代が来たのだ。山頭火は其中庵に、其中庵の山頭火だ。ねた、ねた、十三時間ねた。……

・しぐれつつうつくしい草が身のまはり

一月廿二日　晴、身心一新、おだやかな日。

終日終夜読書。

一月廿三日　白がいがいの雪景色。

長らくなまけてゐた、けふからいよいよ勉強する。雪へ雪のかゞやき、清浄かぎりなし。庵中独臥、読書三昧。今日もおだやかな一日だつた、日々好日の境地へはまだ達してゐないけれど、日々が悪日でない境涯ではあると思ふ。

・雪のしたゝる水くんできてけふのお粥・春の雪ふる草のいよいよしづか・わらや雪とくる音のいちにち

一月廿四日　晴、寒、曇。

三日ぶりに街へ出かけた（人と話したも三日ぶり）、そして酒と米と餅と豆腐とを買うてきた。雪がふれば雪見酒、酒がなければ読書、炬燵と餅とはいつでもある、――これが私の冬ごもり情調だ。

・寒空のとゞろけばとほくより飛行機・爆音、まつしぐらに凩をついて一機・飛行機がとんできていつて冴えかへる空・けふもよい日の、こごめ餅こんがりふくれた　　　戯作一首世の中に餅ほどうまいものはない　　すいもあまいも噛みしめる味

一月廿五日　霜晴れ、のどかな日かげ。

午前、街へ出かけて、払へるだけ払ひ、買へる物だけ買ふ。午後、また出かけて駅までゆく、いろ／＼の用事を思ひだして山口へ、そして鈴木さんを訪ねる、頼む事は頼んで、御馳走を頂戴した、帰途湯田で入浴、温泉にひたつてゐる心持は往生安楽国だ！帰庵したのは十時だつた、労れた、々々々。留守中に来客があつた、酒と肴を持つて来て、そして飲んでも食べても待ちきれなかつたらしい、――彼は樹明君でなければならない、――机上のノートには何のかのと書き残してあつた。私は此頃めつきり衰弱して、半病人の生活をしてゐる、そしてさういふ生活が私をしてほんたうの私たらしめてくれる！

・かあとなけばかあとこたへて小春日のからすども・夜あけの風のしづもればつもつてゐる雪・見あげて飛行機のゆくへの見えなくなるまで　たたへて凍つてゐる雲かげ・あたたかなれば木かげ人かげ・枯草へ煙のかげの濃くうすく・わかいめをとでならんでできる麦ふむ仕事・竹の葉のいちはやく音たてて霰　　　改作二句・木枯は鳴りつのる変電所の直角線・しんみりする日の、草のかげ

一月廿六日　雪もよひ、小雪ちらほら。

酒があるから酒を飲む、朝酒はうまい。青海苔の風味をよろこぶ。午後、樹明往訪、そして来訪、あつさり飲んでめでたく別れる、——人生はうすみどりこそよけれ、だ。

ぐうたら手記□自然と自我との一如境、無為安楽の老境。□自己省察——自己精進——自己超克。□酒は高い、本は安い、酔うて軽く持つて重い、酒はうまくて本はおもしろいことはあまりに明白。□あかるい、あたゝかい日ざし、それを浴びて味うてゐるだけでも、生きてゐることの幸福を感じる。□雑草の心、それを私はうたひたい。□個性と自我、個性は全のあらはれとしての個、自我は我慾の結晶、芸術に於て、個性は表現されなければならないが、自我に執着してはならない。

一月廿七日　晴、そして曇。

……待つてゐる……何を……待つてゐる……まづ郵便を……そして……友人を。……偉大一升借りる、鰯十尾買ふ。午後、樹明君約をふんで来庵、お土産は餅、ボタ餅がないのが残念だつたが。気持よく飲んで酔うて、さよなら。今日、駅のポストまで出かけたついでに、ライスカレーを食べた、Ｏ食堂のそれは肉めし程度、さらにＫ食堂のそれはうまかつた、とにかく私は私の胃袋に祝福をさゝげます！

一月廿八日　晴れてあたゝか、すこし歩く。

畑仕事、すぐ労れてダメ、情ないかな。ようねむれることは何よりのよろこびだ。

一月廿九日　曇、冷たい、小雪ちらつく。

たよりいろ／＼、うれしいうれしい。寒い、鯖のさしみで一杯。ちかごろの私の句作傾向はわるくないと思ふ、一日一句でたくさんだ、その一句を磨いて磨いて磨きあげるのである、そこに私の性格があり生活があると思ふ。

私の生き方——（附、郵便貯金の事）私は私が不生産的であり、隠遁的であることことのためにに苦しみ悩んでゐた、そしてやうや

くかういふ信念に落ちつくことが出来た――行動といふことは必ずしも直接的であることに限らないと思ふ、性格的に間接的にしか行動し得ない私は、私自身をして、私の周囲をして、なごやかな存在とし、なぐさめの場所として荘厳し提供する、それが私の生活の意義である、と私は考へる。私は今日から郵便貯金を始めた、一日十銭を節約するのである（バツトをなでしこに、酒三合を二合にといふ風に）、そしてそれは私の死骸かたづけ代となるのである。省みて疚しくない生活、俯仰天地人に恥ぢない生活、嘘のない生活、秘密のない生活、――無理のない生活、悔のない生活、――私自身の生活。

　　一月三十日　曇、霙、そして朝酒！

　ちよつと街へ、――理髪入浴。今日はからだのぐあいがよつぽどよかつた。身も心も欲しがる酒、さういふ酒だけ飲むべし。

　　一月三十一日　晴曇、ずゐぶん冷たい。

　明方やつと眠りついたと思つたら、恋猫のために眼覚めさせられた、いがみあひつゝ愛し、愛しあひつゝいがむのが、彼等の此頃の仕事だ、どうすることもできない本能だ。

　　　　　　旧正月まへ・こゝろたのしくてそこらで餅をつく音も・更けてひとり焼く餅の音たてゝはふくれる・みぞれする草屋根のしたしさは　霜晴れの、むくむくと土をむぐらもち　ふるつくふうふういつまでうたふ　　　改作　ほつと夕日のとゞくところで赤い草の実

　　二月朔日　晴。

　もう二月になつた。……ぶら／＼歩いて、酒と魚とを買うて戻つた。何となく腹工合が悪い、嫌な夢を見た。今日は一句もなかつた、それでよろしい。

　　二月二日　曇、ばら／＼雨。

　緑平老からの手紙まことにありがたし。梅の花ざかり、そこらを歩くとほのかに匂ふ、椿の花も咲きつゞけてうつくしい。樹明君に招かれて、夕方から学校の宿直室へ出かける、酒と飯とをよばれる、すこし飲みすぎて心臓にこたえて苦しんだが、しばらくして快くなつた、

とうとう泊つた、しかし一睡も出来なかつた、勝太郎の唄をラヂオを聴いた、いろ／＼の雑誌を読みちらした。睡れないなら睡れるまで睡らないでよろしい。

　　高声は山ゆきすがたの着ぶくれてゐる　寒い朝の、小鳥が食べる実が赤い　曲ると近道は墓場で冷たい風・寒い裏から流れでる水のちりあくた・南無地蔵尊冴えかへる星をいたゞきたまふ・恋猫が、火の番が、それから夜あけの葉が鳴る　雪でもふりさうな、山の鴉も寒さうな声で

　　二月三日　曇、雪もよひ、寒い冷たい、時雨。

　暗いうちに昨夜食べ残した御飯を食べて帰庵、すぐ炬燵をあたゝかくして読書。まだ徹夜なら一夜二夜は平気だ、御飯も二三杯、餅なら五つ六つは何の事はない（酒は三合飲むと飲みすぎて苦しくなるが）。私としては出来るだけの御馳走をこしらへて、来庵するといふ樹明君を待つ。……今日読んだものの中に、渇魚、渇地獄、渇極楽といふ言葉があつた、味ふべき言葉だと思つた、地獄の底の極楽を泳ぐ魚（魚にあつては地獄であらう、人間に釣りあげられるから）。樹明来、さつそく飲む、下物は焼小鯛、玉葱のぬた、黒布の佃煮、いづれも庵独特の手料理。急用ができて樹明君は早々帰つて行つた、奥さんがわざ／＼迎へに来られたので何とも致し方がない。夜、冬村君が約束通りに餅をたくさん持つてきてくれた、ありがたい、此頃の私は酒を貰ふよりも、銭を貰ふよりも、餅を貰ふことがうれしい、それほど私は餅好きになり、餅ばかりたべてゐるのである、近くまた樹明君も持つてきてくれるといふ、うれしいな！※飯の味、酒の味、水の味、そして餅の味、つぎは茶の味か。……

　・ひとりであたゝかく餅ばかり食べてゐる・足音が来てそのまゝ去つてしまつた落葉・今日のをはりのサイレンのリズムで・けふも雪もよひの、こんなに餅をもらうてゐる・星空冴えてくる寒行の大鼓うちだした

　　二月四日　晴、時々曇。

　旧のお正月、節分でもある、私はいつもお正月だ！終日籠居、睡く

なればうたゝ寝、覚めては読書。独り者は独り言をいふ、これも表現本能のあらはれであらう。

落葉ふんで豆腐やさんがきたので豆腐を（改作）

二月五日　曇、霜、氷、雨。

朝は餅粥、餅と米と大根とが渾然としてうまさそのものとなる。……午前中はとても寒かつたが、午後はあたゝかい、むしろぬくすぎる雨となつた。

・霜枯れの菜葉畑も春がうごいてゐる雨・ここでもそこでも筵織る音のあたゝかい雨

二月六日　晴、小雪ちらりほらり。

独を慎しむ——独を楽しむ——これが今日此頃の私の生活気分である。

・霽れそめて雫する葉のあたゝかな・あすもよい日の星がまたゝく・やうやく見つけた蕗のとうのおもひで　　　追加一句　ふくろうないてこゝが私の生れたところ

二月七日　雪、雪、雪、晴れていよ／＼うつくしい。

雪をふんで雪ふる街へ、——その買物は醤油三合十五銭、鰯十銭十四尾、酒は幸に余つてゐる！雪、酒、魚、火、飯、……しづかな幸福、片隅の幸福。今日は雪の句が二十ばかり出来た、出来すぎたやうだけれど出来るものはそれでよからう、水の流れるやうなものだから、尾籠だけれど、屁のやうな糞のやうなものだから！

ぐうたら手記□或る日の私。□酒（私もやつと酒について語れるやうになつた）。□自殺は二十代に多く、そして五十代に多いと或る社会学者が説いてゐた、この五十代については考へさせられる。※素人と玄人との問題。　芸術制作に於ける、殊に句作に於ける※自然には矛盾はない、あると考へるのは矛盾だらけの人間である。□「遊ぶ」と「怠ける」□出来た句——生れた句、作つた句、拵らへた句。□人生——生活は、長い短かいが問題ではない、深いか浅いかに価値がある。※五十知命、いひかへれば冷暖自知ではあるまいか。

・雪へ雪ふる小鳥なきつれてくる・雪がふるふる火種たやすまいとする・雪のなか高声あげてゆきき・枯木の雪を蹴ちらしては百舌鳥・雪ふるゆふべのゆたかな麦飯の湯気・雪、街の雑音の身にちかく　雪の大根ぬいてきておろし　雪をふんで郵便やさんがうれしいたよりを・雪をかぶつて枯枝も蓑虫も・雪ふれば雪のつんではおちるだけ・あなたの事を、あなたの餅をやきつつ（樹明君に）　雪のふりつもるお粥をあたためる・いちにち胸が鳴る音へ雪のしづくして・ぶらりとさがつて雪ふるみのむし・雪つまんでは子も親も食べ　朝のひかりのちりあくたうつすりと雪・春がちかよるすかんぽの赤い葉で・雪をたべつつしづかなものが身ぬちをめぐり・をとことをんごといつたりきたりして雪・雪のあかるさの死ねないからだ　　　井師筆の額を凝視して　雪あかりの「其中一人」があるいてゐるやうな

二月八日　曇、消え残る雪の寒さ。

少々風邪気味で、咳が出て洟水が出るけれど、約束通り山口へ行く、先づ湯田の温泉に浸る、それから市中を散歩する、本屋を素見したり、山を観たりして、夕方、周二居を訪ねる、おとなしい句会であつた、三輪さん、山廷さん、そして奥さん、人数は少ないけれど熱心があつた、終列車で帰庵、十二時近かつた、それから火をおこし炬燵をあたゝめ、湯を沸かし餅を焼いて、食べて、そしてゆつくり寝た、独身者はなか／＼忙しかつた。今日は寒かつた、坐つてゐても歩いてゐても冬を感じた、多分此季節中では、今日が厳寒であらう。真夜中——二時頃にけたゝましく警察のサイレンが鳴りだした、蒸気ポンプの疾走する音も聞える、火事だらうと思つたが（小郡としては珍らしい）、労れてゐるので起きて見る元気もなく、そのまゝ睡りつゞけた。今日はまことによい日であつた。山口で外郎一包を買つた、明日往訪する白船老への土産として。Ｓ奥さんの温情にうたれた、尊敬と信頼とに値する女性として。今日もしみ／″＼感じたことであるが、私もたうとう『此一筋』につながれてしまつた、私の中で人と句とが一つになつてゐる、私が生活するといふことは句作することである、句を離れて私は存在しないのである。

ぐうたら手記※私にも三楽といふやうなものがないこともない、——三楽といふよりも三福といつた方が適切かも知れない。——

一、わがままであること、二、ぐうたらであること、三、やくざであること、

いひかへれば、私が無能無力にして独身であり俳人であることに外ならない！

□鰒について——

鰒はうまい——これには誰も文句はない。さしみもうまいがちりもうまい、あつさりして、そしてコクがある。ヒレ酒なんかは問題ぢやない。酒の酔と鰒の熱とがからだいつぱいになつてとろ／＼する心地はまさに羽化登仙である、生命なんか惜しくない、ほかに生命なんかないぢやないか！

　二月九日　曇。

天気模様もよくないし、からだのぐあいもよくないけれど、思ひ立つては思ひ返さない私だから、時計を曲げて汽車賃をこしらへ、徳山へ行く。福川で下車して歩るく、途中富田で青海苔を買ふ、降りだしたのでバスに乗る。白船君とは殆んど一年ぶりの対談。夜は雑草句会、例によつて例の如し。白船居は娘さんが孫を連れて同居してゐられるので、或る宿屋へ案内して泊めて貰ふ、すまなかつた、何もかも人絹のピカ／＼するなかで寝る。今夜はよく食べた、自分ながら胃袋の大きいのに呆れた。……友はよいかな、旧友はことによいかな。奥さんに嫁の事を頼んで、さんざヒヤカされた。

・雪ふれば雪を観てゐる私です・ひとりで事足るふきのとうをやく・孤独であることが、くしやみがやたらにでる・雪がふるふる鉄をうつうつ・火の番そこからひきかへせば恋猫・更けて竹の葉の鳴るを、餅の焼けてふくれるを　　　改作一句追加・焼いてしまへばこれだけの灰が半生の記録　　　木郎第二世の誕生をよろこぶ　雪あかりの、すこやかな呼吸

　二月十日　雨。

よく寝た、雨で八代の鶴見物は駄目。十時の汽車で帰ることにする、白船君に切符まで買うて貰つて気の毒だつた。十二時帰庵、樹明君がやつてくる、酒井さんがやつてくる、磯部さんがやつてくる。

……酒四升、鰒大皿、飲めや唄へや、踊れや。…………とろ／＼どろ／＼、よろめきまはるほどに、とう／＼動けなくなつて宿屋に泊つた。

　・芽麥の寒さもそこらで雲雀さえづれば・冬ざれの山がせまると長いトンネル　冬ぐもりの波にたゞようて何の船　ここにも住む人々があつて墓場・家があれば田があれば子供や犬や・雪もよひ雪にならない工場地帯のけむり　ひさしぶり話せば、ぬくい雨となつた（白船老に）　あれもこれもおもひでの雨がふりかゝるバスで通る

　　二月十一日　晴、紀元節、建国祭。

　こゝろよい睡眠から覚めて、おいしい朝飯を食べて、戻つてきて、昨夜の跡片付をする。午後、樹明君と磯部君とを招いて残肴残酒でうかれる、うかれすぎてあぶなかつたが、やつと散歩だけですました、めでたし／＼。月もおぼろの、何となく春めいた。

　　二月十二日　曇。

　門外不出、独臥読書。

　　二月十三日

　おなじく、おなじく。

　　二月十四日　曇。

　今日も門外不出、終日読書。

　・花ぐもりの、ぬけさうな歯のぬけないなやみ

　　二月十五日　曇、ばら／＼雨。

　身辺整理。四日ぶりに街へ出かける、そして七日ぶりに入浴する。

　　二月十六日　時雨、春が来てゐる。……

　めづらしくも、乞食がきた。……夕方、樹明君来庵。……春琴抄を読む。……

　・春めいた朝はやうから乞食

二月十七日　晴、降霜結氷、春寒。

三日ぶりに街へ出て、酒一罎借りる、酒でも飲まなければやりきれなくなつたほど、身心が労れて弱つてゐるのである。アルコールのおかげで宵の間はぐつすり寝た、夜中に眼覚めて、茶の本を一年ぶりに読みなほす、よい本はいつ読んでもいくど読んでもおもしろい。夜の雨、それは冬がいそいで逃げてゆくやうな、春がいそいでくるやうな音を立てゝ降つた。

・霜晴れほのかに匂ふは水仙　　　或る夜の感懐・死にたいときに死ぬるがよろしい水仙匂ふ・寝るとしてもう春の水を腹いつぱい・月夜雨ふるその音は春

二月十八日　春ぐもり、雨。

日照雨、春が降るやうな雨、ひよどりがうれしさうに啼いて飛ぶ。あるだけの米と麦とを炊く、炭も石油もなくなつた、なくなるときには何もかもいつしよになくなる、人生とはこんなものだなと思ふ。読むものだけはある、片隅の幸福は残つてゐる。

・いちにち雨ふり春めいて草も私も　めつきり春めいて百舌鳥が啼くのも　ゆふ凪の雑魚など焼いて一人・寝床へまでまんまるい月がまともに・かうして生きてゐる湯豆腐ふいた

二月十九日　晴、晴、春、春。

やうやく米と炭と油とを工面した、窮すれば通ずるといふが、私の内外の生活はいつもさうである。今宵は十六夜の月のよろしさ。

二月二十日　晴、霜も氷も春。

独り者の朝寝はよろしいな。午後、湯屋へ出かけて、ユフウツを洗ひ流してくる。帰途、農学校に立ち寄つて樹明君と話す、君も此頃は明朗で愉快だ。私は酒も好きだが、菓子も好きになつた（何もかも好きになりつつある、といつた方がよいかも知れない）、辛いものには辛いもののよさが、甘いものには甘いもののよさがある、右も左も甘党辛党万々歳である。苦労は人間を磨く、用心すべきは悪擦れしないことである。私の日記も書く事書きたい事がだん／＼少くなつた、こ

こにも私の近来の生活気力があらはれてゐるといへるだらう。

　・こどもはなかよく椿の花をひらうては・せんだんの実や春めいた雲のうごくともなく・椿ぽとり豆腐やの笛がちかづく・人間がなつかしい空にはよい月　やつぱり出てゐる蕗のとうのおもひで（改作）　　　井師筆額字を凝視しつつ・「其中一人」があるくよな春がやつてきた（改作）

　　二月二十一日

　なか／＼寒い、霜がつめたい、捨てた水がすぐ凍るほどであるが、晴れてうらゝかで、春、春、春、午後は曇つて、夜はぬくたらしい雨となつた。おいしい雑魚を焼いてゆつくり昼飯を食べてから近在を散歩する、春寒い風が胸にこたえるので、長くは歩けなかつたが、蕗のとうと句とを拾つて戻つた。けふもまた誰も来なかつた、誰も来ないでよろしいけれども、淋しいなとは思つたことである。※ありがたいことには、私は此頃また以前のやうに御飯をおいしく食べるやうになつた、逃げた幸福がかへつてきたのである、生きることは味ふことであるが、食べることは味ふことの切実なるものである（殊に老境に於ては、食べることが生きることである）。夜は盲目物語を読んで潤一郎芸術の渾然たるにうたれた、そして人の一生といふものが痛感された。

　・なむからたんのうお仏飯のゆげも・ひとりぐらしも大根きりぼしすることも　おもむろに雑魚など焼いてまだ寒いゆふべは　窓ちかくきてたえづるや御飯にしよう　焼いては食べる雑魚もゆたかなゆふ御飯・蕗のとうが、その句が出来てたよりを書く　蕗のとう、あれから一年たちました（緑平老に）・空が山があたゝかないろの水をわたる・住みなれて藪椿なんぼでも咲き　歩けなくなつた心臓の弱さをひなたに　蕗のとうのみどりもそへてひとりの食卓・ほろにがさもふるさとでふきのとう　藁塚のかげからもやつと蕗のとう

　　二月二十二日　雨、春時化とでもいはう、よいたよりでも来ないかな？

　降る、降る、その雨を衝いて（ゴム靴はありがたいな、おもいな）

街へ、——酒買ひに、でせう、——まつたく、その通り、一升借り出しました。一杯機嫌で、うと／＼してゐるところへ、敬坊来庵、久しぶりにＦ屋でうまい酒を飲む、それからまた例によつて二三ヶ所を泳ぎまはる、そしてＩ旅館に碇泊（沈没にあらず）、まことによいとろ／＼であつた！（どろ／＼にあらず）

・山から水が春の音たてて流れだしてきた・雑草あるがまま芽ぶきはじめた

二月二十三日　晴、まつたく春ですね。

公明正大なる朝帰り！　五臓六腑にしみわたる朝酒のほろ酔機嫌で！雑魚を焼きつつ、造化のデリカシーにうたれ、同時に人間の残忍を考へないではゐられなかつた。酒は酔を意識して、いや期待して飲んではいけない。酔ふための酒はいけない、味ふ酒でなければならない。酔ひたい酒でなくて、味ふほどに酔ふ酒でなければならない。酒のうまさ、水のうまさ、それが人生のうまさでもある。しづかに炭をおこして（炭があるのはうれしいな）しづかに茶をすゝる、——人間として生きてゐる幸福。水、米、酒、豆腐、俳句——よくぞ日本に生れたる！　日本人としてのよろこび。地獄に遊ぶ、かういふ生き方は尊い。山口へ出張して、帰途また立寄るといつて別れた敬坊を待つたが、なか／＼やつて来ない、樹明君から手紙がくる、宿直だからやつて来なさいといふ、夕方から出かける、例の如く飲む食べる、話す笑ふ、そして泊る、……今夜はみんな酔ひすぎて（五人共）あぶなく脱線するところだつた。

試作四句その手が、をんなになつてゐる肉体雪ふる処女の手がテーブルのうへに咲いては落ちる椿の情熱をひらふ雪あかりわれとわが死相をゑがく

ぐうたら手記□飲みすぎ食べすぎもよくないが、饒舌りすぎはもつとよくない。□本を読むは物を食べるに似たり。□心の欲するところに従うてその矩を踰えず——生活の極致。　過ぎたるは及ばざるに如かず——処世の妙諦。　人事を尽して天命を俟つ——人間の真髄。

二月二十四日　晴、うらゝか。

朝飯をよばれてから朝がへり。敬坊はやつぱり来てゐない、また脱線かな、何しろ春がきたから、まだ若いから。……

ぐうたら手記□アテにしないで待つ――これが私の生活信条とでもいふべきもの（友に与へる文句である）。　来者不拒、去者不追といつてもよからう。□俳句することが、私に於ては、生活することだ。　俳句する心が、私の生きてゐる泉である。□遊ぶ――道に遊ぶ、芸に遊ぶ、句に遊ぶ、酒に遊ぶ、――童心にして老心。□鼠、歯、餅、飯、水、酒、虫、花。　鼠もゐない家、歯のない人間、餅と日本人。

二月二十五日　晴。

……みだれてしまつた、自己統制をなくしてしまつた、あてもなく歩いた。……

二月廿六日　雨。

身心疲労たへがたし。

二月二十七日　曇、晴。

終日終夜、悶え通した。

二月二十八日　晴れたり曇つたり。

ぢつとしてゐるにたへなくて、街に出て宿屋に泊つた、そしてやつと安静をえた、近在散歩。

三月一日　春日和、もう虫が出て飛ぶ。

散歩、歩いてゐると何となく慰められる。

・大石小石ごろ／＼として春　夜露もしつとり春であります・春夜は汽車の遠ざかる音も・もう郵便がくるころの陽が芽ぶく木々・風がほどよく春めいた藪から藪へ・春風のローラーがいつたりきたり・伐り残されて芽ぶく木でたゝへた水へ

三月二日　晴。

今夜は呂竹居に泊めて貰つた、なごやかな家庭の空気がいら／＼してゐる私をやはらかくつつむ、ありがたい、まことにありがたい。

三月三日　四日　五日　六日

寝てゐた、寝てゐるより外に仕方がない。

三月七日　晴。

やつと起きあがつて、句集発送。夜半の闖入者としてＫ君、Ｉ君襲来。

三月八日

春が来たことをしみ／″＼感じる。身辺整理。机を南縁から北窓へうつす、これも気分転換の一法である。在るがままに在らしめ、成るがままに成らしめる、それが私の心境でなければならない。

・山火事も春らしいけむりひろがる・ぬくうてあるけば椿ぽたぽた・草へ草が、いつとなく春になつて

三月九日　春寒。

身心平安。山口の句会へ行く、椹野川づたひに歩いて行つた、春景色、そして私は沈欝であつた、いつ訪ねても周二居はしづかであたゝかである、湯田温泉も私のかたくなにむすぼれた身心をほぐしてくれた、おいしい夕飯をいたゞいて、若い人々と話して、終列車で戻つた、まことによい一日一夜であつた。

三月十日　日露戦役三十年記念日。

すつかり春、しゆう／＼として風が吹く。奴豆腐で一本、豆腐はうまい、いつたべてもうまい、酒は時としてにがいけれど。蛙が鳴いた、初声である、蝶々も出てきてひら／＼。こころたのしい日である。

日の丸が大きくゆれる春寒い風　　（試作）或る友に代りて触れてつめたい手に手をかさね

三月十一日　晴、雨、風、そしてまた晴。

初雷、春をうたふ空のしらべだ、春雷。旅をおもふ、旅仕度して旅情を味ふ。樹明来庵、とろ／＼、それから、どろ／＼！

・ゆらげば枝もふくらんできたやうな・春はいちはやく咲きだしてうすむらさき　トラツクのがたびしも春けしきめいて

三月十二日

正々堂々として朝がへり。トンビを曲げて酔ふ、身心洞然としてさえぎるものなし。

・風の枯葦のおちつかうともしない　晴れて風ふく草に火をはなつ　つつましく住めば小鳥のきてあそぶ

三月十三日　晴。

もう油虫めが出てきやがつた。澄太君から来信、その友情は私を感泣さした。

・山から水が流れてきて春の音・住みなれて家をめぐりてなづな咲く

三月十四日　晴、霜、氷。

樹明君と関門日々新聞記者波多野君と同行して来庵、飲んで、出かけてまた飲んだ、そして酔うて、嫌な事件があつた。

三月十五日

うれしい藪鶯が鳴く。後藤さんが帰郷の途次を寄つてくれた、澄太君の奥さんの心づくし——饅頭を持つて。

・みんないつしよに湧いてあふれる湯のあつさ（千人湯）・風も春めいて刑務所の壁の高さ

十六日　十七日　十八日

かなしい、うれしい日であつたとだけ。

三月十九日　曇。

急に思ひ立つて佐野の妹を訪ねる、お土産は樹明君から貰つた八

ム、いつものやうに酔つぱらつておしやべり、寿さんが黙々として労働してゐることは尊い、省みて恥ぢないではゐられなかつた。外出着の質受ができないので、古被布を着て行つたので、さんざ叱られた、叱る彼女も辛からうが、叱られる私も辛かつた、……肉縁のよさ、そして肉縁のわずらはしさ！

　をとこがをなごが水がせゝらぐ灯かげ（雑）

　　三月二十日

　夜の明けきらないうちに起きて散歩、佐波川はおもひでのしづけさをたたへて鶯も啼いてゐる。イチと名づけられた犬が可愛い、ほんたうに可愛い。花と梅干とを貰うて帰庵。Ｆ家の白木蓮がうつくしい、それにもおもひでがある。

　　三月二十一日　曇、なか／＼寒い、雨。

　お彼岸の中日。アテにしないで待ちかまへてゐた徳山の連中は来てくれなかつた、……寝るより外なかつた。

　　　白船君にだまされてゆふべとなれば木魚をたたく　　改作追加一句子がうたへば母もうたへばさくらちる

　　三月二十二日　晴。

　生死を生死せよ。

　　三月二十三日　雪でもふりだしさうな曇りだつたが、午後はぬくい雨となつた。

　たよりいろ／＼、ありがたし、かたじけなし。街へ出かけて、払ふべきものを払へるだけ払ふ、Ｔさんの如きは、払つて貰ふことは予期してゐなかつたといつて私よりも彼女が恐縮した！雑魚で一杯、ほろ／＼酔うて、ぶら／＼歩きたい気分をおさへて寝た。……雑木雑草、その幸福にひたつた。

　・ふるさとはおもひではこぼれ菜の花も　なんと長い汽車が麦田のなかを・ぼけが咲いてふるさとのかたすみに・けふはこれだけ拓いたといふ山肌のうるほひ・水に雲が明けてくる鉄橋のかげ　　妹の家

を訪ねて二句・門をはいれば匂ふはその沈丁花　しきりに尾をふる犬がゐてふるさと

　　三月二十四日　雨、だん／＼晴れてきた。

　私は友情で生きてゐる、いや友情で生かされてゐる。私は私を祝福する、祝福せずにはゐられない。樹明来庵、酒余の痴呆状態で！　そして酒よりも飯が欲しいといふ。樹明君を送つて別れてから、一人で飲む、ほろ／＼とろ／＼酔ふ、そしていつもの宿に泊つた、ぐつすり眠れた。

　・あなたとフリイヂヤとそしてわたくしと（或る女友に）・さえづりつつのぼりつつ雲雀の青空　朝月が、いちはやくひよ鳥が・酔へばさみしがる木の芽草の芽

　　三月二十五日　日本晴。

　日本の春だ、日本人の歓喜だ。過去をして過去を葬らしめよ、昨日は昨日、明日は明日、今日は今日の生命を呼吸せよ。小鳥のやうに、あゝ小鳥のやうにうたへ、そしてをどれ。もう蟻が出て来て歩いてゐる。ありがたい手紙、ほんたうにありがたい手紙。街を歩く、酒がある、女がゐる。……伊東さんがやつてくる、国森君にでくわす、どろ／＼になつて帰庵、いつしよに寝る。

　　　述懐たつた一本の歯がいたみます

　　三月二十六日　晴。

　朝酒のよろしさ、伊東君を見送る。暴風一過、自己清算にいそがしかつた！

　　三月二十七日　曇。

　サクラがぼつ／＼咲きだした。あさましい自分、みじめな自分をさらけだした。自分が自分を信頼することができないとは何といふ情なさだらう。最後の自分の姿をまざ／＼と見た。

　・考へることがある窓ちかくきてなくは鴉・日向おもたくうなだれて花はちる・うららかにして鏡の中の顔・雨の、風の、芽をふく枝の

やすけさは

三月二十八日　花時風雨多し。

こん／＼としてねむつた。

三月二十九日　晴。

前後際断。恥知らずの自分が恥づかしい。緑平句集、松の木は尊い。村上名物、堆朱の香入は有難い。

（改作一句）・月夜の筍を掘る　　　或る日或る家にて　やたらにしやべればシクラメンの赤いの白いの

三月三十日　晴れてうららか。

ゆうぜんとして、だうぜんとして、或はぼうぜんとして、無為にして無余、いろ／＼の意味で。はる／″＼信州からそば粉到来、さつそく賞味した。敗残者としてさん／″＼やつつけられる夢を見た、それはまつたく私自身の醜態だつた、私自身しか知らない、私自身にしか解らない私の正体だつた。

・窓から花ぐもりの煙突一本・電線に鳥がならんですつかり春・わかれたくないネオンライトの明滅で

三月三十一日　曇、やがて晴。

身心整理。――転身一路、しつかりした足取でゆつくり歩め。一転語――

春風秋雨　　五十四年　　　　　　　　　　　喝一起一伏　　総山頭火

とう／＼徹夜してしまつた。年をとるほど、生きてゐることのむつかしさを感じる、本来の面目に徹しえないからである。親しい友に――

……私はとかく物事にこだはりすぎて困ります、そしてクヨ／＼したり、ケチ／＼したりしてゐます、私のやうなものは生きてゐるかぎり、この苦悩から脱しきれないでせうが、とにかく全心全身を句作に

ぶちこまなければなりません。……・なんとけさの鶯のへたくそうた・あるだけの酒をたべ風を聴き・悔いることばかりひよどりはないてくれても

　　　　——（このみち）——このみちをゆく——このみちをゆくよりほかない私である。それは苦しい、そして楽しい道である、はるかな、そしてたしかな、細い険しい道である。白道である、それは凄い道である、冷たい道ではない。私はうたふ、私をうたふ、自然をうたふ、人間をうたふ。俳句は悲鳴ではない、むろん怒号ではない、溜息でもない、欠伸であつてはならない、むしろ深呼吸である。詩はいきづき、しらべである、さけびであつてもうめきであつてはいけない、時として涙がでても汗がながれても。噛みしめて味ふ、こだはりなく遊ぶ。ゆたかに、のびやかに、すなほに。さびしけれどもあたたかに。——（序に代へて）

　　四月一日　晴、April fool といはれる日。

　人生といふものは、結果から観ると、April fool みたいなことが多からう。友情に甘えるな、自分を甘やかすな。天地明朗、身心清澄。午後、近郊を散歩する、出かけるとき何の気もなくステツキ、いやステツキといつてはいけない、杖をついたのである、山頭火も老いたるかなと思へば微苦笑物だ。まだ風は寒いので、四時間ばかり山から野をぶらついて、途中、一杯ひつかけて戻つた。旧街道の松並木が伐り倒されてゐる、往来の邪魔になるからだらうけれど、いたましく感じた。酒はどうしてもやめられないから飲む、飲めば飲みすぎる、そして酒乱になる、だらしなくなる、一種のマニヤだ、つつしまなければならないなどと考へてゐるうちに、ぐつすりとねむつた。

　　四月二日　晴、春風しゆう／＼。

　ありがたいかな、うれしいかな、たよりを貰ひ、たよりをあげる。善哉々々、鰯で一杯。大山君に信州のそば粉と浜松の納豆をお裾分けする、かういふ到来物は私一人で私すべきものではない、みんないつしよにその友情を味ふべきである、大山君はそれを味うてくれる人、味ふに値する人だ。何よりもわざとらしいことはいけない、私たちは動物的興奮を捨てゝ自然的平静を持してゐなければいけない、しか

し、……水のやうに、水の流れるやうに。すぽりと過去をぬいだ、未来を忘れた、今日のここ、この身のこのまま極楽浄土だ。ナムカラタンノウトラヤヤ。……

・藪かげ椿いちりんの赤さ・いつも貧乏でふきのとうやたらに出てくる　引越して来て木蓮咲いた・ゆらぐ枝の芽ぶかうとして・水音の山ざくら散るばかり　　　出征兵士の家・日の丸がへんぽんと咲いてゐるもの　　　松並木よ　伐り倒されて松並木は子供らを遊ばせて　　　改作　花ぐもりの、ぬけさうな歯のぬけないなやみ

四月三日　花見日和。

小鳥がとてもよく啼く、四十雀がとくに浮調子で啼いてゐる、恋の唄だ！緑平老へ愚痴をいはせて貰ふ。——

……私は此頃痛切に世のあぢきなさ身のやるせなさを感じます、それはオイボレセンチに過ぎないとばかりいつてしまへないものがあります。……

十二時のサイレンが鳴つて間もなく樹明君来庵、まづ一杯、ほろ／＼として山を歩く、そして公園へ下りる、そこここ花見の酒宴が開かれてゐる、私たちも草にすわつて花見をする、ビール三本、酒一本、辨当一つ、——それで十分だつた、おとなしく別れる、私はすぐ帰庵して、お茶漬を食べて寝た。今日の樹明君はよかつた、彼にくらべて私は私の心を恥ぢた、どうも酒に敗ける、酔ふとぢつとしてゐられなくなる、そして、……今日はわるくなかつたが。人生はリズミカルに、大井川は流れ渡りだ。花見辨当をたべてゐるうちに、ほろりと歯がぬけた、ぬけさうな歯であり、ぬければよいと考へてゐた歯であつた、何だかさつぱりした。ぬけさうでぬけなかつた歯がぬけた、これだけでも解脱の気分を味ふことが出来た。自己検討、愚劣を発見するばかりであるが、その愚劣が近来やゝ自在になつたことはうれしいと思ふ。

ぐうたら手記□私はうたふ、自然を通して私をうたふ。□私の句は私の微笑である、時として苦笑めいたものがないでもあるまいが。□くりかえしていふ、私の行く道は『此一筋』の外にはないので

ある。□俳句性を一言でつくせば、ぐつと掴んでぱつと放つ、といふところにあると思ふ。□私の傾能は老境に入るにしたがつて、色の世界から音の世界――声の世界へはいつてゆく。□俳句のリズムは、はねあがつてたゞよふリズムであると思ふ。　（井師は、短歌をながれてとほるリズム、俳句をあとにかへるリズムと説いてゐる。）

四月四日　雨、花が散つて葉が繁る雨だ。

身辺整理、しづかに読書。雨の音は私の神経をやはらげやすめてくれる、雨を聴いてゐると、何かしんみりしたものが身ぬちをめぐつてひろがる。……死をおもふ日だ、疲労と休息とを求める日だ。夕方、どてらでゴム靴をはいて、まるで山賊のやうないでたちで駅のポストまで出かけた。酒三合、飯三杯、おいしくいたゞいて寝る。

ぐうたら手記□現代の俳句は生活感情、社会感情を表現しなければならないことは勿論だが、それは意識的に作為的に成し遂げらるべきものではない、俳句が単に生活の断片的記録になつたり、煩瑣な事件の報告に過ぎなかつたりする源因はそこにある、思想を思想のままに、観念を観念として現はすならば、それは説明であり叙述である、俳句は現象――自然現象でも人事現象でも――を通して思想なり観念なりを描き写さなければならないのである、自然人事の現象を刹那的に摂取した感動が俳句的律動として表現されなければならないのである、この境地を説いて、私は自然を通して私をうたふ、といふのである。□感覚なくして芸術――少くとも俳句は生れない。□俳人が道学的になつた時が月並的になつた時である。

四月五日　晴、初めて蛇を見る。

ありがたいたよりいろ／＼、ありがたし。さびしいけれどおちついた日、久しぶりの入浴。午後、樹明来、Ｏさんも来庵、つゞいて敬坊来、二升ほど飲んでほろ／＼とろ／＼、それから出かけてぼろ／＼どろ／＼、わかれ／＼になつて、私だけはＩ旅館をたゝきおこして泊つた、……今夜はまことに、のむ、うたふ、をどる、めでたし／＼だつた。

ぐうたら手記□感覚なくして芸術は生れない、同時に感覚だ

けでは芸術は生れない、感覚に奥在する something. それが芸術のほんたうの母胎」は底本では「芸術のほんたうの母胎」］である。　芸術――俳句芸術は作者その人、人間そのものである、あらねばならない。□人生のための芸術――芸術のための芸術。　俳句のための俳句制作（仏道のための仏道修行のやうに）。　心境――境涯――人格的表現。　芸――道――生命。　如々として遊ぶ。□私は雑草を愛する、雑草をうたふ。　第四句集の題名は雑草風景としたい。　雑草風景は雑草風景である。私は雑草のやうな人間である。　雑草が私に、私が雑草に、私と雑草とは一如である。

　四月六日　曇。

　暗いうちに朝がへり、そして朝酒。公明正大であつた（かへりみて恥づかしくないこともないけれど、許して頂戴！）。身辺整理。放下着、放下着。入浴するのも旅をするのも一つの放下着だらう。忘れるといふことは、たしかに放下着の或る段階だ。今日は黎々火君が来てくれる日である、何もないからほうれん草を摘んで洗ひあげておく、待ちかねて、やうやく暮れるころになつて来てくれた、お土産はうるか一壺とさくら餅一包、さつそく大好物のうるかを賞味する、鮎の貴族的な香気が何ともいへない高雅なものをたゞよはせる。おそくまで話しつゞける、子のやうな彼と親のやうな私、そして俳句の道を連れだつてすゝむ二人の間には、たゞあたゝかいしたしみがあるばかりである。

　　ぐうたら手記□人生の黄昏！□性慾のなくなつた生活は太陽を失つた風景のやうなものだらう。□苦しいから生きてゐるのかも知れない、なやみがあるから生甲斐を感じるのかも知れない。□いのちはうごく、そのうごきをうたはなければならない。□雑草！　私は雑草をうたふ、雑草のなかにうごく私の生命、私のなかにうごく雑草の生命をうたふのである。　雑草を雑草としてうたふ、それでよいのである、それだけで足りてゐるのである。　雑草の意義とか価値とか、さういふものを、私の句を通して味解するとしないとはあなたの自由である、あらねばならない。　私はたゞ雑草をうたふのである。

　四月七日　とてもよいお天気、しかし寒い々々。

水をくんでおいて帰る黎々火君よ。鶯が、四十雀がほがらかに啼く。黎々火君は八時の汽車で帰つていつた、別れて一人となるとひとしほうすら寒い、山の鴉が出てきてさわぐのも何となくうらさびしい。今日は今年の花見の書入日第一の日曜だらう。私にしてもぢつとしてをれない日だ。どこといふあてもなく歩いた。我人ともになつかしい。さくら、さくら、酒、酒、うた、うた。

・あてなくあるくてふてふあとになりさきになり・芽ぶくものそのなかによこたける・山のひなたの、つつましく芽ぶいてゐる・水音の暮れてゆく山ざくらちる・さくら二三本でそこで踊つてゐる　白い蝶が黄ろい蝶が春風しゆうしゆう　さくらちる暮れてもかへらない連中に　花見べんたうほろつと歯がぬけた

四月八日　雨。

花まつりを行ふ地方はあやにくの雨で困つたらう、私は宿屋でゆつくり雨を味つた。どうもからだのぐあいがあたりまへでない、むろんあたまのぐあいもよくないが。夕方から、樹明君によばれて学校の宿直室へ出かける。よい酒をよばれて、そのまゝ泊めて貰つた。悔いのない酒、さういふ酒でなければならない。

四月九日　曇、雨、早朝帰庵。

身辺整理、捨てゝも捨てゝも捨てきれないものが、いつとなくたまつてくる。……終日読書。やつと一関透過、むつかしい一関だつた、まことに白雲悠々の境地である。更けて遠く蛙の声。

・草に寝ころんで雲なし・この山の木も石も私をよう知つてゐる　雨の小鳥がきては啼きます・身にちかく山の鴉がきては啼きます・春風の楢の葉のすつかり落ちた・穴から蛇もうつくしい肌をひなたに・ひとりで食べる湯豆腐うごく・さくら咲いて、なるほど日本の春で・晴れてさくらのちるあたり三味の鳴る方へ

四月十日　雨、しと／＼とふる春雨である。

買ひかぶられて苦しい、どうぞ私を買ひかぶつて下さるな。大樹の下にを読む、小野さんといふ著者のあたゝかい、やはらかい人柄がよく解る、情趣の人である。大空放哉伝を読む、放哉坊はよい師友を持

つてゐてありがたいことである。夜、酒を提げて、樹明君とＩ君と来庵、二人は酔うて唄つたり踊つたりする、しかし私は酔へない、しやべれない、どうして唄へるものか、踊れるものか、気の毒だけれど、早く帰つてもらつて寝た。

・人声のちかづいてくる木の芽あかるく　雑草風景、世の中がむつかしくなる話・花ぐもりの飛行機の爆音・なんだかうれしく小鳥しきりにきてなく日・さえづりかはしつつ籠のうちとそと　おほらかに行くさくら散る・ここから公園の、お地蔵さまへもさくら一枝
黎々火君に　なつかしい顔が若さを持つてきた

　　四月十一日　曇、身心すぐれず。

しようことなしにポストまで、そして米と油とを買うて戻つた。無味無臭、無色透明の世界に住みたい。水、餅、豆腐、飯。……

　　四月十二日　晴、なか／＼寒い。

私を救ふものは涙よりも汗、汗も流さないから堕落するのだ。いやな風が吹く、風にはたへられない私だ。

・新菊もほうれん草も咲くままに・草が芽ぶいて来てくれて悪友善友・枇杷が枯れて枇杷が生えてひとりぐらしも・いちにちすわつて風のながれるを・暮れるとすこし肌寒いさくらほろほろ・椿を垣にして咲かせて金持らしく　　　庵中無一物　酔うて戻つてさて寝るばかり

　　四月十三日　好晴。

久しぶりに、ほんたうに久しぶりに畑仕事、土を耕やし、草をぬき捨て、大小便をかけて、いつでも胡瓜や茄子やトマトや大根や、植えられるやうにして置く。酒はあるけれど飲まなかつた、飲みたいのを飲まないのではない、飲みたくないから飲まなかつたのである、私は昨日までしば／＼飲みたくない酒を飲んだ、酔ひたいために飲んだのである、むろんにがい酒だつた、身も心もみだれる酒だつた。……過去一年間の悪行乱行が絵巻物のやうに、フイルムのやうに展開する、――それは破戒無慚な日夜だつた。……私は何故死なゝかつたか、昨春、飯田で死んでしまつたら、とさへ度々考へた。……

我昔所造諸悪業皆由無始貪瞋痴従身口意之所生一切我今皆懺悔

一切我今皆懺悔、そして私は新らしい第一歩を踏み出さなければならない。――

・山から白い花を机に・春寒い夢のなかで逢うたり別れたりして・ひつそりさいてちります・機音とんとん桜ちる・さくらちるビラをまく・とほく蛙のなく夜半の自分をかへりみる・けふもよい日のよい火をたいて（澄太君に）・伸びるより咲いてゐる　　黎々火君に　わかれしなの椿の花は一輪ざしに・おくつてかへれば鴉がきてゐた

四月十四日　曇、また雨となり風が出た。

身心寂静。ひとりしづかに自分を見詰めてゐるところへ、風雨の中を酒が来た、しばらくして樹明君とＳさんとがやつてきた、ニベと胡瓜とを持つて。まづ樹明君が酔ふ、Ｓさんも、酔ふたらしい、私は酔へない、酔ひたくない、ほどよく別れて、寝床に入つたが、どうしてもねむれない、起きてまた飲んで、そしてお茶漬を食べた、おかげでぐつすりねむれた。

・藪かげ藪蘭の咲いて春風・空へ積みあげる曇り・雨が風となり風のながるゝを・水音ちかくとほく晴れてくる木の芽・みんな咲いてゐる葱もたんぽぽも・なんでもかんでも拾うてあるく蛙なく（鮮人屑ひろひ）・もう葉ざくらとなり機関車のけむり・うどん一杯、青麦を走る汽車風景で・風がつよすぎる生れたばかりのとんぼ・山ふところわく水のあればまいまい

四月十五日　曇、めつきりぬくうなつた。

去年の今日をおもふ、飯田で病みついた日である、死生の境を彷徨しだした今日である。アルコールの誘惑！　その誘惑からのがれなければならない、いや、アルコールに誘惑されないほどの、不動平静の身心を練りあげなければならない。アルコールの誘惑と酒のうまさとは別々である。柿の芽がうつくしい、燕の身軽さよ。いや／＼ながら街へゆく（この事実でも私の衰弱を証明する、一日三度も街へ出かけた私ではなかつたか）、出さなければならない手紙もあるし、石油もなくなつたし、塩すらもなくなつてゐるから、――米もなくなつてゐ

るけれど、買ふだけの銭がないので、今日はそば粉か何かですます（これは断じて貧乏ではない）。塩ほど必要でそして安価なものはない、同時に、酒ほど贅沢で高価なものはない、といへる。腹は酒でいつぱいになつた、しかも酔へない、何といふ罰あたりだらう、悲惨だらう。しづかに飲む、おのづから酔ふ、山は青くして水の音、鳥が啼きます、花が散ります、あゝあ。

　　　　ぐうたら手記□生活感情、生活リズム、生活気分。□俳句であるといふ以上は俳句の制約を守らなければならない。□俳句性とは——

　単純化　　　　　直観　　　冴え——凄さ。求心的

　生活感情┐社会感情├リズム時代感情┘

　　四月十六日　曇、后晴。

　酒があるから酒を飲んだ、飯はないから食べなかつた、明々朗々である。たより、それ／″＼にありがたし、一つのたよりには一つの性格がある、人生がある。やつと米が買へた、米がないことはほんたうに情ない。十何日ぶりに入浴髯剃、さつぱりがつかりした。夕方、樹明君来庵、私の不機嫌が私のそばにゐられないほど彼を不快にしたらしい、すまなかつた。夢！　春は夢が多い、何といふ汚ない卑しい夢であつたか。……

　　　　湯田温泉三句・わいてあふれる湯のあつさ汗も涙も・湯あがりぼんやり猿を見てゐる人々で・お猿はのどか食べる物なんぼでもある（ナ）・ぽつかり月が、逢ひにゆく・うらゝかな硯を洗ふ・芽ぶく曇りの、倒れさうな墓で・草のうらゝかさよお地蔵さまに首がない（ナ）・こんな山蔭にも田があつて鳴く蛙・夕日いつぱいに椿のまんかい

　　四月十七日　曇、后晴。

　小鳥はたえづる、よろこびそのものであるやうに。午後山口へ、まず湯田で一浴、それから市中を歩きまはつて、労れた胃の腑へ熱燗でおでんを入れる。暮れて帰庵、お茶漬を食べてから読書。だん／＼落ちついてくる、根本的に身心整理をする時機が来たのである。

ぐうたら手記□賭博本能と飲酒本能（競馬を見て）。□気品とは、　句品、人格、境涯。□孤独は死へいそぐ。……

四月十八日　晴。

うら／＼として蝶がもつれる、虫がとびかふ、草がそよぐ、小鳥がさえづる、そして人間は。私は散歩した、嘉川の南端までぶら／＼歩きまはつた。落ちつきすぎるほど落ちついた、山頭火が山頭火らしくなつてきた、山頭火は山頭火でなければならない、山頭火はほんたうの山頭火にならなければならない。夢で鰒を貰つた！　春の夜のナンセンスとはいひきれないものがあるやうだ、私はその鰒を思ひ浮べては独り微苦笑を禁じえなかつた。

・身のまはりは草だらけみんな咲いてゐる（ナ）・あれから一年生き伸びてゐる柿の芽（昨春回想）・水へ水のながれいる音あたゝかし・五月の風が刑務所の煉瓦塀に・ずんぶりひたるあふれるなかへ・わいて惜しげなくあふれてあつい湯

四月十九日　曇。

省みて恥ぢない心境、存らへて疚しくない生活。或る人に――

酒は酒、水は水、それでよろしいのですが、私の場合では酒が水にならないとよろしくないやうです（養老の孝子の場合では、水が酒になりましたが！）。

四月二十日　晴、さてもうらゝかな。

今日も歩いた、陶から鋳銭司へ、そして秋穂まで、野も山も人も春たけなはだつた。入浴、そして晩酌、とてもよかつた。陰暦の三月十八日、裏山の観音堂は賑やかである、地下の人々が男も女も年寄も子供もみんないつしよに、御馳走をこしらへて食べるのである、いはゞ里のピクニツク、村の園遊会である。かういふ風習はなつかしい、うれしいもよほしであるが、それも年々さびれて、都会並の個人享楽にうつつてゆく、なげいたところで時勢のながれはせきとめることもできない。昨日も今日も一句も出来なかつた、出来さうとも思はなかつた、長らく悩んだ結果として、私の句境は打開されつゝあるのである。

四月二十一日　晴、そとをあるけば初夏を感じる。

昨日は朝寝、今朝は早起、それもよし、あれもよし、私の境涯では「物みなよろし」でなければならないから（なか／＼実際はさうでもないけれど）。常に死を前に――否、いつも死が前にゐる！　この一ヶ年の間に私はたしかに十年ほど老いた、それは必ずしも白髪が多くなり歯が抜けた事実ばかりではない。しづかなるかな、あたゝかなるかな。午後、歩いて山口へ行つた、帰途は湯田で一浴してバス、バスは嫌だが温泉はほんたうにうれしい、あふれこぼれる熱い湯にひたつてゐると、生きてゐるよろこびを感じる。晩酌一本、うまい／＼、明日の米はないのに。私はまさしく転換した、転換したといふよりも常態に復したといふべきであらう、正身心を持して不動の生活に入ることが出来たのである。

・ふるつくふうふうわたしはなぐさまない（ナ）・ふるつくふうふうお月さんがのぼつた・ふるつくふうふとないてゐる　　（ふるつくはその鳴声をあらはすふくろうの方言）・照れば鳴いて曇れば鳴いて山羊がいつぴき・てふてふもつれつつ草から空へ（ナ）

四月廿二日　晴れたり曇つたり、また雨か。

けさも早起、しかも米がない。大根と唐辛とを播く。せめて今日一日を正しく楽しく生きたい。米がなくては困るので、学校に樹明君を訪ねて、Ｓさんから句集代を貰うて貰ふ。山口まで歩いた、途中、湯田競馬見物、一競馬見たら嫌になつた、そこには我慾が右往左往してゐるばかりだ、馬券がとぶばかりだ、馬を鑑賞する、いや、賭そのものを味ふことすらないのだ、勝負事の卑しい醜い一面しかないのだ。帰途、新町の馴染の酒店で味淋一杯のお接待を頂戴した、小母さんは眼が悪い、そして今日明日はお大師様の御命日である。学校に寄つて、夕飯を御馳走になつた、そしてほどよく酔うてしやべつて、戻つて寝た。

湯田競馬・くもりおもたく勝つたり敗けたりして　麦田ひろ／″＼といなゝくは勝馬か　　遊園地・さくらちるあくびする親猿子猿　檻の猿なればいつも食べてゐる・猿を見てゐる誰ものどかな表情　　山口運動場・椎の若葉もおもひでのボールをとばす　　建

築工事　雲雀がさえづる地つきうたものびやかに　声を力をあはせては大地をつく・芽ぶくなかのみのむしぶらり・ふたりのなかの苺が咲いた・山の湯へ、初夏の風をまともにガソリンカーで・しげる葉の、おちる葉の、まぶしいそよかぜ（ナ）・若葉へわたしへ風がやさしくねむりをさそふ・なにやらさみしく雀どものおしやべり

四月廿三日　もちなほして晴。

秋穂のお大師めぐりがしたいのだけれど銭が足りないので、また湯田温泉へ行つた。もう初夏らしい風である、歩けばすこし暑いが、しづかにをれば申分のない季節である。うれしいものは毎日うけとるたよりである、今朝は山形から珍らしいかき餅を貰つた、ありがたいことである。ほどよい疲労とうまい晩酌と、そしてこゝろよい睡眠。

湯田競馬、追加一句・勝つてまぶしく空へ呼吸してゐる・誰も来てはくれないほほけたんぽぽ・爆音はとほくかすんで飛行機・ふるさとの学校のからたちの花・ここに舫うておしめを干して初夏の風・晴れて帆柱の小さな鯉のぼり・暮れてなほ何かたたく音が、雨がちかい・ひとりたがやせばうたふなり（ナ）

四月廿四日　晴。

近在散歩。澄太君に返事の手紙を書いた、緑平居訪問の同行を断つたのである、それはまことに一期一会ともいふべきよろこびであり、同時にかなしみではないか、君のあたゝかい心、そして私のかたくなな心、私は書いてゐるうちに涙ぐましくなつた。……若楓のうつくしさ、きんぽうげのうつくしさ。季節の焦燥、人間の憂欝、私の彷徨。

草青く寝ころぶによし　ここまでは会社のうちで金盞花・あゝさつきさつきの風はふくけれど・まがれば菜の花ひよいとバスに乗つて・寝ころべば旅人らしくてきんぽうげ

四月二十五日　晴、日本の春、南国の春。

緑平老に——

……澄太君といつしよにお訪ねすることが出来ないのを悲しみます、無理に出かければ出かけられないこともありませんけれど、それ

は決してあなた方を快くしないばかりでなく、必らず私を苦しめます、どうぞお許し下さい。……何故、私は小鳥たちのやうにうたへないのか、蝶や蜂のやうにとべないのか、蟻のやうにうごけないのか、……私は今、自己革命に面してゐます、一関また一関、ぶちぬきぶちぬかなければならない時機に立つてゐます。……自己克服、いひかへれば過去一年間の、あまりに安易な、放恣な、無慚な身心を立て直さなければなりません、……アルコールでさへ制御し得なかつた私ではなかつたか。……

　松蝉がしきりに鳴きだした、あの声は春があはたゞしく夏へいそぐうただ。半日、椹野川堤で読書、一文なしでは湯田へ行けないから。――

　・うぐひすうぐひす和尚さん掃いてござる・なんとよい日の苗代をつくること・山はしづかなてふてふがまひるのかげして・山かげふつとはためくは鯉幟・岩に口づける水のうまさは・若葉したゝる水音みつけた

　　四月二十六日　曇。

　身辺整理、むしろ心内整理。門外不出、終日読書。

　　四月二十七日　曇、少雨。

　ずゐぶん早く起きたが、何もない！火！　よい火を焚け、そしてよい酒を飲め。Ｋ氏を訪ねて、句集代を頂戴した、それでやつと米が買へた。……かういふ生活には（私のやうな生活にはといはなければなるまいが）苦悩と浪費とがたえない、苦悩はもとより甘受するが、浪費にはたへられない、浪費そのものよりも浪費する心が我慢しきれなくなる。物質の浪費、身心の浪費、ああ。夕方、久しぶりにＴ子さんが来て、しばらく話して帰つた、彼女はわがまゝな、そして不幸な女だ、我儘がなくなれば幸福になれるのだが、恐らくは駄目だらう。何日ぶりかで、奴豆腐をたべた、淡々として何ともいへない味はひだ、水のやうに、飯のやうに。鼠がやつてきてゐるらしい、さすがに春だと思ふ、彼もやがて去るだらう、庵主が時々餓ゑるぐらゐだから、鼠もやりきれなくなるだらう。

・若葉もりあがる空には鳩・五月の風が、刑務所は閉めてぴつたり・私一人となつた最終バスのゆれやう・水へ石を投げては鮮人のこども一人

四月廿八日　曇、時々降る。

朝からマイナスを催促された、マイナスといふものはほんたうによろしくない、プラスはなくてもいゝが（私にはプラスがあつたら、マイナスとおなじくよろしくない！）マイナスのない生活でなければならない。午後、樹明君来庵、散歩、乱酔。

名物男をうたふ・でたらめをうたひつつあさぶをもらひつつ・若葉に月が、をんなはまことにうつくしい・いつ咲いた草の実の赤く　江畔老に・その蕎麦をかけば浅間のけむりが

四月二十九日　曇。

昨夜は安宿の厄介になつたほど酔つぱらつた、そして朝酒（この酒代はどこから出たのだらう！）。

・ふるつくふうふうどうにもならない私です・ふるつくふうふうぢつとしてゐられない私です・ふるつくふうふうあてなくあるく・死ねないでゐるふるつくふうふう

四月三十日　晴、曇、雨。

空も曇れば私も曇る　雨か涙か――風が吹く

昨日も今日も無言、誰にもあはない、あひたくない、終日終夜ぼう／＼ばく／＼。夜中に樹明君が例の如く泥酔して来庵、しばらく寝て、そして帰つた。……

五月一日

あゝ五月と微笑したい。朝、九州の旅先の澄太君から来電、一時の汽車に迎へて共に帰庵、半日愉快に飲んだり話したりした、ほんたうに久しぶりだつた。折から大村さんがお祭の御馳走を持つてきて下さつた、うれしかつた。そして六時の汽車に送つて、理髪して入浴して散歩して、そしてさみしく戻つて寝た。やつぱりひとりはさみしい。

・こゝろ澄めば月草のほのかにひらく・てふてふとまる花がある・空へ若竹のなやみなし・酔ひざめの水のうまさがあふれる青葉・うしろすがたにネオンサインの更けてあかるく

五月二日　晴。

どうにもかうにもやりきれなくなつて、大田の敬君を訪ねる。……酒、酒、酒。……

五月三日　晴、まことに日本晴。

滞在、読書、散歩。

五月四日　晴。

歩いて湯田へ、そして一浴して帰庵。

五月五日　晴。

湯田へ（バス代湯銭がないから本を売つて！）。

五月六日　曇。

身辺整理、整理しても整理しきれないものがある。もう一度、行乞の旅に出なければなるまい。

ぐうたら手記□俳句は間違なく抒情詩である、あらねばならない。□雑草風景、それは其中庵風景であり、そして山頭火風景である。　風景が風光とならなければならない、音が声となり、かたちがすがたとなるやうに。□禅宗の師家が全心全身を傾到して一箇半箇を打出する如く、私は私の一切を尽して、一句半句を打出したい、しないではゐられない、——これが私の唯一の念願であり覚悟である。

五月七日——五月廿三日

生と死との間を彷徨した。山口——三谷——萩——長門峡の若葉も私を慰めることは出来なかつた、博覧会の賑やかさも私には何の楽しみでもなかつた。一歩一歩が生死であつた。生きてゐたくない、死ぬるより外ないではないか。白い薬が、逆巻く水が私の前にあるばかりだつた。

五月廿四日

あんたんとして横臥してゐるところへ、敬君が見舞に来てくれたが、私は応接することすら出来ないほど、重苦しい気分をどうすることも出来なかつた。息詰るやうな雰囲気に堪へ切れないで敬君は街へ出かけていつた。不眠徹夜。

たんぽぽのちりこむばかり誰もこない　蛙げろ／＼苗は伸びる水はあふれて　青葉をくゞつて雀がこどもを連れてきた　青葉の、真昼の、サイレンのながう鳴る　　　改作二句・けふは飲める風かをるガソリンカーで（山口へ）・草へ草がなんとなく春めいて

五月廿五日

敬君から態人が呼出の手紙を持つてきたが、とても出かけられるやうな身心ではない。敬君よ、許して下さい。今夜も不眠徹夜。

五月廿六日　晴。

身心やゝ安静。思ひ立つて、起き上つて、掃除、洗濯、等々。樹明君が来てくれた、敬君脱線のことなど話してゐると、思ひがけなく黎々火君が来た、三人で一杯やる、友はうれしいな酒はうまいな。黎君帰る、つゞいて樹君も帰る、私は袈裟を持ち出して、さらに飲んだ。やりきれないのである、飲んでもやりきれないけれど、酒でも飲まずにはゐられないのである、そしてとうたう宿屋に泊つた。

・山から山へ送電塔がもりあがるみどり　山の青さをたたへて水は澄みきつて　日ざかり萱の穂のひかれば・のぼつたりさがつたり夕蜘蛛は一すぢの糸を・酔ひざめの闇にして螢さまよふ　　　衣更・ほころびを縫ふ糸のもつれること

五月廿七日　曇、そして雨。

海軍記念日、大旗小旗がへんぽんとしてうつくしい。蝿が蝿を打たうとする手にとまる、——私はひとり微苦笑した。たとへ一箇半箇でも、私は私の句を打出したい。午後、ぼんやりしてゐると、樹明君が酒井さんと同道して来庵、間もなく酒と肴とが持ち来されたが、何となく誰も愉快になれなかつた、私はやたらに飲んで饒舌つた。いつも

より早く解散した、私は経本を持ち出して、飲み直さずにはゐられなかつた、そして酔ひつぶれて、いつもの宿屋へころげこんだのである。ああ、ああ、ああ。

　　　　改作・ころり寝ころべば五月の空・青葉の奥へ道がなくなれば墓地・日向あたゝかく私がをれば蝿もをる　　　自問自答・それもよからう草が咲いてゐる

　　五月廿八日　雨。

　終日終夜、もだえるばかりだつた。

　　五月廿九日　曇、晴れてくる。

　好日、好日、緑平老の手紙が、Ｋの手紙が私を元気づけてくれた。身辺整理。夜はシネマ見物、そしておとなしく帰庵しておだやかな睡眠。

　　　　ぐうたら手記□エロストロゴスとの抱擁！□無理をしないこと、これこれ！□自由律俳句作者としての私には苦悶はない、苦心はあるけれど。□俳句は、私の俳句は悲鳴ぢやない、怒号ぢやない、欠伸でもなければ溜息でもない、それはすこやかな呼吸である、おだやかな脉搏である。

　　五月三十日　晴。

　めつきり暑うなつた、散歩したが物足らないので、酒を借り魚を料理して、樹明君の来庵を待ちくたぶれて、やうやく飲み合つた。今夜も泥酔（最後の泥酔である）、そしてあてもなく彷徨して、いつもの宿で倒れた。

　　五月三十一日

　終日終夜、自己沈潜。大道無門、千差有路、透得此関、乾坤独歩。莫妄想、前後際断。

　　　自戒　　　　　　酒について酒は味ふべきものだ、うまい酒を飲むべきだ。

　一、焼酎（火酒類）を飲まないこと一、冷酒を呷らないこと一、適

量として三合以上飲まないこと一、落ちついてしづかに、温めた醇良酒を小さい酒盃で飲むこと一、微酔で止めて泥酔を避けること一、気持の良い酒であること、おのづから酔ふ酒であること一、後に残るやうな酒を飲まないこと

　　六月一日　晴。

　やうやくにして平静をとりもどした、山頭火が山頭火の山頭火にかへつたのである。大山君から、益洲老師講話集「大道を行く」頂戴、さつそく読む。本来無一物、その本心に随順せよ。いよ／＼ます／＼句作道精進の覚悟をかためる、この道を行くより外ない私である！

　　六月二日

　午前は山をあるく、山川草木そのまゝでみなよろし。午後は来書の通りに樹明君来庵、酒と魚とを持参して、そしてほどよく酔うて話して寝て、こゝろよくさよなら、めでたし／＼。自己観照、自己批判。無理のない生活、さういふ生活の根源は素直な心である。簡素、質実、感謝、充足、安心。

　・ゆふべしたしくゆらぎつつ咲く（月草）・おみやげは酒とさかなとそして蝿（樹明君に）・何を求める風の中ゆく・若葉あかるい窓をひらいてほどよい食慾　青葉のむかうからうたうてくるは酒屋さん　風ふく竹ゆらぐ窓の明暗　風の夜の更けてゆく私も虫もぢつとして

　　六月三日　曇。

　けさも早起。午後は風雨が強くなつた、哀傷たへがたいものがある、……風雨を衝いて街へ出かける。Ｆで樹明君に会して飲む、……それから泥酔してＩに泊つた。……

　　六月四日　晴。

　やつぱり酒はよろしくないと思ふ、それがうまいだけそれだけよろしくないと思ふ。散歩、上郷八幡宮の社殿で読書、帰途入浴、連日の憂欝が解消した。

　　六月五日　曇。

旧の端午、追憶の鯉幟吹流しがへんぽんとして泳いでゐる。今日も近郊散歩。

風がいちめんの雑草が合唱する・つかれて風の雑草の雨となつた・逢へるゆふべの水にそうてまがれば影・あざみの花に日のさせばてふてふ・狛犬の二つの表情を撫でる・おもひでが風をおよぐ真鯉緋鯉が（故郷端午）

六月六日　晴。

久しぶりにゆつくり朝寝した。近在散歩、秋穂霊場参拝。畑手入、今春は私の悪日がつづいたので、茄子も胡瓜もトマトも植ゑつけるほどの安静を持たなかつた。……

ぐうたら手記雑草雑感。生命——心——言葉——詩客観を掘りぬくと主観にぶつつかる、彼が我となるのである。物——心、自然——自己物にこだはらない、物からわずらはされない境地。流動して停滞しない境地。二二ヶ四の世界！

六月七日　曇、雨、そして晴。

最初の筍を見つけて食べる、歯が抜けて噛みしめることが出来ないから、ほんたうの味は味へないけれど、やつぱりうまい。遠雷、何となく別れた人をなつかしがらせる、これもオイボレセンチの一端か。飛行機が列をなして低空を通過する、あの爆音は嫌だけれどその姿は悪くない。

六月八日　晴。

信州蕎麦粉を味ふ、蕎麦粉そのもののうまさもあるが、友情のあたたかさがうれしい。飯がない、米がない、銭がない。——山を歩く、山つつじがうつくしい。

ぐうたら手記□即時而真、当相即道を体解せよ。□すなほなわがまま！□酒は（少くとも私には）自己忘却の水である、不眠の夜ふけて飲むアダリンのやうに！□私は与へることが乏しい、だから受けることの乏しさで足りてゐなければならない。□文芸作品の価値は二つに分けて観ることが出来る。

一、作品そのものゝ価値（純文芸的）一、作品が時代へ働らきかけた価値（史的意義）

この二つの価値を併せ有する作品としては芭蕉、啄木、前者の例は乙二、牧水、後者のそれは子規等。

六月九日　快晴。

食べること少くして思ふこと深し。学校に樹明君を訪ねて、米と煙草銭とを貰うてくる、その十銭白銅貨二つをいかに有効に費つたか――

九銭　ハガキ六枚四銭　なでしこ一袋　　残金四銭は明日の煙草代として三銭　風呂銭

独奏――今日はこんな気分だつた、私自身も、蝶々も雑草も。

六月十日　晴。

何となく雨の近いことを感じる、梅雨の前の大気とでもいふのであらう。しづかなるかな、山の鴉があはれつぽい声で啼く、――ヤアマアノカアラスウモタアダヒトリ。身辺整理、といふよりも身内整理。清閑貧楽ともいふべき一日だつた。

松笠風鈴を聴きつつ・風鈴鳴ればはるかなるかな抱壺のすがた・やもりが障子に暮れると恋の場面をゑがく・たたへた水のをり／＼は魚がはねて・柿の若葉に雲のない昼月を添へて・うたうとするその手へとまらうとする蝿で（雑）

六月十一日　晴。

飲む酒はないが読む本はある、ぢつとしてゐられるだけの食べる物もある。……梅雨入前らしく少し曇つて降つた。在るものを味ふ。

六月十二日　晴、入梅。

よき食慾、よき睡眠（そしてよき性慾）、――これが人生の幸福を基礎づける。とても好いお天気、すこし風はあるが、一天雲なしで、青空の澄んだ深い色は何ともいへないうつくしさである。読書にも倦んでそこらを散歩、Ｉさんから在金全部十九銭借りる、さつそく酒一

杯ひつかける、煙草を買うたことはいふまでもない。いやな風がふく、風はほんたうにさびしいものである。らしい生活、それは無論第二義的第三義的なものであるが、それを持続してゆくうちに第一義的に向上することが出来るのではあるまいか。老人は老人らしく、貧乏人は貧乏人らしくせよ、いひかへれば、気取らずに生活せよ、すなほに正直に振舞へ。貧乏はよろしい、けちけちするな、真面目は結構、くよくよしてはいけないが。

・柿の若葉が、食べるものがなくなつた・空腹、けふのサイレンのいつまでも鳴り・うつてもうたれても蝿は膳のそば（雑）・かついでおもいうれしい春の穂・焼かれる虫の音たてて死ぬる・暮れるとしぼむ花草でてふてふの夢・花に花が、てふちよがてふちよに・梅雨めく雲でぬけさうなぬけない歯で・雑草ほしいまゝなる花にして　雑草しげり借金ふえるばかり・ゆふ風ゆうぜんとして蜘蛛は待つ・若葉から若葉へゆふべの蜘蛛はいそがしく・ふと眼がさめて風ふく　　　改作・ひよつこり筍ぽつきりぬかれた

六月十三日　晴、空梅雨らしい。

早起、これも老の特徴だらう、こんなに早起しようとは思はないけれど、眼が覚めると寝てはゐられないのである。朝御飯を食べてゐるとき、ほろりと歯がぬけた、ぬけさうでぬけなかつた歯である、ぶら／＼うごいて私の神経をいら／＼させてゐた歯である、もう最後のそれにちかい歯である、その歯がぬけたのだからさつぱりした、さつぱりしたと同時に、何となくさびしく感じる、一種の空虚を感じるのである。午前中読書、しづかなるよろこび。午後散歩、帰庵すると珍客が待つてゐた、詩外楼君が突然来庵してくれたのである、樹明君を招いて飲む、酔うて歩く、そしてとろとろどろどろ、連れて戻つて貰うて、いつしよに寝る、近来めづらしいへべれけぶりだつた、それだけ嬉しくのんびりしたのでもある！

・空梅雨の風のふく歯がぬけた　ぬけた歯を投げ捨てて雑草の風・ぬけるだけはぬけてしまうて歯のない初夏・花がひらいて日が照つてあそぶてふてふ・めづらしく誰かくる雑草の見えがくれ・おもふことなく萱の穂のちる・こゝも墓らしい筍が生えて・歯のぬけた日の、空

六月十四日　晴。

とても早く起きる。詩外楼君と同道して徳山へ、久しぶりに白船君と会談、そして東へ西へお別れ。私は一時の汽車に乗つた、途中三田尻下車、伊藤君を訪ね、それから三田君を訪ねてまた飲んだ、鯛の刺身のあたらしさ、うまさは素敵だつた、それと同様に三田君の人間のよさも（家人一同のよさも）素敵だつた、暮れてお暇乞して、散歩して、シネマを観て、酒垂山の月を賞して、夜明けの汽車でやつと帰庵した。めづらしく裏山で狐が鳴いてゐた。

・雑草に夜明けの月があるしづけさ・笹のそよぎも梅雨らしい雨がふりだした　あたゝかく日がさすところよい石がある・五月の海は満ちて湛へて大きな船　　　故郷にて・螢ちらほらおもひだすことも

六月十五日　晴れたり曇つたり、梅雨らしく。

遊びすぎたのでがつかりした、自戒をやぶつて冷酒をあほつたので、破戒の罰はてきめんで身心がうづくやうである。湯田へ出かけて熱い温泉に浸る、あゝ極楽、夕方帰庵して一杯飲んですぐ寝た、熟睡、夢も見なかつた安らかさだつた。——危機はたしかに過ぎ去つた——アイスキヤンデー流行には驚嘆する、通行人の立ち寄り易いやうな場所には二軒も三軒も並んで店を張つて競争してゐる、駄菓子屋、氷屋は大恐慌だ、いや彼等はアイスキヤンデー売りに転業しつゝある、先日、私もすゝめられて食べてみたが、流行するだけの値打ちはあると思つた、何しろ安いから、そして割合にうまいから、取扱が簡単だから、等、々、々。今日、途上で、とても美しいお嬢さんを見た、さつそうとして洋装の長身がアスフアルトを踏んでゐる、そして同時に、とても醜い娘さんを見た、彼女は日傘で顔を隠して、追はれて逃げるやうに、隅の方を通る。……私はあんぜんとして溜息をついた。

・朝風そよげばひかるは青葉から青葉へ蜘蛛のいとなみ・水をあびてはつるみとんぼの情熱・晴れてけさはすつかり青田で・萩がもう、ここに住みついて四年・さみだるゝやわが体臭のたゞよふ

六月十六日　晴、風、雨。

風、風、風、風ほどいやなものはない。夕方、樹明君来庵、すぐ帰宅。風に敗けて飛びだした、手には念珠を握つてゐる、それをあづけてＴさんから少し借りる、そして酔ひつぶれて、Ｉ館に泊る。……

×生家の跡　　——（十四日の夜）——

六月十七日　曇。

昨夜の豪雨も今日の晴曇も解らないほど飲んで飲んで、そして倒れた。

六月十八日　晴。　六月十九日　曇。　六月廿日　雨。

ぢつとして読書。ぼう／＼ばく／＼！もう虫が鳴く、虫の声は身にしみる、虫のいのち、虫のうた。……

×私の詩

六月二十一日　雨、梅雨らしく。

早起きして身辺整理。けふもぢつとして読書したり句作したり。何といふ嫌な夢だつたらう、それはヱロでもグロでもなく、あまりになま／＼しく現実的だつた。私はがくぜんとして自分を省みた、そして恥ぢた、何といふ醜い私だつたらう。

・水かげも野苺のひそかなるいろ・おちてしまへば蟻地獄の蟻である・雑草につつまれてくちなしの花は・赤いのはざくろの花のさみだるる・とても上手な頬白が松のてつぺん・草を咲かせてさうしててふちよをあそばせて　赤蛙さびしくとんで（改）　酔ひざめの風がふく筍（その翌朝）　酔ひざめは、南天の花がこぼれるこぼれる

六月廿二日　曇。

田植のいそがしい風景。……蝿を殺す、油虫を殺す、百足を殺す、蜘蛛を殺す、……そしておしまひには私自身を殺すだらう！……あまり予期してゐなかつた酒が魚が持ち来された（一昨日、幸便に托して、山田屋主人に酒と魚を借りたいといふ手紙をあげてをいたのであるが）、さつそく飲んだ（五日ぶりの酒であり魚であつた）、快い気

分になつて、学校に樹明君を訪ねて来庵を促した（そして米と野菜とを貰つて）、それからまた飲んだ、飲んで街へ出た、ひよろひよろになるまで飲んだ、ちようど私の不在中訪ねて来て、私を探し歩いてゐる敬君に逢うて。……二時すぎて、やつと戻つた、すぐ寝た。

六月廿三日　くもり。

快い宿酔！　そこらをしばらく散歩。樹明、百円札で山頭火をおどす！これは昨日の出来事であつた、近来にない明々朗々たる珍現象であつた！Ｙ屋のＭさんが例の如くやつてきて話す、郵便物を托送する。終日待つた、待ちぼけだつた、敬君も来なければ樹君も来なかつた。

・雑草のしたしさは一人たのしく・梅雨の水嵩のあふれるところどぜうとこどもら・ほのかに梅雨明りして竹の子の肌・へんぽんとして託児所の旗が、オルガンがうたふ　枇杷のうつくしさ彼女は笑はない・あれから一年の草がしげるばかり

六月二十四日　降る、降る、降れ、降れ。

終日閉居、読書三昧。今日もＭさんが来た、そして句作を初めた。酒を飲んで酔ふことは悪くないが、酔ひたい気分で酒を呷ることはよろしくない。酒を尊重せよ、自分の生命を尊重するよりも！

ぐうたら手記すなほに。——行住坐臥、いつでも、どこでもすなほに。善悪、生死、すべてに対してすなほに。純なる熱情、唯一念を持して。芸道といふことについて。——執着を去れ、酒から作句から、私自身から。すなほに受け入れる心から強く働らきかける力が出てくる。あるときは澄み、あるときは濁る、そして流れ動かないではゐられない——これが私の性情だ。湛へて澄む——行ひすますことは、私には不可能だ。

六月二十五日　晴。

畑仕事。——大根ふとれ、トマトなれ、蓮芋伸びよ、唐辛よ辛くなれ。三つ植ゑつけて置いた馬鈴薯が三十ばかりに殖えてゐた。土の抱擁と日光の愛撫。寝た、寝た、宵から朝までぐつすり寝た、ランプもともすことなしに。

六月廿六日　晴、そして曇、雨。

拝受、々々、々々！……最後の晩餐！　酒、酒、酒、酒。

六月廿七日　曇、それから雨。

ぼうぜん、あんぜん、そしてゆうぜん、とうぜん。

蠅捕紙（連作風に）蝿は蝿の死屍をつらね死にきれない蝿の鳴いてもがけどもやつと立ちあがつたが、脚がぬけない蝿で鳴くひよいととまつてそのまゝ死んでしまう蝿蝿、とんできて死んでゆく

六月廿八日　雨、とても降つた。

雨は天地がぬけるほど降つたし、私は身心が腐るほど寝た。……

六月廿九日　曇、また降りだした。

午後、敬君に招かれてＦへ行く、蝙蝠傘事件をきつかけにＨの狡猾を責めつけてやつた、日頃の溜飲はさがつたけれど不愉快だつた、早く切りあげて帰庵した。

六月三十日　よく降るものだ、降つた降つた。

樹明君、二日酔のからだを持てあまして来た、そして一日寝て帰つた。濁流たう／＼、非常を知らせるサイレンが陰にこもつて鳴りだした。……

晴れると暑い牛の乳房もたらり・やたらにてふちよがとんでくる梅雨晴れ・降りつづける水音が身のまはり・身のまはりは草だらけマイナスだらけ・いちにち風ふく風を聴きをり「製材所とシネマ」

新生の記　　　　　×

ぐうたら手記薊には薊の花が咲く、薊には薊の花を咲かせておけ。（自嘲自讃の言葉）

×・どうやら霽れさうな草の葉のそよぐそよぐ・はれるよりてふてふは花のある方へ・ぬれててふてふのさがす花はある・はれるとてふちよがさかやさんがやつてきた・しげるがままの草から筍のびあがる・山のみどりの晴れゆく雲のうつりゆく　　　　×

なぜに涙がでるのだろ　　　　　　　　――（私の小唄）――
×　　　　梅雨出水・さかまく水が送電塔へ降りしきる　さみだれのむかうから人かげは酒やさん　　　　　×

□藪蚊□鼠□油虫

　　　　　　　　　×・野心的、情熱、句作硬化症、感動。　いはゆる写生といふもの。　うたふものとうたはれるものとのつながり。・腐つた鯛よりも生きた鰯。　いき／＼　ぴち／＼　みづ／＼しいもの。・おいぼれ、既成作家。（現代的意義）　説明、描写、うたふといふこと。・平凡と常套。

即時而真　当相即道

生々如々

春有百花秋有月夏有涼風冬有雪若無閑事挂心頭便是人間好時節

　七月一日　曇、また降りだした。

身心一新、さらに新らしい第一歩から。すなほな、とらはれない行持。午前ちよつとしようことなしに街のポストまで、出水の跡がいたましい。いつもの癖で、今日もなまけた、原稿も書かなかつたし、書債も償はなかつた、書くべき手紙も書かなかつた。……二つの出来事があつた、それは私の不注意を示す好例だつた、質屋で誤算のままに利子を払ひすごしたこと、そしてうつかりしてゐて百足に螫されたこと。注文しておいた酒をとうとう持つてきてくれなかつた、失念したためか、信用がないためか、……どちらでもよろしい、……酒に囚はれるな。私がここに落ちついてから、そして行乞しなくなつてから、いつとなく私は横着になつたやうだ、事物に対して謙虚な心がまへをなくしてしまつたやうである、あさましい事実だ、私は反省しつゝ、ひとり冷汗をかいた。何となく寝苦しかつた、ペーターのルネツサンスに読みふけつた。

　七月二日　けふもまだ降つてゐる。

こころしづかにしておもひわずらふことなし。雨は悪くない、しみ／″＼としたものがある、風はよろしくない、いら／＼させる。……雨

水がバケツにたまつて水を汲まなくてもすむ、汚れた鍋や茶碗や、みんな雨が洗つてくれる。やつと書債文債をかたづける。酔中漫言——

一杯東西なし二杯古今なし三杯自他なし……

酒がきた、樹明君を招く、それから、ほろ／＼とろ／＼どろ／＼ぼろ／＼ごろ／＼。

…………………………………………………………………

七月三日　雨。

悪日、悪日の悪日。愚劣な山頭火を通り越して醜悪な山頭火だつた。恥を知れ、恥を知れ、恥を知れ、恥知らずめ、恥知らずめ、恥知らずめ。

七月四日　五日　曇つたり、降つたり、晴れたり。

私自身もおなじく。

・こゝろふかくも蝉が鳴きだした　　　朝鮮飴　熊本をおもふ・そのなつかしさもかみしめる歯がぬけてしまうて・ゆふやみほつかりと咲いたか

七月六日　雨。

アルコールの逆流。梅雨もどうやらあがりさうな雷鳴。

七月七日　八日　九日　晴、曇。

身心不調、蟄居乱読、反省思索。

七月十日　曇。

こゝろしづかにさびしく澄みわたる。やまぐちの会へ出かける、途上、老乞食に逢ふ、彼と私とは五十歩百歩だ、いつものやうに湯田で入浴、ああ温泉はありがたい、Ｓさんのお宅でよばれる、うまかつた、それから句会、Ｋさん、Ｈさん、Ａさんの青春をよろこぶ。終列車には間にあはなかつた、飲む、飲みだしたら泥酔しなければおさまらない私の悪癖だ、とう／＼Ｙ旅館へころげこんだ。

・自動車まつしぐらに炎天・木かげは涼しい風がある旅人どうし

若葉の中からアンテナも夏めく・それはそれとして草のしげりやう
は　　　湯田温泉　夏山のかさなれば温泉のわくところ・おもひでの
葉ざくらのせゝらぐ・さびしがりやとしてブトにくはれてゐます

　　七月十一日　曇、混沌として。

　またＳさんのお世話になつた、ああ。……朝から夜まで、酒、シネマ、酒、シネマ。やうやくにして終列車で帰庵。

　　七月十二日　十三日

　寝てゐるほかない、自分を罵るほかない。

　　七月十四日　晴れたか、曇つたか。——

　ぼんやりしてゐるところへ、黎々火君だしぬけに来庵、万事許して貰つて、そして、酒と肴とを奢つて貰ふ。別れてからまた飲んだ、今夜の酒はほんとうに恥づかしい酒、命がけの酒だつた。

　　　　ぐうたら手記□現実——回光返照——境地的。□芸術的野心、作家的情熱。□物そのものを味はひ楽しむ心境。□事実と真実 actuality reality.□実体——物質。　作用——機能。□人間性、社会性。　思想性、芸術性□俳句する、そのことが私の場合では生活するのである。　俳句のための俳句（芸術至上主義である）、仏教のための仏教と同様に。

　　七月十五日　十六日　十七日　どうやら梅雨もあがつた。

　私は毎日寝てゐた、……カルモチンかダイナマイトか。……自己省察は、あゝ、哀しい。

　　七月十八日　半晴半曇。

　身辺整理、——掃除、洗濯、佃煮、等、等。天地一切おだやかな風光。——蝉、きりぎりす、蛙、小鳥、草、木、雲、蝶、蟻、そして私。酒はとうていやめられないとすれば、節酒して、そして生きてゆくより外ない私である。くよくよするな、すなほにおほらかに、けちけちするな。しづかな一歩、たしかな一歩、あせらずたゆまず一歩一歩、その一歩が私の生死であり、私の生活である。

井手君に・待ちきれないでそこらまで夕焼ける空・柱いつぽんをのぼりつくだりつ蟻のまいにち・ひるねの夢をよこぎつて青とかげのうつくしさ（松）　改作・ひとりとんでは赤蛙（松）
改作・暮れるとやもりが障子に恋のたはむれ

七月十九日　晴曇。

身心安静――清浄といつてもよからう。桔梗が一りん咲いた。アルコールが私の身心をどんぞこへまで陥れた、私は起ち上つた、そして甦りつつあるのである。……

・蝉もわたしも時がながれてゆく風・はなれてひとりみのむしもひとり　それをくれた黎々火君に・草はしげるがままの、かたすみの秋田蕗・彼のこと彼女のこと蕗の佃煮を煮つつ・月がいつしかあかるくなればきりぎりす（雑松）・それからそれへ考へることの、ふくろうのなきうつる　ゆふべいそがしく燃えてゐる火のなつかしく（途上）

七月二十日　曇、しめやかな雨となつた。

夕方から、招かれて学校へ行く、樹明君宿直である、例によつて御馳走になる、六日ぶりの酒肴である、おそくなつたので、勧められるまゝに泊つた、食べすぎて寝苦しかつた。

歯のぬけた口で茹章魚を食べビフテキを食べるのだから自分ながら呆れる、むろん噛みしめることは出来ないからほんたうには味へない。

・蛙なく窓からは英語を習ふ声・最後の一匹として殺される蝿として　殺した藪蚊の、それはわたしの血　しんみり風に吹かれてゐる風鈴は鳴る・やつとはれてわたくしもけふはおせんたく（雑）　どこかでラヂオが、ふくろうがうたふ　豆腐やの笛がきこえる御飯にしよう　おくれた薯を植えいそぐ母と子と濡れて

七月廿一日　曇、蒸暑い、雨。

早朝帰庵、身辺整理。――米がなくなつた（銭は無論ない）、絶食もよからう（よくなくても詮方ない）、と観念してゐたら、樹明君か

ら昨夜の言葉通りに少々送つてきた、これでしばらくは安心、そのうちにはＫからの送金があるだらう。即興詩人と梅干老爺！　それを考へてひとり苦笑する、それが事実であるだけそれだけ、笑ひたいやうで笑へない。色慾から食慾へ——これが此頃の推移傾向である。
夢！　夢は自己を第二の自己として表現して見せてくれるものだ、私は近頃よく夢を見る、毎夜の夢が毎日の私を考へさせる。

　　ぐうたら手記□故郷（老いては）（病みては）（うらぶれては）。□旧友（ルンペンの感慨）。□貨幣価値を超越したもの（焚火の如き）。□「無くなる」　銭がなくなる、米がなくなる、生命がなくなる！□過ぎゆくもの（死を前に）。□生活——　帰依——感謝——合掌——報恩。□業 carma ——　私——酒——飲めば悪くなり、飲まなければ悪くなる。——□遺書について。

　　七月廿二日　曇。

　山の枯木を拾ふ、心臓の弱くなつてゐるのに驚いた、弱い心臓を持ちながら。……油虫だけは好きになれない。午後、樹明君来庵、午睡、これから湯田の慰労会へ行くといふ、ちよつと羨ましいな。——煙草がなくなつた、しばらく絶煙するもよからう、——よか、よか。

　・夏草から人声のなつかしく通りすぎてしまう（松）・けさは何となく萱の穂のちるさへ・日ざかりちよろちよろとかげの散歩（松）・すずしさ竹の葉風の風鈴のよろしさ（雑）・風音の蚊をやく・風がでたどこかで踊る大鼓のひゞきくる　　樹明君に・あなたがきてくれるころの風鈴しきり鳴る

　　七月廿三日　曇——晴。

　とてもよく寝た、宵から朝まで、ランプもつけないで、障子もあけはなつたまゝで、——これで連夜の不眠をとりもどした。前隣のＳさんの息子が来て草を刈つてくれた、水を汲むことが、おかげで、楽になりました。晴れて土用らしく照りつける、今年最初の、最高の暑さだつた。やうやく北海道から句集代着金、さつそく街へ出かけて買物——

　二十銭　ハガキ切手三十銭　酒三合三十二銭　なでしこ十銭　鯖一

尾二十銭　茶八銭　味噌十八銭　イリコ

財布にはまだ米代が残してある、何と沢山買うたことよ、有効に費うたことよ。午後、樹明君来庵、酒と豆腐とトマト持参、飲んだり食べたりしたが、いや暑い暑い、暑くてあんまりやれなかつた。安全々々、安心々々。今日は街へ三度出かけた、郵便局へ、駅のポストへ、瑜伽祭へ、——めづらしく落ちついて、——万歳※当分謹慎、身心整理をしなければならない、過去を清算しなければならない、そして——そしてそれからである。

□酔ひどれはうたふ　　——（アル中患者の句帖から）——・酔ひざめの花がこぼれるこぼれる　彼が彼女にだまされた星のまたたくよ・さうろうとして酔ひどれはうたふ炎天・ふと酔ひざめの顔があるバケツの水　アルコールがユウウツがわたしがさまよふ・ぐつたりよこたはるアスフアルトのほとぼりも　いつしかあかるくちかづいてくる太陽・酔ひきれない雲の峰くづれてしまへ

七月二十四日　晴、曇かつた。

また徹夜だ、人間として（彼が出来てゐる人間ならば）、食べるものがまづいとか、夜眠れないとかいふことがあるべき筈はない、私は罰せられてゐるのだ。冬村君を久しぶりに工場に訪ねる、夫婦共稼ぎの光景である、彼等は父母と仲違ひして別居してゐる、こゝにも人生悲劇の場面が展開されてゐるのである。昨日の酒があつまつてゐるので、朝酒昼酒そして晩酌、ありがたいことだ。人のなさけを感じること二度。番茶を味ふ、トマトを味ふ。今日は土用丑の日、とうとう鰻には縁がなかつた、鰻よりも鮎を食べたいのだが。秋茄子三本、秋胡瓜三本を植ゑる、この価五銭、あんまり安すぎる。

ぐうたら手記□求めない生活——私の生活について。□貧しければこそ——　ほどよい貧乏。　私が今日まで生きてきたのは貧乏のおかげだ。□疾病。　ほどよい疾病（私の場合には）□歯のあるとないと——　白船老との会食、酢鮹の話。

七月二十五日　快晴、土用日和。

かん／＼照りつけるので稲が喜んでゐる、百姓が喜んでゐる、私も

喜んでゐる、みんな喜んでゐる。今日も酒があつた、茄子があつた、トマトがあつた、私にはありがたすぎるありがたさである。茶の本（岡倉天心）を読みかへした、片々たる小冊子だけれど内容豊富で、教へられることが極めて多い本である。即興詩人（森鴎外訳）も面白い、クラシツクのよさが、アンデルゼンのよさが、鴎外のよさが私を興奮せしめる。私は空想家だ、いや妄想家だと思つたことである、今日にはじまつたことではないが。遠く蜩が鳴いた、うれしかつた、油虫が私を神経衰弱にする、憎らしい。また徹夜してしまつた、心臓が痛くなつて、このまゝ死ぬるのではないかと思ふたが、大したことはなかつた、そして私の覚悟は十分でない、私といふ人間は出来てゐないことを考へさせられた。……人生——生死——運命或は宿命について思索しつゞけたが、今の私にはまだ解決がない！午後、四時四十分の上りで佐野へ。——故郷の故郷、肉縁の肉縁、そこによいところもあればよくないところもある、いはゞあたゝかいおもさ！山家の御馳走になる、故郷の蚊といへば何だか皮肉だけれど、それも御馳走の一つだらう。酔うて管を巻く、安易な気持だ。

悼（厳父を失へる白雲兄に）・ゆふ風の夏草のそよぐさへ　（父を死なせた友に）　山頭火合掌

・ゆふべすゞしくうたふは警察署のラヂオ・炎天の蓑虫は死んでゐた・蛙よわたしも寝ないで考へてゐる・いつまで生きる竹の子を竹に（改作）・炎天、変電所の鉄骨ががつちり直角形（改作）・さういふ時代もあるにはあつた蝉とる児のぬきあしさしあし・暑さきはまり蝉澄みわたる一人・ゆふべはよみがへる葉に水をやる・山はゆふなぎの街は陽のさす方へ・炎天まつしぐらにパンクした（自動車）　逸郎君に・百合を桔梗に活けかへて待つ朝風・ちつともねむれなかつた朝月のとがりやう・夜あけの風のひえ／″＼として月草ひらく

七月二十七日　曇。

早起、朝酒、九時の下りで九州へ。——初めて汽車の食堂にてビール一本さかな一皿。門司駅一二等待合室にて黎々火君を待ち合せ、岔水君をよびよせてもらつて、アイスクリームを食べつゝ会談。関門風景はいつもわくるくない。それから八幡へ、——鏡子君、井上さん、

星城子君といつしよに、食べたり飲んだり、話したり。入浴、私の体重十四〆弐百、折から安売の玉葱に換算すればまさに壱円四十弐銭の市価（二等品で一〆十銭だから！）。丸久食堂の隣席はきつと結婚見合、この結婚不成立と観たは僻目か、女の方が男よりもづう／＼しかつた。をなごやの鏡子居にをなごと寝ずにひとり泊る。八幡は煙突が多い、食べものやが多い、女が多い、ウソもカネも多いだらう！

　　　　小郡駅待合室　汽車がいつたりきたりぢつとしてゐない子の暑いこと・ふるさとの或る日は山蟹とあそぶこともして　飲めるだけ飲んでふるさと・酔うてふるさとで覚めてふるさとで・ふるさとや茄子も胡瓜も茗荷もトマトも・急行はとまりません日まはりの花がある駅・風は海から冷たい飲みものをなかに

　　七月二十八日　晴れて暑い。

　温柔郷の朝はおそい、十一時近くなつて四人連れでバスで松の寺へ。——私は井上さんの奥さんから頂戴した黒絽の夏羽織をりゆうと着流してゐる、それが俊和尚を驚喜せしめた。もつたいなくも本堂の広い涼しいところで会食、酒、ビール、てんぷら、さしみ、お釈迦さんもびつくりなすつたらう、観音さまはいつもやさしい。かいめ、くさびといふ魚、水桃もおいしかつた。海水浴風景、さういふ風景と私とはもはや縁遠くなつた。浜万年青、一名いかりおもと、それを愛して俊和尚が植えひろげてゐる。私の句碑（松はみな枝たれて南無観世音）の前で撮影、私も久しぶりに法衣をもとうた。私一人滞在、寺の夜はしづかだつた。

　　　　ぐうたら手記□世間体や慾で営まれる世界はあまりに薄つぺらだ。　義理や人情で動く世界もまだ／＼駄目だ、人間のほんたうの世界はその奥にある、そこから、ほんたうの芸術が溢れ流れてくるのである。□金持の君は、金さへあれば買はれるものを買ふのもわるくあるまい、貧乏な私は金では買へないものを求めるのもよからうではないか。

　　七月二十九日　晴。

　朝酒、それから和尚さん飯野さん、清丸さんたちに送られて、バス

を乗り換へ乗り換へ飯塚へ。今日はバスからバスへ、トクリからトクリの一日だつた。Ｈで健と会飲、だいぶ痩せて元気がないから叱つてやつた、一年一度の父子情調だ。待つた芸者と仲居とが口をそろへて曰く、親子で遊ばれる方は飯塚にもめつたにございません、――これはいつたい褒められたのか貶されたのか。駅前の宿屋へ自動車で押し込められてしまつた、こゝの印象はよくなかつた。

　・真夏の真昼のボタ山のあるところ　炎天のボタ山がならんでゐる　　　改作一句　枯れたすゝきに日が照れば誰か来てくれさうな

　　七月三十日　暑いこと、暑いこと。

　緑平居へ、うれしいな、友の中の友。温情、御馳走、涼風、ラヂオ。……

　　　　緑平居・葉ざくらがひさ／″＼逢はせてくれたかげ・みんないつしよにちやぶ台へまたてふてふ

　　七月三十一日　晴れやかに。

　八幡で星城子君のニコニコ顔に逢ひ、別れてからシネマ見物、夜は戸畑の多々楼君と同伴して若松の荒瀬さんを往訪、このあたりの夜景はうつくしい、製鉄所の礦滓はことにうつくしかつた。

　　八月一日

　再び関門へ。――黎々火君と共に岔水居で会談会飲。黎君に若い日本人としての情趣があり、岔君に近代都会人らしいデリカシーがある。岔水居泊、琴の音、蛙の声、港の灯。今日観たシネマは面白かつた、サトウハチローの裏街の交響楽には新味はないが持味があつた。暑苦しく寝苦しかつた。

　　　　岔水居　したしく逢うてビール泡立つ　　　或る旧友と会して・寝顔なつかしいをさな顔がある　朝ぐもり海へ出てゆく暑い雲

　　八月二日

　朝酒はありがたい、もつたいない。岔水君に送られて下関へ。――私が使用する送られてといふ言葉は食事、切符、等々を与へられるこ

とをも意味してゐる、あゝもつたいない。下関では飲み歩いた、饒舌り散らした、とう／＼黎々火君の厄介になつた。シネマは面白かつた。小遣も興味もなくなつたので、駅の待合室で一夜を明かした。

八月三日

早朝帰庵。愉快な旅の一週間だつた、友はなつかしい、酒はおいしい、ビールもよろしい、鮎も好き、……労れて、だらけて、こんとんとして眠つた。

八月四日

ぼう／＼ばく／＼。関日の波多君が小学校の先生二人を同伴して来庵、アイスキヤンデーをかぢりながら暫時雑談、今日は私の雑草哲学を説く元気もなかつた。

ぐうたら手記□句作——自己脱却（自己超越）——一句は一皮。　その一句は古い一皮を脱いだのである。　一句は一句の身心脱落である。　昨日の揚棄、今日の誕生。□自己虐待、マゾヒズム。近代人の不安焦燥動揺彷徨、虚無。□俳句する——生活する——人生する。

八月五日　晴れてゐたか、曇つてゐたか。

かねて東京の斎藤さんから通知のあつた多根順子女史来庵、しばらく話した、お茶もあげないでお土産をいたゞいてすまなかつた、句集を買うて下さつたのは有難かつた、其中庵名物の雑草風景は観て下さつた、女史に敬意を表する。どうもむしやくしやしていけない、夏羽織を質入して飲んだが、まだ足りないので、さらに飲みなほした、Ｙさんに立替へて貰つて、どろ／＼の身心をやつと庵まで運んだ。……恥知らずめ、罰あたりめ。

ぐうたら手記□捨身になれば不死身になる。□不自然な貧乏。

一は社会的に、一は個人的に（これが私の場合）。

八月六日——九日

晴れてよろし、降つてよろし、何もかもみなよろし。

八月十日　第二誕生日、回光返照。

生死一如、自然と自我との融合。……私はとうとう卒倒した、幸か不幸か、雨がふつてゐたので雨にうたれて、自然的に意識を回復したが、縁から転がり落ちて雑草の中へうつ伏せになつてゐた、顔も手も足も擦り剥いだ、さすが不死身に近い私も数日間動けなかつた、水ばかり飲んで、自業自得を痛感しつつ生死の境を彷徨した。……これは知友に与へた報告書の一節である。

正しくいへば、卒倒でなくして自殺未遂であつた。私はＳへの手紙、Ｋへの手紙の中にウソを書いた、許してくれ、なんぼ私でも自殺する前に、不義理な借金の一部分だけなりとも私自身で清算したいから、よろしく送金を頼む、とは書きえなかつたのである。とにかく生も死もなくなつた、多量過ぎたカルモチンに酔つぱらつて、私は無意識裡にあばれつつ、それを吐きだしたのである。

断崖に衝きあたつた私だつた、そして手を撒して絶後に蘇つた私だつた。

死に直面して　　　「死をうたふ」と題して前書を附し、第二日曜へ寄稿。・死んでしまへば、雑草雨ふる・死ぬる薬を掌に、かゞやく青葉・死がせまつてくる炎天・死をまへにして涼しい風・風鈴の鳴るさへ死はしのびよる・ふと死の誘惑が星がまたたく・死のすがたのまざまざ見えて天の川・傷が癒えゆく秋めいた風となつて吹く・おもひおくことはないゆふべ芋の葉ひらひら・草によこたはる胸ふかく何か巣くうて鳴くやうな・雨にうたれてよみがへつたか人も草も

八月十五日　晴、涼しい、新秋来だ。

徹夜また徹夜、やうやくにして身辺整理をはじめることができた。五十四才にして五十四年の非を知る。憔悴枯槁せる自己を観る。遠く蜩が鳴く。風が吹く、蒼茫として暮れる。くつわ虫が鳴きだした。胸が切ない（肺炎の時は痛かつた）、狭心症の発作であるさうな、そして心臓痲痺の前兆でもあるさうな（私は脳溢血を欣求してゐるが、事実はなか／＼皮肉である）。灯すものはなくなつたが、月があかる

い。

　　　　徹夜不眠・ほつと夜明けの風鈴が鳴りだした　ずつと青葉の暮れかゝる街の灯ともる・遠く人のこひしうて夜蝉の鳴く・踊大鼓も澄んでくる月のまんまるな・月のあかるさがうらもおもてもきりぎりす・月あかりが日のいろに蝉やきりぎりすや　　　米田雄郎氏に、病中一句・一章読んでは腹に伏せる「青天人」の感触

　　八月十六日　晴れて涼しい。

　今日も身辺整理、手紙を書きつづける。昨夜もまた一睡もしなかつた、少し神経衰弱になつてゐるらしい、そんな弱さではいけない。午後、樹明君、敬治君来庵、酒と汽車辨当を買うて、三人楽しく飲んで食べて話した、夕方からいつしよに街へ出かけてシネマを観た（トーキーでないので、せつかくのヱノケンも駄目だつた）、それから少し歩いて、めでたく別れた。十一日ぶりのアルコール、いやサケはとてもうまかつた。私にはもう性慾はない、食慾があるだけだ、味ふことが生きることだ。

　・すずしく風が蜂も蝶々も通りぬける・かたすみでうれてはおちるなつめです・身のまはりいつからともなく枯れそめし草　ねむれなかつた朝月があるざくろの花　月夜干してあるものの白うゆらいで

　　三月十七日」はママ］

　寝た、寝た、ぐつすりと睡れた。樹明君に連れられて、椹野川尻で鮒釣見習。

　　八月十八日　新秋清明。

　初めてつく／＼ぼうしが鳴いた。

　　青葉かげお地蔵さまと待つてゐる　蟻の行列をかぞへたりして待つ身は暑い　バスのほこりの風にふかれて昼顔の花・炎天下の兵隊としてまつすぐな舗道　行軍の兵隊さんでちよつとさかなつり・釣りあげられて涼しくひかる・水底の太陽から釣りあげるひかり・ゆふなぎおちついてまた釣れた

　　八月十九日　晴、朝晩の涼しさよ、夜は冷える。

　身辺整理。今日も手紙を書きつゞける（遺書も改めて調製したくおもひをひそめる）、Ｋへの手紙は書きつつ涙が出た。ちよつと学校へ、やうやくなでしこ一袋を手に入れる。肉体がこんなに弱くては——精神はそんなに弱いとは思はないが——仕事は出来ない。人生は味解である、人生を味解すれば苦も楽となるのだ。よき子であれ、よき夫（或は妻）であれ、よき父であれ、それ以外によき人間となる常道はない。先日からずゐぶん手紙を書いた、そのどれにも次の章句を書き添へることは忘れなかつた——

　余生いくばく、私は全身全心を句作にぶちこみませう。

　これこそ私の本音である。十七日ぶりに入浴、あゝ風呂はありがたい、それは保健と享楽とを兼ねて、そして安くて手軽である。純真に生きる——さうするより外に私が生きてゆく道はなくなつた、——この一念を信受奉行せよ。からだがよろ／＼する、しかしこゝろはしつかりしてゐるぞ、油虫め、おまへなんぞに神経を衰弱させられてたまるか、たゝき殺した、踏みつぶした。また不眠症におそはれたやうだ、ねむくなるまで読んだり考へたりする、……明け方ちかくなつて、ちよつとまどろんだ。　　　　　　　　　　　　×
×　　　　　　　　　　　×不眠症は罰である、私はいつもその罰に悩まされてゐる、十六日の夜は三日ぶりにぐつすりと寝て、生きてゐることのよろこびを感じた、よき食慾はめぐまれてゐる私であるが、よき睡眠は奪はれてゐる、生活に無理があるからだ、その無理をのぞかなければならない。行乞は一種の労働だ、殊に私のやうな乞食坊主には堪へがたい苦悩だ、しかしそれは反省と努力とをもたらす、私は行乞しないでゐると、いつとなく知らず識らずの間に安易と放恣とに堕在する、肉体労働は虚無に傾き頽廃に陥る身心を建て直してくれる、——この意味に於て、私は再び行乞生活に立ちかへらうと決心したのである。十七日は朝早くから嘉川行乞に出かけるつもりだつた（もうその日の米もなくなつてゐた）、そこへ学校の給仕さんが樹明君の手紙を持つて来た、——今日は托鉢なさるとのことでしたが、米は私が供養しますから、午後、川尻へいつしよに鮒釣に行きませう、——といふのである、そこで私は鉄鉢を魚籠に持ちかへた、人生は時に応じ境に随うてこだはらないのがよろしい。釣は逃避行の上々なるものだ、魚

は釣れなくとも句は釣れる、句も釣れないでよい、一竿の風月は天地悠久の生々如々である、空、水、風、太陽、草木、そして土石、虫魚、……人間もその間に在つて無我無心となるのである。私は釣をはじめやうと思ふ、行乞と魚釣と句作との三昧境に没入したいと思ふ。しかし今日はその第一日の小手調べであつた、樹明君は魚を釣り私は句を釣つた、同時に米も釣つたのである。山羊髯！　その髯を私は立てはじめたのである、再生記念、節酒記念、純真生活記念として。八月十日を転機として、いよいよ節酒を実行する機縁が熟した（絶対禁酒は、私のやうなものには、生理的にも不可能である）、今度こそは酒に於ける私を私自身で清算することが出来るのである。今が私には死に時かも知れない、私は長生したくもないが、急いで死にたくもない、生きられるだけは生きて、死ぬるときには死ぬる、――それがよいではないか。アルコール中毒、そして狭心症、どうもこれが私の死病らしい、脳溢血でころり往生したいのが私の念願であるが、それを強要するのは我儘だ、あまり贅沢は申さぬものである。颱風一過、万物寂然として存在す、それが今の私の心境である。卒倒が私のデカダンを払ひのけてくれた、まことに卒倒菩薩である。ひとりはよろし、ひとりはさびし。油虫よ、お前を憎んで殺さずにゐない私の得手勝手はあさましい、私はお前に対して恥ぢる。

×　　　　　　×　　　　　　×

　風ふく枝の、なんとせかせか蝉のなく　朝風の軒へのそりと蟇か・朝風の野の花を活けて北朗の壺の水いろ　すゞしく鉄鉢をさゝげつつ午前六時のサイレン・あるきたいだけあるいて頭陀袋ふくれた夕月・草のそよげば何となく人を待つてゐる　　悼（母を亡くした星城子君に）・いつとなく秋めいた葉ざくらのかげに　山から風が風鈴へ、生きてゐたいとおもふ・日ざかりひゞくは俵を織つてゐる音　かなしい手紙をポストに、炎天のほこりひろがる・木かげ水かげわたくしのかげ・炎天の稗をぬく（雑）

　　ぐうたら手記□はぜのおばさん。□河原撫子の野趣。□太陽の熱と光とがこもつてゐるトマトを食べる。□生は生に、死は死に、去来は去来に、物そのものに任せきつた心境。

　八月二十日　曇。

朝夕の快さにくらべて、日中の暑苦しさはどうだ。酒にひきづられ、友にさゝえられ、句にみちびかれて、こゝまで来た私である、私は今更のやうに酒について考へ、句について考へ、そして友のありがたさを（それと同時に子のありがたさをも）、感じないではゐられない。……待つてゐた句集代落手、さつそく麦と煙草とハガキと石油を買ふ。古雑誌を焚いて、湯を沸かすことは（時としては御飯を炊くこともある）、何だかわびしいものですね（さういふ経験を持つてゐる人も少くないだらう）。蝉がいらだたしく鳴きつづける、私もすこしいらいらする、いけない／＼、落ちつけ／＼。つく／＼ぼうしの声をしみ／″＼よいと思ふ、東洋的、日本的、俳句的、そして山頭火的。

・放たれてゆふかぜの馬にうまい草（丘）・ひらひらひるがへる葉の、ちる葉のうつくしさよ　逢ひにゆく袂ぐさを捨てる・誰かくればよい窓ちかくがちやがちや（がちやがちやはくつわ虫）　　　病中・寝てゐるほかないつく／＼ぼうしつく／＼ぼうし（楠）・トマト畠で食べるトマトのしたたる太陽・つくつくぼうしがちかく来て鳴いて去つてしまう

八月廿一日　晴。

初秋の朝の風光はとても快適だ、身心がひきしまるやうだ。どうやら私の生活も一転した、自分ながら転身一路のあざやかさに感じてゐる、したがつて句境も一転しなければならない、天地一枚、自他一如の純真が表現されなければならない。此頃すこし堅くなりすぎてゐるやうだ、もつとゆつたりしなければなるまい、悠然として酒を味ひつつ山水を観る、といつたやうな気持でありたい。生を楽しむ、それは尊い態度だ、酒も旅も釣も、そして句作もすべてが生の歓喜であれ。友よ、山よ、酒よ、水よ、とよびかけずにゐられない私。八月十日の卒倒菩薩は私から過去の暗影を払拭してくれた、さびしがり、臆病、はにかみ、焦燥、後悔、取越苦労、等々からきれいさつぱりと私を解放してくれた。……

・餓えてきた蚊がとまるより殺された・草にすわつて二人したしく煙管から煙管へ・ずうつと電信棒が青田風・ぼんやりしてそこらから秋めいた風（眼鏡を失うて）・すすき穂にでて悲しい日がまたちかづ

く・ゆう潮がこゝまでたたへてはぶ草の花・つきあたれば秋めく海でたたへてゐる　　　旅中・こんやはここで、星がちか／＼またたきだした・寝ころぶや知らない土地のゆふべの草・旅は暮れいそぐ電信棒のつく／＼ぼうし・おわかれの入日の赤いこと

　　八月廿二日　曇、だん／＼晴れて暑くなつた。

　今日も身辺整理、文債書債を果しつつ。机上の徳利に蓮芋の葉を活ける、たいへんよろしい、芋の葉と徳利と山頭火とは渾然として其中庵の調和をなしてゐる。方々から見舞状、ありがたし／＼。天たかく地ひろし、山そびえ水ながるゝ感。Ｋ店員が立ち寄つて昼寝をする。花売老人が来て縞萱を所望する、七十三才だといふ、子はないのか、孫はないのか、彼を楽隠居にしてあげたい。昨夜も今夜も少々寝苦しい、時々狭心症的な軽い発作、読書しないで思索をつゞけた。鼠だらうか——鼠はゐない筈だが——仏壇をがたびしあばれて、とうとう観音像をひつくりかへした、鼠とすれば——油虫にはそれほどの力はないから——食べる何物もないので、腹を立てたのでもあらうか。

　・考へつづけてゐる大きな鳥が下りてきた・蟻がひつぱる大きい獲物のおもくて暑くて　　　地蔵祭・炎天のお供へものをめぐつて小供ら　　　黎々火君に、病中・はる／″＼ときて汲んでくれた水を味ふ（楠）・かなしい手紙をポストにおとす音のゆふ闇（改作）

　　八月廿三日　晴、曇つて雨の近いことを思はせる雲行き。

　いつからとなく、裏に蟇が来て住んでゐる、彼とはすぐ友達になれさうだ、私には似合の友達だ。先日から麦飯——米麦半々——にしたので腹工合が至極よろしい、ルンペンだつたために、胃袋が大きく、それを満たさないと気がすまないやうになつてゐるから、そして運動不足で、しかも運動らしい運動は出来ない肉体になつてしまつた私には、麦飯こそ適応してゐる、この意味でまた、南無麦飯菩薩である。卒倒してからころりと生活気分がかはつた、現在の私は、まじめで、あかるくて、すなほで、つつましくて、あたたかく澄んで湛へてゐる、ありがたいと思ふ。こうろぎがはつきりうたひだした。

　　　　　ぐうたら手記▫人生的芸術主義　芸術的人生主義▫俳句が、ぐ

つとつかんでぱつとはなつことを特色とするならば、短歌は、ぢつとおさへてしぼりだすことを特色とするだらう。

八月廿四日　朝は曇つて厄日前の空模様だつたが、おひ／＼晴れた。

早起、といふよりも寝なかつた。出来るだけ簡素に――生活も情意もすべて。まだ身辺整理が片付かない、洗濯、裁縫、書信、遺書、揮毫、等、等、等。農学校に樹明君を訪ねて、切手をハガキに代へて貰ふ。身心ゆたかにして、麦飯もうまい、うまい。畑を耕して菜を播く準備をして置く、土のよろしさと自分のよわさとを感じる。夕方、樹明君がやつてきて、佐野の親戚へお悔みに行くから、いつしよに行かうといふ、ＯＫ、駅へ行く、六時の電車が出るまでにはまだ三十分ある、Ｙ屋で一杯ひつかける、佐山では手早く用事をすまして、停留場まで戻つてくると、一時間ばかり早い、そこでまた駅前の飲食店で一本二本、小郡へ帰着したのが九時、もう一度飲むつもりで、ぶら／＼歩きまはつたが、気に入つた場所が見つからないので、けつきよく、そのまゝ別れて戻つた、めでたし、めでたし。久しぶりの酒と散歩とがぐつすり睡らせてくれた。

ぐうたら手記□過去帳――　年寄の冷水でなくして洟水。□天地荘厳経。　自然、藝術。□魚籃を失ふ釣人。　魚籃を持たない釣人。□純粋化――単純化――個性化。

八月廿五日　晴。

まだ暗いうちにサイレンが鳴つたが、はて、何だらう、――それだけ私も世を離れてゐる。けさはとても早起、夜が明けるのを待ちかねた、まるで四五才の小供のやうに。卒倒以来、心地頓に爽快、今日は特に明朗だつた。山の鴉が窓ちかくやつてきて啼きさわぐ、赤城の子守唄をおもひだせとばかりに、――じつさい、おもひだして小声でうたつた、何とセンチなオヂイサン！これは昨夜、佐山地方を逍遙して感じたのであるが――ここらあたりには時代の音は聞えるけれど、まだ／＼時代の波は押し寄せてはゐない。やつと郵便がきた、友のありがたさ、子のありがたさをしみ／″＼感じないではゐられなかつた。午後、ぼんやりしてゐるところへ、ひよつこり黎坊が来てくれた、うれ

しかつた、反古紙を探して私製はがきを窮製して方々の親しい人々へ寄書をしたりなどして、しんみりと夕方まで遊んだ。やうやく、眼鏡を買ふことが出来た、古い眼鏡は度が弱くて霞の中にゐるやうだつたが、これで夜の明けたやうに明るくなつた。このごろまた多少神経衰弱の気味、恥づべし、恥づべし。

ぐうたら手記俳句——　詩的本質　特異性　季語、季感、季題の再検討　┌季節的　┌印象的　└民族的　└現実的　観念象徴

ぐうたら手記雨はしみじみする、ことに秋の雨は。

八月廿六日　晴、残暑がなか／＼きびしい。

朝、山萩の一枝を折つてきて机上をかざつた。午前、街へ行く、払へるだけ借金を払ふ、借金は第三者には解らない重荷であるだけ、それだけ払ふてからの気持は軽くて快いものである。いよ／＼遊漁鑑札を受けた、これから山頭火の釣のはじまり／＼！アイをひつかけるか、コヒを釣りあげるか。山東菜を一畝ほど播く。しづかにして、すなほにつつましく。青唐辛の佃煮をこしらへる。去年は肺炎、今年は狭心症、来年は脳溢血か、——希くはころり往生であらんことを。午後はとても暑かつたが、米買ひに、豆腐買ひに、焼酎買ひに、街へまた出かけた。夕立がやつてきさうだつたが、すこしバラ／＼と降つたが、とうとう逃げてしまつた。どうも寝苦しい、妙な嫌な夢を見る。……

ぐうたら手記釣心、句心、酔心。「道心の中に衣食あり」頭がさがつた、恥づかしさと心強さとで汗が流れた、私の場合では道心を句心と置き換へてもよからう。惜花春起草、愛月秋眠遅、かういふ気持も悪くない。

八月廿七日　晴、秋となつた空にちぎれ雲。

天地悠久の感、事々無礙、念々微笑の境地。黙壺君からの来信、その中には友情が封じ込まれてあつた。……さつそく、湯田の温泉に遊ぶことにする。暑い、銭がある、理髪する（女がやつてくれたが、男よりも女の方がやさしくて念入で、下手上手にかゝはらない私にはう

れしかつた）、バスがゆつくりしてゐる。……温泉は熱くて豊富で、広くて、遠慮がなくて、安くて、手軽で、ほんたうによろしい。町を歩いて、嫌とも気のつくことはキヤンデー時代だといふことだ、こゝにもそこにもキヤンデー売店、そしてあの児もこの人もキヤンデーをしやぶつてゐる。買物いろ／＼、銘酒二合買うて戻ることも忘れなかつた。生ビールもうまいが、燗酒はもつと、もつとうまい。拾五銭のランチも私には御馳走だ。四時の汽車で帰庵、夕餉の支度をしてゐると、樹明君から来信、宿直ださうである、ＯＫ、待つてゐましたとばかり学校へ、——例によつて生ビールと鮭肉とを頂戴した、釣道具、餌蚯蚓などを分けて貰ふ。更けて帰庵、涼しい風が吹きぬける。

　壺の萩さく朝風が机をはらふ・藪をとほして青空が秋・風鈴しみ／″＼抱壺のおもかげ・日ざかりひなたで犬はつるんでゐる・どなたもお留守の、日向草のうつくしさ・日ざかりの牛がこんなに重い荷を　　　追加、行乞・どこで泊らう暑苦しう犬がついてくる　螢、こゝからが湯の町（街）の大橋小橋（改作）

　八月廿八日　曇、風、雨。

風がだん／＼強くなる、どこかは暴風雨だらう。夢にまで見た魚釣第一日の予定は狂つてしまつた、どこへも出かけないで読書。酒屋の小僧さんが空瓶とりにきて、小さい不快事を残していつた。風の中のきりぎりす、蝉、こほろぎがとぎれ／＼に鳴く、私もその中の一匹だらう。一日ながらへば一日の悔をます、——八月十日までの私はたしかにさういふ生活気分だつた、今日此頃の私は生活感情を新たにすることが出来た。油虫、油虫、昼も夜も、こゝにもそこにもぞろ／＼、ぞろ／＼、私は油虫を見るとぞつとする、強い油虫、そして弱い私！山羊髯がだいぶ長くなつた、ユーモアたつぷりである、これが真白になつたらよからう、今では胡麻塩、何だか卑しい。柚子を見つけて一つもぐ、香気ふくいくとして身にしみる、豆腐が欲しいな。何としづかな、おちついた日。夕焼の色が不穏だつた、厄日近しといふ天候。

・風はほしいまゝに青柿ぽとりぽとり・風がわたしを竹の葉をやすませない・立ち寄れば昼ふかくごまの花ちる・くづれる家のひそかにくづれるひぐらし（丘関）・よしきりなく釣竿二つ三つはうごく・暮

れいそぐあかるさのなかで釣れだした　　　遊園地・お猿はうららか食べるものなんぼでも（改作）・ゆふべすずしく流れてきた絵が桃太郎（丘関）・石を枕にしんじつ寝てゐる乞食・誰かきたよな声は蜂だつたか・ここにもじゆずだまの実のおもひで・こころいれかへた唐辛いろづく　庭隅の芭蕉よみがへりあたらしい葉を　誰かを待つてゐる街が灯つた

八月廿九日　曇、微雨、そして晴。

雨はしみ／″＼する、颶風がやつてこないでよかつた、どこも大したことはなかつたらしい、めでたし／＼。私自身でも釣に行くつもりだつたし、樹明君からも誘はれたので、正午のサイレンを聞いて出かける、椹野川尻の六丁といふ場所へ、そして樹明君とも出逢ふ、川は釣れないから沼へ行く、ぼつ／＼釣れる、日が傾いて今から釣れるといふ頃、私だけ先きに帰る、途中で六時のサイレンが鳴つた、帰つてすぐ料理、ゆつくりと焼酎の残りを味ひ、たらふく麦飯を食べた。釣場へ往復二里あまり、四時間あまり釣つたので、ほどよく労れて睡ることが出来た。今日の獲物（樹明君から半分は貰つたのだが）――

中鮒三つ、小鮒八つ（中鮒は刺身にし小鮒は焼く）。俳句二つ（今日は句作衝動をあまり感じなかつた）。

釣は逃避行の一種として申分ない、そして釣しつつある私は好々爺になりつつあるやうだ、ありがたい。

・なつかしい足音が秋草ふんでくる（樹明君に）・壁の穴からのぞいて蔓草　　　敬治君に三句　逢へば黙つてゐればしめやかな雑草の雨・秋めいた雨音も二人かうしてをれば　更けてかへるそのかげの涼しすぎる　　　追憶一句・お祭の甘酒のあまいことも　　　追加一句・草のあを／＼はれ／″＼として豚の仔が驚いてゐる

八月三十日　曇、晴、そしてちよつと夕立。

朝早々とＫ店員御入来、酒代請求である、財布をさかさまにしてやつと支払ふ、彼は好人物で、当代の商人としてはあまりに好人物である。昼虫のしづけさしめやかさ。米田雄郎兄の青天人読後感を書きあげて送る。親しい友へのたよりに――

……卒倒以来頓に心地明快、節酒も出来るやうになつて、といふよりも酒への執着がうすくなつて、生き方に無理がなくなつたので、身心共にやすらかです（まだ、すこやかとはいひきれませんが）、とにかく、生きられるだけは生きて、死ぬるときは死ぬるのがよいではありませんか。……

今日も午後は六丁釣場へ出かけた、先客一人、なか／＼上手に釣つてゐる、私もゆつくり構へこんだが、痔が痛むし、暑苦しいし、その上、近在の河童小僧連が押し寄せてうるさいので、早々切りあげて戻つた。

獲物は、——鮒二つ、鯊一つ、そして句二つ。

これでも私の晩酌の下物としては足りる、私の営養不足を補うて余りあるだらう。魚一皿、酒一本、それだけでまことにゆつたりとした気分である。雨の音が私を一しほ落ちつかせてくれる、雨に心をうたせてゐると何ともいへない気持になる。留守中に誰か来たやうだ、鏡が取りだしてあり、紙反古が捨てゝあり、そして障子が閉めかけてある（この障子が閉めかけてあることが、私を不快にし、その人を軽蔑せしめた！）、何とも書き残してはなかつた。鈴虫が鳴きだした、お前はつゝましい歌手だよ。

ぐうたら手記詩制作　感動——言葉——韻律。

八月三十一日　曇、微雨。

朝が待遠かつた、ぐつすり寝て眼のさめたのが早過ぎた。たよりいろ／＼、しみ／″＼ありがたし。竹の葉にばら／＼雨のよろしさ。夜具整理、女の——主婦の心持が解つた。このごろ、御飯のうつくしさ、うまさ、ありがたさ。駅のポストまで出かけた帰途で、念珠玉草を見つけて、一茎持つて戻つて、机上の徳利に※す、幼年時代の追憶が湧いた。石蕗二三株を鉢植にする、私の好きな草の一つである、私の食卓を飾つてくれるだらう。夕方になると晩酌の誘惑がくる、とう／＼こらへきれないで、なけなしの銭で焼酎一合買うてきた。……

ぐうたら手記▫考へると——　私の過去の悪行——乱酔も遊蕩も一切が現在の私を作りあげる捨石のやうなものだつた（といつた

からとて、私は過去を是認しようとするのではないが）。　第一関を衝き破らなければ第二関に到り得ないのだ、第二関を突破しなければ第三関にぶつつからないのだ。　そして、第四関、第五関、第六関、第七関、……関門はいくつでもある。　それが人生なのだ。

　　九月一日　雨。

　ひえ／″＼として、単衣一枚ではうそ寒いので襦袢をかさねた、夜は蒲団をだして着た。丸火鉢の灰の中でごそ／＼動いてゐるものがある！　よく観れば、いつぞや落ちこんだ油虫だつた、痩せて弱つてゐる、三原山の火坑に落ちて死ねない人間のやうだ、憎い油虫だけれど――私はどうしても油虫だけは嫌いだが――何だかいぢらしくて憎めなかつた。大山君を昨日から待つてゐたのだが、仕事の都合で五日の朝訪ねるといふハガキがきたので、がつかりした、五日の朝よ、早く来れ、早く五日の朝となれ。辛うじて質屋の利子を払ふ。大根一本三銭也。柚子の香気うれし。何と賑やかな虫の合奏だらう。よくない酒でも何でも泥酔するまで呷らずにはゐない私だつた、さういふ私が八月十日以後は、よい酒を微酔するだけ味へば十分足りるやうになつた、一升の酒が二合三合となつたのである、酔ひたい酒から味ふ酒へ転じたのである、しみ／″＼酒は味ふべきである。嫌な、嫌な夢を二つも続けて見た、……寝苦しかつた、……醜い自分を自分で恥ぢた。……　　　　　　　　　　　　　△　　　　　　　　　　　△　　　　　　　　　　　△今日は関東大震災の記念日である。あの日のことを考へると、自分のだらしなさがはつきり解る。……あの場合、私がほんたうにしつかりしてゐたならば、私は復活更生してゐなければならなかつたのである。あれから十三年、私はいたづらに放浪し苦悩し浮沈してゐたに過ぎないではないか。九月一日、私はこゝで、最後の正しい歩調を踏み出さなければならない。

　我昔所造諸惑業皆由無始貪瞋癡従身口意之所生一切我今皆懺悔　　　合掌

　　　　ぐうたら手記▫昼は働き夜は睡る。　これが人間の健全な情態であり、人生の幸福である。▫梅干はまことに尊いものだつた、日本人にとつては。▫西洋人は獣に近く、日本人は鳥に近い。▫酒、友、

句。□不一不二の境地、空じ空じ空じてゆく心境。□私は一心一向に一乗道に精進する、一乗道とは即ち句作道である。　　　　ぐうたら手記□句作は、私にあつては、解脱であるが、一般の句作者にあつても、その作品は解脱的でなければならないと思ふ。　　　　ぐうたら手記□私はいつも物を粗末にしないやうに心がけてゐるが、殊に、米、水、酒については細心である、それらを粗末に取扱うてゐる人々を見ると腹が立つ（立てゝはならない腹が！）。

　　九月二日　曇、そして晴。

　午後、あまり辛気くさいので出かける、ちよつと農学校に寄つて、樹明君と話したり新聞を読んだりする、それから上郷の釣場を偵察した、あまり恰好な場所でもない、水浴して帰庵、蓼数株を手折つたが、萎れて駄目だつた。野の草花はうれしいものである。夜はめづらしや、いつどこから来たのか、鼠が天井をあばれまはる、鼠もゐない草庵だつたが。今日は二百十日だつた、まことにおだやかな厄日であつた、めでたいめでたい。

　　　　　ぐうたら手記□回光返照の徳。□生死を超え好悪を絶す、善悪なく愛憎なし。　『物みな我れに可からざるなし』

　　九月三日　曇、さすがに厄日前後らしい天候。

　食べる物がなくなつた、今日は絶食して身心を浄化するつもりで、朝は梅茶三杯。前栽の萩——一昨春、黎坊とふたりで山から移植したもの——が勢よく伸びて、ぽつ／＼花をひらきはじめた、萩は好きな花、どこといつて見どころはないけれど、葉にも花にも枝ぶりにも捨てがたいもの、いや心をひかれるところがある。露草の一りん二りん、それも私の机上にはふさはしい。このごろの蚊の鋭さ、そして蝿のはかなさ。午前は郵便やさんを待ちつつ読書。午後は空腹に敗けて近在行乞、何となく左胸部が痛みだしたので、二時間あまりで止めた、米八合あまり頂戴したのはうれしい、さつそくその米を炊いて食べる、涙ぐましいほどおいしかつた、まことに一鉢千家飯、粒々辛苦実である、それを味はひつつ、感謝と反省とを新たにするところにも行乞の功徳がある（私は行乞しないでゐると、いつとなく我がまゝになる、今日しみ／″＼行乞してよかつたと思つたことである）。今日の

行乞相はすこし弱々しかつたが上々だつた、私としては満点に近かつた。ぢつと自分を省みて考へてゐると、過去がまるで遠い悪夢のやうである、明日の事は考へない、私は今日の私を生かしきればよいのである。本日の郵便物は――

　黎々火君から、十返花君から。病秋兎死君から最初の来信、それはうれしいかなしいさびしいものだつた。雄郎和尚からヱハガキと詩歌八月号。清臨句集、黎明、これは亡児記念としての句集で、用紙は大阪若狭紙、りつぱなものであるが、誤植が比較的に多いのは惜しかつた。

　夕方、庵のまはりをぶら／＼歩いてゐると、蜘蛛の囲に大きな黒い蝶々がひつかゝつて、ばた／＼あえいでゐた、よく大人も小供もかういふものを見つけると、悪戯心や惻隠心から、その蝶々を逃がしてやるものである、蝶々は助かるが蜘蛛は失望する、私はかういふ場合には傍観的態度をとる、さういふ闘争は自然だからである、蝶の不運、そして蜘蛛の好運、所詮免かれがたい万物の運命である、……しかし後刻もう一度、その蝶々に近づいて、よく見ると蜘蛛はゐない、蝶々がいたづらに苦しんでゐるのである、私は手を借してやつた、蝶はすつと逃げた、雑草の中へひそんだ、思へば運命は奇しきものである、彼女の幸福はどんなだらう。

　　　　　ぐうたら手記▫自然法爾――私が落ちつくところはやつぱりここだつた。▫身心清浄にして身心安泰なり、――これは私の実感である。

　　　×歯　　（三八九、扉の言葉）　　　　　　　（めくら滅法歯なしがむしやら）鉄鉢と魚籃と　　　（層雲へ）　　――其中日記ところどころ――　　×酔心　　（椿へ寄稿）

　　九月四日　曇、――雨となる。

　宵からぐつすり寝たので早く眼が覚めて、夜の明けるのが待ち遠しかつた、これも老人の一得一失だらう。桔梗の末花を徳利に※す、これが山桔梗だといいのだが。蓮芋を壺に活ける、これも水芋だとうれしいのだけれど。小雨がふる（まつたく秋雨だ）、今日の托鉢はダメ

かな、お客さんにあげる御飯がないのだが。火を燃やしつつ、いつでも火といふものを考へる、乞食はよく火を焚くといふ、火はありがたい、焚火はたまらなくなつかしいものだ。私には銭はなくなりがちだけれど、時間はいつもたつぷりある、両方あつては勿躰ない！すなほにつつましく、——これが、これのみが私の生き方である、生き方でなければならない。街の子が来て、なつめをもいだ。大根を播く、今日はまことに種蒔日和だ。暮近く、敬治君ひよつこり来庵、渋茶をすゝりながら暫時話す、暮れてから、誘はれて（あまり気はすゝまないが、敬治君にはすまないが）、いつしよにＦへ行つて飲む、ほどよく酔うて、更けて戻つた。「その矩を踰えない」私であつたことは何よりもうれしい、私はとうとう私自身に立ちかへることが出来たのだ、私はやうやう本然の私を取りかへしたのだ。山頭火が山頭火を祝福する！

・もう枯れる草の葉の雨となり（丘関）・萩が咲きだしてたまたま人のくる径へまで（楠）・馬糞茸も雑草の雨のしめやかな（門）　　　「死をうたふ」追加・死がちかづけばおのれの体臭（楠）

九月五日　雨——晴れてゆく。

東の空が白むのを待ちかねて起きる。今日は大山さんが来てくれる日。浴衣一枚では肌寒く、手がいつしか火鉢へいつてゐる。待つ身はつらいな、立つたり坐つたり、そこらまで出て見たり、……正午のサイレンが鳴つた、すこしいらいらしてゐるところへ、酒屋さんが酒と酢とを持つてきた、そして間もなく大山君が、家嶋さんがにこ／＼顔をあらはした、……五ヶ月ぶりだけれど、何だか遠く離れてゐたやうだつた。……豆腐はいつものやうに大山さんみづからさげてきたけれど、実は其中庵裡無一物、米も醤油も味噌も茶も何もかも無くなつてゐることをぶちまける（大山さんなればこそである）、大山さん身軽に立ちあがつてまた街へ出かける、そして米と醤油とシヨウガと瓜と茄子と海苔とを買つてきてくれた、さつそくさかもりがはじまる、うまい／＼、ありがたい／＼（家嶋さんは最初だから、多少呆れてゐるやうだつた）、酒はある、下物もある、話は話しても話しても尽きない、友情がその酒のやうにからだにしみわたり、室いつぱいにたゞよ

ふ、まつたく幸福だ。料理は文字通りの精進だつた、そしてとてもおいしかつた。雑草の中へ筵をしいて、二人寝ころんだところを家嶋さんがパチンとカメラにおさめた。家嶋さんからは、竹の葉の茶のことを教へてもらつた（笹茶と名づけたらよいと思ふ）。間もなく夕暮となる、そこらまで見送る、わかれはやつぱりかなしい、わかれてかへるさびしさ。かへつて、ざつとかたづけて、御飯を炊いて、また一本つけて、ひとりしみ／″＼人生を味ふ、そしてぐつすりとねむつた。大山さん心づくしの一瓶、それは醗酵させない葡萄液である、滋養豊富、元気回復の妙薬ださうである、この一瓶で山頭火はよみがへるだらうことに間違はない、日々好日だけれど、今日は好日の好日だつた、合掌。もう一項附記して置きたいことがある、庵としての御馳走は何もなかつたが、雑草を見て貰つたこと、一鉢千家飯を食べて貰つたことは、私としてまことにうれしいことであつたのである。

　　　　黎々火君に・月へ、縞萱の穂の伸びやう　　　澄太君に・待ちきれない雑草へあかるい雨　伸びあがつて露草咲いてゐる待つてゐる　そこまで送る夕焼ける空の晴れる・あんたがちようど岩国あたりの虫を聴きつつ寝る　　　改作・秋風の、水音の、石をみがく（丘）・機関庫のしづもれば昼虫のなく・これが山いちじくのつぶらなる実をもいではたべ（門）・風ふく草の、鳴きつのる虫の、名は知らない・つく／＼ぼうしいらだゝしいゆふべのサイレン・厄日あとさきの物みなうごく朝風

　　九月六日　晴。

　さびしいけれどしづやかで。――午後は托鉢をやめて魚釣に行く、行くことは行つたが、なか／＼釣れないし、餌もなくなつたし、労れてもゐるので、早々帰つた、そしてその雑魚を肴に昨日のおあまりを頂戴したことである。

　小鮒三つ、句二つ。

　　　　ぐうたら手記□拾ふに値するもの　行乞して、煙草がなくて、私はバツトの吸殻を拾うて喫んだ、そしてつく／″＼自分を省みたことである、私は捨てられたものを拾うて生きてゆく人間であればよい！□拒まれるに値するもの　これも行乞中に感じたことであるが、

すげなく断られるのがあたりまへだ、米でも銭でも与へられるのは、袈裟と法衣とに対してだ、私は拒まれるに相当する人間である。

九月七日　晴――曇――風。

午前中読書。午後は托鉢、嘉川を歩く、二時間余。

今日の功徳　　　米、一升三合　　銭、十四銭。

今日の行乞相もよかつた、ぢやけんに手をふる女もあれば、わざ／＼自転車から下りて下さる男もある、世はさま／″＼、人はいろ／＼である、私は寂然不動であるが。宵から寝た（石油が少ないからでもある）。

読んだものの中から（木曽節）　月の出頃と約束したに　　　　月は山端にわしやここに（伊那節）　葉むら若い衆よう来てくれた　　　　さぞや濡れつら豆の葉で

九月八日　風、風、風。

しづかに読書しつつ、敬君を待つ。ちよつと農学校へ行く、樹明君は出張不在、Oさんに、敬君来庵の約束を托言して、すぐ戻る、ついでに新聞を読ませて貰つた。新聞といふものは現代生活からは離れないものになつてゐる、それからも私は離れてしまつてゐる、時々読みたくなるのは、――機会さへあれば、読まずにはゐられないのは、あまりにあたりまへだらう。いつからとなく野鼠がやつて来てゐるらしいが、食べる物がないので、昨夜は新らしく供へた仏前のお花を食べてしまうてゐる、私は（そして仏さまも）微苦笑する外なかつた。油虫だつて同様だ、食べる物がないものだから、マツチのペーパーを舐めてゐる、それには糊の臭があるとみえて。待つても待つても、敬君は来ない、待ちくたびれて、洗濯したり、畑に肥料をやつたり。夕食後、石油がないから、蚊帳の中に寝ころんでゐると、やつと、だしぬけに、敬君来庵、酒も罐詰も来た、私一人が飲んで食べて、敬君は話しつづけて、そしてだいぶおそくなつたけれど、またいつしよにFへ、――また飲んで饒舌つて、そして休み休みいつしよに戻つて来た、ぐつすり寝た、よい睡眠だつた。

ぐうたら手記□法衣をきて釣竿をかついで出かけたら面白か

らうと樹明君がひやかしたが、私は鉄鉢を魚籃としたならばもつと面白いだらうと考へてゐる。□私の生活を語れば――

雑炊、佃煮。孤独、単純。

九月九日　雨、さすがに厄日前後で雲行不穏。

よく飲んでよく寝た朝である、お天気は悪いが、私たちは快適であつた。朝飯のうまさ、いや、朝酒のうまさ。敬君の山口行を駅まで見送つて、それから買物たくさん、――菜葉、石油、煙草、ハガキ――此金高三十四銭也。ああ、しづかだ、しづかな雨だ。午後、Ｋの店員が、酒と豆腐と小鯛とを持つてきて、手紙をさしだした、樹明君が五時頃来庵するから仕度をしておいてくれとのことである、よしきたとばかり、豆腐はヤツコに、魚は焼いて、そしてチビリ／＼やつてゐると、樹明君がすこし疲れたやうな顔をあらはした、さしつさゝれつ敬君を待つたが、とう／＼駄目だつた、そして樹明君は暮れきらないうちに帰宅した。めでたいわかれだつたけれど、少々淋しい別れでもあつた。酒が、昨日の分と今日の分とを合せて、一升ばかり残つてゐる、さてもかはればかはるものであるわい！

ぐうたら手記□独楽ではない、楽独である。

九月十日　曇、をり／＼雨、どうやら晴れさうな。

そゞろ寒い、或は読み、或は考へ、或は眺め、そして清閑を楽しむ。耳を澄ますと、どこやらで鉦たたき（？）が鳴いてゐる。晩酌をゆつくりやつてから近在散歩。苅萱を手折つてきて活ける、苅萱は好きだ。きたない、うるさい、小さな百姓家だつたけれど、朝顔の蔓を垣根に這はすことは忘れてゐない。夜が更けると雲が散つて月がさやけく照つた、虫の合唱が澄んでくる、私の心も澄んでくる。

郵便も来ない日のつくつくぼうし・風が雨となる案山子を肩に出かける・電線とほく山ふかく越えてゆく青葉・竹の葉のすなほにそよぐこゝろを見つめる　昼ふかく虫なく草の枯れやうとして・てふてふもつれつつかげひなた（楠）・風鈴しきり鳴る誰か来るやうな

九月十一日　秋晴、久しぶりの青空だつた。

あれやこれやと旅仕度をする（来月来々月の旅を予想して）、旅をおもひつつ、旅の用意をととのへることはまことに楽しいものである、他人には解らないで、自分一人の味ふ気分である。昨日漬けた菜漬のうまさ、貧しい食卓がいきいきとする。やつと郵便やさんが来てくれた、いろ／＼あつたが、とりわけてうれしかつたのは——

澄太君の手紙（切手と先日の写真とが封入してあつた）。陶房日記（著者無坪その人に会つたやうな感じ）。

ゆふべ、駅のポストまで。ちらほら彼岸花が咲きだしてゐる、なるほど彼岸が近づいてきた。百舌鳥も出てきた、彼の声もまだ鋭くない。身心おちついてほがらかである、法衣の肩に釣竿をのせても、その矛盾を感じないほどである。十四日の月がうつくしかつた、寝床でまともにその光を浴びつつ睡つた。

其中漫筆

其中一人として、漫然として考へ、漫然として書き流したものである。

人間は人間です、神様でもなければ悪魔でもありません、天にも昇れないし、地にも潜れません、天と地との間で、泣いたり笑つたりする動物です。……

九月十二日　晴、曇、仲秋、二百二十日。

いつものやうに早起きする、そしていつものやうに水を汲んだり、御飯を炊いたり、掃除したり、本を読んだり、寝たり起きたり。……大空のうつくしさよ、竹の葉を透いて見える空の青さよ、ちぎれ雲がいう／＼として遊ぶ。陶房日記を読む、その味は無坪その人の味だ。句稿整理、書かねばならない原稿を書く。——絶後蘇へる——といふ禅語がある、私の卒倒は私を復活させたのである。午後、蜆貝でも掘るつもりで川尻へ行く（魚釣しようにも鉤がないし蚯蚓も買へないから）、一時間ばかり水中にしやがんで五合ばかり掘つた、これ以上は入用がないので、土手の青草をしいて、渡場風景を眺める、ノンビリしたものである。蜆貝といふものはとても沢山あるものだと思ふ、商買人が二人、金網道具ですくうてゐたが、半日で三斗位の獲物がある

さうだ、いづれどこか貝類をめづらしがる地方へ送るのだらう、帰途、かねて見ておいたみぞはぎを持つてかへつて活ける、野の花はうつくしい。一日留守にしておいても何一つ変つてゐない、出たときのまゝである、今日は柿の葉が一枚散り込んでゐるだけ！蜆貝汁をこしらへつゝ、私は私の冷酷、いや、人間の残忍といふことを考へずにはゐられなかつた。仲秋無月ではあるまいけれど、雲が多いのは残念だ、思はず晩酌を過して、ほんたうに久しぶりに、夜の街を逍遙する、例の如くＹさんから少し借りる、あちらで一杯、こちらで一杯、涼台に腰をかけさせて貰つて与太話に興じたりする、そのうちに幸か不幸かＨ君に会ふ、Ｍ食堂へ誘はれて這入る、女給よりも刺身がうまかつた！　酔歩まんさんとして戻つたのは三時頃か、アルコールのおかげで前後不覚。……酔うても乱れない……山頭火万歳！雲がいつしかなくなつて月が冴えてゐたことは見逃さなかつた、仲秋らしい月光に照らされて、私は労れてゐたけれど幸福だつた。

　・とうふやさんの笛が、もう郵便やさんがくるころの秋草・すすきすこしほほけたる虫のしめやかな　砂掘れば水澄めばなんぼでも蜆貝　食べやうとする蜆貝みんな口あけてゐるか　秋の蚊のするどくさみしくうたれた　徳利から徳利へ秋の夜の酒を・ひとりいちにち大きい木を挽く　いつとなく手が火鉢へ蝿もきてゐる　ゆふべのそりとやつてきた犬で食べるものがない・秋雨ふけて処女をなくした顔がうたふ・何がこんなにねむらせない月夜の蕎麦の花・こゝろ澄ませばみんな鳴きかはしてゐる虫・おのれにこもればまへもうしろもまんぢゆさけ　出れば引く戻れば引く鳴子ががらがら・ひとりとひとりで虫は裏藪で鉦たたく　風が肌寒い新国道のアイスキヤンデーの旗・人のつとめは果したくらしの、いちじくたくさんならせてゐる　いちめんの稲穂波だつお祭の鐘がきこえる　厄日あとさきの雲のゆききの、塵芥をたくけむり

　　九月十三日　晴、曇、雨。

　少々頭が重い、胃も悪い、昨夜の今朝だから仕方がない、やめておくれよコツプ酒だけは、——と自分で自分にいひきかせて微苦笑する。山の先生か、山の鴉か、これも微苦笑物だ。夕立がさつときて気持を一新してくれた、涼風といふよりも冷気が身にしみる。新秋の風

物は、木も草も山も空も人もすが／＼しい。今月に入つてから初めて生魚を買ふ、雑魚十銭（先月は一度塩鱒の切身を十一銭で買つたゞけだつた）。障子をあけてはゐられないほど秋風が吹く、蓮の葉の裏返つた色にも秋の思ひが濃くゆらぐ。前のWさんから鶏頭数株を貰つてきて、前庭のこゝそこに植ゑる、こゝにも秋が色濃くあらはれるだらう。夜おそく、酔樹明君がやつてきた、煙草二三服吸うて帰つていつた、君の心持は解る、酒を飲まずにはゐられない心持、飲めば酔はずにはゐられない心持、そして酔へば乱れずにはゐない心持——その心持は解りすぎるほど解る、それだけ私は君を悲しく思ひ、みじめに感じる。有仏処勿住、無仏処走過、である、樹明君。

・わかれて遠い瞳が夜あけの明星・草ふかく韮が咲いてゐるつつましい花　植ゑるより蜂が蝶々がきてとまる花・日向ぼつこは蝿もとんぼもみんないつしよに・更けると澄みわたる月の狐鳴く・朝月あかるい水で米とぐ

九月十四日　曇、ひやゝか。

朝は大急ぎで、原稿を書きあげて、層雲社へ送つた、駅のポストまで行つた。尻からげ！　私はいつからとなく、尻からげする癖を持つやうになつた、尻をからげることはよろしい、尻をまくることはよろしくないが。曼珠沙華を机上に活ける、うつくしいことはうつくしいけれど、何だか妖婦に対してゐるやうな。午後は近郊散策、これからはぶらりぶらりとあてなく歩くのが楽しみだ。今明日は上郷八幡宮の御祭礼、明日明後日はまた中領八幡様のお祭、提灯を吊り旗をかゝげ、御馳走をこしらへ、よい着物をきて、——秋祭風景はけつかう／＼。戻ると、あけておいた障子がしめてある、さては昨夜の樹明再来だなと、はいつてみると案の定、ぐうぐう寝てゐる、昨日から御飯を食べないからと鮨をたくさん持参してゐる、私もお招伴した、暮れかけてから、おとなしく別れる。……焼酎一合と鮨六つとで腹いつぱい心いつぱいになつて、蚊帳も吊らないで眠つてしまつた、夜中に眼覚めて月を観た。食べたい時に食べ、寝たい時に寝る、これが其中庵に於ける山頭火の行持だ。

・日向はあたたかくて芋虫も散歩する・朝は露草の花のさかりで・

身にちかく鴉のなけばなんとなく・くもりしづけく柿の葉のちる音も・萩さいてではいりのみんな触れてゆく　聟をとるとて家建てるとて石を運ぶや秋　秋空ふかく爆音が、飛行機は見つからない

九月十五日　晴、まこと天高し。

身辺整理、整理しても、整理しても整理しつくせないものがある。待つともなく待つてゐたコクトオ詩抄が岔水居からやつて来た、キング九月号を連れて。午後は近郊散策。このあたりはすべてお祭である、家々人々それ／″＼にふさはしい御馳走をこしらへて食べあふ、うれしいではないか。ゆふべ何となくさびしいので街へ出かけた、山田屋でコツプ酒二杯二十銭、見切屋で古典二冊二十銭、酒は安くないが、本はあまりに安かつた。コツプ酒のおかげで、帰庵すると直ぐ極楽へ行くやうに熟睡に落ちたが、覚めて胃がよくないのは是非もない、やめておくれよコツプ酒——と、どこやらで呟く声が聞えるやうだつた。病んでもクヨ／＼しない、貧乏してもケチ／＼しない、さういふ境涯に私は入りたいのだ。

・食べるものはあるトマト畑のトマトが赤い・水のゆたかにうごめくもののかげ・空の青さが樹の青さへ石地蔵尊・秋晴れのみのむしが道のまんなかに　　　市井事をうたふ・彼氏花を持ち彼女も持つ曼珠沙華　秋の夜ふけて処女をなくした顔がうたふ（改作）・なんと大きな腹がアスフアルトの暑さ

九月十六日　朝は秋晴秋冷だつたが、それから曇。

今朝の御飯は申分のない出来だつた（目下端境期だから、米そのものはあまりよくない）、身心が落ちつくほど御飯もほどよく炊ける。もう米がなくなつたから（銭はむろん無い）、今日は托鉢しなければならないのだけれど、どうも気がすゝまない、といふ訳で、早目に昼飯をしまうて椹野川尻に魚釣と出かける、釣る人も網打つ人もずゐぶん多い、自転車がそこにもこゝにも乗り捨てゝある、私の釣は短かい、二時間ばかりで帰つて来た、運動がてらの、趣味興味以上でも以外でもないのだから。

今日の獲物は、小鮒二、小鯊五。

途中、捨猫の仔がまつはり鳴くには閉口した、私が旅しないのだつたら、連れて戻つて飼ふのだけれど。宵からぐつすりと寝た、ランプも点けなかつた。夜中に眼が覚めて、雨声虫声の階調を傾聴した。

・をさない瞳がぢつと見てゐる虫のうごかない・くもりつめたく山の鴉の出てきてさわぐ・てふてふひらひらとんできて萩の咲いてゐる・いちにち雨ふる土に種子を抱かせる

其中漫筆行乞と魚釣、鉄鉢を魚籃として。殺活一如　与奪一体。酒徳利に酒があるならば、米櫃に米があるならば。

九月十七日　雨、一日降り通した。

雨漏りはわびしいものである、秋雨はまたよく漏るものだと思ふ。夜が長くなつて日が短かくなつた、朝晩のサイレンを聞く時さう感じる。雨はほんたうに私を落ちつかせる、明日の米はないけれど、しづかに読書。終夜ほとんど不眠、夜明け前にとろ／＼とした。二十日月が明るかつた。露命をつなぐ――それで私はけつかうだ。

其中漫筆芸術は熟してくると、さびが出てくる、冴えが出てくる、凄さも出てくる、そこまでゆかなければウソだ、日本の芸術では、殊に私たちの文芸では。

九月十八日　晴。

秋空一碧、風はまさに秋風。防空演習の日。托鉢しなければならないのであるが、どうも気がすゝまない、M店でコツプ酒一杯ひつかけて、H店で稲荷鮨十ばかり借りて来て休養、読書、思索。飛行機の爆音が迫る、砲声がとゞろく、非常報知のサイレンが長う鳴る……非常時風景の一断面だ。午後、畑を耕やす、つく／″＼自分の俯甲斐なさが解る、青唐辛を採つて佃煮にする。今夜も昨夜のやうに蚊帳を吊らなかつた、肌寒い、燈火管制で点燈しない。うつくしい有明月夜だつた、狐が鳴いた。

・晴れきつて青さ防空のサイレンうなる　しきりに撃ちまくる星がぴかぴか・燈火管制の、風が出て虫が鳴きつのる　　燈火管制・まつくらやみで煮えてる音は佃煮・ぴつたりけさも明星がそこに

九月十九日　快晴。

子規忌、子規逝いてから三十四年の今日である、俳壇の推移展開を考へる。――やうやく酔心を書きあげて椿へ送つた、安心。Ｈさんからうれしい手紙が来た、般若湯代が入れてあつた、さつそく湯田へ行く、山口を歩く、飲む食べる、……友のありがたさ、湯のありがたさ、酒のありがたさ、飯のありがたさ……何もかもありがたかつた、そして買物いろいろさまざま、それを肩にして、帰途、農学校へ寄つて、今日は私が一升買つた、ちようど宿直の樹明君とＩ君と三人で畜舎の宿直室で飲んだが、ちりがうまかつた、帰庵したのは十時頃か、少々飲みすぎて苦しかつた。過ぎるは足らないよりもいけない。

・ばさりと柿の葉のしづけさ　つめたい雨のふりそゝぐ水音となり

九月二十日　曇、雨となる。

昨夜の今朝だから腹工合がよろしくない、自業自得、観念する外はない。斬れば血が出る、――涙は出なくなつても、血は出るものである、生きてゐるかぎりは、――これは昨夜、酔中下駄の緒をすげるとて足を過つて傷けたときの感想である。神湊の惣参居士が、わざ／＼私のために般若心経講義（高神覚升師）を取寄せて、送つて下さつた、感謝以上のものである。こほろぎの声がだん／＼鋭くなる。……午後、街へ出て、種物、染粉、柿渋などを買ふ。今日もＹ酒屋のＳちやんがやつてきた（昨日も留守中に来たさうである）、若い人には若い人としてのよさがある、しつかりやりたまへ。

其中漫筆　　必然性（歴史的）現

実　　文学　　可能性（社会科学的）

九月廿一日　雨、彼岸。

見わたすと、柿がだいぶ色づいた、柿がうれてくるほど秋はふかくなるのだ。秋蝿の、いや、私の神経過敏に微苦笑する。つくつくぼうしの声も弱々しくなつて、いつともなく遠ざかつてゆく。今日の買物は、――鯖一尾十銭、胡瓜一つ三銭、そして焼酎一合十銭也。今日の幸福二つ、――般若心経講義を読んだこと、晩酌がうまかつたこと。夕方、見馴れない人が来たと思つたら、国勢調査の下調査だつた、私

のやうなものでも、現代日本人の一人であるに相違ない。かまきりが、きり／″＼すが、座敷へあがつてくる、やがてこうろぎもあがつてくるだらう。

其中漫筆独酌の味。対酌の味。

母、――盗癖、――裸――梨の木。子、――一銭、――嘘――真実。田舎をまはる昔ながらの琵琶法師。村のデパート。

九月廿二日　曇。

二百三十日もまづ無事で珍重々々。百舌鳥の声が耳につくやうになつた。子供が竹刀を揮つて曼珠沙華をばさり／＼と撫斬りしてゐる、私にもさういふ追憶がある、振舞はちと残酷だけれど、彼等の心持にはほゝゑましいものがある。ゴム長靴を穿いて、バケツを提げて、豆腐買ひに出かける、自分ながら好々爺らしく感じる。今晩は晩酌なし、やりたくないのぢやない、やりたいのだけれどやれないのだ、むりにやるには及ばない。やうやく雲がきれて夕日が射してきた。

其中漫筆何をたべてもおいしく、何を為てもおもしろく、何を見てもたのしく、何を聞いてもたのしく。

九月廿三日　曇、秋冷、野分らしく吹く。

朝から寝ころんで漫読とはゼイタクな！午後は魚釣とはまたゼイタクな。小沙魚六つ、ゴリ五つ、いつものやうにあまり釣れない、あまり釣らうとも思はないが。早々帰庵して、不運な彼等を火焙りにして（私としては荼毘に附して、といつた方がよからう）、一杯やつた。今日はうれしや晩酌がある、――何と其中庵の山頭火にふさはしい幸福ではないか。それから（このそれからがちつとばかりよくなかつたが）、駅のポストまで、それからＹ屋へ、Ｍ店へ、Ｆ屋へ、等々で飲み過ぎた（つまり、多々楼君の温情を飲んだ訳である、貨幣として八十銭！）。飲み過ぎて歩けないから、無賃ホテル（駅の待合室）のベンチで休息した、戻つたのは夜明近かつた。山頭火万歳！

九月廿四日　暴風雨。

今日は彼岸の中日だが、これではお寺参りも出来まい、鐘の音はち

ぎれて鳴るが。昨日、魚釣の帰途、採つて戻つた紫苑男郎花を活ける、やつぱり秋の草花だな。午後、風雨の中をＳさん来訪、酒持参で、つゞいて樹明君来庵、豆腐と野菜と魚とを持参して、御馳走、御馳走、ちりはうまいな、ほどよく酔うて夕方解散。少々飲み過ぎ食べ過ぎたやうだ。

・風ふく萩はゆれつつ咲いて・藪風ふきつのる窓の明暗（関）・風を聴く鳴きやめない虫はゐる　雨ふるなんぼ障子をたゝいてもはゐれない虫で　　　病中　そこらまできて鉦たゝき

九月廿五日　曇、雨、晴。

ありがたや朝酒がある（昨日のおあまり）。ほろ酔の眼に、咲きこぼれた萩が殊にうつくしい。買物いろ／＼——米（これは借）、石油十銭、餅十銭、魚十銭。やうやくにして晴れた空を仰ぎ、身心のおとろへを覚えた、これでは行乞の旅も覚束ない。夕方、Ｎさんといふ青年来訪、しばらく漫談した、いつぞや酔中Ｆ喫茶店で出逢つた人である。寝苦しかつた、妙な夢を見た。

・花のこぼるゝ萩をおこしてやる・野分あしたどこかで家を建てる音・からりと晴れて韮の花にもてふてふ・歩けるだけ歩く水音の遠く近く・燃えつくしたるこゝろさびしく曼珠沙華

九月廿六日　晴、時々曇つてはしぐれる。

朝寝した、寝床から出ないうちに六時のサイレンが鳴つた。午後、近在を散歩する、三里ぐらゐは歩いたらう、途中で、軽い狭心症的発作が起つた。帰つてくると、誰やら来てゐる、昨日の中村君だ、縁側で文芸談、等々。花めうが（？）が最初の花をつけた、まことに清楚なすがたである、これをわざ／＼持つてきて植ゑてくれた黎坊に報告して喜ばせなければなるまい（一昨春）。気取るな、気構へを捨てろ！夜中、行李から冬物をとりだすとき、油虫七匹ほどたゝき殺した、そしてそれが気になつて、とりとめもない事を考へつゞけた、何といふ弱虫だ、私は油虫よりも弱い。

・咲きつづく彼岸花みんな首を斬られてゐる　うつくしい着物を干しならべ秋晴れ・百舌鳥が鋭くなつてアンテナのてつぺん・風のつめ

たくうらがへる草の葉・秋晴れて草の葉のかげ

　　九月廿七日　晴。

　朝寒、米磨ぐ水がやゝつめたく、汲みあげる水がほのかにあたゝかい。夏物をしまうて冬物をだす、といつたところでボロ二三枚だが。今日も午後は近在散策。過去をして過去を葬らしめる、――それが観念としてでなく体験としてあらはれてきた。夕方、樹明君が酒と肴とを奢ることになつて用意してゐると、敬君がまた酒と肴とを持つて来た、三人楽しく飲み且つ語る、過去の物語が賑つた、十時近くなつて快く散会、近来うれしい会合だつた、ぐつすり前後不覚の睡眠がめぐまれた。

　　　　其中漫筆□こんにやくといふもの　　　　　（豆腐に対比して）□物事をアテにすることは、あんまりよくないが、アテがなくては生活は出来ないが、アテが外れても困らない心がまへは持つてゐなければなるまい。

　　九月二十八日　まことに秋晴。

　昨夜の今朝でも身心ほがらか。油虫め、弱々しくなつてゐる、よろ／＼してゐる、見つかり次第、たゝき殺す私はじつさい暴君だ。待つているＫからの手紙が来ない、湯田行乞と心をきめて、九時頃から出かける。椹野川土手づたひにぼつり／＼と歩く、山の色も水の音もすべて秋。湯田競馬へいそぐ慾張連中がぞろ／＼。湯田行乞四時間。

　今日の功徳、　　米、一升八合　　　　　　　　銭、四十四銭　　　　　　　　句、七章

　行乞は省みて恥づかしいけれど、インチキ商買をするよりもよいと思ふ（私はインチキはやらうと思つたつてやれないけれど）。

　昼飯の代りとして、焼酎半杯、六銭　　　　　　　　焼饅頭三つ、五銭

　それから千人湯にずんぶり、あああありがたい。四時過ぎて周二居訪問、いつものやうに本を借り御馳走になる、そして句会。まことによい一夜であつた、Ｓ夫人のへだてなさ、Ｋ君の若さ、Ｈ嬢のつゝまし

さ。散会したのは十時すぎ、いつもの癖でおでんやで飲み足す（鈴木さん、すみません）、そしてもう汽車もバスもなくなつたので、駅のベンチで寝る。

　　　　其中漫談　　　　　九月廿八日の行乞中の特種――□西村のお嬢さんに句会の事を話さうと思つて立寄つたら、女中さんがあはてゝ皿に米を盛つてくれた。□大歳の或る家で、斎藤さんの宅とは知らず立つて、奥さんに名乗りをあげた。□アイスキヤンデーの店でアイスキヤンデーの青いのを一本供養してくれた。□或る結髪処で、そこにゐた老妓がつと立つてきて、十銭白銅貨を鉄鉢へ入れた。□女郎屋の老主人が間違つて五十銭銀貨をくれた、それを返すと喜んで改めて一銭銅貨二枚くれた。

　　九月廿九日　晴、いよ／＼秋。

　東の空が白むのを待つて湯田へ、朝湯はよろしいなあ、何とゆたかな温泉。バスで上郷まで、無事帰庵、帰庵して酒があることは、ほんたうにうれしい。バス風景――

　とても愉快な女中さんいやな釣人どうし

　シヨウガ四つで一銭とは！　おばあさん、すみませんね。天たかく地ひろし、秋、秋、秋。まさに萩の花ざかり。今日は郵便が来ない、Ｋからいつもくる手紙が来ないので、何となく不安な気がする。……やつと駅のポストまで出かけて、すぐ戻つた。読書三昧。

　　　　其中漫筆……おもひわずらふところさらになし。……私の山羊髯。

　・たえずゆれつつ葦の花さく・水音の流れゆく秋のいろ・青草ひろく牛をあそばせあそんでゐる・となもお留守で胡麻の実はじける・鉄鉢の秋蝿を連れあるく・秋暑い鉄鉢で、お米がいつぱい　　　おでんや・更けると食堂の、虫のなくテーブル・秋はうれしい朝の山山

　　九月三十日　日本晴、時々曇つたり降つたりしたけれど。

　身辺整理。けふも郵便が来ない、山の鴉が庵をめぐつて啼きさわぐ、何だか気になる、何となく憂鬱になる。待つもの――手紙――は

来ないで、待たない人――掛取――が来た、とかく世の中はかうしたもの！宵からグウグウ（ランプに油もないので）、夜中に眼がさめて、鼠の悪趣味――どこかをたゞかぢる音――を聞いた。

・干しならべておもひでの衣裳が赤く青く　山からけふは街の人ごみにまじらう・地べたとぶてふてふとなり秋風・誰かやつてくる足音が落葉・秋のゆふべのほどよう燃えるほのほ

　　十月一日　晴。

国勢調査日、私もその一枚に記入した。今年も余すところはもう三ヶ月。花めうがが匂ふ、白百合ほど強くなくて、まことに奥床しいかをりである。けふも鴉が身にちかく啼く。やつと郵便が来た、Ｋから手紙が来たので、ほつと安心した。払へるだけ払ひ、買へるだけ買ふ、残つたのは一銭銅貨二つ！樹明君を招待する、――ちりで一杯。

酒一升、　　壱円小鯛三尾、拾弐銭　青いものは樹明君持参豆腐三丁　　九銭

ほどよく飲んで、ほどよく酔ふたが、別れ際がちよつとあぶなかつた、桑原々々。いつのまにやらアイスキヤンデー店が焼芋屋にかはつてゐる、季節のうつりかはりがはつきり解る。今夜はぐつすり睡れた。……

・足もとからてふてふが魂のやうに　　　花めうが・夜のふかうして花のいよいよ匂ふ　藪蚊をころしまたころし曇る秋空・秋の雨ふるほんにほどよう炊けた御飯で

　　十月二日　曇、とう／＼雨。

近所の人が来て、草を刈らせてくれといふ、それほどぼうぼうたる草だつた。雨になつたので、釣はやめにして読書。昨日のおあまりを飲む、新菊はおいしいな。

・うなりつつ大きな蜂がきてもひつそり・ひなた散りそめし葉の二三枚・酔ひのさめゆく蕎麦の花しろし・柿一つ、たつた一つがまつかに熟れた・柿の葉のおちるすがたのうれしい朝夕・かまきりがすいつちよが月の寝床まで

十月三日　時雨、やつと晴れた。

裏からあたりを眺めると、もうそここゝ黄葉してゐる、柿の葉がばさり／＼と落ちる。小郡の招魂祭、ポン／＼花火が鳴る、彼等に平和あれ。畑仕事、新菊を播き添へ、山東菜を播き直す、播くといふことはうれしい。街のポストまで出かける、そして酒と肴とを送つて貰ふやうにＹ屋へ頼む。茶の花がもう咲きだしてゐる、それを鑑賞してゐて御飯の焦げるのも知らなかつた、しかし焦げた御飯は、いや焦げるまで炊きあげた御飯はおいしいものである。御飯の炊き方について道話一則――焦げた部分――犠牲となつた部分と、熟成した部分――よく炊けた部分との関係。……酒がもたらされた、鮭の罐詰も――そして私はいうぜんとして飲みはじめたのであるが、いつしかぼうぜんとして出かけた、Ｙさんからいつものやうに少し借りて、Ｆ、Ｙ、Ｎ、Ｍ、Ｋと飲み歩いた、……とう／＼駅のベンチで夜を明かしてしまつた……それでも帰ることは帰つた。久しぶりの、ほんたうに久しぶりの、小さい、小さい脱線だつた。時々は脱線すべし、ケチ／＼すべからず、クヨ／＼すべからず。

（其中漫筆）　　　続酔心泥酔の世界から微酔の境地へ

┌個性　┌特殊的　┌芸術│　│　│文芸│　│　│
短歌└社会性└普遍的　└俳句

日本詩

┌音声　┌定型言語の成分　│意想　│季題
└文字　└切字

十月四日　秋晴。

めづらしくも朝寝、寝床へ日がさしこむまで。天地一枚といふ感じ、ほんたうに好い季節である。私にだけ層雲が来ない、何となく淋しい。昨夜の今朝で、こゝろうつろのやうな。佐野の妹を訪ねようかとも思つたが、着物の質受が出来ないので果さない、床屋で気分をさつぱりさせて貰ふ。菜葉一把三銭也、新漬として毎朝の食膳をゆたかにしてくれる。暮れるころ、樹明君来庵、お土産は酒と魚と、そして原稿紙。愉快に談笑して十時頃にさよならさよなら。私がいつものや

うに飲めなくて気の毒だつた、御飯を食べてゐたから。松茸ちりが食べたいな、焼松茸は昨夜たくさん食べたけれど。——

（伊ヱ遂に開戦）・秋空たかく号外を読みあげては走る・日向あたゝかくもう死ぬる蝿となり・朝風の柿の葉のおちるかげ・月夜のみみずみんな逃げてしまつた（釣餌）・いま汲んできた水にもう柿落葉・燃えつくしたる曼珠沙華さみしく（改作）

十月五日　秋晴。

自然も人間もおだやかに。——朝酒（昨夜のおあまりで）、ゼイタクすぎる。柿をもぐ人がちらほら、Ｊさんも柿もぎにきた、そして熟柿をくれた、あゝ熟柿！　老祖母の哀しい追憶がまたよみがへつて私を涙ぐませる。まだおあまりがあつて晩酌、そしてそのまゝぐつすり。

・考へてゐる身にかく百舌鳥のするどく・太陽のぬくもりの熟柿のあまさをすゝる・てふてふたかくはとべなくなつた草の穂・昼も虫なく誰を待つともなく待つ

十月六日　晴、朝寒。

今朝もおあまりで朝酒。天いよ／＼高く地ます／＼広し。黎々火君が層雲、緑平老が大泉を送つてくれた。酒があつて飯があつて、そして寝床があつて、ああ幸福々々。

十月七日　まつたく秋日和。

朝寝、寝床の中で六時のサイレンを聴いた。今日も油虫を二匹、そしてまた二匹殺した、多分彼等は夫婦だつたらう、殺してから——殺さずにはゐられないから殺したが——気持の悪いこと。日向の縁で本を読んでゐると、うつくしいパラソルが近づいてくる、ハテナと思つてゐると、さつさうとして山口の秀子さんがあらはれた、小郡駅まで来たので、ちよつとお伺ひしたといふ、其中庵も時ならぬ色彩で飾られた、しばらく対談、友達を訪ねるといふので（その友達は農学校の先生のお嬢さんで、そしてその宅は農学校の裏にあるので）、農学校まで同道して、樹明君に案内を頼んで戻つた、道すがら、人々が驚いてゐる、何しろ私が若い美しい女性と連れ立つてゐるものだから！行

乞しなければならないのだが（もう米がないのだが）、どうしても行乞する気になれない。大根も山東菜も虫害で全滅！　ああ。秋海棠のまぼろし！　それは私の好きな草花、そして、うれしいかなしい熊本生活のおもひで。暮れてから、樹明君が学校の仕事を持つて来庵、投げ出された五十銭銀貨二枚を持つて、私は街へ出かけて買物――サケ（これはマイナスで）、トウフ、マツタケ、サカナ、シンギク、バンチヤ。うまいちりだつた、うまいさけだつた、おとなしくこゝろよく酔うて、ふたりともぐう／＼、ぐう／＼。

　　　　ミスＨ子をうたふ二句・秋草のむかうからパラソルのうつくしいいろ・秋空のあかるさに処女のうつくしさ・釣糸の張りきつて澄んで秋空（魚釣）・秋空たかくやうやく出来上つたビルデング・日まわり陽を浴びてとろとろ・近道は蓼がいちはやくもみづりて・なんでとびつくこうろぎよ・いちめんに実りたるかな瑞穂の国　しめやかにふりだして松茸のふとる雨

　　十月八日　晴。

　早起、まづ聴いたのは百舌鳥の声、視たのは蕎麦の花。朝酒、ほろり／＼と柿の葉が落ちる。とても好いお天気、ぢつとしてはゐられないので出てあるく。米は買へないから（一升三十二銭）食パンを買ふ（一斤十四銭）、そして行乞はしないのだ、こゝにも私のワガママがあるけれど、それが私のウマレツキだから、詮方もない。今日は油虫を二度とも殺しそこなつた、かうまで油虫が憎いとは情なくなる。Ｎさん来庵、恋愛談を聞かされる、かういふ話も時々は悪くない（度々では困るけれど！）。やつと番茶が買へたので、それをすゝりながら話しつゞけた。食パンが近来飲みすぎ食べすぎの胃腸をとゝのへてくれるとは。……今夜は樹明君宿直なので、六時のサイレンが鳴つてから訪ねる、いつものやうに御馳走になる、思はず飲みすぎて酔つぱらつた、まつすぐに戻ればよいのに横道にそれてしまつた、戻ることは戻つたけれど、愚劣な自分を持てあました！

　其中漫筆

　　　酔中戯作一首あなた　ドウテイわたくし　シヨヂヨよ月があかるい虫のこゑ

其中漫筆□私俳句とは――□リアリズム精神　　自由、流動、気魄。

十月九日　曇、寒い。

朝焼がうつくしかつた。昨夜の自分を反省して、仏前にお詫びした。……しつかりしろ山頭火！　あんまり下らないぞ！煩悩無尽誓願断。自覚すれば、醜悪にたへないやうな自分を見出すことはあまりにあさましい、自分のよさをも自覚しなければ嘘だ（人には誰でもよさがある、あらなければならない）。曇つて風が吹く、まさに秋風だ。断食（絶食とは意味違ふ）と読書と思索。――同一の過失を繰り返すことが情ない、酔はない時はしないこと――したくないことを酔中敢てするから嫌になる、自己統制をを」は底本では「嫌になる、自己統制を」］失ふのである、酒に即して自己を批判すれば、酒を飲んでゐるうちに酒に飲まれるのが悲しいのである。――

其中漫筆┌自己の生活認識└社会の現実認識　┌知識　└意識┌生活印象└時代感覚

十月十日　曇、やつぱり雨だつた。

ゆつくり朝寝。朝も昼も梅茶（食べたくても食べるものがない）。午後は近在行乞、五時間ばかり嘉川方面を托鉢した、お米一升七合頂戴。夕飯はまことにおいしくありがたかつた。私の好きな石蕗の花が咲きだしてゐる、さつそく折つて戻つて活けた。行乞はありがたい、私の身心を安らかにする。

・ことしもここに石蕗の花も私も　蕎麦の花も里ちかい下りとなつた

十月十一日　雨、晴れて上天気になつた。

呂竹さん来庵、文字通りの清談しばらく。上水道水源地散歩、蛇が落ちこんで泳ぎまはつてゐる、多分這ひあがることは出来まい、まいまいはいういうと泳いでゐる。帰途、捨菜を拾うてきて漬ける。ああ、塩は安い、安すぎる。あまり月がよいので、そこらまで歩いて一杯。

電信工事・秋晴の仕事がいそがしい空間　　上水道水源地・水底太陽のかゞやいて水すまし

十月十二日　晴、仲秋、月はよからう。

柿もぎにＪさんの妻君が子供を連れて、近所のおかみさんといつしよに来た。私も熟柿を食べる、うまい／＼。学校まで出かけて、新聞を読ませて貰ふ。身心何となく不調、何となく死期が遠くないやうな気がする。……此頃また、クヨ／＼ケチ／＼するやうだ。昨日も今日も御飯の出来がよろしくない、米そのものもよくないのだが、私の気分もよくないからだらう。月はよかつたが、酒のないのが、話相手のないのが物足らなかつた。寝苦しかつた。

・水はたたへて山山の倒影がまさに秋・朝早く汲みあげる水の落葉といもりと・まんまるい月がふるさとのやうな山から（旅中）・のぼる月の、竹の葉のかすかにゆらぐ

十月十三日——十一月二日

ぼうぼうたり、ばくばくたり。ひつそり生きながらへてゐて唐辛が赤い。どうにもならない私であつた。……

十一月三日

長大息。——

十一月四日

樹明来。石油がなくなつた。

十一月五日

米がなくなつた。

十一月六日

傷いた椋鳥のやうに。

十一月七日

樹明来、酒と魚とありがたし。

・ほんに秋日和の、つるんでゐる豚・焼跡に日が射してがらくた・そよぎつつ草枯れる水音

十一月八日　九日

一人、月がよかつた。茶の花が咲いてゐる、なんでかなしいのだ。熟柿を食べる。

十一月十日

病中老吟一句――

はひあるく秋蝿のわたくし

Ａさん来庵、お土産として酒肴たくさん。湯田へ連れて行つて貰つた、ほどよく酔うてＭ旅館にいつしよに泊めて貰つた。

十一月十一日　日本晴。

Ａさんの厚情に感謝しないではゐられない。山口散策。りんだう、野菊、秋草がうつくしい。夜は酒を持つて宿直室の樹明君を訪ふ。

十一月十二日　曇。

寒くなつた、草が枯れるばかり。ホントウがウソになつたり、ウソがホントウになつたり、澄んだり濁つたり。――

十一月十三日――廿一日

死なないでゐるだけだつた！

十一月廿二日　曇。

冬がいよ／＼近寄つて来た。山口句会へ。身辺整理、私は dead rock を乗り越えることが出来たゞらうか。

十一月廿三日　晴――曇。

落葉しつくした柿の木、紅葉してゐる櫨の木。父、母、祖母、姉、弟、……みんな消えてしまつた、血族はいとはしいけれど忘れがたい、肉縁はつかしいがはなれなければならない。……

十一月廿四日　曇。

しぐれ、冬らしい寒さ、火燵の仕度をする。腹いつぱい麦飯を食べた。片隅の幸福が充ち満ちてゐるではないか。Ｔさんだしぬけに来庵、酒を貰ふ、句集を買つて下さつた。街へ出かけて払へるだけ払ふ。

十一月廿五日　晴。

今日は昨日頂戴した菊正がある。敬君久しぶりに来訪、一杯ひつかけてから、ぶら／＼どろ／＼、飲んだ飲んだ、食べた食べた、そしてめでたく解散。しぐれ、しぐれにぬれてかへつてきた。

十一月廿六日　晴。

小春日和のうれしさ、湯田へ出かける。留守に敬君がやつて来たさうな、すまなかつた。

十一月廿七日――三十日

ムチヤクチヤだつた、私の自棄的身心をさらけだした。……

十二月一日　雨。

こん／＼として眠つた、眠るより外ない私だつた。

十二月二日――五日

死、それとも旅…… all or nothing

十二月六日

旅に出た、どこへ、ゆきたい方へ、ゆけるところまで。旅人山頭火、死場所をさがしつゝ私は行く！　逃避行の外の何物でもない。

第29章
其中日記　09 (新字旧仮名)

昭和十一年（句稿別冊）

七月二十二日　曇、晴、混沌として。

広島の酔を乗せて、朝の五時前に小郡へ着いた。恥知らずめ！　不良老人め！お土産の酒三升は重かつたが、酒だから苦にはならなかつた、よろ／＼して帰庵した。八ヶ月ぶりだつた、草だらけ、埃だらけ、黴だらけだつた、その中にころげこんで、睡りつゞけた。

七月廿三日　曇。

夜も昼もこん／＼睡りつゞけてゐたが、夕方ふつと眼覚めて街へ出かけた。……雨、風、泥酔、自棄。天地も荒れたが私も荒れた。……とう／＼動けなくなつて、Ｉ屋に泊つた。

七月廿四日　五日　六日

何ともいへない三日間だつた、転々してゐるうちに明けたり暮れたりした。病める樹明君を見舞ふことも出来なかつた、あゝすまない、すみません。

七月廿七日　晴。

暴風一過、けろりと凪いだ。……身心すぐれない、罰だ、当然すぎる当然だ。黎々火君来訪、ありがたかつた（心中恥づかしかつた）、おべんたうを貰つてうれしかつた。身辺整理。書かなければならない、しかし書きたくない手紙を二つ書いた。夜は自責の念にせまられて眠れなかつた。

七月廿八日　曇。

元気なし、あたりまへだ、歯痛痔痛同時に起る、あたりまへだ。身辺整理、整理、整理、整理。虫の声がしめやかに。孤独の不自然。寝床があつて、米があつて、本があつて、そして酒があるならば。——夜中に眼が覚めて、秋を感じた。

七月廿九日　晴。

ぐつすり寝たので、だいぶ身心こゝろよし。出頭没頭五十五年の悔だけが残つてゐる。身のまはり家のまはり、きたない、きたない。暑苦しい日々夜々。午後、樹明君に招かれて宿直室へ出かける、久しぶりに、ほんたうに久しぶりだつたが、かなしいかな、彼は飲めない、衰弱した様子が気の毒とも何ともいへない、すまないけれど私だけ飲んだ、駅辨も御馳走だつた。寝物語がいつまでも尽きなかつた。

孤独は求むべきものではない、求めてはならない、太陽は孤独だといつて威張る人がある、負け惜しみは止したがよい、人間は星屑のやうに在るべきものである。

七月三十日　晴。

早朝帰庵。今日も身辺整理。歯痛、樹明君の盲腸と私の歯とはおなじやうなものだ、共に役立たないもののために苦しみ悩まされる。暑い／＼。久しぶりに落ちついて晩酌、しきりにＫの事を考へた。誰もみんな幸福であれ。

邪気を吐きつくせば邪気なし、この意味で時々泥酔することは悪くない、それは大掃除みたいなものだ。彼の一生は逃避行の連続ではなかつたか！

七月三十一日　晴。

身心やうやく落ちつく。久しぶりに味噌汁をこしらへる、うまかつた。たよりいろ／＼、うれしかつた。山口へ行く、途中理髪する、気分がさつぱりした、バスに乗りおくれてガソリンカーにする、暑い暑い、青い青い、そして涼しい涼しい、愉快愉快。誰も彼もアイスキヤンデーを食べる、現代風景の一齣。湯田で一浴、ありがたいありがたい、バスで夕方帰庵。夜はまた街へ出かける、飯、酒、女——人間、動物、何が何やら解らなくなつてしまつて、Ｊさんの宿舎に泊めて貰

ふ。はじめよろしくをはりわろし——これが私にあてはまる常套文句だ。あさましい事実だ。

△味噌汁と漬物。△ルンペンの資格。

食べないでも平気でゐること。腐つたものを食べてもあたらないこと。

いひかへると

呆けた頭脳と痺れた心臓と。そして何物をも受け入れる胃腸。

八月一日　雨、後曇。

早朝帰庵。物みなよろし、悲観は禁物、在るものを観照せよ。雀、猫、犬、爺さん、蝉、蝶々、蜻蛉、いろ／＼の生きものが今日の私をおとづれた。しづかな雨、しづかな私だつた。昨夜は騒々しく今晩は悠々、そのどちらもほんたうだ。老境の眼ざめ（青春の眼ざめがあるやうに）。

　　　懺悔と告白私にはまだ懺悔が出来ない、告白は出来るけれど、——反省が足りないのである。このみちをゆく。——私一人の道だ。けはしい道だ。細い道だ。the road leads no where かも知れない。躓いても転んでも行かなければならない。私の道は一つしかない。私は私の道を行くより外ない。……………………………………

八月二日　曇。

早起、身辺整理。歯痛（苦痛は人生を味解させる）。今日も雨、しめやかな日。今日の買物は、米三升九十九銭、鯖一尾十六銭。澄太君が近著地下の水を送つてくれた、読んで何よりも羨ましいと思つたのは君のおちつきだ、そして孝行だ、地下の水一冊は澄太其人の面貌だ、君に対する尊敬と親愛とをより深くした。午後、Ｊさん来庵、さいはひ、紫蘇巻と酒とがあるから一杯さしあげる。近来めづらしい、ありがたい晩飯を食べた。こゝろしづかにしてしづみゆく、せんすべなし。すゞしくぐつすりねむる。

世の中にタダほど安いものはないといふが、或る場合にはタダほど高いものはないこともある。私には、私のやうなものには、さういふ

或る場合が稀でない。

　八月三日　曇、後雨。

　せつかくの月も管絃祭も駄目であつた。障子の目張半日。まるで梅雨のやうな土用だ。俊和尚からうれしい手紙。やつと月があらはれた、花火が見える、何となく人が恋しく過去がなつかしかつた。

　八月四日　曇、後晴。

　今日は涼しい、涼しすぎる。家の中へ紛れ込んでゐる蝉を空へ放つてやつたら、蜘蛛の囲にひつかゝつてあえない最後を遂げた（その蝉を助けないのは私の宿命観だ）。街のレコードがさかんに唄ふ、私は蚊帳の中でそれを聴いてゐる。たよりさま／″＼で、どれもありがたい、すぐかへしを書いて駅のポストへ入れる。やつと書信だけはかたづいた。蚊帳のうちで月見、私らしい贅沢。

　好意を持たれることはうれしいが、持たれすぎることは恥づかしい。買ひかぶられても見下げられても私は苦しい。

　八月五日　曇――晴。

　五時起床。桔梗が咲きつゞける、山桔梗なら一段とよからう。蜘蛛の仕事を観る。熊蝉が鳴きだした。夕立を観る。雨はしめやかでよろしいけれど、雨の漏る音はわびしいものである。焼酎二合二十四銭、揚豆腐二枚三銭。街で樹明君に邂逅、同伴して帰庵、飲むうちに、そして歩くうちにムチヤクチヤになつてしまつた。身心放下ならよいが、身心蹂躙だからよろしくない。

　八月六日　雨。

　一切空、放心無※礙の境地。すべてそらごとひがごとの世の中、友情のみはまことしんじつなり。酒をのぞいて私の肉体が存在しないやうに、矛盾を外にしては表現されない私の心であつた、ああ。乱酔、自己忘失、路傍に倒れてゐる私を深夜の夕立がたゝきつぶした、私は一切を無くした、色即是空だつた。……転身一路、たしかに私の身心は一部脱落した、へうへうたり山頭火！　ゆうゆうたり山頭火！　湛へたる水のしづかさだ！

八月七日　曇――雨。

おちついて澄む、身心かろくさわやか。

八月八日　晴れたり曇つたり、気まぐれ日和。

洗濯、何もかも洗へ。Ｉさんの宅で樹明君もいつしよになつて飲む、今夜も歩きまはつたけれど、ほろ／＼とろ／＼気分で愉快だつた、めでたし、めでたし、めでたし。Ｉさんの蚊帳で寝る。

風狂、風流、風雅。

八月九日　雨――曇。

降つた降つた、めづらしいどしやぶりだつた、その中を戻つた、はだしで、濡れるなら濡れて。内外整理。Ｋから送金、心臓がハツとした、おのづから眼が熱くなつた、感謝と慚愧とに堪へなかつた。山口へ行つて買物色々、湯田へまはつて入浴、そして快い酔を持つて帰つた。

捨身没我の風光。幸不幸は主観の産物。

八月十日　曇。

夕立のこゝろよさ。ぐつすり寝る。

八月十一日　曇、晴、また降りさうな。

米、酒、石油、木炭、醤油、煙草、――Ｋのおかげで庵中物資豊富である。――わるい親父によい息子！歯がぬけた、痛みもとれた。うれしい晩酌でありました。

八月十二日　晴。

朝月のよさ。虫干、何もかも一切の虫干。今日も夕立、夏から秋へのうつりかはり。何となく寝苦しかつた、Ｋを夢みた、彼が近々結婚するので、その式場の様子をまざ／＼と夢に見たのである。私には何も贐するものがない、ああ。

八月十三日　雨、曇。

しづかなるかな。降る、降る、降る、降る。私には飛躍はあつても漸進はありえない。夜は樹明君が宿直といふ通知があつたので、のこ／＼出かけて、とう／＼酔うて、こそ／＼泊つた。

八月十四日　晴。

眼が覚めて見廻すと、学校の宿直室に寝てゐる、樹明君の側に寝てゐる、……朝酒二杯ひつかける、朝飯をよばれて戻る。ほろよひ人生だ、へべれけ人生では困る。ロンドン日本大使館気付で、斎藤清衛さんへ、私としては長い手紙を書く、斎藤さんは歩く人だ、ほんたうに歩く人だ、遙かに旅程の平安を祈る、それにしても私は私自身が省みられる、私は歩かなくなつた、遊びまはるやうになつた、私の現在の苦悩はそこから起る。正午のサイレンを聞いてから、樹明君と約束した通り、釣竿かついで、椹野川の六丁へ出かける、君の姿が見えない、私は釣竿しか持つてゐないから何うすることも出来ない、しばらく待つことにして、水を浴びたり句を拾ふたりする、もう帰らうと思つて土手を歩いてゐると、君が自転車でやつて来た、出水が多くて釣れないといふ、そのまゝ同行して橋袂の店で一休みする、そして別れた、別れる時に君から握飯を貰つた、焼魚も買つてくれた、面白いではないか、魚は釣らないで握飯を釣つたのである、いや、魚も釣つたが焼魚を釣つたのである！　樹明君、ほんたうにありがたう、ありがたう。土手から摘んできた河原撫子を机上の壺に活ける、この花は見すぼらしいが、日本固有のよさがある、私の好きな花の一つだ。夕方、日照雨一しきり、今年はとても天候不順で、梅雨季のやうな暑中だ、身のまはり——身そのものが黴だらけになる、まつたくやりきれない。夜、くつわ虫がちよつと鳴いた。踊大皷がをちこちで鳴る、そこのお寺でも早くから鳴つてゐる、見物しようかとも思つたが、年寄のおつくうで、蚊帳の中で聴く、唄声も聞える、更けるにしたがつて音が冴えてくる、踊もはづむらしい。めづらしく半鐘が鳴りだした、警察のサイレンも、——火事らしいが見えない。いつとなく眠つてしまつた。

八月十五日　晴。

此の地方は昨日今日が盆。朝焼がうつくしかつた。身辺整理、毎日

少しづつやつてゐるが、なか／＼かたづかない。庵中閑寂、盆のたのしさもわずらはしさもない。午後、今日も夕立、蒸暑い夕立模様。駅のポストまで。——晩酌は焼酎、下物は昨日の焼鯖。

八月十六日　晴、……曇、……雨。……

秋を感じる、昨日はつくつくぼうしが最初の声を聞かせた、萩もこま／″＼と蕾をつけた。朝のこゝろよさ、しづかに考へ、書き、読む。正法眼蔵随聞記拝読。また雨、ほんたうにやりきれない。盥に雨を聴く（そこら雨漏る音がたえない）。心境廓然（先夜の放下着このかた）。午後、今日も日課のやうに駅のポストまで。涼しい夕だ、涼しすぎる、秋が来た、秋が来たのだ、あけはなつて浴衣では肌寒いほどだつた。今夜も踊大皷が聞える、踊れ踊れ、踊りたいだけ踊れ、踊れるだけ踊れ、踊れ踊れ。夜は散歩（散歩でもしなければ堪へられなくて）、そして一杯飲んで一杯食べて、おとなしく帰庵、すぐ床に入つてぐつすり睡つた、めでたし／＼。

□老いては老を楽しむ。□歯のない生活。　歯がなくなると、歯齦が役立つ、手が加勢する、人生はまことに面白い。□昨日の私、今日の私、そして明日の私、この三つの私が矛盾して私を苦悩せしめる。
その私とは誰だ。——

八月十七日

もう晴れてもよかろう、晴れていたゞきたい。……どこかそこらで、虫が断末魔の声をあげてゐる、その声は彼が末後の一句だらう、私の俳句もまたそんなものだ！今日は少々ボンヤリしてゐる、何か忘れ物でもしたやうな、物を取り落したやうな。——すなほにしてつつましく——これが私の生活態度でなければならない。一時頃、樹明君来庵（鶏肉と酒とを持つて）、間もなくＫさんも偶然来庵、鼎座して愉快に飲んだ、夕方、街まで送つて、帰途、米を買うて戻つて、炊いて食べて寝た、万歳！

ゆうぜんとして飲み、とうぜんとして酔ふ、さういふ境涯を希ふ。飲みでもしなければ一人ではゐられないし、飲めば出かけるし、出かけるとロクなことはない。ひとりでしづかにおちついてゐることは出

来ないのか、あはれな私ではある。

　八月十八日　めづらしく快晴。

　朝寒、遠く蜩のうた、身辺整理、読書。午後、街まで、徳利さげて！夕方、Ｋさんが牛肉と酒と蚊取線香とを持つて来て飲まうといふ、飲む、食べる、歩く、唄ふ、そして帰る、Ｋさんは酔ふとなか／＼片意地になる、ＳからＭへまはつたゞけでやつと連れて戻つた、大出来／＼、樹明君をよんだのに来なかつたのは残念／＼。

　物事にこだはりさへしなければおもひわずらふことはない、放下着。

　八月十九日　晴。

　昨夜の今朝の私だ、何となく身心がだるい。迎酒！　牛肉もまだ残つてゐる。ゲジゲジを見つけたのでたたき殺した、殺してから気持が悪かつた、無益の殺生とは思はないけれど、人間のエゴであることには間違ひない。今日も古悪友樹明君、新悪友Ｋ君がやつて来て、あつさり飲んだ、ヨタ話がはづんだ。あな、おもしろの浮世かな。宵寝の朝寝だつた。

　八月二十日　晴、午後曇る。

　何やかや用事が出てきて、なか／＼忙しい。駅のポストまで。トマトがとても食べきれない（私があまり食べないからでもあるが）、郵便さんにでも食べてもらはう。すなほにつつましく、今日も生きる、うれしい。待つ人来らず、待つ物受け取れない、さびしい。午後、河尻へ出かけて蜆貝を掘る、食べるだけはすぐ与へられた、ありがたい。刈萱を摘んで戻つた、これも私の好きな草である、まだ穂が出てゐないから、刈萱の風情は十分に味へないが。蜆貝汁をこしらへつつ、私は心で叫んだ、——蜆貝よ、私は今、鬼になつてゐるのだ！いつ来たのか、鼠がさわぐ、鼠は家につきものだ、寝床はあげるが食物はあげられないぞ。

　八月二十一日　半晴半曇。

　今朝は早起だつた、御飯が食べてから六時のサイレンがきこえた。

街へ出かける、買物いろ／＼、アメリカから句集代を送つて下さつた渓厳子に感謝する。来信とり／″＼すぐ返事を認めて、駅のポストへ。雑草を眺めて、そのよろしさを味ふ。午後また街へ、焼酎二合弐拾四銭、大根一本五銭、落ちついて晩酌、そして読書。

　　　　　緑平老に……出放題になりたいといふあなたが出放題になれないで、なりたくないと思ふ私がなる、とかく世の中はかうしたもので、さういふ人生もまたおもしろいではありませんか。……

　Ｋが結婚するさうな、いや、したさうな

　をべしをみなへしと咲きそろふべし

　この一句が私のせめてものハナムケに有之候、あはれといふもおろかなりけり。

　八月廿二日　曇――晴。

　蝉を捕へる小供らがしば／＼来る、庵も平和ではない、私自身もとき／″＼不安になる。……ああ、待つ身はつらいなあ！ちよつと学校に樹明君を訪ねる、昨夜また脱線したとかで浮かない顔をしてゐる、話したいことも話さないで帰る、畜舎で新聞を読ませて貰つた。今日もすなほでつゝましく。午後、Ｋさん来庵、樹明君は来てくれさうにもない、やがて予期したやうに敬君来庵、久しぶりだつた、持参の酒と魚で愉快に飲みつゝ語りつゞけた、日の暮れないうちにめでたく解散。夕暮はサビシイのでＫさんを訪ねる、ビールをよばれて戻るとそのまゝ寝てしまつた。今日の酒は愉快だつた、三人で一升、その半分位は私が飲んだらしい、ほろ／＼とろ／＼ぐう／＼だつた。

　□よい友、よい酒、――よい人生。□山口へ行くと、いつも『おもひでをあるく』といふ感がある、あの山この水、どこへ行つても青春の追憶がある。

　八月廿三日　晴。

　昨の酒が愉快だつたし、ぐつすりと安眠したので、今日は身心明朗だ。此頃よくＫやＫの婚礼の夢を見る、親心とでもいふのであらうか、――肉縁断ち難し、断ち難きが故に断たざるべからず、――あ

あ。身辺整理、やつと片付いた。午後、樹明君来庵、誘はれて椹野川へ出かける、魚は捕らないで飲み歩いた、そしてどろ／＼ぼろ／＼になつてしまつた、……それでも理髪して、道具は持つて帰つて寝床にはいつてゐたから妙だ！

　温泉といふものは有難いものである、私は入浴好きだが、温泉にはいると、身心が一新されたやうに感じる。湯田温泉を近くに持つてゐる私は幸福である。バス代が往復で十四銭（上郷まで歩いて、回数券で）、湯銭が二回で五銭（割引券を買へば）。何と安価な極楽浄土だらう。

　八月二十四日　曇。

　天も曇れば私も曇る。……当分また禁酒の事、……駄目々々。空が晴れた、私も晴れた、……風が涼しく、身も心も涼しく。……たよりいろ／＼ありがたし。山口へ行く、鈴木さんを訪ねて御馳走になる、おいしかつた、小郡まで戻つて、友沢さんを訪ね、それからまた飲んで歩いた、御苦労々々々。

　八月廿五日　晴。

　昨日の今日の私で朗らかだ、愉快々々。身心整理！秋蝉（？）が鳴く、法師蝉とは別な声。アルコールなし、おとなしくしてゐた、句なし。夕方、Ｋさん来訪、水瓜を持つて来て下さつた。裏山の観音堂はお祭とかで、近隣の人々が集つて賑やかだ。前の小父さんが草を刈つてくれた、一挙両得。

　八月廿六日　曇――雨。

　秋だ、風も雨も、私の身心もまた。落ちついて読書。午後ひよつこり黎君来訪、お土産として汽車辨当はうれしかつた、いつしよに街へ出かけて焼酎を買つて来た（蚊捕線香を買つて貰つた）、焼酎も悪くないな、心許した友達とチビリ／＼やるには。――夕方別れる、見送は許して貰ふ、汽車に間にあへばよいが、と案じてゐるところへ六時のサイレン、さつそく後を追うて駅まで行つたが見つからない、すぐ引返して寝た、よく睡れた。

　今日も前の小父さんが草を刈つてくれたのは有難かつたが、咲きそ

めた萩まで刈つてくれたには閉口した、活けることをも遠慮して、毎日毎日咲くのを眺めてゐたのに、……これが有難迷惑といふのだらうか、刈りとられた萩の枝を見ては微苦笑するより外なかつた。

八月廿七日　曇。

夢の中で執着深い自分を見出した。山から木や草を戴いて活ける。飲むか読むか、或は歩くか寝るか。……idle dreamer は一匹の蠅にもみだされる。厄日近い天候、雲の色も風の音も何となく穏かでないものがあつた。早寝、ランプもともさないで、とりとめもない事を考へつゞけてゐると、Ｎさんが来訪された、しばらく漫談。くつわ虫が水の流れるやうに鳴く、すぐそこまで来て鳴く、座敷の中へとびこんで鳴く。……

或る自殺（連作）

八月廿八日　晴、とかく曇りがち。

露草のうつくしさを机上にうつす、何と可憐な花だらう。うらさびしさ、ものかなしさ、そして退屈！つれ／″＼なるまゝに徒然草を読む。早く夕飯を食べて、新開作のＮさんを訪ねるつもりで出かけたが、途中、Ｋさんの家庭に立寄る、雑談しばらく、本を借りてそのまゝ帰つた。……夜、Ｋさんはまた来庵、無駄話一くさりで、さよなら。虫が鳴きしきり月がよかつた、だいぶ更けるまで読書した。

八月廿九日　曇、雨となる。

早起して、そして。……雨もわるくないな、しみ／″＼おちつける、屋根漏はわびしいけれど、盥の音はさびしいが。まつたく秋だ、浴衣一枚では肌寒くなつた。仏さまへ蚊とり線香！緑平老よ、あなたのたよりはほんたうにうれしかつた。酒三合三十銭、雑魚八尾十銭。ゆふぜんとして飲みだしたが、ぼうぜんとして出かけた、そしてざつぜんとして戻つた。……

自戒三則一、腹を立てないこと。一、物を粗末にしないこと。一、後悔しないこと。　いひかへると、物事にこだはらないこと。

八月卅日　曇。

少々あたまがおもい、自業自得でございます。そこらをぶら／＼歩く、蔓草のよさを観た。私としてはめづらしく二日酔気分、霧の中にゐるやうで物がぼうとしてゐる。蝉がいつとなく遠ざかつた、小鳥が出てくる、虫がやるせなく鳴く。……Ｊさんの子供が棗もぎに来た、私にもこれに似た少年の日のおもひでがある。郵便は来なかつた。生物の※拗を蟻の群に見出す。法師蝉が身近く鳴きせまる、何だか蝉も私もヤケクソになるやうな。酒屋が酒を持つて来てくれた、飲んでゐるうちにやりきれなくなる、とびだして歩く、ぼう／＼たるものがそこらいちめんにひろがつて、何もかもどろ／＼になつてしまつた。……

物そのもの

八月三十一日　晴曇。

眼が覚めたら畜舎だつた、……Ｊさんの寝床に潜り込んでゐたのだ、……急いで戻つて、水を汲む、飯を焚く、ヒヤをひつかける、……切なくて悩ましかつた。しづかな、あまりにしづかな一日、読書と反省、すなほであれ、つゝましくあれ。

九月一日　曇、——晴。

陰暦七月十五日、そして二百十日、そして関東震災記念日で酒なしデー。自分を認識しないではゐられない日だ。おとなしく、さびしく、やるせなく。——まことにおだやかな厄日、ありがたいことである。晴れてよい月夜になつた、踊大皷がはづむ、私は蚊帳の中で大平楽だつた。

□ヱゴイスト人間。　　　残忍なる、殺伐なる、狡猾なる、□買ひかぶられることは苦しい恥かしい。　見下げられることは安らかだ。　　　　over-value よりも under-value がよい。

九月二日　曇——晴。

早起、短冊を書かうとしたが書けなかつた、書きたくなかつたからである、私は我儘だ、我儘一杯だ。うたゝ寝の夢のはかなさ。長生す

れば恥多し、――今日もしみ／″＼感じた。蝉が鳴き叫ぶ、死期近い声だ。爪を切る、髭を剃る、やくざ小説を読む、――すべてが退屈と空虚とをごまかす外の何物でもない。待つともなく待つてゐる、何を待つてゐるのか、私にもはつきり解らない！今夜もよい月だつた。

□九官鳥になれ、くつわ虫になれ。　そこに安住せよ。□自己を磨く、芸を磨く。　私の場合では、酒を味ひつつ句を作ることである。

九月三日　晴――曇。

昇る陽をまともに、寝たり起きたり。やつと短冊を書きあげた、三十枚、一枚も書き損じなく、すぐ送る、ほつとした。郵便局まで出かけたついでに、シヨウチユウ一杯、ほろ／＼になつて帰る、途中少々あぶなかつた！おとなしく、また一日一夜が過ぎた。

九月四日　晴。

あまりに早起だつた、なか／＼夜が明けなかつた、年をとると、先がないので、ゆつくり睡れません！いつからともなく空の虫が地の虫になつた、いひかへると、蝉や蜻蛉が少くなつて、こほろぎなどが鳴きしきるのである、こほろぎは最も大衆的歌手だ。きたない、きたない、何もかもきたない、私自身の身心がことにきたない。味気ないな、――何に対しても興味がない――、生活意力がなくなつたのだ。六時のサイレンが鳴つてから、樹明君来庵、久しぶりである（二週間近く逢はなかつた）、飲む、食べる、しやべる、それから散歩、そして例によつて例の如し！畜舎に泊つた（蝮の暗示があつたので）、アルコール臭くて困つたとＩさんが笑ひながら言つた（朝のこと）。

虫の宿。小鳥の遊び場。

九月五日　晴。

さうらうとしてかへる。……樹明君よ、お互につつしみませう！ぼう／＼ばく／＼として今日一日は閑居した。残暑がなか／＼きびしい、朝から裸だつた、はだか、はだか、はだかなるかなである。鈴虫が数日前から前栽でチンチロリン、チンチロリン、まだまづいな。どこからか鼠がやつてきて、そこらをかぢる、がり／＼、がり／＼、彼はかぢることそのことがおもしろいらしい。

白い花（第五句集）私が求めつつある花は青い花でなく赤い花でもなくて白い花である。私が見出してゐる花は灰色の花である。

九月六日　秋晴らしく。

夜明けの虫声はしみじみとしたものだ。もう茶の木が蕾を持つてゐる。壺の薊の花――狂ひ咲――が開く。しんねりむつつりの今日だつた、さびしいな。夕の散歩、やつぱりさびしい。蚊がめつきり減つた、それだけ風が冷やかになつた。寝苦しかつた、月は風情ある夜であつたが。

私は無用人、不用人だ、いはゞ社会の疣でもあらう、冀くは毒にも薬にもならない、痛くも痒くもない存在でありたいものだ。疣であれ、瘤になつてはいけない。

九月七日　晴、まつたく秋だ。

草刈爺さんがけさもまた来てくれた、憾むらくは彼にはデリカシーがない、青紫蘇も蓮芋も何もかも刈つてしまつた、いつぞや萩の早咲を刈つてしまつたやうに。洗濯もする、すこしわびしいな。日記整理。樹明君から来信、彼は腹を立てない人だ、時々近親からは腹を立てられる人だが（酔ふとだらしがないので）。Ｎさんを訪ねる、土手の砂塵は嫌だつたが、青田風はよかつた、それから――それから――気持よく飲んで歩いて、とろ／＼ほろ／＼になつた。Ｉ屋に泊る、動けなくなつたのだ！

△酔線　　微酔線、泥酔線。

九月八日　日本晴。

早朝帰庵、やれ／＼。閑居――読書――回顧――微苦笑。秋空一碧、身はさわやかだが心はぼんやり。何とかいふ小鳥がとても悲痛な声で啼く、私の代辯ででもあるやうに。つく／″＼思ふ、私の寝床はよい寝床！

九月九日　晴――曇。

すなほにつつましく。――ほどよく飲む、ほどよく酔ふ――ほどよく生きる――それが出来ない不幸。たよりいろ／＼、ありがたい／

＼。さつそく米と酒を仕入れるべく出かける、どちらへ行かうか、山口へ行かう（平民の独り者はノンキである、キラクである、ワガママである。シアワセである）、上郷から一時の列車に乗る、山口駅前の十銭食堂で飲んで食べて四十銭、いろ／＼買物をする、三円あまり買つたら持ちきれないほどある、湯田へまはつて一浴、バスで足元のあかるいうちにめでたく帰庵。だいぶ日が短かくなつた、私にも夜も昼も長いのだが。めつきり蚊が少くなつた、虫の声が鋭くなつた、秋らしい秋になつてくる。不眠、読んだり考へたりしてゐるうちにたうとう夜が明けた、老境を感じた。

△忘れた句は逃げた魚のやうに感じる、その実その句はくだらない句なのだ、その魚がつまらない魚であるやうに。△憑かれたもの！　私もその一人らしい、酒に憑かれてゐる、句に憑かれてゐる。△かういふ生活をしてゐて、さびしくないといふのはウソだ、ウソはいひたくない、いふものではない。　笑ふものは笑へ。　おかしければ笑へ。

九月十日　曇。

二百二十日、さすがに厄日らしく時々降つたり吹いたり、雷鳴があつたり、多少不穏な空気が動かないでもなかつたが、無事だつた。番茶のうまさよ、酒もうまいが、茶にはまた茶独特のうまさがある。茶の味は私にはまだほんたうに解らないけれど。午後、街へ散歩、極上焼酎を買ふ、とても強烈でヂン以上だ。今日から湯田競馬、フアンといふよりも慾張連中が新国道を自動車で狂奔する。私はゆうぜんとして飲み、とうぜんとして酔ふ。火酒の味！樹明君から来信、今夜は宿直だから久しぶりにゆつくり飲まうといふ、暮れてから出かける、鶏肉はうまかつた、Ｉさん Ｊさんも仲間入する。ほろ／＼とろ／＼、そのまゝ泊る、昨夜ねむれなかつたので、今夜はよくねむれた。

「いかに酔ふか」も緊急事だけれど「何に酔ふか」が最初の問題だ。酒に酔ふか、よろしい、飲みなさい、恋に酔ふか、よろしい、可愛がりなさい。銭がありますか、女がゐますかよ、よろしい、よろしい。泥沼を歩きなさい、そして死んでしまへ！

九月十一日　曇。

朝飯をよばれてから帰る。雷雨、痛快だつた。ある手紙、それは予期しないではなかつたが、やつぱりかなしいさびしいものであつた。腹工合がよくない、昨夜の食べ過ぎがたゝるのである、過ぎたるは及ばざるに如かず、まつたくその通り。夜は例の如き彷徨、有金全部をはたいた、壱円三十九銭也。ぼろ／＼どろ／＼、戻つたのは夜明前だつた、こゝしばらくは謹慎の事。

山頭火を笑ふ人生の浪費者だよ。悪辣はないが愚劣はありすぎる。くよくよするな。

九月十二日　晴。

茫々漠々、空々寂々。昨夜は放楽デー、今日は放心日。朝、裏口の戸をあけると、蛇がとびだした、私も驚いたが彼も驚いたらしい。生疵が痛い、昨夜の記念だ。私の心臓はなか／＼強い（文字通りに）。夜、Ｎさん来庵、先夜の酔中散歩の事など笑し合つて笑ふ。……近頃また夢を見るやうになつた。

九月十三日　晴。

今日はまつたくぐうたら山頭火だつた。午近くＫさん来庵、焼酎を舐めながら雑談、かうして余生をむさぼることは苦しい。

九月十四日　曇、時々雨。

早起、そしてそれから。――銭がない、米もなくなつた。頼まれた短冊を書いて送るべく、学校に樹明君を訪ねて郵税を借りる、酒代を貰ふ、夕方訪ねようといふ、……飯を炊く、鰯を焼く、酒を注ぐ、……ああいそがしい。驟雨一過、自然も人間もせい／″＼した。酔境無我、万象空。曇天、憂欝、孤独、寂滅。……待つ身はつらいな、立つたり座つたり、やつと御入来、飲む、食べる、しやべる、そして歩く、ほろ／＼だ、とろ／＼だ、よろ／＼だ。とうたう畜舎の御厄介になる、いつもの通り。それにしても理髪したのは大出来、金をあまり費はなかつたのも――費はせなかつたのも、自動車を呼び寄せなかつたのも大出来だつた。

△これだけキチヨウメンであつて、そしてこれだけダラシないとは。……△在る、――こゝに在る。　存在、それが真実だ、詩だ。

九月十五日　曇。

五時過ぎには起きて新聞を読み、煙草をくゆらし戯談をいひ、そして戻つて来て、茶を沸かし御飯を食べた。やつぱり私は不死身に近い。今日明日は地下のお祭、お祭だとて私は。……おもしろい手紙をうけとつた、処女のにほひがする、何となく愉快になつた。午後、Nさん来訪、お互に無一文だからしばらく無駄話をして、さよならさよなら。柿の葉の落ちるのが目につくやうになつた。青柚子一つ、秋が匂ふ。あまつた御飯をおむすびにして焼いてをく、明日の糧です、一つ二つ三つ、四つあります。つつましく、あまりにつつましく。季節のうつりかはりが身にしみる。

固形アルコールについて味ふ酒は液体でないと困る。酔ふ酒は固形が便利だ。丸薬のやうに一粒二粒といつたやうな。酒量に応じて、その場合を考へて、一粒とか十粒とかを服用する。一粒ほろ／＼十粒どろ／＼なぞは至極面白からう。酔丹といふ名はいかが！　或は安楽丸。　×私は極楽蜻蛉だ。

九月十六日　雨、晴れる、曇る。

秋雨、しよう／＼とふる、単衣一枚では肌寒く、手水も冷たく感じられる、火鉢がなつかしくなつておのづから手をかざすほど。せつかくのお祭が雨で気の毒なと思つてゐるうちにだん／＼雲が切れて日ざしが洩れてきた、私にはお祭も（盆も正月も）ないけれど。秋風さらさらさら。待つ、待つ、待つ、――来ない、来ない、来ない。うたゝ寝していやな夢を見た、覚めてもしばらくはその情景から離れることが出来なかつた。夢は正直だ、意識しない自分をさらけだして見せてくれる、再思三省。今夜は蚊帳を吊らなかつた、胸が切なく寝苦しい一夜だつた。

△銭なしデー　いつもさうだ。△酒なしデー　しば／＼ある。△飯なしデー　とき／″＼。　そして最後に△命なしデー　さよなら！

九月十七日　秋晴。

身心すが／＼しい、澄んだ自分が出現する。身辺整理。今日も来な

い、今日も。——空腹しみ／″＼読書。ひよろ／＼（何しろ昨日の朝食べたきりだから）散歩する、ついでに学校に寄つて新聞を読んでゐたら、ひよつこり樹明君（何といふ幸福、実は遠慮して逢はないでゐたのだ！）、遠慮しないで米を貰ふ、酒と魚とを買つて貰ふ、後から来るといふので、庵中独酌、待つてゐる。酒はうまいな、飯はうまいな。三十余時間ぶりに御飯がはいつたので胃がたまげて鳴つてゐる、どうだ、うまからう。私が——歯のない私が鮹を食べる！今夜は私も樹明君もおとなしかつた、飲んで食べて、さよなら、万歳！熟睡だつた、豚のやうに。一升ぺろり、よい、よい、よいとなあ！

彼に与へた言葉私がわるくなれば君もわるくなる。君がよくなれば私もよくなる。お互によくならう。

九月十八日　晴、満洲事変記念日。

宵寝をしたのであまり早起だつた。朝空の星のうつくしさ。身心平静、秋気清澄。百舌鳥が出て来た。胃の工合がよろしくない、当然すぎる当然！昼飯を食べてから、ふと思ひ立つて湯田へ行く、椹野川を土手づたひに溯る、葦の花、瀬の音、こほろぎのうた、お地蔵さま、秋草のいろ／＼、……温泉で一浴して引き返す、往復とも歩いたが（銭がないから）、近来のよい散歩だつた。温泉はありがたし、酒と飯とがあればいよ／＼ありがたし、銭があればます／＼ありがたし。やうやく花茗荷が咲いた。蚊帳を仕舞ふ、冬物の用意はどうぢや、質受をいそがないと風邪をひくぞ！

三界万霊

九月十九日　曇。

秋風、間違なく秋風。子規忌、子規逝いて何年、年々鶏頭は赤し。花めうが匂ふ、それはあまりに独善的な。身辺整理、日記も書き改めるし、浴衣も洗濯しました。茶の木がもうかたいつぼみを持つてゐる。たよりいろ／＼、ありがたし／＼。昼飯をたべてゐるところへＮさん来訪、何もないからいつしよに近郊散策、そのまゝ別れた。二人のなまけもの！　わるくない題号だね！今日の散歩はＮさんが青唐辛を貰つてくれた、帰庵早々佃煮にしてをく。左の太腿が痛い（昨日か

ら）、そろ／＼ヤキがまはつてもいゝころだ。かへつてぼんやりしてゐると、樹明君から来信、今日は御案内があるべきだらう、云々、御案内しようにも出来ませんよといふ。酒屋が酒を持つてくる（樹明君を通してＳさんから）、樹明君が下物をぶらさげてくる。夕焼がうつくしい。三人で飲む、食べる、しやべる、——そして、それから例によつて例の如し。ほろ／＼ぼろ／＼、とろ／＼どろ／＼、おそくもどることはもどつた、感心々々、感心々々。

九月二十日　曇。

朝酒がある、あれば飲まずにはゐられない私だ。やつと来た、それを持つて街へ、昼も夜もなくなつた、彼も私もなくなつた、……一切空々寂々だつた、濡れて戻つて寝た。……

九月二十一日　晴。

自責の念にたへなかつた、何といふ弱さだらう、自分が自分を制御することが出来ないとは！終日憂欝、堪へがたいものがあつた。

九月廿二日　秋晴。

朝、眼が覚めるといつも私は思ふ、——まだ生きてゐた、——今朝もさう思つたことである。山の鴉がやつて来て啼く、私は泣けない。身心重苦しく、沈欝、堪へがたし。虚心坦懐であれ、洒々落々たれ、淡々たれ、悠々たれ。午後はあんまり気がふさぐので近郊を散歩した、米と油とを買うて戻る。樹明君は来てゐない、来てくれさうにもない、九、一九の脱線でまた戒厳令をしかれたのかもわからない。今後は誓つて、よい酒、うまい酒、恥づかしくない酒、悔ゐない酒、——澄んでおちついた酒を飲まう、飲まなければならない。肉体——顔は正直だ、昨日今日の私の顔は私の心そのままだ、何といふ険悪、自分ながら見るに忍びなかつた。酒屋の小僧さんが、私の生活を心配してくれる、心配しなくつたつてよいよ、どうにかかうにか食つてはゆけます！寒山詩を読む、我心似秋月。……散歩して少し労れたところで晩酌をやつたので、だいぶ身心くつろいでゐるところへ、Ｋさん来訪、つゞいてＮさん来訪、四方山話でのんびりした。別れてから、Ｎさんがしんせつにも持つてきて貸して下さつた婦人公論を読み散ら

して夜を更かした。

九月廿三日　晴、彼岸中日。

日本晴、ピクニツク日和、まさに人生行楽の秋。朝霧のすが／＼しさ、朝の水を汲みあげると清新そのものだ。

来るか来るかと燗して待てばあなた来ないで酒は無くなる待つても待つても来てくれない曼珠沙華が赤い

此二章を樹明君にあげる。秋空一碧、一片の雲なし、私もあんなでありたい。地虫しきりに鳴く、私もあんなにうたひたい。自己を知れ、此一句に私の一切は尽きる。大毎記者Ｍさん来庵、ざつくばらんに話す、私のやうなものの言動が記事の一つとして役立てば、それもよからうではないか。午後は散歩、ついでに入浴。矢足は椿が多い、椿の里といつてもよからう（柿の里といつてもよいやうに）、今日もおばあさんとむすめさんとがその実をもいでゐる、絞つて油をとるために、——好ましい田園風景の一齣。何よりも私は自制力が欲しい。夜はやりきれなくて街へ出かけて飲んだ、泥酔した、あさましい事実だ！

私に出来ることは二つ、たつた二つしかない——　酒を飲むこと。　句を作ること。願はくは、　わるくない酒を飲むこと。　よい句を作ること。そしてその二つを育むものとして——　歩くこと。読むこと。

九月廿四日　秋晴。

弱者の悪、痴人の醜を痛感する。思索、批判、統制が足らない、厚顔無恥、そして無能無力だ！終日怏々。愛想が尽きたか！　未練はないか！甘えるなかれ、甘やかすなかれ。濁貧！　矛盾地獄！　孤独餓鬼！流れるままに流れろ、なるやうになれ。空は高い、私は弱い！死ぬるまで生きてをれ！現実の夢か、夢の現実か。苦悩は踊る！

△反省、それは弱者の唯一の武器だ。△太陽を仰いで孤独を味ふ。△愚人、悪人、小人、狂人、——私はそのいづれぞ。　私は私の愚を守らう、守りたい。△疣、瘤、癌。　どうか社会の疣でとどまりたい、瘤になつては困る、癌にはなれまい。

九月廿五日　晴――曇。

身心だいぶ落ちつく。わがこゝろ水の如かれ、わがこゝろ空の如かれ。午前、大毎のＭさんが写真師を連れて来訪、私と庵とを写した、私といふ人間はつまらないが、萩にすすきの草屋はつまらなくはない。庵中独坐。曼珠沙華の花さかり、とても美しいが、その妖艶は強すぎる。悔恨、更生、精進。……さびしけりやうたへ。夜更けて、樹明君が酔つぱらつて転げこんだ、そして寝てしまつた、酔態あさましいものであつたが、人事ぢやない、それはまた私の姿でもあるのだ。頭部に腫物が出来て気分がすぐれない、しかし軽い疾病は現在の私にはむしろうれしいものだ。落ちついて睡れなかつた。夜明けの雨となつた。

生死も真実、煩悩も真実、苦難も真実、弱さも醜さも愚かさも真実だ。生々死々、去々来々。矛盾そのままの調和、それが本当である、人生も自然のやうに。観照自得の境地。割り切れない、割り切らうとあせらない心境逍遙。放下着――無一物――一切空。

九月廿六日　曇、――雨。

樹明君ぼうぜん、私はせいぜんとして。酔中の自己について語り合ふ、そして笑ひ合ふ。雨しとしと、その音は私をおちつかせる、風さうさう、その声もおちつかせる。身辺整理。茶の花が咲いてゐた（此木には気がつかないでゐた、ずゐぶん早咲である）、好きな花だ、さつそく活けて飽かず観る、純日本的のよさがある。夕暮出かける、豆腐買ひに酒買ひに、地下足袋穿いて傘さして。Ｎさん来庵、いつしよにほどよく飲んで食べて、それから歩く、ほどよく酔うて別れた、めでたしめでたし。酒はありがたい、おかげで今夜はぐつすりと寝た。日が短かくなつた、雨が――何物へもしみいるやうな、しみとほらないではやまないやうな雨が降りだした。

　　　或るおだやかな夜の自問自答「酔ひましたね」「酔ひました」「歩きませうか」「歩きませう」「飲みませうか」「飲みませう」「面白いですな」「面白いですね」「帰りませうか」「帰りませう」「休みませうか」「休みませう」「さよなら」「さよなら」

九月廿七日　雨――晴。

未明に起きてごそごそ。――夜が長い、ああ長い。肌寒を感じる、冬物の御用意はいかゞ！Ｋよ、ありがたう、おめでたう、私のさびしさかなしさはわかるまい、わからない方がよい。Ｋさん来庵。午後出かける（これは当然必然だ）、そして例の通り、払へるだけ払つた気持はよいな、酔つぱらつた気持もわるくない。夕方帰つて見ると、盃せん浪藉、ＫさんとＪさんとがやつてきて、飲んで、そして出かけたらしい。うたゝねしてゐるところへ樹明君来訪、二人の酔漢がそのまゝ寝てしまつた。天下泰平、往生安楽国、ムニヤムニヤアーメン。

▵愚劣なる存在の一個――山頭火！▵相手のないカンシヤク。▵我れ観音とならん、いや我れは観音なり、といふくらゐの自信、いや、自惚があつてほしい。▵物そのものを生かすこと。

△１＋１＝２ １÷１＝Ｘ　人生とはかういふものか　１－１＝０ １×１＝Ｘ

▵言葉の味　　貧乏、銭なし、無一文、等々。▵後悔しない私になりたい。

九月廿八日　晴。

樹明君悄然として出勤する、人間樹明のしほらしさは見るに忍びなかつた。朝酒！　幸か不幸か、どちらでも構はない。嫌な手紙を書いた、書きたくないけれど書かなければならなかつた、それを持つて駅のポストへ出かけて、そしてふら／＼飲み歩いた（といつてもフトコロはヒンヂヤクだつた）、ぼろ／＼になつた、とう／＼また畜舎の御厄介になつた。……

九月廿九日　秋晴。

早朝帰庵。その日が来た、と思ふ。ＮさんがＦさんと同道して来庵、私のことが記事として載つてゐる福日紙を持つて（先日のＭさんが書いたのだ）、同道して散歩、たいへん労れて戻る。魚眠洞君の手紙はうれしかつた。Ｋから新婚写真を送つてきた、それはもとより私を喜ばしたが、同時に私を憂欝にした（一昨日の結婚挨拶状と同様に）、親として父として人間として、私は屑の屑、下々の下だ！昨日

も今日も酒があり肴がある。月のよろしさ。いつまでも睡れなかつた。

芭蕉……感傷　　富士川の渡。　　市振の宿。蕪村……貧乏　　悪妻。一茶……執着　　大福帳。

九月三十日　晴——曇。

仲秋無月。肌寒く百舌鳥鋭し。沈静、読書、観賞。——昼食前に樹明君が来て、山口へ出張するから同伴しようといふ、一も二もなく出かける。湯田温泉はいつでもうれしい、あてもなく歩きまはつて句を拾ふ。そしていつしよに帰るべくバスに乗つたが、私だけはいつもの癖でどろ／＼どろ／＼。……

Ｋへの手紙　　（父と子との間）

十月一日　曇。

今夜も無月か、惜しいなあ。夜明け近くなつて帰つて来た。……樹明君神妙に早起して出勤、昨夜の君はいつもと違つてよかつた。……身心すぐれず、宿酔の気味、罰だ。……たよりいろ／＼うれしかつた、Ｎさんからハガキを頂戴した、少女のたよりは私をまじめにしてくれる。どうかして酒から茶へ転向したい。私は飲む、浴びるほど酒を呷る、それはひつきよう空虚の苦杯なのだ。……私は泣いた、ひとり泣いた、何故の涙であるか、私自身にも解らない、私は私自身を笑つてやる、私のオイボレセンチを笑つてくれ、笑つてくれ。その日のその日がやつて来た。……終日終夜謹慎。夜ふけて雨、意識が水のやう。酒が飲みたくなくなり、飲めなくなるやうな気がする、それがウソかホントウかは時日が解いてくれるだらう。何事も自然のまゝに、自然そのものであれ。

□石の自然を愛す。□茶の清寂を愛す。□A rolling Stone□自然と自己、入我特入。

十月二日　曇——雨。

自己省察、身辺整理、清濁明暗、沈欝。油買ひに行く（酒買ひにあらず）、路傍のコスモスが美しかつた、秋も日に日に深うなる。……

よくならうとすればするほどわるくなる、といふよりも、わるくなればなるほどよくならうとする、……真実なる矛盾である。……しばらく畑仕事をしたら、草の実がくつついた。今夜も不眠、やたらに読書した。風が出て月は見えなかつた。

　　　　ウソとホントウウソらしいウソはよい、ウソらしいホントウもよい。ホントウらしいウソはよくない。私はホントウらしいホントウをいひたい。

　十月三日　晴。

　やうやく晴れた、今夜は月があるだらう。野分らしく吹く。観月会、――其中有楽。原稿を書きつつ、自分の貧弱を痛感した。郵便が来なかつた、さびしいことの一つ。悔恨――哀愁――頽廃――虚無――そして――？アルコールのない日は、酔うてゐない私は――沈欝たへがたくなる。待つ、待つ、待つ、――先づ敬君、それから㳂水君、おくれて樹明君。よい月でありよい酒であつた、むろんよい友である。駅までいつしよに出かける。さよなら、さよなら、めでたし、めでたし。

　十月四日　秋晴。

　昨日の今日でよい日だ。日が照る、百舌鳥が啼く、萩がこぼれる、ほどよい風が吹く、……其中一人にして幸福だ。胡瓜を食べる、うまい／＼。わが心、水の如し！貧乏有閑、呵々大笑！待つてゐた敬君が午後来訪、よい酒を飲んでバスまで見送る。それから飲み歩いてぼろ／＼どろ／＼。ぐつすり睡れた、アルコール様々だ。留守にＮさんが来て、御馳走になりました、と書き残してある。

　灯取虫よ。お前の最後は気の毒だつた、追うても払うてもお前はランプにぶつかつて、とうたう焼かれてしまつた。火を慕うて火で死ぬるのがお前の性だ、「汝の性のつたなきを泣け」といふより外ないではないか。灯取虫よ。お前はお前の性に随順して亡んだ。成仏うたがひなし、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

　十月五日　曇。

　沈欝たへがたし、昨夜の今朝だからいたしかたなし。その日のその

日のその日がやつてきた！　やつてきた！茫々漠々、空々寂々、死か狂か、死にそこないの、この心を誰が知る！夕方、酒が持ち来された、ほどなく樹明君来訪、しんみり飲んで別れた、よかつたよかつた。やすらかな眠をめぐまれた。

（五日）・かさりこそりと虫だつたか

十月六日　晴――曇。

朝寝、沈静。自己を清算せよ、過去を放下せよ、――それが、それのみが私の生きて行く道である。緑平老からの手紙はなつかしかつた、うれしかつた。ぼんやり縁に坐つてゐる、――蝶がとぶ、とんぼがからむ、蜂がなく、虫がなく、木の葉がちる、小鳥がちらつく、――私の沈んだ情熱がそこらいちめんにひろがつてゆく。――雑魚のうまさ、雑草のうつくしいやうに。よい酒よい飯をいたゞいた。柿落葉の風情。昨日も今日もたゞつつましく。

（六日）・おのれにこもる木の実うれてくる・木の葉ひかる雲が秋になりきつた・ゆふ闇はたへがたうして蕎麦の花・明日のあてはない松虫鈴虫・ゆふ焼のうつくしくおもふことなく・秋の夜の鐘のいつまでも鳴る・陽だまりを虫がころげる・青空のした播いて芽生えた・たゞに鳴きしきる虫の一ぴき

十月七日　曇、――晴。

早起して身辺整理。寒くなつた、冬物の用意をしなければならなくなつた。ほうれん草を播く、大根がもう芽生えてゐる、生れるもの、伸びるもののすがたはうれしい。午後、四日ぶりに街へ、石油買うて、一杯ひつかけて、雑魚をさげて戻る。暮方近くＮさん来庵、職を持たない人の不安と弛緩とがよく解る。夜は婦人公論を読む、二・二六事件の記録が胸深く徹えた、そこには頭の下る純真があつたのだ。今夜も不眠だ、呪ふべき私自身をあはれむ。

（七日）・くもりおもたい木魚をたたく・草刈るや草の実だらけ・落葉するする柿の赤うなる・ぶらぶら熟柿の夕焼・ばさりと落ちて死ぬる虫・更けるほどに月の木の葉のふりしきる

□よい酒を飲めるやうになる自信はないけれど、よい句は出来ない

こともあるまいといふ自惚は持つてゐる。□自分の句について考へる—— 私は私をうたふ、自然をうたふ。 人間性をうたひ、自然の調和をうたふ。 人間に眼醒めしめ、自然を味はせたいのである。□人間としての樹明について考へる—— 彼は文芸を解し、酒を解してゐる、それだけで幸福であり、不幸でもある。□幸福と不幸とは垣一重である。 神と悪魔とは裏表だ。 地獄の底が極楽。

十月八日　晴——曇。

朝寒、火鉢がこひしくなつた、朝月もつめたさうだ、まともに朝日があたたかく、百舌鳥の声が澄んできた。自己省察、その一つとして、——こんどの旅は下らないものであつたが、よい句は出来なかつたけれど、句境の打開はあると思ふ、生れて出たからには、生きてゐるかぎりは、私も私としての仕事をしなければならない、よい句、ほんたうの句、山頭火の句を作り出さなければならないと思ふ、私は近来、創作的昂奮を感じてゐる、私にもまだこれだけの芸術的情熱があるとは私自身も知らなかつた、——私は幸にして辛うじて、春の泥沼から秋の山裾へ這ひあがることができたのである。シロがやつてきてうろ／＼してゐる、彼もまた不幸な犬だ、鈍にして怯なること私に似てゐる。午後、ともすれば滅入りこむ気分をひきたてて、秋晴三里の郊外を歩いて山口へ出かける、椹野川風景も悪くない、葦がよい、花も葉も、——いろ／＼買物をして、湯田で一浴して帰つた、机上のノートに書き残して置いやうに、間違なく暮れる前に！帰ると直ぐ水を汲む、米を磨ぐ、お菜を煮る、いやはや独り者は忙しいことだ。ゆつくりと晩飯、おいしいな、ちよいと一杯ほしいな。留守中誰も来なかつたらしい。ほんたうに好い季節だ、もつたいないほどの秋日和だ。意識が冴えて剃刀のやうだ、そして睡れない、この矛盾が私を苦悩せしめる、ホンモノでないからだ。古雑誌を読む、芥川龍之介の自殺について小穴隆一が書いてゐる、考へさせられる問題だ、古くして新らしい問題だ、それは人間そのものの問題だ。今日の幸福は千人風呂にはいつて、そして一杯ひつかけたことであつた、うれしくもあり、さびしくもあつた。

今日の買物——一金六銭　揚豆腐二つ　　一金六銭　　野菜種子一金弐銭　葱一束　　　　一金三十銭　番茶半斤一金九銭　味噌

百目　　　一金五銭　　古雑誌一冊　　　外に一金五銭　　入浴料一金弐十銭　酒二杯一金十銭　　バス代（湯田まで歩いて、また上郷から歩く）

やつぱり酒がいちばん高い、酒を飲まないと苦労はないのだけれど、しかし、たのしみもないわけだ。

□自己の単純化。　何よりも簡素な生活。□今日の太陽！□自画像　句集の題名として悪くないと思ふ、平凡なだけ嫌味はない、私の句集にはふさわしいであらう。□秋の山、秋の雲、秋の風、秋の水、秋の草――秋の姿が表現する秋の心。　松茸よ。　秋を吸ふ、食べる、飲む。　秋を味ふ、秋の心に融ける。

（八日）・晴れきつて大根二葉のよろこび・柿の葉のちる萩のこぼるること・秋晴の馬を叱りつ耕しつ・蕗の古葉のいちはやくやぶれた・月夜ゆつくり尿する・播かれて種子の土におちつく・風が枯葉を私もねむれない　　　（山口吟行）・細い手の触れては機械ようまはる（工場）・秋草のうへでをなごで昼寝で・秋風の馬がうまさうに食べてゐる・とんぼうとまるや秋暑い土・みのむしぶらりとさがつたところ秋の風・お父さんお母さん秋が晴れました（ピクニツク）

十月九日　晴。

身心やうやくにして本来の面目にたちかへつたらしい、おちつけたことは何よりうれしい。午前、鉄道便で小さい荷物がきた、黙壺君からの贈物であつた、福屋の佃煮、おかげで御飯をおいしくいたゞくことができる、ありがたし。秋をたたへよ、秋をうたへよ、秋風日記を書き初める。痔がよくない、昨日歩いたからだらう、痛むほどではないけれど、気持が悪い。昼飯は久しぶりにうまい味噌汁。何といふしづかさ、純愛の手紙といふのを読む、彼の純な心情にうたれる。午後は畑仕事、蕪、大根、新菊などゝ播くものが多い。夕方出かけて一杯ひつかける。夕餉するとて涙ぽろ／＼、何の涙だらう。何となく寝苦しかつた、おちついてはゐるけれど。――ぐうたら、のんべい、やくざ。……

（九日）・うれしいことでもありさうな朝日がこゝまで・はたして

うれしいことがあつたよこうろぎよ・飛行機はるかに通りすぎるこほろぎ・つめたくあはただしくてふてふ・ひつそりとおだやかな味噌汁煮える・百舌鳥もこほろぎも今日の幸福・水をわたる誰にともなくさようなら・月の澄みやうは熟柿落ちようとして・酔ひざめの風のかなしく吹きぬける（改作）

十月十日　晴――曇。

けさも朝月がよかつた。小猫でも飼はうかなど〻思ふ（犬も悪くないけれど私にはとても養ひきれない）、こんなことを考へるのは年齢のせいか、秋だからか、とにかくペツトが欲しいな。平静、しづかに読み、しづかに考へる、時々オイボレセンチを持て余す、どう扱つたらよからうか。松茸で一杯二杯三杯やりたいなあ、あの香、あの舌触、ああやりきれない！こんな句を見つけた――

老いぬれば日の永いにも涙かな　　一茶

さつそく、附きすぎる句を附ける――

夜ルも長くてまた涙する　　山頭火

同老相憐むとでもいはう。たよりいろ／＼ありがたし、それにつけても、私の方からあげなければならないたよりであげずにあるたより、たとへば秋君へのそれのやうなのがある、それを考へると胸がいたくなる、決してなほざりにしてゐるのではないが、あげられないのだ、あげたいあげたいと念じながらあげることが出来ないのだ！今日も小包、長野の北光君から、信濃の春をおもひだす、一昨日は伊豆の一郎君から小包を受取つて、今春の会合をなつかしんだが。第二日曜十月号、はつらつとしてたのもしい、音律論がまた問題になつてゐる、俳句のリズム論はずゐぶん、むつかしい問題であるが、それを理論づける人は別にある、私はそれを実行づけなければならない。とにかくぼんやりしてはゐられない、勉強することだ。心の中で或る人に詑びる、――友としてのすまなさよりも人間としての恥づかしさを私は痛感してゐます。郵便物を持つて街へ、そして米を買へるだけ買ふ、そして一杯やりたいが、今日はダメダメ！私には仏道修行はとても出来ないが（仏弟子としての面目まるつぶれだ）俳諧修行なら出来

る、現に日夜それに全身全心をうちこんでゐる、俳諧修行もまた仏道修行の一つとはいへないだらうか。何物をも粗末にしない私が、なぜ、酒を粗末にするのだらうか、つつましい私であつて、しかも私自身をないがしらに扱ふのは何故であらうか、酔中の私を考へると泣きたくなる。近隣の子供たちが林の中でばさ／＼栗の木をたたいてゐる、栗の実は拾ふべきもので、もぐものではないと思ふ。柿はもぐべきもの、たゞし熟柿は落ちる！ゆふべのしめやかさが自分について考へさせる、——愚に覚めて愚を守れ、生地で生きてゆけ、愚直でやり通せよ、愚人の書でも綴れ。——昨日今日またぬくうなつた、浴衣一枚でもよかつた。樹明君に対して何となく不安を覚える、数日前、日記と句帖とを無理借されて、其後音沙汰なしが、その一因でもあるが、酒を飲んだ君は信用出来ない、君が好人物であるだけ惜しい。
夜、枕許へこほろぎがやつてきた。……

（拾日）・郵便が来てそれから柿の葉のちるだけ・播きをへてふかぶかと呼吸する・昼ふかく落葉に落葉が落ちては・鳴いて鳴いてこほろぎの恋・何おもふともなく柿の葉のおちることしきり・ぢゆうわうにとんだりはねたり蝗の原つぱ・もろいいのちとして手のしたの虫・柚子の香のほの／＼遠い山なみ・砂ほこりもいつさいがつさい秋になつた・生きてはゐられない雲の流れゆく・明日は死屍となる爪をきる・捨てたをはりのおのれを捨てる水・眼とづれば影が影があらはれてはきえる・水音のとけてゆく水音・死へのみちは水音をさかのぼりつつ（改）

□正しく、たゞ正しく、そこから美しさも清らかさもすべて生れてくる。□古きものほど新らしきはなし、真理は平凡なり、例へば、私たちはいつでも真実でなければならない、真実に生きなければならない。　問題は真実の内容にある、真実であることに間違はないが、何が真実であるか、現代に即して自我の発露はどうすれば真実であるか。　いかに考へ、いかに行ふべきであるか。　いひかへると、真実の表現は何であるか。□托鉢して、そして仏弟子として修行しないならば、それは一種の詐偽取財だ。　行乞して、物資を費消するならば、それも一種の搾取だ。　仏家として仏道に精進しないならば、背任行為ではないか！

十月十一日　晴、空の色がはつきりしないけれど。

沈潜、自己を掘り下げることが今の私の仕事だ。Ｊさんの子供が柿もぎに来た、今年はこゝの柿はあまりなつてゐない、よそのはたくさんなつてゐるのに。今日は誰か来さうなものである、来てくれるとよいな、と思つてゐるところへ樹明君が来た、よかつた、よかつた、安心した（私の予感があたらないでもなかつたらしい、先日来、酒のために悩まされたといふ）、御飯を食べてから、君は沙魚釣に、私はポストへ。今日も品行方正！午後、Ｔ酒店の主人が空罐拾ひに来て閑談しばらく、先日の新聞記事が利いてるらしい。秋を味ふ、眼で柿を食べる。……がちやがちやがまだ鳴いてゐる、鈴虫があちらで一匹、こちらで一匹、おとなしくさびしく鳴く。どうも寝苦しい、やつと寝つくと悪夢におそはれる、詰らないことである。過去は過去、未来は未来、後悔するな、遅疑するな、現在を十分に生きろ！第一山頭火、第二山頭火、第三山頭火。——

　　　　「秋風日記」○播くもの——宮重大根、聖護院大根、ころげ蕪、新菊、ほうれん草（ワケギを植ゑる）。○秋を味ふ——酒と松茸。○風、月、草、虫。——○蚯蚓つぶやいて曰く——俺の寝床の平和をみだすのは誰だ！　こほろぎはさゝやく——こゝはわたしの産褥ですよ。　雑草曰く——もうぢき枯れるんだ。

（十日）・にぎやかに柿をもいでゐる・もがれたあとの柿の木のたそがれ・散つてゐる花のよろしさがかたすみに

　　　　作家の発展過程第一段階、芸術殿堂建設（初歩の）。第二段階、芸術の現実化。第三段階、現実の芸術化（自己創造へ）。第四段階、芸術の境地実現（究竟の）。　　　　　（自己完成）

十月十二日　曇。

日中は晴れたり曇つたり、夜に入つてしぐれる音か、落葉する音か、いづれ雨は近いだらうが、それがむしろ望ましいが、なか／＼かたい天候である。落ちついて、さうだ落ちついて、ひとりで、そしてひとりで、よろしいな。枇杷の枯枝をかたづける、この一木がことしの冬の焚付を保證してくれる、ありがたい。ゐのこつち草——ぬすと

草の実のねばりつよさよ。午後は近郊散策、私の好きな石蕗が咲いてゐた、龍膽はたづねあてなかつた、野も山もところ／″＼紅葉してゐる、百姓は田畝でいそがしく、たいがい留守であつた。山の木、野の草を活ける、楽しみはこゝにもある。自転屋の主人Ｊさん、つゞいて酒屋の主人Ｍさんがやつてきて四方山話。今日でサケナシデーが三日つゞく、飲みたいのをぐつと抑へて、――つらいね！今日はじめて熟柿を食べる（歯のない私は熟柿しか食べられない）、何といふ甘さ、それは太陽そのものの味であらう。今夜も寝苦しかつた。

……　　　　（昭和十一年十月十二日午前十時記す）――所詮、私は私の道に精進するより外はないのである、たとへ、その道は常道でなくとも、また、難道であつても、何であつても、私は私の道を行かざるを得ないのである。句作道、――この道は私の行くべき、行き得る、行かないではゐられない、唯一無二の道である。それは険しい道だ、或は寂しい道だ、だが、私は敢然として悠然として、その道に精進する。句作が私の一切となつた、私は一切を句作にぶちこむ。私は我儘である、私は幸福である、私は貧乏である、私は自由である、私は孤独である、私は純真である。私は飛躍した、溝を飛び越した、空も地もひろ／″＼として、すべてが美しい。よろこびか、かなしみか、よろこびともいへようし、かなしみともいへよう、しかし、私はそれ以上のものを感じる。――

□苦しみがなければ喜びもない、――これが人生の相場である、そして苦しみと喜びとの度合は正比例する、苦しみがはげしければはげしいほど、喜びもつよいのである。　苦しんで喜ぶか、はげしく苦しんでつよく喜ぶか、苦しまず喜ばず、無味に安んずるか、どちらでもよろしい（後者は実際がなか／＼許さない）。　苦悩悲喜を超越したところが禅門の悟だ、煩悩具足の我々であるけれど、その煩悩に囚へられないやうになるのが仏道修行である。□現象と表象。　事象（自然人生）を現象として実験し分析し研究するのは科学者、それを綜合的に表象として表現するのが芸術家だ、芸術は人を離れて、即ち作者を没しては意味をなさない。

柿の葉私の句集をかう名づけてもよからうではないか、柿の実でもない、柿の木でもない、柿の葉である。私の好きな葉である。

柿腸、柿の帶といふやうな書名は知つてゐるが。私の句集には柿の葉がふさはしい。我が心柿の葉に似たり。　　　梅干の味私は梅干の味を知つてゐる。孤独が、貧乏が、病苦が梅干を味はせる。梅干がどんなにうまいものであるか、ありがたいものであるか。病苦に悩んで、貧乏に苦しんで、そして孤独に徹する時、梅干を全身全心で十分に味ふことが出来る。

　十月十三日　晴。

　朝曇が日の昇るにつれて晴れわたつた、暑からず寒からず、ほんたう好い季節ではある。「秋ふかしよくぞ日本に生れける」我が心は秋の水の如し！朝からポンポン狼火の音、ハテ、演習かな、運動会かな。風が出て柿の葉がしきりに散る、柿の葉が散りしいてゐる風景はわるくない。生地を磨く、磨いて磨いて、底光りするまで磨く、——さういふ俳句を私は作りたい。酒乱清算の機縁が熟したと思ふ（私の場合では酒乱といふよりも酒狂といふべきだらう）。今日も午後は近郊散策、形あるものがくづれる姿を見た、……途中、シヨウチユウ半杯が腹の虫をごまかした。婦人公論を読む、なか／＼面白い、私はその実話や告白から（それが真実のものであるかぎりは）、教へられ考へさせられることが多い。「おさびしいでせう」と訪ねて来た人がしば／＼いふ、さうです、さびしくないことはない、しかしさびしい以上によいものがあります、どちらもよいことは世の中にありませんからね、私は社会の例外として存在してゐるのです、私だけにはかういふ生活態度も生活様式も自然で当然で、必然でもありますが、例外は飽くまでも例外ですよ、と私は答へる。空は高く地は広く、山も水も草も美しい、私は幸福だ、生きられるだけは生きよう。——

　火！毎朝、起きるとすぐ竈の下を焚きつける、ちろちろと燃える、燃えあがる。うつくしい、ありがたい。火の尊厳美をたたふ。

　天地悠久を感じる。自然の恩寵を感じる。万物の流転を感じる。

　感じることは事実だ。見るよりも聞くよりもたしかな事実だ。触れることがたしかな事実であるやうに。

　今日の幸福。今日の感謝。

十月十四日　快晴。

申分のない秋日和、松茸が食べたい。私が昨年来特に動揺してゐたのは、老年期に入る動揺のためであつたと思ふ、不安、焦燥、無恥、自暴自棄、虚無、——すべてがその動揺から迸つたのだらう、そしてそれに酒が拍車をかけた、私の激しい性情が色彩を濃くした、……しかしそれも過ぎてしまつた、私は今、嵐の跡に立つてゐる。たより／＼いろ／＼、緑平老は十八日に来庵してくれるといふ、待つてゐる、俊和尚は熊本から熊本の悪夢を思ひださせるやうに書いてよこす、困るね、リンゴは有一君の人間のよさをそのまゝ現はしてゐる。しづかにしてなつかしく、といつたやうな気分だ、だが、私にも私としてのなやみがありなげきがある、それがだん／＼「もののあはれ」といつたやうな情緒になりつつあるが。私は俳句に対して monomania だ、それでよろしい。Sweet solitude！それがなくてはかういふ生活はつづけられない。無理のない、こだはりのない、ゆつたりとしてすなほな身心が望ましい、欲しい。米がなくなつた（銭はもとよりない）、ハガキが百枚ばかりある、それで何とかならう。夕方やりきれなくなり、街へ出かけてハガキを酒に代へる、ハガキ酒はよかつたね、ほどよく酔うた、さるにても酒飲根性のいやしさよ。学校の給仕さんが呼びに来た、樹明君宿直といふ、さつそくまた出かける、御馳走になつてそのまま泊る、少々飲みすぎて少々あぶなく少々寝苦しかつた。

□自分の本分を知れ。　自分の塔を築きあげよ。□あたりまへのもの、すなほなもの、ありのままのもの。　さういふものを私は尊ぶ。
□孤独はうたふ。　私の俳句はさういふうたの一つ
だ。　　　　　　　×　空談閑語。

十月十五日　晴。

早起帰庵、何と好い秋日和。留守中にＮさんが来たらしい、すまなかつた。少々胃の工合がよろしくない、迎酒として昨夜の残りものを飲む、壁のつくろひはやつぱり泥だといひます！待つもの来ない、だいたい待つといふ気持がよろしくない、私にあつては。洗濯、これはあまり自慢にはならない。午後、散歩、入浴、学校に寄つて、新聞を読み米を貰うて戻る、樹明君、まことにありがたう。夜、Ｎさん来

訪、しばらく雑談。割合によく眠れた。

私の一生更年期の苦悶――老年期へ入る不安。動揺焦燥も解消した。老境。私の前半生はこゝに終つた、後半生はこれからである。山頭火の真骨頂は今後に於て発揮せられるだらう。一日一日、一句一句、一歩一歩。

十月十六日　晴、お天気がようつゞく。

このごろの飯のうまさよ、飯そのもののうまさだ。一粒の米にも千万無量の味が籠つてゐる、まことに粒々辛苦、ああ、お米のありがたさよ。何もお菜がないから、けふもシヨウユウライス！おもひがけなく、Ｓ子さんと彼女の友達とがＭ老人に案内されて来てくれた、まつたくもつて珍客来だ、おかまひは出来ないが、渋茶を飲んだり熟柿を食べたりして貰ふ、むろん雑草風景は十分に味つて貰ふ。三人打ち連れて、駅前のＨ食堂へはいる、私は酒と刺身と焼松茸とを御馳走になる（世はさかさまとなりにけりだ）、松茸は初物、おいしかつた。それからが少々いけなかつた、例の如く彷徨した、少々みだれた、……五時頃帰庵、誰か来たらしいと思つたら、Ｎさんが昨夜話しあつた約をふんで、釣つた沙魚十数尾を持参してくれたのだつた、さつそく料理して、うまい夕飯を食べた。暮れて樹明君来庵、ほろ酔機嫌でニコ／＼してゐる、今日の私の行動をもうチヤンと知つてゐる、明後日の緑平老歓迎のことを話しあつて、めでたくさよなら。Ｙ夫人の急死を聞かされたとき、私の身心はドキンとした、手当は十分行き届いたのだらうけれど、何しろ尿毒症の激発ではどうにもならなかつたらしい、ああ、ああ、Ｙ主人の悲嘆が思ひやられる、彼女は私の酔態をよく知つてくれてゐた、彼女の面影が眼前に彷彿して、無常観をそそつてたまらなくなる。……アルコールのおかげで、ぐつすり寝た、飲みすぎ食べすぎで腹工合はよくないが。事の多い、感慨の深い一日だつた。

十月十七日　晴。

神嘗祭、よい休日。おちつけ、おちつけ、おちついて、おちついて。――昨日の御飯に昨夜の沙魚、うまいうまい、Ｎさんありがたうありがたう。ちよつとそこらを散歩しても、秋の楽園。午後、ポスト

まで、大根一本三銭。刈田の蓼紅葉のうつくしさ、草紅葉は好きだ。シヨウガの風味、シソの実の風味、それも秋の風味。歩くと暑い暑い、帰るとドテラを脱いで浴衣一枚、涼しい涼しい。夕飯は茶粥、大根がうまくなつた。今夜もＮさん来庵、とりとめもない雑談しばらく。どうやら風邪をひいたらしい、胸の中が何だか変である、痛みさへしなければ、起居が不自由にさへならなければ、軽い疾病は私にとつて救ひの神だらう！

◎今日の太陽最も古くして、そして、最も新らしいもの。私の幸福は昨日の太陽ではなく、また、明日の太陽でもない。私の句集の題名にしたい。　　　◎道中記北陸道中記、東海道中記春の道中記、夏の道中記

十月十八日　曇。

野分、裏藪が騒々しい。眼が覚めると寝てはゐられなかつた、今日はうれしい日だ、緑平老が訪ねて来てくれる日だ！お茶が沸いて御飯が炊けて、何もかも済んでもまだ夜は明けきらなかつた、ずゐぶん早起きしたものだ。石蕗を活け代へる、いゝなあ。ちよいと学校まで、樹明君に逢ひ、新聞（昨日の分、今日は休刊）を読み、そして一先づ帰庵。駅へ出迎へる扮装といつぱ――地下足袋で尻からげ、ヘルメツトにステツキ、まさに田舎の好々爺で、典型的庵主様だらう！緑平老は約の如く十一時の列車で御入来、駅辨と一升罎とを買つて貰ふ。よろしいな、うれしいな、飲む、食べる、饒舌る、笑ふ、とかくするうちに、樹明君もやつてくる、焼松茸、ちり、追加一升、柿、等々々。……彼が飲めば私が酔ふ、私が酔へば彼が踊る。六時の汽車へ見送る、尽きない名残がいつもの二人を彷徨させる、乱酔させる。……ダツドサンでいつしよに帰庵、そして解散。――米代も油代も炭代も煙草代もみんな飲んでしまつたが、それでよろしい、私は後悔しない！

十月十九日　曇、降りさうで、なか／＼降らない。

朝酒あり、ありがたし。昨日の今日はさびしい、そのさびしさをまぎらすために散歩、入浴、それでもまぎらしかねて、また飲みはじめる、Ａ屋、Ｙ屋、暮れてからＫさんから少々借りてＢ屋で飲む、なぐさまない、ぶら／＼かへる、そして寝る、夢中にしぐれを聴いたやう

だつたが。ハガキ酒、キツテ酒！　ヂゴク、ゴクラク！　あはれ、あはれ！Ｓ子から来信、かういふ文句を読んでゐると年甲斐もなく涙ぐましくなる、血は水よも濃く、そして切ない！

　十月二十日　晴。

　身心何となく痛い、すべて自因自果、自業自得也。この澄みやうは、――我、秋天の如く秋水に似たり、おちついてしめやかな一日だつた。柿の落葉の色彩の美しさは拾ひあげて凝視しないではゐられないほどだ。午後、Ｎさんが親切にも婦人公論十月号を持つて来てくれた。夕方、酒と雑魚と菜葉と到来、間もなく樹明君来庵、気持よく飲んで、それから散歩。Ｊさんから訴へられ叱られ責められた、一言もなし、非は私にある、今更のやうに自分の愚劣を恥ぢた。今夜の樹明君は良い方だつた（私も良かつた）。新しい下駄五十銭を樹明君が奮発してくれた、これで地下足袋を穿いてうろ／＼しないですむ。

　十月廿一日　晴、よくつゞくことだ。

　まづはめでたや。――反省、自己検討。――ほうれん草のおひたしがうまい。山野逍遙、ああ天地が美しい。終日読書。もうつくつくぼうしは鳴かなくなつたが、まだがちやがちやは鳴いてゐる、何だかそこにも私自身の陰影が残つてゐるやうな気がする。……

　十月廿三日　晴。

　風邪気分、咳が出て困る、六時のサイレンが鳴つても寝床にゐた、私としてはめづらしい朝寝だ。平静、――身辺整理。食べる物がない！　今日の食卓には貰つたほうれん草と盗んだ熟柿とあるだけだつた。郵便もたうとう来なかつた。午後、Ｎさん来庵、いつしよに学校の樹明君を訪ねる、酒と魚とを貰つて、またいつしよに帰庵、樹明君もやつてきて、愉快に飲んでほろ酔うた、いつしよに街へ出かけて、無事にめでたく解散。私は一人になつて、Ｙ屋で食べＨ屋で飲んで、理髪し入浴して帰つた、そしてぐつすりと寝た。今日は嫌な言葉――それが誰の言葉であるかは書かないでもよい、――を樹明君及Ｎさんを通して聞いた。今夜の良かつたことは、――樹明君といつしよに飲み歩かなかつたこと（これは彼が避けたのかも知れない）、そしてＮ

さんに無理なゲルトを出させなかつたこと。とにかく世の中はうるさい、人間の接触はわずらはしい、私は一人で飲まう、そして酔はう、そして唄はう踊らう！

　十月廿三日　好晴。

　昨夜、一人で飲んで酔うたので、今朝はさつぱりと身心が軽い、酒はほんによろしい。早朝、財布をさまさまにして、前のＦ家で白米一升ほど分けて戴く。飯！　飯といふもののうまさありがたさが身にしみる、心にこたえる、私は貧乏だ、そして幸福だ。秋寒を感じさせる風、水、雲。昨日も今日も毎日、とても好い日和、秋のよろしさが泌みわたり澄みとほる。……落ちついて読書。――純真で、そして愚鈍で、それでよろしい。酒なしデー、煙草なしデーだつた。よき食慾とよき睡眠とがあつた。方便として、禁酒節酒の仮面を被らうかとも思ふ、私は勿論、酒からは離れ得ないが、人から離れたいのである、人間（私のやうな人間でも）全然は孤独ではあり得ないけれど、孤独でありたいと願ひ、また、孤独であることの出来る時機がある、私は今、さういふ時機に直面してゐるやうである、……なほよく考ふべし。

　省みて疚しくない生活恥ぢない生活かげひなたのない生活雲のやうな、風のやうな水のやうな生活何物をも恐れない誰をも憚らない生活すなほにつつましくあたたかい、やさしい生活

　十月廿四日　晴、申分のない晴。

　寒い、水がつめたい、火がなつかしくなつた。酒もよい、煙草もよいが、本もよいな。Ｋから来信、ありがたう／＼／＼。午後、街へ出かけて、払へるだけ払ふ、飲めるだけ飲む、歩けるだけ歩く、……半日半夜彷徨、どろ／＼になつて戻つたが、留守中たいへんだつたらしい。――黎君が来る、樹明君が来る、敬君が来る、いつしよに或るフアンを連れて、そして中村君も魚を持つて来る。……苦しかつた、のたうちまはつた、酒は悪魔だ、何と可愛い悪魔だらう！

　自然観照――自己観照――自然観照。自己表現――自然表現。

　十月廿五日　晴、行楽日和だ。

迎へ酒のにがさよ（朝酒そのものはうまいのだが）。農業校の運動会見物、樹明君はもう酔うてゐる、いや、昨夜からの延長らしい、お辨当を貰ふ、特別にナイシヨウで酒を貰ふ。……私はスポーツに興味を持たない、引留められるのをふりきつて（Ｙ屋で五十銭借りて）、宮市へ行く、花御子の行列をちよつと見物した、そしてＩ家で御馳走になつた、昔話がはづんだ、Ｓ子の親切がうれしかつた。……十時の汽車で帰庵、月はよかつたが、気持もおちついてはゐたけれど、やつぱりさびしかつた。留守中、樹明君やら敬治君やらやつて来て待ちあぐんだらしい、すまなかつた。労れてよくねむれたが、夢はヘンテコなものだつた。

十月廿六日　曇。

——酒をつつしみませう——、と自問自答した。炭屋の小父さんが炭を持つて来て、しばらく話した。いよ／＼酒をやめる機縁が熟したらしい、肉体的にも精神的にも、経済的にも生活的にも（といつて全然アルコールと絶縁することは不可能だらうが）、これはまことに大事出来だ、自己革命の最たるものだ。午後、樹明君来庵、ちりでほどよく飲んだ、そして六時のサイレンを聞いて、おとなしく別れた。ばら／＼雨、山川草木いよ／＼うつくしい。まづしささびしさにたへて、——月、虫、時雨。石油が切れてゐるので宵から寝る。おつとりとして生きたいな。

十月廿七日　曇——晴。

しぐれの声で眼ざめた、めつきり寒うなつた、火鉢に火がないと坐つてゐられなくなつた。とかく弱者の溜息らしいものが出る、情ないかな。そこらで鶲がひそかに啼く、百舌鳥も孤独だが、これはまた寂しい鳥だ。身辺整理、畑仕事もその一つ。街へちよいと、油買ひに、米買ひに、なくてはすまない二つの物。夜、Ｎさん来庵、いつものやうに、金がない、金がほしい話！良い月夜だつた、十三夜ぐらゐだらう。咳き入つて困つた、ちゞむさいこと。

十月廿八日　まことに日本の秋晴。

いよ／＼寒くなつた、シヤツがほしくタビがほしくなつた、いそい

で冬の仕度をしなければならなくなつた。ひよどりが出て来て啼く、好きな鳥だ。紫蘇の実を採る、いゝにほひだ、日本的香気といふべきだらう。大根を間引いてコヤシをやる、大根こそは日本蔬菜の第一位である。——ああ、君、君、申訳がない、申訳がない、すみません、すみません、——遠方の友に向つて、私は平身低頭した、——彼は誰、何処にゐる。——此頃の農家は忙しいが、寸閑をぬすんで、老人も子供もうち連れて柿をもいだり茸をさがしたりする、まことに美しい田園風景だ。稲扱の音響も美しい調べといふべきだらう。白菜がおいしい、漬けて一等だ。みそさざいもなつかしい、おまへもまた寂しい鳥だ。目白はおほぜいでやつてくる、貴族的だ。午後、ぶら／＼歩きたくなつて山口へ、一片の雲影もない秋日和である。一人はよろしいなと思ふ、そしてまた、一人はさびしいなと思ふ、人間は我儘な動物だなと思ふ。湯田温泉に浸る、……それから……それから……バカ、バカ、……バカ、バカ……Ｓさんには申訳がない、Ｙさんにも恥づかしい、……とうたう湯田の安宿に泊つた。

「旅草紙」過去清算。身心整理。

十月廿九日　晴。

空は明るく私は暗い、私は爛れてゐる！一浴二浴して身心を洗ふ。朝のバスにて帰庵、直ぐ臥床。夜、嘉川のＩ老人来庵、たゞしやべつた、心中の苦しまぎれに。——私が変人なら彼も変人だらう。当地方の変人物語を聞く。

十月三十日　晴。

身心やゝかろし。節酒か禁酒か、死か狂か。百舌鳥が刺すやうに啼く、私の愚劣を叱※するやうに。長大息する外ない。樹明君に催促されて、揮毫十数枚、悪筆の乱筆がいよ／＼ます／＼あさましい、夕方、それを持参して、酒と魚とを持ち帰つて、樹明君の来庵を待ち受けて。——それからまた、いつしよに出かけて飲み歩いた、べろ／＼になつて、いつしよに帰つて来た。月がよかつた、酒もわるくはなかつた。

十月三十一日　晴。

やれ、やれ、――やれやれ、――やれやれ。樹明君を送り出す、山頭火をあざ笑ふ！午前は断食寮の青年二人来訪、午後はＮさん来訪。昨夜、樹明君から頂戴した餅を味ふ。

酔中うけた傷に醒めて秋風を感じたことである。（廿九日）樹明君も多分さうだつたらう！（三十一日）

十一月一日　曇。

一雨ほしいな。月が改まつた、今年も後二ヶ月だけだ、しつかりせよ。身心整理が出来るまでは、どうでもかうでも酒をつつしまなければならない。真実一路、句作三昧。台湾の田中君からありがたい手紙とたくさんな龍眼肉、うれしかつた。午後、樹明君来庵、例の揮毫料で飲むことにする、私は酒買ひに、君は魚こしらへ。暮れてから、さよなら／＼、よかつた／＼。夜は寝苦しかつた、ちよつとまどろんだゞけだつた。

朝寝もよからう、昼寝もわるくなからう、夜更かしもかまはない。飲んでもよからう、酔うてもよからう、無理さへなければ。――水のながれるやうに、おのづからなる生き方、そして、すなほな心がまへ。

十一月二日　晴、時雨。

おちついて身のまはりをかたづける。櫨紅葉を活ける、めざましいうつくしさ。無理をするな、あせるな、いら／＼するな、なるやうになれ、ばた／＼するな、流れるまゝに流れてゆけ。昨日の酒が少々残つてゐる、ちびり／＼飲む、ほんのり酔ふ、その元気でポストへ、ついでに湯屋へ。秋ふかい顔を剃つた、野の花を摘んで御仏に供へた。途上、Ｔさんの親切な挨拶を受けて、私は私を叱つたことである、――恥を知れ、自分を知れ、老を知れ、自然を知れ。――雲も私もしづかに暮れる、誰も来なかつた、郵便やさんも来なかつた。今夜も寝苦しいとは、……徹夜推敲、……月がおもてからうらへまはつた。咳が出て困る、夜ふけて独り咳き入つてゐるときは、ひし／＼と老境をさまようてゐる自分を見出すのである。洟水も出る、これも老を告げるものだ。

自己即自然。自然発見即自己発見。自己の生命、自然の生命。いのち、いのちのしらべ。自然律。

十一月三日　晴――曇。

明治節、菊花節、むしろ日本節とよぶべきだらう。今朝はずゐぶん寒かつた、触れる物が冷たかつた、澄んで明るい日だつた。揮毫、木郎君に送る、龍眼肉少々Ｓさんへお裾分する、先日のお詑とお礼とを申上げる。うまい昼飯だつた、たとへそれがシヨウユウライスであつても、感謝々々。午後、Ｎさん来庵、文藝春秋と婦人公論とを持つて来て貸して下さつた、感謝々々、いつしよに郵便局へ行き油屋へ行き、それからまたいつしよに帰庵して、龍眼肉を咬みお茶を飲んで話した。途上で聖護院大根一本を拾ふ、いびつだから捨てゝあつたのである、その一本が今晩の私のお菜として余りあるものであつた、感謝々々。しづかだな、さびしいな、と時々思ふことである。今夜はうれしい、石油があつて、読物があつて。夜が更けて、腹が空つたので、夜食を食べる、ゼイタクだな、とも思うたことである。曇、こんどは降りさうだ、降つてもよい頃だ。

婦人公論十一月号所載　父と娘との記事を読みて

十一月四日　曇、時雨。

なか／＼降らない、降りさうなものだ、降つてもらひたい、と空を眺めてゐるうちに、ぽつり／＼しぐれてきた、よい雨だ、何十日ぶりかの、雨らしい雨だ、刈入には気の毒でないでもないが、畑の物は助かつた。うまい朝飯、いはゆるうまいものは何もないけれど、飯だけでもうまい／＼。昼飯にも夕飯にも塩雑魚をあぶつて食べる、なか／＼よい味である、それにつけても、噛み砕く歯が欲しい。今日は酒なしデー、しめやかな日だつた。鈴虫が一匹、そこらに生き残つて鳴きつゞけてゐる、生きものの悲壮な声である（俳句もさういふ声でありたい）。――書きたくてたまらない手紙、書かなければすまない手紙、その手紙が書けないのである、書いても出せないのである、――過去の放縦、不始末が口惜しい、――憂愁懊悩たへがたし。――醜怪な夢を見た。……二人の無用人（私とＮさん）

十一月五日　晴。

私としては朝寝だつた、六時のサイレンを聞いてから起床、夜が長く日が短かくなつたものだ。秋も老いた、私も老いた。いよ／＼三八九を復活することにきめた、身心を整理するにはさうするより外に方法がないことが分つた。過去を清算せよ、一切を整理せよ。午前、Ｉ酒店の主人が空罎をあつめに寄つて、しばらく世間話、彼はよい娘を持つてゐる、のんべいだ、いろ／＼の苦労をしたらしい。しみ／″＼食べること、——味ふこと。今日も酒なし、飯はある！風が初冬らしく吹きはじめた。

生死はもとより一大事なり、されば飲食一大事なり、男女のまじはりも一大事なり。風は風なり、水は水なり、雲は雲なり、花は花なり、そして風は水なり、雲なり、花なり。人は人なり、草は草なり、虫は虫なり、犬は犬なり、そして人は草なり、虫なり、犬なり。百舌鳥よ、こほろぎよ、がちやがちやよ。草よ、柿よ、石よ。雲よ、水よ。……

十一月六日　晴、——曇、——雨。

冬が来た、冬ごもりの季節が近寄つた。今日も酒なし、明日は米なし、いつも銭なし！午後、ポストへ、ついでに湯屋へ。野菊を床に、龍膽を机に飾る、これだけでも今日の私は幸福だ。朝は晴れ、夕は曇り、夜はしめやかな雨となつた。

自然無尽蔵。——観よ、観よ、観よ。作れ、作れ、作れ。それだけで、私は十分だ。

十一月七日　時雨。

しぐれはまことによろし、枯れてゆく草のまことにうつくし。あるだけの御飯を食べて、そこはかとなくそこらをかたづける。眼鏡が合はないのか、視力が弱つて、あたりがぼうつとしてゐる。正午の汽車で遠足で西下する魚眠洞さんに逢ふべく出かけようとしてゐるところへ、おもひがけなくＴさんとＭさんとが来庵、Ｔさんはあいかはらずやりつぱなしで、Ｍさんはいつものやうにおとなしい、うれしかつた、ありがたかつた、大阪に於ける旅中のあれこれをおもひだして、

何となくさびしくもあつたが、ちよつと話して、すぐいつしよに駅へ出かけた、樹明君を待ちあはせて、二人でプラツトに魚眠洞さんを迎へ、そして別れた、うれしくもありかなしくもあつた。私はＴさんＭさんに誘はれて湯田へ、いろ／＼御馳走になりつゝ明るいうちから更けるまで歓談した、そして名残は尽きないけれど零時の汽車で見送つた。今日はほんたうにうれしいありがたい日だつた、そしてさびしいかなしい日でもあつた。……どうにもならないかなしさは竹原のＫさんからの手紙だつた、Ｋさんの心情、奥さんの心情がひし／＼と胸にしみいつた、Ｋさん、かなしいことをいはないで、早く快くなつて庵を訪ねて来て下さい、私は待つてゐます。Ｔさん、そしてＫさん、おかげで私は助かりました、ありがたう、ありがたう。……何という私の弱さ、あさましさ、だらしなさ、……私は私を罵り鞭打ちつゝ泣いた。……

　婦人公論十一月号所載の、三浦環女史の自叙伝を読んで、彼女の芸術に対する情熱と自信とにうたれた。自分の道を精進するだけの情熱と自信とはいつも持つてゐたい、万一それを失ふならば、彼が本当の芸術家であるならば、狂か死があるばかりである。

　十一月七日　八日　九日　十日　十一日

　ぼう／＼たり、ばく／＼たり、空々寂々。

　十一月十二日

　飲まず、食はず、私はぢつと寝てゐた。夜、樹明君とＳさん来訪、酒と牛肉と、そして私の我儘と。——Ａ君に送らなければならなかつた手紙を送ることが出来たのは、何ともいへない安心だつた、これだけがこの数日間のせめてものなぐさめだつた、それはＴさんのおかげだ、そしてやうやく眼鏡を買ふことが出来たのも近来にないよろこびだつた、それもＫさんのおかげだ。……

　どうすればよいのか。どうにもならないではないか。自我分裂といふのか。自己破壊とでもいふのか。

　十一月十三日　曇。

　寝てゐる、覚めると冷酒を呷る、そして寝てゐる。

十一月十四日　晴。

昨日の通りの今日だ。Ｎさんが来られて、そつと帰られた（後から書置きを見て知つた）。

十一月十五日　曇。

附近で演習がある、それを観るべく出かけられたらしいＫさんＮさん来訪。何もかもなくなつた、水まで涸れてしまつた！悪夢がはてしもなくつゞく。

十一月十六日　曇。

澄太君には逢へなかつた、とても山口へは出かけられし、返事も出せなかつたので留守だと思はれたのだらう、あゝすまないすまない、ほんたうにすまない。夕ちかく俊和尚は知らせの通り来庵、数日寝たきりの私も誘はれて、駅前の宿まで出かけた、そこでいろ／＼御馳走になつた。秋ふかうして人のなさけのあたたかさ、友の温情が身心にしみこむ、何は幸福だ、幸福すぎる。睡れない、睡れないのが本当だ。……

――とにかく生きてゐたくなくなつた、といふよりも生きてはゐられなくなつた、とすれば、死ぬるより外ない、死んで、これ以上の恥と悩みとから免がれるより外ない。酒、句、そして何がある、それ以外に。酒は私を狂はしめる。句は私を救ふ。その酒がやめられないのだ。句が作れないのだ、ほんたうの句が作れないのだ。

――或る日の独白

十一月十七日　晴。

午前中は身辺整理。午後、買物がてら、ちよつと街まで出たのがよくなかつた、一杯が二杯になり、二杯が五杯になり、五杯が十杯になつて、何が何やらわからないほど泥酔してしまつた。やつぱり、ほろゑい人生でなくてどろゑい人生だつた、愚劣だ、醜悪だ。自分で自分のあさましさにあきれる。飲まずにはゐられない酒だけれど、飲めば酔ふ、酔へば踊る、それもよいけれど、しやべるな、うろつくな、すなほであれ、おとなしくしてをれ。負け惜しみの生活はよくない、投

げ出した生活がよい。

心を広く持て。身をゆつくりとくつろげることだ。

放心！ぼうつとして天地の間によこたはるべし。くよ／＼するな。けち／＼するな。

ふりかへるなかれ、前を観よ。いや、観ようともするな。見えるだけ見るがよい、聞えるだけ聞くがよい、触れるだけ触れるがよい。自我放下！

十一月十八日　曇、時雨。

雲のやうに、水のやうに、そして風のやうに。久しぶりに落ちついて、御飯を炊きお汁をこしらへた。いつでも死ねるやうに、いつ死んでもよいやうに、身心を整理して置くべし。

なかれ三章一、くよくよするなかれ。一、けちけちするなかれ。一、がつがつするなかれ。　べし三章一、茫々たるべし。一、悠々たるべし。一、寂々たるべし。

勿論、物事にこだはつてはいけないが、こだはるまいとして、こだはることにこだはつてはならない。執着のなくなるのは蛇が脱皮するやうでなければならない、蝉が殻を捨てるやうに、内に熟するものがあれば外はおのづから新らしくなるやうでなければならない。今日は酒なし、石油もなし、そして御飯と大根とがある、結局、食慾こそは最初の、そして最後のものである。ムダはあつてもムラのない生活が望ましい、一言に約すれば、自然、いひかへれば本然、さらにいひかへれば無理のない生き方。

私の買物帳一金弐十五銭　番茶一袋一金十銭　蝋燭五本一金十銭　蒲鉾一本一金九銭　味噌百目一金八銭　大根一把一金壱円　酒一升一金弐十四銭　バツト三ツ一金十五銭　石油三合

十一月十九日　晴、曇、雨。

夜もすがら時雨を聴いた。身心整理。ひよどりはなつかしいかな。しぐれ日和、よい今日でもあるが、わびしい今日でもある。此頃よく

夢を見る（身心不調のためだらう）、昨夜も或る夢を見た、そこではＳやＫや彼や彼女が現はれて、私を泣かせたり笑はせたりした、過去と現在がこんがらがつて。……午後Ｎさん来庵、いつしよに散歩かた〴〵石油買ひに新町へ、そして途中別れた。おかげで、今夜は燈明がある読物がある。柿、柚子、橙、唐辛等をとりいれる、其中庵もまづくしてそしてゆたかだ。風がなか〳〵強い、をり〳〵しぐれる、昼は秋ふかいものを感ずるが、夜は冬の来たことを感じる。風の落ちた空に夕月が出てゐた、忘れがたい風景であつた。ぢつとしてゐても、出かけても、何となく労れる、胸が痛い、これは感冒のひきこみがよくならないからだらうが）近頃めつきり老衰を覚える。……おちついてしめやかな老境、それは私の切に望むところである。なるやうになつてゆく、――それが私の生き方でなければならない。

　最も古くして常に新らしいものは何か、それが芸術の、随つて人生の真実である。軒端に蟷螂が産卵した産のまゝで死んでゐた、私は自然のいのちのすがたそのままを観たのである。家のまはりに柿の木、野菜畑に大根がなかつたならば、私たちの秋はどんなに淋しいであらう。しみ〴〵味ふ酒、さういふ酒だけを飲む私にならなければならない。

　十一月二十日　日本晴だ。

　なるやうになつてゆく、――これが私の最後の唯一の生き方であることが解つた。実人さんから干魚をたくさん頂戴した、干魚そのものは歯のない私には堅すぎるけれど、その情味のやわらかさは、ありがたし〳〵。夕飯を食べて、ランプを点けて、一服やつてゐるところへなつかしい声――敬君だ、わざ〳〵生一本と汽車辨当を携へての御入来である、さつそく飲んで食べた、……それから街へ、……をんな、をんな、うた、うた、……ほろ〳〵とろ〳〵、……Ｆ屋で酔ひつぶれてしまつた！

　□ホントウのナンセンス文学　　　こしらへたナンセンスではない。　　　　おのづからうまれたナンセンス。□あふれてわくもの。□魔術はよろしい。　手品はよろしくない。□草の実の執着。　熟柿の甘味。　太陽の光と熱。

十一月廿一日　曇。

いよ／＼冬が来た。——起きてすぐ帰庵、敬君は下関へ出張。午後、ポストまで、ついでに買物、海老雑魚十二銭、貰ひ水、独り者らしい、貧乏らしい、それがかへつて私の生活にはふさはしからう。あるだけの米を炊ぐ、これも私にはふさはしからう。やつぱり飲みすぎ食べすぎだつた、不死身の私も何となく胸苦しい。暮れて敬君再び来庵、Ｆ屋まで出かけて少し飲んで多く食べる、戻つて来てからお茶を飲み菓子を食べ、そして仲よく寝る。火燵があたゝかく、ぐつすり睡つた。今日初めて火燵を出したが、火燵といふものはなつかしくうれしいものだ。

┌しづかな朝飯。└さびしい夕餉。

鬼も知つた鬼がよいといふ、なるほど。

播いた種が生えないのは播かない種が生えるよりもよくない。

十一月廿二日　曇——晴。

いつしよにおいしく朝飯をいたゞく。敬君は実家へ。午前はとてもしづかでしめやかだつた、おちつける日、小鳥の来る日だつた、目白、鵯、鶲。午後、敬君再び来庵、酒を少し仕入れて、ほどなくＮさん来庵、野菜をいろ／＼持つて、三人でおとなしく飲む。夕方、いつしよに街へ出て別れる、私だけ一人で湯田へ、……わるくない酔ひ方だつた。——句も夢も忘れてしまつた。いつもの安宿に泊る。

十一月廿三日　冬曇。

十時帰庵。注文しておいた酒がある、貰つた鮒がある。待ち受けてゐるＮさんが来ないので、ひとりでちびりちびり飲んだ。今日はどうした風の吹きまはしか、反物売の娘さんがやつてきて、しつこくすゝめるのには閉口した。——胃腸が痛む——身心の爛れてゐる。

十一月廿四日　冬晴。

うまいかな朝酒、ぬくいかな火燵。今晩も鮒を料理して独酌。近来めつきり老衰したことを感じる、みんな身から出た錆だ、詮方なし。老衰しきつてしまへば、また、そこにはそこだけのものがあるだら

う。彼を思ふ、彼とは誰だ、彼女を思ふ、彼女とは誰だ、故郷を思ふ、故郷は何処だ！老いて夢多し、老いて惑多し。慾がなくなるほど濁が見える、澄んでくる。澄んだり濁つたり、濁つたり澄んだり、そして。——

十一月廿五日　好晴。

朝酒あります！身辺整理、まづ書信をかたづける。午後、街へ——ポストへ、風呂屋へ、それから学校へ、そこで偶然、豚を屠る光景を目撃して不快な気持になつたが、樹明君に逢つて与太をとばしてゐるうちにすつかり愉快になつた。こらへる——こらへろ——こらへた！（何を——酒を！）殆んど夜を徹して句作推敲、ねむれないからしようことなしの勉強だ、明け方ちかくとろ／＼としたら、恐ろしいあさましい悪夢に襲はれた。

□精神が制御しきれない肉体！

幸福なる疾病ではあるまいか！

□人間的真実

自然の真実。社会的真実。

□いのちはいのちなり、私はたゞそれをうたへばよろし。

いのちのリズム、俳句のリズム、山頭火のリズム。

□真実は生命なり。　生命は真実なり。

十一月廿六日　曇。

暗い、寒い、小雪でもちらつきさうな。いよ／＼冬ごもりだ。閉居読書。しめやかな雨となつた、よい雨だが屋根が漏ることはうるさい。あたたかい夜だつたがねむれない、酒気が切れたからだらう。いよ／＼アル中患者だ、私も俳人から癈人になりつつあるのだらう！

□俳句性——単純。

季題が存してゐたのも十七音形態であつたのも。飯がうまい、花がうつくしい……水がありがたい、雲が好き……みんな私の実感実情で

ある。櫨紅葉がとても見事な色彩を持つてゐる、それに感動したら、それをうたへばよいではないか。ビルデイングでもヱンヂンでも同様である。

□個を通して全は表現される。

集団的なものは集団的に。——

□感覚を越えて意志を現はさうとしてはならない、観念を強いてはならない。　感覚的事象に徹するところに、そこに写実の蘊奥がある（或る画家の所感を読みて）。

十一月廿七日　雨——曇——晴。

見れば見るほど枯草のうつくしさ、櫨紅葉のよろしさ、ほんたうに秋は好きだ。火燵でうたた寝、どうやら睡眠不足も足りた。貰ひ水、いよ／＼水が有難く、ます／＼水を大切にする。夕方、約束通りに樹明君と敬君と同道して来庵、酒、魚、豆腐など持参、久振りに三人対座して飲み且つ食べたが、どうしたのか、いつものやうに快く酔はない、何だか妙な気持で、三人同道してＦ屋へ押しかけ、さらに飲んだが、どうしても興が熟しない、別れ／＼になつて、私と樹明君とはＳ亭でまた飲み、半熟の卵みたいになつてタクシーで送られて帰つて来た、ほどなく敬君も帰来、残肴で残酒を平げて、いつしよに寝た。ぐううぐう、ぐううぐう（これは私の鼾声！）。

　　　或俳友に答へて——……結局、めいめい信ずる道を精進するより外ないと思ひます、彼が真摯であるかぎりは、彼は彼の体験の中に真実を探しあてる外ないでせう。……私は幸福ではないかも知れないが、不幸ではない（私自身は時々幸福と思ふたり不幸と考へたりするが）。近眼、老眼、どちらも事実だ、そして近眼と老眼とがこんがらかつて、老近眼とでも呼びたい事実だ。

十一月廿八日　曇——晴。

熟睡したので気分快適、二人いつしよに楽しい朝餉を味ふ。敬君は九時のバスで山口へ、午後には帰つて来るとはいつたけれど、どうなるものやら。……おちついてしづかなるかな。今日は陰暦の十月十五日、宮市天満宮の神幸祭である、追憶果てなし、詣りたくてたまらな

いが、質受が出来ない、小遣がない。街の風呂にはいる、冬村君に出くわす、天満宮へ詣るといふ、嫌になつて※々帰庵。めづらしく遍路爺さんがやつて来た、一銭あげる、この一銭も今の私には大金だ！敬君はたうとう帰つて来ない、はて、どこに沈没したかな。暮れてから農学校の宿直室へ、酒とうどんの御馳走になる、樹明君はあまり飲まない、私ばかり頂戴する、酒三杯、うどん三杯、大きな胃の腑ではある！　飲み足りないので、柄にもなく遠慮して、街へひとり出かけて、さらに飲み食ひする、酒六杯！　そして酔つぱらつて——乱れない程度に——学校へ引き返して泊めて貰ふ、極楽々々。

□我がままな飲食、気まぐれな性慾を排斥する。□物忘れすることは悪くない、自分自身をも時々は忘れるがよろしからう。　今日の私は本を忘れステツキを忘れ帽子を忘れた、だが、酒を忘れなかつた。

十二廿九日　日本晴。

霜白く雲かげなし、美しい日和。朝飯をよばれてから帰庵。飯三杯、汁三杯、茶三杯。——誰も来てゐなかつた、敬君たうとう戻らなかつた。宮市へ行きたいと考へてゐるところへ樹明君来庵、散歩しようといふ、ぶら／＼歩く、名田島の方へ、途中、酒があるところでは飲む、Ｎさんに逢つて、案内され紹介される、父君も年をとられた、私も年が寄つたと思ふ、往事夢の如く——悪夢の如し、それからまた歩く、暮れてバスで小郡まで、そしてまた飲む、飲んで騒ぐ。……

十一月三十日　晴——曇。

何しろ昨日の今日でして。——閉ぢ籠つて、岔水君が送つてくれた中央公論を読む、ともすれば昨夜の自分を反省して憂欝になる、樹明君とても多分おなじだらう！

私の買物一金三十銭　麦二升一金六銭　焼酎半杯一金三十弐銭　なでしこ大袋一金四銭　葱一束

十二月一日　晴。

いよ／＼師走になつた。身辺を整理せよ、心中を清算せよ。午後、ポストまで出かける、ついでに入浴する。月が毎夜うつくしい。

十二月二日　晴、曇、時雨。

あたゝかくて何よりと喜んでゐたら急に寒くなつた、風物がすつかり冬らしくなつた。おとなしく冬ごもりすることだ。冬は冬らしく、老人は老人らしく、私は私らしく、それがホントウだ。肉体的にも胸中異変があるらしい、今の場合では、私にあつては、疾患は不幸な幸福とでもいふべきだらう！青城子君から、鏡子さんが商工会議員に高点で当選したと知らせて来たので、早速、お祝ひの一句を贈つた――

月のあかるい空へあけはなつ

久しぶりに麦飯を炊く、あたゝかくておいしい、腹いつぱい頂戴した。夕方、駅のポストまで出かける、Ｙ屋でほどよく酔うて、すぐ戻つて、ぐつすり寝た、まことにめでたいことであつた。夜中に眼が覚めて、寝床で句作を続けた。

※草は美しい、詩人としては無論、社会人としての自覚はなければならないが、その美しさをうたへばよい、それ以外のことは考へないがよい、考へなくともよい。※ありやうがあるべきやうであるとき、そこに真善美がある。※自然とは、生活的には、自己の顕現である、芸術的にもまた。※俳句的とは――

主観の客観化。象徴的表現。

十二月三日　時雨。

今日は私の第五十四回の誕生日である。――一年は短かいと思ふが、一生はなか／＼長いものである。柚子味噌で麦飯をぼそ／＼食べる。寒い寒い、火燵々々、極楽々々、ありがたいありがたい。終日終夜、時雨を聴いた。

□リズムについて　素材を表現するのは言葉であるが、その言葉を生かすのはリズムである（詩に於ては、リズムは必然のものである）。　或る詩人の或る時の或る場所に於ける情調（にほひ、いろあひ、ひゞき）を伝へるのはリズム、――その詩のリズム、彼のリズムのみが能くするところである。　日本の詩に於けるリズムについて考ふべし。□芸術は由来貴族的なものである、それが純真であればあるほど深くなり高くなる、そこでは大衆よりも人間をまづ観る、社会性

よりも人間性を重く考へる（といつて、勿論、社会から孤立した人間が存在するといふのではない、人間は社会的環境によつて規定せられるものではあるが——）。

十二月四日　曇、時雨。

まつたく冬日風景。——なか／＼冷える、奥は雪だらう、寒がりの私は土鼠のやうに火燵にもぐりこんでゐる（抱壺君はベツドで頭だけ出して蓑虫みたいださうな）。ワガママ、イクヂナシ、何といはれても仕方がない、アルコールが老衰を早発さしたのだらう。あとくされのない生活、さういう生活をしたい。郵便が来なかつた、このことだけでも私には大きな失望を与へる。午後ポストまで、ついでに入浴、そして買物少々。葱汁と麦飯とは何となく調和してゐる、それが私の今日の晩餐だつた。昨日も今日も酒なし、明日はどうだか解らない。私もやうやくにして、私の句——ほんたうの句——水のやうな句——山頭火の句が作れるやうになつたらしい、何よりうれしいことである。

十二月五日　晴。

冷たい、足袋を穿かないではゐられなくなつた。左の耳が何だか変だ、耳も悪くなるだらう、何しろもうオルガンそのものが古くなつたのから、そして虐待しつづけてきたのだから（眼だつて何だつておなじことだ）。今日も郵便が来なかつた、郵便は私に残された楽しみの一つだのに。正午、Ｎさん久しぶりに来庵、詩稿持参、水を汲んで来て貰ふ（あれだけしぐれたのに、こゝの井戸には水がたまらない）。六日ぶりに人が来て、人と話した訳だ。午後、学校の給仕さんが樹明君の手紙を持つて来た、——下物は持つて行くから酒を用意してくれ、といふのである、これは今の私には無理難題だ、私は此頃八方塞りで手も足も出ない、たつた酒一升がままにならぬとは気の毒みたいだ、などゝ考へてゐるうちに、だん／＼腹立たしくなつた、これは好意の悪意だ、貧乏と放縦と情誼と無能との雑炊だ！暮れ方に樹明君来庵、酒がなくては落ちつけないといつて早々帰去、ああ残念々々、ああ失望々々。一人取り残された私はお茶を飲んでパン——それは樹明君のお土産——を食べて、火燵にもぐりこんだ。老いては睡りがたし

の嘆にたへなかつた。

※自然と自己とのつながり——　どんなにつながつてゐるか。　それが問題である。　そこに立場がある。※感覚美——　それが正しく表現さるとき、感覚美はおのづから感覚美以上のものを暗示する、いはゆる象徴芸術が生れる。　これが私の句作的立脚点である。※俳句の本質（及限界）——　発想　俳句的把握。　表現　俳句的リズム。

十二月六日　曇。

冬、冬、冬。——酒なしデー四日目で、多少いら／＼する。朝早くから籾摺の音が賑やかに聞える、播いて刈る彼等は、少くとも今日は限りない幸福を味ふだらう。寒菊のうつくしさ、それは私のよろこびだ。正午すぎ、樹明君から態々人を以て野菜即売会への案内を受けたので、農学校へ出かける、見事な野菜が陳列されて、如才のない主婦たちが盛んに買ひ込んでゐる、私も大根、京菜、鶏肉、ソーセージを頂戴したが、とても重かつた、しかしその重さはありがたい重さだ。樹明君が約束通り夕方来庵、おとなしく飲んで別れた、酒は足らなかつたけれど下物は十分だつた。炬燵でうと／＼してゐると、だしぬけに二人の来庵者！　うれしかつた、澄太君と黎々火君だ。お土産の酒と蒲鉾とを炬燵の上に並べて味ふ、そしていつしよに寝た。まことによい会合であつた、生きてゐてうれしいと思ふ。

▫実生活に於ては後悔しないやうに。　句作に於ては凝滞しないやうに。▫すべてがこゝろをあらはす。　山でも風でも草でも雲でも水でも鳥でも、何でもこゝのあらはれとなる。　この境地、そしてその作品。

十二月七日　曇。

睡れないので早くから起きて、飲んだり食べたり、そして六時の汽車で黎々火君を見送り、二人はそのまゝ湯田へ、例の千人風呂でのんびり遊ぶ。友情と温泉とには相通ずるものがあるやうだ。山口へまはる、途中、酒屋に腰掛けて濁酒をひつかける、それから駅通りで、簡単なれども意味深い会食、満腹をバスに揺られて、学校に樹明君を訪ふ、そして再び庵へ、胡瓜がうまかつた（これは樹明君から澄太君へ

の贈物を裾分けして貰つたのだ）。一時の汽車で名残惜しくもお別れ。しよんぼり帰つてうたゝねする、さびしいな。待つたが樹明君は来てくれなかつた、いや来てくれた、寝苦しかつた。想ひ出せば、今日は私の記念日だ、去年の今日、私は捨身懸命の長旅に立つたのである。……

○独り言○或る問答○濁酒○忘れられない人物○貰ひ水○寒鮒○情熱○放心○持味○その犬○郵便○生地に生きる○老境○句作三昧○酒○年越○お正月

十二月八日　今日もまた曇天。

寒い、冷たい、暗い、――今にも何か降つて来さうな。層雲、第二日曜、松、到来。出かけたくないけれど、ちよつと街へ、油買ひに。藪椿たつた一輪見つかつた、机上を飾つてくれた。黎君ありがたう、子規全集を読んで。暮れても耕やす人々、あゝすみません。麦飯の炊き方を会得しました、おいしい麦飯を食べられるやうになりました。

□俳句らしい俳句も悪くないが、目下は俳句らしくない俳句が望ましい。□感覚を超えて意志を強ゆる勿れ。　月並化する最初の危険、最大の誘惑。

十二月九日　大霜。

初めて戸外の水が氷結した、身心ひきしまるやうな大気だつた、美しい太陽だつた。浜松の女学生連から来信、彼女らには彼女らにふさわしい苦悩がある、生きてゐるかぎり免かれがたい人間苦である。左の耳がだん／＼聞えなくなる、左の事を聞くなといふのだらう！

十二月十日　晴。

いかにも冬日らしく、そして山頭火らしく。米が乏しく、炭が乏しく、そしていかにも山頭火らしく。午後、Ｎさん来庵、鮒、野菜など頂戴する、いつしよに街へ、私はついでに入浴。やつと冬物の利上げだけ出来ました！前の畑に芋が落ちてゐたので、拾つて来て芋粥をこしらへる、貰ひ水往復の一得ともいへよう。冬の雨はまことにしづかなるかな。睡れないので夜通し句作。

近頃の感覚どうやらかうやら、私の最後の過渡期も終つたら

しい、いよ／＼最後の新らしい生活だ、老の歩みを踏みしめ踏みしめ、一歩一歩、精進するのだ。ずゐぶん苦しみ悩んだ。……それは個人転換期の苦悶といつてもよからう。　第一期、少年から青年へ（青春のなやみ）　第二期、青年から壮年へ（中年のくるしみ）　第三期、壮年から老年へ（老のもだえ）老境そのものには苦悶はないであらう、老いると感じることそのことが苦しみ悶えるのであらう。老は枯草のしづかさでなければならない。□年の瀬を渡る。　　（其中日記抄――山頭火行状記）□千人風呂と濁酒と皇帝。　　（新三題噺ですね）

十二月十一日　あたゝかい雨。

いつものやうに悶々寂々。小鮒を煮る、ドンコを焙る、残忍々々。水に放つと寒鮒はぴち／＼生きかへる、放たれても桶の中であり、生きかへつても殺される、――これはあまりに月並な感想だ、幼稚なセンチだが、しかしそれがまた人間並世間並といへないこともなからう、いや、現代ではもう人間並でなく世間並でなくなつてゐるのだ、現代人はそんなことを考へ感じないほど忙しいのだ、硬くなつてゐるのだ、自分のことのために、或はまた社会のために。――芋を拾へば芋粥を煮る、大根を貰へば大根飯を炊く、それがよろしい、それでよろしい、私の場合では。生命を尊いと思ふが故に、生命をつないでくれる物品を尊ぶのである。

○眼が二つ、耳が二つ、手が二本、足が二本。　口は一つ。　ありがたし、ありがたし。○光、熱。　太陽。　水。　そして我。

十二月十二日　晴、時々曇る。

夜来の雨がさらりと霽れて、枯草がいよ／＼美しい、そしてまた時々曇つて竹の葉がこゝろよいしらべを奏でる。……身心沈静、連作「生魚を焼く」に苦心する、この苦心は愉快な苦心である。枯草の奥で、まだ啼く虫がゐる。……澄太君から地下の水を四冊送つて来た、先日懇請したのであるが、それにしても、君の正しい温情が今更のやうに有難い。其中有閑無酒、有無自在、――こんなことを考へたりしてゐるうちに午前が過ぎた。午後、石油と醤油とを仕入れるために（といへば大袈裟だが、嚢中わづかに二十六銭しかない）出かけよう

としてゐるところへ、Ｎさん来訪、ひきかへしてしばらく話して、それから同道して街の中へ、——飲んだ、飲んだ、Ｙ屋、Ｈ食堂、Ｍカフヱー、等々、——別れてから、私はＦ屋で一休みして、入浴して、そしてどうやらかうやら戻つて来て、ぐつすり寝た、近来の熟睡だつた。私としては少なからぬ浪費だつたけれど、五日ぶりの酒、十四日目の泥酔だから許して貰はう！

□魚屋は魚臭い、彼の肉体がさうであるばかりでなく、或は彼の精神までもさうであるかも知れない。　よい事でもあり、わるい事でもある、とかく世の中はかうしたものだ。　多くの事は楯の両面に過ぎない。□野菜美。　芸術作品にもさういふ美がありたい。　野菜を観る態度——　実用的価値。　芸術的価値（私の立場はこれだ）。□紙鳶揚げの追憶。——

十二月十三日　晴——曇。

天地晴朗、身心清澄なり。昨日の今日にして、さてもしづかな。小春うらゝかなり、野山を逍遙遊すべし。米がある、炭がある、——幸福々々、感謝々々。酒を持つて来てくれない、忘れたのか、信用がないのか、どちらにしてもその事実は私をさびしがらせる。——いはでものことをいふな、昨日、或る人間に対してさう感じた、今日また嫌な彼に出逢つた。藪椿を一輪見つけて活ける、よいな、よいな。娘の子は可愛いな、ことに彼女は！午後は街へ出かける、油買ひに、——途中、農学校に立寄る、樹明君は日曜だから、もう帰宅したさうな、逢つて、昨夜の事を語り、宿直に招かれてゐたお礼をいひ、そしてまた武二招待会について相談したかつたのだが。ぶら／＼歩いてゐるうちに、畑の野菜の美にうたれた、野菜のやうな美しい句が作りたいと思つた。夕方、待つてゐた通りに樹明君来庵、幸に鮒が貰つてあるので一杯やらうといふので、私は街の酒屋へ一走り、君は残つて料理する。……うまい酒だつた、うまい鮒だつた、まことによい酒盛であつた、めでたしめでたし（樹明君万歳！）。覚えずうたた寝して飯を焦がしてしまつた、焦げた飯もうまいものだ。ぐつすり寝たが、明け方に眼が覚めて物思ひに耽つた。

私の買物——一金十五銭　石油三合一金　四銭　なでしこ小

袋一金　九銭　醤油三合一金十五銭　ハガキ十枚

十二月十四日　晴――曇。

何といふ温かい冬だらう、昨年の今頃をおもひだす、ちようど生野島の無坪居に滞在してゐたが、ほんたうに寒かつた、動けないほど寒かつた。歯齦がだん／＼かたくなつて、ぬけた歯の代用をするやうになつた、生きもののからだといふものは、まことによく出来てゐる。障子をすつかりあけはなつ、さてもうらゝかな冬景色！寒菊のうつくしさ、藪椿のうつくしさ。澄太君からの伝統、比古君からの手紙を読む。ほんにまつたく無一文となつた！　めづらしいことではないが。晩飯は大根粥、おいしかつた。ゆたかに炭火がおこるよろこび！今夜も睡れないで、とりとめもない事をぼんやり考へつゞけた。

※あるべきものがあるといふことは何といふよろこびだらう。※わいてあふるるよろこび！※無駄に無駄を重ねたやうな一生だつた、それに酒をたえず注いで、そこから句が生れたやうな一生だつた（回想録の一節として）。

十二月十五日　晴、晴、晴。

今日の太陽の第一線を身心に浴びて起きた。雲のない、風もないうらゝかさ、めずらしく一日通して申分のない小春日和だつた。小春日といふものは何となく老人くさいと思ふが如何。午後、あまりお天気がよいので散歩、農学校に寄つて新聞を読ませて貰ふ、新聞といふものは面白い必需品だ、最近のセンセーシヨナルな記事としては、英帝退位と蒋介石監禁、事実としての関心があると共に小説的興味がある。樹明君にも逢つたが、お互に酒の捻出が出来ないので、ほいなくもさびしいわかれ！つつましく生きやう、藪柑子のやうに。――夕闇せまれば――一杯やりたいな――心の友達といつしよに。――餅が食べないな、煮てもよし焼いてもよし、田舎餅がうまいな。

□眼が二つある、耳も二つある、手も足もまた二つある、そして口は一つ、一つしかない。　自然はまつたく抜目がない。　一つの口でさへ食べさせかねてゐる私たちだ！　眼が一つ潰れても、耳が片方聴えなくなつても、手足が一本は折れても、けつこう間に合ふではない

か。　…………………………□昨日の事は忘れてしまへ、明日の事は考へないがよい、今日の事に生きよ。

　実行はむつかしいけれど、私には、日々の実感だ。

　□自己の内に自然を見出す。

　主我的——西洋的——強い生活。

　□自然の中へ融け込む。

　没我的——東洋的——素直な生き方。

　十二月十六日　曇——晴——曇。

　朝起きると貰ひ水。たよりいろ／＼ありがたし。大根飯を炊く——萱の穂で小箒を拵らへる——髯が伸びて何となく気にかゝる——といつたやうな身辺些事もそれ／″＼興味があるものだ。ふと気がつくと、こゝには鼠がゐない、時々入り込んでくるが、間もなく逃げだす、食物がないからであらうけれど、それにしても家に鼠は付物なのに。午後は散歩、今日も農学校に寄つて新聞を読み樹明君に逢ふ、サビシイサビシイ顔を見合せて別れた！水仙が芽ぶいて、早いのは蕾んでゐる。杖はよいものだ、老人には竹の杖がよい、私のは棕梠竹、いつぞや行脚の途次、白船居で貰つたもの。庵中独臥、閑々寂々、水のやうな句がうまれさうな、今夜もまた睡れさうにない。……

　※俳句性——

（単純化）　┌印象律量に
於て——俳句的リズム┤　└象徴的手法質に於
て——自然及自然化されたる人事　（端的）

　※作家は自己批判を怠つてはならない、自己認識が正しくなければならない。　俳人といへども同様である。　自己を句材とすることは随分難かしい（独りよがりの句ならば何でもないが）、深い体験と相常の年齢とを要する。　人間が出来てゐなければ、彼の句は——自己をうたふ場合には殊に——成つてゐないからである。※俳句は作られるものでなくして生れるものといはれる。　生れるもの——

個性的、境涯的、身辺的。

俳句は心境の芸術である。※新俳句と新川柳とを劃する一線は、前者が飽くまで具象的表現を要求するに反し、後者は抽象的叙述を許容する、言ひ換へれば、観念を観念として表白しても川柳にはなる、断じて俳句にはならないが、——そこにあると考へる。

十二月十七日　曇——晴。

今朝は六時のサイレンが鳴る前に起きた。アルコールなしの四日目、いつもほどではないが、多少の憂鬱と焦燥とがある。名を知らない小鳥がおもしろく啼く、それは彼等の love song だらう。草紅葉のうつくしさよ。身辺整理。——今日のあたゝかさはどうだ、今年の冬は何といふぬくいことだらう。頭痛がして、ぢつとしてゐられないので裏山を歩く、山はいつでもよいなあ！こらへた——ぐつとこらへた——何をこらへた——のんべい虫がこみあげてくるのを。——ねむれなければねむれるまでねむらないだけだ。此頃、私は天地自在を感じる。……

雑録◎閑中忙（年末年始の記）

十二月十八日　曇——雨。

明け方、雷鳴そして雨声、春雷でもあるまい、冬雷か、ぬくい、ぬくい、ぬくすぎる。雨の枯草風景のよろしさ。身心おちついて、しづかに身辺雑事を観察鑑賞。耳が遠くなるに随つて、かへつて私は万象玲瓏、身心透徹を感じるのである。暮れ方、酒と魚とを持つて樹明君来訪、まことによい酒よい話であつた、酒を飲みつくしてめでたく別れる、後始末してから、ぐつすり寝る。指折り数へると、六日ぶりの酒だつた。

□古典に就いて

自然性千載不易——（貫くもの）┐
時代性　├歴史的展開一時流行——（移るもの）┘

□万物此一点にあつまる、そこに芸術がある、心の芸術である。

十二月十九日　曇。

今日はだいぶ冬らしく。ぐつすり睡れたので、いつもより気分が軽い。やうやく井戸に水がたまつた、濁つてはゐるけれど使へないこともない、これで何十日ぶりかで、毎日の水貰ひの苦労をしないですむやうになつた、ありがたい。あるだけの米を炊く。――小包が来た、遠く浅間の麓から江畔老が心づくしの品――蕎麦粉である、涙がこぼれるほどうれしかつた、それは江畔老その人のやうにあたゝかくておいしい！　合掌瞑目、しばらく信州の山河と人々とをなつかしがつた。……漁眠洞さんから、女学校々友会雑誌ふぢなみも来た、これもうれしい読物だつた。私はひとりしみ／″＼幸福感にひたつた。午後、Ｎさん来庵、お土産の生海苔はめづらしくておいしかつた、沢山あるので、佃煮にしたり干したりしてをく、むろん生でも食べたが。いつしよに蕎麦粉をかいて味ふ。庵の厨房いよ／＼豊富である。Ｎさんから露西亜三人集を借りる、チヱーホフを読み返すために、――私は彼の作品を愛好してゐる、何度読んでも面白い、読む度に味が出る。やがて大晦日、それからお正月、それから！――

○平凡に徹すること、これが私たち平凡人の唯一の道である、老来ます／＼この感が深い、平凡にして純真、簡にして凡、それでよろしいのである。○物そのものになりきる、これがほんたうの生き方である、禅の立つところである。○新しい俳句の道は、入り易くして到り難い、門はわけなくくゞれるが、堂へはなか／＼のぼれない。　難行道だ、それだけ楽しい道だ。　常精進より外にてだてはない。

十二月二十日　曇。

陰欝な日和、寒い寒い、炬燵にもぐりこんで。――Ｋさん来庵、大根と密柑とを頂戴する、生海苔があるといふので一杯やることになり、一応帰つて、酒と醤油と酢とを持参、ほどよく飲んで別れた、信州名物の蕎麦粉を御馳走したらたいへん喜んで下さつた、私もうれしかつた。Ｋから、多々楼君から、ありがたい手紙を受け取つた、ほんとうにありがたかつた、おかげで悠々として年の瀬を越すことが出来る、（もう一度繰り返さう）ほんたうにありがたかつた。その為替を持つて街へ出かける、そして払へるだけ払ひ、買へるだけ買ふ、例によつて湯田温泉へ、たまつた垢を洗ひ流す、ゆつくり飲んで、例の宿に泊る、愉快々々、上出来々々々、万歳々々（此費用弐円あまり）。

私の買物帳（山頭火師走風景）一金壱円五十五銭　　米五升
一金壱円弐十銭　　木炭壱俵一金五銭　　　　塩一金八
銭　　　　封筒一金六銭　　　　マツチ一金九
銭　　　　味噌百目一金十五銭　　　　番茶一金五十
銭　　　　下駄一金壱円十銭　　　酒壱升一金三十銭
なでしこ一金十七銭　　　酢一瓶一金六十三銭　　　醤油一升
一金四十五銭　　石油一升一金十五銭　　　湯札五枚一金弐
拾五銭　　　理髪料一金四十五銭　　　麦三升一金十
銭　　　　鰯十三尾

十二月二十一日　曇――晴。

あたゝかい師走風景である、朝のバスでめでたく帰庵、庵はいつも閑々寂々、枯草風景がなか／＼美しい。午後、街へ出かけていろ／＼買物をする、そしていつもの癖で、あちらこちらで飲む、コツプ酒十杯位はひつかけたらう！　おつつしみなさい、冷酒はおよしなさい！　暮れてから戻つた、そしてお茶漬さら／＼いたゞいて寝た、飲みすぎて少し苦しかつた、それ見ろ、罰があたるぞ、いや、あたつてゐるぞ！Ａ店の旧債を払つたことは何よりうれしい、そして僕の食堂、Ｙ屋で一杯やることはこのうへないたのしみだ。

□ウソをいふな、他人に対しても、自分に対しても。　自分をゴマカすな、アマヤカすな。□物を粗末にしないことはよいが、物惜しみするな、勿躰ないも卑しいからといふ諺にあてはまるやうではいけない。□酔ふと、とかくおしやべりになる、つつしむべきことだ。□かなしくても涙、うれしくても涙。　よろこびにも酒、うれひにも酒。酒と涙とは人生の清涼剤か！

十二月廿二日　晴。

晴れてうつくしい朝、酒があつてうれしい朝。午後ポストまで、米と石油とが重かつた、途上Ｊさんに出くわしてきまりのわるい思ひをした、自分のぐうたらな過去を恥ぢるばかりだつた。うまい夕飯を食べた、よい月を眺めた、おとなしい一日であつた。

十二月廿三日　曇――晴。

ゆつくり朝寝した、冬らしい寒さだ、これしきの寒さでも寒がり老人にはこたえるのだから情ない。一杯機嫌で身辺を整理する。今日の樹明君は忙しくて、そして鹿爪らしく構へてるだらう、義弟新婚の引受人だから、などゝ考へる。午後、郵便局へ、ついでに床屋へ、それから湯屋へ寄つて、さつぱりして戻つた。夜はやつぱりあまりよく睡れなかつた。……

天地間に偶然といふものはない、と確信するやうになつた。

十二月廿四日　晴。

曇つて冷える、なか／＼寒い。自分でも感心するほど身心が落ちついてきた、機縁が熟したといふ外ない。しづかなよろこび、それは私の孤独な貧楽だ。暮れる前、駅まで出かけてＹ屋に寄る、ほどよく酔うて戻つて、あつさりお茶漬を食べて、すぐ寝た。宵寝が覚めてから長い夜であつたが、よい月夜でもあつた。

十二月廿五日　曇。

霜、氷、そして雪もよひ、今年の冬の最初の日といつたやうな冷たさだつた。今日はなつかしい祖母の日。彼女は不幸な女性であつた、私の祖母であり、そしてまた母でもあつた、母以上の母であつた、私は涙なしに彼女を想ふことは出来ないのである。母の自殺（祖母の善良、父の軽薄、私の優柔）、——ここから私一家の不幸は初まつたのである。

我昔所造諸悪業皆由無始貪瞋痴従身口意之所生一切我今皆懺悔

ああ、一切我今皆懺悔、私はお位牌に額づいて涙するばかりである。……寒い、寒い（あとで聞けば零度以下だつたさうな！）、何かあたゝかいものでも食べよう。そば粉でもかこうか。昨日今日はクリスマスだ、なるほどな！正午のサイレンが鳴つてから、火燵にもぐりこんでゐると、靴音、Ｋさんだ、クリスマスだから寒いから今晩一杯やらうといふ相談である（何の彼のと酒飲は酒を飲みたがる）、かういふ相談ならいつでもＯ　Ｋ！　用意する材料もないが、それでも菜葉を切つたり、大根をおろしたり、——約を履んで、まづＳさん来庵、つゞいてＫさん来庵、酒はあるし下物はあるし、——いつしよに

歩いてＭへ、女、女、酒、酒、よかつたな、よかつたな！ちやんと戻つて、御飯を食べて、ちやんと寝てゐた。

□第三出発――　第一、破産出郷　　　　　東京熊本時代へ　第二、出家得度　　　　　放浪流転時代へ　第三、老衰沈静　　　　　小郡安住時代　（これからが、日本的、俳句的、山頭火的時代といへるだらう）□一つの存在――

十二月廿六日　曇――晴。

昨夜の今朝だ、あるだけの酒を飲む。ひとり唄ふ、踊つて一人！昨日の寒さにひきかへて今日の暖かさ。午前、Ｋさん来庵、昨夜の会合の愉快だつたことなど話して、今日もまた飲まうといふ、それもよからう、何度でも忘年会をやつたつてかまはない。午後、郵便局へ出かけたついでに入浴、冷酒の酔が一時に。板敷で一寝入、途中また教会堂の縁側で一睡、いそいで戻ると、留守中にＫさんが酩酊して来たと書き残してある、しまつた、すまなかつた。晩飯だか夜食だか解らない御飯を食べて、火燵でうたた寝。ふくろうが啼く、さびしい鳥のさびしい唄だ。酔は時空を超越する、いや撥無する、昼夜なく東西なく、酔境は展開する！

□机上のみだれたるは心中のみだれたるなり。

十二月廿七日　晴――曇。

霜、冷たいが快い、うらゝかな冬枯風景。鵯が啼いてゐる、鵯も啼いてゐる。身心いよ／＼澄む。今日は酒なし、それもよからう。午後、街へ出かけて買物少しばかり。うまい晩飯だつた、鰯――それも塩鰯――と麦飯とはよく調和してゐる、農村生活らしい食卓だ。宵は睡れなかつたが、明方からぐつすり睡れた、明るい月夜だつた。

□感情の真実（純化、深化、強化）

事象に囚はるゝ勿れ、景象の虜となる勿れ。

□純粋俳句（俳句のための俳句）

動機の純粋。題材の純粋。表現の純粋。

□大衆化とは通俗化にあらず、読者の多数を意味せず、各階級に読まれ味はゝれることなり、年齢、境遇、性情を超えて理解せられることなり。

十二月廿八日　晴——曇。

今夜は霜月の満月だが。……今日は役所は御用納め、其中庵裡には御用の始めもなく、随つて納めもなし。朝早くから畑打つ人々、家内惣出だ、その音には何ともいへないハーモニーがある。めづらしく朝寝した、のんびりしたものだ、それからまた晴れて暖かい幸福を味はつた。今日は郵便も来なかつた。今日も酒なしか、——などと考へてゐるところへ、Ｋさん来訪、まだ酒があるから、樹明君を誘うて、もう一度（二度でも三度でも）忘年会を開かうといふ、大賛成で待ち受けてゐると、暮れないうちに、樹明君は魚の包を、Ｋさんは罐詰を持つて来庵、それからおもしろおかしく飲んで解散した、めでたやめでたや、善哉々々！　年も忘れたが、自分を忘れた、うれしいね、愉快だね。樹明君何となく憔悴してゐる、数日間の気苦労と酒宴つづきのためだらう、気の毒でもあり癪にもさわる！私は其中感月でぐつすり寝た、明方近く覚めて句作。暁の月はほんたうによかつた、この月を観よと叫びたかつた。

第五句集　柿の葉　山頭火と緑平と澄太との三重奏△山緑澄——山の緑は澄む、と読めば読まれる。　　（其中庵風景）　月から柿の葉ひらり　　　山　柿の葉おちこませてゐることか　　　緑

十二月廿九日　晴、時雨。

今日はよつぽどぬくかつた。晴雨共によろし、寒くさへなければ（私は暑さには強い）。庵主は般若湯が好き、いつも赤い顔して赤字で苦しんでゐる、山頭火よ、と自から嘲り自から慰める。天地人に対してすまない、といつも私は思ふ、思ふだけで、それを実現することは出来ないけれど、——今日も強くさう思つた。いやな鴉の鳴声が気にかゝつて困つた。緑平老から年忘れの一封を頂戴した、すみません、すみません。うまい昼食であつたが、さびしい昼食でもあつた。夕方、農学校へ行く、樹明君宿直、御馳走になつて、ラヂオを聴いたりなどして泊る。ぐつすりとよく睡れた。

□凝心もよいが放心もわるくない、若い時は心を凝らして求めるがよろしく、年をとつてはぼんやりと充ち足りてゐる貌がよい。□完成と未完成、人生は完成への未完成である、生死去来はその姿である。

十二月三十日　晴。

日本晴だ、霜がうらゝかだつた。今年もいよ／＼押しつまつて、余すところ一日となつた、私は忙しくはないけれど、あまりノンキでもない、年の瀬はやつぱり年の瀬だ。朝寝して、御飯をよばれて、何やかや貰つて、十時近く帰庵。おちついてつつましく、読んだり炊いたり、考へたり歌つたり、歩いたり寝たりして。——鰤のうまさ、うますぎる！（先日貰つた残り）午後は曇つて憂欝になつてゐるところへ、樹明君来庵、すぐ酒屋へ魚屋へ、Ｊさんも加はつて、第三回忘年会を開催した、酒は二升ある、下物はおばやけ、くぢら、ユカイだつた、おとなしく解散して、ほんにぐつすり寝た。

十二月三十一日　曇。

雨、あたゝかな、おだやかな。昭和十一年もいよ／＼今日かぎりだ。飲みすぎ食べすぎ。大晦日だから身のまはり家のまはりを少しばかり片づける。郵便が来ない。街へ、湯屋へ出かける。松、梅、竹、裏白、譲葉、……門松らしいものをこしらへて飾る。夕方、樹明君来庵、例年の如く餅を頂戴する、有合の下物で飲む、——かうして、こゝで、年を送り年を迎へる、めでたしめでたし。暮れてから湯田へ、千人湯に浸つてから一杯二杯三杯。……

掛取にも見離された節季！

第30章
其中日記　10 (新字旧仮名)

　　　　自戒三則一、物を粗末にしないこと一、腹を立てないこと一、愚痴をいはないこと　　　誓願三章一、無理をしないこと一、後悔しないこと一、自己に佞らないこと　　　欣求三条一、勉強すること一、観照すること一、句作すること

　　一月一日　晴――曇。

　明けましておめでたう。九時帰庵、独酌。賀状とり／″＼。午後、樹明居へ、御馳走になる、来客数人、なか／＼賑やかであつたが、うるさくもあつた。留守中、敬君来庵、すみませんでした。うたゝ寝、覚めると暮れてゐた。酒もうまいが餅もうまい、飯もありがたいが水もありがたい。夜おそく八幡連中来庵、星城子、鏡子、井上、杉山さんの四人。豚を鋤焼して飲む、ごろ寝したのは三時を過ぎてゐたらう。

　　一月二日　曇。

　朝寝して、起きるとまた酒、豚汁はおいしかつた、さすがに井上さんはコツクだつたらしい。堤さん、後を追うて来た、お土産として銘酒二本。夕方、みんないつしよにタクシーで湯田温泉に遊ぶ、M旅館で賑やかに会食、近来になくハシヤいだ。十時の汽車に乗るべく、またタクシーで、――私はたうとう愚劣きわまる酒乱患者となつてしまつた！

　　一月三日　曇。

　茫々たり、漠々たり、昏々たり、沈々たり。庵中独坐。自己清算しろ、自己破産か！　自己決算か！おのづからなる自壊作用！――生きてゐたくない、死にたい――それも執着だ。この寂寥、この憂欝、こ

の虚無。たへがたし、其中一人酔つぱらふ。生きてゐる真実、食べることの真実、あはれ／＼。天地人一切の有象無象！酒、酒、餅、餅、新年、新年。老醜。——

一月四日　曇。

やゝ落ちつく。午後、樹明君来庵、酒一杯、飯一杯。夕方、敬君来庵、一升樽さげて。同道して湯田へ、一浴して戻る、酒が残つてゐるのでそれだけ飲む。熟睡安眠、夢も見なかつた。

一月五日　晴。

日本晴である、昼寝。樹明君来訪、例の如く酔うてそれからそれへ、——馬鹿、阿呆。——

一月六日　雨——曇。

陰欝な一日。餅があるので、鼠が来てゐるお正月（いつもはゐない、ゐつかない）。考へる、——強く生きよ。

一月七日　曇。

或る青年来庵、間もなく樹明君来訪、三人でのんびり飲む。咲いた、咲いた、机上の梅が、床の水仙が。一人となればまた沈欝な一夜。

一月八日　曇。

あたゝかい冬だが、昨日今日はさすがに寒い。閑居読書。

一月九日　曇。

一切放下着。——転身一路。——泥中の魚、辛うじて水中の魚！自他共に醜悪愚劣。酒なし、煙草なし、石油なし、むろん小遣なんか一銭もなし。

一月十日　曇。

雪、初雪である。自然にかへれ、自己にかへれ、人間にかへれ。午後、暮羊君来庵、つゞいて樹明君来庵、牛肉の鋤焼で飲みはじめる、それから彷徨する。苦しかつた、心臓が破裂しさうだつた。雪あかり

で自分を見詰める。――

　　一月十一日　晴、曇、雪。

　雪、雪、此地方には珍らしい雪景色を展開した。雪を観賞する。寒い、寒い、オイボレ、オイボレ。

　　一月十四日日」に二重傍線］　晴。

　晴れて来た、をり／＼氷雨が降つた。どうにもならない私の人生。

　　一月十二日　曇。

　小雪ちらほら。Ｉ老人来訪、彼もまた奇人たるを失はない。

　　一月十三日

　Ｎさん来庵。こんとんとしてからつぽなり。

　　一月十四日　晴。

　冬、冬をひし／＼と感じる。からだが痛い、火燵であたゝめる。何もかも無くなつた、命だけはあるが。無心にして逍遙遊せよ。午後、Ｎさん来訪、餅を頂戴する。読書。すこしさみしい。

　　一月十五日　晴。

　めつきり白髪がふえてゐるのに驚く。蟄居十日、断酒五日。朝は雑煮、昼は無、晩もまた無。まるで水底にゐるやうだ。

　　一月十六日　晴。

　銭が欲しい、酒も米も油も。久しぶりにて御飯にありつく、うまかつた。生死を生死すれば生死なしといふ、まつたくだ。なつかしいかな小鳥の群、冬の表情の一断面。

　　一月十七日　曇。

　雪もよひ、今にも降りだしさう。身心安静。樹明君来庵、周二君も来庵、めづらしい三人でひさしぶりの快飲。鮓がおいしかつた、鮓そのものよりもそれをこしらへて持つて来て下さつた心が。めでたく解散。

　　一月十八日　曇。

　ぬくい、うれしい。うたゝ寝の夢のゆくへはいづこだらう。今日はアルコールの誘惑に打ち克つことが出来た。ポストまで出かける。梅もよろしく椿もよろしく水仙もよろしく。

　　一月十九日　曇。

　しづかな雨、しづかな心。郵便は来なかつた。南枝落北枝開、これが宇宙の相である。敬君来庵、樹明君も、暮羊君もまた、にぎやかな酒宴が初まつた、愉快々々。

　　一月廿日　曇。

　毎日の冬ごもりには困るけれど詮方ない。朝がへり、公明正大だ。身辺整理。昨夜の今朝で、さすがの山頭火も少々ぼんやりしてござる。ポストまで。梅の花ざかり。濡れてかゞやく枯草のうつくしさよ。Ｎさん来訪、Ｆさんといつしよに。飲めば酔へる幸福を祝福すべし。年賀状をぼつ／＼認める、のんきだね。夕月がほのかに照る、白船君だしぬけに来庵、これはこれはとばかり話しこんでしまつた、八時の汽車へ見送る、お土産の吟醸をいたゞく。ふくろうが啼く、さびしいと思ふ。ぐつすり睡れた。

　　一月廿一日　雨。

　めづらしい早起、すぐ飲みはじめる、ちびり／＼うまいなあ、白船君ありがと。ひとつひとつ餅を焼いては食べる。貧楽を味ふ。私は身心共に例外ではないかと考へる。したのぢやない、なつたのだ。ポストへ出かけたついでに入浴。夕方敬君来庵、脱線談を聞くこともお正月らしい気分だ。万事めでたしめでたし。

　近頃の感想遺言　　　　　——健に——

　　一月廿二日　曇——雨。

　大寒といふのにこのぬくさはどうだらう。今日も年賀状を書く、ノンキだね！銃声、喊声、非常時らしく聞える、至るところに軍国風景が展開される。ひとりでしづかに微酔を味ふ。誰も来なかつた、郵便も来なかつた、孤独と沈黙との一日一夜だつた。嫌な夢を見た、何と

いふ嫌な夢だつたか、それは私の愚劣と家庭の――往時の――醜悪とをまざ／＼とさらけだしたものだつた。

一月廿三日　曇――晴。

田舎餅はうまい／＼。身心沈静、暗愁を感じる。……今日も蟄居、年賀状を書く。午後、Ｋさん来庵、まじめに俳談しばらく。さびしい夕餉だつた。

□貧乏して卑しくならない人、苦労して狡猾にならない人はえらいと思ふ。

一月廿四日　晴。

午前中は小春日和だつたが、午後は風が出てうそ寒かつた、それにしても大寒とは思へない。とん／＼から／＼、前の家で莚を織り通す音もうらゝかだつた。身辺整理する、――私は此頃何となく労れてゐる、――老いては老を楽しむがよい。待つものが来ない、苦労性の私は心配しないではゐられない、必ずしもヱゴではない。午後、Ｎさん来庵、いつしよにそこらを散歩して、農学校の舎監室にＫさんを訪ねる（樹明君は山口出張）、あたゝかいストーブの傍でヨウカンを食べながら話した。帰途、一杯やりたかつたが――甘いものを食べた後なので殊に――八方塞りで、どうにもならなかつた！今日、数日ぶりに新聞を読んで政界の風雲急なるに驚いた、たうとう軍部と政党とが正面衝突して、解散か総辞職かで緊張しが、脆くも広田首相は辞表を捧呈した、まことに日本の現在は『疾風怒濤時代』である。今日の夕餉もさびしかつた。月あかりで（石油がないので）不眠徹夜、追想したり反省したり句作したりする外なかつた！┌生の歓喜か└死の幸福か

一月廿五日　時雨。

水底の魚のやうに自己にひそんでゐた。――食べる物がなくなつた、――何もかも無くなつた。Ｋから手紙が来ないのが気にかゝる、この気持はなかなか複雑だが。空腹が私に句を作らせる、近来めづらしくも十余句！夜、食べたくて飲みたくて街へ出かける、Ｍ屋で酒二杯、Ｍ店でまた二杯、そしてＳ屋でうどん二杯、おまけにうどん玉を借りて戻る。……十三夜の月があかるかつた、私はうれしかつた。

月が酒がからだいつぱいのよろこび

お酒のおかげでぐつすりと寝た。

□人間は生れて最初が食慾で、そして老いて最後が食慾だ。□貧乏は反省をよびおこす。　食べるものも無くなると、本来の自分があらはれる。

一月廿六日　晴。

小春うらゝかに梅の散る日。熟睡したので身心やすらか。朝飯はうどんで、昼飯はぬいて、夕飯は大根で、――それしかないので。――正午のサイレンが鳴つた、今日もＫからの手紙は待ちぼけか！終日庵中独坐。W老人が来て何かと話しかける、買ひかぶられてゐる私は返答に困つた。……今夜は燈火のないことが私にたくさん句を作らせた、明け方ちかくまで睡れなかつた。うつくしい月だつた、感慨にふけらざるをえなかつた。

一月廿七日　晴。

身心沈静。明暗、清濁、濃淡の間を私は彷徨してゐる、そして句を拾ふのだ、いや、句を吐くのだ！やうやくＫから手紙が来たのでほつとする、さつそく出かけて、払へるだけ払ひ買へるだけ買ふ。ゆつくり飲んで食べる、理髪して入浴する。四日ぶりに御飯を炊く、うれしかつた、ありがたかつた、おいしかつた。生きてゐるよろこび、死なゝいでゐるうれしさ。飯、飯、飯、酒、酒、酒だつた！宵から快眠したので、夜中に眼をさまして句作、気に入つた句が作れた。句、句、句でもあつた（前の文句に対して）。

今日の買物　　　（なか／＼大きい）一金四十五銭　　ハガキ一金六十銭　　酒一金壱円弐十銭　　木炭一金三十弐銭　　なでしこ一金六銭　　蝋燭一金六拾弐銭　　米一金十銭　　うどん一金六銭　　鰯一金九銭　　味噌一金拾五銭　　ゴマメ

一月廿八日　雨。

きのふけふ冬もいよ／＼本格的になつたやうだ。老の鼻水！午後、

街へ、油買ひに麦買ひに、そして一杯やつた、幸福々々。新聞を見ると、政局不安は何う結着するか誰にも解らないらしい。日本は何うなるか――何うすればよいか――誰もが考へて、そして誰もが苦しんでゐる問題である。よく食べてよく寝た。

□現実逃避ではない、現実超越である。□詩人は現実よりも現実的である。□現実にもぐりこんで、そして現実を通り抜けるとき詩がある。　現実を咀嚼し消化し摂取して現実の詩が生れるのである。□現実そのものは詩ではない。　詩は現実の現実でなければならない。

　一月廿九日　曇――晴。

一切放下着、身辺を整理せよ、むしろ心内を清算せよ。どこかで牛が鳴く、いつまでも長う鳴く、乳房が恋ひしいのか、異性が欲しいのか、――私も何だか泣きたくなる！午後、中井君だしぬけに来訪。その間の事情を知つてゐる樹明君も来訪。ちりで飲む、話がはづんだ、――ルンペン、ポエム、人間、性慾、自然。……――私は憂欝になる、身心不調だ、――冷酒をあほつて、下らないことをしやべつてごまかす。――

どこまでゆく遠山の雪ひかる

中井君が私の旧作を覚えてゐて、放浪の哀愁を語る、二人とも心地よく睡つた。

　一月三十日　晴。

朝日を部屋いつぱいみなぎらせところで、中井さんと朝酒を酌みかはす、別れてはお互に雲の如く風の如くいつまた逢るやら、逢へないやら、中井君よ、命長く幸多かれ。へう／＼として中井君は行く、私はぼう／＼として見送る。……それにしてもよく飲んだ、昨夜三人で二本、今朝二人で一本、その一本は中井君が絵を売つて、その金で買つてきてくれた酒だ、ありがたい酒かな、すまない酒かな。小春のうらゝかさ、太陽の恩恵が身心にしみる。春菊のうまさよ（そのうまさには私が栽培したといふ味もこもつてゐる）。裏山を歩いて仏前に供へる花をさがす。梅、水仙、青木、椿、みなどれもうつくしい。暮れるころ、駅のポストまで出かける、我慢しきれなくてＹ屋に寄つて二

三杯ひつかける、ほろ酔機嫌で戻つてすぐ寝る。よく睡れたが、夢は怪奇なものだつた、何しろ幽霊があらはれたり猛獣が出てきたり、とてもあやしいものだつた、それはすべて私自身の卑怯醜悪だ！新聞を見ると、宇垣大将は遂に大命拝辞（大将の官職をも辞退するといふ）、平沼枢相も拝辞、そして林大将大命拝受、これで政局は落ちつくらしい。私は陸軍の誠意を信じる、熱情を尊ぶ、たゞ憂ふるところは専政、独裁、圧迫、等々である。政党よ、しつかりしろ、国民よ頑張れ！それはそれとして、私は私自身について考へる（私は人間の例外だ、社会の疣だ）、——私の一切を句作へ、酒はさういふ私を精進させる動力である。二三合で酔へる私であつたら、——と今夜もしみ／″＼考へたことである。とにかく、今夜は七十三銭の幸福だつた。

□生活をうたふとは果して何を意味するか、考ふべし。　生活とは何か、考ふべし。□実生活に於ける自他の問題。　　　　　　　　　（個人と社会と国家）　芸術内容としての自然人生。□人生とは。　芸術とは。　詩とは。　俳句とは。□酒は仏だ、そして鬼だ、仏としては憎い仏、鬼としては愛すべき鬼だ。□わがまゝな不幸。　最後の我儘は何か——自殺だ！□自殺は弱者の悲しい武器だ。

一月三十一日　曇。

身心正常、このマラを見よ！午後、中村さん来庵、西蔵の線香を貰つた、さつそく一本を焚く、ほのかに伽羅の香がする。いつしよに裏山をぶらつく、墓場の徳利を拾つたり、或は竹田小幅を売り飛ばした不孝話を聞く。別れてから句作。お茶漬さら／＼うまい／＼。夜は婦人公論の新年号を読む、なか／＼面白い。

□貧乏しても貧乏くさくなるな。□小さい殻に閉ぢこもつてちゞこまるな。□独りの酔を味はひ楽しむ。　対山独酌。□物がなくなつてその物の価値が解る。　物そのものだけでその持味が解る。□武士は食はねど——はよろしい。　高楊枝——はよろしくない。□自己を味ふ。　自己観照。□泥酔のうれしさ、泥酔は一切を撥無する。□自から運転させない資本の持主、自から耕作しない田畑の持主、自己の才能を発揮させない人間——彼等は共に社会のダニだ。

二月一日　曇——雨。

更始一新。或は雨を聴き、或は書を読み、終日独坐。孤独、沈潜——句作。

二月二日　晴、時雨。

いよ／＼身心安静なり。たよりいろ／＼、どれもうれしいが、Ｙさんから米代（酒代といふのだが、現在の場合では酒でなく米になつた）。澄太君からルナアル日記を送つて貰つたのは、とりわけ、ありがたかつた。午後、街のポストへ、ついでに入浴、それから一杯、——六日ぶりの風呂、三日ぶりの酒で、ユカイ／＼。ほろ酔機嫌で、うと／＼してゐるところへ、Ｋさん来訪、お土産の餅はうまかつた、ことに草餅は。林内閣まさに成立、とにかくめでたし。物価騰貴、木炭の値上りは寒がりの私にはたこへる、白米が一升につき一銭あがつて、三十二銭（私はいまだ米を高いと思つたことはない）。私は近頃何となく老人、ことにおぢいさんに心をひかれる、私自身がもうおぢいさん気分になつたからでもあらうか。足が痛い、左足の関節のぐあいがよろしくない、不摂生がリヨウマチを招いたのだらう、私はそれをむしろ喜ぶ、歩行の不自由は（不能となつては困るけれど）私におちつきを与へるだらう、私は酔うて彷徨する悪癖に悩んでゐるからである、不幸な幸福とでもいふべきか。私は私の孤独を反省する、それは孤高でなくて孤寒である、私は孤立を誇るほど思ひあがつてはゐないが迎合に甘んずるほど堕落してもゐない。在るべきものが——無くてはならないものが——米が炭が石油が在る幸福と喜悦と、そして感謝。私は幸福だ、少くとも今日の私は幸福である。夜の明けしらむまで不眠、しかし今夜の私には読みたい本があり、灯火があつた。……

※男は欲しくないが、子供が欲しいといふ女が出現しつつあるといふ。　女は欲しがつて子供を欲しがらない男が存在することはたしかだ。　これも現代相の一面である。※私の好きな食物は——　酒と刺身と、それから餅　私の好きな事は——　旅と読書と句作。

二月三日　晴。

節分——春立つ日。ルナアル日記を読む、そしてまづ感じたこと

は、――真実は言つてよいもの、言ふべきものといふよりも、言はずにはをれないものである――といふことであつた。足が痛い、左の足が腫れてゐる、かしこまることができなくなつた、よろしい、歩くことがむつかしくなつたつてよろしい、それは日頃から私の望んでゐたところだ！郵便は来なかつた、それは私をよつぽどさびしうする。今日になつてもまだ賀状を書きつづけてゐる、それほどのんきでづぼらな私だ。……午後、ポストまで出かけたついでに樹明君を訪ねる、今夜の八幡宮節分祭で出逢ふことを約束した。寒鮒と馬肉とを貰うて戻る、有難かつた。寒い、寒い、寒らしい寒気。暮れて節分の鐘が鳴り出した、いろ／＼考へさせる声だ、宮市の天満宮は賑ふだらう、思ひ出は甘酸つぱい哀愁だ。八時頃から出かける、参詣人がつゞいてゐる、境内を探したが樹明君を見つけることが出来ない、約束の場所に約束の時間に一時間近くも待ちうけたが、たうとう逢へなかつた、逢へなかつたことは残念だが、逢はなかつた方がよいやうにも思ふ、とにかくこれからは夜の外出はやめることにしよう、寒くて、そして淋しくてやりきれないので、駅へまはつて（そこまで行かないとマイナスが利かない）、熱いのを数杯ひつかけて帰庵した。身心共に寝苦しかつた。

┌生活的事実└芸術的真実┌芸道│芸のための芸└芸そのものを磨く

┌君は都会人で都会にゐる│都会の風物をうたひたまへ└都会人としての君をうたひたまへ┌私は田舎にゐる田舎者だ│天然自然の田園をうたうて└自分を出すより外ないではないか┌君のビルデイングは私の草屋だ└私の雑草は君のアドバルーンだらう

□藪椿はまことに好きな花木だ、　それに昔風の田舎娘を感じる、　彼女は樸実だが野卑ではない。□事実を掘り下げて、その底から真実を掴み取ることだ。□雲悠々と観る彼はいら／＼してゐるのである、この気持が解らなければ、彼の作品はほんたうに味へない。

□食べる物は何でもおいしくありがたく食べる私、私は私を祝福する！□意志の代用としての肉体的缺陥。　（私の病は私を救ふ）

　二月四日　晴。

歩行困難、そして気分安静、——快い矛盾、肉身おとろへて心気澄む、とでもいひたい境地である。うらゝかな小鳥のうた、春が来たやうな微風。それにしても、今日も郵便は来ないのか、さびしい、さびしい。おいしい昼餉、樹明君ありがたう、私は天地人にお礼を申上げる。麦飯をたらふく食べるからだらう、やたらに屁が出る、屁を放つてをかしくもない独り者だが、何だかのんびりする、屁は孤独な道化者か！髯が伸びて少々邪魔になりだした、気にかけるな、気にかゝるやうなら剃り落してしまへ。そろ／＼罰があたる頃だと思つてゐたら、左足の関節が痛みだした、しかし、私としては、痛みが激しくならないで起居不能にならない限りは、不幸でなくてむしろ幸福である（悲しい幸福、みじめな仕合でもあらうか）。昼も夜も読書三昧、しづかな幸福であつた。

□ナムアミダブツ、ナムアミダブツとつぶやきつぶやき殺してゐる、殺しつつナムアミダブツといつてゐる、——それが人間といふものだ！□オモヒデはトシヨリのキヤラメル□意志を忘れて来た男　意志だけ持つてゐる女□老顔のよさは雨露に錆びた石仏のやうなものだらう、浮世の風雪が彼を磨いたのだらう。□不幸な幸福——泥酔のやうな。　幸福な不幸——悲しい健康。□酒飲の楽しい矛盾。□故郷忘じ難し、そして留まり難し。　血肉は離れて懐かしがるべし。□私は社会の疣だ、瘤にはなりたくない。　癌にはなれさうもない。

□食べる物がなくなつたとき、Ｋさんが食べる物を持つて来て下さつた、Ｋさんありがたう、そして私は天地人に感謝する。□食慾は人間最初の慾望で、そして最後の慾望だ、赤児は生れるとすぐ乳房を吸ひ、老人はいつでも何でも食べたがる。□世尊良久、まことにありがたい態度である。□この生活、この心境はなか／＼解つてもらへない、解るまでには三十年の痴愚を要するのか、私自身のやうに。□世を捨てたなどゝうぬぼれてはゐない、世に捨てられたことをはつきり知つてゐる。□老人はよく独り言をいふ、愚痴な人はよく独り言をいふ、独り者が独り言をいふのはあたりまへだ、愚痴で老いぼれの独り者が独り言をいふのは、あたりまへすぎるあたりまへだらう。

二月五日　晴——曇。

　けさはだいぶ関節炎がよくなつたらしい、それではかへつて困る、幸福な不幸から不幸な幸福へ転じては、いよ／＼ます／＼不幸になる！もう蕗のとうが出てゐるさうな、それを聞いたゞけでも早春を感じる。食後の散歩がてら、蕗のとうを探して近在をぶらつく、出てゐた、出てゐた、去年も出たところに出てゐた、よい蕗のとうだ、よい香気だ、さつそく佃煮にする、句にする。麦がなくなつたので、久しぶりに米だけを炊く、飯の白さが身心にしみとほるやうであつた。落ちついてゐるつもりだけれど、事にふれ折につけて動揺する（今日だつてさうだ）、自分によく解つてゐるだけそれだけ苦しい。ぶらりぶらり家のまはりを歩いてゐると、うちの蕗のとうも落葉の中から逞ましいあたまをのぞけてゐる（黎々火君が持つて来て植ゑた秋田蕗である、自然生の蕗は毎年ずつとおくれて、貧弱なとうを出す）。蕗のとうが咲いたのもおもしろい。暮れてゆくけはひ、暮れ残る梅の花、何となく悄然としてゐるところへ樹明君から呼び出しの使者が来た、さつそく学校の畜舎部屋へ出かける、Ｉさん、Ｊさん、そして樹明君が車座になつて酒宴が開かれてゐる、私もその中へとびこむ、うまいうまい、ありがたい、ありがたい、酔ふた酔ふた、……それから街へ、……Ｆ屋へ、Ｓへ、Ｍへ、たうとうＫへ……ぼろ／＼どろ／＼……何が何やらわからなくなつた、……それでも跣足で戻つて、ちやんと自分の寝床に寝てゐた、命をおとさなかつたのは不思議々々々。泥酔のよろしさ、こんとんとしてぼう／＼ばく／＼、だが少々梯子を登りすぎましたね！

　▫おでんのやうな句、そしてやつこ豆腐のやうな、或はビフテキのやうな句。▫冬ごもりの幸福――火燵、本、食物、そして煙草も酒も――それから――それ以上あると不幸になる！▫人生は割り切れないだらうが、割り切れるやうな場合もないではない、深い体験で算盤玉を弾く時。▫芸術的真実は生活的事実から生れる。　事実にごまかされては真実はつかめない。▫現実にもぐりこんで、もぐりぬけたとき、現実をうたふことが出来る。▫雑音にも雑音としてのリズムがあることを味はゝなければならない。▫行き詰ることはよろしい、ホントウは行き詰る、ウソはだら／＼歩く、時々地駄太ふむのもよろしい。

二月六日　曇。

しつかりしろ！　山頭火！足が痛い、善哉々々。――もつと賢くなるか、それとも、もつと馬鹿になるか、とにかく中途半端がよろしくないのだ。昨夜の今朝で、嫌な気持だ、地球よ、さつさと廻転しろ、山頭火よ、どし／＼歩め。心がむづ／＼する、お天気もよくない、降るなら降れ、照るなら照れ。……怠惰の安逸に浸る、放心はありがたい。うつろのやうな肉体を火燵のぬくさにつゝんで読書、ルナアル日記を読みつゞける、だん／＼落ちついてくる。ルナアル日記はちようど父の死を語つてゐる。貪る心が何よりも悪いと思ふ。駄作、悪作、愚作、――せめて凡作を――傑作は出来ないから――もちろん、人生の、生活の、私の身すぎ世すぎである。昨夜、貰つて来た馬肉（酔中でも遺失しなかつた）を煮る、佃煮にする、おもひで果てなし。ハガキを貰つたから今日も賀状を書く、ノンキだね。六時のサイレンが鳴つてから、学校の宿直室に樹明君を訪ねる、いつもにかはらぬ顔を見て安心した（チユウリツプの球根が身代りになつたらしい！）。飯をよばれ酒をよばれ、そして泊らせて貰ふ。明るい電燈のあかりで、火鉢のあたゝかさで、めづらしく原稿――独語六枚――を書きあげる。落ちついて、のんびりして、愉快になつた。

□何となく老人に心ひかれるやうになつた私は、私自身老人になつてゐた！□彼は酒が好きな点では日本人としての幸福をめぐまれてゐるが、餅を好かないのは大いなる不幸だ。□足を病んで足が二本あることをしみ／″＼有難いと思つた。□生地で生きなければ創造することは出来ない。□自殺は彼の最後の我儘だ。□五日一草、十日一石といふ、私は一生一水でありたい。□石の沈黙、藪の饒舌、そして人間の矛盾。　太陽の愛撫、小鳥の明朗。

□いつも最後の晩餐だ。　いつも最初の朝飯だ。□独言は愚痴ともいへる。□空洞から生れる句、それは水のやうな、或は風のやうな句。□一時の睡眠から永遠の睡眠へ――やつぱり催眠剤がよい、――酒を腹いつぱい飲んで、それから寝床に横はつて。――□母の死……弟の死……祖母の死……父の死……さて、次の番は……どうやら順番が来たやうだ、いや、順番にしなければならないやうだ。……□米櫃に米がある、酒徳利に酒があることは何といふ幸福だろう、反古籠に反古

があることさへも。□over value よりも under value□酔ふ、遊ぶ、そして滅ぶ。……

二月七日　曇。

暖かい雨、もう春が来たやうな。――新聞を読んで、朝飯をよばれて、おとなしく帰庵。ルナアル日記を読みつゞける、ゆつくりと落ちついて。どこかで仔犬が鳴きわめく、と仔犬のいぢらしい姿態が眼前にうかびあがる。……彼には盗癖があるらしい（Ｎ屋の店員）、すつかり嫌になる、彼の何でもない一挙動が私をこんなにも憂欝にする。……樹明君来庵、酒を持つて――飲んで話してゐるところへ、Ｓさん来庵、酒と下物とを持つて――酔ふ、私は酔うて睡つてしまつた。

□遊蕩のための遊蕩のよろしさ！□私には好悪はあるが美醜はない、浄穢不二にはなりきれないけれど愛憎はあつさりしてゐる。□感傷は反芻する。　孤独は散歩する。　憂欝は中毒する。□空は風ふく。私は咳する。

二月八日　晴。

風、風、風はほんたうにさみしい！昨夜の余得として、酒がある、カマボコがある、バツトがある、――ありがたく頂戴して今日の憂欝を消散せしめる。――あるだけ飲んで食べて、そして寝る、としよりの、独りぼつちの怠けものの気楽さだ。終日、風を聴く。――何でもない事、その事が身心にこびりついて離れない不快、風が屋根の藁を吹き散らして貧乏な私を悩ます。……私はリヨウマチのおかげで、おとなしく閉ぢ籠つてゐます、――といふやうな消息の文句はあまりおもしろくない。

□たつたこれだけか！　私の一生は！□とにかく、花を見てゐると、或は月を仰いでゐると楽しい――少くとも腹は立たない！　私の花であり、私の月だ。□「遊ぶ」は「怠ける」ではない、前者は緊張、後者は弛緩。□仏法のために仏法を修める。　俳句のために俳句を作る。　たゞたゞ余念あるべからず。□物そのものになる、なりきる。□作者は作者である限りヱゴイストであつてよい。

二月九日　晴。

日本晴、まつたく春だ、朝寝したことも春らしかつた、蕗のとうをさがしあるくこともまた。終日読書、読み労れるとそこらを歩く。今日はほんたうに好い日だつた、観念的には日々好日といふけれど、実感としてはいつもさうとばかりはいへない、よつぽど出来てゐる人物でない限りは。とりとめもない物思ひ、そこはかとない無常感、——私は弱虫、そしてなまけものだわい、強くなれ〳〵。

微笑する句（時々は微苦笑する）

怒号、悲鳴、溜息、欠伸。呵々大笑はおもしろいが時代が許さないだらう。慟哭もわるくないけれど感情が拒むだらう。生活内容の豊富貧弱はともかくとして、生活態度を確立せよ。時代の空気を深く吸ひこめ、そしてすつかり吐き出せ。

二月十日　晴——曇。

春、春、春、晴れると、すつかり春だ。——早すぎる春、嘘のやうな春だ。足が痛い、頭が痒い、多少いら〳〵する、物資が乏しくなつたからでもあらう、もう米も石油も煙草も乏しくなつた。たゞ死なゝいだけ、それではつまらないやうにも考へ、また、それでよいやうにも思ふ。とにかく小使銭がほしいな！午後、ポストまで出かけたついでに湯にはいる、四日ぶりの外出、そして八日ぶりの入浴。——

お米買はうか　酒買ほか石油にしようか　煙草にしようか

道ばたにはタカノツメとかいふ紫の小草が咲いてゐる、ぶらぶら歩いてゐるうちに、だん〳〵憂欝が軽くなる、途中一杯ひつかけた。夜はまた出かけた、酔ひたくてたまらなかつたので、酔はずにはゐられなかつたので、……そして例によつて例の如し、マイナスにマイナスを加へ、愚劣に愚劣を重ねた、……こんとんとして何が何やら解らなくなつた。

□まことの作者は飛躍する、飛躍する作者は足踏する、爆発前の焦燥、緊張、苦悩、憂欝、それをぢつと堪へてゐなければならない。□無能無力であることを自覚したが故に、その一筋につながることを体現したのである。

二月十一日　曇——雨。

旧の正月元日、そして紀元節、建国祭。茫々たり、たゞ茫々たり、何物もなし、何物もなし。夕方、暮羊君来庵、招待されて訪問、うまい酒、うまい下物の御馳走を頂戴する、うれしかつた、快く酔うて、帰庵して熟睡した。

※俳句性とは——　　　内容に於て、随つて形式に於て　□単純（最高限度の）　　緊張（圧縮ではない）　□主観の燃焼　即　印象の象徴化　　暗示（朦朧ではない、晦渋ではない）

二月十二日　雨。

雨の漏る音、わびしい一日。夜、樹明君来庵、御持参の酒を飲んだが、やつぱりわびしい一夜だつた。

二月十三日　曇。

残つてゐるだけの酒を呷つて寝てゐる。先々死々去々来々、それはそれでよいではないか、なぜこんなにこだはるのだ。……冬、冬、冬、曇つて冬一人。冬蠅が一匹、うるさくせつなく飛びまはる。

二月十四日　晴、時々霙。

身心不快。午後、樹明来訪、つゞいて暮羊君来訪、例の如く飲む、話す、笑ふ。……雪、酒、そして飯がありました、ありがたう。

二月十五日　雪、時々晴。

満目白皚々。朝、妙な男が訪ねて来た、嫌な男だつた、悪い男とは思はないけれど。昨日も今日も郵便は来ない。

二月十六日　曇——晴。

倦怠、たゞ寒く、たゞ懶し。

二月十七日　曇。

沈欝たへがたし。私は虚病の虚病を病んでゐる。今日も嫌な朝鮮人が来た。燈火をなくして第三夜だ、暗黒裡の妄想！七日の月があることはあつた。

二月十八日　晴——曇。

春寒、めつきり春めいて来た。身心やゝ落ちついて、めづらしくも朝寝。碧梧桐氏逝去を今日知つた（新聞を見ないから）、哀悼にたへない、氏は俳人中もつとも芸術家肌であつたやうに思ふ、一事を続けてやれなかつたのも、弟子とはなれがちだつたのもそのためだ、未完成——惜しいけれど詮方のない、——永久の未完成といつたやうな性格だつた。七日ぶり外出、そして四日ぶりに燈火を与へられた。いつもケチ／＼して、或はクヨ／＼して、そして時々クラ／＼して、——何といふみすぼらしい生活だらう、ひとり省みては自から罵るばかりだ。いうぜんとして、山を観よ、雲を観よ、水を観よ、草を観よ、石を観よ。……

二月十九日　晴れたり曇つたり。

身辺整理。なづなが咲いてゐる、蕪も大根も咲かうとしてゐる。Nさん来庵、水など汲んでもらふ、すみません。風が出て来た、風はさみしい、何よりさみしい、いつもさみしい、やりきれない。うつ／＼として一日が過ぎる。

二月廿日　晴、そして曇。

春寒、氷が薄く張つて小鳥が囀づる。食べる物がなくなつたので梅茶ですます、それもよからう、とかく飲みすぎ食べすぎる胃腸を浄めるためにも、また、貪りたがる心をしづめるためにも。それにしても食慾の正確さは！　胃袋の正直さは！出かけて米を借りて戻る（樹明君に泣きつかないのは私の良心の名残だ）、すぐ炊いて食べる。ほろよひ人生か、へゞれけ人生か、——私は時々泥酔しないと生きてゐられない人間だ！

椿赤く酔へばますます赤し　（梅の白さよりも椿の赤いのが今の私にはほんたうだ）

曇つて寒く、山の鴉が啼く、さびしいな。街へ出かけて、白米を借りて戻る、さつそく炊いて食べる、わびしいな。六日ぶりの酒、十一日ぶりの入浴。学校に寄つて新聞を読ませてもらふ、樹明君にはわざと逢はなかつた。今日はだいぶ歩いたので、足が痛い、頭が重い。

或る友への消息に先日来、私は足部神経痛で、多少の起居不

自由を感じます、いつそ歩行不随意になればよいと思ひます、さうなれば、しぜんしようことなしに身心が落ちつきませう。……

二月廿一日　曇。

身心沈静、やりきれなくて湯田へ出かける。……

二月廿二日　三日　四日　五日　六日　七日　八日

ぼう／＼として、あるいは、しん／＼として。悲しい日、恥づかしい日、悩ましい日、切ない日。草が芽吹き、鴉が啼き、人間が酔うてさまよふ。

┌飯と酒│　飯のありがたさ└塩と味噌　　塩のよろしさ　満腹と脱糞

三月一日　曇。

春は来たが、私は冬だ。——終日不動無言。身心頽廃。せめて美しく滅ぶべし。——

三月二日　晴。

雲雀、菜の花、小虫がしきりに飛ぶ、——春だ。放下着、一切放下着。不思善不思悪、空々寂々。午後、五日ぶりに外出する、無燈火にたへられなくなつたから。Ｋさんから本を借り、コロツケを貰ふ。三日ぶりに点燈、だいぶ落ちついて来た。生きてゐればゐるだけ、私は私の無能無力を感じるだけである。……

三月三日　雨。

春雨だ、間もなく花も咲くだらう。亡母祥月命日。沈痛な気分が私の身心を支配した。……私たち一族の不幸は母の自殺から始まる、……と、私は自叙伝を書き始めるだらう。……母に罪はない、誰にも罪はない、悪いといへばみんなが悪いのだ、人間がいけないのだ。……身辺整理。矛盾は矛盾として。——何事も天真爛漫に、隠さず飾らず、ムキダシで生きてゆけ。

□物そのものになりきれ。　虚無ならば虚無そのものに。□自然そのものをそのまゝ味はひ詠ふ。□表現は現象を越えてはいけない。　表

現は現象に留つてゐてはいけない。　この矛盾が作家の真実で解消する。□感覚を離れないで感覚以上のものを表現する。　それが作家の天分と努力とによつて可能となる。

　　三月四日　曇。

　身心平静。

　　三月五日　晴。

　外は春、内は冬。

　　三月六日　曇。

　雪もよひが雨になつた。

　椿赤く思ふこと多し

　　三月七日　晴。

　茫々たり漠々たり、老衰あきらかなり。緑平老よ、ありがたうありがたう。五日ぶり外出、四日ぶり喫煙、七日ぶり飲酒、十日ぶり入浴。――

　　三月八日　晴――曇。

　沈欝たへがたし。Ｎさん来訪、同道して山口へ。二人の無用人！　Ｍさんのところで少し借り、それから飲み歩く、九州へ渡れるだけは残して。門司駅の待合室で夜明かし、岔水君を訪ねて小遣をせびり、黎坊に送られて八幡へ。

　　三月九日　晴。

　昨夜の延長。――

　飾窓の花がひらいてゐるビフテキうまさうな

　飲食店前即事である。鏡子君、井上君、星城子君を訪ふ。夜は或るデパート楼上の四有三君送別句会に出席。

　さようなら雲が春らしい

　鏡子居宿泊。或る料亭で――

燈籠しづかなるかな酒のこぼるる

変質的脱線、飲んだ／＼歩いた／＼。雲平君の厄介になる、ああ、ああ。（これは三月十二日の事実だつた！）

それから七階へ、星のきらめくを

鏡子居宿泊、白雲子、堤さん、星城子君来訪。日本娘のよろしさ。

三月十日　曇。

陸軍記念日。おなじく。

三月十一日　風雨。

鏡子君自慢の腕をふるつて記念写真撮影。来訪者いろ／＼。更けて、来訪の星城子君に連れられて同氏宅へ。

三月十二日　曇。

朝湯朝酒。桜咲く前の荒生田公園風景、その中の一人として山頭火登場。

三月九日の記事最後の分はここに。——

三月十三日　晴。

雲平居。

見おろす山から春めいた煙

雲平君夫妻の優待に身心をまかせる。

草青むところよい妻とよい子と

おのれを恥ぢるばかりである。

三月十四日　曇。

雲平居。

三月十五日　曇。

おなじく。読書、執筆、揮毫。

三月十六日　晴。

雲平居。夜は菫雨居の海峡句会へ出席する。俊和尚同宿。

三月十七日

へうぜんとして直方へ飯塚へ、そしてＫのところへ。初めてＳに面会する、まことに異様な初対面ではあつた！父父たらずして子子たり、悩ましいかな苦しいかな。

三月十八日　曇――晴。

緑平居へ転げ込む。――

ボタ山なつかしく草萌ゆる

三月十九日　雨。

雀、鶯、草、雲。……愛憎なし恩怨なし、そしてそして、――愚！若松へ、多君を煩はして熊本へ。

逢うて別れてさくらのつぼみいつまた逢へるやら雀のおしやべり

熊本駅で一夜を明かす。

三月廿日　晴。

朝、彼女を訪ねる、子に対する不平、嫁についての不腹を聞かされる、無理はないと思ふけれど、私は必ずしもさうとは思はない、それは多分に人間（女）の嫉妬がまじつてゐる。

三月廿一日　晴。

酒、酒、酒、歩く、歩く、歩く。

三月廿二日　晴。

元寛君を訪ね、同道して蓼平君を訪ふ。酒と女と涙とがあつた！――（前の頁へ）――

三月廿三日

酔中晴雲なし！義庵老師を慰める、奥さんが亡くなられて（よい奥

さんとは考へなかつたが）めつきり弱つてゐられる。午後の汽車で帰途に就く。途中博多下車、諸芸大会観覧。駅で夜明かし、宿料がないので。

三月廿四日　晴。

小郡を乗り越してSを驚かす。肉縁のうれしさいやしさ。ほんに酔うて、ぐつすりと寝た。

三月廿五日　曇。

風が吹く、さびしくせつなく。やうやくにして帰庵、ほつとする。樹明君往訪。ほろ／＼ぼろ／＼。——

三月廿六日——卅一日

こんとんとして。——

四月一日　晴——曇。

徹夜不眠、しゆくぜんとして寝床から起き上つた、あゝ、どんなに思ひ悩んだことか。反省自覚。——節度ある生活。小鳥がいろ／＼来ては鳴く、鶯も鳴いてゐる。私にも春が来てゐるのだが、何となやましい春！青春のなやみと老境のなやみ、だいたい、老境にはなやみなんどあつてはならないのだが。身心共に貪るなかれ、たとへば微酔にあきたらないで泥酔にまでおちいることもホントウではない。食慾減退、とても大きな胃袋の持主の私なのに。蜂がしきりに鳴いてそこらを飛びまはる、おまへもまた落ちつけないのか。街へ油買ひに、ついでに入浴、さつぱりした、のうのうした。春、春、春、まつたく春だ。——さくらもちらほら三分咲き、金鳳華咲いてこゝかしこ。そして議会はとつぜん解散になつた。何もかも動揺してゐる、私自身のやうに。夕方、暮羊君来庵、先夜の脱線ぶりを互にぶちまけて笑ふ（私はむしろ泣く気持だ）。人生はひつきよう泣き笑ひらしい。招かれて、いつしよに行く、奥さんの手料理でほろ／＼酔うて戻る。自浄吾意、——そこに建て直しの鍵がある。猫が虎のやうになる——なりきらないところに、そこに悲喜劇の科介があらはれるのだ。今夜も眠れさうになかつたが、何となく気が明るく軽くなつて、明方ちかくなつて睡れた。夜をこめて恋のふくろうのたはむれ、彼等は幸福だ、幸福

であれ、といふのも人間の愚痴だらう。

□アルコールは離れがたない悪魔だ。　酒を飲むことは、酔うて乱れることは、私の Karma だ。□狂か死か、それとも旅か（今の私を救ふものは）、或はまた疾病か。□死線を超えるごとに、彼は深くなる、それがよいかわるいかは別問題だ。□そこに偶然はない、必然があるばかりだ。□時としてはよい種子も播け！

　　　　今日の私の買物一金十五銭　　石油三合一金十一銭　　マッチ大函一金十銭　　　ハガキ五枚一金五銭　　　切手十枚

┌いとなみ――労働┐|　　　　　　　　├たのしいはたらき└たはむれ――遊戯┘

　　四月二日　曇。

花ぐもりだらう、花のいぶきを感じる。沈欝たへがたし、それを堪へるのが私の人生である。どうやらかうやら、ぼうぜんたる気分からゆうぜんたる気分へ転換しつゝある。天地人の春であれ。掃除――洗濯――裁縫――なか／＼忙しい。やうやく句が出来るやうになつた、おちついて澄んできたのである、とにかくうれしい。旅の樹明を思ひつゝ来庵を待つたが駄目だつた。風、風、風、午後はいやな、さびしい風が吹いた。夜中夢中で絶え入るほど咳きこんで困つた。

□一年は短かいやうだけれど、一生はずゐぶん長いやうに思ふ。□俳句は（短歌も同様に）ひつきよう心境詩ではあるまいか。

　　四月三日　晴。

神武天皇祭、日本的！うらゝかな旗日。早起沈静、よろしい／＼。春寒、春も寒いね！人事に囚はるゝなかれ。昼寝はよろしい、夢はよろしくない。花見のどよめきがきこえる、――あゝそれなのに、それなのに。――Ｋへ手紙を書く。――こけつまろびつ――とろ／＼どろ／＼――何が何やら。――酒乱、醜態、あゝあゝ、……恥を知れ、恥を、……死んでしまひたい、……馬鹿、阿呆。……………………

かへりみて、死あるのみ。醜い生存。死ぬるまでは繰り返されるでもあらう悪行。愚劣、醜悪、愚劣、醜悪。死にたくても死ねない矛

盾。矛盾に矛盾をかさねてゐる毎日毎夜。

四月四日　晴曇不明！

昨夜の延長、宿酔ふら／＼、湯田へ。

『健からの手紙、緑平老からの手紙、それを読んで恥ぢないならば、泣かないならば、ほんぜんとして本心に立ちかへらないならば、私は山頭火ではない、人間ではない（これは九日の朝のことである、私はどうかしてゐる）。』

湯田はよかつた、あたゝかい湯が私のつきつめた身心をほごしてくれた、うれしかつた。安宿Ｓ屋に泊る、昼は遊園の猿を見た、そして夜は漫才大会へ行つた。同宿五六人、罪のない猥談が面白かつた。ほんたうに遊ぶ気分、さういふ気分になりたい。

四月五日　晴。

歩いて戻つた、塘の桜は半分ばかり咲いてゐたけれど、私はうつ／＼としてゐるばかりだつた。留守中客来、敬君と樹明君とがやつて来て、一杯飲んで待つてゐたらしい。その残物を頂戴する。夜は暮羊君の宅に招待された、よい酒であつた、うれしい酒であつた。『飢』

食べる物がない一日水を飲む遊園地の猿公温泉浴

四月六日

憂欝たへがたかつた、立つても居てもたへきれないものがあつた。……Ｎさん来訪、いつしよに散歩、そして酒、酒、酒、みだれてあばれた。……まつたく酒狂だ、虎でなくて狼だ。………………………

四月七日、八日

身心バラ／＼だ、夢とも現とも何ともいへない気分だ。

四月九日　晴。

親しい友の手紙に鞭うたれて、湯田まで散歩。一浴一杯、身心やゝ安定。帰来して庵中独坐。

四月十日　晴。

さくらがちる。だん／＼平静になる。蕗の香、若布の香、御馳走々々々。

四月十一日　晴。

山はドンチヤン、花見のまつ盛り。私はぢつとして寝てゐるより外はない。夕方散歩、よかつた、よかつた。

四月十二日　晴。

いよ／＼落ちついた、合掌。春蝉の声を聞いた。鴉がうたれて死んだ、むしろ私を殺してくれるとよいのに！他人に頼るなかれ、自分を信ぜよ。せめて晩年だけなりとも人並に生きたい。ほんたうの句を作れ、山頭火の句を作れ。人間の真実をぶちまけて人間を詠へ、山頭火を詠へ。

心を広く強く、高く。横に広く——ではない。縦に深く——である。私の場合では。——

四月十三日　晴——曇。

身心いよ／＼安静、やうやく自分をとりもどした。絶対禁酒はとうてい出来さうにもないが、節酒はどうやら出来さうである。酒を味へ、酒に敗けるな。克己、克己、克己、克己が一切だ。慊らない、何もかも——私自身に対して、そして句作の場合は殊に。——風、風、風だつた、日中吹き通して、夜中も吹きつゞけた。屋根の一部が吹きとばされる。桜も散つてしまつたらう。まことに花時風雨多である。風の中の散歩も一興だつた、山はいつもうれしいものである。寝苦しかつた。……

貪らず、惴らず、乱れず。心すなほに体ゆたかなり。

老人は老人らしく、無能力者は無能力者らしく生きる——これが私を生かす生き方である。

四月十四日　曇——雨。

風、風、風、風はほんたうにさびしい、いやなものである。句稿整理。暮れて出かける、一杯二杯三杯、ぐんで／＼になつたが、脱線と

はいへなかつたが。……

句作三境事……………………説明式　事柄
景……………………描写的　自然人生の姿態象……………………表現　真の具体化　　（門を入るは易く堂に上るは難し）

四月十五日　晴。

朝酒二三杯。学校に寄つて、樹明君、暮羊君を悩ました。おとなしく帰庵して就床。

四月十六日　曇。

茫然として草を観る、——そんな気持だつた。

四月十七日　晴。

うらゝかだつた、落ちつけた。木の芽草の芽のうつくしさ。愚痴を去れ。塩の味を知つた（食べるものがなくなつて）。よろしい、よろしい、よろしい。

窮すれば通ず——まつたくだ。——窮しなければ通じない。

四月十八日　晴——曇。

身辺整理、落ちついてすなほな日。午後、久しぶりに樹明君来庵、宿酔の様子で、すぐ寝てしまふ、夕方になつて少しばかり飲む、二人としては近来にない、よい会合であつた。私もおかげでぐつすりと睡れた。

四月十九日　曇——晴。

今日もおだやかな一日だつた。句稿整理、なか／＼捗らないので困る。暑くなく寒くなく、まさに好季節の好季節。何十日ぶりかで句作気分になつた、山頭火はまだ山頭火を失つてはゐなかつた！腹工合がよくないので散歩、たうとう湯田まで歩いた、一浴して、そして一杯ひつかけて帰つた、まことによい散歩だつた。

シヨウユウライスよりもソルトライスがうまい！　このうまさは貧乏しないと、飢えないと解らない。

四月廿日　晴――曇。

季節のよろしさ、晩秋初冬ほどではないけれど、生き残つてゐるよろこびをよろこばせてくれる。句稿整理。松蝉がそこらで鳴く。裏山を歩く、蕨でも採るつもりだつたが、それは見つからなくて、句を二つ三つ拾つた。午後また近郊散歩。溜息――春のなげき、天にも地にも私にも。今日は村の観音祭らしく、地下の老若男女が御馳走を持つて山へ行く、――それを眺めてゐて、私は何か寂しかつた。無感傷主義の境地に入れたら、どんなに落ちつけるだらう、……そして、……この身心のドライをどうしたらよいか。……寝苦しかつた。私はどこかへ移らう（湯田が望ましい）、居は気を移すといふ、新らしい土地で新らしく生活しよう。

今日の買物一金十銭　酒一杯一金十銭　鰯十四尾一金五銭　廻転焼三つ一金十銭　バス代一金十五銭　石油三合

四月廿日」はママ］　曇。

今日も句稿整理、といふよりも、身心整理といふべきであらう。午後、ポストまで出かける。米がなくなつた（むろん、いつものやうに銭はない）、Ｉ商店から二升だけ借りてくる、途上で蕨を買つた、一把五銭也。鰯もうまい、蕗もうまい、蕨もうまい、海のもの山のもの畑のもの、しみじみ味へば何でもうまい。それにしても私は私の大食を嘆く、何といふ大きい、そして強い私の胃袋だらう！蒸暑かつた、夏が近いことをおもはせる。日が長く夜が短かい、私はその日夜を持て余してゐる、罰あたりの不幸者め！

四月廿二日　雨。

早起、身辺整理。規律ある生活、――それが正しい生活だ、人間は節制をなくしてはならない、孔子でさへも、我れ七十にして己の欲するところに従うてその矩を踰えず、といはれたではないか、この事が六十近くなつて初めて解つた。矛盾だらけの私である、私の日々の生活は矛盾に矛盾を積み重ねて行くやうなものだ。無坪兄から見事な壺を頂戴した、兄その人に触れたやうな気がした。雨はしんみりと落ち

つかせてくれる、今日はおだやかな好日であつた。昨日の蒸暑さにひきかへて今日は肌寒かつた。煙草もなくなつた、喫はないでこらへた。

離愁

□人間性に根ざす流浪性□孤立と集合□人間は人間の中□ルンペンの悲哀

四月廿三日　曇——晴。

沈静、多少の憂欝。妙な人間が来た、彼は唖だつた、頭髪だけはキチンと分けて古オーヴアを着てゐる、彼に対して、私は何となく不愉快を感じた、悲しい事実だが、私は此頃多少ヒネクレて浮かないのである。めつたにないことであるが、今日の私は頭脳が重苦しいので、裏山を散歩する、山はいつもよろしいな、何の木かの若葉を折つて来て活けた。松蝉が家ちかく下りて来て、しきりに鳴く、初夏の声だ。誰か来たと思つて出て見たら、Ｋ屋の老主人だつた。——

雑草ふみわけたま／＼来れば借金取で

微苦笑する外なかつた。

旅に出たいと思ふ。——むろん、昨年のやうなプチブル的な旅は嫌だ、嘘だ、繰り返したくない。以前のやうに、行乞流転して、そのまゝ消えてしまふやうな旅でなければならない。かなしいかな、私の身心はあまりに物臭になつてゐる、意力をなくしてしまつてゐるのだ。——

四月廿四日　曇——雨。

まことにおだやかな天、地、人、——私であつた。貪ることなかれ、貪ることなかれ。句稿整理、どうやらかうやらかたづきさうになつた。午後は散歩、農学校に寄つて新聞を読ませて貰ふ、樹明君に逢うて、悲しい話を聞く（彼の窶れた顔はまともに見てはゐられなかつた、みんな酒のためだ、人事とは思はれない）、私も悲しくなつて、急いで戻つた。今日も蕗を煮た、そのほろにがさは何ともいへないうまさだ、此頃が蕗の旬だらう。米は、むろん、なくてはならないが、

石油もなければならない、米と石油と、この二つさへあれば、私は死なずにゐられる。いつまでも睡れなかつた、アブラが切れたからだらう。去来集を読む。明け方、とろ／＼したとおもつたら、とても嫌な夢を見た。……

善良なる愚人ではいけない。賢い善人でなければならない。この人を見よ――何といふ愚人の醜さだらう！

日光と水と、そして塩と草と、これだけは私の生活にもなくてはならないものである。

四月廿五日　雨。

いやな夢から覚めて、そのまゝ起きて御飯を炊く。すこしく食べて、ふかく考へよ。一切にささへられた人生、一切にはたらきかける生活、貫いて流れるもの――それだ、それだ。青梅が大きくなつてゐる、春菊は花をつけて食べられなくなつたので、生花にする。やつぱり人間はヱゴイストだ。健からの手紙は私に涙を流させ、緑平老への手紙は私に汗を流させた。……街へ出かけて、払へるだけ払つてまはる、払ひたい、払はなければならない半分も払はないのに、また無一文になつてしまつた。Ｍ店で二杯、Ｋ屋で二杯ひつかけた、ほろ／＼とろ／＼、戻つて御飯にする、若布がおいしかつた。樹明君から来信、今晩は宿直だからやつて来たまへ、久しぶりに飲んで話さう、といふ、訪ねるまでの時間内に湯屋で髯を剃る。私の大食が樹明君を驚かした、私はとかく食べすぎ飲みすぎて困る、だいたい根性が卑しいからでもあるが、放浪がさうさせたのでもある。愉快な一夜だつた、ほろ酔人生の一場面だつた。樹明君は早くから鼾をかいてゐる、私はおそくまで睡れなかつた、私には邪気が多いらしい。

四月廿六日　晴。

早く起きて、そのまゝ戻る。藪風がさわがしく、そゞろ肌寒い。身心安静、珍重々々。斎藤さんからなつかしいたよりがあつた、野蕗君からも近々訪問するといふうれしいたより。午後は散歩、仁保津方面を歩きまはつた、ちようど氏神様の御年祭で、河原にテントを張り余興などいろ／＼あるましい、男も女もおぢいさんもおばあさんも子も

孫も、どつさり御馳走を携へて集つてくる、村のピクニツク、うらやましかつた。

自己闘争記酔ひざめの記

　　四月廿七日　晴。

句稿整理、完成、ほつとする。揮毫、いつものやうに、悪筆の乱筆。空罎、古雑誌、襤褸を売る、五十銭！さつそく街へ、Ｋ店で少々借りて湯田へ、例のＳ屋に泊る、一宿二飯で四十六銭。湯はよいなあと嘆息の欠伸を洩らしつつ。樹明君が不在中に来てくれたらしい、こんな置文句があつた。——

また散歩（これは私）ケツコウ／＼　ハルダモノ午後四時　樹来アゲ二切タベタ庵のニホヒガシタ

　　四月廿八日　曇。

朝湯朝酒（朝々はないが！）。八時帰庵、野蕗君を待つ。昼御飯を食べてから散歩がてら、駅まで出迎へたが、失望々々。笹鳴、ずゐぶん下手糞な鶯だ、でも日にましうまくなる、勉強々々、私の句作もそのやうに。

　　四月廿九日　晴。

日本晴、天長節、万歳万々歳。春寒、なか／＼寒い。節度正しい生活、平凡にして真実。樹明君から来信、一献傾けたいから用意して置いてくれとの事、さつそく在中の五十銭銀貨二枚を持つて街へ出かける、酒、魚、御馳走を拵らへる、三時頃から六時頃まで、めでたきさかもり。かういふ会合でなければならない、おかげで、のんびりとした。

感激は興奮ではない。観念から俳句は生れない。俳句は体験から生れなければならない。

　　四月三十日　曇——雨。

身心平静、何よりのよろこびである。旧の三月廿日、秋穂はお大師まゐりで賑ふのだが、かういふお天気では人出が減るだらう、私も見

合せた（小遣銭もないから）。ほんたうの信心には雨も風もないけれど。――待つてゐるものが来ない。しめやかな雨。午後、ポストへ、ついでに入浴。一杯ひつかけてほろ／＼、ぐつすりと寝た。

　御飯がおいしい――食べるものが何でもうまい――それは人生の幸福中の幸福である。

　　五月一日　雨。

　早起、身辺整理。ありがたい手紙が二つ、緑老から、黙君から、それは涙のこぼれる手紙だつた。秋穂まゐりが出来ないので湯田へ行く、お大師様の御利益よりも温泉のそれがテキメンだつた。

　払ふべきもの払へるだけ払ふたうれしさ。

　　五月二日　三日　雨――曇――晴。

　湯田滞在。時計を売つて、酒と菓子とをルンペン君に奢つた、みんないつしよにうたうて笑つた。

　　五月四日　五日　晴。

　帰庵。がつかりして寝つゞけた。――

　何物にも囚はるゝなかれ。殊に自己に対して。

　　五月六日　晴。

　五月、あゝ五月。やつと寝床から起きあがつた。――灯火なし、眠れない、苦しかつた。

　　五月七日　曇。

　身心不安、食慾減退。樹明君から来信、よい事があるといふ、夕方から出かける、御馳走を頂戴する、敬君待つても来らず、泊る。

　　五月八日　晴――曇――雨。

　未明帰庵。父の第十七回忌、ひとりさびしく読経し回向する、私はほんたうに不孝者であることを痛感した。……身心沈静、やりきれなくて街へ出かけて酔ふ。春雷、身心ぐた／＼になつて、それでも戻つ

て来た。

味ふこと　　　　　（酒を飲む態度）酔ふこと

五月九日　雨。

起きあがれない、……寝床にもぐりこんだまゝで悶えるばかりだ。敬君来庵、酒と下物を持参、飲んで話してゐるうちに、だいぶ身心がやすらかになつた、友はありがたいもの、酒はうまいもの。今日は樹明君を待つたがたうとう来てくれなかつた。

五月十日　晴。

すこし落ちついて来た、よく食べてよく睡れた。

五月十一日　十二日　十三日　曇。

こんとんとして何物もなし。——

五月十四日　曇。

一切放下着、流るゝまゝに流れよう。……………………なりきれ、なりきれ、何でもよいからそのものになりきれ。樹明君を訪ねて飯米を貰うて戻る、南無樹明大明神！午後、Ｎさん来庵、夕方、樹明君来庵。

粗末にするな、自分を——悉有仏性を信ずるからには。

無にはなれるが、空にはなか／＼れない。

死中の生地獄の極楽

求むるな、貪るな酔を、酒を！

無執着、無抵抗

五月十五日　十六日　十七日　十八日

湯田滞在、山口行乞。まるでムチヤクチヤだつた、それはムチヤクチヤだつたけれど、私としては一切を投げだして死生の境を彷徨したものだつた。断——空——暗——明——黙

五月十九日　廿日　廿一日　廿二日

老いてます／＼醜し。

五月廿三日　曇――雨。

早起、身辺整理。無、無、空、空。――午後、樹明君来てくれて酒を買うてくれる、ありがたい、ほろ酔機嫌で湯田へ行く、ほんに温泉は身心をしづめてくれる、ありがたい。

┌つゝましく、くよ／＼せずに└すなほに、けち／＼せずに

五月廿四日　雨。

バス代がないから（昨夜はＹ店の主人に切手を銭にかへて貰つて宿料を払ふたのだが）はだしで歩いて戻つた、よかつた。斎藤さんから近著東洋人の旅が来てゐた、さつそく読み初めた。

五月廿五日　晴。

終日読書。新緑がいよ／＼うつくしい、鶯がよい声でうたふ。東洋人の旅はなつかしい読物だつた、著者と膝を交へて語るやうな親しさを味つた、フインランドの旅、アイルランドの旅が殊によいと思ふ。

澄めば濁り、濁ればまた澄む。明暗の境澄みきれ合掌――無我

五月廿六日　曇。

いつものやうにきちんとＫから送金、ありがたいぞ。買物いろ／＼、払へるだけ払ひ、買へるだけ買ふ。また湯田へ。――

五月廿七日　曇。

滞在。酔うてゐる、落ちついてゐる。……

五月廿八日　曇。

今日も歩いて帰庵。

五月廿九日　晴。

Ｎさん来訪、しばらく話してから、いつしよに米屋まで出かける、Ｍ店でちよいと一杯ひつかけました。身心沈静、落ちついて読む。投げだせ、投げだせ、投げだすより外に私の助かるみちはない。

□枯淡な句と幼稚な句とは一見して同一なものゝやうに思はれる、その距離は紙一枚に過ぎないかも知れない、しかし、――しかしである、作者は幼稚を脱して枯淡に徹するまでに数十年の血みどろな精進をつゞけて来たのである。□自然に即して思想が現はれる、思想を現はすやうに自然を剪裁するのではない、――これが私の現在の句作的立場である。

五月三十日　晴。

早起、身辺整理、久しぶりに身心明朗。暮羊君久々にて来庵、病気全快は何より、例の如く無駄話、ついていつて雑誌を借り酒を貰うて戻る（君はまだ飲んではいけないさうで）。十二時頃、樹明君来庵、旦へ行かうといふ、同行はＳさんＫさんたち（旦は、私の第二の故郷である、そこの鯛を食べ酒を飲むことは楽しい）、お仲間入したいけれど会費三円が出来ない、Ｋ店で借らうとしたが、月末でどうにもならないさうである、残念ながら参加中止、帰庵して、例の一本を傾けた、寂しかつたが、けつきよくは、よかつた、よかつた、酔ひました、ほろ／＼とろ／＼、そして湯田へまた参りました（Ｙ店で壱円借りまして）、熱い湯、熱い湯、熱い湯に浸ると、身心が蕩けるやうに快い。

哲学から句は生れないけれど、句には哲学があつてもかまはない。私は私の私であれ！

五月三十一日　曇。

午前帰庵。留守に、樹明君が酔つぱらつて来たらしい。アルコールを止揚せよ、先づ焼酎を止めろ、酒は日本酒に限る、燗してちびり／＼飲むべし、時としてぐい／＼ビールを呷るもよからう。水がうまい、水を飲んで胃腸を洗ふ、いや身心を洗ふ。

六月一日　晴。

更新第一歩。草のめざましさ、小鳥のほがらかさ。Ｋからの酒を頂戴する。今日は今日のお天気、今日は今日の事をなせ。死線を越えて無我境を行く。身辺整理、発熱の気味で。――

芸術的自信はなかるべからず、断じて自惚はあるべからず。

自己矛盾――自己嫌忌――自己破壊――

六月二日　晴――曇。

青い朝が動いてゐる、暁のすが／＼しさ、みづ／＼しさ、身心清澄、創作衝動を感じる。鶉衣を読む、うまいことはうまいが、あまりにうまい。洗濯、草苅、何といふ役に立たない肉体だらう！石油買ひに出かける、ついでに入浴。やるせない手紙をＳに送る、あゝ。数日ぶりに新聞を見る、予期の如く林内閣は退却した、そして大命は近衛公に降下し、公は拝受した、これで行き詰つてゐる非常時も非常時として安定するだらうと誰もが予期してゐる。国家は国民の社会である。朝晩はまだ春だが、日中はまつたく夏だ。ありがたくおいしく御飯をいたゞいた。旅、旅、旅に出たい、そしてワガママをたゝきつぶしたい（かなしいかな、私は行乞の旅をつゞける元気をなくしてしまつてゐる）。不眠、しようことなしの徹夜読書、アブラが切れたのだらう。東の空が白むのを待ちかねて起きる。――

詩人は謙虚でなければならない、見よ慢心せる俳人のいかに多きことよ。増上慢はネコイラズみたいなものだ。

『飯と酒と水』　（父親の出奔、帰郷、家出）『半自叙伝』『うさきのころも』

六月三日　曇。

沈静。――下の家の主人が来て草を刈つてゐる、朝風にそよぐ青草をさくり／＼と刈りすゝむ心持は快いものであらうと思ふ。今日もまた、郵便も来ないのか！午後、ポストまで出かけたついでに、農学校の畜舎に寄つて新聞を読む、至るところ近衛内閣万歳である、誰もが暗さに労れてゐるのだ。けふも発熱の気味、からだのどこかに異変が起つてゐるらしい、それもよからう、仕方がないが、どうか痛まないやうに。……蒸暑い、柿の青い葉が時々落ちる。二夜分ねむれた、いやな夢を見たけれど。

放てば手に満つ此語句に道元禅師の真骨頂が籠つてゐる、おのづから頭がさがる。

昨日は昨日の夢。今日は今日の現実。明日は晴か曇か、それとも雨

か。

六月四日　晴。

好い季節だ（いつでも好季節といふのは観念としてゞある）。好すぎる季節だ。おいしい御飯そのものだ。句稿を整理しつゝ、自分の未熟なのに呆れ、懈怠がちであるのを恥ぢた、おい、山頭火、しつかりしろよ。午後は畑仕事、すぐ掌にマメが出来る、まことに／＼情ない肉体ではある。夜は芭蕉を読む、芭蕉の物品は読めば読むほど味がふかい、と今更のやうに感じ入つたことである。——遂に無芸大食にして終る——自弔の一句である。卑しい夢を見た、私の内心には、人を疑ひ人を虐げる卑しさがあるのだ、恥づべし、鞭つべし。

後記——

□柿の葉のうつくさはないが——　柿の蔕、柿腸□ひとりの句二つについて——□旅の句、吟行句□「他人の午蒡で法事をする」　御礼申上げる

六月五日　曇——雨。

梅雨近し。第五句集柿の葉、やうやく脱稿、さつそく大山君に送つてほつとする、パイーやるところだが、銭がないし、借るところもないし、やつとＹ屋で一杯ひつかける、この一杯には千万無量の味があつた。割り切れない人生、どうやらかうやら、へゞれけ人生からほろゑひ人生へ。——大根を播く、時知らず大根といふ名はわるくない。私の生活態度はあまりに安易であつた、生活内容が貧弱になるのもあたりまへだ。今晩は一碗の御飯しかない、お茶を熱くして蕗を味はひつゝ食べた。夜になつて雨、落ちついて読書。

私の立場としては、広くよりも深く新よりも真を求める。乞食することは、今の私として、詮方もないが、いはゆる乞食根性には落ちたくない、これは矛盾だらうか、否、否、否。

六月六日　雨、終日終夜降りつゞけた。

梅雨らしく降る、雨もわるくないけれど、方々の雨漏りには困る。朝飯なし！　渋茶ですます。ポストへ、Ｉ店で米を借りる、胡瓜も安

くなつた、大五銭小二銭、小を二本買ふ。捨猫がしきりに鳴く、鳴いて鳴いて鳴きつくして死ぬるだらう、私はどうすることも出来ない。自然といふものについて考へる。……またポストへ、ついでに入浴、そしてＭ屋に寄つて一杯ひつかける、Ｋ店で煙草を借る、なでしこが切れてはぎを借る、十三銭の浪費である。身辺を整理した気持好さで、アルコールのおかげでぐつすりと眠れた。

こらへる、——私はこらへなければならない、こらへることのできない私を呪ふ。未熟と未完成とは別物だ。芸術に国境なし、しかし民族の血肉はある、そのどちらも真だ。感傷は反芻する——と、ルナアルは日記に書いてゐるが、私の感傷は反噬する。自信をなくした日、こんな寂しいことはない、そのときほど、自分をみじめと思ふことはない。

六月七日　雨、雨、雨。

五時起床、熟睡の朝の軽快。——とかく功利的に動きたがる——省みて恥づかしい。落ちついて読書、生きてゐるよろこびを感じる、飛躍前の興奮を感じる、うつぼつとして句作衝動が沸き立つ。句が作れなくなつたとき、酒が飲めなくなつたとき、その時こそ私の命が終る時である。甘えるな、甘えるな——媚びるな、媚びるな——自分を甘やかすな、他人に媚びるなと自から戒める言葉である。日々の二つの幸福。——何でもおいしく食べられる、何を食べてもうまい。感情を偽らないこと、すなほに、ひたむきに感情を表白することが出来る（勿論、比較的に）。第二日曜六月号到来、はつらつたるものがある、さつそく牧句人へ手紙を書く。夕方、ポストへ、それから豆腐屋へ寄つて二丁借りてくる（酒屋へは寄れなかつた）。豆腐の味、——淡如水如飯。夜、心臓がしめつけられるやうに苦しくなつたので、いそいで句帖と日記とを書きつけたが何事もなかつた。いつも覚悟は持つてゐるけれど、かういふ場合の、孤独な老人はみじめなものだらう！昨夜は宵からあんなによく睡れたのに、今夜はいつまでも睡れない、うつら／＼してゐるうちに、いつとなくみじか夜は明けてしまつた。……

俳句は——自由律俳句はやさしくてそしてむつかしい。門を入るは

易く、堂に上るは難く、そして室に入るはいよ／＼ます／＼難し。句はむつかしい、特に旅の句はむつかしい、と句稿を整理しながら、今更のやうに考へたことである。時代は移る、人間は動きつゞけてゐる、句に時代の匂ひ、色、響があらば、それはその時代の句ではない。貫き流るゝもの、――それは何か、問題はこゝによこたはる。○その花が何といふ名であるかは作者には問題ではない、作者は花そのものを感じるのである、しかし、その感動を俳句として表現するときには、それが何の花であるかをいはなければならない（特殊な場合をのぞいて）、こゝに季感の意義がが」は底本では「季感の意義が」］あると思ふ。○都会人にビルデイングがあるやうに田園人には藁塚がある、しかし、煎茶よりもコーヒーに心をひかれるのが、近代的人情であらう。○俳句ほど作者を離れない文芸はあるまい（短歌も同様に）、一句一句に作者の顔が刻みこまれてある、その顔が解らなければその句はほんたう解らないのである。○把握即表現である、把握が正しく確かであれば表現はおのづからにして成る、さういふ句がホントウの句である。

　　六月八日　雨。

　降つた降つた、降る降る。武二君へ手紙を書く、層雲経営について。ありがたし、多々君の手紙、ほんたうにありがたかつた、君の温情が私の身心にしみとほつた。ポストへ、そして買物いろ／＼、これだけあれば当分凌げる。……身辺整理、私の変質的発作は整理出来ないものだらうか、否、きつと整理してみせる。つゝましくすなほな日であつた。午後、またポストへ、ついでに入浴、髯を剃り爪を切り、さつぱりした。樹明来信、宿直だから来遊を待つ、おもしろいニユースがあるといふ。六時のサイレンを聞いてから出かける、ニユースといふのはＫさんの事だつた（彼に幸福あれ）、いつものやうに夕飯をよばれ（無論、般若湯も！）十時頃帰庵。今日の新聞記事、――無想庵が巴里に於ける話は悲しかつた。今日は茄子と胡瓜とを植ゑた。人の短を説く勿れ、己の長を語る勿れ、合掌。

　層雲はましく第二期に入つた、今後の運動は若い人々のはたらきである、第一期の仕事に残つてゐるものがあるならば、それは老人たちのつとめである。層雲俳句に対していつも慊らなく感じることは、野

性味のないことである（野心的な句はさうたう見うけるが）、小さいナイフのやうな句ばかりで大鉈のやうな句がない。

六月九日　曇――晴。

やつと霽れた。天地荘厳――私は沈欝。――せめて、余生をなごやかに送りたいと思ふ。菜を漬ける、何といつても食料品として最も安価なのは塩だ（私は一年間に十五銭の塩を使ひきれない）。読書はよいな、今日も悠々として書を読んで暮らした。石油買ひがてら散歩、或る畠の畔からコスモスの苗を抜いて来て植ゑる、この秋は庵のまはりが美しいだらう。途上に句はいくらでも落ちてゐる、それを拾ひあげることが出来るのは俳句的姿勢だ。心いよ／＼深うして表現ます／＼直なり、――この境地は句に徹しようと不断に精進するものでないと、よく解るまい。

塩鮭のあたま

あのルンペンはどうしてゐるだらうか。

飲みすぎることは自制しえないこともないが、さて食べすぎることは自然に任す外ない。私は日本人であることを喜ぶ、現代に生れたことを喜ぶ、俳句を解することを喜ぶ。老醜たへがたいものがある！二郎！　お前は此一筋を持たない無能無才だつた、つながるものゝないお前は自殺するより外なかつたのだ！　ああ。

六月十日　晴。

時の記念日。早起、掃除も御飯も日記書入も何もかもすんでから、六時のサイレンが鳴つた。なか／＼寒い、ドテラをかさねる。自然にぢかに触れること、――作者にとつては、その事が何よりも大切である。裏藪で今年最初の筍を見つけた。ほんたうに日が長い、終日無言、読んで楽しむ。啄木鳥が来た、お前も寂しい鳥だ。

今日の買物一金五銭　　菜葉一把一金三十四銭　　ハガキと切手一金十六銭　　醤油四合一金三銭　　酢一合一金十銭　　酒一杯一金九銭　　花王石鹸一金十銭　　塩鯖一尾一金十五銭　　石油三合一金十三銭　　若布五十匁一金九銭　　味噌百匁

六月十一日　晴――曇、入梅。

未明起床、身心清澄。――完全に私は私をとりもどした、山頭火はたしかに山頭火の山頭火となつたのである。――落ちついて読んだり書いたり。藪を探して小さい筍二本貰つた、さつそく煮て食べた、うまかつた。昼御飯をすましてからポストへ、ついでに学校に寄つて、樹明君に会ふ、新聞を読み、豚と豚の仔を観る。豚！　十匹近い仔！　そこに自然の或る姿を発見する！小西さんからよい返事があつた、早く快くなりたまへ。あるだけの米――五合あまり――を炊く。――芸に遊ぶ――現在の私はこの境地にゐる。まことに嫌な夢を見た、私にはまだそんなに未練があり執着があるのか、そんなにも私は下劣醜悪な人間なのか、――悲しくも淋しい一夜であつた。

┏自然┃　　　　　　　人間認識┗歴史（社会）　　（時代）┏自然　┏物　┏有限　┏存在┗人間　┗心　┗無限　┗実在観る――認識する――描く、詠ふ、奏でる

六月十二日　曇――少雨――晴。

沈静。――午前、ポストへ、一杯ひつかける、味噌を買ふ、財布には一銭銅貨が二つしか残つてゐない。梅雨らしく晴曇さだまらず、それでよろしい。午後、晴れたので散歩、山越えして伊藤さんを訪ねる、幸にして在宅、二時間ばかり話して帰る、小さい壺と、そして白米一升を貰つて（米を無心したときは内心恥ぢ入つた）。伊藤さんは交れば交るほど味の出てくる人物らしい、私と意気投合するかも知れない（私と同様に独居生活で、そして息子自慢だ、君は外に働きかけんとし、私は内に潜みがちになるが）、とにかくうれしい訪問であつた。夕方、暮羊君来訪、しばらく話す。早く寝床に入つたが寝苦しかつた。

私の場合では、貧乏はむしろ有難い、若し私が貧乏にならなかつたならば、一生、食物のうまさを知らなかつたらうし、また、飲んだくれて早死してしまつたらうから。……貧楽である。※私の生活態度を食物の場合で説明すると、――いふところのうまい食物でも食べる人間が健全でなければ、うまいと味ふことは出来ない、それと同様に、いはゆるまづい物、いや、うまくない食物でも身心が調うてゐれば、

おいしく、ありがたく味ふことが出来る、――それが人生の味だ。与ふれば与へらる、捨てると拾はせられる。することはさすこととなつてかへつてくる。

――行乞僧の言葉　┌なる　└する

六月十三日　晴――曇。

旧端午、日曜、日々好日だけれど、今日は好日中の好日だ、誰かお団子をくれないかな。――堪へきれないから飲みまはる、飲みまはるからいよ／＼ます／＼堪へきれなくなる――かういふ愚かな弱さはいのちがけで、からうじて揚棄したことである。朝、ポストへ、途中、一杯やりたかつたがぐつとこらへた、こらへるより外なかつたからでもあるが。正午のサイレンが鳴つて、樹明君来訪、つゞいて暮羊君も――、そして始まらなければならない酒が始まりました！　極楽々々。今日も鷹が裏山でしきりに啼く。暮羊君から、古い夏帽子を頂戴した、感謝々々。夜、Ｋ店でバス代宿銭を借りて湯田へ。Ｓ屋に泊る、隣室で犬も喰はない夫婦喧嘩がうるさかつた、私は酔うて熟睡。

句作雑感　――実作者の言葉

六月十四日　曇。

のんびりとして朝湯、そして朝酒。バスで、九時頃帰庵、やつぱり庵がよろしいな。私は湯が好き、温泉浴を何よりも好いてゐる、うれしい時かなしい時、さびしい時、腹が立つた時、むしやくしやする時、私は温泉へはいる、――私がしば／＼湯田へ行くゆゑんである。

六月十五日　晴。

或は空梅雨かも知れない、なか／＼降らない。つつましい一日だつた、考へることも食べることも！午後、湯田へ行く、途中はまつたく夏日風景であつた。泰山木の花を観て、緑平老を懐かしがつた。裏藪の筍がによき／＼のぞきはじめた、当分、筍のうまさを満喫することだらう。読書にも倦いて、そこらを散歩する、もう地虫が鳴いてゐる、イチハツ、ツツジ、ダリヤ、等々をもらうて戻る。寝苦しかつた、それだけ私はなつてゐないのだ。

□俳句は態度の文学といはれる、動かしがたい至言である、だから道としての俳句といふものがまた成り立つ。□年中行事の一つとして、春の彼岸に行はれるといふ日のお伴はおもしろい、土落しなども。□生死——行乞、犬——無心無我——

六月十六日　晴れたり曇つたり、ちよんびり降つたり。

机を北窓に移す。初めて蚊帳を吊る。みんみん蝉も最初の唄をうたつたやうだつたが。筍がぞく／＼出初めた、今までは毎日蕗を食べたが、これからは毎日筍を食べることだらう。蕗から筍へ、——私の季節のうつりかはりである。待つものが来ない、失望落胆。飢が私をして学校の米を貰はしめた、樹明君に対しても（私自身に対しても）心苦しいといつたらなかつた。いつまでかうした生活がつゞくのか、私はどこまでだらしがないのだらう。飯ほどうまいものはない、私たちのやうな日本人には。腹いつぱい食べて、空を仰げば、今日の日輪かゞやく。W老人からトマト苗を分けて貰つて植ゑつける、五本、いつしよに薯やら葱やら貰つた、感謝。——魚売の声よそにふけ青嵐——これは也有翁の閑居吟であるが、私の場では、

豆腐屋のラツパも寄らない青葉若葉

である、呵々。

六月十七日　曇——晴。

早起、なか／＼降らない。ぼつ／＼田植が始つた。亡弟二郎の祥月命日（私の推定日）、読経焼香して彼の冥福を祈つた、彼はまことに不幸な正直な人間であつたが。——樹明君へ告白の手紙を書く、かういふ手紙を今日書いたといふことも何かの因縁だらう。午後は散歩、三時間あまり、新町から椹野川土手へ、途中、Ｓ老人の店で一杯借りる、月草を折つて戻る、昼顔は見つからなかつた。米がなくなつた、煙草もなくなつた、石油もなくならうとしてゐる、生命だけが、幸にして或は不幸にして、なくならない！

六月十八日　晴。

早起して身辺整理、悪筆を揮ふたのもその一つ。一度、学校まで出かけたが、樹明君に逢ひにくゝて新聞を読んだゞけで戻つた、そして

また出かけて、やうやく樹明君に逢ふ、君はいつものやうに万事飲み込んでゐて、米をくれる、酒を魚を御馳走してくれた。最初の酒と魚とはほんにありがたかつた、おいしかつた、Ｆ屋での散財はおもしろかつたけれど、つまらなかつたと思ふ。とにかく私は今月になつて初めて刺身を食べ、三月ぶりに芸者と遊ぶほどののんきさを持つたのである。まさに樹明大明神！　南無樹明菩薩！

　　六月十九日　曇。

　朝寝。——何しろ一時過ぎて帰つて来て、それから水を汲むやら米を磨ぐやら、……とやかくするうちに東の空が白みだした、……そして寝床にはいつた。今朝、考へて、やつぱり昨夜は飲みすぎだつたと思ふ、今までのやうにダラシなくはなかつたけれど、浪費は浪費として反省すべきものがあると思ふ、すまなかつた、／＼。落ちついて読書。

　　六月廿日　晴。

　ちつとも降らない梅雨季。Ｚさんがやつて来て、窓の筍——若竹になりつゝあつたのを切り採つた、私の朝夕の楽しみを奪はれて、私は憤慨した、Ｚさん、自然人生に対してデリカシーを持つてゐない人間は軽蔑すべきかな。門外不出、終日無言。

　　六月廿一日　晴。

　いよ／＼降らない。ポストへ、そしてまた湯屋へ。途中、Ｏさんの豚小屋を見物した、彼等は食べて寝て、そして子を生んで、最後は屠られるのである、彼等がガツ／＼食べてゐる有様や、数多くの仔にせがまれてゐる有様を見てゐると、何となくアンタンたるものを感じる、人間だつて、けつきよくは、おんなじ宿命を負はされてゐる！のそり／＼と藪から蟇が出て来た、お前も一匹、さびしいか、私は一人、さびしいよ。——酒なし煙草なし、毎日、白粥をすすつてゐる、昨日も今日も、そして明日もまた。——夜、久しぶりにＮさん来訪、月のさしこむ縁で話す、タバコを喫はせて貰つた。小遣銭のない生活はよろしくありませんね。

　　六月廿二日　晴。

まづしく、つゝましく、わびしく。散歩、面談の用事が出来て谷川君往訪、ついでにＮさん往訪、酒と飯とをよばれる、画賛を書かされる、それから沙魚釣、釣れないので、鰕と蜆貝とをあさつて戻つた。谷川君来訪、酒と魚とを持つて——酔うて二人は街を飲み歩いた、——酔中彷徨の果ては——脱線しないで無事帰庵、——よかつた、よかつた。

六月廿三日　曇。

昨夜の延長だ、酒、酒、恥、恥、夢、夢。

六月廿四日　晴。

終日無言行。おとなしく読書。反省がちく／＼身心を刺す。……

六月廿五日　曇。

身心沈静。Ｋから、いつものやうにきちんときまつた手紙が来た。さつそく出かけて、払へるだけ払ひ、買へるだけ買ふ。Ｋよ、ありがたう、ありがたう。借金を返した気持は何ともいへない。午後、またポストへ出かける、そして湯田まで思はず行つてしまつた。酒と温泉とに対しては私はグニヤグニヤフニヤフニヤだ！Ｋさんから菊正一本頂戴した、悪筆の代償として。Ｓ屋に泊る、アルコールのおかげで、温浴のおかげで、そしてまた同宿連中のあけつぱなしのＹ談のおかげで、ぐつすりと睡れた。

六月廿六日　雨、雨。

宿酔。——何だか身心が変調なので、いそいで帰庵。フラフラする。——

六月廿七日　雨、雨、雨。

臥床、読書、自己を省察して冷汗を流す。

六月廿八日　曇、時々晴。

畑仕事、胡瓜やトマトに垣をこしらへてやる。昨日も今日も閑居、読書三昧、無言行。酒なく煙草なく燈火なし。……

六月廿九日　曇、そして雨。

朝、いつぞやの花売爺さんが来て、縞萱を所望した、代金として八銭くれていつた。ポストへ、一杯ひつかける、石油を買ひ煙草を買ふ、みんなカケである。くちなしの花を活ける、くちなしの花はよいかな。Ｊさんが筍をすぽり／＼と切る、彼の所有だから文句はいへないけれど、人間には審美的感情がないと困るな！降る／＼、降れ／＼、梅雨は梅雨らしく降るのがよいとは思ふけれど、屋根の漏るには閉口する、家だけではない、私までが漏るやうな。――五年前――私がこゝに住みついてから※木した夾竹桃が最初の花を持つた――その頃の自分が考へられる、私の身心は荒んでしまつた。当分は禁足の事。――――奇妙な夢を見た、それはまことにグロテスクな夢だつた、私の胸には悪獣が穴籠りしてゐるらしい。

┌求むるなかれ│貪るなかれ└持つなかれ┌没我│忘我└無我

六月三十日　雨。

今日も郵便が来ない、さらにさびしい日である。先日から新聞を購読してゐる（今日までとてもどこかで読まして貰つてゐたが）、新聞といふものはすでに私たちにとつては、生活の必需品となつてゐる、私は酒を飲むやうに新聞を読むのである。読売はなつかしい新聞だ、今日此頃の読売は新興の意気ハツラツとしてゐる。終日読書、まことに日が永い、いや、私には夜さへも短かくはないのだ！また夢を見た、――旧友Ｓ君に邂逅して愉快に談笑した、これも老情のあらはれだらうか。

夢のない人生は寂しすぎる！

七月一日　曇――晴。

早起、沈静。今年も半分過ぎ去つてしまつた。菜園を眺めて、今更のやうに大地と太陽とのありがたさを思ふ。午後ポストへ、ついでに入浴、Ｍ屋で一杯、うれしいうれしい、暑い暑い。大阪毎日新聞による、黒龍江畔風雲急らしい、どうぞ戦争にならないやうにと人民のために祈る。私は不死身に近い肉体の持主だが、病的健康とでもいふのだらうか、あんなにムチヤクチヤで、こんなにガンキヨウである。き

り／″＼すが鳴きだした、金亀虫が初めてやつてきた（地虫はすでに鳴いてゐたが）。毎日、しづかな、あまりにしづかな日がつゞく、こんなではいつカンシヤクがバクハツするかもわからない、用心々々。疳癪は必ずしも騒がしい時うるさい場合にのみ起るものではない。蟻が塩物に集まつてゐた、まことに辛いものにも蟻である（だつて甘いものなんかないではないかなどと、蟻よ、逆襲することなかれ！）。夕方、さびしいから、そこらをぶらつく、やつぱり慰まない、人間は人間の中、人間には人間がおもしろい。几董、沼波、大魯の句を鑑賞する。不眠、今夜はとても蚊が多い、二度も三度も蚊を焼いた、老いたるかな、山頭火！今夜の夢は妙だつた、自動車がこんがらがつて、私もつきとばされたが。――

　物を尊ぶ。――貨幣にごまかさるゝなかれ。金銀にまよふなかれ。米を、酒を、水を、魚を味へ。物そのものの味。――

　　七月二日　晴――曇。

　今朝は私も早く起きたが新聞の配達も早かつた。落ちついて読書、其角、嵐雪鑑賞。午後は裏山を逍遥する、心臓の弱さを痛感する。小松二本、俳句二章を拾ふた。すつかり夏日風景になつた。岔水君から奥さんお手製の折紙を送つて来た、曰く鮹の道、曰くコン助、曰くピヱロ、これも庵中無聊を慰めてくれる。夕方、Ｎさん来庵、閑談暫時、ほいなくそのまゝさよならをする。

　句作の道は、生活の純化にある。志すところは無我境逍遙である。

　　七月三日　好晴。

　眼が覚めるとすぐ起きた、火を焚きつけたり掃除したりしてゐるうちに明けてきた。読書三昧。其角の作はうまいとは思ふけれど、芭蕉の句のやうに身にせまり心をうつものがない、私は其角を好かない、去来を好く。――みんないつしよに――草も木も虫も鳥も――朝の歌をうたはう。――まことに好季節、私は夏を礼讃する、夏は貧乏人でも暮らしよい、年寄でも凌ぎよい。――どうせ野ざらしの私であらうことは覚悟してゐる、せめて野の鳥や獣のやうに死にたいものである。――菜園に肥料を与へたり害虫を殺したりする、何かと考へさせ

られることが多い。――私のやうな人間が、涼風に臥してのんびりしてゐることは、ほんたうに勿躰ない、省みて慎しまなければならない私である。――自堕落に身を持ちくづした私で、さういふ私だつたから、規律の尊さが身にしみてきたのであらう。午後はそゞろあるき、ポストを口実にしてＭ店まで出かけて一杯二杯、ほんにサケノミはいやしい。凝心はよい、時には放心もよい。夢いろ／＼、夢は覚えてゐてもすぐ忘れてしまふからうれしい。

七月四日　曇つたり晴れたり。

曇ると梅雨はまだすまないと思ひ、晴れると梅雨はもうあがつたなと思ふ、――人間の気分のうごきは妙なものである。閑寂をしみ／″＼味ふ。菜園観賞。――郵便が来ない、寂しいなあ。ありつたけの米――三合ばかり――を炊く。畑人よ、そんなに馬を叱るな。山の方で鳶がしきりに鳴く、哀切な声だ。一杯やりたいなと考へてゐるところへ、どうだらう、敬君来訪、いつしよに出かける、樹明不在、Ｆ屋で飲む、Ｓ君も仲間入、そこへまたどうだらう、樹明君加入、ビール、サイダー、酒、トマト、刺身、バナナ、ゲイシヤガール、アアソレナノニ、――それから、それから、それから、……十時頃ダツトサンで帰庵、敬君宿泊、ぐつすり睡れたが不快なものがあつた。

七月五日　曇、時々雨。

二人とも朝飯なしでお茶をすする。敬君は九時のバスで県庁へ、私は読書。身心重苦しい、死なゝいから生きてゐる、――といつたやうな存在。飯がない、米がない、袋を持つて、学校に樹明君を訪ね、米を貰つてくる、これで当分は安心。甘草（カンゾウ？）が咲いてゐたので生ける、忘れ草といふ名は気に入つた、何もかもみんな忘れてしまへ。暑い、蒸暑い、遠く雷鳴、いよ／＼梅雨もあがるらしい。無知の世界か、無恥の生活か。――放下着、――善悪是非も利害得失も生死有無もいつさいがつさいみんないつしよに。――菜園にて――

山頭火が猿葉虫を殺しつゝ、「外道め」猿葉虫は殺されつゝ（叫ぶだらう！）「人間の奴め」

宇宙は生々流転する、――昨日の彼は明日の私だらう。嵐雪の句は

うまくて好きである。

　　七月六日　曇。

　明けるのを待ちかねて起きる、虫がしきりに鳴いてゐる、流転の相として一切を観ずる、万物は変化のあらはれである。郵便は来たけれど、——失望。——ポストへ、焼酎一合、豆腐二丁。パイーの世界はうれしい！時知らず大根を播く、こんどはうまく大根になつてくれるやうに。久しぶりに豆腐を味ふ。蠅を打つにも、全心全力で打てば、めつたに打ちそこなうことはない。みん／＼蝉が鳴きだした、まだ短かくて下手だが私の好きな声だ。寝苦しい。……

　┌くよ／＼せずに事を運べ。└けち／＼せずに物を尊べ。

　　七月七日　曇——晴。

　七夕祭、山口は賑ふだらう、湯田へ行きたいがバス代なし。正法眼蔵拝読。Ｉ家の人から馬鈴薯を貰ふ、私は薯類をあまり好かないけれど、それを下さる人情をありがたく頂戴する。ハダカになりだした、世の中ハダカでよいわいな。午後、油買ひに、いつものおぢいさんおばあさんの店で、焼酎一杯ひつかける、十二銭天国だ。まことにこれやこの酒仏飯仏そして水仏。夜は芭蕉俳句鑑賞。芭蕉はやつぱり偉大な詩人であつたと痛感する。

　泥落し　農村年中行事の一つとして

　　七月八日　晴、時々驟雨。

　夏の朝のよろしさ、みん／＼蝉のよろしさ。身辺整理、掃除したり洗濯したり。昼も夜も漫読する。午後、夕立らしく降る、雷鳴はげしく、二句おとしていつた。街の風呂にはいつて欝魂を洗ふ。暑い、暑い。夕御飯はシヨウユウライス！ほんに、ほんに、ぐつすりと寝た、近頃めづらしい熟睡だつた。

　○魂の詩○印象を離れないで印象を超えたるものの表現——暗示——象徴

　　七月九日　曇、雨をり／＼。

澄み徹る寂しさ。——其中一人、まつたく無言。

七月十日　曇、微雨。

鼠がやつてきたらしい、庵主自身食べるものは此頃は塩だけしか残つてゐないのに。……塩を味ふ、飯そのものの味。落ちついて読書。北支那の形勢不穏、私は人知れず憂慮する。桔梗がいちはやく一輪咲いた。めづらしく裏山からホトトギスの声。午後、ポストへ、ついでに入浴、ぢつとこらへてゐたがこらへきれなくなり、M店へまはつてちよいと一杯！夜、Nさん来訪、くらがりで閑談しばらく。

七月十一日　曇。

おもひだしたやうに時々ふる。早起、日記をつけてゐるところへ、樹明君がさうらうとしてやつて来た、その素振があたりまへでない、また脱線沈没したのだらう、かなしくなる、しばらく寝たり起きたりしてゐたが、さうらうとして帰つていつた、さびしいな。此頃は郵便も来ないのか！プチブル奥さんの会話を聞くともなく聞く、——このごろは食べられないで困ります、食べい食べいといはれるんですけど、——私は考へる、——私は食べられて困る、なるたけ小食でありたいと思ふのに大食して困る、——どちらがほんたうか、どちらが幸福か。——新聞を読んでゐると、自殺者心中者が多いのに胸をうたれる、生きてゐる生甲斐のある世の中でもないけれど、死んでしまへばそれまでだ。午後、ポストへ、ついでにすこし散歩する、新町へまはつて、ちよつくら一杯！あまり寂しくて、やりきれないので、澄太君と緑平老とへたよりを書く。夜はしづかに寝た。

私の境涯は——山頭火即俳句だ。俳句即山頭火とはうぬぼれていないが（それほど省察を忘れてはゐない）。

七月十二日　雨、そして晴。

降つた降つた、漏つた漏つた。今日も塩だけで。——鬼百合を活ける。午後は晴れた。Ｉ店で米を借りる、M店で一杯。とかく気持が虚無的になる、虚無に徹するより外はあるまい。

┏自然　　　　┏人間┗人生　　　　┗虫

┌象徴的把握┐印象│　　　　　│生活感情　　└写実的表現┘

七月十三日　晴——曇。

朝の光——蛙の合唱、蝉の歌、きり／″＼すのうた。盆が来た、とてもさびしい盆である。衆生の恩を思ふ、それを忘れさへしなければ堕落し切ることはない。裏山逍遙。ほどよい枯竹が見つかつたので火吹竹をこしらへる、ずゐぶん現代ばなれの所作だ。夜は芭蕉再鑑賞。寝苦しかつた、いつまでも睡れなかつた。飯と塩、それだけで今日も暮らした。

七月十四日　曇、時々降る。

何よりも早く起きた、そして。——朝は正法眼蔵拝読。さびしいな、こらへきれないで出かける、Ｍで酒を、Ｋで煙草を借りて戻る、ありがたい。

言はむすべ為むすべ知らに極りて貴きものは酒にし有るらし（大伴旅人）

今日、読んだものの中で、この歌に心をひかれた。初めてうちの胡瓜を食べる、うまかつた、うれしかつた。先日から塩飯を食べつゞけてゐるので（時々般若湯を飲むけれど）、身清浄心寂静を感じる。北支の形勢はいよ／＼切迫した、それは日本人として大陸進出の一動向である、日本の必然だ、それに対して抵抗邀撃するのは支那の必然だ、ここに必然と必然との闘争が展開される、勝つても負けてもまた必然当然であれ。夕方、Ｉさん来庵、四方山話をする。草刈さんに家のまはりの草——通行を妨げる——その草を刈つて貰ふ。夜は寒山詩を読む、彼の信念はよく解る、共鳴するけれど、彼の独善的態度には賛じがたい、私は彼の詩のやうな句は作りたくない。今夜も寝苦しかつた、老情でもあらう！

七月十五日　雨、曇、晴。

暗いうちに起きて、何やかやしてゐるうちにやうやく明るくなつた。——たうとう塩もなくなつた！　まさに今年無錐其地だ！藪蚊には困る、私一人にあつまつて私を落ちつかせない、あゝ藪蚊藪蚊、藪蚊をキズにして何両！午後、湯屋へ、そこでしばらくの生をたのし

む。敬君来庵、樹明君往訪、……酒、酒、酒、……それから、それから、それからだつた、――それで、よろしい、よろしい、よろしい。

空観――実相無相、生死去来真実相。

七月十六日　曇。

早起、けさはにぎやかだ、樹明君敬君が泊つてゐる、飲みつかれ歩きつかれて死んだやうに寝てゐる。樹明君は早朝出勤、敬君はゆつくりして帰宅。私は街へ、一杯また一杯ひつかける。理髪入浴、みんなマイナスだ。どうも飲み足らない、といふよりも、昨夜からの酒が身内に滞つて欝結してゐる、また街へ出かけて飲み歩く、幸か不幸かＴ君に逢ふ、いつしよに飲む、とうたう酔ひつぶれてしまつた、それでも戻ることは戻つた、いつ、どうして戻つたかは覚えないが！近来めづらしいへベレケぶりであつた。

綜合単純化虚心

七月十七日　曇。

昨日の今日である、終日独坐無言行。豚小屋の豚のいやしさ、切手を飲みあるくだらしなさ。初茄子（私には）二つ三銭、あまりうまくなかつた。熟睡はうれしかつた。

七月十八日　曇。

草庵無事。寒山詩鑑賞、多少の反感をそゝられる、それは私の偏見だらうか。

七月十九日　晴。

朝風のすが／＼しさよ。花月草紙を読む、常識読本とでもいはうか。物事すべてつゝましく生きること。熊蝉が、むかうの方で、ちよいと鳴いた、今夏最初の声である。午後――学校へ――米屋へ――酒屋へ。米はありがたく酒はうまし、私の目下の慾望はどうかして、米一斗酒一斗備へたいことである、その願求がなか／＼実現されない、そこがかへつてよいところだらう。物価騰貴――日用品が高くなるのは私にもこたえることである。北支風雲ます／＼急、これも私にこたえる。旅、旅、このスランプを救ふものは旅の外にはない、とも考へ

る、夏のをはりからまた四国へでも渡らう。アルコール二十銭のおかげで、ぐつすりと寝た。地獄極楽、それが人生だ。

七月廿日　また曇る、晴れさうにもある。

土用入。けさは朝寝だつた、起きて間もなく六時のサイレンが鳴つた。新聞が来た、郵便が来た、さてそれから。——熊蝉が鳴く、真夏の歌だ、油蝉も鳴きだした、それは残暑の声だらう。胡瓜の花は好きな花だ。夾竹桃はうつくしい、花も葉も、あまり好きではないが。めづらしく裏山で蜩が鳴く、かな／＼かな／＼好きなうたである、かつこうが好きなやうに。夕飯を食べたところへ谷川君来庵、お土産として酒魚ありがたし。酔はない私は酔へる彼を見送ることが出来た、彼を通して、私は私の片影を観た！しばらく滞在してゐた鼠も愛想を尽かして去つたらしい。晴れて良い月夜になつた。

七月廿一日　晴。

正法眼蔵拝読。胃のぐあいが何となくよろしくない、やつぱり飲みすぎだつた。今日はかなり暑かつた、いよ／＼本格的な夏だ。午後、樹明君来庵、つゞいて暮羊君も、——酒すこし、トマトがうまかつた、雑談してめでたく解散、あつぱれ／＼！

逍遙遊

七月廿二日　晴。

熟睡の朝のよろしさ、夏のよろしさ。柿の葉後記を書きあげて澄太君に送る、これで当面の要件が一つ片づいた、まだ二つ残つてゐる、——屋根修繕と揮毫。蚊にも蜘蛛にも困るが、蟻にも困る、蠅には困らない、ほとんどゐないから、ことしは油虫が少ないので助かつてゐる。ちよつとポストまで、汗びつしよりになつた、庵は涼しい、極楽々々。陰暦六月十五日、とても良い月だつた、放哉の句をおもひだした。

こんなよい月をひとり見て寝る

七月廿三日　晴。

妙な夢見がつゞく、身心がみだれてゐることを知る。夏は夏らし

く、私は私らしく。身辺整理、——洗濯、裁縫、等々。徒然草鑑賞、兼好法師は楽翁よりも段ちがひの文人だ。午後、寝ころんで読書してゐるところへ電報来、後藤さんが帰省の途次立寄るといふ、六時の汽車で来て下さつた君を駅に迎へてうれしかつた、同道して一応帰庵、それからまた同道して山口へ行く、途中湯田で一浴、一杯ひつかけさせて貰ふ、そして周二君を訪ねる、三人で街を歩いて、蕎麦とビールとの御馳走になり別れて戻つた。『二人寝る夜ぞたのもしき』といつた風に寝た。

　七月廿四日　曇——晴、また曇つて時々雨。

三時頃目が覚めて四時過ぎ起床。後藤さんは早朝出立、ほんたうにすまなかつた、いつもこれほどではないのに、こんどばかりは文字通りに何のおかまひも出来なかつた、ほんたうにすまなかつた、いろいろお世話になつた、ありがたかつた。今日も徒然草鑑賞、うまい、おもしろい。後藤さんから句集代の前金を貰つたので、街へ出かける。

醤油四合——十六銭焼酎一合——十二銭豆腐二丁——六銭ハガキ十枚——二十銭　その他——

感謝々々、湯田温泉へ行きたいな（昨夜、ちよつと一ヶ月ぶりで行つたことは行つたけれど）。うたゝ寝から覚めると、どこかでレコードがうたつてゐる、何といふあはれつぽい唄だらう、ぢつとして聞いてゐられないので、そこらを歩きまはる、さみしいなあ！今日は小郡の管絃祭、誰もが仕掛花火見物に出かけるらしい、私はひとり蚊帳の中に寝ころんで、打揚花火を見たり月を眺めたりした。……蒸暑い晩だつたが、ぐつすりと寝た。

　七月廿五日　曇。

雨風となつた。——Ｋから来信、ポストへ出かける。街で、払へるだけ払ひ、買へるだけ買つた、そして飲めるだけ飲んだ！（といつたところで、解つたものだ、コツプ酒の十杯も飲んだらうか）湯田へ、——たうとう散歩がそこまで延びた、いつものＳ屋に泊つた。そこで、不愉快な事件にぶつかつた、私は酔うてゐたけれど、ぐつとこらへた、人間はあさましいものだと思つた、彼も私も誰も。

七月廿六日　雨――曇。

酒でごまかして一日をすごした。酔うて戻つた。……

七月廿七日　降つたり、曇つたり。

身心不調、身動きも出来ないほど疲労してゐる。

七月廿八日　雨――曇。

すべて隠遁的に。――孤独と沈黙との生活にかへれ。

七月廿九日　曇。

沈欝たへがたし。四日ぶりに出かける、そしてW屋で一杯ひつかける。北支の風雲がたうとう爆発した、悲痛であるが、詮方のない事実である。現実的現実に直面せよ。

七月三十日　雨。

毎日毎夜、万歳々々の声がきこえる、出征将士を見送る声である、その声が私の身心にしみとほる。夕方、あまりさびしいので、暮羊君を訪ねる、ビールと水密桃の御馳走になる、感謝々々、おかげで、よい睡眠をめぐまれた。

七月三十一日　晴。

どうやら晴れさうな、人も樹木もよろこびうごく。貧乏はつらいかな、銭がないために、人間はどんなに悩み苦しむことか。――この寂しさはどうしたのだらう！塩と胡瓜とを味ふ、塩はありがたい、それをこしらへてくれる人に感謝する、胡瓜はうまい、それを惜しみなくめぐんでくれる自然に感謝する。モウパツサン短篇集を読む、モウパツサンはわるくないと思ふ、チヱーホフほど親しくは感じないけれど。先月はあれほど緊縮して暮らした、今月もこれほどつましく生活費を切り詰めた、しかし赤字つゞきである（もつともちよい／＼一杯ひつかけるから、それが浪費といへばいへるけれど、私にあつては、酒は米につぐ生活必需品である！）。かうして生きてゐてどうなるのか、どうすればよいのか、今更のやうに、自分の無能無力が悲しかつた、腹立たしい。乞食になりきれない弱さ、働いて食べる意力のない

みじめさ。

　改めて書き遺すこと

　丈草

　性くるしみ学ぶ事を好まず、感ありて吟じ、人ありて談じ、常はこの事打わすれたる如し。

　（去来、丈草誄）

　春雨やぬけ出た儘の夜着の穴大原や蝶の出て舞ふ朧月鶯や茶の木畠の朝月夜白雨に走り下るや竹の蟻

　　時鳥啼くや湖水のささ濁り　行秋や梢にかかる鉋屑・蜻蛉の来ては蠅とる笠の中（旅中）・虫の音の中に咳き出す寝覚かな　幾人か時雨かけぬく瀬田の橋　ほこ／＼と朝日さしこむ火燵かな　水底の岩に落つく木の葉かな・物かけて寝よとや裾のきり／″＼す　連のある処へ掃くぞ蟋蟀・淋しさの底ぬけて降る霙哉　交は紙衣のきれを譲りけり（貧交）　　　　はせを翁の病床に侍りて　うづくまる薬の下の寒さかな・朝霜や茶湯の後のくすり鍋（無名庵）　　　　宗長、三井寺にて　夕月夜うみ少しある木の間かな　　俳諧勧進帳　　　　　奉加乞食路通　いね／＼と人にいはれつ年の暮　草臥て烏行くなり雪ぐもり　草枕虻を押へて寝覚めけり

　　┌五句三十一音、短歌形式（五七五七七）　　　　┌奇数形式短│三句十七音、俳句形式　（五七五）　　　　　　　│　うたはぬ形式形│四句二十六音、俗謡形式（七五七五—七七七五）　└偶数形式式│　　　　　　　今様—　　　　　　　　　　　　　　　うたふ形式　└六句三十八音、旋頭歌形式（五七七—五七七）長┌小長歌（七句から十五句）歌│中長歌（十六句から五十句）　└大長歌（五十一句以上）　　　　　┌抒情詩┐　┌主観詩┤　　　│詩│　　　└思想詩│歌│　　　　　　　├叙景的抒情詩　│　　　┌叙事詩│　└客観詩┤│　　　　　└叙景詩┘

第31章
其中日記　11 (新字旧仮名)

　　　　自省自戒節度ある生活、省みて疚しくない生活、悔のない生活。

　孤独に落ちつけ。――物事を考へるはよろしい、考へなければならない、しかしクヨクヨするなかれ。貧乏に敗けるな。――物を粗末にしないことは尊い、しかも、ケチケチすることはみじめである、卑しくなるな。酒を味へ。――うまいと思ふかぎりは飲め、酔ひたいと思うて飲むのは嘘である。

　水の流れるやうに、雲の行くやうに、咲いて枯れる雑草のやうに。

　自然観賞、人生観照、時代認識、自己把握、沈潜思索、読書鑑賞。

　句作、作つた句でなくして生れた句、空の句。

　『身に反みて誠あれば楽これより大なるはなし』（孟子）

　　八月一日　晴。

　早起して散歩した、夏山の朝のよろしさ。省みて恥多く悔多し。借金ほど嫌なものはない、その嫌なものから、私はいつまでも離れることが出来ない。午後また散歩、W店でまた一杯。暑い暑い、うまいうまい、ありがたいありがたい。モウパツサンを読む、彼の不幸を思ふ。

　　八月二日　晴。

　けさも早起して散歩。おちつけ、おちつけ。身辺整理、といふよりも身心整理。ライクロフトの手記を読みなほす、ギツシングと私との間には共通なものがあるらしい。夜、しみ／″＼秋を感じた。どうやら

かうやら私はスランプから抜け出たらしい。とにかく銭がないことはさみしい、いや、悩ましい、払はなければならないものが払へないのはほんたうに苦しい。

八月三日　晴。

早起、仰いで雲を観、俯して草を観る。Ｓへ。——汽車賃がないから歩いて行く、樹明君に事情を話して、手土産としてラツカース二罏借りる。……寂しい悲しい訪問だつた。泊る、東京から小さいお客さんが数人来てゐてうるさかつた。酒はうまかつた。

八月四日　晴。

朝早く防府へ。——佐波川で泳ぐ。Ｍ君を訪ねる。午後、徳山へ。——途中、富海に下車して、追憶をあらたにした。酔うてゐる間だけ楽しい。白船君を訪ふ、忙しいので宿屋に泊めて貰ふ、たゞ／＼酔うてゐる間だけが楽しい。

八月五日　晴。

午近くなつて帰途につく。再び富海に下車して海に浸る。白船君は落ちついてゐる、漣月君は元気いつぱいだ、さて私は。——三田尻駅で、東路君に逢ふ、飲む、酔ふ、泊る。

八月六日　晴。

東路君来訪、朝から飲む、そして酔ふ。夕方の汽車で帰庵。

八月七日　晴。

終日臥床、沈欝たへがたし。

八月八日　晴、立秋。

身心不安、たへきれなくなつて街へ、酔ひつぶれた。

八月九日　晴。

茫々として。——

八月十日　晴。

おなじく。

八月十一日　晴。

暑い／＼。街の米屋へ出かける、死なゝいかぎりは食べなければならない。途上で暮羊君に出くわす、午後、同君がビールやら何やら持ちこんで来て、Ｉさん Ｊさんもやつて来て、愉快に飲む語る。がちや／＼が鳴き初めた。

八月十二日　晴。

だいぶ落ちついた、身のまはりをかたづける。夜、Ｎさん来庵。生死に迷ふ。――

八月十三日　晴。

空々寂々。

八月十四日　晴。

捨身、一切を捨てろ、捨身には生も死もない。――日暮而道遠、吾生既蹉※、――放逸無慚の過去がひし／＼と迫る、ああ。欝々として今日も過ぎ去るか。マツチがなくなつたので――マツチのありがたさを今更のやうに感じる、――四日ぶりに街へ出かけた、Ｓ屋で一杯ひつかけたが、うまくなかつた、うまくない筈だ。最後のものがやつてくる。……

八月十五日　晴。

今日も暑いことだらう、朝から汗が出る。沈欝、ああたへがたいかな。上海爆発！　爆発すべくして、たうとう爆発した。午後、招待されて、宿直室に樹明君往訪、久しぶりの会合であつた、酒とそうめん、風呂、ラヂオと新聞、いろ／＼御馳走になつた。おかげで熟睡。

八月十六日　晴。

暑い／＼、朝、はだかで御飯を炊いてゐるところへ、ひよつこりと斎藤さん来庵、閑談半日のよろこびを味ふ。つく／＼ぼうし、つく／＼ぼうし。泣菫の随筆を読む、おもしろいけれど、どことなく堅苦しい。

八月十七日　晴――曇。

暗いうちに眼覚めて、すぐ起きる、しみ／″＼秋を感じる。私の秋だ。駅から万歳々々の喊声が聞える、ほんたうにすみません、すみません。右の胸が痛い、先夜、酔うて転んだためである。私を救ふものはたゞ疾病か！寝苦しかつた、切ない夢の連続だつた。

八月十八日　曇――晴。

けさも早起。あぢきない日々（この言葉は適切だ）がつゞく。中支空爆の記事を読んでゐると、私の血も湧く。ばら／＼と日照雨、夕立はなか／＼やつて来ない。死の用意、いつ死んでもよいやうに、いつでも死ねるやうに用意しておけ。私は穀つぶし虫に過ぎない、省みて恥ぢ入るばかりである。一切が無くなつた、――ひかり、のぞみ、ちからのすべてが無くなつてしまつた。午後、暮羊君来訪、ついていつて新聞を読ませて貰ふ、そうめんの御馳走になつた。文藝春秋、婦人公論を読む。今夜も寝苦しかつた。

八月十九日　晴。

たうぶん降りさうにもない、毎日、夕立が来さうで来ない、今日もばら／＼の日照雨と遠雷だけだつた。米がなくなつたので、六日ぶりに街へ、――Ｍ屋でコツプ酒二杯弐十四銭、Ｉ店で白米四升壱円四十銭、Ｓ屋で豆腐二十六銭。胸が痛い、痛ければ痛いほど私は落ちつく、悲しい矛盾である。ずゐぶん暑苦しい日であつた、そして寝苦しい夜であつた。

八月廿日　晴。

朝はまつたく秋だ、廢墟をさまよふやうな生存だ。陰暦七月十五日、せつかくの月も雲があつて冴えなかつた、嫌な夢ばかり見つゞけた。

酔境、無是非、没得失。生死空々、去来寂々。

水があれば、――米があれば、――そして酒があれば。――

八月廿一日　曇――雨――晴。

さびしくかなしく（銭がないせいばかりではない）。久しぶりのよい雨であつた、めつきり涼しくなつた。澄太君から、句集柿の葉発送の通知、澄太君ありがたう、ありがたう。よい月夜、たうとうランプをつけないですました。

八月廿二日　曇——晴。

悪夢から覚めて直ぐ起きた、あまりに早かつたが。語録を読む、先聖古徳の行持綿々密々なるにうたれる、省みて私は。——文字通りの、米と塩だけになつた。夕方、孤愁に堪へかねて四日ぶりに外出、散歩がてら駅まで行く、句集はまだ来てゐない、帰途Ｍ屋で一杯ひつかけ、折から昇る月を背負うて戻る。徹夜不眠、幸にして三時頃新聞が来た。

八月廿三日　晴。

身心が暑苦しい。句集到着、澄太君の友情そのものにぶつつかつたやうに、ありがたくうれしかつた。午後、樹明君と暮羊君と来庵、酒を買うて祝して下さる。句集を銭に代へて、久しぶりに山口へ行く、酔うて泊る。

八月廿四日　晴。

午前帰庵。アルコールのおかげで動けない。……

八月廿五日　晴。

Ｋから来信、ありがたう。句集刊行自祝の意味で、そしてまた、小郡に於ける最後の遊楽のつもりで、私としては贅沢に飲む、酔ふ、たうとう酔ひつぶれてしまつた、ぼうぼう、ばくばく、自我もなく天地もなし、一切空。

八月廿六日　晴。

急に思ひ立つて（旅費が出来たので）、九時の列車で九州へ下る。——十二時、門司の銀行に岔水君を訪ねる、いつもかはらぬ岔水君、なつかしい岔水君だ、黎々火君にも逢うて食事を共にする、三時、警察署に青城子君を訪ねる、不在、堤さんも不在、さらに井上さんを訪ねて御馳走になる、鏡子居訪問、こゝでも御馳走になる、井上さんも

鏡子君もしんせつにして下さる。夜は三人で市街散歩、氷汁粉には閉口した、井上さんの宅にひきかへして、ビールを飲んで、泊めて貰ふ。

八月廿七日　晴。

暑い／＼、朝湯朝酒。青城子君、堤さん、鏡子君来訪、会談会食。青城子君とは半年ぶりにうちとけて話し合つた、どうやらワダカマリも解けたらしい、青城子君よ、すまなかつた。三時、お暇乞して、ぶら／＼戸畑へ向ふ、途中、雲平居を訪ねる、夕飯をよばれる、雲平君の厚誼に感謝する。多々桜君は折あしく宿直、そして子供さんが病気、早々辞去して駅前の宿屋に泊る。関門地方は燈火管制で真暗だ、その闇の中を出征する光景はまことに戦時気分いつぱいだ。至るところで、友情が私の放逸を恥ぢ入らせる、私は何といふ愚劣な人間だらう。

八月廿八日　曇。

早朝出立、朝酒をひつかけた元気で八幡まで歩く。十二時前に飯塚着、伊岐須の健を訪ねる、二時間ばかり話して別れる。三時すぎ、緑平居の客となる、病中の奥さんにはお気の毒だけれど泊めて貰ふ。緑平老としみ／″＼話す。……

八月廿九日　晴。

早起、話しても、話しても、話しきれないものがある。十時の汽車で門司へ、岔水居に立ち寄る、若い奥さんがこゝろよく迎へて下さる。飲む、話す、そして泊る、岔水君はいつもかはらぬ人だとつくづく思ふ、洗練された都会人だ。

八月卅日　曇。

あまり品行方正だつたからか、たうとうからだをいためたらしい！朝、お暇乞する。埠頭で青島避難民を満載した泰山丸を迎へる、どこへ行つても戦時風景だが、関門はとりわけてその色彩が濃く眼にしみ入る。役所に黎君往訪。正午、下関に渡り、映画見物はやめにして、唐戸から電車で長府の楽園地へ、一浴して一睡。夕を待つて黎々火居を敲く、泊めて貰ふ。今日も暑苦しかった。さぞや戦地は辛からう。

——

八月卅一日　晴。

黎君は早朝出勤、私はゆつくりして、歩いて長府駅から乗車、途中嘉川で下車、伊藤さんの宅に寄つて少憩、句集を発送する。夕方帰庵、暮羊君ビールを持つて来庵。

九月一日　曇。

二百十日、関東大震災記念日。アルコールなしで謹慎、追憶、懺愧。

九月二日——九月十日　晴曇。——

彷徨、身心落ちつかず、やるせなさたへがたし。

九月十一日　曇。

身辺整理。人間を再認識すべく市井の中へ飛びこむ覚悟を固める、恐らくは私の最後のあがきであらう。五時の汽車で、樹明君と共に下関へ、——嬉しいやうな、悲しいやうな、淋しいやうな、切ない気持だつた。七時すぎ下関着、雨が降るのでタクシーで、Ｎ家へ行く、こゝで私は人間を観やうとするのである。老主人といつしよに飲む、第一印象はよくもなかつたがわるくもなかつた。私は急転直下した、山から市井へ、草の中から人間の巷へ。……樹明君と枕をならべて寝る、君は間もなく寝入つたが、私はいつまでも眠れなかつた、万感交々至るとは今夜の私の胸中だ。

九月十二日　曇。

朝早く起きる、新生活の第一日である。三人同道して彦島へ渡る、材木の受渡方計算法を教へて貰ふ、それから門司へ渡つてＭ会社のＵ氏に紹介される、何もかも昨日と今日とは正反対だ。夜、樹明君を駅に見送る、当分逢へまい、切ない別離だつた（樹明君も同様だつたらしい）。

九月十三日　晴。

主人について彦島へ行き、材木の陸揚を手伝ふ。算盤の響だ、まつ

たく六十の手習！嫌な家庭だ（家庭とはいへない家庭だ）、夫、妻、子、孫、みんなラツフでエゴイストで、見聞するにたへない場面の連続だ。街を歩いてゐたら、ヅケを見せつけられた、あそこまで落ちてしまつたら、どんなに人間もラクな動物だらう。いたるところ戦時気分がたゞようてゐる。月がよかつた。

　　九月十四日　晴。

　主人と共に門司行、請求書調製。オヤヂのワカラズヤであるに驚く、彼はガムシヤラで世の中を渡る男に過ぎない。

　　九月十五日　晴。

　未明起床、主人仲仕連中といつしよに本船へ出かける、北海道松を受取るのである、慣れない船上往来には閉口した。菜葉服にゴム靴、自分ながら苦笑しないではゐられない。昨日も今日も樹明君の友情に感泣する、それはありがたいともありがたい手紙であつた。酒を飲まないでよく睡ることが出来た。

　　九月十六日　晴。

　雑務、主人のワカラナサ加減にウンザリする。夕方たうとうカンシヤクバクハツ、サヨナラをする、サツパリした。あるだけ飲む、酔ひつぶれてしまつた、善哉々々。

　　九月十七日　晴。

　地橙孫君往訪、不在、ふと思ひついて、女学校に支草を訪ふ、句集を数冊売つて貰ふ。関日社のＨ君を訪ねる、おでんやでしばらく話す。夜は支草居往訪。Ｈ屋といふ宿は泊れるだけだが、安くて清潔で、遠慮がなくてよろしい。

　　九月十八日　曇。

　門司に渡つて、岔水君往訪、さらに黎君往訪。

　　九月十九日　晴。

　電車で黎々火居へ、いつしよに塩風呂にはいつてから別れる、一時の汽車で小郡へ、やれ／＼やれ／＼。

九月廿日——十月八日

晴れたり曇つたり、澄んだり濁つたり。——

十月九日　晴。

沈欝、そこらを散歩して、農学校に立寄り、樹明君から五十銭借りる、石油を買ひコツプ酒を呷る。色即是空、空即是色、——私はこの境地に向ひつゝある、そこまで徹したいと念じる、現象に即して実在を観なければならないと思ふ。

□俳句性は——　表現上では、簡素、それは五七五の定型に限らない。　内容についていへば、単純、必ずしも季感を要しない。□俳句は個性芸術、心境の文学である、そして人間そのものをうたふよりも自然をうたふ——自然を通して、自然の風物に即して人間を表現することに特徴づけられる、生活をうたふにしても、人間を自然として鑑賞する境地に立つてうたはなければならない。　俳人は現実に没入しながらも、しかも現実を超越してゐなければならない。

十月十日　好い秋日和。

終日身辺整理、だん／＼落ちついてきた。私の好きな茶の花が咲きだした。秋風の裏藪がざわめく。今夜も眠れない。——

十月十一日　晴。

秋暑し、おちついて読む。熟柿がうまい、山の鴉もやつてきて食べる。午後、ポストまで出かける、W屋で一杯。道べりの蓼紅葉がうつくしい。神保さんの妻君が子供を連れて柿もぎに来た、今年はだいぶなることはなつたけれど大方は落ちた、それでも籠にいつぱい百ぢかくあつたらう。今夜は幸にして眠れた。不眠は我儘な不幸である。

十月十二日　雨、後晴。

ひとりしんみりと籠つてゐた。整理しても、整理しても、整理しきれないものがある、それが私のなげきなやみとなるのだ、整理せよ、整理せよ。——無くなつた、何もかも無くなつた、銭はもとより、米も醤油も、マツチまでも無くなつてしまつた。

私にあつては、酒は好き嫌ひの問題ではない、その有無が生死となるのである。私が酒をやめようやめようと努めながらもやめることが出来ないのは、必ずしも私の薄志弱行ばかりではない。酒は仏か鬼か。とにかく私は酒と心中するのだ！

十月十三日　曇。

早起、朝寒、火が恋しくなつた。樹明君を訪ねる、新聞を読ませて貰ふ。今日から国民総動員週間。午後、街へ出かける、Ｉ店で米を借りる、Ｙ屋で飲む（久しぶりの山頭火的飲ツ振だつた）。夜は句集発送をかたづける、何でもないことだけれど、整理のあとのこゝろよさ。今夜はほどよう睡れさうなのに、なか／＼睡れなかつた。事変句数首をまとめた。

今日の買物一金六銭　　菜葉二把一金六十五銭　切手端書一金十五銭　　石油三合一金五銭　　線香一金三十弐銭　なでしこ一金九銭　　味噌一金十七銭　　煮干一金八銭　　大根　　（大根一本七銭とは高いぞ）

十月十四日　秋晴。

身心沈静。今日は小学校の運動会、子供も親達もうれしさうにお辨当を持つて行く、日本晴で何よりだ、私までうれしい気分になる、まことに楽しい行中行事の一つである。郵便局へ出かける、とてもうらゝかな日である、久しぶりに――四十余日ぶりに理髪、そして久しぶりに――十余日ぶりに入浴、身も心も軽くなつた、――二十八銭の保健的享楽といへばいへるだらう！途中で見つけた鮮人屑屋さんを連れて戻つて、古新聞と空瓶とを売る、金四十銭、これだけでもこの場合大いに助かる。石蕗の花がぼつ／＼咲きだした、野性味がある、下品なやうでおつとりしてゐる、私の好きな花の一つだ。コスモスはやゝすがれ気味になつてゐる、優美そのものともいふべき花であるが、どういふものか、私はあまり好きでない。松茸は今が出盛り、百目が二十銭乃至三十銭、今年は稲作が上出来なので、それと反対に不出来だといふ。菜ツ葉を買うて来て、さつそく煮たり漬けたりする、うまいうまい！今夜もまた一睡も出来なかつた、むろん近来昼寝なんかしやしない、不眠は情ないが、それに堪へる健康は有難い、私のは

不死身なのだらうか。……

　　十月十五日　晴――曇――雨。

　朝はなか／＼寒かつた。裏藪はまさに秋風、柿の落葉がうつくしうなる。たよりいろ／＼、ありがたし／＼。Ｋ店のマイナスを払ふことが出来たのはうれしい、マイナスを払つた気持のよさはマイナスに苦しんだものでないと解らない。品行方正、どうやら落ちつけさうだ。今夜はぐつすり睡れた、めづらしい熟睡だつた。

　人間は互に理解し理解せられることを欲する、それは所有慾名聞慾でなくして真実心だ。自由な自由律！　私は自由律の自由を要求する。

　　十月十六日　時雨。

　けふもつゝましく。――かへりみると、八月九月はきわめて多事多難だつた、自分で自分を殺すやうな日夜がつゞいた、そして死にもしないで、私はこの境地まで来た。……身辺整理、何もかもかたづけて――まだ屋根と野菜畑とはかたづかないが――ほつとする、おちついてゆつたりした気持である。濡れてポストまで、傘も帽子もなくなつたから！一杯ひつかけたが、いつもほどうまくなかつた、後味もよくなかつた、戻つてから熟柿を食べて、どうやらさつぱりした、――これが本当ならありがたいうれしいと思ふ、同時にさびしくもかなしくも思ふ。私は酒を飲む時はいつも一生懸命だつた、いのちがけで飲んで飲んで飲みつぶれてゐたのである！夜はのんきに古雑誌（それも主婦の友だ！）を読んでゐたが、どうしても睡れない、明方近くとろ／＼としたが、すぐ覚めて起きた、不眠はたしかに罰だ！　なまけものにうちおろされる鞭だ！

　　十月十七日　曇。

　しづかなるかな。……稲扱機のひゞきがなつかしくきこえる。風、秋風だ、木の葉がちる。秋寒、何となくうすら寒い。炭屋まで出かける、火鉢がこひしうなつたのだ、火鉢に手をかざしてゐないとおちつきがわるい。今夜はともかく眠れた、夢は多かつたが。

　　十月十八日　晴、満月。

寒い、冷たい、冬が近いことを思はせる、今朝から火鉢に火をいける。最近二ヶ月間の変化を考へると、私はしゆくぜんとする、自然も私もすつかり変化した。うれしいたよりいろ／＼、ことにアメリカからのそれはうれしかつた。さつそく街へ出かけて買物をする、ありがたかつた。久しぶりに独酌を味ふ、うまい、うまい。暮れてから学校に樹明君を訪ねる（酒と焼茸とを携へて）、いつしよに散歩する、ほどよく酔うて、労れたのでＩ屋に泊る、よかつた、よかつた。

　　十月十九日　秋空一碧。

早朝、同道して帰庵、酒もあり汁もあり飯もあつて幸福だつた。何だか、忘れてしまつたやうな気がする、何もかもみんな忘れてしまへ！山口へ行く、湯田で一浴、そして一杯、もつたいないことだ、私は「天下の楽人」であらうか！おとなしく戻つて、月を観て、しんみり睡つた。方々へ手紙を書く。——

私はこのごろ落ちついてはゐますが、もつと山ふかい里にひつこまなければ、しんじつ落ちつけないやうに思ひます、……どうなる私か、……老来いよ／＼恥多く惑ひ多し、です。……

　　十月廿日　晴。

今朝も早くから、出征を見送る声が聞える、私はその声に聞き入りつゝ、ほんたうにすまないと思ふ、合掌低頭して懺悔し感謝した。……まことに日本晴、散歩する、山口へ行く、シヨウチユウのたゝりで動けなくなり、たうとうＫ旅館に泊つた。泥酔の快！　いたましい幸福だ。

　　十月廿一日　晴。

どうやらかうやら払ふだけは払へた、歩いて帰る、秋色こまやかであつた。昨夜、酔中に手帳を盗まれてしまつた、盗んだ者には何の価値もないけれど、盗まれた私は大いに困る。信濃のＨさんから、米と餅とを頂戴した、万謝、何と餅のうまいこと！晩酌一本、上機嫌になつて、牧水の幾山河を読む、面白い面白い。まいばん良い月で、睡れても睡れなくてもうれしい。

　　十月廿二日　晴れきつて雲のかけらもない、午後は少し曇つた

が。

　——戦争は、私のやうなものにも、心理的にまた経済的にこたえる、私は所詮、無能無力で、積極的に生産的に働くことは出来ないから、せめて消極的にでも、自己を正しうし、愚を守らう、酒も出来るだけ慎んで、精一杯詩作しよう、——それが私の奉公である。ぢつとしてはをれないほどの好天気である、そこらをぶら／＼歩いて、学校に寄り新聞を読んで戻つた。戦争の記事はいたましくもいさましい、私は読んで興奮するよりも、読んでゐるうちに涙ぐましくなり遣りきれなくなる。……Ｏ主人が頼んで置いた松茸を持つて来て下さつた、早速、二包に荷造りして発送する、一つは緑平老へ、一つは澄太君へ（両君も喜んでくれるだらうが私も嬉しい）。裏山逍遙、秋いよ／＼深し。松茸を焼いて食べ煮て食べる、うまいな、うまいな。夜、久しぶりに暮羊君来庵、餅を焼き渋茶を沸かして暫らく話す、近々一杯やらうといふ相談がまとまる。今夜もよい月夜だつた、しづかに読みしづかに寝る。

　　十月廿三日　好晴。

　澄みきつた空に朝月の清けさ、うつくしい秋景色。飯がうまく頭が軽い、ほんに好い季節ではある。鵯がやつて来て啼く、鵯も出て来て啼く。ポストへ、——山の鴉がしきりに啼きさわぐ。ちよいと一杯が三杯になつた！　ほろ酔のこゝろよさ！茶の花がうつくしい、熟柿もうまい。またポストへ、そしてまた一杯！　嚢中無一文！Ｗ老人から、ちしや苗とわけぎの球根を分けて貰うて植ゑる、安心々々。夕方、約の如く暮羊君来庵、酒と新菊とを持つて、そして壱円投げだして飲まうといふ、応とばかりに街へ出かけて買物いろ／＼、飲む、笑ふ、二十日月がほんのりとのぞいてきた、とてもおいしかつた、うれしかつた。松茸と柚子と新菊との三重香、秋の香気が一碗の中にあつまつてゐる、秋は匂ひだ、その匂ひの凝つたのが松茸の香であり、柚子の香である。

　　　　今日の買物一金十銭　　　ハガキ一金三十銭　　酒一金二十九銭　煮干一金九銭　　　玉葱一金四銭　　　大根一金五十五銭　酒一金六銭　　　豆腐一金九銭　　　揚豆腐一金十四銭　　松茸

□小鳥のおもひで

□田雀——□渡り鳥——□雲雀の巣——□眼白——

十月廿四日　今日も好晴。

おかげでぐつすり睡れて、早く眼が覚めた、ランプをともして読書してゐるうちに、鶏が啼き、お寺の鐘が鳴り、会社のサイレンが鳴る、すぐ起きる、明星はだいぶ昇つてゐるが、山の端がうつすら明るいだけ、しかし、朝月が冴えてゐるので暗くはない、——昭和十二年十月二十四日といふ今日の好き日をことほぐ。世はさま／″＼人はいろ／＼だとつく／″＼思ふ、たとへば、こんどの句集についても、申込んで来たので送つてあげたのに、礼状さへもよこさ人がずゐぶん多い、そしてさういふ人はたいがい青年らしい（私がかうまで憤慨するのも自分に関した事柄であり、物質的なこだはりがあるからかも知れない、お互、反省しよう）。——おかげさまで、——といふ言葉は尊い、私たちが飲食するのも読書するのも散歩するのも、すべて生きものが生きてゐるのは、みんな何かのおかげである、その何かに感謝し報恩したいと努めることに人生の意義がある。例によつてポストまで、学校で新聞を読み樹明君に会ふ。路傍の草の中で仔猫が断末魔の悲鳴をあげてゐた、胸が痛くなつた。樹明君を待ちつつ支度をする、今日もまた松茸に豆腐のチリだ、待ちきれないで一杯やつてゐると、めづらしくも女と子供の声が山の方へ行く、何ともいへない秋日和である。三時頃、樹明君やうやく来庵、お土産として若鶏の肉、おいしかつた。おもしろかつた、よかつた、うれしかつた、万歳！酒と肉とがからだいつぱいになつたやう、私の肉体は不死身みたいに変態的だ（精神が変質性であるやうに）。年をとつて、とかく物忘れするやうになつた、それがあたりまへであり、そしてわるくないとは思ふが、何だかさびしくないでもない、やつぱり年はとりたくないものだ。今夜はなか／＼寝つかなかつた、なんどもランプをつけたり消したりした。更けてからの月が良かつた。

今日の御馳走一金七十銭　　酒一金弐十一銭　松茸一金九銭　　豆腐　　〆金壱円也、あるたけ！

十月廿五日　晴——曇。

けさも早起、朝景色のよろしさを心ゆくまで観賞する、生きてゐることのよろこびを感じる。たよりいろ／＼、アメリカの大月君からはうれしい手紙を貰つた、名古屋の森君からは長良川の鮎の粕漬を頂戴した。今更ながら、買ひ被られる心苦しさ、見下げられる気安さを思ふ。散歩がてらポストへ、――櫨紅葉が日にましうつくしうなる、野菊が咲きだした、龍膽も咲いてゐる、……秋は野に山にいつぱいだ。おいしい昼餉をいたゞく。何と敏感にして、そして手足不自由な秋蠅よ。午後、湯屋へ、ばら／＼雨に濡れながら。今日は宮市の花御子祭ださうな、昔なつかしいおもひにうたれる。……おだやかな夕焼、よき眠あれ。

□Over value□under value

十月廿六日　今日も快晴。

たよりいろ／＼、いづれもうれしいが、とりわけて、アメリカのＯさん、イキスのＫからのはうれしかつた。うれしいこと、かなしいこと、さびしいこと。払へるだけ払ひ、買へるだけ買ふ、――それからまた、散歩、湯田へ、飲む、酔ふ、泊る。

十月廿七日　晴。

Ｆで飲む、アルコールなしでは夢がなさすぎる私の生活だ！あちらこちら彷徨、今夜も湯田泊。

○流転しながらも安定を失はざれ。○動中静。○謙遜であれ、自他に対して。

十月廿八日　曇。

ぼう／＼として、歩いて戻る、……いつものやうに、つゝましく、わびしく。……

十月廿九日　曇。

降りさうで降らない、だん／＼晴れる。――生死の問題がこびりついて離れない、死を考へるはそれだけ生に執着してゐるのだ、生死超脱の境地には生死の思念はないのだ。――

十月三十日　雨――曇。

久しぶりの雨、秋らしくしよう／＼と降る。身心沈静。迷悟共に放下せよ、一切空に徹せよ。山野逍遥遊、雑木紅葉のうつくしさ、秋の野草のうつくしさ。菊の花のよろしさは、りんだうのよろしさは。純真と情熱と、そして意力と。

十月卅一日　曇。

たよりはうれしい、木の葉がうつくしいやうに。散歩、一杯また一杯、一歩一杯とでもいはうか。樹明君の案内を受けたので、農学校の運動会へ出かけたが面白くないので（私はスポーツ、一切の勝負事に興味を失つてゐる）、早々帰庵して読書。生きものが――むろん人間が――私が――生きてゆくことはなか／＼むつかしい、木の実草の実を食べて、それですむならばどんなにラクだらう、などゝ考へる。閑居句作、その外に私の生きる道があるかよ。読みたい本があつて、そして酔へる酒があるならば、そこは極楽だ。

十一月一日　曇、時雨。

早起、安静。詩作報国をおもふ、日本を歌へ！　歌はなければならない。純情を失ふなかれ、正直であれ、自他に対して。散歩がてらポストへ。――ふらふら湯田をさまよふた、そして自分をなくしてしまつた。――

自己否定か。自己破壊か。自己忘却か。

十一月二日　三日　四日　五日

飲んだ、むちやくちやに飲んだ、Ｔ屋で、Ｏ旅館で、Ｍで、Ｋ屋で。……たうとう留置場にぶちこまれた、ああ！

十一月六日　七日　八日　九日

南京虫に苦しめられた、それよりも良心に責められた。南京虫よりも劣つた私だ、何といふ醜悪！検事局にまはされ、支払を誓約して解放された。歩いて戻つた。――

十一月十日　曇。

白紙になつて生きよう、すなほに一切を受け入れよう。嘘をいふな、善いことも悪いことも、他人に対しても、自分に対しても。心気透明、澄みわたる心が刃物のやうに冴えかへる。

十一月十一日　曇。

身心きわめて沈静。悲しい手紙を書きつゞける。非国民、非人間のそしりは甘んじて受ける。胸が痛い、心が痛い。かへりみてやましい生活ではあつたが、かへりみてやましい句は作らなかつた、それがせめてものよろこびである。最後の場面、山頭火五十五年の生涯はたゞ悪夢の連続に過ぎなかつた。緑平老よ、澄太君よ、赦して下さい、健よ、悲しまないでくれ。

十一月十二日　晴。

朝早く、樹明君来庵、何だか形勢おだやかでない、先日来の出来事を告白する。堪へがたい憂欝に堪へてゐるところへ、Ｎ君来訪、冷静に現在の自分を暴露する。Ｎ君の好意を受けて、久しぶりに酒盃をとりかはす、すこし酔うて、いつしよに街へ出かけて、Ｍでしばらく遊んでから別れる、帰庵して残りの酒を飲みながら考へてゐると、酔樹明君があやしげな女を連れて来た、けつきよく、また連れ出されて、その女の許に泊つてしまつた。……

虚心。——生死を超越した生死、是非を超越した是非、得失を超越した得失。

色即空、空即色。煩悩を離れて人間は存在しない、存在することは出来ないけれど、人間は煩悩に囚へられてはならない、煩悩を御するところに生活がある。

十一月十三日　曇。

その翌朝だ、——何といふ悲しい現実だ。Ｋさんからの手紙が私を悲しませる。鶲よ、お前もさびしい鳥だね。ぢつとしてゐるに堪へきれなくなつて散歩する、阿知須まで行つた、その塩風呂はよかつた、中食もうまかつた、夕方帰庵して、めづらしく熟睡をめぐまれた。

十一月十四日　晴——曇。

沈静、待つものは来ないけれど。――土に還る、――ああ！身辺整理。みそさゞいが来て、さびしい声で啼く。夕、ポストまで出かける、ついでに理髪する、そして一杯やる、この一杯は最後の一杯となるかも解らない。

“I am a rolling stone !”もう地団太ふんではゐない。尻餅をついたのだ！

十一月十五日　晴。

うらゝかな日ざしが身ぬちにしみとほる。私は最後の関頭に立つてゐる、死地に於ける安静！身辺整理、いつでも死ねるやうに。――健から電報為替が来た、おお健よ、健よ、合掌。樹明君に一書を託し置き、直ぐ山口へ急ぐ、どうにかかうにか事件解決、ほつとする、ぐつたりして一風呂浴びてから一杯ひつかける、のんびりとＳ屋に泊つた。純真であることの外に私の生きてゆく道はない。

十一月十六日　曇――晴。

朝、無事帰庵。昨日の私、そして今日の私。――

私も此事件を契機として断然更生します、作詩報国の心がまへで、余生を清く正しく美しく生きませう。

酒を慎まう、自分を育てよう、ほんたうの山頭火を表現しよう。信濃のＨ君から蕎麦粉と粟餅とを頂戴した、うれしかつた。

十一月十七日　晴。

身心安静。――今日は陰暦で十月十五日、宮市天満宮の神幸祭である、おもひではつきない、共に裸坊となつておもしろがつたＡ君はどうしてゐるだらう？午後、Ｎさん来訪、無事を喜ぶ（意味深長な一句だ）、見送りがてら、散歩がてら、石油買ひがてらに新町まで同道する、折から展開される演習を観る（何十年ぶりかで）。戦争記事は私を憂欝にする、しかも読まずにはゐられない、読みつゝ道徳的苛責を感じる、非国民のそしりを甘んじて受ける私であるが、しかも非国民であることには安んじ得ない私である。とてもよい月夜だつた、ぢつとしてゐると、宮市のお祭のどよめきが聞えるやうだ、私はひとりさ

みしく耳を澄ましてゐた。夢を見た、はかない夢であつた、恥づかしい夢でもあつた、血肉のつながりの微妙さを此事件に於て味ふた、血肉は切つても切れない、切れば血が出る、その血は時としてあまりねばりづよくてあさましくなるが。……即かうとすれば離れる、離れたいのに即く、これが人間の、ことに私の癖だ、実際生活に於ける私の態度は不即不離でありたい、言葉は古いけれど、意味は新らしい、私は人及物——就中、酒——に対して不即不離でなければならない。

　実際生活を一点に集約すると、食べること、になると思ふ。食べることは最も大切で、最も愉快で、神聖といふべきである。

　　十一月十八日　曇——晴。

　未明起床、演習の砲声が私を考へさせる。しだいに憂欝が身ぬちにひろがつて堪へがたくなる、散歩、雑木紅葉がうつくしい、櫨紅葉は目さむるばかりである、生きてゐることの幸福がほのかに湧いてくる。……友が恋しい、逢ひたい、緑平老、澄太君から音信がないのが気にかゝる、先日の手紙は君ら二人を共に失望させ腹立たせたに違ひない、私が私に愛想をつかすほどだから、君らが私に愛想をつかすのもあたりまへだ、が、それにしても私はあきらめきれない、私はまたと得がたい尊い心友のどちらをも失ふたのだらうか、私はやるせない悔恨に責められてゐる。……暮れて風が吹きだした、月はかう／＼とかゞやいてゐる、何だか寂しくてやりきれないので、或る人へ手土産のつもりで買つて置いた外郎を食べる、なつかしい味だ。眠れない、眠りきれない。——

　上手下手の境を早く通りぬけたい。よいとかわるいとかいふ批評を許さない境地に到達したい。

　　十一月十九日　曇。

　寒うなつた、冬らしく風が吹く。沈欝、時として、天地に向つて慟哭したいやうな気持におそはれる、それは持病ともいふべきオイボレセンチではない。私は隠遁生活にはいらう（今までもさうでないことはなかつたけれど）、そして孤独に徹しなければならない、それが私の運命だ。今夜はいつもよりよく眠れた。

自律心をなくしてしまふ自分を悲しむ。自律力のない自分を鞭打つ。アルコールのない生活。悔のない生活。

自他を欺くなかれ。自分に佞り他人に甘えるなかれ。

十一月廿日　晴。

空も私もしぐれる。——茶の実を採る、アメリカの友に贈るべく。——私は躓いた、傷いた、そして、しかも、新らしい歩みを踏み出したのである（その歩みが溌剌颯爽たるものでないことはあたりまへだ）。——読書、私には読書が何よりもうれしくよろしい、趣味としても、また教養としても、私は読書におちつかう。信濃の松郎君から頂戴した蕎麦粉を掻いて味ふ、信濃の風物がほうふつとしてうかんでくる。午後、ポストまで散歩、このごろの散歩は楽しい。寝苦しかつた。

自問自答（一）　　　　——自殺について——死ねるか。死ねる。いつでも死ねるか。いつでも。——死にたいか。死にたいといふよりも生きてゐたくないと思ふ。どうして？性格破産の苦悩に堪へきれないのだ。古くさいな！古い新らしいは問題ぢやない、ウソかホントウか、それが問題だ。それもよからう。……ウソがホントウになり、ホントウがウソになる。私の生活はメチヤクチヤだ。それで。——生活難ぢやない、生存難だ、いや、存在難だ！　生きる死ぬるの問題以前の問題だ。

十一月廿一日　時雨。

めつきり冬らしくなつた。めつたにないことであるが、頭が重苦しい、断酒五日にわたるせいかも知れない。終日無言、時雨を聴き枯草を観る。林五君に、そして緑平、澄太、比古の三君に懺悔謝罪状を送る。……天蒼々地茫々、そして人漠々。

林伍君に——

——所詮、無能無力、そして我がまゝ気まゝ、これでは苦しむのがあたりまへでせう、みんな身から出た錆で、どうしようもありません、人生は苦悩の連続ですね。——

緑平、澄太、比古君に――

――辛うじて非国民非人間の泥沼から立ちあがることが出来ました、前後截断、余生をつゝましくうつくしく生きぬく覚悟であります、既往重々の悪業、改めて謝罪いたします。　　百舌鳥するどく　　　　　酔ひざめの身ぬちをつらぬく

　十一月廿二日　晴、時々曇る。

安静、そして憂欝。ともすれば死の誘惑を感じる、しんじつほんたうに、まつたく落ちついてゐないからだらう。柚子味噌をこしらへる、たいしてうまいものではないけれど、純日本的な味がある（こしらへ方も日本的だ）。

　十一月廿三日　曇。

寒い風が吹く、雪でも降りさうな。水仙を活ける、ことしはあたゝかいので早く蕾をもつた、私は日本水仙の清純を愛する、色も香も気高い。忠彦君へ詫状を書く、強いて詫びなくてもよいのだが、詫びなくては、私の気がすまないのである、忠彦君よ、早く元気になりたまへ、そしていつしよに人生を楽しみませう。今日此頃の私は転身一路の安静である、人間は、ことに私のやうなものは、落ちるところまで落ちないと落ちつけないらしい。自分をごまかすな、どんな場合でも。快食は出来る、快眠が出来ない、修行が足らないのだ。午後は散歩する、Ｍ屋に寄つて一杯また一杯（一週間ぶりの酒だけれど、あまりうまくなかつた）、それからついでにＫ店に寄つてなでしこを借りて帰つた。酒も煙草もなか／＼やめられないが、どうやら酒が水になりさうである。米と味噌と炭と石油と、そして本と、そして酒と煙草と、そして。――新古今を読みつゞけた、その技巧には感服する、しかし私はさういふ歌を作らうとは考へない、やつぱり万葉がよい、そこには掬めども尽きないものがある。

一、社会的自覚　　人間として一、国民的自覚　　日本人として一、個人的自覚　　俳人山頭火として

自然と不自然

自然らしい不自然不自然らしい自然私の場合

十一月廿四日　曇。

寝苦しかつた夜が明けて陰欝な日が来た。身心整理。――みそさゞいが寒さうに啼く、その声は私の声ではあるまいか、私の句はその声のやうなものだらう。裏山逍遙、あゝ山は美しいと讃嘆しないではゐられなかつた、山はほんたうに美しく装ひしてゐる。此頃は毎朝、有明の月がさやかである、その月を仰いで、私は昨夜見た夢を恥づかしく思つた。

自問自答（二）　　　　――（生死について）――

『生死を超越したる生死』

十一月廿五日　晴。

冬らしい冷たさ、朝寒夜寒であるが。午前中はうらゝかだつたが、午後はうそ寒かつた。――ほろびゆくものゝうつくしさをおもふ。ハガキが二枚残つてゐたので、緑水君と多々桜君とへたよりを書く、ＳＯＳを意味しないでもない。散歩、ポストのあるところまで。日々の新聞を待ち受けて読み耽る気持、その気持が、新聞は生活の一部であることを証拠立てる、とにかく新聞といふものは面白い、読まずにはゐられない。夜は石油がないので（それを買ふ銭もないので）、宵から寝たが、なか／＼寝つかなかつた、苦しい贅沢とでもいはうか！

┌流転美│頽廃美└壊滅美

凋落の秋の色

散る葉のうつくしさ木の葉は散るときが最もうつくしい。

十一月廿六日　晴、時々曇。

おちついて、おちつきほどおちついて読書。……食べるものがなくなつて、ます／＼食べることの真実が解る。……夕飯は米がなくなつたので、そばかきですます、そしてすぐ寝る、石油もないから！

十一月廿七日　晴。

朝はよいかな、朝はよいかな、小鳥と共にうたはう。――自省しつゝ私は独語する、――私のやうな変質的我儘者も或は千万人中の一

人として許しては貰へないだらうか、枯木も山のにぎはひといはれるやうに。――午後、頭痛がしてたまらないのでそこらを散歩する、櫨紅葉の美しい一枝を折つて戻る、あゝ亡き母の追懐！　私が自叙伝を書くならば、その冒頭の語句として、――私一家の不幸は母の自殺から初まる、――と書かなければならない、しかし、母よ、あなたに罪はない、あなたは犠牲となられたのだ。朝も昼も夕も蕎麦粉を掻いて食べる。夜が明けると起き、日が暮れると寝る、それもわるくない、おもしろい私の生活ではある。

　　十一月廿八日　曇、時雨。

　うれしいたより、大山の奥さんからのたよりはとりわけて、私をよろこばせた（龍造寺さんから、句集代として多分の喜捨を頂戴して感謝に堪へない）、おゝ大山君、ありがたう（それにつけても緑平老からたよりがないのが気にかかつてならない）。さつそく街へ出かけて買物いろ／＼、――米、醤油、石油、マツチ、味噌、煙草、等々等々。何といふ飯のうまさ！（貧乏は物の味を倍加する）ありがたさ！（困窮はその物の価値を認識せしめる）暮羊君、久しぶりに来庵、蕎麦掻きを御馳走する、同君から金と傘とを借りて、再び街へ出かけた。夜、湯田まで出かけて入浴する、十二日ぶりの入浴である、すぐ引き返した、そして心ゆたかに独酌のよさを味つた。私は私のうちにりんりんたるものを感じる、それを正しくうたふことが私の当面の仕事である。酒が今までのやうにうまくなくなつた、それは心理的といふよりも生理的変化が私の内部に起つてゐるからであらう、とにかく私はアルコールを揚棄しなければならない。

　　十一月廿九日　曇。

　起きるとすぐ火を焚きつける、火はうれしいものだ、冬の火はことさらうれしい。生きてゐることは死んでしまふよりも苦しい世の中であるけれども、その苦しさに堪へることが人生である。ポストまで出かける、緑平老へ第二の詫状をおくる、岔水、多々桜君へ受贈本をそれ／″＼送る、この送料はけふこのごろの私にはこたへた。鰯十尾十三銭、酒二合二十二銭、おいしい中食をいたゞく。午後散歩、湯田へ行く、Ｓ屋に泊る、温泉はありがたいといつも思ふ、つい泊つてしまふ

（安くて良い宿を見つけたものだから）。酒はあまり飲まなくなつた、いや飲めなくなつた（経済的に、また肉体的に）、しかし絶対禁酒はとうてい出来ない。

十一月卅一日」はママ］　曇――晴。

朝湯を浴びて、一杯ひつかけて、それからバスに乗つて帰庵。緑平老からあたゝかいたよりが来た、ほつとする。大根はうまいかな、大根はあらゆる点で日本蔬菜の王だ。白菜一玉八銭、これも漬物にして天下一品。身辺整理、そゝくさ日が暮れた。

十二月一日　時雨。

新らしい月が来た（間もなく新らしい年が来る）、新らしい足どりで精進しよう。防火デーといふので、サイレン、鐘声、消防隊の活動がこゝまでもよく解る。だいたい、このごろは何々デー何々週間が多すぎる、多ぎたるは及ばざるにしかず、誰もが食傷してゐるやうである！冬ごもり、ことしはつゝましく私らしい冬ごもりをしたい、今日まづ炬燵の用意をした（今年はとても暖かくて、当分炬燵に用もないらしいが）。おとなしく読書して今日一日を生きた。

今日一日の生活――それが私の生活の一切だ。昨日を忘れ、明日を考へない。私の生き方は正常でないかも知れない、だが、私には私の生き方として、かういふ生き方が最も自然であり正当である。

十二月二日　けふも時雨。

早朝、樹明君がやつて来て（多分、よくない朝帰りだらう！）、一寝入して、お茶を飲んで、そしてそのまゝ出勤（感心々々）。呂竹さんの奥さんが逝かれたさうな、お気の毒だ、さつそくお悔に行き会葬しなければならないのだけれど、それが出来ないので、仏壇に香を※きお経をあげて、ひとりひそかに冥福を祈つた。昨日も今日も郵便が来ないが、私はぢつと待つてゐる、それだけ私も落ちついて来たのだらう。身辺整理、整理しても整理しきれないものがある。頭痛が堪へがたいので臥床、どうやら風邪をひいたらしい。知足安分、――これが私の生活信条である。

年はとつても年寄にはなりたくない、――誰でもがかう望むだら

う。年寄になつてはもう駄目だ。情熱のないところに創作はない。

　　十二月三日　時雨。

　第五十五回の誕生日！郵便は来たけれど、期待する手紙は来なかつた。新聞を読み／＼、新聞は有難いと思ふ。寒波が襲来したさうだが、寒い／＼。終日無言、酒はないけれど米はまだあるので、落ちついて読書した。夕方、一杯やりたくなつたが、ぢつとこらへて早寝した。さびしい一日、さびしすぎる誕生日であつた。

　　十二月四日　曇、時雨。

　身心安静。――ポストへ出かける、W店で酒三合借りる、ほうれん草二把四銭、なでしこ四銭、木綿針五本で一銭！ほうれん草はおいしい、酒はさほどうまくない（四日ぶりの酒なのに）。酒がうまくなくなることは――酒で無理をしなくなることは、私の苦悩がなくなることであるが、それは同時に私の悦楽がなくなることでもある。

　┌精神乖離症└精神分裂症┌今日一日の命┃大死一番絶後蘇生└死而後已┌剣道四病┃　　驚、恐、疑、惑└剣道四綱　　　一眼二足三膽四力

　　十二月五日　初雪、晴。

　朝早く雪が積んでゐる、降ってゐる、雪のうつくしさ。雪見酒！わるくないな、誰か一樽さげて来ないかな。……それどころぢやない、米が一粒もないではないか、……よしよし、絶食もよからう！食べすぎ飲みすぎのわだかまりが清掃されるだらう！雪がふるふる、支那遠征の将士を思ふ、合掌。郵便屋さん、御苦労、新聞屋さん、御苦労。あらゆるものに対して感激と感謝を覚える日である。ポストまで、すぐ戻つた、善哉々々。雪を眺めつゝ、行乞時代を追想しないではゐられなかつた。寒い寒い、冬もいよ／＼本調子になつた。初炬燵、かうしてぬく／＼と寝てゐられることは何といふ幸福であらう、有難いよりも勿躰ない。寝苦しかつた、なか／＼睡れなかつた（空腹の故でもある！）、長い夜が一層長かつた、私は熱心に軍歌の語句を考へつゞけた。……

　金がありがたいのではない、金をありがたがるのではない、物が、物そのものがありがたいのだ、物を造つた者をありがたがるのだ。

十二月六日　曇。

今にも何か降りだしさうな空模様である。初霜初氷。霜に強い葉弱い葉、氷を砕く音の快さ。いよ／＼南京陥落も迫つた、亢奮せざるを得ない。軍歌一篇をまとめた。煙草もなくなつた、石油も乏しい、木炭も僅かしか残つてゐない、其中庵非常時風景、いや、むしろ、平常時風景！悠然として飢えるか！　それだけのおちつきが私にあるならば、私は私を祝福する。今が絶食の――断食といふよりも妥当だ――最も苦しい時である、頑張れ、頑張れ。臥床読書、徒然草鑑賞。午前は菜漬、午後は煮大根を少々食べる、なんと番茶のかんばしさ。

十二月七日　曇、時雨。

寒い々々、貧弱々々。動いて動かざる心を養へ。今日で絶食三日、断酒も三日、そして禁煙二日、――午後堪へきれなくなつて出かける、精神は落ちついてゐるけれど、肉体がひよろつく、やうやくコツプ酒一杯、なでしこ一袋にありつく、米の方はいろ／＼うるさいことがあるから、W老人を訪ねて芋を貰うて戻る、芋のうまさが――今まであまり食べなかつたが――初めて解つた！たかな六株植える、楽しみである、悔なき楽しみ！睡れないし、燈火はないし、腹はへるしで、夜の明けるのがほんたうに待ち遠かつた。

其中雑感――○衝動性変質、自虐症○孤独癖○自然的○断食、絶食○頽廃美

十二月八日　曇。

朝は芋をお茶受にして渋茶何杯でもすゝつた、昼も夜もまた、芋々芋々。多々桜君罹病入院のたより、そんな予感がないでもなかつたが、気にかゝる、早く快くなつて下さい。

病中は何もかも投げだして物事に拘泥しないことが第一大切だと思ひます、……のんきにのんびりと句でも作ることです。

南京まさに陥落しようとして、降伏勧告！　城下の盟は支那人としてさぞ辛からう、勝つ者と負ける者！暮羊君の奥さんから十銭借りて街へ出かける、切手四銭、ハガキ二銭、そしてなでしこ四銭。日が暮れるとすぐ寝床にはいつた、燈火がなくては寝て考へるより外はな

い。

┌短日抄└長夜抄

夜が明けると起き日が暮れると寝る残れるものを食べて余生を楽しむ

十二月九日　晴、曇、時雨。

朝の心、朝焼、昇る日がうつくしかつた。時雨、草に私にしみ入る。……何もかもなくなる、ＳＯＳの反響はない。南京攻略の祝賀会が方々で催される（国民的感激の高調が公報を待ちきれないで）、当地でも提灯行列が行はれた、それに参加しない私はさびしい。寝床で行列のどよめきを聴いてゐると、人並の生活人として生活することの出来ない自分を恥づかしく悩ましく思はないではゐられない。樹明君ちよつと来談、ほんたうにすまなかつた。貰つたバツトのうまさ、肉慾は痛切であり、そして卑らしくもある。寝苦しかつた、あたりまへである。

貧乏を味へ。貧乏にあまやかされるな。貧乏にごまかされるな。

十二月十日　時雨。

けさは芋もなくなつて、お茶ばかりすゝつてすました。飢は緊張する、餓えてます／＼沈静、いよ／＼真摯。頭痛がするので臥床。お茶のあつさよ、うまさよ、かうばしさよ。

天青地白（ちちこぐさ）

十二月十一日　晴。

めづらしくお天気になつた、沈欝気分やゝうすらぐ。来書一通、岔君ありがたう、ほんたうにありがたう。さつそく出かけて買物いろ／＼。七日ぶりに飯を味ふ、うまいと感じるよりも、ありがたいと思うたことである、御飯の御の字の意義を考へる。南京陥落、歓喜と悲愁とを痛感する。久しぶりに、ほんに久しぶりに、ひとりしみ／″＼一盞傾けた。私もいよ／＼一生のしめくゝりをつけるべき時機に際会した。指が何故だか痛い、指一本のための不自由、不快、不甲斐なさ、全体と部分との緊密なる接触を考へる。午後、湯田へ行き、温泉で、

連日の垢と汗とを流した。Ｓ屋に泊つて、ゆつくり休養した。蕎麦がうまかつた、山口の山はうつくしい。

陰部の両面的意義　　排泄と交接、そしてその快感！

酔へばあさましく酔はねばさびしく

　十二月十二日　晴。

小春日、好い日であつた、朝帰庵。つゝましく読書。風邪をひいたとみえて（私も人並に！）、洟水がぽたり／＼落ちて困つた、老を感じた。今晩は何日ぶりかで、ランプをともすことが出来た。

或る日の出来事――バスの中で　　パン屑、インテリ女性

　十二月十三日　好晴。

けさは少々朝寝、それだけよくねむれたわけ。降霜、寒冷も本格的になつた。霜晴れの太陽のまぶしさ、小鳥の声のうれしさ。私の好きな藪椿がもう咲いては落ちだした。夕方、ポストまで、ついでに焼酎と蝦雑魚とを買うて戻つて飲んだり食べたり、御馳走々々々。――物に触れ事につれ、ともすれば心が動く、心の芯は動かないつもりだけれど、やつぱり私は落ちつかない。――からだがとかくよろめく、アルコールの害毒と老衰とを感じないではゐられない。アルコールのおかげで快眠、夢中大きな鯉を捕へた、何の前兆か、ハツハツハツ！

『わが冬ごもりの記』

　十二月十四日　晴、曇、時雨。

午前中は申分のない小春凪だつた。朝酒一本（昨夜の残りもの）、うまいな、ありがたいな、いや、もつたいないな、ほんに朝湯朝酒朝……。昭和十二年十二月十三日夕刻、敵の首都南京城を攻略せり、――堂々たる公報だなつかしい友へたより二通、澄太君へ、無坪君へ。午後は買物がてら散歩。今晩から麦飯にした、それは経済的といふよりも生理的な理由による（といつても、新聞代位は倹約になるが）、私はだいたい食べすぎる（飲みすぎることはいふまでもなからう！）、とかく貧乏人の胃袋は大きい、ルンペンは殆んど例外なしに胃拡張的だ、私は自分でも驚くほど大食だ、白飯をぞんぶんに詰め込

むと年寄にはもたれ気味になるが、大麦飯（米麦半々）ならば腹いつぱい食べてもあまり徹へないのである、あゝ食べることはあまりに痛切だ。晩は久しぶりの豆腐で、おいしい麦御飯を頂戴した、張り切つた腹を撫でゝは結構々々！夜、上厠後の痔出血で閉口した、焼酎と唐辛とのせいだらう、老人は強い刺戟を慎むべし。

——わが南京攻囲軍は十三日夕刻南京城を完全に占領せり。江南の空澄み渡り日章旗城頭高く夕陽に映え皇軍の威容紫金山を圧せり。——

（上海日本海軍部公報）

大空澄みわたる　　日の丸あかるい涙あふるる　　（山生）

十二月十五日　快晴。

早起、身辺整理。——小春日和のうらゝかさ、一天雲なし、気分ほがらか。書かなければならない、出さなければならない手紙があるのだけれど、今日も果さなかつた、播いたものは刈らなければならないのに、私はどうしてこんなに我がまゝなのだらう。終日独坐、無言行。良い月夜だつた、霜月十三夜である。

十二月十六日　霜晴。

昨夜の夢の名残が嫌なおもひをさせる。……その後一ヶ月経つた、私はいよ／＼落ちつく。……やうやくにして、長い悲しい恥づかしい手紙を書きあげて、さつそく投函した、健よ健よ許してくれ許してくれ！沈欝たへがたきにたへた、あゝ苦しい。落ちたるを拾ふといふよりも、捨てられたる物を生かす気持で、また一つ拾うて戻つた。大根一本二銭、おろしたり煮たり漬たり、なんぼ大根好きの私でも一度や二度では食べきれない。今夜も良い月夜、玲瓏として冴えわたる月光がおのづから天地の悠久を考へさせた、いつまでも睡れなかつた。

悠久な時の流れ、いひかへれば厳粛な歴史の流れ、我々はその流れに流されて行く、その流れに躍り込んで泳ぎ切らなければならない、時代の波に棹して自己の使命を果さなければならない。

十二月十七日　晴。

風はさむいが大気はあたゝかい、小春日である。――酒を忘れる、さういふ境地が私のうちに拓かれつゝある、――あまり酒をおもはなくなつた。郵便は来ない、新聞は来たけれど。何となく淋しい。今日は南京入場式、そして今夜は満月、誰も感慨無量であらう、殊に出征の将兵は。――うらゝかにして小鳥のうた、百舌鳥の疳高い声、目白のおとなしい合唱。ちよつと出かけて一杯ひつかけた、うまい酒だつた、あぶないあぶない！（だが、酒はよいかな、ほどよい酒は、――とうたひたくなる！）道連れになつたW老人の話、彼は幸福人だらう。油揚を買ふ、揚豆腐は田舎料理にはなくてはならぬものである、稲荷鮨のころもとしても、煮物の味付としても。睡眠不足の気味で、すまないけれど、しばらく昼寝した、すまないと思ふ。帝人事件判決が下つた、被告全部無罪、私たちには事件の真相はつかめないけれど、割り切れないものがあるらしい、その割り切れないものは現社会の癌だらう！おだやかに昇る月を観た、よかつた、よかつた。寝苦しく胸苦しかつた、粗食大食のためか！

十二月十八日　曇、時雨。

雨にらしい、ぬくすぎる、ばら／＼雨が落ちだした。身心平静。私は生活苦といふよりも生存苦になやまされてゐる、それではあまりにみじめだ。朝、めづらしくこゝまで行商人がやつて来て、反物はいらないかといふ、御苦労さん、反物どころか、食べる物がなくなつて困つてゐる！　それもこれも不景気の反映だらう。世界歴史に燦然として光輝を放つべき南京入城式の壮観が、今日の新聞では写真と共に色々報道されてゐる、ありがたいニユースであつた。濡れてかゞやく枯草のうつくしさよ、観れば観るほど美しい。午後、やうやく半切四枚を書きなぐつた、悪筆の乱筆をもつともつと揮はなければなりません！今夜も睡れないので、あれこれ読みちらしてごまかす。

読書浄土旅極楽飯醍醐酒甘露

十二月十九日　曇――雪。

寒い雲がかさなりひろがつて年の瀬らしくなる、粉雪がちら／＼する、寒い、寒い。火鉢に火、机に本、おちついてしづかな心。あるだけの米と麦とを炊く、二食分には足るまい、また絶食か！　つらい

ね。しようことなしに、暮羊君から墨を借りて、半切四枚書きなぐる、いつものやうに悪筆の乱筆、仕方がないといへばそれまでだけれど、あまりよい気持ではない、そしてそれを急いで送るべく——早く物に代へて貰ひために、ポストまで出かける、ついでにうどん玉を買ひたかつたが、かなしいかな、銭がなかつた。風がきびしくなつた、まさしく凩だ。かねて見つけておいて蔓梅一枝を活ける、よいなあと眺める。夕方、Ｙ君がだしぬけに来庵、ほとんど一年ぶりだ、持参の酒と魚とを食べて、いつしよに寝る。……

┌縦の関係——祖先——父母——遺伝、伝統└横の関係——兄弟——夫婦、友人——社会性┌短歌——外延的——迸出——詠嘆└俳句——内包的——沈潜——

十二月廿日　雪——曇——雨。

Ｙ君と別れる、お茶をすゝつて（お茶しか食べるものがなかつた）。うれしいたよりがあつた。支那をおもふ、支那をおもへば、一度や二度の絶食は何でもない、炭火があるだけでも私にはありがたすぎる！ポストまで出かける、うどんを食べる、うまい／＼。ぽろりと歯が抜けた（四本のうちの一本だ）。

十二月廿一日　曇。

雪がちほらする中を郵便局へいそぐ、Ｋよ、ありがたう、涙ぐましくなつて、あてもなく歩く。飯のうまさ、酒のうまさ、そして生きる苦しさ、考へる切なさ！たうとう湯田温泉まで。——

十二月廿二日　曇。

冬至、あゝまた朝酒！　身にしみる冬至だ！

主観の客観化。創作は一種の脱皮ともいへる。宛名のない遺言状ともいへやう。

十二月廿三日　曇、時雨。　廿四日　もおなじく、雨。

昨夜も帰れなかつたが、今日も帰れさうにない。駅で遺骨を迎へる、あはれ、六百五十柱、涙がとめどもなくこぼれて困つた。熟睡が何よりもうれしかつた。……

十二月廿五日　晴。

小春日和。いつもの気まぐれで、歩いて防府へまはる、おもひでのつきない道すぢである。——Ｓ君を訪ねる、不在、Ｍ君には逢つたが客来なので遠慮する、Ｉ君を訪ねる、また不在、Ｅ君も同様に。……最後にＹ君を訪ねた（といふよりも尋ねた）、幸にして在宅、十何年ぶりの再会だ、旧友のなつかしさあたゝかさが身にしみた。暮れて——更けて別れる、月が出た、おもひでを反芻しながらやうやくにして帰庵した。労れた、労れた、ぐつすりと寝た。

十二月廿六日　晴——曇——雪。

祖母忌。——さむ／″＼として、しみ／″＼として。——すまない、すまない、私は大地に跪づいて天に謝し、人に詫びる、あゝすまない、すまない。——

十二月廿七日　曇。

悪夢のやうな私の生活、その中へ樹明君が女を連れて（無論、酒も持つて）、訪ねて来た。現実はみじめすぎる！夜は農学校に宿直の樹明君を訪ねて泊る。

十二月廿八日　晴曇定めなし。

寒さも本格的になつた。身辺整理、心内整理が第一だ。私の心は此頃の天候のやうに、晴れたり曇つたり、しぐれたり、雪がふつたり。……酔はない酒、いや酔へない心、彷徨。

十二月廿九日　晴。

天高く地広し、——さういふ心がまへで生活せよ。昨夜は湯田温泉に浸り、そのまゝ泊つた、そして早朝帰庵。

十二月卅日　晴。

今年もいよ／＼押しつまつた。私も人並に門松を飾つた。理髪入浴、よい年を迎へよう。

十二月卅一日　曇。

名残の雪でも降りだしさうな。街へ、すぐ戻つた。蕎麦を食べ、一本傾けた。

昭和十二年を送ることしもこゝにけふぎりの米五升ことしもをはりの虫がまつくろ

自己を省みて

新古今集より　窓近き竹の葉すさぶ風の音にいとゞみじかきうたたねのゆめ　　　　　　　式子内親王　　　朗詠――風生竹夜窓間臥　道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちとまりつれ　　　　　　　　西行法師　夕づく日さすや庵りの柴の戸に寂しくもあるかひぐらしの声　　　　　　前大納言忠良　さびしさに堪へたる人の又もあれないほりならべむ冬の山里　　　　　　西行法師　かりそめの別れと今日を思へども今やまことの旅にもあるらむ　　　　　俊恵法師　あけばまた越ゆべき山の峯なれや空ゆく月の末の白雲　　　　　　　　藤原家隆　年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさよの中山　　　　　　　西行法師　遙かなる岩のはざまにひとりゐて人目おもはで物思はばや　　　　　　　〃　ながめわびそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕ぐれの空　藤原通光・鈴鹿山うきことよそにふりすてていかになりゆくわが身なるらむ　　　　西行法師　風に靡く富士のけぶりの空に消えてゆくへも知らぬ我が思ひかな　　　　〃

□苦しい節季であり、寂しい正月であつたが、今年はトンビを着ることが出来た、Ｉさんの温情を、Ｋが活かしてくれたのである、ありがたいことである。

柿の葉の広告文として、層雲に発表した感想――

句作三十年、俳句はほんたうにむつかしいと思ふ。俳句は自然のままがよい、自己をいつはらないことである、よくてもわるくても、自分をあるじとする句でなければならない。私はこの境地におちついて、かへりみてやましくない句を作りたい。私の句集は、私にあつては、私自身で積みかさねる墓標に外ならない。

子に与へる句集父らしくない父が子らしい子に与へる句集

第32章
其中日記　12 (新字旧仮名)

知足安分。

他ノ短ヲ語ル勿レ。己ノ長ヲ説ク勿レ。

応無所住而生其心。

独慎、俯仰天地に愧ぢず。

色即是空、空即是色。

誠ハ天ノ道ナリ、コレヲ誠ニスルハ人ノ道ナリ。

一月一日　晴——曇、時雨。

午前中は晴れてあたゝかだつたが、午後は曇つて、時雨が枯草に冷たい音を立てたりした。——別事なし、つゝましくおだやかな元日であつた（それが私にはふさはしい）。賀状いろ／＼、今年は少い、緑平老よ、ありがたう、独酌のよろしさ（鰯の頭をしやぶりながら！）。餅もある、餅のうまさが酒のうまさを凌がうとする。終日、独坐無言。——

一月二日　晴れたり曇つたり、しぐれたり。

をり／＼しぐれてしめやかな一人正月であつた。今日は新聞のない日（関西の新聞聯合申合で休刊）、そのことだけでもさびしい／＼。——求めず（たとへば平安を）、貪らず（たとへばアルコールを）、あるがまゝに、なるがまゝに生きぬかう。今日も独坐無言だつた！

一月三日　曇。

寒気りんれつ、小雪ちらほら。炭火のうれしさ、餅のおいしさ（今

朝は食べる物がないので、仏壇のお供餅を頂戴した）。鵯がさびしさうに啼いて遊ぶ、さびしいお正月だ。午後、米買ひに街へ出かける、寒いことだけが正月風景らしい、今年最初のコツプ酒一杯！今日も独坐無言のつもりだつたが、夕方になると、たうとうやりきれなくなつて、湯田温泉へ、――Ｓ屋に泊る。途上で、美しい兄妹風景を見た、そして宿屋では、あさましい痴情風景を見せつけられた。夜は同宿の植木屋老人に誘はれて諸芸大会見物、二十銭の馬鹿笑である。咳が出て困る、感冒がこぢれてどうやら喘息らしくなる、睡れないのは苦しいが、苦しくてもこらへる外ない。

　　一月四日　曇。

　早朝、入浴して、そして二三杯ひつかける。身心何となく不調、焼酎のたゝりらしい、慎むべきは火酒を呷ることだ、省みて、自分の不節制に驚く。午後、無事帰庵。やつぱり自分の寝床がどこよりもよろしい！

　朝湯極楽　朝酒浄土醒めりや地極の鬼が来る

　個人を不幸にするもの、私を意味なく苦悩せしめるものは――
暴飲　　借金今年の私はこの二つの悪徳から脱却しなければならない。

　年をとつて、貧乏すると、食意地だけになる、我ながらあさましいけれど疑へない事実だ。

　　一月五日　時雨。

　めづらしく朝寝した、肉身をいたはつて臥床。喘息らしい、それもよからう、からだが病めば、こゝろがおちつく自信を私は持つてゐる。

　　一月六日　雪しぐれ。

　今にも雪が降りだしさうな、――降りだした。寒の入、寒らしい寒さだ（一昨冬の旅をおもひだす）。昨日も今日も独坐無言。――

　　一月七日　曇。

雪、雪、寒い、寒い、身も心も冷える。……——人を憎み物を惜しむ執着から抜けきらない自分をあはれむ。——終日不動、沈黙を守る、落ちついてゐることの幸福感。

煩悩即本能、本性発揚統制、自律的に、社会国家的に生活、生活の展開人間、人間の価値、人生の意義

一月八日　雪時雨。

みそつちよも寒さうにそこらをかさこそ。煙草がなくなつた、炭もなくならうとしてゐる、石油も乏しくなつた、米も残り少ない、醤油も塩も。……樹明君からの来書は私の胸を抉るやうに響く、あゝすまない／＼。私は肉体的には勿論、精神的にも死の方へ歩いてゐる、生の執着は死の誘惑ほど強くない。文字通り、門外不出だつた。

一月九日　曇。

粉雪ちら／＼、寒い／＼、缺乏／＼。午後、ちよつと街へ、六日ぶりに一杯ひつかけたが、酒屋の前を通り過ぎたやうな気分で、はかない／＼。米があるならば、炭があるならば、そして石油があるならば、そして、そして、そしてまた、煙草があるならば、酒があるならば、あゝ充分だ、充分すぎる充分だ！（わざと、充の字を用ひる）夕方、久しぶりに暮羊君来庵。身心不調、臥床、生きてゐることの幸不幸。さびしいけれども、——まづしけれども、——おちついてつゝましく。——けち／＼するな、——くよ／＼するな、——いうぜんとしてつゝましく。——

私が若し昨日今日のうちに自殺するとしたならば、そして遺書を書き残すとしたならば、こんな文句があるだらう。——

枯木も山のにぎはひといふ、私は見すぼらしい枯木に過ぎないけれど、山をにぎはさないでもあるまいと考へて、のんべんだら／＼生き存らへてゐたが、もう生きてゐることが嫌になつた、生きてゆくことが苦しくなつた、私は生きて用のない人間だ、いや邪魔になる人間だ、私が死んでしまへばそれだけ自他共に助かるのである。枯木は伐つてしまへ、若木がぐい／＼伸びてきて、そしてまた、どし／＼芽生えてきて、枯木が邪魔になる、伐つて薪にするがよい。そこで、私は

私自身を伐つた。

　　一月十日　曇――晴。

　東京の樞子さんから、おいしいせんべいを頂戴した。臥床、しみ／″＼死をおもふ、ねがふところはたゞそれころり往生である。……暮れ方から石油買ひに出かける、寒月がよかつた。

　　一月十一日　曇。

　――米がなくなつた、炭もなくなつた、そして口と胃とがある、生きてゐることは辛い。――さむいな、さびしいな。今日やうやく賀状のかへしを五六通書いて出した。昨日今日多少寒さがゆるんだやうで、雪もよひが雪にならないで時雨になつた。ねむれないので句の推敲をする。更けて弱震があつた、それも寂しい出来事の一つ。

　田舎者には田舎者の句老人には老人の句山頭火には山頭火の句

　┌素質┐|年齢┼個性└環境┘ ┌創作的活動|　　　量よりも質└批判、沈潜、表現

　　一月十二日　晴――曇――時雨。

　霜晴れの太陽を観よ。風が出て来た、風を聴け。しようことなしにポストまで（ＳＯＳの場合だ！）、途中一杯ひつかけたが、足らないのでまた一杯、折からの空腹で、ほろりとして戻る（のん気なＳＯＳの場合だね！）。庵中嚢中無一物、寒いこと寒いこと（床中で痛切に自分の無能無力を感じた、私には生活能力がない、そして生活意慾をもなくしつゝある私である）。

　　一月十三日　曇、折々氷雨。

　薄雪、さらさらさら解ける音はわるくない。今朝は食べるものがなくなつたので、湯だけ沸かして、紫蘇茶数杯、やむをえない絶食（断食とはいへない！）であるが、上海では毎日窮民が何百人も凍死餓死するさうだから、それを考へると、こんなことは何でもない。午後、寝てゐたけれど、やりきれなくなつて出かける、Ｗ店で一杯ひつかけた元気でＦ店へ行き米を借らうとしたが娘一人で話がまとまらない、さらにＮ店へ飛びこみ、また一杯ひつかけて、愚痴をならべて主人か

ら米代若干借ることが出来た。……今年最初の羞恥だ！米と麦とを持つて戻り、ほつとしてゐるところへ学校の給仕が樹明君の手紙を持つて来た、こたえた、私は何と答へよう、かう書くより外なかつた、それがせいいつぱいの返事だつた。――……忘れてもゐません、捨てゝもおきません、どうぞあてにしないで待つてゐて下さい。……あゝ金が敵の世の中である、自他共に誰もが金に苦しめられてゐる、跪いてゐる、あゝ。うどん一杯、何といふうまいうどんだつたらう！餅のうまさは何ともいへない！よく食べてよく睡つた。

事変俳句について俳句は、ひつきよう、境地の詩であると思ふ、事象乃至景象が境地化せられなければ内容として生きないと思ふ。戦争の現象だけでは、現象そのものは俳句の対象としてほんたうでない、浅薄である。感動が内に籠つて感激となつて表現せられるところに俳句の本質がある。事実の底の真実。――現象の象徴的表現、――心象。凝つて溢れるもの。――

一月十四日　晴。

（木炭がないので）焚火しながら、そこはかとなく、とりとめもないことを思ひつゞける、焚火といふものはうれしい。午後、Ｎさん久しぶりに来庵、明けてからの第二の来庵者である（第一の訪問者は九日の暮羊君であつた）、焚火をかこんで閑談しばらく、それから連れ立つて近郊を散歩、おとなしく別れた（昨年の新春会合はよくなかつたが）。夕、Ｓ君来訪、樹明君の意を酌んで、――あゝすまない、すまない、義理のつらさには堪へきれない。夜はねむれないので、おそくまで読書。今日は愉快な出来事が二つあつた。――一つは、うたゝ寝の夢に梅花を見たことである、早く梅が咲けばよいと念じてゐたせいでもあらう、夢裏梅花開。もう一つは、ゆくりなく蕗の薹を見つけたことである（秋田蕗）、日だまりにむくむくとあたまをもたげた蕗の薹のたくましさ、うれしかつた（醤油が買へたら、さつそく佃煮にしよう、そして樹明君を招いて一杯やらう！）。ふきのとう数句が、ふきのとうそのものゝやうにおのづから作れた。

一月十五日　晴、曇、そして小雨。

めづらしく快晴だつたが、やがてまた曇つた。――待望の郵便が来

ない、私が苦しむのは自業自得だが、樹明君に合せる顔がない、それが切ない。麦飯のほけり（よい言葉だ）、自分でも呆れるほどの食慾、私の肉体は摩訶不可思議である！――なんとつゝましく、あまりにつゝましい毎日である！午後、ぢつとしてはゐられないので歩く、あてもなく歩くのである、さびしいといふよりもかなしい散歩だ（――いかにさびしきものとかは知る、――）、雨が落ちだしたので、濡れて戻る、いよ／＼さびしく、さらにかなしく。出かけたついでに石油を買ふ（ハガキや豆腐や醤油は買へなかつた）、そして十三日ぶりに入浴して不精髯を剃る、湯のあたゝかさで少しは憂欝のかたまりがやはらいだやうである。もう猫柳が光つてゐる、春の先駆者らしい。――身を以て俳句する、それはよいとかわるいとかの問題ではない、幸不幸の問題ではない、業だ！　カルマだ！　どうにもならないものだ！　そしてそれが私の宿命だ！小雨があがつて、良い月夜になつた、私は今夜も睡れない。――私はしだいに行乞流転時代のおちつきとまじめとをとりかへしつゝある、たとへ後退であつても祝福すべき回復である。此頃は真宗の報恩講、御灯ふかく鐘の声がこもつて、そこには老弱の善男善女が額づいてゐた。吉田絃二郎さんの身辺秋風を読んで、その至情にうたれた、よいかな純化されたるセンチ！純なるものは何でもいつでもうつくしい！

　第六句集（幸にして刊行がめぐまれるならば）

　孤寒抄の広告文案

　┌業やれ／＼└業だな／＼

　　一月十六日　晴――曇。

　霜晴れの青空がすぐまた雲で蔽はれてしまつた、冬曇りといへばそれまでだけれど、日和癖でもあらう。来ない、来ない、来ない、待つてゐるのに、待ちあぐんでゐるのに、待ちきれなくなつてゐるのに、――それは何か！ぼろぼろの福袍を着て、焚火してゐると、我ながら侘住居らしく感じるが、他から観たら、山賊執居のていたらくだらう！午後、樹明君が訪ねてくれた、つゞいてＳ君もやつて来た、二十日ぶりに快飲歓談した、折から庵中嚢中無一物なので、むろん、酒も魚も野菜も、炭も醤油までもが何もかもお客さんの負担である、うま

かつた、うれしかつた、夕方めでたく解散、さよなら、ありがたう。私はすぐ寝た、今夜は炬燵があるのでぬく／＼と寝た、真夜中に眼が覚めて、それからはどうしても寝つかれない、本を読んだり句を作つたりしたが、長い長い半夜であつた。

事象の説明であつても、それは同時に景象の描写である句、さういふ句を作りたい、作らなければならない。

┌個性の文学┃　　（個人主義を意味しない）└境地の詩　（隠遁趣味ではない）

私はうたふ、小鳥と共にうたはう。　（私の句作態度としては）

石を磨く。――　（句作の苦しみと歓び）

一月十七日　晴。

日本晴！　天地悠久。日が照つてあたゝかい、梅の蕾がほころぶだらう。昨日、政府が発表した歴史的対支重大声明を読む、我々はこゝに日本国民の使命を新たに自覚し大和民族の将来を再認識して再出発したのである。小鳥をうつな、うつてくれるな、空気銃を持ちあるく青年たちよ、小鳥をおびやかさないで、たのしくうたはせようではないか。おごそかにしてあたゝかき態度、自他に対して生活的にも世間的にも。午後は散歩、八方原橋を渡つて北へ北へ、途中で数句拾ふ、W店に寄つて一杯また一杯！　好日、好日！春が近い、といふよりも、春のやうなうらゝかさであつた、ぽか／＼あたゝかであつた。その日その日のくらしが楽であるやうに願ふ、一日の憂は一日にて足れり、一日の幸もまた一日で十分だ。今夜も炬燵があつてうれしい。深夜の水を汲みあげて、腹いつぱい飲んだ。

一月十八日　曇――雨。

好晴で爽快だつたが、間もなく曇つて陰欝で、そしてぬくい雨が降りだした。朝から渋茶ばかりがぶ／＼飲む、また絶食である、野菜少々食べる。――寝るより外はなかりけり、といつたあんばいで、寝床の中で漫読。――餓ほど（死もさうであるが）人間をまじめに立ちかへらせるものはない、餓えたことのない胃は悲しんだことのない心臓のやうに、人間的でない。何とぬくい寒だらう、炬燵なしでも何と

もない。

一月十九日　曇――雨。

あたゝかすぎるほどあたゝかい、炭をなくした寒がりには何よりのうれしさである。毎日、新聞を読みつゝ、新聞の力を感じる。Ｙさんからうれしい手紙が来た（予期しなかつたゞけそれだけうれしさも大きかつた）、助かつた、助かつた、炭代としてあつたけれど、米代にした、炭はなくても米があれば落ちつける。郵便局で、思ひがけなく藤津君に邂逅、Ｆ屋で痛飲する、めでたく和解して、昨年来の感情のもつれも解消してしまつた、酔に乗じて、打連れて、雨の中を中村君往訪、生憎不在、父君母君と持参の酒と肴をひろげて四方山話（親馬鹿、子外道の情合を味ふ、中村君しつかりしたまへ、孝行をしなさいよ！）。暮れるころ、ふりしきる雨を衝いて、渡しを渡り、藤津君の宅に転げ込み、勧められるまゝにたうとう泊つてしまつた。終夜水音、――不眠読書。酒が料理が、菓子が、飯が水が、すべてが餓え渇いてゐる五臓六腑にしみわたつたことである。

一月廿日　曇、時雨。

ぬくい／＼、まるで四月ごろのぬくさだ。しづかな邸宅だ、雨乞山の巌壁もわるくない、水音がよい、枯葦もよい、小鳥が囀りつゝ飛んで、閑寂味をひきたてる。――送られて戻ると、ぢき、正午のサイレンが鳴りわたつた。雨漏のあとのわびしさ。さつそく御飯を炊いて、満腹の幸福、昼寝の安楽をほしいまゝにする（冥加にあまるが、許していたゞかう）。

一月廿一日　曇、小雨。

大寒入、冬がいよ／＼真剣になる。何となく憂欝、そのためでもあるまいが、御飯が出来損つた（めつたにないことで、そのことがまた憂欝を強める）。午後、誘はれて、出張する樹明君のお伴をして山口へ行く、ほどよく飲んで帰つて来たが、それからがいけなかつた、私は樹明君を引き留めることが出来なかつばかりではない、のこ／＼跟いてまはつて、踏み入つてはならない場所へ踏み入つてしまつた！……何といふ卑しさ、だらしなさ、あゝ。……彼の酔態は見てゐ

られない、あさましさのかぎりだ、しつかりしてくれ、せめてもの気休めは夜ふけても戻つたことであつた。

一月廿二日　晴。

寒くなつた、あたりまへの寒さだが、寒がりの私は、炭もなくしたから、寝床にちゞこまつてゐる外ない。終日不快、よく食べる私も一食したゞけだ。支那人のやうにメイフアース——没法子——とうそぶいてはゐられない。

一月廿三日　晴。

大寒らしい寒さだ。正午近く、Ｔ女来庵（彼女に感謝しないではないが、歓迎する気分にはなれない）、酒、下物、そして木炭まで持参には恐縮した、間もなく樹明君も来庵、飲みつゝ話す、話しつゝ飲む、酔はない、酔へない、夕方解散、よかつた、よかつた。今夜は炬燵に寝ることが出来た、ありがたう。どうでもかうでも、樹明君に苦い手紙を書かなければならない。

一月廿四日　曇。

午前中は晴朗だつたが。——午後、Ｎさん来訪、同道して出かける。貧乏、貧乏、寒い寒い、食慾、食慾、うまいうまい。食ふや食はずでも句を作らずにはゐられない、業だよ。

一月廿五日　曇。

やゝあたゝかくして小鳥のうた。手紙を書く、書きたくない手紙だ、自己嫌忌、そして自己憐愍。枯木を折る拍子に頭部に瘤をこしらへる、私自身が瘤のやうな存在である、ひとり苦笑する。ポストへ出かける、トンビを質入して米を買ふ。……私は癈人だ、だが、私は良心的に行動したい。

一月廿六日　曇、小雪。

良心沈静。Ｋからうれしいたよりがあつた、ありがたや、めでたや。

うれしいたよりが小鳥のうたが冴えかへる

初孫が生まれて来るさうな！　私もいよ／＼おぢいさんになる！……今日はぞんぶんに飲むつもりで出かける、……久しぶりに泥酔して動けなくなり、Ｗさんの店に泊めて貰ふ。……

一月廿七日　晴曇不明。

朝から飲む、飲む歩いて、酔つぱらつて、暮れて戻る、こんとんとして何物もなし。酔中、呂竹居に推参してお悔みを申上げたことは覚えてゐる、――この一事だけがせめてもの殊勝さだ、これで重荷が一つ抜けた。

一月廿八日　雪だつたらしい。

こん／＼眠る。

一月廿九日　晴れたり曇つたりしたのだらう。

食べては眠り、眠りては食べ。――樹明君から呼びに来たけれど行けなかつた。

一月卅日　雪。

めづらしく婦人客があつた、樹明君を尋ねて奥さんがやつて来られたのである、悲しい事実ではないか、樹明君よ、奥さんをいたはつてあげたまへ。夕方、暮羊君しばらくぶりに来庵、一杯やらうといふので、酒と牛肉とを買うて来てくれた、愉快な酒だつた。私には、食べる事飲むことだけが残されてある！

一月卅一日　晴。

霜白く空青し。旧正月元日。残つた酒、残つた肴で、めでたしめでたし。

二月一日　晴、曇、雪。

あゝたへがたし。――八幡同人諸君の友情をしみ／″＼感じる、そして、六日ぶりに床をあげて街へ、ついでに湯田へ、そしてたうとうＳ屋に泊つてしまつた。

二月二日　雪。

雪がふるふる、雪はふつても、湯があり、飯があり、酒がある、ありがたいことである、もつたいないことである。十時帰庵、身心安静。近来にない楽しい一泊の旅であつた。

二月三日　薄曇。

節分、宮市の天神様に詣りたいなあ。餅を焼いて食べつゝ追憶にふけつた。

二月四日　晴――曇――雨。

立春大吉。米買ひに街へ出かけて、ついでに一杯。私がアル中であることは間違はない。生活必需品と嗜好品との間に微妙な味がある、酒、煙草、新聞、等々。悲しいかな、身心相食む。夜は招かれて、宿直室に樹明君を訪ねる、食べて飲んで、しやべつてくたぶれて帰つたのは十二時近かつたらう。

二月五日　曇、小雨。

昨夜の飲みすぎ食べすぎで、胃のぐあいがよくない、何となく身心の重苦しさを覚える。身辺整理。――呂竹さん来庵、香奠返しとして砂糖を頂戴する、落ちついてしんみりと亡き妻を語り句を語る呂竹さんはいかにも呂竹さんらしい、私はいつものやうに、山頭火らしく、私自身を語り、そして句を語つた。樹明君から借りた井月全集を読む。今日も有耶無耶で暮れてしまつた、それはちようど私の一生が有耶無耶で過ぎるやうに。――

物を広く探るよりも、心を深く究める。単純にして深遠。東洋精神、日本精神、俳句精神。直観。自我帰投。

二月六日　晴――曇。

めつきり春めいて来た。――句稿二篇、やうやく書きあげて発送。夜、買物がてら街へ出かけて、一杯また一杯、すつかり酔つぱらつたが、おとなしく戻つて寝た、めでたしめでたし。

二月七日　晴れたり、曇つたり、雪がふつたり。

寒いことは寒いけれど春寒、身にも心にも天にも地にも春を感じ

る。春の小鳥がやつてきて春の歌をうたふ。藪椿がいよ／＼うつくしい。思いがけなく道明寺糒といふものを頂戴した。おくればせながら、賀状のかへしを書いてポストへ（私のづぼらは救ひがたい）、ついでに油買、途中例によつて、一杯ひつかけたいのをやつとこらへた！寥平君への返事に――

……お互に老来ます／＼惑ひ深く恥多き嘆に堪へませんね、……アメリカ行は面白いでせうが、それよりも早く冥土行が実現しさうですね。……

Ｋさんに――

……万物は在るところのものに成りますが、成るやうに成らせる外ありませんね、……さういふ心がまへで生きて行きませう。……

万葉集より　○かくばかり恋ひつつあらずば高山の磐根しまきて死なましものを　　　磐姫皇后　○吾はもや安見児得たり皆人の得がてにすとふ安見児得たり　　　　　　藤原鎌足　○足引の山のしづくに妹まつと吾たちぬれぬ山のしづくに　　　　　　　大津皇子　○淡海の海夕波千鳥汝が鳴けばこころもしぬに古へおもほゆ　　　　　柿本人麿・○家にあれば笥にもるいひを草枕旅にしあれば椎の葉にもる　　　　　　有馬皇子

・○鴨山の磐根しまける吾をかも知らにと妹は待ちつつあらむ　　　　　柿本人麿

（石見高角、美濃郡海岸）

○憶良らは今はまからむ子泣くらむ其彼母も吾をまつらむ　　　　　　山上憶良　○昔こそよそにも見しかわぎも子がおくつきと思へばはしき佐保山　　　大伴家持　○神風の伊勢の浜萩折りふせて旅寝やすらむあらき浜辺に　　　　　　碁提磯妻　○わが背子は物な思ひそ事あらば火にも水にもわれなけなくに　　　　安倍女郎　○千鳥なく佐保の河瀬のさざれ波やむ時もなし吾が恋ふらくは　　　　大伴坂上女郎┌○あしびきの山の雫に妹待つと吾立ち濡れぬ山の雫に　　　　　　　　大津皇子└○吾を待つと君が濡れけむあしびきの山の雫にならましものを　　　　石川郎女　○健ら男や片

恋せむと歎けども醜の健ら男なほ恋ひにけり　　　　　　　　　舎人皇子　○小竹の葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば　　　　　柿本人麿

二月八日　曇、小雪。

いちめんのわすれ雪、思ひ出したやうに降る。生活力のはかないのに自分ながら呆れる。机上の梅がやうやく開かうとしてゐる。

讃酒歌　　　　　以白酒為賢者　以清酒為聖人大伴旅人（万葉集）

しるしなき物を思はずは一杯のにごれる酒を飲むべく有らし　賢こみて物いふよりは酒のみて酔泣するしまさりて有らし　言はむすべせむすべ知らに極まりて貴きものは酒にし有るらし　なかなかに人とあらずば酒壺になりてしがも酒にしみなむ　あなみにくさかしらをすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似む　もだをりて賢しらするは酒のみてゑひ泣するに尚しかずけり

大隈言道（草径集）

なき時はなくて幾日かすぐすらむある日は酒のあるにすきつつ　今日は今日あらむ限はのみくらし明日のうれへは明日ぞうれへむ・わが如く酒にいふらし音立ててうてはうつ手をまぬる山彦

橘曙覧（志濃夫廼舎集）

・とくとくとたりくる酒のなりひさご嬉しき音をさするものかな　菊かをるまがきの下にゑひたふれ南の山のからうたうたふ・床になくこほろぎ橋を横に見てゑひたふれたるねごこちのよさ

二月九日　雪。

ずゐぶん冷える、終日臥床、死について考へつゞける、……死ぬることはむつかしい、死場所、死の方法……死の準備、それが私に残された唯一の仕事だ！道明寺糒を食べる、未知の友の温情を味ふ。

二月十日　曇。

動けない。——俳句を通して、心と心とが触れ合ふ（来信を読みつゝ）。

二月十一日　晴。

日本晴だ。紀元節、建国祭、今日から国民総動員第二強調週間。憲法発布五十年祝賀式典。天地の間にりんりんたるものがある。午後、樹明君来庵、同道して暮羊君を見舞ふ、酒肴の御馳走になり、餅を貰うて帰庵。酒はうまい、餅はうまい……みんなうまい！

二月十二日　晴。

春日和。——身のまはりをかたづける、いつでも死ねるやうに！糯と餅と、そして味噌と砂糖と、それだけ！夕暮、油買ひに街へ、例によつて一杯、あゝ極楽々々。歯がぬけた、さつぱりした、その歯は残つてゐる四枚の中の一枚で、歯として役立たないばかりでなく、気にかゝる邪魔物であつた。

二月十三日　晴——曇——雨。

まさしく春だ！あたゝかい飯が食べたい！今日はとてもあたゝかだつた、夜になつてあたゝかすぎる雨が降りだした。……

二月十四日　曇。

いかにも春雨らしく降つた。沈欝たへがたし、うつら／＼昼夜なし。更けてよい月夜になつた、十五夜らしい。

飢は甘味を要求する、疲れも同様に。辛味苦味は食慾を増進する。酸味は——酢物は酒としつくり調和する。

二月十五日　晴——曇。

春が来た、春が来た、空から太陽から、土から草から、いろんな虫が出て来て飛んだり這うたり、——だが、私は冬ごもりの暗い穴から抜け出せない。今日も糯ばかり食べてゐて苦しかつたけれど、自信のある句がつぎ／＼に作れてうれしかつた。夜はいつまでも眠れなくて読書した、米もなくてはならないものだが、本もなくてはならないものだ。

二月十六日　曇——雨。

食養不足、睡眠不足で身心不調。頭痛、腹痛、そして心痛、——不

死身にちかい私も少々弱つた。専念に句作し推敲する。――今夜も不眠、読書する外なかつた。酒よりも飯を、肉よりも野菜を要求する。

利休が茶の湯の心得を説いた言葉の中に、　　花はその花のやうにといふ一項があつた、うれしい言葉である。物のいのちを生かし、物の徳を尊ぶ心、それが芸術であり道徳であり、宗教でもある。

二月十七日　晴、後、曇。

春寒、身心平静。風、風、風はやりきれない。此頃は死ぬる人が多い、用意はよいか！夕方、街へ出かける、W屋N屋の好意で、たらふく飲んで食べて、そして寝た、近頃にない痛飲、陶酔、熟睡であつた、分別も苦労も何もかもなくなつてしまつた！　めでたしめでたし、大いにめでたし。

二月十八日　晴、曇、霙。

寒さが逆戻りした。九日ぶりに御飯を食べる、しみ／″＼しみ／″＼味つた。風が吹く。蕗の薹を二つ見つけた。自戒自粛、つゝましくおちついて読書。やすらかに睡つた。

感動こそ詩の母胎である。沈黙の言葉。自然の心、人間の心、物のあはれ。自己に徹して自然に徹するを得。自然に徹するは自己に徹するなり。自然をうたふは自己をうたふなり。民族詩、日本民族詩としての俳句。ユーモアのある句、“Humorous Haiku”

二月十九日　晴、曇。

夜が明けると起き、日が暮れると寝た。

二月廿日　曇。

太陽と共に、――小鳥と共に。――暮羊君来庵。草庵無事、たゞ無事。

二月廿一日　晴。

沈欝。――

二月廿二日　曇、雪。

寝苦しくて朝寝。Ｋからの手紙はうれしくもありかなしくもあつた、安心と心配とをもたらした。六日ぶり外出、買物いろ／＼、米、醤油、茶、等々、払へるだけ払ひ、買へるだけ買ふ。湯田まで出かけて、二十日ぶりに入浴、二三杯ひつかける、たうとうＳ屋に泊つた。

二月廿三日　曇。

十時帰庵、自分の寝床がうれしい。新若布がうまい、高いことも高いが（百目壱円三十銭だつた）。

二月廿四日　晴――曇――霙。

晴れると春、曇れば冬、内は春、外は冬。おちついて読書。――

二月廿五日　晴。

薄雪薄氷がうらゝかな日光で解けて雫する。Ｎ、Ｆの二君、汽車辨当持参で来訪、あべこべに御馳走になつた、ありがたう。樹明君から来信、あゝ私はどうすることも出来ない、すまない、私には何のあてもない。――炭がなくなつた、米もなくならうとしてゐる、命よ、むしろなくなつてしまへ！

二月廿六日　晴。

春が来たのに。――

おのれを語る生活能力を持たない私は生活意慾をも失ひつゝある、あたりまへすぎるみじめさだ。業、業、何事も業であると思ふ、私が苦悩しつゝ酒を飲むことも、食ふや食はずで句を作ることも。――句を作る、よい句を作る、――その一事に私の存在はつながれてゐる。酒を飲む、うまい酒を飲む、――その一事に私の生活はさゝへられてゐる。

二月廿七日　好晴。

霜、春の霜、太陽、春の太陽。午後散歩する、といふよりも彷徨する、あれやこれやと気になつて落ちついてゐられない。春風しゆう／＼、雲雀がうたひ草が咲いてゐる、あたゝかすぎるほどあたゝかだつた。

二月廿八日　晴。

春はうれしや、貧乏のつらさ！炭だけはＫ店から借りたが、さて米はどうするか、また絶食するか、貧乏はつらいね！人に教へられたというて、中年の放浪者が訪ねて来た、俳行脚をつゞけてゐるといふ、対談しばらく、短冊一枚書かされた、世間師としては、彼は好感の持てる人柄だつた。私もいよ／＼旅に出ようと思ふ、旅のことをいろ／＼考へてゐるうちに夜が明けてしまつた。身心が何となくのび／＼した、あゝ旅と酒とそして句。

省みて疚しくない生活。プラスマイナスのない世界。

三月一日　晴。

春風春水一時到、といつたやうな風景。身辺整理。ありがたや、火鉢に火がある（なさけなや、米桶に米はなくなつてしまつたが）。句稿二篇書きあげる、さつそくポストへ。Ｗ店で飲む、酔つぱらつて、また泊つてしまつた。

三月二日

酔境に東西なく、酔心に晴曇なし。

三月三日　曇。

さみしくも風が吹く。……

三月四日　曇。

沈欝。――フアブルの昆虫記を読む。初蛙が枯草の中で二声鳴いた。昨日も今日も絶食、そして明日！たうとう不眠、長い長い夜であつた。

春風の吹くまま咲いて散つて行く（旅出）

わざとかういふ月並一句を作つてこゝに録して置く。

其中雑感　　戦争、貧乏、孤独。　　散歩、酒、業。俳諧乞食業。定型と伝統。　　歴史的必然。旅で拾うた句。

三月五日　曇――雨。

身心平静、今日もまた絶食、落ちついて万葉鑑賞、万葉集は尊い古典である、動かされ、教へられ、考へさせられることが多くて、おのづから頭が下る。四日ぶりに外出、梅は満開、椿ぽたぽた、今年の梅は厳寒のために蕾が堅かつたが、数日来の暖気でトーチカもたちまちくづれてしまつた。外出途中、今日はとても飲みたかつたが、ぢだんだ踏んで我慢した、善哉々々！政府対議会（軍部対議会といつた方が痛切だらう）、その接触交渉がなか／＼微妙らしい、大西少佐の失言、政党本部占拠事件、右翼（？）の安部党首襲撃、等々、物情何となく騒然としてゐる、上下左右新旧の摩擦相剋は相当深酷らしく考へられる。日本はどうなるか、どうすればよいか、どうしなければならないかは日本人自身が解決しないではゐられない問題である（私のやうなものでも思案してゐる！）。……私は遂に無能無才、身心共にやりきれなくなつた、どうでもかうでも旅にでも出て局面を打開しなければならない、行詰つた境地からは真実は生れない、……窮余の一策として俳諧の一筋をたよりに俳諧乞食旅行に踏み出さう！火燵が入らなくなつた、火鉢も僅かの火ですむやうになつた、ありがたいありがたい、それにしても私のやうに大飲したり大食しないですむやうな生活方法はないものだらうか！食ふや食はずでも句は出来る、こんなに苦しんでゐて、しかも句が作れることは、何といつてもうれしい。今夜も眠れない、疲れてはゐるが興奮してゐる、おい山頭火しつかりしろ、おちつけおちつけ！

三月六日　曇、をり／＼雨。

地久節。亡母四十七年忌、かなしい、さびしい供養、彼女は定めて、（月並の文句でいへば）草葉の蔭で、私のために泣いてゐるだらう！今日は仏前に供へたうどんを頂戴したけれど、絶食四日で、さすがの私も少々ひよろ／＼する、独坐にたへかね横臥して読書思索。万葉集を味ひ、井月句集を読む、おゝ井月よ。家のまはりで空気銃の音が絶えない、若者たちよ、無益の殺生をしなさるなよ。どうしたのか、今朝は新聞が来ない、今日そのものが来ないやうな気がする。ほんたうに好い季節、障子を開け放つて眺める。蜘蛛が這ふ、蚊が飛ぶ、あまり温かいので。裏山で最初の笹鳴を聴いた。夜は雨風になつた、さびしかつた、寝苦しかつた。いよ／＼アブラが切れてしまつ

た！いつとなく、ぐつすり睡つた。

（序詩）天、我を殺さずして詩を作らしむ我生きて詩を作らむまことの詩、我みづからの詩天そのものの詩を作らむ――作らざるべからず　（逍遙遊）ほんたうの人間は行きつまる行きつまつたところに新らしい世界がひらけるなげくな、さわぐな、おぼるるな（旅で拾ふ）のんびり生きたいゆつくり歩かうおいしさうな草の実一ついただくよ、ありがたう

三月七日　晴れたり曇つたり、そして降つたり。

春寒、あたりまへのよろしさ。――来ない、来ない、ほんに待つ身はつらい！しづかに紫蘇茶をすゝる。とても起きてはゐられない、からだがふら／＼する、また火燵を出して寝る、そして読書、反省、追想、思索。今朝はいつのまにやら新聞が来てゐる、新聞を読んで、時事を知り時代を解することは私たちのつとめであり、なぐさめであり、勉強でもある、新聞はありがたいものだ。寝てゐたが、たまらなくなつて出かける、やうやくにして米と酒と石油とを少々借ることが出来た（日頃の馴染ではあるけれど、家も名も知らない私のやうなものに快く貸して下さつたＳ店の妻君とＭ老人とに感謝する）。六日ぶりに飯を食べ酒を飲んだ、まことにそれは御飯であり、お酒であつた！　味うてゐるうちに眼がくらむやうな心地であつた、ほつとするよりがつかりしたやうに。雨露のめぐみといつたやうなものをしみ／″＼感ずる、衆生の恩を感ずる。――泣くな、怒るな、耽るな。……飯の味、酒の味、人の味、――生活の味。おかずがないので、鰯のあたまを味ふ。――私は自覚する、私の句境――といふよりも私の人間性――は飛躍した、私は飛躍し飛躍し飛躍する、しかし私は私自身を飛躍しない、それがよろしい、それで結構だ、私は飽くまで私だ、山頭火はいつでも山頭火だ！人間至るところ、山あり水あり、飯あり、酒あり、――さういふ人生でなければならない。ゆつたりとしてしづかなよろこびが湧いて溢れた。

戦争――悲惨なる事実――存在の必然――生物の悲劇。――よくてもわるくてもほんたう。先づ何よりもうそのない生活、それから、それから。物そのものを尊ぶ、物そのものゝために惜しみ、そして愛す

る。甘さと旨さとは違ふ。

甘さを表現したゞけでは（旨さが籠つてゐないならば）それはよき芸術ではない。よき芸術には人生のほんたうのうまさがなければならない。

三月八日　曇――晴。

身辺整理。宇平さんから旅費を頂戴した、ありがたう、ありがたう。さつそく街へ出かけて、買はなければならない物だけ買ふ、そして払へるだけ払ふ。理髪する、そのまゝ湯田へ行く、半月振の入浴。ほんたうにさつぱりした。たうとうＳ屋に泊つて、のんびりと一夜を送つた。

おばあさんおたつしやですね、おいくつですか。まあなばかりで――はいはい、七十二でございます、いえ、八十二で。……

三月九日　曇。

朝から飲む（悪い癖だがたうてい止まない！）、山口でゆくりなくＮさんに逢ひ、いつしよにまた飲む、かうなるとどうにもならない私の性分で、今晩もまたＳ屋に泊めて貰つた、やれ／＼、やれ／＼。

三月十日　雨。

陸軍記念日、意義ふかい今日である。朝のうち帰庵。旅立の用意をする。午後、暮羊君来庵、快飲快談。

三月十一日　晴――曇。

今日は出立するつもりだつたが、天候もはつきりしないし、胃腸のぐあいもよくないので静養した。旅、旅、旅、――私を救ふものは旅だ、旅の外にはない、旅をしてゐると、人間、詩、自然がよく解る。さびしくもうれしい旅、かなしくも生きてゐる私！旅の仕度もすつかり出来た。――（旅へ）

太陽。空と水。米と味噌。炭と油。本と酒。

三月十二日――四月三日　旅日記

第33章
其中日記　13 (新字旧仮名)

五月一日　晴――曇――雨。

早起、一風呂あびて一杯ひつかける、極楽々々！七時のバスで帰庵。留守中に敬君や樹明君や誰かゞ来庵したらしい、すまなかつた、残念なことをした。何となく憂欝。――W屋主人来庵。風が出て来た、風はほんたうにさびしい、やりきれない。午後、樹明君を訪ね、いつしよに街へ出かけて飲む、敬君にも出くわし、三人で飲む、酔ふ、どろ／＼になつてしまつた、それでも戻ることは戻つた、つらかつた、やれ／＼！夜中に眼が覚めて、とてもさびしかつた、かなしかつた。慎しむべきは酒なりけり！　老いてはつゝましかるべし！

五月二日　曇――雨。

身心整理する外ない、さうするには、さしあたり、旅に出る外ない、歩かう歩かう、風のまに／＼！夕方、ポストまで出かけたついでにシヨウチユウを買うて戻る、どうも米を買ふには足りない、それに気が欝いでたへきれなくなつた。アルコールのおかげで快眠、うれしかつた。

五月三日　雨――曇。

欝々として楽しまない、幸にしてK社から句稿料が届いたので街へ出かけて二三杯呷る、その勢で山口へ行く、飲んで酔うてS屋に泊る、前後不覚、一切合切が空つぽになつた。

五月四日　曇。

朝帰庵、飯を炊いたり洗濯したり、そして読んだり考へたり、――労れていつとなし寝入りこんでしまつた。

五月五日　曇。

さらに転一歩。――夕方、敬君酔うて来庵、いろ／＼考へさせられる、同道してW店を襲ひ、私もまた酔ふ、帰つたのは十一時近かつたらう、そのまゝぐつすり睡つて、夜の明けるまでちつとも覚えなかつた、万歳々々！

途上点描　　　（旅日記ところ／″＼）

五月六日――十九日

――まるで地獄だつた。酔うては彷徨し、※めては慟哭した、自己冒涜と自己呵責との連続であつた。私は人非人だ、Ｈがいふやうに穀つぶしだ。Ｋに対して、Ｗさんに対して、何といふ背信忘恩であらう。酒！　あゝ酒のためだ、酒が悪いのではない、私が善くないのだ、酒に飲まれるほど弱い私よ、呪はれてあれ！肉体的にはたうとう吐血した、精神的には自殺に面して悩み苦しんだ。死、さうだ、死が最も簡単な解決、いや終局だ、狂、狂しうるほどの力もないのだ。死、死、死、そして遂に死なゝかつた、死ねなかつた、辛うじて自分を取り戻した、そして……夜が――私の夜が明けたのである、幸にして（不幸にして、かも解らない）、私は私の私となつた。――

五月廿日　曇。

門外不出。――下の家から梯子を借りて来て屋根を繕ふ、漏つて漏つて堪へきれなくなつたのだ、梅雨季も近づいてくるが、葺替代がないのだ、あぶなかつた、足すべらして落ちさうだつた。日本案内記を読みつゞけて、旅したい心をなぐさめる。珍らしいお客様があつた、Ｔさんが二人連れでやつてきて、静寂に感心して帰つていつた。多々桜君の死は私に堪へがたい痛恨をもたらした、奥さんからの通知に接した時、私は脳天を撃ちのめされたやうなシヨツクを感じた、過ぐる三月にお見舞してよかつた、あれは久しぶりの、そして最後の出会であつたが、あゝ、それにしても、死んではならない君は死んでしまうし、死ねばよい私は死なゝいでゐる、私は自然の矛盾とでもいひたいものを感じる、そして腹立たしくさへなる。……

“Natural nonsense”雑草のたたかひ――

荒地野菊のたくましさポピーの弱さ

五月廿一日　晴。

横臥読書、すまない、すまない、すみません。除州陥落！　そして此国民のおちつき！日本人は大きくなつた、日本は進みつゝある！食糧がなくなつたけれど米を買ふには銭が足らないので、うどん玉を買うて帰る、新聞を借りて読む、あれやこれやで今日も暮れてしまつた。

五月廿二日　曇——雨。

昨夜は一睡もしないで、自己に沈潜した、自己省察は苦しかつた、だが、私の覚悟はきまつた。——私は名誉もほしくない、財産もいらない、生命さへも惜しいとは思はない、いつまで生きるるか解らないが（あゝ、長生すればまことに恥多し！）、生きてゐるかぎりは私の句を作らう。すなほにつゝましく、——あるところのものに足りて、いういうとして怠りなく、——個性の高揚。久しぶりに花を活ける、卯の花は好きだが、薊も悪くない、総じて野の花はよい。身辺整理。白船君から澄太君の手紙を廻送して貰ふ、澄太君、ありがたう／＼。街へ出かけて買物、もとより第一番に一杯ひつかける、七日ぶりの酒だが、それほどうまくない、ハテナ！先日たうとう吐血したが（悪友達は胃潰瘍だらうとおどかしたが）、それでも酒はやめない（やめられもしないし、やめやうともしない）、句がやめられないと同様に（業だ、業だよ）。旅、旅、旅、何よりも旅がよい、旅が私を打開してくれる。今日は近来にない賑やかな日だつた、先づ敬君来庵、それＮさん、それから暮羊君（新聞の掛取までも）、愉快に話し大いに笑つた。夕方から雨になつて風も出て来たが、落ちついて読書する。満腹々々、極楽々々。

今日の買物——弐十弐銭　　酒二杯

┌三十五銭　　白米一升└十八銭　　　平麦一升

弐十弐銭　　煮干五十目十銭　　　赤味噌百目十銭　　　餅七ツ二銭　　　沢庵漬一本三十弐銭　　なでしこ大包一個壱円弐十銭　木炭一俵八銭　　　バツトー

物価騰貴、殊に生活必需品の騰貴は私を脅威する。

五月廿三日　雨――晴。

身心沈静、だが、まだ／＼本物ではない、おちつけおちつけ、おちつかなければ、ほんたうの句は出て来ない。久しぶりに味噌汁をこしらへて味ふ。……不死身の捨身、押の一手でひた押しに押してゆく外ありません。……（或る友に）ポストまで出かける、ついでに買物、酒、豆腐、酢。やつこ豆腐はうまい、ちしや膾もうまいな。なやましくもなつかしい密柑の花の匂ひ、五月の匂ひ。また街に出かけて飲む、Ｗ店、学校、そしてまたＷ店、たうとうそこで倒れた、まことに久しぶりのよい泥酔であつたよ、しかし、ほんにしかし、酒は飲むべし、飲まれてはならない！

▵蛙の話▵羊の話

アンゴラ兎の話

人間は追剥。羊が毛を刈り取られて風邪をひいた。搾取に甘んじてゐる境地。

五月廿四日　曇。

朝酒、御飯までよばれてから帰庵。身辺整理、整理せよ、整理せよ、心のすみ／″＼まで。Ｎさん来庵、本をいろ／＼持つて来て貸して下さつた、そして焼酎を御馳走して下さつた、感謝々々。二人うち連れて近郊散策、新緑がうつくしい、水音がうれしい、木苺がうまかつた。Ｗさん来庵、ふとん綿ちしや葉をあげる、これだけが私の精いつぱいの謝意のあらはれだ。焼酎をあほつたからだらう、胃が痛みだして弱つた、死！　ぞつとした、いつものやうでもなく、死にたくないやうな気がした、これからは焼酎は飲むまい、飲んではならない（西洋の火酒には縁が遠い）、これだけは必らず実行すべし、生命が惜しいよりも胃痛が堪へられない、そしてまた、酒はうまいけれど焼酎はうまいと思はない。蚊帳を吊らなければならなくたので、机を南から北の窓へうつす、こんなこともちよつと気分をかへる、だいたい、書斎は北向の窓がよい、落ちついて読み書きが出来る。夜は今日借りた本を読みつゞけた。

“高くこゝろをさとりて俗に帰るべし”　　　　芭蕉の言葉（土芳―赤冊子）

“鬼が笑ふ”

五月廿五日　晴。

落ちついて読書。鮮人の女屑屋がやつて来て、お一人で寂しいでせう、といふ、その寂しさをまぎらすべく、鍬を持つて畑に出たが、身のおとろへを痛感するばかりだつた。蕗の皮を剥ぎつゝ物を思ふ、よう剥げることも追憶の種だ、生々死々去々来々のことはりはよく解つてゐるけれど寂しいことにかはりはない。

今日の買物――四十四銭　酒四合五銭　　豆腐二丁四銭　　酢一合

五月廿六日　晴。

ぢつとしてはゐられないから、いよ／＼旅へ出かけることにする、せめて広島までゞも歩きたい、そして久しぶりに友達のたれかれに逢ひたい、……沈欝のやりどころがないのである、で、身のまはりをかたづける。……畑仕事、苗床をこしらへる、唐辛を播いておく。朝晩は肌寒いほどであるが、日中はだいぶ暑くなつた、それもその筈だ、私はまだ綿入を着てゐる！寝苦しかつた、初めて蚊帳を吊つた。

五月廿七日　晴――曇。

明けるより起きた。煙火は海軍記念日だから。すこしいら／＼する、暮羊居から新聞を借りて来て読む、内閣改造問題で賑やかだ。今日から単衣にする、わざと定型一句――

さすらひの果はいづくぞ衣がへ

ポストまで出かける、米は買へないからうどん玉を買うてすます、あはれ／＼。父子草、母子草、あゝこれもやりきれない。胡瓜苗を植ゑる（下のＹ老人のところには茄子苗はなかつた）、此五本が私の食膳をどんなにゆたかにすることか。旅の用意はとゝなうたが、さて、かんじんかなめのものが出来ない、ぢつとしてゐる、つらいね。

人にはそれ〳〵天分がある、私には私としての持前がある。天分に随うて天分を活かし天分を楽しむ、それが人生だ。私は安んじて句を作らう、よねんなく私の句を作らう、よい句が出来たら、――きつと出来る。

五月廿八日　曇。

緑平老、ありがたう、ありがたう、緑平老。旅、旅、やうやく旅に出かけることが出来た。――

五月廿八日――六月五日旅日記。――

第34章
其中日記　14 (新字旧仮名)

旅日記

八月二日　晴れて暑い、虹ヶ浜。

午後三時の汽車で徳山へ、白船居で北朗君を待ち合せ、同道して虹ヶ浜へ。北朗君は一家をあげて連れて来てゐる、にぎやかなことである、そしてうるさいことである（それが生活内容を形づくるのだが）。いつしよに夕潮を浴びる、海はひろ／″＼としてよいなあと思ふ、波に乗つて波のまに／＼泳ぐのはうれしい、波のリズム、それが私のリズムとなつてゆれる。松もよい、松風はむろんよろしい、さく／＼踏みありく砂もよい、自然は何でもいつでもよろしいな。遠慮がないので、また傾け過ぎた、宿のおばあさん——老マダムとでもいはうか——が酒好きで、のんべいの気持が解るのでうれしかつた、二階に一人のんびりと寝せてもらつた。海、海、波、波、子供、子供、酒、酒、夢、夢！

八月三日　曇、下関。

早くから起きて松原を散歩する、朝の海はことによろしい、同道して、七時の汽車で徳山へ、昨日も今日も応召兵見送でどの駅も混雑してゐる、涙ぐましい風景である。白船居で昼食をよばれる、酒のことは書くまでもあるまい。白船君夫婦は幸福だ、円満な家庭とは君らのそれであらう（不幸な家庭とは私のそれであるやうに）。十二時の列車で九州へ、四時、門司に着いて銀行の岔水君を訪ね、それから局の黎々火君を訪ねる、ビールを飲んで、いつしよに下関へ渡つて別れる、いつものやうに花屋に泊る、夜は地橙孫君を訪ねて話す、ビールやら酒やら泡盛やら飲みすぎて、ふらついてゐるところを検索されて

しまつた（彼は新米巡査だつた、手帖が汚したかつたのだらう！）。

何もかも万歳となつて炎天　出征兵これが最後の日本の飯を食べてゐる汗潮風強く出て征く人が旗が

八月四日　晴、緑平居。

朝やうやく解放されて帰宿、おかみさんが気の毒がつてくれる、ほんたうに馬鹿らしい出来事だつた。十時、関門海峡を渡る、一杯ひつかける、一時緑平居着、腹から安心して御馳走になる、腹も空つてゐたので、奴豆腐を二丁までも頂戴した。夜はラヂオを聞きレコードを聞かせてもらつた。

長い長いトンネルをぬけて炎天　廃坑日ざかりの煙突また煙吐いてゐるけふは誰か来てくれさうな昼月がある親船子船すずしくゆれてゆく　非常時色古い葉新らしい葉七夕の竹は立て

八月五日　晴、鏡子居。

早起、香春岳を眺める、忘れられない山だ、緑平老のやうに。十時のバスで飯塚へ、烏峠の眺望はなか／＼よい。伊岐須ではみんなたつしやでほがらかだつた、こゝでも豆腐をたくさんよばれた、健と差向ひで、初孫を寝かせて、愉快なビールを飲んだ、若い人々よ、幸多かれ。四時のバスで、そして五時の汽車で八幡へ向ふ、何だか寂しくなつて、たへかねて一杯二杯三杯……七時、鏡子居へころげこんだ、そしてまた酒、いつしよに井上さんの宅へ、そしてまたビール、やつと戻つて寝た、弱くなりましたねと鏡子さんに皮肉られながら。悲しい酒でもあり寂しい酒でもあり、嬉しい酒でもあり、うまい酒でもあつた！

孫――酒――旅――老――友――

八月六日　岔水居。

朝酒はほんたうにうまい、一滴一杯が五臓六腑にしみわたるやうである。昼飯は井上さんのところで御馳走になる、一人でゆつくり飲んで食べた、ありがたう／＼、鏡子さん、ありがたう。二時電車で戸畑へ、雲平居、星城子居を妨げないで、多々桜君の霊前で回向する、ほ

んに老少不定だ、奥さんの愁傷は見るに堪へなかつた。電車で、六時、門司の岔水居をたゝく、しづかな、あたゝかな家庭、岔水君にふさはしい、食後、奥さんもいつしよに散歩して映画を観たが面白くなかつた。

　　多々桜君霊前その桃が実となり、君すでに亡してふてふ一つ渦潮のまんなかに炎天にたへて咲く花のうごいてゐる

　八月七日　晴、まさしく大暑、花屋。

　起きてまづ一杯。——九時出発、岔水君夫妻よ、いつまでも今のやうに。歩く、下関はなつかしい都市である、飲んでは歩く。支草居往訪、すぐ退出、地橙孫居往訪、不在。花屋のいつもの部屋でぐつすり寝た。

　八月八日　晴、華山々麓。

　朝ふたゝび支草居を訪ねて、妻君から不快を与へられた、何か誤解してゐるらしい、是非もない事だ、私としては疚しくない。十一時の汽車に乗つて小月で下りる、一里一杯の元気で岡枝まで歩く、そこから軽便で原町まで、そして西市まで歩く、また一里歩いて、やうやくにして守富さんの家をたづねあてる、ほつとして水を飲ませてもらふ。家は華山々麓の山里にあつた、まことに清閑な住居であつた、家人がしんせつにもてなして下さる、守富さんが温厚そのものゝやうな詩人であるのも、なるほどとうなづかれた。久しぶりに蜩を聴いた、何といふよい声だらう。まことによい夜をおくることが出来た。

　華山々麓の一夜蜩

　　華山々麓やうやくたづねあててかなかなふと見あげる山から月の出るところ

　八月九日　曇、帰庵。

　朝の雨すこし、山から山があふれてくる、涼しい風がふきぬける、蜩が鳴く、池の鯉がはねる、うまい酒がます／＼うまい。十時半、西市まで送られて、切符までいたゞいて帰途についた。途中、吉田へまはつて東行庵に拝登した、夕方戻つた。

東行庵水浴胡瓜一山十銭！寝たら餅

柳すずしくお地蔵さまのあたま撫でては

八月九日　晴、立秋。

夕方帰庵。久しぶりに、自分の寝床で手足を伸ばして安眠熟睡した。

八月十日　晴。

暑い、暑い、忙しい、忙しい。身辺整理。――散歩、暮羊居に寄る、やつぱり一人はさびしい。月がよかつた、満月だつた、踊大鼓が聞える。がちや／＼がちや／＼、にぎやかなことである。ぐつすりと寝た。

・泥あそび水あそびする子供らの幸福・戦地より帰隊せる大場部隊長の苦衷

八月十一日　晴。

早く起きて筆を執る。――暮羊君来庵。月のよろしさ。よく睡れた。

八月十二日　日本晴。

終日執筆。午後散歩して一杯。柚子盗人が来たやうだ、いつぞやは花盗人が来たが。近来とかく腹が立つて困る、反省が足らないからだ、腹を立てるほど私は人並らしくないではないか！

八月十三日　晴。

沈静。――やうやく一篇書きあげて澄太君へ送る。ポストまで出かける、例によつて一杯。暑い日であつた、物みなあえいでゐる。嚢中自無銭！柿の実が青葉がくれに目立つほど大きくなつた、そしてぽとり／＼落ちる。更けるまで寝つかれなかつた。

八月十四日　晴。

暑いとはいつても、朝晩は秋を感じる、一雨来たらめつきり秋めくだらう。澄太君の好意で稿料を受取る、木郎君から来信、北支はさぞ

暑からう。樹明君から招待される、暮羊君から五十銭借りて理髪、煙草とグリコとを買ふ、椹野川で水浴する、そしてそれから訪ねたが、すこし早すぎた、やがて樹明君帰宅、よく飲みよく食べた、そしてそのあたりをぶらついて帰つて来た。家庭は、家庭といふものはなつかしいと思つた。

八月十五日　晴。

空々寂々、善哉々々。良寛和尚は空中習字をしたといふ、よし、私は空へ句を書かう！散歩、ポストへ、買物。暮羊居で雑談。肉体は老いこんでくるが、精神は若返るやうな気がする。……

八月十六日　曇。

——悪日だつた、酔ひつぶれて悔を残すばかりだつた。たうとう戻れなくて、Ｉさんの寝床にもぐりこんだ！

・心ゆたかなれば体すこやかなり。

八月十七日　晴。

昨夜の今朝である、堪へがたい憂欝だ。絶食。——悪魔が来て私を責め悩ました。……

八月十八日　曇。

身心清掃、今日も絶食。散歩、酔うて彷徨したけれど。……

八月十九日　曇。

早朝帰庵、ほつとする（昨夜はＪさんの寝床に寝せて貰つたので）。雨、雨よ、私を洗つてくれ。

八月廿日　曇。

不快。——Ｔといふ未見の人からうれしい手紙を貰つた（これも澄太君の友情のおかげである）、ありがたう。一度犯した過失は二度犯すといふ、私はいつもおなじ過失を犯しつゞけてゐる。酒はやめられない、酒を飲むと脱線する（いつもさうではないが、そして脱線といつても大したことではないけれど）、ほんたうにうまい酒、最初から

最後までうまい酒が飲みたい。悔のない生活、かへりみてやましくない生活がしたい。私は矛盾だらけだ、それはアルコールがもたらすものである。或る日はおとなしすぎるほどおとなしく、或る夜はあきれるほどあばれる。あゝ、かうして私は一生を終へるのか。ほろ／＼酔ふたとき、私は天国を逍遙する。しんじつ句作するとき、私は無何有境の法悦を味ふ。あゝ、この矛盾！　それを克服することが私にあつては生死の問題だ！

　八月廿一日　曇、微雨。

　身心沈静、専心読書。たよりさま／″＼、友はなつかしいかな。自己粛清——自己転換——自殺——私もいよ／＼どんづまりまで来た。
——まさしく秋、天も地も人も。

　八月廿二日　曇——晴。

　欝々として。——戦争の夢を見た、覚めてからも暫らくは身心が重苦しかつた。

　八月廿三日　晴れたり曇つたり。

　冷々淡々、それでよろしい。朝はコーヒーだけ、昼は御飯、晩はまたコーヒー。憂欝にたへきれなくて散歩する、暮羊居に寄つて新聞を借りる。万葉集を読みつゝ、その素純にうたれる。身辺整理。とても寝苦しかつた。

　八月廿四日　晴、快晴。

　けふもコーヒーだけ。清丸さんから重ねてたより、召集されて入営するといふ、餞けする物はないので、さつそく一句贈つた。六日ぶりに街へ、まづW店で一杯また一杯（酒も六日ぶりだ）、そしてＳ店で半搗米を貸して貰ふ。けつきよくは飯と水である。今日はお盆の二十四日、地下はお地蔵さまのおせつたいで賑ふ、ほゝゑましい風景であつた。午後、また、散歩がてらポストへ、暮羊居に立ち寄つて、久しぶりに会食した、よばれた／＼、うまかつた／＼！夜、暮羊君来庵、杉の青葉で蚊遣して、わざと蝋燭で、コーヒーをおいしくすゝつた。今夜も寝苦しかつたが、やつと眠れた。

八月廿五日　今日も快晴。

新秋のすが／＼しさ。Ｋから手紙が来ない、何となく不安な気がする。句稿整理、第六句集孤寒抄刊行の準備。散歩がてら、学校のＩさんを訪ねて、四国霊場奉納経をあげる、彼の妻君は大のお大師信者だから。陽は熱く風は涼しい。半搗米がなか／＼うまい、玄米も試食したい。すなほにつゝましく、たゞ／＼すなほにつゝましく、——それが私の生活態度でなければならない。

・一石一鳥がよろしい、それで十分だ。　たとへ一石二鳥三鳥があつたとしても。　一石一鳥の態度。

・私の浪費——　　　酒の浪費——泥酔。　　　　　　　　　　　　自分を粗末にする。　　　身心の浪費——のらくら。

・死期、死処・残生、余命

・巣立つ鳥　老いぼれ鳥

八月廿六日　晴。

早起、しづかな朝景色。緑平老は、忙しくて忙しくて雷のやうな、といふ、私はひまでひまで草のやうだ！老境。——草と虫と、そして。——Ｋから来書、ありがたう、安心する。さつそく出かけて、払へるだけ払ひ、買へるだけ買つた。飲みたいだけ飲み、食べたいだけ食べた、感謝々々。夕、暮羊居に立ち寄つた、暮羊君とお客さんとが街へ出かけるあとからついていつたのがいけなかつた、とうたう喧嘩わかれに別れて戻るやうなみじめさになつてしまつた。……今日、真実を語ることが——ほんたうをそのまゝ話すことが必ずしも幸福をもたらすものでないことを事実に於て見せつけられた。……

・ついてゆく。

△馬鹿と罵られても私は怒らない、私は自分が馬鹿であることを知りぬいてゐるから。△私はどんなに見下げられても平気だ、私は人間として無能無力であることを自覚してゐるから、何のねうちもない自分であることを悟つてゐるから。

八月廿七日　曇、微雨。

陰欝、身のまはりをかたづけて読書。反省して堪へがたいものがある、やつぱり私は一人がよい、一人の愚を守れ。夜、夕立があつた、寝床へまで漏つた、……あゝ、私の身心はやぶれてゐる！

八月廿八日　雨――曇。

落ちついて読書。短冊を書いてＮさんへ送る。飯あり、酒なし、……銭もなし。

八月廿九日　曇。

夜の明けるのを待ちかねて、水を汲む、水が濁つてゐる、さびしい色だ、何となく心が重苦しい。午後、Ｎさん久しぶりに来庵、そこはかとなく話す、コーヒーを御馳走したいが砂糖がない、そこらまで送る、そして私は石油買ひに新町へ、Ｍ店で一杯、むろんマイナス也、老主人はいつも嫌な人間なるかな、ついでに米を貰うて戻る。今日、Ｎさんに裏の柚子をもいでもらつた、柚味噌をこしらへた、香気ふくいくとして身心さわやかになつた。あれから暮羊君に逢はない、酒の上とはいひながら、私は感情をぶちまけすぎた、慎むべし、／＼。

┌誠┐│││真心┼無心境│││└無我┘

――我は如何なる状に居るとも、足ることを学びたればなり。――

パウローピリピ書

八月三十日　曇、時々雨。

暁起、虫声、読書。樹明君から来書、読んでゐるうちに涙ぐましくなつた、あゝありがたい。蝶夢和尚文集を読みつゞける。やうやく花茗荷が咲きだした、私の好きな花である、白い花だ、匂ひのよい花だ（水仙のやうに、くちなしのやうに、泰山木のやうに）。しづかで、おちつけばます／＼しづかで。蚊はともかく、油虫はやりきれない、Ｎさんから借りた本をなめられて申訳がない、困るぢやないか、油虫め。健へ手紙を書く、満洲進出についての卑見を申し送つた。暮れきらないうちに、農学校の宿直室に樹明君を訪ねる、酒とビフテキをよばれた、御馳走々々々、極楽々々。ほどよく帰つて寝た、ちんちろり

ん／＼、いつしか睡つてしまつた。私はＫ君との交渉に於て、人間の交際は深入するものでないことを教へられた（親友の場合は特別だ、深入するほど親密なのだ）、浅く交れ——かう事実が教へる、また、かういふ事も知つた、不用意な言行が、時として、どんなに葛藤をひきおこすものであるかを、——つゝましくあれ。

┌学んで、そして考へて。└考へて、そして学んで。

┌生活的事実└芸術的真実

八月三十一日　晴、まつたく秋。

未明眼覚めて、昨今の自分を省察する、しつかりせよ。身心平静。このごろの蚊の鋭さはどうだ。洗濯をする。久しぶりに裏山へ行く、もう萩が咲いてゐた。夕、散歩して銃後の句を一つ拾うた。白船老に——

……私は身心共にどんづまりに来たやうです、こゝで自己転換をしなければなりませんが、それが出来るかどうか、出来たらお手拍子喝采を願ひます、……お互に還暦も近づきましたね、私はいそいで酒を飲まなければなりません、みつちり句も作らなければなりません、とすれば私もやつぱり忙しいといへますね！……

苔の花

それは私の句、私の文にまことにまことによく似てゐる、——私の文集と句集の名前としてふさはしいではないか。

死ぬることは生れることよりもむつかしいらしい。

九月一日　晴、二百十日。

関東大震災記念日。あれからもう十五年になる、あの頃の私を考へると、まことに感慨無量である。今年ももう九月になつた！暮羊居から新聞を借りて来て読む。柿の葉がまじめに落ちはじめた。畑仕事をすこしする。どこかで万歳の声がする。夕方、暮羊君がやつてきて雑談しばらく。

九月二日　曇。

あかつき、虫の声がふるやうだ。落ちついて読書。午後は畑仕事、すばらしい草だ、明日は大根を蒔かう、ふさはしいお天気だ。新聞を借りて来て読みふける、新聞だけは読まずにはゐられない。夕方、裏の観音堂で大鼓が鳴り出した、地下のお接待日だ、ぞろ／＼誰も彼も登つてゆく、――なつかしくもうらやましい事であつた。夜、風のぐあいで、駅売の声がはつきり聞える、これはなやましいことだつた！

九月三日　曇――晴。

いつとなくいつのまにやら、すつかり秋になつた。私の好きな晩秋初冬もちかづいた。散歩、呂竹さんへ花茗荷を持つていつてあげる、句稿を投函する、W店で一杯ひつかける（アルコールのたゝりか、それともマイナスのたゝりか、めつたにない頭痛がした！）。夕方、大根を蒔く、何と弱い肉体だらう。

父子物語　　一、麦飯　　二、酒　　三、嘘―一銭銅貨

九月四日　曇――雨――風。

厄日前後で雲行何となく不穏。関東はまた風水禍に見舞はれた、それはむろん災害であるが、それを天地の警告として受入れるところに、人間の省察と発展とがある。今日は蕪を蒔く、そして洗濯をする。ポストまで出かけたついでに、暮羊居から新聞と雑誌とを借りる。雷鳴、時雨、うそ寒かつた。今晩の御飯はとてもおいしかつた、――いつもおいしく御飯をいたゞくのであるが、とりわけて――しみ／″＼ありがたいと思つた。いつもかはらずおいしいのは水と飯である。奇抜な夢を見た、奇抜すぎてをかしかつた、夢中、思慮を失はない自分がうれしかつた。

九月五日　風雨。

厄日らしく降つたり吹いたり。肌寒く、襦袢を重ねた。やむことをえないで、街へ出かける、まづW店で一杯ひつかけ、その勢ひで、Ｓ店で米を借りて戻つた、途上六句拾つた。御飯！　米といふものについて改めて考へる。層雲への短かい感想を書きあげる、それを持つて再び街へ、W店でまた飲む、酔うたが乱れなかつた。……人が恋ひしかつた、友達がなつかしかつた。

九月六日　雨。

胃のぐあいがよくない、今日は節食、昨日は食べすぎ飲みすぎた。何となく陰欝、井戸の水の濁つてゐるのも。読書が何よりよい、読書なるかな、読書なるかな。こほろぎの歌のよろしさ。澄太君からありがたいたより、あゝ友はありがたいかな。蚊が蠅が秋風に吹かれて、とてもずるくなつた。また、嫌な夢を見た、身心の鍛錬が足らない。

「感覚を通して魂へ」（ヘルマン・ヘツセ）感覚の中に魂を。――

九月七日　晴。

夜明けが待ち遠しかつた。やうやく晴れわたつた、日本晴だつた。もう大根も蕪も芽生えてゐる。散歩、まことに秋晴のよろしさであつた。昨日も今日も半搗飯と塩だけ。よい月夜であつた、踊大鼓が聞える。何といふ下らない夢であつたらう！婦人公論所載、河崎なつ女史の自叙伝はおもしろかつた、鳩山さんの母の伝記も、野口博士の生ひ立ちの記も。

九月八日　晴。

やすらかに今日の太陽を迎へた。萩も咲かうとし、曼珠沙華が咲きだした。散歩の季節、散歩日和であつた。暮雲居から新聞を借りて来て読む、徳安爆撃同乗記に心をひかれた。句稿整理、第六句集孤寒抄出版のために、――所詮は身すぎ世すぎのみじめさ！今日も三度とも塩かけ飯！閏七月の十五日、いはゆる芋明月であるが、誰も来てくれなかつた、雲が出て風が出て、月も冴えなかつた、なぜだか頭痛の気味で、早くから寝床にはいつたが、なか／＼寝つかれなかつた。Ｊさんが来ての話では、Ｆ老主人が危篤ださうである、此頃は死ぬる人が多いといふ、南無阿弥陀仏。

無駄をせず無理をせず――強く正しく――すなほにつゝましく――

九月九日　曇、一時晴。

しづかに――しづかで。――Ｎさんから短冊代を頂戴した、ありがたう。散歩、買物いろ／＼、やつぱり飲みすぎた、胃は何よりも正直だ！駅で、出征の山口兵を見送る、万歳々々、みんな朗らかで元気

で、心強く感じた、万歳々々。殆んど一ヶ月ぶりに温浴、垢を洗ひ落したが、また、垢がたまつた。不在中にＮさんが来庵されたらしい、すまなかつた。寝苦しかつた。

・徳安爆撃行、陸の荒鷲、久保編隊長の感嘆。――　秋晴れや爆煙散つて敵はなし

九月十日　曇――晴。

――省みて恥ぢる。彼岸花を仏前に。青唐辛佃煮。今朝から麦飯にする、いつも御飯を食べすぎるから。散歩、嘉川のポストまで、Ｉさんを訪ふ、息子さん出征。日中外出はまだ暑い、山越して汗びつしより。萢萱を活ける、何の奇もないところが好きだ。宵から寝た、夜中に眼覚める、良い月夜であつた。東京の夢を見た、東京の事を考へてもゐないのに。

九月十一日　晴――曇。

日に日に日が短く夜が長くなる、とかく寝覚がちの私は秋をひし／＼味はなければならない。よい日曜日、私には日曜も月曜もないけれど。急いで随筆を書きあげて澄太君へ送る。ポストまで出かけたついでに、W店で一杯。途上で暮羊君に邂逅し、先日の短冊の話をして安心。麦飯がうまい、茄子のどぶ漬がうまい、柚子味噌がうまい、うまいうまい！午後、散歩、W店でまた一杯、おかげで四句拾ふ。Ｆ老人はたうとう死なれた、森をへだてゝお葬式を見送る、あゝ生々死々去々来々、あはたゞしい人生ではある。樹明君に招かれて学校へ行く、宿直部屋で、腹いつぱい御馳走になつた、そして悪筆を揮つた、夜おそくまで、庵の事を話したり、伯父さんの話を聞いたり、芥川賞受賞作厚物咲を読んだりして帰つた。月がよかつた、酔眼に映る月の世界は美しい夢だ。今日は失策一つしでかした、御飯をしかけて忘れてゐたのである、せつかくの御飯を黒焦げにしてしまつた、私もだいぶ老耄したらしいわい！

衣食住の順序は、私にありては、食、衣、住。私は自然に心をひかれる、人事よりも自然にひきつけられる、それは素質境遇のせゐだらうが。

九月十二日　晴――曇。

身心倦怠。――昨夜は御馳走になりすぎた、自分の卑しさを恥ぢないではゐられない。顔を剃る、多少、気分がよくなつた。Ｊさんの話では、Ｗ老人も死なれたさうな、ああ。更けてよい月夜だつた。

九月十三日　晴――曇。

朝は晴れきつてゐたが、雲が出て風も出た。日の出を迎へる気持は何といへない。茶の木がもう蕾をつけてゐる。朝、百匹に螫された、彼は雑巾の中にもぐりこんでゐたのである、それをうつかり押へつけたのである、螫した彼には罪はない、螫された私の不運である、幸にして折よく有合せの薬を塗つたので、何でもなかつた。お昼は菜を間引いて味噌汁、おいしかつた、二重の意味で。めつきり日が短かくなつた、蚊も急に少くなつた。いろ／＼考へて寝つかないうちに夜が明けてしまつた。有明月が遠く細く美しかつた。

自然――自己必然性――本質性

自己を自然の一部分として観ると共に自然を自己のひろがりとして観る。

「人得咬菜根百事可做」「勿躰ないも卑しいから」

九月十四日　晴。

朝寒、袖なしを出して着た。句稿整理、なか／＼捗らない。白い着物を干して仕舞ふ、といつても浴衣一枚肌着一枚だけしかない。散歩、ポストまで、それから油屋へ。或る店でラジオを聞かせて貰ふ、欧洲もチヱツコ問題をめぐつて、戦争の前夜らしい雲行、ヒツトラーの獅子吼が強く聞える。……酒屋の前は眼をつぶり息をしないで通りぬけた！外を歩けば暑いが、内に居ればそゞろに寒い。井戸端会議といふものは面白い。漢口へ、――漢口へ、――日本人はみんな叫ぶ！お祭の大鼓が響く、ちよつと淋しくなる。また米がなくなつたので麦だけ炊く、まだ麦でもあるのが仕合せだ。麦を食べると胃の工合はよろしいけれど、腹が張つて困る（食べすぎるからでもあらうが）、そして放屁がつゞく。老人の死が多い、近火、近火、用心、用心。今日は何となく楽しい一日であつた、合掌。ランプも点けないで宵から寝

た。

・その文鎮　　　もしもこれが金であつたなら。――・借金の話

九月十五日　曇。

早寝早起だつた。今日もまた菜を間引いて、味噌が残つてゐたので、おいしお汁をこしらへた。澄太君からうれしいたより、私は廿二日を待ちかまへてゐますよ。散歩、ポストまで、W店で一杯、街はお祭で提灯が飾つてある。虫が卵子に執着して、鳴きわめいて去らない、彼等の子煩悩をあはれと思ふ。私は健啖、あまりに健啖だ！　そのために私はかへつて苦しむ、あゝ何と大きい強い胃の腑であらう！身心が冴えて、いつまでも睡れなかつた、やうやく睡れたら、すてきに珍妙な夢に襲はれた。

まづ何よりも米と味噌――それから石油と木炭――つぎに煙草と酒と魚――　　此順序が狂ふから困ります。

九月十六日　晴。

近在はお祭といふのに、心得の悪い私は、――朝は麦と塩、昼は絶食、――しかし、そのおかげで腹工合よろし、――不幸の幸福とでもいはうか。空腹をかゝへてポストまで、一杯ひつかけたいのをこらへて！曼珠沙華がむらがり咲いて美しい、仏華としてはよろしいが、何としても生花にはならない。午後出かける、学校に寄つて米二升借りてくる、やれやれ、晩食はシヨウユウライス！　うまいうまい。そこらまで散歩、安心して熟睡、夢も見なかつた。

金持金にきたなく酒飲酒にいやしい、しかし金持のきたなさはたまるほどきたないが、酒持のいやしさは酒を惜しむよりも大切にする方で、気持はさつぱりしてゐる。

九月十七日　晴。

暁起、そろ／＼火が親しくなつて来た。茶の花を活ける、日本人的のよろしさの一つ。また青唐辛を佃煮にする、外にお菜は出来ないから。けさは郵便が来なかつたが、今日は土曜日、或は誰か来てくれるかも知れないと待つてゐたが、やつぱり失望だつた。茶の若木を見つ

けて、瘞品の火消壺に植ゑる。風が出て柿の葉をしきりにおとす、座敷の中へまで散りこんでくる。――急に胸苦しくなつたが、すぐ快くなつた、私の悪運はなか／＼強いわい！　祝すべきか、弔すべきか！菜園手入、大根よ、早くふとれ、蕪よ、ぐん／＼伸びてくれ（することなすことがすべてヱゴイズムのあらはれだ！）。鶉衣を読みつゞける、也有翁のブル趣味がよく解る、よいところといやなところと、うそとほんたうと。晩食は一握りの米をお粥にしてすました、とかく食べすぎては身の毒、世間の迷惑である。今夜は蚊帳を吊らないで、杉青葉をくすべて寝た、風がうそ寒くなつて蚊も蠅もすつかり姿を見せなくなつた、すこし暖かいとすぐ出てくるが。――私は落ちついた、からだはます／＼すこやかに、心はいよ／＼澄んでくる、――私のやうな人間でも、素質を生かして良心的な仕事が出来さうである。――

・余盃

貧閑記　独楽記（老楽）

一生の未完成、そして　一句の完成

蚊帳と火燵との間　　　　　　（晩秋初冬）

九月十八日　晴、朝夕は曇る。

夜が長かつた、とかく寝覚がちの夜は殊に長かつた、夜の明けるのを待ちに待つて、東の空が白みそめるより起きた。しよう／＼として秋風が吹く、いろ／＼の虫が家の中へまで入つてくる。身辺を清掃して、机を南椽にうつす、気分かろくなる。秋晴、散歩日和、ちよいと旅がしたいな、おとなしく洗濯、読書、何やかや、なんぼでもすることがある。満洲事変記念日、十一時頃（時計を持つてゐないので）一人で焼香黙祷。……身心清澄、仕事も捗つてうれしい一日だつた。

・牡羊の死（暮羊君の話）　　畜魂碑　　ダンベイ

九月十九日　曇――雨。

何となし快々として楽しまない日。句集の後記、広告文の原稿は書きあげたが、句の取捨推敲に苦しめられる、自分の事は自分になか／＼解らないものだ、もつとも歳月それ自体が淘汰整理してはくれる。

暮羊居へ、新聞を借り、そして二句拾ふ。やうやくよい雨になつた、急に秋冷を覚えた。寝苦しくて阿呆らしい夢を見つゞけた。――

九月二十日　晴。

今日は二百三十日、厄日を無事平穏に通り越して、めでたしめでたし。何だかうれしいことがありさうな。――やつと郵便が来た、澄太君から遞友稿料受取、さつそく街へ出かけて、買へるだけ買ふ、おもに食料品、例によつて二三杯ひつかけることはやめられない！澄太君の来庵――廿二日の会合――が都合で来月に繰り下げられたことは私に失望を与へた、待たう。午後また散歩、W店で飲みだしたが、一本の酒が飲みきれなかつた（肉体は飲みきらないのに精神は飲みたがつてゐる、酔ひたいのだ）、十三日ぶりに入浴して帰庵。夕、また／＼散歩、ポストまで。夜は軽い読物を読んで、のんびりと寝た。

緑平老の来信に答へて――

あなたは廃物同様だけれど、非常時だから御奉公させて貰つとるといふが、私は癈品にも値しない存在ですよ、ほんに無能無力、生きてたゞ世の中の邪魔物、片隅にちゞこまつて、なるたけ穀をつぶさないやうにする外ありませんね。

或る種苗会社から見本を送つてくれたがその種子は芽生えなかつた、会社の不注意か、栽培者の不行届か、いづれにしても微苦笑物だつた。

九月廿一日　晴。

身心やゝ重し、昨日のアルコールのせゐだらう。露草の何と美しいこと。大根一本四銭、根はおろして、葉は漬けて味ふ、豆腐一丁三銭、ヤツコで味ふ、青しその香のよろしさ。新らしい俳文、――散文詩を作らう、作らなければならないと思ふ。まづ何よりも三八九を復活したい。午後、近郊散歩、五句拾ふ。味覚の秋、しかも香気の秋だ、紫蘇、柚子、橙、松茸。――おいしい晩飯であつた、おだやかな夕であつた。食後、ポストのあるところまで散歩。

・巣居知風、穴居知雨――といふ語句があるさうだが、私はそれに和して独居知己といひたい。

・酔へば一切肯定だ。　アルコールは否定を知らない。

・独居は人を饒舌にする、パラドツクスめいた文句だが。

・生は寄とは思はない、生は生の生でなければならないと思ふが、死は寄也と思ふ。　これが現在の私の信念である。

九月廿二日　晴。

早すぎるけれど起きた、うつくしい朝明けだつた。近所は道普請、すみません。何ともいへない好晴、まつたく日本晴だ、空に雲がないやうに、心に影もない。季節のうつりかはりは、それに気づくと、その正しく早いのに驚かされる、一ヶ月前と今とは何といふ相異だらう。或る戦争記事を読んで涙を流した、私が涙もろいからばかりではない、それはあまりに痛切であつた。歩くと草の実がくつついてくるやうになつた。このごろの蚊はまるで死物狂ひだ！食べる物、飲む物がいよ／＼ます／＼うまくなる。松茸と酒、酒と松茸、あゝ松茸、あゝ酒！石油がなくなつたので、宵から寝た。

作家にとつて、知ることは知らないよりもましだが大したことではない、何よりも味ふことである。ほんたうに知るには味はなければならない。どんなに経験を積み重ねても、それが体験として働らかなければ、すべてが徒労である。

△貧乏の説。△句といふこと

九月廿三日　晴。

早起、——虫声、鶏声、そして鐘声。多少の憂欝。朝はお粥で、——今日は節食、——お彼岸団子が食べたいな！庵は鼠も生活難らしい（此頃また鼠が来てゐる）。蕪大根を蒔きかへる、種子代四銭、殺虫剤が買へないのであります。渚同人からたよりがあつた、かなしいたよりだつた、あゝ詢二老、もう一度逢ひたかつた、逢ひたかつた。……街へ、買物がてら散歩、一杯も飲まなかつた、いや、飲めなかつた。菜ツ葉一把三銭、野菜もだん／＼高くなる、何もかも騰る、貧乏人はいよ／＼困る。蛇入穴、まだ早いが、今日も裏で数匹のろ／＼してゐた、蛇は嫌だ、見るとぞつとする。寝苦しくて下らない夢ばかり。今日は十九句作つた、多すぎる、ちようど飲みすぎ食べすぎるや

うに、――それについて考へる、私の多作は私の大食のやうなものだらう、善悪利害どちらともいへないものだらう、要は無理なしに出来るものなら、それは自然であり、やむをえないことであらう。

　・大根葉が伸びない、枯れる、虫がついたのだ、いはゆる害虫だ、だが人間はもつと悪い害虫だらう、大根にとつては。

　　　　　小害虫大害虫。

　半搗米を食べ慣れて、その美味と経済と栄養との三調子揃つてゐることが解つた。

　二十銭で買つた鋏が十余年前十銭買つた鋏ほどの切味を持つてゐないことは、何といつても皮肉な事実だ。

　九月廿四日　晴。

　彼岸の中日、清澄。菜漬のおいしさ、淡々として無量の味。のどかな朝日をまともに浴びて読書（歳事記）。顔を剃る（理髪は入浴同様に気分を一新する）。彼岸団子の味は――食べたいなあ――老楽の一つ！今日明日は誰か来てくれさうなものだと待つてゐる。暮羊居を訪ねて、新聞を借り梨を貰ふ。すこし風が出て、柿の葉がしきりに落ちる、熟柿も落ちる、もつたいないな、まだ食べられないかな（とかく年寄はいやしいものですね！）。宵からぐつすり。――今日は三句しか拾へなかつた、それも無理に拾つた気味がある、三句だけでよいのだけれど、三句とも駄作では心細い。

　・漂泊詩人の三つの型　　芭蕉、良寛　　一茶　　井月

　九月廿五日　晴、朝寒、時々曇る。

　何とほがらかな、何かよいことでもありさうな。井師から朱鱗洞遺稿『礼讃』改訂本到着、私からも井師に謝意と敬意とを表する。あのころの事を追想するとまことに感慨にたへない。朱君を考へると、何とはなしに、啄木を考へる、或る意味で、朱君は俳壇の啄木らしかつたといへないでもなからう。煙管掃除、ノンキだね。昨日も今日も待つともなく待つてゐたが、誰も訪ねて来てくれなかつた（暮羊君がちよつと来たゞけ）、軽い失望を感じて何だか寂しかつた。それにして

も敬君はどうしたのだらう、少し腹が立つ！歳事記を読みつゞけて、気がついたことは、月の例句は多すぎるほど多いが、さても気に入つた作は殆んど見つからない、一茶の句に多少ある、芭蕉はあまり多く作つてゐないやうである。門外不出、文字通りの無言行だつた。今日は十句出来た、どうせ瓦礫みたいな句だけれど、磨いたならば、瓦は瓦だけの光を発するだらう、磨け、磨け、光るまで磨きあげることだ。

・象徴の世界　　形象から心象へ　　心象から形象へ　　形象即心象の境地

九月廿六日　晴。

夜中の風は多少野分めいてゐた。白船老から珍らしく来信、水仙花さんからの句集代が封入してあつた（しかも緑平老の句集代だ！）、ありがたう／＼、すぐ街へ、いつものやうに一杯ひつかけた、七日ぶりのアルコールだが、さほどうまくなかつた、よろしい／＼、米、麦、油揚、ハガキ、菜葉を買うて戻つた、おかげで絶食のみじめさを免かれました！　白船老よ、水仙花さんよ。私は支へられて生き残つてゐる！それなのに、このごろ、ともすれば腹が立つ（人間に対して）。何で腹が立つ、腹を立てるほど私はしつかりしてゐないぢやないか、我儘を捨てろ、自己を知れ。今日の菜葉はよかつた、安くもあつた、広島菜は茹でゝ、大根菜は新漬にしておく、おいしいぞ。チヱツコをめぐつて欧洲の天地はうづまいてゐるらしい。夕方、ポストまで、途中で三句拾つた。麦飯もおいしいが半搗米の底味にはたうていかなはない、私は黒い米の堅い飯が好きだ、視覚からも味覚からも、生理的にも心理的にも、たまらない味がある。今日は九句、句数はちようどころあひだけれど、句品はまだ／＼、精進努力が足らない／＼。

過去帳、——“みんな死んだ、死んでしまつた、死んでゆく”・朱鱗洞・多々桜君・詢二老・寸鶏頭・一平処

九月廿七日　晴。

五時頃起床。——大根葉の虫をさがしだしてはつぶす、無益の殺生

ではないが、憎くもあり可愛想でもある、詮方もない事実だ。予期した通りにＫから送金、何とキチヨウメンな息子だらう、ありがたし／＼。さつそく街へ、――払へるだけ払ひ（払はなければならない半分も払へない）、買へるだけ買ふ（買ひたい半分も買へない）、何だか寂しくなり悲しくなる、一二杯ひつかけて理髪して貰ふ、農学校に寄つたら、牛がお産をするところだつた。コスモスが愛らしく咲きだした、向日葵がどう／＼と咲いてゐた。昨日今日は萩の花ざかりだ、一人で観るには惜しいが、久しぶりにお茶を飲む（ずゐぶん長く白湯ばかり飲んでゐた）。午後また街へ、だいぶ飲んだ、――まづＳ店で、それからＷ店で、さらにＮ店で、そしてＴ店で、――今日は一升近く呷つたらう、酔うた、久しぶりにいゝ気持になつた、それでもおとなしく戻つて来てすぐ寝た――善哉々々、山頭火バンザアイ！今日はふつと生魚を買つた、一尾十銭（これで昭和十三年に生魚を買ふこと四度目である！）。今日、出かけるとき、だいぶ出かけてから、財布を忘れてゐたことに気付いて引き返した、私もちかごろ耄碌したらしい、だいぶぼんやりしてゐる、おい、山頭火、しつかりしろよ！真夜中に眼が覚めた、起きて何やかや片づける、酔うて帰つたと見えて、そこらがとり散らかしてある。酔郷、そこには地獄もなく天国もない、悪魔もゐなければ仏様もゐられない、まさに酔楽々だ、無我飄々だ！四十四日ぶりに理髪して八日ぶりに入浴した、床屋の娘さん、湯屋のお婆さん、どちらも結構々々。夜が長かつた、なか／＼明けなかつた。……

・新聞紙の一きれも――

一きれの新聞反古から、私は暗示を受ける場合がちよい／＼ある。

・言葉――ぴたりとあてはまる言葉といふものは考へ出すよりも拾ひあげる場合が多い。

作家としての苦心、制作のよろこび。

今日の買物（九月廿六日）十銭　　ハガキ五枚六銭　揚豆腐二丁十三銭　　酒一杯五銭　　大根菜一把四銭　　広島菜一把三十五銭　米一升十八銭　　麦一升　　〆金九十一銭也　　今日の買物（九月廿七日）　　午前二十銭　　ハガキ五、切手五十八

銭　　酒一杯半三十銭　　理髪賃一円五銭　米三升六銭　　　黒糸一把七銭　　　胡麻一袋五銭　　　線香一把　　午後十三銭　　飯茶碗一、茶飲碗一五銭　　　切昆布一袋四銭　　　生薑一束六十八銭　酒五杯半十銭　　　番茶一袋十銭　　　生魚十銭　　　餅七ツ十五銭　　醤油四合六十四銭　短冊十四枚十一銭　　巻煙草一十八銭　煮干五十匁四十七銭　質屋利子払　　〆金四円九銭也

九月廿八日　曇――晴。

さすがに今朝は腹工合がよくない、嚢中自無銭！うつくしいかな要の芽、柿の落葉も見れば見るほどうつくしい、あゝ自然は美しい。歳事記続読。Ｍ君に句稿、Ｎ君に短冊を送る。午後の散歩では失敗した、飲みすぎて、だらしなかつた、Ｗ店での焼酎二杯がこたへた、Ｙ店ではまだよかつた、Ｆ屋へいつたのがよくなかつた、どろ／＼で戻ることは戻つた。

九月廿九日　曇――晴。

暁の黙想――悲しかつた。鳴きたてるこほろぎ、その声が身にしみわたる。今日から防空訓練週間、――サイレンが鳴りひゞく、爆音がとゞろく。――山口へ、――三月ぶりに――柳田橋まで歩き、湯田までバス、駅までまた歩く、そこで遺骨を迎へる、かなしい場面だ。……第三書房へ、図書館へ、博物館へ、清君によばれて、湯田温泉で、そして小郡で、――Ｎ店で、Ｗ店で、――どろ／＼どろ／＼、前後不覚、たうとう倒れてしまつた！

九月三十日　曇、ばら／＼雨。

早朝帰庵。自己を検討する、私は酔ふとだらしがなさすぎる、自制が足らない。……萩が咲きみだれて美しい、それを眺めてゐると、心が落ちついてきて気がやすらかになる。おちつけ、おちつけ、いら／＼するな！石油もないので、ランプを点けないで、宵から寝る、寝苦しかつた、夜が長かつた、警報サイレンがしきりに鳴つた、妙な夢ばかり見た。……

満腹と脱糞

十月二日　曇。

沈静なり、読書。酒もうまいが本もおもしろい、わがまゝきまゝの旅がしたい、酒を飲んだり、本を読んだり、女に戯れたり、……歩きたい、／＼。敬君来庵、ほんに久しぶり、七十五日ぶりだ、酒、豆腐、おべんたう、うれしい／＼。Ｆ君は死なれたさうな、彼の死を悼むよりも、彼の妻と子との運命を考へる、彼は東京にゐると聞いてゐたが、冥土にいつたのだつた！　あゝ。手紙を書く、いやな手紙だつた、私にとつても、喜代志君にとつてもまた。柿買老人が一人また一人来た。熟柿のうまさよ、柿には柿虫がゐますね。ポストまで出かける、W店で一杯、Ｎ店で一杯、またＦ店で一杯、方角が解らなくなる、道徳を失ふ、二度誰何された、何しろ防空警戒中だ、満身の瘡痍——たゞしかすり傷だけ、——辛うじて帰庵、前後不覚で寝てしまつた。アルコール天国、そしてアルコール地獄、よからう、よいとしなければ生きてゐられない。

・秋穂散策

十月二日　曇——雨。

自分のおろかさをあはれみいたはりつゝ。——いら／＼するなかれ。柿の落葉のうつくしさ、そのうつくしさを観るだけのためにも生きてゐたいと思ふ！可愛い花盗人来襲、彼等は物の私有といふことを知らないほど純でうぶなのだ。——とうてい、酒はやめられないとすれば、せめて日本酒だけにしよう、焼酎のやうな火酒を飲んで、ろくな事のあつたためしがない、昨夜の場合だつてさうである。夕方、雷鳴、そして驟雨、夜に入つて本降りになつた。警戒サイレンがしきりに鳴つた。昨夜の失敗が今夜の私を睡らせなかつた、苦しかつた。

・感動は詩の母胎であるが、　亢奮からほんたうの詩は生れない。　戦線の詩なるものがそれを実証してゐる。

・酔境　　自己忘失　　自己脱却　　自己超越　相対を止揚したる絶対境

十月三日　雨、秋雨らしく降りつゞいた。

おちついて——身心整理。今夜も寝苦しかつた、やつと寝つけば、奇々怪々の悪夢に襲はれた、莫妄想々々々、一切放下々々々々。

十月四日　晴。

早起、天地人清澄。——五十にして五十年の非を知るといふが、私は六十にして六十年の非、七十にして七十年の非を知る愚人だ！私は此頃になつて、やうやく、自分らしい句境を持つことが出来たと思ふ。今朝の郵便はハガキ三枚、手紙二つ、そのいづれもうれしいが、とりわけて鏡君の手紙はうれしかつた、ありがたう、ありがたう。街へ出かける、払へるだけ払つたり、返せるだけ返したら、買物をするほどは残らなかつた、あはれ／＼。途中、Ｏ老人に行き逢ふ、さつそく草庵建立の志を話して、配意を願つて置いた。Ｏ家で松茸を少々分配して貰つた、Ｎ店へ三本、Ｗ店へ二本あげたら、私の食膳には小さいのが三本あまつただけだつたが、おいしかつた。松茸、松茸の香は追憶をかぎりなくひきいだす。蕎麦の花がしろ／″＼と咲いてゐる、清楚な花だ、コスモスが赤く或は白く咲きいでゝ揺れてゐる、可憐な花である。街に出かけたとき、或る店で、不快な事にぶつかつた、ちよつとした、何でもない事だのに、それが神経をいたぶつていつまでも忘れられない。……午後、延引の手紙を二通認めて、またポストまで。午前は酒に敗けたが、午後はアルコールに勝つた、といふのは、酒をひつかけたが、焼酎は呷らなかつたといふことである。今夜は石油が買へたので、六日ぶりにランプを点けて、奥の三畳を締め切つて読書した。十一日の月が裏藪に傾くまで眠れなかつた、そして明けるのが待ちきれないで起きた。——井戸の水が濁つてゐる、澄みきつた水が飲みたい、戦地の将士にすまないけれど。

茶の木と梅の木　樹ぶり枝ぶり（日本的）　花と葉実（実用的価値）（活花として）

・鱧の膽（老祖母追憶）　「鱧の皮」

自己と他己　自己を害ふだけでなく他己をも傷めることは苦しい。

〼Ｊ君の審問に答へて　　不断の精進　　一生の道　　歩々新天地

感動なくして制作するなかれ。ホントウの句は下手でもよろしいが、ウソの句は上手でも駄目。多作寡作は素質により、その場その時の事情により、慣習によるでせう。句作より前に詩精神の涵養が大切。読書、観察、思索。よい句はよい人からのみ生れる（よい人とは必ずし

も道徳的人物を意味しない）、人間として磨かれ練れてゐなければならない。作りつゝ味はひつゝ、――制作と鑑賞とは両翼の如し。句は飽くまで推敲すべし、一句に拘泥するは非。

┌古池や蛙とびこむ水の音┃―――蛙とびこむ水の音
┃――――――――水の音└――――――――――音

芭蕉翁は聴覚型の詩人、音の世界

十月五日　晴。

身心清澄、うつくしい朝焼の日の出。朝寒夕寒、日中は暑い。不名誉の負傷がなか／＼癒えない、恥づかしいことだ。買物がてら街を散歩したのは近来にない失敗だつた、一杯一杯また一杯、たうとうどん底に落ちこんでしまつた、私の苦悩は詮方ないが、Ｎの主人には申訳がない、あゝ。アルコール地獄、そこには何もない、メチヤ／＼だつた。

十月六日　晴。

暗欝、死がのぞいて来る。……あまりに暗いしづけさだ。私は完全に世間学校の落第生だ、人間学校から遂に放逐された。……酔へば悲しく、酔はないでも悲しく、私も人も。身のまはりを見わたして、私は堪へきれなくなる。ちよつとポストまで。――昨日はアルコールに敗けたが、今日はアルコールに勝つた、勝つた、勝つたがやつぱり苦しい。

・二つの宿願

生きてゐる間は感情をいつはらないこと。わがまゝといへばそれまでだが、私は願ふ。いやな人から遠ざかつて、好きなことだけしたいのである。死ぬるときはころりと死にたい、それには脳溢血がいちばんよろしい。

・酔中の思考や行動がいつものそれらと相違するといふことは、自分の平常の生活に嘘偽――不自然があるからではないか。・年寄の物忘れはむしろ恩恵だ、忘れたいのに忘れられないことがどんなに多いことか！

十月七日　晴。

沈静。——苦しい手紙を書いて、散歩がてらのポスト行がたうとう嘉川まで歩いた、ぼつ／＼稲刈がはじまり、路傍には私の好きな石蕗の花がちらほら咲いてゐた。秋晴がつゞく、私の身心もそのやうであれ！「移民以後」を読む、胸にせまる小説だ。今日は酒に勝つたぞ！閏八月十四日の月夜、松虫の声も冴えてゐる、わりあいによくねむれた。

十月八日　晴。

早起、朝寒、平静、執筆。——まことに日本の秋！今日こそはと頑張つて、一日がゝりで、やつと句集原稿をまとめあげた、さつそくポストへ——ほつとした、うれしい一杯、もう一杯、疲労と安心と喜悦とがこゝろよく酒に融ける。……夕また月に誘はれて街へ、W店で少し飲む、おとなしく酔うて戻つて、近来にない快眠をめぐまれた。月もよかつたが、私もよかつた、酒もよかつた！

アルコールを飲まないでサケを飲め。

しづかにたたへたる情熱。それが望ましい。

青い花！　そして白い花！

・卑怯だけれど私は人間から逃避する、そして勇敢に自然の中に沈潜する。　安易な妥協は私の性情が許さない。・青年は青年らしく、老人は老人らしく、彼は彼らしく、——それが人間らしい人間であり、人間の姿である。

嘘をいふな、飾るな、自他を欺く勿れ。

十月九日　曇。

ぼうぜんとしてやすらかなり！いつものやうに早く起きたが、御飯が——むろんお米も——ないので絶食、それもかへつてよろしい。新町方面へ散歩、そしてM店で一杯借り、Ｓ店で三升借り（これは米）、さらに局の奥さんからハガキ二枚借りた！一杯の酒が身ぬちにしみわたり、数椀の御飯がからだいつぱいになつた。……しぐれらしく微雨をり／＼。草紅葉、わけても蓼がうつくしくいろづいてきた。

暮羊君来庵、観そこなつた五人の斥候兵の話などを聞く、娘さんの出生を祝する。——酔樹明さうらうとして（まんさんとしてではない）来る、何といふ悩ましい姿だらう、どんなに悩んでゐるかは解りすぎるほど解る、すぐ寝た、対座するにはどちらも堪へきれないのである、お茶漬をたべて、すこし元気が出て、帰つていつた、樹明よ、くよ／＼するなよ、君らしくもないぞ。おちついてゐて、しかもいら／＼するとは！婦人公論所載、林歌子刀自の自叙伝は感銘深かつた。更けて良い月夜になつた、いつまでも睡れなかつた、どうしても寝つけなかつた、選句や文案を練つてゐるうちに、たうとう夜が明けてしまつた。

　緑平老に——

　お引越のよし、たいへんでせう、近いとお手伝するのでが、そしてかへつてお邪魔するのでせうが！　私はぼうぜんとしてゐます、穴の中へでもはいりたい気持です。

　軒からぶらりと蓑虫の秋風

　虫の方が幸福です、何だかうらやましいやうな！

　十月十日　晴——曇——時雨。

　何もかも片づいてから、やつと六時のサイレン。蕪も大根も菜葉はまた駄目になつてしまつた。害虫はむしろ私の身心の中に巣喰うてゐるのだ！詩三篇作つた、民謡風に私の心持をあらはしたのである。地主が来て柿をもいでしまつた、食べたいとは思はないけれど、見る眼が淋しくなつてしまつた。昨夜一睡もしなかつたので、今日は少々ぼんやりしてゐる。私の胃袋は強い、大きすぎる、食慾もすばらしい、あまりに逞ましい！よく食べてよく寝た。十月十五日——信坊の祥月命日だ、忘れないやうに。

　・熟柿の話・酔余録

　十月十一日　曇——雨。

　原稿を書きつゞける、やうやく約束通り澄太君に——君を満足させはすまいけれど——送ることが出来た。Ｋから、予期した如く、来

信、あゝすまない／＼、さつそく出かける、そして払へるだけ払ふ。恥を忍んで、返金すべく、Ｎ店老主人と対面、それから一杯、苦しい一杯ではあつた。私は近来水の句がだん／＼出来るやうになつた、善哉々々。手紙を書いて、またポストへ、ハガキを書いて、さらにまたポストへ、まことに御苦労千万！虫が火鉢へ寄るやうになつた、寒いからだらう。ゆつくり夕飯（安心して晩酌をやりたかつた）、うまい味噌汁だつた。ちつとも睡れない、夜通し考へつゞけた。

・死は誘惑する、生の仮面を脱げ！・人を離れて一人住んでゐると、ともすれば死にたくなる、といへばいひすぎるかも知れないが、生きてゐたいと思はなくなる——死んでもよいと思ふやうになる、私にはさういふ傾向が強いやうだ。

過去を葬る記。

葱一把四銭也。そして酒四杯四十七銭也。

十月十二日　時雨、曇。

夜明が待ち遠かつたけれど、私は落ちついて、ぢつと空を眺めてゐた、沈静そのものゝやうに。何となく気持がめいりこんでくる、暗いかげがたゞよふ。……近郊散策、百間堤まで歩いた。とびかふ蝗、赤い沢蟹、蓼紅葉、いろ／＼のものを見たり聞いたりしたが、句にならなかつた、気分が散漫だつたから。まさに私の転機だ、私はこゝで転換する、句作の上でも、生活の上でも、私全体の上に於て。愚にかへれ、愚を守れ、愚におちつけ！今夜は熟睡した、ありがたかつた。

空の世界——┌主観——明鏡止水なり。└客観——生滅流転の相。

無我無心。空を観ずるのではない、空そのものになる。

意味を持たせすぎる。語りすぎる。事象よりも景象を。景象即心象。感覚を通して魂の表現。

説かずして写す。

求むるなかれ、探すなかれ。

おのづからにしておのれのすがた。

十月十三日　曇。

平静、身辺を整理する。どうやら晴れさうな、今日は小学校の運動会、をさない彼等をよろこばしたいと願ふ。二三日ぬくいので、佃煮にも黴が生えた、黴といふものは有毒無毒にかゝはらずほんたうに嫌なものだ、ちようど油虫のやうに！三と数は好きだ、飯も三杯、酒も三杯といふ風に今日から実行しよう（但し杯の大きさに融通をつけておかう！）。午後は散歩、石油を買うて、それから財布の底をはたいて酒、酒（といつても十銭しかなかつた！　これだけでちよいと虫をなだめておく！）。途中、ひよつこりＷさんの妻君に出会つた、先方も私も見違えてゐた。私はまさしく転身一路だ、私もこんどはどうやらしんじつ落ちつけるらしい、バンザアイ！自己矛盾、省みて恥ぢ入る、私のやうに矛盾だらけの老人があらうか！食べられるので、かへつて困る、食べすぎて困る、必要以上に食べるのは賤しいからだ！　貪る気持があるからだ！　どうぞ飲みすぎは御免下さい！今夜は灯がある、ランプのあかりで古典を読むのも一興であることを失はない。今夜はまた睡れない、隔日徹夜とは困つた。

・詩人は吃がよい、訥々としてうたふのがよい。　舌の長い唇の薄いのはいやだ。　おしやべりに悪人もなからうがホンモノもあるまい。

・単純、清澄、温情。　湧いて湛へて溢れる温泉のやうに句作したい。・マルグリツト　オオドウウ　孤児マリア　光ほのか

十月十四日　曇――晴。

――夜が長かつた、なか／＼明けなかつた、明けはじめるとたちまち明けた。夜明けの風が野分らしく吹いた、柿が庵をつゝんだ。私が仏でもあるかのやうに荘厳してくれた。徹夜句作で労れたからだを裏山へ持つて行つた。Ｎさんから短冊代を送つて来た、ありがたう、これで、澄太君を餓えさせないですむ、明日よ、早う来い／＼。街へ出かけて買物。――たうとう私は爆発した、十日ぶりに毒気悪気を吐いた、ずゐぶん溜つてゐた。――雨になり、酔ひしれて戻れないのでＷ店に泊つた。恥二つ、まへもうしろも恥だつた、何の恥、――恥を恥と感じなければ恥はない、私は恥ぢる、恥を恥として恥ぢないではゐ

られない、——悲しい矛盾だ、寂しい撞着だ！　あゝ。酒を慎まう、自分から進んで積極的には飲むまい、消極的禁酒ならば私にも可能と思ふ。

A伯母┐△二人の伯母│　│の一生 └
M伯母┘△祖母の乳房（姉の追憶）△孤貧の記

十月十五日　曇。

早朝帰庵、陰欝たへがたし。澄太君はほがらかに迎へなければならない。……仏前にて焼香合掌、懺悔念願。ぼんやり、阿呆、とんま、ばか、ぼんやり。章郎君来庵、熟柿をもいでたべたり、御飯を炊いてたべたり。草、雨、風、——まさに日本の秋だ。いつしよに三時の汽車を待ちうけて、澄太君といつしよに、酒、飯、ユカイユカイ！夜、Ｓさんも来庵、私だけ大いに飲んで大いに語る。あたゝかく、二人ならんで寝る、熟睡だつた。

私の外廓はしば／＼破れるが、内なる私はなか／＼破れない、——この点では私は私を堅く持してゐる。だらしいがない、——これが酔山頭火に対する定評だ、まつたくその通り、ほんたうに、だらしがない！

十月十六日　晴。

まことに秋晴、風が出たのが惜しかつた。澄太君は七時のバスで山口へ、今夜も泊つてくれることにして。私はいうぜんとして、一杯また一杯。ちよいとポストまでが、Ｉさんを訪ねて、また飲んでうたふことになつた、同席のＳさんも変人だ、三変人いつしよに変人ぶりを発揮した。色紙二枚、新婚祝句を書きなぐつてＫ嬢にあげる。二時頃帰庵、樹明君待ちあぐねて帰らうとするところ、引返してもらつて雑談しばらく。

風の中の豆腐一丁（樹明）

と机上のノートに書いてあつた。風が出て寒くなつた、澄太君なかなか戻つて来ない。寝床で章君から借りた麦と兵隊を読んでゐるところへ澄太君の足音、もう十時を過ぎてゐた。お土産の一本をちびり／＼やつて、おかげでぐつすり。今夜の対話はよかつた、しみ／″＼触れ

るものがあつた。

十月十七日　好晴。

神嘗祭、日本晴である。ゆつくり寝て六時ちかくなつて起床。澄太君は早朝から街へ買物に（みんな庵のための品々）。小蕪、白菜、醤油、等々、今日の庵は物資豊富である、ありがたう、すみません。今朝は最初の寒さ冷たさだつた、足袋が欲しいなと思ふほどであつた、米洗ふ水が身にしみた。澄太君、腹いつぱい食べて、裏で野糞を垂れて、日向ぼこしてうつらうつら、全澄太発揮！私は私らしくちびりちびり朝酒、うまいな、もつたいないな。十二時すぎて、農学校に樹明君を訪ねたが不在、ぶら／＼歩いて嘉川駅まで、途中、うどんを食べ鮨を食べ、かまぼこでコツプ酒を飲んだり、――尽きぬ名残を惜しみつつ、三時の汽車で君は下関へ、私はまた歩いて帰庵、途中、敬君の実家に立ち寄つて暫く雑談（庵のことなど）。人間が人間に接すると、とかく嫌な思ひをさせられる。アルコールと散歩とのおかげで、宵からぐう／＼ぐう／＼、うれしかつた。

澄太君の好意で――

二十五銭　　焼杉下駄三十銭　　　家庭用マツチ壱円　　　　借金二口

米や茶は買へなかつたが。――

十月十八日　快晴。

――頭はかるいが胃が重い！おちついて読書、麦と兵隊など。午後、ポストへ、ついでに入浴、半月ぶりだつた！　途上の一杯二杯がたのしかつた。今年は先日の時ならぬ暖気で、せつかくの松茸が腐つたさうな、酒が売れませんと酒屋がこぼす、飲めないなとのんべいが嘆く。……――好意に甘えるな（人に対しても自然に対しても）、――とつく／″＼考へる。

十月十九日　晴。

有明の月に起された、早すぎるが起きた。今日も好いお天気だ、どこへ出かけようかな。みぞそばの花の野性美。山から小鳥が下りて来

た、ひよどりが啼く。百舌鳥の声が秋風と共に鋭くなる。――私は万物に感謝する。――ポストまで出かける、途中の一杯は忘れない。蛇が路傍で殺されてゐた、早く穴に入ればよかつたのに。靖国神社大祭第二日、十時十五分一斉黙祷、私も焼香合掌、天地人に低頭祈念した。昨日は新聞の出ない日だつた、今日は新聞を読んだ日。うたた寝！　それは独身の自由を表現してゐる、無産有閑の余徳である。紫蘇の穂を採る、すこしおくれたが、香気あたりにたゞよふ。午後は絶食、米もないし、食傷気味でもあるので。よく睡れるやうになつたのが何よりもうれしい。

　無理のない存在

　自然な生死

　麦と兵隊を読んで、いろ／＼感じたが――

　・記者の眼と作者の眼

　彼等のペンの相違

　・実感体験の尊さ・水の如く酒の如く、そして・記録文学の事・戦線制作の事

　十月廿日　曇。

　本格的秋になりつつある、私はまだ用意が出来ない、まだ単衣を着てゐる、……気にかけてはゐないけれど。しよう／＼として風がふく。午前は絶食。――街へ、ポストまで、いさゝかの稿料を受けて、酒やら茶やら何やら買ふ。やれ／＼よい／＼（といつたやうな生き方だ）。散歩、こゝで一杯、あちらで一杯、一杯一杯また一杯、――酔つぱらつて、そして戻つて、そのまゝ無何有郷！

　十月廿一日　晴、曇、時雨。

　早起――反省。風、風、この風はすこぶる意味深長だ！Ｋから来書、日鉄退社、満炭入社といふ、Ｋよ、行くか、行け、行け。――――私はぢつとしてゐられない、風を歩いて、――そしてＮさんを訪ねたが、予感した如く不在、父君母君と語る、親なるかなの感が深かつた。――風――酒――雨だつた。アル中らしくペン持つ手がふ

るへる。私は私に希求する、ふさぎの虫よ、どうぞ焼酎だけはやめてくれ！夕方、Ｗさんが来て、熟柿を盗んで帰つた、多分、妻君への土産だらう、恋女房と熟柿！　面白いな。夜、叫びつゝ走る人がある、何となく不安を感じる。ねむれない、ねむれない、あゝ、ねむれない。

正しく——これが生き方の根本。やはらかく——これがその運び方。

断層　（風来坊の感想）

┌個人的反省└社会的考察

十月廿二日　晴。

身心平静、落ちついて、日向ぼこしつゝ読書。動いて動かない心——さういふ境地に入りたいと思ふ。菜漬がおいしい、昨日今日が食べ頃である、澄太君、ありがたう。午後、Ｎさん来庵、留守にしてゐないでよかつた、夕方まで雑談、何もありませんが熟柿でももいで食べて下さい！草雲雀がいよ／＼ます／＼さびしくかなしく鳴いて、ゆく秋を惜しんでゐる。人間にはそれ／″＼嫌なところがある、今日はＮさんの嫌なところを見出した（先日はＫ君の嫌なところを見せつけられたが）、いやなものはいやだから仕方ない！人間はけつきよく良心的に生きてゆくより外あるまい。

・風来坊はうたふ・風の歌　　（空中散歩）

生活は水の流れるやうに——といふのが私の念願であつたが、今日へう／＼として風を歩いて、生き方は風のやうに——ありたいとも考へた。

┌凡人——偶然│常人——当然└作家——必然　　　偶然を必然とする熱意

直感の芸術——詩——句

十月廿三日　晴。

まことに秋晴、日本晴である。煙草がなくなつたので、何だか手持

無沙汰で、——無ければ無いでよろしく、有るまで待たう！今日は山口へ行きたいのだが、——詩園会の同人にお詫のハガキを出すより外ない。待つてゐるやうな、ゐないやうな、よいやうな、わるいやうな。何とうらゝかな日ざし、私の気分もなごやかである、そこらを逍遙遊、——暮羊居へ、学校へ、田圃の間を歩いたり、林の中をさまよふたり。——今夜は寝苦しかつたが、やうやくにして寝ついた。

　胃の強くない人は、食べすぎてはならない、飲みすぎてはならない、同様に心の弱い人は、知りすぎてはならない、考へすぎてはならない。

　たとへ生れ代るにしても、私はやつぱり、日本の、山口の、山頭火でありたい。

　笑はれ人種！　私はその人種に属する、あんまりニヤニヤ笑うてくれるなよ！

　十月廿四日　晴——曇。

　未明、眼覚めてそのまゝ起床。午前は快晴だつたが、午後は曇り勝だつた。支那事変俳句（俳句研究十一月号所載）を読む、無慮三千句、そのうち私の身心を動かしたものが何句あるか、戦線句は拙くとも抜きがたい実感味がある、銃後句は造花のつまらなさだ！そこら散歩、学校に寄つてＩさんから米三升借りる、Ｍ老人の家を尋ねて、借家を見せて貰ふ、その家を借りたいと思ふ。今日も自分ながら大食に呆れた、何といふ大きい胃袋だらう、私の胃袋は！夜はロウソクで読書、寝苦しかつた、しぐれの音がわびしかつた。

　十月廿五日　時雨——曇——晴。

　早すぎるけれど起きて、あれやこれやそゝくさ。万象ゆく秋らしく、秋色秋声。好晴になつた、今日は宮市の花御子である。Ｓ君から来信、Ｎ君と同道して来訪するといふ、待つてゐる。……恥を忍んで、暮羊君の奥さんから五十銭玉一つ借りる、五日ぶりに酒を、三日ぶりに煙草を味つた。夕方また出かけて飲む、Ｃ店で一杯、Ｎ店で一杯、Ｗ店で一杯、Ｉさんの部屋で樹明君と三人で一升！樹明君とＭ老人を訪ねる、家のことである、交渉不成立、あはれ／＼。——わが日

の本にわが寝床なし！Ｍ老人の宅では臼引だつた、新米が盛りあげてあつた、さら／＼さら、何といふうれしい感触だらう。酔つぱらつたが、戻つて、寝てゐた！

「騙」全身全心で生きぬく時、人は獣になるか神になるかである。たとへば、戦線に立つ人のやうに。

十月廿六日　晴。

昨日の事が夢のやうだ、今日はぼんやりしてゐる。漢口が陥落したらしい、万歳！――私は何かに憑かれてゐる、そんな気がしてならない。待つてゐる、待つてゐる、来ない、来ない。日向ぼこしながら読書、これやこの極楽々々。――天が下にはかくれ家もなし、まつたくね！待つ身はつらき木の葉ちるかな、だ。足どめされて、待ちぼけくはされて、ほんに腹が立つ。裏山をあるく、野も山も秋がにじみ出てゐる。やりきれない、さびしいなあ！Ｆのおばあさんがお墓まゐりのさびしいすがたを見よ。人間のみじめさ！　私自身のみじめさはいはずもがな。独り者は怒りつぽいよ、それが解らないＳ君でもあるまいに、絶交に値するぞ！すこし曇つたが、また持ち直した、腹を立ててゐる私へ鶲が宥めるやうに啼いて来た（百舌鳥は私を焚きつけるやうに絶叫するが）。癪にさわるといへば、生きてゐることそのことが癪だ！メボが出来るらしい、腎臓病らしいぞ。とにかく、おいしい夕御飯だつた。腹立まぎれに五十余句作つた、駄作ばかりだ。案外にもよく眠れた。

十二月十三日　曇――晴――時雨。

思はず朝寝した、私としては。一浴して来て日向ぼつこ、何とうらゝかなこと！昨日、Ｆ君が約束した如く、福日から写真撮影にやつて来た、めづらしく法衣姿をカメラに入れた。逓友の選句と感想文とをやつとまとめて送る、ほつとした、大山君、〆切におくれてすみませんでしたね。しばらく散歩、ポストへ、そしてＨ君の店に寄り、Ｓ屋のおかみさんに古着の縫換を依頼する。徳重さんから燭台を借りて読む、亡き常夏君を偲ぶ、回顧の感慨に堪へなかつた。午後また入浴してＨさんを訪ねる、いひだしにくかつたが、小遣が一文もないので壱円借りる、……さつそく一杯また一杯、あゝノンベイは助からな

い！嚢中自有銭、然而自無銭だ。夜、樹明君酔つぱらつて来訪、すぐ出ていつたが、私をさびしがらせかなしませた、……彼に平安あれ。ま夜中に眼覚めて時雨を聴いた、そして月光を観た。今日は南京攻略一周年、いろ／＼のことを考へさせられた、――日本の事、支那の事、亜細亜の事、そして自分の事。――――ノウモネー、ノウアルコールデーを覚悟してゐたが、Ｈ君の厚意で救はれた、Ｈ君ありがたう。

　・さびしいところにゐては、さびしさをそれほど強く感じないですむが、にぎやかなところではかへつてさびしさを感じる。・小郡から湯田へ移つてさう思ふ。

　十二月十四日　晴。

　早起入浴、身心平静。夜来の雨に洗はれて空が澄みきつてゐる。朝湯のありがたさ、窓から昇る陽をまともに飲むことのうれしさ、そして食べることのよろしさ。聖護院大根一つ二銭也。まつたく日本晴、蠅も出て来て好日を楽しんでゐる。読書と散歩、――この二つが私のほんたうの好物だ。どうやら平常の自分に立ちかへることが出来たらしい。日あたりがよくてあたゝかすぎる、まぶしいほどだ。午後、だしぬけに健来訪、或は最後の会合かも知れない。Ｙ食堂で食事を共にして別れる、行け／＼、やれ／＼。私は私として私の仕事を成し遂げるよ。宮市のＫ女の訃を聞かされて驚いた、人生無常といふ外ない、Ｓ子の悲嘆が思ひやられる、さつそく弔詞だけ送つた。福日の記事は私を苦笑せしめた、私そのものがヨタだからヨタくられても仕方がないけれど。何となく落ちつけなくて、或る店の娘らに御馳走してあげる、そしてさらにＹ君に奢つた、酔つぱらつて、帰るなり寝てしまつた。……

　十二月十五日　晴。

　今日から経済戦強調週間。そしてまた赤穂義士討入の日（昨夜から今朝にかけて）。私も自戒自粛する。さみしくなると散歩する、いら／＼すると読書する、とにかく読書、とにかく散歩。Ｓ君から中外日報を送つて貰つた、なつかしかつた。日なたで、お隣りの主人、前のおぢいさんと無駄話をする、みんな酒好き酒飲みだから、酒の話ばか

り、私はつく／″＼市井の中といふ感じがした、うるさいけれどおもしろい、人生の味を感じる。

・酒と餅・市井の中・絹ボロとは

十二月十六日　晴——曇——雨。

降霜結氷、朝湯朝酒、好日好事。朝晩は冷たいが、日中はほんたうにあたゝかい。快心事二つ、その一つは履物問題の解決（間違つた下駄を交換した）、その二つは酒の量りのよかつたこと。夜、和田君来訪、詩園新年号持参。御飯が足りないからうどん玉で補ふ。一風呂浴びて一杯やつて、ぐう／＼ぐう／＼、極楽々々。

十二月十七日　曇——晴。

朝湯、朝酒は遠慮する。久しぶりに味噌汁、三杯すすつた！澄太君からのたよりはうれしいよりもありがたかつた（緑平老のそれのやうに）。身辺整理。あまりあたたかいので蠅が出て来て困る、たうとう蠅捕紙を探して買つたが、皮肉なことには、それは役立たなかつた、現実のをかしさである。白菜二株七銭、これで当分おいしい菜漬が食べられる、菜漬はほんたうにおいしい。——破戒、しかも二重の破戒、ノーアルコールのつもりであつたのに、シヨウチユウをひつかけました。いろ／＼考へて、いつまでもねむれなかつた。

○生活箴二章　　△金銭を大切にすべし　　△酒食を慎むべし○飲酒戒三則　　△火酒を飲むべからず　　△微酔にて止めること　　△現金で飲むべし

十二月十八日　曇——晴。

さすがに日曜日の朝で、おとなりも（六人の子持だ！）ゆつくりとしてにぎやかだ。雪もよひの空もだん／＼晴れて来た。中学生が隣寺境内清掃、善哉々々。樹明君から嫌なハガキが来た、近来になく不快の念にうたれた、すぐ返事を書く、樹君に罪はない、Ｉさんがズルイのだ、詮じつめると、私のルーズが悪いのだ。反省を新たにする、考ふべし、改むべし。Ｙ君の手紙には好感が持てた。昼飯を食べすぎたので、そこらを散歩、傷病兵と学生とがコンビでボールを楽しんでゐた、まことにほゝゑましい風景であつた。塩五銭、何と安く、そして

何と尊い塩だ。夜、縫物をしてゐるところへ、Ｆさん来訪、新聞経営の話いろ／＼（彼は小さい郷土新聞を一人でやつてゐる）、誘はれてうどん屋で御馳走になる、酒二本しつぽく二杯、Ｆさんには気の毒だつたけれど、私はうれしかつた。

・酒飲酒好は——　鉄のやうに強い意志を持つてゐるか、または貧乏でなければならない、節酒しなければ経済的に破綻する前に肉体的にまゐつてしまう！・市井にうづもれて市塵に染まず、親しんで狎れず、愛して媚びず、敬うて阿らず。——・否定の否定、そして肯定。

十二月十九日　半晴半曇。

けさの湯はあつくてことによかつた、ぢつと浸つてゐると、身も心もとろ／＼とろけるやうだ。今日も在営部隊出発の廻文がまはつて来た、私はついおくれて見送りそこなつた、ほんたうに申訳ないと思ふ、香を※いて瞑想にしづむ。——カラツポになれ、なりきれ、何もかも捨てゝしまへ、いつさいがつさい放下せよ、——そこからほんたうに転一歩することが出来る。——さすがに市井の中だ、私の入口へもいろ／＼の物売がやつてくる、小郡ではなかつたことである。軍神西住大尉の記事、私は胸をうたれた。妙なことがあるものだ、——炭俵の中から、瓢箪から駒が出るやうに庖丁が出て来た、怪我をしないでよかつた、それは私の庖丁よりもよさゝうだ。遺産として私に残つてゐるものは何か、——位牌と文鎮と、そして私といふ無用人！　私はまづその文鎮を随筆として書くことにする。前の路傍で子供が熱心に遊んでゐる、うらやましい生き方だ、あそび！　あそぶことが生きることである幸福！夕方、和田君来訪、詩園二月号は常夏追悼号にするといふ、うれしいことである、私も何か書かう。私の好きな鰯が今日は高くて四尾五銭だつた、塩漬にして味ふ、たうとう一杯買はされた！気持がよくないほどあたゝかい、師走といふのにぬくすぎる、袖なしを脱ぎ足袋を脱ぐ、火燵もいらない。夜、温泉に浸りながら、温泉異変とでもいふやうなものが突発したら、さぞ人間のアラ世間のアラが暴露されるだらうなどゝ埒もないことを考へた、……顔を剃つてさつぱりした、ぬく／＼と寝て漫読する。また不眠の鬼が戻つて来たらしい、クワバラ／＼。

“かくなればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂”（松蔭）・年の瀬流れ渡りの記

Ｎさんに——

あなたが風邪をひかれたと聞いて、私はしみ／″＼自分の孤寒を感じました、そして風邪もひかない私は幸福なのか不幸なのか解らなくなりました。……

執着のいろ／＼

銭、酒、女、等々。

鰯のあたま——鰤のあたま

ダシにもならない鰯のあたまも信仰から

十二月二十日　曇。

あつい湯があふれる中にずんぶり。——中村さん来訪、近く台台へ旅立たれるさうで、おわかれはかなしいが、門出をよろこぶ、前途に幸福あれ、考へてみれば、先日のふしだらもおもひでの種として、まんざら無意味でもなかつたやうだ。今日はすこし冷える、といつても節季としてはあたゝかすぎる、木炭の消費が少なくて助かるけれど。そこらで子供がうよ／＼、よく泣く児だ、泣いて太るのだらう！昨日も今日もいちにち机を離れなかつたが、仕事はなか／＼捗らない、私はほんになまけものだね。句稿を整理する、秋季の句数何百、そのうちに採るべきものが何句あつたか、——いかに近来の私がだらけてゐたかをまざ／＼見せつけられた。句ばかりではない、私の行動はどうだつたか、——ツマラナイの一語で蔽ひつくせるではないか。反省が足らない、努力が足らない、自重が足らない、すべて足らないものだらけだ！なけなしの財布の底をはたいて一合買ふ、まつたくの一文なしになつて、かへつてさつぱりした。

十二月廿一日　曇——雨。

——雪か霙かと思うてゐたが、たうとう雨になつた、冬の雨らしくもない雨である、どうして今年はこんなにぬくいのだらう。子供のあそび——泣く、唄ふ、喧嘩する、——それがみんなあそびだ。所在な

さに火燵をこしらへて読書。呉郎さんはもう帰つて来られたと思ふが、早くやつて来てくれゝばよいのに。――今日は誰も来てくれなかつた、誰をも訪ねてゆかなかつた、もく／＼としてしめやかな一日だつた、ノーマネーそしてノーアルコールの一日でもあつた。今夜も不眠に苦しんだ、快食快便なのに、なぜ快眠がめぐまれないのか（労働しないことがその主因であらうことは知つてゐるけれど）。

・愚を守る――・貧乏におちつく――・無能無力に安んずる・おのれにかへる――

十二月廿二日　曇、時雨、晴。

早起。――窓の風景、風にもまるゝ枯木、ぽつねんとして待つてゐる老人。……ずゐぶんあたゝかだつたが、風が出て冷えてくる。――冬至、短日の短日。時局の波動が、あるときはひし／＼と、あるときはしみじみと、私のやうなものにも響く、私は、あゝ私は。
――
――――――――――――――――――――――――――――白菜の新漬のおいしさ。久しぶりに山口の街へ出かける、Ｓさんから読物を借り、Ｓ君を見舞ふ、Ｓ君よ、ガンバリタマヘ！寥君のたより、元君のたより、どちらも私を悲しませる。もつたいないけれど、宵からコタツで読書。今日も酒なし（煙草もとぼしくなつた）、ガソリンが切れると、ひとしほ寂しい。

第35章
其中日記　15 (新字旧仮名)

一月一日　曇――雨。

聖戦第三年、興亜新春、万歳万々歳。安眠、朝寝、身心平静。おめでたう、ありがたう。――起きるなり、水を汲みあげて腹いつぱい飲んだ、それは若水であり、そして酔醒の水であつた。朝湯、香を※いて自戒自粛、――回顧五十年、疚しくない生活、悔のない生活、あたりまへの生活、すなほにつゝましく生活したい。朝酒、かたじけなし、酒を楽しみ味ふ境涯であれ。雑煮のうまさ、酒がうまいやうに。十時、私も祈願祝祷。雨、あるいは雪になるらしい、雨もよし、雪もよし、たうとう雨になつた、しめやかな雨である。転一歩――新一歩。戦地のＳ君Ｙ君へ賀状を書く、まことに千里同風の感がある。風邪をひいたらしい、宵から炬燵にもぐつて読書。門外不出、黙然独坐の一日であつた。不眠、酔つぱらひが通る、さすがにお正月らしく。

Ｎさんに――

……生きてゐることは時々つらいとは思ひますけれど、やつぱり生きられるだけは生きて、酒を飲んだり句を作つたりする外ありません、……それが私の宿業であります。……

一月二日　快晴。

朝湯、おだやかなこゝろ、なごやかな日ざし。一※の香を焚いて反省する。子供は羽子つく、隣家から喧嘩の声。飯のうまさも、そして餅のうまさも、そしてまた酒のうまさも。――まことにしんじつ文なし正月！！」は底本では「文なし正月！」］（節季の文なしよりもつらいね！）煙草もなくなり、餅もなくなり、湯札もなくなり、醤油もなくなり……（銭なんか無いことはいふまでもない！）――あるが

まゝに――与へられるまゝに――生かされるまゝに。――午後、Ｎ君来訪、私としては今年最初の会談をする。招待されて往訪、来客十人あまり、知つた顔、聞いてゐる顔ばかり、ほどよく飲食して帰宅、めでたし。人にまじはることは愉快でもあり不愉快でもあり、私のやうな我儘者は長く続けて人間の中に居ることは堪へがたく感じる。……Ｎ君の宅で、ことし初めての数の子を食べた、おいしい数の子であつた。今日もまた、自分の卑しさ醜さを見せつけられた、やりきれない気持だつた。……今夜も不眠、おちつけ／＼。

・老來。・かなしみもなく、また、よろこびもなく。・微熱はわるくない。　　うと／＼、ぼんやり、しつとり。……・処女と話すことはよろしい。　　半処女ばかり！・女房に惚れてゐれば家庭安楽だ。“無明実相即仏性”素心を失ふこと勿れ。

一月三日　曇。

寒い、雪になりさうな空模様。けさは新聞がない（定休だから仕方ないが物足りなさを感じる）、けさはまた湯にもはいれない（湯銭がないのである）。湯町にゐて湯にはいれないとは、みじめすぎる！そこらを歩いてＨさんの店に寄る、不在、新年早々借金しないでかへつてよかつた、やれ／＼。窓のうちあたゝかに落ちついて読書、とにかく米があり炭がある。……午後、和田君に誘はれて、宮野の阿川君を訪ねる、汽車賃も煙草銭も出して貰つて恐縮々々。阿川邸は落ちついた旧家のよさがあつた、客としては和田君、藤井君、村田君、そして私、よく食べよく飲んだ、暮れるころから、同道して山口へ、矢島さんのところでまた御馳走になり、中原君兄弟もいつしよに繰り出してＳ軒で騒いだ、……たうとう方角を失ひ場所を失ひ、自分を失つてしまつたが、……什郎さんにタクシーで送つて貰つた。……本年最初の愚劣だつた！

※水の流れるやうに、或は雲のゆくやうに、風の吹くやうにありたいと考へてゐた、このごろは太陽の心を考へてゐる（澄太君が逓友新年号の扉に太陽の使者を書いてゐる）、日光のやうにあまねく惜しみなくうらゝかでありたいと思ふ。※自省が自縛であるやうでは、ホンモノではない。※他己迎合はあさましいが、自分に媚びることはヨリ

あさましい。※友情に甘えるな、自分を甘やかすな。※無理のない、ほがらかな姿、自然な、すなほな姿。　さういふ身心を持してゐたい。

一月四日　曇――雨。

昨日の今日である、身心が重苦しい。けさは湯にはいれた、ありがたかつた、どろ／＼を洗ひ流した。門外不出、自己に沈潜する。銀柳一枝の春信。夜、中原君、和田君来訪、いつしよに湯に入り、中原さんの宅に寄つて御馳走になる。ほろ／＼よう睡つた。近衛内閣総辞職、大命、平沼男に降下するらしい。

「私」を超越した境地。縁尽いて去る。私は醜い、醜いが故に生きてゐる。必然――当然――自然。嘘の世界、ウソを考へるな！コースの意義。┌人生はラツキヨのやうにも（私の場合は）。│剥ぐことそのことに意味がある。└剥ぐものそのものには意味がないとしても。しんじつ弱い。

一月五日　曇――雪。

雪、雪、寒い、寒い。雪を観る。――身心整理。――一時すぎ中原君来訪、同道して田辺さん方へ往訪しようとしてゐるところへ、指月堂君来訪、二十五年ぶりの会見である、話しても話しても話し足りない（お土産の赤大根まことにありがたう）、そこへ敬君来訪、そしてまた藤井さんが自動車で迎へに来られた、――どれもこれも約束通りである、敬君だけ残つてゆつくり休んで貰ふことにして、みんないつしよに出かける。雪ひんぷん、すつかりお正月気分になつて、飲んだり食べたり、しやべつたりふざけたり、……酔うてはゐるし、凍みてはゐるし、こけつまろびつ、戻ることは戻つた。……

一月六日　曇――晴。

天地沈欝、私も沈欝！――昨夜も飲みすぎた、いや、飲まれすぎた、最後の場面の一齣は不快だつた、けさ思ひだしても不快である、慎しむべし、酒を慎しむべし、自分自から慎しむべし。きびしい冷たさである、一杯ひつかけて寝るより外ない。門外不出、漁眠洞さんからうれしいたよりがあつた。

一月七日　晴――曇――雨。

朝湯朝酒、うらゝかな。ナマケモノであることをひし／＼感じる。一人であることのよろしさ。隣り寺の隠居が惜気もなく、――といふよりも無慈悲に、銀柳を伐つてしまつた、ナマクサ坊主め！今日も門外不出、しづかに読書をつゞける。夜、矢島さんが一升さげて来訪、しんみり飲んでゐると、中原、和田、村田の三君が酔つぱらつて闖入、ま夜中まで騒いだ、……私は中原君と共に寝た、中原君よ、思ひ煩ふなかれ、君は詩人である前によきドクトルとなりたまへ、君のお母さんは良き母ですぞ、私の母は私の幼年時に自殺しましたよ。とにかく、ともすれば上すべりする私を警戒する、真実は掘り下げなければ掴めるものではない。

“地熱”“空像”

一月八日　曇、風雪。

寒風をぬけていつて、ことにうれしい朝湯だつた。身心すこしく不調、飲みすぎ食べすぎのために。Ｔさんが来た、好かない人物である、彼は誰にも嫌はれる（ケチ／＼で、ズウ／＼しいので）、だが、嫌はれ通して来た点に於て、彼は凡人ではないかも知れない。節食、静養する。

一月九日　曇。

風がないのが何よりだ。酒なし句なし、もとより銭なし！Ｓ君のお土産赤大根を賞味する、今更のやうに、一粒の米、一滴の水のありがたさを考へる。

一月十日　曇――晴。

沈欝。――うどん玉二つ、酒一杯、どうやら私自身のお正月らしく。天も地も人もあたゝかい、爪を切る、理髪もしたいのだが。……Ｙさんへ手紙を書く、書きたくない手紙だつた、書かなければない手紙だつた、書かずにはゐられない手紙だつたのだ。散歩、Ｓ君を訪ねる、仕事に精出してゐる彼に逢ふことはうれしい。和田さん来訪、すまなかつた。

菜根譚より風来疎竹、風過而竹不留声。雁度寒潭、雁去而潭不留影。故君子事来而心始現、事去而心随空。

一月十一日　曇、風。

——堪へがたいものがある、仕事でまぎらしたが。……Ｈさん徃訪、不在、かへつてよかつたと思ふ。お茶漬、砂糖湯。……

一月十二日　雪、雪、雪。

今日は絶食、それは身心清掃の非常手段ともなる。或は明るく或は暗く。雪を踏んで、Ｈさんを訪ね少々借りる、ありがたう／＼。句集の扉を書いて送ることが出来たのはとてもうれしかつた。おいしく夕飯を食べて、ゆつくり温泉に浸つた。

一月十三日　晴。

隣家の主人が、朝早くから、しきりに呶鳴つてゐる、これも市井風景のおもしろさだ。原稿を書きあげて送る、安心と満足、ほつとした。ケチ／＼せずに、クヨ／＼せずに。Ｙさんから今日も返事が来ない、来なければ仕方がないが、それでよいのであるが、何となく気分が重苦しい。敬君ひよつこり来訪、酒と下物、そして米代と炭代とを頂戴する、助かつた、助かつた、感謝、感謝。アルコールのおかげで熟睡した。

・一人は寒い、心が寒い。・無一物底、雪降りつもる。

一月十四日　晴。

早起、なか／＼冷たい、今年は寒さがきびしい、老人は私は閉口する。朝湯で昨日の汚濁を洗ひ、朝酒に今日の安楽を味ふ、私にめぐまれた最大の幸福である。喘息らしく咳き入つて弱つた、弱つたけれど、私は嘆かない。夜更けて、たうとう雨になつた。

一月十五日　曇。

また雪らしい、また寒波襲来か。こだはるな、こだはるなと私はこだはつてゐる、どうにもならない私の性である。おとなりのお寺は報恩講、さみしいお講だな。米がある、炭がある、ありがたい、ありがたい、何といつても米と炭と、この二つの菩薩をなくしては生きてゐられない。午後、敬君来訪、サケサカナ例の如く、こゝろよく酔ふ、同道して山口の或る人を訪ねる、おとなしく用をすませて戻る、めで

たし／＼／＼。

簟草（米大陸の孤萍ともいふべき）　　　タンブルウエード？

一月十六日　晴。

うらゝかである、ほのかなよろこびを覚える。土と兵隊を読んで感激した、麦と兵隊もよかつた。花と兵隊もよい、火野葦平万々歳である。昼食すましてから、運動がてら山口まで散歩する。とある小路を歩いてゐたら、思ひがけなくＹ君に呼び入れられて、酒をよばれた、読物も貸して貰つた、ほんたうに予期しない幸福だつた。ハガキのあるだけたよりを書いて出した。まつたく雲のない晴天だつた。夜はのんびり読書。久しぶりで（いつでもだが）、餅がうまかつた。恋猫が切ない声で鳴いてうろつく。

・黙つて死んで行く・生死の中から・自分を空しくする・真実一路

酔境――

ほろ／＼、ぼろ／＼、とろ／＼、どろ／＼。

一月十七日　曇。

早起入浴。消え残る雪のきたなさ。“鶏肉はありませんか”隣家と間違へた女の声。双葉山がまた敗れた、敗け癖がついたのだらう。めづらしくせきれいが来て啼く。米一升麦一升だけ買ふことが出来た。あすのいのちをたれがしろ――まつたくそのとほりである。敬君が今日も寄つてくれたが、風邪気味なので、ちよんびり飲んで別れた。近所に豆腐屋が開業した、これで何もかも揃うた、まことに至れり尽せりである！

一月十八日　雨。

ひとりを楽しむ、ほんにしめやかな雨ではある。麦飯を詰めこんだので腹が張る、昼食はうどんですます。机上の人形が笑うてゐる！古い中央公論を借りたので、夜明け前の終篇を読む、読んでゐるうちに涙ぐましくなつた。……門外不出、黙坐読書。

・夫婦喧嘩　　Ｓ君の場合　　Ｆさんの場合・酒　　よい酒　　う

まい酒

米、飯、酒

・囊中自無銭だが、　庵裡自在米でもある。・日光と水と。

一月十九日　晴――風――曇。

┌ミヅカラ△自│　　└オノヅカラ

二月一日　晴曇。

身心不調。――私は近来あまりに放漫だつた、知らず識らず、若い連中の仲間にまじつて、年甲斐もなく浮れ騒いだ、省みて汗するばかりである、私は自戒自粛して、正しい私に立ちかへらなければならない。ことに一昨夜の自分、昨日の自分を考へるとき、私は私に対して恥づかしいばかりでなく、Ｙさんに対して申訳ないではないか。馬鹿、馬鹿、馬鹿。――夜はやりきれなくなり、Ｓさんを訪ねて少しばかり飲んだ。Ｙさんに置手紙して私の衷情を伝へた、よかつた。

二月二日

こん／＼として終日寝てゐた。夜おそくＦさん来訪、誘はれてそこらを散歩し、御馳走になつた。――私は慰まない。

二月三日

今日もやるせなかつた、しくしく身心がいたい。門外不出、黙々として自己を省察した。

二月四日　節分。

おなじく。夜、ＨさんＭさんＩさんが訪ねて下さつたが、事情をほのめかして帰つて貰つた。お土産として酒一升頂戴した、ありがたう、すみません。

二月五日　曇――雨。

今日は立春だがなか／＼寒い、寒さが老の骨身にこたえる。今日から日本精神発揚週間。五日ぶりに寝床をあげ、三日ぶりに入浴した。湯田にゐて、湯好きの私が入浴しないのはよくよくのことである、私

はそれほど私をたたきつけてゐるのである。Ｈさんから少々借りて、隣のＦさんといつしよに飲んだ、私はあまり飲まないで彼に飲ませた、たいへん喜ばれた。

二月七日　曇――雪――晴。

この冬は寒気も降雪も例年よりはげしい、私もいつもよりまじめになり、それだけ苦しい。十日ぶりにどうやら自分の自分になつたやうだ。米はあるが炭がなくなつた、酒もあるけれどあまり飲みたくない、それでもあるだけは飲んでしまつたが。元君から涙ぐましいたよりがあつた。みんな苦しいのだ、誰も悩んでゐる。――

二月八日　半晴半曇、小雪。

寒いと思へば寒いけれど、春を感じないではゐられない。春、春、春が来た、春が来た、雪はふつても風がふいても、日ざしのあたゝかさ、うらゝかさ、まさしく春だ、春だ。うぬぼれるな、むさぼるな、こだはるな。また雪がふる、しん／＼冷える、炭のないのがさびしい。兵隊さんに餅をあげるといつておかみさんたちが集めてゐる、私のところへは幸か不幸か来なかつた、私には餅もない、銭もない、かなしみを感じつゝほつとした。午後、のんびり湯に浸つて顔を剃つた、これが今日の幸福だつた。こゝろしづかに、からだゆたかに。――終日黙照、私の場合では句作三昧。まじめになると不眠になるとは。……

二月九日　晴れたり曇つたり。

まいあさ思ふ、――朝湯のうれしさありがたさ。――炭の粉もなくなつてしまつた（ありがたいことには米はまだ／＼ある）、――貧乏には慣れてゐるけれど、貧乏はやつぱりつらい！焚火をして寒さをしのぐ、焚火はなつかしいものだ。人間のきたなさ！　こんなことを考へる私はきたない！午後、ぢつとしてゐられなくなつて出かける、Ｙさんから文藝春秋を借りる、柳はいちはやく芽ぐんでゐる。……なけなしの本をさがして二冊だけ金に代へる、うれしかつた、一杯十弐銭、三つ五銭！（これは何の事！）人間はとにかくうるさいな！　人間のよさを味ふ前に、人間のきたなさを感じるのだからやりきれな

い！夜、こらへられなくて一本飲んだ、うまかつた、貧乏して初めて解る味はひだ。おかげで快眠をめぐまれた。

　二月十四日　曇。

　関また関、辛うじて当面の一関はつきぬけたが、私はまだまだほんたうにしんからつきぬけてはゐない、関、関、関。

　三月一日　曇。

　門外不出、黙々黙照。

　三月二日　晴。

　おなじく。

　三月三日　雨。

　おなじく。

　三月四日　曇――晴。

　五日ぶりに起床入浴、身心清掃。澄太君、ほんたうにありがたう、助かりましたよ身も心も。身辺整理。六日ぶりの酒だのにさまでうまいと思へない、幸、不幸。虫、虫、虫が、いろ／＼の虫が出て来た。老衰を自覚する。――近在散歩。買へるだけ食料品を買ふ。雑魚のうまさ、おかげで酒のうまさ、極楽々々。常に屑を捨てること。よい月夜であつた、満月らしかつた。

　三月五日　晴――曇――雨。

　しみ／″＼春。Ｏさんからいろ／＼おいしいものを頂戴した、ありがたう。野分朝といつたやうな感じ。――山口は痘魔が躍るのによい都市らしい！

　三月六日　雨、春雨らしく。

　無坪さんから酒代拝受。うまい晩酌だつた、酒二合三十銭、鰯一皿十銭也。夜、再種痘、下駄をかへられて不愉快だつた。人間のきたなさ！（自他共に）――私の身心不調はなか／＼回復しない。――

三月七日　曇。

早起――久しぶりで朝酒のよろしさ。なつかしや雲雀のうた。身辺整理。午後は近郊散策、理髪する、身も心も軽くなる。春寒の草、水、雲。……夕方、Ｙさん来訪、君は若いけれど苦労人である、近々快飲しようと約束した。一杯ひつかけて、ぐう／＼ぐう／＼。

三月八日　晴。

転一歩。――母の四十八回忌。――さくら餅を供へ、鉦をうち、読経しつゝ線香の立ちのぼるけむりを見詰めてゐると、四十八年の悪夢が渦巻くやうで、限りなき悔恨にうたれる、おなじ過失を繰り返し繰り返して来た私ではなかつたか。……午後は散歩する、うらゝかな春景色である、Ｓ君といふ人に逢つた、私は見忘れてゐたけれど、先方はよく覚えてゐて、気易に話しかける、それも春らしい一添景だつた。今日はじめて今年の蝶を見た、彼女は枯草の中をさようてゐた。また不眠症になつたらしい。

三月九日　晴、后曇。

春霜、春寒、身辺整理。痘禍もどうやら峠を越したらしい、私の種痘もこんどはどうやらついたらしい。戦地の記事を読み写真を見るたびに、自粛自戒しなければならないと痛感する、自粛自戒しなければ罰があたるだらう。京都のＴさんからうれしいたよりをいたゞいた。私は買ひかぶられてゐる、心苦しくて悩ましくさへある。山口散策、何となくからだのぐあいがよくないので早く帰つた、むしろ病弱礼讃だ！悪夢、私は――人間はあさましいと思つた。

三月十日　曇、風が出て雨となる。

暁起、入浴、身心平静。今日は陸軍記念日。しづかに、しづかに一人の一日。夜また一盞傾ける。痴夢一場、人間のきたなさだ、近来、夢が多すぎる！

┌八百屋のおかみさん曰く、│　お一人ですか、お一人はようございますね、私も一人になりたい、一人がようございますね。└秋葉老人答へて曰く、　　一人だつて二人だつておなじことですよ、人間は否でも応でも一人になつて死にますよ。

三月十一日　雨――曇――雨。

雨はうるさいけれど（かういふ侘住居では殊に）、同時にまた落ちつかせてくれる、人生によいことばかりはない、わるいことばかりがないやうに。Ｙさんから句集代拝受、感謝々々。山口へ出かける、今日はまさに買物デーだつた、おとなしく帰宅、めでたし／＼。酒のうまさ、餅のうまさ、若布のうまさ、飯のうまさ、あゝおいしい／＼。前の家で、主人公も客人も酔つぱらつて呶鳴り合つてゐる、まことにこのあたりは酔つぱらひ部落だ！（私にもたしかにその一員たる資格がある！）澄太君から句集到来、友情が身心に泌み入つて涙がこぼれる。……身辺整理、アメリカへ、東京へ、その他へ、送るべきものを送つて安心する。――やつとスランプからぬけだすことが出来た。不眠（私はまじめに考へだすと眠れなくなる、癖の一つだ）。

・今日の買物十銭　　塩混布四十匁二十銭　　ハガキ一枚四銭　　豆腐一丁二十四銭　酒二合五十銭　　外郎一包（贈物として）二十四銭　餅二百匁二十銭　　番茶四半斤十五銭　　若布二十匁十銭　　醤油二合三銭　　酢一合

三月十二日　曇、時々雨。

朝湯、銭が切れたといつたら番台老人――顔馴染の――が湯札を数枚下さつた、ありがたう。隣の子供はよう泣く子供だ！古新聞を売つて四十銭、さつそく一杯ひつかける、ほんに酒飲みはつらいね！午後は山口散策、途中で句集代を貰つて、飲むほどに歩くほどに酔つぱらつてしまつたが、ちやんと戻つて寝床に横つてゐた、……夜明け前に眼が覚めて火をおこしお茶漬を食べる、火燵をまたこしらへた。今夜はぐつすり睡れた、南無アルコール菩薩様々！山頭火よ、老いぼれたぞ、先日、酔中どこかに置き忘れた風呂敷包がどうしても見つからない。

三月十三日　曇、春寒。

身心平静。迎へ酒がほしいな！裏の空家へ若夫婦が引越して来たらしい、長くは人のゐつかない家だが。一銭足りなくて、大山君へ〆切をすぎた選稿が送れないので、わざ／＼Ｓ君のところまで出かけて行

つた、一銭のねうちを考へさせられたのはこれが二度目、いつぞやは汽車賃が一銭足りなくて、次の駅まで二里あまり歩いたことがある、夜中空腹をかゝへて！——つゝましい一日であつた。

三月十四日　曇。

なか／＼寒い、冷える、けさは氷が張つてゐた。温泉のありがたさ。落ちついて読書、句作、思索。Ｉさん、ありがたう、おかげで一杯やれました。山口の街まで、酒を飲み餅を買ふことは忘れなかつた、忘れられないのだ。たか菜四把八銭也、半分煮て半分漬ける。身辺整理、Ｋ君に小包を送ることが出来た、重荷一つおろしたやうな気がする。裏の家の妻君が引越の挨拶に来た、ハガキ三枚貰ふ。近郊散策、春寒い風が吹く。ゆつくり晩酌をやつたところへ、ＮさんがＳさんと同道して来訪、同道してＦ屋で飲む、愉快だつた、おとなしく十時ごろ帰つて熟睡した。——私は近来、人間に食傷したやうだ、私はまだ人間を全的に掴んでゐないのだ、これでは旅に出るより外ない。

三月十五日　晴、風。——

霜、どうやらお天気もきまつたらしい、私も落ちついた。少々二日酔気分、迎酒をやらざなるまい。一杯機嫌で半切十数枚書きなぐつた、魚眠洞君へ、指月堂君へ送つて、ほつとする、重荷をいくつもおろしたやうに。——近所の妻君群がおしやべりしてゐる、おきまりの人の噂だ、人には人の事が何よりも興味があるらしい。午後しばらく近在散歩、Ｓ君を訪ねたりして。夕方、Ｔさん来訪、どうも好きになれない人だ（私ばかりではない、誰もがさういふ）。木炭がなくなつたので火を焚いてすます、もう暖かいから寒中のやうには苦しくない。

三月十六日　半晴半曇、風つめたし。

うらゝかに天地人。——悪筆の乱筆を揮ふ。大法輪を読む、道元禅師は讃ふべきかな。午後は例の如く散歩。誰か来てくれないかな。

——

三月十七日　晴。

まことに好季節、朝のよろしさ。Ｉさん、ありがたう、さつそく一

杯やりましたよ。机上の沈丁花がほのかに匂ふ。やゝ沈欝、しばらく散歩。風、風、風、とびだしてＤ屋で飲む、また一苦労こしらへた！　酔心地はよかつたが。夜中に雪がふつてゐた。――チヤンポンはいけません、それだけはやめてくれ！

三月十八日　晴。

雪、白一色のうつくしさ。つむよりとける春の淡雪だつた。身心和平。炭がなくなると雪がふると――皮肉だな。入浴、髯を剃り爪を切る、うらゝか／＼。近郊散策、糸米を歩いて、やうやく藪椿を見つけた、香山園では久しぶりにうまい水を腹いつぱいいたゞいた、もう桜が蕾み、柳が芽吹いてゐる、ぶら／＼歩いてゐるうちに、七句拾うた。アメリカのＫさんから、ほんたうにうれしいたよりをもらつた、うれしい／＼。気象異変で、寒いことは寒いけれど、空がどことなく霞んでゐる、山のいろもあたゝかくなつた。きちんとして、しづかにおちついた今日であつた。夜は雨になつた、何だか霙になりさうである。不眠、うつら／＼考へてゐるうちに夜が明けた。

三月十九日　晴曇、小雪。

――薄雪が積んでゐる、冬が逆戻りしたやうに。炭がほしいな、ガラクタを焚いて凌ぐ。湯に行けば、湯がぬるくて浅い、風邪を引きに行つたやうなものだつた。待つものが来ない。寒い／＼、冷たい／＼。だが、私はおちついてしづかにしてゐた。午後、Ｙさん来訪、しばらく閑談、そこへＤ屋の主人がやつて来た、一昨夜のたたりだ！　風、風、風、ちよつと寝る、うと／＼した。夜は約束の通りにＹさんといつしよにＯ屋で飲む、感じたやうに感じのよい家だつた、ほどよく飲んで別れた、めでたし／＼。まつたく快飲快食快談、そして快眠だつた。

三月二十日　曇。

朝湯にははいれないけれど（湯銭もないので）、身心平静、落ちついて読書する。Ｙさんの悲しい顔があらはれた、私の心配があたつたのである、いつしよにＨ屋に出かけて、湯に入り酒を飲む。何となく、すまないやうな酒だつた、ＳちやんＭちやんを相手に飲んでゐる

うちに、Ｙさんがどこかへ逃げてしまつた、私もとびだしてＳ屋に泊めて貰つた。

三月廿一日　晴——曇、また雨らしい。

お彼岸日和らしく。——Ｓ屋で朝飯をよばれて帰宅。Ｙさんはどこかにしけこんで、まだ帰らないらしいが、早く帰りたまへ、仕事に精出したまへと祈る。午後は散歩、うらうら春を歩いた、御堀まで歩いて、W家を見出して、中学時代の回想に耽つた、あれから四十年、その部屋は昔のまゝに残つてゐた。水にそうて歩く、——春をしみ／″＼感じる。古雑誌を燃やして飯を炊き茶を沸かす、わびしいと思はないでもないが、不平ではない。このごろ私はよく食べよく睡る、極楽々々。湯田にゐて湯にはいれないことはさびしいと思ふ。近来、私は人間に接触しすぎたやうである、何だか嫌なものがこびりついたやうである、早く旅に出て、その嫌なものを払ひ落したい。待ちうけてゐる手紙が来ない。……

第36章
其中日記　16 (新字旧仮名)

　五月十九日　晴。

　さらりと朝湯によごれを流して。——自分のうちのしたしさ、そしてむさくるしさ、わびしさ。日本晴、めつきり夏めいた。今日はアルコールなし！

　五月廿日　晴、風、そして曇。

　暑い、暑い、汗、汗、友、友、酒、酒。

　五月廿一日　晴れたり曇つたり。

　初夏の朝のさわやかなるかな。こゝもタバコキキンである。Ｆさん来訪、あたりさわりのない四方山話。

　五月廿二日　曇。

　しづかに生きてしづかに死にたい。棕梠の花咲く、私の部屋の樹木としてはその木が一本あるだけ。胡瓜一つ五銭だつた。私はこのごろからことにふさいだりいら／＼したりする、密柑の花が匂ひ螢が飛びかふころは。——山口まで散歩。Ｙさん来訪、Ｈさんも、そしてほろ／＼にしてもらつた！夜明ちかく、ほとゝぎすが啼いた、一声、二声。

　五月廿三日　曇。

　五月廿四日　おなじく。

　五月廿五日

　去々来々、来々去々。

五月廿六日

五月廿七日　曇。

自粛自戒、鞭は自分で持て！林芙美子女史の北岸部隊を読みて感動す。三日ぶりに入浴して御飯を炊く。Ｙさん来居、ありがたう。

五月廿八日　晴曇。

重苦しい日であり夜であつた。

五月廿九日――六月九日

この間ブランク、それは渾沌とでもいふより外はなかつた。

“自省録”

“秋葉小路の人人”　　（身辺雑記風に）

　　旧作二首一杯の茶のあたゝかさ身にしみて　　こゝろすなほに子を抱いて寝る　　　噫、忘き弟よ今はたゞ死ぬるばかりと手をあはせ　　山のみどりに見入りたりけむ

六月十日　曇。“時の記念日”

徹夜だつた。――身心すこし落ちつく、温泉はありがたいかな。夕方、白船君来訪、君は変らない人、よき子、よき夫、よき父、よき祖父、そしてよき友、よき社会人であるとしみ／″＼感じ入つた、うれしい来訪であつたが、気の毒な来訪でもあつた、すみませんでした、あしからず。つゞいて千冬君来訪、白船君を送りだしてから、同道して山口へ出かける、Ｋで飲んだ、Ｙさんも来てくれた、酔うて夜更けて夢中で戻つて寝た。

六月十一日　晴曇。

六月十二日　梅雨入。

六月十三日　　　　　　　梅雨らしく降れ。六月十四日

やつぱりほんたうに落ちつけない、快々として起きたり寝たり、悩ましい朝々夜々であつた。とても愉快な一夜であつた。――

六月十六日　晴。

七時のバスで、澄太君は西へ出発した、名残が惜しい、バスの見えなくなるまで見送る、……それから私は飲んだ、しやべつた、歩いた、酔つぱらつた。……夜、Ｙさん来訪、Ｙへまで出かけて、また飲んだが、よい飲み方だつた。

六月十七日　晴。

空梅雨らしく、なか／＼降りださない。身心おちついてこゝろよし。Ｙさんと坊ちやんといつしよに湯にはいる。晩酌、ほどよい酒であつた。亡弟二郎を想ふ、彼は正直すぎて、そしてあまりに多感だつた、彼の最後は彼の宿命だつた、あゝ。

六月十八日　晴。

明けるのを待ちかねて起きる。朝湯、散歩、薊を折つて帰る。Ｆさん来訪。世の中はむつかしい、うるさいなあと思ふ。散歩が安全第一、何よりもよい。死を考へる、母、姉、祖母、父、弟、……そして妻を子を考へる。……

六月十九日　晴。

早起。近隣に対して、——父よ母よ、そんなに子を叱るなかれ。身のまはりをかたづける、旅立つ前の用意として。誰もさびしいのだ、みんな寂しき人々なのだとも時々は思はせられるが。——

六月廿日　晴——曇。

八大龍王よ、雨降らしめたまへ。どくだみの花はわるくない、入浴のかへりにはいつも摘んで来て、活けて楽しむのである。昨日今日は古いゴム長靴を売つてさゝへたが！死身の捨身だ！駅に遺骨を迎へて涙をあらたにした。天地人有情非情に合掌する。夜は前の涼台に腰かけて、たれかれと世間話する、これも折々は面白い。

燃ゆる太陽、燃ゆる人間。

六月廿一日　曇。

雨がほしいほしいといふ声ばかり聞える。自粛自戒自重の事。やつ

と雨になるらしかつたが、降るといふほど降らない。米がなくなつた、銭はもとより。今日は旧の端午だといふのに、――腹は空つても食べる物がない、水ばかりがぶ／＼飲む。Ｎさんに逢ふ、或る家で飲む、よかつた／＼。

　六月廿二日　雨、よい雨。

　ほどよい酔心地、銭を少々借ることが出来たのである。ほどよく食べて、ぶら／＼歩く。何よりも米、そして酒である、私のやうな酒好にも。酒は慎むべし、酒を慎めない私はしよつちゆう自分にかくいひきかせてゐるけれど、いつもだめになる。酒は悪魔か、否、酒は菩薩か、否、酒は酒である、そして時として悪魔、時として菩薩、私次第で。……

　六月廿三日　曇――雨。

　きのふのけふで、さすがの山頭火もへこたれてござる！身辺整理、やつとかたづいた。散歩、朝倉は好きな山里だ。くちなしの花を貰ふ、なつかしいおもひでがある。雷鳴、やうやく雨になつた、降れ／＼、降らないと田が植ゑられない。――とにかく酒をつゝしまう、つゝしまなければならない。夕方、Ｙさんが雨中わざ／＼来訪、酒と米とを買うて下さつた、ありがたし／＼、ほどよく酔うてぐつすりと寝た、めでたし／＼。

　六月廿四日　曇、ふつたりやんだり。

　午前、ちよつと山口へ、少しばかり買物をする。まことに喜雨だつた、たちまち旱魃解消、いつせいに田植が始まつた、一滴千金の慈雨とでもいはう。午後、やるせなくたへがたいので一杯やつたがうまくなかつた。散歩して野草に気を紛らした。

　六月廿五日　曇、梅雨らしく。

　身心清掃！さびしく焼酎一杯、そして入浴、そしてまた散歩。私の窓へもいろ／＼のものが来てくれる、蝶、蜻蛉、蜂、蜘蛛、それから雀、百舌鳥、――蠅と蚊とはおことはり。近郊を散歩して、ふと二三基の墓石を見つけた、それには、在監中死亡者合葬之墓と刻んであつた、囚人の墓！　私はひそかに回向した。

六月廿六日　曇。

夏の朝のよろしさ。Ｋよ、ありがたう、——父としての私を考へる！山口へ、買物いろ／＼、ちよい／＼コツプ酒！不快事三件、バスに於ける彼、彼、店頭の彼女。おもしろくもありおもしろくもない人生だ！夕方、だしぬけにＹさんがＨを連れて来た、Ｋで飲んだが、あまり愉快でなかつた、Ｙさんの気持に同情する。

東漂西泊、おのづから死がおとづれる、そして野の鳥のやうに一生を終りたい。

六月廿七日　晴曇。

平静、——清澄、Ｕ、Ｓ、そしてＴ君来訪、酒、魚、飯、……饒舌、呵笑。……どくだみはよろしいかな、花も葉も。向三軒両隣の人々。

六月廿八日　曇、時々明るくなる。

おちついてしづかなり。Ｙさん来訪、たのしい酒を酌んだ。

六月廿九日　曇。

先日来、飲みすぎ話しすぎたので、多少の憂欝は仕方がない。入浴髭剃、これだけでもすこし気分が軽くなる。Ｄ老人と話す、これも気分転換の一法。Ｙさん、Ｎさん来訪、街のＫへ出かけて飲む、酔つぱらつてみじめだつた！

七月一日　晴れたり曇つたり。

——自分で自分を持てあますとは何といふだらしなさだらう。——午後、久しぶりに敬君来訪、なつかしく話しつゝＣへ、それからさらにＦへ、折よくＭ君も来訪、三人いつしよに飲んだ飲んだ騒いだ騒いだ、……Ｗさんはとう／＼泊つてくれた。

七月二日　曇。

……阿呆、馬鹿、……ぼうぼうばくばく……こんとんとして泥沼に落ちこんだやうな。……夕方、Ｙさんがいつものやうに自転車で坊を連れて来訪、Ｗさんのお土産“三楽”を味ひつゝしみ／″＼話したことで

ある。

七月三日　時々雨。

やゝ平静、降りきらない梅雨空を仰ぎつゝ溜息を洩らしつゝ。――午後、酔つぱらつてＩ君W君来襲、三人の酔漢は今日もまたＫへ出かけて、さらに／＼酔つぱらつた、Ｉ君は猪になりＮ君は猫になり、私は兎になつた、そしていたづらに来てくれたＹ君を苦笑させた。……Ｉ君をむりやり引張つて戻つたのは大出来だつたか。……

七月四日　曇、風ふく。

防空訓練第一日。禁酒、身心清掃に努力する。――悔恨かぎりなし、自粛自戒せよ。Ｉ君の苦悩が解りすぎて、私の苦悩たへがたし。お互に慎しみませう、ああ済みませんでした！

七月五日　曇――晴。

防空訓練第二日。早起、入浴、読経、身辺を整理する。近郊散策、雑草のよさを観賞する。夜はＮ君来訪、月の出るころまで、くらがりで話す。アルコールなし。――

七月六日　曇、風物何となく不穏。

防空訓練第三日。不眠、夜の明けるのを待ちかねて入浴、私が今日の最初の浴客であつた。しんみりおちついた日であつた。回光返照、おちつけ／＼、しつかり／＼。十時、約の如くＮ君来訪、バスで吉敷地方を散歩する、龍蔵寺拝登、鼓の瀧を観る、初めて蝉を聴く、一杯の酒、数個の握飯、おいしかつた。夕方、Ｙさん来訪、三人連れ立つてＦで飲む、楽しかるべき会合があまり楽しくなかつた、うまい酒もうまくなかつた、Ｙさんの振舞は軌道を外れてゐた、私は何となく腹立たしかつた。……山頭火よ、恥づかしくはないか、恥知らずめ！

七月七日　曇、そして晴。

――身心重苦し、自業自得なり、こゝで転一歩しなければ、私は自滅するより外なし。何よりもアルコールを節すべし（禁ずることはとうてい出来ない）、自己を失はない範囲で酒を楽しむべし。叱る声、泣く声、怒る声、笑ふ声、――市井の間にゐることを痛感する、裏小

路だなあと思ふ。文章報国――句作一念の覚悟なくては、私は現代に生きてゐられない。Ｄ老人は病みて動けない、毎日逢ふ人々に同じ繰言を並べて、悶々の情をまぎらしてゐる、人事でない気の毒さである。支那時変二周年記念日、黙祷、回向、私も日本人である、日本人ならば日本人らしく行動せよ。お粥と握飯とですます、むろん酒なし日也。午後、呉郎君来訪（Ｎ君ではしつくりしない、矢島君をＹさんと呼ぶよりも、やあさんといつた方がしたしめるやうに）、散歩、水泳、帰途、Ｓ君を訪ねる、Ｙさんに邂逅、三人同道して帰つて来て、内證で、ほんたうに内證でビールを飲む、Ｙさんは何か事情があると見えて泊ることになつた（今日、店頭で飲酒し警察で説諭された人もあつたさうな）。月よろし、おそくまで話し合つた、Ｙさんはやうやく睡つたが、私はたうとう睡れなかつた。……

七月八日　晴。

ほんにうつくしい朝だつた。梅雨はいよ／＼空梅雨らしい、夏日かゞやき炎天燃ゑる、――それにつけても私には自粛自戒が足らない。隣は夫なしの奥さん、裏は妻なしの御主人、そして子供が多い、朝晩、子を叱る声が絶えない、気の毒でもあり皮肉でもある。Ｙさんと共に入浴、朝飯をあげる、近来にない朝起だつたさうな、六時にはもう帰られた、長門峡行を約束して。十時、Ｎさん来訪、すぐ連れ立つて湯田駅から上り列車へ乗り込む、山口駅からＹさん同乗、おもしろおかしく話してゐるうちに長門峡駅に着いた。山容水声、身も心も楽しくおどる。中の茶屋まで歩く、河鹿が鳴く、青葉がそよぐ。呉郎君、やあさん、そして山翁、まさに子供にかへる。酒、ビール、鮎、鰻、飲みたいだけ飲み、ふざけたいだけふざける、……たうとう三人いつしよに泳いだ。観光客ちらほら、むつまじいアベツクもゐた。五時の列車で山口へ、そしてカフヱーＯへ、私は気が滅入つて堪へがたいので、ひとり別れて帰つた、九時近かつた。よい一日だつたがよくない一夜だつた、私は誰にともなく（いや自分自身に向いて）バカヤロウ！　と叫んだ。……

七月九日　晴。

憂欝やりどころなし、一杯ひつかけて我慢する。自省、自粛、自

戒。呉郎さん来訪、昨日の話をして笑つたり悔んだり、焼酎を少し仕入れて酌みかはす。蒸暑かつたが、すこし降つた、ありがたい雨ではあつた。夕方、呉郎さんに連れ出されて山口へ散歩する、思慮の足らない私と若い呉郎さんとは軌道を踏み外してしまつた、Ｋ屋に於ける、街頭に於ける悲喜劇一齣はこゝに書くにも忍びない。私たちはこれを契機として本然に立ちかへらなければならない。

七月十日　曇。

自己を鞭打つ、自己を殴れ！退一歩、そして転一歩。嵐の前のしづけさ、嵐のあとのむなしさ。とにもかくにも私は一人となつて旅に出やう、九州から四国へ渡らう。床屋へ行く、いくらか気持がよくなつた。裏の子供が便所に落ちたといつて騒いでゐる、私にもさういふ思出がある、幼いとき馬の小便壺に落ちたのである。しばらく散歩、雑草を観てまいる。大風一過の心持、こゝで転一歩しなければならない。呉郎さん来訪、やあさんも、――よか／＼！

七月十一日　晴。

身心沈静。朝早くから、裏の小父さんが隣の小母さんが子を叱つてゐる、なるたけ子を叱らないやうに。真夏らしい、洗濯、そして散歩。呉郎さん、やあさん、Ｆさん来訪。夕方、呉郎さんといつしよに散歩して帰つてくると、また、やあさんとＴさんと、そして知らないオヤヂが座り込んでゐる、雰囲気険悪、唯事ならずと直覚したが、果してＫ屋がやつて来たのである、私は頭を下げて、ほんたうにすみませんでした、私が悪かつた、あやまります、と詫びるより外なかつた、幸にして呉郎さんの手が解決してくれた、ありがたう／＼。私たちのダラシナサもカキセイの登場でバクハツし、それでどうやら葛藤も解消したらしい。

七月十二日　晴。

沈欝。――退一歩そして転一歩、それから歩々精進。午後、呉郎さんと共に川で泳ぐ。一切放下着（酒と句とは詮方ないけれど）。夜、やあさんＴさん来訪、電話で呉郎さんを招く、四人でＫへ出かける、Ｔさん送別、私たち慰労のためである。しんみり愉快であつた。

七月十三日　晴。

気分快適、身辺整理、自省自制。けふも呉郎さん兄弟と共に泳ぐ。夕方、Ｎさん来訪、Ｔさんに招かれてＨ屋へ行く、Ｔさん不在、不得要領で戻つて来た、そしておとなしく読書して熟睡した。

七月十四日　曇、晴。

沈静。――昨日までの私の生活はあまりに放慢だつた、安易すぎた、緊張せよ、精進せよ、喝。人間、世間、深入りするなかれ。しきりに旅を思ふ、山を水を思ふ、散歩する。Ｙさん来訪、暑かつた。

七月十五日　曇。

身心平静、湯銭がないので散歩、夏の夜明の快さ。なか／＼雨が降りさうにもない、誰もが天を仰いで長大息してゐる。無一文！　煙草も喫へなくなつた。暑苦しい日だつた。夕方、Ｙさんが坊ちやんを連れて来訪、酒煙草を買つて貰つた、気持ちよく酔うて歩きまはつた。

七月十六日　晴。

茫々漠々、真夏の太陽が照りつける、……私はまさに身心のひでりにあえいでゐる。Ｙさんの厚意で、いろ／＼買物することが出来た、ありがたう／＼。夜はＳさんＦさんに誘はれて、素人演芸会を観た、私は今更のやうに、強い心臓の持主が多いのに驚嘆した。

七月十七日　曇。

よく眠れたので、身も心も軽く明るい。月草のよろしさ、浅漬のおいしさ、風の涼しさ。ビールの空罐を売つて、今日の小遣にする。日中あまりに暑いので――まるでムロの中にゐるやうなので、川へまで出かけて泳ぐ、川は大小の河童だらけだ。Ｙさん来訪、Ｎさんも来訪。とても暑かつたけれど、ずゐぶんよい日でもあつた。夜明けにたしかにホトヽギスが啼いた。

・虫を殺す――そのことにも私のヱゴイズムを見出したのである。・遊興、遊蕩、耽溺、沈没。・来る者は拒まず、去るものは追はず、求めず、斥けず。・他を相手にせず、自分を相手にする。・自己省察、自己鞭撻。

七月十八日　晴。

何と美しい朝明！　遠くほとゝぎすが二声三声啼いた。身心おだやかに朝湯を楽しむ、生きてゐることのよろこびの一つ！旱魃苦！　八大龍王、雨をめぐみたまへ！大根一本七銭、胡瓜一本八銭。饐えた御飯を食べたが何ともなかつた、私もまだ乞食旅行が出来る！ちかごろしば／＼変な夢ばかり見るがどうしたのだらう。Ｙ老人の不平、——人間は草いや石ではありませんからなう。——午後、泳ぐ、昼顔一茎を摘んで戻る。夕早くＹさん来訪、めづらしく単身である、電話で呉郎さんを呼び出して、Ｆ屋へ行く、飲む、踊る、ワヤだつた、バカヤロウ！

七月十九日　晴。

混沌として宿酔気分。散歩、水泳、放談。やあさん呉郎さん来訪、ビール、氷、干魚。……夜はしづかに読書。

七月廿日　晴。

四時起床、入浴、洗濯。……今日は土用入、鰻が食べたいな。自省自責の念たへがたし、何だか燃えるものが私のうちそとにひろがりつゝあるやうだ。図書館まで散歩、山口は今日から祇園祭。白木槿を途上で見つけた、清楚そのものゝやうな。昼はやあさんに奢つて貰つて呉郎さんとビールの飲み直し。夜は祇園祭に出かけて白鷺の舞を観た。

あるときは死なむとおもひあるときは生きむとねがひ還暦となりぬ

“酒を飲む者は閑をあるじとし”“ひとり住むほど面白きはなし”

（芭蕉の言葉）

七月廿一日　晴、一雨ほしや。

朝湯のよろしさ、朝蝉のよろしさ。まつたく猛暑だ、油蝉熊蝉が鳴きだした。身分しらべで巡査来訪、いろ／＼話す、若いおとなしい巡査だつた。何でも売れば売れる（窮すれば通ずる）、運よく今日は一杯代捻りだした、曰く、空炭俵六枚十八銭、古新聞十六銭、空罎七銭、合して四十一銭也！あんまり暑いので呉郎さんを訪ふ、十郎とも

いつしよに馬鹿話して馬鹿笑ひする、愉快だつた。夕立来、まだ／＼雨は足らないけれど万象いき／＼として来た。ううさんやあさん来訪、呉郎さんもやつて来て、酒、酒、酒、それから、それから、それから、——酒はうまいが、酔ふとやつぱり嫌なことがある。……酒をつゝしむべし、つゝしまざるべからず、ひとりの酒を味ふべし、おちついてしづかに味ふべし。自分にかへれ、自分の愚を守れ、すなほであれ、つゝましかれ、しやべるな、うろつくな。人と人とは親しむべし、※るゝべからず、このごろことにこの感が深い。

・句作は飛行機の操作に似たり。・熱時熱殺。

七月廿二日　曇。

昨夜の今朝である、沈欝ならざるを得ない。野を歩き草を踏んで自から慰めるより外なかつた。

七月廿三日　雨——曇——晴。

退一歩せよ、自省自粛自戒。福富さんがめづらしくも来訪、長谷さんと同道して、共に散歩、映画見物、浅酎低唱といつたやうなことになつたが、いつもとはちがつて気持がよかつた、多謝々々。

七月廿四日　曇——晴。

なか／＼思ふほどは降らない、すこしは降つたけれど、まだ／＼。健よ、ありがたう。呉郎さん十郎を誘つて昼飯を食べる、それから風来居にいつしよに戻つて来てまた飲んだ。……

七月廿五日——七月廿七日

此三日間は空白にしておく、自分の修行未熟を見せつけられるばかりだつた、私はバカ／＼／＼ダメ／＼を連呼してゐた。

七月廿八日　晴。

身心やゝ軽快。思ひ立つて佐野の妹を訪ねることにする、呉郎さんから本三冊借り受けそれを質入して、やうやく小遣をこしらへた、一時の汽車で大道まで、大道から歩いて、半年ぶりに思ひ出の多い門をくゞつた。肉縁はなつかしい、同時にいやらしい、私は矛盾した心持

を妹や甥に対して感じ、それにたへないで、引留められるのをふりきつて、七時の汽車で帰途についた。小郡で飲んで飲んで飲みつぶれてしまつた。

　七月廿九日　晴。

　朝早く河で泳いだ、いはゞ私の禊である、六根清浄、身心潔白、青天白日。——章郎さんから少し借りて帰居。

　七月卅日　卅一日

　何も書かない、といふよりも書けないのである。

　八月一日

　混沌。

　八月二日　晴——曇。

　沈欝たへがたし。呉郎さんを訪ふ、不在、近在を散歩する。ボロを売つていくらか出来た、呉郎さんから握飯を貰ふ。まさに一刀両断すべし、前後際断、即今に徹すべし。句集茶の花、おなじく背嚢を頂戴する、背嚢の真実にうたれた。敬君来訪、つゞいて矢島さん来訪、呉郎さんもまた、酒とビールとチヤンポンでおもしろく飲んで酔うた。

　八月三日　雨。

　早起、前の小路のラヂオ体操に和して遙拝黙祷。恥ぢよ、慎めよ。雨は降り足らないけれど、ほんにうれしいうるほひであつた。腹工合がよくない、臥床読書。夜、矢島さん来訪。ひとり飲み、ひとり酔ひ、ひとり寝る、善哉々々。

　八月四日　晴。

　身心何となく重苦しいやうな。九時、組内の応召入隊者を駅まで歓送する、しんじつ頭がさがる、どうぞ、どうぞ。——おちつけ、おちつけ、おちついてゐなければ自分のこともまた他人のことも解らない。今日は来訪も往訪もなし。

　・酔へば極楽、醒めると地獄。・往いて還らぬ旅。・合掌無心。・

有りすぎても困る、無さすぎても困る。・銭、銭、銭！

八月五日　晴。

気分すぐれず、散歩する。いやな夢を見た、気分さらにすぐれず。

八月六日　晴。

やつと米一升、そして豆腐一丁。アルコールなし、矛盾した言葉でいふと、酒はうまいがアルコールはうまくない。向ひのおぢいさんおばあさんの仲のよさ、毎日見聞するにつけて感心するばかりである。

反省余録

“自画像”

八月七日　晴。

四時半起床、入浴、清掃。——今日は詩園同人が大挙して阿知須へ押しかけるといふ、私もＨさんやＹさんやＳさんから誘はれたけれど、気分がすゝまないし、銭もないので断つた（まつたく無一文である！）。——ひとりしづかにしてゐた。靖国神社へ詣でる遺児部隊、涙の記事である。何よりもうまいのは水であると思ふ、けつきよく味のない味がほんたうの味ではないかと思ふ。永日、そして長夜、情ないけれど私の現実だ。午後、近在散策。タバコがなくなつた、諦めて禁煙。夕飯はいさゝかのお粥ですます。夕方、呉郎さん来訪、酒と下物とを奢つてくれる、煙草も貰つた、面白い話もした、近頃めづらしい快々的！山口へ出かけて行つた呉郎さんが更けてから戻つて来た、泊めてあげる。……夜はいつしか秋を感じるやうになつた、今夜は殊にそんな気がした、秋立つ日も近いな。

八月七日　晴。

まいにち夕立が来さうで来ない、植物も動物も憂欝である。呉郎さん寝床で長大息！ウラのオヤヂのコヾト、トナリのオカミのコヾト、それはすべて子に対して妻への、夫への不平であり、要望である（彼等には夫も妻もゐないのだ！　お察しいたします！）。立秋気分十分、旅をおもふ。壺に雑草を活けて飽かず眺める、すゞだま、夕顔、月見草、それ〳〵のよさ。腹ぐあいがよくない、食べすぎ飲みすぎの

たゝり。今朝、或る事実に於て、自分のきたなさ（身心共に）を見せつけられた！――痩せましたね、と呉郎さんにいたはられた、痩せる筈ですよ。やうやく健へ手紙――かなしいたよりを書いた、それを持つてしばらく散歩。午後、Ｔ君来訪、誘はれて山口のＴ屋へ出かける、愉快な酒だつた、五時帰る、間もなくやあさん来訪、ちよつと話して、さよなら。ひきつゞいてＳ君、呉郎さん来訪、やあさんまた来訪、Ｈ君、W君来訪、にぎやかなことだつた。彼等は山口へ行つた、私は残つた、あゝくたぶれた。ぐつすり眠つた、あけはなしたまゝで、――万歳！

八月八日　晴。

毎日々々暑いことではある。宿酔気分（私にはめつたにないことだ）。胃が反抗して困つた、あたりまへすぎるあたりまへだ。やたらに水を飲んでごまかす。散歩、そして水浴、露草のなつかしい花。偶然、機関銃隊に出くわした、兵隊さんの汗、それは私たちの涙でなければならない。ふしぎにも短歌一首うまれた。――

機関銃隊真夏の真昼まつしぐら　　水をよぎり駈足で行く

Ｓ君往訪、梅干を貰ふ、梅干のうまさありがたさ。呉郎さんについていろ／＼聞かされた、或る事が暴れて謹慎を余儀なくされてゐるとのこと、私にも責任がある、あれこれ考へて胸がいたくなつた。……やあさんがいつものやうに坊ちやんを連れてやつて来た、今日は自動車を買つてもらつておとなしかつた、助かつた。夕方、呉郎さんが顔を見せてくれたのでほつとした、お互に自粛自戒を語り合つた、まもなくＳ君も来訪、三人で十時頃まで話した、いつもの猥話が主だつたが、ヘロ吸引病者の話は興味深かつた。やすらかに睡つた。今日は立秋だつた、吹く風が秋をさゝやいてゐる、私も旅に出かけよう。……

八月九日　晴――曇。

気持よろし、自粛自制を誓ふ、忍ぶものは救はるべし、自制なきところにはおちつきなし。前の路地で、いつものやうにラヂオ体操、今朝はいつもより緊張してゐるやうだ、観てゐて――参加すればさらに――ほゝゑましき風景なり。十二時頃、沛然として夕立がやつて来

た、よい雨だつた、ありがたい雨だつた、何よりも農家の歓喜が思ひやられる。夕立のあとのしづけさ、一句たちまち出来た。午後、山口へ散歩するつもりで出かけたが、気がすゝまないので、途中からひきかへした。——米も煙草もなくなつた、こゝに缺食老人あり、誰か御馳走してくれませんか！呉郎さん来訪、夕餉頃まで雑談、お辨当を頂戴した、おいしかつた、うれしかつた、夜は漫談しながらやあさんを待つたが、あやにく来てくれなかつた。——待つもの来らず——さびしいなあ！

八月十日　晴。

空々寂々。——おはぐろとんぼがたくさんお寺の生垣をくゞりぬけてくる、草の葉にとまつて、しづかにしづかに翅をひろげたりたゝんだりする、——こゝは一坪にも足らない空地であるが、悪童の出入を禁じ雑草の茂るまゝにしてある、私の花園だ、そしてとんぼやてふてふの極楽である。古新聞を売つて、やうやく二十銭捻出した、それはすぐナデシコとなりトウフとなつた。豆腐は昔風なのがよい、絹漉は嫌ひだ、ことにヤツコで食べるときには。どうにも堪へきれなくなつて酒造会社から五合借りてちび／＼飲んでしまつた、うまかつた（弱虫め、卑怯者め！）。酔うた、酔うて悠然として雲を眺めてゐた、善哉善哉、そして唄つた。——

何をくよ／＼川端柳米山さんから雲が出た……

呉郎さんを訪ねる、上り込んで本を読んでゐたが、誰も出て来ないので帰る、途中、Ｈさんから少し借りる、酔中厚顔とでもいはうか。白米一升四十銭、さゝげ豆一束二銭、茄鮹一本十二銭。夕方から呉郎さん兄弟といつしよに山口へ出かける、Ｍ店でやあさんもいつしよになり、それからカフヱーＲからＴへ飲みまはつた、そしてこゝで私は失敬して一人帰つて来た、ずゐぶん酔うてゐた。今日はほんたうに飲みすぎた、カフヱーへはいつたのもよくなかつた、まことに過ぎたるは及ばざるに如かず、自制力に乏しい自分を罵りつゝ寝た。……草叢の中で、もうこうろぎがうつくしいしらべをうたうてゐた。水、水、水、水ほどうまいものはないと思ふ。

・自分で自分に腹が立つうちはまだ見込があると思ふ。・ヤイトウ

の思出　母よ恋し

八月十一日　晴。

胃のぐあいがよろしくない、自業自得である。久しぶりに入浴、床屋へは行きたいが行けない。酒代家賃を請求された、はて、何としたものか！Ｆさん来訪。やあさん来訪、昨夜の出来事を聴く、心配したが、夜、呉郎さん十郎さん来訪、そしてその詳細を聴く、お互に謹慎しなければなりませんね、謹慎々々。

八月十二日　晴。

身心沈静。ぢつとしてゐると、何となくいら／＼してくるので、そこらを散歩する、雑草ののび／＼とそよぐ姿を眺めると、なごやかな気持になる。……呉郎さん、約の如く来てくれた（持つて来てくれた！）、ありがたう、ありがたう。――午後、九州へ出発した。

八月十三日　十四日　十五日

旅日記（別冊）

八月十五日　晴。

――午後五時帰居。何となく、うるさくさびしく感じた。無相さんから久しぶりにたよりが来てゐた、しみ／″＼読ませるたよりだつた、この秋には多分逢へるだらう。払へるだけ払つて、そして白米一升豆腐一丁買つた。盆といふたとて、私には何もない。秋風らしく吹く、盆踊の大鼓が鳴つてゐる。のび／＼と寝た、自分の寝床ほどやすらかなものはない。

八月十六日　晴、肌寒し。

数日ぶりに温泉浴、温泉はよいなあと思ふ、温泉があること、そのことだけが私を湯田にひきつけてゐる！身心沈静、身辺整理、心中清掃。呉郎さんを訪ねて、新聞を読ませて貰ふ、東京会談はやつぱり停滞してゐる。何もお菜がないので、胡麻塩をこしらへる。Ｓさんの死を呉郎さんから知らされて胸をうたれた、あの若さで死ぬるとは。
――いちにち涼しい風が吹きぬける、秋が駈足で来たのか。山口へ夕の散歩、不在中に仲のよい中原兄弟が来訪されたらしい、すまなかつ

た、惜しいことだつた。散歩の途上、早咲の曼珠沙華を見つけて、二三本頂戴する、机上らんまん、妖婦のやうな花だ。夜、ふつと電燈が消えたので、外へ出て仰ぎ見ると、満天の星のうつくしさといつたらなかつた。

自誓その分を知るべし。山頭火よ、お前はお前の愚を守れ。

八月十七日　晴。

五時前起床、子供と老人とは朝寝が出来ない！木炭が買へないからそこらの雑木をひろひあつめて焚きつける、それでもありがたいことには、御飯が吹き御湯が沸いた。当分降りさうにもない、まつたく雨のない夏ではある。身心整理、市中大掃除日も近づいて来たよ。呉郎さんを訪ふ、何だか声をかけたくなかつたので逢はないで戻つた、私はどうかしてゐるな！午後は散歩、図書館まで行つて新聞を読む。水涸れて水饑饉のいたましさ。真昼、川向に火事があつた、人が走る、消防自動車が唸る。……夕方、酔うて呉郎さんと下井田さんと縺れて来た、シヨウチユウ一杯よばれて、ぐつすり睡つた、めでたし。

酒は微酔に限る、とつく／″＼考へるやうになつた。酔態のいやらしさ、みじめさ、他人を観て、自分を顧みて。

八月十八日　晴。

平静、そしてだん／＼沈欝になる。——今朝からまた絶食だ、炊く米がなくなつたからでもあるが。新秋のさわやかさ、散歩でもしようとしてゐるところへ、呉郎さん十郎さんうち連れて来訪、正午のサイレンが鳴るまで雑談。朝は塩茶、昼は砂糖茶（砂糖だけが少しばかり残つてゐた）、さて晩は。……呉郎さんが親切にも握飯をたくさん持つて来て下さつた、昼飯として早速その半分だけ頂戴する、多謝々々。どうやらかうやら夕飯にもありつけた次第。どこへ行つても誰に逢つても、水がない、一雨欲しいといふ話ばかりである、今年は当地方は六十年ぶりの旱魃とのことである。夕方、やあさんが思ひがけなく子を連れて来訪、愛宕様に禁酒の願掛をしたといふ、善哉々々、矢島家万歳である、自から誓つた事は必ず自から守りたまへ、私は改めて君を見直すことにする。Ｆさん来訪、地方の小新聞記

者といふものについて考へる。呉郎さんを訪ねたが不在らしいので、そのまゝ帰つて読書。

“貧閑自詠”

八月十九日　晴。

けさも塩茶ですます、すます外ないのである。今日明日は大掃除日、私も掃除する、空腹でぼろ畳を出し入れするのは辛かつた、午前中片づいたけれど、何しろ食べてゐないのだから、さうとうこたえた、うれしかつたのは十銭一つ壱銭一つ見つけたことだつた、さつそく入浴して、そしてナデシコを買つた！心が楽しまない、沈みがちである、弱いかな、山頭火！山口へ散歩がてら出かける、敬君を訪ふ、不在、U君を訪ふ、また不在（そのために嫌な頼みをいひださなくてすんだけれど）、帰途、S君の店に寄り、事情を話して白米一升快く貸して貰ふことが出来た、うれしかつた、ありがたかつた。留守中、やあさん来訪、私が帰るところへ引き返して来たので、同道して帰居、しばらく話す、罐詰を買つて下さつた、酒代も頂戴した、私が早速酒屋へ出かけた留守中に君は、“酒は恐ろしいから帰りますよ”と書き残して帰つてしまつた、禁酒はなか／＼むつかしいものである、君よしつかりやつてくれたまへ、君よ、私は久しぶりにうまい酒を飲んだ、ありがたう、すまなかつた。おかげで、ぐつすり熟睡した。

・身口意の三業合致　　　考へること、言ふこと、行ふこと。・有仏のところ留まる勿れ、無仏のところ走過せよ。（趙洲）・知性と感性。

八月廿日　晴、雨遠し。

今日から六日間防空訓練。朝早く散歩する、河原撫子を採つて来て活ける、素朴な可憐な花である。M老人の代筆をしてあげる、うれしい手紙を読まされ、うれしい返事を書いてあげた、別れた妻、十五年間、新らしい妻、不行跡、古い妻、——人生は走馬燈のやうに廻転する現実を観た。菜葉を買ふことができた、煮る、漬ける、おいしいぞ、一把七銭、さうとうな値段である。母が恋しくて、何かなしに泣く子、裏の子供は気の毒だな。いろ／＼さま／″＼なことを考へさせら

れる。夕立が来さうで来ない、暑い暑い日中だつた。午後、やあさん、雑誌配達のついでに来訪、酒がないので――酒が飲めないので、お互に何だか手持無沙汰だつた、こゝが辛抱々々。Ｓがだしぬけに来た、近々支那へ行くといふ、それはよいことだ、近々また来ますといふ、どうぞ、さよなら。夕、山口まで散歩、燈火管制は暗くて陰気だつた。十二時近く敬君来訪、すぐいつしよにならんで寝たが、何しろ蚊張も蚊とり線香もなくて、むさくるしいので、我慢しきれないと見えて、夜中、どこかへ逃げだしてしまつた、すまなかつた、すまなかつた。私は蚊にくはれながら、うつら／＼だつた。

　　マイナスのない生活、せめて物質的にでも。・Ｄ老人とＭ老人。　（向ひの）（裏の）・飢（餓鬼）　別れた妻の動静（再会）

　　　　戯作一首　いくたびかやめんと誓ひ　いくたびか死なうと思ひ　アル中になる

　八月廿一日　晴。

　未明起床、身心平静。早朝から、となりもうらも子供相手に小言小言小言の連続。あゝうるさいな、まつたくうるさい世の中ではある！井戸の水も日にまし涸れてくる、釣瓶綱いつぱいに汲みあげる水のありがたさ！朝蜘蛛が頭上からぶらさがつて来た、かくべつよい事がありさうでもないのに。……洗濯をする、洗濯はなか／＼骨が折れる、女房の恩を思ひ出す。散歩、図書館まで歩いて諸新聞を閲覧する、東京会談も決裂に近く、時局いよ／＼重大、形勢は急迫しつゝある。暑かつた、暑い暑い日である。Ｎさんから、井師を通して、酒代――揮毫料――を頂戴する、半分は借金払、半分は買物、たちまち無くなつてしまつたが、Ｎさん、ありがたう／＼。酔老人と子供、――それはほゝゑましい風景であつた。夕立が来たことは来たが、たゞばら／＼雨に過ぎなかつた。入浴、顔を剃つたりして気分を立て直す。夜は燈火管制で暗いので、涼み台がおそくまで賑やかだつた。あゝ何といふ悲しい夢だつたらう、私は自分の泣声で眼覚めた、老祖母のいたましい犠牲の場面だつた、私はぢつとしてゐるにたへなかつた。……

　或る友との対話に於て、私は私の卑小を痛感した、そしてそれが私の貧乏――私のふしだらからくる――のためであることを自覚して、

内心たゞ／＼恥ぢ入るばかりであつた。

八月廿二日　曇――晴。

朝湯、虫鳴く、秋だな。朝酒ほろ／＼、秋だな。朝飯、菜漬のおいしさ、秋だな。Ｋよ、ありがたう。呉郎さん十郎さん来訪、三人ぶら／＼山口へ、おでんや、料理屋、喫茶店、愉快に飲み食ひして談笑する、日が暮れる前に戻つて来たが、今日は飲むことも飲んだが、酔ふことも酔うた。旅費がなくなつた、何とかしなければならない。やあさん不在中来訪、お気の毒でした。ぐつすり睡れた、ありがたし。

八月廿三日　晴曇。

ぼう／＼たり、サケはナミダかアブラかチかアセか。……饐えた飯をわざと食べる、流浪に堪へ得るかどうかの試練でもある。気分がすぐれないので朝酒一杯二杯三杯！呉郎さん来訪、昨日の事を話して貰ふ、酔中の私を反省する、私も私らしくなつたやうである。裏の子供に墨をすらせて、半切二三枚書きなぐる、それをやあさんの店に届け、ついでに図書館へまはつて新聞を読んで戻る。暑い、暑い、乾く、乾く。白木槿いよ／＼美しい、好きな花である。午後、やあさん父子来訪、いつしよに昼寝する。夜は再来するといふやあさんを待つたが、待ちぼけだつた、少々腹立たしくなつたけれど、そのために数句作れた。しづかに読書して快眠。

市井雑記のうち――

裏の子供ら、“汝の性のつたなきを泣け”――雲はなぜ動くの――子供の疑問。――お月様が駈けつとる、とつてやろ――おなじく。

ある娘

彼女は彼のかくし子だつたのか。

八月廿四日　曇。

五時前起床、炊事をしておいて入浴。早朝だしぬけにやあさん来訪、呉郎さんよんで来て、ちよつとおわかれの言葉など、さよなら、ごきげんよう。こらへきれなくなつて、ちよい一杯！井戸水がいよ／＼涸れて濁つて来た、貰ひ水をしなければなくなつた、断水の悲鳴が

新聞をにぎはしてゐる。今日も防空事務所へ、四時から五時まで勤務。夕方、やあさんううさん同道して来訪、酒、飯、そして悪筆を揮ふ。酔態あさましかつたらう、いやらしい夢を見た、若さがまだ残つてゐる故だといへないこともないけれど。

八月廿五日　晴。

朝、防空訓練は解除された。前の涼台で四方山話、世間はうるさいけれどまたおもしろい。晩酌一杯、あゝうまかつた、緑平老の友情に感謝する。夜しばらくそこら散歩、おだやかな睡眠。

八月廿六日　晴。

いよ／＼長旅に出かけるべく身辺整理。散歩がてら図書館へ、途上で一句拾ふ。世界の情勢はまさに発火点に達したらしい、その前夜といつた緊迫ぶりである、いつの時代でも戦争は絶えない。胡瓜五銭、おいしく昼飯をいたゞいた。貧しいけれどつゝましい日であつた。つく／″＼思ふ、人間の死所を得ることは難いかな、私は希ふ、獣のやうに、鳥のやうに、せめて虫のやうにでも死にたい、私が旅するのは死場所を探すのだ！いやな夢を見た、小人夢多とでもいはう。

八月廿七日　晴、風ふく。

陰暦七月十三日、祖先の恩恵を考ふべし。焚きつけの木切を拾うてくる。まづすなほであれ。貰ひ水、朝一杯、昼二杯、夕一杯（二升入の小バケツしか持つてゐない）。今日も散歩がてら図書館へ。欧州の情勢は一触即発といはれ、和戦の間紙一枚といはれるが、ほんたうに戦争が勃発するかどうか、神さまだけが知つてござる！山中の校庭を歩く、感慨多少、市場に寄つて買物少々。ひつきよう、人間の生活は飲むこと食べること！早く旅に出たいが用意が整はない。――いひかへると、旅費の工面がつかない、――いら／＼する、この旅は、私にとつては、捨身懸命的である、ひたむきに良心的に歩かう。時々風があたりを吹きまくる、颱風が近づきつゝあるさうな。夕となればまた一杯やりたい、独り者の気楽さ、貧乏のはかなさ。よい月夜、そして捨てられた仔猫がしきりに鳴いてゐる、私はどうすることもできない自分をあはれむほかなかつた。つゝましくすなほに今日を送つたこと

はうれしい。

　自己抑制でなくて自己解脱でなければならない。

　私たちは時勢や環境の影響を受けないではゐられないけれど、私たちは肚の底にがつちりしたものを持つてゐなければならない、時代や周囲に順応しつゝ、そして自分自らの道を進まなければならない。動いて動かない心である。

　無芸無能の私に出来る事は二つ、二つしかない。――　歩くこと（自分の足で）　作ること（自分の句を）私は流浪する外ないのである、詩人として。

　　　水のおもひで“水の話”　　　水についていろ／＼。

　八月廿八日　曇、風模様、秋冷、雨すこし。

　沈静。――風よ吹くな、雨よ降れ、金の雨、銀の雨、降つてこい、降ることは降つたが、ばら／＼雨にすぎなかつた、雨は今まさに一滴千両であるが。人を憎むよりも己を責めろ、おのれを正せ、自己批判は飽くまで峻厳でなければならない。やうやく本格的に句作するやうになつた、喜ぶべき哉。何となく切ないものがこみあげてくるので、酒を借りて飲んだ、酒は一時のなぐさめにしかならないけれど、ほろ／＼酔ふと、とにかく愉快になる。……内閣総辞職とは驚いた、日本もいよ／＼更始一新だ。白紙に返れ、人生は時々ブランクがあつてもかまはない。身のまはりをかたづけてさつぱりした、無一文はちとさびしい。アルコールのきゝめで、宵からこん／＼うつ／＼寝こんでしまつた、いろ／＼の錯覚におそはれた、……旅人の夢だ。……

　・動くものは美しい、水を観よ、雲を観よ。・他国に依存する国家がいたましいやうに、他人依存の個人はみじめだ。・求めない生活態度、拒まない生活態度、生活態度は空寂でありたい、私に関するかぎりは。・自分を踏み超えて行け。

　八月廿九日　晴、風強し。

　午後、図書館へ、途中ところ／″＼枯るゝ田あり、傷心たへがたし、欧洲は緊迫情勢のまゝ、大命阿部大将に降下した、組閣早かるべし。

どうでもかうでも原稿を書きあげなければならなくなつた。となりへ今日は旦那さんが来てゐるらしい、うらへは別れた妻君が来てゐる、私は一人でしづかにしづかに中外日報を読んでゐる！午後、ひよつこり樹明君来訪、豆腐と魚とを貰つた、酒はわざと遠慮した。待つてゐたけれど樹君も敬君も来てくれなかつた、Ｉもまた。めづらしく号外の鈴が鳴る。さびしいゆふべではあつた。今宵は陰暦七月十五夜だが、月は冴えなかつた、たゞ風がさわがしかつた。

・およそ誠意のないところに友情は成り立たない。　わざとらしさを去れ。・酒は三合、ビールならば二本、ほろ／＼酔ふたらそのまゝ睡るべし、その他の火酒は口にすべからず。・つゝましく、けち／＼せずに。　のび／＼として、くよ／＼しないで。・世に旧友ほどよろしきものはなし。

八月卅日　曇、風、晴、風。

ゆつくり六時すぎまで朝寝（いつもは朝飯が六時）。——今朝、旅立つつもりだつたが。——香を※いて自省自戒、遙拝黙祷。裏の洗濯川もとうたう涸れてしまつた、赤ちやん持の妻君は閉口してゐる。“風がふくので年とつたやうな気がする”とＤ老人が誰かと話してゐる、市井の風。魚肉は好きでもありうまいと思ふけれど、食べてゐるうちにたまらなく腥いと感じることがある、獣肉はうますぎる、だからもたれ気味になる、やつぱり新鮮な野菜にしくものはない。午前、図書館へ、途上二句落ちてゐた。この風の中で半鐘が鳴るとは！　山火事ださうな。Ｓから手紙、うれしく読んだ。午後、意外にも呉郎さん再出現、夕方まで雑談。やあさん夕方来訪、てつちやん今日はおとなしい。無相君から私のはがきの珍妙を指摘してくる、その筈だ、四国の木村君へのそれと九洲の木村君へのはがきとが宛名をまちがへて書かれたのだ、どうやら山頭火耄碌らしいぞ！猫のいやらしさ、猫の心のいやしさを見せつけられて不快になつた。今夜の月はうつくしかつた、風に磨かれて冴えきつてゐた。近来珍らしい良夜であつた。

八月卅一日　快晴、風が涼しい。

千人湯最初の浴客として未明一浴、塩茶一杯、それだけで絶食（正確にいへば缺食だらう）。Ｓへ手紙を書いてわびしい気持になつた。

旅行延期、身辺整理、一切放下着、々々々。このごろの朝夕の散歩はたのしい。貧乏のきたなさを見た、いはゆる清貧に対して、これは濁貧とでもいふべきだらう！（乞食になりきりえないみじめさでもある）うたゝねのはかなさ。……呉郎さんを訪ふ、不在、山口へ出かけて、Ｓ君から切手を貰つて手紙を出す、Ｕ君から当面の米代を借りる、途中一杯ひつかける、とてもうまい一杯だつた、帰つて来て、さつそく米を買うて御飯にありつく、何だかがつかりした！夕方、やあさん来訪、顔色がよくない、何かあるなと予期してゐたら、一切をぶちまけて私の意見をたづねた（不幸にして私の直観はまちがつてゐなかつた、お互に苦しいことだ）、それはまことに非常時の非常時である、君は冷静に判断して誠意を以て事に当りたまへ、死の覚悟があるならば、そして誠実の一念を失はないならば、難関突破は成し遂げられるだらう、くれ／″＼もヤケになりたまふな、飽くまでもマコトを以て貫きたまへと話した（今の私が君に与へうるものはこれだけである、私は私の腑甲斐なさを恥ぢる）、君は喜んでいつた、……私は合掌して、君の幸福を祈つた。……やあさんのおかげで晩酌一本、ありがたう／＼。こゝろよくねむつた。

・私は喜んで恩に着るが、恩を着せられるのはまつぴらだ、――これが私の気質である、私は某君に対して、いつもかく感じないではゐられない、許してくれたまへ。・空々寂々、是非の中で是非にしばられない、利害の中で利害にとらはれない、――動いて動かない心である。

九月一日　おだやかに明けて晴。

興亜奉公日、関東震災記念日、二百十日、――等には極めて意義ふかい日であつた。朝浴、身心清浄、遙拝黙祷、自粛自戒。割木一把弐十弐銭とは！　何もかも高くなる、そして貧乏人はいよ／＼貧乏する。ちよいと散歩、白い草花を見つけて活けた。孤独を味はひ清閑を楽しむ、これが私の性、天の命である。午後、矢島さん来訪、君の復活精勤をよろこぶ。夕方から山口へ、下井田君を訪ねて新聞を読む、思ひがけなく長谷さんに会し、招かれて下井田君と共に推参し、新婚の奥さんに紹介される、偶然また村田君も来訪、四人でしづかに話した（少しばかり酒をよばれたことはナイシヨナイシヨ！）、話してゐ

るうちに、蘇満国境戦の機微に触れ、我々国民はもつともつともつと緊張しなければならないことを痛感して憮然たるものがあつた。……ひとりぼんやりいろ／＼さま／″＼の事に思ひを走らせる、蘇満国境をおのづから思ふ、子のこと、友のこと。……矢島さん午後も来訪。そこら散歩。秋暑く、私は身も心も労れた、老いたのだ。┌単独体└配合体（元禄時代——）

叙述式（事象）　俳句的リズム描写式（景象）　　　（内容律）

九月二日　晴、けふもおだやか。

六時すぎまでゆつくり寝た。いづれほどなく死ぬだらう捨猫が泣く、捨猫よ、汝の性のつたなきを泣け！とんぼがはかなくとんできて身のまはりをとびまはる、とべる間はとべ、やがてとべなくなるよ。朝、矢島さん来訪、一応帰店して新聞を持つて来てくれた、多謝々々。独波がたうとう戦闘の火蓋を切つた（英は仏は伊は蘇は）、いよ／＼世界戦争にまで展開するか。新聞は私たちの生活からは離せないものとなつた、そして私は朝日を好む。——つく／″＼考へる、私は豆腐屋の売子にでもならうか！　友達のふところにすがることがいやになつた、すまないと思ふ、毎日毎月の赤字がたまらなく私を悩ます、私は省みて疚しくない暮らし方をしたいと念じてやまない。午後、曇つて来て夕立が来さうだつたが来なかつた、みんな失望した、あるものは絶望したやうにも見えた。また米がなくなつた、また絶食しなければなるまい、それもよからう、食べすぎて困るよりも！今日はめづらしく矢島さんが来なかつた。

情に溺るゝなかれ、情に流れては真実の句は打出されない。

句作の場合添へるよりも捨つべし。言ひすぎは言ひ足らないよりもよくない。おしやべりは何よりも禁物なり、言葉多きは品少なしとはまことに至言なり。道として、行として句作せよ。

（私の述懐一節）——私はその日その日の生活にも困つてゐる、食ふや食はずで昨日今日を送り迎へてゐる、多分明日も、いや、死ぬるまではさうであらう、だが、私は毎日毎夜句を作つてゐる、飲み食ひしないでも句を作ることは怠らない、いひかへると、腹は空つ

てゐても句は出来るのである、水の流れるやうに句心は湧いて溢れるのだ、私にあつては、生きるとは句作することである、句作即生活だ。――私の念願は二つ、たゞ二つある、ほんたうの自分の句を作りあげることがその一つ、そして他の一つはころり往生である、病んでも長く苦しまないで、あれこれと厄介をかけないで、めでたい死を遂げたいのである（私は心臓麻痺か脳溢血で無造作に往生すると信じてゐる）。――私はいつ死んでもよい、いつ死んでも悔いない心がまへを持ちつゞけてゐる（残念なことにはそれに対する用意が整うてゐないけれど）。――無能無才、小心にして放縦、怠惰にして正直、あらゆる矛盾を蔵してゐる私は、恥づかしいけれど、かうなるより外なかつたのであらう。――意志の弱さ、酒の強さ――ああこれが私の致命傷だ！

九月三日　晴。

早起一浴、焼香黙祷。待つもの来らず、さびしいな。生物の執着――打たれた蠅のあがき――を見てあんぜんとした、生から死へうつる強い苦しみを見よ。閑窓静思といつたやうな朝々夜々。日中の暑さ、朝晩の涼しさ。雷鳴はちかづいたが夕立は来なかつた。二時頃、中村さん来訪、話してゐるうちに矢島さんも来訪、新聞をありがたう。暮れて呉郎さん十郎さん来訪（何といふ仲のよい兄弟だらう）、しばらく雑談してさよなら。私もちよいと散歩して、ちよいと一杯（十郎さんありがたう）、おかげでぐつすり。

・自我をしつかり（否定的にも肯定的にも）。・自意識を強く深く。・自己揚棄。・赤字のない生活　　　　身心共に。

九月四日　晴。

今朝は寝すごした、それほど昨夜の一杯はこたえた。シヨウチユウよ、サヨナラ。久しぶりに味噌汁をすゝる（先日来、味噌までは買へなかつたのであるが、今朝は偶然買ふことが出来た）、いはゆる馬鹿の三杯汁だつた。向ひの縁台が朝から賑やかである、それを題材にして二句作つた。家のうちにゐても、そとを歩いても、湯に入つても秋を感じる、秋もいよ／＼本格的になつた。ぢつとしてゐると、しづかなよろこびをおぼえる、閑静そのものゝやうな一ト時をよろこぶ。午

前中、呉郎さん十郎さん来訪、寝たり話したり。新聞をありがたう。欧洲の情勢はいよ／＼急迫して爆発したらしい。自主独往といふ、それは外交に限らない、国家も個人も自主独往であれ、それは孤立ではない、提携しても離反しても、常に自己を堅持することである、鼠のやうな存在でなくて獅子の如く生きぬくのである。

　近来、酒に対する私の執着は（少くとも火酒に対しては）、めつきり冷却した（もと／＼火酒は好きでなかつた、それは安くて強いから飲んだのであるが）。酒を味へ、日本酒の味を知れ。ほろ酔のよさを守れ。酒中の趣はほの／″＼としてのびやかなり。

　九月五日　晴。

　塩茶二三杯（食べるものは何もない）。十時頃出かける、気はすゝまないけれど仕方なしに敬君を役所に訪うて少しばかり米代を融通して貰ふ、図書館へまはつて新聞数種を閲覧する、欧洲は戦火さんらんだ。あゝこの一杯！（まさに此一戦だらう！）帰つてくると、まもなく矢島さん来訪、酒代を頂戴する、ありがたう／＼。けさ、或る事に於て、自分のつめたさいやしさを見て、それが忘れられないで不快たへがたし。一本飲む、さらに一本、……熟睡の熟睡。水がすつかり涸れて、稲が枯れる、人も枯れさうだ。あせるな／＼、あせらないでどつしりとしてをれ。——私の酒は三合にきまつた、いや、きめなければならないのである、三合以上はうまくない、よろしくない、三合三合、あゝ三合！

　九月六日　晴。

　沈静——憂欝。山口図書館へ、そして大神宮参拝。不在中に矢島さん来訪したらしい、すまなかつた。何と日中の暑さ、ことに今日はひどかつた。小人夢多し、このごろいろんな夢を見る。……

　・ルンペンとハンカチ　彼は或る朝早く香水ひんぷんたるハンカチを拾つた。……・ダンサマ！　こんな言葉——それは封建時代の残滓だ——がこのあたりの人々の間にくりかへされてゐる。

　┌あるときは悪魔のこゝろ│しかすがに神にちかづく└我にやはあらぬ

九月七日　晴。

身心沈欝。――けさも図書館へ、欧洲戦局は捗々しく発展しない、宣伝戦だけは鎬を削つてゐるけれど。閑想閑読といつたやうな。――午後、呉郎さん十郎さん某郎さん大挙して来訪、呉郎さんの袂銭で酒少し買うて来て、少し愉快に話して、さよなら／＼、めでたし／＼。夜、あんまり暑苦しいのでしばらく散歩、そして熟睡。

九月八日　曇――晴。

待望の雨はなか／＼やつて来ない。早起入浴、身心安静。――午前は図書館行、木戸神社参拝。朝蜘蛛果して好事の前兆であるか――果して好事到来だつた、Ｋ社から稿料落手、そしておもひがけなくＴ君から旅費として着金、ありがたや／＼（Ｓから返事のないことは気がゝりだが――）。午後また山口へ、三時半着の遺骨を駅で迎へる、さびしかつたけれど、私にはこれだけしか奉仕が出来ない、あはれむべし、かなしむべし。鯖一尾十五銭、胡瓜一瓢十銭、のんびり晩酌一本また一本、ありがたし。――とうたうＨさんから借りて山口へ出かけて飲んだり食べたり、あゝ、あゝ。あたりまへに戻つて、ぐう／＼ぐう／＼！

あたりまへといふことはさびしい、さびしすぎる、とき／″＼は脱線すべし脱線せざるべからず！

九月九日　曇、風、そしてやうやく雨！

迎酒二三杯。……中原邸を訪ふ、しばらく雑談して戻る。ぼう／＼としてゐる、風が吹くので、さらにぼう／＼。吹く吹く、そしてたうとう降りだした、降れ降れ、よい雨、よい雨、慈雨、喜雨、金の雨、銀の雨、まさに一滴千金！夜は呉郎さん十郎さんが酒と下物とを持参、しばしのわかれを惜しんで別れた、ほどよい酒だつた、しんみりしたわかれだつた。お互の幸福を念じつゝ安らかに寝た。

逢ふは別れのはじめといふ、いつも一期一会である。

九月十日　晴曇、時々雨、晴。

朝湯、あざやかな天地、虫声むせぶが如く、秋風流るゝやうに吹

く。朝、十郎さんが白米を供養して下さつた、ありがたい、これで当分は安心して暮らせる、呉郎さんも来訪、いよ／＼おわかれ、さよなら、ごきげんよう。昨夜の残肴冷酒をいたゞく、残り物によろこびあり！午前中は図書館で。――不在中に矢島さん来訪、失礼々々、夕方また来訪、無相君より来書、はるかに健康を祈る。晩酌一本、ほろ酔きげんで揮毫、その色紙を持つて長谷さん往訪、三人同道して帰宅、酒をおごつて貰つた（珍妙品の買物も頼まれた！）。それから散歩、Ｔ君に逢つて、そして飲んだ、酔つた。焦燥――昏沈、一杯ひつかけたが不眠、徹夜して句稿を整理した。私は考へる、――私は自虐症なのだ！

┌あるがままに・虚心　無我┃　└なるやうに　┌生活・良心的　┃　└句作┌米、米、米、――┃酒、酒、酒、――└水、水、水、――

九月十一日　晴。

――ほんたうに十郎さんにはすまないことをした、敬君宇君には憐笑され、矢君を憤慨さした、……あゝ……痴呆といふより外なし、恥知らずを恥ぢる事ばかりなり。

九月十二日　晴。

終日終夜、昏々として眠る、生ける屍なり。

九月十三日

今日も臥床、読書をせめてもの慰藉として。夜、樹明君来訪、停留所まで送る、酒をよばれた、いそがしい酒であつたけれどうれしい顔だつた。

われあさましく　┌昨日今日　┐酒をたべつつ　┃生死の中の┃われを罵る　└一句なり　┘

九月十四日　晴。

身心不調、……堪へがたきものあり、つゝましく、そしてすなほに。――自覚せよ、自制せよ、さもなくば自決せよ。自己に籠れ、愚を守れ。

秋葉小路をうたふ（一）うらのこどもは　よう泣く子となりのこどもも　よう泣く子となりが泣けばうらも泣く泣いて泣かれて明け暮れる

感動と句作良心的生活日本人的気魄

——私は俳句を人生で割り切つた（と自信してゐる）、そして人生を俳句で割り切らうとしてゐる、果してそれが私の可能か不可能かは解らないが、私は全心全身で精進してゐる。

現実的抒情——俳句の本質

日本的詩情

民衆的（必ずしも大衆的を意味しない）

日本人的気魄

ぐつと掴んでぱつと投げる。

印象的——象徴的単純

九月十五日　晴——曇——雨。

朝浴、沈静、執筆、読書。——私は隠遁する、しなければならない、私は隠遁して私の仕事——といつても句作するより外ない——に没頭する、それが私の本分を尽す所以である。午前中は運動がてら図書館まで、折から博物館で開催中の乃木展を観る、今更ながら乃木将軍及び乃木家の方々には頭がさがる、私は衷心恥づかしかつた。彼岸ちかくなつて彼岸花がそこらに咲いてゐる。何とさびしいゆうべではある。暮れ方から、やつと降りだした、降れ降れ、降つてくれ降つてくれ。久し振りに雨の音に耳傾けた、雨は人をおちつかせる、ことに今夜のやうな雨の音は。雨を聴き虫を聴きながらゆつくりと、そしてぐつすりと寝た。——

九月十六日　曇——雨。

早起清掃、焼香念誦。朝しばらく散歩、雨後のみづ／＼しさ、人に逢へば人のよろこび、野を行けば野のよろこび、山に入つたら山のよろこびがあるだらう。やつと小さい刈萱を見つけて活ける。蟹を捕る

とて大人も子供も川の中をざぶ／＼歩いてゐる。待ちうけてゐる人も手紙も来ないので、すこし沈欝になる、Ｓよ、早く来てくれ。ぢつとしてゐるにたへないので、今朝も図書館へ。労れた、労れた、私は労れてゐるのだ！正午前、矢君来訪、しつかりやりたまへと祈る。すつかり秋になつた。午後はまた雨、よいかな、よいかな。すなほにつゝましく、そしてわびしくせつなく。今夜も不眠、起きて原稿を整理する。旅に出たいなあ！　一日も早く出たいなあ！

私の遊蕩はいのちがけだ！やらうたつてやれない、だから、やるまいとしてもやるのだ！酒乱の切なさよ！あゝ。——

私は芭蕉や一茶のことはあまり考へない、いつも考へるのは路通や井月のことである、彼等の酒好や最後のことである。

私は人間の中へ入りこみすぎた、あまりに多くの人間に接した。いはゆる友達なるものから遠ざかれ。

それにつけても、旧友はありがたいかな。緑、澄、樹、敬、等々君の如きは。

九月十七日　雨——曇——雨。

朝湯のよろしさ、そして詮方なしの絶食はよろしくない！日記整理、私が日記をつけるのは自己整理のためだ。何もかも無くなつたやうな気がする、たゞだらしのない命が残つてゐる！ひよろ／＼山口へ、途中或る寺の盛物講とかいふ法要に随喜したが早々退出、下井田君を訪ねて米一升借りて帰る、古雑誌を燃やして、ともかく飯にする、お菜といつても何もないから胡麻塩で食べる、ありがたかつた。——貧乏すりやこそ人の知らない苦労する、やれ／＼、こりや／＼。午后、上田君来訪、自由律俳談一くさり。鉦たゝきが懸命に鉦をたたいてゐる、お隣はお寺だから何となくおもしろい。妙な夢ばかり見て、とかく寝覚がちだつた、ほんに年はとりたくないものですね、といつても、とる年はとらずにはゐられませんね。言ふことは汝の言ふに任す、行ふことは我の行ふままなり、——これが今の私の生活態度だ。暮るゝころ、新国道をしばらく散歩して、湯田もなか／＼よいと思つた、どうやら私も山口から足が抜けなくなつてゆくらしい（私は

前から山口は好いてゐるのだが）。

※子

皮はとてもクガク実はとてもアマイ、栗が殻いかめしく実がうまいやうに。

九月十八日　晴、秋日和である。

三時ごろ眼が覚めたので、そのまゝ起きて執筆。窓をあけはなつて浴衣一枚では肌寒い、水もつめたくなつた、ことしは冬が来るのも早からう。彼岸入、団子たべたや、どこからかころげてこないかな！と書いたあと、今日は彼岸入でなかつた、私はどうかしてゐるぞ。満洲事変記念日、いろ／＼考へさせられる。朝の散歩、足はおのづから野へ川へ、刈萱はよいな、四句拾つた。Ｄ老人と立話する、或る老人の悶死、彼の後妻の薄情、等、等、等。山口へ出かける、下井田君のところで新聞を読み、それから古本屋へ行つて、最後の一冊——机上の小辞典——を五十銭紙幣一枚に代へる、途中こらへきれなくなつて幾日ぶりかの一杯をひつかけ、そして焚付の木切を拾うて帰つた。市場風景はあまりに人間の食気を見せつける、うるさくて、私のやうな貧乏人はかへつて恐縮する。日射が机上の半分までさすやうになつた、それだけ秋が深まつてくるのである。——おゝ井戸の水があるぞ、と大人も子供も歓喜の声をあげた、旱魃が訓へた人間の叫びである、どうやらこれで水饑饉も助かつたやうだ。このごろこのあたりも死ぬる病人が多い、昨日は三人も死にましたと聞かされた、みんな私よりも若い人達だ。……午後便で、“層雲”と“小さき者”と到着、層雲を手にすると、武二君の苦心を察しる、小さき者を読んでは微笑した、天地のかため男女のちぎりはおもしろかつた。夕方、矢島さん来訪、何となく労れてゐられるやうに見える、大事にしたまへ、ほんたうに。晩酌一杯、もう一杯ほしいのをぐつと抑へた、大出来々々々。アルコールなしでは生きてゐられない自分をあはれむ。酒として味ふべし、アルコールとして飲むべからず。酒は飲まして貰へるが、飯はなか／＼食はしてくれない、皮肉な事実である。今日は近来にない多作だつた、多作な割合に自信が持てた、とにかく精進々々。うまく睡れた、それもうれしい。

自嘲一句酒飲めば涙ながるるおろかな秋ぞ

・貧乏は物そのもののねうちを解らせてくれる。　そして物そのもののあぢはひをも。　稲さま、ありがたい言葉である。・私共はお天道様の光と親の光で育ちました、——と前の家の小母さんが誰かと話してゐたが、今だつてさうである。・私が貧乏してゐるので、おまけに病気で働けないので、お天道様が水だけは涸らさないで下さる、——と前の家の小父さんの皮肉見たいな挨拶、なるほど、近所の井戸は涸れて、人々が貰ひに来るほどよい水が絶えないのである。

九月十九日　曇——晴。

何となく沈欝、黙々として。——私は深く考へそして強く生きなければならない。まつたく無一文になつた、最後の一銭ではマツチを買つた。屑屋来い来い、空罎売ろう。無相君より来書、いつもかはらぬ真情流露のもの、それにしてもみゆきさんの軽快（全快とは、私としては、いひきれない）を祈つてやまない。今日は米が足りないからお粥にして食べた、何といふ大きな、そして消化のよい胃袋だらう！夕方から山口散策、下井田君を訪ねて、新聞を読み月おくれの新日本を借りて帰る。今夜はうそ寒い、一杯やりたいな、ゼイタクをいふな！そのうちにいつしか眠つてしまつた。

・つら／＼生き物の世界を観ずるに、およそこざかしきものは人間なり。・そも／＼銭といふものは、——あゝあゝ。

九月二十日　小雨——曇。

今朝は早くから水腹で歩いて小郡へ出かけるつもりだつたが、すこし寝すごしたし雨も降つてゐるので中止。まことに秋は反省思索の季節、自分が自分に還る時であることを身心に於て痛感する。食べるものがないから食べない、時々は絶食もわるくない、わざ／＼断食する人も少なくないではないか（その効験も著しい）。断食は身心清掃工作だ。そゞろに寒い、浴衣をかさねる。一文なしではどうにもならないので、破羽織を持つて山口の質屋まで出かけたが、私はそこで冷笑され拒絶された、私はそのまゝ帰つて来た、途中も帰宅後も考へつゞけた。——私は侮辱されたが、反省して、改悟の念をより深く深める

ことが出来た、これは動いて動かない心の一端を実現したのである、転一歩であり、そして進一歩だ。恥を知らないのではない、恥は恥として痛切に感じてゐる、恥ぢ入るがゆえに、抗がはないで守るのである、恥を生かすのである。身心澄徹、いはゞ明鏡止水の境地、よろこぶべし。水を飲んではしづかに読書、ひもじかつたけれどやすらかであつた。澄太君の温情を無にして申訳ないけれど、私はしばらく旅立てさうもない、むしろ此際かたづくだけ身のまはりをかたづけることにする、そして安心して旅立つことにしよう。悠々として雲を観た、空々寂々の風を逍遙した。

山頭火は山頭火であれば足る、山頭火は山頭火として生きぬけ、それがほんたうの道である。

九月廿一日　曇、時々雨――晴、好晴、彼岸入。

朝霧、それは私自身のやうにも。沈静、おちついて読書。午前ちよいと散歩、下井田君の宅に寄つて新聞を読み、ハガキを貰つて澄太君へ旅立延期を詫びる、心苦しかつた。腹が空つて、それで歩くので、さすがに私も少々へこたれた。水よりもあたゝかいものが飲みたくなつたので、湯を沸かして、茶はないから塩を入れてすゝる、うまかつた、さつぱりした。気まぐれ日和、私とても同様に。――午后また歩く、句を拾うてうれしかつた。散歩のついでに上田君を訪ねる、恥をおさへて事情を話して少しばかり借りる、ほんに快く貸して貰つてありがたかつた。上田君は若いけれど濶達だ、光栄あれ。まづ何よりも一杯、そして一服。……さつそく御飯を炊いて腹いつぱい食べた、そしてまた／＼散歩、しかし散歩は散歩でも午前と午后とは気分が違ふ！あゝ三日ぶりの御飯！　その白さ、そのあたゝかさ、あゝ、その味は貧乏しないと、餓えたものでないと、たうてい解るまい、涙がこぼれる味だ！絶食二日、つらいよりもせつなかつた、断食ならばさうではあるまい。餓に自責が伴うから二倍の苦しさとなるのである。食べたいだけ食べた気持は、――のんびり、ゆつくり、がつかり、ぐつすり、だつた！

今日の買物　　┌半杯┐一金十五銭　酒｜
｜　└半杯┘一金五銭　はぎ一金二銭　マツチ一金四

十銭　米一升一金六銭　　ハガキ一金十銭　　イリコ　　　合計金七十八銭也┐一金十銭　　醤油二合　│　　┌ちようど┐一金四銭　　菜葉　　　│1,00│いつぱい│一金八銭　　なでしこ　│　　└だつた┘　　　合計金二十二銭也┘一金四十弐銭　酒一金八銭　　タバコ一金四十銭　米一金五銭　　茄子一金十銭　　　魚　　　合計金壱円五銭也

・半杯＋半杯＝一杯！

九月廿三日　秋晴。

三日ぶりの朝湯だつた、やゝ寒いほどのこゝろよさ。正身端坐、遙拝黙祷。買物がてら散歩、とうたう図書館まで行つてしまつた。ほうれん草二把四銭、茹でたら一握りしかない、おいしかつた、ことしは菜葉が乏しい、したがつて高い、菜葉のありがたさが身にしみる。午后、矢島ちよつと挨拶して通過。向ひの老人、県会議員選挙の依頼状を貰つたのがうれしいと見えて、出かけて来て、何とかかんとか自慢らしい話。終日秋風、ひえ／″＼としてよろし。つゝましくすなほな——さびしいけれどなごやかな一日だつた、好日の中の好日だつた。

季節のうつりかはり、それにもまして、私は人間のうつりかはりを感じないではゐられない。この二三ヶ月間に於ける私のかはりやう、周囲のうつりやうはどうだ！私もやうやくにして私自身にかへることができた、どんなことがあつても、びくともしないおちつきを持つやうになつた。君は君の道を進みたまへ、私は私の道をたどる、それが人生だ。大道はまつすぐに通じてゐる、そしてあらゆる道を摂めて貫く、その道が正しいかぎりは。

九月廿三日　快晴。

なか／＼寒い、水道の水のぬくさよ。胡麻塩をこしらえる、こしらえるうちに二句を得た。午前中散歩、図書館まで、途上二句拾ふ。市役所から私のうちへまでも選挙権係が来られた、御苦労さん。秋日のつよさよ、何もかもすぐかわいてしまう。午後、藤井さん久しぶりに来訪、あいかはらずの愚痴話。何ヶ月ぶりかでやつと層雲句稿をまとめて送る、安心。

ゆふべはまた散歩、長谷さんを訪ねて文芸九月号を借りる。今夜はおもしろい読物があつて助かつた。いやな夢を見た、酒と女と友との夢だつたが。——

九月廿四日　晴。

秋季皇霊祭、すなはち彼岸の中日。行楽日和、学校には運動会が開かれ、山野には子供を連れてのハイカーが多い。悪夢の断片をさらりと朝湯に流し、閉ぢ籠つて読書三昧、多少の沈欝気味。朝飯は食べないで——食べるものがなくなつたから——塩茶二三杯、身心清掃工作としてわるくない。待つものがある、なか／＼来ない。午前図書館まで散歩。午后また山口へ、恥づべき方法で当面の生活費を捻出した、恥づかしかつたが、現在の私としては、それを敢てしたことに理由がないでもない、少くとも三つの理由がある、だが自己弁護することはよろしくない、私は好まないからこゝには書くまい。金借道中、世相人相いろ／＼さま／″＼だ、村田君に邂逅してちよつと話す、金缺病の話をして笑つた、一杯ひつかけた、それからまた一杯、今日の一杯は許して下さい、二杯はよくなかつたが、ほんたうに熟睡した、アルコールのおかげだらう。

九月廿五日　晴れたり曇つたり。

沈静、朝湯の中で私は私の極楽を感じた。Ｓから来信、ありがたう／＼、さつそく払ふ買ふ。山口へ散歩、ついでに理髪、さつぱりした。昼食、小鰯の酢漬、酒三合、私はまた私の極楽を感じた。午后、小郡へ、樹明君は来客でゆつくり話せなかつたが、暮羊君から夕飯の御馳走になつた、久し振りの学校飯、おいしかつた。八時帰居、それから飲んだ、そしておとなしく寝た。私はだん／＼偏狭になるらしい、私は酔中の私を信ずることが出来ない、あはれ／＼！

九月廿六日　晴。

昨夜の今朝、時雨だよ、一浴一杯。山口まで散歩、方々に寄つて暇乞する。よい月夜だつた。

100　宇100　矢100　伊100　矢050　中150　改300　豊150　林020　中　　　（1070）040　樹045　ナ（品）（11,550）080　ナ

(品) 040　F　　　(11,750) 100　な080　長　　　(14,550)
050　〔本〕　(15,050) 100　上　　　(16,050) 150　〔本〕
(17,550) 10,000　　　　　18,550

第37章
最近の感想　(新字新仮名)

　現時の俳壇に対して望ましい事は多々あるが、最も望ましい事の一つは理解ある俳論の出現である。かつて島村抱月氏は情理をつくした批評ということを説かれた。それとおなじ意味に於て、私は『情理をつくした俳論』を要望する。　合しても離れても、また讃するにしても貶するにしても、すべてが理解の上に立っていなければならない。個々の心は或は傾向を異にし道程を異にするであろう。しかしながら、それらはすべて真実から出発していなければならない。　評者の心は作者の心にまで分け入らなければならない。広い正しい心は毒舌や先入見や一時の感情を超絶する。つつましやかにしてしかも力強く、あたたかにしてしかも権威ある批判は、魂と魂、真実と真実とが接触するところから生まれる。私は人間本来の声――その声に根ざした俳論を熱求して居る。

　季題論が繰り返される毎に、私は一味の寂しさを感じないでは居られない。ただ季題という概念肯定のために――むしろ季題という言葉の存在のために、多くの論議が浪費されつつあるではないか。もしも季題というものが俳句の根本要素であるならば、季題研究は全然因襲的雰囲気から脱離して、更に更に根本的に取扱われなければならない。　私は季題論を読むとき、季題という言葉よりも自然という言葉を使用する方がより多く妥当であり適切であると思う。

　俳句を止めるとか止めないとかいう人が時々ある。何という薄っぺらな心境であろう。止めようと思って止められるような俳句であるならば、止めまいと思うても止んでしまうような俳句であるならば、それはまことの詩ではない。止めるとか止めないとか、好きとか嫌いとかいうようなことを超越したところに、まことの詩としての俳句存

在の理由がある。自我発現乃至価値創造の要求を離れて句作の意義はない。

直接的表現を云々する態度は間接的態度である。現実味と真実味とを区分したり、人生味と自然味と優劣を争うたりする境地を脱していない。考うべき問題はもっと奥にある。　第一義の問題をそのままにして置いて第二義第三義の問題に没頭するとき、俳壇は堕落するばかりである。

一切の事象は内部化されなければならない。内部化されて初めて価値を持つ。　生命ある作品とは必然性を有する作品である。必然性は人間性のどん底にある。　詩人は自発的でなければならない。価値の創造者でなければならない。　新らしい俳人はまず人間として苦しまなければならない。苦しみ、苦しみ、苦しみぬいた人間のみが詩人である。——（九、二六、夜）——（「樹」大正五年十一月号）

第38章
雑記　(新字新仮名)

　私には私らしい、庵には庵らしいお正月が来た。明けましてまずはおめでとうございます、とおよろこびを申しあげる。門松や輪飾りはめんどうくさいから止めにして、裏山から歯朶を五六本折ってきて瓶に挿した。それだけで十分だった。

歯朶活けて五十二の春を迎へた

　お屠蘇は緑平老から、数の子は元寛坊から、餅は樹明居から頂戴した。

　元日、とうぜんとしていたら、鴉が来て啼いた。皮肉な年始客である。即吟一句を与えて追っ払った。

お正月のからすかあかあ

　樹明君和して曰く、

かあかあからすがふたつ

　このふたつがうれしい、二羽といわないところにかぎりないしたしみがある。さて、このふたつが啼いてどこまで飛んだやら！

　今年の私は山村庵居のよろこびに添えて、二つの望みがある。好きなものは、と訊かれたら、些の躊躇なしに、旅と酒と本、と私は答える。今年はその本を読みたい。まず俳書大系を通読したいと思う。これが一つの望み、そしてその二つは、酒から茶へ転換することである。いいかえればアルコールを揚棄したい、飲まずにはいられない酒を、飲んでもよい酒としたいのです。前者は訳なく実現されましょうが、後者は自分ながらあぶない。そこでまあ出来るだけ割引し

て、せめて酒に茶をまぜたいと念じている（そんな無分別な考を起すなという悪友もある。じっさい、私にもそんな気がしないでもないのですが）。　本集を発送したら、久しぶりに行乞の旅に出かけるつもりです。時々行乞しないと米塩にも困りますが、それよりも人間が我儘になって困ります。どの方角へ向うかは、まだ私自身にもはっきりしていません。どこでもよいのですから、半月ばかり、そこらあたりをぶらついてきましょう。

　畑作はなかなかおもしろい。ほとんど自給自足が出来る。　ほうれんそうはたくさん播いた割合にはよくないが、新菊はよかった。ちしゃはすばらしく葉をひろげて、たべてもたべてもたべきれない。大根は根よりも葉が出来て、これでは大根という代りに大葉とよびたいほどです。菜は間引いてからぐんぐん伸びた。それを洗って干して漬ける。ひとりしみじみ噛みしめていると、ついほろりとする。このほろりが解りますか。

　たべきれないちしやの葉が雨をためてゐるけさはけさのほうれんさうのおしたし霜の大根ぬいてきてお汁ができた

　こんな句がいくらでも出来ます。畑作よりも句作の方がまだ上手だという評判です。

　会費について二三照会せられた方がありますから、ざっくばらんにここへ書き添えて置きます。あれはまず米一升というところで、二十五銭としましたが、それに拘泥するには及びません。それより多くても、また少くてもかまいません（タダでは困りますけれど）。私の生活は伸縮自在、化方に通じています。金があればあるように、なければないようにやってゆきます。

　急にお寒くなりました。夜更けて物思いにふけっていると、裏の畑で狐が鳴きます。狐もさびしいのでしょう。　諸兄の平安を祈ります。（一、一六、夜）（「三八九」第五集）

第39章
雑信(新字新仮名)

　新年句会には失敬しました、あれほど堅く約束していた事ですから、私自身は必ず出席するつもりでしたけれど、好事魔多しとやらで、飛んでもない邪魔が這入って、ああいうぐうたらを仕出来しました、何とも彼とも言訳の申上様もありません、ただただ恐縮の外ありません、新年早※ぐうたらの発揮なんぞは自分で自分に愛想が尽きます、といったところで、ぐうたらは何処まで行ってもぐうたら、何時になってもぐうたらで、それは私の皮膚の色が黒いのとおなじく、私の性であります、私自身さえ何うする事も出来ません、有体に白状しますれば私は我と我が身を持ち倦んでいるのです、丁度、気の弱い母親が駄々ッ児の独り息子を持て余していますように、

我に小さう籠るに耳は眼はなくも　　　泥田の田螺幸もあるらむ

　突然ですが、少しく事情があって当分の間、俳句、単に俳句のみならず一切の文芸に遠ざかりたいと思います、随って名残惜しくも、皆様と袖を分たねばなりません、今年は子の年ですから、仁木の鼠みたいに、また出直して来るつもりではありますが、一応お別れします、色々御厄介になりました、皆様、御機嫌よう。

毒ありて活く生命にや河豚汁　　　　　　　　一月十八日午前十時　　　　　　　　　　　　　田螺公　謹んで申す

（椋鳥会五句集『河豚』明治四十五年一月）

第40章
雑信(新字新仮名)

△今朝、思いがけなく本集をうけとりました。前集ほど振っていないという評には誰も異議はありますまい。句が総じてダレています。無理に拵えたらしい痕跡があります。△私は此度もまた出句することが出来ませんでした。自分は出句もしないで、こういう勝手な文句を並べる——実は済まない、不都合千万だと思います。併し詮方がありません。私には今の処どうしても句が作れません。句作の余裕——句材があってもそれを句として発表するだけの心のユトリがありません。私は此頃非常に心身が動揺しています。それがために殆んど家業をも省みないほどの慌しい押し詰った生活を続けています。どうぞ私を赦して下さい。そしてもう少し考えさして下さい。△五句集の組織について色々の御意見がありますが、それによって五句集に対する諸君の熱心な真面目な態度が窺われて私は至極喜んで居ります。自から省みて自分の腑甲斐なさを責めずにはいられません。発奮せずにはいられません。△私は私だけの意見をチョッと述べて置きます。石花菜君の説には賛成ですが、今は其時期であるまいと思います。やっぱり碧松君のいわれるように本五句集は本五句集として今迄通りの経路を進んでゆくのがよかろうと思います。一言にして尽せば私は現状維持論者です。△一転しつつある私は懐疑に生きて居ります。私は俳句其物に就て諸君の御高見を承りたいと切望しています。句の巧拙とか優劣とかいうこと以外にまた句材とか句法とかいうものについて御経験を示して戴きたいと思います。そして時々『何故我々は句作するか』という疑問を提出して考えたり論じたりするのは一面非常に無知な、そして一面非常に意味あることだろうと信じて居ります。

△　△　△

△華やかな春にあこがれていられる石花菜君の若々しい感情を祝福する。緑大野にそそり立つ樫樹のような碧松君の堅実な歩調を尊敬する。そして折からの凩に嚏をしたり苦笑したりする破口栓君の心持に同情する。私は三君とりどりの態度に動かされた。私もまた私の一部を暴露したい。荒んで石塊のように硬張った私の感情を少しばかり披露したい。あの大道芸人が群衆の前にその醜い髯面をさらすように！△私にも春があった。青い花を求め探した、黄ろい酒を飲み歩いた。赤い燃ゆるような唇を吸った。強烈なもの、斬新なもの、身も心も蕩けてしまうようなもの、熱愛する恋人を弄り殺して剖き取った肉のようなものを貪ぼった——実人生を芸術化しようとして悶え苦しんだ、悶え苦しんで何を得た？　あゝたゞアルコール中毒！△自己批評は三人の私生児を生んだ。自棄生活、隠遁生活、そして自己破壊。私はそのいずれと結婚したか。……

深い穴がある。冷たい風が吹く。誰やら歩いてくる——灰色の靄の奥から、トボ／＼と歩いてくる。誰だ！シツカリしろ！ビク／＼するな、急げ、急げ、愚図々々せずに急いで来い！危ない、気を付けろ！穴がある、深い穴がある、暗い穴がある。落ちるぞ、いつそ飛び込め！——あ、彼は——私はヅドンと倒れた※

△人生には解決がない。ただ解決らしいものが一つある。それは死だ！　と誰やらが叫んだ。然かも死そのものを信じえない人にとっては死もまた解決らしくさえない！△人生とは矛盾の別名である。矛盾に根ざして咲いた悪の華、それが芸術だと信じていた。今でもそう信じている。と同時に芸術はどうしても道楽という気がして仕方がない。現実の苦痛に泣笑しつつ都々逸でも唄いたくなる。情ない、あさましいと思うけれど、事実は飽くまでも事実である。△放浪によりてえたる貧しき収穫より——旧作□

美しき人を泣かして酒飲みて調子ばづれのステヽコ踊る旅籠屋の二階にまろび一枚の新聞よみて一夜をあかす酒飲めど酔ひえぬ人はたゞ一人欄干つかみて遠き雲みる酔覚の水飲む如く一人に足らひうる身は嬉しからまし

△　△　△

△先日の句会では愉快でした。持病の饒舌で諸君を煩わしたことを謝します。そして破口栓君に私はあれだけ饒舌ってもまだ饒舌り足らなかったことを伝えて置きます。最後に檳郎君にお詑します。私は本紙を七枚ばかり破棄しました。実は今夜妙に興奮していたので、筆に任せて書き続けて、さて読みかえして見ると、あまり下らない事ばかり並べているので、すまないとは思いましたけれど、そのままにして置いて同人諸君の気持を悪くするよりはましだと考えたので引き裂いて反古籠へ投り込みました。△巡回編集としての小俳紙発行のことは漣月君からも訪問をし訪問をうけた時承りましたが、雑誌編集はなかなか困難で永続は難かろうと思いましたから、しかとした返事は致しませんでした。このことについては兼てより熟考しましたが私は巡回編集よりは寧ろ単独編集の方が永続しようと思います。二三者の手に依って単独に編集されては如何です。△歌集、大賛成です。賛成……と意気込んでも作ることは出来ません、が作り得る様になりたいのです。十四五の頃は一寸熱中して少年界などへも投書したことがありましたが此の所は遠ざかっていますのでてんで御話になりませんが是非御仲間に入れて戴きとうございます。歌集には賛成者も多い様ですから早速に編集したいものです。編集者を誰れや彼れやと云うと暇取りますから甚だ失礼ですが最初一二度私が編集しましょう（五句集の体裁で）、早速ですが左記に依り御投書を願います。（編集其他の事項に就ては近々回章を出します。――田螺公）

五首ずつ集

最近作二月末日〆切　五首

（題□□□）

佐波郡三田尻駅前浴永不泣子宛

（椋鳥会『初凪』　大正二年一月）

第41章
三八九雑記　(新字新仮名)

なんとなく春めいてきた、土鼠がもりあげた土くれにも春を感じる。

水のいろも春めいたいもりいつぴき

私もこのごろはあまりくよくよしないようになった。それはアキラメでもなければナゲヤリでもない、むろんサトリでもない、いわば、老のオチツキでもあろうか。　近眼と遠眼とがこんがらがってきたように、或は悠然として、或は茫然として、山を空を土を眺めることができるようになった。放心！　凝心もよいが放心もわるくないと思う。　おかげで、この冬はこだわりなく生きてきた。春になったら春風が吹くでしょう。

終日尋春不見春　　杖藜踏破幾重雲帰来拭把梅花看　　春在枝頭已十分

その梅はもう盛りをすぎたけれど、あちらこちらにしろじろと立っている。裏畑の三本、前の家の二本、いずれも老木、満開のころは、一人で観るのにもったいないほどであった。　道べりの二三本、これは若木だが、すこし行くと、ここにも一本、そこにも一本というぐあいで、なかなかのながめであった。こんなところもあったのかと驚くぐらい、花をつけてはじめて、その存在をはっきりさせている。

咲いてここにも梅の木があつた

ここ矢足は椿の里とよばずにはいられないほど藪椿が多い（前のＦ家の生垣はすべて椿である）。　ぶらぶら歩いていると、ぽとりぽとり、いつ咲いたのか、頭上ゆたかに、素朴な情熱の花がかがやいて

いる。

　水音の藪椿もう落ちてゐる

　　水仙がおくれてやたらに咲きだした。先住者が好きだったのだろう、畑のあちこちにかたまりあって、清純たぐいなき色香を見せている。そんなわけで、仏壇も水仙、床の間も水仙、机の上も水仙です（この花にはさびしいおもいでがあるが、ここには書くまい）。

　水仙こちらむいてみんなひらいた

　　大根と新菊とはおしまいになった。ほうれんそうがだんだんとよくなった。こやし——それも自給自足——をうんと与えたためだろう。ちさはあいかわらず元気百パア、私も食気百パアというところ。　畑地はずいぶん広い、とても全部へは手が届かないし、またそうする必要もない、その三分の二は雑草に委任、いや失地回復させてある。

　よう燃える火で私ひとりで大きな雪がふりだして一人いたづらに寒うしてよごれた手もう暮れたか火でも焚かうかいちにち花がこぼれてひとり雪あしたあるだけの米を粥にしてをくひとりの火の燃えさかりゆくを

　　これらの句は、日記に記しただけで、たいがい捨てたのですが、わざとここに発表して、そしてこの発表を契機として、私はいわゆる孤独趣味、独りよがり、貧乏臭、等、を清算する、これも身心整理の一端です。樹明君にお嬢さんが恵まれた。本集所載の連作には、夫として父としての真実が樹明的手法で表現されている。　私は貧交ただ駄作を贈って、およろこびのこころを伝える外なかった。

　雪となつたが生れたさうな（第六感で）雪や山茶花や娘がうまれた雪ふるあしたの女としてうまれてきた

　　私には女の子を持った体験はないけれど（白船君にはありすぎる！）、お嬢さんが日本女性としての全人となられることを祈願してやみません。

　　今年はよく雪が降りましたね、雪見酒は樹明君と二人でやりまし

た。雪見にころぶところまで出かけました。

　燗は焚火でふたりの夜

　　節分には樹明君に誘われて、八幡様へのこのこおまいりいたしました。或るおじいさんのところで、鯨肉をよばれて年越らしい情調にひたりました。

　月がまうへに年越の鐘が鳴る鳴る

　　本集の発行はだいぶおくれました。私のワガママとグウタラとのせいであります。何しろ何から何まで私の手一つでやらなければなりませんので、しかも私は気分屋なので、とかくおくれがちになりますが、あしからず思って下さい。そこでまず、原稿整理を月の中旬に、そして下旬に発行ということに定めておきます。　とにかく、次集からはしっかりやりましょう。

　　長崎市から発行されていた自由律句誌『枇杷』が休刊のやむなきに立ちいたったのはまことに惜しいことであるが、編輯者が揚言せられるように、その収獲と功績とは決して小でないと思う。一日も早く復活再刊の日が来ることを祈ります。　広島逓友の大山澄太氏から『青空を戴く』を戴いた。氏へは層雲を通して親しみを持っていたが、こうしてまとめられた文と句とをしみじみ読み味わって、氏の純情と敬虔とにうたれた。青空を戴く！　この題名が何よりもよく氏の性格と本の内容とを語っている。

　　あかね社の新井声風氏著『明治以降物故新派俳人伝』第壱輯の寄贈を受けて、当然出るべきものが出たことを喜ぶと共に著者の労を考えた。そして書中に、朱鱗洞葉平の名を見出して、懐旧の情を新たにした。

　『松』を毎号贈って下さる浜松の同人諸君に感謝する。同時に『紅』『リンゴ』『一茶』等の同人諸君に御礼を申しあげる。　本集には、草木塔続篇及酒についての覚書を書くつもりでいて、どうにも気がすすみませんので止めました。これからは私も書きますから、諸兄も書いて下さい。

　春は長い煙管を持つて

——（二、二七、夜）——（「三八九」第六集）

第42章
四国遍路日記　(新字新仮名)

十一月一日　晴、行程七里、もみぢ屋という宿に泊る。

——有明月のうつくしさ。今朝はいよいよ出発、更始一新、転一歩のたしかな一歩を踏み出さなければならない。七時出立、徳島へ向う（先夜の苦しさを考え味わいつつ）。このあたりは水郷である、吉野川の支流がゆるやかに流れ、蘆荻が見わたすかぎり風に靡いている、水に沿うて水を眺めながら歩いて行く。宮島という部落へまいって十郎兵衛の遺跡を見た、道筋を訊ねたら嘘を教えてくれた人がある、悪意からではなかろうけれど、旅人に同情がなさすぎる。発動汽船で別宮川を渡して貰う、大河らしく濁流滔々として流れている（渡船賃は市営なので無料）。徳島は通りぬける、ずいぶん急いだけれど道程はなかなか捗らない、日が落ちてから、籏島（義経上陸地といわれる）のほとりの宿に泊った。八十歳近い老爺一人で営業しているらしいが、この老爺なかなか曲者らしい、嫌な人間である、調度も賄も悪くて、私をして旅のわびしさせつなさを感ぜしめるに十分であった！（皮肉的に表現すれば草紅葉のよさの一端もない宿だった！）今日は興亜奉公日、第二回目、恥ずかしいことだが、私はちょっぴりアルコールを摂取して旅情をまぎらした。同宿四人、修業遍路二人、巡礼母子二人、何だかごみごみごてごてして寝覚勝な夜であった。

（十一月一日）

旅空ほつかりと朝月がある夜をこめておちつけない葦の葉ずれのちかづく山の、とほざかる山の雑木紅葉の落葉吹きまくる風のよろよろあるく秋の山山ひきずる地下足袋のやぶれお山のぼりくだり何かおとしたやうな

十一月二日　快晴、行程八里、星越山麓、あさひや。

早起早立、まっしぐらにいそぐ、第十八番恩山寺遥拝、第十九番立江寺拝登。野良で野良働きの人々がお弁当を食べている、私も食べる、わがままをつつしむべし。飴玉をしゃぶりつついくつかの村を過ぎる、福井（鉄道の終点）というところで、一杯ひっかける、つかれがうすらいだ、山路になる、雑木山の今日この頃は美しい、鉦打で泊ろうと思ったけれど泊めてくれない、また歩きつづけて峠の下で泊めて貰う、まったくの山村だが、電話もあればラジオもある、宿は可もなし不可もなしだった、相客は老同行、話し合っているうちに同県人だったので、何となくなつかしかった、好感の持てるおじいさんだった。今夜も風呂なし（昨夜も）、水で身体を拭いたが肌寒を感じた。

十一月三日　晴、行程八里、牟岐、長尾屋。

老同行と同道して、いつもより早く出発した。峠三里、平地みたいになだらかだったけれど、ずいぶん長い坂であった、話相手があるので退屈しなかった、老同行とは日和佐町の入口で別れた（おじいさん、どうぞお大切に）。第二十三番薬王寺拝登、仏殿庫裡もがっちりしている、円山らしい、その山上からの眺望がよろしい、相生の樟の下で休憩した、日和佐という港街はよさそうな場所である。途中、どこかで手拭をおとして、そしてそのために一句ひろった、ふかしいもを買って食べ食べ歩いた、飯ばかりの飯も食べた、自分で自分の胃袋のでかいのに呆れる。途中、すこし行乞、いそいだけれど牟岐へ辿り着いたのは夕方だった。よい宿が見つかってうれしかった、おじいさんは好々爺、おばあさんはしんせつでこまめで、好きな人柄で、夜具も賄もよかった、部屋は古びてむさくるしかったが、風呂に入れて貰ったのもうれしかった、三日ぶりのつかれを流すことが出来た。御飯前、一杯ひっかけずにはいられないので、数町も遠い酒店まで出かけた、酒好き酒飲みの心裡は酒好き酒飲みでないと、とうてい解るまい、おそくなって、おばあさんへんろが二人ころげこんできた、あまりしゃべるので、同宿の不動老人がぶつくさいっていた。

（十一月三日）

山家ひそかにもひたき

明治節

山の学校けふはよき日の旗をあげもみづる山の家あれば旗日の旗よい連れがあつて雑木もみぢやひよ鳥や旗日の旗は立てて村はとかくおるすがち村はるすがちの柿赤し山みち暮れいそぐりんだうこんなに草の実どこの草の実（改）しぐるるあしあとをたどりゆくトンネル吹きぬける風の葉がちるしぐれてぬれて旅ごろもしぼつてはゆくしぐれてぬれてまつかな柿もろたしぐるるほどは波の音たかく大魚籠さかさまにしぐれてゐる濡れてはたらくめうとなかよくしぐれて人が海をみてゐる

十一月四日　雨、風、行程六里、甲ノ浦、三福屋。

雨中出立、そして雨中行乞（今日、牟岐町で、初めて行乞らしく行乞した）、雨が本降りになった、風が強く吹きだした、――八坂八浜を行くのである、風雨のすきまから長汀曲浦を眺めつつ急ぐ、鯖大師堂に参詣する、風で笠を吹きとばされ、眼鏡もとんでしまって閉口していたら、通りがかりの小学生が拾ってくれた、ありがとうありがとう、雨いよいよしげく、風ますますすさぶ、奥鞆町で泊るより外なくなったが、どの宿屋でも泊めてくれない、ままよとばかり濡れ鼠のようになって歩きつづける、途中どうにもやりきれなくなり、道べりの倉庫の蔭で休んだ、着物をしぼったりお昼をたべたり、二時間ばかりは動けなかった。どしゃぶり！　まったくそうだった、そしてそれを吹きまくる烈風、雨が横さまに簾のようになってそそいだ、私は天からたたきつけられたように感じた、むしろ痛快だった。暮れちかく宍喰町まで来たには来たが、また泊れない、ようやく甲ノ浦まで来て、ようやく泊めて貰うことが出来た、ありがたかった、よい宿でもあってうれしかった、同宿に気むつかしい病人がいていやだったが。　宿のおばさんがお祭の御馳走のお裾分だといって、お鮨を一皿おせったいして下さった、おいしかった、私も今夜は二杯傾けた。……

野宿いろ／＼

波音おだやかな夢のふるさと秋風こんやも星空のました落葉しいて寝るよりほかない山のうつくしさ生きの身のいのちかなしく月澄みわたる

いつぞやの野宿を

わがいのちをはるもよろし大空を仰げば月の澄みわたるなり

留置郵便はうれしいありがたい

秋のたより一ト束おつかけてゐた波音の松風の秋の雨かな歩るくほかない秋の雨ふりつのる

十一月五日　快晴、行程五里、佐喜浜、樫尾屋。

すっきり霽れあがって、昨日の時化は夢のように、四時に起きて六時立つ。今日の道はよかった、すばらしかった（昨日の道もまた）。山よ海よ空よと呼かけたいようだった。波音、小鳥、水、何もかもありがたかった。太平洋と昇る日！途中時々行乞。お遍路さんが日にまし数多くなってくる、よい墓地があり、よい橋があり、よい神社があり、よい岩石があった。……おべんとうはとても景色のよいところでいただいた、松の木のかげで、散松葉の上で、石蕗の花の中で、大海を見おろして。ごろごろ浜のごろごろ石、まるいまるい、波に磨かれ磨かれた石だ。早いけれど、佐喜浜の素人宿ともいいたいような宿に泊った、浜はお祭、みんな騒いでいる、今夜も私は二杯傾けた！　一室一人で一燈を独占した、おかげで日記をだいぶ整理することが出来た。行乞の功徳、昨日は銭四銭米四合、今日は銭二銭米五合、宿銭はどこでも木賃三十銭米五合代二十銭、米を持っていないと五十銭払わなければならない。行乞のむつかしさ、私はすっかり行乞の自信をなくしてしまった、行乞はつらいかな、やるせないかな。

（牟岐、長尾屋）　　（甲ノ浦、三福屋）

夜　菜葉、芋　　　　菜葉

塩鰯　　　　　　　　煮魚唐辛佃煮　　　　菜漬

朝　味噌汁　　　　　味噌汁

×唐辛佃煮　　　×菜漬

菜漬

（×印をお弁当に入れる）

（十一月五日、室戸岬へ）

おほらかにおしよせて白波

ごろごろ浜

水もころころ山から海へ

銃後風景

おぢいさんおばあさん炭を焼いてゐる旅はほろほろ月が出た旅のからだをぽりぽり掻いてゐる病みて旅人いつもニンニクたべてゐる

（室戸）

わだつみをまへにわがおべんたうまづしけれどもあらなみの石蕗の花ざかり松はかたむいてあら波のくだけるまゝ蔦がからまりもみづりて電信棒われいまここに海の青さのかぎりなし秋ふかく分け入るほどはあざみの花墓二つ三つ大樟のかげ落葉あたたかく噛みしめる御飯のひかりいちにち物いはず波音

野宿さま／″＼

こんやはひとり波音につつまれて食べて寝て月がさしいる岩穴枯草ぬくう寝るとする蠅もきてゐる月夜あかるい舟があつてそのなかで寝る泊るところがないどかりと暮れたすすき原まつぱだかになつて虱をとるかうまでよりすがる蠅をうたうとするか水あり飲めばおいしく洗ふによろしく波音そのかみの悲劇のあと

太平洋に面して

ぼうぼうちよせてわれをうつ

現実直前の力。

大地を踏みしめ踏みしめて歩け！

十一月六日　曇、時雨、晴、行程六里、室戸町、原屋。

朝すこしばかりしぐれた、七時出立、行乞二時間、銭四銭米四合あまり功徳を戴いた、行乞相は悪くなかったと思う、海ぞいに室戸岬へ

いそぐ、途上、奇岩怪石がしばしば足をとどめさせる、椎名隧道は額画のようであった、そこで飯行李を開く、私もまた額画の一部分となった訳である。室戸岬の突端に立ったのは三時頃であったろう、室戸岬は真に大観である、限りなき大空、果しなき大洋、雑木山、大小の岩石、なんぼ眺めても飽かない、眺めれば眺めるほどその大きさが解ってくる、……ここにも大師の行水池、苦行窟などがある、草刈婆さんがわざわざ亀の池まで連れて行ってくれたが亀はあらわれなかった、婆さん御苦労さま有難う。山の上に第二十四番の札所東寺がある、堂塔はさほどでないが景勝第一を占めている、そこで、私は思いがけなく小犬に咬みつかれた、何でもないことだが寺の人々は心配したらしい、私はさっさと山を下った、私としてこれを機縁として、更に強く更に深く自己を反省しなければならない。麓の津呂で泊るつもりだったけれど泊れなかった（断られたり、留守だったりして）、とうとう室戸の本町まで歩いて、やっと最後の宿のおかみさんに無理に泊めて貰った、もうとっぷり暮れていたのである。片隅で無燈、一杯機嫌で早寝した（風呂があってよかった）。

（十一月六日）“室戸岬”へ

波音しぐれて晴れたあらうみとどろ稲は枯れてゐるかくれたりあらはれたり岩と波と岩とのあそび海鳴そぞろ別れて遠い人をおもふゆふべは寒い猫の子鳴いて戻つたあら海せまる蘭竹のみだれやう

東寺

うちぬけて秋ふかい山の波音

土佐海岸

松の木松の木としぐれてくる

十一月七日　秋晴、行程四里、羽根泊（小松屋）。

早起、津寺拝登、行乞三時間、十時ごろからそろそろ西へ歩く——（銭十六銭米八合）。途中、西寺遥拝（すみません）、不動岩の裏で、太平洋を眺めながら、すこし早いが、お弁当を食べる、容樹の葉を数枚摘む。松原がつづく、海も空も日本晴、秋——日本の秋、道そいの畑には豌豆がだいぶ伸びている、浜おもとがよく茂っている、

南国らしい、今日は数人のおへんろさんと行き逢ったが、紅白粉をつけた尼さんは珍らしかった、何だか道化役者めいていた、このあたりには薄化粧した女はめったに見あたらないのに。喜良川の松原で、行きずりの老遍路夫婦と暫らく話した、何となしに考えさせられる事実である、三里あまり歩いて来て、羽根、その街はずれの宿——屋号が書き出してない——家に泊った、木賃宿としては新らしい造作で、待遇も悪くない、部屋も井戸端も風呂も、そして便所も広々として明るくて、うれしかった、なかなかよい宿であった。今日は三時前の早泊り、先夜昨夜に懲りたから。清流まで出かけて、肌着や腰巻を洗濯する、顔も手も足も洗い清めた、いわば旅の禊である、こらえきれなくて一杯ひっかける、高いと思うたけれど、漬物を貰い新聞（幾日ぶりか！）を読ましてくれたから、やっぱり高くはなかった、明日は明日の風が吹こう、今日は今日の風に任せる、……好日好事だった、ありがたしありがたし。夜はおそくまで執筆（一室一人一燈のよさだ）、昨夜をとりかえしたような気がした。先日から地下足袋が破れて、そのために左の足を痛めて困っていたところ、運よくゴム長靴の一方が捨ててあるのを見つけた、それを裂いて足袋底に代用したので助かった、——求むるものは与えらるということ、必要は発明の母という語句を思いだしたことである。寒い地方の人がまろい、いいかえると、温かい地方の人間は人柄がよくない、お修行しても寒いところの方がよく貰えると或る修行遍路さんが話した、一面の道理があるようだ。行乞していると、今更のように出征の標札——その種類はいろいろある、地方によって時節によって異るが——その標札が多いのに気がつく、三枚も並べてあるのにはおのずから頭がさがる。……

安宿では——木賃宿では——遍路宿では——

□一人一隅、そこに陣取って、それぞれの荷物を始末する。□めいめいのおはちを枕許に（人々の御飯）。□一室数人一鉢数人一燈数人。□安宿で困るのは、便所のきたなさ、食器のきたなさ、夜具のきたなさ、虱のきたなさ、等々であろう。○安宿に泊る人はたいがい真裸（大部分はそうである）である、虱がとりつくのを避けるためである、夏はともかく冬はその道の修行が積んでいないとなかなかである（もっとも九州の或る地方のようにそういう慣習があるところの人々

は別として）。

（夕食）　　　　　　　　　　（朝食）

莢豆と芋との煮付　　　　味噌汁二杯南瓜の煮付　　　　　　　大根漬大根浅漬

御飯もお茶もたっぷり　　たっぷり

犬二題

□四国の犬で遍路に吠えたてるとは認識不足だ、犬の敵性。□昨日は犬に咬みつかれて考えさせられ、今日は犬になつかれて困った、どちらも似たような茶色の小犬だったが。□“しぐるるや犬と向き合つてゐる”

四国をまわっていて、気のつくのは空家が多いことである、ベタベタビラを張られた空家が見すぼらしく沿道に立ちならんでいる！阿波の着倒れ、土佐の食い倒れ、というそうな。阿波では飲食店、土佐では酒を売る店が多すぎる！土佐は南国暖国、秋のおわりに、豆苗が伸び、胡瓜がたくさんぶらさがっている、よい国だ。今度、四国を巡遊して、道路がよくなっていることを感じたが、橋梁が至るところに新らしく美しいのを観た。米が二度出来るのは安芸郡——この地方である、伊尾木は殊に温暖で収穫も多いらしい。

（十一月七日）

草の実こんなにどこの草の実ここで泊らう草の実払ふ牛は花野につながれておのれの円をゑがく

途上即事

ついてくる犬よおまへも宿なしか石ころそのまま墓にしてある松のよろしさ旅で果てることもほんに秋空ほろほろほろびゆくわたくしの秋一握の米をいただきいただいてまいにちの旅

“自適集”

十一月八日　晴——曇、行乞六里、伊尾木橋畔、日の出屋で。

五時前に眼が覚めた、満天の星のひかりである、家人の起きるまで読んだり書いたりする。ゆっくりして七時すぎてから立つ、ところどころ行乞、羽根附近の海岸風景もわるくない。奈半利貯木場、巨材が積み重ねてある、見事なものだ、奈半利町行乞、町に活気がないだけそれだけ功徳も少なかった、土佐日記那波の泊の史蹟である。奈半利川を渡ると田野町、浜口雄幸先生の邸宅があると標札が出ている、それから安田町、神の峯遥拝、恥じないではいられない、大山岬、狭いけれどよい風光である、澄太君を考えたのは自然であろう。四時頃、都合よく伊尾木で宿につけた、同宿は同行一人、おばさんはよい人柄である、風呂も沸かしてもらえた、今日こそはアルコールなし、宿に米一升渡して、不足十二銭払ったら、剰すところ銭九銭米二合だけなり。今日の功徳は米六合と銭六銭だった、よく食べよく寝た、終夜水声。同行さんから、餅やら蜜柑やらお菜やら頂戴した、感謝々々。

（十一月八日）

木の実おちてゐる拾ふべしあとになりさきになりおへんろさんのたれかれ

（野食）

秋あたたかく蠅も蚊もあつまつて短日暮れかかる笠のおもさよ脚のいたさも海は空は日本晴秋もをはりの蠅となりはひあるく仲がよくないぢいさんばあさん夜が長く

十一月九日　曇――雨、行程三里、和食松原、恵比須屋。

四時半起床、雲ってはいるが降ってはいない、助かった！　という感じである、おばあさんが起きるまで日記をつける、散歩する、身心平静、近来にないおちつき、七時前出発、橋を二つ渡るとすぐ安芸町、午前中行乞、かなり長い街筋である、行乞しおえると雨になった、雨中を三里あまり歩いて和食町、教えられた宿――町はずれの、松林の中のゑびすやにおちつく、ほんによい宿であった、きれいでしんせつでしずかで、そしてまじめで、――名勝、和食の松原、名産、和食笠。夕方、はだしで五丁も十丁も出かけて、一杯ひっかけて（何といううまさ！）、ずぶぬれになった、御苦労々々々。晩食後、同宿

の行商老人と共に宿の主人から轟神社の神事について聞かされた、どこでもたれでもお国自慢は旅の好話題というべしである。今日は大降りだった、とある路傍のお宮で雨やどりしていると田舎のおかみさん二人もやってきた、その会話がおもしろい、言葉がよく解らないけれど、腰巻の話、おやじの話、息子の話。今日の功徳はめずらしくも、銭二十八銭、米九合余。

（夕食）　　　（朝食）

菜葉おひたし　そうめん汁　米一升渡そうめん　　　いりこ　　　　内五合は飯梅ショウガ　　梅干　　　　不足金

十三銭也

（十一月九日）

水音明けてくる長い橋をわたる朝の橋をわたるより乞ひはじめる朝のひかりただよへばうたふもの

高知へ

日に日に近うなる松原つづく

　十一月十日　晴、朝寒、行程八里、高知山西。

——よう降った、夜明けまで降りつづいたが、朝はからりと晴れわたって、星がさえざえと光っていた、——助かったと思う、幸福々々（宿もよかった、ほとんど申分なかった）。七時出立、松原がよろしい、お弁当のおもいのもうれしかった、赤岡町まで二里半、途中行乞（功徳は銭七銭米六合）。午後はひたすら高知へ強行した、申訳ないけれど、第二十八番、第二十九番は遥拝で許していただく、風が出て来たが、ほどなく凪いで、のどかな小春日和になった、御免からは路面舗装、身も心も軽い、思いかけなく、電車から降りた母子の方から拾銭玉を頂戴した（この十銭が私を野宿から助けてくれた！）。いそいだけれど暮れて高知着、まず郵便局で郵便物を受取った、いろいろ受取ったけれど、期待したものはなかった、がっかりした、お札所横の山西屋に泊る、名を売っているだけ客扱もよく客人も多い、おいしい御飯をたべ風呂に入って、ぐったり寝た、アルコールなし。米八合

渡して（内五合は飯米）不足金二十銭払った。

┌米八合渡　内五合は飯米┐└金十三銭払　　　　　　　┘

（夕食）　　　　　　（朝食）

焼魚　　　　　　　　味噌汁二杯菜葉ひたし　　　　削節沢庵漬　　　　　　　たくあん二片

さしみ　　　　　　　味噌汁二椀蓮の煮付　　　　　菜葉の煮たの漬物　　　　　　　　漬物

金がある時は金のない時を考えないけれど、金のない時は金のある時を考える、……私たちのようなものの痛いところだ。かけだし夫婦はすぐ解る！　と宿の人々がいう、なるほど、そうだで。

落日いろいろ

大洋、都市、田園、山中。

（十一月十日）

墓地はしづかなおべんたうをひらく梅干あざやかな飯粒ひかる

行乞即事

あなもたいなやお手手のお米こぼれますまぶしくもわが入る山に日も入つた

高知城

お城晴れわたる蔦紅葉銅像おごそか落つる葉もなく

土佐路所見

重荷おもけど人がひく犬がひく

十一月十一日　晴、滞在。

七時――十二時、市内行乞（米四合、銭五十五銭）。人さまざま世さまざま、同室四人、みなへんろさん、私もその一人。身心のむなしさを感じる。高知城観覧、その下でお弁当をひらく、虱をとる、帰宿して一杯、そして一浴、鬚を剃った、ぽかぽか――ぼうぼう。――

十一月十二日　よき晴れ、滞在。

八時から十一時まで行乞、銭四十七銭米八合。高知はやっぱり四国の都会、おせったいの意味で、みかん、かし、いも……をいただくことが多い、午後は曇る、降ったら困るな、一杯ひっかける！夜は市街を散歩する、明日の行乞場所を視察しておく、歩いても歩いても何を視ても何を視てもなぐさまない。

十一月十三日　晴、滞在。

晴れてありがたかった、へんろの旅には何よりもお天気がありがたい、うすら寒い。八時——十一時行乞、いやでいやでたまらないけれど、食べて泊るほどいただくまで、——三時まで行乞、かろうじて銭三十四銭米五合、頂戴して帰る、一杯頂戴してほっとする。……同宿同室一人ふえる、若い易者だ、なかなかのリクツヤらしい。——銭一銭米一合残っているだけだ！

ひなたまぶしく飯ばかりの飯をまぶしくしらみとりつくせない老木倒れたるままのひかげ

街のある日のあるところ

ハイヒールで葱ぶらさげて只今おかへり今日の太陽がまづ城のてつぺん道べり腰をおろして知らない顔ばかり旅のほこりをうちはらふ草のげつそり枯れた旅の旅路の何となくいそぐ

十一月十四日　晴——曇、滞在。

寒くなつた、冬が近づいたなと思う、沈欝やりどころなし、澄太君からも緑平老からも、また無相さんからも、どうしてたよりがないのだろう、覚悟して——というよりも、あきらめて——ままよ一杯、また一杯。……今日はよく辛棒した、七時——十一時、そしてまた十二時——二時、市内行乞、五十二銭の銭と八合の米を貰って帰って来た。毎夜、御詠歌の稽古が熱心につづけられる、御詠歌というものはいろいろの派があるけれど、所詮はほろりとさせられるところにそのいのちがある。銭はなくてもゆとりがある！

いろ／＼さま／″＼

木賃宿は、多くの人は御飯四合貰う（女は三合）、それを三度分にする人もあるし、二度で食べてしまう人も少くない、だいたい流浪者はお昼をぬかす二食が普通だ。私は五合食べる、大食の方だが、いつも三度に食べるのだから（お弁当を持って出るので）、あたりまえかも知れない、もっとも四国の宿の御飯は他の地方のそれよりも正確で、量が多いことは間違はない。

高知で眼についた看板二三——安めし、これは適切だ、安宿も適切（木賃宿は普通だが、簡易宿、経済宿はかえっておもしろくない）、かん安売、これはどうかと思う、かんは棺である。

十一月十五日　秋晴、滞在。

早起、身心軽快、誰も愉快そうだ、私も愉快にならざるをえないではないか。八時から十一時まで行乞、なぜだかいやでいやでたえがたくなって、河原に横ってお弁当を食べたり景色を観たりしても、気分がごまかせない、あちらこちらを無理に行乞して二時帰宿、一杯ひっかけた、財布に五銭、さんやに一合しかない、行こう行こう、明朝はどうでもこうでも出立しよう、絶食もよし、野宿もやむをえない、——放下着、こだわるな、こだわるな、とどこおりなく流れてゆく、——それが私の道ではないか！今朝、同室のおへんろさん二人出立、西へ東へ、御機嫌よう、御縁があったらまた逢いましょう。新客一人、野宿のお遍路さんらしい。——水のように、雲のように。——今日の功徳は銭三十三銭、米五合也、食べて泊って、そして一杯ひっかけて、煙草も買ったので、残るところは……心細いといえば心細い、その心細さで明日からは野に臥し山で寝なければならないだろう、三度の食事もあまりあてにはなるまい！

十一月十六日　晴——曇、行程八里、越智町、野宿。

暗いうちに起きたが出発は七時ちかくなった、思いあきらめて松山へいそぐ、——高知では甲斐なくも滞在しすぎた、さよなら、若い易者さんよ、老同行よ、さよなら高知よ。途中処々行乞、伊野町へ十一時着いて一時まで行乞（道中いそいだので老同行を追いぬいたのは恥ずかしかった、すまなかったと思う）、銭三十四銭米六合戴いた、仁淀川橋、土佐紙などが印象された。とっぷり暮れて越智町に入った

が、どの宿屋でも断られ、一杯元気で製材所の倉庫にもぐりこんで寝る、犬に嗅ぎ出されて困った、ろくろく睡れなかった、鼠に米袋をかじられた、——絶食野宿はつらいものである。

　　十一月十七日　曇——時雨、行程四里、川口在善根宿。

　おもわず寝すごして、のこのこ出かけるところを家人に見つけられたらしいが、何ともいわれなかった、お世話になりました。七時から十時まで越智町行乞、しぐれだしたがしぐれるままに行乞しつづけた（薯、餅、菓子、柿、密柑、——そのまま食べられるものが今朝はうれしかった、何しろ腹が空っては読経が出来ない！）、それから行けるところまで行く心がまえで。——午後は晴れた、風景よろし（寺村橋より殊に）、しみじみ山と水とを観た。川口行乞、伊野——越智——とつづいて行乞成績がよい、遍路街道でなく、そしてまた遍路も稀で、人情も信仰もあついものがある、今日の功徳は銭五十八銭米一升四合。野宿覚悟で川口の街はずれをいそいでいると川土手の下から呼びとめられた、遍路さんお米を売ってくれないかとおかみさんがいうのである、そこへ下りて行くと家といえば家のような小屋が二軒ある、一升買ってくれた、しかも四十二銭で、——竹籠を編んでいた主人公が、よかったら泊って行きなさい野宿よりましだろう、という、渡りに船で泊めて貰う、板張、筵敷、さんたんたる住居である、そして夫婦のあたたかい心はどうだ！（茶碗も数が足らなく蒲団も掛一枚きりだった）子供六人！　猫三匹、鶏数羽、老人、牛。……私はなけなしの財布から老人と主人とに酒を、妻君と子供に菓子を買ってあげて、まずしい、しかもおいしい夕飯をみんないっしょにいただいたことである。労れて、酔うて、ぐっすり寝た、瀬音も耳につかなかった。

　　十一月十八日　好晴、往復四里、おなじく。

　山のよろしさ、水のよろしさ、人のよろしさ、主人に教えられて、二里ちかく奥にある池川町へ出かけて行乞、九時から十二時まで、いろいろの点で、よい町であった（行きちがう小学生がお辞儀する）。行乞成績は銭七十九銭、米一升三合、もったいなかった（留守は多かったけれど、お通りは殆んどなかった、奥の町はよいかな）。渓谷

美、私の好きな山も水も存分に味った、野糞山糞、何と景色のよいこと！　三時には帰って来て、川で身心を清め、そして一杯すすった。明けおそく暮れ早い山峡の第二夜が来た、今夜は瀬音が耳について、いつまでも睡れなかった。宵月、そして星空、うつくしかった。

“谿谷美”“善根宿”“野宿”行乞しつつ、無言ではあるが私のよびかける言葉の一節、或る日或る家で——“おかみさんよ、足を洗うよりも心を洗いなさい、石敷を拭くよりも心を拭きなさい”“顔をうつくしくするよりもまず心をうつくしくしなさい”

（十一月十六日）（十一月十七日）（十一月十八日）

あなたの好きな山茶花の散つては咲く（或る友に）

野宿

わが手わが足われにあたたかく寝る夜の長さ夜どほし犬にほえられて寝ても覚めても夜が長い瀬の音

橋があると家がある崖の蔦紅葉山のするどさそこに昼月をおくびつしり唐黍ほしならべゆたかなかまへ岩ばしる水がたたへて青さ褉する山のしづけさはわが息くさく

十一月十九日　秋晴、行程七里。

落出の街はずれ大野大師堂でお通夜、ゆっくりして八時出立、それではどなたもごきげんよう、たいへんお世話になりました。……昨日の道よりも今日の道、山と水とがますますうつくしくなる、引地橋ほとりの眺望もよい、猿橋のほとりも（その街を十時から十一時まで行乞）、仁淀渓谷。秋の日は傾いたが、舟戸で泊れない、県界——両国橋——を越えていそぐ、西の谷でも泊れない、落出に来たが泊れない（宿屋という宿屋ではみな断られた、遍路はいっさい泊めないらしい）、詮方なしに一杯かたむける、その店の人に教えられて、街はずれの丘の上にある大師堂でお通夜した、戸があり茣蓙があって、なかなかよかった、お弁当の残りを食べ、飴玉をしゃぶりつつ、いつとなく眠った、夜もすがら渓声。宵のうちはアルコールの力で熟睡するが、明け方には眼が覚めて、夜の長いこと長いこと、水音たえずして、そしてしずけさ、さびしさ、昨夜のにぎやかで、うるさかったの

にくらべて、この寒さ、とにかく、この二三日は今まで知らないものを知った。

十一月二十日　晴、好晴、行程六里、久万町、札所下、とみや。

やっと夜が明けはじめた、いちめんの霧である、寒い寒い、手足が冷える（さすがに土佐は温かく伊予は寒いと思う）、瀬の音が高い、霧がうすらぐにつれて前面の山のよさがあらわれる、すぐそばの桜紅葉がほろほろ散りしく、焼香読経、冥想黙祷。そこへ村の信心老人――この堂の世話人らしい――が詣でで来て、何かと聞かされた、遍路にもいろいろあって、めったにはここに泊められないこと、お賽銭を盗んだり何かして困ること、幸にして私の正しさは認めて貰った。寒いけれど（川風が吹くので）八時から一時間ばかり行乞（銭二十八銭、米四合、途中も行乞しつつ）、それから久万へ、成川の流れ、山々の雑木紅葉、歩々の美観、路傍の家のおばあさんからふかし薯をたくさん頂戴した、さっそく朝食として半分、またの半分は昼食として、うまかった、うれしかった。三里ちかく来ると御三戸橋、ここから面河渓へ入る道が分れている、そこの巨大なる夫婦岩は奥地の風景の尋常でなかろうことを思わせるに十分である、私はひたむきに久万へ――松山へといそいだ。山がひらけるともう久万町だった、まだ日は落ちなかった、札所下の宿に泊ることが出来た、おばあさんなかなかの上手者、よい宿である、広くて深切で、そして。――五日ぶりの宿、五日ぶりの風呂！（よい宿のよい風呂）街まで出かけて、ちゃんぽんで二杯ひっかけた、甘露々々、そして極楽々々（宿へは米五合銭三十銭渡して安心）。同宿十数人、同室の同行（修行遍路）から田舎餅を御馳走になった、何ともいえない味だった、ありがとう。半夜熟睡、半夜執筆、今夜は夜の長いのも苦にならない。

（夕）　　（朝）

ぬた　　味噌汁大根おろし　豆の煮たの菜葉汁　煮〆漬物　漬物

（めずらしく精進料理）

（川口在）

黒味噌

（赤にあらず）

田舎には山羊を飼養している家が多い。山羊は一匹つながれて、おとなしく、さびしく草を食べたり鳴いたり、——何だか私も山羊のような！

（十一月二十日）（十一月十九日も）

つつましくも山畑三椏咲きそろひ岩が大きな岩がいちめんの蔦紅葉なんとまつかにもみづりて何の木銀杏ちるちる山羊はかなしげに水はみな瀧となり秋ふかしほんに小春のあたたかいてふてふ雑木紅葉を掃きよせて焚く

野宿

つめたう覚めてまぶしくも山は雑木紅葉

十一月二十一日

早起、すぐ上の四十四番に拝登する、老杉しんしんとして霧がふかい、よいお寺である。同宿の同行から餅を御馳走になったので、お賽銭を少々あげたら、また餅を頂戴した、田舎餅はうまい、近来にないおせったいであった、宿のおばさんからも月々の慣例として一銭いただいた。八時から九時まで久万町行乞、銭十三銭米二合、霧の中を二里ちかく歩いてゆくと三坂峠、手足の不自由な同行と道連れになり、ゆっくり歩く（鶏を拾った話はおかしかった）、遍路みちはあまり人通りがないと見えて落葉がふかい、桜の老木が枯れて立っている、椋の大樹がそそり立っている、峠が下りになったところでならんでお弁当を食べてから別れる、御機嫌よう。山が山に樹が樹に紅葉をひろげてうつくしさったらない、いそいで四十六番参拝、長い橋を渡って、森松駅から汽車で松山へ、立花駅から藤岡さんの宅へとびこんだのは六時頃だったろう、ほっと安心する。人のなさけにほごれて旅のつかれが一時に出た、ほろ酔きげんで道後温泉にひたる、理髪したので一層のうのうする、緑平老のおせったいで、坊ちゃんというおでんやで高等学校の学生さんを相手に酔いつぶれた！　それでも帰ることは帰って来た！奥さん、たいへんお手数をかけました、……のんべいの

あさましさを味う、……友情のありがたさを味う。

大宝寺

朝まゐりはわたくし一人の銀杏ちりしくお山は霧のしんしん大杉そそり立つ

へんろ宿

お客もあつたりなかつたりコスモス枯れ／″＼霧の中から霧の中へ人かげ雑木紅葉のかゞやくところでおべんたう秋風あるいてもあるいても

蓮月尼　宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花の下臥

十一月二十二日——二十六日　藤岡さんの宅にて。

ぼうぼうとして飲んだり食べたり寝たり起きたり。

晴れたり曇つたり酔うたり覚めたり秋はゆく

十一月二十七日　曇——晴、道後湯町、ちくぜんや。

朝酒をよばれて、しばらくのおわかれをする、へんろとなって道後へ、方々の宿で断られ、やっとこの宿におちつかせてもらう。洗濯、裁縫、執筆、読書、いそがしいいそがしい。

十一月二十八日——十二月二日

酔生夢死とはこんなにしていることだろうと思った、何も記す事がない、強いて記せば——三十日、高商に高橋さんを訪ねて久々で逢えた事、その夜来て下さって宿銭を保証して小遣を下さった事。しみじみ自分の無能を考えさせられた日夜がつづいたことである！

十二月三日　晴。

気分ややかろし、第五十七回の誕生日、自祝も自弔もあったものじゃない！　同室の青年に話していると、高橋さん来訪、同道して藤岡さん往訪。招かれて、夕方から高橋さんを訪う、令弟（茂夫さん）戦死し遺骨に回向する、生々死々去々来々、それでよろしいと思う。十時ごろ帰宿、酒がこころよくまわらないので、そしていろいろさま

ざまのことが考えられるので、いつまでもねつかれなかった。

　或る日

　なんとあたたかなしらみをとる

　十二月三日夜、一洵居、戦死せる高市茂夫氏の遺骨にぬかづいて

　供へまつる柿よ林檎よさんらんたりなむあみだぶつなむあみだぶつみあかしまたたく蝋涙いつとなく長い秋も更けてわかれていそぐ足音さむざむひなたしみじみ石ころのやうにさかのぼる秋ふかい水が渡れない

　或る老人

　ひなたぢつとして生きぬいてきたといつたやうな

　　十二月四日　曇。

　早起入浴、読んだり書いたりする。西へ東へ、或は南へ北へ、さようなら、ごきげんよう。昼飯をたべてから歩いて——電車賃もないので——市庁のホールへ、そこで茂夫さんの市葬が営まれた、護国居士、私はひたむきにぬかずく、歩いて五時帰宿、涙ぐましい一日だった。

　土と兵隊

　穂すすきひかるわれらはたたかふ

　　十二月五日　好晴。

　何となく身心不調、……何かなしにさびしい。終日終夜黙々不動。きのうもきょうもアルコールなし。省みて恥じ入る外なし。

　　十二月六日　晴。

　つめたい、霜がうっすら降っている（松山市内では初氷が張ったそうな）、冬も本格的になってきた。頭痛、何もかも重苦しいように感じる。朝食をすましてすぐ出かける、高橋さんの奥さんから少し借りる、局に藤岡さんを訪ねる、出張不在、一杯ひっかけて帰宿、入浴、臥床、妄想はてなし！夜、高橋さん来訪、その人にうたれる、私は

——私は、——ああああ——と長大息するのみ。今夜も不眠、いたずらに後悔しつづける。

　　十二月七日　小春日和。

　朝の一浴、そして一杯、ほんに小春だ！身辺整理、洗え洗え、捨てろ捨てろ。午後は近郊散策、道後グラウンドは荒廃している、常信寺はなかなかよい。夕方、高橋さんを訪ね、同道して義安寺へ参拝、高商の坐禅会に参加する。帰宿してまた一杯、また、……同宿同室は老人ばかり、しずかでさびしかった。

　　十二月八日　曇——晴。

　無能無力、無銭無悩。……　　……………………………………………………………………

　　十二月九日　晴。

　——山頭火はなまけもの也、わがままもの也、きまぐれもの也、虫に似たり、草の如し。午後近在散歩。

　　十二月十日

　おなじような日がまた一日過ぎていった。

　　十二月十一日　晴。

　高橋さんを訪う、同道して貸部屋探し、見つからない、途中、二神さんを訪う、初めて房子さんに会う。高橋さんから小遣を頂戴したので一二杯ひっかける。

　　十二月十二日　十三日

　十二日の未明、臨検があっただけ。…………………………

　　十二月十四日　晴。

　藤岡さんを局に訪ねて郵便物をうけとる、いずれもうれしいたよりであるが、とりわけ健からのはうれしかった、さっそく飲む、食べる、——久しぶりに酔っぱらった。夕方帰宿すると、留守に高橋さんが来訪されたそうである、新居の吉報を齎らして、——すみませんで

した。ぐっすり寝る、夢も悔もなし、こんとんとしてぼうぼうばくばくなり

十二月十五日　晴。

昨日の飲みすぎ食べすぎがたたっている、朝酒数杯でごまかす。午前、高橋さん来訪、厚情に甘えて、新居へ移った、御幸山麓、御幸寺の隠宅のような家屋、私には過ぎている、勿体ないような気がする。高橋さんがいろいろさまざまの物を持って来て下さる、すなおに受ける、ほんとうに感謝の言葉もない、蒲団、机、火鉢、鍋、七輪、バケツ、茶椀、箸、そして米、醤油、塩。昼食は街のおでんやで、夕食は高橋さんの宅で。——夜は高橋さんに連れられて安井さんを訪ねた、あるだけの酒をよばれる、揮毫したり、俳談したり、絵を観せてもらったりしているうちに、いつしか十時近くなったのでいそいで帰る、練兵場を横ぎりそこなって、うろうろしたけれど、さわりなく帰れた、そしてすぐ寝た。　……………………………………（ここで私は宿の妻君に改めて感謝しなければならない、まことによい宿であった、よい妻君であった、私はとうとう二十日近くも滞在してしまった（事情がそうさせたのであるが、宿がよくなかったならば、私はどこかへとびだしたであろう）。四国巡拝中の遍路宿で、もっとも居心地のよい宿と思う（もっとも木賃料は四十銭で、他地方よりも十銭高いけれど、道後の宿一般がそうなのである、それでも一日三食たべて六十五銭乃至七十銭）。夜の敷布上掛はいつも白々と洗濯してある、居間も便所も掃除が行き届いている、食事もよい、魚類、野菜、味噌汁、漬物、どれも料理が上手でたっぷりある、亭主は好人物にすぎないらしいが、妻君は口も八丁、手も八丁、なかなかの遣手だった。

十二月十五日　晴（重複するけれど改めて記述する）

とうとうその日——今日が来た、私はまさに転一歩するのである、そして新一歩しなければならないのである。一洵君に連れられて新居へ移って来た、御幸山麓御幸寺境内の隠宅である、高台で閑静で、家屋も土地も清らかである、山の景観も市街や山野の遠望も佳い。京間の六畳一室四畳半一室、厨房も便所もほどよくしてある、水は前の方

十間ばかりのところに汲揚ポンプがある、水質は悪くない、焚物は裏山から勝手に採るがよろしい、東々北向だから、まともに太陽が昇る（この頃は右に偏っているが）、月見には申分なかろう。東隣は新築の護国神社、西隣は古刹龍泰寺、松山銀座へ七丁位、道後温泉へは数町。知人としては真摯と温和とで心からいたわって下さる一洵君、物事を苦にしないで何かと庇護して下さる藤君、等々、そして君らの夫人。すべての点に於て、私の分には過ぎたる栖家である、私は感泣して、すなおにつつましく私の寝床をここにこしらえた。夕飯は一洵君の宅で頂戴し、それから同道して隣接の月村画伯を訪ね、おそくまで話し興じた。新居第一夜のねむりはやすらかだった。

新“風来居”の記

“無事心頭情自寂　無心事上境都如”（自警偈）

十二月十六日　（晴）

高橋さんの内へ行たり高橋さんが来たりで。……

第43章
述懐　(新字新仮名)

——私はその日その日の生活にも困っている。食うや食わずで昨日今日を送り迎えている。多分明日も——いや、死ぬるまではそうだろう。だが私は毎日毎夜句を作っている。飲み食いしないでも句を作ることは怠らない。いいかえると腹は空いていても句は出来るのである。水の流れるように句心は湧いて溢れるのだ。私にあっては生きるとは句作することである。句作即生活だ。　私の念願は二つ。ただ二つある。ほんとうの自分の句を作りあげることがその一つ。そして他の一つはころり往生である。病んでも長く苦しまないで、あれこれと厄介をかけないで、めでたい死を遂げたいのである。——私は心臓麻痺か脳溢血で無造作に往生すると信じている。　——私はいつ死んでもよい。いつ死んでも悔いない心がまえを持ちつづけている。——残念なことにはそれに対する用意が整うていないけれど。——　——無能無才。小心にして放縦。怠慢にして正直。あらゆる矛盾を蔵している私は恥ずかしいけれど、こうなるより外なかったのであろう。　意志の弱さ、貪の強さ——ああこれが私の致命傷だ！（「広島逓友」昭和十三年八月）

第44章
白い花　(新字新仮名)

私は木花よりも草花を愛する。春の花より秋の花が好きだ。西洋種はあまり好かない。野草を愛する。

家のまわりや山野渓谷を歩き廻って、見つかりしだい手あたり放題に雑草を摘んで来て、机上の壺に投げ入れて、それをしみじみ観賞するのである。　このごろの季節では、蓼、りんどう、コスモス、芒、石蕗、等々何でもよい、何でもよさを持っている。　草は壺に投げ入れたままで、そのままで何ともいえないポーズを表現する。なまじ手を入れると、入れれば入れるほど悪くなる。　抛入花はほんとうの抛げ入れでなければならない。そこに流派の見方や個人の一手が加えられると、それは抛入でなくて抛挿だ。　摘んで帰ってその草を壺に抛げ入れる。それだけでも草のいのちは歪められる。私はしばしばやはり「野におけ」の嘆息を洩らすのである。

人間の悩みは尽きない。私は堪えきれない場合にはよく酒を呷ったものである（今でもそういう悪癖がないとはいいきれないが）。酒はごまかす丈で救う力を持っていない。ごまかすことは安易だけれど、さらにまたごまかさなければならなくなる。そういう場合には諸君よ、山に登りましょう、林に分け入りましょう、野を歩きましょう、水のながれにそうて、私たちの身心がやすまるまで逍遥しましょうよ。

どうにもこうにも自分が自分を持てあますことがある。そのとき、露草の一茎がどんなに私をいたわってくれることか。私はソロモンの栄華と野の花のよそおいを対比して考察したりなんかしない。ソロモンの栄華は人間文化の一段階として、それはそれでよいではないか。野の花のよそおいは野の花のよそおいとして鑑賞せよ。　一茎草

を拈じて丈六の仏に化することもわるくないが、私は草の葉の一葉で足りる。足りるところに、私の愚が穏坐している。

死は誘惑する。生の仮面は脱ぎ捨てたくなるし、また脱ぎ捨てなければならないが、本当に生き抜くことのむずかしさよ。私は走り出て、そこらの芒の穂に触れる。……

若うして或は赤い花にあこがれ、或は「青い花」を求めあるいた。赤い花はしぼんでくずれた。青い花は見つからなかった。そして灰色の野原がつづいた。　けさ、萩にかくれて咲き残っている花茗荷をふと見つけた。人間の残忍な爪はその唯一をむしりとったのである。　葉や株のむくつけきに似もやらず、なんとその花の清楚なことよ、気高いかおりがあたりにただようて、私はしんとする。　見よ、むこうには茶の花が咲き続いているではないか。そうだったか——白い花だったか！

萩ちればコスモス咲いてそして茶の花も

（「愚を守る」初版本）

第45章
白い路　(新字新仮名)

　熟した果実がおのずから落ちるように、ほっかりと眼が覚めた。働けるだけ働いて、寝たいだけ寝た後の気分は、安らかさのうちに一味の空しさを含んでいる。……　妻はもう起きて台所をカタコト響かせている。その響が何となく寂しい。……寂しさを感じるようではいけないと思って、ガバと起きあがる。どんより曇って今にも降り出しそうだ。何だか嫌な、陰鬱な日である。凶事が落ちかかって来そうな気がして仕方がない。　急いで店の掃除をする。手と足とを出来るだけ動かす。とやかくするうちに飯の仕度が出来たので、親子三人が膳の前に並ぶ。暖かい飯の匂い、味噌汁の匂いが腹の底まで沁み込んで、不平も心配もいつとなく忘れてしまう。朝飯の前後は、私のようなものでも、いくらか善良な夫となり、慈愛ある父となる。そして世間で所謂 sweet home の雰囲気を少しばかり嗅ぐことが出来る！　今日は朝早くからお客さんが多い。店番をしながら、店頭装飾を改める。貧弱な商品を並べたり拡げたり、額縁を出したり入れたりする。自分の欠点が嫌というほど眼について腹立たしい気分になるので、気を取り直しては子と二人で、栗を焼いたり話したりする。久し振りに栗を食べた。なかなか甘い。故郷から贈ってくれたのだと思うと、そのなかに故郷の好きな味いと嫌な匂いとが潜んでいるようだ。　午後、妻子を玩具展覧会へ行かせる。久々で母子打連れて外出するので、いそいそとして嬉しそうに出て行く。その後姿を見送っているうちに、覚えずほろりとした。　下らない空想をはらいはらい、仕入の事や、店頭装飾の事を考える。——絵葉書とか額縁とか文学書とかいうものは、陳列の巧拙によって売れたり売れなかったりする場合が多い。同業者の一人が「我々の商品は売れるものでなくて売るものである」といったそうであるが、実に経験が生んだ至言である。米屋や日

用品店なぞと違って、いつも積極的に自動的に活動していなければならない。始終中、清新の気分を保っていなければならない。苦しい事も多い代りには、面白い事も多い。　二時間ばかり経って、妻子が帰って来た。子供が、陳列してある玩具を片端から買ってくれといって困ったという。まだ困った顔をしている。――滑稽な悲劇である。　夕方、駅から着荷の通知があった。在金一切掻き集めて、受取に行こうとしているところへ、折悪く納税貯金組合から集金に来た。詮方なしに駅行を止める。今日も亦、貧乏の切なさを味わせられた。――もうだいぶ慣れて、さほど痛切ではないけれど。――　厳密に論ずれば、貧乏は或る一つの罪悪であるかも知れない。しかし現在の社会制度に於ては――少くとも現在の私の境遇にあっては、それは恥ずべきことでもなければ誇るべきことでもない、不幸でもなければ幸福でもない、否、寧ろ幸福であるといえよう。私は「貧乏」によって、肉体的にさえも二つの幸福を与えられた。一つは禁酒であり、他の一つは飯を甘く食べることである。そして私は貧乏であることによって益々人間的になり得るらしく信じている。若し貧乏に哲学が在るとすれば、それは「微笑の哲学」でなければならない！　夜は早く妻に店番を譲って寝床へ這い込む。いつもの癖で、いろいろの幻影がちらつく。私の前には一筋の白い路がある、果てしなく続く一筋の白い路が、……（大正五年十一月廿七日の生活記録より）（「層雲」大正六年一月号）

第46章
草木塔　(新字旧仮名)

若うして死をいそぎたまへる母上の霊前に本書を供へまつる

鉢の子

大正十四年二月、いよいよ出家得度して、肥後の片田舎なる味取観音堂守となつたが、それはまことに山林独住の、しづかといへばしづかな、さびしいと思へばさびしい生活であつた。

松はみな枝垂れて南無観世音

松風に明け暮れの鐘撞いて

ひさしぶりに掃く垣根の花が咲いてゐる

大正十五年四月、解くすべもない惑ひを背負うて、行乞流転の旅に出た。

分け入つても分け入つても青い山

しとどに濡れてこれは道しるべの石

炎天をいただいて乞ひ歩く

放哉居士の作に和して

鴉啼いてわたしも一人

生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり（修証義）

生死の中の雪ふりしきる

木の葉散る歩きつめる

昭和二年三年、或は山陽道、或は山陰道、或は四国九州をあてもなくさまよふ。

踏みわける萩よすすきよ

この旅、果もない旅のつくつくぼうし

へうへうとして水を味ふ

落ちかかる月を観てゐるに一人

ひとりで蚊にくはれてゐる

投げだしてまだ陽のある脚

山の奥から繭負うて来た

笠にとんぼをとまらせてあるく

歩きつづける彼岸花咲きつづける

まつすぐな道でさみしい

だまつて今日の草鞋穿く

ほろほろ酔うて木の葉ふる

しぐるるや死なないでゐる

張りかへた障子のなかの一人

水に影ある旅人である

雪がふるふる雪見てをれば

しぐるるやしぐるる山へ歩み入る

食べるだけはいただいた雨となり

木の芽草の芽あるきつづける

生き残つたからだ掻いてゐる

昭和四年も五年もまた歩きつづけるより外なかつた。あなたこなたと九州地方を流浪したことである。

わかれきてつくつくぼうし

また見ることもない山が遠ざかる

こほろぎに鳴かれてばかり

れいろうとして水鳥はつるむ

百舌鳥啼いて身の捨てどころなし

どうしようもないわたしが歩いてゐる

涸れきつた川を渡る

ぶらさがつてゐる烏瓜は二つ

大観峰

すすきのひかりさえぎるものなし

分け入れば水音

すべつてころんで山がひつそり

昧々居

雨の山茶花の散るでもなく

しきりに落ちる大きい葉かな

けさもよい日の星一つ

すつかり枯れて豆となつてゐる

つかれた脚へとんぼとまつた

枯山飲むほどの水はありて

捨てきれない荷物のおもさまへうしろ

法衣こんなにやぶれて草の実

旅のかきおき書きかへておく

岩かげまさしく水が湧いてゐる

あの雲がおとした雨にぬれてゐる

ここに白髪を剃り落して去る

秋となつた雑草にすわる

こんなにうまい水があふれてゐる

年とれば故郷こひしいつくつくぼうし

岩が岩に薊咲かせてゐる

それでよろしい落葉を掃く

水音といつしよに里へ下りて来た

しみじみ食べる飯ばかりの飯である

まつたく雲がない笠をぬぎ

墓がならんでそこまで波がおしよせて

酔うてこほろぎと寝てゐたよ

味々居

また逢へた山茶花も咲いてゐる

雨だれの音も年とつた

見すぼらしい影とおもふに木の葉ふる

緑平居　二句

逢ひたい、捨炭山が見えだした

枝をさしのべてゐる冬木

物乞ふ家もなくなり山には雲

あるひは乞ふことをやめ山を観てゐる

述懐

笠も漏りだしたか

霜夜の寝床がどこかにあらう

熊本にて

安か安か寒か寒か雪雪

昭和六年、熊本に落ちつくべく努めたけれど、どうしても落ちつけなかつた。またもや旅から旅へ旅しつづけるばかりである。

自嘲

うしろすがたのしぐれてゆくか

鉄鉢の中へも霰

いつまで旅することの爪をきる

呼子港

朝凪の島を二つおく

大浦天主堂

冬雨の石階をのぼるサンタマリヤ

ほろりとぬけた歯ではある

寒い雲がいそぐ

ふるさとは遠くして木の芽

よい湯からよい月へ出た

はや芽吹く樹で啼いてゐる

笠へぽつとり椿だつた

しづかな道となりどくだみの芽

蕨がもう売られてゐる

朝からの騒音へ長い橋かかる

ここにおちつき草萌ゆる

いただいて足りて一人の箸をおく

しぐるる土をふみしめてゆく

秋風の石を拾ふ

今日の道のたんぽぽ咲いた

其中一人

雨ふるふるさとははだしであるく

くりやまで月かげの一人で

かるかやへかるかやのゆれてゐる

うつりきてお彼岸花の花ざかり

朝焼雨ふる大根まかう

草の実の露の、おちつかうとする

ゆふ空から柚子の一つをもらふ

茶の花のちるばかりちらしておく

いつしか明けてゐる茶の花

冬が来てゐる木ぎれ竹ぎれ

月が昇つて何を待つでもなく

ひとりの火の燃えさかりゆくを

お正月の鴉かあかあ

落葉の、水仙の芽かよ

あれこれ食べるものはあつて風の一日

水音しんじつおちつきました

茶の木も庵らしくひらいてはちり

誰か来さうな空が曇つてゐる枇杷の花

落葉ふる奥ふかく御仏を観る

雪空の最後の一つをもぐ

其中雪ふる一人として火を焚く

ぬくい日の、まだ食べるものはある

月かげのまんなかをもどる

雪へ雪ふるしづけさにをる

雪ふる一人一人ゆく

落葉あたたかうして藪柑子

茶の木にかこまれそこはかとないくらし

或る友に

月夜、手土産は米だつたか

あるけば蕗のとう

椿ひらいて墓がある

ひつそりかんとしてぺんぺん草の花ざかり

いちりん※の椿いちりん

音は朝から木の実をたべに来た鳥か

ぬいてもぬいても草の執着をぬく

もう暮れる火の燃え立つなり

人が来たよな枇杷の葉のおちるだけ

けふは蕗をつみ蕗をたべ

何とかしたい草の葉のそよげども

すずめをどるやたんぽぽちるや

もう明けさうな窓あけて青葉

ながい毛がしらが

こころすなほに御飯がふいた

てふてふうらからおもてへひらひら

やつぱり一人がよろしい雑草

けふもいちにち誰も来なかつたほうたる

すツぱだかへとんぼとまらうとするか

かさりこそり音させて鳴かぬ虫が来た

行乞途上

松風すずしく人も食べ馬も食べ

けふもいちにち風をあるいてきた

何が何やらみんな咲いてゐる

あるけばきんぽうげすわればきんぽうげ

あざみあざやかなあさのあめあがり

うつむいて石ころばかり

若葉のしづくで笠のしづくで

ほうたるこいこいふるさとにきた

お寺の竹の子竹になつた

松かぜ松かげ寝ころんで

明けてくる鎌をとぐ

ひとりきいてゐてきつつき

かたむいた月のふくろうとして

川棚温泉

花いばら、ここの土とならうよ

待つてゐるさくらんぼ熟れてゐる

山ふところのはだかとなり

山路はや萩を咲かせてゐる

ここにふたたび花いばら散つてゐる

朝の土から拾ふ

石をまつり水のわくところ

いそいでもどるかなかなかなかな

山のいちにち蟻もあるいてゐる

雲がいそいでよい月にする

朝は涼しい茗荷の子

いつも一人で赤とんぼ

旅の法衣がかわくまで雑草の風

川棚を去る

けふはおわかれの糸瓜がぶらり

ぬれるだけぬれてきたきんぽうげ

うごいてみのむしだつたよ

いちじくの葉かげあるおべんたうを持つてゐる

水をへだててをなごやの灯がまたたきだした

かすんでかさなつて山がふるさと

春風の鉢の子一つ

わがままきままな旅の雨にはぬれてゆく

帰庵

ひさびさもどれば筍によきによき

びつしより濡れて代掻く馬は叱られてばかり

はれたりふつたり青田になつた

草しげるそこは死人を焼くところ

朝露しつとり行きたい方へ行く

ほととぎすあすはあの山こえて行かう

笠をぬぎしみじみとぬれ

家を持たない秋がふかうなるばかり　行乞流転のはかなさであり独善孤調のわびしさである。私はあてもなく果もなくさまよひあるいてゐたが、人つひに孤ならず、欲しがつてゐた寝床はめぐまれた。　昭和七年九月二十日、私は故郷のほとりに私の其中庵を見つけて、そこに移り住むことが出来たのである。

曼珠沙華咲いてここがわたしの寝るところ

　私は酒が好きであり水もまた好きである。昨日までは酒が水よりも好きであつた。今日は酒が好きな程度に於て水も好きである。明日は水が酒よりも好きになるかも知れない。「鉢の子」には酒のやうな句（その醇不醇は別として）が多かつた。「其中一人」と「行乞途上」には酒のやうな句、水のやうな句がチヤンポンになつてゐる。これからは水のやうな句が多いやうにと念じてゐる。淡如水――それが私の境涯でなければならないから。（昭和八年十月十五日、其中庵にて　山頭火）

山行水行

山あれば山を観る雨の日は雨を聴く春夏秋冬あしたもよろしゆふべもよろし

炎天かくすところなく水のながれくる

日ざかりのお地蔵さまの顔がにこにこ

待つでも待たぬでもない雑草の月あかり

風の枯木をひろうてはあるく

向日葵や日ざかりの機械休ませてある

蚊帳へまともな月かげも誰か来さうな

糸瓜ぶらりと地べたへとどいた

夕立が洗つていつた茄子をもぐ

こほろぎよあすの米だけはある

まことお彼岸入の彼岸花

手がとどくいちじくのうれざま

おもひでは汐みちてくるふるさとのわたし場

しようしようとふる水をくむ

一つもいで御飯にしよう

ふと子のことを百舌鳥が啼く

山のあなたへお日さま見おくり御飯にする

昼もしづかな蠅が蠅たたきを知つてゐる

酔へなくなつたみじめさはこほろぎがなく

はだかではだかの子にたたかれてゐる

ほんによかつた夕立の水音がそこここ

やつと郵便が来てそれから熟柿のおちるだけ

散るは柿の葉咲くは茶の花ざかり

うれてはおちる実をひろふ

人を見送りひとりでかへるぬかるみ

月夜、あるだけの米をとぐ

空のふかさは落葉しづんでゐる水

石があれば草があれば枯れてゐる

お月さまが地蔵さまにお寒くなりました

水音のたえずしていばらの実

うしろから月のかげする水をわたる

しぐるる土に播いてゆく

或る若い友

落葉を踏んで来て恋人に逢つたなどといふ

ぽきりと折れて竹が竹のなか

月がうらへまはれば藪かげ

とぼしいくらしの屋根の雪とけてしたたる

ほいないわかれの暮れやすい月が十日ごろ

街は師走の八百屋の玉葱芽をふいた

ことしもこんやぎりのみぞれとなつた

なんといふ空がなごやかな柚子の二つ三つ

ここにかうしてわたしをおいてゐる冬夜

焚くだけの枯木はひろへた山が晴れてゐる

病めば鶲がそこらまで

よびかけられてふりかへつたが落葉林

雪へ足跡もがつちりとゆく

酒をたべてゐる山は枯れてゐる

しんみり雪ふる小鳥の愛情

遠山の雪も別れてしまつた人も

雪のあかるさが家いつぱいのしづけさ

藪柑子もさびしがりやの実がぽつちり

枯れてしまうて萩もすすきも濡れてゐる

椿のおちる水のながれる

寝ざめ雪ふる、さびしがるではないが

誰か来さうな雪がちらほら

ふくろうはふくろうでわたしはわたしでねむれない

汽車のひびきも夜明けらしい楢の葉の鳴る

月がうらへまはつても木かげ

枯れたすすきに日の照れば誰か来さうな

何もかも雑炊としてあたたかく

蓑虫もしづくする春が来たぞな

病みほほけて信濃より帰庵

草や木や生きて戻つて茂つてゐる

病みて一人の朝がゆふべとなりゆく青葉

柿の若葉のかがやく空を死なずにゐる

蜂がてふちよが草がなんぼでも咲いて

けさは水音も、よいたよりでもありさうな

いつもつながれてほえるほかない犬です

ほんにしづかな草の生えては咲く

生えて伸びて咲いてゐる幸福

閉めて一人の障子を虫が来てたたく

影もはつきりと若葉

ひよいと穴からとかげかよ

誰も来てくれない蕗の佃煮を煮る

千人風呂

ちんぽこもおそそも湧いてあふれる湯

うれしいこともかなしいことも草しげる

ひとりひつそり竹の子竹になる

山から山がのぞいて梅雨晴れ

朝からはだかでとんぼがとまる

食べる物はあつて酔ふ物もあつて雑草の雨

炎天のはてもなく蟻の行列

蜘蛛は網張る私は私を肯定する

いつでも死ねる草が咲いたり実つたり

日ざかり落ちる葉のいちまい

霽れててふてふ二つとなり三つとなり

青空したしくしんかんとして

ここにわたしがつくつくぼうしがいちにち

百合咲けばお地蔵さまにも百合の花

草にも風が出てきた豆腐も冷えただろ

風がすずしく吹きぬけるので蜂もとんぼも

ふるさとの水をのみ水をあび

ここを死に場所とし草のしげりにしげり

誰にあげよう糸瓜の水をとります

お彼岸のお彼岸花をみほとけに

彼岸花さくふるさとはお墓のあるばかり

秋風の、腹立ててゐるかまきりで

おちついて柿もうれてくる

重荷を負うてめくらである

つくつくぼうしあまりにちかくつくつくぼうし

柿の木のむかうから月が柿の木のうへ

寝床へ日がさす柿の葉や萱の穂や

何か足らないものがある落葉する

郵便屋さん

たより持つてきて熟柿たべて行く

百舌鳥のさけぶやその葉のちるや

樹明君に

うらから来てくれて草の実だらけ

ともかくも生かされてはゐる雑草の中

旅から旅へ

わかれてきた道がまつすぐ

月も水底に旅空がある

柳があつて柳屋といふ涼しい風

みんなたつしやでかぼちやの花も

夕立晴れるより山蟹の出てきてあそぶ

そこから青田のよい湯かげん

昼寝さめてどちらを見ても山

旅はいつしか秋めく山に霧のかかるさへ

よい宿でどちらも山で前は酒屋で

すわれば風がある秋の雑草

ここで寝るとする草の実のこぼれる

萩がすすきがけふのみち

白船居

うらに木が四五本あればつくつくぼうし

道がなくなり落葉しようとしてゐる

木の葉ふるふる鉢の子へも

柳ちるそこから乞ひはじめる

よい道がよい建物へ、焼場です

長門峡

いま写します紅葉が散ります

あるけば草の実すわれば草の実

春が来た水音の行けるところまで

梅もどき赤くて機嫌のよい目白頬白

春寒のをなごやのをなごが一銭持つて出てくれた

さて、どちらへ行かう風がふく

この道しかない春の雪ふる

けふはここまでの草鞋をぬぐ

石鴨荘

草山のしたしさは鶯も啼く

いつとなくさくらが咲いて逢うてはわかれる

橋畔亭

先生のあのころのことも楓の芽

樹が倒れてゐる腰をかける

津島同人に

おわかれの水鳥がういたりしづんだり

燕とびかふ旅から旅へ草鞋を穿く

名古屋同人に

もう逢へますまい木の芽のくもり

乞ひあるく水音のどこまでも

木曽路　三句

飲みたい水が音たててゐた

山ふかく蕗のとうなら咲いてゐる

山しづかなれば笠をぬぐ

飯田にて病む　二句

まこと山国の、山ばかりなる月の

あすはかへらうさくらちるちつてくる

　山行水行はサンコウスイコウとも或はまたサンギヨウスイギヨウとも読まれてかまはない。私にあつては、行くことが修することであり、歩くことが行ずることに外ならないからである。

　昨年の八月から今年の十月までの間に吐き捨てた句数は二千に近いであらう。その中から拾ひあげたのが三百句あまり、それをさらに選り分けて纏めたのが以上の百四十一句である。うたふもののよろこびは力いつぱいに自分の真実をうたふことである。この意味に於て、私は恥ぢることなしにそのよろこびをよろこびたいと思ふ。

あるけばきんぽうげすわればきんぽうげあるけば草の実すわれば草の実

　この二句は同型同曲である。どちらも行乞途上に於ける私の真実をうたつた作であるが、現在の私としては前句を捨てて後句を残すことにする。

私はやうやく『存在の世界』にかへつて来て帰家穏坐とでもいひたいここちがする。私は長い間さまようてゐた。からだがさまようてゐたばかりでなく、こころもさまようてゐた。在るべきものに苦しみ、在らずにはゐないものに悩まされてゐた。そしてやうやくにして、在るものにおちつくことができた。そこに私自身を見出したのである。　在るべきものも在らずにはゐないものもすべてが在るものの中に蔵されてゐる。在るものを知るときすべてを知るのである。私は在るべきものを捨てようとするのではない、在らずにはゐないものから逃れようとするのではない。『存在の世界』を再認識して再出発したい私の心がまへである。　うたふものの第一義はうたふことそのことでなければならない。私は詩として私自身を表現しなければならない。それこそ私のつとめであり同時に私のねがひである。（昭和九年の秋、其中庵にて　山頭火）

雑草風景

柿が赤くて住めば住まれる家の木として

みごもつてよろめいてこほろぎかよ

日かげいつか月かげとなり木のかげ

残された二つ三つが熟柿となる雲のゆきき

みんなではたらく刈田ひろびろ

誰も来ないとうがらし赤うなる

病めば梅ぼしのあかさ

なんぼう考へてもおんなじことの落葉ふみあるく

落葉ふかく水汲めば水の澄みやう

病中　二句

寝たり起きたり落葉する

ほつかり覚めてまうへの月を感じてゐる

月のあかるい水汲んでおく

白船老に

あなたを待つてゐる火のよう燃える

ちよいと茶店があつて空瓶に活けた菊

多賀治第二世の出生を祝して

お日様のぞくとすやすや寝顔

悔いるこころに日が照り小鳥来て啼くか

落葉ふんで豆腐やさんが来たので豆腐を

枯れゆく草のうつくしさにすわる

冬がまた来てまた歯がぬけることも

噛みしめる味も抜けさうな歯で

竹のよろしさは朝風のしづくしつつ

霽れて元日の水がたたへていつぱい

舫ひてここに正月の舳をならべ

枯木に鴉が、お正月もすみました

どこからともなく散つてくる木の葉の感傷

しぐれつつうつくしい草が身のまはり

ひつそり暮らせばみそさざい

ぶらりとさがつて雪ふる蓑虫

雪もよひ雪にならない工場地帯のけむり

あたたかなれば木かげ人かげ

住みなれて藪椿いつまでも咲き

あるがまま雑草として芽をふく

ぬくうてあるけば椿ぽたぽた

風がほどよく春めいた藪と藪

ほろにがさもふるさとの蕗のとう

ゆらいで梢もふくらんできたやうな

山から白い花を机に

ある日は人のこひしさも木の芽草の芽

人声のちかづいてくる木の芽あかるく

伸びるより咲いてゐる

草のそよげば何となく人を待つ

ひとりたがやせばうたふなり

花ぐもりの窓から煙突一本

ひつそり咲いて散ります

枇杷が枯れて枇杷が生えてひとりぐらし

照れば鳴いて曇れば鳴いて山羊がいつぴき

空へ若竹のなやみなし

身のまはりは草だらけみんな咲いてる

ころり寝ころべば青空

何を求める風の中ゆく

草を咲かせてそしててふちよをあそばせて

青葉の奥へなほ径があつて墓

それもよからう草が咲いてゐる

月がいつしかあかるくなればきりぎりす

木かげは風がある旅人どうし

日の光ちよろちよろとかげとかげ

月のあかるさがうらもおもてもきりぎりす

樹明君に

あんたが来てくれさうなころの風鈴

炎天の稗をぬく

てふてふもつれつつかげひなた

もう枯れる草の葉の雨となり

くづれる家のひそかにくづれるひぐらし

病中　五句

死んでしまへば雑草雨ふる

死をまへに涼しい風

風鈴の鳴るさへ死のしのびよる

おもひおくことはないゆふべの芋の葉ひらひら

傷が癒えゆく秋めいた風となつて吹く

秋風の水音の石をみがく

萩が径へまでたまたま人の来る

月へ萱の穂の伸びやう

旅はゆふかげの電信棒のつくつくぼうし

つきあたれば秋めく海でたたへてゐる

題して『雑草風景』といふ、それは其中庵風景であり、そしてまた山頭火風景である。　風景は風光とならなければならない。音が声となり、かたちがすがたとなり、にほひがかをりとなり、色が光となるやうに。

私は雑草的存在に過ぎないけれどそれで満ち足りてゐる。雑草は雑草として、生え伸び咲き実り、そして枯れてしまへばそれでよろしいのである。

　　或る時は澄み或る時は濁る。——澄んだり濁つたりする私であるが、澄んでも濁つても、私にあつては一句一句の身心脱落であることに間違ひはない。

　　此の一年間に於て私は十年老いたことを感じる（十年間に一年しか老いなかつたこともあつたやうに）。そして老来ますます惑ひの多いことを感じないではゐられない。かへりみて心の脆弱、句の貧困を恥ぢ入るばかりである。（昭和十年十二月二十日、遠い旅路をたどりつつ　山頭火）

柿の葉

昭和十年十二月六日、庵中独坐に堪へかねて旅立つ

水に雲かげもおちつかせないものがある

生野島無坪居

あたたかく草の枯れてゐるなり

旅は笹山の笹のそよぐのも

門司埠頭

春潮のテープちぎれてなほも手をふり

ばいかる丸にて

ふるさとはあの山なみの雪のかがやく

宝塚へ

春の雪ふる女はまことうつくしい

あてもない旅の袂草こんなにたまり

たたずめば風わたる空のとほくとほく

宇治平等院　三句

雲のゆききも栄華のあとの水ひかる

春風の扉ひらけば南無阿弥陀仏

うららかな鐘を撞かうよ

伊勢神宮

たふとさはましろなる鶏

魚眠洞君と共に

けふはここに来て枯葦いちめん

麦の穂のおもひでがないでもない

浜名湖

春の海のどこからともなく漕いでくる

鎌倉はよい松の木の月が出た

伊豆はあたたかく野宿によろしい波音も

また一枚ぬぎすてる旅から旅

ほつと月がある東京に来てゐる

花が葉になる東京よさようなら

甲信国境

行き暮れてなんとここらの水のうまさは

のんびり尿する草の芽だらけ

信濃路

あるけばかつこういそげばかつこう

からまつ落葉まどろめばふるさとの夢

江畔老に

浅間をまともにおべんたうは草の上にて

碓氷山中にて路を失ふ

山のふかさはみな芽吹く

国上山

青葉わけゆく良寛さまも行かしたろ

日本海岸

こころむなしくあらなみのよせてはかへし

砂丘にうづくまりけふも佐渡は見えない

荒海へ脚投げだして旅のあとさき

水底の雲もみちのくの空のさみだれ

あうたりわかれたりさみだるる

水音とほくちかくおのれをあゆます

毛越寺

草のしげるや礎石ところどころのたまり水

平泉

ここまでを来し水飲んで去る

永平寺　三句

水音のたえずして御仏とあり

てふてふひらひらいらかをこえた

法堂あけはなつ明けはなれてゐる

大阪道頓堀

みんなかへる家はあるゆふべのゆきき

更けると涼しい月がビルの間から

今日の足音のいちはやく橋をわたりくる

七月二十二日帰庵

ふたたびここに草もしげるまま

わたしひとりの音させてゐる

自責

酔ざめの風のかなしく吹きぬける

鴉啼いたとて誰も来てはくれない

山羊はかなしげに草は青く

つくつくぼうし鳴いてつくつくぼうし

降れば水音がある草の茂りやう

庵中独坐

こころおちつけば水の音

ひらひら蝶はうたへない

ぬれててふてふどこへゆく

大いに晴れわたり大根二葉

何おもふともなく柿の葉のおちることしきり

柚子の香のほのぼの遠い山なみ

にぎやかに柿をもいでゐる

千人風呂

はだかで話がはづみます

からむものがない蔓草の枯れてゐる

米とぐところみぞそばのいつとなく咲いて

墓場あたたかうしててふてふ

山ふところの、ことしもここにりんだうの花

けさは涼しいお粥をいただく

結婚したといふ子に

をとこべしをみなへしと咲きそろふべし

わかれて遠い人を、佃煮を、煮る

鎌をとぐ夕焼おだやかな

いつまで生きる曼珠沙華咲きだした

藪にいちにちの風がをさまると三日月

わたしと生れたことが秋ふかうなるわたし

歩くほかない草の実つけてもどるほかない

あたたかい白い飯が在る

ふつと影がかすめていつた風

風の明暗をたどる

立ちどまると水音のする方へ道

ほんのり咲いて水にうつり

草の咲けるを露のこぼるるを

吹きぬける秋風の吹きぬけるままに

やつと咲いて白い花だつた

落葉の濡れてかがやくを柿の落葉

悔いるこころの曼珠沙華燃ゆる

ふるさとの土の底から鉦たたき

月からひらり柿の葉

何を待つ日に日に落葉ふかうなる

涸れてくる水の澄みやう

草の枯るるにみそつちよ来たか

澄太おもへば柿の葉のおちるおちる

風は何よりさみしいとおもふすすきの穂

産んだまま死んでゐるかよかまきりよ

けふは凩のはがき一枚

草のうつくしさはしぐれつつしめやかな

洗へば大根いよいよ白し

しぐるる土をうちおこしては播く

自嘲

影もぼそぼそ夜ふけのわたしがたべてゐる

冬木の月あかり寝るとする

ひよいと芋が落ちてゐたので芋粥にする

しぐれしたしうお墓を洗つていつた

秋ふかい水をもらうてもどる

ひとりの火をつくる

生きてしづかな寒鮒もろた

草はうつくしい枯れざま

藁塚藁塚とあたたかし

樹明君に

落葉ふみくるその足音は知つてゐる

やつぱり一人はさみしい枯草

落葉してさらにしたしくおとなりの灯の

風の中からかあかあ鴉

葉の落ちて落ちる葉はない太陽

何事もない枯木雪ふる

ことしも暮れる火吹竹ふく

お正月が来るバケツは買へて水がいつぱい

昭和十二年元旦

今日から新らしいカレンダーの日の丸

自画像

ぼろ着て着ぶくれておめでたい顔で

あつまつてお正月の焚火してゐる

雪ふる食べるものはあつて雪ふる

みぞるる朝のよう燃える木に木をかさね

しみじみ生かされてゐることがほころび縫ふとき

いつも出てくる蕗のとう出てきてゐる

緑平老に

かうして生きてはゐる木の芽や草の芽や

雪ふれば酒買へば酒もあがつた

ひらくよりしづくする椿まつかな

てふてふうらうら天へ昇るか

自戒

一つあれば事足る鍋の米をとぐ

　柿の葉はうつくしい、若葉も青葉も——ことに落葉はうつくしい。濡れてかがやく柿の落葉に見入るとき、私は造化の妙にうたれるのである。

あるけば草の実すわれば草の実あるけばかつこういそげばかつこう

　そのどちらかを捨つべきであらうが、私としてはいづれにも捨てがたいものがある。昨年東北地方を旅して、郭公が多いのに驚きつつ

心ゆくまでその声を聴いた。信濃路では、生れて始めてその姿さへ観たのであつた。

やつぱり一人がよろしい雑草やつぱり一人はさみしい枯草

自己陶酔の感傷味を私自身もあきたらなく感じるけれど、個人句集では許されないでもあるまいと考へて敢て採録した。かうした私の心境は解つてもらへると信じてゐる。（昭和丁丑の夏、其中庵にて山頭火）

銃後

天われを殺さずして詩を作らしむわれ生きて詩を作らむわれみづからのまことなる詩を

街頭所見

日ざかりの千人針の一針づつ

月のあかるさはどこを爆撃してゐることか

秋もいよいよふかうなる日の丸へんぽん

ふたたびは踏むまい土を踏みしめて征く

しぐれて雲のちぎれゆく支那をおもふ

戦死者の家

ひつそりとして八ツ手花咲く

遺骨を迎ふ

しぐれつつしづかにも六百五十柱

もくもくとしてしぐるる白い函をまへに

山裾あたたかなここにうづめます

凩の日の丸二つ二人も出してゐる

冬ぼたんほつと勇ましいたよりがあつた

雪へ雪ふる戦ひはこれからだといふ

勝たねばならない大地いつせいに芽吹かうとする

遺骨を迎へて

いさましくもかなしくも白い函

街はおまつりお骨となつて帰られたか

遺骨を抱いて帰郷する父親

ぽろぽろしたたる汗がましろな函に

お骨声なく水のうへをゆく

その一片はふるさとの土となる秋

みんな出て征く山の青さのいよいよ青く

馬も召されておぢいさんおばあさん

ほまれの家

音は並んで日の丸はたたく

歓送

これが最後の日本の御飯を食べてゐる、汗

ぢつと瞳が瞳に喰ひ入る瞳

案山子もがつちり日の丸ふつてゐる

戦傷兵士

足は手は支那に残してふたたび日本に

孤寒

だまつてあそぶ鳥の一羽が花のなか

春風の蓑虫ひよいとのぞいた

ひよいとのぞいて蓑虫は鳴かない

もらうてもどるあたたかな水のこぼるるを

とんからとんから何織るうららか

ひなたはたのしく啼く鳥も啼かぬ鳥も

身のまはりはほしいままなる草の咲く

草の青さよはだしでもどる

草は咲くがままのてふてふ

藪から鍋へ筍いつぽん

ならんで竹の子竹になりつつ

窓にしたしく竹の子竹になる明け暮れ

風の中おのれを責めつつ歩く

われをしみじみ風が出て来て考へさせる

雷をまぢかに覚めてかしこまる

がちやがちやがちやがちや鳴くよりほかない

誰を待つとてゆふべは萩のしきりにこぼれ

声はまさしく月夜はたらく人人だ

雨ふればふるほどに石蕗の花

播きをへるとよい雨になる山のいろ

そこはかとなくそこら木の葉のちるやうに

ゆふべなごやかな親蜘蛛子蜘蛛

しんじつおちつけない草のかれがれ

しぐるるやあるだけの御飯よう炊けた

焼場水たまり雲をうつして寒く

死線　四句

死はひややかな空とほく雲のゆく

死をひしと唐辛まつかな

死のしづけさは晴れて葉のない木

そこに月を死のまへにおく

いつとなく机に塵が冬めく

草の実が袖にも裾にもあたたかな

枯すすき枯れつくしたる雪のふりつもる

水に放つや寒鮒みんな泳いでゐる

一つあると蕗のとう二つ三つ

蕗のとうことしもここに蕗のとう

わかれてからのまいにち雪ふる

母の四十七回忌

うどん供へて、母よ、わたくしもいただきまする

其中一人いつも一人の草萌ゆる

枯枝ぽきぽきおもふことなく

つるりとむげて葱の白さよ

鶲また一羽となればしきり啼く

なんとなくあるいて墓と墓との間

おのれにこもる藪椿咲いては落ち

春が来たいちはやく虫がやつて来た

啼いて二三羽春の鴉で

咳がやまない背中をたたく手がない

窓あけて窓いつぱいの春

しづけさ、竹の子みんな竹になつた

ひとり住めばあをあをとして草

朝焼夕焼食べるものがない

自嘲

初孫がうまれたさうな風鈴の鳴る

雨を受けて桶いつぱいの美しい水

飛んでいつぴき赤蛙

げんのしようこのおのれひそかな花と咲く

また一日がをはるとしてすこし夕焼けて

更に改作（昭和十五年二月）

草にすわり飯ばかりの飯をしみじみ

行乞途上（改作追加）

草にすわり飯ばかりの飯

旅心

葦の穂風の行きたい方へ行く

身にちかく水のながれくる

どこからともなく雲が出て来て秋の雲

飯のうまさが青い青い空

ごろりと草に、ふんどしかわいた

をなごやは夜がまだ明けない葉柳並木

秋風、行きたい方へ行けるところまで

ビルとビルとのすきまから見えて山の青さよ

朝の雨の石をしめすほど

行旅病死者

霜しろくころりと死んでゐる

老ルンペンと共に

草をしいておべんたう分けて食べて右左

朝のひかりへ蒔いておいて旅立つ

ちよいと渡してもらふ早春のさざなみ

なんとうまさうなものばかりがシヨウヰンドウ

宇平居

石に水を、春の夜にする

福沢先生旧邸

その土蔵はそのままに青木の実

ひつそり蕗のとうここで休まう

人に逢はなくなりてより山のてふてふ

ふつとふるさとのことが山椒の芽

どこでも死ねるからだで春風

たたへて春の水としあふれる

水をへだててをとことをなごと話が尽きない

旅人わたしもしばしいつしよに貝掘らう

うらうら蝶は死んでゐる

さくらまんかいにして刑務所

病院に多々桜君を見舞ふ

投げ※しは白桃の蕾とくとくひらけ

多々桜君の霊前にて

桃が実となり君すでに亡し

うららかにボタ山がボタ山に

湯田名所

大橋小橋ほうたるほたる

このみちをたどるほかない草のふかくも

妹の家

たまたまたづね来てその泰山木が咲いてゐて

泊ることにしてふるさとの葱坊主

ふるさとはちしやもみがうまいふるさとにゐる

うまれた家はあとかたもないほうたる

温柔郷裏の井子居

きぬぎぬの金魚が死んで浮いてゐる

華山山麓の友に

やうやくたづねあてててかなかな

孤寒といふ語は私としても好ましいとは思はないが、私はその語が表現する限界を彷徨してゐる。私は早くさういふ句境から抜け出したい。この関頭を透過しなければ、私の句作は無礙自在であり得ない。（孤高といふやうな言葉は多くの場合に於て夜郎自大のシノニムに過ぎない。）

私の祖母はずゐぶん長生したが、長生したがためにかへつて没落転々の憂目を見た。祖母はいつも『業やれ業やれ』と呟いてゐた。私もこのごろになつて、句作するとき（恥かしいことには酒を飲むときも同様に）『業だな業だな』と考へるやうになつた。祖母の業やれは悲しいあきらめであつたが、私の業だなは寂しい自覚である。私はその業を甘受してゐる。むしろその業を悦楽してゐる。

凩の日の丸二つ二人も出してゐる音は並んで日の丸はたたく

二句とも同一の事変現象をうたつた作であるが（季は違つてゐた

が）、前句は眼から心への、後句は耳から心への印象表現として、どちらも残しておきたい。

　しみじみ食べる飯ばかりの飯である草にすわり飯ばかりの飯

　　やうやくにして改作することが出来た。両句は十年あまりの歳月を隔ててゐる。その間の生活過程を顧みると、私には感慨深いものがある。（昭和十三年十月、其中庵にて　山頭火）

　鴉

　水のうまさを蛙鳴く

　寝床まで月を入れ寝るとする

　生えて墓揚の、咲いてうつくしや

　むしあつく生きものが生きものの中に

　山からしたたる水である

　まひまひしづか湧いてあふるる水なれば

　かたすみの三ツ葉の花なり

　半搗米を常食として

　米の黒さもたのもしく洗ふ

　へそが汗ためてゐる

　降りさうなおとなりも大根蒔いてゐる

　むすめと母と蓮の花さげてくる

　雷とどろくやふくいくとして花のましろく

　風のなか米もらひに行く

　日が山に、山から月が、柿の実たわわ

　萩が咲いてなるほどそこにかまきりがをる

　鳴いてきりぎりす生きてはゐる

ここを墓場とし曼珠沙華燃ゆる

身のまはりは日に日に好きな草が咲く

貧農生活　二句

働らいても働らいてもすすきツ穂

刈るより掘るより播いてゐる

つゆけくも露草の花の

空襲警報るゐるゐとして柿赤し

防空管制下よい子うまれて男の子

身辺整理

焼いてしまへばこれだけの灰を風吹く

老遍路

死ねない手がふる鈴をふる

とほくちかくどこかのおくで鳴いてゐる

わが其中庵も

壁がくづれてそこから蔓草

それは死の前のてふてふの舞

月は見えない月あかりの水まんまん

十一月、湯田の風来居に移る

一羽来て啼かない鳥である

秋もをはりの蠅となりはひあるく

水のゆふべのすこし波立つ

燃えに燃ゆる火なりうつくしく

再会

握りしめる手に手のあかぎれ

囚人の墓としひそかに草萌えて

となりの夫婦

やつと世帯が持てて新らしいバケツ

日支事変

木の芽や草の芽やこれからである

赤字つづきのどうやらかうやら蕗のとう

机上一りんおもむろにひらく

三月、東へ旅立つ

旅もいつしかおたまじやくしが泳いでゐる

春の山からころころ石ころ

啼いて鴉の、飛んで鴉の、おちつくところがない

風は海から吹きぬける葱坊主

伊良湖岬

はるばるたづね来て岩鼻一人

渥美半島

まがると風が海ちかい豌豆畑

鳳来寺拝登

お山しんしんしづくする真実不虚

青蓋句屋

花ぐもりピアノのおけいこがはじまりました

浜名街道

水のまんなかの道がまつすぐ

秋葉山中

石に腰を、墓であつたか

水たたへたればおよぐ蟇

天龍川をさかのぼる

水音けふもひとり旅ゆく

山のしづけさは白い花

若水君と共に高遠城阯へ、緑平老に一句

なるほど信濃の月が出てゐる

月蝕

旅の月夜のだんだん虧げゆくを

伊那町にて

この水あの水の天龍となる水音

権兵衛峠へ

ながれがここでおちあふ音の山ざくら

鳥居峠

このみちいくねんの大栃芽吹く

木曽の宿

おちつけないふとんおもたく寝る

帰居

しみじみしづかな机の塵

朝の土をもくもくもたげてもぐらもち

大旱

涸れて涸れきつて石ころごろごろ

雨乞

燃ゆる火の、雨ふらしめと燃えさかる

どこにも水がない枯田汗してはたらく

まいにちはだかでてふちよやとんぼや

炎天のレールまつすぐ

もらうてもどる水がこぼれるすずしくも

鉦たたきよ鉦をたたいてどこにゐる

月のあかるさ旅のめをとのさざめごと

鳥とほくとほく雲に入るゆくへ見おくる

けふの暑さはたばこやにたばこがない

月は澄みわたり刑務所のまうへ

九月、四国巡礼の旅へ

鴉とんでゆく水をわたらう

　三年ぶりに句稿（昭和十三年七月—十四年九月）を整理して七十二句ほど拾ひあげた。

　所詮は自分を知ることである。私は私の愚を守らう。（昭和十五年二月、御幸山麓一草庵にて　山頭火）（昭和十五年四月刊）

第47章
草木塔　(新字新仮名)

茶の花

　庵のまわりには茶の木が多い。五歩にして一株、十歩にしてまた一株。　私は茶の木を愛する、その花をさらに愛する。私はここに移ってきてから、ながいこと忘れていた茶の花の趣致に心をひかれた。　捨てられるともなく捨てられている茶の木は『侘びつくしたる侘人』の観がある。その花は彼の芸術であろう。　茶の木は枝ぶりもおもしろいし、葉のかたちもよい。花のすがたは求むところなき気品をたたえている。　この柿の木が其中庵を庵らしく装飾するならば、そこらの茶の木は庵の周囲を庵として完成してくれる。　茶の花に隠遁的なものがあることは否めない。また、老後くさいものがあることもたしかである。年をとるにしたがって、みょうが、とうがらし、しょうが、ふきのとうが好きになるように、茶の木が、茶の花が好きになる。　しかし、私はまだ茶人にはなっていない、幸にして、あるいは不幸にして。　梅は春にさきがけ、茶の花は冬を知らせる（水仙は冬を象徴する）。　茶の花をじっと観ていると、私は老を感じる。人生の冬を感じる。私の身心を流れている伝統的日本がうごめくのを感じる。

茶の花や身にちかく冬が来てゐる

柿

　前も柿、後も柿、右も柿、左も柿である。柿の季節に於て、其中庵風景はその豪華版を展開する。　今までの私は眼で柿を鑑賞していた。庵主となって初めて舌で柿を味わった。そしてそのうまさに驚かされた。何という甘さ、自然そのものの、そのままの甘さ、柿が木の

実の甘さを私に教えてくれた。ありがたい。　柿の若葉はうつくしい。青葉もうつくしい。秋ふこうなって、色づいて、そしてひらりひらりと落ちる葉もまたうつくしい。すべての葉をおとしつくして、冬空たかく立っている梢には、なすべきことをなしおえたおちつきがあるではないか。　柿の実については、日本人が日本人に説くがものはない。るいるいとして枝にある柿、ゆたかに盛られた盆の柿、それはそれだけで芸術品である。　そしてまた、彼女が剥いでくれる柿の味は彼氏にまかせておくがよい。　柿は日本固有の、日本独特のものと聞いた。柿に日本の味があるのはあたりまえすぎるあたりまえであろう。

みんないつしよに柿をもぎつつ柿をたべつつ

楢の葉

　楢の葉はおどろきやすい。すこしの風にも音を立てる。枯れても、おおかたは梢からはなれない。その葉と葉とが昼も夜もささやいている。　夜おそく戻ってくると、頭上でかさかさと挨拶するのは楢の葉である。　訪ねてくる人もなく、訪ねてゆく所もなく、そこらをぶらついていると、ひらひらと枯葉が一枚二枚、それも楢の葉である。　楢の葉よ、いつまでも野性の純真を失うな。骨ぶといのがお前の持前だ。

楢の葉の枯れて落ちない声を聴け

（「三八九」第五集）

第48章
旅日記　(新字旧仮名)

年頭所感——芭蕉は芭蕉、良寛は良寛である、芭蕉にならうとしても芭蕉にはなりきれないし、良寛の真似をしたところで初まらない。私は私である、山頭火は山頭火である、芭蕉にならうとも思はないし、また、なれるものでもない、良寛でないものが良寛らしく装ふことは良寛を汚し、同時に自分を害ふ。私は山頭火になりきればよろしいのである、自分を自分の自分として活かせば、それが私の道である。　　　　　　　×　　　　　　　　×　　　　　　　　×歩く、飲む、作る、——これが山頭火の三つ物である。山の中を歩く、——そこから私は身心の平静を与へられる。酒を飲むよりも水を飲む、酒を飲まずにはゐられない私の現在ではあるが、酒を飲むやうに水を飲む、いや、水を飲むやうに酒を飲む、——かういふ境地でありたい。作るとは無論、俳句を作るのである、そして随筆も書きたいのである。

一月一日　二日　三日　四日　五日……岡山、稀也居。

夫、妻、子供六人、にぎやかだつた。幸福な家庭。たいへんお世話になつた。あんまり寒いので、九州へひきかへして春を待つことにした。竹原の小西さん夫婦、幸福であれ。私は新らしい友人を恵まれた。

二月一日　澄太居。

澄太君は大人である、澄太君らしい澄太君である。私は友として澄太君を持つてゐることを喜び且つ誇る。黙壺居。黙壺君も有難い友である。初めてお目にかゝつた小野さん夫婦に感謝する。広島の盛り場で私は風呂敷を盗まれた。日記、句帖、原稿——それは私にはかけが

へのないものであり、泥坊には何でもないものである。とにかく残念な事をした、この旅日記も書けなくなつた、旅の句も大方は覚えてゐない。やつぱりぐうたらの罰である。岡山から広島までの間で、玉島のＦ女史を訪ねたことも、忘れがたい旅のおもひでとならう。円通寺、良寛和尚。（二月）奈良、桂子居。（二月）赤穂附近。

　　二月十一日　十二日　十三日

　今日から新らしく書き初める。――雪、紀元節、建国祭。黙壺居滞在。第四句集雑草風景の句箋を書く。こゝでまた改めて澄太君の温情に触れないではゐない。

　　二月十四日

　日本晴、出立。

　　二月十六日　十七日

　場末の安宿にて休養、いひかへると、孤独気分になりきるために。

　　二月十八日

　ぶら／＼歩いて宮嶋まで、そこで泊つた。

　　二月十九日　大霜、快晴。

　生死去来は生死去来である。大竹に泊る。

　　二月二十日　二十一日　柳井津滞在。

　この日、この身、この心。……

　　二月廿二日

　白船老を訪ねる、泊れといふのをふりきつて別れる。雪、雪、酒、酒、泥、泥。

　　二月廿三日

　　宮市の安宿で感慨無量。

　　二月廿四日　岔水居。

あゝ友はまことにありがたい。

二月廿五日　曇つて寒い。

戸畑へ、多々桜君を訪ねる。

二月廿六日　廿七日　牡丹雪が降つた、星城子居。

あたゝかなるかな、友のこころ。こゝで重大事件（二・二五事件）を知つた。省みて、自分の愚劣を恥ぢるより外ない。

二月廿八日

八幡の人々を訪ねまはる。井上さん、仙波さん、その他。

二月廿九日　雪、霰。

土筆君に招かれて行く。寝苦しい夜がつゞく、あたりまへだ。

追加　　　（伊豆海岸、信濃路、その他にて）また一枚ぬぎすてる旅から旅へ水の上はつきり春の雲はてなき旅の遠山の雪ひかるあれがふるさとの山なみの雪ひかる街の雑音しづもれば恋猫の月枯葦の一すぢの水のながれ春風のテープちぎれてたゞよふ手から手へ春風のテープ

三月一日　緑平居、雪、霜、霙。

緑平老は私の第一の友人だ。

遠山の雪ひかるどこまで行く

三月二日

今日は事務家となつて句集発送。雪、雪、雪だつた。ヘツドランプをうたふ。

三月三日

酔うて、ぬかるみを歩いて、そして、また飯塚へ、それから二瀬へ。逢うてはならないＫに逢ふたが。とろ／＼どろ／＼、ほろ／＼ぼろぼろの一日だつた。死に場所が、死に時がなか／＼に見つからないのである！

ふりかへるボタ山ボタン雪ふりしきる雪ふる逢へばわかれの雪ふる

三月四日　岔水居。

何といふ憂欝、歩く外ない。若松へ、多君に事情を打明けて旅費を借る、そして門司へ。黎君を訪ねる、理髪、会食、同伴で岔君を訪ふ。岔水君はうれしい人だ、黎々火君も。さびしいけれどあたゝかい家庭。

三月五日　ばいかる丸。

神戸直航の汽船に乗り込む。さよなら、黎々火君、さよなら、岔水君よ。さよなら、九州の山よ海よ。テープのなげき。こゝろやすらかな海上の一夜だつた。

三月六日　詩外楼居。

朝、神戸着。上陸第一歩、新らしい気分であつた。詩外楼居。めいろ君を訪ふ。あたゝかく、ぐつすり睡れた、ありがたかつた。詩外楼君に感謝する、奥さんにも。

三月七日　詩外楼居。

曇、花ぐもりのやうな。朝湯のあつさ、こゝろよさは。めいろ居を訪うて、おいしい昼飯をいたゞく、それから新開地を散歩して、忍術映画見物、馬鹿馬鹿しいのがよろしい。賀英子嬢をめぐまれためいろ君のよろこびをうたふ——

雛をかざらう雛のよにうまれてきた

何だか寝苦しかつた。旅の袂草の感想。

三月八日　愚郎居。

雪中吟行、神戸大阪の同人といつしよに、畑の梅林へ、梅やら雪やら、なか／＼の傑作で、忘れられない追憶となるだらう、西幸寺の一室で句会、句作そのものはあまりふるはなかつたが、句評は愉快だつた、酒、握飯、焼酎、海苔巻、各自持参の御馳走もおいしかつた。夕方私一人は豊中下車、やうやく愚郎居をたづねあてゝほつとした、例によつて酒、火燵、ありがたかつた。雪は美しい、友情は温かい、私

は私自身を祝福する。

・暮れて雪あかりの、寝床をたづねてあるく・木の葉が雪をおとせばみそさゞい・雪でもふりだしさうな、唇の赤いこと・春の雪ふるヲンナはまことにうつくしい・春比佐良画がくところの娘さんたち・からたちにふりつもる雪もしづかな家　　　追加一句　みんな洋服で私一人が法衣で雪がふるふる

三月九日　愚郎居。

晴、雪はまだ消えない、春の雪らしくもなく降りつもつたものだ。整理、裂く捨てる、洗ふ。朝湯朝酒とはもつたいない、今日にはじまつたことではないけれど。ほろよい人生、へゞれけ人生であつてはならない、酒、酒、肴、肴と御馳走責めにされた、奥さんの手料理はおいしい。夜はＳさん来訪、書いたり話したり笑つたり。

・火燵まで入れてもろうて猫がおさきに　　　（愚郎居）・雪あかりの日あかりの池がある畑がある

三月十日

比古君の厄介になる。比古君は私にピタリと触れてくれる、うれしかつた。奥さんに連れられて、大阪劇場で、松竹レヴユー見物、まことに春のおどり！夜は新町でのんきに遊ぶ。

・こどもに雪をたべさしたりしてつゝましいくらし・きたない池に枯葦の葉も大阪がちかい・春風の旗がはた／＼特別興行といふ・うらはぬかるみの、女房ぶりの、大根やにんじん・雲のゆききのさびしくもあるか

三月十一日

ほつかり覚める。新町のお茶屋の二階、柄にもない。比古君が方々を連れ歩いてくれる。汁といふ店で汁を食べた、さすがに大阪だと思つた。夜はまた新町へ。

三月十二日　曇。

ぶらつくうちに日が暮れた。比古居、蔵の中に寝せて貰ふ、よかつ

た、よかつた。

三月十三日

今日も遊び暮らす。

三月十四日　うらゝか。

松平さんと同行して、街はづれのお宅へ、しづかな生活であつた。石仏図を観せて貰ふ、松平さんは尊敬すべき画家だ。

三月十五日　滞在。

比古君、印君来訪。終日歓談。

三月十六日　まつたく春。

十時出立、松原まで歩いて、そこからは電車で富田林に後藤さんを訪ふ、泊めて貰ふ。弘川寺の西行塚に詣でる。近在には古蹟が多い、楠公の遺蹟も所々にある。田園風景がうらゝかだつた。

滝池山弘川寺

西行堂　木像、伝文覚上人作西行塚　円信上人、西行法師のことなり似雲法師の墓

三月十七日　曇、時々雨。

八時出立、京都へ。柏原まで電車、そこから歩く。瓢箪山。河内平野、牛はふさはしい。枚方で泊る、うるさい宿だつた。小楠公の墓、大樟。淀川風景はよい。

三月十八日　曇、肌寒い、彼岸入。

早起出発。石清水八幡宮。或るお婆さん、二銭の喜捨拝受。電車で京都へ、北朗居にころげこむ。北朗君と同道して陶工石黒さんを訪ねる。寸栗子翁の訃を聞いて驚く、いよ／＼近火を感じる。夕方、みんないつしよに——奥さんも子供さんも——南禅寺境内の豆腐料理を賞味する、さすがにおいしかつた。京都の豆腐はうまい。夜は別れて一人、新京極を散歩する、そしてそこに寝てしまふ。——飲む食べる、しやべるふざける、——それだけが人生か！

三月十九日　晴。

朝は寒く昼は暖か。どこといふあてもなく、歩きたい方へ歩きたいだけ歩いた。――八坂の塔、芭蕉堂、西行庵、智恩院、南禅寺、永観堂、銀閣寺、本願寺、等々等。桂子さんから速達で手紙を受取つた、何だか誤解されてゐる、嫌な気持になつた。夜の北朗居は賑やかだつた、句会といふよりも坐談会だつた。仙酔楼君と逢ふ、まことにしばらくだつた。世間はうるさいね、女もうるさいね。こだはるなかれ。自分の信ずる道を行く外ない。

三月廿日　曇、花ぐもり。

朝湯朝酒。蛇が穴を出てゐた。同人と共に北野吟行。鷹ヶ峯、庵、光悦寺、金閣寺、酔つぱらうて、仙酔楼居へ自働車で送られる。

三月廿一日　雨――晴、滞在。

午后、物安居士、いく子刀自を訪ふ。愉快な微酔。

三月廿二日　晴。

もつたいなや、けふも朝湯朝酒。十時出立、宇治へ。――平等院、うらゝかな栄華の跡。汽車で木津まで行つて泊る。

三月廿三日　晴。

うらゝかな雀のおしやべり。早朝出発、乗車、九時大河原下車、途中、笠置の山、水、家、すべてが好ましかつた。川を渡船で渡されて、旅は道連れ、快活な若者と女給らしい娘さんらといつしよに山を越え山を越える。山城大和の自然は美しい。山路は快い、飛行機がまうへを掠める。母と子とが重荷を負うて行く。二里ばかりで名張川の岐流に添うて歩く、梅がちらほら咲いてゐる。歩々春だ、梅だ、月ヶ瀬梅渓は好きなところだつた、だいぶ名所じみてはゐるけれど。

こゝから月ヶ瀬といふ梅へ橋をわたる

バスで上野町へ、遊廓近くの安宿に泊る、うるさい宿だつた。

五月門一目万本月瀬橋

三月廿四日　晴。

芭蕉遺蹟を探る——故郷塚、瓢竹庵。上野は好印象を与へてくれた。阿保まで三里、うらゝかな道。阿保から津まで電車。津はいかにも城下らしいおちついた都会であつた、梅川屋といふのに泊る、一宿二飯で三十四銭！二角さんを訪ねて御馳走になる。

三月廿五日

朝、都影さんを訪ねる、二角君に連れられて、都影さんは一見好きになれる人だ。自働車といふものもよしわるしだと思ふ。二角君に案内されて山田へ。内宮外宮はたゞありがたかつたといふより外はない。二見ヶ浦。

裸木塚芭蕉塚平□塚

都影居泊、私にはぜいたくすぎるほどだつた。夜は自家用で白子町までドライヴ、都影君はドクトルとして、私は妙なお客さんとして。

おちついてしづけさは青木の実　　（比古君か印君に）　鎧着ておよろこび申す春の風吹く　　（弘川寺）　春の山鐘撞いて送られた　けふのよろこびは山また山の芽ぶく色　ちんぽこの湯気もほんによい湯で　　（京都）東山・旅は笹山の笹のそよぐのも　まるい山をまへに酔つぱらふ　松笠の落ちてゐるだけで　こんやはこゝで雨がふる春雨・旅の袂草のこんなにたまり　ぬかるみも春らしく堀りかへしてゐる　　（宇治）　うらゝかな鐘をつかう　御堂のさびも春のさゞなみ・春日へ扉ひらいて南無阿弥陀仏・たゞずめば風わたる空の遠く遠く　　（月ヶ瀬へ）　落葉ふる岩が腰かけとして・どこで倒れてもよい山うぐひす　落葉してあらはなる巌がつちり　蕗のとうあしもとに一つ　後になり先になり梅にほふ　　（伊勢神宮、五十鈴川）　そのながれにくちそゝぐ　たふとさはまつしろなる鶏の　若葉のにほひも水のよろしさもぬかづく　　（二見ヶ浦）　春波のおしよせる砂にゑがく　旅人として小雪ちらつくを　　（津にて）・けふはこゝにきて枯葦いちめん・麦の穂のおもひでがないでもないこどもといつしよにひよろ／＼つくし　春の夜の近眼と老眼とこんがらがつて　影は竹の葉の晴れてきさうな　春めく雲でうごかな

い　　　（辨天島）　すうつと松並木が、雨も春　とほく白波が見えて松のまがりやう　裸木に一句作らしたといふ猿がしよんぼり　ぬくい雨となる砂の足あと　どうやら晴れてる花ぐもりの水平線・春の海のどこからともなく漕いでくる　これから旅も、さくら咲きだした・茶どころの茶の木畑の春雨

　　三月廿六日　あたゝかく。

　病室の二階一間を占領して終日、読む、書く、飲む。……

　　三月廿七日

　九時の列車にて出立、さよなら、さよなら、ありがたう、ありがたう。途中、四日市下車、折から開催中の博覧会見物、つまらなかつた。都影君から貰つた正宗をラツパのみしたのはおもしろかつた。夕方、津島君、おもひでの道をたどつて漁眠洞訪問、なつかしい家庭である、坊ちやんはよい児だ。

　鉦たゝきが鉦をたゝいてゐる

　などゝ俳句する、まだ小学二年なのに。

　ひさしぶりの話がつきない夜の雨になり

　　三月廿八日　曇。

　身辺整理。坊ちやんお嬢さん同行で、木曽川あたりへ遊ぶ、お辨当に家人の心づくしがこめられてゐた、酒――それは私にだけの――には殊に。――鈴鹿山がひかる、伊吹山も。風が出た、風は何よりもいつも寂しい。めづらしいよい遊びの一日ではあつた。

　　三月廿九日　晴。

　朝酒はありがたすぎる。私を旅に出て来て、もつたいないと思ふ。私は私の友の友情に値しないことを私みづからよく知つてゐる。津島地方の産物は毛織物と蕗、面白い取合である。濃美平野はうらゝかだつた。午后、漁君と同道して、蓴蓮亭を訪ふ、夜は句会。例によつて飲みすぎる、しやべりすぎる。

　　三月三十日　晴。

きしめん――名古屋名物の一つといはれる揚豆腐をあしらつたうどん――を御馳走になる。それから秋彦君と共に林五舎へ。森有一君はほんたうに好きな友人だ。ヱロ貝！　その御馳走もよかつた。秋彦君去り武朗君来る。夜おそくまで話しつゞけた、そして睡つた、安らかに睡つた。林五君よ、幸福でありたまへ。

三月三十一日　晴、春寒、薄氷が張つてゐた。

徳川園観賞。二時の汽車で浜松へ。――浜松は津とも違つて、おちついた都会である。平野小児科医院、そこに多賀治君が待つてゐて下さつた。二階の病院の一室を私の部屋として提供された、高等下宿にでもゐるやうで、身も心もくつろいだ。

四月一日　快晴。

御馳走々々々。散歩、休養、通信。私は自殺未遂者だ。短かいやうな長いやうな一生。多賀治さんとは初対面だけれど、親しい間柄である。よい夫でありよい父であり、そしてよいドクトルである多賀治君を祝福する。

四月二日　曇。

春雨しと／＼。永井さん来訪、野蕗君往訪。多賀治君の住宅にも寄つて奥さんに挨拶する、新居普請中。看護婦さんと相乗で辨天島へ一路ドライヴする、かへりみてブルジヨアすぎる。松月旅館に送りこまれて、酒、酒、酒、いよ／＼ブルジヨアすぎる。暮れる前に、自働車で送られる、酔がかつと出て、私はたうとう行方不明になつてしまつた！

四月三日　風雨はげしかつた。

朝湯朝酒、昨夜の今朝で泣きたいやうな気持だ。一時の列車で鎌倉へ。――野蕗さんがひよつこり乗り込んで、送つて下さつた、涙ぐましい温情を感じた。名古屋にも浜松にも同人間に何だか感情のもつれがあるらしい、私としては、そのどちらにも無関心だけれど。天竜川を渡るとき、先年のおもひでにふけつた。海は濁つて富士は見えない。桃の花、菜の花、青麦、――日本は美しい！丹那トンネル、暗い音がつゞく。熱海は春たけなは、花見客が騒々しい、うるさいけれど

おこられもしない。――私は憂欝だ――人間が嫌になつたのでなくて、自分自身が嫌なのだ。大船で乗り換へようとして下車すると、鎌倉同人が眼ざとく私を見つけて、にこ／＼、自働車で鎌倉へ。鳴雨居に落ちつく、くつろいで、酒、酒、話、話。鳴雨君は想像した通り、奥さんと二人ぎりの、別荘風の小ぢんまりした家庭は春の海のやう。雪男君、蜻郎君、冬青君、新五郎君、――鎌倉同人はほんたうになごやかだ。波音があたゝかだつた。

　ヒヤとおヒヤ――前者は冷酒、後者は水。

　　四月四日　晴。

　かたじけなくも、もつたいなくも、朝湯にはいつてから朝酒をいたゞく。蜻郎君来訪。三人連れで散歩、光明寺大聖閣、””幡宮、建長寺、円覚寺、長谷の大仏。……冬青居往訪。夜は南浦園で句会、支那料理がおいしかつた。まことによい日よい夜であつた。層雲社から電報、明日の句会へ出席せよといふので。――

　鎌倉風景。――東京の印象。――東京は広い。伊豆遊吟。

　沼津――東京。

　朝の富士は白いあたまの春の雲松の木あざやかに富士の全貌ぶらんこぶら／＼若葉照る街の騒音何の木か咲いてゐる

　東京をうたふ。

　さくらちる富士がまつしろさくら咲いてまた逢うてゐる旅ごゝろかなしい風がふきまくるぼう／＼としてあるくいつしか春

　　　　（追加）　蘭竹かれ／″＼の風にふかれつゝ・鎌倉は松の木のよい月がのぼつた

　大仏さん異人さんさくら寺

　いちはやく山ふところのさくら一もと　　斎藤さんにまた逢ひませうと手を握る

　東京をうたふ。

ほつと月がある東京に来てゐる花ぐもりの富士が見えたりかくれたりビルからビルへ東京は私はうごくビルがビルに星も見えない空
ビルにて窓へやつと芽ぶいてきた

四月五日　快晴、鎌倉から東京へ。

眼が覚めると海がころげてくるやうな波音である。鳴雨居はしづかな夫婦ずまゐ、別荘風のしやれた家である。朝湯朝酒、今日に限つたことではないけれど勿体ないなあと思ふ。雪男さん来訪、散歩する、雪男居に寄る、御馳走になる。昨夜の召電によつていつしよに上京する、大船で約束通り蜻郎君と落ち合ふ。うらゝかな日である。品川へ着いてまずそこの水を飲んだ、東京の水である、電車に乗つた、東京の空である、十三年ぶりに東京へ来たのだ。大泉園を初めて訪ねる、鎌倉の椿が咲いてゐる、井師にお目にかゝる、北朗君も来てゐる。句会、二十名ばかり集まつた、殆んどみな初対面の方々だ。夜は層雲社に泊めて貰ふ、犬に吠えられた、歓迎してくれたのかも知れない。武二君、五味君、北朗君と夜の更けるのも忘れて話しつゞけた。

四月六日　花ぐもり。

朝酒二三杯。北朗君、武二君と同道して銀座へ、磊々子、一石路夢道を訪ねる。酒、酒、酒、花、花、花、そして女、女、女。北朗は古道具屋をまはつて、いろんなものを買ふ、私が酒を飲むやうなものだろう。

四月七日　花ぐもり。

浅草風景（新浅草観賞）。定食八銭は安い、デンキブランはうまい、喜劇は面白い。あてもなくぶら／＼あるく。

四月八日　曇、いつしか雨となつた。

やたらに歩いた、――浅草から上野へ、それから九段へ、それから丸の内へ。砂吐流君往訪、これは丸ビル。農平君往訪、これは海上ビル。鳳車君往訪、これは東京ビル。農平君と、それから魔神明君と日本橋の大　で会食。東京駅で砂吐流君を待ち受け、新宿聚楽で夕食をする、味覚の殿堂といつてゐるだけ満員繁昌だ。砂吐流の新居春風亭に泊る。

四月九日　小雨――曇。

朝からビールを飲む。いつしよに出かける、君は丸ビルへ、私はかたこと庵へ。武蔵野はなつかしい、うつくしい。運よく斎藤さん在庵。同道して徳富健次郎の墓に詣でる。櫟林のところ／″＼に辛夷の白い花ざかり。青樫荘に前田夕暮氏を訪ふ。さらに青木健作氏を訪ふ、三十余年ぶりの再会である、でも、昔なつかしい面影は失はれてゐなかつた。やがて農平君も来訪、四人で歓談、夜の更けるのも忘れて。斎藤さんは健作君の宅で、私は農平君の宅に泊めて貰ふ。まことにまことに珍らしい会合であつた。

四月十日　曇。

春寒、ばら／＼雨。みんないつしよに出発、そしてそれ／″＼の方向へ別れた。東京ビルに茂森君往訪、なつかしかつた、連れられて自働車で新宿へ出て、或るおでんやで飲む、そしてまた十二社へ、酒と女とがあつた。私は自働車で浅草へ、そこで倒れてしまつた。友、友、友、友、友。

四月十一日　曇。

農平君の案内で江戸川の花見に出かける、桜はまだ蕾だ、掛茶屋の赤前垂が黄色い声で客を呼んでゐるばかりだが、飲む酒はある。……柴又にまわつて川甚でも飲む。私はまた浅草へ。

四月十二日　曇。

おめでたいおのぼりさんとして。山谷の安宿に泊る、泊るだけは二十五銭。

四月十三日　雨。

濡れて層雲社へ帰る、武二君が私の行方不明を心配してゐたさうで、私の癖とはいひながらすまなかつた。夜は銀座へ、丸ビル人会出席。かう酒ばかり飲んでゐては困る！

四月十四日　晴。

さくらが咲いた、散歩、赤坂見附はよい風景だつた。武二君と共に

迎へられて磊々子居へ。磊々居滞在。

　　四月十五日　花ぐもり。

　朝湯朝酒とは有難すぎる、身にあまる冥加である。二人でぶら／＼歩く、Ｉさんのお宅で御馳走になる、天ぷら蕎麦、冷酒、池上本門寺、よい森、松がよい。高輪泉岳寺、香烟がたえない。それから明治座へ、面白かつた、井上はやつぱりうまい。銀座裏で飲んで食べる、おけさ飯とアブサン。東京は広い、時代錯誤場所錯誤。

　　四月十六日　曇つたり晴れたり。

　東京では遊びすぎた、やうやく東京を離れる、磊々子夫妻の温情は身にしみて有難かつた。琅※洞訪問、あやにく不在、その代りに多摩川観賞、二子橋畔春風習々春光熈々。雷にどなられ霙にたゝかれた。風がふいて蛙がないてゐる。戸塚の松並木は美しかつた。やつと藤沢で寝床を見つけた。自分らしく、旅人らしく。

　　四月十七日　伊東温泉伊東屋。

　晴、うらゝかだつた。茅ヶ崎まで歩く、汽車で熱海まで、そこからまた歩く、行程七里、労れた。富士はほんたうに尊い、私も富士見西行の姿になつた。熱海はさすがに温泉郷らしい賑やかさだつた、伊東も観光祭。今日の道は山も海も美しかつたけれど自働車がうるさかつた。山の水をぞんぶんに飲んだ、をり／＼すべつたりころんだりした。旅のおもしろさ、旅のさびしさ。

　・松並木がなくなると富士をまともに・とほく富士をおいて桜まんかい

　　四月十八日　滞在、休養、整理。

　伊豆はさすがに南国情調だ、麦が穂に出て燕が飛びかうてゐる。○伊豆は生きるにも死ぬるにもよいところである。○伊豆は至るところ花が咲いて湯が湧く、どこかに私にふさはしい寝床はないかな！大地から湧きあがる湯は有難い。同宿同行の話がなか／＼興味深い、トギヤ老人、アメヤクヅレ、ルンペン、ヘンロ、ツジウラウリ。……焼酎をひつかけてぐつすり眠つた。

・なみおとのさくらほろほろ・春の夜の近眼と老眼とこんがらがつて・伊豆はあたゝかく死ぬるによろしい波音・湯の町通りぬける春風

四月十九日　雨、予想した通り。

みんな籠城して四方山話、誰も一城のいや一畳の主だ、私も一隅に陣取つて読んだり書いたりする。午后は晴れた、私は行乞をやめてそこらを見物して歩く、浄の池で悠々泳いでゐる毒魚。伊東はいはゆる湯町情調が濃厚で、私のやうなものには向かない。波音、夕焼、旅情切ないものがあつた。一杯ひつかける余裕はない、寝苦しい一夜だつた。

（伊東町）・をなごやの春もにぎやかな青木の実・まいにち風ふくからたちの芽で・はる／″＼ときて伊豆の山なみ夕焼くる・かうして生きてゐることが、草の芽が赤い

四月二十日　快晴、下田へ出立する。

川奈ゴルフ場、一碧湖、富戸の爼岩、光の村、等々を横眼で眺めつゝ通りすぎる、雑木山が美しい、天城連山が尊い、山うぐひすが有難い。風、風、強い風が吹く、吹きまくられつゝ歩く、さびしい、つかれる。赤沢あたりから海岸の風景が殊によろしくなる、茫々たる海、峨々たる巌、熱川温泉に安宿があるといふので下つて行つたが断られた、稲取へ暮れて着いて宿をとつてほつとした、行程八里強。

・芽ぶくより若葉する湯けむりをちこち・山路あるけば山の鴉がきてはなく

四月二十一日　谷津温泉、一郎居。

しづかな、わびしい宿だつた、花屑がそこらいちめんに散りしいてゐた。昨夜のルンペン君と別れる、今生ふたゝび逢ふことはなからう。今日も晴れて風が吹く。今井浜は伊豆舞子とよばれるだけあつて海浜がうつくしい。行程三里弱、午前中に谷津の松木一郎君を訪ねる、一郎居は春風駘蕩だ、桜の花片が坐敷へ散り込む。メロン、トマトを御馳走になる、それは君の手作りだ、内湯の御馳走は何より。

・うら／＼石仏もねむさうな

四月二十二日

雨、ふと眼覚めて耳を疑つた。こゝはほんたうにあたゝかい、もう牡丹が咲いて、蚊が出てくる。温泉は湧出量が豊富で高温である、雑木山の空へ噴き上げる湯煙の勢よさ。今日の雨はまことによかつた。　△　△　△朝湯のあつさよろしさありがたさ。朝酒とは勿体なし。　△　△　△ほんたうでない、といつて、うそでもない生活、それが私の現在だ。

△洗濯、身も心も内も外も。△花菖蒲の輸出。△栖足寺の甕（銘は祖母懐、作は藤四郎）

四月二十二日　花時風雨多、まつたくその通りの雨風だつた。

熱い湯を自分で加減して何度も入浴する、奥さんが呆れて笑はれる。湯、そして酒、あゝ極楽々々。午後だん／＼晴れる、一郎君といつしよに下田へ向ふ。山蕗が咲きほうけてゐる、ふきのとうが伸びて咲いて、咲きをへてゐるのである。○伊豆の若葉はうつくしい。白浜の色はほんたうに美しかつた、砂の白さ、海のみどり。大平洋をまへに、墓をうしろに、砂丘にあぐらをかいて持参の酒を飲んだ。至るところに鉱山、小さい金鉱があつた、それも伊豆らしいと思はせた。下田近くなると、まづ玉泉寺があつた、維新史の第一頁を歩いてゐるやうだ。浜崎の兎子居に草鞋をぬぐ、そして二三子と共に食卓を囲んで話しつゞける。酔ふて書きなぐる、いつもの私のやうに。そして一郎君と枕をならべて熟睡。伊豆は、湯はよいけれど水はよろしくない、温泉地のどこでもさうであるやうに。伊豆に多いのは旅宿の立看板と隧道と、そしてバス。

・この木もあの木もうつくしい若葉・別れようとして水を腹いつぱい

△天草を干しひろげる△来の宮神社の禁酒デー

四月二十三日　曇、うすら寒い。

朝早く、二人で散歩する、風が落ちて波音が耳につく、前はすぐ海だ。牡丹の花ざかり、楓の若葉が赤い。蛙が鳴く、頬白が囀づる。辨天島は特異な存在である、吉田松蔭の故事はなつかしい。九時すぎ、

三人で下田へ、途中、一郎君と別れる、一郎君いろ／＼ありがたう。稲生沢川を渡ればまさに下田港だ、港町情調ゆたかであらう、私は通りぬけて下賀茂温泉へ。留置の手紙は二通ありがたかつた。雑木山がよい姿と色とを見せてくれる。下賀茂は好きな温泉場である、雑木山につゝまれて、のびやかな湯けむりがそこゝから立ち昇る、そここゝに散在してゐる旅館もしづかでしんみりとしてゐる。その一軒の二階に案内された、さつそく驚ろくべき熱い強塩泉だ、ぽか／＼あたゝまつてからまた酒だ、あまり御馳走はないけれどうまい／＼。兎子君が専子君を同伴して紹介された、三人同伴で専子居へ落ちつく、兎子君は帰宅、私と専子君とはまた入浴して、そして来訪のＳさんと飲みだした。今夜も酔ふて、しやべつて、書きなぐつた、湯と酒とが無何有郷に連れていつてくれた、ぐつすりねむれた。……ノンキだね、ゼイタクだね、ホガらかだね、モツタイないね！

・波音強くして葱坊主・道は若葉の中を鉱山へ・けふのみちはすみれたんぽゝさきつゞいて・すみれたんぽゝこどもらとたはむれる

△黒船襲来、異人上陸で、里人は牛を連れて山へ逃げたさうな。△黒船祭の前日。

四月二十四日　晴、后曇。

早朝、川ぶちの共同湯にはいる、底から湧きあがつてくる湯のうれしさ。湯けむりが白く雑木若葉へひろがつてゆく、まことに平和な風景。七時のバスで出発、松崎へ急ぐ。峠のながめはよかつた、山また山、木といふ木が芽ぶいて若葉してかゞやく。バスガールと運ちやんとの会話、お客は私一人。九時松崎着、海岸づたいに歩く。昨夜、飲みすぎたので、さすがの私も弱つてゐる、すべつてころんで向脛をすりむいだ。遠足の小学生がうれしさうにおべんたうを持つてゆく、私の頭陀袋にも一郎君から貰つた般若湯が一壜ある。田子からすみれ丸に乗つて沼津へ。今夜は土肥温泉に泊る筈だつたがその予定を変更したのである、だいたい私の旅に予定なんかあるべきでない、ゆきあたりばつたり、行きたいだけ行き、留まりたいところに留まればよいのである、山頭火でたらめ道中がよろしいのである、ふさはしいのである。凪で気楽で嬉しい海上の三時間だつた。沼津に着いたのは五時、

やうやく梅軒を探しあてゝ客となる。夜は句会、桃の会の方々が集まつて楽しく談笑句作した。

・明けてくる若葉から炭焼くけむり・山のみどりを分けのぼるバスのうなりつゝ・鴉さわぐそこは墓地・水平線がうつくしい腰掛がある・山の青さ海の青さみんな甲板に　　　（田子浦）・そこらに島をばらまいて春の波

▵さよなら伊豆よ　やつて来ましたぞ駿河▵伊豆めぐりで

東海岸は陸から海を西海岸は海から陸を観賞した

四月二十五日

お天気がまたくづれて雨が降つてゐる、一室にこもつて書くことをする。ほろゑひ人生でなければならない、私のやうなゑつぱらひ生活ではいけない。微笑の一生でありたい。

四月廿五日（続）

雨、そして風だ、昨日、無理にもこゝまで来てよかつたと思ふ。停電、わびしく寝る。

四月廿六日　晴。

早く起きて、梅軒・桃月・路耕の三君と共に六時の汽車で東京へ、今日は層雲記念大会である。一天雲なし、ほがらかな日である。九時着、孤独な散歩者、乞食坊主、築地本願寺参拝。一時、会場伊吹へ（物貰ひと思はれて玄関番に断られたりして）。愉快な大会であつた、なか／＼の盛会でもあつた、知つた人知らない人、いろ／＼の人に逢つた、誰もが打ち解けて嬉しさうだつた。句会から宴会、十時すぎて、私は一人街へ出た、酔ふた元気で、銀座のカフヱーに飛び込んだりしたが、けつきよく、こんな服装では浅草あたりの安宿に転げ込むより外なかつた。今日は旅愁をしみ／″＼感じたことである。……

四月廿七日　廿八日　曇――雨。

法衣も網代笠も投げ捨てゝ、浅草で遊んだ、遊べるだけ遊んだ。浅草は好きだ、愉快な遊楽場である、私のやうな人間にはとりわけて。

四月廿九日　雨。

今日も浅草彷徨。

四月三十日　曇。

おなじく。労れて憂欝になる、金もなくなつたのだが。

五月一日　曇。

東京を横断した、もちろん歩いて。社に戻つて泊る。

五月二日　曇。

いよ／＼東京をあとに、新宿から電車で八王子へ。多摩少年院に三洞君を訪ねる。夜は三洞居で丘の会句会。今日、久しぶりに豊次君に会つて話した、あの頃の事はいつもなつかしい、それにしてもお互に変つたものである。武蔵野は好きだ、丘、流、草、ことに栃の若葉と春の竜胆とはよかつた。ゆつくり寝せて貰つた。

・どこかに月あかりの木の芽匂ふなり・旅もなぐさまないこゝろ持ちあるく

五月三日

丘の家はしづかである、あたゝかである。黙太居を訪ねる、昼飯をよばれる。君は詩人である。院庭で中井さんが、黙太三洞そして私をカメラにおさめて下さつた。広次君を宿に訪ねて、さらに話しつゞけた。憂欝たへがたくなつた、アルコールでごまかすより外なかつた、私は卑怯者だ、ぐうたらだ！

・旅のすがたをカメラに初夏の雲も

五月四日　日本晴。

甲州路をたどる。——三洞君がしんせつにも浅川まで送つて下さつた、君の温情まことにありがたし、私はその温情に甘えたやうだ。汽車で小仏峠を越える、雑木山のうつくしさよ。山また山、富士がひよつこり白いあたまをのぞける、山はけはしく谿はふかく雑木若葉はかゞやく。与瀬から上野原まで歩いて、清水屋といふ安宿に泊る、一

泊二飯で五十銭は安かつた。

（追憶）・何かさみしく死んでしまへととぶとんぼ

五月五日　晴。

至るところ鯉幟吹流しがへんぽんとして青空でおどつてゐる。やつと自分といふものをとりかへして私らしくなつたやうである。五月の甲州街道はまことによろしい。桂川峡では河鹿が鳴いてゐた。山にも野にもいろ／＼の花が咲いてゐる。猿橋。

・若葉かゞやく今日は猿橋を渡る

こんな句が出来るのも旅の一興だ。甲府まで汽車、笹子峠は長かつた、大菩薩峠の名に心をひかれた。甲斐絹水晶の産地、葡萄郷、安宿は雑然騒然、私のやうな旅人は何となくものかなしくなる、酒を呷つて甲府銀座をさまよふ。老を痛切に感じる、ともかくも今日までは死なゝいでゐるけれど！（生きてゐたのではない）desperate character！

・しつとり濡れて草もわたしもてふてふも

五月六日　曇。

何も彼も暗い、天も地も人も。

（自嘲）どうにもならない生きものが夜の底に　　（追加）旅はいつしか春めく泡盛をあほる

五月七日　とう／＼雨となつた。

緑平老から旅費を送つて貰ふ。ありがたしかたじけなし。孤独な散歩者として。——

五月八日　曇。

心機一転、これから私は私らしい旅人として出立しなければならない。我儘は私の性だから、それはそれとしてよろしいけれど、ブルジヨア的であつてはならない、執着しない我儘でなければならない。

・風は五月のさわやかな死にざま・ひよいと月が出てゐた富士のむかうから

（甲州から信州へ）・日の照れば雪山のいよいよ白し・尿するそこら草の芽だらけ・こんなに蕎麦がうまい浅間のふもとにゐる　江畔老に鼻頭橋まで見送られて　橋までいつしよに、それからまた一人旅・浅間をまへにまいにち畑打つてふてふ・落花ちりこむ壁土のねばりやう・浅間はつきりとぶてふてふ・芽ぶいて落葉松落葉は寝ころぶによく・新道が旧道に草萌ゆる・袂草のいつとなくたまつてゐる捨てる　碓氷山中雑詠・木の芽あかるい家があつて誰もゐない・道がわからなくなり啼く鳥歩く鳥・遠くなり近くなる水音の一人・山のふかさはみな芽ぶく・誰にも逢はない呼子鳥啼く・はるかにあかるく山ざくら花ざかり・山ふかうしてなんとするどく・足もとあやうく咲いてゐる一りん・春日さんらんとして白樺の肌・ふと河鹿なくたゝずみて聴く　（追加）・古びた鯉幟も、屋根には石をおき・はてしなき旅空の爆音を仰ぐ・まともに見えてくる妙義でこぼこ　（〃）・行き暮れてほの白くからたちの花・けふは今日の太陽をいたゞいて行く・一人となれば分け入る山のかつこう・うそ寒う夕焼けて山羊がないて　稔郎居・ゆうべいそがしい音は打つてくださる蕎麦で　江畔老と共に岩子鉱泉に・はなしがとだえると蛙げろげろ　自省・衣かへて心いれかへて旅もあらためて・親馬仔馬みんな戻つてくるあたゝかし・桑畑芽ぶく中の奉安殿・浅間朝からあざやかな雲雀の唄です　（追加一句）追分・こゝで休むとする道の分れるところ・芽ぶく林の白樺の白く

「わびしさも」

五月八日（続）

高原、山国らしく、かるさん姿のよろしさ。たうとう行き暮れてしまつた、泊めてくれるところがない、ままよ今までの贅沢を償ふ意味でも野宿しよう、といふ覚悟で、とぼ／＼峠を登つて行くと、ルンペン君に出逢つた、彼も宿がなくて困つてゐるといふ、よく見ると、伊豆で同宿したことのある顔だ、それではいつしよに泊らうといふので、峠の中腹で百姓家——そこには三軒しかない家の一軒——に無理矢理に頼んで泊めて貰つた。二人の有金持物を合して米一升金五十銭、それだけ全部をあげる。旅烏はのんきであるがみじめでもある。そしてこの家の乱雑はどうだ、きたない子供、無智なおかみさん、み

じめな食物、自分の生活がもつたいない、恥づかしいとつく／″＼思つたことである。夜ふけて雨、どうやら雪もまじつてゐるらしい、何しろ八ヶ岳の麓だから。いつまでも睡れなかつた。

　　五月九日　日本晴。

　明けきらないうちに起きた、朝日が寒さうな光を投げてゐる、霜柱がかたい。見よ、雪をいたゞいた山なみのうつくしさ。早々出立、話しながらゆつくり歩く。落葉松、筒鳥、清流、あゝその水のうまさ。石ころ道をだいぶ歩いて清里駅、こゝらの駅は日本で最高地に在る停車場、熊が汽車見物に出て来たといふ話。やがて信濃路に入る、野辺山風景は気に入つた、第二の軽井沢になるといはれている、いちめんの落葉松林だ。妙な因縁で、帰りタクシーに乗せて貰ふ、有難かつた、ルンペン君は驚いてゐる。海ノ口からまた歩いて海尻、そしてやうやく小海駅、こゝでルンペン君に別れる、汽車は千曲川に沿うて下りやがて岩村田町、江畔老の無相庵に客となる、家内中で待つてゐて下さつた、涙ぐましくもうれしかつた。おゝ浅間！　初めて観るが懐かしい姿。江畔老の家庭はまた何といふなごやかさであらう、父草君が是非々々といつて按摩して下さる、恐れ入りました。

　　五月十日

　夜来の雨は霽れて、空の色が身にしみる、雪の浅間の噴烟ものどかだ。炎の会句会、粋花、如風、等々の同人に紹介される。山国の春は何もかもいつしよにやつて来て、とても忙しい、人も自然も。手打蕎麦――いはゆる信州蕎麦の浅間蕎麦――その味は何ともいへない、一茶がおらがそばと自慢したゞけはある。

　逢つて何よりお蕎麦のうまさは

　鼻頭稲荷の境内で記念撮影。江畔老から牧水の事をいろ／＼聞く。うれしくあたゝかくやすらけく寝たり起きたり、我がまゝをさせていたゞく。

　　五月十一日　晴。

　朝の散歩。軽井沢方面へ行かける。――浅間をまへに落葉松林に寝ころんで高い空を観てゐると、しみ／″＼旅、春、人の心、俳句、友の

情、……を感じる、木の芽、もろ／＼の花、水音、小鳥の歌、……何もかもみんなありがたい。信濃追分、いかにも廃駅らしい（北国街道と中仙道との別れ路）。浅間大神里宮

芭蕉句碑――婦支飛寿石者浅間能野分可哉

天然製氷所が散在してゐる。やうやく沓掛に着く、別荘地らしい風景である。軽井沢駅前の噴水の味は忘れない。駅前の旅館に泊る、一泊二食で一円、私には良すぎるが仕方がない。一人一室一燈はうれしい、一杯ひつかけて、ぐつすりと寝た。

水音をさぐる

五月十二日　晴。

高原の朝のすが／＼しさ、しづけさ。旧道碓氷越――

遊園道路を登る、吊橋、雑木若葉。ふと右に浅間があらはれる、小鳥合唱。見晴台、妙義の奇怪なる山容。峠町、熊野神社、上信国境。こゝまで半里、遊覧往復客。

道を踏み違へて（道標が朽ちてゐたので、右へ下るべきを左へ霧積温泉道を辿つたのである）、山中彷徨、殆んど一日。

山ざくら、山くずれ、落葉ふかく。すべつてころんで、谷川の水を飲む。

やつと湯の沢といふところへ下つて、杣人と道連れになつて、坂本の宿場に急いだ。

芭蕉句碑（一つぬいで――）。

横川の牛馬宿に泊る、座蒲団も出してくれ茶菓子も出してくれて七十銭。客は私一人、熱い風呂を浴びて爐辺に胡坐をかいて、やれ／＼助かつた！

五月十三日　晴――曇。

早朝出立。碓氷関所阯、妙義の裏、霧積川の河鹿、松井田町（折からのラヂオは赤城の子守唄だつた）、きんぽうげ、桐の花、安中原

市、そこの杉並木はすばらしかつた。途中で巡査に訊問されたりなどして、癪だから理髪する。……高崎市の安宿に寄ると、ふしぎや、また例のルンペン君に出会つた、人生万事如是々々、そして人生はまた一期一会だ（但会一処でもあるが）、幸にして持合があるので、ビールとビフテキとをおごつてあげた、彼のよろこび、彼のかなしみ、それは私にもよく解る、君よ幸福であれ。

　　五月十四日　曇――晴。

　こゝから引返すことにして、松井田まで歩き、そこから汽車で御代田まで、また歩いて暮れ方、平原の甘利君の宅に落ちつくことが出来た。手打蕎麦も酒もうまかつた、よく睡れた。

　　五月十五日　曇。

　附近散歩、小川でふんどしを洗ふ。甘酒を頂戴するなど。炬燵に寝そべつて悠々休養。椋鳥がしきりに啼く、初めて郭公を聞いた、旅情あらたなり。夜おそくまで閑談。親子四人の睦まじい家庭。

　　五月十六日　曇、夜は雨。

　お早う、椋鳥君、おや鶯も来てゐる。さようなら、ごきげんよう。再び江畔居の厄介になる。午后は岩子鉱泉行、そして平根の粋花居へ、よばれて酔うて夜になつて帰る。比古君黙壺君からの来信ありがたし、ありがたし。

　　五月十七日　雨、曇、そして晴。

　稔郎君、粋花君来訪。終日閑談、悪筆を揮ふ、いつものやうに。
――甲州路。

　信濃路。――

　・あるけばかつこういそげばかつこう　　　（無相庵）・のんびり尿するそこら草の芽だらけ・浅間をまへにおべんたうは青草の・風かをるしのの国の水のよろしさは歩々生死、一歩一歩が生であり死である、生死を超越しなければならない。転身一路、自己の自己となり、自然の自然でなければならない。自然即自己、自己即自然。　　自問自答ゆうぜんとして生きてゆけるかしようようとして死ねるかどうぢ

や、どうぢや山に聴け、水が語るだらう

　生の執着があるやうに、死の誘惑もある。生きたいといふ欲求に死にたいといふ希望が代ることもあらう。

　　五月十八日　日本晴。

　今日も無相庵江畔居滞在。朝から郭公がさかんに啼く。江畔老といつしよに閼迦流山へ遊ぶ、尻からげ、地下足袋、帽子なしの杖ついて、弥次さん喜多さん、とてもほがらかである。長野種馬所の青草に足を投げ出して休む、右は落葉松林、左は赤松林、前は青々と茂る草のむかうに残雪の八ヶ岳蓼科の連峰、よい眺望である。初めて林檎の木と花とを見た。信濃――北国山国はどこでもさうであるが――梅桜桃李一時開で、自然も人間も忙がしい。此地方には山羊が多い、おとなしい家畜だが、あの鳴声はさびしい。一里あまり歩いて、香坂明泉寺。自然石のよい石碑が立つてゐる、曰く

　南朝忠臣香坂高宗

　お山へ登る、老樹うつさうとして小鳥がしきりに囀づる。頂上十二丁目、大正十二年八月摂政宮殿下御登臨之処といふ記念碑が建てられてある、眺望がよろしい、白馬連山が地平を白く劃つてゐる。木蔭の若草に寝そべつて、握飯を食べる、一壜を携へて来ることは忘れてゐない、ほろ／＼酔ふてうたゝ寝する、まことに大平楽である。一杯の水も仏の涙かな――といふ風の閼迦流山くづしがむき出してある、放浪詩人三石勝五郎さんの作。ぶら／＼歩いて戻つたのは四時頃であつた。電報が二通来てゐた、比古君から、澄太さんからである、どちらも有難い通知だつた。こゝで私はまた我がまゝ気まゝな性癖を発揮して、汽車で小諸へ向つた、明後日また引返してくるつもりで。私の滞在もずゐぶん長くなつた、桑が芽ぶいて伸びた。……

　今日の収穫

　・あるけばかつこういそげばかつこう・落葉松は晴れ切つてかつこう・若葉したたるながれで旅のふんどしを・お山へのぼる花をむしつてはたべ・岩に腰かけ樹にもたれ何をおもふや・いただきの木のてつぺんで鳥はうたふ・おべんたうをひらくどこから散つてくる花びら・

雲かげもない木の芽のしづか・寝ころびたいスロープで寝ころぶ若草・落葉松落葉まどろめばふるさとの夢・落葉松落葉墓が二つ三つ　　　懐古園三句・浅間は千曲はゆうべはそゞろ寒い風・ゆふ風さわがしくわたしも旅人・その石垣の草の青さも（牧水をおもふ）・浅間をむかうに深い水を汲みあげる・ぞんぶんに水のんで去る藤の花・風かをる信濃の国の水のよろしさ・虱がとりつくせない旅から旅・浅間へ脚を投げだして虱をとる・まんなかに池がある昼の蛙なく（岩村田遊廓）・浅間したしいあしたでゆふべ

で　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（此の二句父草居にて）・ゆつくりいくにち桑が芽ぶいて若葉した　　　江畔老に・けさはおわかれの、あるだけのお酒をいたゞく・草萌ゆる道が分れる角で別れる・逢へば別れるよしきりのおしやべり・さえづりかはして知らない鳥が知らない木に・水はあふれるままにあふれてうららか

○自戒一則——

貪る勿れ、疑ふ勿れ、欺く勿れ、佞る勿れ、いつもおだやかにつゝましくあれ。

五月十八日（続）

岩村田から小諸まで二里半、汽車の窓から眺める風景は千曲谿谷的なものがある、乙女といふ駅名も珍らしかつた（九州に妻といふ地名もあるが）。小諸へ着いたのは夕暮、さつそく宿を探して、簡易御泊処鎌田屋といふのを見つけた、老婆が孫を相手に営業をつゞけてゐるといふ、前金で六拾銭渡す、茶菓子、座蒲団、福袍を出してくれる、有難い、夜具も割合に清潔だつた。暮れきらないうちに、懐古園（小諸城阯）を逍遙する、樹木が多くて懐かしいが、風が吹いて肌寒かつた。藤村詩碑は立派なものである、藤村自身書いた千曲川旅情の歌が金属板にしてある、その傍の松の木が枯れかけてゐるのは寂しかつた、……雲白く遊子かなしむ……旅情あらたに切なるを感じた。二之丸阯に藤村庵がある、古梁庵主宮坂さんが管理してゐる、小諸文化春秋会といふ標札も出してある（藤村氏自身は藤村庵を深草亭と名づけた）。二之丸阯の石垣の一つに牧水の歌が刻んである——

かたはらに秋くさの花かたるらく　　ほろびしものはなつかしきか

な

　見晴台からの眺望はよろしい、千曲川のよいところがよく眺められる。噴き出してゐる水もよかつた。夜は一杯ひつかけて街を散歩する、小諸銀座といふてもお客は通らない、小川の水音が聞えるだけだ。なか／＼寒い、風が旅愁をそゝる。また一杯ひつかけて、おばあさんのいはゆる娑婆ふさぎのからだを寝床に横たへた。……

　　五月十九日　曇、風、雨。

　さすがに浅間の麓町だけあつて、風が強くて雨が冷たい。やつぱり酒だ、酒より外に私を慰安してくれるものはない（句作と友情とは別物として）、朝から居酒屋情調を味つた。風雨の中を中棚鉱泉宿に落ちつく、安くして貰つて一泊二飯一円。あまり待遇はよくないけれど、幾度でも熱い湯にはいれるのがうれしい。終日ごろ／″＼して暮らした、終夜ぐうぐう寝た。

　　五月二十日　晴。

　八時出立、戻橋を渡つて、千曲川に沿うて、川辺村を歩く。初めて松蝉を聞いた、初夏気分だ。谿谷のながめがよろしい、浅間山のすがたも悪くない（浅間山の形容は小諸からはよくない、岩村田からがよい）。途中人蔘栽培の畠がちらほら見える、人蔘は日光を忌み雨を嫌ひ、一度育つた土では十余年も育てることが出来ないさうな、贅沢な植物ではある。八ツヶ岳にはまだ雪が光つてゐる。八幡まで二里、左折して千曲川を渡る、中津といふ田舎町があつた。○また風が吹きだした、彼がどんなに孤独な旅人を悩ますかは、彼でなくては解るまい。二里近くで岩村田町、相生の松とよばれる中仙道往還の名木があつた、赤松黒松の雌雄両木が絡み合ひ結びついてゐる。書き忘れたが、途中、中佐都といふ部落に蕉翁句碑があつた。

　刈かけし田面の鶴や里の秋

　岩村田町に着いた時はもう三時、もりそばを味はひ銘酒を味つた。信濃は一茶がうたつてるやうに、蕎麦の名物を誇つてゐるが、とりわけ、戸隠蕎麦（いはゆる更科蕎麦）浅間蕎麦（浅間山麓一帯の田舎蕎麦）がうまいさうである、私も幸にして浅間蕎麦は再三御馳走になつ

たことである。また／＼父子草居——これは私の命名——の食客となつた。夜は最後の一夜といふので、みんないつしよにしみ／″＼と語つた、一期一会の人生ではあるが、縁あらばまた逢へるであらう。うつくしい夕焼が旅情を切にしたことも書き落してはならない。物みな可かれと祈る。

　　五月廿一日　快晴。

　いよ／＼出立だ、朝早くから郭公がしきりに啼く。八時、岩村田の街はづれまで江畔老が見送つて下さる、ありがたう。さよなら、さよなら、ほんたうに関口一家は親切な温和な方々ばかりであつた、羨ましい家庭であつた。御代田駅まで歩く、一里半、沓掛まで汽車、それから歩けるだけ歩いた。長倉山の頂上、見晴台の見晴らしはすばらしかつた、山また山である、浅間は近く明るく、白馬は遠く白く眺めて来たが、こゝでは高い山低い山、鋭い山丸い山が層々として重なつてゐる、軽井沢の一望も近代的風光たるを失はない。別荘散在、赤いのや青いのや、日本風なのや西洋流なのや。かつこう、うぐひす、からまつ、みづおと、そしてほとゝぎすがをり／＼啼く、千ヶ滝の水もおいしかつた。行人稀で、時々自働車。峯の茶屋で昼飯、こゝを中心にして自働車専用道路がある、私設の有料である。こゝからすぐ国界県界、道は何だか荒涼たる六里ヶ原を横ぎる。浅間村牧場、北軽井沢駅。白樺が多い、歯朶の芽が興を引く、所有建札が眼に障る。養狐場が所々にある、銀狐を生育さすのである、狐の食料は人間よりも贅沢で月二十円位はかゝるさうな、そして一ヶ年の後には毒殺されて毛皮は数百金に売れるといふ、資金を要する商売であるが、なか／＼儲かるさうな。吾妻駅から電車で草津へ、五里七十四銭は高いやうであるが、登り登るのだから成程と思ふ、駅で巡査さん駅長さんと雑談する、共に好人物だつた。殺風景な山や家がつゞいてゐたが、嬬恋三原あたりの眺めはよかつた。浅間高原の空気を満喫した。高く来て肌寒い。六時頃やつと草津着、やうやく富山館といふ宿をたづねあてた、泊銭七十銭、湯銭十二銭。同宿は病遍路、おとなしい老人、草津といふところは何となくうるさい、街も湯もきたならしい、よいとこでもなさゝうだ、お湯の中にはどんな花が咲くか解つたものぢやない！熱い湯にはいつて二三杯ひつかけて、ライスカレーを食べて（これが宿

の夕食だ、変な宿だ）ぐつすり寝た。夢は何？…………

五月廿二日　晴、曇る。

朝湯はほんたうによろしいな、朝は共同湯もきれいだつた。宿の主人は石工、こつこつこつこつ、でもおちついてしづかだ。病遍路さんは腎臓脚気でよろ／＼して軽井沢――の方へ出て行つた。……今日一日は休養することにして、ノンキにそこらを歩く。湯ノ沢といふ場所へ行つた、そこは業病人がうよ／＼してゐる、すまないけれど、嫌な気持になつて、すぐ引き返した、かういふ場所でかういふ人々に心から接触してゐる宣教師諸君には頭がさがる、ほんたうに。白根神社参拝、古風で、派手でないのがうれしい。草津気分――湯町情調。

何だかうるさいと思つたが、一日二日滞在してゐるうちに何となく好きになるから妙、しかし何となくきたない。湯があふれて川となつて流れてゆく、浪費の快感がないでもない。山の水を縦横に引いて、山の水はつめたくてうまい。湯の花、そして草津味噌。○ロクロくる／＼椀が出来る盆が出来る。……昼もレコードがうたひ、三味線が鳴るのは、さすがに草津。しかし草津シーズンはこれからだ、揉湯、時間湯の光景はめづらしくおもしろい、そしてかなしい。草津よいとこかよくないとこか、乞食坊主の私には解らん、お湯の中に花が咲くかどうか、凡そ縁遠いものです。

午后、宿のおかみさんに案内されて、しづかなきれいななぎの湯といふのへゆく、なるほど不便なだけしづかで、紙ぎれや綿きれがちらばつてゐない、しかしこゝもやつぱり特有の男女混浴だ、男一人（私に）女五人（二人はダルマ、二人は田舎娘、一人は宿のおかみさんだ）、ぶく／＼下から湧く、透き通つて底の石が見える。皈途、一杯また一杯、酔つぱらつて、おしやべり、――それもよからうではありませんか！

ぼろ／＼　どろ／＼

五月廿三日　雨、霽れて曇。

滞在、昨夜の今朝で身心おだやかでない。一切万事落々漠々。私は何故時々泥酔するのか、泥酔しないではゐられないのか。――私はほ

んたうにおちついてゐない、いつも内面では動揺してゐる、——それもその源因ではあるが、私は自己忘却を敢てしなければ堪へられないのである、かなしいかな。私はまだ自己脱却に達してゐないのである、泥酔は自己を忘れさせてはくれるが、自己を超越させてはくれない。

　生死を生死すれば生死なし。煩悩を煩悩せずば煩悩なし。

　　五月廿四日　雨。

　昨夜の風雨は高原らしい風雨であつた、雷鳴急雨、それは私の荒みつゝある身心を鞭つた。今日も詮方なしに滞在する、私のやうなものでも、それは時間と旅費との浪費に過ぎなかつた。よく降る、よく寝る、よく食べる、よく飲める、よく考へる。……

　　　（草津雑詠）もめやうたへや湯けむり湯けむりふいてあふれて湯烟の青さ澄む

　揉湯——時間湯。

　　五月廿五日　行程四里（上り三里、下り一里）。

　からりと晴れてまさに日本晴、身心あらたに出立する、万座温泉まで四里には近いのだが、七時半から三時までかゝつた、ずゐぶん難かしい山路だつた。草津の街を出はづれると落葉松林、それから落葉松山、そして灌木と熊笹、頂上近くなれば硫黄粘土と岩石ばかり。白根山は噴煙をふきあげてゐる、荒涼として人生の寂寥を感じた。涙のない人生、茫漠たる自然。

　　五月廿五日（続）

　まことにしづかな道だつた、かつこうもうぐひすもほうじろもよく啼いてくれたが、雪のあるところはすべるし、解けたところはぬかつてゐるし、はふたりころんだり、かなり苦しんだ。残雪をたべたり、見渡したり、雪解の水音を聴いたり、ぢつと考へこんだり。山、山、山、うつくしい山、好きな山、歩き慣れない雪の山路には弱つたが、江畔おくるところの杖で大いに助かつた、ありがたし／＼。草津から二里あまり登つて芳ヶ平、ヒユツテーがある、スキーの盛んなことだ

らうなどゝ思ひつゝ歩いた。○白根山の頂上は何ともいへないさびしさだつた、噴烟、岩石（枯木、熊笹は頂上近くまであつたが）、残雪、太陽！落葉松の老木は尊いすがたである。やうやく一里あまり下ると、ぷんと谷底から湯の匂ひ、温泉宿らしい屋根が見える、着いたのは三時だつた、何と手間取つたことだらう、それだけ愉快だつた。とりつきの宿——日進館といふ、私にはよすぎる宿に泊る、一泊二飯で一円。すべてが古風であることはうれしい、コタツ、ランプ、樋から落ちる湯（膳部がいかにも貧弱なのはやつぱり侘しかつたが）、何よりも熱い湯の湧出量が豊富なのはうれしい。○ぐん／＼湧きあがる熱湯が湛へて溢れる湯けむりを見よ。旅館は並んで二軒、離れて一軒、どれも相当大きい、たゞし今頃は閑散季で、ゆつくりとしづかである。自炊式であることはよろしい、給仕してくれないのが私には気楽でよろしい。さつそく洗濯をする、それから鬚を剃り爪を切る、さつぱりする、あかるくなる。だん／＼曇つてきた、とかく山国は雨になりがちだ、明日もまた降るかも解らない。○山国と味噌汁、朝も汁、晩も汁だ、汁はわるくないが、その味噌が臭くて酸つぱいと弱る。ねむれないので夜ふけてまた入浴、誰もゐない薄暗い湯壺にずんぶりひたつて水音に心を澄ます、……内湯のありがたさ、山の湯のありがたさである、……よくねむれた。

　万座よいとこ、水があふれて湯があふれて。昔風で、行き届かないやうな、気のきかないやうな昔ぶりがうれしい。遠慮のない、見得を張らないで済む気安さ。のんびりとくつろげる。苦湯へ下つて一浴びしなかつたことは惜しかつた、その豊富な素朴な孤独味を知らなかつた（長野で北光君に教へられて残念がつた）。草津は金持と患者とが入湯するところだらう、万座はしづかに体を養ひ気を吐くところである、プロでもブルでも。古来からの有名さと交通の便利さとが草津を享楽郷とし、また療養地とした、たしかに草津の湯は効く、浴してゐるといかにも効くやうに感じる。万座は交通の不便で助かつてゐる、草鞋穿きで杖をつかなければ登つて行けないところに万座のよさの一つがある。こん／＼と湧いてなみ／＼と湛へてそしてどし／＼溢れる温泉のあたゝかさ。この湯宿は案外田舎式であるが、そこによいところ好もしいところがある、ヘマなサービスぶりにもかへつて愛嬌がある。朝の膳に川魚のカツレツが載せてある、ちようど草津の宿で、夕

飯としてカレーライスをどつさり出されたやうなものだ、おかしくもあり、いやでもあり、珍妙々々。私が温泉を好むのは、いはゆる湯治のためでもなく遊興のためでもない、あふれる熱い湯に浸つて、手足をのび／＼と伸ばして、とうぜんたる気分になりたいからである。豊富な熱湯、閑静な空気が何よりだ。

——（山をうたふ）——・春の鳥とんできてとんでいつた　（白根越へ）・ひとりで越える残雪をたべては・山ふところ咲いてゐる花は白くて・杖よどちらへゆかう芽ぶく山山・墓が一つこゝでも誰か死んでゐる・山路しめやかな馬糞をふむ・残雪ひかる足あとをたどる・山路たま／＼ゆきあへばしたしい挨拶・春の山のそこここゝけむりいたゞきから吐く・いたゞきの木はみんな枯れてゐる風・残雪の誰かの足あとが道しるべ　——（山をうたふ）——・山は火を噴くとゞろきの残雪に立つ・すべつて杖もいつしよにころんで・残雪をふんできてあふれる湯の中・とつぷり暮れて音たてて水　万座温泉・水音がねむらせないおもひでがそれからそれへ・更けてもう／＼とわきあがるもののしゞま　万座峠・霧の底にて啼くは筒鳥・山路なつかしくバツトのカラも・ふきのとうも咲いてほほけて断崖・ごろりと岩が道のまんなかに・あんなところに家がある子供がゐる犬がほえる（追加）　内山へ・霧雨しくしく濡れるもよろしく・けふは街へ下る山は雨・八重ざくらうつくしく南無観世音菩薩像・かつこう啼いて霽れさうなみどりしづくする・こんやの寝床はある若葉あかるい雨・このみちがをなごやへ霽れさうもないぬかるみ・こゝろおちつかない麦の穂のそよぐや・つめたい雨が牡丹に、牡丹くづれる・ころびやすうなつたからだがころんだままでしみ／″＼・明けるとかつこう家ちかくかつこう・すぐそこでしたしや信濃路のかつこう・崖から夢のよな石楠花で・ゆふべ啼きしきる郭公を見た・観てゐる山へ落ちかゝる陽を見る・これが胡桃といふ花若葉くもる空・ちよいちよい富士がのぞいてまつしろ・つかれもなやみもあつい湯にずんぶり（追加）

五月廿六日　曇、后雨。

未明起きてすぐ湯にはいる、朝湯の快さは何ともいへない。さすがに高原、肌寒い、霧雨が降つてゐる、もことしてあたりが暗い。今朝

はしゆくぜん身心の新たなるを覚えた、私はやうやくまた一転化の機縁が熟してきたことを感じる。七時出発、長野へ向ふ、身も心も軽い、霧雨しつとり、濡れよとままだ。万座川の水声、たちのぼる湯けむり、残雪のかゞやき、笹山うぐひすのうた、巨木のすがた、小草のそよぎ、——ゆつたり歩く。万座峠（山田峠ともいふ県界）の頂上まで半里、それから山田温泉まで下り三里。雪も残つてをり、破損したところもあるけれど、しづかなよい道、らくな道、好きな道であつた。岩かゞみ草などがちらほら眼につく、莟はまだ堅い、いろ／＼の小鳥がほがらかにさえづつてゐる、しづかな木立、きよらかな水音、くづれた炭焼小屋、ふきのとう、わらび、雑木の芽、落葉松の若葉はこまやかに、白樺の肌は白うかゞやく。虎杖橋附近の眺望はよかつた、松川谿谷美の一景。七味橋、それを渡つたところに湯宿一軒、七味温泉と呼んでゐる。さらにまた五色温泉がある、こゝも宿屋一軒、めづらしいのは河原湯（野天風呂）である、だんだん里近くなる。雑木山のうつくしさよ、青葉若葉の青さ、せぐりおちる谷水の白さ、山つゝじの赤さ。道は広くてよいけれど、山崩れがあつて道普請が初まつてゐる。ほどなく山田温泉に着いた、まさに十二時、薬師堂があつて吉野桜が美しい。山田温泉場はこぢんまりとして、きれいに掃き清められてゐる、そこがかへつて物足らないやうにも感じられる。高井橋といふ吊橋も立派なものである。バスが通う、一路坦々としてすべるやうに須坂へ向ふ、道ばたに蒲公英が咲きみだれてうつくしい。子安橋、樋沢橋、千曲川が遙かに光つて見える、郭公が啼きつゞける。途中、酒屋に寄つて一杯また一杯。須坂まで三里、さらに西風間まで三里、バスも電車も都合よくないので歩く。晴れそうであつたが降つて来た、小雨だから濡れるままに濡れる。妙高、黒姫、戸穏の山々が好きな姿を見せたり消したりする。千曲川を渡る、村上橋は堂々たるものである、もう長野は遠くない。やうやく北光居をおとづれる、すぐ着換へさせて下さる、手織木綿らしいぎこちなさが却つて温情と質実とを与へる、やれ／＼よかつた／＼ありがたい／＼。（今日は強行で十里近く歩いたのである）再び信州に入つて上野をふりかへると、そこに多少の感想がある——上洲から信州へはいつてくると明るくなつたやうだ（白根から万座峠を下つて）、概して道がよろしい、道標がしんせつに建てゝある、旅人はよろこぶのである。

青く明るく信濃の国はなつかしきかな

秋山部落の話（北光君から聞く）

平家の残党——秋山美人——（離れておくれてゐたのが現今では最も新らしい）——東京へ女給として進出、モダンガール。

（信濃から越後へ）・こゝから越後路のまんなかに犬が寝てゐる（関川にて）・ゆれてゐるかげは何の若葉をふむ・飲んで食べて寝そべれば蛙の合唱（迂生居即事）・首だけある仏さまを春ふかき灯に（〃）・ガラス戸へだてて月夜の花が白い（〃）・めづらしく棕梠が咲いてゐて少年の夢（追憶）・砂丘のをんなはをなごやのをんなで佐渡は見えない（日本海岸）　柏原にて・ぐるりとまはつてきてこぼれ菜の花（土蔵）・若葉かぶさる折からの蛙なく（墓所）・孫のよな子を抱いて雪も消えた庭に（銀汀に）・砂丘が砂丘に咲いてゐる草の名は知らない・とかく言葉が通じにくい旅路になつた・くもりおもたい空が海が憂欝（日本海）・みんなかへる家はあるゆうべのゆきき・なんにもない海へ煙ぼうぼうとして（日本海）・砂山青白く誰もゐない

五月廿七日　雨。

まだ明けきらない床の中で話しする、北光君はまじめでそしてあたゝかい人だ。よしきりが啼きつゞける、お前はまつたくおしやべりだね、裏店のおかみさんのやうに。よかつた、ほんたうによかつた、万座で雨にふりこめられると、いらない心配をしなければならなかつたであらう。朝酒、寄せ書、悪筆。昼酒、雑談、そしてまた乱筆。夕方から長野銀座を散歩する、雨が降るのに御苦労々々々、郵便局はよかつた、湯屋もよかつた、蕎麦はむろんうまかつた、帰途、すべつてころんだ、そして一句拾つた！夜は句会、五人で親しく句会、といふよりも座談会、そこには俳人的といふよりも人間的なあたゝかさがあつた、一時近くなつて散会した。降る、降る、ほんたうに根気よく降りつゞける雨かな。

五月廿八日

曇、もう霽れてもよいだらう、どうやら霽れさうだ、白馬連峰が遠

く白くかゞやいてゐる。午前中はおとなしく執筆。酒はやつぱりうまい、朝酒、昼酒、晩酒よろしい、今日は今日の風がふくまゝに、明日は明日の風がふくだらう、／＼といつた気分で、さよなら／＼、ありがたう／＼、はい／＼。午后は北光君に連れられて紅葉城君を訪ねる、一杯機嫌で揮毫。三人同道して長野見物――まづ西光寺（刈萱親子地蔵尊）へ詣でる、父寂照坊母千里御前、そのまんなかに道念坊の墓がある、それから美篶橋上に立つ、白根山四阿山のすがたもよろしい。向うは川中島、そこは千曲川と犀川とが合流するところで有名な古戦場、前は杏の里と呼ばれる部落、朝日山の阿弥陀堂はその右手に見える、さらに裾花川に架してある相生橋のほとりへ行く、とても巨大な柳がある、すこし溯ると白岩といはれる戸隠名勝裾花渓最初の観光場所がある、今日は雪解で水が濁り、桜は散つて河鹿はまだ鳴かない。街をまつすぐにいよ／＼善光寺である（途中郵便局でＫからの手紙を受取つた、すまない／＼ありがたい／＼）。長野の善光寺か、善光寺の長野かといはれるほどであつて、善光寺はまことにうれしい寺院である、お開帳がすんだばかりで、まだその名残がある、八百屋お七物語の吉三郎建立と伝へる濡仏がある、大勧進大本願の建物は、両者の勢力争を示さないでもない、山門も本堂もがつちりとして荘麗といふ外はない（何と鳩、いや燕の多いことよ）、それにしても参道の両側の土産物店の並んでゐること、そしてその品々の月並なこと。帰途紅葉城君の御馳走でやぶといふ蕎麦中心の料理屋へ寄つた、座敷も庭園も蕎麦も料理も悪くなかつた、私にはよすぎるよさだつた、紅君とは別れて北君と二人で入浴して帰宅して安眠した。

　　五月廿九日　曇。

　逢ふは別れのはじめ、名残の酒杯をかはして、衣更して、いろ／＼御世話になりました、どうぞ御大事に。……長野駅はそれにふさはしい仏閣式建物である、こゝまで北光君と紅葉城君とが見送つて下さつた、そして切符やら煙草やら何やらかやら頂戴した、八時の汽車で柏原へ。――車中で遠足の小学生が私に少年の夢を味はせてくれた、山のみどりのうつくしさ、まつたく日本晴の日本国だ、九時すぎてさびしい山駅柏原に着いた。

　□触処生涯、これが私の境地でなければならない。□省みて恥づかし

くはないか、私はあまりに我がまゝ気まゝではないか、ゼイタクではないか、プチブル的ではないか。……（五月廿九日所感）

活花のお師匠さん——といつてもまだ若い——北光君は語る——盛花からだん／＼投入になつてゆくから面白いですよ。○白樺は他の植物とは違つて、表皮を剥がれても痛痒を感じない——生育上支障を来さない——むしろそれを喜んでゐるやうに見えるといふ、営林署でも皮を剥ぐことそのことは構はないけれど、観賞上美観を妨げないやうに路傍の白樺だけは皮を剥がないやうにといつてゐるさうである（薪材として役立つより外なかつた白樺が趣味的に色々使用され初めたことはうれしいことの一つ）。○その土地でその土地の人々にその土地の山の名とか河の名とかを訊ねて、知らない、知りませんと答へられると腹が立つ、これは学校の先生がよろしくない。○銀汀君から聞いた米若の話。

彼は今浪界第一の人気者だが、若い時は信濃川分水工事の土方だつたさうな、あまり浪花節がうまく、彼がうたひだすと、みんな聞き惚れてしまつて仕事が手につかないので解雇されたといふことだ。

○虹果君から聞いた話。

北国ではよく飲む、冬ごもりは毎日毎夜飲むさうで、酒でも飲まなければやりきれないといふ、そんなわけで、一升飲むとか二升飲むとかいはないで、二日飲めるとか三日飲めるとかいつて酒量を日数であらはすさうな。

海国から輸入された鯡が山国信濃化されて鯡昆布巻となつて特殊の味と値とを持つた。

五月三十一日　雨。

夢のやうに雨を聞いたが、やつぱり降つてゐる、昨日こゝまで来てゐたことは（宿屋で断られて汽車に乗つたのだつたが）ほんたうによかつた、宿で降りこめられて旅費と時間とを浪費することは私のやうなものには堪へがたい。早く眼は覚めたけれど家人の迷惑を考へて、床の中でぼんやりしてゐる。二階の別室に閉ぢ籠つて身辺整理。信濃川産の生鮭はおいしかつた、生れて初めて知つた鮭の味である。若葉

にふりそゝぐ雨の音はよい、隣は図書館、裏は武徳殿、あたりはしづかである。虹果君来訪、おもしろい人である。銀汀君と仕事の合間には話す、なつかしい人だ、よきパパであるらしい。長岡散歩、入浴、一番風呂で気持がよかつた。夕方から句会場――おとなりの仕出屋――へ出かける、会者五六人、遠慮なく話し合ひ腹一杯飲み食ひする、例によつて悪筆の乱筆を揮ふ、十二時近くなつて散会、酔ふて戻つてすぐ寝る、酒よりも水、水。

（越後をうたふ）・くもつてさむく旅のゆふべのあまりしづかな・湯あがりの、つつじまつかに咲いて・春がいそがしく狂人がわめく人だかり（北国所見）・図書館はいつもひつそりと松の花・若葉して銅像のすがたも（互尊文庫）　追加数句・桑畑の若葉のむかうから白馬連峰・煙突にちかづいて今日の太陽

戸隠に小鳥の里あり、うれしいではないか。一茶翁遺蹟めぐり。

六月一日　晴。

四時にはほがらかに眼覚めた、私はたしかに不死身にちかいらしい、それは幸福でもあり不幸でもあるやうだ！初夏の朝のすが／＼しさよ、身も心ものび／＼として、おのづからほゝゑましくなる。街の鳩――飼主のない――が容姿には不似合な声で啼く。午前中は互尊文庫で読書、探した本は見つからなかつたが。昼飯は昨日も今日も蕎麦をいたゞいた、蕎麦はうまい、淡々として無限の味。稲青君に案内されて悠久山へ。夜は虹果居へ。飲めるだけ飲んだが。……

六月二日　曇、雨。

出立、銀汀、稲青の二君に長生橋まで送られて、さよなら、さよなら。良寛和尚の遺蹟めぐり。

良寛墓、良寛堂。あらなみをまへになじんでゐた仏。（国上山中）青葉分け行く　良寛さまも行かしたろ

出雲崎泊。

六月三日　曇。

寺泊へ、それから国上山へ。

水は滝となつて落ちる荒波

弥彦神社。バスで新潟へ。

六月四日　五日　六日　七日

新潟滞在。砂無路居。

六月八日

おわかれ。村上東町の詢二居へ。

六月九日

詢二居飲会。

六月十日

瀬波温泉にて。

六月十一日　十二日

ぼう／＼ばく／＼。

六月十三日

鶴岡へ、秋兎死居。

六月十四日

秋君といつしよに湯田川温泉へ。

六月十五日

散歩。

六月十六日――廿二日

酒、女、むちやくちやだつた。秋君よ、驚いてはいけない、すまなかつた、かういふ人間として、許してくれたまへ。湯田川温泉行。

六月廿三日　曇。

梅雨らしく降る。私は遂に自己を失つた、さうらうとしてどこへ行く。――抱壺君にだけは是非逢ひたい、幸にして澄太君の温情が仙台

までの切符を買つてくれた、十時半の汽車に乗る。青い山、青い野、私は慰まない、あゝこの憂欝、この苦脳、——くづれゆく身心。六時すぎて仙台着、抱壺君としんみり話す、予期したよりも元気がよいのがうれしい、どちらが果して病人か！歩々生死、刻々去来。あたゝかな家庭に落ちついて、病みながらも平安を楽しみつゝある抱壺君、生きてゐられるかぎり生きてゐたまへ。

　　六月廿四日　快晴。

　令弟に案内されて市内見物。仙台はよい都会だ、品格のある都会である、市内で郭公が啼き、河鹿が鳴く。広瀬川、青葉城。東北学院に青城子を訪ねる、君は温厚な紳士である、寂しい人でもある（その事情は後で君の口から聞いた）。午後青衣子君来訪、抱壺君父子と共に会飲、しめやかな酒であつた。

　　六月廿五日　曇。

　握飯と傘とを持つて、そして切符までも買つて貰つて、松島遊覧の電車に乗り込む。塩釜神社参拝、境内神さびて、おのづから頭がさがる、多羅葉樹の姿、松島遊園、——あまりに遊園化してゐる、うるさいと思ふ。瑞巌寺（雲居禅師の無相窟）。五大堂、福浦島。松島は雨の夜月の夜逍遙する景勝であらう。三時の電車で石巻へ、露江居におちつく、お嬢さんが人なつこくてうれしい。入浴、微酔、おなじ道をたどるもののありがたさ。寝ること／＼忘れること／＼。

　　六月廿六日　雨。

　早い朝湯にはいつてから日和山の展望をたのしむ、美しい港風景である、芭蕉句碑もあつた。十時出発、汽車で平泉へ、沿道の眺望はよかつた、旭山……一関。……平泉。——

　毛越寺旧蹟、まことに滅びるものは美しい！

　中尊寺、金色堂。あまりに現代色が光つてゐる！

　何だか不快を感じて、平泉を後に匆々汽車に乗つた。九時仙台着、やうやく青衣子居を探しあてゝ厄介になる。青衣子君の苦脳と平静とは尊くも悲しい、省みて私は私を恥ぢた。

六月廿七日　晴。

——妙な夢を見た。青衣子が方々を案内して下さる、しづかな日だつた。政岡の墓、伽羅樹一もと。躑躅ヶ岡、枝垂桜の老木並木。乳房の木、萩。宮城野をよこぎる、蝶々。Ｓさんから芳醇一壜頂戴。夕方、Ｋ君わざ／＼来訪。熱い湯からあがつてうまい酒をよばれる。主人心づくしの鯉の手料理！手紙二つ書く、——澄太君へ、緑平老へ、——これは悲しい手紙だ、私の全心全身をぶちまけた手紙だ（或は遺書といつてもよからう！）、懺悔告白だ。良寛遺墨を鑑賞する、羨ましい、そして達しがたい境地の芸術である。多々楼君、都影君、江畔老、緑平老、……感謝々々。

六月廿九日　曇。

沈静、いよ／＼帰ることにする、どこへ。とにかく小郡まで、そこにはさびしいけれどやすらかな寝床がある。……七時、さよなら、ありがたう、ごきげんよう、青衣子よ、坊ちやんよ。十時の汽車で逆戻り、二時、鳴子下車、多賀の湯といふ湯宿に泊る、質実なのが何よりうれしい。いつでもどこでも、帰家穏座の心でありたい。どしや降りになつて旅愁しきり。

六月三十日　雨——曇。

眼さめるとすぐ熱い熱い湯の中へ、それから酒、酒、そして女、女だつた。普通の湯治客には何でもないほどの酒と女とが私を痛ましいものにする。

七月一日　晴。

身心頽廃。四時出立、酒田泊。アルコールがなければ生きてゐられないのだ、むりにアルコールなしになれば狂ひさうになるのだ。……

七月二日　曇。

天地暗く私も暗い。十時の汽車で南へ南へ。——雨、風、時化日和となつた。夜一時福井着、駅で夜の明けるのを待つ。明けてから歩いて、永平寺へ、途中引返して市中彷徨。

七月三日　曇。

ぼつり／＼歩いてまた永平寺へ、労れて歩けなくなつて、途中野宿する、何ともいへない孤独の哀感だつた。

七月四日　晴。

どうやら梅雨空も霽れるらしく、私も何となく開けてきた。野宿のつかれ、無一文のはかなさ。……二里は田圃道、二里は山道、やうやくにして永平寺門前に着いた。事情を話して参籠——といつてもあたりまへの宿泊——させていたゞく。永平寺も俗化してゐるけれど、他の本山に比べるとまだ／＼よい方である。山がよろしい、水がよろしい、伽藍がよろしい、僧侶の起居がよろしい。しづかで、おごそかで、ありがたい。久しぶりに安眠。

七月五日　永平寺にて。

早朝、勤行随喜。終日独坐、無言、反省、自責。酒も煙草もない、アルコールがなければ、ニコチンがなければ、などゝいふも我儘だ。山ほとゝぎす、水音はたえない。長い日であり長い夜であつたが、うれしい日であれ、うれしい夜でもあつた。

七月六日　曇。

おつとめがすんで、障子をあけはなつと、夜明けの山のみどりがながれこむこゝろよさは何ともいへない。道即事、事即道。行住座臥の事々物々を外にして、どこに人生があるか、道があるか。生活とは念々撓まざる行である。貪らざるなり、偽らざるなり、驕らざるなり。すなほにしてつゝましく、しづかにしてあたゝかく。愛するなり、敬ふなり、奉るなり。雨を観、雨を聴く、心浄うして体閑かなり。五十五才にして五十五年の非を知る、噫、生々死々去々来々転々また転々。隠すことなく飾ることなく、媚びることなく。きどらずに、ごまかさずに、こだはらずに。無理のない生活、拘泥しない生活、滞らない生活、悔恨のない生活。おのづから流れて、いつも流れてとゞまらない生き方、水のやうな、雲のやうな、風のやうな生き方。自他清浄、一切清浄。だらけきつた身心がひきしまつて、本来の自分にたちかへつたやうな気分になつた。古往今来、幾多の人間が私とおなじ過失を繰り返し、おなじ苦悩憂悶にもがき、そしておなじ最

後のものに向つて急いだであらうか。一切我今皆懺悔。（後日、私の懺悔はホンモノでなかつたことを、さらにまた懺悔しなければならない私であつた）夕の勧行随喜。独慎、自分で自分を欺くな。洗へ、洗へ、洗ひ落せ、…………垢、よごれ、乞食根性、卑屈、恥知らず、すがりごゝろ、…………洗ひ落せ。夜が更けて沈んでも睡れなかつた。

　　七月七日　曇。

　莫妄想。暁の鐘の声が――それは音でなくて、声である――が身心に沁みとほる。永平本山では、ヱレベーターは出来ても、また、水流し式の便所が出来ても、行持は綿々密々でなければならない、それが曹洞禅の本領である。黙々として、粛々として、一切が調節された幸福でなければならない。野菜料理の味。独り遊ぶ、――三日間、私はアルコールなしに、ニコチンなしに、無言行をつゞけた。これで、私の一生はよかれあしかれ、とにかく終つた、と思ふ。満心の恥、通身の汗。流れるまゝに流れよう、あせらずに、いういうとして。

　　七月八日　雨。

　朝課諷経に随喜する。新山頭火となれ。身心を正しく持して生きよ。午後、裸足で歩いて、福井まで出かけた、留置郵便物を受取る、砂夢路君の友情によつて、泊ることが出来た、そして、久しぶりに飲んだ、そしてまた乱れた。……

　　七月九日

　とぼ／＼と永平寺へ戻つて来た。少しばかりの志納をあげて、南無承陽大師、破戒無慚の私は下山した。夜行で大阪へ向ふ。

　　七月十日　降る降る。

　比古さんのお世話になる、何の因縁あつて、私はかうまで比古さんの庇護をうけるのか。性格破産か、自我分裂か。

　　七月十二日　十三日

　滞在。

　　七月十四日

夕方、安治川口から大長丸に乗つて、ほつとした。大阪よ、さよなら、比古さん、ありがたう。

七月十五日　晴。

朝の海がだいぶ私をのんびりさせた、朝月のこゝろよさ。二時、竹原着、蝼子居の客となる。蝼子君夫妻の温情は全心全身にしみこんだ。私はいつも思ふ――私は何といふ下らない人間だらう、そして友といふ友はみんな何といふありがたい人々だらう。

七月十六日　晴。

滞在。朝の散歩のこゝろよさ。ごろ寝して読みちらす、まさに安楽国である。朝酒、昼酒、そしてまた晩酒、けつかう、けつかう。打水、そこから涼しい風、煽風器の殺風景な風はたゞ風といふだけ。

七月十七日　快晴。

ひとりぶら／＼的場海岸へ、そこで今年最初の海水浴、ノンキだね。夾竹桃の花は南国的、泰山木の花は男性的。身辺整理、やうやくにして落ちつく。

七月十八日　晴。

散歩、鳩、雀、月草。……しばらくにして。……午前一時発動汽船で生野島へ渡る、Ｋさん、奥さん、お嬢さん、お嬢さんも久しくに、五人、風もよろしく人もよろしく。無坪さんは芸術家だ。夕潮に泳ぐ、私だけ残つて。星月夜、やつぱりさびしいな。

七月十九日　晴。

未明散歩。山鳩、水声、人語。

鶴岡――仙台。

秋兎死君にこれがおわかれのガザの花か秋兎死うたうてガザ咲いておくのほそみちあふたりわかれたりさみだるるはてしなくさみだるる空がみちのく　　平泉ここまで来しを水飲んで去る水音とほくちかくおのれをあゆます水底の雲もみちのくの空のさみだれこゝろむなしくあらうみのよせてはかへすあてもない旅の袂草こんなにたまりみ

んなかへる家はあるゆふべのゆききさみだるる旅もをはりの足を洗ふ梅雨空の荒海の憂欝その手の下にいのちさみしい虫として　　永平寺てふてふひらひらいらかをこえた水音のたえずして御仏とあり山のしづかさへしづかなる雨法堂あけはなつあけはなたれてゐる何もかも夢のよな合歓の花さいてわかれて砂丘の足あとをふむ島が島に天の川たかく船が船にゆう凪の蟹もそれ／″＼穴を持つ今日の足音いちはやく橋をわたりくる　　竹原　生野島萩とすすきとあを／＼として十分すずしく風は萩の若葉をそよがせてそしてそよかぜの草の葉からてふてふうまれて出た　　無坪兄に手が顔が遠ざかる白い点となつて旅もをはりのこゝの涼しい籐椅子死にそこなうて山は青くて　　螻子君に朝風すずしくおもふことなくかぼちやの花朝の海のゆう／＼として出船の船ヱンヂンは正しくまはりつゝ、朝ほんにはだかはすずしいひとり

七月十九日（続）

老鶯しきりに啼く、島の平和。島もうるさいね、人間のゐるところ、そこは葛藤のあるところ。昼寝の夢はどんなであつたらう！

水音のこゝろのふるさと波がしろくくだけてはけふも暮れゆく

待てば海路のよか船があつた、紫丸に乗せてもらうて竹原へもどることが出来た。夕凪の内海はほんにうつくしい。一期一会、いつも、いつも一期の会。夜は螻子居の家庭をうらやみつゝ寝てしまつた。

七月廿日　晴。

いよ／＼皈ります、随縁去来だ。煩悩、煩悩、煩悩即菩提、菩提もなくなれ。

煩悩を煩悩せずば（いゝ歌だ！）煩悩は煩悩ながら煩悩はなし

空、それは煩悩がなくなつた境地だ。いや／＼、菩提に囚はれない境地だ。執着するなよ！七時半の列車で出発、忠彦君に送られて、お土産として、酒三本、煙草一罐、そして小郡までの切符！どうぞ、どうぞ、幸福に、幸福に（不幸がすぐ彼を襲うたとは！）。炎天かゞやく。九時半広島安着、黙壺居を訪ねて、また甘やかされた。共にうち連れて、市中見物、生ビールとトンカツ、等々等。旅といふものは、旅人の心は——酒、酒、酒。澄太君の友情に甘える。憂欝、哀愁、苦

脳はてなし。身辺整理。

　　七月廿一日

　ブランク、ブランク、いつさいがつさいブランクで。——

　　七月廿二日

　憂欝たへがたし、気が狂はないのが不思議だ。夜行で皈庵。

————————————————————————大阪——広島

　・たれもかへる家はあるゆうべのゆきき・更けると涼しい月がビルのあいだから　　　遊戯場　やるせなさが毬をぶつつけてゐる
或る食堂　食べることのしんじつみんな食べてゐる

第49章
旅日記　02 昭和十三年(新字旧仮名)

五月廿八日　廿九日　澄太居柊屋。

やうやく旅立つことが出来た（旅費を送つて下さつた澄太緑平の二君にこゝで改めてお礼を申上げる）。八時出発、朝飯が足らなかつたから餅屋に寄つて餅を食べる、それから理髪する（ずゐぶん長う伸びてゐた）。四辻駅で、折よくやつて来た汽車に乗る、繁村の松原、佐波川の流、あの山この道、思ひ出の種ならぬはない。富海下車、一杯ひつかけて歩く、椿峠を越えて湯野へ、湯野温泉は改修されて立派になつてゐる、一浴一杯、戸田駅へ急ぐ、Ｓ君の事が想ひだされてたまらなかつた。四時の汽車で徳山へ、いつもかはらぬ白船君夫妻の厚情に甦つたやうな気がした、豪雨の中を櫛ヶ浜まで歩いて、そこからまた汽車で柳井に下車したけれど適当な宿が見つからないので夜行で広島へ、三時半着、待合室で夜の明けるのを待ちかねて澄太居、いや、これからは柊屋へ押しかけた、澄太君が寝床からニコ／＼起きて来た。うまい酒だつた（酒そのものも文字通りの生一本だつた）、あゝ極楽々々！午後、奥さもいつしよに出かける、新天地でニュース映画を観る、帰途、小野さんの宅に立寄る。晩酌のよろしさ、しばらく話して、ぐつすりと寝た。

五月三十日　梅雨日和。

句稿整理。螻子居を訪ねる、それから黙壺君に逢ふ、マア／＼ヤア／＼！　それで万事ＯＫだ！　うれしいな。黙壺君と同道して再び螻子居へ、そして三人で澄太君へ、とぶ螢、それをとらへるみんなのすがた、私は酔うて、たゞもう愉快であつた。それから、黙壺君と二人

ぎりになり、新天地を飲み歩いた、泥酔してしまつた、黙壺君すみませんでした！

　　五月三十一日　曇、黙壺居。

　朝酒のうまさよ。高等学校の郊汀さんを訪ふ、初対面であるが、どちらもノンベイなので、新天地へ出かけて飲みまはる、中国新聞社で黙壺君に落ち合ひ、三人元気よく江波の山陽茶屋（とでもいはうか）まで押しだして、うまい料理を食べた、そして、それから、……それから、そして、……地極々々！

　　六月一日　晴、螻子居。

　身心混沌として我と我を罵るのみ、——といつたやうなていたらく！螻子居の厄介になる、昼酒、晩酌、読書、雑談、散歩、螻子君と共に一日一夜たのしく暮らした。今日は野の川で水浴した、多少身心がさつぱした。

　　六月二日　柊屋、晴、曇。

　そんなことはどうでもよい、澄太君夫妻の温情につゝまれてゐた。Ｓ氏Ｋ氏の邸宅に押しかけて短冊を売りつけた、あゝ不快、不快、不快。……

　　　澄太居雑詠よい酒でよい蛙でほんに久しぶり雨ふる古い古い石塔が青葉がくれに青葉をへだててお隣は味噌でも摺るらしい音柊のあを／＼としておだやかなくらし朝の鏡の白い花のかげ蛙ひとしきりそれからまた降る　　　□海は曇つて何もない雨つんばくろよいつしよにゆかう

　　六月三日　晴。

　七時出立、己斐まで電車、そこから歩くつもりだつたが、酒づかれでまた電車で宮嶋へ、青葉の紅葉谷公園はよかつたけれど、Ｉ旅館へ短冊売にいつて気持が悪くなつたので、早々海を渡つて汽車に乗り込んだ、麻里布で下車、人絹会社のＭ氏を訪ねる、黙壺君からの紹介があるので気持よく五六枚買うて貰ふ。何とかいふ安宿に泊る、何だか変な家だ。夜はバスで岩国へ出かけた、錦帯橋の上で河鹿に聞き入つ

た、さびしいがよい夜であつた。

　　六月四日　晴、Ｍ居。

　起きるより酒屋へ駈けつけて一杯また一杯。岩国の町へはまはらないで愛宕村を歩いた、山のみどりがめざましい、おゝ、あの山がそれか、あの山林で弟は自殺したのか、弟よ、お前はあまりに弱く、そしてあまりに不幸だつたね！藤生から汽車で柳井へ、バスで伊保庄へ、Ｍさんに面接する、白船君を通して知つてはゐたけれど、旧知の友達のやうな気がした、話すほどに飲むほどに酔うてしまうてすゝめれるまゝに泊めてもらつた。近来にない楽しい対酌であつた。

　　六月五日　晴。

　朝から酒、それもよろしい（Ｍさんのところは造り酒屋で、Ｍさんはその主人で、しかもさうたうの左党だ）、お土産として生一本を頂戴する、酒銘として幾山河は好いでないこともないが、牧水の門人としてのＭさんの心意気が見えてうれしい、殊に傍書の「白玉の」の歌はうれしい。昨日とおなじバスで柳井へ戻り、文友君の店を襲うた、そしてあたゝかい歓待をうけた、ありがたかつた。六時の汽車で運ばれて、無事帰庵、めでたし／＼。

　帰来無別事雑草茫々浮塵寂々中国のよろしさありがたい人情

　　六月五日　曇。

　更けて戻つて、そのまゝ寝た。何といふ寂しさだらう。どこにゐても落ちつけない私ではある。……

　　六月六日　晴、曇、晴、曇。

　Ｍさんから貰つて戻つた酒があるので樹明君を招待する、折よく敬君も一樽持参で来てくれて、久しぶりに三人で快飲歓談した、かういふ会合が人生にめつたにあるものではない、うれしかつた、ことにおとなしくこゝろよく別れたのがよかつたよかつた！

　　六月七日――十日

　――なやましい、せつないといふより外はなかつた、私は私を見失

つてしまつた、ぢつと死を見つめてゐた。――

　　六月十一日　曇、梅雨入。

　やつと起きあがつて、身のまはりをかたづける。敬君、出張の途中ちよつと来庵。街へ出かける、うどん玉でも買うて来て食べよう。胡瓜は一本だけ助かつて、四本は枯れてしまつた、肥料が不足なのか、それとも足りすぎたのか。雑草がやたらにはびこる、荒地野菊ののさばりざまはどうだ。螢がとぶ、こほろぎが鳴く。筍がによき／＼のぞきだした。夕方、暮羊君来庵。

　　六月十二日　梅雨らしく。

　早起、身辺整理。落ちついて紫蘇茶一杯。今日もうどん。仔を奪はれて、下の家の牛が悲しい声で鳴きつゞけてゐる、主人もいぢらしく思うて、連れだして草をたべさせてゐる。降る降る、漏る漏る。……やりきれなくなつて出かける、むちやくちやに飲み歩くほどに、トラどころぢやないタンクになつてしまつた。……

　　六月十三日　雨。

　動けない、食べないで寝てゐた。

　　六月十四日　曇。

　ぢつとしてゐられなくなり、農学校へ出かけて、みんないつしよに飲む、酔うてＷ店に泊つた。

　・手と手　　　妙な握手・夾竹桃・泰山木・藪柑子・かなめの芽
――　――・ひよどり・頬白・きつつき・ひたき・みそさゞい
――　――

　　六月十五日　雨。　六月十六日　曇。

　苦しい、苦しい、苦しい、……Ｎさんを訪ねる、酒！

　　六月十七日　雨。

　Ｋから返事が来た、涙なしでは読まれない。払へるだけ払ふ、そしてほどよく飲んで酔うて、そしてまたＷ店の厄介になつた。

六月十八日　雨、のち晴。

労れてはゐるけれど、樹明君に頼まれて事務を手伝ふ、そして共に宿直室に泊る。

六月十九日　曇。

今日も手伝ふ、午後帰庵してほつとした。

六月廿日　雨。

死ぬにも死ねないみじめさである。

六月廿一日　雨。

無言行をつゞける。

六月廿二日　雨、夏至。

おなじく。——いかに生くべきか、かうしてゐて私はどうするのか、どうなるのか、考へてゐたところで、どうにもならない私ではないか。自己の純化、生活の正しさ、建て直せ、建て直せ！時代の認識、人生の真実、私は再出発する外ない！

六月廿三日　曇。

窮すれば通ず、といふ、やうやく転一歩した、さらに転一歩しよう、しなければならない。五日ぶりに外出、W店へ筍を持つていつてあげる、飲まないで戻つたのは上出来だつた。文字通り一文なし、それでも落ちついてをれる。一切放下着、水の湧くやうに、溢れるやうに流れるやうに。

六月廿四日　雨、雨、雨。

食べるものがない、何もかもなくなつた、ぢつとして雨を観てゐた。……今日も郵便は来ないのか、今日も待ちぼけか！どしや降りの中をポストまで出かけたついでに樹明君を学校に訪ねる、先日の手伝賃を貰ふ、ありがたう、助かつた、さつそく一杯ひつかける、買物をする、そのまゝ戻つた。緑平老から句集を頂戴する、ほんによい句集、いかにも緑平らしい句集だ、雀の句にはとても好きなのがある。

寝苦しかつた、すなほになれ、無理をするな！

　　　　今日の買物弐十弐銭　酒十弐銭　　煙草七十銭　　米十七銭　　麦十八銭　　石油五銭　　　胡瓜

　　六月廿五日　曇――晴。

　水音、水音、水音はよいかなよいかな。矛盾――私の矛盾は私自身で解消せしめなければならない、強い意志と直き実行とが解消してくれる、強くなれ、直くあれ。午後、散歩がてらポストへ、途中、一杯ひつかけたいのをぐつと抑へて、その代りに四句拾うて戻つた！くちなしを活ける、かんざうをも、――どちらも好きな花である。梅雨寒といふのでもあらう、なか／＼寒い、綿入を出して着た。腹が空つては句も作れない、今日はあたりまへに三度の御飯を食べた、朝のお菜は筍、昼は胡瓜、晩は豆腐、これでも私には御馳走だ！

　　　　今日の食費一金拾六銭　　米麦代一金五銭　　　副食物代　　合計二十一銭、一食七銭也。

　　六月廿六日　快晴。

　早起、梅雨晴、どうやら梅雨もあがつたらしい。今日も郵便は来ないのか、誰か来ないかな。午前、暮羊君往訪、酒によばれ新聞を貸して貰ふ。午後、暮羊君来訪、四方山話。散歩がてらポストへ、そして……あゝ。……

　　六月廿八日　晴。

　――どんなに私が愚劣であつたかは、事務室へまで押しかけて、かつて怒つたことのない樹明君を怒らしたことでも解る、何といふ愚劣だらう、あゝ私は樹明君に何と詫びたらよからう。――乱酔して、昨夜も　今夜もW店に倒れてゐた。

　　六月廿八日　晴。

　庵中独坐、自責に堪へないで苦悩するばかりだつた。

　　六月廿九日　晴。

　自省自戒。妄執を払拭せよ。

・珍問答　お月さんですよ！　小鳥でございます。・すゞしく鼻毛をぬいてもらふ。

六月卅日　曇。

すこし落ちつく、身辺を整理する。青山青白雲白、——私の境地はこゝにある。夏蝉が鳴きだした。

七月一日　曇——晴——曇。

新一歩。——早起して、清掃、洗濯。おちついて読書。梅雨模様だけれど私は晴れつゝある。酒に執するなかれ、たゞ酒に執しない様にと私は私に願求、私には名利の慾望はあまりない、ないといつてもよいぐらゐだ、酒が飲みたい、——これが私の慾であり癌である、私はほんたうに酒を味ふやうになりたい、ならなければならない。——句には執してもよい、それが私の生きぬく道でもある、私は酒に於て、そして句に於て私の宿業を感じる、感ぜざるを得ないのである。——行乞の仕度をする、近々旅に出ようと思ふ、旅は私を新たにする（酒は私を甘やかしすぎる）。行乞しなければいけない、行乞は私を深める（酒は私を狂はしめる）。私は落ちついた、このしづけさは嵐のあとのそれだ、私は先日慟哭した、あふれる涙が身心を洗ひ浄めた。強い人間であれ。——知足安分の境地、何よりも貪る心があさましい、酒に対する私の態度は何といふ醜さぞ。断乎として節酒減食を実行する。中村さんが山口からの帰途来訪、慰忠魂菓子（板垣陸相供ふるところの）お裾分を頂戴した、そしていつものやうに、貧乏の話、文学の話、戦争の話をしておとなしく別れた。終夜不眠（夜中眠れないなどゝいふことがあるべきでない、食べる物がうまくないことがあつてはならないやうに）。

七月二日　曇。

いよ／＼梅雨晴らしい。朝蝉のよろしさ、藪蚊のにくさ。飯が足らないので（米もないので）、筍粥にしていたゞく。過去一切を清算せよ、しなければならない。手紙を書く、樹明君へ、そしてＫへ、書きをへてほつとした、こんな手紙は書きたくない、書いてはならない。ポストへ、五日ぶりの外出、Ｗ店で飲む、空腹と睡眠不足のためだら

う、たいへん酔うた、酔うて彷徨した、とうたう倒れてしまつた。……

七月三日　晴――風――曇。

朝酒一本飲んで戻つた。戦時的色彩が日にまし濃厚になる、私もひし／＼と時局を感じる、しみ／″＼戦争を感じる。土方母堂、そしてリユシコフ将軍の新聞記事が胸をうつた、あゝ人間。自然はよいかな、芸術はありがたいかな。

山頭火に与ふ　　酔中の自己打診　　　　　自己批判　　　　　自己忠告生死の一線　　彷徨　　超越　　逍遙

七月四日　曇、時々微雨。

早起したが食べるものはない、番茶を飲むだけ。絶食、――思索、――読書、――句作。Ｋから女子出産、母子共健全とのたよりがあつた、めでたしめでたしと独り言をいふばかりである！雑草を活ける、甘草はよろしいな、いぬころ草は可愛いな。暮れてから、暮羊君来訪、暫時俳談。夜は空腹も忘れて、近作の推敲に一心だつた。

七月五日　雨。

寝床の中へまで雨が漏つてきたので、びつくりして、詮方なしに起きたが、まだ夜が明けない、裏の棚田で水鶏がせつなげに啼いてゐた。……落ちついて紫蘇茶一杯すゝつて読書。うれしいたよりが二つ、一つはＫから、そして一つは樹明君から。――山口へ行く、三月ぶりだ、折よく来てくれたバスに乗つて、まづ一杯、また一杯、また／＼一杯。買へるだけ買ふ、――といつても僅かだが、――持ちきれないほどの品物を持つて、雨の中を戻つた、大出来、大出来！また街へ、また買物。ゆつくり晩酌をやつてゐるところへ、暮羊君来庵、いさゝかの酒を酌みかはしながら俳談する。それからまた／＼街へ、払へるだけ払ふ、そして飲めるだけ飲む。……

○象徴詩としての俳句　　　　俳句の象徴性○俳句は気合のやうなものだ、禅坊主の喝のやうなものだと思ふ。○自己に徹することが自然に徹することだ。　自然に徹するとは空の世界を体解することである。

七月六日　雨。

……いつのまにやら、どうしてやら、ちやんと帰つて来て寝てゐた。……今日も山口へ行く、ハイカイコジキだ、つらいね。Ｗ君もＨ君もＮ君も不在、Ｈ君には逢へた、小学校はよいな、参観してゐると涙ぐましくなる。湯田はよいとこ（たゞ温泉がある故に）、酔うてとうたうＳ屋に泊る、いやなおかみさんだけれど、宿そのものは悪くない。おかげでぐつすり、ほんにぐつすり睡れた。

七月七日　曇――雨。

朝酒は止めて、一浴して歩いて帰つた。日支事変一周年、正午のサイレンと共に黙祷、あゝ……あゝ。夕方、樹明君と敬君と同道して来庵、うれしかつた、酒とビフテキとの御馳走を頂戴する、内證内證！

七月八日　雨――曇。

早すぎるけれど早く起きた、短夜がまだ長すぎる、年はとりたくないものだ、朝酒の御馳走をいたゞく。落ちついて読書。欝欝たへがたくして、――酒まで苦い！

七月九日　晴。

朝寝だつた、霽れわたつた大空を昇る太陽！いよ／＼梅雨もあがつたらしい、暑くなつた、すこしぢたばたすると汗びつしよりになる、いよ／＼夏だ。旅、旅、行乞、行乞、山頭火、山頭火。愛国婦人会の本部から来信、傷病将士慰安のために書画展覧会を開催するから、彩筆報国の意味で寄贈せよとの事、私は喜んで、ほんたうに喜んで寄贈する、それだけでも私の自責の念はだいぶ救はれる、ありがたいと思ふ。心も軽く身もかろく、あたりを整理する。ちよつと街へ出かけて、米と油を買ふ。もう裸がよくなつた、裸で勉強する。まつたく不眠、蛙のコーラスも悪くないな。

七月十日　晴――曇――雨。

未明起床、夜が朝となる景象を観賞する、不眠の余得とでもいはうか。早朝、訪問者があつて、風呂の売物はないかと訊ねる、それも面白かつた。今日も好晴（夕方くづれたけれど）、炎天らしくなつて照

りつける、私は冬が嫌ひなだけ夏が好きだ。暮羊君来訪、そして暮羊居徃訪、カン／＼帽（むろん去年の）を頂戴した。澄太君へ送るべき原稿を書きあげてポストへ、帰途、Ｗ店に寄ると、Ｔといふのんべいさんがゐる、いつしよに飲む、飲むより酔ふた、酔うたけれど乱れなかつた。愛国婦人会へ寄贈すべき半切の画箋紙を暮羊君から寄贈して貰つた。労れて酔うて熟睡した、めでたし／＼。

七月十一日　晴。

今日は遺骨を迎へる日である。十時のバスで山口へ行く、一張羅を質入して、やうやく小遣をこしらへて、――理髪する、温泉にはいる、一杯ひつかける、――山口駅は儀仗兵やら遺族やら、大衆やらが炎天の下にたたずんで待つてゐる、私もその一人となる、暑い暑い、ばら／＼雨が天の涙のやうに落ちる！十二時過ぎて、その汽車が着いた、あゝ二百数十柱！　声なき凱旋、――悲しい場面であつた。白い函の横に供へられた桔梗二三輪、鳩が二三羽飛んで来て、空にひるがへる、すすり泣きの声が聞える、弔銃のつゝましさ、ラツパの哀音、――行列はしゆく／＼として群集の間を原隊へ帰つて行つた。……一応帰庵して、五時の列車でＳへ、四月ぶりの徃訪であつたが、まるで叱られにいつたやうなものであつた、泰山木が咲いてゐた、私の好きな花、そしてなつかしい花。土蟹、蛙、水鶏の声、水音、物みなしづかでおちついてゐる、私の心臓だけがあはたゞしい！酒、酒はうまい。一杯機嫌で、愛国婦人会から申込まれてゐた半切と短冊とを書きあげる（傷病将士慰問、書画即売、展覧会の一部として、私は喜んで書いて贈るのである）、慰安するのでなくて、かへつて慰安されるのだ！自己嫌忌、自己嘲罵がこみあげてくるが、幸にして酔うて熟睡することが出来た。

途上見聞の一、

日の丸をふりまはす子供に母親が説き諭してゐる。――今日はバンザイではありませんよ、おとなしくお迎へするんですよ。

血縁の重苦しさよ。

七月十二日　曇――晴。

早起すぎるけれど起きる、五時をちよつとまはつたところだ、そこらを散歩する。蛙は愛嬌者だが、蟹もなか／＼の愛嬌者だ。大崎の郵便局まで出かける、玉祖神社に参拝。神域の清らかさ、朝酒臭いのが恥づかしい。一時の汽車で帰省、味噌と浴衣と小遣とを貰つて、どの駅にも帰宅する遺骨を迎へる人々、また暗涙をそゝられる。夕方散歩、W店に寄る、Ｋ老人が飲んでゐる、いつしよに飲みかはすうちにたうとう寝入り込んでしまつた。飲仲間！　私の仲間、Ｋ老人もその一員である。

七月十三日　雨。

朝飯を御馳走になつて、跣足で戻つた。昨日の今日で、身心が何となく重苦しい、罰だ、罰は甘んじて受けなければならない。物資統制、価額公定、等々で戦時色が日にまし濃厚になる、私もまた日にまし生活の窮迫に苦しむ、だが、物心総動員の秋だ、誰でもが頑張らなければならない。窓にちかく竹の子が枝を葉をひろげる。どこからともなく、いつからともなく鼠がやつて来て、いたづらをする、鼠よ、食べる物のあるところへ行きなさい！ポストまで出かけて、いろ／＼買物をする、米、麦、石油、豆腐。……自動車に轢かれて、小犬が断末魔の悲鳴をあげてゐる、見るにたへない、聞くにたへなかつた。夏水仙を持つてかへつて活ける、楚々として純白な美しさ。生れて初めて糠味噌をこしらへる、少々塩が利きすぎたが、うまく出来た、さつそく茄子を漬ける。今日は楽しい日だつた、今日は今日の幸福を味はつた、有難い一日であつた。夕、敬君来庵、間もまく、酒と肴とを持つて暮羊君来庵、三人でつゝましくたのしく飲んだ。

私はよく物を貰ふ、人がよく物を下さる。私は何でもありがたく頂戴する。私は物貰ひに出来てゐる人間だらうか。

恩に狎れてはいけない。人情に甘えてはならない。

七月十四日　晴、曇。

早起、花を剪る、車百合は床の壺に、夾竹桃は仏前に。身辺整理。——Ｓから貰つた味噌を食べる、何だか涙ぐましくなつた。いろ／＼のたよりを受取る、いろ／＼のたよりを発送する。旧の六月十七夜、

椹野河原は人出が多からう、今年は煙火の催物はないが。近在散歩、歩けばずゐぶん暑い。ふと気づくと、縞萱を盗み切られてゐる、惜しいと思ふよりも嫌な気がする。

・関東震災遺聞・Ｈ老人とマツチ・Ｋ夫人と水道・汁かけ飯・感謝、水、米、生命　惜しむのではない、尊ぶのである。　物を大切にする心

七月十五日　曇、晴。

早起、読書、思索、句作、散歩。――曇ると梅雨らしいが、晴れると炎天だ。今日もポストまで出かける、ついでに新聞を借りて読む。人さま／″＼といふ感が深い。ポストへ、アメリカ行の小包が入国拒絶で返つて来たので（茶の実を入れてあつたので）、不快を覚えたが、入浴してさつぱりと忘れてしまうことが出来た。夕方、敬君来、つゞいて樹明来、暮羊来、お土産のハムを下物におもしろく飲み、めづらしく句を作つたが、三人いつしよに街へ出かけて、Ｋ屋、Ｆ屋とほつつき歩いて、みんなだらしなくなつた、先づ敬君が行方不明、樹明君が雲隠れ、そして虎になつた暮君を虎になりたがる山頭火が辛うじて引張つて帰つた、二時頃だつたらう。句会が苦界になつた次第である。

七月十六日　晴。

不快、内外清掃。桔梗が咲き初めた。自戒、自粛、自制せよ、孤坐観心。かねての約束の如く、山口詩選出版記念茶話会へ招待されたので出かける、一時のバスで湯田へ。いつものやうに一浴して（一杯は差控へて）、白石校に長谷さんを訪ねる、それから下井田さんを訪ねる、新聞雑誌を読ませて貰ふ、行水させて貰ふ、夕飯の御馳走になる、酒三本、快く微酔した、ハダカとハダカとのつきあいはうれしかつた。七時前、長谷、福富、下井田等と八木食堂へ、出席者十人ばかり、新聞記者がしやべること／＼、私もまけずにしやべりちらしたが。十時頃、そこを切りあげて、長谷君の部屋で飲む、誰もが興奮してゐる、和田君は泣いて語る、中原君は酔うて寝る、下井田君は人生批判をつゞける、福富さんと長谷さんとはおとなしい、私はやたらに飲む、……それから湯田へ出かけて飲みつゞける、三時近くなつたの

で、すまないが、中原君の蚊帳の中に入れて貰つた。

□老人対話（湯田浴場にて）□座席を譲られて（バスの中で）□ステツキから杖に

七月十七日　快晴、真夏。

早々眼覚めたけれど、朝寝の癖があるらしいから遠慮して九時過ぎ起きた、すぐ温泉へ出かけて一浴、そして一杯、朝飯を頂戴してお暇乞する、二人はさらに椹野川で泳いだ、河原の石ころがそれ／″＼のよさを具へてゐる事実に今更のやうに驚嘆したりした。明日の来庵を約して、一時半の汽車で帰庵。留守に福富さん来訪、すまなかつた、外に誰だか友達もやつて来たらしい。

七月十八日　晴。

朝早く身もかろく心もすが／＼しく。句稿など整理しつゝ待つてゐる。――正午すぎ中原君来庵、焼酎を奢つて貰つて飲みかはす、どちらも酔うてしまつて、湯田へ出かける、それはやつぱり酔興だつた、酔中はなれ／″＼になつて、そこゝさまようたが、やうやく夜が明けて歩いて戻つた。……自制、自制、今の私に缺げてゐるものは、無くてならないものは自制である、自制せよ、自制せよ。

┌自我本位説└生命〃〃　新らしい生命観

七月十九日　晴。

暑かつた、――まつたく真夏の天地になつた。茫々たり、漠々たり、混沌として何物もなし、しかも堪へがたく憂愁たゞよふ。……夜、中原君来訪、同君のよさが事毎にあらはれて、ます／＼好きになる、私を心配してくれる心持がたまらなくうれしい、酔態の見苦しかつたことを聞かされたが、大した醜態は演じなかつたらしい、日頃の狂態までには到らなかつたことを知つて、ほつとした。蚊帳の中でランプも点けないで、十一時まで話し合つた。かねて読みたいと思つてゐた雪国と浅草紅団とを持つて来て下さつた、ありがたし／＼。労れて安心して安眠した、めでたし／＼。今日はまたアメリカの大月さんからコーヒーを頂戴した、ありがたう／＼／＼。

七月廿日　晴。

申分のない土用入。快眠した朝の心、落ちついて読書。みん／＼蝉がだん／＼家ちかく身ぢかく来て鳴きつゞける、しみ／″＼とした気分で聴いてゐる。蟻よ、君の勤勉には頭がさがるが、家の中まではいつてくれるな、からだを螫さないやうに頼むよ。母蜘蛛よ、子袋は重からうな、大切にしなさい。——無くなつた、やつと見つかつた、ほつとした、それは巻煙草一本のゆくへである、——神経衰弱的動作はよろしくない。——暮れて暮羊君来庵、先夜の連中に対して不平をならべる、近日、飲み直すことにする、何とか彼とか、酒飲は酒を飲む機会と口実とをつかむものである！

七月廿一日　晴。

沈静、句稿整理。暮羊居から新聞を借りて読む、婦人公論も。まつたく土用だ、よい暑さだ！夕風に吹かれて散歩、飲みたくなつて、銭はないけれど、Wさんを訪ねて、飲まして貰ふ、酔つぱらふ、でも戻ることは戻つた、こけつまろびつで。——

“諸行無常”“木魂”

随処作空　立処皆真　　（臨済）・老木挽さんがいふ——・山の子は山で。——

七月廿二日　晴、晴、晴。

——宿酔気味——散歩——山口へ——Ｓさん、Wさん、Ｆさん、——酔境空寂、——最終バスで帰庵、——風呂敷包も、下駄も、何もかもなくなつてしまつた、——あゝさつぱりした、よかつた！

七月廿三日　晴。

空々寂々。——花屋が来て、縞萱と桔梗とを所望して、十五銭くれた。暮羊居で米一升分けて貰ふ。初めて熊蝉が鳴く。夾竹桃の花が美しい、まさに万緑叢中紅一点。飯のうまさ。暮羊君来庵、同道して、四時の汽車で防府へ行く、令兄のところで御馳走になる、悪筆を揮ふ、十時の汽車で帰る、駅前でＩさんに逢ふ、三人で飲む、近来にない愉快な一夜だつた。帰庵したのは一時頃だつたらう、蚊帳も吊らな

いで寝てしまつた！

・花の良心　　花屋老人の事・停車場待合室

七月廿四日　晴、風が涼しかつた。

私は二日酔をしない、いうぜんとして落ちついてゐる。涼しい昼寝、あゝ勿体ない、赦して下さい、すみません。昼も夜も暮羊君来庵、ブラジルコーヒーを味ふ。今夜は意外な訪問者があつた、Ｍのおかみさんとその娘、何もないからコーヒーを少しあげた！涼しすぎる風、蒲団なしでは寝てゐられなかつた。

七月廿五日　晴。

早起、焼香、肌寒。——節食、それは絶食の前提となるだらう。老鶯啼く、ゆつくりしんみりコーヒーを味ふ。所在なさにあちらへいつたりこちらへきたり、そこらをあるきまはる。……雪国を読む、寂しい小説だ、康成百パアの小説だ、人生は一切徒労か、情熱いたづらに燃えて、燃えつくすのか！よい日であつた、よい風が吹いた、よい人生であれ。午後、暮羊君来庵、読書、昼寝、談笑。……身心が何となくだるい、風に労れたのでもあらうか。Ｙさんの戦死は私を悲しがらせて、——どうにもならない。

七月廿六日　晴——曇。

好晴がつゞいたが曇となつた、どうやら雨が近いらしい、物みな待ちかまへてゐる。待つともなく待つもの、——来なかつた。絶食、食べるものがないから食べないのだが、身心清掃の工作としてよろしい。落ちついて読書。——

七月廿七日　曇——晴。

未明起床、明けゆく情調を味ふ、よいかな、夏の朝。絶食第二日、梅茶一杯、身心安静。散歩、五日ぶりの外出である、一杯借りた機嫌で、米も石油も借りて帰つた！飯のありがたさ、あたゝかい麦飯のうまさ。九江陥落！　ああとさけぶほかない、この感嘆詞には千万無量のおもひがこもつてゐる。まことに盛夏酷暑だ。夕立が来てくれさうな雷鳴だつたが、ばら／＼雨で終つた、一雨ざつと来ると、人間より

も草木がよろこぶだらうに。暮羊君の奥さんからカマス二尾頂戴する、憾むらくは酒がないと嘆じてゐるところへ、暮羊君が一本さげて来庵、ほんたうにうまい酒であり、そしてよい酒であつた。おかげで、前後不覚、ぐつすり睡れた。

　　七月廿八日　晴。

　ようねむれた朝のこゝろたのしく。浅草紅団、なか／＼おもしろい。何となくいら／＼して落ちつけない、どうしたのだらう、気まぐれ山頭火！今日もずゐぶん暑かつた、我がまゝ気まゝに暮らした、感謝々々。

　・断食か、行乞か。・閑愁・うれしがりや

　　七月廿九日　晴曇。

　早く起きた、朝蝉まことによろし。何となく倦怠、顔を剃り、身体を水拭きする。すなほにつゝましく読書。今日は一句もなかつた、それでよろし、それもよからう。

　　七月卅日　曇。

　落ちついて、——蝉も私もきり／″＼すも。今日も郵便は来なかつた。胡瓜一つ——一つしか生つてゐない——をもいで御飯をたべる。私としてはめづらしく頭が痛い、散歩、暮羊居で、ラツキヨウを下物にコツプ酒。夕方、樹明君来庵、飯が食べたいといはれても、麦飯、胡瓜、味噌、そして白湯しかなかつた、杉の葉を燻して、しばらく漫談。しづかさ、さびしさ、かなしさ、早く寝た。

　軽く詠うて深く感じさせる。良心——意志——行動

　　七月卅一日　曇、微雨。

　沈欝。——涼しすぎる、秋風のやうな。——五日ぶりに、やつと郵便が来たことは来たけれど。——煙草がなくなつた、食べるものもなくならうとしてゐる。シヨウユウライス！歳事記を読みつゞける。

——

　　八月一日　雨——曇——晴。

　朝のうちは時化模様で、風雨が強くなりさうだつたが、だん／＼おさまつて、おだやかな晴天になつた。つゝましく、今日も歳事記を読みつゞけた。早寝する。

　　八月二日　晴――曇。

　絶食、身心を清掃しよう！思ひがけなく、Ｋからうれしい手紙、といふよりもありがたい手紙が来た、あゝＫよ、Ｋよ、私は、私は。……樹明君酔つぱらつてころげこんだ、寝せてをいて、街へ出かける、買物いろ／＼、何よりも、米と酒！樹明君と同道して暮羊居まで。私は旅へ。――

　八月三日┐　　　　├旅日記〃　八日┘

第50章
旅日記　03 昭和十四年(新字旧仮名)

道中記

三月卅一日　曇。

夕方になつてやうやく出立、藤井さんに駅まで送つて貰つて。——春三君の芳志万謝、Ｓ屋で一献！白船居訪問、とめられるのを辞して、待合室で夜明の汽車を待つて広島へ。

春の夜の明日は知らないかたすみで寝る

句はまづいが真情也。

四月一日　曇、澄太居。

澄太居のよさを満喫する、澄太君には大人の風格がある、私は友人として澄太君をめぐまれてゐることを感謝する、考へて見ると、私のやうなぐうたらに澄太君のやうな人物が配せられたといふ事実はまことに意義深遠なものがあると思ふ。私は友達にさゝへられて今日まで生きて来た、ありがたいことではないか、私は低頭し合掌して私の幸福を祝福せずにはゐられない、澄太居の前にはよい柊がある、といふわけで柊屋といふ。

朝の鏡にうつりて花の大きく白く旅の或る日の鼻毛ぬくことも

四月二日　雨、仏通寺（豊田郡高坂村）。

澄太君に導かれて仏通寺へ拝登する。山声水声雨声、しづかにもしづかなるかな、幸にして山崎益道老師在院、お目にかゝることが出来

た。精進料理をいたゞきつゝ、対談なんと六時間、隠寮はきよらかにしてあかるし。杉本中佐の話は襟を正さしむるものがあつた、夜が更けたので泊めてもらつた、澄太君はやすらかな寝息で睡れているのに、私はいつまでも眠れなかつた、ぢつとして裏山で啼く梟の声を聴いてゐた、ここにも私の修業未熟があらはれてゐる、恥づべし。

　　　仏通寺（許山一宿）・あけはなつや満山のみどり　水音の若竹のそよがず・山のみどりのふか／″＼雲がながれつゝ・塔をかすめてながるゝ雲のちぎれては・ほんにお山はしづかなふくろう

　四月三日　曇――晴れさうな、尾ノ道にて。

　朝早くお暇乞して本郷へ。朝御飯はおいしかつた、道々の風景もよかつた。澄太君は広島へ、私は三原へ。やうやく黙壺居をたづねあてたが誰も不在（黙壺君の周囲を何か蔽うてゐるやうな気がする、どうか私の勘のあやまりであるやうに）。私はいろ／＼考へたが、船で広島へひきかへすことにして汽車で尾道へ。淡々居を訪ふ、在宅、さつそく一杯よばれる、それからいつしよに――坊ちやんも連れて――市中散歩、別れて私は一人で中学校に阿弥坊君寒太君を訪ねて逢へた、しばらく話し、阿弥坊君の宅で夕飯の御馳走になつた、……どうしても旅費が足りないので、淡々君を電話で呼出し、或る家に泊つた、その家がよくなかつた、昨日のよさがまつたく今日のよくなさになつてしまつた、淡々君よ、すまなかつた、すまなかつた。淡々居には生れたばかりの赤ン坊がゐた、阿弥坊居では奥さんが産むばかりの前で寝てゐられた、とにかく、めでたしめでたし。

　　　すこし寝忘れのてふてふいそぐ　・春の服着て春風吹きます水の誘惑、死の誘惑一切時一切事

　四月四日　曇、澄太居、晴。

　朝の汽船で帰つて来た、心中のやましさ、気がとがめて困つた。柊屋の雰囲気がしだい／＼に私をなごやかにしてくれる、くつろいで飲んだり話したりするやうになれた。悪筆の乱筆を揮ふ。

　・さざなみの島はまことに菜の花ざかり　涙ながれて春の夜のかなしくはないけれど・春風のうごくさかなを売りあるく　春は船でとん

だりはねたり　テープうつくしく春のさざなみ

残月余生

四月五日　晴れたり曇つたり、船中。

朝出立、宇品で浪切丸に乗り込む。好々爺と隣り合せて都合がよかつた。一二杯ひつかけて、ぐつすりと寝た。

四月六日　曇、大阪。

八時、川口上陸、久しぶりに大阪の土を踏んだ。比古君の厄介になる、いつものやうに。千日前の盛り場をぶらつく。夜は比古君の好意で、琴人君に案内されて、カフヱーヴヰナスにとぐろを巻く、酔つぱらつて比古居には帰れなくなつたので、裏町の宿屋に泊つた。

　　比古居にて　電話いそがしく籠のカナリヤも・春の夜のうそとまこととこんがらがつて　　大大阪はさすがに　景気インフレ街は更けるとへどばかり　　春樹居で主人に代りて・たまたま鶯が来て妻と二人

四月七日　曇、天六。

比古君不在で逢へない。市中ところ／″＼を見物して歩きまはる、そしてとうたう天六へいつてやうやく安い宿を見つけることが出来たのは仕合せだつた。

・散つたり咲いたりやうやう逢へた　　（この句は雄和尚にあげたいと思ふ）

四月八日　曇、春樹画房。

電車賃がないから歩いて街はづれの春樹君を訪ねる、折よく在宅、ほつとした。春樹君はおとなしい画家である、そして閑静な住居である、古風な武家屋敷はだいぶ荒廃してはゐるが、なんともいへない寂をつけてゐる。夜は家族の方々と共に御馳走になつた、ゆつたりと落ちついて頂戴した。夢もやすらかであつた。

四月九日　半晴半曇、京都。

頼みにくかつたが、押して頼んで旅費を借りた。電車で梅田へ、そしてまた電車で京都へ。豊田君を訪ねる、不在、仙酔楼君を訪ねる、在宅、ちよつと話して、それから充夫居の句会へ。一杯機嫌でしやべつた、しやべつた。更けて一人で京都駅へ。待合室で意外にも北朗君に逢つた。△腰掛に寝て夜を明かした、朝になつたので歩いて豊田君を工場舎に訪ねる、だいぶ待つてやうやく逢つた、共に市中を散歩し山中を逍遙した。鰊屋で昼飯を食べ、そして中外社に寄つた、涙骨先生にお目にかゝることができたのはうれしかつた。まことに万年青年のおもかげがある、どことなく人をひきつける徳がある、大いに話して大いに笑つた。色紙二三枚寄せ書きした。過分の草鞋銭を頂戴して恐縮した。駅まで送つてもらつて、豊田君に別れる、豊田君とは初対面だつたのに、――ありがたう／＼ありがたう。

“旅日記ところ／″＼”

四月十日　晴、京都。

――昨夜はよくなかつた、京極を歩いたのがまづよくなかつた、酒を飯んだのがよくなかつた、夜のふけるまでぶら／＼したのがよくなかつた、金を持つてゐたのが（私としては）さらによくなかつた、――所詮、私といふ人間がよくなかつたのだ。豊田君に対してすまない、涙骨先生に対してすまない、私自身に対してもすまないではないか。私は何をしたか、さしたることはしてゐない、恥づかしいと思ううちにも慰めるところがないでもない、だが、私は恥ぢる、恥ぢないではゐられない。※朝の汽車で近江路を通る。近江の春はうつくしい。石塔の雄和尚に初見参。和尚はなつかしい人だ、逢へばすぐ友達になれる。たよりを通して知つている和尚は向き合うて話している和尚そのままだ。和尚さん、今夜は泊めてもらひますよ、とも何ともいはないで、一二本いたゞいて寝てしまつた。△

四月十一日　晴、雄郎居、極楽寺。

※お寺の一夜はおちついてよかつた。

四月十二日　曇、極楽寺――雄郎居。

四月十三日　雨、風、リンゴ舎。

　　　リンゴ舎庭園・塀はコンクリートの蔦よ芽を吹け　しばらく夕日がいちぢくの芽　　熱田神宮参拝、林伍君と共に　ならんでぬかづいて二千五百九十九年の春

　四月十四日　晴、魚眠洞居。

　　旅も一人の春風に吹きまくられ　波音の菜の花の花ざかり　春まだ寒いたんぽゝたんぽゝ　指のしなやかさ春の日ざしの　杉菜そよぐのも春はまだ寒い風　かすんでとほく爆音のうつりゆくを　山羊鳴いて山羊をひつぱつてくる女・うらうらやうやうたづねあてた・椿は落ちつくして落ちたまゝ

　四月十五日　花ぐもり。

　・この旅死の旅であらうほほけたんぽぽ　虫がぢつとガラス戸のうちとそとと　たんぽぽひらく立つことにする・吹きつめて行きどころがない風・これがおわかれのたんぽぽひらいて

　四月十六日　曇、吟行。

　・青麦ひろ／″＼ひらけるこゝろ　　業平塚・はこべ花さく旅のある日のすなほにも　枯草にかすかな風がある旅で　　無量寿寺　くもりおそく落ちる椿の白や赤や　　明治用水々源池　さくらがちれば酒がこぼれます　緋桃白桃お嫁さんに逢ふ　　依佐美無電局　花ぐもりの無電塔はがつちりとして

　四月十七日　曇。

　・逢うて菜の花わかれて菜の花ざかり　いちめんの菜の花の花ざかりをゆく　さくらちりかゝる旅とたつたよ・旅もいつしかおたまじやくしが泳いでゐる　　途上

　未定稿（作品そのものは——）未完成稿（芸術家その人は）旅やけ！　ルンペンの色！

　四月十八日　晴。

　・とめられて泊つて海の音（帰城子居）・大きいのが小さいのが招き猫が春の夜　役場のさくらのいそがしくもちるか　水の上はまだ寒

い火を焚いて朝早く　そこら人声のして明けてくる春の波　朝の海からどしどし運びこんでゐる・ほろりと最後の歯もぬけてうらゝか・水にうつりて散つてゐるのは山ざくら・山ふところの山さくら花ざかり・芽ぶいて山はあふれてさゞなみ・啼いて鴉の、飛んで鴉の、かへるところがない（述懐）・伊勢は志摩はかすんで遠く近く白波・波音の松風となる水のうまさは（半月庵蛤水）　ひとり兎を飼うてひつそり（健三居）

四月十九日　曇つたり晴れたり、花ぐもりだ。

八時出立、礫浦まで送られて別れる、健三君よ、ありがたう、どうぞ幸福であつて下さい。旅立つてから、初めて私の旅らしくなつた。師崎まで海岸づたひに三里強。至るところ、てんぐさが干してある、わかめがほしてある、いかなごが干してある。いたどりの若芽が旅情をそゝる。おかめさん——龍亀大菩薩の墓標。遍路シーズンなので、おへんろさんの群がつゞく。師崎は物価の高い場所らしい、二三杯ひつかける。新四国第三十六番、遍照寺、いやな風景の一つ。三時の船で福江へ、海上二時間の眺望はよかつた。島へ帰る人々、港の女！やうやく福江に着いて、あちこち探して、よさゝうな宿を見つけた、吉良屋。おとなしくやすらかな一夜であつた。

・浦波おだやかなてんぐさ干しひろげ　右も左も網干してある花のちる道を・春の山からころころ石ころ・大魚籠はからつぽな春風・歩きつづけて荒波に足を洗はせてまた・春風の声張りあげて何でも十銭　花ぐもりの、病人島から載せて来た　出船入船春はたけなわ・島へ花ぐもりの、嫁の道具積んで漕ぐ・島島人が乗り人が下り春らんまん　やつと一人となり私が旅人らしく・波の上をゆきちがふ挨拶投げかはしつつ　春の夜の寝言ながなが聞かされてゐる

四月二十日　曇——雨。

早々出発、伊良湖崎へ、——二里。若葉のうつくしさ、雀のしたしさ。街はづれの潮音寺境内に杜国の墓があつた、芭蕉翁らの句碑もあつた、なつかしかつた。沿道は木立が多い、豌豆の産地である、家はみな相当の大きさで防風林をめぐらしてゐる。伊良湖明神はありがたかつた、閑静なのが何よりだ、御手洗は汲上井戸だがわるくなかつ

た、磯丸霊神社とあるのもうれしかつた、芭蕉句碑もあつた、例の句——鷹一つが刻んであつた。岬の景観はすばらしい、句作どころぢやない、我れ人の小ささを痛感するだけだ！なまめかしい女の群に出逢つたのは意外だつた、芭蕉翁は鷹を見つけてうれしがつたけれど、私は鳶に啼かれてさびしがる外なかつた。易者さんですか、俳諧師ですよ！——砲声爆音がたえない、風、波、——時勢を感じる、——非常時日本である。今日は道すがら、生きてゐてよかつたとも思ひ、また、生き伸びる切なさをも考へた。岬おこし、磯丸糖、——芭蕉飴などはいかが！伊良湖から日出、堀切、小塩津、和地と歩いた、豌豆の外に花を作つている、金盞花が多かつた、養鶏も盛んである。途中からバスに乗つて、赤羽根といふ漁村のＭ屋に地下足袋をぬいだ（昨夜の吉良屋老人に教へられた通りに）、予想したよりも、さびしい寒村であつた、宿も何だか変な宿だつたが、それでもアルコールのおかげで、ぐつたり寝た。——たうとう雨になつた。伊良湖の荒磯で貝穀を拾ひ若布を拾うたことは忘れられない。

　　穂麦まつすぐな道が伊良湖へ　鳶啼くや花ぐもり明るうなる・風が出て来てからたちの芽や花や　道しるべやつと読める花がちるちる　松のみどりの山のむかうの波音・とんびしきりに鳴いて舞ふいらござき・風は海から吹きぬける葱坊主　芽吹いて白く花のよな一枝を・岩鼻ひとり吹きとばされまいぞ　　　　　　　　　　　　　　　（伊良湖岬）　吹きまくる風のなか咲いてむらさき　潮騒の椿ぽとぽと・波音の墓のひそかにも・風のてふてふいつ消えた　波音のたえずして一人（赤羽根の宿）　花ぐもり砂ほこり立てていつてしまつた　　——（或る日或る時）——・麦に穂が出るふるさとへいそぐ　　伊良湖岬　荒磯ちぎれ若布を噛みしめる　風吹きつのる汽車はゆきちがふ・若葉へ看板塗りかへてビールあります

　四月廿一日　雨、風。

　早く眼が覚める、雨が降つている、だが、私は晴雨にかゝはらないで歩くのである。まづ一杯傾ける、アルコールは私のホルモンだ、さすがに豌豆どころ、安宿の膳の上にも豌豆が載せてある。——高松——黒川原、こゝで電車に乗る、風がさわがしくて歩いてはゐられな

い、十一時だつた、一時には早くも豊橋着、すぐ折嶺居を探しあてる、学校まで出かけて面会する、久しぶりの再会であつた。折嶺居のよろしさ、折嶺君その人のやうに。夜は僊一郎君治君来訪、方々へ寄せ書きなどした。顔を剃つてさつぱりした、私自身も驚くほどの長湯、それほどよい湯であつた。道を訊ねて誠意のない返事を聞くと腹が立つ。

・風のなか野糞する草の青々・風がさわがしい木の芽草の芽おちつけない　　折嶺　ほんに生れて来たばかりの眼をあけて　さめざめ濡れてかたすみのシクラメン・風をあるいて来てふたたび逢へた　水たまり花びらたまり霽れそうもない雨の

四月廿二日　雨――曇。

八時の電車で豊川へ、そして鳳来寺へ。水筒には護摩水がいつぱい、辨当行李には御飯がいつぱい、ありがたう／＼。豊川稲荷は名高いだけあつて、その堂塔は堂々たるものである、豊川閣へは朝から自動車が横付けになつてゐる、金持がもつと金持になりたくて祈願するのだろう、私などにはおよそ縁のないところだ。街筋は飲食店と土産物店との連続である。お寺では小僧さんが流行唄をうたひながら、何だかなまめかしく掃除してゐた。狐の像が多い、読経の調子も煽動的である。さらに電車で鳳来山へ。――駅からお山まで一キロ、そこからお寺（本堂）まで一キロ。石段――その古風なのがよろしい――何千段、老杉しん／＼と並び立つてゐる、水音が絶えない、霧、折からの鐘声もありがたかつた。本堂前の広場でおべんたうをひらいて一杯いただいた。ゆつくりして、二時半の電車で、四時すぎ帰来、よい湯に入れて貰い、おいしい御飯を戴いた。夜は句会、主人、私、僊君、Ｋ君。いつしよに出かけて一献酌んで別れた。

とかく飲みすぎ食べすぎ、そしてしやべりすぎる自分をあはれむ、あはれまないではゐられない！

・しみじみ濡れて若葉も麦も旅人わたしも　雨ふりそゝぐ窓がらすのおぼろ／＼に　　豊川稲荷　春雨しとゞ私もまゐります　どしやぶりの電車満員まつしぐら　　鳳来寺　トンネルいくつおりたところが木の芽の雨・ここからお山のさくらまんかい　たたずめは山気しんし

んせまる　春雨の石仏みんな濡れたまふ・石段のぼりつくしてほつと水をいたゞく・人声もなく散りしいて白椿（薬師院）・霧雨のお山は濡れてのぼる・お山しづくする真実不虚・山の青さ大いなる御仏おはす　水があふれて水が音たてゝ、しづか・山霧のふかくも苔の花　ずんぶりぬれてならんで石仏たちは　水が龍となる頂ちかくも・水音の千年万年ながるる・石だんーだんーだんの水音　霽れるよりお山のてふてふ

四月廿三日　曇——晴、野蕗居。

朝早く出立した、折嶺君同行、何とかいふ女教師も共に。いはゞ、浜松へ東海道のハイキングである。旧東海道の松並木、その下蔭で暫時休憩観賞。岩屋観音は通り過ぎながら拝む。二川からバス、文字通りの鮨詰、臭い／＼！白須賀公園、潮見坂の眺望、こゝで折君が自身をも入れて撮影する。大平洋の壮観、そこでちよつと昼寝する。新井まで徒歩、新井関阯。僊君乗車の汽車を待ち合せて共に野蕗居へ。野蕗君は駅まで出迎へて下さつた、奥さんは娘さんのお産で満洲行の不在。一同で別れるまで句会、良谷君も来訪。私は何の遠慮もなく悠々として、——よい日でありよい夜でありました。

・なづなやはこべや春ふかく　蝶も出てゐる昔ながらの松並木・松風春風振袖ひらひらさせてくる（自転車）　よせてはかへす白波のなごやかな三人・椎の若葉のもりあがる空は雲なし・道ははるかな松蝉が鳴きだした　のびのびと寝せていただいて鼠のさわぎまはるのも　まつたく雲がないピントをあはせる　爆音むくむく雲わく　　野蕗居　小松四五本みどりして奥さんはお留守・声高くお話することもいくねんぶりの春　鉢植たくさん子供たくさんの春

四月廿四日　晴、春寒、風、野蕗居滞在。

野蕗居昨今・こどもら学校へいつてしまうと花ぐもりのカナリヤ・妻を満洲に、留守居の豌豆咲きつづく　ふと三日月を旅空に　ちよつぴり芽ぶかせて人を待つてゐる　　青蓋句屋・花ぐもりピアノのおけいこがはじまりました・どこの山の蕨だらうと噛みしめて旅

四月廿五日

　　　黙祷・松のみどりのすなほな掌をあはす　若葉へあけはなちだまつてゐる・雀のおしやべり借りたものが返せない・春寒抜けさうで抜けない歯だ・天龍さかのぼらう浜松の蠅をふりはらふ　　浜名街道・水のまんなかの道がまつすぐ

　四月廿六日　曇、雨、風。

　　　浜名湖めぐり・いのちありて浜名湖は花くもりのさざなみ・遠江春まだ寒い焼鮒買はう・旅もやうやく一人になりて白い花　まいにちあるくぼつぼつ茶摘もはじまつた　低空飛行その下の畑打つ・若葉わけのぼるちかみちうまい水があつた　一足千里の地下足袋ふんで春ふかく・花ぐもりの湖が見えたりかくれたり、歩く　旅空はるかに飛行機のゆくへ・春ふかき家を解く　若葉を分け入りてうんこすること　筍ぢいさんまた売れた・晴れてうれしい曇つてよろしい水の上ゆく　どしやぶりの桜若葉のそよぎやう

　四月廿七日

　・燕したしく今日の店をひろげる・風の中うごいて蛙がつるんで蛙が　ひなた伸びあがつてそよいでいたどり　波音ばかりの空家ばかりで・すみれたんぽぽゆつくりあるく　崖藤のうつくしさ仰いでは行く　山肌にじみでる水の飲むだけは　犬がいたづらに吠えて大樟の若葉かげ　髪を梳く女あり牡丹かがやかに　牡丹ちるや鬢のほつれを掻きあげる　お客といへば私一人の牡丹燃ゆる・旅はおちつかない蘭竹の風　それそれみどりして親松子松　芥をあさるせなかのひなたあたたかく

　四月廿八日　野蕗居、紅日書楼句会、晴。

　連日の酒で、さすがの私も少々閉口してゐる！　もつたいないことだが。一杯機嫌で悪筆の乱筆を揮ふ。野蕗老に導かれて、みどりさんを訪ねた、病臥中で気の毒だつたけれど、私たちの訪問が彼女を喜ばし慰めたことは疑へない。西来院の紫雲藤は咲きそらうてはゐなかつたが見事なものであつた、折から幼稚園の生徒が遠足で来てゐたのもうれしい風景であつた。普済寺拝登、市中漫歩。Ｓ食堂で中食、刺身で飲んで野菜で食べて、腹いつぱい詰めこんで五十五銭！　安いな。

街頭所見の一つとして、しんこ細工は珍らしくもまた懐かしいものだつた。蕨を買つて来て煮て貰つて味つた。夜は紅日書楼で句会、会者九人、私のやうな者でも歓迎していたゞいて恐縮した。十二時近く帰宅して快眠。

　　裁判所の桜若葉がうつくしくて　すつかり葉桜となり別れる　バスのとまつたところが刑務所の若葉　ハツ手若葉のひつそりとして・お留守らしい青木の実の二つ三
つ　　　　　　　　　　　　　　　　　　（みどりさんを訪ねて）
雲かげもない日のあなたを訪ねて来た・藤棚の下いつせいにおべんたうをひらいて（紫雲藤、幼稚園生）　六地蔵さんぽかぽか陽がさした・幾山河あてなくあるいて藤の花ざかり・ぼうたんや咲いてゐるのも散つてゐるのも　枯れきつて何の若葉かそよいでゐる（家康鎧掛松）・しんこ細工のうらうら鳥がうまれ魚うまれ　蔓ばら咲かせてようはやるお医者　くわう／＼鳴くや屋上の鶴は二羽（松菱デパート）　木馬に乗せられて乗つて春風　ぼうしよこちよに、ハイ七階であります、春（エレベーターガール）一階二階五階七階春らんまん

“浜松の印象”

　　　紅日書楼　おとなへば薬くさいのも春の宵　　句会帰途・一人へり二人へり月は十日ごろ　芽ぶいて風が重い足で行く・茶碗は北朗、徳利も酒盃も、酔ふ　北朗作るところの壺があつて花が咲いて

四月廿九日　晴、肌寒く、二俣町。

天長節。早起、今朝はいよ／＼出立である、浜松では滞在しすぎた。……

……私としては滞在しすぎました、これから秋葉山拝登、天龍を溯つて信濃路を歩きます、……どこへ行つても山は青いけれど、なか／＼落ちつけません。……

野蕗老のまめ／＼しさよ、おべんたうを詰めて貰ひ、残りの酒を酌んで別れる、なが／＼お世話になりました、さよなら、ごきげんよう。八時の電車で二俣まで、山の町らしく感じがよい。初めて天龍川を渡つた、途中、樟の老樹の若葉が美しかつた。身心何となく労れた

ので、今日一日はゆつくり休養することにして、Ｍ屋に泊つた、感じのよい宿であつた。ぐつすり昼寝した、寝たいだけ寝た、睡りたいだけ睡つた。

・今日のよき日の柿若葉なり　石ころに陽がしみる水のない川　はじめて天龍を、つんばくろとびちがふ・若葉ふかく山のむかうから流れくる・老いては旅は寝ざめがてなる水音ぞ

四月三十日　晴、曇、雨、秋葉山麓。

身心軽快、早朝をふみしめて立つた。光明山参拝、祭神は摩利支天、近く山奥から人里近くお出ましになつたらしい、それも時代のせいだ、豚の石像は珍らしかつた（豕だろう）。途上、小学生が恤兵献金の函を抱へて立つてゐる、私も心ばかり寄附する、自分を省みて恥ぢ入るばかりだつた。山越は断念して本街道を二俣川ぞひに登つて行く、鶯がしきりに啼いて、河鹿も時々鳴いてくれた。今日の道はよい道、好きな道だ、予期したよりも早く雨になつて濡れたけれど、それも悪くない。光明村では処々にむつかしい立札を見せつけられた。秋葉橋あたりのながめはよい、気田川を下つて来る筏も面白い。六里位しか歩かないが、こゝに泊りたくなつたので、秋葉山麓のＮ屋に泊つた、まつたくの山の宿、閑静此上なしである、よい一夜であつた。月あかりがして水声がどこからともきこえる。……

途上所見・若葉つゝまれて今日は入営式　山のよさを水のうまさをからだいつぱい　何やら花ざかりなり河鹿鳴くなり　山うぐひすしきりに啼けば河鹿も鳴いて・山をふかめて河鹿しきりに・水のあかるくながれてくれば河鹿なく　しばし谷間で、辨当行李も洗ふ・道しるべ立たせたまふは南無地蔵尊・ほほけて蕗のとうよい宿だな・あつまりて音たてるほどの谷川となり・山はしぐれて濡れるもよかろ・若葉わけのぼるお山はけふもしぐれて・山の宿としいやなラヂオが春の曲・我れここに花ありて蝶　何となく人のなつかしく歩く　述懐・母よ、しみ／″＼首に頭陀袋をかけるとき

“山の宿”「山坊の暮色静春の雨」とは！山層々　お茶菓子！　その坐蒲団水淙々　鼻緒の赤さが　雲去来　湯上り　大きい暗い家　とてらな

し　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　おばあさん霧朦朧　　廊下鳴
る　　　　　　おかみさん　主人は不
在？　　　　　　　　　　　　　　　　　　　むすめさん　　　　古色蒼
然！“朝は　　　　　　　　　　　　　　　お風呂こゆつくりタマゴ
に　　　　　　　　　　　　地酒！　みかんとは！ヤリノ
リ　　　　　　　　　　　　オムレツ！　　　定
石”　　　　　　　　　　　　　　たくあん

破れて縫うてあるもの閑古鳥よ啼け古雑誌を読みつゝ水声山色老人——“得何和”“一人を楽しむ”

旅していると、一期一会をしみ／〃＼感じる、山を歩いてゐると和敬清寂を考へる。

五月一日　曇——晴、晴——曇、西渡泊。

——旅中でまた月があらたまつた。——おのづから眼覚める、また早すぎる、しづかだな。かすかに水音、小鳥が啼く／＼。電燈を消して、朝のひかりでおもむろに一服（実は一杯やりたいのだけれど、酒が悪い、バツが悪い、等々！）。自然そのものの合唱！あゝ生きてることのよろこび！私も宿の人ものんきにかまへてゐたので出発したときは八時すぎてゐた、おべんたうはこしらへてもらつたが、宿銭はちよいと高いな！古風な参道——うれしいな——をゆつくりとのぼる、いそいではのぼれません、わたくしのやうなものは。古風な常夜燈はよろしいな、町標はくづれてしまつてゐる。迦具工はなつかしい！中腹のお休みどころのまへに、何と大きな樹、それは山桜！やすみ／＼あえぎ／＼のぼる、ほんたうに山麓で泊つてよかつたと思ひつゝ。富士見晴らし台、おんなかしまし！仏に首なし、杓に底なし、とにかく異風景。一の鳥居（五丁位）——二の鳥居（四十丁位）——三の鳥居（五十丁位）。さらにより見晴らし台（気田川）。秋葉寺——三尺坊、秋葉大権現とよ！

大荷を負うて、醤油樽、おゝ酒樽もあるよ

大杉、神杉、六根清浄。秋葉神社境内はよろしい、機織井まじない。

売店、ポスト、電話、無料休憩所、何のかのとうるさいけれど。

——

裏道を信州街道へ。——八丁茶屋はくづれるまゝにしてある。好々爺と道づれ、平山部落まで、ありがたかつた。

七十才、乗物ぎらひの酒ずきとよ

下り阪でも急だから骨が折れた。

咲かない馬酔木の芽のうつくしさ

平山から瀬尻へ。——“天龍のぼれば”小唄二つ三つ

天龍のぼればのぼれば逢ひたい若葉がせまる若葉がせまる

（酔余の一ふし二ふし）

おれのこころは天龍の水よわがまゝきまゝ流れてゆかう

下る筏に上る帆。……かつと天龍が——おゝ天龍！　よいな／＼。うんと水を飲みました。瀬尻平山橋、それから架設中の大和橋、渡船で、大井橋、そして西ノ渡（三味線が鳴りラヂオが叫ぶ！）。山香といふ地名はゆかしい、そしてまた天龍の水はうまい、／＼、／＼。西の渡といふ一筋町を歩いてＩ屋といふ宿に泊る、予期したよりもよかつた、万事が宿屋らしい（昨夜の坂下のＮ屋はどうだ！　なつてゐなかつたぢやないか、たゞ秋葉山麓といふことがよいだけで——）。

　朝霧晴るゝお山おりる人のぼる人・ゆつくりのぼる馬酔木まつしろ　つかれてうづくまるところしやがさきみだれ・ぬれていたどりのさてもさびしくなつかしく・すゝめられてこれやこのあんころ餅を一つ・切株に腰かけて遠い遠い昔・杉山しんしんしよんべんしよう・霧、大いなる巌あらはれる　道しるべ倒れたまゝの山しぐれ・山苺咲いてゐてつゝましくも花・石に腰かけると墓であつた・なんとこんなに大きい火道具が春山のいたゞきに（秋葉神社）　秋葉山——　いのちをはりて枯れたる株の苔むして・大杉仰げばはるかなる太陽　お山はさくらちりのこり啼くは鶯　どうだんも咲かうとしてお山　機織井・水湧けば鳴く蛙　谷のふかさで鯉幟うごく（平山部落）・水はみな瀧となり天龍へ音たかく・天龍ましたにしておべんたうは飯ばか

り　ぼうたんゆらぐや天龍はさかまく・茶畑下れば飛び立つ鳥や何といふ鳥・水音けふもひとり旅行く　何といふ花の赤さがゆらいでゐるよ・春ふかきゆふべのわたしをわたしてもらふ・橋をわたると谷は暮れ早い街のともしび

五月二日　西渡にて。

アルコールの力！　そのおかげで熟睡することが出来たけれど、飲み過ぎの罰は覿面、胃腸の工合が悪い、がぶ／＼水を飲んでごまかす。……

水を飲むこと歩くこと

これが私の健康法だ、そして——

好きな物を、好きな事を好きなだけ——

これが私の生き方だ。色即是空、空即是色、いひかへると、現象と実在とが不即不離になつて、私の身心其物として表現せられる境地、その境地に没入することが私の志である。煩悩を煩悩するなかれ、こだはるなかれ、とゞまるなかれ、疑ふなかれ、佞ねるなかれ、…………そして、流れるままに、流れるところまで流れてゆけ。（夜半、感ずるところありて、記し置く。）友へのたよりにその一節として次のやうに書き添へることは忘れなかつた。——

……秋葉山の上り一里、下り二里は私としては悩みましたけれど、悩んだだけお山のよろしさも味いました、明日はいよ／＼信州入、伊那へ向ひます、天龍川はさすがにすばらしい、ようこそ来たと思ひました。……

とかく飲みすぎ食べすぎ、そしてしやべりすぎる、かへりみて情なくなる、捨てゝも捨てゝも捨てきれない貪慾、あゝ、やりきれなくなる。西渡の印象として——

こぢんまりとまとまつてゐる。料理屋、仕立屋、床屋、食料品店、宿屋が多い。物価は割合に安い、商人も一手だ。若い女の肌が白く美しい。

宿の扁額に曰く“故郷難忘”

五月二日　曇、夕立、晴、満島泊。

朝早く起きて散歩、山も水も人も快い。七時出立、まことによい宿だつた、昨日の宿にひきかへて安くもあつた、何となく気持がよろしい。行けるところまで歩くつもりで、水窪川（天龍の支流の一つ）にそうて行く、河鹿がしきりに鳴く、右側の山には山吹、馬酔木、もちつゝじの花が或は黄ろく、或は白く赤く咲きつゞいてゐる、行き逢う山をとめもきよらかである、——今日の道この道はよいなあと思ひ思ひつゝ歩いて行く。——山急にして水はみな瀧、鬱蒼として声あり、——とでも形容したい。山の水で顔を洗ひ辨当行李を洗ふ、むろん、腹いつぱい飲んで。水を堰き流木を整理してゐる、“や”と呼ぶさうな、路傍の石仏を昔から在つたまゝにコンクリートの壁をわざ／＼拵らへて祀つてある、うれしい心づかひである、私も立ちどまつて心経一巻諷誦する。風物がしだいに信州らしくなる、屋根にたくさん石をのせてある、訛が解りにくい。ぼたん、藤、つゝじの花がうつくしい。十二時近く水窪町へ着く、さびしい街だ、ここで酒屋の若主人から、これからは難路であることを教へられ、逆に電鉄のある方——天龍本流へ戻ることにした、やかまし食堂といふ家で、大豆腐一丁（何と大きな豆腐であつたよ）、酒一本、飯一碗を詰めこんだ、そしてむつかしい、あぶない峠を登りはじめた、間もなく雨が降りだした、やうやく登りつくして、いそいで下る途中で雷雨にたゝかれた、白神駅に辿りついた時は五時を過ぎてゐた（二里あまりに五時間を費したのだ）、駅といつても駅員はゐない、粗末な小屋があるばかりである、それでも乗る人はあつて数人あつまつた、椎茸買出商人、出稼人、山住神社参詣人、等々で、みんな親しく賑やかに話し合ふ、私は言葉がよく通じないことを残念に思うた、発電所に落雷したとかで停電、電車がおくれて、最も近くて宿屋がある駅といふ満島へ下車して、Ｔ屋に落ちついた時は七時半、山峡は早くもとつぷり暮れてゐた、途中は苦しかつたけれど、風景は申分なかつた、殊に峠を下りつゝ、天龍を見はるかす山のすがたは何ともいへなかつた、絶景絶叫だつた。山ぐみ、苺ばら、どちらもさみしいつゝましい花だな。この宿は可もなく不可もなし、あたりまへといふところ、料理は塩辛いが夜具は悪くない。今夜も昨夜のやうに、給仕してくれるのに閉口した（断つても聞いてくれないのである）。どうも関東地方は一般に、酒が高くて、し

かも悪い、夏はビールにした方が安全であらう。一風呂浴びて一杯ひつかける気持はまさに千両万両！障子をあけたら、山が月が、瀬音が、——良い月夜になつた。なぜだか、労れてゐるのに寝苦しかつた。

今日の話題（旅のエピソードいろ／＼）

△小娘がどうしてもヅロースを穿かしてくれとせびる。△木樵の老人が鉈を拾うたら解るやうに置いていつてくれといふ。△山住様を脊負つてるから雷も恐くないといふ。△雷獣を捕へて煮て食べた話。△白神長者の家。△地名の読み方の珍らしさ、大嵐など。

電車では天龍川は味へない、トンネルばかりだから。抜ける前の歯の悩ましさよ。

・朝の水のおもむろに筏ながれくる・山の上まで家があつて畑があつて青々　岩が落ちてきさうな山吹のちる　朝風河鹿ほんによろしいな・水があふるゝ山のをとめのうつくしさ・郵便やさん藤の花を持ちあるく　山がせまる谷がちゞまつてまつさを・旅人の身ぬちしみとほる水なり　水をひいてこんなところにも一軒屋・足もと蕨が生えてゐてのびやかな・歩いてまいにちいたどりが伸び伸びて・屋根に石置いて春のうれしく・伐つては流す木を水に水に木を・曇りてしづかな河鹿しきり鳴く・いちにち木を伐り木を挽きひとり　けふも一つのよい事をしてあげて歩く

（杣人に斧を拾うてあげた）

いたゞきちかい若葉となり雨となり　ちよいと雨をよけたのが葉桜のかげ　山を越えると天龍見えてくると・のぼりつくして一本松晴れてきた　はじめて人に逢ふ山のしぐれて・山蟻山のしづけさを這うてくる　立ち枯れの樹の大きくて山ざくら花　山の高さへわきあがる雲で・若葉がくれの瀬音はまさしく天龍川・こそこそ逃げるもかなしからずや山のとかげは　峯をへだててたまたま啼くは筒鳥か　山はしづけく鳥もうたへば人もうたふ　山また山の、声が涸れたよ・山ふかくして白い花　夕立晴れて夕焼けて雲が湧いて　天龍はすつかり暮れて山の灯ちんがり・山が月が水音をちこち

五月三日　晴、うららかな日であつた、若水居。

私も鶯も早起き、そこらを散歩する。今朝はなか／＼肌寒い、どの家にもまだ火燵があけてある、だんだらの家並、さすがに山の町らしい、お休所と書いた店が多い（平岡には限らないけれど）。男は法被を、女はモンペを穿いてゐる。上りたり下つたりするうちに、神代榎（天然記念物）の大木を見つけた。今日は足が痛い、衰へたりな山頭火、旅をつゞけてゐると、さらに老を感じる。九時の電車で、いよ／＼伊那へ。トンネル、トンネル、トンネル、天龍川がちらり／＼。十時、天龍峡駅下車、姑射橋附近の眺望がすぐれてゐる、枝垂桜、朴の若葉がよかつた、遠く連峯には雪がかがやいてゐる。何となく憂欝、コツプ酒をひつかけてごまかす外なかつた。十二時の電車で私は伊那へ運ばれていつた、電車はこゝろよく走る。——赤石連山の壮観、家々の五月幟、時に満員、乗客の漫談（二十六人の徴兵検査で二十五人合格したとか）、車掌が声高く“高遠原”、このあたりは高原らしい蕭条たるものがあつた。飯田を通過する時は感慨無量であつた、私は胸の中で、飯田よ飯田よ、蛙堂老よ蛙堂老よ、と感謝の合掌を捧げるばかりだつた。伊那地方に入ると、天龍川は平凡化する、天龍が天龍の天龍たるところを失うてしまうのである、天龍は天龍峡の下流となつて、山が迫り谷が蹙つてその本質を発揮すると思ふ、もとり伊那の天龍はそれとしての味もあらうが。一時、伊那町着、あちらで訊ね、こちらで訊ねて、やうやく若水居をたづねあてた、荷物——といふほどのものでもない——だけは預けて置いて、女学校に若水君を訪ねる、初対面だが初対面らしくもなく。伯先桜、天然記念物、樹齢二百年位、堂々たる大木。駒ヶ岳の偉容（東駒、西駒、南駒）。女学校々庭には、桜（山桜）、山吹が咲きみだれてゐた。白樺、満天星の若芽もなつかしかつた。同道してバスで井月の墓に参詣した（記事は前の頁に）、それから歩いたり乗つたりして高遠城址を観た、月が月蔵山から昇つた（満月に近い、ほんたうに信濃の月だつた）、アメの魚がおいしかつた。葉桜の水たまりでは蛙がしんみり鳴き、料理屋では名残の花見客がドンチヤン騒いでゐた、私たちも酔ふた、酔歩まんさんとして、自動車に揺られて戻つた、戻るなり前後不覚でぐつすりと睡つたのである、ありがたし／＼。今日初めて斑鳩といふ鳥を聴いた、ほがらかな声音である。このあたりではまだ桑の芽も固い、夜風もひ

えびえとしてゐる。炬燵で話したり食べたりするのは楽しい。山国のよろしさ、ほんに山国のよろしさに触れる。

“いろ／＼”

私の旅とお産――

淡々居、阿弥坊居、折嶺居、そして若水居。

無縁塚。木曽では、麺類魚類は高いが酒類は割合に安い、よい酒ではないけれど飲めない酒ではない。都会の娘は一眼二眼見たときは美しいと思ふが、よく見ていると、醜さがだん／＼見えてくる、田舎の女はその反対である。中年の都会女には嫌な人間が多い。

天龍川を前に　向ふ岸へは日がさしてうそ寒い二三軒・屋根に石を、春もまだまだ寒い　　平岡の神代榎・なんと大きな木の芽ぶかうともしない　遠山の雪うららかに晴れきつた・桑の若葉のその中の家と墓と・うらうら残つたのがちる　おぢいさんも戦闘帽でハイキング　裏門、訪ね来て山羊に鳴かれる　　高遠・なるほど信濃の月が出てゐる　飲んでもうたうても蛙鳴く　さくらはすつかり葉桜となりて月夜・旅の月夜のふくろう啼くか　水音の月がのぼれば葉桜の花びら・ポストはそこに旅の月夜で　　五月三日の月蝕・旅の月夜のだんだん虧げてくる　　アメの魚・みすゞかる信濃の水のすがたとも
井月の墓前にて・お墓したしくお酒をそゝぐ・お墓撫でさすりつゝ、はるばるまゐりました　駒ヶ根をまへにいつもひとりでしたね・供へるものとては、野の木瓜の二枝三枝　“井月の墓”

伊那町から東へ（高遠への途中）一里余、美篶村六道原、漬大根の産地、墓域は一畝位、檜の垣、二俣松一本立つ（入口に）、野木瓜、椋鳥？

┌ツツジ├ヒノキ苗└散松葉

墓碑、（自然石）“降るとまで人には見せて花曇り”

（井月にふさはしい）

墓石、“塩翁斎柳家井月居士”俗名塩原清助位牌、“塩翁院柳家井月居士”夕日をまともに、明るく清く。駒ヶ嶽、仙丈ヶ岳。新しい盛土、石

がのせてあつた。モンペ姿の少女。班鳩のうた。

“苧環をくりかけてあり梅の宿”“何処やらに鶴の声きく霞かな”“駒ヶ嶽に日和さだめて稲の花”

井月の偽筆！　彼は地下で微苦笑してゐることだろう！

┌塩原本家　軸、屏風、短冊└塩原新家　愛瓢・ぶらぶらぬけさうな歯をつけて旅をつゞける・わが旅のつゞくほどにお産のつゞき

五月四日　晴、若水居。

春、山国の春、高原の春、山の色、空の色、土の色、何も彼も春だ。若水居のしたしさ、若水君その人のあらはれだ。独活の粕漬うまいな、御幣餅（飯団子の田楽）はめずらしい。火燵で落ちついて身辺整理、——日記、手紙、等々。ほろ酔機嫌で、色紙や短冊や半折を書きとばす。午后、理髪して入浴、伊那銀座を散歩する。夜は酒と話と蕎麦と、…………そして夜中にはどこかに火事があつた！

・こどもなかよくあたゝかく芽ぶく・大鼓たたいてさくらちるばかり（高遠）　みすゞかる信濃の国の御幣餅です・ぬけさうな歯がぬけてほつと信濃の月　　（信濃が木曽になる！）・春の夜ふけるとぬけるまへの歯のなやみ・あの水この水の天龍となる水音（伊那）　ひるからは風が出て西駒東駒の残雪（望嶽居）・月あかりして山が山がどつしり（　〃　）

五月五日　晴、今日は端午、奈良井。

若水君ありがたう、皆さんごきげんよう、伊那よ、さよなら、——七時出立。小沢川にそうて権兵衛峠へ、山桜が咲いてこゝに一本、そこに一本、山吹、野木瓜、落葉松若葉、櫟の芽、小鳥の唄、谷川の声。……山の家では——そこに三軒あつたが——娘さんが手臼をまはして何かの粉を挽いてゐた、珍らしい風景だ。峠路がはつきりしなくなつて（そこに古い道標があつたけれど、あまりはつきりしてゐなかつた）、不安でなくもなかつたが、馬糞をあてに送電線をたどつて登つていつたら、幸にして本当の一軒家があつた、そのおかみさんに道が間違つてゐないこと、頂上まで二十数丁であることをはつきり教へられて安心した。その家の前に彼岸桜が一本、咲きも残らず散りも始

めぬ豪華版をひろげてゐた。——右を見たり左を眺めたり、見下したり見上げたりして、ゆつくり／＼登る、心臓のよくない私は、平地は平気だが、上りとなると三倍の時間を要する。谷間のところ／″＼には残雪がある、蕗のとうのよいのを見つけて袂に二つ三つ、今晩のお汁にいれようといふのである、白樺のよろしさ、落葉松のよろしさ、中腹の落葉松は今が見頃だ、辛夷が咲いてゐた、木賊が生えてゐるのも珍らしかつた。山の子供は行き逢ふ人々に挨拶する、私にも。奈良井川といつしよに、トロのレールを伝うて奈良井へ出たが、なか／＼遠かつた（今日の行程は八里）、着くより、一杯ひつかけ一服やつた、今日は一日、酒飢饉煙草飢饉だつたから。桜は満開、さびれた街並だ、家は木曽流の惣二階、風がうすら寒い。Ｍ屋といふ家を見つけて泊つた、古い暗い宿であつた、さつそく火燵に火を入れてくれてうれしかつた。山の湯へ行く、帰りみちに酒店に寄つたら、下物として冬菜を一皿御馳走してくれた、ほうれん草に似てゐてうまい、宿ではオコギのおひたしがうまかつた。今夜は飲み過した、しかしよく睡れた。酒屋の主人曰く“——お泊りになりましたな”、それほど通行人が少なく、旅客が稀なのである。

　落葉松は林立したのがうつくしい、若葉の下にゐると夢みるこゝちがする。白樺は若木が数本並んでゐるのがうつくしい、彼は無用の気高さといつたやうなものを持つてゐる。

　　　若水君よ・わかれてひとり朝のながれをさかのぼる・水はおのづから里へわたしも若葉ふみわけて・山国の山ふところで昼寝する・ながれがこゝであつまる音の山ざくら　こども山吹を折つて来て※していつた（若水居）・てふてふとまらう石をめぐりて水・寝ころべば信濃の空のふかいかな　咲きみちてうごくともなくうごいてさくら　すくすく伸びてはからまつ若葉・てふてふついてくる山はしづけし・てふてふ峠をおりてきた　岩に口つけてかつかつ飯める水で　電線はまつすぐにわたしはうねうね峠が長い・おぢいさんおばあさん炭を焼くけむり・月夜しろいのは白樺で

　五月六日　曇——雨、福島町。

　よい水がこん／＼あふれてゐる、この家のよさの一つ、朝酒、それ

は花見酒でもあつた、裏から桜の花片がしきりに散りこんでくる。ゆつくりする、火燵といふものはなつかしい。八時を過ぎてから出発する、木曽旧道をたどる、道はくづれたまゝ、通る人はない、茫々たる道である、歩いてゐるうちに、人生のやりきれないものを感じる！老樹のかげに水が流れてゐる、飲むによく休むによい、こゝに幾とせ幾たりの旅人が立ち寄つたであらうか！木曽はよいとこ、水のゆたかさ、きよさ、うまさ。木曽山中の野糞は近来の傑作！鳥居峠、古戦場、御野立所、遊園地、句碑二つ。

　雲雀よりうへにやすらふ山路かな（ばせを翁）木曽の栃うき世の人の土産かな（凡兆隠人）

　今日の道が此旅の第一だと思ふ。十一時、藪原に入つた、一杯元気で福島へ急ぐ、途上、下げ髪モンペ姿の少女を見たとき、薙刀の一本をあげたいと思つた。道は木曽川に沿うて下る、昔風の旅姿の中年女に逢うた、自分も髷物映画中の一人であるやうな気がした。自動車の通らないのが何よりだ（わがまゝな私を許していたゞきたい）、福島町に入るまではバスもタクシーもトラツクも往来しなかつた。岩上で一人、岩魚か山魚を釣つてゐる、うらやましい。山吹橋巴ヶ渕、清冽閑寂。沿道は山吹、連翹、李の花がめざましかつた、河鹿も鳴いてゐた。水神、二十三夜菩薩の石塔はおもしろい。あちらこちらにさうずがことん／＼。清流あり、腰巻を洗ふ。駒ヶ岳の全貌はすばらしかつた。木曽河原の大石小石しろ／″＼としぐれる。夕方福島着、一わたり歩いて、Ｓ屋といふ商人宿に泊つた。名物お六櫛、買うたところであげる人がない。今晩は酒よりも蕎麦を味いたかつたが果さなかつた、残念ながら、——酒飲はつらい！宿のおかみさんが気をきかしすぎて、よい方の丹前を貸してくれたけれど、赤いので外出してきまりが悪かつた、さういへば部屋もこゝの最上室だ！終夜水声。……

　・草ぼうぼうとしてこのみちのつゞくなり　たゝずめば水音のはてもなし　誰も通らない道とて鴉啼く　ぼう／＼として今日の陽は照る　みちはくづれたまゝとぼとぼあるく　みちばたの石に腰かけ南無虚空蔵如来・誰も通らない草萌ゆる・水音のとほくちかくなりて道は・誰も通らない山みちの電信棒　道がわからない石仏に首なし・山のふかさを小鳥それ／″＼のうたを・このみちいくねんの栃若葉　けふ

もいちにち山また山のさくらちる・水を飲んでは水をながめて木曽は花ざかり・山をふかめてあの声は筒鳥か　木曽は南へ水もわたしも南へ行く　山路ふかうして汽車の音の高うして・山や川や家や橋がある　芽ぶいて雑木はうつくしいトンネル山　さくらちるやびつこで重荷を負うてくる　春風の水音の何を織るのか・春風の長い橋を架けかへてゐる　分け入るやまいにちふんどし洗ふ・花ぐもり道とへばつんぼだつたか　流れて水が街にあふるるや春　　上田、明治大帝御野立所　お姿たふとくも大杉そそり立つ　木曽はいま芽ぶくさかりのしぐれして　母子それ／″＼薪を負うて山から戻る・たまたま詣でゝ木曽は花まつり

　五月七日　曇――雨――曇、坂下。

　まだ明けないのに、木曽川を河原雀がしきりに啼いて飛ぶ、私も起きて日記を書く。山のうつくしさ、水のきよらかさ。身心何となく不調、雨もふりだしたので、滞在して休養したかつたけれど、財布が合点しないので、八時をすぎてから出発する、まづ興禅寺に詣つて義仲廟を展する、それから蝙蝠傘をさしてぼつ／＼歩いた、歩いてゐるうちに、だいぶ身心も軽くなるやうである、歩くことは私には一種の服薬である。福島を離れると、水のない木曽川になる、ダム工事のためだ、しみ／″＼みじめさを覚える。木曽御嶽の遠望といふ立札があつたが、雨霧にその山容は見えない。二里ばかりで、有名な木曽の桟道がある。芭蕉の句碑二つ、明治天皇聖績碑（東郷大将題）。

　かけはしや命をからむ蔦かつら（芭蕉翁）

　傍に見すぼらしい家があつて、見すぼらしい老人が何やら拾うてゐた、これこそまことに、命をからむかけはし！十一時、上松町に着く、そこから半里位で、名だゝる寝覚の床、臨川寺からの眺望はすぐれてゐる、娘の子が二人せつせといたどりを採つてゐた。或るお休所、それはぐず／＼してゐて、そして高すぎた、木曽の店は総じて商売振がまだるこい。寝覚の床は清閑境であるが、鉄道線路がその上を走つてをり、前方に送電塔がそびえてゐるのはふさはしくない。滑川橋附近は好景である、歩けるだけ歩くつもりで歩きつゞける、だん／＼憂欝になる。……小野の瀧、とう／＼と落下する水を眺めてゐて、

少しは気がまぎれた。木戸沢橋、穴沢橋、桟沢橋、大沢橋、枇杷沢橋、——その附近のながめはよかつた。風越山も忘れられない。須原駅に着いたら四時近かつた、待つより外ないので、そこらを歩いて見る、子供等がわい／＼青大将を料理してゐた、神経痛の薬として小母さんに頼まれたのださうな、おや／＼、おや／＼。子供に駅を訊ねたら、桜の木のあるところと指さしてくれた、この子は賢い。五時の列車に乗り込む、名古屋へ通すつもりだつたけれど、十時頃に林五君の家庭をみだすに忍びないので、六時、坂下下車、そして藪下屋といふ宿に落ちついた、こゝは先年一泊した土地、いろ／＼の事がおもいだされる。雨はふつたりやんだり、憂欝を払ふべく一杯ひつかけた、かういふ場合のアルコールは殊によろしくないのだけれど。——日の出湯といふのへ出かける、暗い湯だ、月の湯とでも名づけたらよからうに。総じて山国の人々は暗さになれて気にかけないらしい。汽車が、乗つてゐて耳を傾けると、残つた残つたと響くやうだ、意味ふかい言葉ではある。——早く寝よう、早く帰ろう、早く死なう！

　　　興禅寺の義仲廟　さくらちりをへたるところ朝日将軍の墓・かけはしふめば旅のこゝろのゆるゝとも　おべんたうを食べて洗うて寝覚の床で　筧の水のあふるれば誰もひとくち・苔むしてよい墓のぬしはわからないが・日が落ちる山のあなたへ雲のゆく　たちまち暗くたちまち明るく青い山（トンネルつゞけば）・旅のこゝろのふとんおもたく寝る

　　　（寝覚の床の句碑二つ）筏士に何とか問む青あらし　　　也有翁ひるがほに昼寝せうもの床の山　　　芭蕉翁

　三留野——坂下、その間の木曽川。まことに山高く谷深し。

　五月八日　曇、リンゴ舎。

　朝早くから裏藪で雀共が会議を開いてゐる、なるほど、坂下の藪下屋だ。朝のお茶受はどこでも梅干、たいへんよろしい、日本人は梅干のありがたさを味解しなければウソだ。——なぜこんなに気が滅入るのだらう、くよ／＼するな、とにかく一杯やりたまへ、——朝から鯖の酢漬をつけてくれてるではないか。——よい宿だつた、安くもあるし気楽でもあつた、どこでもこんなだと私も助かるのだが。旅愁——

といつたやうなものがほのかにたゞようてくる、したがつて不機嫌になる、それをごまかすためにそこらを歩きまはる。……八時頃出発、九時乗車、名古屋へ、リンゴ舎へ。落合川のダム風景は悪くない、葉桜の長い列はよかつた。遠足の小学生と同車、腰かける余地がない、ずゐぶん騒がしかつたけれど、その騒がしさが私に数句めぐんでくれた。子供は動く、いつも動いてゐる、食べる／＼、しやべる／＼。バツトの空函を拾ひ集めてゐた一人が、一本残つてゐたのを見つけて私に差出した、ありがたう、よい子だな！子供が騒げば騒ぐほど先生は微笑する、先生はありがたいな！名古屋近くなつて、彼等は昼飯、それ／″＼握飯にかぶりついた、親心子心、私は涙ぐましくなつた。光寺上流の山は水はよかつた、よかつた。十二時、何日ぶりかで名古屋の駅に下り立つた、或る食堂で酒と飯、しばらく広小路ブラ、それから電車でリンゴ舎に地下足袋を脱いだ。林五君の家庭はほんたうにむつまじい、みんなが心が心をあはせつないでゐる、うらやましくもありがたくもある、私もその雰囲気につゝまれて、なごやかな私となる。……夜、武朗君白々君来訪、坊ちやん二人も参加して句会、十二時近くまで話し会つた、うれしいあつまりであつた。連日のつかれで熟睡（妙な夢におそはれたが！）。未明、後架に起きたら、よい有明月夜だつた。

・ここに咲いてこゝに散る花のしづか　水の青さへ山のみどりがさかさまに　山から町へ、重荷がどつさり蕨で　子供が兵隊さんによびかける葉桜の濃く　山が青く青く女はおしやべり　夏めく山のまつくろなけむり　　小学生の男と同車して　大きな小さな、とり／″＼のおむすびをそれ／″＼・こどもら手をあげつゝ五月の風を・帽子ぬげば大きい禿が春の風・汽車は裏町のしばらくはおしめ風景です　　名古屋へまた　いくにちぶりのプラタナスすつかり若葉・見えてお城が煤煙のむかう・こころおちつかない水は濁りて　　リンゴ舎小庭　いちぢく若葉となりふたゝび逢へたよろこび・あを／＼しげりゆくおとなりの塀がかくれるほどにも・家内むつまじくばらの蕾に傘さしかけてある　夜のばらのしろくしづかな

五月九日　快晴、リンゴ舎、名古屋。

眼ざめ楽しく、空青く、草木青く、風快く。鋏を借りて手足の爪を

切る、こんなことにも旅情が湧く、弱い人間である。八時から主人に案内されて、名古屋見物と出かける、歩いてお城まで、天主閣拝観、堂々として暗くて、封建の力ともいふべきものを痛感する、清正公石には清正の人格が残つてゐる。陸軍病院に敬意を表し、護国神社に合掌する、青銅の大鳥居は尊い、大厚皮香の木ぶりをよろこんだ。行楽日和、掃除日、風の日。デパートを見物する、十一屋で展観中の上海陸戦隊のスチールには頭が下るばかりだつた。松坂屋は感じのよい百貨店、賑うて居た、食料品部を通りぬけるとき、人間の胃袋の大きく強いことを考へさせられた！途上、めしやに寄つて昼食をしたゝめる、安かつたが、それだけ粗末だつたが、私はそれで十分だつた。ついでに蓴蓮亭を訪ねる、幸にして夫妻とも在宅、折からの平手前に招ぜられたが、それは私たち二人にとつては有難迷惑だつた！労れて、動物園行は止めて戻つた、乗物をちつとも利用しなかつたので、四里か五里かしか歩かないけれど、ずゐぶん労れた、山や水の間よりも人間の中ではほんたうに労れるやうだ。おいしく夕飯をいただく、晩酌三本はおめでたすぎるぞ、リンゴ舎小庭に雪の下のひろがるやうなものか！今夜も句会、白々武朗二君来訪、おそくまで句評して、さよなら／＼。よく睡れたが、恥づかしい夢を見た。

　　　名古屋城・青葉若葉大いなる石垣に日の照りて・天守閣はがつちり風の中をのぼる・鯱のひかりも初夏の風のかがやく・若葉のひかりに触れつゝ行く　　デパートのエレ※ーターガール・上つたり下つたりおなじ言葉をくりかへして永い永い日

　デパート所見

　鯰をひつかける、傷ける鯰の群亀の昼寝便所内の一日、便所婆さん！開店分列式（男女店員数百名の）　（三星デパートのビルデング）

　五月十日　晴、曇、比古居、大阪。

　家庭の朝の空気のしたしさ、なつかしさ。朝酒を頂戴する、今朝はお別れだ、林五君、奥さん、坊ちやん、ありがたう、ごきげんよう。八時出立、電車で駅へ、八時の列車には乗りおくれたので十時を待つ。名古屋駅の建物設備はすばらしい、日本一、東洋一だ。十時半の

列車で大阪へ（京都へは立ち寄らないことにした、湖辺の逍遙も出来なくなつた）。或老夫婦、慾が多いと見つともないな！車中うつら／＼。近江の国は春闌けて暑い／＼。石山駅頭の歓送風景、小学生の万歳々々を聞いて涙ぐましく。南へ南へ、春がだん／＼夏めいてくる。或る中年の男女、彼等はたしかに秘密を持つてゐる、情痴の臭味が彼等をつゝんでゐる。四時梅田着、入浴してから電車で湊町へ、牧句人君は旅行中、それから歩いて比古さんを訪ねる、在宅、お客さんにまじつていろ／＼の話を聞く、カフヱーの話、人と人との交渉破裂の話、或る事業の話、等々、――それがみんな裏面の打明話だから興味ふかい。大阪は騒々しいと今更のやうに感じる、私は騒音には堪へられない。比古居で泊めてもらふ、いつぞやうに、蔵の中で寝た、お染のゐない久松といつたやうな風に！アルコールなしですこしさびしかつたが、こゝろよく睡ることが出来た。

　　　林五君に・くもりおもたくつひのわかれか　　名古屋駅　夜もなく昼もない地下室の人々　　車中　うらうらここはどこだらう・おべんたうはおむすびをわけてたべておわかれ　春風の汽車が汽車を追ひ抜く・関ヶ原は青葉若葉がせまるとトンネル・琵琶湖はまさに春こまやかなさざなみ・初夏のそよそよコンパクトにほふ　暮れゆくビルのたかくも飛ぶは何鳥・街のゆうぐれ猫鳴いて逢ひに来た　ゆく春の夜の水のんで寝た

　五月十一日　晴――曇、奈良。

　　　畝傍御陵・松老いて鴉啼くなり　　橿原神宮・この松の千代に八千代の芽吹いてみどり・みたらし噴く水のしづかなる声・旅もをはりの尿の赤く　枯れきつてあたゝかな風ふく　あすは雨らしい風が麦の穂の列　ぽろり歯がぬけてくれて大阪の月あかり　ぬけた歯はそこら朝風に抜け捨てゝ　一人もよろしい大和国原そこはかとなく　若い人々のその中に私もまじり春の旅

　白船君からのたよりでは、大連の坂田君が十年ぶりに帰郷、三人相会して談笑することが出来なかつたのはまことに残念千万、ぢだんだふんで口惜しがつたけれど、諦める外ない、命があるならば、縁があるならば、また逢ふこともあらう。坂田君よ、御機嫌よう！（十二日

夜）

　五月十二日　雨、神戸、詩外楼居。

　朝早く嫌な宿屋から離れて雨中散歩。

　　　奈良公園　塔は五重いういうとして鹿・生きもののくさいくさい雨のふりそゝぐ・雨がふる大阪城の若葉かな

　五月十三日　雨――曇――晴、詩外楼居。

　こゝろよくねむれた朝のこゝろよさ。朝酒！　もつたいなかつたけれど。――詩君の好意で新東亜建設博覧会見物に出かけることにして、九時の電車で三宮へ、一時まで場内をぶらついた、くたびれるためにはいつたやうなものだけれど、武漢攻略パノラマ、武勲室、満洲開拓村光景は身にしみて観てまはつた。何となく身心が重苦しい。三時、戻つて入浴して、書いたり考へたり、しづかに暮らした。

　　けふは霽れさうな雲が切れると煤煙・ここに旅の一夜がまた明けて雀のおしやべり　晴れるとどこかで街の河鹿・出水のあとのくづれたままの芽ぶいてゐる　　博覧会場にて　眼とづれば涙ながるゝ人々戦ふ・春雨に濡れてラクダは動かない

第51章
漬物の味〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

　私は長いあいだ漬物の味を知らなかった。ようやく近頃になって漬物はうまいなあとしみじみ味うている。　清新そのものともいいたい白菜の塩漬もうれしいが、鼈甲のような大根の味噌漬もわるくない。辛子菜の香味、茄子の色彩、胡瓜の快活、糸菜の優美、――しかし私はどちらかといえば、粕漬の濃厚よりも浅漬の淡白を好いている。　よい女房は亭主の膳にうまい漬物を絶やさない。私は断言しよう、まずい漬物を食べさせる彼女は必らずよくない妻君だ！　山のもの海のもの、どんな御馳走があっても、最後の点睛はおいしい漬物の一皿でなければならない。　漬物の味が解らないかぎり、彼は全き日本人ではあり得ないと思う。そしてまた私は考える、――漬物と俳句との間には一味相通ずるところの或る物があることを。――（「三八九」第弐集　昭和六年三月五日発行）

第52章
鉄鉢と魚籃と　——其中日記から——(新字新仮名)

九月三日。　曇、さすがに厄日前後らしい天候。　朝は梅茶三杯ですます。身心を浄化するには何よりもこれがよろしい。　前栽の萩——それは一昨年黎々火君と共に裏山から移植したもの——が勢よく伸びて、びっしり蕾をつけている。早いのはぽつぽつ咲きだしている。萩は何となく好きな花だが、それは山萩にかぎる。葉にも花にも枝ぶりにも私たち日本人を惹きつけるものがある。　このごろの蚊のするどさ、そして蠅のはかなさ、いずれも死んでゆくもののすがたである。　午前は郵便を待ちつつ読書。　ハガキ三枚、黎々火君から、十返花君から、そして珍らしくも病秋兎死君から。雄郎和尚から絵葉書と詩歌八月号清臨句集黎明、これは若狭紙を大判のまま使って、なかなか凝ったものである。　午後は近在行乞、家から家へ歩きまわっているうちに、何だか左胸部が痛むようなので、二時間ばかりで切りあげた。それでも米八合あまり頂戴している。さっそく炊いて食べる。まことに「一鉢千家飯」、涙ぐましくなる。　今日の行乞相はよかったと思う。行乞の功徳はいろいろあるが、行乞していると、自分のことも他人のこともよく解る、我儘がいえなくなる。我儘を許さなくなる。我儘をたたきつぶして、自他本然の真実心を発露せずにはいられなくなる。

九月四日。　宵からぐっすり寝たので早くから眼が覚めて、夜の明けるのが待ち遠しかった。　芋の葉を机上の日田徳利に挿す。其中庵にはふさわしい生花である。　小雨がふりだした。大根を播く。托鉢はやめにして読書に倦けば雑草を観賞する。　夕方、Ｋ君がひょっこり来庵、明日から出張する途次を立ち寄ってくれたという。渋茶を

すすりながら清談しばらく、それからいっしょにＦ屋まで出かける。ほどよく飲んで酔うて戻って来たのは十二時近かったろう。

　九月五日。　雨、だんだん晴れる。　今日は澄太君が来てくれる日だ。　待つ身はつらいな、立ったり坐ったりそこらまで出て見たり——正午のサイレンが鳴ってから、やっと懐かしい姿が現われた、Ｉさんといっしょに。　酒、米、醤油、酢、豆腐、茄子、何から何まで御持参だ。これではどちらがお客だか解らない。客も主人もなくなったところに私たちのまじわりがある。　名残はつきないけれど、六時の汽車へ見送る。人生はすべて一期一会のこころだ。　さて、明日は托鉢しようか、魚釣しようか、もし其中庵にスローガンがあるとしたならば——「今日は托鉢、明日は魚釣！」（「層雲」昭和十年十月号）

第53章
道中記　(新字旧仮名)

三月十二日　晴、春寒、笹鳴、そして出立——八幡。

昨夜は夜通し眠れなかつた、出立前に、アメリカ同人の贈物ポピーを播いてをく！今朝の誓願、今後は焼酎を飲むまいぞ、総じて火酒は私に向かない、火酒を飲んでロクな事があつたタメシがない、火酒は地獄の使だ！やつとこさで、九時の汽車に乗れた、やれ／＼、今日の新聞は車内で読ませて貰つた。十一時、関門海峡を渡る。——急いで、日本銀行支店の岔水君を訪ふ、岔水君は若い江戸ッ児のよさだけを私にあらはしてくれる、ありがたいことである。黎々火君は出張不在、軽い失望、帰途の希望がある。——一杯また一杯、安い酒、酔はない酒、淋しい酒！門司駅の待合室で岔水君を待つ、四時、同道して小倉まで。大朝支社参観、深切に案内して下さつた、近代風景を断片的に鑑賞することが出来た、或るおでんやで飲んで話して、別れた。電車で、ほろよひ気分で、暮れ方の鏡子居へとびこむ、客来で、私一人で御馳走になる、さすがにをなごやだけあつて賑やかだ、時々主人公と世間話をしながら、腹いつぱい飲んで食べた、早々ほろ／＼になつてぐつたりと寝た、感謝々々。好い日であつたが、やつぱり私のその日その日は覚めきらない悪夢の断片といはなければなるない。

・朝のひかりへ播いてをいて旅立つ（アメリカポピー会同人に）・食べるもの食べつくしたる旅に出る（自分自身に！）　　再録・春風のどこでも死ねるからだであるく（これも自嘲の一句）　　述懐、冬去春来・かつえずこごえず冬もほぐれた（別）・戦ひはこれからの大地芽吹きだした・野中の一本いちはやく芽吹いてゐる　梅はさかりの、軍需工業のけむり・たちまち曇り、すぐ晴れて海峡の鴎　　門司駅待合室所見・仲よく読んでゐるよこからいやな顔がのぞいて

——綿織物よりも絹織物を！　これも非常時の国産奨励。

改作追加一句、峠にて或る日のルンペンと共に・草の上におべんたう分けて食べて右左

三月十三日　曇、時雨、若松。

朝早く起きてはならないので困つた（夜ふかしの朝寝があたりまへの社会だから）、こつそり抜けだして散歩、時局柄で朝湯もないので、コツプ酒でも呷る外ない、……不用人間の不用時間を持て余した。……身辺整理、アメリカ行の小包をこしらへ手紙を書く。八幡の印象、——中心は何といつても製鉄所の煙突、そして飲食店、職工、何もかもごた／＼してゐる。新聞記事で動かされたもの二つ、——モルガンお雪の帰国と岡田博の母を嘆く言葉。午後、鏡子君に連れられて、徳訪問、よい湯を頂戴した、そして酒と金との功徳も頂戴した。四時頃出立（鏡子君の温情に改めて感謝する）、警察署に星城子君を訪ねたが不在、雲平居は帰途立寄ることにして、電車で戸畑へ。多々桜居で、奥さんのなげきを聴く（多々桜君の病状について）、同情に堪へない、すぐ若松病院へ行く。四階の狭い病室、寝台に横はつたまゝで、附添婆さんから夕飯を食べさせてもらつてゐる多々桜君に逢ふ、顔色は予期したほど悪くないので安心した、二時間あまり話す、私一人がおしやべりしたことである。暮れたけれど月があるので、バスで蘇葉居へいそぐ、折よく在宅、しばらく話したが、何となく身心が落ちつかないので、バスでまた駅まで引返し安宿に泊つた、歩いて飲んで寝た、夜中に臨検があつた。今日は気持のよい娘を三人見た、バスガール、バアガール、そして電車の乗客。誰もが戦闘帽をかぶつてゐる、それも非常気分を反映してゐてわるくはないけれど、おなじ色に塗りつぶされたゞけの世間のすがたはあまりよくはなからう。——あれは何でせう？（一杯機嫌の私）——お月さんですよ！（街の若い人）これは若松に於ける私のナンセンスである。

・早春のくだもの店の日かげうつる　　波止場所見として・風の中のこぼれ米拾ひあつめては母子・まんぢゆうたべたべ出船の船を見てゐる、寒い・朝の雨の石をぬらすより霽れた　　若松へわたし場・ちよいと渡してもらふ早春のさざなみ　　多々桜君を病院に見舞うて、

病室即事・投げ※しは桜のつぼみのとくひらけ・木の実かさなりあうてゆふべのしづけさ　　製鉄所遠望・夜どほし燃やす火の燃えてさかる音　　途上・かなしい旅だ何といふバスのゆれざまだ

　　三月十四日　晴、糸田。

　安宿の気安さ。めしやでめしを食べ、酒屋で酒を飲み、餅屋で餅を味はつた（草餅の魅力である）。若松の帆檣林立風景も此頃は以前ほどでないやうだ。歩くつもりで歩きだしたが、途中でへたばつて、バスで折尾へ、折尾から汽車で直方へ。Ｓ酒場に折から帰郷中の惣参居士を訪ねる、生一本の御馳走になる、お土産としても頂戴する、多謝々々。街はづれまで送られて、金田までバス、そこから宮床まで歩く、緑平居はいつ来てもしたしい、香春岳もなつかしい、ボタ山も芽吹きさうな色彩をたゝへてゐる、天も春、地も春、人もまた春だ、夜のふけるまで話しつゞける、話しても話しても話がある。

　　　炭坑地風景・花ぐもりの炭車長う長うつらなり・春風ぽこぽこ驢馬にまたがつて　　駅構内所見・うらゝかに青い旗や赤い旗や　炭坑地風景二句・うらゝかな春空のボタ山かぶる山よ・そこらぢゆう石炭だらけの石炭を拾ふてゐる・水にそうてでこぼこのみちの草萌ゆる　　ボタ捨車・ボタ山も芽ぐんでくるスキップ・爆音、さくらはまだ開かない

　　三月十五日　晴、中津。

　今日も身辺整理、やうやく文債書債を果してほつとする。十時、お暇して、歩いて伊田へ、伊田から汽車で行橋へ、乗り替へて中津へ。汽車では七曲りの快も味へなかつた、駅でさめ／″＼と泣いてゐた若い女をあはれと思つた。宇平居は数年前のそれだ、お嬢さんがさつそく御馳走して下さる、ありがたかつた。宇平さんは医者としても市民としても忙がしい、忙がしくて病気をする暇もないといふ、結構々々。夜、二丘老来訪、三人でのんきぶりを発揮する。寝苦しかつたが、よい月夜であつた。

　　　中津・街は花見の売出しも近いペンキぬりたて　　宇平居・石に水を、春の夜にする・あなたを待つとてまんまるい月の

三月十六日　好晴、中津。

早起、塩風呂にはいる、朝酒、味噌汁がおいしかつた。宇平居でよいものは門と石仏。味々居往訪、味々君はさびしい人だがおとなしすぎる。福沢先生の旧邸宅を観る、昔ながらの土蔵は忘れ難い。柳が芽ぶいてゐる、もう筍が店頭に飾られてゐる、草餅を食べる、双葉山という酒を飲む（双葉山は近在の出生である）。中津は鰒の本場だ、魚屋といふ魚屋には見事な鰒が並べられてある、それを眺めてゐたら、店番のおばさんから、だしぬけに、「おとうさん、鰒一本洗はうか！」と声をかけられた。引札（俳諧乞食用としての）出来。夜は句会、二丘、味々、耕平、そして主人と私、あまりしやべつたので、さびしくなつた、かなしくさへなつた。

・のぞいて芽柳のなつかしくも　　妙蓮寺　お寺の大柳芽吹いてゆれて　春寒の鰒を並べて売りたがつてゐる　塩湯はよろしく春もしだいにととなふ景色　　福沢先生旧邸　その土蔵はそのまゝに青木の実

三月十七日　日本晴、宇佐。

一片の雲影もない快さ、朝湯朝酒のうれしさ、いよ／＼出発、宇平さん、二丘さん、味々さん、ありがたう、ありがたう、ありがたう。俳諧乞食業は最初から失敗した！途中、二三杯ひつかける、歩けなくなつて、宇佐までバス、Ｍ屋といふ安宿に泊る、よい宿であつた、深切なのが何よりもうれしい、神宮に参拝して祈願した、神宮は修理中。宇佐風景、丘、白壁、そして宇佐飴を売る店。ふんどし異変、山頭火ナンセンスの一つ、私としては飲み過ぎた祟りであり、田舎の巡査としては威張りたがる癖とでもいはう、とにかく、うるさい世の中だ、笑ひたくて笑へない出来事であつた。

自嘲・旅も春めくもぞもぞ虱がゐるやうな・春のほこりが、こんなに子供を生んでゐる・街をぬけると月がある長い橋がある　　宇佐神宮・松から朝日が赤い大鳥居・春霜にあとつけて詣でる

水をへだててをとことをなごと話がつきない・道しるべが読めないかげろふもゆる・たたへて春の水としあふれる・牛をみちづれにうららかな峠一里・放たれて馬は食べる草のなんぼでも・紫雲英や菜の

花やふるさとをなくしてしまつた・春風、石をくだいてこなごなにする・うらうらこどもとともにグリコがうまい・今日の日をおさめて山のくつきりと高く・朝月落ちかゝる山の芽ぶいて来た・噴水を見てゐる顔ののどかにも・春のおとづれ大鼓たたいて何を売る・ひとり山越えてまた山

　　三月十八日　晴、霜、彼岸入、別府。

　早々出立、ぶら／＼歩いて南へ、南へ、うらゝかすぎるうらゝかさだ。北馬城を過ぎ立石で辨当行李を開く、茶店の若いおかみさんの自慢話も興が深かつた。巡礼の親子三人連れ、子供がいちばんうらゝかだ。亀川まで汽車、賃四十七銭は惜しかつたが、――亀川にはほどよい宿が見つからないので、電車で別府へ、Ｆ屋に地下足袋を脱ぐ、さつそく一浴して一杯！　おそくまで散歩して熟睡。

　別府は山もよろしく海もよろしく、湯はもちろんよろしく、女もわるくないらしい。時局のために遊覧客は多くないらしいが、それでも二千や三千はあるらしい。いたるところ温泉、いたるところをなごや、湯はタダ、女も安いさうな。遊園別府、貧乏人や偏屈者の来る場所ではない。

　別府所見、――小秦誰、朝見川朝日橋のほとり、竹田が妓にかく書いて与へたといふが、夜はともかく、昼はゴモクアクタでワヤだ！

　別府竹枝、流川通、名残橋阯、カフヱーやおでんやや料亭や置屋があつまつてゐる。高崎山のおもしろさ、鶴見岳のよろしさ。

　旅の人々と彼等の財布を狙ふ街の人々と、温泉の匂ひ、脂粉の香り。土産物を売る店と女を売る店と。

　由布岳――旧名、湯ノ嶽――通称、豊後富士は好きな山である、総じて豊後の山岳は好きだ。

　なるたけ本道を歩くことだ、遠いけれど間違がない、近道、それは多く旧道、その道は歩くにはよろしいが、よく見定めて、念に念を入れて歩くことだ。

　無尽寥。――

作ることが生きることである。

片手で耕やす人！

すなほにつゝましく。

昨日を忘れよ、明日を思ふな、物事にこだはるな。一切放下着、超越生活。

ラクダを羨む（新聞の北支記事を読んで）、食べることに苦労してゐると、ラクダに笑はれるやうになる！

カシラナリ（頭成）といふ地名は珍らしい。

ビンボウはカンシヤクの素！

三月十九日　晴、浜脇、　一泊二飯八十銭。一人一室一燈。

早朝入浴して散歩する、あかつき丸の出航を見送る。この宿は悪くはないがうるさいので、浜脇のＧ屋へ移る、しづかでしんせつできれいで、夜具も賄もよい。歩いたり、浴びたり、書いたり、飲んだり、――旅づかれで、詳しくいへば、人づかれ、湯づかれ、酒づかれで、宵からぐつすり寝た、まことに近頃にない快眠であつた。

三月二十日　晴、浜脇。

申分のないお天気、ほんたうに好い季節。早く眼覚めて入浴、散歩、そして、……豊後富士の姿はうつくしい、朝にかゞやいた時は殊に。宿の居心地がよいので、もう一日逗留することにして、行きあたりばつたり方々を見物する、人出が多い、恵まれた日曜だ。波止場に立つて出港するすみれ丸を見送り、入港するあかつき丸を迎へる。夜も散歩、どてら姿が右往左往する。今日も破戒した、シヨウチユウを飲みアワモリを飲んだ、アワモリ屋のおかみさんは私の顔を覚えてしまつて（さすがに商買だ）、小海老のてんぴら一片を下物としてサービスしてくれた！近来、視力の減退が著しいことを感じる、栄養不良のためか、老衰のためか、そのどちらでもあらう。

――別府三泊は長過ぎた、気分も倦怠したし旅費も乏しくなつた、明朝は降つても照つても立たう。今夜はなか／＼睡れなかつた。

別府埠頭春風のテープもつれる別れもたのしく出てゆく汽船の、入りくる汽船の、うらゝかな水平線

三月廿一日　曇、風雨となつた、由布院。

朝湯はよいな、けさは朝酒を遠慮した。お彼岸の中日といふので朝御飯は小豆飯、それにも少年の追憶をそゝられる、いよ／＼八時出立、由布院へ歩く。——立派なドライヴウヱー、自動車はうるさい（歩くものには）、乗らないものには外道車だ（便利なこともある、乗らないものにも）。私はもう登山は出来ない、仰いで山を観るばかりである。鶴見園を横に見て登る、登る程に、海地獄、八幡地獄、無間地獄、等々と地獄の連続だ。山里は梅やら桃やら咲いて、水車がまはつて、牛が鳴いて、とても長閑である、そこらで演習があるらしい砲声も！風が出て晴れさうだが、たうとう風雨になつた、ラクダ色の山が山に、ごつ／＼そびえてゐる。朝見川鶴見橋。火男火売神社。山鶯が啼く、音色のよいのも啼く、水音をさがして飲む、腹いつぱい、うまい／＼、山鳴、山霧、さびしいな、何となく心細い。鐘紡種牧場、なか／＼大規模らしい。城島台、眺望はすばらしいらしいが、霧で視野はすつかり遮られてしまつた。雲雀が啼く、これもおもひでの種の一つだ、道ばたの蕗の薹二つ三つ頂戴する。五時近くなつて、やうやく由布院の湯坪へ着く、Ｔ屋といふ安宿へおちつく、なか／＼よい宿らしい、家は粗末だが、……どてらを貸してくれる、お茶を持つてきてくれる（お茶受として沢庵も悪くない）、火鉢にたくさん火をいけてくれる、内湯がある、電燈が明るい。……ハガキを出したついでに、さつそく一杯——二杯ひつかける、うまい酒だつた、また、よい酒でもあつた。ほろ／＼ほろ／＼、だが、風がガタビシの硝子障子をたゝく音はさびしい／＼。こゝには水がない、温泉だけといふ、さりとは。——別府由布院六里といふが、どうして／＼、山行六里にはすつかり労れきつた、年はとりたくないものだわい！今夜はゆつくり寝やう、ぐつすり睡れるだらう。

由布院はさびしい温泉だが、そこが好きだ、湯を浴びてはぽか／＼ぼんやりしてゐるのがうれしい。

酔ひざめの水ではないので、酔ひざめの湯をがぶ／＼飲んだ！

夜が更けて、雨になり風になつた、困つたな、ふと眼覚めて硝子障子越しに見ると、月夜になつてゐる、よかつた。由布院がきつぜんと聳え立ち、朝月が近くかゝつてゐる、よいな。

・湯けむりの梅のまつさかり・うりものと書かれて岩のうららかな・枯野風ふくお日様のぞいた・のぼつたりくだつたり濡れても寒くはない雨の・蕗のとうここで休まう・山霧ふかく風車のまはるでもなく　　牧水に・ずんぶり濡れてけふも旅ゆく（幾山河……）・山のなか山が見えない霧のなか行く・草枯れてほんによい岩がところ／″＼　　由布越・吹きおろす風をまともに吹きとばされまいぞ

　三月廿二日　好晴、春光煕々、玖珠。

七時、身心かろく出発する、高原のさわやかさ、秋のやうな、南由布へまはり、いよ／＼山路にかゝる、水分峠である、山又山、鶯がやたらに啼く。十歩行いては立ちどまり百歩行いては腰をおろす。雲雀が啼く、蛙が鳴く、蕗の薹、水音、家があると、鶏の声、牛の声、子供の声。生きてゐる幸福、歩いてゐる悦楽。野糞、いや山糞をいう／＼として垂れた！うまい水が流れ落ちてゐる、もちろん腹いつぱい飲んだ。人間には逢はない、ことし最初の蝶に逢つた。長い峠であつたが、よい峠であつた。知らぬ間に野矢駅を通り越して中村へ下つてゐた、グリコ噛み噛み、さらに三里歩いて、暮れかゝる頃やうやく森町に着いた、運よくＭ屋といふ宿を教へられて泊めて貰ふ、ほどよい宿であつた。防空訓練で電燈は消されてしまつたので、一杯ひつかけてそのまゝ寝た、夜中に、トタン屋根をたゝく雨音に旅愁を感じた。

里程の主観的意味（徒歩の苦楽）。客観的には一里でも主観的に二里の場合もある。里程観念。小学生が比較的に正しい。

日出生台とはよい地名。

田舎の人は総じて深切だけれど、時として不深切きはまることもある、今日はその不深切のために半里ばかり歩き損した。その山近く住んでゐて、その山の名を知らない、のんきといふか、まぬけといはうか！老梅が咲き満ちてゐた、しづかに、しづかに、野の聖のやうに（廿二日）。

追憶の道。——

人間のいやしさ、きたなさを痛切に感じる、肉体的に、生理的に人間の臭さがたへきれないやうにさへ！

　水分峠枯山あまねく日のあたる鶯うたふのどけさ仔牛が乳房をはなれないはれ／″＼山はむつちりよこたはるふと見れば足にふまれてつく／＼し蕗のとうかたまつて山ふところに　由布岳ふりかへる山のすがたの見えたり見えなかつたり　水分峠誰にも逢はない山のてふてふてふうらうらどこまでついてくる春もすつかり鶯うまくなつた芽ぶく山をまへにどつしりすわる散る花や咲く花やぽか／＼歩く水音の里ちかくなつてきたこぼれ菜の花もをさないおもひで芽ぶく木木の濡れてます／＼うつくしく旅のわびしさのトタン屋根たたく雨

三月廿三日　雨——曇——雨、日田。

早起、小雨ニなつたので早々立つ。八時半の列車で日田へ（今日は歩きたかつたのが雨具の用意がないので、仕方がない）。天ヶ瀬には一夜泊りたかつた。日田はいつ来てもよい土地だが、いつもよくないのが私の財布だ！　駅で暫らく雨宿りして、それから街を通りぬけて、四年ぶりに馬酔木居を訪れた、なつかしい。散歩したり、鯱を釣つたり、のんびり遊ぶ、なか／＼寒い、汽車にもスチーム、駅にもストーヴ、火鉢にも燠がたやされない。

日田地方は酒の安いところだつた、いひかへると、量りがよいのである、一杯ひつかけてもコツプでなく枡だ、いはゆる枡飲である。

日田は木どころ、製材所が多い、なか／＼大規模だ、産物ハ焼杉下駄、名物ハ鮎、うまいなうるかは。飲食店、宿屋料理屋が多い。

水郷日田、夏から秋が殊に日田！

日田のよいところは——私にうれしいのは——水がゆたかで酒がやすい、たへがたいのは風のふくこと。霧はわるくないが（底霧とよばれてゐる）。

父と子、子と父。——

三月廿四日　曇——晴、日田。

どうもお天気がはつきりしない、現代の社会そのものゝやうに！アンゴラ兎。淡窓先生墓所、長生園。頼山陽先生淹留の故宅、如斯亭。ふぐ料理とはどうかな、川魚料理とはよいが。ある家の白木蓮まんかい。川、川、水、水、酒、酒。日の隈公園、月の隈公園、星の隈公園。銭渕橋、河原のブールバール。製材所風景。

馬酔木居いつぽんかたすみのみつまたのはな川風さむみおちつかないてふてふ水車はまはる泣くやうな声だして　日田水じゆうわうに柳は芽ぶく山ざくら人がのぼつて折つてゐる藪の椿の赤くもあるかみちがわかれるさくらさく猿田彦花ぐもりいういうとして一機また一機

三月廿五日　曇——晴、二日市。

馬酔木君、さよなら、さよなら、馬酔木君。酒の一日だつた、健よ、ありがたう。バスで来て武蔵温泉のＨ屋ニ泊る、くだらない。

三月廿六日　晴、晴、博多。

朝湯朝酒のゼイタクさだ、すみません。十時の汽車で博多へ、百道のＴさんを訪ねたが不在、そしてやうやく老司の少年院を尋ねあてたが、三洞さんは博多の事務所にゐられるといふ、引き返して事務所へ、さらに仮寓へまで連れて行つて貰つて、三年ぶりに懐かしい温容に接することが出来た、坊ちやん二人を連れての下宿生活である。夕飯は家庭食堂で、それから暫らく散歩して帰宿。三洞老！　ふさはしい呼び方だ。

三洞仮寓うらは椿の落ちたままむつかしい因数分解の、赤い何の芽

三月廿七日　曇、微雨、博多。

父と子とのほゝゑましい情景、涙ぐましいほどである。悪筆をふりまはした。午後、同道して酒壺洞君を訪ふ、何年ぶりの対談だらうか、君も老けたなと思つた。酒をよばれることばかりだ、朝も酒、夕も酒、昨日も酒、今日も酒、私もたうとう酒に労れて来た！今夜も泊めて貰ふ。

飯屋のおかみさんとルンペン（博多にて）大衆酒場の女給さん

お大師様とルンペン（途上）仏様と泥坊

三月廿八日　晴、福岡。

ありがたう三洞さん、さよなら坊ちやん。福岡市街をムチヤクチヤに歩きまはる、やたらに酒を呷る。……夕方、ふたゝびＴさんを訪問、折よく逢へて、お互にのんべいだから気軽く酔うて、ぐつたり寝入つた。Ｔさんが奥さんに投げるオイコラはよくない。

三月廿九日　快晴、神湊。

バスで神の湊へ。——俊和尚はエライ和尚でないだけ好きな和尚だ、清丸さんもよい坊さんになつてゐる、奥さんはもとより温良な家庭婦人だ、おいしいチリを御馳走して下さる、うどんもおいしかつた。

三月三十日　八幡。

朝から飲む、ルンペン画家ともいふべきＨさんに紹介される、五十未だ家をなさぬ彼は国際的放浪者らしい面影もある、彼は描き私は書いた、そして二人共に飲んだ。午後出立、俊和尚の温情をしみ／″＼感じた、バスで赤間へ、汽車で折尾まで、電車で八幡へ、Ｉさんの茶の間へころげこむと、また酒だ。夜は鏡子居往訪、おとなしく帰つておとなしく寝た。

三月卅一日　晴——曇、八幡。

青城子居に寄る、不在、待つ。青君はよき友である、ありがたい友である、私はしば／＼叱られる、怒られる、そして愛せられる。……私ばかりが飲み、君は盛んに食べる。青城子君よ、子を叱るなかれ、どなつてはいけません。

改作追加春は驢馬にまたがつてどちらまで　　八幡製鉄所風景

すくすく煙突みんな煙を吐いて鉱滓うつくしくも空へ水へ流れたり

四月一日　晴、門司、下関。

雲平さんを訪ねた、不在、奥さんも留守、待つてゐる気も出なく

て、電車で門司へ急いだ、局に黎々火君を訪ねる、久しぶりだ、今日は四月馬鹿なので来訪者の呼出しも嘘だと思つたので長く待たせてすまなかつたといふ、昼食を共にし、後刻駅の待合室で会ふことを約して別れた、私はそれから銀行に岔水君を訪ねた、都合の悪いことには宿直で、しかも年度がはりで多忙で、とても時間の余裕もからだのひまもない、暮れ方に黎君と同道して訪問して寸時話して、私たち二人は海峡を渡つた、そして下関で握鮨など食べて、さようなら、黎君、早く結婚したまへ！昨日今日何だかいら／＼してたまらない、一人ぶら／＼歩いては飲み、飲んでは歩いた、酔つぱらつた、腹がいつぱいになつて財布がからつぽになつた、たうとう待合室のベンチに寝込んでしまつた！

四月二日　日本晴、埴生。

ふと眼が覚める、何だ、駅に寝てゐる、五時の汽車の出るところだ、帰るだけの乗車賃は持つてゐたけれど、まてよ、これから徒歩で帰らう！　黎君が知つたら、だからゆふべ早くお帰りなさいといつたではありませんかと笑ふだらう。唐戸で十銭の朝飯を詰め込み、ゆつくりとしかもがつしりと歩き出した。——しんじつうらゝかな日である、日本晴といはうか、節句晴といはうか（今日は旧の三月二日）。長府の海岸は汐干狩の人々で賑うてゐた、誰もがぢつとしてはゐられないうらゝかさである、ノンキな旅人の私もその群にまじつて暫く遊んだ。埴生で泊つた、まだ早いけれど、歩けば歩けたが（行程七里）。合宿はうるさい事が多い、といつても詮のない事だけれど。

長府海岸旅人わたしもしばしいつしよに貝を掘る波音のうららかな草がよい寝床松原伐りひらき新らしい仕事が始まる

四月三日　曇、時々降る、帰庵。

出来るだけ早々出立、急がず休まずで歩く。春が駈足でやつて来たので、至るところ桜がちらりほらり咲き出してゐる、山桜は散つてしまつて若葉のかゞやかしいところもある、田舎の豪家の邸内いつぱいに咲き充ちた桜の大木二三樹はほんたうに美しかつた、まつたく日本的であつた、家も花も人も。厚東川べりの桜並木も美しかつた。春の日曜の祭日、絶好の行楽日だけれど、お天気が思はしくない、何だか

気の毒に思ふ、嘆くなかれ、むろん悔いるなかれ、人々具足、ほどよく楽しめ。いつしか十里近く歩きおほせて、五時すぎには、三週間ぶりで帰庵した。

　　四月三日　曇。

　——夕方帰庵したけれど、濡れた着物を乾かす火もなく、空いた腹を充たす米もない、そして無一文、無一物だ、——暮羊君を往訪する、私を待つてゐてくれたが今日は実家へ行きました、と奥さんが残念さうにいはれる、詮方なく街へ出てW店に腰をおろす、酒を借り飯をよばれ、はては泊めて貰つた！

　　四月四日　曇、霰が降つた、晴。

　W店夫妻の好意に甘えすぎたやうではあるが、酔うてそのまゝ寝てしまつたことは仕方がないが、酔中彷徨してＹ店へ飛び込んだことはよくなかつた、いや悪かつた、悪かつた、恥づかしい、恥づかしい。夜は暮羊居に招待されて、ニコ／＼御馳走になつた。

　　四月五日　六日　七日　八日

　労れて、ごろ／＼ぐう／＼眠りつゞけたことである、いはゞ旅づかれといふものであらうか、私の場合では、人づかれ酒づかれといふべきであらう。

　自分の意志で、生れ出ることは出来ないけれど、死んでしまうことは自分の自由だ、こゝに人間の悲喜劇が展開される。

　　四月九日　晴。

　絶食——不眠——憂欝、そして。——あはたゞしい春だ、もう桜が散り柿が芽ぶく。

　　四月十日　曇。

　或る店で白米少々借ることが出来た、感謝合掌。飯！　飯！Ｈ君と某君と同道して来訪、対談しばらく。午後、めづらしくも敬君来庵、つゞいて樹明君も来庵、うれしい酒盛が始まつた、酔うたよ、酔うたよ、愉快だ、愉快だ。ほんにぐつすり睡つた、ふと眼覚めると雨の

音、まことによい夜明であつた。――私はいよ／＼重大決意をした、――いさぎよく其中庵を解消して、再び行乞流転の旅人となるのである。

絶食と断食

┏客観的事実┗主観的意義

四月十一日　曇――晴。

藪鶯がしきりに啼く、だん／＼晴れてくる。ふと鏡をのぞいて、自分の老顔に驚いた！身辺整理。シヤガが咲きだした、仏前に供へる、木の芽、草の芽。秋田蕗が若葉をかゞやかにひろげだした。――ここに改めて、W店夫妻にお礼を申上げる。

四月十二日　曇。

待つてゐるのに屑屋さんが来てくれない、違約といふことは、いかなる場合にも不快だ。身辺整理をつゞける。――いよ／＼覚悟をきめた、私は其中庵を解消して遠い旅に出かけよう、背水の陣をしくのだ、捨身の構へだ、行乞山頭火でないとほんたうの句が出来ない、俳人山頭火になりきれない。春寒うつくしい月夜であつた。

其中庵解消の記

行方も知らぬ旅の路かな濁れるもの、滞れるもの

四月十三日　晴。

なか／＼寒いことである。旅日記整理。戦争は必然の事象とは考へるけれど、何といつても戦争は嫌だと思ふ。めづらしく畑仕事。

四月十四日　曇。

うつくしい朝焼、あまり生甲斐もない生活。Ｋからうれしい返事が来た、この親にしてこの子があるとは！街へ出かける、ＮにＷにＫに払ふ。何日ぶりかで理髪入浴、それからゆつくり飲みだしたが、一本が二本になり二本が三本になつて、四本五本六本、そしてたうとう脱線してしまつた、今年最初の脱線だ、すまなかつた、すまなかつた、慚愧々々（私としては脱線だけれど、世間人としてはさしたことでは

ない）。

人間臭

四月十五日　晴曇不明。——

昨日の延長だ、まだピリオドがうてない、飲みあるく、——夜やうやく帰庵。

四月十六日　晴——曇。

庵中独臥、絶食、読書。また山口の聯隊から出征するので、歓呼の声が渦巻く、その声が身心に沁み入る。……

四月十七日　曇、微雨。

謹慎、落ちついて雨を聴く。

四月十八日　曇。

午後は晴れたので山口へ行く、本を米に代へて戻る。四日ぶりに御飯を食べることが出来た！ほどよく飲んで食べて、つゝましく考へしづかに読み、一生懸命に作る、——それが何よりの楽しみであらう。

四月十九日　晴——曇。

春蝉が鳴きだした、夏ちかい温かさだ。流し元の草の中に、捨芹が青々と花をつけてゐる、生きるものゝ生きる力のめざましさ、省みて恥ぢ入つた。蕗を煮て食べる、うまい、ちしやに味噌をつけて食べる、うまい、何もかもうまいうまい！夕方、野を逍遙して、野の花を観賞した、すみれ、きんぽうげ、菜の花、紫雲英、とり／″＼にうつくしい、青草もうつくしい、虫もうつくしい。今日はＳを訪ねたいと思つたが、銭がないので止めた、骨肉といふものは離れてゐるとなつかしく逢へば嫌になる、そこに人生のなやみがある。……寝苦しく悪夢に襲はれどほしだ。

四月廿日　曇。

小鳥の歌のほがらかさ、椿もをはりのうつくしさ。——自覚自信——自粛自戒。——今日は陰暦の三月廿日、明日へかけて秋穂地方は

賑ふだらう、私も巡拝するつもりだつたが、先日の浪費で、その余裕をなくしてしまつた。散歩、農学校に寄つて新聞を読ませて貰ふ、新聞を読まない日は飯を食べないやうな感じ。近来痛切に自然の理法といふものを感じる、生々流転の相を観じる。……石油が切れたので宵から寝る、暗闇で句を作つたり直したりしてゐるうちに、いつとなく睡つた、そして夢中なほ作つたり直したりした。

　無理をするな、素直であれ。――すべてがこの語句に尽きる、この心がまへさへ失はなければ、人は人として十分に生きてゆける。

　　四月廿一日　曇。

　沈欝。――散歩、ＳのＳを訪ねる、逢うてよかつたと思ふ、やつぱり血は水よりも濃い！　暮れて戻る、途中またW店に寄つて飲む、酔ひしれてＦ屋に出かけ、たうとうそこに寝込んでしまつた！

　　四月廿二日　曇――晴。

　酒、酒、酒、馬鹿、馬鹿、馬鹿。W店にもＮ店にもＴ店にもすまないすまない。動けなくなつてW店のお世話になる。

　　四月廿三日　晴。

　朝、さうらうとして帰庵。Ｓから貰うた餅を焼いては食べる。夕方、暮羊君来庵、酒と下物とを持つて。

　ユーモアのある句へ、それからナンセンスの句へ（無為無作の句といつてもよからう）。

　　四月廿四日　曇。

　こん／＼として眠る。

　　四月廿五日　曇。

　憂欝たへがたいところへ敬君来庵、しばらく話したので多少落ちつけた、ありがたう。米と油とを買ふ。古新聞古雑誌ボロをあつめて屑屋に売り払つたら、何と壱円十九銭出来た、これで今月はどうかなるだらう、ありがたしありがたし！夕方、暮羊居往訪、一杯よばれる、散歩してさらに一杯、これで今夜はよく睡れさうなものだが。

四月廿六日　晴——曇。

昨夜よく睡れなかつたので身心が重苦しい。身辺整理する、心内を清掃しよう。動か静か、——死か生か、——ああ私は迷ふ。——一切放下着、——無為無念であれ。——今日も若葉のむかうから、歓呼の歌万歳の声が聞える、私は思はず正坐して合掌した、そして心の奥ふかく、ほんたうにすみませんと叫んだ。……午後散歩、少し買物をして帰る途上でゆくりなく樹明君に出くわした、ああ樹明君、私はあなたに対して自分の忘恩背徳を恥ぢ入る外はありません。めづらしい、ほんにめづらしい晩酌！　といつても目刺をさかなに焼酎をちびりちびりすゝつたのに過ぎないが、それでもそのおかげでよく睡れた。

四月廿七日　曇——雨。

水のにじむやうに哀愁が身ぬちをめぐる、泣きたいやうな、そして泣けさうもない気持である。しづかな雨、憂欝な私、——ふさぎの虫めがあばれようとする。柿の若葉のさわやかさ、要若葉のあざやかさ。午後、暮羊君来談。今夜は不眠で苦しんだ、詮方なく読書。

旅は私にあつては生活の切札だ！

四月廿八日　曇——晴。

——やうやくにして落ちついたことは落ちついたが、身心の不調はいかんともなしがたい。——散歩、山は野は春たけなはである、山にはつゝじが咲きみだれ、燕は季節の鳥としてひらり／＼、嘉川まで行つた、Ｉさんに逢ふ、米一升三十四銭、麦一升十九銭。蕗を剥ぎつゝ思ひ出が尽きない。畑を耕す、茄子胡瓜を植ゑつけて置かう、誰のために！春寒、ランプもつけないで宵から寝た。……

あるときは生きむとおもひあるときは　　　死なむとおもふおのれをむちうつ

日本が——世界も——さうであるやうに、私自身も転換期に立つてゐる、生死に直面してゐる、最後のあがきだ、私は迷うてゐる、どうすればよいのか、どうしなければならないのか。……

四月廿九日　晴。

天長節、日本晴だ、めでたし。とにかく落ちついた、めでたし、めでたし。アメリカからありがたいたより、Ｋさんありがたう。眼白がすばらしくうまいうたをうたうてくれる。つゝましく、ひたすらつゝましく。麦飯をいたゞく、ありがたし、ありがたし。散歩、棕梠の花房が私を少年時代にひきもどした。ふくろうが近寄つて来て、すぐそこの木で啼く、私はしんみり読み書きする。

四月卅日　晴。

転一歩。――好晴、好季節、幸にして海のあなたからの好意で湯田へ行くことが出来た、久しぶりにのんびり熱い湯に浸つた、そしてぞんぶんに飲んだ（正味一升は飲んだらしい！）、くたびれてＳ屋に泊つた。まことによい一日一夜であつた、Ｋさんにあつくお礼を申上げる。――

幸福とは幸福と思ふことそのこと、不幸とは不幸と思ふことそのことであるともいへるが、幸福と思はせ、不幸と思はせるものは何か、さういふ心そのものは何であるか。

無我無心の境地「万葉集から」

初心者のために　○自由律俳句入門俳句性研究として　○句作雑感山頭火通信　○其中消息乞食井月

事実と真実――　ことしもけふぎりの米五升自然と芸術――　誰を待つとてゆふべは萩のしきりにこぼれ

「孤寒抄」　┌銃後風景　┃逍遙遊「天青地白」　└旅で拾ふ

私に出来る事はたつた二つしかない、酒を飲むこと、句を作ること、飲んでは苦しみ、苦しんでは飲む、食ふや食はずで句作する、まことに阿呆らしさのかぎりだ、業、業、業。

遺骨を迎へてぽろぽろ流れる汗が白い函に馬も召されておぢいさんおばあさん

第54章
独慎〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

　昭和八年一月一日、私はゆうぜんとしてひとり（いつもひとりだが）ここにこうしてかしこまっていた。　昨年は筑前の或る炭坑町で新年を迎えた。一昨年は熊本で、五年は久留米で、四年は広島で、三年は徳島で、二年は内海で、元年は味取で。——　一切は流転する。流転するから永遠である、ともいえる。流れるものは流れるがゆえに常に新らしい。生々死々、去々来々、そのなかから、或はそのなかへ、仏が示現したまうのである。　私はまだ『あなたまかせ』にまで帰納しきっていないことを恥じるが、与えられるものは、たとえそれがパンであろうと、石であろうと、何であろうとありがたく戴くだけの心がまえは持っているつもりである。　行乞の或る日、或る家で、ふと額を見たら、『独慎』と書いてあった。忘れられない語句である。これは論語から出ていると思うが、その意味は詮ずるところ、自分を欺かないということであろう。自分が自分に嘘をいわないようになれば、彼は磨かれた人である。人物に大小はあっても人格の上下はない。　私は五十二歳の新年を迎えた。ふりかえりみる過去は『あさましい』の一語で尽きる。ただ感情を偽らないようにして生きていたことが、せめてものよろこびである。　独慎——この二字を今年の書き初めとして、私は心の紙にはっきりと書いた。（「三八九」第五集昭和八年一月二十日発行）

第55章
寝床〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

　ここへ移って来てから、ほんとうにのびやかな時間が流れてゆく。自分の寝床——それはどんなに見すぼらしいものであっても——を持っているということが、こんなにも身心を落ちつかせるものかと自分ながら驚ろいているのである。　仏教では樹下石上といい一所不住ともいう。ルンペンは『寝たとこ我が家』という。しかし、そこまで徹するには悟脱するか、または捨鉢にならなければならない。とうてい私たちのような平々凡々の徒の堪え得るところでない。

　家を持たない秋が深うなつた霜夜の寝床が見つからない

　そうろうとして歩きつづけていた私は、私相応の諦観は持っていたけれど、時としてこういう嘆息を洩らさずにはいられなかった。
人生の幸福とはよい食慾とよい睡眠とに外ならないと教えられたが、まったくそうである。ここでは食慾の問題には触れないでおく。私たちは眠らなければならない。いや眠らずにはいられない。しかも眠り得ない人々のいかに多いことよ。　眠るためには寝床が与えられなければならない。よく眠るためにはよい寝床が与えられなければならない。彼等に寝床を与えよ。　　　　　　　　×

　重荷おもくて唄うたふ　山頭火　　味取観音堂に於て松はみな枝垂れて南無観世音　耕畝久しぶりに掃く垣根の花が咲いてゐる　同ねむりふかい村を見おろし尿する　同

　（「三八九」第壱集　昭和六年二月二日発行）

第56章
俳句に於ける象徴的表現　(新字新仮名)

　　井泉水氏は印象詩乃至象徴詩としての俳句について屡々語られた。しかし俳句に於ける象徴の本質に就ては説かれない。筆端が時々此問題に触れたとも言うべき程である。私は此の根本的説明に接するを待つよりも、こういう問題はお互に協力して研究すべきものではないかと思う。

　病雁の夜寒に落ちて旅寝かな　　　　　　　　　芭蕉僅かの花が散りければ梅は総身に芽ぐみぬ　　井泉水わが足跡人生ひてわれにつゞく朧　　　　　　地橙孫陽の前に鳥ないて安らかな一日　　　　　　　　　　　　　鳳車

　　これらの句を読んだ時、私は或る物を掴んだように思うた。私の心がぱっと光輝したように感じた。かかる傾向は層雲を中心とする人々ばかりの間に起ったのではかい。他の二三氏によっても試みられつつある。　象徴（symbol）が符号（sign）と同じ意味であった時代は既に過ぎて了った。象徴は生命の刹那的燃焼の表現を外にして自己を全力的に表現し得ないのである。かるが故に象徴的表現しか自己を表現し得ない場合に於て、換言すれば或る刹那に於ける自己表現の方式として唯一の象徴的表現が存在する場合に於て象徴的表現は最大の効果を発揮するのである。　そして文芸に於ては詩、殊に俳句は性質上又形式上かくの如き境地をかくの如き方式によって表現せざるを得ないのである。　広い意味新しい意味に於ての象徴主義は霊肉合致であり神人渾融である。そして古典主義と浪漫主義（自然主義以後のそれらで『新』字を附せられている）との合一である（中村星湖氏片上

伸氏等の最近論文参照）。私にはよく解らないが当来の新文芸は象徴主義によって生れるのではないかとも思う。　象徴的表現ということに関聯して忘れてならないのは言葉というものの真意義である。言語を生かさなければ――言葉が生命とならなければ――言葉が生命となった詩でなければ、まことの象徴詩ではない。そして我々の心が物心一如の境地に到達しなければ言葉は我々の生命となり得ないのである。（「樹」八号　大正三年十二月）

第57章
『鉢の子』から『其中庵』まで(新字新仮名)

　この一篇は、たいへんおそくなりましたけれど、結庵報告書ともいうべきものであります。井師をはじめ、北朗兄、緑平兄、酒壺洞兄、元寛兄、白船兄、樹明兄、そのほか同人諸兄姉の温情によって、句集が出版され、草庵が造作されました。おかげで私は山村庵居の宿題を果すことが出来て、朝々、山のしずけさ人のあたたかさを満喫しております。ここに改めてお礼とお詫とを申し上げる次第であります。

　　一昨年——昭和五年の秋もおわりに近い或る日であった。私は当もないそして果てもない旅のつかれを抱いて、緑平居への坂をのぼっていった。そこにはいつものように桜の老樹がしんかんと並び立っていた。

　枝をさしのべてゐる冬木

　　さしのべている緑平老の手であった。私はその手を握って、道友のあたたかさをしみじみと心の底まで味わった。　私は労れていた。死なないから、というよりも死ねないから生きているだけの活力しか持っていなかった。あれほど歩くことそのことを楽しんでいた私だったが、『歩くのが嫌になった』と呟かずにはいられない私となっていた。それほど私の身は労れていたのである。『あんたがほんとに落ちつくつもりなら』緑平老の言葉はあたたかすぎるほどあたたかだった。　こうして其中庵の第一石は置かれたけれど、じっとしていられる身ではない。私はひとまず熊本へ帰ることにした（実をいえば、私には行く方向はあっても帰る場所はないのである）。　冬雨の降る夕であった。私はさんざん濡れて歩いていた。川が一すじ私といっしょ

に流れていた。ぽとり、そしてまたぽとり、私は冷たい頬を撫でた。笠が漏りだしたのだ。

笠も漏りだしたか

　この網代笠は旅に出てから三度目のそれである。雨も風も雪も、そして或る夜は霜もふせいでくれた。世の人のあざけりからも隠してくれた。自棄の危険をも守ってくれた。――その笠が漏りだしたのである。――私はしばらく土手の枯草にたたずんで、涸れてゆく水に見入った。　あなたこなたと歩きつづけて、熊本に着いたのはもう年の暮だった。街は師走の賑やかさであったが、私の寝床はどこにも見出せなかった。

霜夜の寝床が見つからない

　これは事実そのままを叙したのであるけれど、気持を述べるならば、

霜夜の寝床がどこかにあらう

となる。じっさい、そういう気持でなければこういう生活が出来るものでない。しかしこれらの事実や気持の奥に、叙するよりも、述べるよりも、詠うべき或物が存在すると思う。　ようやくにして、場末の二階を間借りすることが出来た。そしてさっそく『三八九』を出すことになった、当面の問題は日々の米塩だったから（ここでもまた、井師、緑平老、元寛、馬酔木、寥平の諸兄に対して感謝の念を新らしくする）。　明けて六年、一月二月三月と調子よく万事運ぶようであったが、結局はよくなかった。内外から破綻した。ただに私自身が傷ついたばかりでなく、私の周囲の人々をも傷つけるような破目になった。　事の具体的記述は避けよう、過去の不愉快を繰り返して味わいたくないから。　私はまた旅に出るより外はなかった。

　何処へ行く、東の方へ行こう。何処まで行く、其中庵のあるところまで。

　六年が暮れて七年の正月には、私は緑平居でお屠蘇を頂戴していた。そしてボタ山を眺めながら話し合っていた。　ここで、其中庵の第二石が置かれた。今暫らく行乞の旅を続けているうちに、造庵の方

法を講じてあげるとのことであった。　私は身も心も軽く草鞋を穿いた。あの桜の老樹の青葉若葉を心に描きながら坂を下りて行った。

　福岡へ、唐津へ、長崎へ、それから島原へ、佐賀へ、神湊へ、八幡へ、戸幡へ、小倉へ、門司へ、そしておもいでふかい海峡を渡った。　徳山、小郡、――この小郡に庵居するようになろうとは、私も樹明兄も共に予期していなかった。因縁所生、物は在るところのものに成る。

　句集の原稿は、緑平居で層雲から写してまとめたが、句数は僅々百数十句に過ぎなかった。これが、これだけが行乞流転七年の結晶であった。　私はその句稿を頭陀袋におさめて歩きつづけた。石を磨いて玉にしようとは思わないが、石には石だけの光があろう、磨いて、磨いて、磨きあげて、せめて石は石だけの光を出そうと努めるのが、私のような下根のなぐさめであり力である。　しかし、私にはまだ自選の自信がなかったので、すまないとは思いながら、井師に厳選をお願いした、師が快く多忙な貴重な時間を割いて、何から何まで行き届いたお心づかいに対しては、まことに何ともお礼の申しあげようがない。　句集出版については北朗兄を煩わした。まだ一面の識もない私に示された好意と斡旋とは永久に忘れることがないであろう。　そしてさらに、後援会の事務一切を一身に引き受けて、面倒至極な事務をあんなに手際よく取り捌いて下さった酒壺洞兄に心からの謝意を表することを忘れてはならない。　緑平老、白船老の厚情については説くまでもあるまいが、元寛兄、俊兄、星城子兄、入雲洞兄、樹明兄、敬治兄等の並々ならぬ友誼については、ここで感謝の一念を書き添えずにはいられない。

　こうして、身にあまる恩恵につつまれつつ、私は東漂西泊した。鉢の子という題名は私の句集にふさわしいものであった。一鉢千家飯、自然が人が友が私に米塩と寝床とをめぐんだ。

　庵居の場所を探ねるにあたって、私は二つの我儘な望みを持っていた。それが山村であること、そして水のよいところか、または温泉地であることであった。　最初、嬉野温泉でだいぶ心が動いた、そこは、水もよく湯もよかった。視野が濶けすぎて、周囲がうるさくない

こともなかったけれど、行乞の便利は悪くなかった。しかし何分にも手がかりがない。見知らぬ乞食坊主を歓迎するほどの物好きな人を見つけることが出来なかった。

　ついで足をとめたのが川棚温泉である。関門の都市に遠くない割合に現代化していない。山もうつくしいし湯もあつい。ことにうれしいのは友の多い都市に近いことであった。私はひとりでここが死場所であるときめてしまった。

　花いばらここの土とならうよ

　こんな句が口をついて出るほどひきつけられたので、さっそく土地借入に没頭した。人の知らない苦心をして、やっと山裾の畑地一劃を借入れる約束はしたが、それからが難関であった。当村居住の確実な保証人を二人立ててくれというのである。幸にして幸雄兄の知辺があるので、紹介して貰って奔走したけれど、田舎の人は消極的で猜疑心が強くて、出来そうで出来ない。一人出来たと喜べば、二人目が破れて悲しませせる。二人目が承諾すると、一人目が拒絶する。——私はこの時ほど旅人のはかなさを感じたことはない。

　ひとりきいてゐてきつつき

　思案にあまって、山路をさまようて、聞くともなく、そして見るともなく、啄木鳥に出逢ったのであった。　私は殆んど捨鉢な気分にさえ堕在していた。憂鬱な暑苦しい日夜であった。私はどうにかせずにはいられないところまでいっていたのである。　だが、私はこんなに未練ぶかい男ではなかった筈だ。むろん人間としての執着は捨て得ないけれど、これほど執着するだけの理由がどこにあるか。何事も因縁時節である、因縁が熟さなければ、時節が到来しなければ何事も実現するものではない。なるようになれではいけないが、なるようにしかならない世の中である。行雲流水の身の上だ、私は雲のように物事にこだわらないで、流れに随って行動しなければならない。　去ろう、去ろう、川棚を去ろう。さらば川棚よ、たいへんお世話になった。私は一生涯川棚を忘れないであろう。川棚よ、さらば。

　けふはおわかれの糸瓜がぶらり

私の心は明るいとはいえないまでも重くはなかった。私の行手には小郡があった、そこには樹明兄がいる。そのさきには敬治兄がいる。その近くのＡ村は水が清くて山がしずかだった。それを私ははっきりと記憶している。

『もし川棚の方がいけないようでしたら、ここにも庵居するに似合な家がないでもありませんよ。』此夏二度目に樹明兄を訪ねてきた時、兄が洩らした会話の一節だった。私はその時はまだ川棚に執着していたので、その深切だけを頂戴した。それが今はその深切の実を頂戴すべく、ひょうぜんとしてやってきたのである。　或る家の裏座敷に取り敢えず落ちついた。鍋、釜、俎板、庖丁、米、炭、等々と自炊の道具が備えられた。　二人でその家を見分に出かけた。山手の里を辿って、その奥の森の傍、夏草が茂りたいだけ茂った中に、草葺の小家があった。久しく風雨に任せてあったので、屋根は漏り壁は落ちていても、そこには私をひきつける何物かがあった。　私はすっかり気に入った。一日も早く移って来たい希望を述べた。樹明兄は喜んで万事の交渉に当ってくれた。　屋根が葺きかえられる。便所が改築される（というのは、独身者は老衰の場合を予想しておかなければならないから）。畳を敷いて障子を張る。――樹明兄、冬村兄の活動振は眼ざましいというよりも涙ぐましいものであった。　昭和七年九月二十日、私は其中庵の主となった。　私が探し求めていた其中庵は熊本にはなかった、嬉野にも川棚にもなかった。ふる郷のほとりの山裾にあった。茶の木をめぐらし、柿の木にかこまれ、木の葉が散りかけ、虫があつまり、百舌鳥が啼きかける廃屋にあった。　廃人、廃屋に入る。　それは最も自然で、最も相応しているではないか。水の流れるような推移ではないか。自然が、御仏が友人を通して指示する生活とはいえなかろうか。

今にして思えば、私は長く川棚には落ちつけなかったろう（幸雄兄の温情にここで改めてお礼を申しあげる）。川棚には温泉はあるけれど、ここのような閑寂がない。しめやかさがない。　私は山を愛する。高山名山には親しめないが、名もない山、見すぼらしい山を楽しむ。　ここは水に乏しいけれど、すこしのぼれば、雑草の中からしみじみと湧き出る泉がある。　私は雑木が好きだ。この頃の櫨の葉のう

つくしさはどうだ。夜ふけて、そこはかとなく散る木の葉の音、おりおり思いだしたように落ちる木の実の音、それに聴き入るとき、私は御仏の声を感じる。

　雨のふる日はよい。しぐれする夜のなごやかさは物臭な私に粥を煮させる。

　風もわるくない。もう凩らしい風が吹いている。寝覚の一人をめぐって、風はどこから来てどこへ行くのか。さみしいといえば人間そのものがさみしいのだ。さみしがらせよとうたった詩人もあるではないか。私はさみしさがなくなることを求めない。むしろ、さみしいからこそ生きている、生きていられるのである。

ふるさとはからたちの実となつてゐる

　そのからたちの実に、私は私を観る。そして私の生活を考える。　雨ふるふるさとはなつかしい。はだしであるいていると、蹠の感触が少年の夢をよびかえす。そこに白髪の感傷家がさまようているとは。――

あめふるふるさとははだしであるく

　最後に私は、川棚で出来た句『花いばら、ここの土とならうよ』の花いばらを茶の花におきかえなければならなくなったことを書き添えよう。そして、もう一句、最も新らしい一句を書き添えなければなるまい。

住みなれて茶の花のひらいては散る

（「三八九」復活第四集）

第58章
故郷〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

　家郷忘じ難しという。まことにそのとおりである。故郷はとうてい捨てきれないものである。それを愛する人は愛する意味に於て、それを憎む人は憎む意味に於て。　さらにまた、予言者は故郷に容れられずという諺もある。えらい人はえらいが故に理解されない、変った者は変っているために爪弾きされる。しかし、拒まれても嘲られても、それを捨て得ないところに、人間性のいたましい発露がある。錦衣還郷が人情ならば、襤褸をさげて故園の山河をさまようのもまた人情である。　近代人は故郷を失いつつある。故郷を持たない人間がふえてゆく。彼等の故郷は機械の間かも知れない。或はテーブルの上かも知れない。或はまた、闘争そのもの、享楽そのものかも知れない。しかしながら、身の故郷はいかにともあれ、私たちは心の故郷を離れてはならないと思う。　自性を徹見して本地の風光に帰入する、この境地を禅門では『帰家穏座』と形容する。ここまで到達しなければ、ほんとうの故郷、ほんとうの人間、ほんとうの自分は見出せない。
自分自身にたちかえる、ここから新らしい第一歩を踏み出さなければならない。そして歩み続けなければならない。　私は今、ふるさとのほとりに庵居している。とうとうかえってきましたね——と慰められたり憐まれたりしながら、ひとりしずかに自然を観じ人事を観じている。余生いつまで保つかは解らないけれど、枯木死灰と化さないかぎり、ほんとうの故郷を欣求することは忘れていない。（「三八九」復活第四集　昭和七年十二月十五日発行）

第59章
遍路の正月　(新字新仮名)

　私もどうやら思い出を反芻する老いぼれになったらしい。思い出は果もなく続く。昔の旅のお正月の話の一つ。　それは確か昭和三年であったと思う。私はとぼとぼ伊予路を歩いていた。予定らしい予定のない旅のやすけさで、師走の街を通りぬけて場末の安宿に頭陀袋をおろした。同宿は老遍路さん、可なりの年配だけれどがっちりした体躯の持主だった。彼は滞在客らしく宿の人々とも親しみ深く振舞うていた。そしてすっかりお正月の仕度――いかにも遍路らしい飾りつけ――が出来ていた。正面には弘法大師の掛軸、その前にお納経の帳面、御燈明、線香、念珠、すべてが型の通りであったが、驚いたことには、右に大形の五十銭銀貨が十枚ばかり並べてあり、左に護摩水の一升罎が置いてあった！　私は一隅に陣取ったが（安宿では一隅の自由しか許されない）、さて、飾るべき何物も持っていない。ただ破れ法衣を掛け網代笠をさげ※杖を立て頭陀袋を置いて、その前に坐ってぼんやりしているより外はなかった。　そこで私は旅の三回目の新年を迎えた。ありがたくも私の孤寒はその老遍路さんの酒と餅と温情とによって慰められ寛ろげられた。　生々死々去々来々、南無大師遍照金剛々々々々々々々々。（「愚を守る」初版本　昭和十六年八月刊）

第60章
歩々到着　(新字新仮名)

　禅門に「歩々到着」という言葉がある。それは一歩一歩がそのまま到着であり、一歩は一歩の脱落であることを意味する。一寸坐れば一寸の仏という語句とも相通ずるものがあるようである。　私は歩いた、歩きつづけた、歩きたかったから、いや歩かなければならなかったから、いやいや歩かずにはいられなかったから、歩いたのである、歩きつづけているのである。きのうも歩いた、きょうも歩いた、あすも歩かなければならない、あさってもまた。——

　木の芽草の芽歩きつづけるはてもない旅のつくつくぼうしけふはけふの道のたんぽぽさいた　　　　　□どうしようもないワタシが歩いてをる

　（「春菜」層雲二百五十号記念集　昭和七年五月刊）

第61章
松山日記　(新字旧仮名)

“同塵居”　誓詞に代へて我昔所造諸悪業皆由無始貪瞋痴従身語意之所生一切我今皆懺悔

三帰礼自から仏に帰依し奉る　当に願はくは衆生と共に大道を体解して　　　　無上意を発さん自から法に帰依し奉る　当に願はくは衆生と共に深く経蔵に入りて　　　智慧海の如くならん自から僧に帰依し奉る　当に願はくは衆生と共に大衆を統理して　　　　一切無礙ならん

願以此功徳　普及於一切我等与衆生　皆共成仏道

紀元二千六百年元日

輝かしい新世紀の黎明。——午前九時、聖寿万歳斉唱、黙祷。——

新年誓詞——

“こゝに昭和十五年の元旦を迎へ恭しく聖寿の万歳を寿ぎ奉り、いよ／＼肇国の精神を顕揚し、強力日本を建設して新東亜建設の聖業完遂に邁進し、もつて紀元二千六百年を光輝ある年たらしめんことを堅くお誓ひ申します。”

二月十一日　曇——雨。

紀元節、新らしい世紀を意識し把握し体得せよ、殆んど徹夜だつた、句稿整理。午前、道後温泉入浴、護国神社参拝、午後、一洵兄と同道して月村君を訪ね、三人打連れて漫歩漫談、降りだしたので急いで帰つた。今日も飲みすぎだつた、酒を慎しむべし、己を省みるべし、シヨウチユウよ、さよなら！（消極的に日本酒だけを味ふべし）

落ちついて雨ふる、雨ふりて落ちつく。……徹夜執筆。——

二月十二日　雨。

門外不出、終日徹夜して専念に句稿を整理する、みづから選ぶ、——むつかしい／＼、つゝましくすなほに、しづかにおちついて仕事をする、善哉々々。一昨日、Ｓ寺で書きなぐつた全紙の揮毫が気になつてしやうがない、破るべし／＼、破らなければならない／＼、一洵炊君にたのんで何とかしてもらふことにして、ほつと安心、こだはるな／＼、よか／＼。

（酔中乱筆、なつちよらん！）

二月十三日　雨——曇。

あまり寝ないで稿をすゝめる、明日までには“鴉”を、数日内に一代集の原稿をまとめなければならない。……藤君へ手紙をやつと出した、ほつと冷汗を流した、書きたくない、しかも書かなければならない手紙だつた！散歩がてらポストまで出かけた、買物いろ／＼。一杯機嫌でうたゝ寝してしまつた、眼が覚めたらもう夕方だつた、道後へ出かけて理髪入浴、一洵炊居へまはつて戻る、身心何となく不調、今日は今夜はなまけてしまつた。途上、菜葉一株拾うた、煮て食べる。夜をこめて鳴くのは蟇だつた、鳴く鳴く、歩く歩く。風、悪夢、下痢、——いやな一日であつた。

・※虫の言葉・蟇の春　　今日の買物酒三合　　七十五銭昆布巻　　十八銭酢　　　　五銭大大根　　十六銭目刺　　　十五銭水仙　　　三銭ハガキ　　十銭バツト　　九銭

二月十四日　曇——晴。

早起、徹夜するつもりだつたのに、身心不調で今夜もなまけてしまつた、九時ごろ出かける、古町まで歩いて、そこから電車で高浜へ、澄太君を迎へるために、待つ間、しみ／″＼海を眺めた。一時、同道して帰庵、酒も豆腐も買うて貰つて、歓談はつきない、高橋一洵さん来庵、おいしい漬物を持つて来て下さつた、夕方、藤岡政一さんも来庵（お酒とお手紙とはほんたうにうれしかつた、涙ぐましかつた！）、手土産として、さらに大密柑やら田舎饅頭やら、……ありがたう、あ

りがたう。四人楽しく酔ふ（必ずしも酒ばかりに酔うたのではない）、寄書したり半折を書いたりする。十時前にいつしよに道後温泉へ出かけたが、私は途中で酔が出て、たうとうＴ屋に倒れこんでしまつた、すまなかつた、何しろ私一人で一升近く飲んだものだから。今日の酒はうまかつた、ありがたかつた。

┌どんぐり　┌どんぐり先生（一洵）“三鈍”┃どんこつ　┃どんこ和尚（澄太）　└どんびき　└どんびき老

豆腐の佃煮とは！

“草庵きのふけふ”

二月十五日　晴。

早朝帰庵。——一洵居に大山君を見舞うたが、早すぎて格子戸があけてなかつた、再び訪ねたときは遅すぎて、すでに出立後だつた（今朝は時計のないのが口惜しかつた）、といふ訳で、学校で、どんぐり先生に逢うて、昨夜来のことを報告する。近頃おかしかつたのは、昨夜、Ｔ屋で田舎娘と床を並べて寝てゐたことだつた（安宿で合宿だから）、うれしかつたのは煙草を切らして困つて朝まだきに途上の人から二三本頂戴したこと。……春光うら／＼、駅まで歩いて行く、京都の豊田さんからの贈物——赤蕪漬——を受け取つて、いそ／＼その桶を抱いて戻つた、途中和蕾居と一洵居とに寄つて句会のことを相談して取極めた。毎日、友情につゝまれて、ほんにあたたか！ゆつくり晩酌、冷酒を呷らぬこと。このごろ、よく物忘れする、老はおのづからあらはれる。駅で千人の“力”の字を書いてあげた。夜を徹して仕事、がんばれ、精出せ、しつかりしろ。

今日明日（旧正月八日九日）は有名な椿祭で街は人出が多い、春らしい風景だ。松山のやうなよい場所で、そしてこんなによい知友があつて、よくなれない私なら。——山頭火と酒と俳句とは三味一体らしい！

“椿祭”（縁起笹）

二月十六日　曇。

霜、バケツの水がつめたい。ちよつとポストまで、練兵場は練兵中で横切れないので、学校の方をまはる、おかげで途上二三句拾つた。藁屑を焚いて火鉢用の灰をこしらえる、このごろの私としてはめづらしいなごやかさである！　なか／＼寒いけれど、春が来たのに間違ひはない。

二月十七日　晴。

早起きして執筆。詮方なくポストまで出かける、途中、突撃教練の動作を眺めて感激した。練兵場の枯草にも雲雀が春をよろこんでゐる！午前は一洵君来訪、大いに画筆を揮はれた、午後は二神姉妹来庵、花をいろ／＼持つて来て活けて下さつた、モナカもおいしかつた、ありがたう。今日はみんないつしよに茂君からの贈物赤かぶら漬を味つた、茂君よ、よろこんで下さい。ゆくりなく、或る事に於て自分の卑しさを見つけた、ああ、放下せよ、超越せよ。夜はまたポストへ、ついでに入浴、空瓶を酒に代へて晩酌にめぐまれた！どんびきが寒いのでひつこんでゐたが、また出て来た、今夜もあぶなく踏みつけるところだつた。伊予密柑は萩密柑の分家ださうなが、ゴツイ／＼、ヱライ／＼。愉快な一日だつた、快く酔うてよう眠れた、借りて来てある漱石の小品も読まないで、床に入るなり、ぐう／＼ぐう／＼。

ぼんやりしてゐることは、とき／″＼は、なか／＼によろしい、ありがたい。

二月十八日　快晴。

清明を感じる、風は冷たいけれどなごやかであつた、未明、眼覚めて起床、よねんなく執筆、暁天にひゞきわたる護国神社の太鼓の声は尊い。午後は柿の会第二回句会を開催する、来会者は六名――一洵、月村、柳女、布佐女、和蕾、無水――だけだつたが、親しみのある会合であつた、夕方一先づ散会、一洵無水和蕾の三君は居残つて、朱鱗洞の句碑建設について相談した。いろ／＼御馳走を頂戴してありがたかつた、労れてすぐ寝床にはいつた。

俳句的――俳句性　　単純――

二月十九日　晴――曇――雨。

早起執筆、怠け者の忙しさである。朝焼は美しかつたが、だん／＼曇つて、たうとう雨になつた、寒い〻〻、冷たい〻〻、夜は雨になつてぬくい／＼。十時頃、一洵君来庵、同道で布佐女さんを見舞ふ、大したことがなくて安心した、お土産は茶掛三枚（一洵君の絵に私が賛句したもの、お互に心臓は強いぞ／＼！）。徹夜で句稿整理。いつとなくどこからとなく鼠が来てゐる、猫はお先に来てゐる、油断大敵ですぞよ！夜〻の雨の音はよろしいな、おちつける。

人間は未完成でも（それがよろしいけれど）、制作はそれ／″＼完成品であるべし。

若さと老┕　┗━━┛　赤い手と青白い手をならべて——

“三ドン物語”（ドンコ和尚、ドンビキ先生、ドングリ翁）

“早春日記”“松山散策ところ／″＼”“野人断想”

二月廿日　雨——曇。

しと／＼ふる雨の音、白みくる暁の色、——せんねんに句稿整理、——月が出て来て、句を作らせた！

二月廿一日　快晴、午後多少の曇。

午前中にやつとこさで句稿をまとめあげた、さつそく速達で東京へ送つた、やれ／＼御苦労〻〻〻。午後一洵来庵、勧められて私もＭ家の埋骨式に列する、墓も人も金持の臭味がないでもなかつた。風、風、春風がまた木枯になつた。一洵君を通して、村瀬さんから明晩招待される、ありがたう。健から来信、ありがたうありがたう、キユツと一杯！　うまいなあ！　夕はまた街へ出かけて一本仕入れて帰り、チビリ／＼、仕事をすました安心と、早く送金してくれた嬉しさとで、ほどよく酔うて、ぐつすり睡つた。

二月廿二日　曇。

未明起床、残つたゞけを飲む、身辺整理、私には私では割り切れないものがある！小雪ちらほら、なか／＼寒い。夕方早く一洵君往訪、同道して村瀬氏方へ推参、相客二人（支配人Ｆ氏、校長Ｓ氏）、酒は白鹿、寄せ鍋はぽつぽと湯気を立てる、主人夫妻は温情をばらまく、

私も今夜はとりわけ野人の本領を発揮して、飲んだ々々食べた々々！　揮毫は苦しくないでもなかつたが、刀剣拝見は珍らしかつた。だいぶ更けて解散、途中、五十三銭浪費して無事帰庵。

┌単純　　　　　┌自由律└直観　　　　┃自然
律　　　　　　└必然律

二月廿三日　晴、日本晴。

天も地も私もうらゝか（朝は霜白く土は凍てゝゐたけれど）、まつたく春！　障子をあけはなつて春を呼吸する。高商生伊川君ひよつこり来訪、しばらく雑談、ひきつゞいて、和蕾君来庵、空箱、釘、密柑を持つて来て下さつた、ありがたかつた。うち連れて、ついそこの龍穏寺へ参詣する、なか／＼の人出で、露店もたくさん出てゐる、私は和蕾君に、処女会の桜餅を買て貰つた、うまかつた、春の匂ひがする！有名な孝子桜、又の名十六日桜は親木が朽ちて若木がはかなくもたつた一輪の花をつけてゐた。

ほんに一輪咲いて一輪

二月廿四日　春、春、春。――

四時前後起床、月光あまねく万象きよらか。午前、一洵君来庵、漫談もまた楽し。夕暮、ポストまで出かける、酒樽の誘惑にまけて、米代を酒代に代へて戻る、甘いやうな苦がいやうな。――澄太君から、よか／＼といふ返電が来た、うれしい。よい月夜であつた（旧正月の十七日）。

二月廿五日　雨――曇――晴。

護国神社の大鼓と共に起きる、せつかくの日曜日が雨で気の毒だ、私は雨傘がないので、しやうことなしに蟄居、雨もわるくない、落ちつかせてくれる、日記、句稿、書信など整理する。ちよいとポストまで、あゝ、あたゝかしありがたし、練兵場では、雲雀がのんきにうたつてゐた、草がぼつ／＼青んで来た、綿入をぬがう、足袋をはくまい。密柑の皮を煮る、砂糖代用として飴玉二つ三つ入れて。けふも途上で、菜葉一株拾つた、お汁の実にした。宵から寝床の中で読書、極楽々々、すみません／＼。

二月廿六日　晴。

起床してから、東雲神社の大鼓、そして護国神社の大鼓がとうとう鳴りだした。すなほに／＼、こだはるな／＼、——これは今日此頃殊に私が自分に言つて聴かせる言葉である。春寒し——早春の感じはよろし。午前中、高商生二名来訪、ちよつと新俳句について話す、珍らしくも魚売婆さんがくる、いやだから、きつぱりと断りきる。おとなりから芹のおひたしを頂戴する、おいしかつた、早春の匂ひだ。午後はポストまで、ついでに洵汀居を訪ねる、しばらく雑談してから、同道して、道後山へ観梅と出かける、紅梅林で、しかも散りぎわで、いやらしかつた、梅は白梅、咲きそろはないうちがよろしい、ぶら／＼かへつて来たが、よい散歩だつた。一洵居で、めづらしくもまたきなこ餅の御馳走になつた、そしてまた一洵君が濁酒の代りに豆腐を買うてくれた、多謝。夜は“遍路行”推敲。

芹

二月廿七日　晴、春光あまねし。

早寝早起で、有明月夜がとてもよかつた、夜の明けないうちに御飯をすまして、夜が明けると道後へいつた、春霜が冷たかつたけれど、入浴して顔を剃つたらさつぱりした。魚売のいやな婆さんがけふもまた来た、すげなく断つた（銭もないのだが）、悪く思はないでくれ、いやなものはいやなんだ！昼御飯でも食べようかとしてゐるところへ一洵汀さん来庵、春らしくのんびり話す。洗濯、裁縫、漬物、そして揮毫。新聞代を払ふ、電燈料も払はなければならない、酒代どころか米代もなくなつた！　金持にならうとはもうとう思はない、貧乏でもかまはないけれど、米だけは不足なしに暮らしたい。

“草庵昨今”“山水行脚”

二月廿八日　曇、小雨。

ゆつくり朝寝した、私としては。朝、無門関第一則——趙州狗子。今朝からは新聞がある、一つのよろこびである。苦労しなさい、苦労は薬だ、毒薬だ、良薬だ、私はさん／″＼苦労をつゞけてゐる、毎日毎日、手紙を書いては出してゐる、通信費が嵩むには閉口する、うれし

い悲鳴だけれど。三時頃、一洵老来庵、お土産ありがたう、郵便局まで同道する、安君へ悪筆発送、ほつと安心。何となく憂欝、疳癪玉が破裂しさうで、自分ながらハラ／＼する、情ないことだ！春らしく降る雨、シケてもこぼすな、それを芽を吹かせ花を咲かせる雨だから。宵にしばらく寝て、それから不眠、身辺整理。

回光返照――

ふりかへりみるこゝろ。ぢつと待つてゐる心がまへ。

何々しなければならない生活。

二月廿九日　曇、閏の今日である。

早くから眼は覚めていたけれど、――護国神社の大鼓が鳴りだより起きた。おごそかに、そしてしめやかに明けてくる――日々好日。私の生活もやうやくにして、自分の本性にかへり、本調子になりつゝあるらしい、賀すべし、励むべし、けふも洗濯、縫物、そして揮毫（調子がよろしくなかつたが）。昨年度の映画の中でベストワンといはれる“土”の入場券を貰つてゐたけれど、たうとう――行かず仕舞になつた、衰へたるかな山頭火、いつまでも青年性を失はないであれ、老いても老いぼれたくない、若い老人のよさを保持せよ。一時、一洵さん来庵、三月三日の吟行について相談する。或る事に於て、自分で自分の早合点がおかしかつた。やつとポンプの修理が出来て、前の井戸から汲むことが出来るやうになつた、貰ひ水といふものはなか／＼厄介なものである。山から下りて来た子供が花――私の好きな藪椿をくれた、ありがたう、壺に投げ入れて飽かず眺める。ポストまで出かける、なでしこを幸にして見つけた、葱一把九銭、葱は蔬菜のうちで、高いことも高いが旨いことも旨い。いよ／＼一文なしになつてしまつた、私にあつてはあたりまへの事だけれどやつぱりさみしい！不孝者！　とたえず反省の声が私につぶやく、今夜はぐつすりと睡れた。

人、猫、鼠、小鳥

“一草一人”俗仙人

三月一日　曇、興亜奉公日を忘るゝなかれ。

けさは早かつた、なか／＼夜が明けなかつた、雪、雪が降つて積んでゐる、めづらしい雪だ、明けはなれゆく雪のしづけさ。――身心清明。雪見酒といふところだが。……米があり、炭があり、煙草があり、……今日の私は幸福である、合掌。昨日も寒かつたが今日も寒い、また綿入をかさねる。護国神社参拝者が今日は特に多い、拝殿前に並列して合唱する女学生の姿が見え、声が聞える、雪はしづかに人はつゝましく、ああ。朝から待つものは先づ郵便、それから新聞、それから友達、それから。――葱はおいしい、その生長力にも驚かされる、切つて置いた茎の中からぐい／＼芯が伸び出てくる！春の雪である、積んだといつても解けやすい、日がさしてくるとたちまち解ける、風も吹く、家をめぐつて雪解の水のしづくする音が賑やかだ。早春の気まぐれ日和が私をあかぎれでいためる、漬物石を探しまはりつゝ、さて。――夕方吟行の事で和蕾君を訪ねる、帰途、泰山木の一枝を黙つて頂戴した！　泰山木はよいかな、よいかな、よいかな。身心何となく不調、早寝する、なか／＼寝つかれない、句作一途の私であつたが、さうするより外ないが、私には世間的な生活能力がないのだ。

三月二日　晴、冷たい、薄氷が張つてゐた。

快眠したので気持よく眼が覚める、起きると間もなく護国神社の大鼓が鳴りだした。すなほな朝である、おちついて執筆。日本晴、何となく神代日本、古代日本を思ふ、そして日本的なものを感じる。蓴子君からまた入間海苔を頂戴した、お隣へもお裾分する、感謝々々。澄太君から金堂のヱハガキ、北国はまだ／＼寒からう。右手の親指のあかぎれが何かにつけて不自由を感じさせる。練兵の声が折々聞える。春光煕々、洗濯、裁縫、等々。道後へ出かけようとしてゐるところへ一洵君来訪、明日の吟行の打合をする。注意深くあれ、或る事に於て、そゝつかしい自分を観て情けなかつた。腹工合がよろしくない、食べすぎが源因だらう。夕方、出かけて、質屋で少し借りる、すまないと思ふけれど仕方がない、背に腹はかへられない場合である、さつそく米を買ふ、ハガキを買ふ、大根を買ふ、……酒も煙草も買ふ、おかげで助かつた、ありがたう／＼。夜、しづかに飲んだ、九日ぶりの酒である、うまかつたことはいふまでもない、あゝ酒飲はつらいか

な。オツチヨコチヨイを清算せよ、貪心を去れ、——事実に即していへば、梯子酒を飲むなといふのである。ほどよく酔うて、ぐつすりと寝た、好い一日ではあつた。

自然性　簡易性　清浄性　妥当性　　調和性┌感性└知性　みだれざる情熱

三月三日　曇。

熟睡の熟睡だつた、護国神社の大鼓も知らなかつた、起きるより先づ一杯、そして道後へいそいで一浴。九時前に出かける。市駅で連中といつしよになる、十時の汽車で田ノ窪へ、そこから一里ばかり歩いて拝志の小山邸へ、同行は一洵、月邨、三土思夫妻、布佐女、栗田姉妹、——男四人の女四人で、賑やかであつた、田舎はよいなあと思ひながら野を行き川を渡つた、皿ヶ峰は特殊の上形をひろげてゐた、重信川はすつかり涸れてゐた。小山邸は昔風の大きい空屋敷だつた（庄屋であつたさうな）、庭園が広くて万両がこゝにもそこにも赤い実をかゞやかせてゐた、老梅もよく、大南天もおもしろかつた、すべてに旧家らしい色彩と香気とが残つてゐた、ゆつくりお辨当を頂戴して句座を開いた、まことにのんびりした会合だつた、帰途はまた賑やかに田ノ窪駅まで歩いて、五時の汽車で市駅まで、そこから私は一人で歩いて戻つた、かなり草臥れた。火鉢に火があつたのはうれしかつた、熱いお茶で食べた食べた、そしてすぐ寝た寝た。……今日も好い一日であつた。

“早春の一日”

三月四日　曇、午後は雨。

明けはなれてから起床、あたゝかいのが何よりだ、昨日の春蘭を植える、蘭、ことに野の蘭は好きだ。門外不出、つゝましく読書、清閑を楽しんだ。

三月五日　雨——曇。

早起、四時前だつたらう、なか／＼大鼓が鳴らなかつた。まだ降つてゐる、しと／＼しと／＼春雨らしく。和尚さん久しぶりに帰山。藤君から、指月堂君から、北支出征の横君からハガキ。支那を考へると

き、支那にある日本を考へるとき、私たちのこゝろはいたまざるをえない、……よきにつけよくないにつけ。午後、霽間をちよつとポストまで、どうでも雨傘一本買はなければならない。明日から当寺の御祭礼といふので、近所の人々がやつて来て、幟を立てたり何かしてゐる、大国旗小国旗、“御幸山大権現”の幟が何本も立てられた。今晩の御飯はとても出来がよかつた、御飯炊は下手でない私ではあるけれど、これはまた格別においしかつた。早寝、夜中に眼覚めて読書。

今日の買物十八銭　はぎ三十銭　密柑五四銭　湯銭六銭　豆腐一三銭　金盞花一把二十銭　草餅十　合計金六十一銭也　今日の三食　┌大根朝│　└漬物（白菜）　┌豆腐　│昼│　漬物　└海苔　│　┌汁　│晩│　〃　└若布　お茶受　草餅、キヤラメル、密柑。

三月六日　曇――晴。

けさもずゐぶん早かつた、早すぎた、何もかもかたづいてもまだ夜が明けなかつた。亡母第四十九回忌、御幸山大権現祭日、地久節、母の日週間。出校の途次、一洵さん立ち寄る、母へお経をよんでくれる、ありがたう、望まれて近詠少々かいてあげる、いづれ何かの埋草になるのだらう。道後で一浴、爪をきり顔を剃る、さつぱりした。仏前にかしこまつて、焼香諷経、母よ、不孝者を赦して下さい。道後から帰つてくると、驚いたことには、お寺への参道に――庵ちかく――露店が数々出てゐた、駄菓子店、おでん店！　※焼店、果物店、……おでんやには私も苦笑した。近所の男女が庫裡で御馳走をこしらへてゐる、おまつりは、いはゞ親睦会である。ちらりほらり参詣人が登つてくる、午後、墓地の広場で護摩が焚かれた、もつたいぶつた坊さん数人、俄ごしらへの山伏数人、それらを囲んで参拝者が数十人、……野天の護摩の焔、――よいものがある。練兵場から機関銃の音、突喊の叫声がしきりに聞える。今日はまつたく春の気候だつた、ぬくたらしいほどだつた、綿入をぬぎ火燵をとりのけ、そして火鉢もうるさい位に。のんびりと寝た、仏前からおさがりをいたゞいて。――

“三月六日の記”

三月七日　曇、春ぐもりらしい、花ぐもりとまではいへないけれ

ど。——

ゆつくり朝寝、といつても七時には起きたが、けさは郵便が来なかつた、さみしいな。ぺんぺん草を活けて楽しむ、春蘭の蕾もふくらんでくる。机上整理、——揮毫、書信、原稿、等々。井師、斎藤さん、大山君へ手紙をだしてほつとした、自分ながら自分のぐうたらにあきれる。……

……私も“山頭火一代集”ともいふべき此句集の刊行を転機として転一歩したいと念願してをります、これでは私はまだ／＼落ちつけません。……老を楽しむ、——酒を味ふ、——さういふ境に参じたいものであります。

などゝ書いて送つた。ようこらへるぞ、——と私は私を励ましてゐる、一杯やりたいのをぢつとこらへてゐる、疳癪をぐつと抑へつけてゐる、私もだん／＼ほんたうの私に落ちついてゆくらしい、澄太君が“坐を定めたる山頭火”と説いたが、その坐は一草庵の坐だけでなく、私本然の坐でなければならない。出て歩くと、春風しゆう／＼、ほうつと霞んでふわり／＼雲が遊んでゐる。夕方郵便局へ出かけたついでに街を散歩する、帰つて来て、何となく身心の不調を感じてすぐ寝る。身心多少の不調はかへつてよろしい、私のやうなものには。

——

◎無理のない、随つて嘘のない生活。　水の流れるやうに生きたい。

三月八日　曇、小雨。

おとなりの紅梅がうつくしい（松山には紅梅が多い、それを好く人も多いらしい）、降りそぼる雨は春雨だな、ふと見ると、門前にめづらしく倖が来てゐる、御祈祷をしてもらふ人が詣つたらしい、やがて※が鳴りだした。久しぶりに頬白のさへづりを聞いた、方々から来信、方々へ発信。今日の御飯はおいしかつた、こゝろすなほな一日だつた。

・釜飯の話　　附、飯櫃の話・苔と垢

三月九日　曇、晴れたり降つたり、風が吹いたり。

よい眼覚めであつた。郵便が来なかつたので、とても寂しい。刻煙草を手に入れたくて——昨日はどうしても見つけださなかつたので——ぶら／＼古町方面を探したが駄目だつた、しようことなしにバツトを買つて帰つて来た。何となくみじめな気分になる。……花時風雨多、今日は風が出て雨がばらついた。早夕飯にしてすぐ寝る（昼寝といふ方が妥当だらう）、わがまゝすぎる自分を恥ぢる、夢をたくさん見た。ゆふべはなごやかだつた、どうしたわけか、西洋人夫婦が墓地の方から話しながら出て来て去つた。

三月十日　快晴。

日本晴、陸軍記念日。早朝、護国神社参拝、それから道後温泉入浴、やつとはぎを見つけてうれしかつた。軍人学生聯合の攻防演習が練兵場を中にして行はれた、境内へも機関銃が持ちこまれた、砲声、号令、剣光帽影。……青年団、処女会、国防婦人会、学生、民衆、……まさに総動員の態勢である、私も庵を開け放つて、今日の日を祝福した。おとなりから粕漬、お寺から五目飯を頂戴した、何とでつかい胃袋！　自分ながら呆れる／＼！けふ始めてことしの蝶を見た、紋白蝶一羽。ちよつとポストまで、途上、どんぐり先生に逢ふ、明朝出立、どんこ和尚を訪ねるといふ、どんびき翁からよろしくとたのんでおいた。布佐女さん来庵、すぐ帰つて行く、気毒なうしろ姿！おとなりの坊ちやんが山兎の仔を二匹捕へて来てゐる、山の日向で遊んでゐるところを捕へたといふ、親兎が心配してゐることだらう、私はいつも思ふ、人間ほど得手勝手な、残忍な、恥知らずの、悪賢い動物は他にゐない！午後またポストへ、ついでに久しぶりに大街道散歩、松山はよごれてゐないといふ感じがする。途中——練兵場で——少女用の赤い巾着を拾つた、新品で何も入つてゐなかつた、誰かの娘さんにあげよう！今日はほんたうに珍らしいお天気だつた、朝から晩まで快晴で温暖だつた、そして私としてもつゝましい一日だつた。

三月十一日　曇——雨。

早起、すつかり片づいてから、東雲神社の、それから護国神社の大鼓が鳴つた。——ふんどしをこしらへた、古腰巻で！　私は痔が悪いから手製の特別なふんどしでないと用をなさない！冷たい雨が落ちだ

した、昨日がよすぎたのだから不平はいへない、傘がないのでポストまで出かけられないのには困つた。肌寒い日である、ああ一杯やりたいなあ！もう一週間あまり一滴も注入しないのだから無理もありますまい！門外不出、黙々として終日机辺を離れなかつた。今日は冷えるなと見まはすと、遠山には雪がほのかにひかつてゐる、急に寒さを覚えてまた炬燵をひつぱりだした。……

“梛の葉”

三月十二日　晴。

朝、ポストまで、運よくはぎ一袋。お寺の女性が洗濯して赤い布をひら／＼させる、お寺にも春が来たかな！——だん／＼食べるものがなくなる——寒いな、心細いな。——夕はあるだけの御飯を炊いて食べた、胡麻塩をふりかけて、——それでも数碗けろりと平らげるのだから、私の胃袋は強い々々！友達への消息に——

伊予路の春は日にましうつくしくなります、私もこちらへ移つて来てから、おかげでしごくのんきに暮らせて、今までのやうに好んで苦しむやうな癖がだん／＼矯められました。……

おちついて死ねさうな草萠ゆる

和尚さん来談、とりとめもない四方山話をしたが、予想してゐたよりも、文芸に理解のある新らしい老人だつた。午後は松山散策、——立花から郊外へ（朱鱗洞君の墓を展した、昨秋の深更まゐつたときは酔中で礼を失したことが多く済まないと心が咎めてゐたが、これでほつと安心した）。おだやかなねむり、千金万金にも代へがたいねむりだつた。

三月十三日　晴——曇、そして風、雨。

眼覚めるより起きた、四時ごろでもあらう、すぐ執筆、朝食後は読書。郵便が来て、そして軽い失望（待つともなく待つてゐるものが来ないから）。煙草がなくなつた、こらへろ、こらへる／＼、飲みたいか、飲みたいよ、待つてをれ、待つ／＼。無理をしないで、あせらないで、いう／＼として。——ポストまで用があつて、そして松山散策、——商品陳列所で名産観賞、図書館で新聞閲覧、練兵行事拝見。

夕方またポストへ、ついでに藤君を訪ねる、にぎやかな、あたゝかな家庭かな、御馳走になる、サケ、サカナ、タバコ、……ほろ／＼気分で帰つてすぐ寝た、句も夢もない一夜であつた、人のなさけのありがたさよ。後味——酒はうまいなあ！　十日ぶりの酒はまたかくべつの味だつた、春雷、それも酒中の一興だつた。或る事に於て自己の卑小を観せつけられた。

今日此頃の私の日課　┌八時に郵便午前は仕事
┤　└十時に新聞午後は散歩、訪問、客来夜間は勉強
読書　推敲

三月十四日　曇——晴。

東雲神社の大鼓と共に起床、寝ね足りて、安易な気分。絶食！　食べるものがないから、それを活用して身心清掃の一法として断食する、渋茶をすすつて執筆。けさはすこしおくれて郵便が来て、軽い失望を残した。昼食はぬき、ポストまで出かける、一洵、和蕾、無水君を訪ねて、句碑句会のことを相談する、腹がペコ／＼では散歩もおもしろくないので早く帰る、帰つて来てもフラ／＼だ。夕方、一洵居往訪、まだ講演旅行中、奥さんに事情を話して米を借りる、奥さんが親切なだけ私は恥づかしかつた。おとなりの坊ちやんが山兎の仔は死んでしまつたといふ、それがほんたうだが、かあひさうなことだつた。御飯が出来た、まづ仏さまに、それから山頭火に！よく食べてよく寝た。

“山兎の仔よ”

三月十五日　曇。

未明起床、身辺整理、静座読書。早朝、護国神社参拝、道後入浴、余寒春寒、そゞろに寒い。——たうとう塩まで無くなつてしまつた！午後はいつものやうに松山散策、——正宗寺拝登、子規堂、子規居士鳴雪翁埋髪塔、本堂のないのはさびしい。暮方ねむくなつたから寝床にはいつた、そのまゝ寝入つてしまつた、こゝらが独り者の怠け者の気楽である。

米と水と火と

三月十六日　晴、なか／＼冷たい。

寝床の中で明けの大鼓を聞いた。快食快眠のよろしさ（快便とまではいへない、何しろ痔が破れてるから！）。無門関第二則、百丈野狐。文字通りの、ほんたうの、飯ばかりの飯を味ふ、無論、お菜が——塩もなくなつたからである（禁酒禁烟であることはいふまでもない）。毎日の行事“松山散策”は、曇つて寒いので、今日は止めにした、外出する元気、散歩する余裕がないからである、衰へたるかな、山頭火、しつかりしなさい！お寺から茄子の芥子漬を一皿下さつた、今日の場合、かくべつにありがたかつた、おいしかつた。まことにつゝましい一日であつた。昼寝から早寝へ、そのまゝぐう／＼ぐう／＼。

三月十七日　晴れたり曇つたり、そして寒い。

東雲の大鼓が鳴り護国の大鼓が鳴る、それを聞いては起きずにはゐられない。余寒がなか／＼にきびしい、外井戸のポンプは氷結してゐて水が汲めなかつた。朝焼がうつくしかつた。明日から彼岸のためか、お墓まゐりがたえない。私は今日も門外不出、しんねりむつつりで暮らした。

三月十八日　曇、彼岸入、晴。

朝は早い私であるが、けさはかくべつ早かつた、四時ごろだつたらう、何もかもかたづいたのに、まだなか／＼明けの大鼓が鳴りださなかつた。あんまり寒いので綿入をかさねた、ぽか／＼暖かくなつた。いよ／＼食べる物は一粒一滴も無くなつた、無一物底無尽蔵と澄ましてもゐられまいが。——朝は寒かつた、小雪でもちらつきさうだつたが、午後は晴れてあたゝかくなつた、本格的春景色だつた。藤居を訪ねて、奥さんに事情を話して、米と醤油とを借りた、恥づかしかつた、ありがたかつた。帰つて来ると、一洵君が待つてゐた、旅行中だつたので久しぶり——といつても十日足らずの——来庵である、なつかしく話す、広島の柊屋の話はなつかしい。澄君からキレイ一本頂戴した、しばらくぶりでコクのある酒を味つた、澄君ありがたう、一洵君ごくらうさま！句会の事句碑の事で、午後、和蕾君を訪ねる、不在、無水君を訪ねる、また不在、さらに局の藤君を訪ねる、碧君にも

逢つた。帰途、一洵居に寄つて夕飯とそして一本！　をよばれて帰つた。落日がうつくしくおごそかであつた。あたゝかくなつたので、さつそく綿入をぬいだ、身心は軽いほどよろしい。やすらかに寝た。ありがたかつたな、六日ぶりの酒、四日ぶりの煙、うまかつたな！

三月十九日　晴――曇。

ほどよい目覚め、護国神社の大鼓の声と同時だつた。このごろ、私は私にふさはしい生活をつづけてゐる、七円で二十日間つゝましく生きて来てゐる。……眼が覚めると、まづ何よりもまづ／＼一杯、大山君ありがたう、ありがたう。郵便やさん寄らないで下の街道をまつすぐに去つていつた！そこのポストまで、ついでにしばらく散歩。昼食はシヨウユウライス、うまい／＼。お彼岸団子が食べたいな！午後また散歩、寺町附近、ほんたうに寺が多い、寺ばかりだ、活けるやうな花は見つからなかつたが――松山の郊外には野の花が少ないが――三句拾つた。夕方になつて、またもや出かけた、まづ一洵居を訪ふ、主人シヤツ一枚になつて庭造りの光景、そして遠慮なくよばれて、お土産まで貰つて十一時帰庵。それからあるだけの酒と飯とを詰め込んで、乱筆酔筆悪筆を揮ふ、書かねばならないものを書いて安心。雨が近いらしく、月は暈をかぶつてゐるが、それは朧月といひたいものだつた。夜明けに間もないらしいころになつて寝床へもぐりこんだ。

松山で多いのは――

医院、社寺、おでんや

三月二十日　曇、春らしく、晴。

とろ／＼したと思つたら、もう護国神社の大鼓が鳴りだしたので起きた。清朗を感じる、書債を果したので身心軽快。東亜新建設の第一歩、新支那中央政府の誕生、王精衛さつさうとして登場、日支がつちり握手せよ。そこらで鶏がしきりに啼く、お前も孤独の鳥だね。朝から狼火が鳴る、道後の温泉祭だ。けさも郵便は――やつと来た――失望を残して。――墓地散歩。――狂乞食がさまようてゐる、笹鳴を初めて聴く、探し求めてゐた藪椿はついそこの藪かげにあつた。藪椿を活ける、藪椿は好きだな。裏の土手で、ゆくりなくも蕗のとうを見つ

けた、二つ、さつそく昼食はそれを煮て食べた、ほろ／＼。そこら散歩、練兵を観たり、吸殻を拾ふたり、……卑しいな、情ないなあ！夕方から柿の会三月例会、一洵、三土思、無水、藤君、和蕾の五君だけ来庵、今晩は女性を欠いだ、なごやかな句座であつた、席上で朱鱗洞句碑建立の具体案がやゝまとまつたのはよかつた、十一時頃散会。月がある、おぼろ月。お土産ありがたう、三土思君、藤君。お茶漬を食べて寝る、昨夜の睡眠不足ですぐ寝入つた。

——銭がないから命があるのだ、貧乏だから死なずにゐるのだ、——それが真実である、私の場合では。——

三月廿一日　晴——曇。

春季皇霊祭、春分、彼岸の中日。朝寝、すつかり明けはなたれてゐた、余寒がなか／＼である、水をつかへば水のつめたさが身ぬちにしみいる。藤君のお土産マグロを味ふ、うまかつた、私は刺身好き、好きな刺身なら二三人前はペロリと平げる。風、風、風が吹きだした、強く、さらに強く。久しぶりに道後へ出かけて入浴、買物をして戻る。戻つて見ると、座敷に小豆飯が一皿おいてある、おとなりからだらう、ありがたう存じます。風がたうとうばら／＼雨になって解消した、たか菜を煮たり漬けたり。煙草がない、数軒探しまはつたがない、詮方なく“光”を買ふ、貧乏人はユウウツにならざるをえない（刻煙草があるにはあるが私たちには高級すぎるものばかりである！）。月光あざやかな夜になつた。早寝、そして熟睡。

今日の買物十銭　饅頭十銭　ハガキ四銭　入浴料五銭　塩九銭　菜葉十三銭　タバコ

三月廿二日　曇——晴。

しづかな朝明けだつたが、寒すぎる春寒である、小雪がちらついた、私はまた／＼綿入をかさねたことである。鵯が近く啼きしきる、鵯よ、お前と私とには共通なものが流れてゐるやうだね！郵便が来ることは来たが——うれしいことはうれしかつたが、——だが、足りないものがあつた。また食べるものが無くなつた。……散歩、和蕾さんを訪ねて朱鱗洞句碑の相談をする、あまり寒いので早々帰庵。昼食と

してはイモとパンとがめぐまれた。けふも風が、いやな風が吹く。夕方また散歩に出かける、一洵居に寄る、Ｙさんあり、卒業記念として悪筆を揮はせられた、夕飯をよばれる、この一飯は百飯千飯ほどありがたかつた、藤君を訪ねる、いろ／＼打合せて帰庵、練兵場の月がよかつた。

“持つ物、持たない物”

三月廿三日　曇——晴、旧二月十五日。

春眠不覚暁——とでもいふのか、とかく不眠がちな私も此頃はなんぼでも眠れる。……朝食なし、缺食老人だ！今日は澄太君に逢へる日、うれしいな。健から書留、ありがたう／＼、御礼々々。さつそく街へ出かけて買物をする、荷が重かつた、腹がぺこ／＼なので！まつたく春、好日好日大好日。一杯一杯また一杯！また街へ、また買物。お寺から団子を貰ふ、おいしかつた。道後へ、理髪入浴、藤君居に寄つて米代返金、債荷一つ果してほつとする。——米もあり、炭もあり、塩もあり、そして煙草もあり、本もあり、そしてまた、酒もあり。——暮れてまた道後へ、澄太君を迎ふべく、九時逢つた、大山君、井家上君、藤君、一洵君、辻田君、そして山頭火、共に湯に入り共にうどんを食べ、そして別れて私一人は一草庵へ戻つた。酔と労れとですぐ寝入つた。

今日の買物五十銭　ハガキ切手五十銭　番茶壱円三十銭　酒二十銭　醤油弐十四銭　目刺三十銭　削節九十銭　米二十三銭　麦一円八十銭　木炭十七銭　大根おろし十四銭　カメリヤ六銭　葱壱円　米代返金二十五銭　グリコ進物三十銭　理髪四銭　湯銭十六銭　醤油壺二十八銭　いろ／＼　この買物を見よ！

三月廿四日　晴。

早起、まづ考へる、——酒を慎むべし、酒を味ふべし。春寒料峭ともいぶきか。午近くなって、澄、井、藤の三君来庵、渋茶をすゝって雑談してゐるところへ、噂の清君来訪。みんないつしよにそこまで出かけて、清君と私とは高商校へ、三君は修養会場龍穏寺へ。高商で高

橋さんとしばらく歓談、ライスカレーを御馳走になる、それから二人は電車で道後へ出かけて入浴、おでんやでパイー、パイ二、それから大街道へ電車でのして、Ｔさんといつしよになり、三人でまた飲む、それからまたＭさんも参加しててんぷらやそばやで食べる食べる、……こゝで私は失礼してお先きに一人帰って来た、十六日の月が練兵場を照らし初めたころ。――さしみ、てんぷら、そば、どれもみなおいしかつた、酒もわるくなかつた、近来にない牛飲馬

　三月廿五日　晴――曇――雨。

　ゆつくり朝寝。しづかにおちついて読書。ぬくい／＼、ねむい／＼。午後は例の如く松山散策、大街道のポストまで。このごろまた食べすぎるやうだ、つゝしめ／＼。

　三月廿六日　雨、どうやら霽れさうな。

　早起、降つてゐる、せつかくの大挙湯山行はダメらしい。朝から半鐘が鳴る、火事でないことを祈る。たか菜の漬物がうまい、私が漬けて私が食べるのだから殊に、しと／＼降る、ほんに春雨だな、目白が出て来て囀づりまはる、貴族的団体だ。三時近くなって、約の如く、大勢来庵、澄君、井君、高君、藤君、そして辻君。さつそくさかもりが初まる、豚、豆腐、臓物、菜葉、庵の饗宴らしい団欒である、主人もお客もない自他融合の賑やかさである、みんなよく食べよくしやべる、私もよく飲みよくしやべる。暮れてからぞろ／＼道後の湯へはいる、そして別れたが、私は――あゝ私は逆戻りして、ひとりでまた飲んだ、そして恥づかしくも貪と痴とを吐き出した！更けて帰つて夢もなく寝てしまつた。……

　三月廿七日　晴。

　――酔うてゐる、さらに飲む、いよ／＼酔ふ、――澄太君来庵、君は私の酔態に避易してゐることがよく解る、――そこへ一洵君も来庵、三人同道して道後の八重垣旅館へ押しかける、私だけ酒をよばれる、三人で悪筆乱筆を揮ふ、夕方、自動車で伊予鉄ホールの講演会へ出かけて、初めて澄君の講演を聴いた、よか／＼。いそいで、ひとりさびしくかへつた、酔ざめのはかなさ、せつなさ、自から責めて自か

ら詫びた！

　三月廿八日　晴。

　春光あまねし、自粛自戒、独を慎む、わざと澄君を訪ねないで、門外不出、清閑を楽しんだ。午後、一洵君が見舞うて下さつた、ありがたう。吉江孤雁氏逝去、過去を想ひだしてさびしくなつた、あゝ。人に逢ひすぎるのはよくない、人間は人間の中だけれど、時々は人間を離れて人間――自分をも――観るがよい、私は近来人に接しすぎるやうだ、考ふべし。

　三月廿九日　晴――曇。

　身心やうやく平静、すなほにつゝましく。安君から来信、ありがたう／＼。道後一浴、のんびりする、今年最初の燕を見た、よい鳥である。午後、大街道へ出かけて映画観賞（入場券を貰つたので）、あまりおもしろくなかつた、つかれてもどつて早く寝た。有明月夜のさやけさ。

　三月三十日　曇、そして雨。

　朝寝、朝焼はうつくしかつたが雨になつた、何となく憂欝。やうやく刻煙草を探しあてたが、あやめ十二銭では困る、貧乏人が金持のまねをするやうな生活はいやだ！食べることは大切だが、食べることにとらへられるな。裁く勿れ、自分を裁いても他人を裁くな。反省して恥多し、悔多し、恥じない生活、悔いない生活、さういふ生活を生活したい。

　三月三十一日　曇。

　身心すこしく不調、終日不快。新支那中央政府の成立、そして南京遷都の記事が厳粛なものを与へる、いろ／＼のことを考へさゝないではおかない、国民精神総動員といひ、東亜新秩序の建設といひ、そして闇取引のたえない事実といひ、国民的訓練の不足といひ、犠牲の不公平といひ……私のやうなものでも、自他に対して憤慨にたへないおもひがする。

　四月一日　曇、小雨。

数日ぶりに床揚げする、どうも身心がすぐれない、更始一新をひとりひそかに誓ふ。春蘭が咲きだした、一二輪机上に活けてよろこぶ。選句、勉強せよ、怠惰が何よりもよくない。道後へ、爪をきり顔を剃る、味噌と大根とを買うて戻る、味噌百目十一銭、大根一本五銭。あちらこちらで桜が綻び初めた。昨日はおとなりから五目飯を、今日はお寺から小豆飯を頂戴した、感謝々々。

四月二日　曇。

朝と共に起きる、身心軽快、朝月さわやかだつた、久しぶりに味噌汁を味ふ。ポストまで出かける、うら／＼うら／＼、一洵居にちよつと寄つて、それから一緒に道後公園遊歩、白木蓮を見あげて旦浦時代のおもひでにふけつた。あたゝかい風がさわがしく吹く、ほれ草が咲いてゐる、蠅が出て来てゐる。――夕方また散歩、刻煙草をさがしたがさがしあてなかつた、苣蒿を見つけて買つた、一株一銭は安い／＼。いたづらに腹がへる！　私らしい嘆息でせう！　或る友へのたよりの中に――

……私にはどうにもかうにも解けきらない矛盾のかたまりがあります、その矛盾を抱へて微苦笑する外ありません。……あれからあまり外出せず、ガソリンも注入せず、時局相応のつゝましさを持してをります。伊予路はすつかり春景色になりましたが、今春はぢつとして待ちませう、待つ心、それは大切なものだと思ひます、おちついてしづかにしづかに、そしてしづかに。……

四月三日　雨、風。――

降る／＼、よう降る雨だ、いちにち降り通した、せつかくの紋日がダメになつてしまつた。無門関を読む。――何もかも無くなりつゝある、――無、無、無と究尽すべし。――午後は時化になつた、ずゐぶん吹きまくつた、屋根のトタンがとんだ、花がちぎれて散つた、春の嵐、花を咲かす雨であり、そしてまた花を散らす風である、私は寝床で風を聴いて暮らした。

四月四日　晴。

嵐のあとのしづけさむなしさ。朝は渋茶二三杯。貧乏はつらいな、

質草をさがしだして、当面の生活費だけやうやく捻出したが。……名もない草を活ける、ちしやもみがおいしかつた。飲まずにはゐられないから飲む、飲めば酔ふ、酔へば乱れる、あはれ／＼。

　四月―日　晴、曇、雨、風。――

　散歩、酒、花、人、悔恨。……――貰ふか、盗むか、拾ふか、買ふか。――或る夜、招かれて御馳走になつた、そして憂欝になつた。桜が咲いて、なか／＼寒い。昨日も今日も、何日も寝てゐた、起きあがる気力がなくなつたのである。一転二転三転、そして。――随時随処、花らんまん人らんまん。

　五月八日　晴。

　早起、清掃。父の十九回忌、仏前にぬかづいて懺悔の熱涙をしぼる、憂欝たへがたく、道後入浴、近郊散策。　――　――
――

　五月廿七日　晴。

　早起出立、中国九州の旅へ、――九時の汽船で広島へ向ふ。身心憂欝、おちついてはゐるけれど、――この旅はいはゞ私の逃避行である、――私は死んでも死にきれない境地を彷徨してゐるのだ。海上平穏、一時宇品着、電車で局にどんこ和尚を訪ふ、宅で泊めて貰ふ、よい風呂にはいりおいしい夕飯をいたゞく、あゝどんこ和尚、どんこ和尚の家庭、しづかであたゝかなるかな、私もくつろいでしんみりした。夜、後藤さん来訪、三人でしめやかに話した。罰あたりの私はおそくまで睡れなかつた。

　五月廿八日　曇。

　早起、一雨ほしいなと誰もが希ふ。いつもの飲みすぎ食べすぎで多少の腹痛と下痢、自粛しよう、しなければならない。朝、奥さんは道後へ、私は山口へ。――己斐までバスと電車、賃金七銭、何といふ安さ、もつたいないと思ふ、折よく九時の列車に乗れた。バスの中ではうるさかつた、汽車の中ではさうざうしかつた。十二時、徳山下車、白船居訪問、こゝでもよばれる、旧友のなつかしさ。三時の汽車で山口へ、四時着、Ｙ君を訪ねる、Ｍ君を招き、三人連れで湯田の或る料

亭で夕飯を食べる、飲みたいだけ飲み、しやべりたいだけしやべつた、Ｙ君の沈黙とＭ君の饒舌とは変な対照だつた。夜ふけて帰山、私はＹ君の厄介になつた、おそくまでいろ／＼話した。……

　曇れば波立つ行く春の海の憂欝島をばらまいて海は夏めくいちにち日向でひとりの仕事　柊屋（澄太居）よい眼ざめの雀のおしやべり風は初夏の、さつさうとしてあるけむくむく盛りあがる若葉匂ふなり初夏の風のひかりて渦潮の　自嘲六十にして落ちつけないこゝろ海をわたる

　五月廿九日　晴。

　早朝散歩、山口の街の夢はなか／＼覚めなかつた、私には山口はおもひでのふかい街である、（熊本を第二の故郷とでもいふならば）第三の故郷といつてもいゝだらう。九時、さよならをする、小郡の樹明君を訪ねる、久しぶりに談笑する、望まれるまゝに半折数枚書きなぐる、梅焼酎はよかつたよかつた。小郡ではＫ君Ｏ君にも逢つた、小郡は私の第四の故郷とでもいはうか。夕方、山口へ引き返してＳ君を訪ねあてる、私は彼の厚情にうたれた。夜、Ｍ君に逢つてＫ屋で飲む、Ｙ君はとうたう来てくれなかつた、――何だかみんな不快だつた。いつものやうに梯子酒でおでん屋を飲みまはつた、そして酔ひつぶれて乱れてしまつた、あゝ。

　五月卅日　晴。

　十時ごろ、Ｓ君の部屋から出て、湯田で一浴した、温泉は好きだけれど湯田という土地は嫌だ、湯田には私の悪いおもひでばかりがこびりついてゐる、いや、湯田が悪いのぢやない、私自身が悪いのだ。反省――慚愧――憂欝。――いそいで汽車に乗つて、九州へいそいだ、三時、関門を渡る、感慨ひとしほであつた。門司で黎々火君と久しぶりに面接、おでんやでうまい酒を飲むことが出来た、うれしかつた。電車で八幡へ、幸にして青城子君は在宅だつた、同道して鏡子居訪問、在宅、いつしよに話したり食べたり入浴したりした、井子にも逢へた。こゝでほどよく酔うて、そのまゝ寝させて貰ふ。

　案山子いかめしく、それをめぐつててふてふるさとの花の匂へば

匂ふとて　湯田螢こいこい大橋小橋とんでくるみかんお手玉にひとりあそんでゐる窓をあけると風がある青田は涼し　関門風景渦潮ながるゝてふてふならんで——　鏡子居朝空の鯉幟の赤いの黒いの泳いでゐる

五月卅一日　晴。

やゝ気分がよくなつた。——朝、病床のＴ君を見舞ふ。九時すぎて青城子居へ、奥さんの心づくしの御馳走をいたゞく、青城子君はとりつきにくい人物だけれど、とりつけばあたゝかい人物である、とにかくまつすぐにつきぬける人物である。午後出立、黒崎まで電車、そこから汽車で赤間まで、さらにそこからバスで神湊へ、隣船寺拝登、俊和尚と握手して、しばらく／＼。前の宿屋に案内されてもてなされる、すまないと思ひつゝも食べた食べた、飲んだ飲んだ、おいしかつたおいしかつた。ならんで寝床にはいつたが、私だけはいつまでもねむれなかつた。

　神湊海岸砂にあしあとのどこまでつづく晴れるほどに曇るほどに波のたはむれゆく春の夜のどこかで時計鳴る遠く来てひでり雲ちぎれちぎれ

六月一日　曇。

興亜奉公日、酒はないけれど——それがあたりまへで——ありがたくも朝食は純日本米だつた。八時すぎてバスで出発、さよなら／＼ありがたう／＼。正午前、赤池着、駅前で理髪して緑平居を訪ふ、出勤不在、奥さんがさつそく、やつこ豆腐とビールとを出して下さる、おいしくいたゞく。緑平はなつかしい、緑平居はなつかしい。夕方、主人帰宅、快食快食。おそくまで寝物語、あゝ緑平はなつかしい。

　緑平居どうやら雨になりさうな茄子苗も二三

六月二日　晴、曇。

こゝまでも純日本米を味つた、日本人といふことについて考へさせられる。……午前中は一人で悠々。二時、お暇乞する、四時若松で乗船、波おだやかに四国へ、私自身の寝床へ。——船中では誰もが南京虫にやられて、ぽり／＼からだをかきながら苦笑してゐる、飯は純外

米、ぽろ／＼こぼれる、ボロ船だけれど、ごろ／＼寝てゐるうちに東へ東へ、南へ南へ。——

六月三日　晴。

朝明けの風景はうつくしくたのしかつた。大空の下、大海の上。船脚がおくれて、高浜へ着いたのは十一時近かつた。

六月四日　晴。

休養。夏を感じる。買物に出かけて、そしてほろ／＼ぼろ／＼。

……………………………はだかへ木の実ぽつとり

六月廿三日

……深更、酔うて帰る途中、すべつてころんだ、額をすりむぎ、眼鏡が壊れ、帽子が飛んだ。……罪と罰！　因果必然、ごまかせないのである。

六月廿八日　曇——雨。

一洵老来庵、おちついた私を見て貰ふ、愚かな私は五十九歳にして五十九年の非を覚つたのである。暑い、暑い、みん／＼蝉の初声を聞いた。たま／＼屑屋さんが来て、古新聞やら古俵やら買うてくれた、大枚壱円三十四銭也、助かつた、さつそく出かけて買物いろ／＼。蠅、蠅、蚊、蚊。——蠅は打つことも出るし我慢が出来ないこともないが、蚊には困る、いつでもどこでも、だまつてちくりとやる、痒い痒い。今夜もたうとう眠れなかつた、二晩つゞけての徹夜である、私は弱らない、私の身心は澄みとほるやうだ。

　　　今日の買物五十四銭　酒二合十一銭　　赤味噌百目八銭　　　玉葱二百目八銭　　　蠅捕紙二枚六銭　　　豆腐一丁四銭　　　ちさ一把

六月廿八日　雨——曇。

道後で一杯ひつかけて温泉浴。時々アル中の発作に襲はれる、身辺を幻影しきりに去来する。夜、さびしいので汀火骨居を訪ふ、不在、ひきかへす、途中うどんを食べる、うまかつた。

六月三十日　雨。

降つた、降つた、……どしやぶりのこゝろよさ、十分に降つた、十分な水をめぐまれた。歩々生死、易の研究を思ひ立つ。身心整理。

——

友のたれかれに————さん。私にもやうやく一転化の機縁が熟しました、虚脱的雲霧が消散して、私本来の天地に立ちかへりました。梅雨は梅雨らしく、そして山頭火は山頭火らしく。苦しい切ない悩ましい三ヶ月でありました、生死混沌の泥沼彷徨でありました。すなほに、ほがらかに、貧しくてもつゝましく、私は私みづからの光となりませう。応無所住而生其心——まだこの一転句が出来ません。いづれちかくまた。

人間が——殊に自分自身が臭くて臭くて時々堪へきれなくなる、私が特異体質だからか。酒よりも米、そして米よりも——何が大切か！

七月一日　半晴半曇、興亜奉公日。

早起、手早く掃除して、護国神社参拝。反省自粛、限りなき悔恨、つゝましい覚悟。食べるものがない、財布をはたいてみたら四十七銭ある、それを持つて出かけて外米一升！　三十八銭也。晴れてくるほどに暑くなる、洗濯などする。まつたく煙草がなくなつて昨日から我慢してゐたが、時々一服やりたいなと思ふ、一杯ひつかけたいと思ふよりも。夕方、やつとバツトにありついた、ありがたう／＼。

七月二日　晴。

けさも早起、おとなりの時計が五つ鳴つた。身辺整理、捨てられるだけ捨てる。どうやら梅雨も早目に上つたらしい、暑くなつた、真夏真昼の感じがあつた。夕方から一洵老往訪。

“あるときは王者のこころ　あるときは乞食のこころ　生きがたく生く”

七月三日　快晴。

早寝早起、それを実行しつゝある。郵便は来たけれど、待つてゐる郵便物は来なかつた、昨日も今日も文字通りの無一文！大空のかゞや

き、日光の強さ、本格的夏になつた。暮れると待ちきれないで大街道へ、例の店で、カケで、一杯ひつかける、この一杯はこたえた、こたえましたよ。夜はまた散歩、無水居、和蕾居、三人で四方山話。ぐつすり睡れた。

七月四日　晴。

雲影もなく晴れわたつて、かゞやかしい太陽がしづかに昇る、夏の朝はよいかな。けさは食べるものがない、水を飲んですます！学校に一洵老を訪ねたが会へない、居宅へまはつて奥さんから混合米一升だけ借りる。ありがたい一升であり恥づかしい一升である。このあたりもやうやく田植が初まつた、一日のうちにたちまち青田になつてしまつた、よい風景である。欧亜の風雲いよ／＼急、一隅にせぐゝまる私のやうなものも心臓がどき／＼うごく。或る俳人来訪、とりとめもないことをしばらく話し合つたが、彼は少々変だつた、彼は礼を知らないらしい。夕の散歩で一杯一服にありついた、ありがたう。和尚さん来談、蚊に喰はれつゝ世間話をした。快食、そして快眠。

貰ふといふことは有難いよりも尊い私には貰ふ資格はない、それほど私は練れてゐない、磨かれてゐない。

七月五日　晴、晴、晴。

あまりに早い早起。――まづ東雲神社の大鼓、それから護国神社の大鼓、それから、それから。――夏はよいかな、朝はことによいかな。けさも待つものは来なかつた、私は私としては禁酒に近い節酒を守つてゐる。“颱風一過の心境”昼寝から覚めて雲の峰を観る。門外不出の心がまへで、独坐閑読。夕の散歩は田舎へ、夾竹桃一枝頂戴した。ぐつすりねむれた。

七月六日　晴。

朝明けのよろしさ。すなほに、そしてつゝましく。――来ない来ない、待ちくたぶれた、来ない来ない。――まつたく悪夢だつた、さういふより外に、今春の私の行動を形容する語句はない、あゝそれはまつたく悪夢だつた、今、私は時代と共に歩調を合せて精進することが出来るやうになつた、時局の認識不足といふよりも、自我の分裂だつ

た、私はやうやく私本来の風光をとりかへしたのである。勉強しよう、勉強しなければならない、私は俳人として日本文芸に能ふかぎり寄与しなければならない。今日もずゐぶん暑かつた、毎日三十度以上、まるで土用の暑さである。夕はいつものやうに散歩、それから読書。

“一草閑話”　　豆腐と沢庵漬

七月七日　曇。

事変三周年記念日、あらゆる意味で感銘の深い今日である、今日の認識をしつかり把持せよ。早朝、護国神社参拝、個人も団体も陸続として参拝する。正午、一億一心遙拝黙祷。或る事で、恥ぢる心を恥ぢる、矛盾のかたまりだ！おとなりから米一升借りる、つらいな。ちよい／＼一杯やりたくなつて困ります。夕は散歩、城山をまはつた。ふと眼覚めると、よい雨の音があつた。

七月八日　曇。

小鳥はうたふ、疑ふことなく惲ることなく、たのしげにそしてほがらかに。朝から暑い、蒸暑さは苦しい、いちにちはだかで。――うらからおはぐろとんぼがひよろ／＼通りぬけてはゆく。柳河から句集代落手、ありがたう、助かつた、さつそく街へ出て買物いろ／＼、限られた銭で限りもない品だから、考へ／＼買うたことである、一週間ぶりに銭の顔を見た！遁友選句を了へる、ほつと安心する。久しぶりに――ほんに十日ぶりに道後の湯へ、残念ながら一杯にはありつけなかつた（今月はまだ二杯しか頂戴しない、そしてぢつとこらへてゐるのだから私の酒癖もたいへんよくなつた）。どうしたのか――船に故障でもあつたのか――午前中はどの新聞も来なかつた、新聞のない朝は歯がぬけたやうなさびしさを感じる。夜は一洵居へ――柿の会出席、出席者は少なかつたけれど――月郚夫妻、一洵老、和蕾君、そして私の五人――おちついて、しんみりした会合だつた。帰庵したのは十二時に近かつた、食べ残しの御飯をたべて、文藝春秋を読んでゐるうちに、いつしか夜が明けてしまつた。……不眠と不能と、そのいづれを。――

今日の買物二十二銭　ハガキ切手三十銭　経木帽七十六銭　外米二升二十三銭　押麦一升三十銭　バツトはぎ三十銭　理髪料四銭　入浴料六銭　豆腐一丁五銭　沢庵半本七十銭　電燈料　〆金弐円九十六銭也　差引残金四銭也

七月九日　曇。

未明地震、眼が覚めたのですぐ起きる、東雲神社の大鼓、それから護国神社の大鼓。八雲書林から来書、印税の残額を貰つた、古町へ、そして大街道へ出かける、払へるだけ払ひ買へるだけ買ふ。だいぶ酔うて戻つて、そのまゝ寝た、何しろ五六日ぶりの酒だからずゐぶんこたえた。……今日の買物のうちで、左記の三つはよかつた。——

三十銭　梅一斤五十銭　ラツキヨー升二十五銭　鯖一尾

七月十日　曇——雨。

早起、すこし宿酔気味、すみません／＼。けふも街へ、——また飲む、一杯が二杯に、二杯が三杯に、——あゝ。——一洵老午後来庵、少し借りる、すまん／＼。——電燈料を払うてうれしかつた。

七月十一日　曇——晴。

めづらしく朝寝、身辺整理。一洵老来庵、私はなぜあなたのやうに落ちつけないのか、省みて恥ぢ入る外なかつた、いよ／＼明日山陰へ出て京都大阪から東京への旅行に出るそうだ——私はさびしい。炎天合掌。世界の風雲いよ／＼ます／＼急なり。

七月十二日　曇。

澄君から、朔君から小遣拝受、感謝で胸がいつぱいになる。出かける、あれこれ買物、そして“歴史”観覧、近来にない好映画だつた。午後、大夕立があつた、何もかも洗ひ流してしまふ愉快だつた。夜はよくなかつた、ほろ／＼がぼろ／＼になつた、とろ／＼がどろ／＼になつた！

七月十三日　曇。

ダメ、ダメ、ダメ、――自己に失望し、ともすれば絶望する、――しつかりしろ、山頭火、――山頭火、最後の精進をしろ！熊蝉が鳴きだした。けふも午後驟雨があつた、痛快だけれど多少の心配がないでもない。

七月十四日　曇――風――雨。

身心何となく不調、心正しからざれば体正しからず、体正しからざれば心正しからず、私はそれを私自身で立証した、悲しい事実である。颱風の余波が吹きまくつた、私自身のやうに。

七月十五日　曇――雨。

自戒自粛、昨日も今日も門外不出、ひたすら謹慎した。降つた、降つた、かう降つてはことしも水でまた苦労するだろう、水がありすぎて！人間の我利、人間の希求、人間の立場。大山君から近著“尊皇と禅”を贈られてゆつくり読む、杉本中佐、寺原少佐の純真にうたれる。――

……貴著しみ／″＼拝読しました、そして恥ぢ入りました、自分の貪――酒に対する執着――を呪ふ外ありませんでした。……

七月十六日　曇、時々雨。

夜明ちかく雷雨、すぐ起床。純真一路の生活へ。――厚志を持つて道後へ、それから松山へ、“歴史”第二部第三部を観た、よかつた、Ｔ屋で夕食、五十五銭、おいしかつた。天候沈欝、私自身も沈欝。

七月十七日　曇――晴――雨。

とう／＼護国神社の大太鼓。亡弟二郎の祥月命日（推定）、甘い物を供へて回向する、あゝ彼は愚直すぎた！朝酒少々あり、もつたいなし。糊付け法をおとなりの奥さんからおそはつて、浴衣や肌着を糊付けする。晴れるほど暑かつた、一洵老来庵。身辺整理、文債書債など。暮れ方からまた夕立模様となつた。

七月十八日　晴。

四時起床、明けゆく天地のよろしさ、ありがたさ。不平なく、反省

しつゝ。——米麦を買ふ、外米二合押平麦一合が私の一日の糧である、感謝の生活、感謝を忘れたる時は堕落したる時である。朝飯ぬきの昼飯を早目にいたゞく、十分に、十分すぎるほどに。午後は道後の湯へ。米内首相退職、組閣の大命は近衛公へ下つた、——日本は東洋は世界は急速度に転換しつゝある、旧制度は刻々に崩壊し新秩序が刻々成立しつゝある、——私達は切に切に時局の安定を希求する、それを実現するために強力政治を熱望する、——現状維持派よ、退却せよ、新人登場せよ、過渡的生活を止揚して新生活を建設しよう。——

あるがまゝの世界なるがまゝの人世

磨き、そして冴え

七月十九日　晴。

早く眼覚めたけれど、あまり蚊が多いのでぢつとして明けはなれるまで待つてゐた、流れ入る朝、あゝ朝はよいかな、ことに夏の朝は。短冊や半折や茶掛を書きあげるつもりで、墨を磨り紙を展げたが、どうにもかうにも気が乗らないので、酒代を借りて街へ出かけた、そしてあゝ、私はまた私の最も悪い一面をさらけだした！馬鹿！　阿呆！　馬鹿！　阿呆！　何といふ醜態だ、何といふ愚劣だ！

自制“自律生活”

七月廿日　晴、土用入。

たへがたい沈欝。————一切我今皆懺悔、私は跪いて祈つた。——午後、雷鳴だけであまり降らなかつた、そこにも私は私自身を観た。自制、尊いのは自制である、自制は生活の軌道である。……

自由律——自然律——生命律

七月廿一日　晴——曇。

身心やゝ落ちつく。午後は道後へ、一浴一杯。明るいうちから蚊帳に籠つて読書。無事、あまりに無事な。——

七月廿二日　曇——晴。

待つものは来ないで藪蚊がやたらに螫すので、すこしばかりいらだ

つ。……文債書債をすつかりかたづけた、ほつかりする、今日はとりわけて暑かつた、三十度を何度昇つたらうか。ポストまで出かけたついでに——

　労研饅頭一包——十銭胡瓜一本——十銭

　“一事一心”　┌鬼………神┐芸術の┤　┝作家の生活　└芸………道┘

　七月廿三日　晴。

　日日好日也、事々また好事也。新国民生活体制、——私もその第一歩に歩調を合せる、——清新、強剛、信頼、勤労。——午後、夕立、涼しくなつた。道後へ、一浴して一杯なし！　今日は途中で下駄が割れたのでひさしぶりに跣足で歩いた。夜は珍らしく道後の方面から三味の音が聞えた。

　七月廿四日　晴、時々曇る。

　早朝、護国神社参拝。朝の涼しさ、何となく秋を感じた、“土用なかばに秋の風”である。ありがたう、健よ、ありがたう、——さつそく街へ出かける、払へるだけ払うて、買へるだけ買うて、そして飲めるだけ飲み食べるだけ食べた、——ありがたう／＼。蕁子から贈物到着、いろ／＼の品物がいれてあつた、鮪の生節はうれしいものだつた、おとなりへ、お寺へ少しづゝお福分けした。午後、道後へ、——それからまた夕方、古町へ、何となく淋しいのである、無水と俳談しばらく、帰途は大街道へまはつたがおとなしく帰庵してやすらかに寝た。今日はほんたうに大出来だつた、善哉々々！　夏祭（天神祭）で人出が多かつた。

　七月廿五日　晴。

　七月もおはりにちかい、あゝあゝ、ことしもなかばをすぎた、あゝあゝ、わたしも六十になる、あゝあゝ。けさもいつものやうに早起したけれど、胃腸のぐあいがよろしくない、飲みすぎのせいだ、のんべいの宿命だ！　自粛々々。好きな昼顔を活けて自から慰める。けふも午後は道後へ、一浴一杯は幸福々々！　炎天照る々々、照れ々々炎天、ほんにおいしいお酒でありました、そしてだん／＼ほろにがくな

る酒でありました。……夜は古町方面へ、和蕾居で漫談。それから、ひよろ／＼、どろ／＼、ぼう／＼、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、――ダメダ！

七月廿六日　晴。

朝早く、はだしで練兵場を歩きまはつた、落した物は落ちてゐなかつた。……反省、当分謹慎しよう、しなければならない、せずにはゐられない。――自分そのものは捨てきれないのに。……恥づかしいけれど、おとなりから米一升貸していたゞいた。ぽかんとして今日一日を過した。入口の蜂の巣を詮方なくとりのぞいたら、蜂がかへつてきていつまでも離れないで鳴いてゐた、あはれであつた、生きもののあはれである。

一草閑談

七月廿七日　晴、朝は曇。

こゝろすなほに、――ようねむれた。芭門俳人伝を読む。夕方、初めて今年の法師蝉が鳴いた、まだ、ツクツクボウシの調子がうまくない。こんやもぐつすり。――

七月廿八日　晴。

起きてから四時が鳴つた、身心平安。午後、道後へ、途中、とても暑かつたが、土用の照込はうれしい、見よ、いちめんの青田がゆたかにそよいでゐる、まことにこれやこの豊葦原の瑞穂の国のありがたき風景。今は一草庵異変ともいふべき出来事があつた、湯を沸かしてゐるとき、土瓶の底が抜け、おまけに火床がくづれたのである、縁起のよい事ではない、食へなくなる！　といふ前兆かも知れない！謹慎謹慎、自重自重。夕方、散歩がてら貸本屋まで出かけて、婦人公論を借りて帰つた。国民生活がだん／＼緊張して来たことは何よりもうれしい、新体制が漸次結成されつゝある、東亜新秩序の確立は厳粛な事実でなくて何であるか、現実を正視せよ、日本人としての自覚を実現しなければならないのである。――

七月廿九日　晴。

とても早起だつたが、御飯がないので——お米もないので、柴茶を飲んでこらへる。——護国神社参拝、いつも参拝がたえない、このごろことに多い。腹が空つてやりきれなくなつたので出かける、恥を忍んで一洵老の奥さんから米代少々借りる、身慄ひするほど恥づかしかつた、酒も巻煙草も抑へつけて、買へるだけ米と麦とを買ふ、今日の私は多少どうかしてゐる、釣銭を少しばかり貰ひそこなつた、——ぼんやりすることも時々は悪くない。暑い暑、あまり暑いので道後へは行かなかつた。電燈屋さん、すみません、新聞屋さんにもすまなかつた、小遣が欲しいなあと嘆息する。暮れてから豆腐屋へ、やつこほど単純な料理はあまりあるまい、うまいまづいを超えたうまさである。散歩、夕焼雲を眺めてゐるうちに何となくさみしくそしてうらかなしくなつた。……

七月三十日　曇——晴。

おちつけおちつけ、来ない来ない、待つてゐるもの来ないけれどおちついてゐなければなりません。道後へ、一浴して一杯を忘れる、髭を剃つたので、さつぱりした。熟睡、快眠、まことに幸福々々。

“粒々皆是菩薩”

荒地の痩米の生命力

七月三十一日　晴——曇。

五時起床、おだやかな朝明だつた。やつと質を入れて利あげをする。……午後、道後へ出かけたのが失敗の基だつた、一週間ぶりにひつかけたので悪酔して、無茶苦茶、いつもの無軌道ぶりを展開した、財布もなくなるし、恥も外聞も忘れるし、たうとう交番の厄介にまでなつた！　それでもどうやらかうやら戻つてくることは戻つてきたが。——愚劣、愚劣、愚劣といふより外ない！　どうして私はこんなに弱いのか、あまりに弱い、弱すぎるではないか！前後不覚、自他忘失、……あゝ！

八月一日　晴。

興亜奉公日、その一週年記念日。酒を飲め、飲まずにはゐられないならば、——酒に飲まれるな、酒を飲むならば。——暗欝、自責の苦

悩に転々する、終日黙々として謹慎する。

もくもく蚊帳のうちひとり食くふ

この苦悩は私のみが知つてゐる、それを解消するのは私だけである。かなしいかな、あゝ、さびしいかな。

八月二日　曇。

身心やゝ軽く。――Ｂ亭の妻君来庵、掛取也、今更のやうに今春の悪夢を反省させられる。終日黙坐、麦ばかりの御飯を少々戴いて。

あるがまゝに受け入れて、なるやうに任しきらう。事にこだはるな、物にとゞこほるな、自己に侫るな、他己に頼るな。“私は旧生活体制を清算する。

そして私は私の新生活体制をうち立てる。そこで改巻する。――”

（八月三日朝）

○一遍上人（證誠大師）

┌道後、宝厳寺　　　古塚や恋のさめたる柳散る　　　子規└内子、願成寺

○城北寺町

寒月や石塔のかげ松のかげ　　　子規

黄鶴一度去不復返　　　　　　　　（李白）白雲千載空悠々

第62章
水〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

　禅門――洞家には『永平半杓の水』という遺訓がある。それは道元禅師が、使い残しの半杓の水を桶にかえして、水の尊いこと、物を粗末にしてはならないことを戒められたのである。そういう話は現代にもある、建長寺の龍淵和尚（？）は、手水をそのまま捨ててこまった侍者を叱りつけられたということである。使った水を捨てるにしても、それをなおざりに捨てないで、そこらあたりの草木にかけてやる、――水を使えるだけ使う、いいかえれば、水を活かせるだけ活かすというのが禅門の心づかいである。　物に不自由してから初めてその物の尊さを知る、ということは情ないけれど、凡夫としては詮方もない事実である。海上生活をしたことのある人は水を粗末にしないようになる。水のうまさ、ありがたさはなかなか解り難いものである。

　へうへうとして水を味ふ

　こんな時代は身心共に過ぎてしまった。その時代にはまだ水を観念的に取扱うていたから、そして水を味うよりも自分に溺れていたから。

　腹いつぱい水を飲んで来てから寝る

　放浪のさびしいあきらめである。それは水のような流転であった。

　岩かげまさしく水が湧いてゐる

　そこにはまさしく水が湧いいた、その水のうまさありがたさは何物にも代えがたいものであった。私は水の如く湧き、水の如く流れ、水の如く詠いたい。（「三八九」第三集　昭和六年三月三十日発行）

第63章
道〔扉の言葉〕　(新字新仮名)

　いつぞや、日向地方を行乞した時の出来事である。秋晴の午後、或る町はずれの酒屋で生一本の御馳走になった。下地は好きなり空腹でもあったので、ほろほろ気分になって宿のある方へ歩いていると、ぴこりと前に立ってお辞儀をした男があった、中年の、痩せて蒼白い、見るから神経質らしい顔の持主だった。『あなたは禅宗の坊さんですか。……私の道はどこにありましょうか』『道は前にあります、まっすぐにお行きなさい』　私は或は路上問答を試みられたのかも知れないが、とにかく彼は私の即答に満足したらしく、彼の前にある道をまっすぐに行った。　道は前にある、まっすぐに行こう。——これは私の信念である。この語句を裏書するだけの力量を私は具有していないけれど、この語句が暗示する意義は今でも間違っていないと信じている。　句作の道——道としての句作についても同様の事がいえると思う。句材は随時随処にある、それをいかに把握するか、言葉をかえていえば、自然をどれだけ見得するか、そこに彼の人格が現われ彼の境涯が成り立つ、彼の句格が定まり彼の句品が出て来るのである。　平常心是道、と趙州和尚は提唱した。総持古仏は、逢茶喫茶逢飯喫飯と喝破された。これは無論『山非山、水非水』を通しての『山是山、水是水』であるが、山は山でよろしい、水は水でよろしいのである。一茎草は一茎草であって、そしてそれは仏陀である。南無一茎草如来である。　道は非凡を求むるところになくして、平凡を行ずることにある。漸々修学から一超直入が生れるのである。飛躍の母胎は沈潜である。　所詮、句を磨くことは人を磨くことであり、人のかがやきは句のかがやきとなる。人を離れて道はなく、道を離れて人はない。　道は前にある、まっすぐに行こう、まっすぐに行こう。（「三八九」第六集　昭和八年二月二十八日発行）

第64章
物を大切にする心　(新字新仮名)

　物を大切にする心はいのちをはぐくみそだてる温床である。それはおのずから、神と偕にある世界、仏に融け入る境地へみちびく。先年、四国霊場を行乞巡拝したとき、私はゆくりなくＨという老遍路さんと道づれになった。彼はいわゆる苦労人で、職業遍路（信心遍路に対して斯く呼ばれる）としては身心共に卑しくなかった。いかなる動機でそういう境涯に落ちたかは彼自身も語らなかったし私からも訊ねなかった。彼は数回目の巡拝で、四国の地理にも事情にも詳しかった。もらいの多少、行程の緩急、宿の善悪、いろいろの点で私は教えられた。二人は毎日あとになりさきになって歩いた。毎夜おなじ宿に泊って膳を共にし床を並べて親しんだ。阿波——土佐——伊予路を辿りつつあった或る日、私たちは路傍の石に腰かけて休んだ。彼も私も煙草入を取り出して世間話に連日の疲労も忘れていたが、ふと気づくと、彼はやたらにマッチを摺っている。一服一本二本或は五本六本である！　——ずいぶんマッチを使いますね。　——ええ、マッチばかり貰って、たまってしようがない。売ったっていくらにもならないし、こうして減らすんです。　彼の返事を聞いて私は嫌な気がした。彼の信心がほんものでないことを知り、同行に値いしないことが解り、彼に対して厭悪と憤懣との感情が湧き立ったけれど、私はそれをぐっと抑えつけて黙っていた。詰ったとて聞き入れるような彼ではなかったし、私としても説法するほどの自信を持っていなかった。それから数日間、気まずい思いを抱きながら連れ立っていたが、どうにもこうにも堪えきれなくなり、それとなく離ればなれになってしまったのである。その後、彼はどうなったであろうか、まだ生きているだろうか、それとも死んでしまったろうか、私は何かにつけて彼を想い出し彼の幸福を祈っているが、彼が悔い改めないかぎり、彼の末路の不

幸は疑えないのである。　マッチ一本を大切にする心は太陽の恩恵を味解する。日光のありがたさを味解する人は一本のマッチでも粗末にはしない。

　Ｓ夫人はインテリ女性であった。社交もうまく家政もまずくなかった。一見して申分のないマダムであったけれど、惜むらくは貧乏の洗礼を受けていなかった。とあるゆうべ、私はその家庭で意外な光景を見せつけられた。——洗濯か何かする女中が水道の栓をあけっぱなしにしているのである。水はとうとうとして溢れ流れる。文字通りの浪費である。それを知らぬ顔で夫人は澄ましこんでいるのである。——女中の無智は憐むべし、夫人の横着は憎むべし、水の尊さ、勿体なさ……気の弱い私は何ともいえないでその場を立ち去った。　彼女もまた罰あたりである。彼女は物のねうちを知らない。貨幣価値しか知らない。大粒のダイアモンドといえども握飯一つに如かない場合があることを知らない。

　大乗的見地からいえば、一切は不増不減であり、不生不滅である。浪費も節約もなく、有用も無駄もない。だが、人間として浪費は許されない。人間社会に於ては無駄を無くしなければならない。物の価値を尊び人の勤労を敬まわなければならないのである。　常時非常時に拘らず、貴賤貧富を問わず、私たちの生活態度は斯くあるべきであり斯くあらざるを得ない。　物そのもののねうち、それを味うことが生きることである。物そのものがその徳性を発揮するところ、そこが仏性現前の境地である。物の徳性を高揚せしめること、そのことが人間のつとめである。　私は臆面もなくＨ老人を責めＳ夫人を責めて饒舌であり過ぎた。それはすべて私自身に向って説いて聞かせる言葉に外ならない。（「広島逓友」昭和十三年九月）

第65章
夜長ノート　(新字新仮名)

　小春日和のうららかさ。のんびりとした気持になって山の色彩を眺める。赤い葉、黄色い葉、青い葉、薄黒い葉――紅黄青褐とりどりのうつくしさ。自然が秋に与えた傑作をしみじみ味わうたのしさ。いつしか、うっとりとして夢みごころになる。自然の無関心な心、秋の透徹した気、午後三時頃の温かい光線が衰弱した神経の端々まで沁みわたって、最う社会もない、家庭もない――自分自身さえもなくなろうとする。　けたたましい百舌鳥の声にふっと四方の平静が破れる。うつくしい夢幻境が消えて、いかめしい現実境が来る、見ると、傍に老祖母がうとうとと睡っている。青黒い顔色、白茶けた頭髪、窪んだ眼、少し開いた口、細堅い手足――枯木のような骨を石塊のような肉で包んだ、古びた、自然の断片――ああ、それは私を最も愛してくれる、そして私の最も愛する老祖母ではないか。　老祖母の膝にもたれて『白』と呼び慣れている純白な猫が睡っている。よほどよく睡っていると見えて、手も足も投げ出して長くなれるだけ長くなっている。かすかな鼾の声さえ聞える。　その猫の尻尾に所謂『秋蠅』が一匹とまっている。じっとして動かない。翅の色も脚の色もどす黒く陰気くさい。衰残の気色がありありと見える。　秋の田園を背景として、蠅と猫と老祖母と、そして私とより成るこの活ける一幅の絵画。進化論の最も適切なる、この一場の実物教授。境遇と自覚。本能と苦痛。生存と滅亡。　自覚は求めざるをえない賜である。探さざるをえない至宝である。同時に避くべからざる苦痛である。　殊に私のような弱者に於て。　　　　　　　　　○　新刊書を買うて帰るときの感じ、恋人の足音を聞きながら、その姿を待つときの感じ、新鮮な果実に鋭利なナイフをあてたときの感じ。……　その日の新聞を開いたときの匂い、初めて見る若い女性に遇うたときの匂い、吸物碗の蓋をとったときの

匂い、埃及煙草の口を切ったときの匂い、親友から来た手紙の封を破ったときの匂い。……　穏かな興奮と軽い好奇心と浅い慾望と。……　　　　　　　　　　○　一度行った土地へは二度と行きたくない。一度泊った宿屋へは二度と泊りたくない。一度読んだ本は二度と読みたくない。一度遇った人には二度と遇いたくない。一度見た女は二度と見たくない。一度着た衣服は二度と着たくない――一度人間に生れたから、一度男に生れたから、一度此地に生れたから、一度此肉躰此精神と生れたから。……　一度でなくして二度となったとき、それは私にとって千万度繰り返すものである。終生□れ難い、離れ得ないものである。　　　　　　　　　　○　いつまでもシムプルでありたい、ナイーブでありたい、少くとも、シムプルにナイーブに事物を味わいうるだけの心持を失いたくない。　酒を飲むときはただ酒のみを味わいたい、女を恋するときはただ女のみを愛したい。アルコールとか恋愛とかいうことを考えたくない。飲酒の社会に及ぼす害毒とか、色情の人生に於ける意義とかいうことを考えたくない。何事も忘れ、何物をも捨てて――酒というもの、女性というものをも考えずして、ただ味わいたい、ただ愛したい。　　　　　　　　　　○　片田舎の或る読者から観て――その読者の受ける気分とか感じとか心持とかいうものによって、日末現代の文学雑誌及び文学者を二つのサークルに分つことが出来る。　スバル、白樺、三田文学、劇と詩、朱欒。永井荷風氏、吉井勇氏、北原白秋氏、秋田雨雀氏、上田敏氏、小山内薫氏、鈴木三重吉氏。……　早稲田文学、文章世界、帝国文学、新小説。島村抱月氏、田山花袋氏、相馬御風氏、正宗白鳥氏、馬場孤蝶氏、森田草平氏。……　　　　　　　　　　○　現代の日本文明を呪咀して、江戸文明に憧憬し仏蘭西文明を駆歌する荷風氏。現実の醜悪を厭うて夢幻に遁れんとする未明氏。温雅淡白よりも豊艶爛熟を喜ぶ白秋氏。　或る意味に於て、すべての人間はアイデアリストである。ドリーマーである。ロマンチケルである。アナクロニズムといい、エキゾーチシズムという語は色々な、複雑な意味を持っていると思う。　　　　　　　　　　○　俳壇の現状は薄明りである。それが果して曙光であるか、或は夕暮であるかは未だ判明しない。　俳句の理想は俳句の滅亡である。物の目的は物そのものの絶滅にあるということを、此場合に於て、殊に痛切に感ずる。（「青年」明治四十四年十二月号）

第66章
私の生活　(新字新仮名)

　あんまり早く起きたところで仕方がないから、それに今でもよく徹夜するほど夜更しをする性分の私だから、自分ながら感心するほど悠然として朝寝をする。といっても此頃で八時九時には起きる。起きる直ぐ、新聞を丸めた上へ木炭を載せかけた七輪を煽ぎ立てる。米を洗う、味噌を摺る。冬の水は冷たい、だから肉体労働をしたことのない私の手はヒビだらけだ。ドテラ姿で、古扇子で七輪を煽いでいる、ロイド眼鏡のオヤジの恰好は随分珍妙なものに違いない。しかも、そこでまた自分ながら感心するほど綿々密々として、米を洗い味噌を摺るのである。ありもしない銭を粗末にする癖に、断然一粒の米も拾うて釜へ入れるのである。釜が吹くと汁鍋とかけかえる。それが出来ると、燠を火鉢に移して薬鑵をかける。実にこのあたりの行持はつつましくもつつましいものである。思うに彼が、いや私がたとえナマクサ坊主であるにせよ、元古仏『半杓の水』の遺訓までは忘れることが出来ないからである。（ここまで書いたらもう余白がなくなった。集を追うて余白がある毎に書き続けるつもり）（「三八九」第弐集）

第67章
私の生活(新字新仮名)

　　御飯ができ、お汁ができて、そして薬缶を沸くようにしておいて、私は湯屋へ出かける。朝湯は今の私に与えられているゼイタクの一つである、私は悠々として、そして黙々として朝湯を享楽する（朝湯については別に扉の言葉として書く）。過現未一切の私が熱い湯の中に融けてしまう快さ、とだけ書いておく。　湯から帰ると、手製の郵便受函に投げ込まれてある郵便物を掴んで、いそいそと長火鉢の前にあぐらをかく、一つ一つ丹念に読む、読んでは微笑する、そして返事を認める、それを持って角のポストまで行く、途中きっと尿する、そこは花畑だ、紅白紫黄とりどりの美しさである、帰って来て、香ばしい茶をすする、考えるでもなく、考えないでもなく、自分が自分の自分であることを感じる。——この時ほど私は生きていることのよろこびを覚えることはない、そして死なないでよかったとしみじみ思う。　それから、朝食兼昼食がはじまるのであるが、もう余白がなくなった。余白といえば、私の生活は余白的だ、厳密にいえば、それは埋草にも値しないらしい。（「三八九」第三集）

第68章
私を語る　——(新字新仮名)

私もいつのまにやら五十歳になった。五十歳は孔子の所謂、知命の年齢である。私にはまだ天の命は解らないけれど、人の性は多少解ったような気がする。少くとも自分の性だけは。——

私は労れた。歩くことにも労れたが、それよりも行乞の矛盾を繰り返すことに労れた。袈裟のかげに隠れる、嘘の経文を読む、貰いの技巧を弄する、——応供の資格なくして供養を受ける苦脳には堪えきれなくなったのである。

或る時は死ねない人生、そして或る時は死なない人生。生死去来真実人であることに間違はない。しかしその生死去来は仏の御命でなければならない。

征服の世界であり、闘争の時代である。人間が自然を征服しようとする。人と人とが血みどろになって掴み合うている。　敵か味方か、勝つか敗けるか、殺すか殺されるか、——白雲は峯頭に起るも、或は庵中閑打坐は許されないであろう。しかも私は、無能無力の私は、時代錯誤的性情の持主である私は、巷に立ってラッパを吹くほどの意力も持っていない。私は私に籠る、時代錯誤的生活に沈潜する。『空』の世界、『遊化』の寂光土に精進するより外ないのである。

本来の愚に帰れ、そしてその愚を守れ。

私は、我がままな二つの念願を抱いている。生きている間は出来るだけ感情を偽らずに生きたい。これが第一の念願である。言いかえれば、好きなものを好きといいい、嫌いなものを嫌いといいいたい。やりたい事をやって、したくない事をしないようになりたいのである。そして第二の念願は、死ぬる時は端的に死にたい。俗にいう『コロリ往

生』を遂げることである。

私は私自身が幸福であるか不幸であるかを知らないけれど、私の我がままな二つの念願がだんだん実現に近づきつつあることを感ぜずにはいられない。放てば手に満つ、私は私の手をほどこう。　ここに幸福な不幸人の一句がある。——

このみちやいくたりゆきしわれはけふゆく

（「三八九」第壱集）